幻創の楽園

士宇一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻創の楽園

【Ｎコード】
Ｎ４３０５Ｌ

【作者名】
士宇一

【あらすじ】
再生された世界。かつて異世界の勇者が救った世界。今では魔術が魔法でなくなった世界。そんな世界で送るユーマ君の学園戦記。

ゲンソウノガクエン。第３章、夏季休暇編開始。

《砂漠の王国編》

アギの故郷である《砂漠の王国》。この国でユーマが出会ったのは

アギの憧れでもある砂漠の民の国父、レヴァイア王。破天荒な《盾》の王はユーマに何を伝えるのか。

王国ににじり寄る《帝国》の闇。レヴァイアと共に迎え撃つアギやエイリーク。

そしてユーマは。

解放する精霊の力。新たに手にしたゲンソウの力。退くことができない戦いを前に、少年は拳を握る。

各章のあらすじ、登場人物紹介

＋＋＋

ここは各章のあらすじを紹介するところです。長編ですので途中から読むときの目安にしてください。

各章の頭から読みはじめるのもいいかもしれません。

＋＋＋
登場人物紹介
＋＋＋

ユーマ・ミツルギ：御剣優真。《精霊使い》の少年。《再成世界》からやってきた

エイリーク・ウインディ：《風森の国》の第二王女。突撃思考で勝気な《旋風の剣士》

アイリーン・シルバルム：《銀雹の国》の第一王女。最高の魔術師を目指す《銀の氷姫》

アギ：ユーマの親友。《盾》の少年

風葉、砂更：ユーマの精霊たち

＋＋＋

各章紹介

＋＋＋

若干のネタバレあり

＊序章　精霊使いの少年

召使いの少年、ユーマはおつかいで世界中央にある《学園都市》、その中にある《C・リーズ学園》にやってきた。

学園にて再会するユーマとエイリーク。ひょんなことから彼は学園へ編入することになる。そしてエイリークが持っていたはずの《守護の短剣》を持つ少年に興味を持ったアイリーン。魔術師の彼女はユーマに模擬戦を申し込むのだが。

再生された世界の学園にて、ユーマの戦いが始まる。

＋＋＋

イゼット・E・ランス：C・リーズ学園の学園長。情報通で黒い？

オルゾフ：魔術科の教師。高等部2年の学年主任

＊幕間章　日常編

ユーマが学園に来てから数日。行われるのは《能力測定》に新入生を歓迎する《洗礼式》。

そこでユーマはあたらしい仲間や先生、新入生たちと出会う。

エルド兄妹など主要登場人物の紹介を兼ねた日常編。

＋＋＋

リュガ・キカ：『アイリーン公式応援団』に所属する赤い髪の大剣士

ティムス・エルド：ブースター製作に関して天才の練金術師。口が悪い

ポピラ・エルド：ティムスの双子の妹。「馬鹿ですね」が口癖

ジン・オーバ：《射抜く視線》という能力を操る弓使いの１年生。東校からの編入生

ユンカ：ジンにべったりの魔族の少女。ダークエルフでは珍しい『強化型魔族』

グルール・ボロス：学園の格闘技顧問。購買部のギガグリルサンドが好物

セレス・スニア：薬学を専門とする女性。第２救護室を任されて

いる

＊第１章　風森の勇者

前編　エイルシア編

目が覚めると知らない世界だった。そんな優真が出会うのは《風森の国》の第一王女、エイルシア・ウインディ。異世界人となった少年は彼女の世話になる。

しかし風森の国は《病魔》に呪われており、《風邪守の巫女》であるエイルシアは元凶たる《魔人》に１人挑もうとしていた。

しろい少女と梟。それは少年の過去。優真という少年のはじまりと最初の戦い。

＋＋＋

エイルシア・ウインディ：エイリークの姉。《風邪守の巫女》の使命を背負う《魔法使い》

ラゲイル・ウインディ：風森の国の国王にして先代の《風邪守の騎士》

真鐘光輝：優真が兄と慕う青年

古葉大和：光輝の相棒

御剣優花：優真の実姉

ましろ：優真が出会った少女

後編　エイリーク編

学園の春季休暇中。エイルシアの危機を知り帰省するエイリーク。

しかし彼女が風森の国へ帰ってみればすべてが解決したあとのはなし。そして姉の隣には黒髪の少年、優真がいた。

守りたくても何もできずにおわってしまった剣士の少女。優真の存在に戸惑うエイリークはエイルシアを狙う傭兵に襲撃される。優真はこの事件に巻き込まれて……

優真とエイリーク、そして精霊との出会い。優真が《精霊使い》のユーマとなったときの話。

＋＋＋

ラヴニカ・C・ウインディ：ウインデイ家の養女にして幼女。珍しい紫の髪と瞳を持つ

ミサ・クリス：エイリークの親友兼専属侍従（自称）。リーズ学園では普通科にいる

風森：風森の国を守り、ウインディ家を護る守護精霊

＊第２章　銀の悪魔

前編　昇級試験編

めざせランクＡ。昇級試験を控えて日々特訓に励むエイリーク達。ところがコーチ役をしていたユーマは試験前に突然姿を消す。練金術士のエルド兄妹の妹、ポピラは心配ないと言うのだが。

エイリーク、アイリーン、アギの３人が強敵に挑む昇級試験編。

＋＋＋

ブソウ・ナギバ：学園の治安を守る自警部部長。《Ａナンバー》の１人

ブロト・ラグレス：３年生のランクＡ。《黒鎧の大剣士》と呼ばれる重装の剣士

ディジー・バラモンド：３年生のランクＡ。凍結系の術式ならば１流の《氷砕の魔術師》

後編　皇帝竜事件編

試験期間中姿を隠していたユーマ。彼は生徒会、そして《Ａナンバー》を巡る争いに巻き込まれていた。

仕掛けてきたのはエースの１人である《竜使い》。ティムスが重傷を負う事態になったユーマは仲間を守りながら準備を整え、反撃の時を待つ。

勝負は試験の最終日。ユーマはオリジナルの《幻創獣》で《皇帝竜》に挑む。

＋＋＋

リアトリス・ロート：《Ａナンバー》の１人。《烈火烈風》の女騎士

報道部部長：学園一の情報通にして守銭奴。本名は非公開

ユウイ・グナント：《竜使い》。《皇帝竜》と呼ぶ黒竜の《幻創獣》を扱う

ルックス・グナント：ユウイの弟。幻創獣を開発した中等部の技術士

《黙殺》：元エースのアサシン。ブソウ達に協力する

イース：グナント竜騎士団の団員

アラム・アラド：練金科の教師

＊番外　ジン戦記

《射抜く視線》の弓使い、ジン・オーバ。彼の能力は女の子を無自覚に『射抜いてしまう』副作用があるけど本人に自覚がないから厄介だ。

そんな彼が昇級試験前に出会うのはフェアリーの少女。彼もまた《皇帝竜事件》に関わっていく。

第2章の番外編。ジンと彼を巡る彼女達の戦いその第1弾。

＋＋＋

セリカ・フォンデュ：1年生で1番と噂の美少女。ジンに助けられ、『射抜かれる』

リン・エリン：フェアリーの少女。薬学を学ぶ2年生

ベスカ：グナント竜騎士団の女幹部

クフト：グナント竜騎士団の幹部。扱う幻創獣はナーガ

ベルティナ・アスク：ランクBの女戦士

＊幕間章

その１　Ａナンバー編

学園長の計らいで《Ａナンバー》の一員となるユーマ。初任務は彼ら１０人に親睦会の招待状を送ること。

癖の強いエース達。その中でユーマは学園最強の彼と出会う。

一気にキャラ出し過ぎて後悔したＡナンバー編。

＋＋＋

ミスト・クロイツ‥《霧影》。変態

ヒュウナー・フライシュ‥《鳥人》。空飛ぶ悪童

ミヅル・カンナ‥《賢姫》。裏の二つ名は《剣姫》

メリィベル・セルクス‥《獣姫》。生徒会長の護衛

クオーツ・ロア‥《青騎士》。生徒会長の右腕と呼ばれる騎士

マーク・Ｋ・フィー‥《黒鉄》。ナンバー２の魔術師

クルス・リンド‥《剣闘士》。現在の学園最強

その２　旋風姫編

ユーマがエースになって数日。突然学園にやって来たのは風森の姉姫様。

色々とパワーアップした彼女を連れて、ユーマは運動会を前に賑わう学園を案内する。

おまけに風森の国にいる魔人の彼女の話もあります。

＋＋＋

カレハ：エイルシアの精霊

エイリア・ウインディ：風森の国の王妃。先代の《風邪守の巫女》にして初代《旋風の剣士》

その３　合戦編

リーズ学園の運動会は公開授業を兼ねたレクリエーション大会。その中でユーマは《Ａナンバー杯》という団体戦種目を担当しこの日の為に色々と準備をしていた。だけど運動会の前日に起こした事件で彼は謹慎処分を受けてしまい、運動会に参加できなくなってしまう。

何とかして運動会に出ようと企むユーマ。そこにアイリーンに付きまとう編入生が絡んできて……

エイリーク達にジン、《Aナンバー》達に報道部の幽霊部員までもが一同に集結。生徒会長や編入生の思惑も巻き込んだ騎馬戦がはじまる。

＋＋＋

エイヴン・コロデ：落ちこぼれ編入生でとある国の王子様。謹慎中のユーマと出会う

シラヌイ君：エイヴンの従者で《刀使い》の編入生。君付けは仕様

＊第3章　王と少年

前編　砂漠の王国編

＊以降続きます

＋＋＋

リーズ学園だより　Ｖ２　第８回（前書き）

ご覧の皆さまありがとうございます。

８／２１　Ｖｅｒ．　２．００　第８回更新

リーズ学園だより　Ｖ２　第８回

＋＋＋

「《幻創の楽園》をご覧のみなさま、いつもありがとうございます。この《リーズ学園だより》は各設定や裏話を公開するところです」

「２ヶ月放置からの復活っす！」

「報告が遅れましたが、おかげさまでユニークとＰＶの累計がそれぞれ９万人と９０万アクセスを超えました」

「ありがとうっす。ありがとうっす！」

「砂漠の王国編も完結間近。それでは参りましょう」

「《リーズ学園だより》は報道部取材班のオリビー・ビリーと編集の先輩がお送りするっす」

＋＋＋

今後の展開について

＋＋＋

「現在『砂漠の王国編』はエピローグに突入。あと１話か２話で完結となります」

「長かったっすね。これで3章の前半っすか」

「そうね。3章は夏期休暇で一括りにしているから。『砂漠の王国編』は物語の分岐点でもあって過去最高のボリュームとなりました。次回ではそのあたりのまとめをお送りすると思います」

「先輩。それで次の話はどうなるっすか？」

「3章の中編は風森の王妃編。その前に息抜きの番外編を挟むかもしれません」

「《歌姫》のあれっすか？」

「そうね。通称『アギ戦記』。夏期休暇前の学園で彼を主役とした話よ」

「アギさんとリュガさん。《バンダナ兄弟》の話っすね」

「ええ。自警部部長の言いつけで他校へ派遣される2人の任務は《歌姫》と呼ばれる少女の護衛。《精霊使い》が失敗したこの難件に挑む2人の話。4話分くらいの予定」

「明らかになる《歌姫》さんの正体。そしてミツルギさんプロデュースによるアギさんの初デート！」

「公開までしばらくお待ち下さい。それと今後の展開でもう1つ。『砂漠の王国編』の完結を記念して近い内に別連載で外伝をお送りします」

「物語を補完する内容の話っすね。確か2本っすか？」

「1つは砂漠の王国編を別の主人公《雪羅の勇者》の視点で送る裏ルート的な話。もう1つはネタバレオンパレードの過去編」

「王様と王妃様の本当の最初の出会いや、アギさんの秘密など謎解き満載。そして〇〇さんたちの活躍が遂に公開っすね！」

「『砂漠の王国編』はまだまだ終わないわ」

＋＋＋

「《リーズ学園だより》はこれからも更新されていく予定っす」

「それでは次回の更新でまたお会いしましょう」

「パーソナリティーはオリビーと先輩でした。さよならー」

「更新速度、最近落ちてるっすね」

「さらに落とすらしいわよ。『ＥＷＧ』の話をある程度進めるつもりらしいから」

「ええっ！？」

「並行して書くから……外伝、いつ公開する気かしら？」

＋＋＋

リーズ学園だより　Ｖ２　第８回（後書き）

読み返す人がいるかわかりませんけど、バックナンバーは活動報告に記載しています。

０－０１　プロローグ－再会（前書き）

はじめまして。拙い文章をのんびりお送りします

０－０１　プロローグ－再会

＋＋＋

太陽という小さな光は上にあって
月という大きな星が見守る中で
地球と呼ばれる大地の下で

再生されたこの世界

＋＋＋
幻創の楽園
＋＋＋

現在より４００年ほど昔、人と魔族が争う戦乱の時代。
異世界より召喚された勇者は仲間と共に元凶たる魔神を倒します。
魔神を斬る《剣》の役目を終えた勇者は元の世界へと還り、残された人と魔族は共存の道を歩み始めました。

それから４００年。

魔神が世界に与えていた魔力は長い時間を経て減衰していきます。
平和を取り戻すためとはいえ魔神を滅ぼしたのだから魔法の恩恵を失うことは当然です。

しかし人は新しい技術を元に生み出したあたらしい《ちから》によって魔術を再現することに成功。むしろ世界は著しく発展していきくことになります。

再生紀１０００年。

ミレニアム・デイ。

各国にて盛大に行われた祝福の祭典。

その日、賢者と謳われる預言者が祝いの席で近い未来を占いました。

“魔神の転生”

“世界崩壊の危機”
“今一度勇者の力を”
“勇者を導きし者に栄光を”

これが預言者の最期の言葉。

預言者は塵となりました。世界を救う助言と争いの火種を残して。

賢者の預言は絶対。事態を重く受け止めた各国の王は勇者を喚ぶ召喚の儀式を成功させるため、召喚陣の研究と同時に召喚陣のある遺跡の調査を行いました。

《召喚》の魔術は魔力資源が潤沢だった４００年前の遺産。

枯渇した魔力資源と希薄した魔力。そして本物の《魔法使い》が数少ない現在では今の技術力でこの魔術を再現する必要があったのです。

それから7年。

確認されている5ヶ所の遺跡のうち東の遺跡が破壊され、北の遺

跡が占領される事件が発生。

東の遺跡を破壊した犯人は未だ不明ですが、北の遺跡を占領したのは北の国の１つ、《雪羅（せつら）の国》でした。

“勇者を導きし者に栄光を”

野心家である当時の雪羅の王はこの預言の為に我先にと勇者を求めて遺跡の情報を独占したのです。

これをきっかけに《世界を救う者》は《世界の覇権を握るモノ》と勇者の存在意義を少しずつすり替えられ、それを信じる愚かな王達が召喚陣の遺跡とその情報を奪い合う、そんな戦争が始まりました。

３年後。

再生紀１０１０年。

世界を救う勇者を求め争う本末転倒の結果。

争いが膠着状態に陥ると遺跡の調査に支障が起きてしまい召喚陣の研究が一時停止してしまいました。

その後なしくずしに停戦条約が結ばれ、遺跡の情報の公開・共有化が図られることで研究が再会されます。

再生紀１０１１年現在。

召喚陣の完成、勇者の召喚成功の報告はありません。

もしかしたら成功してもその情報を隠蔽しているのかもしれません。勇者の存在は今でも争いの核なのですから。

……そもそも魔神が転生するというのは本当でしょうか。

勇者の力、もしくは異世界人の力は本当に必要なのでしょうか。私は疑問に思います。

確かに一説では異世界から召喚された者は世界を移動する際に特殊な力を授かる場合が多く……

《エイリーク・ウインディ　春季課題――勇者召喚に関するレポートより》

＋＋＋

再生紀１０１１年

かつての《西の大帝国》。

そこは災厄の大破壊により滅びた国の跡地で《西の大砂漠》と呼ばれている。

そのど真ん中にて黒髪の少年が一人。

「ここどこ……？　助けて……沈む……」

「しっかりしてくださいー」

砂に埋もれていた。

＋＋＋

再会

＋＋＋

起源は約４００年前。終戦後の《聖王国》女王リーゼリット・Ｅ・ランスが設立した孤児院にある。

女王自らが子供たちに教えを説いたのがはじまりであり、長い時を経て学園となった今日まで優秀な戦士・魔術士・技術士たちを世界へ送り出してきた。

C（セントラル）・リーズ学園は大陸中央にある中立地帯、《学園都市》の中にある有名な伝統校である。

リーズ学園の卒業生といえば一種のエリート。中立地帯にある当学園は王族や一般人、魔族の区別なく入学者希望者が殺到。また、学園側もその多くを受け入れ現在では各地方に分校が設立している。

当学園は《セントラル》、《中央校》とも呼ばれている。

＋＋＋

季節は桜舞う春。新学期。

《中央校》の正門前で幼馴染に出会ってしまった少女が1人。

「……新学期早々アンタに会うなんて、やっぱり今年のアタシ最低だわ」

エイリーク・ウインディ。西の国の1つ《風森(かぜもり)の国》の第二王女。

金の髪を肩で切り揃えて1つに結び、勝気な翠の瞳で幼馴染を睨む。臙脂(えんじ)色の制服に身を包む、学園の高等部2年生。

「あら、失礼な人ね。礼儀がなってないわよ、ウインディさん」

幼馴染の名はアイリーン・シルバルム。北の魔術国《銀雹(ぎんひょう)の国》の第一王女。

白金の髪は腰まで届くロングストレートに涼しげな蒼の瞳。エイリークと同じ制服で同じく高等部の2年生。彼女はエイリークのことを正門で待っていた。

２人は戦士系と魔術師系、クラス（職業）こそ違えど同じ年でいつも同じ教室といわば腐れ縁ともいう関係である。

何かと張り合う２人だが、やや体育会系な思考のエイリークに比べるとアイリーンの方が口喧嘩では分がある。

「私は貴女が新学期早々にいろいろと失敗しないかと心配して待っていましたのに」

「失礼はアンタよ。１６にもなってそんな事しないわよ」

ふうっ、溜息を吐いて呟くアイリーン。

「……去年の夏季休暇課題のレポートを国に忘れて私のを写したのはどなた？」

「うっ」

「高等部の進学式に遅刻した揚句、中等部の校舎にいたのはどなたかしら？」

「ううっ」

「秋の学園祭でいつも……「うっ、う、うるさーい！」」

割り込むように叫ぶエイリーク。睨むけどちょっと涙目。

微笑むアイリーン。素敵な笑顔はキラキラと輝いている。

エイリークをからかう事ができて満足顔のアイリーン。そんな２人の関係だが決して険悪な関係ではない。お互いに世話焼きなので主導権を握りたいのだ。

「そもそも貴女は……って、あら？　貴女、短剣はどうしたの」

「あ、それは」

エイリークは普段通り左腰のソードホルダーに愛用の細剣を差している。ただ背中のホルダーにあるはずの《守護の短剣》がない。

いや、それは、と言葉を濁すエイリーク。

「忘れ物したのね、仕様のない子。……それとも休暇中に《剣》を授けるに値する《騎士様》にでも出会えたのかしら」

からかうように訊ねると、聞き耳を立てていた生徒たちが騒然と騒ぎ出す。

「まさか」

「《旋風の剣士》に騎士だって？」

「いやーっ、私のエイリーク様！！」

エイリークとアイリーン。この2人は一国の姫であることを除いても学園では割と有名である。

風を纏う細剣で相手を吹き飛ばす《旋風の剣士》。

そして氷属性の魔術を得意とする《銀の氷姫》。

彼女らの実力は学園の評価でランクB。2年生に上がるまでにランクBとは優秀な方である。

彼女達は一部の成績ではランクAにも匹敵し、二つ名を持つだけあって注目度が高い。なので2人の話題は事欠かない。

そして今日の騎士様疑惑はとっておきのスクープだった。いつものことだと聞き流していた生徒も何事かと集まる。

２人の周りにいつのまにか人だかりができていた。そしてエイリークは、

「あのっ、だからそれはっ」

パニックに陥ってそれが噂に拍車をかけてしまった。

＋＋＋

エイリークは最近ついていない。

まず春季休暇中に彼女の故郷である《風森の国》が破滅寸前に陥る事件が起きた。

エイリークが国に帰省したのは解決後の話ではあったが国中が何かと慌ただしくて彼女自身いろいろとあったので休暇の意味は全くなかった。

すべて終わってしまった話なのだが、問題も残っていて現在の悩みの種の１つは話題に上がった《守護の短剣》にまつわることである。

守護の短剣は風森の国の守護精霊、その一部を宿した二振りの短

剣である。

国宝である短剣は御守りとして国にいる2人の姫君が一振りずつ所持しているのだが、精霊と《交信》できないエイリークにとってはただの短剣にすぎない。

彼女にとって短剣は大好きな姉姫とお揃いの、姉妹の絆のかたちと思うものであった。エイリークは学園でも大事にいつも身に着けていた。

御守りの短剣は休暇中に起きた事件でその名の通りエイリークを守り、助けてくれた。しかし今は手元にない。

理由はちょっとだけ複雑で人に『貸して』いるのだが決して『授けて』なんていない。

まして《騎士様》なんていない。

話題に上げて欲しくなかったのだ。なのに今日は一番にアイリーンに出会ってしまった。彼女は自分が短剣を大事にしていることを知っている。

やっぱり今年はついていない。エイリークは思った。

（大騒ぎになってるじゃない。アイリィ覚えてなさいよ。なんて言おう？　どうしよう。短剣は《アイツ》が持ってるけど違うわ。アイツは騎士なんかじゃない。アタシというか姉さまの……いやそれも違う！　どうしようどうしよう……ああっ！　休暇中のレポート忘れた。自信作だったのに……どうしよう？　またアイリィに借り

るのは嫌だ。よし、ミサに借りよう。ミサはもう登校しているよね。ああ。いるといいなあ、ミサの……クッキー……）

＋＋＋

「エイリィ……？」

彼女のあまりの混乱ぶりに心配になって滅多に使わない愛称でそっと訊ねるアイリーン。

そして若干逃避ぎみで脳内の親友とクッキーパーティーを始めそうだったエイリーク。

はっ、と正気に戻る。

「い、いやね、忘れたのよ。忘れた。レポ……じゃない短剣をね。あとで姉さまに頼んで届けてもらうわ」

「まあ、いいですけど……」

訝しむアイリーン。彼女から離れるタイミングは今しかない。

「それじゃアタシ、ミサに用事あるから。また教室でね」

退散しようとするエイリーク。

しかし、やはり彼女はついていなかった。

「え？」

空から声が聞こえる。見上げる2人。

「ちょっと……ど、どいてーーーぇっ！！」

人だかりの真ん中でずしん、という音が響いた。

べちょ、という音が聞こえたかもしれない。

空から降ってきたのは2人の少年。

1人は逆立つ黒髪に青いバンダナを巻いた少年。

西国の砂漠の民特有である砂除けのローブを身に纏う少年は同じ高等部の2年生、アギだ。

アイリーンも見覚えがある。打ち所が悪かったのか彼は気絶している。

問題はもう一人の少年。

黒眼黒髪。東国系と思われる幼さの残る顔立ち。学園の制服ではなくこちらには見覚えがない。新入生だろうかと考える。

ただ隣のエイリークは少年を見て絶句していた。

「痛、いたた、着地失敗。おいアギ、生きてるか。……ごめんな。やっぱ無理だったよ」

「……」

気絶したアギは答えられない。

しかし彼女たちは知っている。着地の際に少年がクッション代わりにして彼を下敷きにしたのだ。

非道の少年は潰された彼に両手を合わせ黙祷。（死んではいない）それから周りを見て誰か人を探す素振りを見せる。

少年とエイリークの目があった。

「アギの言うとおりだな。おーい、エイリーク」

彼女に向けて手を振ると驚く周りの視線を無視して少年はエイリークに近づいた。

「あ、アンタどうして」

「シアさんに頼まれたんだ。レポート忘れただろ」

少年の鞄から取り出されるエイリークのノート。

「……ウインディさん？」

「……ちょっと、アンタこっち来なさい」

「何？」

――やっぱり忘れ物してるじゃない

アイリーンの視線が痛い。

――姉さまの馬鹿ぁ

エイリークは心の中でおせっかいな姉姫に向かって思いっきり叫んだ。

＋＋＋

アイリーンに背を向けてエイリークと話す少年。エイリークをよく知る彼女にも2人の関係が見えない。

ふとアイリーンは気付く。それは少年の腰に差してあるもの。

銀の装飾の施された翠の鞘。風森の紋章。

幼馴染である彼女は見間違えたりしない。あれはエイリークの、本物の《守護の短剣》。

何故？　一瞬考える。でも最後は悪戯っぽい笑顔をエイリークに向けた。

「ウインディさん。彼、貴女の《守護の短剣》も持ってきてくれてますけど？」

「あっ！」

しまった。びっくりして言葉が出ないエイリーク。かわりに少年が答える。

「短剣？　ああ。今俺が《契約》してるから借りてるんだ」

「な、んですって！？」

驚いた。冗談だったのに本当だったのかと。興奮したアイリーンは少年を指差し叫ぶ。

「なっ、なら貴方は、もしかして、彼女の、エイリーク・ウインディの、騎士様なのですか！？」

「「「「――！！」」」」

「ん？」

状況を飲み込めない少年。

叫び、悲鳴を上げる生徒たち。

凍結し、石化する生徒たち。

騒ぎの中心で説明を求める少年はエイリークに振り返る。そのエイリークは、

真っ赤になって、震えていた。

「う、ウインディさん？」

やりすぎた。アイリーンは青ざめる。

これから起きることはただ1つ。《旋風剣》による無差別の制裁だ。巻き込まれるのは御免だった。

しかしエイリークは剣を抜かずに少年と向き合ったまま。顔は下を向いていて彼女の表情は読めない。

未だに訳のわからない少年を前に顔を上げてキッ、と睨みつける。涙目で。

（なんで……アンタは……ここにいて……余計なこと言うのよ！）

エイリークの右腕に風が集まる。

纏う風は腕のまわりで渦を巻き、吹き荒れる。

「ゆ、ユーマの……バァアカアアアアアァァッッ！！！」

竜巻は決して大きくはないが、あれを直接ぶつけられる側はたまったものじゃない。

《旋風剣・疾風突き》

突きというよりアッパーカットのような一撃は、少年を空高く吹き飛ばす。

静寂。完全に巻き込まれると思っていた周囲の生徒たちは宙を舞

う少年に唖然。

「ふん！」

「……新技、ですね」

アイリーンは《旋風剣》を体術に応用した幼馴染の技に感心することでこの惨劇から目を逸らした。

＋＋＋

空飛ぶ少年、ユーマは思う。

（女の子なんだからグーはないでしょ、グーは）

そのまま自由落下してアギ少年（生死判定中）の隣に落ちた。

ぐちゃ

＋＋＋

０－０２　ユーマという少年（前書き）

救護室にて目を覚ます。

０－０２　ユーマという少年

＋＋＋
ユーマという少年
＋＋＋

時は少し遡る。

少年ことユーマは鞄１つ持って《学園都市》へやってきた。

「やっと着いたな。……宿題届けに行って何度も死にかけるなんて思わなかった」

「いや、《西の大砂漠》をそんな軽装備で越えるお前がおかしいんだよ」

ユーマの呟きに突っ込む少年はアギという。

逆立つ黒髪に青いバンダナを巻き、学園指定の制服の上から砂除けのローブを身につけている。

２人はとある砂漠の集落で出会い、意気投合して一緒に《西の大砂漠》より先の砂漠を越えてきたのだ。

「でもまあ、ギリギリだけどユーマのおかげで進学式に間に合いそうだ。遅刻減点は結構成績にヒビクんだぜ」

「よく言うよ。散々《波乗り》で遊んでたくせに。けどお前がいなきゃ道わからなかったからお互い様かな」

そうだろ、と返事をするアギと拳を突き合わせるユーマ。

ごつん。友情の証。

「しかし姫さんの忘れ物届けに砂漠越えするなんて、風森の召使いってのはハードな仕事なんだな」

「……まあね」

ユーマ・ミツルギ。

彼が身に纏う服は略式ではあるが風森の城で使われる召使いのものだ。

「けど役目を果たせばゆっくりできるよ。今回は緊急の仕事（シアさんのお願い）だったからね。今度は《門》を使って観光しながら帰るよ」

ほら、とフリーパスを見せるユーマ。

《門》とは国と国、都市と都市を繋ぐ《転移門》のことである。

《召喚陣》の研究の成果と《転移》の魔術を応用したこの施設は門から門への瞬間移動を可能にし入国手続きと身分証明があれば多くの人が無料で利用できる。

ただし大陸横断するような超長距離の転移は不可能な上に1度に転移できる人数、連続転移回数に制限がある。その為に転移する時間や定員数を国や都市で定期的に決めらている。

長距離の転移の場合は各都市を経由して目的地へ移動するのだ。

《門》の周りには、宿泊施設や時間待ちの客を狙いに露店が並んでいる。

各駅停車の駅のようだな、とユーマは思う。

レール・ウェイもバスもここにはないけど。

ちなみにユーマの持つフリーパスは特別版。入国手続き不要。主要国同士を直接繋ぐ大型転移門を利用する優先権を持つ。

しかも各都市の一流ホテルのロイヤルルームで無料宿泊可能。さらに無期限という王族仕様。風森の姉姫様からのご褒美だ。

もっとも、このフリーパスを使って学園都市へ向かうはずだったのだが何故砂漠越えになったのだろうか。

「……」

ユーマは都合の悪い記憶を封印した。

「いいよな気楽に観光なんてさ。俺だったらお前の言う海に行ってホンモノの《波乗り》を体験してみたいぜ」

「サーフィンていうんだ。まあ砂漠の波乗りも楽しかったじゃないか。ほら、《砂漠の竜蛇》と競争したりしてスリルあったし」

「いや。あれは俺達を食おうとして追いかけてきた訳で……俺達よく生きてたな」

「……そうだね」

虚しい笑い声。

2人は都合の悪い記憶を封印した。

「まあ学園までもう少しなんだろ？　最後まで頼むよ親友」
「おう、まかせな」

＋＋＋

C・リーズ学園正門前。

ユーマ達が学園に着いたとき何故か人垣ができていた。

学園の生徒は要領よく前に進むがユーマには無理だった。人垣に弾かれてしまう。

「ちょっ、見えないけど何やってんのここ」
「あーもしかするといるかもな。風森の姫さん」

学園都市の中でも広大な敷地面積を持つリーズ学園中央校。

揉め事は数多く、事件はいつでもどこでも発生するらしいのだがわざわざ正門前で争うのは《旋風の剣士》と《銀の氷姫》だけらしい。

「何やってんだろね。……よし。アギ、飛び越えよう」
「は？」
何いってんのお前、とアギが言う前にユーマは彼のローブの襟元を掴む。
「せーの！」
「ちょっ、おまっ、ヒイィッ！」
垂直に飛び上がった。
むしろ飛びすぎた。
垂直飛び記録、約２０メートル。
「てめぇ、ビックリするだろうが！　……おい、無事に着地できるんだろうな」
「……」
（どうだろう？）
（そうですねー、地面に向かって衝撃を緩衝する風を起こしたらー、周りの人吹き飛びますよー）
（だめですか）
（自業自得ですー。イメージなしに風で飛んだからー、うまく制御できませんー。あとはサラっちの力かー、アギっちの防御力でなんとかしてくださいー）
（……）

少し青ざめる親友に向かってユーマはにっこり。親指を立てる。
ビシッ
「計算通りだアギ。後はお前を盾に突撃する」
「死ぬ！　死ぬからお前。親友て言ったの嘘だろてめぇー！！」
「嘘じゃないよ。……信じてる」
曇りのない黒の瞳。
絶望してちょっと涙目の盾（アギ）。
「ちょっと……ど、どいてーーーぇっ！！」
地面に向かい突撃する2人の少年。
ずしん、という音が響いた。
べちょ、という音が聞こえたかもしれない。
＋＋＋
時は戻る。
ベッドの上で目を覚ますユーマ。

首を振り視線を横に向けると、隣のベッドでアギが気持ちよさそうに眠っている。

ここは救護室のようなところだろうか。白い部屋。よくお世話になった学校の保健室を思い出す。

「……アギ、ごめんな。俺も空から落ちたよ。1人だけ助かろうとして罰が当たったんだ」

「……いや、それ起きてるときに謝りなさいよ」

起き上がり振り向けばエイリークと白金の髪の美女が座ってこちらを見ている。

美女は誰だかわからないのでエイリークに話しかけた。

「エイリークさん。あの、どうして俺は吹き飛ばされなきゃならんかったのでしょうか？」

まずは質問から。

「……悪かったわね。いろいろとタイミングが悪いのよ。アンタ」

歯切れの悪い回答。

「……まあ、いいや。あとでアギにも謝っとけよ」

「アギはアンタのせいでしょうがあーーっ！」

ユーマは都合の悪い事実の改竄（かいざん）に失敗した。

「うるさいですわ、ウインディさん」

怒鳴る幼馴染をおさえてアイリーンはユーマに話しかける。

「ユーマさん？　でしたか。私はアイリーン・シルバルム。先程の件は私も謝ります。ウインディさんを焚きつけたのは私ですから」

「あ、どうもユーマ・ミツルギです。風森の召使いです」

簡素な自己紹介をする少年。それにアイリーンは怪訝な表情をみせる。

「召使い？《騎士様》じゃなくて？」

「あ、アイリィ。違うって言ってるでしょ。コイツはちょっとした手違いで短剣を預かっているのよ」

「手違い、ねぇ？　本当は《騎士の誓い》済ませてません？」

エイリーク、耳まで真っ赤になって否定する。

「してない！　それより一体どうしてくれるのよ。今朝の事で皆コイツのことアタシの騎士だって勘違いしてるわよきっと」

「……えーと、要するに俺が《コレ》持ってるから学園の皆が俺のことをお前の騎士だって勘違いしてしまうと。それが問題なのか？」

（《コレ》はヒドイですよー）

ユーマ、状況を理解する。

幻聴は無視した。

「なら誤解を解きにいこう。まずはお前の友達からかな」

それが当たり前だと思うユーマは立ち上がる。2人は茫然と彼を見上げた。

これがユーマという少年だった。

思い立ったら即行動。自分のできることからはじめる。自分の事でも他人の為でも、その態度は変わらない。

エイリークは思う。

（そう、ユーマは悪い奴じゃない。そんなだからアイツは……）

「……いいわよ。アンタはここの生徒じゃないから目立つのよ。責任はアイリィに取って貰うわよ」

「……まあ、いいです。こんなまっすぐな目をした人、貴女にはもったいないですし」

何よ、何でもないですわ、無言で睨みあう2人。

仲いいなー、（そうですねー）、のほほんとするユーマと???。

「でも彼は短剣は《契約》して借りていると言いませんでしたか？契約ってもしかして短剣の……」

「そ、そんなことよりユーマ。アンタこれからどうするの？　やっぱりすぐ風森に帰る？」

「時間はあるよ。観光しながら帰るつもりだし。おじさんたちのお土産は何がいいかな？」

ここでユーマの言うおじさんとは風森の国の国王のこと。

娘ラブのお父さん。

「お土産なんて何でもいいわよ。姉さまはきっとアンタが渡すものなら喜んでくれるわ」

そう言いながらもエイリークはユーマの左腕を指差す。彼は左手首に白い腕輪を身に付けていた。

「どうせならその腕輪なんていいじゃない。学園に来る途中にでも買ったんでしょ」

滑らかな質感を持つ白い腕輪。シンプルながら何か神秘的な装飾品だ。

「これは特別製なんだ。でもアクセサリーかあ。なんかいいの探してみるよ」

指輪なんてあげたらだめよ、と釘をさすエイリーク。ユーマはわかっていないようだ。

そんな2人のやりとりを不思議そうにアイリーンは見ていた。

「自分の国の国王をおじさんって、貴方は本当に召使いなのかしら？　……時間があるのならお昼にしましょう。今日から食堂、開いてますよ」

＋＋＋

お姫様が学食でお昼というのはイメージ違うなと思いつつも『お

姫様の通う食堂』に興味を覚えたユーマは3人で食堂へ向かう。

「アギどうしようか」
「そのままでいいです」
「別にいいけどね」

雑談する3人。

途中にある中庭を通る時、3人というよりもユーマが1人の生徒に呼び止められる。

「おい、待てよ」

3人は無視。雑談は続く。

「ここのデザートは王宮顔負けですね」
「ミサちゃんのクッキーより？」
「難しいわね、それ」
「「「あはは」」」

「おい、待てってば」

振り返る3人。見ると救護室で別れた？　アギがいる。

「ひでぇじゃねぇか置きざりなんて。特にユーマ！　あれだけのことをして覚悟してるよなぁ？」

アギ君はおかんむりだ。しょうがないなあ、とユーマは思う。

「俺も天罰は受けた。気にするなよ。それより飯だ。一緒にいこう」

ユーマ君よぉ、本当に反省してるのかい？　と訝しむアギ。

しかし有名な美少女2人（あと親友）と一緒にランチなんて滅多にない機会だ。

いや、これから先もあり得ないはず。

「よし。いこうぜ親友。メニューは日替わりがおススメだ。ハズレがないからな。お前の『カレー』にも負けないさ」

４人は食堂へ向かう。

「カレーて何？」
「俺の故郷の料理さ」
「これがうまいんだぜ」
「貴方、風森の人じゃなくて？」

「お前！　俺を無視するな！！」

怒声。

今度は無視できなかった。４人だけでなく中庭にいる生徒たちも彼に注目する。

「剣を抜け、決闘だ。……認めないぞ。お、お前が、ウインディ様の騎士だなんて」
「……」

だとよアギ、いやお前じゃん、悪あがきするユーマ。

仕方なく前に出る。

「あの、誰だか知らないけどそれは誤解……」

「黙れ！　腰抜けめ。今すぐ消えてウインディ様から離れろ！」

……話を聞いてくれよ、ユーマは溜息。

「なんだよ、あれ」

「ファンクラブとか自称親衛隊とかそんなんじゃね」

中庭には思ったよりも人が多い。騒ぎが大きくなりそうだ。

「……わかった」

「ちょっと、ユーマ」

「わかってる。穏便に済ませる」

目の前の生徒を見る。身長は１７０より上でユーマより高いくらい。体格はそう変わらない。

得物は両手剣。戦士タイプか？

「ルールは？」

「関係ない。貴様をぶちのめして終わりだ！」

喧嘩じゃないか、ユーマは再度溜息。

「わかった。やろう」

短剣を抜き、構える。

「え？」

アギとアイリーン、それに彼らに注目していた生徒たちも驚いた。

ユーマ構え。それは、

剣術を知らない、素人のそれだった。

「ふざけてるのか、貴様」

「い、いや、お、俺は本気だ」

声が震えている。

腰は引き気味で剣先はぶれて狙いが定まってない。

「アイツ……」

エイリークはまさかと不安を覚える。

「こんな奴が騎士だと？」

「い、いやだからそれは誤解だって……」

「ふざけるなあああーーーっ！！」

「ひいっ」

彼は殺される。誰もが思った。

しかし誰も止めない。止めてはいけない。

形式を無視していて校則違反ではあったがユーマが了承した時点でこれは《決闘》なのだから。

「うっ、うわあああっ！」

ユーマは悲鳴を上げる。

でも心の中ではそうでもない。

（２ステップ、いくぞ）

（はーい）

「はぁ！？」

そして一瞬で、皆の前から姿を消した。

「なんだ？　ど、どこに……いいっ！？」

斬るべき相手を見失う男子生徒。

逃げたか、と思う間もなく目を大きく開き吃驚する。

「足が、すべったあああーーっ！！」

ユーマは彼の目の前にいた。

彼に見えるのは靴の裏だが。

フライング・ドロップキック

狙ったかの様なきれいなフォーム。助走をつけて全体重を乗せた一撃は、彼の顔面を踏みつけて遠くに蹴り飛ばす。

そして慌てたように倒れた彼に近づくユーマ。肩に手をかけて……

「ああっ、大丈夫ですか？　大丈夫ですか！　だいじょうぶですかあああーーっ！」

がくん、ばたん、がくん、ごちん

叫びながら激しく肩を揺さぶる。たまに背中や頭を床にぶつけているようだ。

「大丈夫ですか。誰か救護の方いませんか。連絡してください。だれかーっ！」

ユーマはわざと床にぶつけ続けた。

沈黙。

決闘を仕掛けた生徒は泡を吹いて気絶。

アギ達はもちろん、中庭にいた生徒たちにはこの展開に全く訳が分からない。

（……事故に見せかけて相手を沈める。完璧だな。ビシッ）

（ふいうちぃー、じょーうとぉー。えげつねぇー）

心の中で親指を立てるユーマ。幻聴は無視した。

そして。

「どこが、穏便なのよ、アンタはあああーーーっ！！！」

エイリークの右脚に風が集まる。纏う風は渦を巻き吹き荒れる。

《旋風剣・疾風突き》

剣技どころかもう突きですらない飛び蹴りは、中庭の花壇ごとユーマを錐揉み状に吹き飛ばし、校舎の壁に貼り付けた。

べちん。

「……新技、２つ目ですわ」

「……天罰って、これか」

アイリーンはこれがお約束というのかしらと何かを悟り、アギはランチの約束どうなんの、といらん心配をした。

2人はもちろん、惨劇から目を逸らしている。

＋＋＋

校舎の壁と一体化した少年、ユーマは思う。

（一応、お姫様なんだし飛び蹴りはきっとはしたないと思うんだ…）

（壁のまねー、たのしいですかー？）

幻聴は無視した。

＋＋＋

０－０３　推薦状（前書き）

再び救護室から

０－０３　推薦状

＋＋＋
推薦状
＋＋＋

ベッドの上で目を覚ますユーマ。

首を振り視線を横に向けると、隣のベッドで名前を知らない生徒が泡を吹いて唸っている。

ここは救護室のようなところだろうか。白い部屋。……最近お世話になったような気がする。

「……何がいけなかったんだろう」

「全部よ」

起き上がり振り向けばエイリーク達３人が座ってこちらを見ている。

ユーマはエイリークに話しかける。

「エイリークさん。あの、どうして俺は吹き飛ばされなきゃならんかったのでしょうか」

まずは同じ質問から。

「ツッコミよ」

エイリークさん、即答。

「……まあ、いいや。あとで彼には謝っとけよ」
「それはアンタのせいでしょうがあーーっ！」
「うるさいですわ、ウインディさん」

怒鳴る幼馴染をおさえてアイリーン。

「それよりユーマさん、大丈夫ですか？　1時間も気絶していたのよ？」
「ありがとうアイリーンさん。ツッコミだから大丈夫」
「……」

気絶するツッコミなんてない

アギは隣のエイリークが怖くて言えなかった。

「とにかく、起きたならさっさと行くわよ。さっきの事で先生達に呼ばれたの。私たちも一応関係者だから付いて行くわ」

＋＋＋

しばらくして4人が向かったのは職員室。ではなくて学園長室。

もちろん学園の1番お偉いさんのいるところだ。流石にユーマも緊張する。

「やっぱり俺、悪いことしたかな」

「『立会人なしで正式な手続きをしない決闘』『部外者の生徒への暴行』あと『校舎の壁の破損と中庭の花壇の被害』どれも大事(おおごと)よ。」

さらには学生でもなく入園手続きを済ませずここにいるユーマは不法侵入者だった。

「いや、最後2つは俺だけのせいじゃないぞ」

「うるさい。だから付いてきたじゃない。……失礼します。高等部2年のエイリーク・ウインディです」

――はい、おはいりなさい

奥から穏やかな声が聞こえる。4人は部屋の中に入る。

学園長室は落ち着いた雰囲気のある部屋だった。

アンティークってこういうんだろうな、とユーマが思う調度品の数々。日差しを遮るやわらかなカーテン、大きなソファ。

部屋の奥にいるのは2人。

椅子に座っているのは気品のある老婦人。隣には背の高い魔術師といった風体の男が立っている。

老婦人が声をかける。

「いらっしゃい。エイリークさんにアイリーンさん、アギさん。それとユーマさん。私が当学園の学園長を務めています、イゼット・E・ランスです。お隣はですね、今期高等部2年生の学年主任をお

任せします魔術科のオルゾフさんです」
「よろしく頼む」

手短に挨拶をするオルゾフ。アギが口を挟んだ。

「あのー学園長。俺の事知ってるんですか」
「もちろんですよ。あなたの《盾》、おもしろいですね。あなたのような工夫を凝らす生徒は大歓迎です」

褒められたので照れるアギ。

「そうそう。あなたは今日の進学式は無断欠席したけれど今回は事故みたいだから仕様がないわ。成績の減点は免除しますよ」
「本当ですか！？」

アギ、よっしゃあ！　と心の中で叫ぶ。

「学園長」
「はいはい。本題に入りますね。ええと、ユーマ・ミチュルギさん」

ミツルギです、ユーマで結構ですよ、とユーマは訂正。

「はい。ではユーマさん。中庭でおきた決闘の件なのですが」
「あれは事故です。自分が滑って転んで彼を巻き込んだ挙句、気絶させてしまっただけです」

ユーマ即答。隣のエイリークに頭を叩かれる。

「……そうですか。実は先程その生徒さんが目を覚ましたそうですけど……打ち所が悪かったのかしら？　何も覚えてないそうなの」

（よし！）
（狙ったのですかー？　酷いですねー）
幻聴は無視した。
「ですのであなたから事情をお聞きしたかったのですが……事故ですか。わかりました。今回の件はそのように処理します」
あなたの目は嘘つきの目じゃありませんからね、ふふ、と学園長。
ユーマ、ちょっぴり罪悪感。
「壁の破損等の修理費は学園で持つ。このくらいは日常茶飯事だ。しかしウインディ、中庭はお前の仕業だな。《旋風剣》の制御が甘い。周りを巻き込むな」
「……はい」
オルゾフが補足する。エイリーク、バツが悪く苦い顔。
「では学園長。ご用件は以上でしょうか」
「いいえ、アイリーンさん。もう1件だけ。……ユーマさん」
あらためて少年を見る学園長。
「実はあなたに当学園への推薦状が届いています」
「はい？」
突然の話に驚く4人。一体誰が？　という疑問。もしや風森の姉姫かと思われたのだが。

「受験生や編入希望の方の中にあなたの名前はありませんでしたので何かの間違いと思ったのですが……。推薦者は《雷槌（いかづち）》のキリンジさんです」

「オッサン？」

「「「はああっ？」」」

予想外の人物の名前にユーマを除く3人はただ叫ぶしかなった。

＋＋＋

《雷槌（いかづち）》のキリンジは一流のハンターだ。

彼のランクはA。学園の評価基準ではない、世界ランクでのA。

学園の卒業生は大抵Dランク、最優秀生徒でもよくてCという評価基準では世界に7人しかいないAAランクを除いて彼は最上位に位置する。

褐色の肌に金の短髪、厳つい風貌。巨漢と言えるその体格は腕回りだけでもユーマの3倍近くあったはず。

習得の難しい雷属性の術を駆使した近接格闘では敵うものなく、素手で鋼属性の甲殻竜の額すら割るといわれる。

ユーマが彼と出会ったのは《西の大砂漠》。そのど真ん中だった。

「どうして推薦状なんて」

「推薦状にはこう書かれています」

学園長は要約して読み上げる。内容はこうだ。

“入学試験に間に合わなくても、もし彼が現れたのなら力を見てやってほしい”

“彼は私のハンターとしての誇りを取り戻してくれた。目標を与えてくれた。感謝しきれない”

“今すぐ私のギルドにきて欲しいのだが彼には何か目的があるようだ。力になってほしい”

“彼の実力は私の二つ名、《雷槌》に懸けて保証する”

「最後にあなたに出会えたなら、『…今度会うときは私の成果を見せよう。楽しみにしてくれ』と伝言まで預かっています」

「「「「……」」」」

ユーマをベタ褒めしてある。しかし当の本人はそこまでしてもらう覚えがない。

「……アンタ、何したのよ」

「いや、ちょっと待って。思い出すから」

ユーマは回想する。

＋＋＋

最後の最後で襲われた巨大な甲殻竜の群れを突破し、《西の大砂漠》を越えたユーマとキリンジ。

「俺、まだ生きていられてよかった。もう、なんかありがとう！」

ここまでの道程で何度も死にかけた。それでも生きていることを何でもいい何かに感謝、感動したユーマ。

上機嫌でとっておきの飯を振る舞うと恩人であるキリンジに約束した。

近くの集落で砂漠の民の少年から飯を奢ることを約束に食材を分けてもらい、そして作ったとっておきの料理。それは、

カレーライス

……何故ユーマがカレーのルーを持っていたのかは割愛する。

カレーはうまい。カレーにハズレはない。外で食うカレーは最高だ。

「……うまいな」

キリンジは寡黙な男だ。

彼の声には深みがあり、口数少ない言葉の中にあるのは大事なことと本当のことしかない。

短い付き合いだがユーマもそれは知っている。

「そうだろ。でももう作れないんだ。カレーのルーないし……きっともう手に入らないから」

カレーは２０皿分すべて平らげた。

内訳はユーマ3、砂漠の民の少年5、キリンジ１２である。

「……すまないな」

「いいんだ。カレーはやっぱり大勢で食べないと美味くないし」

ユーマは夜空を見上げる。

――こんなふうに腹いっぱいに飯食うのも久しぶりだ。ああ、生きるって素晴らしい

「……ルゥ、というのは作れないのか？」

カレーにご執心のキリンジは訊ねる。

「いや、ルゥじゃなくて要はカレー粉を作ればいいんだ。複数の香辛料を混ぜたものなんだけど、どの香辛料がどれだけいるのかがわからない」

そもそもユーマは『この世界』の香辛料がどんなものか知らなかった。

「……そうか」

「どうせならオッサン、探してみない？　ハンターて別に怪物退治が専門じゃないんでしょ？『ハンターは世界を巡る探究者』ってシアさん言ってたし」

一流なんだろ？　カレー粉作ってくれよ、と割と無茶言うユーマ。

「……」

キリンジは顔には出さないが驚いている。

探究者。世界の謎を探り究める者。

ハンターになってから今まで魔獣狩りばかりだった彼が忘れていた言葉。

ハンターの、もうひとつの在り方。

「……そうだな。そのときはお前も一緒に来るか？」

「そうだね。でも俺やることあるから。まずは学園に行かなきゃ。間に合うといいけど」

「……そうか」

会話はここまで。

2人は各々で星を眺めて夜を過ごした。

「……カレーは香辛料……南か」

この時キリンジが珍しく笑っていたのをユーマは知らない。

＋＋＋

回想おわり。

「……カレーか？」

思い当たる事をかいつまんで説明するユーマ。

（あのオッサン、カレーを探す気だ）

カレーに目覚め、カレー粉を求めて世界を巡る探究者（ハンター）、《雷槌》キリンジ。

彼はユーマが学園に向かう理由を知らなかった。

（きっと勘違いしたんだろうな。ただのおつかいだったのに。……命懸けになったけど）

「カレーとはまさか……４００年前の勇者が書き残した手記、《ぼうけんのしょ》の第２巻、１９ページにある《カレー・ライス》。これは料理のことだというのか！」

「……」

（オルゾフ先生、カレーに食い付き過ぎです。しかも《ぼうけんのしょ》てどこのゲームですか）

「《雷槌》の認める力。貴方はいったい……」

「……」

（生き残るのに必死だったんです。あの時の甲殻竜は全部オッサンが倒しました）

「そもそもなんで《西の大砂漠》なんかにいたのよ」

「……」

（その記憶は封印した。……迂回して北の国を廻るよりはショートカットになると思ったんだよ）

「すげーな。ユーマ、いつそんな有名人に会ったんだ。あの集落にいたんだろ？」

「――！」

（お前は！　一緒にカレー食ってたろうが！）

砂漠の民の少年ことアギはあのときカレーに夢中で食べるだけ食べて満足すると、すぐ1人で寝たのだった。

「いいですか？」

学園長が話を戻す。

「疑問は解消したかしら。それでですね、エイリークさん」

「はい」

エイリークは学園長に向き直る。

「ユーマさんはあなたの召使いだそうね。どうでしょうか？　彼を学園に通わせてもいいのかしら」

別に私のじゃありませんけど、とエイリーク。

「キリンジさんの推薦ですもの。もし学園へ編入するならば、彼を特待生として扱います」

「……」

エイリークはユーマをチラッと見る。それから静かに目を閉じた。

（勝手に決めていいものかしら？）

国王と姉姫のことを考える。

（父さまならどうするだろう？　姉さまはアイツのこと勝手に決めたらちょっと拗ねると思うのだけど……）

風森の国は彼に恩がある。彼がしてくれたことを思えば彼を束縛する権利なんて……ない。

（どちらにしてもアイツの厄介事はアタシの方に来るのよねきっと。そう、アタシはついていないのよ）

諦めがつくと自然と頬が緩む。その表情を引き締め、エイリークは目を開ける。

翠の瞳、風森の色。

「私は、いえ《風森》は彼の意思を尊重します」

ユーマに視線が集まる。ユーマは少しだけ考えて返事をした。

「……わかりました。俺を学園に入れてください」

頭を下げる。

「はい。わかりましたユーマさん。ではあなたには編入試験を受けてもらいます」

「え？」

一応決まりごとですから、と学園長。

「編入試験は筆記試験と実技試験の選択式です。お好きなほうを選んでください」

「学園長、そのことですが……彼が中庭で倒した生徒。ギリギリの

成績ですがランクAの3年生でした。これを踏まえて実技試験はパスにしようと思うのですが」

あら残念ね、と学園長。

先生、あれは事故なんです、と白々しくもまだ誤魔化そうとするユーマ。

「……学園長。よろしければ彼の実技試験の相手、実戦形式で私にやらせてもらえないでしょうか？」

「アイリィ！？」

申し出たのはアイリーン・シルバルム。

驚いたユーマの顔は彼女の真剣な瞳の中に映っていない。

＋＋＋

０－０４　模擬戦（前書き）

ユーマは結局断れなかった

０－０４　模擬戦

＋＋＋

「学園長」
「何でしょうか、オルゾフさん」

ユーマ達４人が退室したあとなので部屋にいるのは２人だけ。

「第２救護室から連絡がありました。３年のユギ・ギュロフが目を覚ましたそうです。何やら騒がしくしていたので自警部が彼を拘束しています」
「そうですか。彼は今まで巧く立ち回っていたようですけど評判の悪い子でしたからね」

ユーマに決闘を仕掛けた生徒のことだった。学園長は穏やかな声のまま話を続ける。

「ええと『一般人の子供に決闘を強制』して『４号棟校舎の壁の大破壊』とさらに『第１食堂の前の中庭の崩壊』。もう迷惑な子ね。あといろいろサービスして減点トータル２００点オーバー。退学ね」
「……」

事実を捻じ曲げて書類に判を押す学園長。

オルゾフの見積りでは彼の減点は５０点前後。学園長が捏造したような被害もなければ『一般人の子供』に怪我を負わせたわけでも

ない。むしろ返り打ちだった。

処分は本来短期の停学扱いだが。

「あと修理費はギュロフ家に請求してください。……多額寄付者の息子が何したっていい訳じゃないんですよ」

「……」

彼の噂はオルゾフも多少は知っている。

特に《ウインディ様私設騎士団》なる秘密組織は犯罪染みていた（ストーカー疑惑、エイリークファンへの恐喝ほか）のだが証拠がない上に被害者に全く気付かれない（気にしていないのかもしれない）ので取り締まることができずにいた。

オルゾフと同じく事情を知っていた学園長は同じ女性として憤っていたようだ。

「やっと尻尾を出しましたよ。よっぽど彼女の《騎士様》が現れたのが気に入らなかったようですね」

「……」

――事件さえ起こせば後はこちらのものでしたわ。うふふ

……黒い。

「……よろしかったのですか？　ミツルギとシルバルムの模擬戦を許可しまして」

「構いませんよ。本当はあなただって彼の実力、見たいのでしょう？」
「……」
この沈黙は肯定だろう。意地っ張りね、と学園長は思う。
「彼女はきっとユーマさんのことに気づいてるわ。それにあなたと同じ《魔術師》ですもの。だから気になってしょうがないのよ」
学園長は報告書の1つを手に取る。
どうやって調べたのだろうか。春先の風森の国で起きた『2つの事件』の詳細が記載されている。
「そう、彼はほんものの……」
その先は答えなかった。

＋＋＋
模擬戦
＋＋＋

学園長室から退室する前の話。
「アイリーンさんが対戦相手ですか。あなた相手の実戦になりますと、試験内容としましては難度が高すぎると思うのですが」

「お願いします」

アイリーンは無理と言われているのがわかっていても頭を下げる。

彼女がこのような頑な態度をとるのは故郷の《銀雹の国》絡みの話か魔術に関してのときくらいだ。

「……仕方ないですね。ではユーマさんの編入試験は実技の方で。ただし、オルゾフさんの提案通り試験はパス。合格とします」

おめでとうございます、と学園長。

「それでですねアイリーンさん。今日の午後5時。第1練武館の使用をわたしが許可します。模擬戦、彼とやってみませんか？」

＋＋＋

第1練武館。

第1戦闘室のその控室。

ユーマ、エイリーク、アギの3人はアイリーンと別れて模擬戦の準備をしていた。模擬戦の勝手がわからないユーマに2人が付いてきてくれたのだ。

「戦闘室は全体に《防護》の結界を張るの。大きなダメージを受けると《防壁》が発動するから怪我をしないというわけではないけど

死ぬようなことはないわ」

「《防壁》が発動するような攻撃は有効打になるんだ。そのダメージを審判が計測してポイントを付ける。制限時間内に一定のポイントを取るか取ったポイントの多い方が勝ち、てわけさ」

大まかなルールを2人から教わる。

「なるほどね。場外負けとか他のルールは？」

「場外判定はランダムに決める戦闘ステージ次第ね。……アンタまさか戦わずに済ませようと思ってない？」

図星だった。ユーマは今迷っている。

「……確かにアンタの力は余り人に見せるべきじゃないわね。でもね」

エイリークはユーマと視線を合わせる。2人の各々の事情を知る彼女の瞳は葛藤する心を写すように揺れていた。

「でもね、見たでしょ。アイリィの嬉しそうな顔。彼女は《魔術師》であることにこだわりがあるの。アタシがあの時《剣士》にこだわっていたみたいに」

エイリークのいうあの時とは《風森の国》で起きた誘拐事件のことだ。ユーマはそのときの彼女の独白を覚えている。

（あの人は自分の『在り方』を見つけた人なのだろうか？）

それとも『決めつけてしまった』、あるいは『決められてしまった』人なのだろうか？

ユーマは控室前で別れた彼女のことを思い出す。

＋＋＋

少し前の控室前にて。

「ここで別れましょう。ウインディさんは彼に付いてあげて」

アイリーンの声は弾んでいる。

ここに来るまでの間、ユーマは出会って間もない彼女の変化に戸惑う。

落ちついた仕種、大人びた表情をする彼女はユーマから見ると彼女と同じ年のエイリークに比べて年上の女性に見えていた。

でも今のアイリーンは年相応の少女だ。ステップを踏むような軽い足取り、それに合わせて揺れる白金のロングストレート。上気した頬。

鼻歌まで歌われたときはエイリークですら驚いたのだった。

そんな彼女を前にユーマは模擬戦を断れずにいた。

風森の国と西の大砂漠で不本意ながら実戦を体験したユーマは力

を振るうこと、戦うことに躊躇いはない。

ただし

（女の子相手に戦うのは嫌だな）

（ふぇみにすとー、てやつですねー）

幻聴は無視した。そのとおりだったけど。

（それに……）

「アイリーンさん、いいですか？」

断る言い訳にしようとユーマは思い切って彼女に対する懸念を訊ねることにした。

「あなたは戦闘型の魔術師なんですよね？」

当たり前のことを言われてきょとんとするアイリーン。

「そのとおりですけど？」

「いいのですか？　模擬戦なんかして。自分の手の内を明かすような真似、わざわざするなんて」

「……」

ユーマは話を続ける。

「魔術師の魔術は確かに強力です。魔術の１つで戦況をひっくり返すなんてざらじゃない。でも魔術師は無敵じゃない。魔術の術式は魔術師によって研究される。それは相手の魔術だってそうだ。」

ユーマの話は続く。

「戦闘型の魔術師なら得意とする術式や切り札といえる強力な術式を持っているはずだ。それがないと1人で戦う事も最大の火力と攻撃範囲を持つ『戦闘型魔術師』の役割を果たせないから。でも魔術に対抗する魔術は存在するし、なくてもいつかは対策を打たれる。無力化された魔術師はただ殺されるだけだ」

ユーマの話は続く。訴えるように、非難するように。

「戦闘用の魔術は命を懸けた時の、ここぞという時の必殺技。人に見せるものじゃないんですよ。魔術は隠すべきだ。……だから何かあると相手に警戒させ牽制する《はったり》が魔術師の最初に使う最大の魔術なんです。全てを晒した丸裸の魔術師なんか魔術師じゃいられない。だから……」

模擬戦やめませんか、と言うのをユーマはやめた。

話し出したら止まらなくなり、断る言い訳にしては大げさで言いすぎたことに気付いたのだ。

しかしおせっかいでも言いたかった。ユーマは恐怖と絶望を見たことがある。

魔術を見ただけで術式を分析して最速で対策を練り、1度受けた魔術なら2度目は必ず無力化する恐るべき魔術師の天敵がいることをユーマは知っている。

――銀の翼を持つ、金の眼をした梟。

あの時、白い魔術師達を切り裂き啄ばむその姿を目の当たりにしたときの恐怖を、

魔術師としての矜持を潰された上で狩られていく彼らの絶望を、

少年は見たことがある。

「……言いたいことはそれだけですか」

アイリーンの表情が変わる。いや、元に戻ったというべきか。

「驚きました。魔術師の事、詳しいのですね。貴方は私とそう変わらない歳なのに」

（……考え方が実戦的すぎます。学園の生徒でもそんなこと意識して魔術は使いません。どれだけの戦闘経験を積んできたというのかしら）

「いや、受け売りだよ」

ゲームのね、と呟くユーマ。アイリーンには聞こえなかった。

「勉強になります。でも愚かなんですよ私。模擬戦はやめません」

アイリーンは話を続ける。

「貴方の力、気付きました。ウインディ家でもない貴方がその《守

護の短剣》を持つのが何よりの証拠。正門前で空から降ってきたのも、中庭でのあの《高速移動》もそう。ウインディさんの《旋風剣》を受けて平気なのもきっと……」

アイリーンの話は続く。

「きっと貴方はほんものの《魔法使い》。私たち《魔術師》が目指す似ているようで違う存在。ならば試してみたい。私（魔術師）の力が貴方（魔法使い）に届くかどうかを」

アイリーンの話は続く。それは宣戦布告。

「私は《銀の氷姫》。貴方にその魔術の全てを出し切ります。たとえ丸裸の魔術師になっても構わない。惨めに負けてもいい。それで全てを晒し全てを失くして魔術師でいられなくても……私は魔術師であり続けたいのです。魔術の高みを目指したい。だから」

――お願い、断らないで

――お願い、私から逃げないで

声にならなかった言葉。ユーマにはそう聞こえた。

「……どうして？」

「決まってます。私は《最高の魔術師》になりたいのです」

「……」

最強じゃなくて最高。どんな魔術師だろう。彼女だってわかって

いないはずだ。

「……」

（負けてもいいなんて考えはこの世界では甘いことだと思うけど）

あんなことを言う彼女は照れたような笑みを浮かべていて、

それはしあわせそうで

――ぼくもいつかは兄さんみたいになりたいんだ

それが少しだけどなつかしくて

――教えて……ください。何も……できずに……あんな思いするなら……俺は

少年には眩しかった。

＋＋＋

第1戦闘室のステージに入ると、ユーマとエイリークの2人は多

くの生徒に迎えられた。

「なんで？」

「……報道部でしょうね。しかも学園長が許可してるみたい」

進学式しかない今日。放課後にも関わらず生徒たちはこの突然のイベントに急遽集まってきている。

ステージから上の2階、3階は観戦スタンド。そこには学園の生徒以外にも学園長をはじめほかの教師たちもいた。

スタンドには『必勝！　銀の氷姫』『アイリーン様万歳』などといった垂れ幕がある。

「なんだ、あれ？」

「《アイリーン公式応援団》。ファンクラブとは別物だけど気にしないで」

アイリーンはエイリークに比べるとこの辺りは如才無い。自分でコントロールしている。

『エイリーク様の騎士なんて認めない』『消えろ！　自称騎士！』などの垂れ幕もある。

ユーマは気になってしょうがない。

「いいから。アイリィのことどれだけ知ってる？」

「《銀の氷姫》なんだろ？　氷の魔術を使う戦闘型の魔術師てくらいかな」

「まあそのくらいよね。いい？　彼女はね……」

ここで待ったをかける。

「いやいい。アイリーンさんは『試合』を臨んでるみたいだから。フェアじゃない」

「アンタね……アタシとの約束覚えてる？」

もちろん、と頷くユーマ。

「ならいいわ。頑張りなさい。アタシはアギとスタンドにいるから」

鼬扉はここまでよ、とユーマの背中を叩いてさっさと行ってしまうエイリーク。

「ちょっとまった」

「何よ」

「やっぱりアドバイスを、と思って。エイリークならどう戦う？」

エイリークは、

「魔術が発動する前に突撃して仕留める。これよ」

「……」

力技だった。

エイリークと別れたユーマ。アギに借りたゴーグルのサイズを調整すると額にかける。

「さあて、いきますか」

（いきませうー）
（……）

幻聴は相変わらずの調子でいて、でもそれが頼もしかった。

＋＋＋

2階観戦スタンドの中央まできたエイリーク。アギがベンチ席をとって待っている。

「おまたせ。何？」
「……いやね、姫さんと待ち合わせしているみたいで周りの視線が痛いんすよ」
「何言ってんのよ。……はじまるわ」

ステージの2人が向き合う。観戦客は静かに彼らを注目した。

＋＋＋

石畳のステージ上に立つユーマ。《防護》の結界の中に入ったせいか全身に一瞬ピリッときた。

今回の戦闘ステージは《Mアリーナ（ミドル）》という。

四方20メートル程度の石畳の舞台。場外判定もなければ障害物もない。尚、中距離戦用のフィールドをアイリーンは得意とする。

ユーマの正面には制服ではなく濃紺のドレスを身に纏うアイリーン。

戦闘服だろうか。白金の髪は背中に流したまま、両の手首には重量感のある銀の腕輪。きっとあれが彼女の増幅器（ブースター）だ。

「お待ちしてました。準備はいいですか」

「ばっちりさ」

対するユーマは先程と大して変わらない。アイリーンは彼を観察する。

白いシャツに黒のズボン、風森の国の召使いが着る略式の制服だ。腰に差すのは翠と銀の《守護の短剣》。あとは額にある黒くて大きめのゴーグルと左腕の白い腕輪ぐらいだ。

ゴーグルは砂漠の民が使う砂除けのものだ。《遮光》の付与効果がある。

白い腕輪は特別製だと言っていた。ブースターだと思うが《魔法使い》ならば必要ないはず。何かしらの付与効果はあるかもしれないと彼女は一応警戒することにした。

「……今日貴方に出会えたことを世界に感謝します。さあ、勝負です。私だけを見てください。……私のすべてを受け止めてください」

祈るような仕草をするアイリーンの顔は真剣そのものだったが、そのあと彼女はまっすぐにユーマを見つめ微笑んだ。

戦闘前だからなのか気分が高揚している彼女の頬は赤い。

（まるで告白でもされてるみたいだな……って）

まずい。

ユーマは今現在自分が観戦客である生徒たちに注目されていることを一瞬でも忘れていた。

スタンドは開始前から大騒ぎになる。

（アイリーンさん、なんで平然としてるんですか。アギとエイリーク、この状況わかっていて笑ってるんだろ。震えてるぞおい。狂ったように踊っているのは何だ。え？　あれが報道部？　奴等が《集音》して実況しているの！？　それより『二股騎士最低』『逝け、ユーマ！』って何時つくったあぁっ！！）

（へいじょーしんですよー）

（……）

アイリーンの集中力は並みじゃない。雑音は全てシャットアウトしている。

くっ、とユーマは混乱した思考を隅に追いやる。

「審判！」

叫ぶユーマ。もうさっさと始めた方がいい。そう判断した。

短剣を抜き構える。相変わらず様になっていない。

アイリーンは思考開始。

《幻想》から《幻創》へ。術式のイメージが固まるにつれ銀の腕輪が輝く。

今度こそ模擬戦がはじまる。

＋＋＋

０－０５　銀の氷姫（前書き）

ユーマＶＳアイリーン。学園での初対戦

０－０５　銀の氷姫

＋＋＋

この世界の魔術は厳密にいうと《ゲンソウ術》というものの１つである。

ゲンソウ術は幻想・幻創・幻操・現操・現創の５つの工程からなる超能力だ。

『ありえなくてとりとめのない想像』と『人のなかにあるが形にならない想い』の２つのちから。

要するに。

『幻や想いを現実にて創造する』、非常識な技術である。これはあたらしい自己表現の一種ともいわれている。

人の想いという無限の力を発現させ、それを制御するのは当然難しい。というよりまず無理だ。

しかしこれを実現させた者たちがいた。４００年前の勇者とその仲間たちだ。

《疾る斬撃》

剣の届かない離れた敵に向けて放つ勇者の剣技はカマイタチでも魔法でもなかった。

「斬る！」
「疾れ！」
「届け！」

この想いだけで実現させたといわれている。

《疾る斬撃》は一例に過ぎないが、彼らは想いの力で魔神を斬ったと史実では語られている。

――不可能じゃない。これはヒトのチカラだ。

人は魔神が世界に与えていた魔力という万能の力が失いつつあることを知ると、勇者の示した《ちから》の可能性を信じ、実用化を目指して多くの年月を費やしてきた。

試行錯誤して多くの実験を繰り返した。ブースターをはじめ様々な補助装置を開発した。

それから明確な想像力があれば誰でも使えることが分かった。

現象のイメージにある共通の認識を抽出してイメージの規格統一を行うことで誰でも同じようにゲンソウ術を使える様に試みたりもした。

尚、規格化したイメージの集合体をＩＭ（イマジン・モジュール）と呼ぶ。

そうやって４００年も経つとゲンソウ術はある程度実用化の成果をあげることができたのだった。

ところで。

ゲンソウ術における魔術は早い段階から実用化していた。そもそも魔術は４００年の前のそれ以前からあったものであり、今の魔術はその模倣に過ぎない。

かつての魔術は『魔力を媒体に術式を通して発動する』。

たとえば《火球》の術式に魔力を消費すれば火の玉を撃ち放つことができた。

現在の魔術は『術式から魔術を想像して発動する』。

これは《火球》という術式から『火の玉を打ち出す』というイメージを想像し、ゲンソウ術を駆使することで火の玉を再現するのだ。

魔術にはほかのゲンソウ術に比べると術式という古くも簡素なＩＭが最初からあった。（ＩＭ《火球》＝火の玉を撃ち出す）

ゲンソウ術の魔術に必要なのは『術式から魔術を想像できるかどうか』という1点。人のイメージとは曖昧なもの。術式が発動して

も完全な魔術を再現できる人は少ない。

火の玉を模倣することができても熱や光など火そのものの性質、それを撃ち出す速度や威力をすべて再現することは難しかった。

高位の魔術をゲンソウ術で再現できない今の魔術師たち。

魔力を消費するだけで魔術を発動できた４００年前の魔術師に比べればその意味で先人たちを超えることができなかった。

旧来の術式をイメージで再現するのは難しい。

だから魔術師は想像の限界に挑戦した。

あらたな術式の創造を。

いつからだろうか。

魔術師と魔法使いが区別されたのは。

＋＋＋

閑話休題。

しばらく様子見するユーマ。１対１の状態で魔術師を相手にするには甘い判断。

そしてアイリーンの術式は完成した。魔術が発動する。

「世界よ、輝け！！」

叫びと共にアイリーンを中心に周囲へ向けて冷気が駆け抜けた。

突風が吹きユーマはそれに耐える。見るとアイリーンの全身と周囲５、６メートルくらいを極小のキラキラと輝いたものがいっぱいに浮遊している。

氷霧。

空気中の水蒸気が直接昇華する気象現象。輝いて見えるのは照明の光を氷晶が散光しているからだ。

常温の環境ではありえない。現にステージ内はひやりとする程度でしかない。

《氷輝陣》

輝く氷晶の世界。氷晶は彼女の濃紺のドレスを星空のように飾り、その中でアイリーンは蒼の瞳を閉じる。

「何時でもどうぞ。これが私のすべてです」

＋＋＋
銀の氷姫
＋＋＋

「あのバカ」

エイリークはユーマを罵る。

「《氷輝陣》なんてアイリィ本気どころじゃないじゃない。あれは発動する前に仕留めないと勝ち目ないわよ」
「なあ、あのキラキラそんなにすごいのか？」

アギは訊ねた。戦士系の彼は魔術の術式に疎い。

「氷の姫さんて言ったら《氷弾の雨》と《氷晶壁》が有名じゃないか」
「《氷輝陣》はアイリィの切り札。１人で戦う時の戦闘スタイルよ。あれを展開したなら１対１ではアタシは勝てない」

剣士と相性が悪いのよ、とエイリーク。

「見てなさい。ユーマは剣士じゃないけど苦戦するわ。アイツはアタシと同じ風だけだから」
「ふーん。……風だけね」

アギの呟きは喧騒に消えた。

＋＋＋

輝きの中、瞳を閉じ無防備に立つアイリーン。
ユーマは手にした短剣を見て躊躇う。しかし、

――いいユーマ。約束して

「……わかってる」

（いくぞ。《高速移動》、2ステップで）
（でんこー、せっかあー）

ユーマは1歩でアイリーンの左側面に立ち2歩目で突撃。
氷霧の中を突破して短剣を突き出そうとする前に、

「氷晶壁」

ユーマの正面に分厚い氷の壁が出現。短剣が弾かれる。

このときアイリーンはユーマを見ていない。正面を向き目は閉じたまま。ただ右腕を横に向けただけだ。

「このっ。もう1回！」
（いなずまー、あたーく）

ジグザグにステップを踏んで狙いを絞らせない。背面に立ち突撃、

と見せかけてあと2ステップ。右側面から突撃。

「氷散弾！」

左手を突き出すアイリーン。

ユーマは慌てて氷の散弾を回避。距離をとる。

「あぶなっ、て考えたら動かず目もつぶって防いでるんだ。フェイントは無駄か」

（ばーか、ですねー）

幻聴は無視した。

「今度はこちらからです。降れよ、氷弾！」

アイリーンは蒼眼を開き、今度は両腕をユーマに向けて突き出した。

《氷弾の雨》がユーマを襲う。

《氷弾》の術式は拳くらいの大きさの氷塊を撃ち出す初級魔術だ。普通魔術は想像力で基本術式を組み替えて威力・効果を調整する。（ゲンソウ術の工程でいうところの《幻操》である）

《氷弾の雨》は氷弾を連射する程度の術式。ただしアイリーンのそれは術式の展開速度と氷弾の連射速度が半端でない。

しかも。

（機関砲かよ。しかも全周囲）

《氷輝陣》を展開中のアイリーンは周囲３６０度のどこからでも氷弾を撃ち出せる。きっと対空砲火も可能だろう。さらに銃口が１つでない。

《高速移動》で回避し続けるユーマ。直線的な弾道の《氷弾》はギリギリまで引き寄せてステップを刻めば躱せないわけではない。

それでも時間が経つにつれ追いつめられる。

「くっ。このお！」

咄嗟に逆手に持った短剣を振るう。

振るった短剣の軌道にあわせてカマイタチが発生。ユーマに当たるはずの氷弾を切り払う。

「もういっちょう！」

（ふーじーん）

今度はアイリーンに向けて《風刃》を放つ。

「氷晶壁」

しかし氷の壁に弾かれた。

「くそっ」

（イメージがー、たりませんー）

そう言われてもカマイタチが氷の壁を切り裂くところなんてユーマは見たことがない。

ユーマの感覚では《風刃》の切れ味をこれ以上《補強》できなかった。

「それならっ」

氷弾を跳び上がって回避。

飛び道具を持つ相手にするには最悪の一手。すかさず次の氷弾がユーマを襲う。

ユーマはそれを『走って』躱す。

「なっ、《天駆》ですって!?」

驚くアイリーン。意表を突いた隙にユーマは彼女の頭上まで数歩で駆け上る。

（あのキラキラしたものが邪魔なんだ。あれがなければ……）

短剣を振りかざす。

「突風!!」

（ふー、ふー）

真下のアイリーンに向けて《突風》を放つ。

吹き下ろし襲い来る風の激しさに彼女は態勢を崩した。輝く氷晶

は撒き散らされる。

「うらあああああっ」

視界を確保できぬまま《天駆》で宙を蹴り、《高速移動》で突撃。落下速度に乗じた渾身の一撃は、

ガキィィッ！！

「……まだまだ、ですわね」

輝く氷晶の中、彼女に迫る寸前で《氷晶壁》に阻まれた。

＋＋＋

「見てますか。オルゾフさん」

「ええ。学園長」

エイリーク達の真上、3階スタンドの来賓席で2人は模擬戦を観戦していた。

「すごいですねアイリーンさん。《氷弾》も《氷晶壁》も魔術の発動までがとてもはやいです」

「《氷輝陣》を構成している氷晶を媒体に術式を構築しているので

す。普段の彼女の倍以上の速度で魔術を発動しています」
「魔術で魔術の増幅器を創造ですか。でもそれだけじゃないでしょう？」
「ええ。この手の発想は珍しくありません。ただシルバルムは自分の特性、《感知》を理解してこの術式を組み上げています」
まあ、オリジナルなんですの？　と学園長は驚くような声を上げる。

《氷輝陣》の特性は主に３つ。

「氷属性魔術の発動補助」
「感知能力の範囲拡張」
「心像の具現」

アイリーンの持つ特性スキル《感知》。
彼女は散布した氷晶の１つ１つを知覚することができる。目に頼らずとも敵が氷霧に触れれば位置を把握することが可能なのだ。
接近を感知した付近に氷晶を集結・結合した上で《氷晶壁》を発動。ゼロから氷の壁を想像して創造するよりも段違いに早い。《氷弾》も同様である。

「そしてこの氷霧は彼女の《心像》。輝く氷晶の風景は彼女の過去に基づき根付く心そのもの。ミツルギの氷霧を吹き飛ばす発想は正しいが、あの程度の風で人の心を吹き消すなんてできはしない。尽きることのない氷晶がすぐに再展開されるのは当前だ」

オルゾフはアイリーンの魔術を評する。

「シルバルムの《氷輝陣》は展開範囲の狭さと攻撃・防御の両立に問題があります。さらに言えば《氷弾》の連射性能に任せすぎで照準が甘くペース配分を間違えるとすぐに消耗してしまう。改善の余地は多いですが今のままでも前衛型を相手にして1人で接近されるのを防ぐ事が可能です。足を止めて戦う魔術師ならば十分といえるでしょう。」

「そうですね。このあいだエイリークさん文句言ってたそうです。『この冷血姫型城塞へいきー』だって」

……何処で聞いたのですか？

ふふ。秘密です

「……ミツルギの方はどう思いますか？」

「あの子もおもしろいわ。まずは《高速移動》。あれだけ動いて身体に殆ど負荷がかかってないみたい」

オルゾフは頷いた。

「ええ。今まで彼が見せたのは《高速移動》、《風刃》、《天駆》、《突風》……」

「あとこっそりだけど《風盾》、《風乗り》も使っているわね。《風読み》もかしら？　下級から中級程度の術式ですけど魔法戦士なら及第点よ」

「《高速移動》を中心に術式を２つ３つ同時展開しています。あの戦闘速度なら３年のランクＡにもこれだけの術者はいません。機動戦なら《Ａナンバー》に匹敵するでしょう」

《Ａナンバー》とは学園のランクＡ、上位１０名のこと。主に高等部の３年生で構成されていて《エース》、《番号持ち》と言われる。

「ただ彼は風使いらしく一撃の重さが足りない。《氷晶壁》を破れなければ勝ち目がない」

「そうですね。速さの点でも不意をつけないので強化された《氷晶壁》の展開速度を超えることができないみたいですし。オルゾフさんならどうします？」

「……」

オルゾフは答えない。

「ごめんなさい。《魔法使い》はわざわざ手の内を晒さないのよね」

「学園長」

あら、ごめんなさいね、謝る学園長。

「……代わりにですがエイリーク・ウインディ。彼女ならば《氷輝陣》を出される前に突撃しますね。あれは魔術の発動までに時間が必要ですから」

「一発勝負なんて潔い子よね。それでも彼女たちの対戦の勝敗は確か五分五分でしたか。……このあいだアイリーンさん愚痴っていた

そうですよ。『あの子なんて、姫型台風攻城へーきよ』ですって」

……本当に何処で聞くんです？

うふふ

「このまま引き分けなんておもしろくないわ。もう1度くらい見せ場はあるでしょう」

＋＋＋

0－06　精霊使い（前書き）

ユーマ、全力モード

0－06　精霊使い

＋＋＋

模擬戦は続く。

《氷晶壁》でユーマの攻撃を完全に弾き、《氷弾》の弾幕を張るアイリーン。

対して《高速移動》で縦横無尽に駆け回り、時には風で《氷弾》を打ち払い反撃するユーマ。

どちらも決定打を与えられずに時間だけが過ぎていく。

観戦スタンドの生徒はいつのまにか沈黙していた。滅多に見ることのできない上級者の戦いに目を見張っている。

《銀の氷姫》の実力は本物だ。殆どの生徒が彼女を知っているが、その『凄さ』を知る生徒は少ない。観戦にきた生徒は今ここにいることが幸運といえる。

そして。

（アイツは誰だ？）

当然の疑問。学園の生徒でない黒髪の少年が彼らの知らない本気

の《銀の氷姫》相手に互角に戦っている。

少年に関する噂はあったのだがこの戦いを見ることで真相はますますわからなくなっていた。

――エイリーク・ウインデイの騎士があらわれたらしいです

――中庭で黒髪の少年が3年の剣士を一撃で倒したそうだぞ

――正門で不審な男がエイリーク様にぶたれて昇天したのよ

――中庭でウインデイ様に蹴られていた……オノレウラヤマシイ

……以上報道部取材メモより抜粋

一方、少年を知る2人。

「引き分けかユーマの負けね」

「いやわかんないぜ」

エイリークとアギの意見は分かれた。

「制限時間のある模擬戦に《氷輝陣》を発動した時点でアイリィに引き分けより下はないわ。ユーマならもしかしたらと思ったけど、《氷晶壁》を破れないなら結果は同じよ」

「そうだな。あの術式は俺の《盾》といい勝負だな。……まあ、それでもユーマは負けないと思うぜ」

アギはユーマから目を離さなかった。

ユーマは氷の弾幕を宙を駆け回って躱し続けている。ハイスピードで展開される攻防戦は1度見逃すとわからなくなってしまう。

「どうしてよ？　ユーマのことはアタシがよく知っているわ。アイツは《風使い》。これ以上の攻撃手段がないのよ」

しかしエイリークは風森の国にいた頃のユーマしか知らない。

「そんなことねぇよ。俺は知ってる。あいつは風だけじゃねぇんだよ」

だからエイリークはアギの言葉に驚いた。

確かにユーマは厳密には《風使い》ではない。しかし風属性の術式しか使えないはずだ。

風森の姉姫が禁じたという、エイリークの知らない《切り札》を除けば。

「……アンタ、何を知っているの？」
「まあみてな。氷の姫さんが動いたぜ」
「……ふん」

エイリークはおもしろくなかった。

＋＋＋
精霊使い
＋＋＋

（もういいでしょうか？）

アイリーンは思う。

ユーマの戦いぶりはアイリーンから見ても素晴らしいものだった。

正直《氷晶壁》の展開はユーマの《高速移動》から繰り出す攻撃に対してギリギリの対応なのだ。

《氷輝陣》の感知が一瞬でも遅れれば短剣が彼女の喉元に突き出される。特に不意打ちの上空からの突撃は肝が冷えた。

アイリーンは春季の休暇中に特訓を重ね、《氷輝陣》の展開範囲を瞬間だが3メートル前後伸ばせるようになっていた。これが有利

に働いている。

ただし感知スキルに集中する余りアイリーンの消耗は激しい。現在の魔術は魔力を殆ど消費しないが、精密且つ緻密に魔術を想像する必要があるのだ。

１つの魔術に対して幻覚を見るほどの想像を何千何万と繰り返す。意識せずとも無意識で、一瞬とはいわずとも僅かな時間で、である。それは人の脳に負担をかける。今の彼女は魔術と《感知》を脳内で同時処理しているのでなおさらだった。

制限時間までもたないと判断したアイリーンは弾幕を張り続け、攻撃１本に絞ることで負荷を軽減することにしたのだが。

（これ以上はないのかもしれません）

《氷晶壁》を警戒しているのかユーマは回避の一手。防戦一方だった。

（だったら……）

「ユーマさん」

氷弾の雨が止む。同時にユーマも《高速移動》を止めた。

「貴方の力、素晴らしいものでした。でもこれまでですね。……きっと私の氷と貴方の風は相性が悪かった。そうなのでしょう」

「……」

ユーマは答えない。アイリーンは彼に対して僅かながら失望していた。

本当はもっとすごいと思っていたのだ。《守護の短剣》を持つにふさわしい圧倒的な力を期待した。

彼女の望みは《魔法使い》の力を目の当たりにすること。そうすれば変われると思ったから。

“最高の魔術師”

彼女は漠然とした願いを実現するきっかけが欲しかった。決して手強い対戦相手が欲しかったわけはでない。

「今日は私にお付き合いくださり感謝致します。……これで最後にしましょう。私の最大の攻撃、受けてください」

《氷輝陣》に変化が起きた。アイリーンの右腕に氷晶が全て集まる。

アイリーンは完成した大きな氷の結晶をユーマに向けた。

「私の『風』は如何でしょう？　風よ、輝けぇ！！」

結晶から氷晶の吹雪が放射される。

《輝風凍波》

凍結攻撃。

《氷輝陣》の氷晶は感知能力の拡張と術式補助の媒体であり実は正確には『氷』ではない。《氷弾》も単体の物理攻撃なので《凍結》の効果を得るには術式を組み替える必要があるのだ。

結晶を撃ち出すものだと読み誤ったユーマ。

放射する吹雪は射角範囲が前方にとても広くて彼に逃げ場はない。

《突風》や攻撃を受け流す《風盾》でも防ぎきれそうにない。

「やばっ！　しまっ、」

吹雪が直撃したユーマは氷漬けになった。

＋＋＋

「……きまったわ」

「いや、まだだな」

頑なアギにエイリークは腹を立てる。

「何がまだなのよ！　アタシだってアイリィのあれは初めて見るのよ。これ以上何が起きるっていうのよ！」

アギはエイリークに答えない。彼はステージ上のユーマしか見ていない。

「……ステージがアリーナなのがよかったんだな。吹雪が地面を凍

らさなかったのも幸いだ。でもやっぱりすげーよな、あいつ」
「あ……。なによ、あれ」
そこまで言われてエイリークは気付く。アイリーンの前に立つ3つの影に。
「そうだよ、ここまでやったんだ。手加減なんてすんじゃねぇ。最後までやれぇ！　ユーマぁ！！」
アギは叫ぶ。
彼はただユーマの《全力》が見たかった。
＋＋＋
吹雪が直撃したユーマは氷漬けになった。
はずだった。
正面に立つアイリーンからはユーマの姿は見えない。
なぜなら2人の間には氷の壁があったから。
「ま、まさか防いだの？　《氷晶壁》で！？」
「違うよ」
壁の向こうから少年の声が聞こえる。

「あぶなかった。咄嗟だったから密度とか強度なんて考えられなかったし。ばかでっかい氷弾だったらアウトだったな」
「そうですねー」
「……」
少年とは違う女の子の声もする。
よく見れば氷の壁は土が壁のように隆起して凍りついたものだった。
ユーマが「よっ」と声をあげて風で壁を切り裂く。
アイリーンの前に姿を現すユーマ。彼は1人でなかった。彼女からは3つの姿が見える。
1つは長身の男の姿。名は《砂更(ささら)》。
波打つ金の長髪。目元は見えない上に身に纏う白いローブの襟で口元も隠している。
1つはとても小さな女の子の姿。名は《風葉(かぜは)》。
くりくりした愛嬌のある顔立ち。緑色の髪と緑色のワンピース。背中に透明な羽が4枚。身長も10センチくらいでまるで妖精のようだ。

そしてもう1つの姿、ユーマにも若干の変化がみられた。

左腕の白い腕輪が形を変え、滑らかな曲線を描く白い篭手になっている。

《白砂の腕輪》は砂の精霊、砂更の器である。

アイリーンがユーマに関して予想していたこと、それ以上の事態に彼女は驚き声を上げた。

「精霊が……2体!?」

＋＋＋

「何よ、風葉じゃないほうのあの精霊は何!?」

アイリーンの驚きと疑問はエイリークもまた同じだった。

「やっぱり知らなかったな。砂の精霊だってさ。《西の大砂漠》で捨て猫……じゃなくて捨て精霊拾ったってあいつは言ってたぜ」

「ひ、拾ったって……ならもしかしてあの白い腕輪は《精霊器》なの!?」

精霊器とは精霊を宿すことのできる道具の総称。《守護の短剣》もこれにあたる。精霊器は付与効果どころでない特殊効果を持つものが多い。

アギはエイリークに頷いてから話を続ける。

「風葉の《魔法》と砂更の『作った砂の波』に乗って俺達は砂漠越えしたんだ」

あれは面白かったなー、と《砂漠の竜蛇》に追われた記憶を都合よく封印しているアギは語る。

「俺が砂更について知ってんのは『下位精霊だから《魔法》が使えない』ことと、『能力は砂を操ることができる』くらいかな」

＋＋＋

「どうやって《輝風凍波》を……」

防いだの？　アイリーンは言葉が続かない。

「砂の壁を作って防風壁にしたんだ。強度が心配だったけど壁が吹き飛ぶ前に凍りついてしまったから……」

「だからどうやって！」

「ん？　いやこうしてさ」

熱り立つアイリーンにきょとんとするユーマは、しゃがみ込んで篭手のある左腕で石畳を叩いた。

叩いた石畳の周り1メートルくらいが砕くというにはとても静かに『粉砕』される。

「こうやって砂を作ってあとは砂更に壁作ってもらうんだ」

「サラっちはー、器用ですよー」

「……」

アイリーンは言葉が出ない。

（《風森の守護精霊》だけでなくもう1体の精霊？　しかも属性が違う。属性の異なる精霊を同時に喚び出すなんて非常識すぎる！）

「……今まで本気じゃなかったんですか？」

アイリーンは氷の結晶を解き再び《氷輝陣》を展開。戦闘態勢を整える。

「……約束したんだ。すべてを見るって」

憤るアイリーンに対するユーマのその表情は弱ヶしかった。彼はここにきてまた躊躇っている。

でもそれは一瞬のこと。

「約束したんだ。すべてを見せるって。だから！」

ユーマは額のゴーグルを被ると短剣を構える。

短剣の構えが今までと違う。見よう見まねだろうが《それ》はアイリーンもよく知っている構え。

「風葉。砂更。力を貸してくれ。《全力》、いくぞ！」

短剣に風が集まる。

短剣が纏う風はまわりで渦を巻き、吹き荒れる。

ユーマの構え。それはエイリーク・ウインディの必殺技。

《旋風剣・疾風突き》

「させません！」

《疾風突き》は今までと同じ一直線に突撃する技だ。アイリーンは氷弾を嵐のように正面に向けて撃ちまくる。

「《追風》最大出力！　《砂塵》！！」

「はー、ふー」

「……」

ユーマの叫びと同時に突風が氷弾をすべて吹き飛ばす。

同時に発生した竜巻は石畳を砕きながら砂を飲み込み、そのままアイリーンに向かっていく。

「氷晶壁ぃ！」

叫ぶアイリーンは《氷晶壁》を防風壁にして竜巻の直撃を防いだ。

しかし。

（くっ、見えません。それに《感知》も封じられた？）

《氷輝陣》とぶつかった《砂塵》はそのまま彼女を中心にして停滞した。

竜巻によって氷霧は吹き飛ばされるが氷晶は無尽蔵に散布するので《氷輝陣》自体が吹き消されたりはしない。ただし今回は竜巻の中の砂塵と氷霧がぶつかりあって氷霧の中に砂が混じってしまった。

視界を塞がれたのはもちろん、かき乱される氷晶が砂の一粒一粒を感知してしまって本命（ユーマ）がわからなくなってしまったのだ。

（氷輝陣の《感知》がこんなにも簡単に無力化されるなんて！　今正面以外から攻撃されたら防ぐことができません。……えっ！？）

「どうして、竜巻が……消えた？」

アイリーンは驚きの連続で翻弄され続ける。

そしてユーマはアイリーンの正面にいた。《疾風突き》の構えのまま全く動いていない。

ユーマは不意打ちを仕掛けるのために《砂塵》を出した訳ではない。ただ『溜め』の時間が欲しかっただけ。

（《疾風突き》じゃ《氷晶壁》は多分破れない。だから）

イメージで《補強》する。

カマイタチで氷の壁を切り裂くイメージはできなかった。

風で氷をどうこうするイメージは湧き辛い。

だからイメージを置き換える。

鋭いドリルで岩盤を砕くイメージと。

「集え、集え集え！　風よ集いて螺旋を描け！」

「ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐー」

短剣が纏う竜巻はさらに風を飲み込み大きくなる。

「回れ回れ竜巻よ、風を束ねて一振りの槍へ！　先は鋭くもっと鋭利に！！」

「ぐるぐるぐるぐるもっともっとー」

巨大な竜巻は激しい勢いはそのままに次第に収束していく。

彼は『この技』を知っているわけではない。ユーマは《旋風剣》の竜巻を《補強》しただけだから。

完成したその技の名は、上位の魔法剣技。

《旋風剣・螺旋疾風突き》

＋＋＋

０－０７　序章のおわり（前書き）

序章　精霊使いの少年

０－０７　序章のおわり

＋＋＋

「こ、これが……」

――貴方の本気なのですか？

言葉が出ない。エイリークの技とは明らかに違う。

彼女の技は竜巻の衝撃波をぶつける打撃・打突攻撃だ。だけどユーマの技は違う。竜巻自体が鋭い槍のように尖り、１つの武器を形成している。

刺突攻撃とも違う。突き刺すよりも荒々しく突き破るイメージがそれにあった。

――砕かれる。破られる……防げない！

あの小さくて強大な竜巻を纏う短剣に《氷晶壁》は通用しない。そう思ってしまった。

アイリーンは戦慄。

そして自分は甘かった、彼をどこかで見下していたことを嫌でも気付かされる。

彼女がユーマに関して推測していたことは『《守護の短剣》に宿る《風森の守護精霊》と契約した《精霊使い》ではないのか？』ということだけだ。

それ以上のことは考えもしなかった。

精霊はこの世界に存在する魔力のひとつ。魔神のいない魔力が減衰していく世界で唯一高い魔力を所有する『魔力の思念体』、『自我をもつ魔力』である。

中でも風森の守護精霊は風の中位精霊。中位以上の位を持つ精霊は《魔法》が使う事ができる。

魔法とは魔力を扱う力のこと。かつての魔術師が《魔術》を使って魔力を扱うのも《魔法》だった。

魔法が使える精霊を使役する《精霊使い》は《魔法使い》といえる。だからアイリーンはユーマに興味を持った。学園内で『魔法使いのようなもの』は体内に先天的な魔力を持つ魔族の生徒くらいなのだ。

世界に数少ないほんものの《魔法使い》。それがアイリーンの前にあらわれた。魔族でもなく魔法を使える《精霊使い》が。

魔法を知りたい。自分の力を試したいという願望を彼女は抑えら

れなかった。

戦ってみて《魔法使い》とはこんなものかと思うと同時に自分だけの魔術、《氷輝陣》は相性こそあれ《魔法使い》に負けてはいないと自信を持つことができた。

ついさっきまで。なのに今は。

《氷弾》は風で吹き返されて《氷輝陣》の感知能力も砂で簡単に無力化された。《氷晶壁》だってきっと砕かれてしまう。

――無力化された魔術師はただ殺されるだけだ

――人に見せるものじゃないんですよ。魔術は隠すべきだ

――全てを晒した丸裸の魔術師なんか魔術師じゃいられない。だから……

（殺される）

そう思っても仕方がなかった。ユーマは忠告までしてくれたのだから。

ユーマは隠していた。砂の精霊のことを。もしかすると最初は《高速移動》だけで戦おうとしていたのかもしれない。

《魔法使い》も魔術師同様、すべてを晒すことは致命的だから。

（……《氷晶壁》を盾にして受け流し、突撃を躱すしかありません。移動系の術式は苦手ですけど《氷滑走》なら）

だけどこの模擬戦でユーマは精霊を出した。

私は彼を本気にさせたのだ、そう思う事でアイリーンは自分を奮い立たせる。

次の手をなんとか考え出して1歩下がると――

ざく

「えっ！？」

石畳を踏む音ではなかった。見るとアイリーンの『足元だけ』が砂になっている。

「……どうして？　これも精霊の力なのですか！？」

悲鳴のように叫び、焦燥する。

この小さな変化は仕掛けた本人と仕掛けられた自分しかわからないはずだ。

（砂を操ることができるということは真下からも攻撃できるということなの？　だとしたら）

最初から勝ち目がなかった。地面より下に《氷輝陣》は展開できないから感知できないのだ。

不意打ちはユーマの得意技だ。そして最初からアイリーンは勘違いしていた。

相手は風の《魔法使い》ではない。ユーマという風と砂を操る《精霊使い》の少年だから。

そして。

「うおおおおお！！！」

ユーマの叫び声がアイリーンの最期の時を伝える。

――まっすぐに突撃してくるか？

――砂で真下から攻めてくるか？

――砂嵐で撹乱して高速移動で死角を突いてくるか？

――それともまだ別の手段があるのか？

《氷輝陣》を中心とした魔術はユーマに通用しない。

必死に次の攻撃を読もうとしても砂除けのゴーグルを被るユーマの表情が読めない。それが一層彼女に恐怖を与えた。

「ひ、氷晶牢ーっ！！」

――どんな攻撃がきても……私が何をしても……敵わない！

心が折れた瞬間。アイリーンは最後の魔術を発動した。

彼女のトラウマといえるもうひとつの《心像》。自身を氷晶の牢獄に閉じ込めて

アイリーンは意識を手放した。

＋＋＋

「うおおおおお！！！」

ユーマは叫ぶ。

この模擬戦でユーマはアイリーンの主たる魔術をすべて見た。その上で叩き潰すように彼女に力を見せつける。

風葉による風の魔法に砂更の砂を操る能力。

そしてユーマのできるゲンソウ術の基礎。

《補強》。ユーマは精霊の力に自分のイメージを付与することで

力を発揮する《精霊使い》なのだ。

《旋風剣》の竜巻をドリル状に形状を変化させたのは風葉の魔法ではなく、彼のゲンソウ術による。

模擬戦なんかにここまでする必要はなかったはずだ。

ユーマは表情をゴーグルで隠す。今の顔を見られたくないから。

《全力》状態は持って数分。それ以上は精霊たちがもたない。

ユーマは正面から飛び込むように突撃。

途中アイリーンが氷晶壁で周囲を囲んだことに気付いたが構わない。

ユーマが彼女に見せるものはこれが最後だから。

アイリーンが氷漬けになっているのに気付いたが構わない。

ただ自分のすべてをぶつけるだけだから。

――これが最後だ！！

《旋風剣・螺旋疾風突き》

衝突。

削る。砕く！　割る！！

アイリーンの持つ『最硬』の魔術、《氷晶牢》も螺旋を描く竜巻の槍に容赦なく削られ粉砕していく。

（砕け、砕け！　砕け！！　砕いて……貫け！！！）

そして。

「とぉまれえええええぇぇ！！！」

その叫びは悲鳴に近かった。

＋＋＋

少女は逃げ出した。暗く冷たい檻の中から。両手の銀の枷をそのままに。

ここがどこだか少女はわからない。知っているのは北の国の中でも極寒の地といわれていると監守が言うのを聞いたことがあるくらいだった。

少女は走る。銀の枷が重くて時々疲れて歩いてしまうが少女は走

る。

まともな服もなく裸足だったが雪道を踏みしめてただひたすら遠くへ。

少女は沈んでいく。暗く冷たい湖に。両手の銀の枷はそのまま重石となって。

なぜかは覚えていない。少女にとってどうでもいいことだった。地下の牢獄でいずれ死ぬか、氷の湖の下で今死ぬか。結果は同じだったから。

少女は沈む。身体が冷たいことなどどうでもいい。心はとっくに凍りついていたから。

氷の世界。冷たいだけの……彼女の世界。

――こんな世界なんて……いらない

少女は意識を手放した。

「しっかりしろ！」

少女に声が届く。

なぜ生きているんだろう。少女にとってどうでもいいことだったが「死ぬんじゃねぇ」「生きろよ」と何度も必死な声を少女に向けるので残った力で目を開ける。

知らない男の人だった。

「気付いたか？　死ぬんじゃねぇ。ふざけるな！　子供がこんな冷たい目をして死んで行くなんて認めねぇ。《俺の国》でこんな真似させねぇ。おい！　死ぬなよ。これからなんだよ。俺も。国も。……きっとお前だって！　お願いだ……生きて……くれよ……」

男は怒っていた。男は泣いていた。少女の為に。

「ど……して」

「――！　俺がわかるか！　いいな。生きろよ。お前みたいな子供がいるなんてゆるさねぇ。いいから生きろよ……見せてやるから。俺の国を。いつか実現する、北の国の中で最もきれいであたたかい俺の理想を。だから」

――あきらめんじゃねぇ

男は泣いた。男は喜んだ。そして泣いた。少女の為に。

そして抱きしめる。

少女の身体の感覚は戻っていない。でも、

（生きても……いいのですか？）

伝わるものがあった。人のぬくもりは心に届く。

男は少女を助け、生かそうとしている。ここで少女が死ぬことを許していない。男が流す涙はきっと……あたたかい。

（あなたは……だれ？）

男は泣き顔でぐちゃぐちゃだが少女はこの顔を忘れない。

少女は今でも時々この光景を夢に見る。銀色に輝くあたたかな氷の世界を。

（ありがとう。お……さま）

＋＋＋

――明るい

瞳は閉じたままのアイリーンは意識を取り戻すとまずそう思った。

静かだった。自分が何をしていたのかも忘れてしまうぐらいに。

（どうなったの？）

目を開けて悲鳴を上げそうになる。

短剣が目の前に突き出されている。それで彼女は理解した。

（……負けたのですね。それもこてんぱんに）

力をすべてを出しきり、そのすべてを叩き潰され、最後に彼女の防衛手段（シェルター）である《氷晶牢》まで砕かれた。アイリーンに残された魔術はもうない。

生きている方が不思議なくらいだった。彼女の身体は震えが止まらない。

しかし短剣の切っ先が震えて見えるのは彼女のせいではなかった。ユーマの腕が震えている。

アイリーンはあらためて少年を見た。

ゴーグルで顔は見えないが口は歯を食いしばっているのがわかった。彼の身体の半分は何故か砂に埋もれ、羽付きのとても小さな女の子がとまれーとまれー、と唸りながらユーマの髪を後ろにひっぱっている。

ユーマは動かない。そんな彼にアイリーンはそっと近づいてゴーグルを外した。

「……なんて顔してるんですか。貴方の勝ちなのに」

「……やっぱりこんなの暴力だ。あと少しで……」

――殺してた

絞り出すような声だった。

「……馬鹿ですね。《防護》の結界があるのです。私が傷つくことなんてありません」

それは嘘。

《氷晶牢》の防御性能は《防護》の防壁よりはるかに高い。それを突き破るならばダメージ軽減の効果は期待できなかっただろう。

嘘に気付かれなければいいとアイリーンは思う。彼の震える手を持った短剣ごと両手で包んだ。

傷ついているのはユーマの方だ。彼はいつ泣いてもおかしくない子供の顔をしていた。

アイリーンは自分より年下だろうと思っていたが彼の泣き顔はさらに幼い。

「ごめんなさい。力を見せたくなかったのはきっと貴方の方だったのに。……ここまでしてくれたのはどうして？」

「……約束したんだ」

アイリーンと約束はしていない。約束したのはエイリーク。彼女だ。

――いいユーマ、約束して

「アイリィに本気でぶつかりなさい。風葉の力も見せてあげて。アタシは魔術師じゃないから彼女の力になってあげれないの。アンタが彼女の力のすべてを見てあげて」

「……でも精霊の力は反則に近いぞ。アイリーンさんの自信を奪いかねない」

「構わないわ。アタシを信じなさい。……アタシは信じてる。アイリィはアンタの力くらいで潰れない。アイリーン・シルバルムはアタシにとってもう《最高の魔術師》なんだから」

「あの子は……」

「あと『ついでに攻略法を気付いたら教えなさい。アタシは負けられないのよ』って」

「あの子は！」

笑いあう2人。ユーマも調子を取り戻してきた。

「……役に立てたかな？」

「ええ」

アイリーンよりも戦闘能力が高い生徒はランクAになれば沢山いる。負けることは彼女にだってある。

でもユーマは戦いながら彼女の弱点を可能な限り洗い出した。本

来ならほぼ一撃で終わるはずの模擬戦を精霊の力の多くを見せてまで最後までつきあってくれた。

「私は強くなります。《氷輝陣》だけでは魔法に、精霊の力に届かなかった。でもこれからです。私は私のなりたい最高の魔術師をまた最初から目指すだけです。……あの人のように」

アイリーンが向ける微笑みにユーマも笑みを向ける。

「そっか。……ところで模擬戦どうやったら終わるの？　時間まだあるんだけど」

観戦席はまだ静かなままだ。２人の様子を見守っている。

アイリーンはユーマから離れて観戦スタンドのほうを身体ごと向けた。

そして宣言する。敗者と思えない振る舞いで勝者を称える。

「この試合は私の負けです。勝者は彼。《精霊使い》のユーマ・ミツルギさんです」

＋＋＋

歓声の中、ユーマは相棒達に感謝を伝える。

（ありがとう。風葉、砂更）

（いいえー、ぎりぎりですもんねー）

（……）

ユーマの力だけでは《旋風剣・螺旋疾風突き》を止めることができなかった。

彼の叫びに応じた風葉が短剣の竜巻に魔法で介入して風に分解し（分解した竜巻は衝撃波となって砕いた氷晶牢を吹き飛ばした）、砂更は主人に向けて真下から大量の砂をぶつけて突撃の勢いを殺したのだ。

精霊たちの独自の判断がなければアイリーンはただでは済まなかった。

（これでよかったんだよな。ん？　エイリーク？）

ふと観戦スタンドに目を向けるとエイリークが見えた。彼女は何故か、ぶすーとした表情をしている。

突然エイリークはステージに飛び降りる。2階から。驚くのは隣にいたアギ。

「ユーマ、勝負しなさい。」

細剣を抜いた。

「あの、エイリークさん。何故俺は連戦せにゃならんのでしょうか？」

「気に入らないのよ。アイリィが負けたのも、精霊が増えていたことも。何よりあの《疾風突き》。あれを教えなさい。あれさえ覚え

ればアイリィなんて敵じゃないわ」

エイリークは無茶苦茶だった。

「ちょっと、ウインディさん」
「いいじゃない。何ならアタシと組まない？　風と砂に対してこっちは風と氷。2人ならユーマにだって負けないわ」
「……貴女と組むのも久しぶりですね」
「アイリーンさんまで!?　くっ、アギぃ！　来てくれ。今から2対2だ」

状況が不利になったのでアギ（親友）を援軍（イケニエ）に呼ぶことにした。

文句を言いつつも飛び降りてすぐにやってきてくれた親友（イケニエ）。

「なんで俺まで」
「そう言うなよ。フォーメーションはアギが前で俺が後ろ。……砂漠でやった《あれ》、やるぞ」
「合体技か！　いいねそれ。よっしゃあ！　俺はやるぜ」

アギをやる気にさせて、ユーマは1人作戦タイム。

（風葉、正直あとどのくらい？）
（もうむりですー。頑張ってあと1回。サラっちだって同じじゃないですかー？）
（……）
（だめですか）
（アギっちの防御力がたよりですねー）
（……）

《全力》を出したユーマは精霊の力をすぐに使う事ができない。今の状態なら《補強》と風葉が教えてくれた風の魔術が２つ３つほどしかない。

「準備はいい？　行くわよ！」

突撃するエイリーク。使う技はもちろん《旋風剣・疾風突き》だ。

「砂塵！」

ユーマは砂塵の竜巻を自分を中心に展開して牽制。エイリークの出鼻を挫く。

精霊の力はここで打ち止め。そしてユーマは、

「ちょっ、ユーマぁ！！？」

アギを置いて逃げ出した。

《天駆》で観戦席に駆け上り、ぎこちない《高速移動》で一目散に戦闘室から逃げていく。

――やっぱり親友てウソだろテメェ！！！

アギの叫びが聞こえる。

きっと幻聴だ。ユーマは思う。

だから……幻聴は無視した。

＋＋＋

学園長室。

ユーマが学園にやってきたその日の夜、学園長のイゼットは今日の出来事を思い出す。

「ユーマさん、でしたか。《精霊使い》の力に何か制限があるようですが大したものでした」

でも、と学園長は呟く。

「きっと彼の『精霊使いではない力』の方はこんなものではないはず。もしも彼がほんものの……《異世界の勇者》ならば……」

彼女はふと脳裏によぎったことを否定して頭を振る。

「……どちらでも構いません。ここはリーズ学園。集まったこどもたちを再び世界に送り出すのが役目。ならば導きましょう。彼もまた同じ。今日から私たちの生徒ですから」

学園長は手にしていた書類をしまう。この書類の内容はオルゾフも知らない。

“風森の国にて召喚の波動を確認”

“同時期に彼の国に封印されていた《魔人》が目覚めた模様。王家たるウインディ家は《風邪守の巫女》、エイルシア・ウインディを中心にこれを撃退”

“魔人相手に風森の戦力ではどうにもならないはずだが気になる点が1つ。彼女の隣には『黒髪の少年』がいたという”

“この少年の身元は不明だが、少年はその後帰省中のエイリーク・ウインディの誘拐事件に遭遇。どうやらこの時に《風森の守護精霊》と契約したと思われる”

“《精霊使い》となった少年の名をユーマ・ミツルギという”

＋＋＋

序章　精霊使いの少年　完

＋＋＋

１－００　プロローグ・ゼロ（前書き）

第１章　予告

1―00　プロローグ・ゼロ

＋＋＋

優真はいつもの公園でしろいものを見つけた。

しろい服にしろい髪。近くで見ると優真よりもちいさな子供が身体を丸くして倒れてる。

「生きてる？」

子供の顔を覗いてから肩を揺する。女の子だ。

むき出しの腕はしろい肌をしていてあたたかい。

「……う？　あ？」

気がついた女の子。

目を開き、自分を揺する少年の黒い瞳をじっと見つめている。

「……はは、まっしろだ」

「う？」

女の子の瞳はしろかった。

銀色ではない。眼球の白とも違う色をしたしろ。

ありえないものを見ても優真は不思議と怖くなかった。無垢なしろ。彼を見つめる瞳は何も知らない赤ん坊のようだ。

「君は誰？　天使の子？　それとも悪魔？」

「あー、う？」

しろい女の子は言葉を発しない。黒髪が珍しいのか優真の髪を引っ張る。

「うあー。あー！」

「いたい、いたいってば。……困ったな。記憶喪失で迷子の扱い方なんて『みんなの公園危機百選』には載ってなかったぞ」

「あー」

優真は両手で女の子をあしらいながら考える。

「まあ、いいや。困った時は姉ちゃんか兄さんに頼もう。きみ、一緒においで。きっとどうにかなるよ」

「う？」

よくわかってない女の子の手を引っ張って優真は駆け出した。

――ぼくはいつか兄さんたちみたいになりたい。この子はぼくがたすけよう。

優真とましろの出会い。

……少年が忘れることのない、出会い。

＋＋＋

このおはなしが、きっと少年のはじまり

この物語は、優真がユーマになった時の話

＋＋＋
プロローグ・ゼロ
＋＋＋

優真は目の前の光景を信じたくなかった。

雨の日の夜のこと。

優真の目の前で2人の男と少女が1人戦っている。

2人の男の内、1人はもう1人を庇って今倒された。

「がはっ」

火炎弾の直撃を受けた彼は優真が兄と慕う15歳の少年。

「大和兄ちゃん！」
「優君どいて！」
駆け寄ろうとする優真を、姉は声で制して大和の手当てをはじめる。
「どうして？　どうしてなんだよ」
――誰が兄ちゃんにこんなひどいことをした？
優真はわかっているけど信じたくなかった。
しろい少女。
しろい服の少女は肌の色、髪の色がしろいだけでなくその瞳もしろい。
優真が拾った、ましろと名付けた女の子。
天使でも悪魔でもない彼女が《魔法》を使い、姉や兄たちに襲いかかる。
「やめろしろ！　やめて……どうして！？」
１２歳の少年にできることなんてない。ただ大切な人たちが殺し

あう様を見ていることしかできない。

「あ、あああーーっ」

しろい少女の放つ雷撃がもう1人の少年を襲う。

少年は右の掌で雷撃を弾くと一気に距離を詰めて少女を殴る。

「ぐっ、があっ！」

「やめろーっ！」

優真の声は届かない。

雨音が邪魔だ。そう思うがもう雨なんて関係ない。優真の叫びなんて彼と少女には関係ない。

殴られた少女は距離とってから背中からしろい翼を『放出』。上空へ逃げる。

「優花！」

「はい！」

姉が《飛翔》の魔法を少年にかけ、彼は空へ追撃をかける。

優真は実の姉が魔法を使うなんて初めて知った。

少女が上空から火炎弾を放つが、同じくして飛び上がった少年が無造作に左腕を振ると、火炎弾は見えない壁のようなものにぶつかり相殺された。

再び距離を詰める少年。しろい少女の腹をグローブをはめた右で殴る。

バチィッ！！

殴った右手から電撃が疾る。

怯んだ少女の首を少年は掴み上げた。

「ぐあっ、あああっ、あああああ！！」

「もういい。お前の魔法は《理解》した。俺に2度目はない」

空中で少女を掴み上げる少年。反対の手にはいつのまにか『銃のようなもの』を握っている。

「やめて。もういいでしょ……光輝兄さん。やめて。しろが、ましろが……」

「優君……」

光輝と呼ばれた少年は優真の声を無視した。止める気はない。

彼は殺す。

誰よりも、何よりも、自分の……心を。

優真はただ叫び、彼を睨みつけることしかできない。

夜空に浮かぶ彼には何をしても届かない。

兄と慕う少年はいつもと姿が違う。優真は今でもアレは兄とは違う別のモノだとしか思えなかった。

――銀の髪と金の瞳を持つ少年

彼のことを《梟》と呼ぶ人がいることもこの時の優真は知らない。

「しろーーーっ！！！」

撃ち落とされたしろい少女。

（……ゆうま）

声が聞こえた気がした。しろい少女はこの言葉しか知らない。

見たくなかった。でも優真は見てしまう。

傷つき墜ちた少女の血の色もまた

「あああああああ！！！」

しろかった。

＋＋＋

《風森の国》聖堂。

エイルシア・ウインディ、風森の第一王女である彼女は向き合う2体の女神像を前に悲壮な決意を固めた。

「……私しかいない。国もお父様も、リィちゃんだって私しか守れないから……」

女神像の1体を睨み、もう1体に語りかける。

「もう少しだけ待っていてくださいお母様。……私が必ず貴女を解放します」

＋＋＋

《精霊使い》でさえない少年は

再生の地、風森の国で彼女達と出会う

次章　風森の勇者

＋＋＋

０－０８ａ　能力測定日　前（前書き）

緑ジャージに赤バンダナ

０－０８ａ　能力測定日　前

＋＋＋

昼休みの職員室。その片隅にて。

「オルゾフ、ちょっといいか？」
「何でしょう。ジャージ先生。」
「……お前までそういうか」

次の講義の準備中のオルゾフに話しかけるのはグルール・ボロス。
高等部の格闘技顧問である。

いかにも体育教師といった彼の特徴は緑の《ジャージ》。色違いのものはない。

この世界は《再生世界》。再生紀と呼ばれるこの世界は、再生されたときにそれ以前の世界《精霊紀》の情報を取り込んでいるらしくジャージといったものも存在する。

「こいつの機能性がわからんのか。お前も着ればわかる！」
「いえ。私は魔術師ですから。ご用はジャージ軍団の勧誘ですか？」
「何の軍団だそれは？　……オルゾフ、お前セレス先生からのお誘いがあったてな？」

凄むグルール。

「スニア先生？　ああ、何でも治療用の薬草と魔術の併用に関して話が聞きたいので食事でもしながらどうですか、という話が」

「そ、それで」

喰いつくグルール。正直暑苦しい。

「いえ、私は来月ある《昇級試験》の責任者なので忙しいのです。お断りしました。彼女も手伝うとありがたくも申し出てくれましたが、流石に彼女も多忙な身ですので」

断りましたよ、とオルゾフ。

対してなんでじゃぁあああ、とグルールは叫んだ。

セレス・スニア。薬学科の教師で若くも優秀な《薬師》の女性。

一般に治療・回復の魔術は普及されていない。ゲンソウ術で再現される魔術では『他人の痛みと傷を治す』というイメージが必要になるのでどうしても他人と《同調》する必要があり修得者が少ないのだ。

なので効果の高い傷薬は重宝され、それを作ってくれるのが美人の先生ならば学園の生徒教員問わず人気があるのは当然だった。

「お前、わかってるのか？　セレス先生はお前に誘いをかけてくれたんだろうが！　彼女も忙しいのにお前を手伝うって言ってくれた

んだろうが！！」
「いえ、だから断りましたって」
正直この同僚の扱いに困るオルゾフ。何より顔が近い。
「羨ましいんだよ、俺は。彼女と接点がないから。それなのにお前は！」
「……分かりました。ではこうしましょう。私が今から貴方を燃やしますからスニア先生に火傷の薬でも貰いに行ってください」
「――！　それだオルゾフ！　頼むぞ」
冗談だったのにもうどうでもよくなったオルゾフ。
上位術式の《烈火爆陣》でも使おうかと思う。どうせこの緑色の筋肉は死にはしない。
「グルールさん、それでいいのですか？　考え直してください」
呆れたように声をかけたのはイゼット・E・ランス。C・リーズ学園の学園長だ。
「学園長、散歩ですか？」
「こんにちは、グルールさん。年寄り扱いはやめてくださいね。あなたにご用があってきました」
「はぁ、自分にですか」
「ええ。午前の能力測定の件で少し。報告書はまだ後でいいんですけど、例の彼の話を聞こうと思いまして」
最近編入してきた《精霊使い》の少年のことだ。グルールも彼と《銀の氷姫》の模擬戦は見ている。

「はい。学園長の指示どおりミツルギは『精霊なし』で能力測定に参加させました。結果を言いますと身体能力・魔術適性どちらも並です」

技術士や魔術師よりも高いが戦士にしては低い身体能力。

戦士よりも高いが技術士や魔術師よりも劣る魔術適性。

総合力はランクD、よくてもCの下位。中等部高学年の平均程度といえたのだが、

「ただし、戦闘能力の点で詳しくみると奴は癖が強い。独自の訓練を積んでいるようでした。魔術も術式よりもゲンソウ術の基本の方を知っている。自分がはっきりとわかったのはミツルギは《補強》が使えるということです」

まぁそれでも、とグルールは続ける。

「奴はおもしろい。俺に殴られて喜んで礼を言う生徒は初めてだったぞ。なあ？　オルゾフ」

「……そうだな」

がはは、と愉快に笑うグルール。オルゾフも気持ちは同じだった。

＋＋＋

能力測定日

＋＋＋

「ユーマ・ミツルギはお前だな」
「はい。……ジャージ？」
Tシャツ短パンに短剣を腰に差す少年、ユーマは緑のジャージ男を見上げた。

学園に来て3日目。今日は恒例行事の1つ、能力測定の日らしい。
能力測定は生徒の適性と実力を測り、1年間の講義や訓練のカリキュラムと来月の《昇級試験》の目安としておこなわれる。
昇級試験は年に3回。個人のランクを上げる少ない機会である。
能力測定は試験対策を立てるにも必要な行事だった。

「そうだジャージだ。お前も着るか？」
「緑はちょっと……それでジャージ先生、何ですか？」
「……グルールだ。グルール・ボロス。ジャージは名前でない」
訂正するグルール。

「お前の実力はこの前の模擬戦を見た。ランクA、それも上位の方だと教師陣は《精霊使い》のお前を評価している。今回は精霊なしの実力を見たい。いいか？」
「はい！」

ユーマにとっても都合がよかった。今の『御剣優真』の実力はどんなものか知りたかったのだ。

「よし。では行って来い。記録書は最後に出せよ」

＋＋＋

結果を見ればユーマの身体能力は全生徒の平均程度。

技術士や一般生徒も含まれるので戦闘系と比べれば平均以下といえる。ちょっぴりへこんだ。

そもそもブースターの使用は禁止されているが身体強化の術式がありの測定なのだ。精霊、特に風葉の魔法なしでユーマが上位に食い込むはずがない。戦士系の生徒だけでなく魔術師系の生徒にも蹴散らされた。

ユーマの使える術式は連続3ステップまでの《高速移動》と《天駆》、そして微風ともいえる《突風》くらいでこれを《補強》するしかない。しかし《補強》はイメージの『溜め』が必要なので時間がかかってしまう。

魔術適性も保有魔力（人も個人差があるが魔力を持つ）はゼロ。得意属性、得意術式系統もなし。《特性スキル》に関してはユーマは必死に隠した。

ただ彼にも上位に上がる測定項目はある。

それは《魔力許容量》。魔力を身体に溜めることのできる限界量のこと。これは測定器をぶち壊すほどだったが魔族以外にこれを重要視する生徒はいない。

「……」
（へこまないでくださいー。風の術式はまたおしえますよー）
風葉に慰められた。ユーマは3年程前から身体を鍛えていたが、それがこんな結果ではあんまりだった。
「いたいた。ユーマ、何してんだ？」
「……人生を振り返ってた」
「はあ？」
アギは分からない。
「それよりお前、実技の測定まだだろ。先生呼んでるぞ」
「……実技って？」
「白兵戦と魔術戦だよ。あとお前だけだぞ」
＋＋＋
四角に白線で線引きされたグラウンドに立つユーマ。正面に立つのはグルール先生。
「白兵の測定は格闘でいいのかミツルギ？」
「はい」
「遅れた罰だ。俺が相手してやる」
「……」
格闘技顧問のグルールは世界ランクＢの格闘家でもある。彼を相

手にする生徒は手加減されても救護室送りだ。

ほかの生徒に同情されるユーマ。彼はまだ意気消沈していて表情が冴えない。

ユーマは短剣をアギに預けると自然と構える。

「ほう。何か経験でもあるのか？」

「……兄に少しだけ」

静寂。ユーマは動かない。

やる気がないのか？　グルールにはユーマから《気》のようなものが感じられなかった。

「こないのか？　なら、行くぞ！！」

攻め込むグルール。猛々しく放つ気は周りの生徒を委縮させる。

「制裁！」

放たれる拳を前にユーマは動かない。

ユーマは、

（なんか懐かしいな。）

刹那の時間、少し昔のことを思い出す。

（いつもこんな風に大和兄ちゃんに相手してもらったっけ。いっつも吹っ飛んだな俺。でも……）

グルールはユーマを間合いに入れる。それをただ見るだけのユーマ。踏み込まれた一歩に合わせてユーマも動く。

半歩だけ、前へ。

「なっ！？」

（兄ちゃんに比べれば……遅い！）

ユーマは自分の間合いを合わせる。正確には至近距離の間合いに合わせた最速の拳を放つ。

放たれているグルールの拳がユーマに届くよりも、ユーマの拳の方が……速い！

ごきっ。

「ぐわあああっ！！　ぐふっ！！！」

どごん。

ユーマのパンチは当たったがグルールの鋼の肉体を前に拳が当た

り負けした。

そしてそのままグルールに殴られる。吹き飛んだ。

グランドを転げまわるユーマ。惨状に青ざめた生徒もいる。

（……しまった。やりすぎた）

グルールは後悔した。相手は子供で教え子だったのについ全力で殴ってしまった。

懐に入られた時に一瞬だけ感じてしまった死の恐怖。

もしも突き出されたのが拳ではなく短剣だったなら……

「……ははっ」

倒れたユーマが声を上げる。

「あはははは」

倒れたまま突然笑いだすユーマ。そしてすぐに起き上がった。

驚くのはグルールと生徒たち。特にグルールの驚き方は酷い。全力で殴ったのだ。

１日気絶どころではない手ごたえのはずだったのに。

「お前……」
「ありがとうございました！」
大声で礼を言うと頭を下げるユーマ。訓練後のいつもの礼儀だ。
「すごいですよ先生。まるで大和兄ちゃんみたいだった」
ユーマは腫らした頬を気にしないほど何故か興奮している。
「兄ちゃんとやると殴る前にいつも吹き飛ばされたからわからなかったけど殴ってみてわかった。……当てても力負けするなら意味ないや。もっと身体鍛えないと」
「……そうだ、そうだぞミツルギ。身体は鍛えるべきなのだ。鍛えれば殴られてもビクともせん。お前もそうだな？」
ユーマは元気そうだった。確認するグルールだがユーマは首を横に振る。
「いいえ。腕輪外すの忘れてたから。これ防御力底上げしてくれるんですよ。外したまま殴られたら下手すると死んでましたね」
「……」
「……」
《白砂の腕輪》を見せて笑うユーマ。
冷や汗が止まらないグルール。突然現れた砂の精霊は彼を睨みつけているようでバツが悪かった。
「……ここの測定は終わりだ。治療を受けたらオルゾフのところで

魔術の実技測定受けてこい」

＋＋＋

ユーマは救護室で殴られた頬と捻った手首を治療してもらった。
次は魔術の実技測定だ。

「遅くなりました」
「スニア先生から連絡はあった。身体の方が問題ないなら始めるぞ。いいか？」
「はい」

オルゾフのもとに来たユーマ。彼が最後の測定なので測定を終えた生徒が見学したり更衣室に向かうのが見える。

「ところで何をするのですか？」
「まずはキャッチボールだ」
「はい？」

この世界は《再生世界》。再生紀と呼ばれるこの世界は、再生されたときにそれ以前の世界《精霊紀》の情報を取り込んでいるが、野球は存在しない。

キャッチボールとは初級術式の属性弾を撃ち合う対戦競技だ。

専用のグローブと防具を装備して攻撃側が弾を撃ち、防御側が弾

をグローブで受けきるか攻撃側が弾を外すと防御側のポイント。防御側のグローブ以外の部位に弾が当たるか受けきれずに弾いてしまうと攻撃側のポイントとなりこれを攻守交替で繰り返す。

競技の勝敗よりも攻撃側の属性弾の変化にコントロールとスピード、防御側の属性弾に対する防御能力を測定する。

「1対1のドッヂボール？」
「相手はどうする？　他の生徒はもう測定は終わらせているので誰でも構わないが」
「それじゃあアギに」
「ちょっとまて」

アギに頼もうとしたところで話に割り込まれた。ユーマが見たことがない生徒。

褐色の肌に赤い髪。赤いバンダナ。リュガ・キカという少年だ。

「キカ。どうした」
「こいつの相手、俺がやります」

睨まれるユーマ。彼に覚えがなくて戸惑う。

「いいぞ、では準備しろ。競技は3セットだ。キカは成績が良ければ前の測定よりもこちらを採用しよう。だから手加減するなよ」
「ありがとうございます。……逃げるなよ」

リュガは後半の部分をユーマに向けて言った。

「なんだ？　あれ」

「リュガか……やっぱりこの前の模擬戦だな」
いつの間にかアギがユーマの傍にいた。
「アギ？」
「あいつな、《アイリーン公式応援団》の一員なんだ。お前、氷の姫さんボコボコにしたから怒ってるぜ多分」
「アイリーンさん絡みか。つかボコボコって」
「頑張れ人気者。まあ、昼は一緒に食おうぜ」
「待てよ、アギ」
呼びとめるユーマ。
「何だ？　俺は助けないぞ」
「防具の付け方がわかんない」
「……」
＋＋＋
「男子はまだ終わってないの？」
アギに声をかけるのは最近彼とよく話をするようになったエイリークとアイリーンだ。
「ああ。あとユーマだけ。しかも相手はリュガだ」
「リュガさんですか？　私は負けたことは気にしていないと皆さんに伝えましたのに」
「馬鹿なのよきっと。あっ！　あのバカ、リュガ相手に《火球》のグローブ選択してるじゃない」

見ればユーマはリュガが手にしたものと同じ赤いグローブを装備していた。

「俺相手に火属性かよ。いい度胸だな」

「これ選んでよかったの？」

初心者のユーマは彼の真似をしただけだった。

「ふざけやがって。先攻、いくぞ！！」

リュガは両手を突き出し集中。すると頭くらいの大きさの火の玉が彼の手の前に《現創》された。

「くらえ！」

撃ち放たれる《火球》。

彼は魔術師ではないので火の玉のスピードは遅く、その弾速は人が歩くぐらいの速さだった。

「これを受け止めるのか……大丈夫だよな？」

両手の《火球》のグローブを見て不安になるユーマ。両手でリュガの火球を受け止める。

「あぢいいいいっ！！！」

受け止めたものの、火球の、その熱に悲鳴を上げるユーマ。

「み、水、氷、こおりーーっ」

「は、はい！」

撃たれる《氷弾》。直撃して地面に沈むユーマ。

「はい、どいてーーっ」

ばしゃ。

エイリークはバケツに水を汲んできてくれた。しかし、倒れこむユーマに構わずぶっかけた。

「……アリガトウゴザイマス」

「……すいません、つい」

「なによ、文句ある？」

現在のポイント：リュガ０、ユーマ１。

「何だよ、あの《火球》？　無茶苦茶熱いぞ」

「成程な。これが狙いか」

アギの説明はこうだ。

リュガの得意とする術式は《高熱化》。火属性効果付与術式である。

魔術師でない彼は《火球》の熱を完全に再現することができないが《高熱化》を付与することで従来の火球とは比べ物にならない『熱い火球』を創ることができる。

ただこれをユーマにぶつけようとしてもスピードがないので簡単に躱されてしまうが、この競技のルール上火球を受け止めねばならないのでユーマは自ら苦痛を受けねばならないのだ。

「外見の割に結構陰湿だな」

「そう言うなよ。火属性に耐性のあるグローブの上からダメージを与えるんだ。あれでも優秀なんだぜあいつ。逆恨みみたいなものだけど少しは我慢してくれ。誤解は解いてやるから」

「ミツルギお前の番だ。早くしろ」

オルゾフに注意されて競技再開。

ユーマは赤いグローブを見て考える。

「どうやって《火球》出すんだ？」

「そのグローブは《ブースター》よ！　とにかくイメージしなさい」

遠くからエイリークが声をあげて説明する。

「へえ。これがブースターか。イメージねぇ」

《補強》の要領で右手に火の玉をイメージしてみる。するとグローブからユーマに向けて何らかのイメージが流れ込んでくる。

赤い球。燃える球。火の熱。火の明かり。

グローブに刻まれている《火球》のＩＭ（イマジン・モジュール）と呼ばれる概念がユーマの火の玉のイメージを《補強》していく。

「ははっ、出来た。自分で想像するより簡単だ」

思わず笑みが出た。ユーマの右の掌には片手で掴むのに丁度いい位の火の玉が《現創》される。

イメージが曖昧なためかそこまで熱くもない。ホログラフィックのようだとユーマは思った。

「これがブースターか。欲しいけど手に入るのかな？」

「何してるのよバカ！　さっさと撃ちなさい！」

遠くでエイリークが怒鳴る。彼女は結構短気な性格をしている。

「撃つ、ね。……さっぱりだ。理屈が分からない」

「どうした？　時間切れになるぞさっさと撃て！」

「ちょっとまって」

リュガに急かされて考えるユーマ。１つアイデアが浮かぶとユーマは火の玉を《幻操》、イメージを《補強》する。

「いくぞ」

ユーマは火の玉を片手で掴んだ。そして大きく振りかぶって

「いっけえ！！」

投げる。

唸る炎の速球はリュガを掠めて校舎の壁に激突。壁に黒く焦げた火球の痕だけが残る。

「……」

「ミツルギ、ミス。ポイント1対1」

周りにいた生徒は沈黙。オルゾフの声だけ場に響いた。

「何だ？　今の《火球》のスピードは？」

「……炎の１００マイルストレート……できたよ」

リュガも驚くがユーマも驚いた。

ユーマが《補強》したのは火の玉を『投げるイメージ』。プロの投手の剛速球と漫画にあった炎の魔球のイメージを組み合わせてみた。

「消える魔球もできるんじゃないか？　これ」

「……ふざけやがって、当たらなきゃ意味ねえんだよ。もう1度食らえ！」

リュガの2回目の攻撃。ユーマは躊躇わずに火球を躱した。

「な！？」

「当たらなきゃ意味ねえんだよ。ばーか」

「ミツルギ、ミス。ポイント2対1」

オルゾフはリュガにポイントを付けた。当然だがルール上属性弾を受けずに逃げれば攻撃側のポイントとなる。

「お前がバカじゃねえか！　ルール分かってんのか？　ああ？」

「……」

ユーマは沈黙。実はルールでは防御側も属性弾を撃ち返すことができる。それで攻撃を相殺、もしくは減衰させて受け止めていいのだが、ユーマはそれを知らなかった。

「……攻撃だ。攻撃しかない。みてろよ」

というわけでユーマは防御を捨てた。火球を掴み、《補強》する。再び大きく振りかぶって

「あたれぇ！」

投げた。　スピードは先程よりもやや遅い。

「ふん。また外れだぜ……ってぐはあっ！！」

「ミツルギ、ヒット。ポイント2対2」

やや横に逸れたユーマの火球は途中リュガに向かって曲がり彼の横腹に当たった。

「よし曲がった。いけるなこれ」

「ぐっ、魔術師じゃ……ないんだろ？　なのに軌道が変わる《火球》、しかも火球に『重さ』があるぞ」

ユーマが次に《補強》したのは『火球の軌道』。球の握りを変え

てカーブボールを投げるイメージを加えてみた。

彼の《火球》に重さがあるのは《補強》した際の火球のイメージが野球のボールだからそれが反映されている。

「この……野郎が！！」

「キカ、ミス。ポイント2対3」

熱くなるリュガ。自分の《火球》の熱さも構わずにユーマを真似て火球を掴んだ。そして投げる。

戦士系の彼らしい力強い投擲は力み過ぎてユーマには当たらなかった。

「くそが！　負けられねえんだよ、お前なんかに」

「……あれは当たるとまずかったな」

「来いよ。てめえの球なんざ受けきってやる！」

「おうよ！」

怒りで熱くなるリュガ。ユーマも燃えてきた。

「普通に投げてもできないカーブであれだけ曲がったんだ。最後はやっぱりアレだな」

ユーマは火球の握りを変えて《補強》。最後も振りかぶって、

「せいっ！」

投げた。1球目と同じスピード。軌道はまっすぐリュガの真正面。構えるリュガ。

「はうっ！？」
「あ……」
「……ミツルギ、ヒット。ポイント2対4。勝者ミツルギ」
顔を顰めつつも審判を下すオルゾフ。

沈黙。

男子生徒の地面に沈んだリュガに向ける視線は痛々しい。
ユーマの投げた火球の握りは人差し指と中指で球を挟むアレ。
フォークボール。
炎の剛速球はリュガの目前で落ちたのだ。

彼の股間めがけて。

＋＋＋

０－０８ｂ　能力測定日　後（前書き）

その日の放課後。アギとリュガ

０－０８ｂ　能力測定日　後

＋＋＋

「……というわけで彼は既存の術式にさらにイメージを加えることの発想に長け、他の魔術の実技測定でも高い結果を出しています」
「特に属性弾を投擲する発想は戦士系に相性がいいと自分は思いました。装備重量を気にせずほぼ無限の投擲武器になりますので」

再びその日の昼休み、職員室にて。

オルゾフ、グルール、学園長の３人はユーマの能力測定について話しあう。

「なるほど。では属性弾の投擲は実戦でも有効なのですか？」
「それはやはり個人の能力次第です。ミツルギの場合、《火球》は球のイメージが強く火の性質はほぼありませんでした。ただの炎を纏うように見える球です。スピードのほうを《補強》していたようですし魔術攻撃として威力は未知数。他の生徒もミツルギのようにうまく軌道を変化できるとはいかないでしょう」

オルゾフは実戦では不向きと判断。属性攻撃としては弱いので魔術としては半端なのが理由である。

「曲げなくていいんだよ。投げるスピードとコントロールはパワーとテクニックで補える。後は《氷弾》や《岩弾》のような質量のあ

る術式を選んで物理攻撃と考えればいいんだ」
「……物理攻撃の投擲ならそのへんの石でいいじゃないですか」
「なんだと！」
「まあまあ、落ち着いてください」

学園長が仲裁に入る。

「使えるかどうかは生徒たちに判断させましょう。投擲自体が魔術師には向いてなさそうですし、戦士系の生徒も『掴める』魔術を再現できるかわかりませんから」

＋＋＋

昼休み、学園内にある1つの中庭にて。

「行くわよ、アイリィ！」
「くっ、今度こそ」

エイリークとアイリーンはキャッチボールで対戦している。

エイリークの選んだグローブは《火球》。ユーマと同じように『燃えているように見える球』を想造すると手で掴んで投げる。

「いっけえ！」

ユーマよりもスピードは数段落ちるが、彼女は《旋風剣》の応用で火球に竜巻を纏わせている。

いわばトルネード火の玉キャノンボール。

「きゃあっ」

アイリーンは《氷弾》で迎撃しようとも竜巻が氷弾を弾いてしまうので威力を相殺できずに受け止め、弾いてしまった。

「いけるわ。《風弾》は掴めなかったけどユーマの球を参考にすれば《火球》なら掴める。掴めるなら《旋風剣》も使える！」

「……ここまでくるとそれはもう《旋風剣》ではないのではなくて？　今度はこっちの番です」

アイリーンの撃ち出す《氷弾》は岩ともいえる巨大な氷塊。魔術師の彼女は投げるよりも従来の術式を使う方が弾速は速い。

対するエイリークは、

「せいやあーーーっ」

右腕に風を纏った《竜巻ぱんち》で氷塊を砕き、その破片を掴んだ。

「勝てる、勝てるわ！　アイリィなんて敵じゃない！」

ははは、と高笑いするエイリークに悔しがるアイリーン。

それを少し離れた所で見るユーマとアギ。

「あれはいいの？」

「ルール上撃ち返していいんだぜ。正直パンチはありかわかんねえ

けど」

学園長が言うまでもなく測定を終えた生徒たちは各々で今日の結果を省みて新しい試みを試している。

もちろん属性弾の投擲もだ。

「まあ、いいや。昼休み終わる前に行ってくるよ」

「どこにだ？」

訊ねるアギにユーマは答える。

「お見舞い」

そう言って救護室に向かった。

＋＋＋

「失礼します」

第2救護室に来たユーマ。よく吹き飛ばされて運ばれる彼だが、自分の足でここまで来たのは初めてかもしれない。

「いらっしゃい、ユーマ君。どうしたの？　湿布の交換？」

迎えてくれたのはセレス・スニア先生。ふわふわの金髪に碧眼。銀縁の眼鏡の似合う若い先生。ユーマはよく彼女の世話になっている。

「見舞いにきたんですけど……顔、酷いですか？」

時間が経つにつれて腫れ上がっていたユーマの頬。言われたら熱を持つようにヒリヒリしてきた。

「ちょっと待ってね。湿布薬用意するから」

「お願いします」

手際良く薬を塗るセレス先生。ガーゼを貼りテープで固定する。

「におうけど我慢してね。もう、ボロス先生は手加減しないんだから」

戦士の人は苦手だわ、とセレス先生。

「君も無理しないでね。かわいい顔してるんだから。ボロス先生みたいな筋肉にはならないでね」

頭をなでられるユーマ。末っ子で弟体質のユーマに抵抗はないが、男にかわいいはやめてもらいたかった。

「……ありがとうございます、先生は今日も忙しいんですか？」

「そうよ。能力測定の日だから何かと張り合う生徒が多いの。学生の頃は気にもしなかったけどこんなにけが人が多いなんて……まだ慣れないわ」

セレスはリーズ学園の卒業生で去年学園に赴任してきた。

彼女は薬学が専門の教師だが傷薬等の調合とその扱いに関して優

秀であり、臨時ながら救護室の1つを任されている。

「それでお見舞いってリュガ君？」

「はい。いますか？」

見舞いの品なんです、とカツサンドを見せる。何の肉なのかは知らない。

「彼はまだ寝てるわ。……余程打ち所が悪かったみたいね」

「……」

ベッドで眠るリュガは青ざめて苦しそうに唸っている。

やりすぎたなとユーマは反省。

「……ごめんな。風葉？」

「はーい」

《守護の短剣》から精霊を呼ぶユーマ。

「回復の術式って《癒しの風》だけ？」

「そうですねー、風属性は万能ですけど特化していませんしー、わたしも《風森》の一部でしかありませんからー」

高位の魔法は無理と風の精霊は答える。

「それじゃあ、《癒しの風》頼むよ」

「はーい。いたーいのー、とんでけふー」

《癒しの風》は風属性広範囲治癒術式の魔術で現在では再現でき

ない《魔法》だった。

効果は風に触れた複数の対象の治癒能力を高め、さらに疲労回復を促すものだがＲＰＧゲームでいう「毎ターンＨＰ微小回復」といったものだ。即時に高い効果は望めない。

それでも室内に吹く《癒しの風》を浴びてリュガの表情は少しづつ穏やかになっていく。

「……すごいわね、なんだかすっきりする。私にも効果があったわ。そうだ君、保健委員になりなさい。助かるわきっと」

「《癒しの風》ですか？　これ即効性ないですよ」

「私に使うのよ。そうすれば疲れ知らずに私２４時間戦えるわ。きっと！」

「……本当に忙しいんですね。また風葉連れて来ますから。そう言えば回復専門職って学生どころか教員でも少ないんですね」

ちょっとした疑問を口にする。

「そうよ。治療の術式はけが人の『痛み』を理解しないとうまく再現できないの。《同調》の特性持ちも少ないけどやはり人気がないわ。回復・治療は《魔法》の方が効率がいいの。だから『魔術師型の魔族のヒーラー』は需要が高いのよ」

なるほど、とユーマ。

だから第１救護室の先生の白衣は黒いんだなと思ったが関係は全くない。

「傷薬の需要が高い訳だ。それなら治療用のマジックアイテムみた

いなのないんですか？　……これみたいな」
「？　それは何？」
ユーマが彼女に見せたのはとっておきの1枚の札。
「これは回路紙（サーキットペーパー）ていうんですけど、魔術回路を紙に沢山刻み込んだやつなんです。この紙に付与した魔法を1度発動すると魔力が魔術回路を循環して術者が離れても長時間魔法が持続するんです。ちなみにこの紙は回復魔法が付与されてます」
「マジックアイテム？　魔術回路？　専門が違うから分からないわ」
「えーと。要するに回復魔法が誰でも使える紙なんですこれ」
「ええっ！」
流石にセレスは驚いた。そんな道具聞いたこともない。
「初めてだわ。『魔術を補助する道具』や『道具に付与する魔術』があるのは知っているけど『魔術の効果を発動できる道具』なんて聞いたことないわ。精霊器や神器の類よそんなもの」
「ええっ！」
今度はユーマが驚いた。まずい。
これは『この世界』ではオーバーテクノロジーの類なのかとユーマは吃驚する。
「そ、そうなんです。これ偶然手に入れたんですけど稀少過ぎて使い道に困ってたんですよ。……よかったら貰ってくれません？　魔術が専門じゃなくてもオルゾフ先生とかに相談したらもしかすると量産できるかもしれないから先生も助かりますよね？」

必死に誤魔化すユーマ。稀少品扱いにして泣く泣く最後の1枚を手放すことにした。

「え、オルゾフ先生!?　いいわ。もちろんよ。ありがとう!」
「?」

――先生とお話するきっかけができちゃった。

ユーマにはセレス先生がお礼を言うのになぜ赤い顔をするのかわからなかった。

＋＋＋

放課後。

目覚めたリュガは救護室を後にした。

「あの野郎、これで許されると思ってるのか?」

手にしたカツサンドを睨みつける。

ちなみにこのカツサンド、購買部ではお約束で人気の1品。

何の肉なのかは誰も知らない。

「お、元気じゃんリュガ」
「……アギか」
リュガは友と呼べる青バンダナの少年に声をかけられる。アギは彼を待っていたらしい。
「何の用だ？」
「いや、ユーマは風葉に魔法使ってもらったって言ってたからどんなものかと。すげーな、精霊って」
「フン」
感心するアギに面白くもないリュガ。
「用は済んだか。じゃあな」
「まあ、待てって。後でユーマも来るから一緒に市街に出ようぜ」
「お前、わかって言ってるのか？　アイツと仲良くする気なんてないぞ」
「氷の姫さんのことか？」
「その呼び方やめろって言ってるだろ！」
アギにも憤る。最近は彼のアイリーンに対する態度も気に入らない。
「リュガ、あの模擬戦は姫さんが望んだことなんだ。負けても満足したって言われたんだろ？」
「ああ。でもアイリーンさんは優しいからそう言うに決まってる。気に入らないのはアイツの態度だ。あんなにぼろぼろに打ち負かしたくせに平然と彼女の傍にいる」
だから気に入らない。

「アイリーンさんの優しさに付け込んでるんだよ！　他の《公式応援団》の連中が納得しても俺は許せない！」
「……」
何を言っても無駄な気がする。
感情的になってるリュガ。それでもアギは話しかけた。
「なあ、どうして《公式応援団》立ちあげたんだ？　団長じゃないけどお前、初期メンバーなんだろ？」
「決まってる。彼女が強くて、綺麗で、何より格好いいからだ」
リュガは即答。
「彼女がどれだけの努力をして、どれだけ魔術に挑戦してきたのかを知っているからだ。泥にまみれて血を吐いたことがあるのも知っている。先輩に負けて1人で泣いていたことも知っている」
リュガはずっと見てきた。
「彼女は自分の決めた道をまっすぐに堂々と進むんだ。その在り方を格好いいと言わないでどうする？　そんな彼女を応援しないでどうする？　だから俺たちは彼女のことをずっと見守ってきたんだ」
「それだよ」
アギは口を挟む。
「どうして見守るんだ？　応援しているのはわかるんだけどそれがわかんねえよ俺。もっと違う方法があったんじゃねえか？」

「何が……」

リュガは黙り込んだ。

「ユーマだって氷の姫さんの良さはわかってるんだ。だからあいつ一緒に姫さん用の新しい術式の構築考えているんだぜ。俺も一緒になって考えたこともあるけどさっぱりだな」

俺は純粋な戦士タイプだからな、とアギは笑う。

「でも俺も2人の手伝いができるんだぜ。何しているかは秘密だけど」

「お前……」

「ユーマが来て氷の姫さんや風森の姫さんと一緒になることが多くなったから分かったんだけど2人とも同じ学園の生徒だ。普通の女の子だぞ、リュガ。知ってるか？」

アギは知っている。見守るのではなく彼女達と同じ日々を過ごしているのだから。

「氷の姫さんは風森の姫さんの幼馴染だけあって全然姫っぽくないんだ。食べ物に好き嫌いがないどころかキワモノでも失敗作でもなんでも食べる。怒ると氷塊で俺やユーマの頭殴るし」

そのあたりは勘弁してほしかったが。

「今日は風森の姫さんとキャッチボール対決して負けたんだけど、もう一回ってムキになるんだぜ。知ってるか？」

「……」

実は最近４人で過ごしていたからリュガとの付き合いが悪かったな、とアギも少し反省していた。

「楽しいんだ、みんなと一緒にいると。だからお前も来いよ。応援団の存在が間違ってるとは言わねえけど、それで壁作ってんじゃないか？　お前」

リュガは黙る。アギの言い分はきっと正しい。でも、

「でもな、俺は……」

問題はこれからのユーマとの関係だ。冷静になればいかに自分の態度が幼稚だったのかが分かるから、これからどう接したらいいのかわからない。

「それにな、リュガ。ユーマは同じ学年にいるけどあいつ、まだ１５だぞ。俺たちの１コ下だ。あいつは俺の親友で弟分だ。お前にとってもそうさ。兄貴はカッコよくなくちゃな」

「……そうだな」

格好いいところ見せろよ、と言っているのだろうか？

アギなりの励ましにリュガの胸のつかえは取り除かれた気がした。

「……ならゲーム街の方に行くぞ。《ドラゴンライダー》のハイスコア、あいつに見せてやる」

「いいな、ゲーム屋巡りか。それでいこう。あとはユーマだけど……お。きたきた」

廊下の向こう側からユーマは現れた。遠くにいるが彼もアギ達に

気付いて駆け寄ろうとしている。

しかし途中、アイリーンと遭遇するユーマ。呼び止められてなにやら話し込む2人。

そして。

ユーマは彼女に連行された。

「ち、ちょっと、アイリさん！？」

ユーマの驚く声だけがアギ達に届いた。

「……おい。呼び方がいつの間にか変わってるぞ」

「そうだな」

「……もしかしてと思うが、あいつに気がなくてもアイリーンさんの方があいつに気があるんじゃないか？」

やっぱり訝しく思ってしまうリュガ。

「弟だろ。どう見てもあれは」

アイリーンに首根っこを掴まれて引きずられるユーマを見ながら、アギは笑った。

＋＋＋

0－09　学生ギルド（前書き）

ユーマ、バイトを探す

０－０９　学生ギルド

＋＋＋

今更だがユーマはこの世界における異世界人だ。

この世界、まして学園生活においてユーマには足りないものがある。

言葉は問題ない。何故か通じる。これは世界の謎。

読み書きも問題ない。

ユーマの精霊、砂更は博識な精霊で彼が代読してくれるからだ。

風葉は意外にも達筆だ。小さな体でペンを抱き、紙の上を踊るように代筆してくれる。流石にユーマは授業のノートは自分の世界の文字を使うつもりでいるが。

衣食住も問題ない。

学園に来て特待生となった彼の生活は学園内において保障されている。

寮生活になるし食文化もそれほど差異はない。味噌汁らしいもの

があってカレーがない世界はどうかとユーマは首を捻るけど。

彼に足りないもの。それは、

お金。

お小遣いがないのだ。まずこれがないと遊べない。

C・リーズ学園は学園都市内にある。学園都市というだけあって街には10代向けの様々な店舗や娯楽・遊戯施設があるのだ。

放課後を訓練や研究に費やす生徒も多いが自由に都市内を廻ることはもちろんできる。

学園に来て数日。魔術やゲンソウ術を駆使した体験型仮想ゲームのある施設を教えて貰い、それに興味があるユーマは学生らしい楽しい放課後ライフを迎えたいのでお小遣いが必要になった。

差し迫って足りないものがもう1つ。ユーマは自分の武器、できればブースターを欲していた。

彼は精霊以外の自衛の手段を必要としている。

リーズ学園は思った以上にトラブルが多い。ユーマも学園に来て早々決闘を仕掛けられたり、エイリークに吹き飛ばされたりしたもの（今も）だがどうやらそれが普通の出来事らしい。

荒事に関係なさそうな技術士志望の生徒や非戦闘系の一般生徒のほうが比率的に多いが、戦士・魔術師志望の生徒は決して少ない訳ではない。

喧嘩決闘事件事故は日常茶飯事のこと。剣と魔術がぶつかりあう毎日。

でも技術士の事故が1番怖かった。ユーマは3号棟校舎の一部が吹き飛ぶのを見たから。機密保持の為自爆したのだと後に報道部は語る。

とどめはエイリーク・ウインディ、彼女だ。

彼女の人気が高いのはユーマも薄々気付いてはいたが彼女はアイドルではない。ヒーローだった。

しかもトラブル割り込み型。見かけるとすぐに首を突っ込み、悪い方、もしくは喧嘩両成敗と《旋風剣》で吹き飛ばす。ついでにユーマも吹き飛ぶ。

「皆迷惑してるの。通行の邪魔よ」

と不良生徒のグループに旋風剣。ユーマはとばっちりで吹き飛んだ。

「そこおっ、割り込むなぁ！」

と食堂にて旋風剣。ユーマの日替わり定食が吹き飛んだ。

「今度こそ完成よ。だから……よけるなぁ！！」

と新技の訓練の的（ユーマ）に旋風剣。ユーマは盾（アギ）ごと吹き飛んだ。

彼女の近くにいるユーマが今後も吹き飛ばされない保証はない。

それでも困っている生徒を助けることも多い彼女の活躍はちょっとした美少女剣士の痛快活劇というと聞こえはいい。しかし自警部（生徒による学内自警組織）でない彼女が自衛目的以外に《旋風剣》を使う事は何かと問題である。

彼女が未だランクBなのは時折減点対象の校則違反をおかしているせいかもしれない。

もちろんユーマはトラブルに関して精霊たちの力を使えば何も問題なく対処できるのだ。しかしユーマ自身の《特性》が精霊使いの力と相反して制限をかけてしまっている。

《全力》状態はもちろん、力を抑えても長い時間精霊の力を行使できない。風葉たちはなるべく温存しておきたかった。

とはいえ先日おこなった能力測定で分かったユーマの実力は精霊抜きでDに近いギリギリのランクC（精霊込みでランクAの上位）。生徒同士の喧嘩や小競り合いに巻き込まれた場合、自力で対処するには心許ないので装備で自分の地力を底上げしたいのだが、

装備を買うにもやはりお金が要る。

「というわけでどこか働ける場所ないかな？」

ユーマ・ミツルギ１５歳。

はじめてのアルバイトは異世界にて探すことになった。

＋＋＋

学生ギルド

＋＋＋

「学生ギルドに行きなさい」

エイリークに簡潔なアドバイスをもらった。暇してたアギを道案内に連れて学生ギルドにむかうユーマ。

学生ギルドは学園都市内における学生による事業組合である。

未熟ながらも戦士・魔術師・技術士である生徒たちが依頼を受けて報酬をもらうことができる、実戦と実践を兼ねたアルバイト斡旋所ともいえる施設だ。

受けることのできる依頼は年齢と個人のランクで決められており、依頼者も同じ学生から近隣の国までと幅広い。

そして学生ギルドが発注する公式依頼は課外実習扱いとなり、成績に加算されるのも魅力である。

「お、『甲殻竜の角探してます。』だってよ。これにしようぜ」
「いやだ」
「じゃあ、『砂漠の竜蛇の舌3体分、高く買い取ります。』これは？」
「「いやだ！」」

学生ギルドに来たのはユーマとアギだけでない。背の高い少年がもう1人ついてきた。

リュガ・キカ。南方の《篝（かがり）の部族》の少年。

褐色の肌で長身の戦士。アギと同じように逆立てた髪は赤く、さらに同じように赤いバンダナを巻いている。

アギの友人である彼は《アイリーン公式応援団》の一員である。

リュガとユーマは彼女絡みで能力測定の日にひと悶着あったのだがアギのおかげでとりあえず和解。今は3人でつるむことも多い。

「甲殻竜なんてダメだ！　あれは《風刃》弾くし、《突風》なんて無視して群れで突撃してくるんだぞ」

《西の大砂漠》での激闘の記憶からユーマは魔獣狩りの依頼に拒否反応を示した。

「こっちは足場の悪い砂漠にいるのにあいつらの動きは機敏でまるでイノシシみたいな奴なんだ。あれ相手に角を折る依頼なんてやりたくない！」

一方でアギの封印は解かれた。

「竜蛇ハイヤダ。……逃ゲナキャダメダ。逃ゲナキャダメナンダヨ。……喰ワレタクナイ飲ミ込マレタクナイ……あああああ」

アギはユーマと共に学園へ向かう途中、《砂漠の竜蛇》に追いかけられたことがある。

飲み込まれかけて涎を被ったのだ。あの酸っぱい臭いはトラウマだった。

「……冗談だ。そもそも俺とアギはランクCだぞ。魔獣狩りなんて依頼受けれねぇよ。ユーマもやる気ねぇし」

アギの過剰な反応に引いたリュガ。

「『自警部の校内の見廻り増員募集』とか『リーズ学園中等部の訓練指導』とか学園内の依頼でいいんじゃねぇか？」

というわけで『C・リーズ学園依頼一覧』を見る3人。

「……このギルド非公式依頼の所にある『アイリーン・シルバルムの写真、1枚500から』ってのは？」

依頼主は匿名。リュガを見る2人。リュガは慌てて否定する。

「違う！　《公式応援団》はそんなものは欲しがらない！」

「じゃあ、『ユーマ・ミツルギへの奇襲作戦参加者募集』これは？」

「……昔の話だ」

依頼主は《アイリーン公式応援団》とある。

「取り消せ、今すぐ！　……何人かもう受けてる！　しかも報酬がアイリさんの写真て……」

リュガを見る2人。今度は黙るリュガ。

「……欲しいか？」

「「……」」

弁解の余地なし。

ユーマは砂の精霊の力でリュガを外に埋めた。

＋＋＋

ユーマは学生ギルドから依頼を幾つか受けるとアギ達と別れて学園に戻った。

彼の手には受けた依頼内容のメモとギルドからの紹介状がある。

「しかしこれは……」

「ユーマさん」

「ん？　ああアイリさん。今帰り？」

途中、アイリーンに出会った。

「いえ、この前話をした《氷輝陣》の改良案について貴方に話を聞

こうと思っていたのですが。ご用は済みましたか？」
「うん。学生ギルドから依頼受けてきたんだ。あとはブースターの製作依頼と見積りを練金科に頼もうと思ったんだけど、別に明日でもいいよ」

練金科は金属や宝石、道具に付与効果を与える技術を専攻する技術士系の科目だ。

術式の補助装備であるブースターも練金科で研究されている。

「ブースター、ですか。貴方は《精霊器》を2つも持っていらっしゃるのに？」
「短剣は借り物。下手に使うとエイリークがうるさいんだ。腕輪は砂更と併用するのが前提だし」

ユーマの短剣の扱いは素人だ。《守護の短剣》はユーマにとって魔法の杖でしかなく《精霊器》としての能力は風森の姉姫の持つもう1つの短剣がなければ使いようがない。

《白砂の腕輪》の能力は2つ。1つは付与効果で『物理防御力の底上げ』される効果がある。

そして砂の精霊《砂更》をサポートする『物質を砂状に変える力』があるのだがこれは生物に液体や氷、加工された鋼などには効果がない。

「もう少し自分向けの武器が欲しいんだ」
「そうですか。ブースターも素材と付与する術式次第で製作費が大きく変わりますからね」

そこでアイリーンは1つの提案をしてくれた。

「貴方のブースターにも興味があります。資金面でお困りでしたら私達が受けた依頼を一緒にやりませんか？　職員からの公式依頼ですので報酬は期待できますよ」

「本当？　私達ってエイリークと？　……わかった。助かるよ」

「ええ。詳しくは後ほど……ってそれは？」

「あ」

ユーマが手にしていたものの1つに彼女の目が止まる。それは写真。

首まで砂で埋められたリュガが助けを請い、ユーマに渡した秘蔵の写真だった。

「そ、そ、それは！！！」

「リュガに貰ったけど、……アイリさん。これちょっと趣味が……」

写真の中身はうさぎさん。

黒いスーツに網タイツ。

白い尻尾にうさみみバンド。

銀のトレイで胸元を隠して振り向きざまにはいポーズ。

白金蒼眼のバニーさん。

「き、きゃあああああ！！」

がつん。

突然ユーマは殴られた。

氷塊で。

どさり。

床に沈むユーマ。

「どうして！？　学園祭の写真はすべて回収したはずなのに！？」

「……」

屍のユーマは答えない。

学園祭でなにがあったの？　とは聞けなかった。

「……リュガさんから頂いたそうですね。あの赤バンダナの頭、凍らせてあげます！！！」

我を忘れて駆け出すアイリーン。ユーマは放置された。

静寂。見かけた生徒は誰も助けてくれない。

これも日常茶飯事だから。

（アイリさん凍結は苦手なんだから……リュガは氷で頭を冷やすどころか氷でかち割られるな）

ユーマは血に染まる赤バンダナ（人ではなくバンダナの方）を思い、心の中で合掌。

（……でも今度会ったらリュガはまた埋めよう。な？　砂更）

（……）

精霊は何も答えてくれなかった。

＋＋＋

0－10　練金科の兄妹（前書き）

ユーマ、ブースターを創ってもらう

０－１０　練金科の兄妹

＋＋＋

「……であるから《魔法》は魔力の質によって威力が増減されるがそれは微々たるものだ。術式を安定して発動できるのが魔法の利点といえる」

午前中最後の授業。

「自分以外を対象とするイメージの難しい補助系統や回復治療系統の術式は魔法の方が効率が良いのはそのためだ」

今日はオルゾフ先生の魔術講義だった。

「しかし、攻撃の術式や生活で使われる術式はゲンソウ術が優れている場合も多い。攻撃に関しては術者のイメージ次第で初級術式でも中級以上の高い威力や変化を与えることもできる。魔法ではそこまで威力を上げることも自由に魔術を運用することができない。次に生活用の術式だが、たとえば《灯火》の術式。この基本ＩＭは何だ？ミツルギ、答えろ」

当てられたユーマ。でもこのあたりはしっかり予習していた。

「はい。火と明るい光、周囲を照らすもの、です」

「そうだ。ただし、《灯火》は『周囲を照らす光』で構わない。屋内の照明にも使われるこの術式は火の持つ熱や燃える性質は必要な

い。慣れれば明かりだけをイメージすればいいのだ。屋内で《灯火》が利用できるのはこの『曖昧な火』を創造できることにある。魔法ではこの曖昧さが不可能で必ず《火》を作り出してしまう。魔法の魔術と比較するゲンソウ術の魔術の利点は他にもあるが……」

1度話を止めるオルゾフ。教室の生徒の大半がそわそわしている。

「そうか、今日は『あの日』か。次回までに生活用の術式とその基本IMのレポート1枚を提出するように。……5分前だがいいぞ。行って来い」

喜び叫ぶ生徒たちを尻目にユーマは飛び降りた。

3階の窓から。

「風葉！」
「はーい」

下方に向けて《突風》を起こして軟着陸するユーマ。

そのまま《高速移動》で渡り廊下を走り抜ける。

「ここは通さねえぜ」
「アギ！」

途中アギが立ちふさがった。身構えるユーマ。

「お前が風葉達を使ってくるのはわかっていた。足留めさせてもらうぞ」
「……どうして俺より教室を出るのが早かった？」

「ふっ、授業はさぼった」
「出ろよバカ野郎！」

アギ相手に正面突破は無理だ。ユーマは《天駆》を使って宙を駆け上り、アギを飛び越える。

「ちいっ、後は頼むぞリュガ！」
「……リュガもかよ」

今度からは2人と手を組んだ方がよさそうだとユーマは思った。

＋＋＋

今日は週に1度の『購買部ビックリサービスデイ』。

普段の商品が大量に出荷される上に割引されるお得な日。この日じゃないと出てこないびっくり商品もある。

普段は食堂派の生徒もこの日は人気のパンが手に入りやすいので購買部を利用することが多い。

だから激戦になる。誰もがライバルを蹴散らし、目当ての品を大量に求めるのだ。

ちなみにユーマの狙いはフィッシュドッグ。

白身魚のフライにタルタルソース。さらに特製マスタードの組み合わせが絶妙の一品。今日の昼食はこれにしようとユーマは決めて

いた。

「廊下をそのスピードで走るなミツルギ！　……まさか貴様、この日に3つしか出ない俺の『大怪鳥ギガグリルサンド』が狙いか！！」

「違う！　先生は授業はいいのかよ。まだ3分前だぞ」

「今日は自習だ。当然だろ」

「それが教師のやることかぁあああ！！！」

立ちふさがるは格闘技顧問の緑ジャージ。

この人相手では《天駆》では躱せない。ハエたたきのように叩き潰されてしまう。

「……いけよ。ユーマ」

「えっ？」

突然現れグルールを抑え込むリュガ。

「ボロス先生が自習にしたクラスはもう購買だ。俺じゃもう間に合わない。でも、お前のスピードなら！」

「ありがとう。リュガ！」

隙を突いてユーマは走り抜ける。ありがとう、戦友。

「しまった！　キカ、貴様……」

「俺はデミグラスサンド、アギはトリプルコロッケだ。頼むぞ！」

授業終了のベルが鳴ると同時に購買部に辿り着くユーマ。すでに行列ができていた。

でもここで諦めたら戦友たちに申し訳が立たない。

「うらあああああ！！」

ユーマは風葉の力を借りて跳んだ。生徒たちを飛び越えて購買部のおばさんの前に立つ。

「デミとトリコを3つずつ。あと『ユポン魚のフィッシュドッグ』3つ！！！」

ユポン魚は南方に生息する深海魚だ。実物はユーマも知らないが触手を持つ魚らしい。

この戦、勝った。そう思ったけど。

「そこおっ、割り込むなぁ！」

《旋風剣・疾風突き》

ユーマを吹き飛ばすのはエイリーク・ウインディ。ついでに生徒の行列も割れた。

「……予約していた『フルーツパフェサンド』と『大怪鳥ギガグリルサンド』ください」

「はいよ」

パンを受け取るエイリーク。

「……」

C・リーズ学園高等部の購買部は、お値段そのままにパンの予約を受け付けています。

＋＋＋
練金科の兄妹
＋＋＋

「どうして購買部の予約使わないのよ？」
「それは邪道だ。戦って勝ち取ることに意味があるんだ」

能力測定日から1週間。ユーマが学生ギルドから依頼を受けて3日が経つ。

今日は以前アイリーンと約束した学生ギルド公式依頼を実行する日だった。

アイリーンはエイリークと2人で依頼を受けるつもりでいたが、ユーマは飛び入りで参加することになったのだ。

「今日の依頼は私達3人なら難度がかなり低くなるでしょう。だから私は新しい術式を試すつもりです。……それにしても」

アイリーンはユーマの腰のあたりを見る。

「それが貴方のブースターですか？」

「そうだよ。まあ、武器に近いかなこれ」

「？」

そう言われても彼女にはそれが武器には見えなかった。

ユーマはいつものように腰の背面に《守護の短剣》を差しているのに加え、右腰と左腰のホルダーに金属板を数枚ぶら下げている。

右腰の金属板は「へ」の字に曲がったような形をしている。片側はグリップのような滑り止めがついていてもう片側の先端と下の方には縦にスリットがある。

まるで『銃のようなもの』。引き金はない。

左腰の金属板は形の揃った長方形。色違いの物が5枚ある。

「今日はこれを使うよ。実戦データが欲しいって製作者も見に来てるし」

ユーマの視線の先には茶髪と黒髪の双子がいる。

「エルド兄妹！？　あの2人に頼んだのですか？」

「うん。昇級試験が近いせいか頼める人がいなかったんだ」

＋＋＋

昨日の放課後。

ユーマは練金科の実験棟に向かった。ブースターの製作を依頼するためだ。

「こんにちはー」

「帰りな」

速攻で断られた。

「いや、ちょっと待って」

「お前、俺達のこと知ってるのか？　この天才兄妹のことを」

「うん。腕が良いのに暇してるって聞いた」

「……」

「馬鹿ですね」

ユーマが訪ねた2人は髪の色こそ違うが顔立ちがよく似た双子だった。

茶髪の長髪が兄のティムス・エルド。ブースター本体の製作と修理・改造を担当。

年齢は15の3年生。飛び級の天才。

黒髪のみつあみがポピラ・エルド。ブースターに付与する術式の構築と調整を担当。

口癖は「馬鹿ですね」

「ちっ、名前は？」

「ユーマ・ミツルギ。最近編入してきた」

「ユーマつうとお前か？　《ドラゴンライダー》の上位に最近ランク入りしたのは？　３面のボス相手に面白い飛び方したんだってな？」

「インメルマンターンか。もうちょっとでできそうなんだけどな」

《ドラゴンライダー》は飛竜に乗って竜騎槍と飛竜のブレス攻撃で空中戦を展開する仮想体験ゲームだ。最近アギやリュガに教えてもらった。

インメンマルターンは縦方向にＵターンする空中機動でユーマはこれで追いかけられたボスキャラの背後をとろうとしたのだが、旋回中に飛竜から落ちたのだ。

「馬鹿ですね。あの動きをやるならば物理的に飛竜の速度が足りません」

「まあ、久々にあのゲームのランキング変わったし面白い馬鹿は嫌いじゃない。……それで何の用だ、《精霊使い》」

兄妹はユーマのことをある程度知っているらしい。

「ブースターの製作依頼と見積りを」

「１０万からだ」

ティムスは即答。

「調整でも1回1万。俺達に依頼するならそのくらい用意しろ。話はそれからだ」

「……じゃあ、これで」

ユーマは自分のクレジット・カードを見せた。ポイントは126028とある。

「何？　魔獣狩りでもしたのか？」

「いや、土砂崩れした道の復旧工事と古文書の意訳をね」

ユーマが学生ギルドで受けた依頼はこれだった。魔獣狩りは遠方に1人ではリスクが高すぎる。

「砂更、砂の精霊の方だけどこいつが博識で古代語にも詳しいんだ。あと土砂や岩も砂にして運んでもらった」

《白砂の腕輪》で砂にすれば後は砂更が操作して運ぶだけだ。

土砂の量も規模も関係ない。3日かかる仕事が1時間で終わり、手当てを3日分貰った。

「ったくいいモン持ってるじゃねぇか。確かに古文書の意訳は内容次第じゃ1冊10万行くかもな。いいぜ。どんなブースターが欲しいんだ？　話くらい聞いてやる」

ユーマは2人に『銃のようなもの』の形を説明する。

「何だそりゃ。そんな金属の板きれを俺達に頼むのか？」

「馬鹿ですね」
「なるべく形と重さ、質感を再現してほしいんだ。似たような物がないから説明が難しい」
自分に馴染んだものだからオーダーメイドでも欲しいと兄妹に伝える。
「ちっ、金属板の加工なんてこんなの5千もしない仕事だぞ。今ここで創ってやる。おい、この水晶球に触れて《それ》をイメージしろ。俺がそれを『読み取って』《練金》してやる」
ユーマは言われたとおりに水晶球に触れてイメージする。ティムスはその間に合成金属の板を持ってきた。
「どれ。おっ、思ったよりも変な形じゃねえな。昔あったっていう《銃》みたいだ」
イメージの形を読み取ったティムスはその形状に興味を持った。
「このはっきりとイメージされてる『エンブレム』はどうする？装飾は別料金だぞ」
「それはいい。俺にはまだ似合わないから」
「……分かった。もういいぞ」
水晶球から手を離すユーマ。ティムスは水晶球と金属板を手にした。
「いいか？　想像と創造の合成。これが『錬金術』だ。ゲンソウ術のなかでも本当の《幻創》と呼べるのはきっとこれだと俺達は思ってる。……お前の『想像』は大したものだ。あとは俺が最高なヤツ

を『創造』してやる。いくぞ！」

ティムスの両手が輝き、一瞬の鋭い光がユーマの視界を奪う。

次の瞬間にはもうティムスの手にはユーマのイメージ通りの金属板があった。その早さこそ《天才》の実力。

ユーマは手渡された金属板のグリップにあたる部分を握り、振りまわしてみる。

「どうだ？」

「……すごいや、イメージ通り」

『実物』と同じ感触に感嘆の声を上げた。

「どこかで『試し撃ち』できないかな？」

「馬鹿ですね。まだ補助術式の付与はしていませんよ？」

本当にそれはただの金属板ですよ、とポピラ。

「いいんだ。これならきっと《補強》で十分使える」

「……隣の部屋を使え。的ぐらい用意してやる」

確かにブースターは突き詰めればイメージ補助の道具だ。思い入れがあればがらくただって効果は望める。

ティムスは金属板を持つユーマに興味を持った。

＋＋＋

ユーマは金属板を手に的の前に立つ。

ティムスの仕事は最高だった。ユーマは形だけでもここまで《これ》を再現してくれるとは思わなかったから。

金属板はイメージで《補強》して扱えばこれは自分だけの武器になる。その確信がユーマにあった。

「いくぞ」

的にスリットだけの『銃口』を向ける。

トリガーはない。この武器の引き金は心で念じる魔法の呪文。

風葉のおかげで身に付けた風属性の適性。ユーマは唯一操れる属性のイメージから攻撃術式を撃ち放つ。

「風弾！」

『銃口』にあたるスリットから撃ち出される《風弾》。

小さくも鋭い風の銃弾を6連射して的を撃ち抜くとユーマは『カートリッジ』のリロードをイメージ。

「次！」

次の的は厚い金属板。この的を前にユーマはイメージをさらに《補強》する。

（風よ集いて螺旋を描け。この一撃で撃ち貫け！）

「はあっ！」

螺旋を描く風弾は貫通弾のイメージ。金属の的を風弾が貫き撃ち破く。

「次！」

今度は複数の的。ユーマは次のイメージで竜巻を撃ち放つ。

「ストーム・ブラストぉ！！」

この世界ならば《旋風砲》と呼ばれる術式だ。的の半分を吹き飛ばす。

「風刃！」

ユーマは金属板を横に振るう。

金属板の『銃身』の部分、その下のスリットからカマイタチが発生。残りの的を1つ残して真横に切り裂いた。

「ラストぉ！」

最後に残した的にユーマは接近。

スリットから発生する《風刃》を維持した風の刃で的を縦に切り裂いてテスト終了。

ユーマは結果に満足した。

「うん。これだけ再現されてると風属性なら風葉の魔法なしでも十分に扱える。これいくらになる？　実はあれが全財産だからこれ以上は無理なんだけど」

「「……」」

エルド兄妹は絶句している。

「……馬鹿ですね。魔術師でないあなた自身は大した術式は使えないはず。なのに補助術式もないただの金属板で数種類の術式を撃ち分けるなんて。既存の《インスタント》のブースターなんて比べ物にもならない」

「銃のようなものだとは思ってはいたが近接戦にも対応しているのか？　……それに『これだけ再現』『風属性なら』だと？」

引っかかるものがあったらしい。

「おい待て、《これ》はまだ完全じゃないのか？　まさか『本物』はただの金属板ではなくて何か『機能』があるのか？」

「えーと……」

ユーマは正直に答えた。『本物』に対してわかることだけだが。

「馬鹿が！　何故それを言わない！　……よし。今から詳しく話せ。俺達が創ってやる」

「当然です。このままでは私の仕事がありません」

「いや、でもお金が……」

「なにつまらねえこと言ってる！　久々に面白いモン創れるんだ、金はいい。創ったら実戦データとらせろ」

「いや、もう時間も遅い……」
「馬鹿ですね。ここの研究室は私達の貸し切りです」

その日の深夜、ユーマのブースターは兄妹の手によって完成された。実戦データはまた後日とその時約束したのだった。

＋＋＋

「だから今日は眠くて眠くて」
「……それでこのブースターは名前があるの？」

エイリークは訊ねた。彼女も天才のエルド兄妹が関わったと聞いて興味を持ったようだ。

「ああ。これは《ガンプレート・レプリカ》。本物じゃないけど今の俺にぴったりだ」

＋＋＋

0－11　洗礼式（前書き）

ユーマＶＳ１年生

０－１１　洗礼式

＋＋＋
洗礼式
＋＋＋

「ところで今日の《洗礼式》って何なの？」

ユーマには馴染みのない言葉だった。お清めでもするのかとまず思う。

「新入生の歓迎のひとつです。高等部と中等部では実力の差が余りにもあるのでそれを１年生に実感してもらいます」

「要するにアタシ達の実力を見せつけるのよ」

『洗礼式で新入生相手に実演する生徒募集。ランクＢ以上推奨』

これが今日の依頼である。毎年学園の教員が学生ギルドに依頼しているギルド公式の依頼だ。

「アタシ達は３人で戦士系・魔術師系の１年生２クラス分、約５０人の相手をするわ。楽勝ね」

この依頼は他にも参加者がいて役割を分担している。

技術士は実験棟で実演。戦士・魔術師は模範実技や新入生相手の

模擬戦といった感じだ。

「ウインディさん、油断しないでください。去年先輩を吹き飛ばした1年生がいたでしょう？」

「……氷塊で先輩を下敷きにした1年生もいたわね」

「「……」」

お互い様だった。

「まあ、いいや。場所は何処？」

「屋外演習場の林よ」

＋＋＋

屋外演習場前にある広場。

3人の前には50人もの1年生が並んでいた。

全員が真新しい簡易戦闘服（支給品の装甲のない丈夫な服）を身につけて武器やブースターらしきものをそれぞれ手にしている。

「新入生の皆さん、進学および入学おめでとう。私達も歓迎するわ」

ユーマ達のグループは司会進行を代表でエイリークが行った。

若干言葉遣いが丁寧だ。

「早速だけど自己紹介します。私はエイリーク・ウインディ。隣の魔術師がアイリーン・シルバルム。私達はランクBの2年生よ」

優雅に礼をするアイリーン。

ざわめく1年生。《旋風の剣士》、《銀の氷姫》は彼らの中でも有名らしい。

「そしてコイツはユーマ・ミツルギ。こんなでも一応特待生。ランクA待遇ね」

「……いいけどさ」

コイツ呼ばわりが不満のユーマ。

ユーマの方は無名らしく反応がイマイチだった。

「洗礼式では私達の実力を見てもらうとあなたたちは聞いていると思うけど、今日は私達を相手に実戦をしてもらいます。……あなたたち全員かかってきなさい」

突然のことに驚く1年生。騒ぐのは当然。

大声を上げるエイリーク。

「黙りなさい！　何の為に武器やブースターを準備させてると思うの？　……いいわ。ユーマ、埋めなさい」

「おい、エイリーク」

「いいのです。去年もこんな感じでした。伝統です」

平然とする2人に仕方なく精霊を呼ぶユーマ。

「ああもう。砂更、モグラ落とし！」

「……」

突如精霊が現れるのでさらに驚く1年生。

ユーマは《白砂の腕輪》で地面を叩いた。

ズボッ！

「えっ！」

「うわあああっ」

「きゃあ！」

モグラ叩きというゲームがある。

複数の穴からモグラがランダムに顔を出す。顔を出したモグラをハンマーで叩くゲームだが《モグラ落とし》は一度にたくさんのモグラを顔の下まで穴に落とすのだ。

1年生が悲鳴を上げる。

広場は砂場となり全員容赦なく首まで埋まった。

生首畑である。

「わかった？　コイツ1人でも一撃で終わりなの。アンタたち1年生ごときにアタシは負けないのよ」

挑発するためかわからないが、地がでているエイリーク。

「ハンデをあげる。まずコイツの精霊たちは使わない。ユーマ、短剣と腕輪はアタシに預けなさい」

「腕輪もかよ。いや、砂更は今のでほぼ限界だからいいけど防御補正が……」

「いいのよ。アンタは《それ》があるでしょ」

《ガンプレート・レプリカ》を指差すエイリーク。ユーマは仕方なく彼女に短剣と腕輪を預けた。

「これでユーマの実力はランクC程度ね。アタシのハンデはこれ。武器はこの短剣1つでいいわ。アイリィはどうする？」

「《氷輝陣》と《氷晶壁》の使用禁止。《氷弾》も使いません。どうですか？」

「最高ね。コイツ達相手なら十分よ」

生首状態の1年生を指差し嘲るエイリーク。

あからさまに挑発している2人の態度に生首達の顔色が変わる。

「ルールはこうです。私達は《マーキングボール》を1つずつ身体に付けます。それを3人とも割ることができれば貴方達の勝ち。制限時間まで割ることができなければ貴方達の負けです」

「アンタ達は諦めなければ何度でも挑戦できるわ。制限時間は2時間。3人のボールを割ることができたら全員の個人ランクはアップ

するわよ。これは学園長にも了承済み。……本気で来なさい」

では解散。と林の中へ駆け込む3人。

しかし1年生たちは生首状態から脱出するのに時間がかかった。

戦闘が開始されたのは1時間後である。

＋＋＋

屋外演習場。森林ステージ。

「5人……いえ6人ですか」

林の中は広く1年生達はいくつかのグループに分かれて散開していた。

アイリーンが遭遇したのはそのグループの1つだ。

「戦士が4人、魔術師が1人。隠れているのも魔術師ですね」

伏兵の正体までばれて驚く1年生。《感知》の特性を持つ彼女ならば未熟な隠蔽など簡単に見破ることができる。

「くそっ、かかれ！」

「いつでもどうぞ。私の魔術はこれです。……《氷晶球》、展開」

接近する戦士タイプを前にアイリーンの銀の腕輪が輝く。

創造されたのは両手で抱えるぐらいの大きな氷の球体。前方に２つ、後方に１つ。

「はあっ！」

アイリーンは腕を振るい《氷晶球》を操作する。自在に飛び回る氷の球体を１年生の１人にぶつけて牽制。

「どうしましたか？　この術式、まだ不慣れなんです。貴方方にはちょうど良いと思うのですけど」

「なめるなよ。先輩！！」

氷晶球を砕こうと斧を振り上げる１年生。

その攻撃は球体に弾かれ、もう１つの球体をぶつけられて木に叩きつけられる。

「《氷晶壁》とはいきませんけどこの《氷晶球》も硬いですよ。『球体』を割るのも貴方達の技量なら難しいでしょうに」

「それならこれだ、《火球》！」

背後からの魔術攻撃。

しかし背面の氷晶球がこれを察知。アイリーンは振り向かずに球体を操作して火炎弾を防ぐ。

アイリーンは自分が生成した氷を知覚することができる。また、その氷にも《感知》が適用されるので氷を周囲に展開するほど彼女は物の気配を感じとる範囲が広がっていく。

《氷輝陣》は全周囲をカバーできるが範囲は自分を中心に半径６メートルと狭い。

《氷晶球》は球体を中心に周囲約３メートルを感知することができる。球体の操作範囲は最大半径約１５メートル。

同時展開は最大５つまでで同時操作は２つまで。これが今の彼女の限界だった。

直撃した球体は傷１つ、溶けた形跡もない。

「イメージが足りません。私の氷を溶かすならリュガさんくらいの熱を想像しませんと」

「……まだですよ先輩。応援が来ました」

いつの間にかアイリーンは囲まれていた。

「いくら氷姫と呼ばれるあなたでも《氷弾》や《氷晶壁》もなしで１５人を相手にできるのですか？」

「それでも足りませんね。でも少しだけ本気を見せます。……未完成の術式です。手加減はできませんよ」

しかし早い段階からアイリーンは増援を感知していた。ただ気にしなかったけだ。

彼女は《氷輝陣》を展開した時のように蒼眼を閉じる。その雰囲気にのまれて1年生は動けない。

「《氷晶球》、術式変更。魔眼、展開！」

氷の球体のすべてに真横に亀裂が入る。そして球体の「瞼（まぶた）」が開いた。

開かれた瞳の色は銀。3つの銀の瞳は戦闘態勢のまま動けない1年生をただ静かに見据えている。

「《銀の魔眼》。これが私のあたらしい魔術です」

＋＋＋

「はあああああっ！！！」

《旋風剣・疾風突き》

竜巻を纏う突撃は細剣だろうと短剣だろうと関係ない。打突時の衝撃波で吹き飛ばすだけだ。

1度に3人を吹き飛ばすエイリーク。ハンデが1番軽いのはきっと彼女だろう。

「次は誰？」

「下がれ。俺達が相手する。魔術師はサポートを頼む」

前に出たのは重装備の戦士タイプが3人。大きな鋼の盾を持ち、槍を構えている。

「重戦士ね。いくわよ！」

構わず《旋風剣》を振るうエイリーク。

重戦士の1人がさらに前に出て盾でエイリークの突撃に耐える。装備重量もあってうしろに数歩分下がるだけで吹き飛ばされなかった。

「今だ。撃て！」

残り2人の重戦士が槍を突きだした。

攻撃を防がれたと同時に後方に下がったエイリークは槍を容易に躱すが、追撃の魔術攻撃が彼女を襲う。

「狙いが甘いわよ。……硬いわね。防御特化の強化系なのかそれとも盾に付与の術式を与えているのかしら？」

魔術攻撃は自分に当たるものだけ《風盾》を使い短剣で逸らした。

エイリークは《旋風剣》以外の術式も使う事が出来る。

「……試してみるか。旋風剣！」

短剣に纏う竜巻は風をさらに飲み込んで大きくなる。

「集え集え集え！　風よ集いて螺旋を描け！」

「その技はまさか！　……隊列を組み直す。防御系の術式を使える奴は援護を！」

リーダー格の重戦士を前にして複数の防御壁を展開。

対するエイリークの放つ技はユーマがアイリーンとの模擬戦で見せた魔法剣上位剣技。

《旋風剣・螺旋疾風突き》

「いっ、けぇーーっ！！」

防御壁を容易く突き破り重戦士へ突撃するエイリーク。

ガリッ！

ところが切っ先が盾に触れた途端《旋風剣》の竜巻は分解し、衝撃波となって爆散した。

エイリークと重戦士のリーダーは互いに吹き飛ぶ。

「痛っ！……失敗か。ユーマの言う『どりる』が訳分からないからこれはちょっと無理ね」

ちなみにユーマは「ドリルは魂の武器でスーパーロボット専用なんだ」と力説し、風葉は「ぐるぐるぐるぐるぐるのどーん！　ですよー」と解説する。彼女には理解できなかった。

「いけるぞ。《旋風剣》が効かないなら《旋風の剣士》なんて……」
「言ってなさい」
「――！！」

歓声を上げようとした重戦士の１人。彼の目の前にエイリークがいた。

「は、はやっ」
「制裁！」

防御する隙を与えずにエイリークは《竜巻ぱんち》で重戦士を殴り飛ばす。

「甘いのよ」
「……しかし不意打ちはそれまでだ。防御を固めて遠距離から攻めれば」
「試してみる？」

《疾風突き》の構えを見せるエイリーク。重戦士のリーダーと睨みあう。

「はあああああ！」
「ぬおおおおっ！」

小細工なしのぶつかり合い。エイリークの《旋風剣・疾風突き》は再び重戦士の盾に阻まれる。

「まだまだぁーっ！」
「う、おおおお！！」

突撃が止まると同時にエイリークは《旋風剣》の短剣を盾に叩きつける。

何度も何度も何度も何度も。

何度も！

「いい加減に……吹っ飛べぇえええ！！」

「くっ、しまった！」

ついに重戦士の盾が弾かれた。

その一瞬の隙にエイリークは彼の懐へ飛び込む。

「なっ！」

「遅いのよ。アンタは」

《旋風剣・疾風突き》

吹き飛ぶ重戦士のリーダー。ここで1年生グループの前衛は崩壊した。

「次は誰？　来ないなら、いくわよ！」

エイリークは1年生の集団に飛びかかった。

＋＋＋

一方その頃。

「何だ？　この嫌な感覚……狙われてる？」

ユーマは林の陰に隠れていた。

＋＋＋

遡って戦闘開始の合図から1時間が経過した頃。

林の中に身を隠すユーマには腰の短剣も左腕の腕輪もない。

あるのは額のゴーグル（とうとうアギに譲ってもらった）と右手の《ガンプレート・レプリカ》だけである。

「そろそろ来るかな？　……風葉達もいないなんて本当に久しぶりだ」

「そうですかー？」

「って風葉？」

彼の肩にしがみついてるのは緑の小さな女の子。風の精霊の風葉。

「お前どうして？」

「見学ですよー。もちろんお手伝いはしませんー」

この精霊は一応中位精霊。精霊器である《守護の短剣》から離れても活動できるらしい。

「でも」
「傍にいるくらいならわたしは消えませんー。守護精霊をなめないでくださいー」

ユーマの心配は自分の《特性》で精霊たちが消えてしまうこと。心配ないと風葉はえへん、と胸を張る。

「危なくなったら『おうち』に帰れよ……ってお客さんだ」

風葉を胸ポケットに放りこむユーマ。木を登って上から様子を見ると、1年生の2人組がやってきた。

「よし。まだ気付かれてないな」
「どうしますかー？」
「もちろん。奇襲だ」

1年生が真下に来たところでユーマは木から飛び降りる。さすがに気付かれるがその時にはもう相手の背後はとった。

スリットの銃口を向けて《風弾》を連射。

「えっ！」
「うわっ！？」

撃たれた1年生2人は風弾の衝撃で木に叩きつけられた。

「何の音だ？」
「こっちの方だ」
「急げ！」

《風弾》の発射音、木に叩きつけた音に気付いて駆け寄る1年生達。その時にはユーマはまた木に登って姿を隠していた。

「……気付かれたかな？　この発射音はどうにかしないと」

「《消音》の術式は風属性ですよー。覚えますかー？」

「あとでな。……追加装置が欲しいな。ティムス達に聞いてみよう」

ちなみにエルド兄妹は今のユーマを偵察器（仕組みは分からないが監視カメラのようなもの）で観測している。

「そういえばどうして《それ》を持つと《風弾》や《風刃》が使えるのですかー？　わたしが教えても全然だめでしたのにー」

ふくれる風葉の質問にユーマは呆れる。

「術式を放つイメージがどうしてもできないんだよ。ガンプレートは元々『魔法弾を撃つ道具』だからイメージしやすい。風弾なんかはシアさんのを見たことあるからね。……それに風葉の教え方がひどい。ふーふーのずばーん、とか言われてもわからないよ」

「そうですかー？」

不満そうな風の精霊。

「いたぞ、木の上だ。撃て！」

「うおっと」

気付かれたらしい。ユーマは《天駆》も駆使して木の上を移動し続けるが追いかけられる。

どうやら探索系の魔術を使われたようだ。

「数が増えるのも厄介だな。このへんで迎え撃つか」

木の上から飛び降りながら風弾を6連射。ほとんどが外れたり盾や術式で防がれたが牽制なのでユーマは気にしない。

着地。1年生達と対峙する。

「貴方の事は知っていますよ《精霊使い》。精霊なしの貴方なんて貧弱な風使いだ」

「メガネは俺の事知ってるのか？　でもそれは昨日までの話。試してみる？」

眼鏡をかけた訳知り顔の1年生に対して不敵な態度で答えるユーマ。

左腰から色違いの金属板を取り出す。

「実験、開始」

「お前達、いけ！」

数を確認。接近してくる戦士が2人。魔術師が3人にメガネが1人。

ユーマはガンプレートのグリップに赤い金属板を差し込む。

金属板に付与されているＩＭがユーマに流れ込み、彼の《火》のイメージを《補強》する。

「フレイム・バーナー」
「なっ！　火属性だと!?」
火炎放射に驚くメガネ。
戦士の1人が火だるまで転がる。あと5人。
「この野郎！」
「ヒート・カッター！」
振り下ろされる剣をガンプレートで受け止める。
ガンプレートは銃身の先と下腹部のスリットから赤い刃を放出していた。受け止めた剣は赤熱化してじゅわー、と嫌な音を立てる。
ユーマはガンプレートを振り抜いて剣を焼き切る。
「お、俺の剣が！」
「隙あり」
呆然とする戦士の1年生を《風弾》で倒す。あと4人。
「そ、それはブースターなのか？　そんな変な形で剣だと?」
「カテゴリーは一応銃剣になると思うけど。知ってる?」
「くぅ、前衛がやられた。一斉攻撃だ。接近を許すな！」
メガネの指示で魔術師は一斉に《火球》を放つ。数は多いが弾速はリュガ並みといわなくても遅い。
ユーマは腕を交差してガンプレートに差してある金属板を『換装』

する。

昔、兄達のように格好よく『カートリッジの交換』をやりたかったので何度も練習した。今では慣れたもので殆ど隙がない。

金属板の色は水色。勢いよく噴射される『水鉄砲』は《火球》をすべて打ち消す。

ついでに火だるまになった1年生にも水をかけてやる。

「消火完了っと」

「火属性だけじゃなくて水属性まで!?　ぶわっ!!」

水鉄砲の勢いに流されて木に叩きつけられた魔術師の1年生。あと3人。

ユーマはそのまま《高速移動》で接近。

風葉の魔法なしでは連続3ステップまでで隙ができてしまうが相手は1年生で魔術師。スピードの緩急をつけたようにみせれば十分フェイントになる。

「ショット!」

バチィ!!

「ぎゃあ!!」

今度の金属板は黄色。ガンプレートはスタンガンとなりその電撃で気絶させた。あと2人。

「ストーム・ブラスト！」

竜巻で吹き飛ばす。あと１人。

「う、嘘だろ。風・火・水・雷の４属性を扱う魔術師なんて学園の《番号持ち》にだっていないぞ。何なんだよお前！！」

「うるさいよ」

メガネの額に銃口を突き付ける。

「ばん！」

「ひぃいいいい！！」

驚いて気絶したメガネ。泡を吹いている。

ユーマはガンプレートをホルダーに収めた。

「何だったんだろうなこいつ。……使わなかったな、これ」

ユーマの手には残りの金属板。色は青と白。

「まあ、いいや。この調子でいこう」

「がんばってくださいー」

＋＋＋

ユーマは風葉を連れて木に登り、林の中へ消えた。

０－１２　魔銃と狙撃手（前書き）

ユーマＶＳ《射抜く視線》

０－１２　魔銃と狙撃手

＋＋＋
魔銃と狙撃手
＋＋＋

「敵発見！　覚悟お！！」
「うわっ」

ユーマはあれから散発的に遭遇する１年生を《風弾》とスタンガンで無力化していった。

そんな中、突然１年生の女の子に襲われる。

「外したか。次は……ってきゃあああああ！」
「ストーム・ブラスト！」

竜巻で吹き飛ばす。だが少女は空中で体勢を整えると身軽に木の枝の上に降り立った。

「危ないわね。何するのよニンゲン！」
「こっちのセリフだってそれ……ん？　人間って？　君もしかして魔族？」
「そうよ。アタシはユンカ。勝負よ！」
「……エイリークみたいだな、こいつ」

ユンカと名乗った小柄な少女は浅黒い肌をしていて短い銀髪を二

つ結びにしている。

先のとがった耳。瞳の色は紅。一般にダークエルフと呼ばれる魔族だ。

魔族とは魔力を体内に多く保有するエルフ、ドワーフといった亜人たちのことを指す。魔力をほとんど持たない亜人は鬼という。

「てりゃあーーっ」
「はやっ、ってか重っ！」
「誰が重いですってー！！」

飛びかかるユンカ。激怒しながら振るわれる双剣の一撃は重く、ユーマは凌ぐのに精一杯だ。

ユンカはエルフでは珍しい強化系魔族。体内の魔力のすべてを身体強化に費やすことができる。

小柄な体格を活かした素早い双剣の技を強化されたパワーで振るう彼女は強力な剣士だった。

「それっ、それそれ。どうだー！！」
「くっ……調子にのるなよ、ちびすけ！」

ユーマは黄色の金属板からスタンガンの電撃をイメージ。ガンプレートで双剣を受ける。

勘が良いのかユンカは瞬時に受け止められた剣から手を離した。絶縁処理なんて施されていない武骨な剣は激しく火花を上げる。

「きゃあ！」
「もらった」
ユーマは銃口をユンカに向け風弾を撃とうとしたその瞬間、
――撃てばあなたを……撃つ！
「――！！」
ぞくり、とした悪寒。ユーマは急遽飛び退き、木を盾にして身を隠す。
伏兵なんて気付きもしなかった。その隙にユンカは離脱してしまう。
「何だ？　この嫌な感覚……狙われてる？」
ユーマは林の陰に隠れた。しばらくの間、動けなかった。
＋＋＋
「ジン！」
逃げ出したユンカは1人の少年を探し、木の上でやっと見つけた。
「ありがとう！　たすかったー」

「ユン！　離れて。近い、顔が近いから！」

ユンカに抱きつかれて赤くなっている少年の名はジン・オーバ。

東国出身でユーマと同じ黒眼黒髪の少年。魔術師には見えず武器らしいものも持っていない。

「僕たちを除いて1年生はほぼ全滅だ。さっきまで隠れて《銀の氷姫》の様子を見ていたんだけど」

ジンはアイリーンの戦いぶりを思い出して身震いする。

「あの術式はマズイ。術者本人が振り回されている感じだったけど気配を感じ取られそうだったからこっちに来たんだ」

「アタシは《旋風の剣士》のところ。来た時にはもう20人くらいの屍の山ができていたわ」

実際に見たものは吹き飛ばされて木の枝に引っ掛かった同級生たち。モズの速贄のようだったとユンカは言う。

「1度離脱したところであの弱そうなのに遭遇したんだけど」

「ユーマ・ミツルギか。僕は結局狙撃できなかったよ」

そして2人は先程の事を思い出す。

「そういや最初の精霊はすごかったね。高等部、というよりも《中央校》の生徒はみんなすごいな」

ジンは東地方の分校である《E・リーズ学園》、その中等部から来た編入生である。

ユーマ達に感心するジン。割と素直な少年だった。

「どうするのジン？　このまま負けるなんて嫌」
「ユンは隠れて様子を見てて。双剣の片方を落したんでしょ。……あとは僕がやる」

＋＋＋

ユーマはしばらくしてエイリークとアイリーンの2人と合流した。

「それは《射抜く視線》のジンでしょうか？」

先程の悪寒の話をすると2人から答えが返ってくる。

「優秀な《弓使い》の噂があったわね。東校じゃなかった？」
「おそらく高等部からこちらへきたのでしょう」
「どんな人？」

ユーマは気になった。

もしあの時撃たれていたらそこで終わっていたと感じたから。その正体が知りたかった。

「アンタと同じ黒髪の男。《射抜く視線》で狙いを定めて《幻想の弓矢》で獲物を仕留める弓使い。アンタが感じたのはその視線よ。きっと」

エイリークの説明をアイリーンが引き継ぐ。

「《幻想の矢》は『無属性の属性弾』です。不可視の矢と思ってください。《射抜く視線》に狙われると矢は必ず当たります。視線から逃れるか防御するしかないのですが姿を隠した彼の見えない矢をどうやって防ぐかが問題です」

ジンは狙撃手。身を潜めて狙い撃つのは彼の得意とするところ。現にユーマは狙われるまで気付かなかった。

「弱点は視線が強くて勘が鋭い奴は大抵狙撃の直前で気付くことができること。矢の連射はできないみたいだから一撃を防げば位置を特定することができるけど」

エイリークの捕捉にユーマも攻略法は大体理解した。

「こっちの方が数はいるんだから囮を使う方が早いって話か」

「ええ。《氷輝陣》を使えるなら私が適役なのですけど」

アイリーンはハンデで自ら《氷輝陣》を封じている。

「俺がやる。エイリーク、これ持ってて」

「これ？」

「試したいことがあるんだ。借りもあるし今度は逃げない」

＋＋＋

林の中を1人ぶらぶらする囮役のユーマ。不本意ながら餌に獲物が食いついた。

「今度こそ倒す！」
「お前かよ。厄介な」

剣1本で攻撃を仕掛けてくるユンカ。

そこにアイリーンが飛び込んできてユーマを《氷晶球》で庇う。

「アイリさん」
「ここは私が」

エイリークならともかく近接戦ではアイリーンの方が不利だ。

ユーマはガンプレートを青の金属板に換装。ＩＭは《氷》。彼女を援護することにした。

「凍れ！」
「……」
「……？」

ガンプレートは何も反応しない。……ただの金属板のようだ。

「何をしているのですか？」
「……ごめん。冷凍光線が出ない。俺も凍結系は苦手みたいだ」
「わ、私は苦手ではありません！！」

自覚はあるのに意地になるアイリーン。

それで隙ができた。すかさず放たれる《幻想の矢》。

「しまっ！」

矢に反応するも遅かった。彼女が腰に付けた《マーキングボール》が割れ、彼女の服に赤い塗料が飛び散る。

「ユーマさん！！」

「やったあ。ジン！！」

「……ごめんアイリさん。あとお前は吹き飛べ」

ストーム・ブラストで喜んで隙だらけのユンカを吹き飛ばす。今度は直撃した。

「さてと。１対１か」

近くにいることは今のでわかった。ユーマはガンプレートの金属板を白に換装して狙われるのを待つことにした。

「……覚えてなさい」

「……」

アイリーンの呟きは幻聴と思いたかった。

＋＋＋

ジンはユンカが吹き飛ばされるその間に狙撃ポジションを変更。木の上を移動していた。

「隠れてって言ったのに。仕方ないなあ」

ジンはユーマが囮だというのはわかっていた。

ユンカにはもしも狙いを外したときに追撃してもらいたかったのだが彼女を餌にアイリーン・シルバルムが釣れた。彼女が隙を見せたのは幸運にすぎないが仕留めたことは大きい。

ユーマはともかくエイリークは近接型。《感知》特性を持ち遠距離攻撃が可能な《銀の氷姫》がいないのであれば状況はジンの方へ有利に傾くはず。

「あとは彼か。あのブースターは見た感じ特殊なものだけど射程はこちらが上だ。問題は僕が一撃で射抜くことができるかどうかだけど」

空の両手を見るジン。手にはじっとりと汗ばんでいる。

「……やるさ。このまま何もせず負けるのは僕も嫌なんだ、ユン」

ジンは気持ちを切り替えて何もない両手で『弓を構える』。『矢をつがえて』、『弦を引く』。

《幻想の弓矢》

弓という幻想を操り幻創の矢を放つゲンソウ術の弓術。

威力こそジンのイメージ通りのただの弓矢にすぎないが不可視、無音、無限の矢を持つこの技は遠距離からの狙撃を得意とするジン

と相性が良かった。

ジンはユーマを見る。彼の左肩にあるボールを見据える。

《射抜く視線》

ジンの放つ矢は彼の視線に誘導され、その名の通り見たものを射抜くことができる。

この技を身に付けた経緯は本人しか知らない、特異能力だった。

この能力を使うときだけは優しい雰囲気を持つ少年も鋭く目を光らせる。

「――!!」

強すぎる視線を察知して振り向くユーマ。

振り向きざまにガンプレートを向けるが狙いはジンに向いていない。当てずっぽうだ。

（気付かれても隠れなかった時点で矢は当たる。僕の……勝ちだ！）

ジンが矢を放つのとユーマがガンプレートを撃つのはほぼ同時だった。

＋＋＋

――来た！！

1度感じたものと同じ悪寒にユーマは振り向く。視線を感じる方に向けてガンプレートを構えた。

（狙う必要はない。方向さえわかればいい。……あとは『再現』できるかどうかだ）

白の金属板から流れ込むイメージをユーマは《補強》する。

イメージは太陽。空を見上げれば感じることのできる――あの光の眩しさ。

「いけっ、閃光弾！」

ユーマの周囲で光が弾け、誰かが驚きの声を上げる。

白の金属板に付与されたＩＭは《光》。

光は火をはじめあらゆる属性に備えられているが純粋な光属性の基本ＩＭを構築できるのは学園の生徒では天才兄妹の妹、ポピラ・エルドだけ。

ユーマは眩しさで目を開くことができない。近くにいるアイリーンも同じだろう。

しかしジンの矢はユーマを掠めただけで外れた。閃光弾はジンの『視線を逸らす』ことに成功したようだ。

（囮役はおわり。あとは）

「そこまでよ」

エイリークは目が眩んでしゃがみ込むジンに短剣を突き付ける。

彼女はユーマの持つ《遮光》の付与された砂除けのゴーグルを身につけていた。１人だけ閃光弾が効かなかったのだ。

ずどーん。

目の見えないユーマは誰かが吹き飛ばされる音を聞いた。

つまりエイリークは容赦しなかった。

＋＋＋

１年生は結局制限時間前に全滅。

ユーマ達はアイリーンの被弾、とやられた本人は不服だが１年生にすれば上出来といえる結果で彼らの洗礼式は終わった。

エイリークは最後をこう締める。

「あれだけのハンデを与えてあの人数差の結果がこれよ。これが実力。でも貴方達はこの１年で私達と同じレベルまで上ることだって

できる。崩れた自信は自分で積みなおしなさい。貴方達はまだ強くなれる……あの《銀の氷姫》を『倒した』のだからね。あのアイリーン・シルバルムを！！」

「……」

「……覚えてなさい」

その呟きが隙を作らせた自分なのか、撃ち抜いた彼なのか、

それとも目の前で堂々とする彼女に向けて言ったのかをユーマは判別できなかった。

＋＋＋

洗礼式終了後。

学生ギルドから報酬を貰うとユーマ達はそのまま打ち上げをおこなう事にした。

アギやリュガを呼んでエルド兄妹も参加。

そして、

「僕たちも参加してよかったんですか？」

「いいのよ。洗礼式は1年生との交流のためでもあるの。報酬も交際費に使われるのが伝統よ」

ジンとユンカの2人も加えられた。

市街のとある飲食店に入るとそれぞれ適当にメニューを注文して

いく。

「こいつらが今回の敢闘賞の1年か？」

「そうね。他にもアタシ達が受け持った中では何人かいたけど目に付いたのは彼らよ」

ジンたちを見てアギはエイリーク達に訪ねた。それになぜかユンカが答える。

「そうよ。《銀の氷姫》を射抜いたんだから。ジンはすごいの！」

「ユン！　すいません。あれはルールと場所が僕に有利だっただけです。実戦では先輩には敵いません」

「気にしていませんよジンさん。……ええ、私は」

嘘だろうと思ったが、誰も口にしなかった。

「おい。《ガンプレート・レプリカ》の方はどうだ。今回はお前の要望通りカートリッジは『基本属性のＩＭ』のみにしたが」

「うん。おかげで風以外の属性も扱う事ができた。不向きな属性と『使ったことのない魔法弾』の再現は無理だったけど」

「氷属性ですね。そこは私の仕事です。カートリッジを特定の術式の補助を目的とした《インスタント》仕様にすれば使いやすくなるはずです。汎用性はなくなりますが換装できますので」

ユーマとエルド兄妹は今回の実戦データを元にガンプレートの改良について話し合った。

この兄妹、興味のあることに関して話すには人あたりは良い。

「新しいカートリッジもだけどガンプレートのオプション、追加装

置も考えて欲しいんだ。発射音を抑える消音器とかどうかな？」
「追加装置（オプション）だと！？　何だその創作意欲を掻き立てる言葉は！　ブースターの補助術式を換装させる仕組みだけでもおもしれぇのに。よし。詳しく話せ。今から創るぞそれ」
「……馬鹿ですね」
「アンタ達、あとにしなさい。……飲み物はみんな持った？　今日はお疲れ様。次は《昇級試験》！　全員のランクアップを目指して張り切っていくわよ」

エイリークの乾杯の音頭に合わせてグラスを掲げる。騒ぎ出す仲間達。

ユーマが学園に来てからまだ１ヶ月も経っていない。

でもエイリークやアギ達に出会い、多くの仲間に囲まれた学園生活。この日常をユーマは楽しんだ。

＋＋＋

1－01　はじまりの日（前書き）

第1章、突入します

1－01　はじまりの日

＋＋＋

私、エイルシア・ウインディが彼と出会ったのは偶然でも運命でもありません。

私に起きた偶然はひとつだけ。森で倒れた彼女と出会い、助けたこと。

――わたしはいつだって人の運命を人が選びとることを願います

――たとえ世界が貴女を救わなくても、貴女の幸せを願う人は必ずいる

あの時の私は彼女の言葉を信じなかった。

――だから忘れないで

そう。だから私は……

＋＋＋

失ったものは戻らない

それを知っているから少年は……

「……はぁはぁ……はぁはぁ、はぁ……キツイな、やっぱり」

深夜の倉庫街。優真は建物の陰に隠れて呼吸を整える。

紙一重の戦いが続いていた。身体の熱は引きそうにない。

「でもなんとか1人にすることはできた。代償はでかかったけど」

あの3人を相手にしては《全力》以上に《本気》を出すしかなかった優真。

ここまでの戦闘で精霊の力を《彼》に『見られて』しまった。風の魔法も、砂を操る力も。

そして炎の槍さえもう通用しない。

「戦う手段がもうほとんどないや。……諦めるか？」

手にした武器を握りしめる。

しかし《これ》だって元々彼の作品だ。既存の魔法弾はきっと通じない。

「それでも駄目だ。俺は……許せない」

優真は己に問いかけ、それを否定することで自分を鼓舞する。

《彼》を敵とする理由が少年にはあるから。

いつまでも隠れてはいけない。優真は思い切って陰から飛び出した。

「――！！　風よ！」

正面の影に向けて咄嗟に放った真空波は《彼》が腕を振るうだけで相殺された。

この技も『見られている』からやはり通じない。反撃に備えたが《彼》は仕掛けてこなかった。

「……余裕ですね。光輝さん」

「優真……」

「そんな声出さないでください。決心が鈍る」

それは梟。

銀の髪と金の瞳を持つ青年

夜を識り、闇を狩るモノ

「お前の力は《理解》した。……俺に2度目はないのは知っているはずだ」

優真は梟の敵ではない。しかし彼は少年を止められなかった。

「知ってる。魔術戦や奥義のぶつけ合いなら《梟》は一撃で倒すしかない」

梟は、優真が兄と慕っていた青年は優真の敵だ。

「でも俺はまだ負けてない。……許せないんだ。あの子を殺したこと。今も」

「……」

消えることなく、抑えきれなくなった負の感情。

優真はそれをぶつけることしかできなかった。

手にした金属板にカートリッジを差し込む。特注の一発が梟を撃ち墜とす最後のチャンス。

「いくよ、……兄さん」

風を起こし、砂埃が舞う。

砂塵の竜巻から放たれる風の刃と砂の散弾。

「優真！」

梟の金の瞳は撹乱に惑わされず当たる攻撃だけを相殺。

上空から降り注ぐ炎槍の雨も腕を上げ見えない何かで打ち払う。

「その程度……っ！？」

同じ術式は彼には通じない。しかし梟の注意は僅かな時間上にそれる。

だから足元が砂地になっていることに気付くのが遅れた。

「うわあああ！」

砂に潜り梟の真下から優真は飛び出す。いくら彼でも地下のものを見ることができないことを優真は知っていたから。

これが最後――

刹那、互いに取り出したのは同じ武器。同時に突き出す銃口。

「優…！？」

「おお！！」

銃が吼える。そして――

＋＋＋

「うわあああああ！！！」

優真は飛び起きて目を覚ました。

「……夢か。……ありえねぇ。光輝さんと決闘なんて何無茶してんだよ俺」

嫌な汗をかいているのがわかる。

「……まあ、いいや。もう少しだけ……ねる」

落ち着いてきたのでもうひと眠りしようと布団をかぶった。時間になったら姉が起こしに来てくれるはずだ。

「！！」

「ん？」

ところが布団をかぶり横になると優真は何かと目があった。誰かいる。

しばらくして自分のベッドではないことに気付いた。布団のにおいがまず違う。

同じベッドの上、同じ布団の中で隣にいるのは年上の女性のようだ。姉ではない。

はちみつ色の長い髪をした優真の見知らぬ綺麗な人。驚きで大きく見開いたままの瞳はきれいな翠をしている。

しばらく見つめあう2人。

「……夢か。……ありえねぇ。何妄想してんだよ俺」

「――――！！」

そう結論を出して彼女の頬に触れてみる。やわらかな感触にすげえ夢だなと感心する優真。

ふにふに。

「き」

「き？」

「キャーーーーーッ！！」

優真は突き飛ばされ追撃の《風弾》で壁に叩きつけられた。

ごちん

彼の物語はエイルシア・ウインディ、彼女のベッドの上から始まったのは2人だけの秘密だ。

＋＋＋

幻創の楽園

第1章　風森の勇者

＋＋＋

＋＋＋

はじまりの日

＋＋＋

再び優真は目を覚ます。目の前には夢にでてきた女性がいた。

警戒されるように何かの構えをとっている。

「あなたは何者ですか？」

「……え？」

夢じゃないようだ。でもどこを見ても見覚えがない。

「ここは……どこ？　天界？　それとも魔界？」

「……打ち所が悪かったのかしら。ここは西の国の最西端、《風森の国》です。自分のことがわかりますか？」

女性の声は優しい。優真も自分を心配してくれているのがわかった。

「大丈夫です。俺は御剣優真。えーと名前が優真です。ところで風森なんて地名聞いたことないんですけど」

「まさか。あなたの出身は何処？　黒髪だから東国の方だと思いますけど」

「？」

優真は自分の国と出身地を彼女に伝える。その地名は王女として教育を受けている彼女でさえ知らない地名だった。

「……今日がいつだかわかりますか？」

「再成紀１０１１年の４月。高校の入学式の日」

今日は再生紀１０１１年の３月。学園都市では今の時期春期休暇に入る頃だろう。

微妙に違う。

「もしかして……これに見覚えは？」

「何です？　それ」

優真に渡されたのは１枚の紙切れ。複雑な文様が描かれている。

「それは先日とある方から頂いたものです。《召喚の札》と言っていましたが」

「……うそだあ」

優真は紙を裏返すとそこに書かれてる文字を見てしまった。

『今日のタイムサービスは午後４時から』

知っている文字で書かれた広告。チラシの裏を信じる人はいないと思う。

＋＋＋

風森の国は西国に数えられる小国の１つ。

《中央中立地帯》からみて西方はかつて栄華を極めた《西の大帝国》の流れを組む国が多い。加えて４００年前に起きた災厄の大破壊によって一度は滅び広大な砂漠地帯となった地域である。

西国は過酷な環境の下で逞しく生きる砂漠の民の集落とその王国、大帝国の遺産を引き継いで復興した高い技術力を誇る国々で成り立つ。

西国は砂漠と技術の国。その中で風森は異質の国だった。

西国で災厄を免れた国は他にもあるが風森は大きな森を持ち自然に恵まれている。

緑に囲まれ風に愛された国。

噂では精霊に護られた国ともいわれる。

十十十

その日の夕方。優真は沈む夕日を眺めていた。

あのあと彼女の部屋から追い出されはしたが捕まることも閉じ込められもしなかった。

そのまま放置されたのでぼんやりとすごす。1日を無為にした気がする。

「あれは防風林、じゃないよな。森だし」

窓からあかく照らされる森の木々とその先の砂漠地帯をただ眺めていた。

本当に知らない風景。優真の知らない世界。

「不思議ですよね」

呆けたままの優真に声をかけたのはあのときの女性。

「あ。えーと、エイ…ルシア、様？」

「言いづらいならば好きなように呼んでもいいですよ」

「でも王女様だって」

「この国は王制ではありません。建前ですので」

エイルシア・ウインディ。風森の国の王女はかしこまる必要はないですよ、と優しく微笑む。

「それじゃあシアさん。そんな感じで」

「何ですかそれ」

優真から見たエイルシアは年上のお姉さんそのまま。今もワンピースのシンプルなドレスにカーディガンといったもの。

寝起きの彼女の姿は忘れたことにしている。

「タテマエって？」

「ウインディ家は国の象徴。そしてこの国にとって大事な役目を果たす一族なのです」

「ふーん。やっぱり不敬罪とかにならない？」

「大丈夫ですよ」

ならいいや、と優真は笑う。

「……落ち着いていますね。あなたにすれば本当は異常な事態ですのに」

「こんなこともあるって本に書いてあった。こっちじゃ前例もあるらしいし実際に起きたんだからしょうがない」

ちなみに優真が読んだ本のタイトルは『世界の危機百選』。あらゆる状況における危険について書かれたこの本は兄の薦めで読んでいる。

シリーズもので他にも『あなたのまちの危機百選』、『はじめてのおつかい危機百選』などがある。

それからエイルシアと一緒になって夕焼け空を眺める。

何もしない日なんていつ振りだろうと優真は思う。

ゆっくりと流れる時間。先にエイルシアが口を開いた。

「太陽を見ていると不思議に思います。昼間はあんなに小さな光なのにこの時間になるとこんなにもあかくて大きい」

優真はそうですね、と同意する。今日1日空を眺めた感想だった。

「月もそう。夜空に輝くいちばん大きな『星』。あの丸い星は1日に少しづつ形を損なっていって最後に消えてしまう」

「……」

「でもまた少しづつ光を取り戻して月はまた『生まれ変わる』のです。月は再生の象徴なんですよ」

「へえ、そうか。……はは」

思わず笑ってしまった優真。エイルシアはその反応を不思議に思う。

「何かありました?」

「いや、シアさんの話を聞いたらここはほんとうに別世界なんだなと思って。そうか。月は星で生まれるんだ。あははは」

「ユーマさん、そんなにおかしいのですか?」

余りにも笑うのでエイルシアは馬鹿にされたようでおもしろくない。子供っぽく頬が膨れる。

「ではあなたの知ってる月とは一体何なのですか？」
「え？　うーん。シアさんは信じてくれるかな？　あのね、月にはね」

優真はエイルシアに話した。これは彼の世界のはじまり。

おとぎばなし。

「月には天使がいるんだ」

＋＋＋

月には天使がいて
地底から悪魔がやってきた
人のいる大地で皆は出会う
再成したこの世界で

＋＋＋

日は沈み、空に星が瞬く。

優真とエイルシアは多くの話をした。お互いの世界の話を。

「信じてくれましたか？」

「シアさんこそ」

優真は自分が召喚されたなんて本当は信じていない。だから確かめるように彼女と話をした。

でも彼女が語る世界は知らない世界だ。想像で魔法を再現できる技術なんて知らない。

エイルシアはユーマが召喚されたなんて本当は信じていない。だから確かめるように彼と話をした。

そもそもこの世界における《召喚》は、１０年以上も研究されて未だ再現されていない術式なのだ。それが紙切れ１枚で喚べるなんて信じられない。

でも少年の語る世界は違うものだ。月や地底に人の住む世界があるというだけで違う。

言葉が通じたからわかった世界の違い。対話することで理解でき

たこと。

――この人は嘘をついていない

それは再生された世界の人と再成した世界の人の出会い

「こんなにおしゃべりしたのも久しぶり。……もう夜ね。食事にしましょう。何か作ります」
「そういや今日は何も食べてないや。ぼんやりしてたもんな」

そこまで考えて優真は彼女以外に誰も会っていないことに気付く。
エイルシアに訊ねた。

「シアさんが作るの？」
「ええ。こう見えても得意なんですよ」
「いや、ここってお城でしょ？　料理人とかいそうなんだけど」
「……」
「それにシアさん以外の人に誰も会わなかったよ俺。ここには誰もいないの？」

それはないと思う。優真に大きさは測りかねるがここは城だ。エイルシア1人で住むような規模じゃない。

すぐに気付かれることとわかっていたとはいえ、悲しい表情を見せるエイルシア。

「みんな風邪なのです」

「風邪？」

何も知らない異界の少年にエイルシアは１つ教えた。

「この国は《病魔》に呪われています」

＋＋＋

１－０２　風邪守の巫女（前書き）

ウインディ家の役目。エイルシアの務め。

１－０２　風邪守の巫女

＋＋＋

少しだけむかしのはなし

「準備はいいか、優真」
「はい！」

優真は『あの日』から兄に自分を鍛えてもらう事にした。

兄の名は古葉大和（こば・やまと）。梟の相棒の少年。

１５歳とは思えない長身でその引き締まったその身体は、未完成ではあっても闘うために存在した。

顔立ちは整っており美系。黒髪の長髪を１つに結びまるで尻尾のようだ。

今日は稽古の日。

いつもは走り込みや筋力トレーニングのような基礎ばかりの優真だが、この日は大和が直々に相手をしてくれる。

「いいか？　俺が師匠から教わったのはこれだけだ。だからお前に

もこれだけしか教えることができない。優真、人はどうやったら死ぬ？」

「……」

ましろのことを思い出して優真はちょっぴりへこむ。

「……悪い。あのな、人は戦闘ならどんな時も『一撃で死ぬ』。致命傷ってやつだ」

「……即死？」

「トドメの、ってやつだ。その『最後の一撃』を乗り切ることができたらその先に活路が生まれる。そこに一発逆転の一撃を放つ。これが俺の《必殺》だ」

カウンター？　と優真。

「どうやるの？」

「俺の拳を見ろ。見えたら踏み込んで拳が当たる前に殴れ。今日から毎日１本、これをやるぞ」

大和の構えを真似てみる。

優真は無茶苦茶だと思いながら、それでも兄を信じた。

（拳を見る、拳を見る……うえっ！？）

見えなかった。殴られてギャグのように錐揉みして吹き飛ぶ。

優真はゴロゴロと転がり最後は近くの木にぶつかって気絶した。

「今日はここまで。まずは『見る』ことからだな」
「……」
優真に聞こえはしなかった。

その日、大和は優花の前で正座。優真の稽古は週3回となる。

＋＋＋

優真は目を閉じいつもの構えをとる。
自然体。ありのままを見て、受け入れ、ただ一歩動くためだけの型。

イメージするのは拳。
何度も体験した迫りくる拳を想像して身体を動かす。

殴られる直前を、あまりの速さに見えない拳を肌で感じた優真。
身体は反応するがいつものように殴り飛ばされる幻を見て……

「うわっ！？」
その強烈なイメージを『再現』してひっくり返った。

「……あれ？」

＋＋＋

風邪守の巫女

＋＋＋

早朝。異世界で城の中にいようと優真の日課は変わらない。ただし部屋の中でやるとなるとトレーニングメニューが限られる。

城を出て森の中を走ることを考えたが……迷いそうなのでやめた。

「うーん。今日のイメージトレーニングはなんか違う。いつもと場所が違うからかな」

まさか妄想でひっくり返るとは思わなかった。

「外に出ないとなると……筋トレは朝からしたくないし勉強するにも本がない。何より」

ぐぅ

「……うん。腹ごしらえも訓練の内と兄ちゃんは言っていたな」

とにかく部屋を出ることにした。

なぜかこそこそと。

＋＋＋

それから優真は朝食をエイルシアと2人で食べた。

「……複雑です」

「え？　おいしくなかった？　これ姉さん直伝なんだけど」

昨晩の夕食はエイルシアが用意した。味付けされた肉を挟んだパンと野菜のスープ。

味の方はおいしかったけど物足りなかった育ち盛りの少年が1人。優真は我慢できなくなって早朝に食糧庫を探し、漁りだした。

なかなか堂々とした乞食っぷりは兄譲り。案の定エイルシアに見つかった。

「ほ、ほら、泊めてもらったからお礼に朝ご飯でも作ろうと思って……」

「その食べかけのソーセージは何ですか？」

「……ごめんなさい」

というわけで本当に優真が朝食を作ることになった。

火の扱い方が分からなかったがエイルシアに優真が知らない調理器具の扱い方と調味料を教わりながら自分で味を見て調整する。

できた料理がこれ。

親子丼

……何故朝から丼ものなのかは優真しか知らない。

「いえ、初めて食べるものですし美味しいですけど何か違うような」

「そう？　兄ちゃんは足りねえ、っておかわりするんだけどな。あと無難な食材だったし。あ、サラダもあるよ」

サラダのドレッシングも姉直伝だ。レモンのような果実の酸味に黒胡椒を効かせてみた。

ついでにマヨネーズも自分で作ってみる。

「やっぱり複雑です。……私よりもユーマさんの方がおいしい」

「え、なんか言った？　シアさん」

何でもありません、と答えてサラダを口にするエイルシア。彼女のプライドの問題だった。

「それにしても《加熱調理器》の扱い方を覚えるのは早かったですね。この卵の火加減ははじめてとは思えません」

「シアさんが教えてくれたからだよ。動力源は違うけど俺の世界にも似たようなものあるから」

そう言って《加熱調理器》を見る優真。優真の世界では通称ＩＨと呼ばれていたものに似ている。

「そうなのですか？　西国の新技術ですよこれ」

「へぇ。でもイメージで加熱できるなら火加減の調整をするより出来上がりをイメージした方が効率がいいよこれ」

加熱調理器のプレートには《加熱》の補助術式が付与されており

イメージするだけで誰でも十分な火力を得ることができる。

「イマジン・モジュールだっけ。《加熱》のイメージを補助してくれるならわざわざ食材を加熱することを考えなくてもよさそうだし」

この時エイルシアはゲンソウ術を知らないはずの少年の発想に驚いた。

「だからほかほかのご飯とか卵に染み込むアツアツのダシとか、あと肉をほおばった時のじゅわあっとした感じなんか考えていたんだ」

「《補強》ですね。《加熱》の術式に料理のできばえのイメージを付与する。……それなら私だって」

「シアさん？」

何でもありません、と答えてスプーンで親子丼を口にするエイルシア。

今晩の夕食で試そうと決意した。

「ごちそうさまでした。ユーマさん、今日は1日をどう過ごすのですか？」

「どうしよう？　『還る方法』があってもしばらくここにいるしかないんだけど」

実は優真が元の世界に帰る手段はあった。《送還》の術式である。

《召喚》と対をなすこの術式は世界中で研究されており、『異世界のモノ』を認識する必要がなく『還る場所』を思い描くことができれば発動できることがわかっている。

ゲンソウ術で世界移動を再現することはほぼ不可能といえるが《魔法》ならば可能だ。問題は《召喚》と同様に必要になる膨大な魔力の確保。

エイルシアはその当てがあることを優真に伝えた。だけど準備のためにしばらく待ってほしいという話だ。

居候状態の優真。することがない。

「そういえばシアさんは何してるの？」

エイルシアは昨日、不審者でもおかしくないはずの優真を1人残して城を空けていた。

「巫女のお勤めです」

＋＋＋

優真はエイルシアに付いていくことにした。はじめて城の外に出る。

「今日は国の南から廻ろうと思います」

エイルシアは風森の国を巡回して国の人の『治療』をおこなっている。

風森の国は1万5千人程の都市だ。《転移門》を利用すれば2、3日で国を1周できるとエイルシアは説明する。

《門》をくぐると別の町に着いたことに優真は驚いた。

町は閑散としていた。様子が気になったが置いていかれてしまう。先を行くエイルシアを優真は追いかける。

目的地は集合広場のある施設。そこに患者はいるらしい。

「おはようございます」

「おお、姫様。いつもありがとうございます」

出迎えたのは初老の男性。この施設の責任者らしい。

男はこの国では珍しい黒髪の少年を見て訊ねた。

「この方は？」

「助手です。人手が必要な時もありますから。城から連れてきました」

「……そうですか。ではこちらへ」

向かったのは中央ホール。そこにはこどもから老人まで沢山の患者がいた。

熱っぽく顔の赤い人たち。咳のひどい人たち。優真には風邪の症状としか思えない。

「シアさん？」

「そう。みんな風邪です。症状は軽い人ばかりですが風邪は万病の

もと。倒れる人もいるし……亡くなってしまう人もいるんです」

エイルシアはそう言うと辛そうに目を伏せる。

「じゃあこれは薬なの？」

手に持つバスケットを見せる優真。

「それはお昼ごはんです。ユーマさんのもありますよ。この風邪は薬が効かないから」

インフルエンザ？　と優真は考えたが根本的に違うものらしい。

「これは呪いの類。だから私が……風よ！」

力強く声を上げるエイルシア。彼女の身体から力が溢れて両手に魔力が集まる。

「風よ。自由なる運び手よ。皆に運ぶはいのちのちから。吹けよ、《癒しの風》よ」

ホール内を吹き抜ける《癒しの風》。さわやかな風の力が患者達に少しづつだが活力を与える。

「これがゲンソウ術？」

「いいえ。《風邪守の巫女》は生まれながらに魔力を持ち風魔法を扱う事ができるのです。《魔法使い》なんですよ、私」

魔法に驚く優真に微笑むエイルシア。

それを見た初老の男性が驚いていた。

「これでここの人たちはしばらく大丈夫です。私は次の町に参ります」

「ありがとうございます。……お気をつけて」

エイルシアは毅然とした態度であとを去る。それを男は悲愴な気持ちで見送った。

「……姫様をお願いします」

「……」

頭を下げる彼の気持ちを優真は理解できなかった。

＋＋＋

町の広場を数件巡ると次の町へ。これを何度か繰り返すと鐘の音が2人に正午を伝える。

「このあたりでお昼にしましょう。そこのベンチでいいかしら？……ユーマさん？」

「ん？　ああ。それでいいよ」

優真は正直ほっとした。今の彼女は彼が知っている『シアさん』だった。

巡回中の彼女に笑顔はない。患者達もみんなエイルシアに感謝の言葉を述べても悲しい顔を彼女に見せるのだった。

どういうことだろう？　優真は気になる。

「どうしましたか？」
「いや。歩き過ぎておなか減ったんだ。お昼は何？」
「サンドイッチです。自信作ですよ。……これは負けません」
「？」

彼女の負けず嫌いは妹によく似ていた。

その自信作はまずボリュームが違う。これには優真も満足。

「ごちそうさまでした」
「はい。やっぱり男の子ですね。昨日くらいの量だと全く足りかったのではないですか？」
「まあね」

落ち着いたところで優真はこの国のことを訊ねてみた。

「この国の風邪は薬が効かないってどういう事？」
「……ただの風邪ではないのです。これは呪い」

ひと月ほど前からです。そう前置きしてエイルシアは説明する。

「この国に封じこめたモノの結界が弱くなっていることで呪力が漏れ出しているのです。国の中心にある城や街ほど被害が大きくて多くの人が療養を兼ねて避難しているのですが……この辺りまで風邪の症状がでているなんて」

「城に人がいないのも街が閑散とした感じがするのは多くの人が寝込んでいるから？」
「そうです。私は《癒しの風》で症状を和らげることができます。これは《風邪守の巫女》である私の役目」
１人でこんなことを続けていると聞いて驚く優真。
「封じこめたモノって？」
「魔人です。邪なる風の魔人。《病魔》ラヴニカ」
魔人は魔族と違う。神が人を創ったとするならば魔神が生み出したモノが魔人である。
精霊と同様に圧倒的な魔力を保有する魔力生命体。数こそ人に比べて少なかったが４００年前の戦争で発揮されたその戦闘力は１人で千人も万人もの人に匹敵するといわれている。
「この魔人を抑え込むのも巫女である私の役目。その為にお母様は……」
「おかあさん？」
「……いつかユーマさんにも会わせますね。素敵な人だったんです。それよりも……」
沈む気持ちを切り替えてエイルシアは優真に笑顔を向ける。
「午後の巡回がおわったらお買い物を手伝ってください。食事が１人分増えた上に今日は朝から大きなネズミさんが食糧庫を漁っていたので食材が足りないのです」
「……ごめんなさい」

冗談ですよとエイルシアは笑い、優真もばつが悪かったが誤魔化すように笑った。

素敵なひとだった。母のことを過去形で語るエイルシア。

優真はあの初老の男性やそのあとの巡回で出会った患者たちの悲しい顔が忘れられなかった。

ふたりだけのささやかな日常。

優真は彼女の宿命を知らないまま数日を過ごす。

＋＋＋

１―０３　風邪守の宿命（前書き）

ウインディ家の宿命。エイルシアの覚悟。

１－０３　風邪守の宿命

＋＋＋

優真が風森の城に居候して数日。

相変わらず国中で風邪が流行り１人治療にあたるエイルシアは１日に巡回する町の数を増やしていた。

患者の中には《癒しの風》ではどうにもならない重症者もいた。そんな時は高位の術式、《浄化の風》を使うことで何とか凌ぐ。

彼女は誰１人も死なせはしなかった。

国の巡回に優真はエイルシアについて行くが治療に関しては何もできない。

できることは昼食の弁当作りと買い物の荷物持ちくらい。散々話し合い、強く主張してエイルシアから勝ち取った優真の権利でもある。

「シアさん忙しくて大変でしょ？　洗濯は流石にマズイけど掃除と食事の準備くらい俺がやるよ」

「いいえ。掃除はともかく食事は私が。……ユーマさんに作ってもらうといろいろと複雑なんです」

「？　手伝いくらいやってもいい？」

「一緒にですか？　……まぁ、それなら」

優真は《送還》のことも気にはなっていたが、エイルシアが忙しいことはよくわかっていたので訊ねることができないでいた。

それでも城の中ではエイルシアと2人静かで穏やかな日々が続く。

「お。シアさん、このスープのベースは何？」
「レノンとバブリイッヂです。美味しいですか？」
「……うん。よくわかんないや」

それは仮初の平穏。

＋＋＋
風邪守の宿命
＋＋＋

国の巡回が丁度1周した次の日。エイルシアは城の中で人を捜していた。

「ユーマさん。このあたりで誰か見かけませんでしたか？」
「ん？　この城ってまだ誰かいたの？」

確か使用人などはみんな療養していると優真は聞いていた。実際

に城の中ではエイルシア以外人に出会ったことがない。

「ええ。またあの人は部屋から抜け出して……」

「俺も捜すの手伝うけど」

お願いします、とエイルシア。

＋＋＋

とりあえず中庭の方へ出る優真。城の配置、間取りはこの数日である程度理解していた。

中庭は世話をする人がいないせいか草が伸び荒れ放題となっている。

「シアさん1人じゃ大変だろうな。あとで草むしりくらいするか。……ん？」

中庭に備えられた椅子とテーブル。そこに男が1人テーブルに伏せている。

「ちょっとおじさん、大丈夫ですか？」

「……うっ、ああ。体調が悪くてね。君は誰だい？　黒髪の使用人は見たこともないが」

優真は今召使いの服を借りている。略式の制服だが生地の素材はいいものが使われていた。

「優真といいます。最近この国にきて困っていたところをシアさん……ああ、エイルシア様に助けてもらったのです」
「……そうか。君から見てあの子は元気かい？　あの子は…今も笑ってくれているかい？」
「……はい」
優真は昨晩の夕食の話をした。
エイルシアは昨日食材を買い込み過ぎた。それをはりきって全部使い料理をしたものだから食卓に大量の皿が並ぶ。
その量を前に呆然とする優真。失敗しました、と照れるエイルシアがおかしくて2人で笑った。
「……ありがとう。1人になったあの子を心配していたんだ。君がいてくれてよかった」
「そんな。それよりも大丈夫なんですか？」
男の顔色は見るからに悪い。
「例の風邪なんでしょう？　シアさんを呼んできます」
男は大丈夫だと優真を制した。
「これでも《騎士》なんだ。やわな鍛え方はしていないよ」
男はエイルシアとは違う金髪で同じ翠眼。腰には長剣を提げていた。
柔和な雰囲気を持つ男に剣は不似合いだと優真は感じる。

「庭の様子が気になっただけなんだ。少し休んだことだし部屋に戻るとしよう。エイルシアには君から伝えてくれ」

男が弱ったところを見せずあまりにも堂々と立ち去るので優真はその場で見送った。

「父親……あの人が王か」

最後に見せた男の笑顔。その目元が彼女に似ていた。だからなんとなくそう思った。

＋＋＋

１０年前。

母との別れを前にエイルシアは何も言えずにいた。

「お母様……」

「大丈夫よ、シア」

エイリア・ウインディ。風森の王妃にして当時の《風邪守の巫女》はこの日《封印の儀》を行うことにした。

国中で不治の風邪が流行りだしたからだ。ならばこれを抑えることができるのは巫女である彼女しかいない。

「リィちゃんは眠ったのね。……こんなに目を腫らして」

エイルシアの妹は泣き疲れて眠ってしまった。

目覚めたときに母がいないことを知ったらまた泣きだすかもしれない。

「大丈夫。いつもお父様みたいになると言って《守護の短剣》を振り回してるんです。私もいます。だからきっと」

「シア」

エイリアは気丈な娘を抱きしめる。

「辛いのね。シアもまだ小さいのに。……巫女の役目を継ぐためとはいえあなたには何もしてあげられなかったわね」

「ち、違います。私はもう12です。《浄化の風》だって扱う事ができます。……辛いのはお母様の方でしょう？」

幼いシアは母の顔を見ることができない。

泣きそうだから。最後なのにと思ってもどうしても……見ることができない。

「違うわ。それは違うのよ、シア。私は幸せ。……私の宿命を知ってもあの人は傍にいてくれた。世界は私に2人の娘を授けてくれた。この日まであなたたちの成長を見届けることができた。だからね、シア」

エイリアは娘の瞳を正面から覗く。涙目のシアにエイリアはどうしても伝えたいことがあった。

「エイルシア。あなたも幸せになるのよ。巫女だからといってすべてを1人で背負わないで」

それが運命を引き継ぐ娘への母の願い。

「今だってあなたにはあの人がいる。エイリークもよ。きっとあなたを助けてくれる人はこれからたくさん現れてくれるわ」

「お母様っ！」

時間が来た。別れの時。

「そろそろね。行ってくるわ。あなた達の未来をきっと、守り続けるから……」

聖堂の、女神像の前に立つエイリア。

《風邪守の巫女》は魔力を集め、封印を解く。

現れる魔人。

「……」

「久しぶりですね」

「あれが……魔人」

この先のことを幼いシアはしっかりと覚えている。

「わたしを……助けてくれる人がいるなら……どうしてお母様を…
…お母様をどうしてたすけてくれないのよ！」

彼女の悲痛の叫びは女神像しか知らない。

＋＋＋

エイルシアは城の地下にある聖堂にいた。

聖堂にあるのは向き合う2体の女神像。その1体にエイルシアは話しかける。

「もう少し待ってください。この日々をあともう少しだけ……」
「シアさん？」
「きゃっ」

声をかけられエイルシアは驚いた。

優真がエイルシアを探して聖堂までやってきたのだ。優真は城の中で行ったことがないのは地下だけだった。

「探したよ。どうしたの？」
「突然でしたから驚いただけです。ユーマさんこそどうしましたか？」

「中庭でおじさんを見つけたよ。部屋に戻るからって言ってたのを伝えにきたんだ」
「中庭……そうですか。ありがとうございます」
優真はエイルシアの様子がなにか変だと思いながら、彼女が見ていた2体の女神像を見た。
「こっちの像はなんかシアさんに似てるね。優しそうだ」
「そうですか？　……そうだとうれしいですね」
前回の《封印の儀》からもう10年。
エイルシアにとって《彼女》に似てきたという事実は嬉しくもあり、長い月日が経ってしまったことを実感して悲しくもあった。
「まだユーマさんには紹介していませんでした」
「え？」
そう言ってエイルシアは女神像に優しく触れ、優真に《彼女》を紹介する。
「彼女がエイリア・ウインディ。私のお母様です」
＋＋＋
エイルシアは優真に話した。

魔人の封印は定期的におこなわなければならないこと。

その周期は数十年の間隔だったがその周期は短くなっていき、とうとう前回の封印から１０年でその封印の結界が解かれようとしていること。

そして、封印に必要なのは《風邪守の巫女》、そのすべてだということ。

「４００年前の勇者の仲間だった《風使い》は命をかけて魔人を封印しました。ウインディ家はその風使いの子孫なのです」

４００年も昔から引き継がれてきた魔力と封印の術式。その後継者であるエイルシア。

「今では魔人の封印はもう私にしかできません」

「……」

「でもこれ以上の封印はきっと無理です。だから私は……今夜、魔人を倒します」

「――！！　そんなこと」

エイルシアは優真を安心させるように微笑む。

「大丈夫です。切り札はあります。それに私は魔法使い。これでも強いんですよ？」

「シアさん？」

命を懸けるならば封印ではなく根源である魔人を倒す。それがエイルシアの覚悟。

「魔人を倒せば……寿命が尽きる前の今ならお母様をきっと解放できます。それに魔人の魔力を確保できれば《送還》の術式だって安定して使える。失敗しても私が再封印すれば……」
「シアさん！」
彼女の自分に言い聞かせるような言葉は遮られた。戸惑うエイルシア。
「え？」
「違う、違うんだよシアさん。どうして……」
無理をしている。優真にはその笑顔が張り付いたものにしか見えなかった。
「どうしてシアさん１人で戦おうとするの？　魔人を封印できるのがシアさんだけなのはわかった。でも戦うなら話は別でしょ？」
優真は悔やんだ。今日初めて彼女の抱えていたことに気付いたから。
誰も気付かなかったのか？
「どうして助けを求めないの？　それに俺を元の世界に還すことまで考えてくれる……無茶だよ。無理しすぎだよ」
「……」
「心配なんだ。そこまで背負い込む必要なんてないはずだ。だったら、だったら俺が……」

「無理ですよ」

冷たい声。

「ゲンソウの力を知らない、魔力も持たない子供にできることはありません」

「――っ！」

優真を見る彼女の瞳も冷たい。

「それにね、ユーマさん。みんな諦めているんですよ」

「なにを……」

「国の人たちを見たでしょう？　みんなが私を憐れんでいる。国を救うために生贄になる私を。こんなことは４００年も昔から繰り返してるんです」

違う！　そう優真は叫びたかった。

（違うよシアさん。あの町の人は俺にお願いします、って頼んだんだ。おじさんだってシアさんのことを気にかけてる）

優真は悔やんだ。今になって国の人の悲しみがわかったから。

味わったことのあるこの痛みに気付けなかった自分が情けなかった。

（みんなあなたのことが大好きなんだ。でも１人じゃ何もできなくて、シアさんの負担になることを知っていても何もしてあげられなくて……）

無力というものを優真は痛いくらいに知っている。

優真はましろに何もしてあげられなかった。

だから優真は、

「シアさん！」

「準備があるのでもう行きます。……もしも私がいなくなったら北の《銀雹の国》を訪ねてください。彼の国の王ならばきっと」

「シアさん……」

「さようなら」

立ち去るエイルシア。振り返りはしなかった。

「ごめんなさい……」

エイルシアは何かをこらえるように拳を強く握りしめる。

強く、強く。

＋＋＋

取り残された優真。

魔人とは今夜戦うとエイルシアは言っていたので再び聖堂に戻ってくるはずだ。

「……大和兄ちゃん」

エイルシアに何も言えなかった優真は先程見た彼女を思い出す。

「シアさんの目、光輝さんにそっくりだったよ」

金色と翠。色こそ違うがその光の強さを優真は知っている。

自ら背負う使命と覚悟

救いを求めず泣くことを辞めた瞳は暗くも強い光を放つ

だから

優真を突き離すほど彼女はやさしかった

何の力もない優真は問いかける。兄ならばきっと、必ず彼女を救ってくれるのに。

ここには《魔女》はいない。彼女の《使い魔》も。

『この世界』には優真しかいないのに。

「兄ちゃん、俺は」

どうすればいい？

＋＋＋

１―０４　病魔の魔人（前書き）

その名はラヴニカ・コルデイク

１－０４　病魔の魔人

＋＋＋

彼女は突然現れた少年とすごした日々を思う。

病床の父と2人だけの城の中で久しぶりに誰かとお話をした。

知らない世界の話は昔、母がおとぎ話をきかせてくれた時のことを思い出した。

久しぶりに誰かと食事をした。

あの時の彼の顔は今思うと妹が量が物足りなくて不満そうにしている時とそっくりだった。

誰かに食事を作ってもらうことも久しぶりだ。

量はともかく美味しかった。男の子に負けて悔しく思うのも久しぶりだ。

誰かと買い物するなんて初めてだ。

本当の国はもっとにぎやかなのにと残念に思うが、でも静かな街を2人で歩くことも楽しかった。

荷物持ちがいるからと買い込み過ぎた食材。その日の夕食は誰かに腕を振るうことが楽しくてつい作りすぎてしまった。

誰かと笑いあうことだって久しぶりだったのだ。

だから気付く。

――私は寂しかった

――この日々をもう少しだけ

だから願った。

「でも、これでいいのです」

――どうしてシアさん1人で戦おうとするんだ？　……どうして助けを求めないの？

それは彼女がいつもひとりだったから。

――俺を元の世界に還すことまで考えてくれる……無茶だよ。無理しすぎだよ

それは彼女がしてあげたかったことだから。

――心配なんだ。そこまで背負い込む必要なんてないはずだ。だったら、だったら俺が……

だから彼女は気付くことができた。少年は優しいから。

「巻き込みたくないのです。賭けるのは私の命だけでいい」

賭けるのはエイルシアのすべて。

勝てば不治の病からの国の救済、母の解放とユーマの《送還》用の魔力の確保。きっと願う未来が手に入る。

負けても魔人は再封印するつもりだ。代償はエイルシアだけ。

「人の運命は人が選びとる……でしたね。ミコト様」

それはユーマと出会う前に助けた女性の言葉。

その先に続く言葉をエイルシアは忘れてしまった。

「だったら、私は」

聖堂の、女神像の前に立つエイルシア。

《風邪守の巫女》は魔力を集め、魔人の封印を解く。

向き合う女神像の１体、母の像とは別の女神像が崩れ、現れる魔人。

「久しぶりですね。ラヴニカ・コルデイク」

再会の言葉は１０年前の母と同じものだった。

＋＋＋

病魔の魔人

＋＋＋

ラヴニカ・コルデイク。

《病魔》の魔人。邪なる風。

魔人の正体は腰まで届く紫の髪と同じ色の瞳。肌を露わにした赤いドレスを纏う妖艶な女性だった。

「……小娘よ。性懲りもなくまた封印か？　我はつまらんぞ」
「ご心配なく。今夜は私のお相手をお願いします。……きっとこれが最後です」

鼻をならす魔人。

「威勢のよい。今までの巫女の中でも若いのう。その《騎士》もまだ子供ではないか」
「……？　ええっ！？」

うしろを振り向いてエイルシアは驚く。

この場にはもう1人、黒髪の少年がいた。

「ユーマさん！？　どうして」
「聖堂の扉、開いていたよ」

本当は隠れていた優真。エイルシアは1度突き放したっきりで優真が現れる可能性を失念していた。

「《騎士》って何？　おじさんみたいな人？」
「い、今は関係ありません！」

赤くなってユーマに向けて叫ぶエイルシア。

《騎士》の話に彼女は動転。優真を魔人との戦いに巻き込んでしまった後悔が簡単に吹き飛ぶ。

姫である者にとって《騎士》の存在は意味合いが異なり特別なものになる。

忠誠を誓い、その身を守り、その心を護り抜く姫君の守護者。

その最愛の理解者である騎士は姫君の伴侶となることが多い。

「そ、そのっ、ちがうんですよ。……歳だって離れているのに……」

「？」

エイルシアの独り言が続く。

「……もうよいか？　我はただ自由になりたいだけなのじゃが？」

魔人に呆れられた。

「はっ。ユーマさん、離れて！　ってユーマさん？」

優真は言われずとも彼女の後方に下がっている。

聖堂の、出口ぎりぎりまで。

「いや、俺邪魔になりそうだし」

「……いきます」

何とも締まらないままに魔人との対決がはじまった。

＋＋＋

「ならば遊んでもらおうかのう」

ラヴニカは微動だにしない。エイルシアは容赦なく魔法を繰り出した。

「風弾、風刃！」

２種類の術式を同時展開して連射。しかし魔人には衝撃も斬撃も効いた様子がない。

「児戯じゃな。我に風属性は効かぬ」

「それならこれはどうです？」

エイルシアは風弾で壁を砕き、瓦礫を魔法で浮かべて前方に複雑な紋様の円陣を描く。

「《加速円陣》展開、撃てぇ―っ！！」

エイルシアは浮かべた瓦礫を魔法陣を通過させて次々と撃ち出した。

魔法陣を通過した瓦礫は飛躍的に加速して魔人を襲う。

「《加速》による質量攻撃か」

これには風をぶつけて瓦礫を防ぐラヴニカ。

ラヴニカは前に動き反撃にでた。エイルシアに手刀を見舞うが、対する彼女は魔人の攻撃をただ見つめ……

「はあっ！」

直前で《爆風壁》を発動させた。

展開した空気の膜に手刀が触れると同時に爆発。その反動で距離をとる。

「どうです？」

「……小賢しいな」

魔人にとって小手調べにもならない戦闘。

「何を考えておる。我の死角をこそこそと動きまわりおって」

「え？」

ラヴニカはエイルシアを相手にしなかった。

「その隠した右腕は何を狙っておる？」

「ユーマさん？」

「……気付いてたか。さすが」

優真は何故か出口の反対側、ラヴニカの背面にいた。右手はポケットに突っこんだまま。

彼女たちの戦闘中、優真はラヴニカの側面、背後を取るように動きまわっていた。

何かを仕掛ける素振りを見せて彼女の注意を分散させていたのだ。

ラヴニカが前に出たのも優真の様子を見る為だった。

「もう1度聞こう。剣も魔力も持たぬただの小僧、何を考えておる」

「お話があります」

優真はエイルシアの傍に立ちラヴニカに話しかける。

その間、魔人が仕掛けることはなかった。

優真は魔人の目を見る。何かを確認するように。

そして隠していた右手を魔人に見せた。手には何も持ってない。

はったりだった。今の優真に戦う術はないから。

それでも自分にできることをしよう、それが優真が決めた自分の在り方でありここにいる理由だった。

そして優真にチャンスが来た。彼女と話す機会が。

「ラヴニカさん、でしたね？　お願いします、戦いをやめて下さい。そして国の人の呪いを解いてシアさんのお母さんを解放してください」

「ほう？」
「ゆ、ユーマさん！？」
頭を下げる優真に驚くのはエイルシアとラヴニカ。
「ラヴニカさん言いましたよね？　自由になりたいって。だからその代わりにです。お願いします」
「……それで我の気が済むと思っておるのか？」
「いいえ。でも、それでもです」
ラヴニカは少年の目を見る。優真はその視線をまっすぐに受け止めた。
優真に恐れはない。
魔人の紫の瞳もまた、優真の知るものだったから。
「……我は我が神の命でヒトの国を襲った」
先に口を開いたのはラヴニカだった。
「小賢しいヒトは我に敵わずとも命を捨て我を封印した。時が過ぎ、次に目を覚ました時、我が神はもうこの世界にいなかった」
魔神は４００年前に倒された。ラヴニカがそれを知ったのはそれから１００年後の話。
「我はもう神の命を聞く必要がなかったのじゃ。しかし国の奴らは目覚めたばかりの我を再び封印した。……話を聞くこともせず」
「問答無用に？　どうして？」

優真の問いにラヴニカは簡潔に答えた。

「流行病は我のせいと言っておったな」

「なっ!?　あなたの呪いのせいではないと、違うというのですか!?」

当時は違う、とラヴニカ。

「理不尽じゃろう?　それからじゃよ。この扱いに我慢できず我が封印に全力で抵抗しておるのは。封印から僅かに漏れ出す《病魔》の魔力。これが呪いの正体じゃろう」

「……」

エイルシアは魔人の話に驚かされる。今まで知らなかった国が呪われる理由。

知ろうともしなかった真実。

「国を襲う意思がなくとも自由を奪われ続けた我。国の為と命を差し出す巫女」

魔人は言う。

目の前の巫女を憐れむように。

「４００年続いた封印は互いに無駄なことだった。そう思わぬか?」

「……」

「のう、どうしてこうなったのじゃろうな?」

自分に、そして彼女に向けた言葉には憂いがあった。

「……違う。どうして……？」

エイルシアは答えることができない。想像していた魔人と彼女は余りにも違う。

握りしめた拳は何かを抑えるようにただ震えていた。

「怖かったんですよ。きっと」

優真はラヴニカの呟きにそう答えた。

「小僧？」

「あなたは実際に国を襲ったのでしょう？　その恐怖は何百年も伝わるものだった。そうじゃないんですか？」

「……そうじゃな」

「封印はその恐怖を取り除くため。きっと恐怖に向き合えなかったんだ。……ラヴニカさん。もしかして人間と話をするのはじめてじゃないんですか？」

そのとおりだった。

ラヴニカが最後に会話をした、彼女にまともな相手をしたのは４００年前に対峙した《風使い》以来。

「ああそうじゃ。こんな風に話をするのは、話を聞いてもらったのは初めてじゃ。……悪く、ないのう」

「ラヴニカさん……」

話ができてよかった。優真はそう思う。

封じられた長い時の間に何があったのだろうか？

「それにあなたも怖かったんじゃないんですか？」

「何？」

「命を捨ててまであなたを封じ続ける人間が」

「……」

ラヴニカの瞳から優真が見たものは諦めと疲れ。

国の平穏の為に囚われた魔人は救いを求めている。

「お互いが怖くて、何も知ろうとせずに恐怖から解放されたくて争いあう」

まだ間に合う。だから優真は自分にできることをしようと思う。

「こういうのやめませんか？」

エイルシアとラヴニカ。４００年も続く諍いから２人を解放するために。

「……お主の話はわかった。じゃがそこの巫女はどうじゃ？　そ奴は我を封印するどころか殺しにかかったが」

「わ、わたしは……」

「ごめんなさい」

優真は迷わずに頭を下げる。

「何故お前が謝る？」

「シアさんは必死だったんだ。国の人を救いたくて、お母さんを助けたくて」

今の優真にできるのは話すこと、伝えることだけ。

優真はエイルシアの想いと願いをラヴニカに理解してもらいたかった。

「無茶してるんだ。だから許して下さい。そしてお願いです。シアさんのお母さんを解放して下さい」

「ユーマさん……」

ラヴニカは戸惑うエイルシアと少年を交互に見る。

頭を下げたままの少年は魔人の目から見ても見事な《騎士》だった。

何の力はなくとも少年は巫女の想いを汲み取り、争いを避けて彼女の願いを叶えようとしている。

「……よかろう。我の望みは自由、それだけじゃ。我を解放するのならお主らとこれまでの仕打ちを許し、この国にも干渉はせん」

「本当ですか！？」

「ただし」

ラヴニカの話には続きがあった。

「先代の巫女の解放は無理じゃ。これは我の力ではない。封印はお前たちが勝手にやったこと。我に解呪はできぬ」
「そ、そんな……」
それを聞きエイルシアは打ちひしがれる。
「シアさん」
優真は母を救う手だてがなくなった彼女を心配するが、同時に別の事も考える。
（今は無理でも魔人であるラヴニカさんの力を借りることができれば……）
「どうする？　小僧」
「わかりました。だったらラヴニカさん、ひとつお願いを……」
「嘘よ」
エイルシアは呟きは思いのほか響いた。
「シアさん？」
「嘘ですよ……ユーマさん。これは嘘。終わるはずなんです」

気付くのが遅かった。

エイルシアの翠の瞳。覚悟をして暗くも強い光を放っていた目から光だけが失われている。

「すべては彼女を、魔人を倒しさえすれば」

「……呑まれたか。愚かな」

失望したのはラヴニカ。優真の制止は間に合わない。

「シアさん！！」

「きえなさい、魔人！！」

エイルシアが放つ瓦礫を核にした《風弾》。

それが無防備なラヴニカの額に直撃した。

＋＋＋

１－０５　狂気のラヴニカ（前書き）

エイルシアＶＳラヴニカ。そして優真は……

１－０５　狂気のラヴニカ

＋＋＋

失ったものは取り戻せる

そう信じたから彼女は……

「あなたさえ、あなたさえいなければ！」

エイルシアは『敵』に向けて次々と魔法を撃ちこんだ。

――みんなは、私は

《風弾》、《風刃》、《旋風砲》、《竜巻》、《真空波》……

「シアさん駄目だ！　どうして！？」

「私は、私は！！」

エイルシアは止まらない。

「《加速円陣》、展開っ！」

エイルシアが思うことはひとつだけ。

「集え集え。集いし風よ、刃を生み出せ」

完成するのは風属性武装術式、《風刃剣》。次にエイルシアが放つ魔術は彼女の奥義。

普通では不可能である『同属性の合成魔術』、それを可能にした魔法陣は失われたはずの《裏切りの魔女》の術式。

エイルシアの祖先が遺したこの魔術はこの日の為に身に付けた彼女の切り札のひとつ。

不可視の風の魔剣。その切っ先を魔人に向けた。

――私は、私の力でみんなの、私の幸せを

「貫け風刃剣。ソニック・ブレイカーーーっ!!!」

――私の望む未来を掴みとる!

《加速》の魔法陣を突破した超音速の《風刃剣》はラブニカの胸を貫き、音速の壁を破るその爆音が聖堂内のすべての音をかき消す。

なのに

「言ったであろう。風属性は効かぬと」

なぜか聞こえてくるラヴニカの声は冷ややかだった。

「それが答えだな巫女よ。我らは潰しあう運命だと」

「違う！」

優真の叫びは彼女には届かない。

「この程度じゃ魔人は倒せない。……そういうことですね」

「シアさん！」

確かにラヴニカに風魔法のダメージを受けた形跡はなかった。

いや、瓦礫をぶつけた最初の一撃は受けているようでラヴニカの額から血が流れている。

それはあかい色をしていた。

「よくわかった。人と魔人は相容れぬ……残念じゃな小僧」

「ラヴニカさん……」

ラヴニカはそれ以上少年と話すことも見ることもやめた。

「我は自由を求めただけじゃ」

そして昔と何の変わらぬ《風邪守の巫女》をみて彼女は憐れんだ。

「私はお母様を取り戻したかっただけです」

エイルシアは魔人を睨む。

「我のせいか？」

「あなたのせいです。最初からあなたさえいなければ」

「……そうか」

その時だ。ラヴニカの雰囲気が変わったのは。

「ならば憎しみには憎しみで向き合おう」

紫の瞳が紅く輝く。

「巫女よ、後悔するなよ。我は我の自由の為に『目覚めよう』！」

膨れ上がる魔人の魔力。エイルシアとの魔力の差が3倍以上になった。

「その魔力は！？」

「巫女よ。《音速破り》の術式は見事じゃった。まさか《裏切りの魔女》の術式の使い手がまだいようとはな」

ラヴニカは笑う。こみ上げてくる衝動を彼女は抑えられない。

「歴代の巫女の中では最高の戦闘力じゃろう。じゃが……」

「なっ！？」

「流れる血のせいかお前の魔力は少ない。歴代の、どの巫女よりもな」

ラヴニカの魔力はさらに上がる。エイルシアの魔力とはもう3桁以上違う。

「悪く思うな。もう歯止めがきかん。ははっ、はははははは」

ラヴニカを中心に風が荒れ狂う。

雷撃が、吹雪が、瘴気が、聖堂の壁や床を削り取る。

「巫女よ。これがお前の憎む《病魔》の魔人じゃ」

魔力を解放することで豹変するラヴニカ。

「さあ、どうするのじゃ？　ははははは、あはははははは」

魔人が目覚めた。

＋＋＋

狂気のラヴニカ

＋＋＋

優真は何もできなかった。ラヴニカを、エイルシアを止めることができなかった。

魔力には狂気が宿る

この時の優真が知らなかったことだ。

ラヴニカは抑え込んだ狂気を解放した。魔神から与えられた膨大な魔力（狂気）に従うからこそ魔人なのだ。

それを優真が知らないとしても、ラヴニカが力を抑え話をしてくれたのは人と和解する気持ちがあったのだろうと優真は思う。

問題はエイルシアだった。彼女は魔力に宿る狂気に囚われている。

彼女は巫女であって《魔術師》でなければほんとうの意味での《魔法使い》でもない。

身体に魔力を宿す者はその狂気を抑えることができなければ《魔法使い》になれない。エイルシアは魔力を実戦で扱うことは初めてだったのだ。狂気の存在を彼女は知らず、制御する術も彼女は知らなかった。

「私は負けない、負けられないのよ！！」

普段の彼女では見せることのない激情。国を思い、母を想う心はそこにはない。

魔人を倒す。その思いだけがエイルシアを動かす。

無謀だった。

「加速円陣…「無駄じゃ」」

「!?」

魔法陣はラヴニカによってかき消される。

「どうして!?」

「単純に魔力をぶつけただけじゃ」

力技だが膨大な魔力を誇る魔人だからこそできる。魔術戦で《魔法使い》が魔人に敵うはずがない。

「脆いのう、人の魔術は。呆気なく吹き飛ぶ。あはははははっ」

「だまりなさい!!」

その笑い声がエイルシアの神経を逆撫でする。

「魔人よ、これならどうです」

怒り任せにエイルシアは短剣を取り出す。銀の装飾の施された翠の鞘。

《守護の短剣》。これがエイルシアの最後の切り札。

「精霊か？　《あやつ》には借りもあるし少しは楽しめるのかのう？　あはっ、あはは」
「……見てなさい」
魔人を無視してエイルシアは念じる。
（力を貸して。魔人を倒すのよ。そうしたらお母様は、私は……）
しかし
「……どうして？」
エイルシアの《交信》が精霊に届かない。
「どうして応えてくれないの？　精霊よ、《風森》よ、答えてっ！？」
彼女の悲鳴は響くだけ。短剣は何も反応しなかった。
「どうして？　私は……」
「狂気に呑まれたお主を見捨てたか。……ふん、興ざめじゃ」
ラヴニカは冷めた目でエイルシアを見下した。相手にする価値はない、と。
エイルシアは短剣を握りしめたまま茫然とした。
「もうよい。去ねよ、最後の巫女」
放たれる《邪風刃》。

「シアさん！！」

そこに優真が飛び出した。エイルシアを抱え込んで床を転がる。

「ぐっ、ごほっ、ごほっ、せ、咳が、なん、で、ごほっ」

「……ユーマ、さん？」

《邪風刃》は優真に掠った。それだけで《病魔》に侵されはじめる。

「邪魔するな。優しい小僧よ。お前だけは生かしてやる。じゃからどけ」

「ごほっ、だ、だめ…だよラヴ、ニカさん、ごほっ、やめて……」

目が霞む。熱も上がった気がする。それでも優真は何とか起き上がりエイルシアをかばう。

「どかぬか！　小僧！！」

「……！」

「きゃっ」

雷撃を放つラヴニカ。

優真はエイルシアを突き飛ばすと自分は再び床を転がるようにしてその場を離れた。

「や、やめて」

エイルシアは正気を取り戻した。彼女にあるのは恐怖。

ユーマが危ないということだけ。

「はぁ、だめだ、シアさん。はぁはぁ、戦っちゃ……駄目なんだ。ごほっ、ラヴニカ、さんを倒しても、ごほっ」

――みんなを救えても、ラヴニカさんは救えない

優真の声は届かない。優真の思いは伝わらない。

痛い思い、苦しい思いをしているのは優真じゃない。彼女なのだと。

優真は見たのだ。瓦礫をぶつけられた彼女あの時の顔を。

額から血を流すラヴニカ。

人に裏切られ、傷ついたのは彼女だというのに

「……ごめん、なさい。ごほっ、でも、戦っちゃ……」

わかりあえなかったことが優真は悲しい。

「所詮は人か。小僧、巫女をそうまでして庇うか」

「やめて、ユーマさん！！」

ラブニカは優真に近づき掴みあげる。

「よかろう。褒美じゃ、受け取れ」

と優真に口づけした。

「んんっ！？」

吹き込まれる《病魔》の吐息。

「がはっ、あ……あああああ！！」

「ユーマさん！？」

「失礼な奴じゃのう、我は殺生は本来好まん。じゃから……」

無慈悲に告げる《病魔》の魔人。

「勝手に苦しみ、勝手に死ね。ははっ、あはははははは」

＋＋＋

「ユーマさん、ユーマさん！！」

エイルシアは少年の名を叫び、揺さぶる。何も考えられず、それしかできなかった。

優真の熱はありえないほど高い。肌の色はもう、人の色をしてい

なかった。

後悔。

「……ごめんなさい。私のせいだ、私が」

「そう。巫女よ、お主のせいじゃぞ」

魔人は告げる。

「小僧は我との和解を望んだこ奴の選択は正しかった。戦って勝てるわけがないのじゃから」

「あ……」

恐怖。

エイルシアは目の前の魔人を見て自分の過ちに気付いた。

「拒んだのはお主じゃ、巫女よ。感情に流されたお主のせいで小僧が犠牲になった」

「違う！」

認めたくなかった。だから悲鳴のような声を上げる。

「違わぬよ。小僧の話を台無しにし、戦いを仕掛けたのは誰じゃ？その上で小僧が庇ったのは誰じゃ？」

「ああ……」

絶望。

魔人の告げる真実がエイルシアの心を折る。

「もうよかろう。お主は十分苦しんだ。楽にしてやる。お主を殺して我も自由となろう」

「……ごめんなさい」

諦念。

もう終わりだ。自分に向けて手をかざす魔人を見て、エイルシアはそう思った。

結局何1つ救うことなく、少年を犠牲にした後悔を抱えて死ぬのだと。

魔人が放つ《邪風弾》。その時――

「それは勘弁してもらいたいな。魔人よ」

エイルシアに向けられた魔法弾は壮年の騎士によって斬り払われた。

「お父様!?　どうして?」

「……間に合ったな。エイルシア、その子を連れて行きなさい」

ラゲイル・ウインディ。《風森の国王》にして先代の《風邪守の騎士》は娘の危機に立ちあがった。

「駄目です。すべて私のせいなんです。だから、だから私が」

「いい加減にしなさい」

ラゲイルはエイルシアを叱りつけ、間違いを正す。

「お前は《風邪守の巫女》。お前がいなくてはその子はどうする？」

「っ！」

「間違えるな。病魔から人を守るのがお前やエイリアの役目。そして……」

ラゲイルは長剣を構える。

彼は１０年前の《封印の儀》に立ち会うことが許されなかった。

《騎士》であるにも関わらず王妃には守ることさえさせてもらえなかった。

《病魔》に侵されたことなど関係ない。後悔を繰り返すことをしたくない王は今度こそ《騎士》として剣を取る。

「巫女であるお前を守り、お前の敵と戦うのが私の、騎士の務めだ。行きなさい！！」

振り抜いた長剣。発生した《突風》はエイルシアを優真ごと聖堂の出口まで吹き飛ばす。

「お父様！！」

「エイリークを頼むぞ」

閉ざした聖堂の扉。

「邪魔をするか？　死に損ない」

対峙するのは魔人と風森の王にして騎士。

「……娘たちの為だ。少しだけ私の意地に付き合ってもらうぞ」

＋＋＋

聖堂から優真と共に追い出されたエイルシア。

中から激しい剣戟の音が聞こえる。

「無茶よ。お父様は体調が」

「ごはっ、ごほっ」

「ユーマさん！？」

父であるラゲイルも心配だが優真は重体だ。今すぐ治療する必要がある。

「ごめんなさい。お父様……」

エイルシアは優真の腕を肩にかけ、引きずるように聖堂から離れた。

＋＋＋

「駄目、《浄化の風》が通じない。何て強い呪いなの」

城の地下から抜け出し中庭まで来るとエイルシアはすぐに優真の治療に当たる。

しかし魔法が効かない。これでまだ優真が生きていることがエイルシアには信じられない。

苦しみ生かされる、そんな呪いだった。

「ごめんなさい、……ごめんなさい」

怖かった。自分のせいでこの優しい少年がいなくなることは我慢できなかった。

「必ず、必ず助けますから。だから……風よ、精霊よ」

エイルシアは《守護の短剣》を強く握りしめ、精霊に請い願う。

「私のすべてを捧げます。だから風よ、《風森》よ。お願いです。力を、彼に与えて――えっ？」

今度は精霊が彼女の《祈願》に応えてくれた。清浄なる風の気をエイルシアは感じる。

驚いたのは突如翠の髪をした女性がエイルシアの前に現れたからだ。

（嘘、まさか風森？　精霊が姿を現すなんて今までなかったのに……）

精霊は倒れた少年を慈しむように見ると微笑み、それからエイルシアに魔力を送る。

――また、たすけにきてくれたのですね

「あ……」

自然と涙が出た。

少年に向けられた、苦しくなるほど溢れる愛しさはエイルシアのものではない。

「……傍にいます。いつだって……」

口に出した言葉もエイルシアのものではなかった。しかし送られてくる魔力を通じて《同調》する想いに彼女は声に出さずにはいられない。それは彼女のなかにもあったものだ。

何故だかわからない。

風森の精霊は誰よりも少年を救いたがっている。

だからエイルシアにできることはひとつだけ。

「きて。一緒に……」

優真を助けたいのはエイルシアだって同じなのだ。

「あなたは生きてください」

精霊と姿を重ねたエイルシアはユーマの唇に自分の唇を重ね、《浄化の風》をユーマの体内へ吹き込む。

彼女と精霊と、そして少年がひとつになって……

エイルシアは夢を見た。

＋＋＋

「うあー、う？　あ？」

「違うよしろ。優真だよ。ゆうま」

「うーあ？」

しろい女の子を見つけた優真は町中を連れて駆け回った。

女の子を探している人がいるかもと思って町中を駆け回ったが何

故か誰にも会う事がない。

夕方になると疲れたので公園に戻った。とりあえず「まっしろだからきみは『ましろ』な」と仮の名前で女の子を呼ぶことにした優真。

ついでに女の子に自分の名前を教えようとしているのだが。

「うん。そんな感じ。ゆーまだよ。ゆ・う・ま」
「う・う・あ」
「ちがう」
「あー」

ましろは言葉を理解できるようだが言葉を発することができない。

「もういちど。ゆうま」
「うーあ、う、うーま」
「おし。『ま』がでた。いいぞ。しろ」
「あー」

頭を撫でると気持ちよさそうにしろい目を細くするましろ。家で飼っている猫みたいだと優真は思う。

「もうちょっとだ。ましろ、ぼくは誰？」
「う、うーっ、……うゅ、ゆ……ま」
「しろ？」

なにかを閃いたように瞳を輝かせるましろ。少年の名前を口にする。

「ゆ…う…ま。ゆうま。ゆーま！」
「そう！　そうだよ。ぼくはゆーま。優真だよ」
「ゆうま、ゆうま」
なんだろう、この達成感は？　優真はうれしくてましろの頭を撫でた。
それはもう、撫でまくった。
ましろもうれしくなって、でもなぜか優真の髪を引っ張った。真似しているようだがそれは違う。
「ちょっ、いたい、いたいってましろ！」
「うあー、う？　ゆーま？」
「……楽しそうですね。まさか《これ》に言葉を教えるなんて」
優真が声のする方に振り向けば、そこに白い人がいた。
＋＋＋

Ｘ－ｘｘ　しろい夜（前書き）

優真とましろ。そして《梟》

Ｘ－ｘｘ　しろい夜

＋＋＋

出会った白い人はましろと同じようで違う白い髪で白い瞳をしていた。

白いのに闇。その瞳から優真は何か恐ろしいものを感じる。

「やっと見つけました。しかしあの小僧2人相手に組織がこうまでやられるとは……」
「おじさん？」

白い人はそこで初めて優真を見た。

「でもやっと《これ》を『回収』できます」
「おじさんは誰？　ましろの、この子の知りあい？」
「う？」

優真は不気味な白い人に訊ねた。彼を見てもましろの反応は相変わらずだったが。

「ましろ……しろ、ね。ククッ、これはいい。ＴＹＰＥ４６。よい名前をもらいましたね。さあ、お礼をしなさい。その少年を……殺しなさい」
「あう？」

どうして？　といった感じでましろは首をかしげた。わかっていないのかもしれない。

「おじさん？」

「くっ、逃走中になにかあったな。……いいでしょう。君は私が」

しろい人は優真を蹴り飛ばす。

「があっ！」

「ゆうま！」

転がる優真に駆け寄るましろ。白い人を睨みつける。

「うー」

「……困りましたね。私はあなたを回収しに来ただけなのです。目撃者は消します。さあ、こちらに来なさい」

「ゆーま、ゆーま」

ましろは無視。優真を揺さぶる。

「うっ、ああ？　ましろ？」

「ゆうま！」

「ちっ、ならば少し痛い目にあってもらいますよ」

そう言うと白い人は手から力が溢れさせる。

魔法だ。しかも攻撃用の。

「しろ、逃げて！」

「逃がしませんよ。君もね」

優真は身の危険を感じた。あれは蹴られて痛いくらいじゃ済まない。

「うーっ、あー！！」

突然叫ぶましろ。同時に背中から魔力を放出する。

現れるのはしろい翼。白い人は意外だったのか目を疑う。

「何？　これは……」

「ゆーま！」

「うわっ、わあああああっ」

ましろは優真に抱きつくと白い人から逃げ出した。

夕暮れの、空へ。

＋＋＋

空を飛ぶましろにしがみつく優真。情けないけど落ちるよりましだ。

身体のどこを掴んでるなんて考えないようにした。

「ゆーま！」
「な、なんだよ。ぼくはやましいことなんて何も」
「う？」
「え、違う？　だったら……うわぁ」

優真とましろは今、空の上にいる。日はとっくに暮れて気付けば夜になっていた。

「すごい。星が近い。世界が……広く見える」
「あー」

優真はいつもより近くに見える星の光と自分の真下を照らす街の光を見比べる。

「どっちも綺麗だ。すごいよ、しろ」
「あーう！」

ましろも気持ちは同じらしい。しろい瞳はちいさな光をいっぱいに納めている。

少女もまたはじめて見た世界だった。優真が興奮して喜ぶものだからましろも嬉しくなった。

２人は抱き合ったままゆっくりと飛び続ける。

夜空の光の中を。

＋＋＋

しばらくはそうしていたが優真はこれからのことを考える。白い人はましろを探しているはずだ。

「危ない人もいるしやっぱり兄さんの所に行こう。頼むよ、しろ」

「あー」

優真の案内で《桜道場》へ飛ぶましろ。

その途中の事。優真にとって本当の事件はこれからだった。

「ストーム・ブラスト！」

ましろが突然の旋風に煽られ、優真を手放してしまう。

「えっ、うわあああああ」

「ゆーま！」

「お、お、おちるーーーっ！！」

地面に直撃する直前。

「よっ、と大丈夫か？　優真」

「大和……兄ちゃん？」

「おう」

抱きとめられた。いつもの調子で返事をする大和。

それを聞いて優真は安心した。

（よかった。もう大丈夫だ。ましろも兄ちゃんたちが助けてくれる）

そこまで考えて優真は気付いた。なにかが爆発する激しい音が聞こえる。

そしてましろがいない。

「ましろは？」
「おい、優真？」
「しろ！」

駆け出した優真に大和は出遅れた。

「しろ、どこだ！」
「ああー！！」
「しろ！」

ましろは戦っていた。相手は銀髪の男。

白い人の仲間かと思ったが違うようだ。ましろが敵意をむき出しにしている。

「あああああ！」

ましろが放つ火炎弾が銀髪の男とその周囲を焼く。爆発音の正体はましろだった。

「ちいっ、回収される前に片づけないと」

「しろ！」

ましろに駆け寄る優真。それがいけなかった。

「離れろ、優真！」

「えっ！？」

何故か銀髪の男が優真の名を叫んだ。放たれた火炎弾の射線上に優真は飛び込んだのだ。

「ああっ！」

「ゆーま！」

「優君！」

優真の前に誰かが立ちふさがる。

その誰かは魔法障壁を展開。火炎弾を防いだ。

「大丈夫？」

「ゆうか……ねえちゃん？」

優真を守ってくれたのは少年の実の姉。

「どうして？」

「ユウ、優真を連れて行け。あとは俺と相棒でやる」

「大和兄ちゃん！？」

追いかけてきた大和はそのまま銀髪の男と並んでましろと対峙した。

「どうして？　それにさっきの声、もしかして……」

「……」

銀髪の男が大和の隣に並ぶのを見る。それで優真は気付いてしまった。

その背中はいつも見ていた2人の姿と重なる。

2人が揃えばできないことはない。誰にも負けない。そう優真は信じてきた。

だから

銀髪の男はきっと……もうひとりの兄

「光輝……にいさんなの？」

「……」

梟は答えない。金の瞳はただしろい少女を見据える。

「どう、して？　……どうして、どうしてなんだよおおおおっ！！！」

ましろは2人に襲いかかり、兄達はそれを向かえ撃つ。

どうして戦うの？　わからない。

『事件』の蚊帳の外にいる優真は何も知らずただ叫ぶことしかできない。

ぽつり

優真がましろと2人で星空はもう見ることはない。

星は雲が隠し、思い出は雨が塗り替えた。

＋＋＋
しろい夜
＋＋＋

優真の部屋。

「優君？　起きてる？」

姉の優花が優真を訪ねてきた。ドアをノックする。

今はもう深夜の2時。優真の返事はない。

「入るよ」

構わずに部屋の中に入る優花。部屋の明かりはつけなかった。

優真は起きていた。ベッドの横に腰かけて動かない。

「優君？」

「……どうして？」

優真はずっとそれだけを考えていた。

＋＋＋

あのあとましろは撃ち落とされた。そこに白い人は狙ったかのように突然現れたのだ。

「感謝しますよ《梟狼》。傷物にはなりましたがおかげで回収できます」

梟は白い人を睨みつけた。

「させると思うか？　それを殺せばお前たちの計画はすべて終わりだ」

「……や……めてよ……も、う」

梟は金属板の銃を倒れたましろの頭に向ける。

優真は叫び過ぎてもう声が、涙が出ない。

梟に優真の声は届かない。でも

「……う？　……ゆ、う……ま？」

ましろに声が届く。虚ろな瞳でただ少年の名前を呟いた。

それに動揺したのは梟。

ましろはもう彼が知っている『人形』ではない。

「隙あり、ですよ」

一瞬の隙を突かれて白い人は梟に牽制の魔法弾を放った。咄嗟に相殺させるがもう遅い。

「ちいっ！」

「回収しました。ではこれで」

白い人はましろを捕らえて姿を消した。

それから梟は復帰した大和を連れて闇夜に消えたのだった。

優真は姉に連れて帰られたがよく覚えていない。

＋＋＋

優真はあの時のことだけを考えていた。

――どうしてましろは姉ちゃん達を襲ったの？

――どうして兄ちゃん達がましろを傷つけるの？

――どうして白い人はましろをさらったの？

知らないことが多すぎて答えが出てこない。

そして

「あいつは……誰？」

――あの銀髪は誰だ？

――ましろを撃ち落としたあいつは誰だ？

「こうちゃんのこと？」

「……ちがう」

姉の答えは信じたくなかった。

「光輝兄さんは髪も目も黒だ。……眼鏡かけていて陰険で、いつも眠そうにしていて根暗で、変なもの作って大和兄ちゃんと馬鹿やって、姉ちゃんに怒られて情けなく正座するのが兄さんだ。あいつじゃない」

「……こうちゃんがすごい認識されてる。でもね」

優花は真実を告げる。

「あれがこうちゃん。真鐘光輝（まがね・こうき）。銀の髪をしても優君の知ってる『光輝兄さん』だよ」

「だったら何で！　……だったら……だったらぼくは……」

優花は優真の目を見て悲しくなった。

怒り。それに憎悪。

優真がその感情をすべて彼にぶつけようとしているのが悲しかった。あの場には彼女も大和もいたのに優真は彼にしか目が向いていない。

そのように仕向けたのは光輝だ。ましろを傷つけたのは彼だけ。

光輝は憎しみを背負う覚悟がある。

でも

「優君、付いてきて」

「え？」

優花は弟を連れ出した。これは優花のわがまま。

優真には彼を憎んでほしくなかったから。憎むのはせめて『すべて』を見せてからだと思った。

梟の棲む、夜の世界を。

＋＋＋

優花に連れられて1時間。再び雨の中を飛ぶ優真。

「そういえばどうして姉ちゃんは魔法が使えるの？　姉ちゃんもぼくも人間だよね？」

「それは……いつか優君にも教えるね。……着いたよ」

連れてこられたのは廃ビルの屋上。

そこに怪我をした大和がいた。

「大和君」

「ユウ？」

「大和兄ちゃん……」

「優真！？　おい、何故連れてきた」

優真が来たのは予想外だったのか大和は慌てた。

「もう黙ってられないよ。だから優君にすべてを見せるために」

「だめだ」

優花の言葉を大和は一言で切り捨てる。

「大和君？」

「今はだめだ。状況は優真にとってまずい。見せるな！」

「それってどういう……」
「しろ！」
叫ぶ優真は駆け出す。優花はそれを追いかけた。
隣のビルの屋上。そこにましろがいた。
しろい女の子がたくさん、たくさんいた。
「どうしてあの子が？」
「間に合わなかった。組織は潰したが《接続》された」
優花の疑問に大和が答えるが優真は理解できない。
ただ最後の一言が優真に衝撃を与えた。
「あの子の『量産型』が情報を同期して目覚めたんだよ！」
対天使・対悪魔戦用人造魔法使いＴＹＰＥ４６。
４６号体用試作体。それがましろの正体。
天使と悪魔がいるこの世界は人を含めた3種族が共存してまだ間もない。
世界には人間至上主義という存在がある。白い人の組織がその１つだった。

この世界は3種族の中で人間だけが魔法を使えない。人間はせいぜい《魔術師》が限界だ。だからに人間が覇権を握るために対魔法戦用のモノを白い人達は造った。

それが人造魔法使い。

ＴＹＰＥ４６は少女型の量産モデル。しろいのはあとで『染め上げて』一般人にカムフラージュするためだ。その運用ははテロや暗殺に近い。

ましろは試作体。戦闘データを収集して量産型に提供するのが役目。

彼女はこれまで天使や悪魔だけでなく、ハーフや力ある人間まで何度も襲った。

この事件に大和と光輝は関わり、白い人の組織を潰しにかかったのだが……

「こうちゃんは？」

「……そこだ」

隣のビルを指差す大和。

しろい少女たちの輪の中で、銀髪の少年が1人戦っている。

＋＋＋

１対５０。

それが今の状況。最初はまだ沢山いた。

優勢なのは梟だった。銀髪の少年はしろい少女たちの魔法をすべて相殺して両手に持つ金属板で確実に撃ち貫き、切り裂いていく。

「どうしてです！　あなた達の戦闘データも手に入れました。なのにこれだけの数を相手にしてどうして！？」

あの白い人がいた。信じられないと梟を見ておののく。

「データならこちらも『見た』。数がいても『あの子』と同じなんだろ？」

冷静にまた１人撃ち抜きながら梟は答える。

「あの子の魔法は《理解》した。俺に２度目はない」

「魔法が効かないだと！？　人間なんだろお前！」

組織の主力となるはずだった人造魔法使いを蹂躙されて彼は絶望する。

天使でも悪魔でもない。まして彼のような改造人間でも。

目の前にいるのは魔術の、魔法の天敵。アレは……バケモノだ！

「だれだ？　だれなんです！？」

銀髪の少年は金の瞳で白い人を見下して彼に答える。いつもどおりに。

「梟。夜を識る者。闇を狩るモノ」

梟は無造作にガンプレートを白い人へ向けて――

そのまま額を撃ち抜いた。

＋＋＋

梟は一方的だった。彼の殺戮をただ見ているだけの3人。優真はもちろん、大和も優花も動けずにいた。

ましろと同じ顔をした少女がまた1人、白い水溜まりに沈む。

「しろ……」

「優真、間違えるな。『あの子』じゃない。違うんだ！！」

「でも」

ショックを受ける優真を大和が揺さぶる。

そんな彼らに気付いた「ましろ」がいた。

「ゆうま」

「えっ」

「ゆうま、ゆーま。ゆうまゆうまゆうまゆうま」

しろい少女達は少年の名前をよぶ。

これはただ「ましろの情報」が量産型と同期した結果だ。

「「「「「ゆうま」」」」」
「「「「「ゆーま」」」」」

「あ…ああ」

しろい少女たちがよぶ。

「「「「「ゆうま！」」」」」
「「「「「ゆーま！」」」」」

しろい少女たちが叫ぶ

「ああ！！」
「優君！　しっかりして！！」

悪夢だった。しろい悪夢。

戦う少女が、倒れた少女が、切られた少女が、撃たれた少女が、

同じ顔で、しろい瞳で、あの子の声で、ぼくを、優真を呼んでいる……

「――っ！」

――ふざけるな！！！

怒声

吼えたのは……梟

「お前らがその名を呼ぶな！！」

「こうき……にいさん？」

その声に優真は正気を取り戻した。

あの声は、あの怒りは間違いなく優真の知っている光輝だった。

「お前たちじゃない。最期まで優真を呼んでいたのは……あの子なんだ！！！」

「こうちゃん……」

光輝の怒りは悲鳴だ。優花はいつもそう感じる。

「……潰す。お前たちはすべて潰す」

銀色の力が梟に引き寄せられる。

怒りに呼応しているのではない。彼を慰めるように《魔力》が寄り添うのだ。

「あの子はいない。俺が殺したんだ。だから消えろ、消えろぉおおおおおっ！！！」

「コウ……」

大和は動けない。

――光輝のせいじゃない。救えなかったのは俺も同じなのに

なのにどうして俺はここにいる？　怪我をした大和は今の相棒の隣に立てないことが何よりも悔しい。

「姉ちゃん……大和兄ちゃん……」

優真は梟から、光輝から目を逸らさない。彼がましろではないモノを殺すのをただ見ている。

「優君？」

「兄さん、泣いてるよ。どうしてだろう？」

「優真……」

今は深夜。雨は止んでいたが離れていれば僅かな明かりの中では声は届いても顔まではわからない。

「痛いんだ。兄さんを見ていると……悲しいんだ」

優真は辛くても目を逸らさない。

このしろい悪夢を狩り続ける梟をただ見ていた。

＋＋＋

夜明けにはすべてがおわった。しろい少女たちはすべて消えた。

残ったのは白い水溜まりの上に立つ黒髪の少年１人だけ。

光輝は大和たちと合流。優真がいたのには流石に驚いた。

「ごめんなさい。私が」

「そうか」

光輝は優花を責めはしなかった。優真は彼を見ない。

「……すまん。でもこれが俺だ」

光輝はそう言って優真の隣を抜けた。

抜けようとした。

「優真？」

気付けば優真が光輝の袖を掴んでいる。そしてそのまま彼の腰にしがみついた。

「う……う、うわあああああ」

泣いた。

「うあああ……あああああ！」

優真は泣いた。

「ああ……あああああ、う……あああああ！！」

悲しかった。

ましろがいなくなったこと。

知らなかった兄の、その在り方。
それに見ているだけだった自分の……無力に。

優真は光輝を掴んで離さない。彼もましろのように消えてしまう、
そんな予感があったから。

優真はもう誰にも消えて欲しくなかった。

「ああ……あああああ！！！」

慟哭の中に怒りも憎しみもない
誰も幸せになれない結末

優真は苦しくて、痛くて、悔しくて

悲しかった

＋＋＋

『あの日』から数日が経つ。

しばらく塞ぎこんでいた優真だったが今日、ある決意を固め部屋を出た。

御剣家のリビングで優真が見たのは2人の少年が姉の前で正座している姿。

「「……」」

光輝と大和が正座している。2人の前には何故かカレーパンが1つ。

「……姉ちゃん？」
「あ。優君おはよう」

「「……」」

うん。いつもの光景だった。

「なにしてるの？」
「気にしないで。……2人はそのまま」
「……はい」
「ちっ」

舌打ちした方が光輝だ。陰険眼鏡。

「ふーん」

カレーパンをほおばる優真。噴きだした。

「なにこれ？　あま！」

「生クリーム&カスタードのダブルクリーム激辛カレーパン」

「……スパイシーな甘さってはじめてだよ。何の罰？」

大方食べ物を物色しようとした大和に光輝が予め仕掛けたものだろう。

問題は御剣家の冷蔵庫の中身が空になっている上にいつの間にこんな仕様もない罠を張られていたことだ。大和が食べるとは限らないのに。

「あ。もしかしてこれ食べたの兄ちゃんじゃなくて姉ちゃん？」

「違うよ」

嘘だ。食べかすを気にして咄嗟に口元を手で抑えては説得力がない。

きっと優花も噴きだして光輝達に笑われたのだろう。花も恥じらう15歳なのに。

ほんとうに、いつもの日常だった。ながされそうになる。

「そうじゃなくて……話があるんだ」

話を切り出すと優真は正座する2人の前で同じように正座する。

そのまま頭を下げて両手と額を床につけた。

「お願いします」

土下座。これはどうしても2人に聞いてほしい願いだった。

――ぼくは弱いから。もう弱いままではいたくないから

「教えて……ください。何も……できずに……あんな思いするなら……俺は」

＋＋＋

ましろの最期を優真は知らない。知っているのは光輝だけ。

「これは『あの子』からだ」

光輝から手渡されたのはクリスタル・コーティングされた《しろいはね》。

「ましろの？　本物なの！？」

「ああ、魔力体だから消えないようにコーティングはしておいた」

光輝は魔法が使えなくても『魔力を扱う道具』を作ることに関しては天才だった。

「優真、同じ情報と能力を持った量産型は『空を飛べなかった』。どうしてあの子だけ飛べたんだろうな？」

「……」

優真にはわからない。

でもましろは、何度も自分の名前を呼んだ少女はこの世界にいた。

優真は忘れない。２人で見た光の夜空も、このはねと同じ色をしたしろい瞳も、

優真に見せてくれた無垢な笑顔も。

ちいさなしろいはねを優真は大切に抱き込む。

はねを残してくれた想いはわからなくても、ましろは確かに『ここ』にいる。

「ありがとう、光輝兄さん。……ありがとう、ましろ」

失ったものは戻らない

それを知っているから少年は……もう失くさないように強くなる

と決めたのだ

だからこのおはなしが、きっと少年のはじまり

＋＋＋

１－０６　優真の決意（前書き）

エイルシアと？？？。そして優真が手にした力

106　優真の決意

＋＋＋

エイルシアは夢を見た。

少年のはじまり、しろい少女と梟の夢。

（……ここは？）

夢から醒めても知らない世界。彼女は今、しろい世界の中にいる。

エイルシアの隣には風森の精霊がいた。

（風森、あなたが）

夢を見せたの？

思い当たることはエイルシアが精霊と同化して優真に触れたこと。

夢を見た原因はそれしかない。

しかし翠の髪をした女性はエイルシアの問いに違うと首を振った。

（風森の魔力を通じてユーマさんの《心像》に触れたのではない？

ではどうして……痛っ）

突然うしろから髪を引っ張られるエイルシア。振り返って言葉を失った。

「う？」

女の子だ。

（あなたはっ！？）

しろい服にしろい肌をした女の子。

髪も瞳もしろい、夢で見た女の子。

（ましろ……さん？）

驚いたまま固まるエイルシアに女の子は無邪気な笑顔を見せた。気付いてくれたのが嬉しかったらしい。

（どういうこと？　ユーマさんの記憶ではあの子は……風森？）

精霊を見るが彼女は答えず女の子に歩み寄る。

エイルシアは『その域』に達していない。知る権利が彼女にはな

かった。

しろい少女は精霊にがばっ、と抱きつく。

言葉を知らない女の子は魔力を通して精霊とコミュニケーションを図っているようだ。

「ゆーま」

「……はい。わかりました」

女の子に頷く風森の精霊。２人の関係と女の子が精霊に伝えた内容が気になるが、エイルシアが知ることはない。

「あーう」

再びエイルシアに近寄るしろい少女。ちいさな手を差し出す。

（なにを……？）

「う？」

繋げと言っているのだろうか？　エイルシアはおそるおそるしろい手を握った。

（――っ！！　あなたは……）

言葉ではない。あたたかな気持ちだけがエイルシアに伝わる。

――ゆうまをたすけてくれてありがとう

エイルシアは思わず女の子を抱きしめた。言葉が出ない。

（あなたはずっと『ここ』にいたのですね！！）

しろい少女は正真正銘、ほんもののましろだった。

ましろはずっと優真の傍にいた。

少年の近くにいて想いに触れながらも何も伝えることができず、何もしてあげることができなくても。

傍にいた。あの日からずっと。

ふれあうことでましろはエイルシアに見せた。今日までの優真を見せてくれた。

1人知らない世界に来た優真。隠していてもどれだけ不安だったのか。

エイルシアがいてくれたこと、彼女と過ごした日々にどれだけ救われたのか。

魔人を倒すと言ったエイルシアの覚悟が大好きな兄に似て悲しかったこと。彼女に何がしてあげられるかずっと悩んだこと。

「ゆうま」

「……はい。そうなんです」

ましろは、エイルシアは知っている。

少年は優しいのだ。だからエイルシアも、魔人の彼女も助けようとした。

優真はラヴニカの悲しみも見逃さなかった。何の力がなくても優真は2人が争わずに救われる道を選ぼうとしていた。

ラヴニカも優真に同意してくれた。なのに、

（なのに私は……）

優真の目から見たあの時のラヴニカはとても傷ついた顔をしていて、あの時の自分がどれだけ醜い顔をしていたことか。

あの時だって優真はどうして？　とエイルシアのせいで悲しんだというのに。

「ごめんなさい。心配したよね？　私が巻き込んでしまったの。だから、だから私が必ずユーマさんを……」

助けます、と言いかけてエイルシアは髪を引っ張られる。

痛い。

ましろはエイルシアの覚悟が気に入らない。むっとした表情。

「あー！」

「……いえ、何が言いたいのかさっぱり……」

「こー」

「？？？」

やっぱりわからない。

やがてエイルシアはしろい世界にいる自分を遠くに感じはじめる。

目覚めが近い。

「……夢かもしれない。でもあなたに会えてよかった。ありがとう」

そう言ってエイルシアはましろの世界から消えた。

「あー」

「……再成の世界からの伝言、確かに受け取りました。私もそろそろいきます」

精霊もましろに別れを告げる。

「もう会うことはないでしょう。現実に戻っても今の私は彼女の力になれず、あの子を助けることができませんから……痛いですよ」
「うー」
諦めた感じにご立腹のましろ。精霊だろうが容赦なく髪を引っ張る。
「こー！」
「……そうですか。ならば私は見届けます」
ましろの主張に精霊は見守ることにした。ましろだって何もできないけれど信じているのだから。
「こー」とは優真が教えた言葉ではない。
「私も信じましょう。あの子と……彼の力を」
「あーう！」
ましろは信じているのだ。優真には彼がいる。
ましろを殺し、それでいてましろの願いを叶えてくれた優真の兄。
本当の彼は誰よりもやさしい。だから優真を助けてくれる。
いつだって、どこにいても、

必ず

＋＋＋

目覚めの時

少年が手にした力は偶然なのか？

＋＋＋

優真の決意

＋＋＋

優真の身体は《病魔》に侵されて今までにないほどに苦しみ、それでいて《病魔》に生かされていた。

（熱い。それに寒い……）

何も考えることができず死にそうでも死なせてもらえない。優真の意識は途切れ途切れだが消えてなくなることはなく、ただ命を弄ばれ苦しめられていた。

（……何だ？）

ふと唇に何かやわらかい感触がした。それから苦しさが和らぐのを優真は感じる。体中に《浄化の風》の魔力が行き渡ったのだ。

優真に異変が起きたのはその時だった。

どくん

（熱い）

優真は感じる。今までにないその熱さ。

どくんどくん

身体が何かを求めている。

（欲しい……）

熱い渇望。無意識に優真は求めるがまま手探りで《それ》を抱き寄せた。

「んんっ！？」

奪う。

「んんぅ……んむぅ」

吸い上げる。

「んふぅ……んんんぅ…ん、んんぅ…」

喰らう。

それは……魔力

十十十

「ぷはっ、はぁはぁ、……あれ？　俺……」

優真は目を覚ました。目の前にはへたり込んだエイルシアがいる。

彼女の顔は紅い。

「シアさん？　大丈夫？」

「はひ、らいじょうぶれす」

そうでもなかった。

夢から覚めるといきなりアレだったのでいろいろとぶっ飛んだエイルシア。

よくわからないまま彼女が落ち着くのを優真は待つ。身体の方はすっかりよくなっていた。

「……よかった。《浄化の風》が効きましたね。もう大丈夫です」

「うん。……ごちそうさま？」

「ありがとう」のかわりにそんな言葉が何故か出た優真。口元を袖で拭う。

「い、いえ。お粗末さまです……」

「？」

エイルシアの返事も変だった。なんかすごかったらしい。

沈黙。優真のアレは無意識で彼は理解しておらず、エイルシアだけが気まずい思いをしている。

「あれからどうなったの？　突然おじさんが現れたのは何となく覚えているのだけど……」

「っ！　お父様！！」

今の状況を思い出したエイルシア。立ち上がろうとしてよろめき、それから自分の異変にも気付く。

「あっ、私の魔力が……」

「シアさん？」

エイルシアは驚くままに優真を見る。

「なくなっている。それにユーマさんに……あなたの《力》、それはもしかして……」

「俺の？」

エイルシアには思い当たることがあった。その力は魔法使いの天敵たる特異能力。

「……関係ありません。ユーマさん、あなたは逃げて下さい」

「シアさんはどうするの？」

「私は魔人を封印します」

エイルシアは決意する。《彼女》に出会った今、改めて命を捨て

る覚悟ができた。

いなくなっても想うことができるとわかったから。

「今の私になら精霊はきっと応えてくれる。だからあなたはここから逃げて。私のせいなのに……もう巻き込みたくないのです」

「シアさん……」

もう何もできない。悔しさと悲しさで俯く優真。それがエイルシアは嬉しかった。

別れを惜しんでくれる。だから別れることができる。

（きっとあの時のお母様も……）

――あの人と同じように素敵に別れることができたら……

微笑むエイルシア。最後に見た、先代の巫女である母のように。

「忘れません。あなたに逢えたこと」

「……」

「私の部屋にあなたの荷物があります。それを持って北の《銀雹の国》へ。そこまでいけばきっと」

「……？　ちょっと待って。シアさん？」

いまとんでもないことを優真は聞いた気がした。

「『俺の荷物』って何？」

「あっ、ああ。あの時動転していて忘れていたのです。ベッドの上に見慣れない鞄があったのできっとユーマさんのものだと……」
「シアさん！！　付いて来て」
「えっ、きゃっ！」
エイルシアの手を取ると優真は別れのシーンを台無しにして駆け出した。

＋＋＋

エイルシアの部屋で優真は自分の鞄を見つけた。この春から使う予定だった高校の学生バッグ。
「あった」
鞄の中にあるのは黒い箱。これは光輝特製の《圧縮ボックス》。
箱の中には優真の『おもちゃ』があるはずだ。悪あがきでもこれに優真は縋った。
「ユーマさん？」
「まだ何かできるはずなんだ。何か……あっ」
実際に箱を開けてみて優真は固まる。
入学祝

そう書かれた手紙がまず目に入った。それよりも問題は中身だ。
中に入っていたはずの『おもちゃ』がほとんど入れ替わっていたり手が加えられている。

グレードアップされていた。

「なんで？　それにどうしてこれが」

それは優真が欲しかったもの。そして今、心から欲したもの。

「俺でも使える簡略されたチューニングは大和兄ちゃんの《ガンプレート》じゃないか。俺の知らないカートリッジもある」

思わず震えた。いつかこれを譲ると言った兄との約束を思い出す。

「それに《回路紙（サーキットペーパー）》がこんなに。回復魔法を中心にこれだけの枚数を付与してくれたのか姉さんは？　《文房具セット》もある！　それに……」

1着の服を見る。

黒を基調とした戦闘服にブーツ。デバイス・ゴーグルのレプリカ。
それにグローブ。

ガンプレートとグローブにはエンブレムが付いていた。

金の瞳と銀の翼を持つ梟を模したデザイン。

「《ナイト・ファミリア》と同じもの……光輝さん」

優真はグローブを握りしめる。この使いこんだ感じのするグローブは間違いない、彼の物だ。

どうして？

何故ここにあるのか。今優真が『ここ』にいる事を含めてわからないことだらけだ。

でも、それでも

「今だけ。今だけでいい……兄さん、力を貸して」

それでも『今』は関係ない。どうしても今だけは優真は力を欲した。

優真は首に提げていたものを取り出し握りしめる。

「それは」

今のエイルシアは知っている。

あれはましろ。《しろいはね》だ。しろい少女はやはり優真の傍にいた。

少年はあの日に誓いを立てたのだ。だから優真はできることとする。

今の優真にはまだできることがある！

「シアさん教えて。さっき言いかけた俺の力のこと」
「……え？」
エイルシアの目の前で優真の雰囲気が変わった。優真は少しでも情報を、戦う力を集めようとしている。
「それにシアさんの力を貸して。俺は……」
優真は見た。ここには闇がある。それは４００年も抱え込んでいた悲しいモノ。
闇を狩る《梟》。今ここで兄の代わりを果たせるのは優真しかいない。
けれど
「えーとですね、それは……」
「シアさん？」
優真は戦う覚悟を決めたけれど、エイルシアが優真の力を説明するにはどうしても先程の《アレ》を説明しなければならず、
「ちょっと時間をください。いろいろと準備が……」
「時間がないんだ。手短でいいから早く」
「……」

（なぜ私だけ気にしなければいけないのでしょうか？　……何かずるい）

話すのに少しだけ勇気と時間を要したエイルシアだった。

＋＋＋

風森の国、聖堂。

優真が駆け付けた時に見たものはいまだ健在の魔人と倒れた騎士の姿。

「お父様！」

「まだ息がある！　シアさん、これ使って」

優真はデッキケースから《キュア》、《ヒール》のカードを取り出しエイルシアに渡す。使い方は先程彼女に教えた。

カードに付与された魔法を発動させると、父の顔色が一気に良くなる。

「す、すごい…」

傷も次第に癒えていく。エイルシアは紙の札に付与されていた魔力量とその効果が信じられなくて、これがほんとうの魔法じゃないのかと思いもした。

優真は1人だけ魔人の前に出る。

「どうした小僧？　命を取り留めたようじゃが何の用かの？」
「……あなたを止めにきました」
それが優真が望むすべきこと。
「ユーマさん……」
「シアさんはおじさんと一緒に下がって。もう魔力がないんだから。あとは俺がやる」
「お主では相手にならんよ」
つまらなそうに魔人は言う。だけど今のエイルシアは彼女の考えが読み取れる。
優真は本来無関係の人間。だからラヴニカは無駄な争いを避けようとしている。
「倒したいんじゃない。戦いを止めたいんです」
「ふん。我はもう狂気を抑えきれん。今度こそ死ぬぞ」
「だけどあなたは一度俺を殺さず『生かしている』」
優真は退かなかった。彼女を信じているから希望があるような推測が彼にはできる。
「あれはシアさんがギリギリで治療できる呪いだった。俺に直接吹き込んだのは死なないように微調整するためだ」
「戯言じゃ」
「それにあれだけ時間が経つのにおじさんはまだ生きてる」

ラブニカの否定を気にもせず優真は話す。

「狂気を抑えきれないと言って殺さないように力を抑えているのは何故です？　……今だって戦ってるんでしょ？　自分（狂気）と」

「……」

ラヴニカは答えない。肯定しているように見える。

エイルシアは優真の言葉にだだ驚くだけ。

（何も知らないはずのユーマさんは最初から気付いていた？　……私が仕掛けなければ魔人は狂気を抑え続けていられたの？）

エイルシアの疑問、それと後悔を余所に少年と魔人の話は続く。

「だからラヴニカさん。止められないなら俺が止めます。それが俺の望みです」

「……よく言った。名前を聞こう。優しくも愚かな小僧よ。お主は誰じゃ」

今の優真に兄たちのような名乗る異名も二つ名もない。だから

「優真。それだけでいい」

「よかろう。ならば止めて見せるがいい。……魔人の力、受け止められると思うなよ」

魔人は笑った。

凄惨な笑みは少年への賞賛。狂気を解放し優真を敵と認めた。

「少しは我を楽しませよ、ユーマ！！」

まだ《精霊使い》でもない少年の戦いがはじまる。

ユーマではない少年の戦い。

「うあああああ！！」

これは優真の戦い

＋＋＋

１－０７　優真の戦い（前書き）

優真ＶＳラヴニカ。前半戦

１－０７　優真の戦い

＋＋＋

私、エイルシア・ウインディが彼と出会ったのは偶然でも運命でもありません。

それは彼女の善意ではあったけれど、今思うとその彼女が仕組んだことではないかと思うのです。

私に起きた偶然はただひとつ。森で倒れた彼女と出会い、助けたこと。

――君、不幸な女のニオイがする

助けた人に向かって失礼なことを言う人だった。

――駄目だよ。幸せは自分で掴みに行かなきゃいけないよ。１人でダメなら手伝ってくれるいい男を探さなきゃ。女の子の特権だよ。

そうだ！

そう言って１枚の紙を取り出すと複雑な模様を描き、私に手渡し

た。

——うん。回路の書き込みはふくろう君の方が上手いけどわたしもまだまだ……あ、それはお礼。わたしはこれしか作れないけど《召喚の札》なんだ。お守り代わりにでももらってくれる？

最初に思ったのは「何を言っているんだろう？」だったと思う。冗談にも程があるとも。

でも彼女は続けて言ったのだ。まるで祝福するように優しく微笑んで。

——ミコトの名を継ぐわたしは、いつだって人の運命を人が選びとることを願います

《召喚の札》なんて信じてはいなかったけれど、彼は私のところに突然現れた。

——ところで年下は好み？

……。

でもどうして私のベッドの中にいたの？

その日の夜は札の不思議な模様を眺めたまま、手に持って眠ってしまったエイルシア。

思い返せば使い方くらいは教えてもらいたかったと彼女は思う。

＋＋＋

1人魔人と対峙する優真。エイルシアからは彼の背中しか見えない。

少年の身体は決して逞しくはないが今だけは大きく見える。彼は優しいだけではなかった。

彼女は思う。あの背中は父と同じ。戦う男の人のそれだと。

「……うっ」

「お父様？　しっかり」

エイルシアの父、国王ラゲイルは回復魔法の効果で目を覚ます。

「……何故戻ってきた？」

「何を言うのです。お父様こそどうして？　その身体で魔人と戦うなんて」

「……そうせずにはいられなかった。騎士として……父として」

痛みが残るのか顔を顰めながら、でもエイルシアの目を離さずにラゲイルは言った。

「エイリアが残した言葉は今でもすべて覚えている。エイルシア、母はお前に何と言った？」

――エイルシア。あなたも幸せになるのよ。巫女だからといってすべてを1人で背負わないで

――今だってあなたにはあの人がいる。エイリークもよ。きっとあなたを助けてくれる人はこれからたくさん現れてくれるわ

「あ……」

「エイリアの願いは私の願い。エイルシア、封印の儀を前にして今のお前は幸せだったのか？」

父はずっと心配していた。だから病床の身で立ち上がったのだと理解した。

「……しあわせです。決まっているじゃないですか」

エイルシアは涙をこらえる。父にはしっかりと伝えたかった。

「私にはお父様がいる。エイリークもよ。国の人だって私を悲しんでくれた」

憐れんだと思い込んだのはエイルシアだ。彼らの顔を思い出せば

胸が苦しい。

私はひとりじゃなかった

「私は幸せ。例え世界が私を救わなくても、私を想う心はもう十分に私を満たしてくれる」

――たとえ世界が貴女を救わなくても、貴女の幸せを願う人は必ずいる

思い出した。ミコトと名乗る彼女はあの時そう言ったのだ。

確かにいた。エイルシアが気付かなかっただけで想ってくれる人はたくさんいた。

あの時のエイルシアは彼女の言葉を信じなかった。

――だから忘れないで

夜を守る魔女は人の為に魔法を使い、使い魔を寄越し、世界に喧嘩を売るのだと。

優真に出会った今だからこそエイルシアは彼女の話を信じることができる。

話してくれたのは再生と再成、２つの世界を繋ぐ魔女の話。
その魔女はひとつの魔法で神や魔神から人を守り、それに《世界》から人を護ってきた。
それは世界を跨ぎ、人と人を繋ぐ出会いの魔法。
召喚術
わかったのだ。自分の為に少年を喚んだのは彼女なのだと。
「ユーマさん……」
魔人と戦う少年をエイルシアは締めつけられる思いで見つめた。
「あの少年はお前の《騎士》か？」
「違います」
ラゲイルはエイルシアがきっぱりと否定するのが意外だった。
「私が巻き込んでしまった。私のせいでこうなってしまった。私は……ユーマさんに戦って欲しくなかった」
「……」
守ってもらう資格がないともエイルシアは考える。

それにエイルシアはあのしろい少女のことを知っている。だからわかる。

「ユーマさんが戦うのはきっと《あの子》のためです。そうあってほしい」

優真はましろの時のようにただ何もせずに泣きたくない、それだけのはずだから。

失ったものは戻らない

それを知っているから少年は戦うのだと

「そう。だから私は……」

エイルシアは優真が護身用にと渡してくれた金属板と《守護の短剣》を強く握りしめる。今度こそ覚悟するのだと。

命を懸けて魔人を封印することでも倒すためでもない。戦う為に。

ここにいなくても少年を想い、見守る少女がいる。

なにもできない少女の為にも自分が代わりに戦わねばならないとエイルシアは決意した。

優真を守るために

＋＋＋
優真の戦い
＋＋＋

「うあああああ！！」

先攻、というより優真の行動はラヴニカよりも早かった。手にした小さな玉を床に叩きつけたのだ。

それは煙玉。立ちこめる煙は魔人の視界を奪う。

「子供騙し」

ラヴニカは邪なる風の魔人。煙幕を容易く《突風》で吹き払うがその時には優真は姿を消していた。

いつの間にかラヴニカの側面、壁際まで移動している。

「《高速移動》？　魔術を使えたか」

優真は何故か壁を蹴りつけるとそのままラヴニカに向かって駆け出した。

ラヴニカは構わず優真に攻撃。放たれる《邪風弾》を優真は躱すことができなかったが、腰のデッキケースから《キュア》のカードを引くと体に当てすぐに中和した。

優真はさらにカードを引き、手にしたままラヴニカに詰め寄ろうと再び走る。

「まさか《符術師》か？」

符術師とは東国方面に存在する特殊な魔術師系クラスの１つである。札を使った置換術式によるトリッキーな戦術を得意とする。優真は東国ではよく見られる黒髪なのでラヴニカがそう思うのも無理はない。

だだし符術師の札は即効性がない。優真の『隠していた魔力』を感じたことでラヴニカは、《病魔》の魔力を中和できるほどの《魔法使い》と少年の事を推測した。

その証拠に試しに放つラヴニカの魔術攻撃を優真は手にした札で防いでいる。

吹雪は炎の壁を展開して相殺し、雷撃はなんとグローブをはめた右の掌で打ち払った。《病魔》の瘴気は受けるとすぐに中和している。

さらに優真は反撃に出た。投げ放つ炎や雷を纏う札をラブニカが風の防壁で防ぐのを見ると、今度は風を切り裂く札を投げる。

魔人の風を突き破るほどの攻撃はラヴニカを掠めた。

「対風属性の高位術式、《裂空刃》と同等か。……楽しい、楽しいのう」

笑う。魔人は笑う。優真が善戦するほど力を使い、ラヴニカは狂気を抑えきれなくなる。

「……」

「もっとじゃ。もっともっと我を楽しませよ」

「……くっ」

絶対的な力の差があるラヴニカは優真で遊んでいるにすぎない。

優真はどうにかしてラブニカに近づこうと走り、またそれだけしか考えられなかった。

＋＋＋

優真が目覚めた特異能力。それでラヴニカに有効打を与えるには接近する必要がある。

その為の手段、優真の武器はグレードアップされた『おもちゃ』と光輝達の装備（ナイト・ファミリア）だけ。魔人を相手にするには全く足りない。

特に主力となる魔法カードの消費は激しかった。

これは回路紙（サーキットペーパー）と呼ばれるものを投擲しやすいように特殊なラミネートを施したもの。回路紙に付与された魔法は刻まれた《魔術回路》を循環することで効果が持続、保存することができる。

光輝が回路紙に組み込んだ術式に優真の姉、優花が付与した魔力は強力だった。カードの1枚1枚が魔人の攻撃を相殺するほどの魔力が込められている。

しかしカードを使った魔術戦闘は回数に限度がある。回路紙のもう1つの特性として「魔術回路に魔力を通すだけで魔法を発動できる」というのがあり魔力を補充すれば再利用できるのだが、今の優真は使い捨てにするしかない。

60枚1組のデッキケースを2セット用意した優真は10分足らずで1組を使い切り、もう1組も半分しか残っていない。

優真の装備はラヴニカに少し近づくだけで大きく消耗していく。

ラヴニカが風で瓦礫をぶつけにきた。上手く避けても障害物となりラヴニカへ近づくのが困難になってしまう。

やむを得ず優真は消しゴムを取り出した。

《文房具セット・インパクトイレイサー》

光輝特製の暗器。超反発素材のゴムをばら撒くように投げて瓦礫にぶつける。

消しゴムはその何百倍もの体積のある瓦礫の衝撃を吸収し、逆に跳ね返した。

障害物を退かして優真は前へ進む。

ラヴニカの《邪風刃》。それは巨大なカマイタチで優真は横に躱すことができない。

優真は咄嗟に右手を上げた。袖口からワイヤーを射出、地下とは思えない高い天井に楔を打ち込む。

ワイヤーガン。高い所に昇るだけだった『おもちゃ』は実戦仕様に改修されている。急速で巻き上げて上昇することで優真はカマイタチを躱す。

これが《高速移動》の正体。最初の煙幕はこれを悟らせないため。

「小賢しいぞ！」

もちろん天井にぶら下がった優真に追撃がくる。優真は手首を捻るワンアクションでワイヤーを切り離すと、左足のワイヤーを床に向けて飛ばし高速で空中移動、ラヴニカの近くに着地した。

前へ。あともう少しだけ、前へ。

しかしあと少しのところで優真に隙ができた。着地時の硬直と足首のワイヤーを切り離す僅かな隙。

「この距離なら外さん。《邪風…」

「ストーム・ブラスト！」

《旋風砲》の竜巻がラヴニカの術式の発動を邪魔した。しかし阻止したのは優真ではない。

後方にいる……

「で、できた。魔法でもゲンソウ術でもないのに……」

驚くエイルシアだった。手には「へ」の字に曲がった金属板を手にしている。

それはガンプレート。選択されたカートリッジは風属性放射攻撃魔法弾

《ストーム・ブラスト》

優真は手持ちの中で強力な武器を彼女に預けていた。

ガンプレートは魔術回路を応用し光輝が製作した魔力を持たない人間が魔法を撃つための魔術装備、『杖』なのだ。扱い方と魔力カートリッジがあれば誰でも使うことができる。

護身に預けた優真だったが、エイルシアは優真を守るためにそれを使った。

魔人の目を引き付けることを承知した上で。

「邪魔しおったな、小娘ぇ！！！」

近づく優真に構わずエイルシアを攻撃するラヴニカ。

「シアさん！」

放つ魔術は《邪風刃剣》。邪なる風の魔剣をエイルシアに向けて投げつける。

ガンプレートを使いこなせるわけがなく、魔力のないエイルシアに防ぐ手がない。

「どきなさい」

エイルシアの前に出るラゲイル。今こそ《騎士》の本懐を成し遂げる時。

彼の長剣に風が集まる。

纏う風は渦を巻き吹き荒れる。

使いこまれた『この技』の竜巻の集束率は高く、放たれた時の衝撃は『彼女』の技に比べれば何倍にも跳ね上がる。

この剣を『彼女』に伝えたのは父である彼なのだ。

《旋風剣・疾風突き》

ラゲイルは《邪風刃剣》を正面から撃ち砕いた。無理をしたのかそのまま膝をつく。

「お父様！」

「大丈夫だ。……やはり私にはこれしかないな」

自分の長剣を見ては苦笑する《風邪守の騎士》。その間にとうとう優真は辿り着いた。

彼女のもとへ。

「ラヴニカさん！」

「……何故じゃ」

「！？」

魔人は苛立った。優真を守ろうとしたエイルシアに、そのエイルシアを庇ったラゲイルの姿に。

「お前たちはいつもそう……1人ではない。皆で庇い合い、助け合おうとする。独りの我を相手にお前らは……」

膨れ上がる魔力。ラヴニカの異変に優真は防御用のカードを取り出す。

恐れを抱いて踏み込むチャンスを見逃してしまった。

「我は……ずっと独りだというのに！！！」

爆発。

内に秘めたラヴニカの感情が彼女を中心に暴風となって何もかも吹き飛ばそうとした。

ラヴニカが４００年も抱え込み抑え込んできた狂気の正体。

孤独。

「きゃあっ！」

「エイルシア！」

エイルシアはラゲイルに庇われながら吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「ぐあっ！　……ラヴニカさん」

優真は爆心地の近くにいたがカードの防御で直撃だけは避けた。

今は最後の１本、吹き飛ぶ直前に伸ばした左腕のワイヤーを床に打ち付け、暴風に身体を晒しながら何とか吹き飛ばされるのをこらえている。

「我は風、我は自由！　なのに、なのにいぃぃぃぃ」

止めなければ。今度こそ狂気に呑まれラヴニカは魔人として本当に覚醒してしまう。

（どうにかして近づかないと……）

何とか注意を逸らしてワイヤーを巻き取るしかない。

暴風の中ではカードを投擲できない。代わりに優真はシャープペンシルを飛ばす。

《文房具セット・ロケットペンシル》

放たれたペンは火を噴いて加速。推進力のあるこれならばラヴニカに届くはず。

「ああっ、あ。アアーーッ！！」

しかしラヴニカの暴走は止まらない。

雷撃が、吹雪が、真空波が暴風と共に無差別に放たれ、優真にも襲い来る。

「あっ……」

そして優真の攻撃が届く前に頼みの綱のワイヤーが切られた。

＋＋＋

１－０８　風森の勇者（前書き）

エイルシア編ラスト

108　風森の勇者

＋＋＋

ワイヤーを切られ優真は吹き飛ばされる。折角詰めた距離が一瞬で離れていく。

優真は装備のほとんどを消費してしまった。ここで離れればラヴニカに近づくことができない。

もうラヴニカを止められない。

（届け……）

届かない

（届けよ）

無理だ

吹き飛ばされるのは一瞬。それが優真には長く感じる。

優真は強くなりたかった。もう泣きたくなかったから。

優真は強くなった。あの時よりも、兄が優真の願いを受け止めこ

こまで鍛えてくれた。

でも届かない。

（俺はただ……）

誰かを守れるようになりたかったのに――

――そんな甘いことを言っているのか？

（――！？）

そうだ。お前には無理だと彼は言った。

――弱いくせに。誰かをなんて守れるはずがない

（あ……）

――切り捨てろ。そんなちっぽけな力、できることなんてたかが知れてる

（光輝さん、でも俺は）

いつも言っていた。１人でできることはない。誰も守れずこの先もただ泣くだけだと。

だから諦めろと。

（俺は……）

――抱えきれない余計な想いを捨てろ。誰かをなんて考えるな

（俺は！！）

――そうすれば今のお前でも

「俺はっ、シアさんを助けたいんだっ！！！」

１人だけなら、本当に大事なものくらい助けることができる

光輝はそう優真に言ったことがある。

＋＋＋

風森の勇者

＋＋＋

「あああああ！！」

優真は手を伸ばす。届け、届けと手を伸ばす。

これしかない。ただ諦めないだけ。

優真に奇跡を起こす力はないけれど、想いを絞り一層強くした想いが優真に手を伸ばさせる。

「ユーマさん！！」

エイルシアは奇跡を見た。

この世界、再生の世界で起こせる奇跡はゲンソウの力。

――うあー！

想いを現す力は彼女に力を与える。

「!?　あ…うあああーーっ!!」

優真は手を伸ばす。届け、届けと手を伸ばす。

彼の背中を押す大きな力を信じて優真は手を伸ばし、ラヴニカに向かって突撃する。

優真の背中から放出する魔力。それははまるで『しろい翼』のように広がり、優真を前に押し出す。

伸ばした手が届くように。

そして手は届いた。優真はラヴニカに体当たりをするようにぶつかり、もつれ合って2人して転がる。

「っ!?　なんじゃ、貴様はっ!!」

突き放して立ち上がる魔人。優真を睨み、それから驚いた。

同じく立ち上がる黒髪の少年。だけど彼の髪は変化していたのだ。

しろい髪の少年。

「あきらめるもんか」

ラヴニカを見る。強い意志を秘めた瞳もまたしろい色をしている。優真のそれはまるで彼の兄のような《変身》だった。

「誰じゃ？」

「弟だ」

ラヴニカにわかるはずがない。だけど優真は力強くそう言った。

「俺は真鐘光輝と古葉大和の弟なんだ。だからあきらめるもんか」

知っている。1人では何もできなくて誰も守ることができず、ずっと泣いていたのは光輝だと優真は知っている。

《梟》が今の彼になるまでずっと諦めなかったのに、彼の弟でありたい優真がたった1度で諦めるわけにはいかなかった。

たとえ魔人を相手にしても絶対に。

優真が手にした武器はシャープペンシル1本。それだけ。

「うおおお！」

「小僧！」

突進する優真を近づけまいとラヴニカは攻撃魔術を放つ。それをしろい翼が迎え撃つ。

雷撃には同じ雷撃、吹雪には火炎弾で相殺させる。

必死だった優真はこのことに、自分の変化を含めてまだ気付いていない。

「ましろさん。あなたは……」

エイルシアはしろい翼を見て涙を流した。

彼女にはあのしろい少女が少年を守っているようにしか見えない。

（あの子も魔法使いです。彼が奪ったあなたの魔力を使い、魔法を繰り出しています）

「風森？」

《守護の短剣》を通して精霊がエイルシアに語りかける。彼女もまた結末を見守っていた。

（あの子は私に近い存在。そう。この世界なら強く望めば《幻創》して彼に力を与えることができる）

「風森と同じ存在の力……《精霊使い》」

その言葉に風森の精霊は優しく頷いた。

同時に精霊の彼女は少年に力を与えるほどの強い繋がりを持つしろい少女を羨ましくも思った。

＋＋＋

激しい攻撃を掻い潜り、遂に優真はラヴニカと近接戦に突入する。

ここからが本番。

ラブニカは稲妻を纏う手刀を放ち、優真はグローブの掌でそれを受け流す。

「ぐっ、まだだ」

優真はさらに前へ一歩踏み込む。

「雷が効かぬのなら！！」

ラヴニカの冷気を纏う手刀。優真はその振り下ろされる手刀から斬殺される自分の姿を確かに見た。

優真は見極める。

これがきっと自分への――最後の一撃。

――戦闘ならどんな時も『一撃で死ぬ』

思い出すのはもう1人の兄。

――でもその最後の一撃というやつを乗り切ることができたら…

…一発逆転の一撃を放つのはここしかない。これが俺の……

「あああああ！」

優真は叫ぶ。

3年だ。3年間も優真は見てきた。大和はいつでも本気で自分に向かいあってくれた。

だから優真は知らない。

大和の、《狼》の拳以上の一撃を

「遅い！！」

優真の身体はラヴニカの渾身の一撃に反応できた。身体を捻りながらさらに半歩前へ。

手刀を躱しながらラヴニカの腕にシャープペンシルを突き刺す。

パリッ！

「ぐっ！？」

刺されたラヴニカの腕が僅かに痺れる。

その芯もまた光輝特製。

《文房具セット・スタンニードル》

隙ができた。優真は右の拳でラヴニカのみぞおちを思いっきり殴る。

ババババッ！　バチッ！！！

優真の拳から稲妻が疾る！

「がはっ！　き、さま」

「どうだっ！！」

これこそ《梟》の切り札。

スタングローブ。

雷撃の魔術回路を組み込んだグローブの掌は雷撃を弾くと同時に急速充電が可能。優真の世界では電磁ロッドが主流なのでこれが重宝される。

受けた雷撃は2発。優真は過剰充電されたグローブの甲から一気に放電させたのだ。ラヴニカは強化系ではないので電撃は大きく効いた。

ふらつくラブニカの視線が優真とぶつかりあう。

――我を殺してくれるか？

彼女の瞳は紫だった。狂気の色がないことに気付く優真。

長らく封印された《病魔》の魔人はどんな形でも自由になりたかった。それだけが彼女の望み。

――俺は止めたかっただけです

優真はしろい瞳でラヴニカに伝える。

自分の狂気とずっと戦ってきたラヴニカ。独りだったと叫んだ魔人を優真は助けたいと思った。

（光輝さん……）

優真には1人しか助ける力がないと兄は言ったけれど今は1人じゃない。優真はなぜかそう感じる。

だからもう1人くらい助けることができないのかと思った。

優真は信じた。彼女『も』救う結末があることを。

彼女の狂気を止める。今の優真にはその切り札があるのだから。

優真はラブニカの後頭部を掴み自分に引き寄せ――

「んむぅ！？」

そして口づけた。

《魔力喰い》発動。

この世界で目覚めた優真の特性スキル。魔力を吸収する特異能力。

魔法弾などの魔力を直接取り込むことのできる力。軽減・中和・相殺・反射・無効化など数々の魔術防御の中で吸収は最強とされる。

力に目覚めたばかりの優真は受けた魔力の数パーセントしか吸収できない非効率なものだが、『内部から直接吸収する』ならば高い効果が得られることがエイルシアによって実証された。

狂気の根源は魔力だ。だから優真は魔人の魔力を奪う。

吸い上げる。

喰らう。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……長いな」

ラゲイルは長い時間くっつきあう2人を見て呟いた。

「複雑です」

エイルシアは思いだす。

魔力を根こそぎ奪いつくすアレは全身の力が抜けるほどに骨抜きにされる。

もうなんかすごいのだ。

「ぷはっ、ごちそうさま！」

「……きゅう」

魔人は倒れた。かわいらしい声を出して。

「……」

……もう《アレ》は使わせないようにしよう。

エイルシアは固くそう誓った。

＋＋＋

「大丈夫ですか？」

「うん。なんかまだいけるって感じ」

いつの間にか優真の髪と瞳は元の色に戻っていた。もう大丈夫だとましろも思ったのだろう。

エイルシアは心の中で感謝する。

優真は桁外れの魔力を吸収した。その魔力を持ちながらも彼は平気のようだ。

「すごい魔力許容量ですね。《魔力喰い》はみんなそうなのかしら？」

「それよりどうしよう？　この魔力、俺使い方わからないんだけど」

ユーマの有り余る魔力を見てエイルシアのは寂しく微笑んだ。

「それだけの魔力があれば《送還》の魔法が確実に発動できます」

思えば魔人の魔力の確保することは最初からそのつもりだったことをエイルシアは忘れていた。

「ありがとう。あなたのおかげで国は《病魔》の呪いから解放されました。私も《風邪守の巫女》の役目から解放されます。……あとはあなただけです」

エイルシア1人では無理だった。少年がいてくれたから得られた結末。

もしも優真に恩を返せるとしたら、それは彼を元の世界へ還してあげること。

寂しいけれどこれしかない。

「あなたの魔力を媒体に《送還》を発動させます。ユーマさん。異世界の、この国の、……私の勇者様。あなたのことは忘れません。だからどうかお元気で」

2人で過ごした日々が1番幸せだったと彼女は思う。

それでも別れを告げるエイルシア。

優真の事情を聞いたラゲイルもまた王として頭を下げた。

「その前に試したいことがあるんだ」

そう言って優真は残された最後の女神像の前に立つ。

「エイリア」

「結局、お母様はこのままでしたね」

「……」

解放されなかった先代の巫女、王妃の像に優真はそっと触れる。

「ユーマさん？」

「この世界のゲンソウ術ってさ、誰でもできるの？」

「……ええ。そこまで万能の力ではないんですけど」

そう前置きしてエイルシアは戸惑いながら質問に答える。

「たとえば加熱調理器を使った時。ユーマさんは料理の出来上がりをイメージして《加熱》しましたね。それは《補強》。ゲンソウ術の基礎です」

《補強》は既存の術式にイメージを付与する《幻操》の力。強いイメージは術式に大きな変化を与えて《現操》するのだ。

「なら《これ》の力を魔力で増幅させることもイメージでできるのかな？」

「それは？」

ユーマはデッキケースから残ったカードの内1枚を彼女に見せる。

回路紙に刻まれ付与された魔法は《ディスペル》。魔法を解く魔法。

優真は女神像にそのカードをあるだけ貼り付けて念じる。

「これだけの魔力があるんだ。それに姉さんが組み込んだ術式に光輝さんが作った魔術回路……もってくれよ」

イメージする。自分が持つ膨大な魔力が回路紙に刻まれた魔術回路に注がれるのを。

イメージする。回路紙に組み込まれた《ディスペル》の効果が何倍も増幅されて魔術回路を循環する流れを。

イメージする。女神像から解放される女性の姿を。

「これは……」

優真は再び《変身》した。やさしい、しろい魔力が回路紙のカードに送られる。

「ユーマさん。……ましろさん」

ましろもまた優真を手伝おうとしている。

優真の望み、エイルシアの願いを叶えるために。もう1度だけ翼を広げる。

そして優真はイメージする。

すべてがおわったあとできっとみせてくれる

あのひとの笑顔を。

「封印はもういらない。だから……壊れろ！！！」

《補強》された魔法の光が弾ける。

しろい少年は、その光で風森の闇を払った。

＋＋＋

「……っ、エイリアっ！！」

崩れ落ちる父の姿をエイルシアは見ることができない。

「……ああ……」

エイルシアは涙で滲むこのしろい光を決して忘れない。

（ありがとう）

精霊は聞こえることもない声で少年に感謝した。

砕けた女神像。それと少年が支える女性をエイルシアは見ることができない。

もう泣きっぱなしだったとあとで彼女は語る。

あとで笑顔で話すことができた。

「……ああっ！！」

彼女が本当に望んだ結末を少年が見せてくれたのだから。今だけは思いっきりエイルシアは泣いた。

エイルシアはこの世界に現れた少年のことを絶対に忘れない。

少年の名は

（ありがとう……ユーマさん）

＋＋＋

１－０９　妹姫の帰省（前書き）

故郷にて彼女は少年と出会う。

1－09　妹姫の帰省

＋＋＋

月陽高校、生徒会室。

「……ふむ。それが君たちの馴れ初めかい？」
「何が馴れ初めよ。久しぶりに家に帰ったらアイツが住みついていた。それだけよ」
「そして君の姉上と3角関係、というわけか」
「そんな話はしてない！！」

エイリークはこの生徒会長が苦手だった。

真鐘光輝の後輩を自負し、御剣優真の先輩と名乗るこの女傑が。

事の始まりは何故か1人お茶に誘われたエイリークが彼女の巧みな話術にはまり、いつの間にか少年との出会いを話すことになったことだ。

それはもういろいろとごまかしたけど。

「しかし後輩がいたから今の君がいるのは事実。……何も思うところはないのかい？」
「そのセリフはそのまま返すわよ。いつまでその先輩キャラ続ける

つもり？」

もうそれなりの付き合いだ。エイリークも彼女の素を知っている。

でも彼女は目を細めてエイリークを見た。見つめる瞳の色と光の強さはあの少年によく似ている。

「私はただ誇りたいんだよ。あの人の後輩でいることを。彼の先輩でいることも」

「……」

その言葉に含まれる深いものにエイリークは何も言えなくなる。

彼女はどこかの王族でも騎士でもない。剣も持てない普通の女子高生でエイリークと同じ年の少女だ。

しかし彼の後輩として立ち上がる時、彼女は英雄となる。そしてここでは少年の先輩として彼を導いてきた。

エイリークから見ても大した人物だった。あの少年が彼の兄達を除けばもっとも信頼し、頼っていたのはこの生徒会長なのだから。

「というわけで今度は私と後輩の出会いを語ろう。入学式のあの日、当時の私は風紀委員で……」

「……ただ自慢したかったのね」

でもってやっぱり彼女は変わり者だ。

（何せアイツの先輩だからね）

「聞いているか？　いいか。あの時の猛はそれはもう生意気で……いや、今もそこは変わらんな。それで……」

エイリークは何度目かわからない生徒会長の話に付き合いながら、少し昔の事を思い出していた。

《おわったあと話、それから続く話より》

＋＋＋
妹姫の帰省
＋＋＋

エイリーク・ウインディは親友に騙された。

「急ぎなさい、ミサ！！」
「待ってってば、リィちゃん。落ち着いて」

エイリークはそうもいかない。一刻も早く《風森の国》へ。

姉のもとへ帰らなければならない。

十十十

エイリークが学園の春季休暇に入った直後のこと。同郷の親友であるミサが彼女にある提案をした。

「リィちゃん。せっかくの休暇だからこのまま旅行に行こうよ。《友園（ともぞの）の国》の遊園都市巡り行きたいって言ってたじゃない？」

「風森の逆方向よ？　それにこの時期に予約なしで行くなんて無謀よ」

「ふっふーん。これを見よ、リィちゃん！」

ぺかーっと光るエフェクト。ミサが取り出したのは2枚のチケット。

「シア様から送られたきたフリーパス。これさえあればわたし達無敵よ！」

「なんで姉さまがアンタに送るのよ。……しょうがないわね」

正直ミサの提案に乗り気だったエイリーク。いろいろあって今は気分を入れ替えたかった。

姉姫にはありがたくも申し訳ないと思うけれど、沈んだ気持ちのまま故郷には帰りたくなかったのが本音だ。

姉さまにはお土産をたくさん買っていこう。とエイリークはミサと共にそのまま遊園都市に泊まりがけで遊びに行くのだった。

このあと、エイリークは自分の《直感》が反応しなかったことを

後悔することになる。

遊園都市巡りの3日目にしてやっとミサの様子がおかしいことに気付いた。

問いただしたエイリークは驚愕。

故郷で流行り出した不治の風邪。風森の姉姫、エイルシアは《風邪守の巫女》として原因たる魔人を再封印、もしくは倒す覚悟を決めたというのだ。

ミサが提案した突然の旅行。すべてはエイリークを風森の国に近づけさせない為の、姉と親友が仕組んだ時間稼ぎだった。

「どうしてアタシに黙っていたのよ、ミサ！　……姉さま！！」

エイリークは泣いた。自分の不甲斐なさと、ちいさな頃に別れた母を思い出して一晩泣いた。

その後の行動は早かった。ミサを連れて風森の国へ急ぐ。

ある時はミサを引きずり、ある時はミサを背負い、またある時はミサを《旋風剣》で吹き飛ばしてでも故郷へ急ぐ。

「いいから前に飛びなさい」

「……ひどいよ、リィちゃん……」

ぶっちゃけると学園では普通科にいる親友はエイリークのお荷物だったらしい。

それでも最短の時間で風森の国に辿り着いた2人。

《門》の都合上、南の離れの町から入国した。

＋＋＋

久しぶりの故郷。2人が見た町の様子は意外にも普通だった。

「あれ？　何も起きてないのかな、リィちゃん？」

店から聞こえてくる売り子たちの声。談笑する女性の声。郊外へ工事に向かう男達の声。

それなりに活気のある町の風景。

「……わからない。城の中心から被害が広がるはずだから安心できないわ」

「おや？　もしかして妹姫さまですか？　おかえりなさいませ」

エイリークに声をかけたのは初老の男性。その声に町の人は彼女に気付き「おかえりなさい」と声をかけてくれる。

「ええ、ただいま。ねぇ、聞きたいことがあるのだけど」

「魔人の封印が解けたって本当ですか？」

エイリークの表情に余裕がない。なのでミサは質問に割り込んだ。

愛想良く。

男は気にしてないと微笑みながら答える。

「本当です。でもエイルシア様が見事に役目を果たされました。…きっとあの少年も」

「っ！」

エイリークは「役目を果たされました」のところで走り出す。

「リィちゃん!?　ごめんなさい、失礼します」

ミサは慌てて追いかけた。

（まさか、まさかまさか）

――遅かったの？

エイルシアの役目。それは彼女を生贄とする魔人の封印。

（嘘。嘘よ！）

母が石像化した日のことを思いだす。あの日からエイリークは聖堂には入ったことがない。

（あんな思いをしたくなかったからアタシは……）

エイリークは城へ突撃する勢いで城門をくぐった。

＋＋＋

「おお、エイリーク。おかえ……」

「邪魔よ！！」

「り……」

中庭を突っ切るエイリーク。庭いじりをしていた父王に気付かなかった。

「……これが噂に聞く……反抗期」

ラゲイルをへこませながらエイリークはまっすぐ聖堂に向かう。

地下の聖堂。そこで見たものは壁と床が無残にも削られ、砕かれた跡地だった。

「酷い……」

あるはずの2体の女神像がない。ここで凄惨な戦いがあったのだとエイリークは思った。

母の像がなくなったことにエイリークはショックを受けるも、町の様子と魔人の像がなくなったことに1つの希望を見出す。

「もしも魔人を倒したならば姉さまは生きているかもしれない！」

エイリークは姉を探しに聖堂から外へ出た。

＋＋＋

「……姉さま」

扉をぶち破るように姉の部屋へ飛び込むエイリーク。

そこで見たものはベッドの上で眠る女性の姿。

顔には白い紙が被せてある。顔は見えないが、あのはちみつ色の髪は姉のものに間違いない。

「そんな、そんなこと……」

相討ちだったの？　エイリークは膝から崩れ落ちる。

「間に合わなかった……アタシは……姉さま」

涙を浮かべるエイリーク。悲しみと後悔だけが残った。

とその時、

「失礼しまーすっと」

「な！？」

突然黒髪の少年が部屋に入ってきた。

少年は略式だが使用人の服を着ている。しかし女性の、この国の姉姫様の部屋に躊躇なく入ってくるのは問題があるのではないか。

そんなことも気にもせず、驚くエイリークにも見向きもしないで少年はベッドに近づいた。

「やっぱり効果が切れていたな。《回路紙》の交換しなきゃな」

ベッドに眠る女性に被せてある紙を取り上げる。顔を見てエイリークはまた驚く。

「か、かか、母さま!?」

「ほい、ヒール」

少年は新しい紙を母の額にぺたりと貼り付けた。呪文と共に輝く紙。

「うん。この大型サイズは持続時間が長いから半日はもつな。さすが姉さん」

「な、なななななっ!?」

もう訳がわからない。ここにはエイリークに事情を説明してくれる人は誰もいなかった。

「ん？　きみ、だれ？」

ぷちっ

きょとんとする少年を見て、エイリークの錯乱は頂点に達した。
それは理不尽な怒りとなってすべて吐き出される。
「……それはっ！　アタシのっ！　セリフだぁあああ！！！」
やつあたりだった。
「リィちゃん!?」
「ユーマさん!?」
エイルシアを連れて駆け付けたミサが見たものは、エイリークの右ストレートで壁にめりこむ黒髪の少年の姿。
エイリークとユーマ。
2人は出会ったときからこんな感じ。
＋＋＋
ミサがエイルシアを連れてきてくれたのは正解だった。暴れそうなエイリークを彼女が落ち着かせ、事情をすべて説明してくれた。

「ごめんなさい。お母様の部屋は長年使っていないものだから私の部屋に寝かせていたのよ」

封印から解放された王妃、エイリアは弱り果てていて未だ眠り続けている状態だった。

ただしユーマの持つ回復系のカード、《回路紙》を使い続けることで最近になって回復の兆しが見られるようになった。王妃の目覚めの時は近いようだ。

「どうして魔人と戦うこと黙っていたの？　アタシだって」
「……ごめんね。リィちゃん、私が間違っていたの」

エイルシアは妹をやさしく抱きしめた。

「私がいなくなってもあなたが無事でいれば国は大丈夫だと思っていたの。だから私は思い切って魔人と戦う覚悟ができた」
「姉さま……」
「でもそれも間違いだった。私の独りよがりの考えでしかなかったの」

沈み込む姉の声。

「魔力の狂気に囚われた私は『魔人だったあの子』と向き合う事ができなかった。私のせいで結局ユーマさんもお父様も巻き込んでしまった」
「？」

魔人と戦ったときに何かあったのだろうか？　言葉の意味がわか

らなかった。

「でもねリィちゃん。もう大丈夫。《病魔》の呪いは解けたしお母様も解放された。私達はみんな無事。これ以上のことはないわ」

晴れやかな笑顔。それはエイリークがずっと見たかったものだ。

「それもこれもユーマさんのおかげ。……ユーマさん？」

エイリークに殴られたショックで優真はへこんでいた。

「……ラヴの奴の手刀は見切れたのに今のは全く見えなかった……俺、ちゃんと強くなってるのかな？」

部屋の隅で「の」の字を描く。

「……ユーマさん、大丈夫ですか？　紹介しますね。彼女はエイリーク・ウインディ。私の妹です。隣はミサ・クリス。リィちゃんの友達です」

「違いますよシア様。わたしはリィちゃんの親友兼専属侍従です」

ミサは自分の肩書き（自称）に誇りを持っている。

「ふふっ、そうでしたね。相変わらずね、ミサちゃんは」

続けてエイルシアは黒髪の少年を2人に紹介した。

「彼はユーマ・ミツルギさん。この国と私、それに『あの子』を救ってくれた恩人です。しばらくは客人として城に滞在しているので2人とも休暇中は仲良くしてくださいね」

エイリークとミサは姉姫の言ったことが信じられない。

「コイツが恩人？　そんな風に見えないわ」

「私達より年下みたいです。強いんですか？」

怪訝な顔をする2人にエイルシアは苦笑した。

「見た目よりすごいんですよ、ユーマさん。……ええ、本当に」

「？　シアさん？」

何を思い出してか、赤い顔してそんなことを言うエイルシア。

優真を含めた3人は理解できない。

「……はっ、何でもないの。……もうすぐお茶の時間ね。ミサちゃん、帰って早々悪いのだけど」

「任せて下さい！　最高のクッキー、焼いてきますね」

ミサはおまかせあれ、と言って厨房へ走り出した。

＋＋＋

午後のお茶をみんなで楽しむことにした。

「中庭もだいぶ見られるようになりましたね、お父様」

「ああ。エイリアが目覚めるまでにはきっと間に合わせるさ」

中庭を眺めて母の話をするエイルシアと国王ラゲイル。

「……うまい。このサクサクした感じは焼きたてじゃできないはずだよ。すごいや、ミサちゃん」

「クッキーを褒めてくれるのはうれしいのだけど、ちゃん付けはやめて欲しいな。わたし君より年上だよ」

「いやどう見たってミサちゃん、て感じなんだけどな？」

「……どうせ私はちんちくりんの童顔ですよ」

優真はしょんぼりするミサと一緒にクッキーを齧る。

「うむ。おかわりじゃ」

「はい、どうぞ」

「……」

エイリークは姉に聞きたいことがあった。

「ねえ、姉さま」

「なあに、リィちゃん？」

「姉さまの膝の上でクッキー食べてるその子、誰？」

エイルシアは7、8歳くらいの女の子を膝に乗せてクッキーを食べさせている。

紫の髪と瞳の女の子。

「ラヴちゃんです。娘です」

「な、なんですって！？」

とんでもないことを言われた。

「誰の？　い、いや、誰との！？」
「それはですねぇ」
かわいくてたまらないという感じで女の子を抱きしめて、意味深に黒髪の少年の方を見る風森の姉姫様。
「うん？」
エイルシアの視線に気づく優真。見つめあう形になる2人。
ありえない。でもまさか、とエイリークの錯乱ゲージが再び頂点に達する。
「何よ、なんなのよ……それってなによーーーっ！！！」
エイリーク絶叫。
「違うぞ」
抱きしめられて迷惑そうな女の子の短い突っ込みは、優真を掴み、暴れ出した彼女に届かない。
女の子の名はラヴニカ・C・ウインディ。
ウインディ家の3女にして養女。

風森の国の姫君は次女が知らぬ間に3姉妹になっていた。

＋＋＋

１－１０　妹姫の憂鬱（前書き）

憂鬱：気がはればれしないこと。　話的にあってますか？

１－１０　妹姫の憂鬱

＋＋＋

「《召喚》の波動が西で確認されました」
「ほう。《西の遺跡》からか？」
「いいえ。遺跡よりさらに西、おそらく《風森の国》と思われます」
「……ふん。《銀雹》の同盟国か。奴らは《召喚》を成功させたと思うか？」
「正直わかりません。ただし、西の国で《召喚》が可能といえるのは風森しかありません」
「……根拠は」
「《風邪守の巫女》、エイルシア・ウインディ。彼女は優秀な《魔法使い》です。そして彼の国に封印されている《魔人》。その膨大な魔力を利用する手段があるならばおそらく」
「……わかった。風森への調査隊を編成せよ。指揮は貴様が、残りは傭兵を使え。くれぐれも我らの存在は隠せ」
「……承りました。我が主よ」

男は『牢獄での謁見』の後、西へと向かった。

＋＋＋

翠の瞳の少女は剣を抜いた。

「そこまでよ魔人」

肩で切りそろえた金の髪をひとつに纏めた騎士服の少女だ。彼女は紫の髪をした女に剣の切っ先を向ける。

「威勢の良いのう、小娘。いや、《騎士》どのか？」

魔人と呼ばれた女は少女を嘲笑う。

「巫女を生贄にした封印なんて私は認めない。貴女は私が倒す」

「我の魔力を前にして粋がれるかのう？」

膨れ上がる魔人の魔力。しかし少女は怯まない。

「関係ないわ。忘れたの？　勇者は想いの力で貴女達の神を斬ったのよ」

魔力のぶつけ合いならば人が魔人に敵うわけがない。

だから人は選んだ。それは勇者と呼ばれる7つの武器。

そして武器と呼ばれた彼らはみせてくれた。想いの力、ゲンソウ術を。

「私は信じる。私の想いを。巫女は…姉さまは私が守る！」

剣士の少女は剣を構える。彼女が信じるのは今まで振り続けた剣と技、それに重ねた想い。

「……ふん、せいぜい我を楽しませろよ、小娘！！」

突撃する剣士。迎え撃つ魔人。

ぶつかり合う風と風。剣技と魔術。

これは少女の夢。

かつて剣士の少女は誓った。

――私の剣でいつかみんなを守る

でも、少女は迷う。

――でも「今」の私は何を守ればいいのだろう？　私の、アタシの剣は……

＋＋＋

妹姫の憂鬱

＋＋＋

優真とラヴニカが戦い、王妃エイリアが解放されたあとの話。

実は魔人にとって魔力は身体を構成する大事な要素である。その魔力を優真によって根こそぎ奪われたラヴニカはちいさな子供の姿にまで退化してしまった。

「魔力がない上に縮んだのは何かと不便じゃが構わん。我は自由じゃ」

――じゃから……はなさぬか！

「いいえ。こんなにちいさな子を1人にするなんて危険です。私が保護します」

――こんなに可愛いのに放っておくなんて……できません！

城を飛び出そうとするラヴニカをエイルシアは抱きしめて離さなかったのだ。

ラヴニカは元の姿でも相当の美貌と容姿だった。子供になってもそれは変わらずむしろ愛らしい。

とりあえず何か着るものを、とエイルシアが彼女の着替えを用意したのがことのはじまり。ラヴニカは今彼女のおさがりのドレスを着ている。ふりふりのドレス姿のラヴニカはまさに「お姫様」だったのだ。

人形のような顔立ちに生意気な雰囲気。紫の長い髪を無造作に手で払うその姿は「ちいさな女王様」。

風森の姉姫様のツボだった。

エイルシアは巫女であるため着飾ることは避けてローブ姿や《風邪守の巫女》の正装でいることが多く、彼女の妹も学園の制服を除けばスカートなんて履かないし普段も正装も騎士服という有様。

要するにエイルシアはおしゃれの類に縁がなかったのだ。

かわいいものを可愛がるという衝動に駆られた風森の姉姫様。飢えていたともいう。

ほかにも理由があるのだが、エイルシアはラヴニカに残ってもらいたかった。

「ならば養子に迎えて妹にでもするかい？」

――娘が増えることはいいことだな、うん

国王（この辺りから娘ラブの気配を優真は感じ始めた）の天啓ともいえる意見にエイルシアはすぐに賛成。ラヴニカはいやそうに首を振った。

「いいじゃないか。養子になるのはともかく折角の自由なんだろ？だったら3食おやつ付きの生活でも楽しんだらどうだ？」
「……うむぅ」

優真の一言にかつての《病魔》の魔人は渋々頷いたのだった。

＋＋＋

「何よ、これ」
「ん？　昼飯だけど」

エイリークが帰省した次の日。その日の昼食はなぜか優真が作っていた。

テーブルにあるのは《加熱調理器》。その上に置かれた大きな鉄板の上には炒められた肉と野菜。そしてスパゲティ。

香ばしいソースの香りがする。

「焼きそば、いや焼きパスタかな？　やっぱり代用するとなんか違うよな」
「いや、そうじゃなくて」

エイリークが気にしているのはこの状況。

現在城の中庭にいるのはエイリークにエイルシア、父である国王ラゲイル、親友のミサ、それに黒髪の少年ユーマ、そして魔人の少女ラヴニカ。

この面子が中庭で、鉄板を囲んで一緒になって昼食を楽しんでいることに違和感を感じるエイリーク。

「なんでこんなことに……」

「人数増えたし天気もいいし、今日は外で食べたいなって。バーベキューなんかしないのシアさん？」

「そうですね、私は初めてですけど。お父様はどうですか？」

「野営した時に捕えた兎を焚火で焼いて食べたことはある。ただ鉄板は持ち歩かないからな。ソースを鉄板にぶっかけるなんて豪快だ」

父王は気さくな人だった。

「うーん、単純な調理法なのにこの焦がしたソースの香りがたまらない。……やりますね、ユーマ君」

「シアよ、おかわりじゃ」

「……」

馴染んでいる。ミサまでこの環境に馴染んでいる。

エイリークは親友に裏切られた気がした。

「リィちゃん、口に合わないの？　珍しい料理だけどリィちゃん好きじゃない？　こういうの」

「そんなことないわ、ミサ。でもね」

料理に不満があるわけでない。外で食べるのも焼きそば？　の味と量にも満足している。

ただ……

「そうだよな。青のりは我慢するとしてソースやしょうゆ、からしにマヨネーズはあったのに焼きそばにかかせない《あれ》がなかったもんなあ……」

昼食を用意したのがこの「ベニショウガ」なんてよくわからないことを言う少年で、

「むぐ、もぐもぐ、ぐっ！」

「ラヴちゃん！？　水、お水！」

長年敵視していた魔人が頬いっぱいに麺を詰め込んで喉を詰まらせたちいさな女の子で、それでいて今一緒にいることはどうしても腑に落ちないエイリークだった。

＋＋＋

風森の国は復興中だ。

《病魔》の呪いが解けた今、滞っていた国交を回復させ風邪が治った国民たちは慌ただしくも忙しい平和な日々を送りはじめた。

城にも騎士や兵、文官に使用人たちが戻りだした。

城に人が戻ったその日。国王ラゲイル・ウインディはすべての国民に魔人の呪いから完全に解かれたこと、そして王妃エイリア・ウインディの解放を大々的に伝えた。

国民は大いに沸いた。

功績は《風邪守の巫女》エイルシア・ウインディ、彼女にあるとラゲイル。それはもう娘の自慢話を延々と語る。

黒髪の少年のことは本人の希望で彼の功績と名は伏せることになったのだが。

風森の民は少年のことを知っている。

「ユーマさん。今から町の巡回に行くのですけど」
「わかった。ついていくよ」

「ユーマさん、今日は国議会のほうに顔を出しますので今日のお昼は……」
「わかった。あとでお弁当持って行くよ。なにがいいかな？」

「ユーマさん！　ララ、ラヴちゃんが！！」
「……また城から飛び出したのかあいつ。わかった。一緒に探すよ」

エイルシアの隣にはいつも少年がいた。彼女が少年に笑顔を向けているのを国民は見ていた。

――姫様が笑っている

これが国民にとってどれだけ衝撃的なことなのかエイルシアは気付いていない。

先代の《風邪守の巫女》である王妃が魔人の封印にその身を捧げたその時から、彼女は人前では毅然とした態度を崩すことはなかった。少女の頃から覚悟を決めたその表情は誰が見ても痛々しいものだった。

再び不治の風邪が流行り出した時。その若さで身を捧げなければならない姉姫を不憫に思いながらも彼らは何もしてあげることができず、彼女の魔法でしか治療することができない病に侵された国民たちはその無力を思い知りただ辛かったのだ。

でも今の彼女は違う。

《病魔》の呪いが解けてもエイルシアは町の巡回を辞めず怪我や病気の治療に魔法を使い続けている。

町の人1人1人に向けて「お大事に」と声をかけて微笑む彼女に涙する人もいた。

巡回の途中に公園のベンチで少年とお昼のお弁当を食べる彼女。

ウインディ家に最近迎えられた養女を連れて嬉しそうに町を歩く彼女。

その養女が城から飛び出したのを少年と一緒に必死になって探す彼女。

――きっと幸せなんだ

エイルシアが時折こどもっぽくも無邪気に見せる笑顔が何よりもこの国が平和になったのだと実感することができたのだった。

ただひとり、彼女の妹を除いて。

＋＋＋

夜。城内の鍛錬場。

「はあっ！」

「ふん！」

エイリークは父を相手に剣の稽古をしていた。

閃く細剣。迎えうつ長剣。もう2時間は続けている。

「今日はここまでにしよう……強くなったな。単純な剣の速さなら私よりも上だよ」

「……」

息を切らしたエイリークは返事をしなかった。

それに父が褒めるのを彼女は納得していない。

「どうした？」
「正直に言って父さま。アタシの剣を」
「……《旋風剣》の制御が甘い。あの技の肝は風の集束率の高さ。小さくも強大な竜巻を想造すれば威力も剣の振り方も幅が広がる。突き技だけではないんだ《旋風剣》は」
「……」
「その突き技だが今日のお前は踏み込みが浅い。いつもの思い切りのよさはどうした？　何か悩みでもあるのか？」

しばらく黙りこんでいたエイリークだったが、父に訊ねた。

「……アタシの剣は魔人には通じない？」
「エイリーク」
「もしあの時あの場所にアタシがいたら役に立てた？　姉さまを守ることが……できた？」

ラゲイルは答えなかった。

「父さま、答えて！」
「無理だな。今のあの子ならともかく、体調が万全だとしても私が敵わないと思った相手だ。エイリーク、お前では……」
「ならアイツは、ユーマって何なのよ！　アイツなら魔人に勝てるの？　アイツなら……アイツだったら姉さまを守れるの！？」
「それは」

「いたいた。おーい、おじさん。エイリーク」

タイミングが良いのか悪いのか、鍛錬場の入り口から声をかける優真。そのまま2人に駆け寄る。

「……なんだい？　ユーマ君」
「食事の用意がもうすぐできるからってシアさんが。早く汗を流しに行った方がいいですよ」
「そうか、ありがとう。……エイリーク。焦ってはいけないよ。お前はまだ強くなれるのだから」
「父さま……」

そう言ってラゲイルは鍛練場を出て行った。

残された2人。エイリークは模擬戦用の剣を優真に差しだす。

「どうした？」
「……剣を、剣を持ちなさいユーマ」
「は？　なんで」
「納得できないのよ。アンタが魔人を倒したことが。姉さまも父さまもその時のことを教えてくれない。結果だけ聞いてよかったなんてアタシには思うことができない」
「そりゃどうやったかなんてあんまり言いたくないんだけど……」

もう使うことはないであろう《アレ》はエイルシアによって禁じ手とされた。

「だったら力を見せなさい。そうでないとアタシは、アタシが目指したものは……」
「エイリーク？」
「どうしたのよ。剣を持ちなさい。そしてアタシと戦いなさい！」

感情的になっているエイリーク。優真は、

「いやだ」

躊躇わずに断った。

「どうして！！」

「御剣家は包丁以上の刃物は持たないしきたりがあるんだ。まあ、親父の代からなんだけど」

「……ふざけてるのアンタ」

エイリークは今にも襲いかかるような剣幕だ。そんな彼女を優真はまっすぐに見つめた。

静かに、強く見つめた。

「戦う理由が俺にはない。どうして力をみせる必要があるんだ？」

「なっ！？」

優真の黒の瞳にエイリークはのまれた。雰囲気が変わったのだ。

「どうして力を誇示する必要がある？　力なんて手段のひとつだ。示威を見せる場合もあるけど今は必要ない」

力を持つこと、力を振るうことに関して優真の兄は厳しかった。

「使い方を間違えたらいけないんだ、力は」

優真は常に問いかけろと言われていた。

覚悟があるのかと？

「ただの力試しじゃないよね？　だったら駄目だ。俺は弱いから正

々堂々と戦うことができない。やるなら……潰す」
「そ、そんなこと」
言い返したいエイリーク。でも優真は間を置かずに彼女に語る。
「それにあの時俺は1人じゃなかった。シアさんやおじさんもいたし兄さん達も力を貸してくれた。それにラヴニカだって。あれはみんなで迎えた結末だ。俺の力だけでできたことじゃない」
「……」
エイリークは黙り込んだ。
「だから俺の力なんて関係ないよ。……だいぶ時間が経ったな。先に戻るよ。汗を流すのに時間がかかるなら遅くなるって伝えておく」
「アタシは……」
「それじゃ」
優真は鍛練場をあとにした。残されるエイリーク。
「アタシは……」
悔しかった。
――あれはみんなで迎えた結末だ。俺の力だけでできたことじゃない
「どうしてあの場にいなかったのよ」

あの時皆が戦ったのだ。

なのに自分はそこにはいなくて、1人だけ蚊帳の外に置かれた感じが拭えなくてエイリークは、

ガシャン！

剣を投げ捨てた。

＋＋＋

1－11　誘拐事件（前書き）

風森の国のもうひとつの事件。

１－１１　誘拐事件

＋＋＋

ミサ・クリスはエイリーク・ウインディの侍女を自称する少女だ。公式ではない。

こげ茶の髪を肩で切り揃えて１つに結ぶ髪型はちいさな頃からエイリークと同じ。昔は風森の姉姫様を差し置いて姉妹のように見られていた。

しかし成長するにつれて顔立ちはもちろん、最近は身長と胸のサイズに差がついてしまったので似ているのはリボンを除いたこの髪型だけになってしまった。（身長はエイリーク、胸はミサが圧勝）

風森の騎士と城の使用人を両親に持つ彼女にとって昔から風森の城は我が家であり、友達のいる遊び場だった。

友達の名はリィちゃんことエイリーク。１０年前から親友だ。

そのミサの親友、エイリークは元気がない。

国が抱えていた問題が一気に解決し、さらに魔人の義妹ができたことに彼女が戸惑うのはわかる。でもそれとは違う何かがあることをミサは気付いていた。

ミサだけが知っていることもある。エイリークは学園で打ち負かされ、沈み込んだ時期があったのだ。

立ち直ったかと思ったが違っていた。エイリークは今も不安を抱えている。

「リィちゃん……王妃様」

１０年前のことを思い出す。あのとき、王妃様が魔人の封印の為にお別れを告げたあの日。

――おうひさま、いなくなっちゃうの？　だめだよぉ、リィちゃんが泣いてるの。だから

――ごめんなさい。エイリークだけじゃないの。ミサちゃんやあなたのお母さんたちのためにも私はいくわ。ミサちゃん、私のとっておき覚えてる？

――うん

――なら大丈夫。私の大事なものをあなたに伝えることができた。だからあなたからあの子たちに伝えて。きっとわかってくれる。私があの子たちのこと、ずっと愛していることを

――ぐすっ、おうひしゃまぁ

――お願いね、ミサ

「大丈夫です。王妃様」

リィちゃんの傍にいる、これはエイリアとの約束ではない。ミサ自身が立てた誓い。

昨日の夕食の時はとうとう姿を見せなかったエイリーク。ミサはそれでも心配はしていない。

「大丈夫。わたしがいる」

よっしゃあ！　と気合を入れて部屋を飛び出した。それから城の厨房へ。

あのいつも強気で、でもほんとうは泣き虫な剣士の少女に彼女がしてあげられることは、昔から1つだけだから。

＋＋＋
誘拐事件
＋＋＋

風森の城に客人として居候中の優真の仕事は主に2つ。

1つは風森の姉姫、エイルシア・ウインディの手伝い。

彼女は巫女の役目の他にも王妃の代理として国の運営に携わり議会に参加することも多い。復興中の現在は特に忙しいので人手が足

りないのだ。

「国の政治っておじさんは何もしないの？」
「お父様は剣を振るか中庭のお世話しかできませんので」
「おじさん……」

娘は国王である父に辛辣だった。

「元々お父様は城の庭師でしたから。それに中庭はお母様の好きな花ばかりなので早く元に戻して貰いたいですしね」
「へぇ。身分違いの、ってやつなんだ」
「そんな恋愛物語みたいなものじゃないはずですよ」

そう言えば2人の馴れ初めを聞いたことがなかったとエイルシア。

「前にも言いましたが王家は国の象徴。役目を果たせれば身分なんて問題ありません。《風邪守の巫女》は《騎士》を選ぶ絶対の権利がありますので」
「ふーん。じゃあシアさんはいないの？　シアさんの《騎士》」

優真の質問に目を細めるエイルシア。昔かわした小さな約束を思いだす。

「今はいません。でも候補者はいるのですよ。私は……ずっと待っているのです」

彼女は懐かしそうに微笑み、それから優真を見てから頬を染めて呟く。

「……最近《騎士》の候補者が増えちゃって私も頑張らないといけ

ないんですけど……」
「シアさん？」
「そ、それよりも今日のお仕事はですね」

＋＋＋

「ちくしょう、どこ行きやがった！　ラヴの奴」

優真のもう１つの仕事。それは失踪癖のあるウインディ家の養女、ラヴニカ・Ｃ・ウインディの捜索である。

彼女はことあるごとに「我は自由なのじゃ！」と城を飛び出す。その度にエイルシアが優真に泣きつくので彼は気付いたら率先して捜すようにしている。

今のラヴニカは子供の姿で大した魔力を持っていない。だから国内にいるのは確かなのだが、回を重ねる毎に『かくれんぼ』が巧みになっている。

今捜している場所は城から北へ少し離れた森の中。

優真曰く『ラヴニカの生息地』

「ユーマ君。なにしてるの？」
「ん？」

茂みから顔を出す優真に声をかけたのは使用人のエプロンドレスを身に付けたミサだった。エイリークの親友兼侍従を自称する彼女

の普段着である。

「いいところに。ミサちゃん、クッキー持ってる？」
「ちょうどあるけど何に使うの？」
「罠を張る」

優真は地面にクッキーを1枚置く。そのあとミサを連れて近くの茂みに隠れた。

「罠って……こんなので何を」
「しゃべらないでね。気付かれるから」

しばらくすると木の上の方からガサゴソ、と大きな音がする。

「えっ、何？　獣なの？」
「いや、もっとタチが悪い。……そろそろかな、耳ふさいでいて。いけぇ！」

優真は近くの木に魔法カードを叩きつけた。

バアアアアン！！

森に響き渡る激しい爆発音。鳥や獣が一斉にこの場から離れていく。

爆音と森の騒々しさに驚くミサ。そして――

ぽて

「ふぎゃ」

驚いて木の上から真っ逆さまに落ちたラヴニカ。

「なんじゃ！？　お主かユーマ！！　クッキーの匂いを辿ってみれば、またおかしな札を使いおって」

「……虫か？　いや犬かお前は。どこからクッキーの匂いを辿った？」

「……あはは」

笑うしかないミサ。２人のやりとりを聞くと、国を脅かした魔人と国を救った英雄なんてとてもじゃないが思えない。

「ふん、今の札が《音爆弾》じゃな。そろそろお主のネタも尽きるじゃろう。我に同じ手は効かん」

「いや、クッキートラップにひっかかったの初めてじゃないだろ、お前。……まあ、いいや。そういやミサちゃんはどうして森の中にいるの？」

思いだしたように優真はミサに訊ねた。

「リィちゃんを探してるんだ。このあたりでリィちゃんいつも剣の稽古しているから」

すると優真は丁度エイリークの居場所を知っていた。

「エイリークなら国の郊外へ視察に行ったよ。シアさんの代理なん

だって」
「そっか。残念」
「あとから俺お昼持って行くけれど、何か用なの？」
「うーん。それじゃあ、お願いしようかな」
エイリークが不安定なことに少年が関わっていることはミサだって気付いている。
それでもあえてミサは大事な親友のことを彼に頼むことにした。

＋＋＋

優真がラヴニカを捕まえた少し前の話。
エイリークは姉から郊外付近の《門》の視察に行く代理を頼まれた。
隣国との国交を回復するにあたり、何か問題ないか直に確認したかったらしい。
「どうしてアタシなの？　父さまは？」
「お父様はダメ。何かあったらすぐ剣を抜くのだから。見た目によらずせっかちなのよ」
「……」
それじゃアタシと変わらないじゃない、そう思ったが言わないことにした。

「……ごめんなさい。せっかくの休暇なのにゆっくりさせてあげられなくて」
「姉さまが忙しいのはわかってるわ。視察に行くくらいアタシに任せて。外は物騒なんだから」
そう言ったエイリーク。最近気づまりを感じていたから丁度いいと思っていた。
「ありがとう、リィちゃん。あとからお昼を持ってくるわね」
そして現在。エイルシアは城の自室にいる。
優真に捕まり、ミサによって連行されたラヴニカを膝に乗せて。
「……おい。仕事はどうしたのじゃ」
「おさぼりです」
ラヴニカはエイルシアに髪を弄られている。エイルシアは紫の長い髪を梳いて結わえるのが楽しいらしい。
「大丈夫です。郊外の視察はリィちゃんに頼みましたから。城の外に出れば気晴らしになると思いまして」
「気付いておったか」
「ええ。私はあの子の姉なんです。何を悩んでいるかくらいは」
「……我と小僧じゃな」
「……ええ」

エイリークは幼いころに国や姉を守るためと剣を手にした。なのにその剣を振るうことなく国は守られた。

黒髪の少年の手によって。

彼女は目的を失い、手にした剣を納めきれずにいるとエイルシアは思っている。

しかも倒すべき魔人は今ここにいる。

「我はいつでも国を出て行ってよいのじゃぞ」

「それは駄目です。ラヴちゃんはもう私達の『家族』なんですから」

「……」

その言葉がラヴニカを苦しめていることを彼女は知らない。

エイルシアは妹を思う。

「今は感情の整理がついていないだけです。きっと」

「……のう」

「大丈夫ですよ。実はユーマさんにリィちゃんのお昼を頼みました。ユーマさんがきっとうまくやってくれます」

人任せかよ、と突っ込むところだが。

「そうじゃない、違うのじゃ」

代わりにラヴニカは顔をしかめた。

「東から嫌な風が混じっておる」

＋＋＋

森の木々に囲まれたはずれの道でエイリークは細剣を抜いた。

「ウインディ家の馬車を襲うなんてアンタ達何者？」

郊外の《門》を順に廻り、最後に東の門へ向かう途中でエイリークの乗る馬車が突然何者かに襲われたのだ。

ただしエイリークは《直感》ですぐに反応した。奇襲を受ける前に咄嗟に飛び出して御者と馬を逃がす。残るは彼女１人。

「ハズレか。視察には巫女が自ら出向くって聞いていたのによう」

「騎士見習いの嬢ちゃんだけか。作戦失敗だな、おい」

目の前には武器を持った完全武装の男が１０人程。盗賊にしては装備が充実している。

「巫女？　作戦ってアンタ達傭兵？」

「そうだぜ、嬢ちゃん」

傭兵とハンターは違う。仕事はそう変わりがないが傭兵はギルド登録されていない集団だ。

いわばアマチュアである。ただし裏仕事に関しては傭兵のほうが需要が高い。

「なんでかってか？　そりゃあなぁ、あ！　ぶしっ！！」

《旋風剣・疾風突き》

エイリークの剣はよくしゃべる男を吹き飛ばした。

「アンタ達は巫女を狙っている。それだけで十分よ。アンタ達はここで倒す」

「……いいぜ。威勢のいい嬢ちゃん。ちょっと遊んであげようか」

1対9という状況にエイリークは果敢に立ち向かった。

実際彼女の剣技は1度に傭兵を3人相手できるほどの実力がある。正面からの戦闘でならば。

エイリークは周囲を囲まれたまま1対1で戦わされている。倒せると思った瞬間に別の傭兵が割り込み仕切り直し。再び1対1を繰り返される。

持久戦だった。

周りを敵に囲まれたプレッシャー。終わらない変則的な1対1。エイリークは体力的、精神的にも次第に追い詰められていく。

「……卑怯よ、アンタら」

「いや、嬢ちゃんアンタは強い。だから俺達も本気で『遊んでいる』」

「か弱い傭兵の戦い方ってやつさ」

傭兵達が笑い、エイリークの焦りが募る。

（なんとか突破口を開かないと……こんなじゃ姉さまを守れない）

しかし思わぬところから突破口が開かれた。

それは火を噴いて傭兵に向かう数本のシャープペンシル。

「ぎゃっ」

スタンニードルが刺さった傭兵が痺れて倒れる。

「な、何だ？」

バアアアアン！！

突然激しい爆発音が周囲に響き渡る。誰もが上を見上げたその時に――

隠れていた黒髪の少年は木から飛び降りた。それと同時に近くの傭兵達に向けて消しゴムを投げる。

「どあっ！」

傭兵達にぶつけた消しゴムは跳ね返らずにその反発力を何倍にも増幅させて逆に傭兵達を弾き飛ばす。

「ったく。この世界も物騒じゃないか」
「ユーマ!?　アンタ」
どうして?　としか言いようがない。
「大丈夫か?　話は御者のおっさんに聞いた。すぐに兵の人も来てくれる。逃げるぞ」
優真はさらに煙玉を放つ。これで傭兵達の視界を奪い混乱に乗じれば逃げれるはずだ。
突然現れて傭兵を蹴散らした優真に呆然とするエイリーク。しかし優真の「逃げる」の言葉にはすぐに反発した。
「待ちなさい。あいつらは姉さまを狙っている。だからこのままには」
「だったらなおさらだ!　お前が殺されたり捕まった方が余計タチが悪い。さあ、早く!」
傭兵は倒したわけではない。奇襲して包囲を崩したにすぎないのだ。
エイリークの腕を掴む優真。しかし彼女は下を向いたまま微動だにしない。
「エイリーク?」
「どうしてよ?　どうしてアタシがアンタに助けられなきゃならないの?」

エイリークは優真の手を振りほどくと、手にした剣に力を込める。

《旋風剣》。剣が纏う竜巻は荒々しく煙幕を吹き飛ばす。

「馬鹿、何を……」

「アタシだってみんなを……姉さまを守ることができる。アタシの剣、アタシの力はこんなものじゃない！！」

視界を晴らすと敵を求めた。

負けたくない、弱い自分を認めたくなくて彼女はただ手にした剣で勝利を求める。

エイリークは立ち直った傭兵達を見つけるとすぐに突撃した。

「そこだ！」

「っ！？」

エイリークが倒れた。側面から《岩弾》を撃たれ、直撃。

「エイリーク！？」

「……ま、魔術師？　伏兵がいたの？」

優真は倒れた彼女に駆け寄ろうとするが、傭兵達に邪魔される。

「どけぇえ！！」

大振りする剣を躱してスタングローブを傭兵にぶつける。

バチッ！！

感電して倒れる傭兵をあとにして優真は電撃を見て怯んだ別の傭兵を殴りかかる。

この時、優真はやはり焦っていた。もう少し冷静でいたら別の戦い方があったはずなのに。闇雲に拳を振るった。

バシッ

何度目かのパンチ。グローブの甲からは放電されなかった。普通の拳では傭兵達を倒すことはできない。

「くそっ、バッテリーが……ぐあっ」
「手こずらせやがってガキが」
「おい、嬢ちゃんもおとなしくしてなよ」

優真は背後から殴られて地に伏せた。その間にもエイリークは細剣を取り上げられる。

「ゆ、ユーマ……」

最悪の展開。2人とも捕まった。

「さあガキども。この落とし前、どうしてくれる?」

＋＋＋

1－12　囚われのエイリーク（前書き）

エイリークの独白。

1－12　囚われのエイリーク

＋＋＋

「えい、やあ！」

小さなエイリークは剣を振る。

ただし6歳の少女が振れる剣などない。彼女が振るのは母からもらった大事なお守り。

《守護の短剣》

「リィちゃん。何してるの？」

「けいこ」

小さなエイリークは剣を振る。大好きな姉が声をかけてもやめることはなかった。

「ちょっとリィちゃん、手を見せて」

姉のエイルシアはエイリークの手を取った。妹の小さな手は皮がむけて血が滲んでいる。

「……いつからやっていたの」

「あさから。だいじょうぶだよ。ちょっとすべるけどいたくないよ」

声が低くなった姉が怖くなって嘘をついた。

「……もう。強情なのは誰に似たのかしら。風よ」

エイルシアは《癒しの風》を唱える。エイリークはてのひらの傷がゆっくりと治っていくのがむず痒い。

「かゆいよ、姉さま」

「ほら我慢して。ばいきんが入るからちゃんと手当てしないと駄目よ」

エイルシアは自分のハンカチを躊躇わずに2つに裂くとエイリークの手に巻き付けた。

「これでよし。リィちゃんは最近剣のお稽古ばかりね。女の子なんだから無茶したらだめよ」

エイルシアは寂しく微笑む。まただ、とエイリークは思った。

母がいなくなってからの姉は笑顔を見せてくれない。それがエイリークには悲しかった。

「だめなの。あたしは姉さまみたいにまりょくがないの。みこになれないの」

「リィちゃん」

「だからね」

だから小さなエイリークは考えた。自分ができること。自分がやりたいことを。

「だからね、あたしは剣を持つの。あたしは父さまみたいな剣士になるの」

傷だらけの手をいっぱいに広げてエイリークは姉に笑顔を向ける。

「そしてね、母さまみたいにつよくなるの」

「？」

あれ？　不思議に思うエイルシア。

「リィちゃん？　お父様みたいな剣士になりたいのよね？」

「うん。でもね、母さまのほうがもっとつよいの。えーとこうやってね……」

エイリークは両手をぶんぶん振りながらしゃべる。

「母さまはこの短剣を2つもってね、父さまの剣をずばーん、てふきとばして、こんどはずどーん、て父さまふきとばしたの。……母さますごかったなあ」

「そう。リィちゃんもお母様の剣を見たことがあるのね。……リィちゃんが剣に興味を持ったのはお父様のせいだと思っていたわ」

「？」

《旋風の剣士》

これは元々彼女たちの母、エイリア・ウインディの二つ名だった。

《風邪守の巫女》の高い魔力から放たれる風魔法、それに加えて

2刀の《守護の短剣》から繰り出される剣技はまさに旋風。全盛期の彼女は最強の魔法剣士の1人だったのだ。

「でもね、短剣は姉さまと半分こしたから剣1本しかつかえない父さまみたいになるの」

「それは……ちょっと変じゃないかな？」

子供らしいひどい発想だ。でもこれが小さなエイリークの夢。

「そしてあたしは剣で姉さまをまもるの。いつかあたしは姉さまの《きし》になるの」

翠の目を大きく開いて驚くエイルシア。

エイルシアはその言葉がどれだけ嬉しかっただろう。どれだけ妹に思われているのかがわかったのだから。

「リィちゃん……わかったわ。それじゃ約束しましょ」

「やくそく？」

エイルシアはエイリークの小さな手を両手で包み、妹と視線を合わせて向き合った。

「立派な剣士になったのならエイリーク・ウインディ、その時にあなたを私の《風邪守の騎士》に任命します」

「ほんとう！？　姉さま！」

「ええ。だから私は待つわ。いつか立派な騎士様が私の前に現れるその日をずっと」

「うん！　あたし、がんばる」

エイルシアは元気な妹を見て微笑む。久しぶりに姉の笑顔を見たエイリークは俄然やる気を出して稽古を再開した。

小さなエイリークは剣を振る。

時が経ち、振るう剣が短剣から摸造剣になって、今の愛用する細剣になってもエイリークは剣を振り続ける。

ずっと、ずっと……

＋＋＋

「ここは？　……そっか、アタシは」

膝を抱えて座り込んでいたエイリーク。いつの間にか眠っていたようだ。

埃っぽい部屋。窓からうっすらと日の光が差し込んでいるのが見えて朝だと気付いた。

＋＋＋

囚われのエイリーク

＋＋＋

風森の国の東のはずれには老朽化が進み、放棄された小さな砦がある。

傭兵にそこへ連れ去られたエイリークはこの部屋に囚われ、一晩をすごした。

「姉さま……」

エイリークはそっと自分の肩に振れる。

そこだけ翠の光がぼんやりと輝いている。僅かな温もりに彼女は縋った。

エイリークは無事だった。なにもされていない。大事な人質だから。

そして同じく捕らわれた優真は……

＋＋＋

『そこまでです。彼女を傷つけることは許しません』

優真が倒されたあと。エイリークの危機を一時的にせよ救ったのは他でもない、彼女の姉エイルシアだった。

突然聞こえた第三者の声。傭兵がエイリークに手を出そうとした

その時、彼女の腰のホルダーに差してある短剣から翠の光が飛び出してきたのだ。

「せ、精霊？　姉さまなの？」

エイルシアはラヴニカの言葉に不吉なものを感じ、国の精霊と《交信》してエイリークの危機を知った。それと同時に彼女の《守護の短剣》に宿る精霊を通じて戦闘に割り込んできた。

「……あんたが風森の姫、巫女さんかい？」

このあと、エイルシアは自分の身と引き換えにエイリークの安全を傭兵達に約束させたのだ。

「なあに、最初から目的は巫女さん、あんただ。うちの雇い主があんたのファンでね、ちょっとシャイなもんだから会わせてやろうとお迎えに来たってわけさ」

『……わかりました。では明朝に国の東にある廃墟の砦に私1人で向かいます』

「駄目、姉さま」

「おっと、黙ってな嬢ちゃん。よし、交渉成立だ。もしも約束を破ったりしたなら」

『それはこちらの台詞です』

翠の光から発せられる声が1段下がる。ざわめく森。

『この国にいる限り私と精霊達に見られている、そう思いなさい』

「あ……ああ」

傭兵はここにはいないエイルシアの迫力にのまれた。

翠の光はそのあと何も話すことなくエイリークの肩に留まった。
精霊の監視らしい。

「ちっ、まあいい。おい嬢ちゃん、その短剣もよこしな」

強引に短剣を奪う傭兵にエイリークは飛びかかった。

「駄目、それだけはだめぇ！！」

短剣を奪い返すとまるで短剣を守るように抱え込み、なりふり構わずしゃがみ込むエイリーク。

彼女は震えていた。

「だめよ。これは姉さまとアタシの……」

剣士としての心が折れた。剣を取り上げられた上に守るべき姉を危険にさらしてしまった。

拠り所は姉と2人で分け合ったこの《守護の短剣》だけ。

「ずいぶんしおらしくなったじゃねえか。じゃあおとなしく付いてきな」

「おい、こっちのガキはどうする？　始末するか？」

気絶している優真に剣を向ける傭兵。

「……ソイツは姉さまのお気に入りよ。人質の価値はあるわ」

エイリークの声は平坦だった。ただ、巻き込まれただけの少年が助かる可能性があると思って言ったのだが。

「そうかい。じゃあ連れていくぞ。時間があるんだ、暇つぶしにさっきのお礼をしねぇとな」

＋＋＋

「ほらよ」

エイリークのいる部屋に放り込まれた優真は傷と痣だらけだった。肌の見える部分は青黒く腫れていて腹部が不自然にへこんでいる。

「っ！？　ちょっと、しっかりしなさい」

「一応生きてるぜ。いいか嬢ちゃん、これは見せしめだ。お情けでその短剣を取り上げなかったんだからおかしな真似はやめなよ。……おい、坊主。よく一晩もったな。また遊ぼうぜ」

傭兵は扉を閉める。ガキッ、と錆びた鍵をかける音がした。

「う、うう、ひ……る」

「そんな……これもアタシのせいなの？」

優真から目をそむけ、強く目をつぶるエイリーク。

すぐに手当てしないといけない。でも道具もなければ治療術式も使えないエイリークは優真を助けてあげることができない。

こんな時エイルシアなら魔法が使えるのに。そう思うと自分の無力にまた打ちのめされる。

「ちがう、ちがうのよ。こんなつもりじゃ……」

泣きたかった。エイリークは我慢した。自分には泣く資格がないと思ったから。

そう思うと余計に泣きたくなった。

＋＋＋

しばらくじっとしていた。エイリークは自分の殻に閉じこもり、静かに独白する。

「結局、アタシはアイツを巻き込んで姉さまに助けられた。姉さまを、危険にさらしてしまった」

エイリークは沈みこむ。心が、くらいところへ。

「アタシは姉さまを守りたかった。だから剣を選んだ。アタシにできるのはこれだけだから……でも間に合わなかった」

沈む。

「国も魔人も母さまもアイツがどうにかしちゃった。アタシは素直に喜べなかった」

沈む。

「昔は、母さまいなくなってからはアタシがいても姉さまがあんなに笑うことなんてなかった。……でも今は違う。アイツや魔人の子がいて姉さまは自然に笑顔でいてくれる……アタシがいなくても」

沈んでいく。

「アタシって何だろう？　何がしたかったのだろう……」

どこまでも……沈む。

――姉さんを守りたかったんだろう？　それだけじゃないか

自分しかいない世界で、エイリークは誰かの声を聞いた。

――守りたいものがあったから剣をとったんだ。いいじゃないか。偉いよお前

うるさい。

――お前子供の時からその道を選んだんだろ？　失くしたくなくて必死で、今まで努力したんだろ？　誰でもできることじゃないんだ

うるさい。

「きっとシアさんだって……」
「うるさい！！　黙れ、ユーマ！！」

エイリークの感情が爆ぜた。その感情は嫉妬。

「国を救った英雄様にはわからないでしょうけど、何もできなかったアタシは悔しいのよ！　アタシは剣士。これしかないの。なのにアタシの剣じゃ守りたくても守れなかった。アタシは、アタシは惨めなのよ！　確かにアンタがいたから姉さまは無事だった。いつも笑顔でいてくれる。でも、でもアンタがいるからアタシは……って」
「……ん？」

エイリークの呟きと先程の叫びを神妙に聞いていた優真。

「なっ、なな」

エイリークはうまく言葉が出ない。気付いたらぼろ雑巾だった優真が起き上がり、エイリークの顔をきょとんと覗きこんでいる。

「ななななな！」
「どうした？」
「どうしてアンタが！？」

優真は痣だらけの顔でふと遠くを見るような顔をした。

「……まさかこの《奥義》を使う事になろうとは思わなかったんだ。兄さんの奥義、《しんだふり》を」
「……」
「要は服の裏に仕込んでいた《ヒール》の回路紙を発動させたんだ。

気絶しなきゃ誰でもできるとっておきなんだぞ」

はっはー、と胸を張り自慢する優真。エイリーク、脱力。

「まあ、リンチっていうか拷問まがいのことはされたんだけど。ほら、左手の爪なんか全部」

「言わないでいいし見せなくていい。……どうしてそう平気なのよアンタは」

「こういうこともあるって本に書いてあった。実際にあったのだからしょうがない」

「……」

おかしい。コイツは異常だとこの時から思いはじめたエイリーク。彼女の《直感》は正しかったのだが。

「さて。捕まっているのはわかるんだけど他の状況がわからない。ここどこ？」

「……最悪よ」

今の状況がエイリークに優真のことを考えさせる時間を与えてくれなかった。

＋＋＋

「だりゃ！」

優真は扉に何度か体当たりをしてみたが、厚みのある木製の扉は錆びた鍵や丁番も丈夫でびくともしない。

「くそっ、こんな木製の扉、兄ちゃんなら1発なのに」

優真はエイリークから状況を確認すると脱出を試みた。何せ傭兵は数だけで頭が悪い、そう思ったからだ。

「人質を縛らずに見張りもなしか。……ちくしょう、これだけ油断されてるのに手段が足りない」

優真の装備はほとんどが奪われていた。残されたのは靴下と靴の中に仕込んでいた回路紙が4枚だけ。

「《音爆弾》、《爆破》、《ヒール》が2枚……戦闘なんか無理だぞ。そうだ。エイリークはなんか魔法みたいなの使えないの？」

「……」

エイリークからの返事はなかった。彼女はあれから膝を抱えて座ったままだ。

「……まあ、いいや。となるとあとはシアさんが来た時に仕掛けるしかないな。ああ、《しんだふり》のタイミング間違ったな」

自力での脱出を諦めた優真はエイリークの隣に座りこむ。

「……何よ」

「そう落ち込むなって。シアさんは魔人に喧嘩売るくらい強いんだ。無策で突っ込むような真似はしないから大丈夫だって」

「……アタシのことを言ってるの」

「……悪い」

地雷を踏んだ。爆発はしないがエイリークは再びどんよりと沈み込む。

「……はぁ。これやるから機嫌直してくれ」

エイリークに差し出したのは小さな紙袋。

「何よこれ？　……クッキー？」

「非常食。あいつら2重ポケットに気付いてなかった」

クッキーのほとんどは割れて崩れたもの。エイリークはその中でましな1枚を手に取り、少しだけ齧った。

「――！　これ、ミサの」

「エイリークに持って行ってくれって頼まれたから。これは俺の分だけどお前の分は昼飯と一緒に置いてきたから」

優真も半分に割れたクッキーを口にした。

サクッ、とした感じと一緒にバターの風味が口いっぱいに広がる。

「うん。やっぱりミサちゃんはすごいな。そう思うだろエイリ……ク？」

優真は驚いて彼女から目を逸らした。

「……っ、みさぁ」

エイリークは泣いていた。声も出さずに静かに涙を流していた。

エイリークにとって親友の作るクッキーは特別なものだ。これは母が残してくれたものだから。

「……」

優真は悔しかった。

また何もできない、何度同じ思いを繰り返さなければならないのかと。エイリークが泣いたのを見ると自分のふがいなさが歯がゆかった。

エイルシアが助けてくれることは疑っていない。ただし最悪の場合も考えてしまう。

人質がいることが問題だ。エイルシアの行動に制限をかけてしまう。下手をすると人質を餌に言いなりにされてしまうかもしれない。

自分の事は別にいい。ただエイリークが解放されずにエイルシアが捕まってしまう事態は何としても避けたい。

脱出は無理でもせめて彼女と連絡が取れれば、と優真が考えていると。

……じゅるり。

「……あの、エイリークさん？」

「……何よ。こっち見るな」

泣き顔でぐしゃぐしゃ、鼻声のエイリーク。

そんなことより優真は気になることがあって、何故か丁寧なしゃべり方で訊ねた。

「先程から聞きたかったのですが、その肩に乗ってる『人形』は…」

「…なに？」

「……は？」

言われたことが分からないエイリーク。彼女の肩にはエイルシアが付けた監視役の精霊が……

「精霊！？　アンタ何が見えるの？」

「よだれを垂らした羽付き妖精」

ユーマに見えるそれは緑色の髪と緑の服を着た１０センチくらいの小さな小さな女の子。エイリークの肩にしがみついてよだれを垂らしている。

エイリークには肩に付いたものが翠の淡い光にしか見えない。でも

「おいしそう、ですねー」

光が声をだしたのはわかった。

＋＋＋

１―１３　エイリークを守るもの（前書き）

風森の精霊、その出会いと……

1－13　エイリークを守るもの

＋＋＋

この世界には神も魔神もいない

「神は人間が殺したのよ。魔神よりもずっと昔に。残ったのは《世界》だけ」

世界史の講義になると必ず《精霊紀》の話や神話の話題になる。ユーマとエイリークも講義後にそんな話をしていた。

「だからアタシ達は感謝を捧げるときは世界に祈るの。神様なんていないから祈らないわ」

「いや、少なくともお前の傍には女神がいると思うぞ」

「はあ！？」

エイリークはユーマの突拍子もない発言に声を上げる。

「女神って《精霊神》のこと？　それがアタシに？」

「いや、そんなのじゃなくて」

《精霊使い》となったユーマは時々だが精霊たちを通じて魔力とは違うちからのようなものを感じることがある。それはエイリークからも感じ取れた。

エイリークは彼女が守りたいと思うたくさんのものと同じくらいに誰かに守られている。

それは《加護》。誰かを守りたいと願う幻想。

ユーマは思う。あの誘拐事件の時、自分にエイリークを助けるチャンスを与えてくれたのは《風森》でも風葉でもない。きっとエイリークを思う彼女の加護があったからだと。

だからユーマは思うのだ。エイリークには女神がついていると。

「その女神さまってな、大きなリボンとエプロンドレスを身につけて、お前のこと『リィちゃん』て呼ぶんだ」

＋＋＋

今も昔もミサの作るクッキーはエイリークにとって特別なものだ。ミサが初めてクッキーを焼いてくれたのは１０年も前のこと。

封印の儀を控えたある日、小さなミサは王妃エイリアにお願いをしたのだ。「リィちゃんを元気にしてほしい」と。

エイリアは娘を心配してくれる優しい少女に『とっておき』を伝授することにした。娘たちは別れを前にして素直に受け取ってくれ

そうになかったから。

それがクッキーのレシピ。エイリアは小さなミサと一緒にクッキーを焼いて、これだけを伝えた。

――あなたからあの子たちに伝えて……あの子たちのこと、ずっと愛していることを

そしてエイリアがいなくなって塞ぎこんだエイリーク。ミサは今こそクッキーが必要だと厨房へ走った。

6歳のミサが城の大きなオーブンを使うのは難しかった。火傷した手を隠しきれず、それでも笑顔でエイリークに歪な形をしたクッキーを差し出しのだ。

あのときエイリークはクッキーを少しだけ齧るとミサに抱きついて泣いた。

小さなミサは小さなエイリークにエイリアの想いを確かに伝えたのだ。自分の思いを込めて。

――リィちゃん、元気出して。わたしがいるよ。ずっと、ずっといるよ

囚われたエイリークはクッキーを齧った時、あの時の事を思い出したのだ。

それでエイリーク支えていた小さな意地は優しくて大きなものに満たされて、溢れて決壊した。

落ち込んだ時、苦しい時、泣きそうなときはいつもミサはクッキーを焼いてくれる。傍にいてくれる。

守りたかったのは姉だけど、いつも支えてくれたのは親友だ。今だってきっと。

エイリークは泣いて、少しずつクッキーを齧って、また泣いた。

負けたくない、そんな気持ちを少しずつ、少しずつ取り戻すように。

＋＋＋

エイリークを守るもの

＋＋＋

優真が手に持つクッキーを凝視する羽付き妖精。

エイリークの肩の上で涎を垂らしているが、彼女は冷たくないのだろうかと頭の片隅でふと思う。

「おいしそう、ですねー」
「しゃべった!?　エイリーク、何だよこいつ」
「姉さまの声じゃない。まさか本当に」

エイリークはエイルシアのように風森の守護精霊と《交信》することができない。なので精霊の存在を認識できたのは初めてだった。

「……食うか？」

半分に割れたクッキーを差しだす優真。

小さな女の子はうわぁ、と歓声を上げてクッキーに飛び付く。

ばりばり、もぐもぐ、ごきゅ

「ふはー。初めてものをたべましたー。おいしかったですー。エイリっちについてきてよかったー」
「エイリっち、ってアンタいきなり何よ」
「エイリっちはわたしと《交信》してくれないからー、おしゃべりできなかったんですー」

クッキーを食べてご機嫌の羽付き妖精。よくしゃべる。

「エイリっちはちいさな時からいっつもわたしの『おうち』を振り回してばかりですからー」
「……お転婆そうだもんなあ」

優真はおもちゃのドールハウスを人形ごと振り回すちいさなエイリークを想像した。

「ちがいますよー。エイリっちは剣ばかりで女の子みたいな遊びは意地でもしなかったんですー」
「なっ、何言ってるのよ、この子」
暴露され赤くなるエイリーク。彼女はわからないが女の子は嬉しそうに慈しむような目でエイリークを見ている。
「わたしは表に出ることはできませんでしたけどー、ずっと、ずっとみてきたんですよー」
この羽付き妖精は10年前からずっとエイリークを見てきた。
彼女に適性がなかったから力になってあげることはなかったけど、少女の成長を傍で見守ってきた。
「……《守護の短剣》の精霊？」
「そうですー。はじめましてー」
これが彼女と精霊の初めての出会い。ふよふよー、と飛びまわり、嬉しそうに話しかけてくる光を前にエイリークは戸惑いを隠せない。
「……」
その間優真は沈黙。何故今頃になって精霊がエイリークの前に現れたのかを考えている。
「それはですねー、シアっちがわたしと《交信》してくれてあと表に出してくれたからなんですー」
「ん？　お前、俺の考えていることがわかるのか？」
「わたしとあなたは『繋がり』はじめていますからー。それでです

ねー」

羽付き妖精の女の子は優真の目の前にふよふよー、と飛んでくると今までの間延びした口調をやめた。

「わたしからお話があります。……貴方に彼女達を助けてもらいたいのです。異界の、再成の世界の少年のあなたに」

「なっ!?　あんた一体？」

「これって」

部屋に風が吹く。そんな幻を感じた。

暖かくて、冷たくて。

優しくて、厳しくて。

優真にはそれだけしかわからないけどエイリークは違う。

匂いを感じる。これは風森の、故郷の風。

「……あなたは、風森の」

翠の光としかわからなかったエイリークにも今の『彼女』の存在を感じ、見ることができた。

エイリークにもエイルシアにも似た、翠の髪の女性。

「私は《風森》。ウインディを護る守護精霊。私は守りたい。私は貴方の力を借りたいのです」

＋＋＋

「俺の力ってどういうこと？」

優真達の前に現れた精霊、《風森》は答える。

「私はウインディを護る精霊。私を使役する資格はウインディの血筋に連なる者にあります。しかしエイリーク。今の貴女には《精霊使い》の適性がありません」

風森は悲しそうにエイリークを見た。

「エイルシアもそうなのですが、今の彼女でも《魔法使い》として《交信》と《祈願》を使うことができました。私は剣士でしかない貴女の力になることができません。……せめて私を世界に現界させて使役できるほどの《精霊使い》がいればよかったのですが」

エイリークは唇を噛む。わかっていたことだけど精霊自ら告げられるのは悔しい。

「俺にその《精霊使い》の適性があるの？」

「いいえ。貴方は《魔力喰い》。魔力に関わる全ての適性は皆無です」

優真の問いに風森は首を横に振るが、ただし、と話を続ける。

「貴方は異世界の存在。しかも《転写体》なのです。ならば世界に属する私は貴方の存在を『この世界の存在』として『書き換える』ことができる」

「「……は？」」

精霊という世界の非常識な力を2人は理解できない。

精霊とは《世界》から生まれ、世界を管理・維持する存在。異界の存在である優真を危険と《世界》が判断すれば異物とみなして排除することも可能なのだ。

今回、優真は正式な手順を踏んで『送り出されている』。なので1つの選択肢が生まれた。

「貴方の存在を《精霊使い》として書き換えることができれば、私は貴方の力になることができる」

「俺が《精霊使い》という存在になる？」

「正確には貴方が属する世界を『こちら側』に切り替えるのです。その時に《精霊使い》の適性を貴方に書き足します」

「クラスチェンジみたいなものかな？」

ゲームの感覚で納得する優真。

「決断して下さい。時間がないのです。今、エイルシアがこちらに向かっています。1人で」

「なっ！？」

優真は驚く。エイリークもだ。

「まさか無策で突っ込んだのか？」

「このままでは貴方達3人が『彼ら』に捕らわれてしまう。世界はそれを望んでいません」

「……」

優真は考えが甘かったことを痛感し、エイリークは姉を心配して焦る。

精霊の話を聞いて優真は覚悟している。力のない自分に力を貸してくれるならそれは願ってもないことだから。

「……聞いていいかな？　あの時、シアさんとラヴニカが戦った時にどうしてシアさんに力を貸してくれなかったの？」

風森は申し訳なさそうに答える。

「精霊の魔力は世界に属し、魔法使いや魔人の扱う魔力は魔神に属します。魔力の狂気に囚われた彼女に力を与えることは魔神に力を与えることと同義。それでは精霊である私は魔神の眷族に変質してしまうのです。助けなかったのは私の本意ではありません」

「……もう1つだけ。何故今になって俺達を助けてくれる？」

風森はエイリークをみて微笑んだ。嬉しそうに。眩しそうに。

「私の一部だったあの子がクッキーを頂きました。だからわかるのです。彼女に元気でいて欲しい、彼女を守りたい、その気持ちが伝

わったから。それは私も同じなのです」

本当はもう1つ理由がある。それは『彼女』が風森に見せてくれたこと。

少年と共にある『しろい少女』は精霊に近い存在でありながら現実に、《世界》に介入してみせた。少年を守るためにゲンソウの力に手を伸ばし、しろい翼を広げた。

風森は本物の精霊なので自らの意志で現界し、力を振るうことができない。《世界》に刃向かうような真似ができず、やろうにも大きな制限がかかってしまう。

それでも風森は見習わなければと思ったのだ。見守ることでは守れない。自ら手を伸ばす必要があると。

「私は守りたい。今のエイリークの力になりたい。私1人では無理でも今は、今なら貴方がいる。だから……」

たすけてください

「だから」

「どうしたらいい？」

優真は風森の言葉を遮って訊ねた。これだけ聞ければもう十分だったから。だからもう訊ねない。

存在を『書き換える』。そのリスクも優真は無視する。

目を伏せる風森。優真の決意を知り悲しくなった。その目はよく知る人と同じだったから。

「……この子に名前を」

風森の前にあの羽付きの女の子が飛び出してきた。ちょこん、と風森の掌にのる。

「《守護の短剣》に宿る私の一部は貴方と共感しています。名を与えることでこの子は私とは独立した同一の存在になります」

えへん、と胸を張る羽付き妖精。

「《精霊使い》になったばかりの貴方は私を使役することはできないはず。代わりにこの子が貴方の力になってくれます」

「……ありがとう。何かお礼できないかな？　俺に出来ることがあればいいけど」

風森は驚く。頼んだのはこちらの方なのに少年がお礼を、しかも従がえる精霊相手に言うものだから。

「……どうして？」

「どうしてって力になってくれるんだろ？　頼みたいのはこっちなんだ」

不意に翳りのある表情を見せる優真。

「俺1人じゃ無理だったから。……俺は、何もできないことが辛いから」

「……」

精霊と優真のやりとりを聞いているだけだったエイリークはそんな彼をずっと見ていた。

くらいところを見つめる瞳。そこは心が沈むくらいところではない。

それは遠くて、ずっと遠くにあるから見えなくてくらいところ。今の優真の瞳の色をエイリークは城の鍛錬場で見たことがある。

その色は黒ではなく闇だ。いや夜だ。でも違う。本来の優真の持つ色ではない。優真の瞳が映す色は……

きっとその色は黒じゃなくて、しろい――

「……もしも」

風森の声にエイリークは正気に戻る。とりとめもない想像は一瞬で消え去った。

「もしも私に願いがあるのならば私は、私は世界を見たい。私は風。風森を守る私はこの国から出られないけれど、叶うならば世界の風と共に自由に吹かれてみたい」

「そっか。なら俺がちっこいこいつを連れて行くよ。こいつと一緒にこの世界を見てくるよ。だから」

優真は風森に手を差し出す。

名前は決めた。それは森の一部で風に舞い踊る緑の若葉。安直だけどきっとふさわしいと思うから。

「だから力を貸してくれ風森。そして一緒に行こう。『風葉』！！」

風森は差しだされた優真の手をとる。

「はい」

風葉と名付けられた精霊は2人の手に自分の小さな手を重ねる。

「はーい」

《契約》は成立した。

こうして優真はユーマとして精霊使いとなった。最後に消えていく守護精霊の声が耳に残る。

――ありがとう。あたらしい風森の守護者よ。風森の風はいつも貴方と共に――

＋＋＋

どうしてこうなったのだろう？

振り返って少年は思う。

高校の入学式だったその日。目が覚めると知らない女性のベッドの中にいた。まず兄の仕掛けた罠と思ったが違った。

知らない世界にて成り行きで魔人と戦う少年。まさか兄のように自分が戦うなんて思わなくて、でも必死になって彼女を救えたことが何よりも嬉しかった。

今度は誘拐事件に巻き込まれ助けに行って捕まった。それで少年は増長していたのだと思い知った。

拷問まがいのリンチを受けて心が折れなかったのも兄のおかげだ。ただもう1度立ち上がれたのは沈み込む彼女を見ていられなかったから。

そして最後に《精霊使い》なんてものになってしまう。状況を打破するためとはいえ、存在を『書き換えた』少年はその変化に今は気付かない。

どうしてこうなったのだろう？

「……まあ、いいや」

それはさておき、脱出するにあたって少年は考える。傭兵達は自分が動けるとは思っていないはずだ。

ならばエイリーク1人に傭兵を引きつけてもらい、逃げたふりして狭い所へ誘導してもらえば不意を突き、精霊の力で各個撃破あるいは一気に無力化できるはず、と

「覚悟はいいか？」
「もちろんよ」

そう言ってエイリークは短剣を構える。

――もう少しだけ頑張ろう

そうしないと親友にあわせる顔がなかったから。

「頼むぞ、相棒」
「まふぁふぇてふふぁふぁいー」

少年の肩にしがみつく精霊は最後のクッキーを頬張った。

「いくぞ、エイリーク、風葉！」
「はああっ！！」

《旋風剣》で扉を突き破るエイリーク。一気に階下へ向けて走り出す。

少年は、ユーマは彼女を追いかける。小さな相棒を肩に乗せて。

エイリークを傭兵達から守りながらの脱出。これが《精霊使い》の少年、ユーマの最初の戦い。

＋＋＋

１－１４ａ　脱出　前（前書き）

ユーマ＆エイリークＶＳ傭兵

1－14a　脱出　前

＋＋＋
脱出
＋＋＋

どうしてこうなったのだろう？

「エイリークさん」
「……何よ」

今の2人は傭兵に囲まれている。

「傭兵は頭が悪い馬鹿だと思っていたけど実はお前も馬鹿だろ」
「……」
「なんであそこで追撃するの？　どう考えても誘いじゃないか！」
「うるさいわよ！」
「逆切れすんな！！」

もう本当にどうしてこうなったのだろう？

脱出しようと飛び出して、すぐ下の階までは順調だったのだ。油断しきっていた傭兵にエイリークが飛び込み、撹乱したところを風葉の魔法で壁に叩きつける。

作戦通り。何も問題はなかった。

問題は次の階の傭兵達。上の階の騒ぎに気付いて警戒していたようだったが、エイリークを見ると一目散に下の階へ逃げ出したのだ。

制止を振り切って追いかけたエイリーク。そして案の定待ち伏せされた。

エイリークに襲いかかる傭兵。助けるために傭兵達の間に割り込むしかなかったユーマ。

そして現在。

追撃から逃げ回って結局砦の1階で傭兵達に囲まれてしまった。

「飛んで火に入るお嬢ちゃん、てか」

各々武器をだらしなくぶら下げた傭兵達。馬鹿にされた。

悔しい。引っかかった方が馬鹿なのだけど。

「卑怯よアンタ達」

「……もういいよ」

「世の中うまくいかないんですよー」

傭兵が悪いと主張する彼女にもう諦めることにしたユーマ。がっくり。

そもそもユーマはエイリークの性格をある程度理解しながら彼女

の戦闘スタイル（突撃ｏｒ突撃）を確認しなかったのだ。どのみちユーマとは相性が悪い。

周囲を確認する。砦の１階は大広間らしい。

壊れたテーブルや倒れた本棚などが散乱している。足元に障害物があるのは幸か不幸かわからない。

傭兵の数は最初１０人前後と思っていたがその倍はいる。外に見張りがいると考えるとどれほどの傭兵がいるのだろうか。

とりあえずユーマはエイリークに文句を言う事にした。

「馬鹿。この突撃馬鹿」

「なっ！」

軽くジャブ。続いてワン・ツー。

「剣士ってさ、もっとカッコよくてスマートなものだと思うんだよ。シアさんを守る時のおじさん決まってたもんなあ。こうピンチの時にさ、颯爽と飛び出してくるんだ」

「だから何よ」

「なのにお前は敵見つけたら突撃、敵が逃げたら突撃、って追いかけるだけなら犬でもできるぞ？」

「なんですって！」

ラッシュ。たたみかける。

エイリークは捕まってからいいところがない。

「犬……アタシ……」

涙目。また心が折れそうになった。

「ここで仲間割れか坊主？　お嬢ちゃんがかわいそうだろ」

余裕の傭兵達。ユーマ達の退路を断ち、囲んでしまえばいつでも嬲ることができるから当然ではある。

そんな彼らをユーマは無視。傭兵を指差してエイリークに説教。

「いいか。傭兵のオッサンたちを見ろよ。あんな頭悪そうなのに罠張って、数で有利な状況作り出してるんだぞ。馬鹿は馬鹿なりに頭使えるんだ。お前も少しは考えて突撃しろよ」

「ううう……」

「馬鹿にしてるんだよな？　坊主」

そこでユーマは振り向き、不敵に笑った。

「もちろん。この程度で俺達の相手になると思うなよ？」

ユーマは唯一の出入口である扉を指差した。

「どかん」

ユーマの間抜けな一声で天井が崩れ、扉が瓦礫で塞がる。

「ユーマ！？」

「なにしやがる!?」

驚くのはエイリークと傭兵。ユーマは気にもしない。

「これで『お前らの退路』は断った。覚悟はいいか?」

ユーマの周囲を囲むように風が発生した。その激しい《突風》は傭兵達にも届いて髪や武器、広間の中にあるものををがたがたと揺らす。

これは風葉の演出だ。天井を壊したのも風の魔法《風弾》である。

「てめぇ……やる気か」

「あんたらの力は理解した。俺に2度目はない……なんてね」

その行動と発言は相手を警戒させるには十分だった。武器を構えだす傭兵。

「アンタ、いったい?」

「エイリークをいぢめてる間に風葉にシアさんと《交信》してもらった。しばらくすれば救援に騎士たちを呼んできてくれる」

「本当!?」

「ああ。それでエイリーク、その短剣でどれだけ戦える?」

「……短剣で戦うなら防ぐので手いっぱい。リーチがないから攻めるのは難しいわ。有効な攻撃は突撃から繰り出す突き技だけ」

「そっか」

苦々しく答えるエイリークだが、ユーマは満足した。それだけでもユーマの武器になる。

「十分だ。風葉と相談したけど老朽化しているこの場で大規模な魔法使うのは危険なんだ。だから力を貸してくれ。時間稼ぎなんて考えない」

やられた分はやり返す、とユーマ。負ける気なんてさらさらない。

「ここであいつらを叩くぞ」

『優真』の基本戦闘スタイルはガンプレートの魔法弾や文房具セットのような魔術武装やアイテムを駆使した奇襲・罠など不意を突くものばかり。

これは師である兄、真鐘光輝の戦い方。ただ今は装備を奪われていてはどうしようもなくもう1人の兄、大和の体術を真似ようとも常識はずれというかまずユーマには無理なので役に立たない。

でも今の『ユーマ』は精霊使い。相棒の精霊がいて、隣にはエイリークもいる。

仲間がいる。

だから真似してみようとユーマは思った。彼の、《梟》の戦い方を。

「風葉、頼むぞ。エイリーク、前に出たらすぐに下がって俺を見て。……フォーメーション」

ユーマは呟いた。言葉の意味は何も関係ない。でもこれは梟が仲間の前で唱える魔法の言葉。

連携戦闘、開始。

先手は風葉。正面に牽制の《風弾》をばら撒いて傭兵の隊列を崩す。そこにすかさずエイリークが突撃。

《旋風剣・疾風突き》

竜巻を纏う短剣は、その衝撃波で傭兵を1度に2人壁に叩きつける。

「エイリーク！」

ユーマの叫びに彼女はバックステップ。ユーマの背後に回る間に援護射撃の《風弾》が飛ぶ。傭兵達に反撃の隙を与えない。

風葉は周囲の牽制と防御に徹していた。ユーマ自身に戦う手段がなのだから仕方がない。

それでもユーマはエイリークの前に立つ。正面にいる傭兵を見据え、背後にいるエイリークには注目するように腕を伸ばして指先を見せる。

正面からの1撃にならユーマは強い。傭兵の攻撃をサイドステップで大きく躱す。

ユーマが横にずれた分スペースが空いた。それに大振りした後の傭兵に隙ができる。

「今！」
「っ！　はあっ！！」

傭兵に向けられる指先。言われるまでもなくエイリークは飛び込んで傭兵をまた1人突き飛ばす。

「次！」

ユーマが指差すのはユーマを中心にして8時方向、斜め後方のスペース。前に出たエイリークを狙って傭兵が来るのは対角線上の2時方向。

エイリークが下がりユーマが割り込む形になる。傭兵がターゲットを変更して群がれば、ユーマは精霊の力を借りて高くジャンプ。

ありえないほどの跳躍に傭兵達が上を見た瞬間、エイリークがまた突撃して傭兵をまた1人壁に叩きつける。

この時ユーマは下を指差していた。

着地。その隙はエイリークと風葉がカバー。

「……ぜはっ、はぁはぁ、まだいけるな、エイリーク」
「へばってるのはアンタの方じゃない」

そうは言うがエイリークは感心している。精霊がいるとはいえ丸腰で敵を引きつけるユーマの度胸を。

下がれば反撃されず、離れただけ傭兵の動きがよく見える。突撃する距離を稼ぎ《旋風剣》の溜めも作れる。

戦いやすい。エイリークはそう思った。

ユーマはエイリークの戦い方は騎兵の槍ようなものだと思っている。

機動力を活かした鋭い必殺の一突き。ただし攻撃後は隙が大きく防がれたあとの反撃や側面からの割り込みに弱い。

突撃馬鹿のエイリークは前衛向きではない。彼女は『2列目』なんだというのがユーマの結論。だからユーマは前に出て傭兵の隙を作ることに専念した。

そこで風葉の魔法はユーマを大いに助ける。

ユーマは空間把握の訓練を受けてはいるが《風読み》の効果が相手の位置を肌で感じさせてくれる。牽制の魔法弾も乱戦では有効に働き、わざと弾幕の穴を作り傭兵達の攻撃を誘導することができた。

エイリークを下げて風葉と共に彼女を乱戦から守り道を作る。彼女の視野を広げてみせる。

加えてエイリークは《直感》の特性持ちで飛び込む勘は抜群。有効な戦術だった。

ヒットアンドアウェイ。攻守の交代を小刻みに繰り返すユーマとエイリーク。

突撃したエイリークに傭兵達が迫る。

「こっちよ。きなさい！！」

ユーマの戦法を理解したエイリークは傭兵をわざと引きつけて下がり、ユーマの前へ誘導する。

傭兵達を目前にしてユーマは叫び、彼の精霊は主人に応えて魔法を振るう。

「吹き飛べ！」

「どかーん」

傭兵の一斉攻撃をユーマは風の障壁で受け止め、爆発。

精霊の風葉は《精霊使い》であるユーマと繋がっている。話さずとも意思の疎通が図れるので風葉はユーマの意図を汲んで適切な魔法を使ってくれるのだ。

《爆風壁》

風属性の防御術式の1つ。

術者の正面に空気の膜を2層に展開。外側の膜に攻撃が当たると2層間で圧縮された空気が暴発するようになっている。

内側の空気膜が術者を守り爆風の反動で攻撃の衝撃を緩衝させる風魔法のリアクティブアーマー（反応装甲）である。

近接攻撃を仕掛ける相手に使えばその爆風が攻撃手段にもなる攻

防一体の術式は、攻撃を仕掛けた傭兵を吹き飛ばし爆風の余波が他の傭兵達の動きを止める。そこへまたエイリークが突撃。

風葉の魔法を盾に、エイリークの突撃を武器とするユーマは傭兵を次々と蹴散らしていく。

「耳！」
「はぁ！？」

訳のわからない指示が飛ぶ。

見れば風葉がエイリークに向けて耳を塞ぐ身振りをしている。

防戦一方だったユーマが前に出たのだ。《高速移動》の数歩で踏み込み、掌底を傭兵の頭に叩きこむ。

ドガアアアアン！！

轟音の一撃は砦を揺らす。とても人が殴って出せる音じゃない。

「なっ！！　んだと！？」

誰もが押し黙った。殴り倒した傭兵を見下ろすユーマを誰もが見た。

『……次はどいつだ』

少年が出したものとは思えない冷ややかで威厳のある声。そして傭兵の誰かは少年が電撃の拳を振るっていたのを思い出した。

別の傭兵は一晩痛めつけたはずのガキが今は平然としていることに今になっておかしいと気付く。

「な、何だよ坊主。お前何モンだよ」

『……』

一瞬何かを考える仕草をしたユーマは厳かに正体を明かした。

『知らないのか？　この国に封印された風の魔人の事を。俺の名も廃れたものだ』

「ま、魔人だと！？」

「まさか……うおっ！！」

ユーマを中心に風が荒れ狂う。《病魔》の魔人さながらに。

『悪く思うなよ人間。遊ぶのが楽しくてもう歯止めがきかん。ははっ、ははははははっ！！』

唸る《突風》に傭兵達は青ざめる。魔人を恐れて砦から脱出しようとした傭兵もいた。だが瓦礫に埋まった扉を見て絶望する。

逃げ場がない。唯一の脱出口はユーマが最初に塞いでいたから。

『言っただろう？　お前らの退路は断ったと。さあ、どうする？　ははははは、あははははは』

さらに風は激しくなる。それで傭兵の戦意を完全に殺いだ。

「ははははは……よし。一気に行くぞ風葉」

「はーい」
「……アンタって」

エイリークは呆れていた。ユーマがいきなり彼女の父、ラゲイルの声で喋ったので魔人云々は演技だと彼女は早い段階で気付いていた。

まずユーマは掌底と同時に《音爆弾》の回路紙を傭兵の頭に直接叩きつけ、ショックと振動で派手に気絶させた。注目を集め《変声》の術式まで使って豹変した演技。ラヴニカの真似は途中から思いついた。

ユーマのボロボロな姿は演技に拍車をかけたのだが、これでもユーマは勝負に出たのだ。ユーマもエイリークも碌に休んでいない。数の点を踏まえても長期戦は無理があった。

作戦は成功した。恐慌状態で背を向ける傭兵達を2人で片っ端から床や壁に叩きつける。

それはもう殲滅戦。戦いはすぐに終わった。

「ふう。片付いたな。エイリークは怪我ないか？　ヒールで回復できるけど」
「別にいいわ。怪我はないから」
「それなら俺が使ってしまうからな」
「いいわよ。……信じられない。あの時アタシは囲まれて1人も倒せなかったのに」

あらためてユーマを見るエイリーク。

「これが《精霊使い》の力？」

そうなのだろうか？　それともユーマ自身の強さなのだろうか？

そのどちらもだろうと思うエイリーク。傭兵のほとんどは彼女が倒したのだ。でも短剣だけの自分1人では無理だったのは理解している。

――ユーマとアイツの精霊がいたからアタシは……

「ところで出口が塞がってるけど、どうやって脱出するのよ？」

「どうせ外に見張りの傭兵がいるはずなんだ。下手に外に出るのはまずい」

考えがある、そう言ってユーマは砦の上を目指した。

＋＋＋

砦の最上階、展望台を兼ねた屋上。

「それで？」

「ここから空を飛んで逃げる。風葉」

「むりですよー」

ユーマのアイデアは精霊が却下。

「は？　なんで？　飛行なんて風属性ぽいだろ？」
「わたしは《風森》の一部にすぎませんー。使える魔法に制限があるのですー」
なんだそれつかえねー、とユーマが思えば、彼の思考は相棒の精霊に筒抜けだった。
膨れて主人の鼻を蹴る風葉。地味に痛い。
「痛っ！　……悪かったよ。じゃあ《補強》は？　俺がイメージで強化すれば別の魔法で代用できないか？」
「イメージできますかー？　そもそも人は空を飛べませんよー」
もっともなことを言われた。エイリークのしらけた視線が痛い。
「……うーんと」
「どうするのよ？」
「飛び降りるなんてどうですか？　この高さなら普通死にますけど」
「「――！？」」
第3者の声。振り返ると男がいた。
誰も気付かなかった。《風読み》ができる風葉ですら。
「どちらでもいいですよ。落ちて死ぬのも、……ここで死ぬの

も」

＋＋＋

1－14b　脱出　後（前書き）

脱出。それから

1－14b　脱出　後

＋＋＋

2人の前に男がいた。それだけしかわからない。

顔も姿も、いつからいたのかもわからない。

だからユーマは男が現れたとほぼ同時に風葉と緊急作戦会議。非常事態の対応は兄にシミュレーションで叩きこまれている。

アレとは関わっていけない。何よりも本能が告げているから。

（風葉、《これ》ならどうだ？）

（その術式は使えますよー。ただ身体を動かしながら『足場』をイメージする必要がありますー。できますかー？）

（大丈夫。昔兄ちゃんが崖から落ちた時、似たようなことをやってた。見たことあるから）

問題はどうやって逃げるか？

戦う必要も話をして相手の情報を引き出す理由もない。ユーマはただエイリークを逃がせばいい。

（あれはヒトじゃないですよー）

（わかってる。ラヴニカとも感じが違う。わからない。なんだ？

アレ）

もう時間がない。ユーマの隣にいるエイリークが短剣に手を伸ばすのを見た。

あの突撃馬鹿、と内心舌打ちしながらユーマは覚悟を決める。

脱出作戦、開始。

「どちらでもいいですよ。落ちて死ぬのも、」

「今だっ」

ユーマは動いた。男が何かを言いきる前にエイリークの手を掴み、引き寄せると、

「えっ？　ええっ!?　……えっ？」

砦の屋上から飛び降りた。

「えええええええ!!」

エイリーク、絶叫。

ユーマはエイリークを抱き寄せたまま降下。地面へ真っ逆さまと思いきや途中で風葉が魔法をかける。

「あまがけー」

ドスッ、といった衝撃がユーマの身体中に響いた。構わずユーマは空を『踏みしめる』。２人分の体重に膝が軋む。

「ぐっ！？」

床を踏み抜きそうな感覚をこらえ、次の１歩で前へ『踏み込み』宙を『駆け出す』。

《天駆》

風属性移動術式。空中を走ることを可能にするこの術式は足を踏み出した先に空気の足場を作っていく必要があるので難度が高い。

それをユーマは『落ちてくる僅かな瓦礫に足をかけて上るという非常識な兄』をイメージし、《補強》してやってのけた。

《高速移動》を併用して砦から一気に遠ざかる。

「ど、どこを触っているのよ！」

「しるか！」

ユーマはエイリークを抱えたまま逃げ出した。

エイリークの怒鳴り声は無視。ユーマに余裕はなかった。

「……まあ、いいでしょう。まさか本当に飛び降りるとは思いもしませんでした」

その場に1人取り残された男。逃げられたことはあまり気にしていないようだ。

「でも、生きてるといいですね？」

彼が手にしていたものはクロスボウ。

矢はなかった。

＋＋＋

ユーマはエイリークを抱きかかえたまま空を走る。人を抱えて走るなんて今のユーマには相当な負担だったが、それでもエイリークを離すことはなかった。

エイリークも最初は今の体勢が恥ずかしくて離せ、下ろせ、と騒いでいた。

しかしユーマの背にいつのまにか刺さっていた矢と服に滲んだ血、それに必死に走るユーマの荒い呼吸の音と自分を抱きしめるその力強さにとうとう何も言えなくなってしまう。

身動きの取れない彼女は変に意識しないよう、ユーマの背中越しに外を眺めた。風森の国が自慢する西の国で最大唯一の森林地帯とその先の砂漠。そしてただ青いだけの空。

綺麗だな。そう思うエイリーク。高いところから見渡す故郷はどんな状況であれ、感慨深いものだった。

砦からだいぶ遠ざかったころ。

ここまで離れれば追手が来ても森が障害となるのでしばらくは大丈夫だろうとユーマは安堵した。

同時に頭がふらつき意識が遠のく。彼の心身の限界が近い。

「風葉、シアさんの場所わかるか？　もしくは近くの町は……風葉？」

「……ええとー……すいませんー」

ユーマは精霊の身体が透けているのに気付いた。

「お前！？」

「おかしいですねー？　魔力がなくなりそうですー。……少しずつ吸い取られてますー」

《魔力喰い》の特性。それはユーマと繋がっている精霊にも適用されていた。

《魔力喰い》は魔力に関わる全ての適性は皆無。いくら精霊の風森の力を借りて《精霊使い》になれたとしても弊害はあった。

これはユーマが力を制御できない為でもあるが、未熟なおかげで

風葉から魔力を少しずつしか奪わなかったのは不幸中の幸いでしかない。

魔力体である精霊は魔力がなくなればその存在が消えてしまう。そして風葉は傭兵達との戦闘のほかにも《癒しの風》使い続けていて魔法を多用しすぎていた。

「俺のせい？　おい、大丈夫なのか？」

「もう無理ですー。……ごめんなさい。ちからになれなくて」

しょんぼりする風葉。

「そんなことない。お前のおかげで逃げることができた。俺の身体もなんとか動かせたし、今生きてるのも風葉が助けてくれたからだ。俺は……」

ユーマは満身創痍。実は《死んだふり》で使用したヒールの回路紙があまり効いていない。傭兵の私刑で受けたダメージと疲労は蓄積されている。

《魔力喰い》のもうひとつの弊害。それはユーマへ向けた魔法の効果が薄くなってしまうことだ。回復の術式が身体へ巡る前に魔力の大半を奪ってしまう。

ユーマは3枚分のヒールと風葉が常にかけ続けた《癒しの風》のおかげで何とか身体を動かすことができたのだ。傭兵に囲まれたときに逃げずに短期決戦に持ち込んだ理由でもある。

そしてユーマの肩には男が放った矢が刺さっている。これも風葉

が咄嗟に《風盾》で威力を殺いで狙いを逸らしてくれたから致命傷を避けることができたのだ。

出会って間もない精霊はこの上なく少年を守り、助けている。

「……ありがとう風葉。あとは俺がどうにかする。だから」

「そうですかー？　だったらわたし、じっかにかえりますー」

だから地上に降りるまで頑張ってくれ、ここまで聞かずに風葉は消えた。

「ちょっ、　実家ってどこだよ。　うあっ！」

風葉が消えれば魔法が解ける。

がくん

空を走り続けたユーマの最後の一歩は、階段を踏み外したような感じがした。

そのままユーマはエイリークと共に森の中へ落ちる。

「えっ？　きゃ……んぐ」

落下する感覚に悲鳴を上げそうになるエイリークの頭をユーマは胸に抱く。

ユーマにできることがもうそれしかなかった。

（せめてエイリークだけでも……頼む！！）

ユーマは何でもいい何かに祈り、そして気力だけで持たせていた身体をエイリークの盾として使い、

――ゆーま！

意識を手放した。

＋＋＋

エイルシアが風森の騎士と兵を連れてユーマとエイリークの捜索にあたっていたのはそれから3時間後のこと。

「姫様。この先は私達に任せてお待ちを」

護衛の騎士がそう進言すると、小さな精霊を肩に乗せたエイルシアはいけませんと首を振る。

「私とこの子でなければ2人を見つけることはできません。私が近くまで案内します」

「ですが」

「エイリーク達にも追手が迫っているかもしれません。捜索は単独で行わないようお願いします」

「……了解しました」

そしてエイルシア達は森の中へ。

「エイリーク……ユーマさん……」
「大丈夫ですよー」

2人の無事を祈り心配するエイルシアにそう言ったのは風葉。

「風葉、でしたね。どうしてですか？　それにいくら魔力を使い切ったからってあなたがユーマさんから離れるなんて」

エイルシアの非難を精霊は気にもしない。

「風森（わたし）はやりすぎたんですよー。《世界》から謹慎をうけましてー、あの時はふらふらのわたししか動けなかったんですー」
「……？」
「あの子が守ってわたしが助けを呼びに行くのが最善だったんですよー」
「それって」

問いかけようとしたその時、

「エイルシア様！」

伝令の兵だ。

「見つかったのですか？」
「いえ、それがツアイ殿の隊がおかしなものを発見しまして」
「おかしな？　どのようなものですか？」
「それが……」

どう言ったものか困惑する伝令兵に護衛の騎士が苛立つ。

「ありのままで構わん。さっさと言え」
「は、はい！　森で大きな繭のようなものを見つけたのです」
「繭？」
「ようなものです。木にくっついているのがどこか不自然なほど大きくて……なんというか白く輝いていました」
「！　それは」
「エイルシア様？」
「案内して下さい。私が確認します」
「は、はい」
「危険です！　新種の魔獣かもしれません」

気が急いて騎士の制止を振り切ろうとするエイルシア。

「問題ありません。だから行かせて。……風葉、そういうことですね？　あの子がユーマさんを守るから2人は大丈夫だと」

頷く風葉。でもどことなく焦りが見える。

「いそいでくださいー。しろっちも限界なんですよー」
「え？　わかりました。ズイン、貴方も付いてきて。急ぎます。クムさんも」
「……わかりました」
「俺の名前を姫様が……」

伝令の兵は名前を覚えてもらっていることに感激し、騎士に尻を蹴られ慌ててエイルシアを繭の所へ案内した。

「こ、これは」

森の中で見たものは大きなしろい繭。

森の木にくっついている、というよりも木の幹や枝に引っかかっているような感じだ。

「そんな……」

「姫様？」

エイルシアは愕然とした。

繭が放つしろい光があまりにも弱々しく明滅して、今にも消えそうだったから。

「大丈夫。もう大丈夫だから！」

声が届くかわからない。だけどエイルシアは叫んだ。

あの繭を『彼女』だと認識できるのはおそらく世界でエイルシアしかいないから。

「無茶をしたら駄目！　あなたが消えてしまったらユーマさんは……だからもうやめて！！」

必死な声が届いたのか、繭は形を変える。

ふわりと広がるそれはしろい翼。中から現れたのは、エイリークを抱きしめたまま眠るしろい髪の少年。

「ユーマさん、リィちゃん！」

次の瞬間、しろい翼は幻のように消えてユーマの髪も黒に戻った。

「あの少年は確か……彼が妹姫様を？」

「ここはいいので人を呼んでください。急いで！！」

騎士と兵は慌てて仲間を呼びに行く。

２人の無事を確認したエイルシアは守ってくれた彼女を想い、涙する。

「……ありがとう」

＋＋＋

落ちる。

ユーマは落ちている。落ちて行く先にいるのは先に落ちた１人の少女。

助けなきゃ、ユーマは思う。だから自分から落ちて行く。

落ちる。

手を伸ばすユーマ。まだ届かない。

――落ちろ、もっと早く！

無理やり体勢を変えて抵抗を減らす。周りは見えない。景色が歪む。

落ちる。

――助けなきゃ、そうしないとまた失ってしまう

もう手放してはいけない。あんな思い2度としたくない。

だからユーマはあの日から兄達を追いかけた。何もしらないまま。

兄は夜に巣食う闇を見た。見せられた。

振りまわされ狂わされていく彼の運命。自身の姿と心が歪むくらいの怒りと悲しみの中で彼は正直に生きる。

許せないからと。

もう1人の兄はまっすぐだった。力もその心も。

彼ができることは身体1つで戦う事だけ。だから彼はいつだって親友の前に立つ。

これ以上親友を傷付けないために彼は《狼》を名乗り拳を振るう。

姉はただ1人を守り、護り続けた。

非日常を生きる彼をうしろから見守り、いつ心が潰れてもおかしくなかった彼を隣で支えた。

彼の危機を救ったのはいつだって姉だった。

優真という少年は彼らを『日常』から見ていただけ。

光輝の力の正体、大和の誓い。優花の覚悟さえ少年は知らない。それでも構わなかった。

ただあの『非日常』を知ったからこそ変わらない兄達の強さを知った。打ち拉がれて初めて少年は彼らを追いかける。

――あの人たちのようになれば俺は……

落ちる。

届かない。ユーマは兄達に及ばない。だから必死に追いかけた。

落ちる。

届かない。だから手を伸ばす。

『あの子』にしてあげられなかったこと。次があるならば、

今度こそ――

とどけ、いつか、きっと！

落ちる。落ちる。落ちる。

落ちる先で手を伸ばす少女。彼が助けたいのは金の髪の少女。

それともしろい髪の……

＋＋＋

「あああああ！！！」

飛び起きるユーマ。

目の前にいるのは驚いて目を見開いたエイリーク。彼はベッドからへ飛びかかるように抱きつく。

「あ……あああああ！！！」

「えっ！？　えええ！！？」

2人は床に倒れた。

「いたっ、離しなさい。と、とにかく落ち着きなさい！！」

顔を赤くしてエイリークは叫ぶが、ユーマは離れない。震える腕で力強く抱きしめる。

と、そこに――

「おもしろいのう」

「……ユーマさん。私の妹に何してるのですか？」

ラヴニカとエイルシアがいた。エイルシアにいたってはユーマに向けて魔法をぶっ放そうとしている。

「……あれ？　俺？」

正気に戻った。何に必死だったのかも忘れた。

「いい加減に離しなさい！！」

「エイリーク？　お前！　無事か！？」

今度は肩に手をかけられ激しく揺さぶられるエイリーク。ユーマにただ頷く。

「そっか。ならいいや。ここどこ？」

あっさり手を離したユーマ。反動でエイリークは床に倒れる。

こてん。ガツッ！

「あ、悪い」

「……アンタは、いったい、何なのよーーーー！！！」

殴りかかるエイリークを誰も止めてくれなかった。

＋＋＋

あれからユーマとエイリークは無事風森の城へ帰還した。精霊の交信を受けたエイルシアが救出部隊を編成して率いてくれたおかげだ。

「この子が教えに来てくれたのです。こっちにいるよーって」

エイルシアの肩にちょこんと座るのはちいさな風の精霊。クッキーを頬張っている。

「風葉！　お前もう大丈夫なんだな」

「シアっちに魔力分けてもらいましたー。そのあとおうちでぐっすり眠ったので元気ですよー」

風葉は普段エイリークの《守護の短剣》の中にいる。そうすればユーマに魔力を奪われず、少しずつ魔力を回復できるらしい。

「シアさん、あれからどうなったの？」

「その話はあとで。あなたは3日も寝込んでいたのですよ。リィちゃん、傷薬と包帯あと水を用意してくれる？　ラヴちゃんも一緒に」

「姉さま？」

「ほれ、行くぞ」

怪訝に思うエイリークを引っ張って部屋を出る小さなラヴニカ。察してくれたらしい。

「シアさん？」

「……とりあえず私がわかることを話します。今回の件、私が狙われた理由はきっとあなたにも関係があるのです」

人払いをしたエイルシアは４００年前の勇者の伝説と賢者の預言を話した。

異世界の《勇者》は野心のある王ならばどうしても手に入れたい存在。３年前の争いがそうだったと。

「魔力さえ確保できれば《召喚》の魔術が使える《魔法使い》の私。それよりも異世界の人であるユーマさんの方が危険です。ユーマさん、傭兵達を相手に何かしましたか？」

「あの時は碌な装備を持ってなかったから派手なことといえば風葉の魔法くらいかな。俺は魔人だぞー、て脅した」

何とも言えない顔のエイルシア。

《精霊使い》の存在は珍しいが全くいないわけでもない。魔人云々は多少問題かもしれないが噂話程度で済ますことはできる。

「他には？　その……しろい羽とか」

「羽？　あっ！　……よかった。盗られてない」

ユーマは思い出したように服の下から首に提げた『しろいはね』取り出す。それを見たエイルシアが酷く驚く。

（えっ？　だって手当てした時、服の下には何も……）

「羽ってこれの事？　ただのお守りなんだけど」

「……いえ。何でもありません」

しろい少女に関しては知らないことが多すぎる。ユーマも知らない彼女の存在を伝えるべきか、彼女は計りかねていた。

「これからは気をつけて下さい。あなたの存在は争いの火種になる。3年前のように」

「シアさんの方は大丈夫なの？」

「私の方は問題ありません。国にいる限り私は精霊に守られています。私だって強いのですよ？」

心配するユーマにエイルシアは安心するよう微笑む。

「それからユーマさんにこれを。あの砦は騎士団を連れて調査してきました」

「！　光輝さんの」

スタングローブだ。他にも奪われたはずの文房具セットや回路紙のカードがある。

「砦はもぬけの殻でした。ユーマさんのものとエイリークの剣は見つけたので私が預かっていたのですが……ユーマさん？」

「……」

ユーマはグローブのエンブレムを見つめていた。
金の眼をした銀色の梟。追いかけてもまだ届かない存在。
これを手にしてもまだ。
「シアさん、ごめんなさい」
ユーマは下を向いたまま謝った。泣きたかったけどそれだけはやめた。
「どうして？」
「風葉が、風森がいなかったら俺、エイリークを傭兵から助けられなかった。捕まって目が覚めた時、あいついなくて……怖かった」
「……」
エイリークが無事だったのは本当に偶然で奇跡だったと思う。だからこそユーマはあの頃から何も変わっていないと痛感する。
「シアさんとラヴニカの時だってまぐれなんだ。やっぱり俺は……弱いよ」
傷ついた少年にエイルシアは何も答えることができなかった。
扉の向こうにいる少女もまた。

1－15　約束（前書き）

エイリークとエイルシア、ユーマと風葉。そして

1－15　約束

＋＋＋

ユーマが目覚めた次の日。

「お。エイリーク、おはよう」

「……何してんのよ、アンタ」

早朝の稽古に森へ向かうエイリークはユーマに出会った。

身体中のあちこちに包帯を巻いた少年は頭に精霊を乗せ、何故か幼女を棒にぶら下げ担いでいる。

「日課だよ。ラヴニカ捕獲の。風葉がいると楽勝だな」

「ちっ、知らぬ間にちっこいの連れおって。このままで済むと思うなよ」

宙ぶらりんでは迫力も威厳もないかつての魔人。

「まいったかー。ちびまじんー」

「なにを言うかこの羽虫が！！」

「喧嘩するなよ。ほら朝飯の手伝いに厨房へ行くぞ。それじゃ」

そのまま城の中へ入ってしまった。

「……何？　アイツ」

なんで平然としてるの？　エイリークは茫然とユーマを見送った。

＋＋＋
約束
＋＋＋

その日の午前中。

「なぜだ？　なぜあのサクサク感を出すことができない！？」
「ユーマ君とは年季が違うの。この域に達するには１０年の月日が必要なんです」
「……」

クッキーを焼いてみるがミサに遠く及ばず膝をつくユーマ。

「おじさん、こっち終わったよ」
「ああ、すまないね。おかげで花の手入れに専念できるよ」
「王様って他に仕事ないんですか？」
「……それは聞かないでくれ」
「……」

中庭の草むしりを手伝って国王に禁句を言ってしまうユーマ。

午後。

「……ユーマさん、何してるのですか？」
「ん？　シアさんの巡回に付いて行くんだけど」
「……怪我人はおとなしくしましょうね」
「ちょっ、首、しまるー」
「……」

エイルシアに引きずられ部屋に押し込められるユーマ。

「のう。それはなんじゃ？」
「ハリセンだよ。こうやって」

バシイイイイン！

「《音爆弾》の回路紙で作ったんだ。いい音するだろ？」
「突然人の頭を叩くな！　吃驚したじゃろうが」
「……」

外出禁止にされラヴニカで遊ぶユーマ。ハリセンで叩き合い激闘を繰り広げる。（そのあと騒音の苦情を受けたエイルシアに叱られるのだが）

「……」

エイリークは今日1日何となくユーマを観察してみた。

「昨日の今日でなんで普通に過ごしてるのよ？」

エイリークはユーマのことがわからない。彼女は聞いてしまった。

――俺は……弱いよ

魔人を倒して姉と国を救い、精霊の力を手に入れて捕まった自分を助けてくれた少年はそれでも弱いと辛そうに言った。

「どうしてそんなこと言うのよ。あれだけのことをしたのにそれでも弱いというの？」

強いということ。守るということ。

ユーマをみて納得しようとしたのにエイリークはわからなくなった。

＋＋＋

夜。

悩んだ挙句エイリークはユーマを探す。話をして直接聞いてみようとしたのだが。

「どこにもいないわ、アイツ」

「ユーマさんのことですか？」

声に振り返ればエイルシアがいた。

「姉さま？」
「ユーマさんの居場所は知っていますよ。その前に２人でお話しませんか？」
「……」
エイリークは姉に言われるがままに付いて行きエイルシアの部屋へ。
「２人きりは久しぶりね。帰ってきてからのリィちゃんったら私のこと避けていたみたいだったから」
「――！　そんなこと」
その通りだった。
攫われた失態は全てエイリークのせいだから。彼女はエイルシアに合わせる顔がなかった。
「わかってる。あなたが不安定だったのは知っていたのに私が仕事なんて頼んだから。謝るのは私の方よ」
「姉さま……」
「ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまって。本当に無事でよかった」
「姉さま！」
先に謝られて何も言えなくなったエイリーク。情けなくて悔しくて、そして泣きたくなって結局エイルシアに抱きついた。
頑な少女が素直に甘えることができたのは昔から姉と親友の２人だけだったから。

「ごめんなさい……ごめんなさい」
「エイリーク……」

エイリークは泣きながら胸の内を曝け出し、途切れ途切れに抱えていたもの吐き出した。

学園で酷い負け方をして自信をなくしていたこと、魔人の事で蚊帳の外に置かれ悔しかったこと。

城でユーマやラヴニカに嫉妬していたこと、傭兵相手に自棄になりユーマに反発して失敗したこと。

捕まった後の砦で過ごした夜の寂しさ、そこで食べたミサのクッキーに思わず泣いてしまったことすべてを話してずっと謝り、エイリークは泣いた。

嗚咽する妹を優しく抱きとめるエイルシア。落ち着くまで2人はしばらくそうしていた。

＋＋＋

「大丈夫？」
「……うん」

姉にすべてを曝け出したエイリークはこころなしかすっきりしたようだ。話を聞いたエイルシアもその様子を見て安堵している。

「……そうよね。突然のことが多かったですものね。あなたが戸惑うのも無理ないの。私もそうだから」

「姉さまが？」
「ええ。ほら、私は厳密にはもう《風邪守の巫女》ではないから」
「あ」
今更だがエイリークは気付いた。
姉は国の為巫女として魔人に全てを捧げる覚悟をしていたはずだ。
それがもうない。
「実はこれからのこと考えてなかったのよ。こんな日が送れるなんて本当は思ってもなかったから」
「……」
それを聞いてやはり諦めていたのだとわかった。思い返して俯いてしまうエイリーク。
「だから少しずつ私のできること、やりたいことをやるわ。ラヴちゃんの事もそう」
「あの子？」
「ええ。……私は魔人をただ憎むだけで彼女自身のことを考えもしなかったから。今度こそ本当の彼女と向き合ってみたいの。それに」
妹をまっすぐに見つめるエイルシア。エイリークはその視線が何故か怖かった。
「エイリーク、あなたともう1度向き合おうと思うの。《風邪守の巫女》としてではなく、あなたの姉、エイルシア・ウインディとして」
「それって」
「リィちゃん、約束覚えてる？」

「……うん」

忘れはしない。それが彼女のはじまりだったのだから。

「巫女の宿命を背負った幼い私が小さなあなたの言葉にどれだけ救われたのか、どれだけ励まされたのかあなたには伝えきれないわ。でもね」

エイルシアは一度言葉を区切ると、自分の気持ちを正直に告げた。

「私はあなたに守ってもらいたくなかった」

姉を守りたかった妹。

「えっ？」

「私のただ1人の妹なのだから。守りたかったのは私の方。だって私は姉でしかも《魔法使い》である私の方があなたよりも強いのですから」

でも妹を守りたかった姉はそんな事望んでいなかった。

「そ、そんな……」

エイルシアの本心を聞いてショックをうけるエイリーク。

「だから魔人の件もあなたを遠ざけたの。……結局私1人では無理でしたけどね」

あの時の自分を思い返して苦笑するエイルシア。それから彼女は突然に話題を変えた。

「ねぇ、リィちゃんはユーマさんに助けられて嬉しかった？」

エイリークは答えない。知らずに拳を握り締めていた。

「守られて、嬉しかった？」

「……姉さまは」

絞るように声を出す。

「姉さまは嬉しかったの？　アイツに、ユーマに守られて」

苦くて苦しい。姉を奪われた気分だった。嫉妬だってことはエイリークもわかってる。

――でも姉さまを守れるのはアタシじゃなくてアイツだから

「いいえ。ちっとも」

「……え？」

姉の返事が意外だったエイリーク。

「リィちゃんも見たでしょう？　ユーマさんがどれだけ無茶していたのか」

ユーマは怪我と疲労のピークで3日も眠り続けていた。

エイルシアが彼の包帯を交換していた時にエイリークは初めてユ

ーマの傷の具合を知ったのだ。

痣と腫れだらけの身体。肋骨も折れていた。矢が刺さっていた肩は今も血が滲んでいる。

「そうよ。あんな体で無理して戦って、《しんだふり》なんて嘘だったのよ」

「ユーマさんは体質で回復魔法の効きが悪いの。だから傷薬の方がよかったのよね」

そう言いながらもあの時エイルシアは《癒しの風》の魔法をユーマに送っていた。彼女が誰よりも少年のことを心配していたのだから。

それから風葉は涙を浮かべてぺちぺちとユーマを叩き続け、エイルシアは小さな精霊を慰めるように頭を撫でていた。エイリークは自分を助けてくれた少年に伝える言葉が思いつかなくて、ただじっとユーマの寝顔を見ていたのだ。

「ユーマさんは弱い」

突然エイルシアがそんな事を言う。

「えっ？」

「剣も魔法も使えずゲンソウ術も知らない。ユーマさんは不思議な道具を使いこなすことで誤魔化してるだけ」

エイリークは信じられない。

「でもアイツは」
「《精霊使い》になれたのは偶然。地力ならきっと私やあなたの方が上だわ」

エイルシアの推測は正しい。ユーマと比べれば身体能力はエイリークの方がはるかに高いし魔術戦も正面から撃ち合えばガンプレートや回路紙よりも風属性に特化したエイルシアの魔法に分がある。

「それでもユーマさんは私達を助けてくれた。お母様もラヴニカも。……ねぇ、ユーマさんが異世界人であることは話したわね？」

エイリークは信じていなかったが話だけは聞いている。精霊の風森もそのようなことを言っていた。

現在ユーマのことを知っているのは彼女とエイルシア、ラゲイル、ラヴニカの４人だけ。

ただエイリークが知らなかったことが１つ。

「私はラヴニカから奪った魔力を使ってユーマさんを元の世界へ還すつもりだった。でもユーマさんはお母様を解放するためにその魔力をすべて使ってしまったの。……あれだけの魔力はそう簡単に手に入らない」

エイルシアは目を伏せた。あの時、少年は何と言っただろうか？

――俺にできることがあったんだ。だからそうしただけだよ。兄さんだってきっとそうする

「今回は《精霊使い》になってまであなたを助けたわ。エイリーク、風森はどうやって適性のないユーマさんと契約したの？」
「精霊は……アイツが《転写体》だから存在を書きかえることができるって言ってた」
召喚に関して独自に調べていたエイルシアに思い当たることがあった。
そのリスクにも気付いてしまう。
「転写体……そんな。だとしたら今のユーマさんは……」
「姉さま？」
「……エイリーク。私は必ずユーマさんを元の世界へ還します。彼に救われたこの国の王女として、そして私、エイルシア・ウインディの意思でこの恩を必ず返します」
「姉さま！？　どうしたのよ」
突然決意を固めるエイルシアに驚いて理由を訊ねたエイリーク。説明を受けたエイリークは愕然とする。
今までの話ではっきりとわかった。ユーマという少年は自分を犠牲にすることに躊躇いがない。
彼は元の世界へ還ることが一層困難になっている。
「どうして？　なんでアイツは」
「もう1度聞くわ。エイリーク、ユーマさんに守られて嬉しかった？」

エイリーク、今度ははっきりと言える。

「嬉しくなんてない。アイツなんかに守られるなんて絶対嫌！」

「私もよ」

エイルシアは妹に同意する。

2人とも気付いた。守るということも守られるということも、ただそれだけでは辛すぎると。

「そもそもあなた達が攫われた時だって私が助けるつもりだったのよ。あの程度の傭兵なんか砦ごと吹き飛ばして終わりなんだから」

「……それは危なかったわよ、姉さま」

主にアタシが、とは言えなかったが。

「私は本気よ。それでね、もう1度私と約束しましょう」

「約束を？」

「そう。私達は姉妹。私達2人に巫女や騎士なんて関係なかったの。守るなんて考えてはいけなかった。守られる方が辛いのだから。だからね」

エイルシアのあたらしい約束。それは幼かった2人が交わしたものと似ているけど違うもの。

エイルシアは昔、母が伝えてくれたことを今になって理解できた。辛い役目を背負っても1人じゃない。誰かの力を借りてもよかったのだ。

彼女には父がいて妹がいる。国の人たちも同盟国のあの王もいた

のだ。手を差し伸べてくれる人はたくさんいたはずなのに、ただそれに気付かなかった。

いや、彼女が見もしなかっただけ。

「あなたが困った時は姉として私があなたの力になります。私が困った時はエイリークが私を助けて。困難はみんなで立ち向かいましょう」

助け合いましょうと改めて彼女は言った。

「1人で背負う必要はないの。2人で無理でも私達を助けてくれる人はたくさんいるのだから」

少年は自分から手を差し出してくれた。でも今度からは自分から手を差し伸べ、自分から手を繋ぐべきだと彼女は思った。

エイルシアはそうありたいと思った。まずは大事な妹と、その為の約束。

「姉さま、アタシは……」

あたらしい約束にエイリークは……

＋＋＋

城の尖塔付近、その屋根の上。そこがエイルシアに教えてもらった場所。

「怪我人のくせに、外はまだ冷えるわよ」

「……ん。でももう少しだけ」

エイリークが少年を見つけた時、ユーマは夜空を眺めていた。

声をかけた時にユーマが何かを隠す素振りを見せたのに気付いたが、エイリークは気にしないことにした。少年の隣に座る。

「……」

エイリークは言いたいこと、聞きたいことがあるけれど、ぼんやりして覇気のないユーマを相手に何も言えずにいる。

静寂。ただ星空を見上げるだけ。

「……こんな星空を見てるとさ、空を飛びたくなるんだ」

ふとユーマは話しだした。夜空を見上げたまま、エイリークを見もしないで。

「星に手が届きそうなくらい高いところから空を見渡してさ、街を眺めるんだ。世界は広い、それを感じたくなる……今は無理だけど、もう1度だけ」

ユーマは夜空に手を伸ばす。でも何も掴めない。どこにも……誰にも届かないその手。

「……もしも」

エイリークはユーマに訊ねた。ユーマの今の仕草が自分と重なってみえたから。

今ならきっと求めた答えが返ってくると思ったから。

「もしも、どれだけ頑張っても何もできなかったならどうしたらいいの？　どうしても届かない願いは諦めなければいけないの？」

エイリークが剣を手にしたのは姉を、誰かを守るため。

――でもアタシは弱い。だから守れない。

今回の事件で彼女は気付いた。どれだけ剣を振るっても守れないものがある。

ならばどうすればいい？

「届かなかったら俺は手を伸ばすよ。それで駄目なら足を前に出す」

「は？」

「最後の最期まで考えて工夫するんだ。手を使って、足を使って、周りを見て、物を使って、声を出して、力を借りて。どんな時でもできることはあるはずなんだ」

それがユーマの答え。

「それでも駄目ならどうしてなのか考える。努力は足りないものを見つけ出してからはじめるんだ。無駄な努力なんてないけれど、目標があるならまっすぐに進んだ方がいい。あとは届くまで積み重ねるだけ」

それがユーマが教わったこと。

「……それで駄目なら？」

エイリークが聞きたいことをユーマはわかっている。砦の中で彼女の独白を聞いたのだから。

「それでも諦めない。『守れないから守らない』のは理由にもならない。そんな誤魔化しを俺は許さない」

だから答えた。ユーマは自分の心の内を。

「俺はもう諦めて生き続けるなんてできないから。だから俺はできることをやる。今できなくても、何度失敗して失っても次は、今度は、いつかきっと」

「……そっか」

エイリークは少しだけわかった。ユーマは強くない。今でも足掻いているだけということ。

それは自分も同じ。ただ目指したものはまだずっと遠くにあった。それだけのこと。

諦めてしまうにはまだ早すぎただけ。

（アタシはまだ何も失ってなんかない。まだ次がある。ならアタシは……）

「ありがと」

彼女が大事なものを失わなかったのはこの少年のおかげだ。

姉を救い、自分を守ってくれた少年。彼がいたから次がある。だから素直に言えることができた。

＋＋＋

ユーマに礼を言うとエイリークはすぐに立ち去った。

残ったのはユーマとひょっこり現れた彼の精霊だけ。

「風葉」

「なんですかー？」

「やっぱり空飛べないかな？」

「飛べますよー」

砦から脱出するときは無理と言ったはずの風葉はそんな事を言う。

「この世界は幻想が力になるのですー。それは魔法を超える無限のちから。望むのならきっと」

「そっか。ゲンソウ術だっけ。俺もできるかな？」

ユーマは目を閉じた。心地よい疲労感が眠りを誘う。

「わたしとの約束、覚えてますかー？」

「お前と一緒にこの世界を見るんだろ？　そうだな、落ち着いたら旅に出よう。異世界で修行の旅なんていいかもな……」

まどろみの中でユーマは風葉に答えた。還ることも難しい上にユーマには何も目標がなかったから。それもいいと考えた。

「……風葉、これからもよろしくな……守ってくれてありがとう、風森……」

眠るユーマ。しろいはねを大事に握りしめて。

「おやすみなさい」

翠の髪の精霊は少年の眠りをずっと見守っていた。

夜風は少年に優しかった。

＋＋＋

この先は《風森》の独り言だ。語りかける相手は今眠っているのだから。

「あなたも随分無理をしましたね。ラヴニカとの戦いで消耗しきっ

たあなたが、もう1度この世界で翼を広げるのは危険な行為でしたでしょうに」

魔力を使い切ったしろい少女は眠りについた。でもきっと少年の危機には必ず無理をして目覚めるはずだ。

「今は力を取り戻すことに専念して下さい。その間この子は私が守ります。……私の中にあるあの人との約束、そして私だったウインディの名にかけて。だから」

精霊は少年を守ることを眠る少女に誓い約束した。

「あなた達の再会を私は願います。だからその時まで……おやすみなさい」

次に少女が目覚めるとき。それは……

＋＋＋

1－16　エピローグ－旅立ちの日（前書き）

第1章ラスト

1－16　エピローグ－旅立ちの日

＋＋＋

「……それが《第二次月陽生徒会クーデーター事件》のあらましであり後輩たち3人組と猛が初めて協力した記念すべき事件なんだよ。彼らを率いた私が生徒会長になったきっかけでもあるな。それから私は……」

「……いつまで続くのよ」

うんざり気味のエイリーク。あれから2時間以上話を聞いている。

「何だ？　退屈なら君が後輩の話をしてくれてもいいのだぞ。色々あったんだろ？　初ちゅーは何時だったとか」

「言うか！！」

「あったのか！？」

「……」

黙った。この生徒会長は相手にしないほうが被害は少ない。

「まあいいさ。今回私が登場したのはほんの息抜きでしかないからな。出番はずっとずっとあとの話だから」

「何の話よ？」

「君の話はまだ終わっていないから語ることができない、そういう話さ。むしろ私は本編に出る機会があるのだろうな？」

「誰に聞いてるのよ」

「さあ？」

ほんとうによくわからない人だ。

「それはさておくとして。もう時間だな。機会があったらいつか教えてくれ。私の知らない後輩、『ユーマ』という少年と君たちの話を」

「機会があればね」

そうエイリークは彼女に返事をした。続けてこうも言った。

「アンタが話す『優真』と同じくらいの話をいつか、ね」

＋＋＋

エイリークは吹っ切れた。あたらしい約束と決意を胸に秘めて。

「姉さま助けて！　課題が終わらないの」

「……自分でやりなさい」

でもって薄情な姉に約束は簡単に破られた。

冗談だけど。

＋＋＋

エピローグ　旅立ちの日

＋＋＋

ミサの力を借りて休暇中の課題をなんとか1日で終わらせたエイリーク。実は今回最大のピンチだったかも知れない。

「助かったわミサ。今度奢るわ」

「それじゃ《林檎亭》のアップルパイをお願いね」

「うっ、……わかったわよ。朝から並んでやるわ」

ミサは嬉しかった。親友が完全復活したのだ。今まで心配かけた分、無理言って奢ってもらおうと思ったのだが。

「《ＳＯＳ》のスウィートロールでもいいわよ。何本でも奢ってあげる」

「――――！！　リィちゃん！！　いくらなんでもそこまではいいよ。課題みせたくらいじゃ贅沢過ぎるよ」

《Ｓｗｅｅｔ　Ｏｆ　Ｓｗｅｅｔｓ》は学園都市内で甘味の最高峰。完全予約制の女生徒の聖域だ。

「いいのよ。……ミサ、いつもありがとう。あなたが親友でよかった」

これはエイリークのミサへの感謝の気持ち。この親友にはいつも助けてもらっている。今回ほどそれを感じたことはなかったから。

感極まった親友と言えば、

「リィちゃん……限定プディングでもいい？」
「……まかせなさい」

親友はあんまり調子に乗せない方がいいと思うエイリークだった。

４月初旬。学園の春期休暇が終わりを迎えようとしている。

学園都市へ戻る準備をはじめたエイリーク。それでも用意するのは課題と友人たちに贈るお土産くらいなのだが。

「あっ」
「む」

エイリークは逃亡中のラヴニカに遭遇した。実は彼女とはまともに話をしたことがない。

「……なんじゃ、それは？」
「……友達へのお土産よ。アタシもうすぐ学園に戻るから」

ぎこちない会話は続くことがなかった。

ラヴニカはどう思ったのだろうか？

「……のう、我が気に入らぬのなら出て行ってよいのじゃぞ。我は自由なのじゃから」
「……そうね。アタシも言いたいことがあった。アタシはアンタを

認めない」

子供の表情は読みやすい。悲しいような、でもほっとしたような顔をするラヴニカ。

――姉さまは正しかった。この子は……

「いい？　アンタは絶対に妹よ。魔人だろうが何年生きていようが今のアンタを姉と呼ぶなんて絶対に嫌」

「なっ！？　何を」

「アンタはもうアタシ達の家族。だから1人になんてさせない。……ラヴニカ、また今度ね」

エイリークがいなくなってもラヴニカはそのまま茫然と立ち尽くす。

「何故じゃ？　あ奴までなんで……」

ラヴニカの呟きは誰にも届かない。

＋＋＋

そしてエイリークとミサが出立する日。

2人を見送るのはエイルシアとラゲイル、ユーマの3人とミサの

両親。

結局、ラヴニカは見送りに来なかった。エイルシアも無理して連れ出そうとは思わない。

「姉さま、ラヴニカは？」
「大丈夫。あとは私に任せて」

「ユーマ君、リィちゃんのことありがとう。これ、風葉ちゃんと食べてね」
「クッキーだ。よかったな、風葉」
「ありがとうですー。ミサちーのことは忘れませんー」

風葉は何故かミサのことを『ミサっち』とは呼ばない。どうやら風葉にとって最上級の敬称らしい。

完全にクッキーに餌付けされている風の精霊。

「そうだった。ユーマ、風葉も来なさい」

エイリークは腰に差してある《守護の短剣》をホルダーごとユーマに差し出す。

「これは？」
「アンタに預ける。風葉には『おうち』が必要でしょ？」

エイリークにとってこの短剣は小さな頃からのお守り、大事なものだ。でも《精霊使い》となった少年にとっても《精霊器》である短剣は必要なものだった。

恩人に対するお礼は彼女はこれが精一杯だから。

「貸すだけよ。アンタが『還る』時は必ず返しに来なさい」

「……ありがとう。大事にするよ」

エイリークから短剣を受け取るユーマ。

国王にして騎士であるエイリークの父、ラゲイルは懐かしそうに、それでいて複雑そうに2人のやりとりを見ていた。

「自分の剣を彼に渡すなんて、まるで《騎士の誓い》みたいじゃないか」

爆弾の投下。

「なっ!?　なななな」

「……そうですよね、リィちゃんも姫なんですよね……忘れてました」

「ユーマ君はリィちゃんの《騎士》になるの？」

「ん？　今の俺は《精霊使い》だよな？」

「そうですよー」

「「「で、どうなの？」」」

問い詰めるのはエイルシア、ミサ、そしてラゲイル。ユーマと風葉はあまり理解していない。

注目されるエイリーク。予想外だった。何も考えずやってしまっ

たともいう。

『姫君の騎士』の話は知ってはいてもエイリークに縁のなかった話。言われるまで気付かなかった。

錯乱ゲージ、急上昇。3、2、1……

「ああーーっ！！！」

逃げた。全速力。

「リィちゃん!?　待ってよー」

追いかけるミサ。騒がしくも旅立つ2人を皆が見送った。

「……行っちゃいました」

「寂しい？」

エイルシアは首を横に振る。

「いいえ。エイリークは私の妹ですもの。また元気に帰ってくるわ」

＋＋＋

エイリーク、疾走中。そして途中で急停止。

「リィちゃん、やっと追い付いた。どうしたの？」

「何でもない。……またね」

エイリークは《直感》に従って遠くの木々に手を振った。
その先に紫の髪をした義妹がいる気がしたから。
「行きましょう。ミサ」
「うん！」
エイリークは歩み出す。今日からあたらしい1歩を踏み出した。
お守りの短剣の代わりに、2つの約束を交わして故郷をあとにする。
――今度会うときは強くなる。もっと、もっと
でも彼女が少年と再会するのは思ったよりも早くほんのちょっと先の話。
＋＋＋
次の日。
「ユーマさん、入りますよ……うわ」
ユーマの部屋を訪れたエイルシアは物で溢れかえっていた部屋をみて唖然とする。

「どうしたの？」
「いえ……ユーマさんこそこれはどうしたのです？」
「《圧縮ボックス》の中身を整理してたんだ。……なんか一杯入ってた」
中身は光輝の作ったらしい装備品や試作品とそのマニュアル。着替えや歯ブラシなどの日用品、危機百選シリーズのほかに本が数冊。非常食もあった。
「このカレーは大和兄ちゃんだな。前にこれがあれば山のものは何でも食えるって言ってたし」
ユーマ、正解。
ちなみに海のものは醤油があればいいというのが大和の持論。カレー粉ではなく市販のルーを入れておくのも彼らしい。
「なんかここまで準備がいいと俺、兄さん達に仕組まれてここに来たんじゃないかな？」
「まさか」
考えてもしょうがないことだった。
「それでシアさん、何か用事？」
「そうでした。実はお願いしたいことがあるのです」

それからユーマは急いで旅支度をした。

学生バッグに最低限の荷物を詰め込み、《守護の短剣》を腰に差す。

「ごめんなさい。リィちゃんたら課題のノートを忘れていたの。他に誰か学園まで届ける人がいればよかったのですけど」

ユーマは中央の学園都市までおつかいに行くことになった。それではじめて国外へ出ることに。

「構わないよ。城の人の中じゃ俺が1番暇してるし。この世界を見て回ろうと思ってたところだったんだ」

「お願いします。これがユーマさんのフリーパスです。《転移門》の利用時に必要です。身分証明も兼ねてますので失くさないで下さいね。それと地図です」

国で緊急発行されたユーマのフリーパス。何気に王族仕様なのをユーマは知らなかった。

公式の身分はウインディ家の召使いだったけど。

「シアさん。これ預かってて」

「！　これはユーマさんの」

エイルシアに渡したのはグローブやガンプレートなどのユーマの装備品。

「とりあえず兄さんの力を借りずに頑張ることにしたよ。俺も強く

なりたいから」
「危険ですよ。外は魔獣もいます。せめて武器だけでも」
でもユーマはそうもいかない理由があった。
「ガンプレートは《魔力喰い》のせいでうまく使えないんだ。よかったらシアさんが使って。カートリッジに魔力を補充してやれば何度でも使えるから」
「こんな大事なもの」
「きっとシアさんの役に立つよ。あと回路紙も回復用に何枚か貰うけどあとはシアさんとラヴニカで分けて。これも再利用できるから」
「でも……」
「だいじょうぶですよー。わたしがいますー」
なおも心配するエイルシアに風葉が短剣から飛びだした。えへん、と胸を張る。
「そうだよな。頼むな、相棒」
「はーい」
風葉はユーマの肩にしがみついてそれで準備万端。
「それじゃ行くよ。シアさん」
「……ユーマさん」
「ん？　ん！？」
気付いたら彼女にキスされていた。

突然の事に反応できないユーマ。

「……おまじないです。寄り道してもいいですけど必ず帰ってきてくださいね」

「……行ってきます」

顔を合わせることができずユーマは振り返らずに走って行った。

そんな少年をエイルシアは優しく見送る。

だだそれからユーマは帰ってこなかった。風森に帰ってきたのは学園の夏季休暇に入ってからの話。

連絡が遅くてしばらくエイルシアが拗ねていたのは彼女の義妹だけが知っている。

＋＋＋

風森の国を出る前にユーマは寄り道をした。

場所は女神像のある広場。聞くとこの国を護る精霊の肖像らしい。

ユーマは女神像の前にミサのクッキーを1枚置いた。

「食べていいですかー？」

「だめだ。これはお供え物なんだ」

ぱん、ぱん

二礼二拍手一礼。

ユーマは自分の知っている礼拝をやってみる。

「行ってきます」

「じゃあねー」

――お気をつけて

ユーマは精霊に旅の無事を祈り、風森の精霊はそんな彼を見守った。

「さて、まずはどこに行くんだっけ」

地図を広げてみるユーマ。

でも文字が読めない。

「……どうしよう。風葉、わかる？」

「わたしはー、砂漠を見てみたいですー」

風葉はユーマの問いを無視するようにそう言って地図を指差す。

見れば砂漠をまっすぐ進めば目的地に一番近い。ような気がする。

「そうか。でも砂漠越えは大丈夫かな？」
「わたしの魔法があればばっちりですー。ついでに修行しましょー。風の魔術をゲンソウ術でできるようになると便利ですよー」
「なるほど。じゃあそれで。さあ、行こう」
「はーい」

思い返すとこれは罠だったと激しく後悔することになるユーマ。

彼が向かう先は《西の大砂漠》。世界最難関の遺跡。

ここで出会った傭兵や砂の精霊、それと魔獣達との戦いがユーマの《精霊使い》としての力を引きだしてくれたのだけど、それはまた別の話。

こうして異世界の少年ユーマは旅立つ。小さな相棒を連れて学園へ。

彼の戦いはまだはじまったばかり。

＋＋＋

「というわけで召喚に関する情報は何もありませんでした」
「……」
「本当ですよ。お土産に風森の姫を捕まえてくるどころか傭兵達は

返り討ち。しかも魔力もない妹姫の方にです。やはりランク登録されない傭兵は役に立ちませんでした」

「……」

「もちろん証拠は残していません。すべて処分しました。どうせ私の存在は『忘れてしまう』ので問題ありませんけど」

「……さがれ」

牢獄での謁見のあと。

「ははは、どうやら忘れているようですね、我が主は」

男は笑う。傀儡の王を嘲笑う。

「それにしても《精霊使い》……また特殊な能力持ちが喚ばれましたね。見逃して下さいよ主様。勇者なんてモノは沢山いた方が面白いのですから」

男は笑う。新しい玩具を見つけたから。

「さて、このことを報告した後は我が国の勇者様でも見に行きましょうか」

＋＋＋

第1章　風森の勇者　完

＋＋＋

序章へ続く

次章　昇級試験／銀の悪魔へ続く

＋＋＋

2－00a　1日のはじまり（前書き）

第2章の導入部です。

ユーマの1日、登校編。

2－00a　1日のはじまり

＋＋＋

C・リーズ学園、男子寮の1室にて。

午前7時。

「おきてくださいー。あさですよー」

早朝から眠る少年の頬をぺちぺちと叩くのは、緑の小さな小さな羽付きの女の子。

「……もうちょっとだけ……ねる」

眠る少年はここ最近仲間たちの特訓に付き合わされてお疲れだった。起きる気配がない。

「しかたないですねー。……『優君？　起きてる？』」

「はい！！　起きてます姉さん！　……って風葉？」

穏やかなのに冷ややかな姉の声に一気に目が覚めて飛び起きた。

何故か正座。長年の習慣は条件反射になっている。

「おはようございますー。びっくりですかー？」

「それやめてくれよ。……なんで姉さんの声知ってるんだよ」

彼女は風の精霊の風葉。風属性の魔法を使う。

今のは《変声》という術式で空気の振動を操作して声質を変化させるのだ。

少年の姉は『この世界』にはいない。何故風葉が知っているかというと、少年が《精霊使い》であって契約した精霊である風葉と繋がっているからだ。

「まあ、いいや。今日も1日頑張るか」

「はーい」

少年は手早く着替えを済ませて顔を洗うと、黒髪を手櫛で撫でて腰に短剣を差す。

「行ってきます」

「いってきますー」

「……」

そして少年は小さな精霊を連れて部屋を出た。

精霊使いの少年、ユーマの学園での1日がはじまる。

部屋に忘れられた白い腕輪。

「……」

その腕輪に宿る砂の精霊は、主人に向けて決して「いってらっしゃい」とは言っていない。

＋＋＋
1日のはじまり
＋＋＋

7時15分。

学園の第1食堂にて。

「おばちゃん、朝食セットBね」

第1食堂、通称『おばちゃんち』。パートのおばちゃんだけで運営されている学生食堂である。

大抵の学生は朝から学食の世話になっている。ベテランの主婦達の作る定食は学園で家庭の味を提供している。

「ようユーマ」
「おはよう。アギ」

ユーマに声をかけて隣に座るのは逆立つ黒髪に青いバンダナの少年。ユーマの友人であるアギだ。

「アギは給食？　それで足りるの？」
「最近は姫さん達に付き合わされて学生ギルドへ依頼受けに行けてないんだよ。ちょっと金がない時はこれでいい」
学園の食堂には無料提供の給食がある。栄養バランスは考えてあるのだが、育ち盛りには物足りない。
今日はトーストにハムエッグとサラダだった。アギはおかずを全部パンに挟んでかぶりつく。
「これが昼だったらキツイけどな。それでだな、ユーマ。実は今日の購買でギガグリルサンドシリーズの新作が出る。昼飯はがっつりこれでいこうと思うが確実に入手するために手を組まないか？」
「いつも情報がはやいね。わかった。午前最後の授業は何だったかな？」
「俺は戦士系の選択だからボロス先生だ。あの人は俺が抑えるからリュガと協力してくれ」
格闘技顧問、グルール・ボロスはギガグリルサンドが好物。ギガグリルサンドは他のパンを圧倒するボリュームを持つが数が少ないので、これを狙うとユーマ達は購買に向かう途中であの緑ジャージの筋肉と交戦することになる。
「リュガは授業違うの？」
「あいつは今日一般選択のほう。世界史だな」
「……似合わないね」
＋＋＋

7時50分。

朝食後。ユーマはそのままホームルームを受けに教室へ向かおうとしたが、腕輪を忘れていたことに気付いて慌てて取りに寮へ戻る。

「悪かったよ、砂更。今度は忘れないから」

「……」

「週3くらい忘れてますものねー」

その事実に腕輪に宿る精霊はいじけた。

砂更。《白砂の腕輪》に宿る、ユーマのもう1体の精霊。

長身で中性的な雰囲気を持つ砂の精霊。ただし口元や目元をロープや金の長髪で隠している。

「拗ねないでくれ。……わかった。今日は普通科棟に行ってミサちゃんにクッキー焼いてもらおう。だから機嫌直してくれ」

「……」

「わたしにもくださいー」

精霊たちは何故か彼女のクッキーがお気に入りだ。他は決してものを食べようとしない。

砂更の機嫌がなおった。

「ごめんな。今度からは気をつけるよ。ん？」

「覚悟！」

学園へ向かう途中でエンカウント。同じ制服だから学園の生徒のようだ。

「砂更！」

砂更は地面から《砂の腕》を出して襲撃者の足を掴み、そのまま砂地となった地面へ引きずり下ろす。

首まで埋めて処理完了。

「最近多いよな、襲われるの。……まあ、いいや。遅刻するからもう行くよ。それじゃあ」

「ばいばーい」

「……」

様々な理由で襲撃する生徒にも慣れたユーマは、挨拶してそのまま学園へ向かう。

「……ここから出してくれ」

生首状態の生徒はもちろん遅刻した。

＋＋＋

午前８時。

Ｃ・リーズ学園の正門前。

ここでは相変わらず2人の姫が言い争う。

「だから、昨日の模擬戦はアイリィが足を止めて戦うから真っ先にアイツに狙われたのよ」

エイリーク・ウインディ。金髪翠眼の《旋風の剣士》。

「貴女だって。すぐに突撃する癖があるから簡単に罠にかかるのです。それと前衛の貴女が後衛をほったらかしにしないでください」

アイリーン・シルバルム。白金の髪に蒼眼の《銀の氷姫》。

2人は模擬戦の反省会をしていたつもりだったが、いつの間にかどちらのせいで負けたのかという話になっている。そこへ通りすがった少年が1人。

「……今日は近づかないでおこう」

「「まちなさい」」

ユーマ、他人のふりして正門突破作戦、失敗。

最近は正門前でユーマが2人に捕まるのがパターンになっている。それを見ている他の生徒はどう思うだろうか？

「アンタ的にはどうなのよ？　3対1で勝負して、簡単にアタシ達に勝ったアンタの意見は！」

「私達の敗因は何なのでしょうか？　いくら貴方が《精霊使い》だとしても昨日は一方的すぎです」

話題となっていたのは昨日ユーマが放課後に付き合わされた合同特訓。

試しにユーマＶＳエイリーク、アイリーン、アギという組み合わせで模擬戦を始めてみたのだが、結果は３セットすべてユーマの勝ちだった。

「いや、無理して付き合ったアギは本気じゃなかったから……」
「それはいいの。反省会の結果、今日のアイツはサンドバックにするから」

アギの今日の予定もエイリークによって決まったらしい。

「……敗因、聞きたいの？」
「言いなさい」
「お願いします」

ユーマは躊躇う。

下手なこと言うと朝から救護室送りにされてしまうのがお決まりになっているから。

「いいユーマ。今度の昇級試験の為でもあるの。アンタのおかげでアタシ達のレベルはこの１ヶ月でまた１段と高くなった。試験まであと１０日。悪いところは早く気付いた方がいいわ」
（気付かせるのよ。アイリィが悪いということを！）

「そうです。３年生までにランクＡになればいいと思う人は多いでしょうけれど、私達にそのつもりはありません。今後の為にもはっ

きりしておきたいのです」
（はっきりさせましょう。あの子の突撃癖が私の足を引っ張っていることを！）
「……わかった」
２人の真剣さに覚悟を決めるユーマ。これまで付き合った特訓の日々が彼女達に説得力を持たせたのだった。
実際のところ、２人はどちらのせいで負けたのかを聞きたかっただけなのだが。
「エイリーク、お前やっぱり突撃馬鹿だよな。砂の壁で姿を隠したら躊躇わずに壁壊しにいきやがって。突き破ってそのまま先にある落とし穴に落ちればもう何も言えないよ」
ずばーん、とぶった切る。
「警戒心てやつがない。隠れる敵が正々堂々と戦うと思うか？」
「ああ？」
エイリークは眉間に皺を寄せ、頭まで砂まみれになった昨日を思い出す。
汗で練り混じった砂のあの気持ち悪さ。服と髪に残った砂を洗い落とすのにどれだけ時間をかけたのだろうか？
「アイリさんは何というか……古い？」

さくっ、と刺した。

「近接戦がダメなのに足を止めて魔術を扱うのは昔からある魔術師のスタイルだよね？　この先通じないと思うよ」

ずぶずぶ、と奥へ突き刺す。

「アイリさんの場合、動かないで身を守るだけだから狙いやすい的なんだ。だから守りを崩せる大技を仕掛けやすい」

ぐりぐり、と傷口を抉る。

「そう言えばアイリさんて氷属性なら多くの系統を扱うことができる反面、なんか中途半端なんだよな。……器用貧乏？」

「――貧！？」

《銀雹の国》の王女様は初めて言われたらしい。彼女の背面に雷が落ちた、気がした。

「まあ、突っ込むだけでも突っ立てるだけでも俺みたいな『仕掛ける』タイプと相性が悪いと――そういうわけなんだけど、あれ？」

気付けば場の空気が変わっている。

エイリークは怒りゲージ上昇中。今にも細剣を抜きそうだ。

アイリーンは消沈中。今にも膝をつきそうだ。

「アンタのせいでとんでもない目にあったの思い出したわ」

今にもどころかもう剣は抜いていたエイリーク。

やっぱり言い過ぎたと後悔するユーマ。回避がもう間に合わない。

「吹き飛びなさい、旋風剣！！」

「今日もやっぱ、」

剣の平でフルスイング。振りぬくと同時に剣に纏う竜巻を解放する。

衝撃波でユーマは飛んだ。校舎の屋上まで。

「りぃいいいいっ！」

きらん。

「感謝するわ。旋風剣の衝撃波の制御ができるようになったのもアンタのおかげよ」

「……私……古い……貧乏……」

多少気が晴れたエイリークとがっくり気落ちするアイリーン。

＋＋＋

８時１５分。

予鈴を屋上で聞いたユーマ。

「……リュガ」
「どう……して、てめぇは……空から……俺めがけて、飛んで、くるんだよ？」
朝から屋上で寝ていた赤い髪に赤いバンダナの少年、リュガ・キカ。
不幸にも吹き飛ばされたユーマが無防備だった彼に直撃した。
倒れたままで虫の息のリュガ。
「ありがとう。おかげで助かったよ。待ってて、人呼んでくるから」
「……待てよ、……てめぇ」
走り出て行ったユーマは戻ってくる。
「そうだ！　今日は購買攻めるから。プランはCの2。集合はいつもの場所でね」
そしてまた走って行く。
「……謝れよ。あと代返……」
気絶するリュガ。遅刻決定。
＋＋＋

２－００ｂ　長い放課後　１（前書き）

ユーマの一日。放課後編

2－00b　長い放課後　1

＋＋＋

昼休み。

「ミツルギ、あとは貴様だけだ。購買部を前にしたこの俺を止められると思うなよ」

購買部のパンを巡る死闘は終盤。ユーマは宿敵と対峙する。

前に立ち塞がるのは格闘技顧問、教師のグルール・ボロス。

アギの奮闘むなしく、リュガという尊い犠牲を出したユーマに残された策は1つ。

「先生、俺と組みましょう。俺達2人なら新作のギガグリルサンドをあの戦場から奪取できるはずです」

懐柔だった。

「――！！　そうか！　ならばついてこいミツルギ。……遅れるなよ」

「サー！」

昨日の敵は今日の戦友（とも）。よい言葉だと思う緑ジャージの筋肉。

ユーマは敬礼し、グルールを盾に購買部へ突入した。

「馬鹿ですね」

お弁当を持った練金科のポピラ・エルドは、購買部という戦場を眺めてそう呟いた。

＋＋＋

長い放課後

＋＋＋

戦果は上々だった。グルールを味方に付けたユーマは戦友達の分も楽々と買い占めて昼食にする。

「ミツルギよ。俺の話を聞いてくれるか」

何故かグルールと一緒に。

「何です？　先生」

「俺は迷ってるのだ。いったいどちらにしたらいいのか」

「どっちでもいいですよ」

「何だと！？」

驚くグルール。

ユーマは《精霊使い》。もしや俺の考えが読めるのかと驚愕した

のだが。

「今回新作の中身は正直予想できませんでしたから。《大貝獣ギガグリルサンド》はバカでっかい貝柱だったわけで、《大海獣ギガグリルサンド》のあの噛みごたえといったら……イカ？」

「違う。昼飯の話ではない」

グルールの話はこうだ。

グルールは薬師で第2救護室を任されているセレス・スニア先生とお近づきになりたい。しかし彼女はどうやら彼の同僚で魔術科の教師であるオルゾフに気があるらしい。

脈のない彼女よりも別の女性にアタックしたほうがいいのか、と。

「練金科のアラムさんも最近いいなと思うのだ。ミステリアスで」

「……えーとアラム・アラド先生でしたっけ？　俺面識ないです」

「そうか。とにかく俺は彼女達との接点が欲しい。何かないか」

迫るグルール。暑苦しい。

「趣味とか共通の話題とかないのですか？」

「ない。それ以前に知らん」

――おい、自分で調べろよ

はっきり言い切ったグルールに呆れるユーマ。

「……じゃあこうしましょう。今から先生を砂更の力で埋めますか

ら、それをセレス先生やアラム先生に助けてもらうという作戦で」
「――！！　それだミツルギ。頼むぞ」

どうでもよくなったユーマ。生き埋めにしてもこの人は大丈夫じゃないのかと割と本気で思った。

＋＋＋

一方その頃。

職員専用の食堂にて。

「なかなか興味深いわねこれ」
「ええ。私よりも貴女の方が専門だと思いまして」
「……むー」

１つのテーブルを囲むのはオルゾフとセレス、そして練金科の教師、アラム・アラドの３人である。

アラムは腰まで伸ばした黒髪と鮮やかな紅いルージュが印象的な妙齢の女性だ。黒衣を身に纏えば誰でも彼女のことを魔女と呼ぶだろう。

「魔力が流れる道が複雑に描かれていてそれが術式を構成している。魔力を循環させることで効果を高めるおまけ付き。魔術というよりも芸術の域よね。これは」
「私はこの札に付与されている魔力の方が驚きだ。この紙の札１枚が高純度の魔石に匹敵している。これほどの魔力を付与できる《魔

法使い》はそういないはずだ」

3人というより、オルゾフとアラムの2人が話をしているのはセレスが持ってきた1枚の札について。ユーマが以前彼女に譲った《ヒール》の《回路紙（サーキットペーパー）》である。

セレスはオルゾフとの会話のきっかけにと見せたのだが、思いのほか回路紙に興味を持ったオルゾフ。彼は旧知の仲であるアラムに専門家として意見を聞いてみることにしたのだが。

セレスにとってアラムの存在は計算外だった。

「これほどの物は400年前の遺産レベルね。スニア先生、この札をどこで？」

「むー……ふぇ？　あっ、あのユーマ君、あの子にもらいました。研究すれば治療用に量産できるかもしれないって」

「……ミツルギか」

「話題になってる《精霊使い》の子ね。ウチの困った天才君たちが彼に触発されていい傾向なのよ。1度会ってみたいわ」

エルド兄妹のことだ。ユーマを通じて閉鎖的だった兄妹に交友関係が広がりつつある。

「ところでこの札だけど、研究するにはサンプルがもう少し欲しいわ。まだあるのかしら？」

「わかりません。ユーマ君に聞いてみないことには」

「そうか。ではこの札はアラム、君に預ける。いいかな？　スニア先生」

「ええっ！？　は、はい。アラド先生お願いします」

オルゾフの発言に驚くセレス。

「こちらこそありがとう。久しぶりにいい研究素材が手に入ったわ。オルゾフ、彼女にお礼しなさいよ」

「……わかったよアラム。成果があったら私にも教えてくれ」

「ええ」

セレスは親しげな2人を見てショックで涙目。

「……オルゾフ先生がアラド先生のこと、名前で呼んでる……」

そんな彼女を見てアラムは、

「若いっていいわねぇ」

そう言って微笑む彼女だった。

＋＋＋

放課後。

練金科棟にて。

「ティムスー、いるー？」

「おう、入れ」

エルド兄妹の研究室を訪ねるユーマ。彼は自分のブースターを彼らに預けていた。

「調整終わった？」
「これだ。カートリッジも総入れ替えした。あとで試し撃ちしろよ」
ティムス・エルド。茶髪の長髪で双子の兄妹の兄。ユーマのブースターの製作者である。
ブースターとは術式を補助するイメージ増幅器のこと。昔でいう魔術師の杖のようなものだ。
ユーマのブースターは銃の形をした金属板、《ガンプレート・レプリカ》。『ユーマの知っている魔法弾』を再現できる武器である。
「それとこれが試作品を改造したやつだ。あいつに使わせるんだろ？　おもしれぇじゃねえか。あとでデータよこすように言っとけ」
「わかったよ。ポピラは？」
「ここです」
いつの間にかユーマの隣にいた技術士の少女。
ポピラ・エルド。黒髪のみつあみ。兄妹の妹の方で補助術式の構成や付与を得意とする。
「ポピっちー」
「いらっしゃい。風葉ちゃん」
飛び出す風葉を優しく受け止めて頭を撫でるポピラ。
風葉はポピラになついている。波長が合うらしい。

「ポピラ、あれできてる？」
「試作型はできていますが。……あんなもの実戦で使えるとは思いませんよ」

あれとは新型のブースター。ユーマ用ではないが。

「とりあえず俺が試してみるから。どっちを採用するかはそのあとで」
「今からですか？　それでどちらを」
「もちろん、空を飛ぶ方で」

＋＋＋

普通科棟にて。

ミサ・クリスはエイリークの親友だが剣士でも魔術師でもない普通の少女だ。普通科の彼女は友達と今度の試験を話題におしゃべりしながら下校していたのだが。

空から彼女を呼ぶ声がする。

「……サ……ん」
「え？」

上を見るミサ。

「ミサちゃーーん、どいてーーーっ！！」

「ええっ！？」

黒髪の少年が空から降ってきた。ミサの目の前でどしん、と着地。

ミサもよく知る少年はなぜか緑色のマントを身につけていた。

「ユーマ君？　どうしたの？」

「ちょっと実験してた。ついでにミサちゃんにクッキー貰おうと思って」

「ミサちー」

「――！！？」

突然のことに驚くミサの友達。さらには精霊がでてきてしゃべりだすから尚更だった。

「クッキーくださいー」

「えーと、はい。砂更の分もね」

用意のいいミサ。幸せそうにクッキーを食べる精霊たち。

「突然ごめん。砂更と約束したから」

「それはいいけど実験って？」

「このマント《風乗り》の補助術式が付与されてるんだ。これで空中を滑空できたらと思って」

《風乗り》は風属性移動術式。空中を滑るように移動できるこの術式は、ムササビのように滑空することで疑似的に飛行できる。

「風葉ちゃんの魔法があるのに？」

「これはエイリーク用。昇級試験の秘密兵器だけど制御が難しいや。10日じゃ間に合わないな……試作2号を採用するか」

ユーマは今、彼女たちの試験対策のコーチをしている。その過程でエイリークに空中からの突撃という攻撃パターンを増やそうと思っていた。

「そっか……リィちゃんのことお願いね」
「わかった。それじゃあ」
「ごちそうさまでしたー」
「……」

ユーマは風葉の魔法で垂直に飛びあがり、吹く風に流されるように場を離れていく。

ミサは思う。

自分は親友の傍にいてあげるしかできないけど、今はユーマがいる。彼はエイリークの力になってくれる。

親友のためを思うとそれは嬉しいことで、ちょっぴり寂しいことだと思うミサ。

「……ミサ。突然空から降る人が知り合いで、それから精霊が出てきたのを見て平然とクッキーを取り出すあなたはやっぱり普通じゃないわ」
「ええっ!?」

そんな彼女は友人から普通の女の子と認識されていなかった。

主にエイリークとユーマのせいで。

＋＋＋

一方その頃。

学園長室にて。

「さて、どうしましょうか？」

学園長、イゼット・Ｅ・ランスは４人の生徒を呼び出して相談していた。

呼び出された生徒は『生徒会長』、『自警部部長』、『報道部部長』、そして現在の《Ａナンバー》の『弟１位』である。生徒会の首脳陣ともいえる顔ぶれだった。

議題は今度の昇級試験における《Ａナンバー》の選定。それに伴い発生するだろう生徒同士の争いについて。

「毎度のことですからね。この派閥争いみたいなのは」

「エース候補というよりもその腰ぎんちゃくが問題だ」

「もう被害出てるのか？」

「大きな事件はないよ。予想してある今期の《Ａナンバー》は今の暫定メンバーとそう変わりがないから。ただ１人だけ」

報道部部長は１人の生徒の資料を全員に配る。黒髪の少年の写真。

「ユーマ・ミツルギ。《精霊使い》の彼を有力なエース候補とみて襲撃する生徒が多いね。学生ギルドの非公式依頼にもあったよ」
「……不特定多数の奴に狙われているのですか？　それで彼は」
生徒会長の質問は自警部部長が答えた。
「それは俺から。はっきり言うとミツルギに被害はない。元々組織だった襲撃ではなく散発的なもので全員返り討ちにあっている。大抵首まで埋められているか木の枝に吊るされているかのどちらかだ。……救助するこちらの身にもなれって話さ」
「それはなんとも」
「それに奴の周りにいる生徒もなかなかの人材が揃っている」
「ボクが報告するね」
今度は報道部部長。
「まず《旋風の剣士》と《銀の氷姫》。彼女たちはきっと今回の試験でランクＡに上がるよ。二つ名持ちだもの、元々それだけの実力があるわけだし。最近はエルド兄妹。それに新入生では注目株の《射抜く視線》も彼の友人だね」
「いや、それだけじゃない。《盾》もいる」
自警部部長は補足するべく割り込んだ。
「誰？　ボクの取材メモに該当する生徒はいないよ」
「お前たちでいえば《バンダナ兄弟》。その青いほうだ。ランクはＣだが俺はあいつを自警部に引き入れたいと前から思っていた。あいつの友人というだけでミツルギは評価できる」
「へぇ、君がそこまで言うなんてね。今度取材班を派遣してみるか」

「話が逸れてます」

生徒会長は本題に戻す。

「ミツルギ君をエースに加えるのは有益みたいだね。彼の作る《騎士団》も面白そうだ。問題は……」

「誰がミツルギを狙っているかだ」

ここで初めてAナンバーのトップが口を開く。

「ミツルギを貶めて得をするのは誰だ？　多分ミツルギにエースの座を奪われる可能性のある下位の《番号持ち》、もしくはその取り巻きだ。可能性があるのは？」

４人が思い浮かべた人物。それは、

《竜使い》

４人の話し合う姿を見て、学園長はその頼もしさに満足していた。

＋＋＋

夕方。

今日の晩御飯はどこで食べようかと悩みながら街をブラブラする

ユーマ。

「あれー？　みてくださいー」

「ん？」

風葉が指さす方向には2人の女生徒が他校の生徒に絡まれているのが見えた。

女生徒の1人には見覚えがある。あの浅黒い肌に銀の髪はダークエルフ。魔族の少女ユンカだ。

「だからこの子困っているでしょ？　用はないからどきなさい」

「いきなり割り込んできてなんだ？　君も俺たちと遊びたい？」

「ちょっと小さいのは趣味じゃないな。やっぱりこっちの子のほうが好みだわ俺」

「この、話を聞けーーっ！！」

ユンカはどうやら絡まれた少女を助けに行ったらしい。

「……まずいな」

ユーマはガンプレートを取り出す。ユンカが危ないのではない、絡んできた男達が危ないのだ。

ユンカは身体能力が非常に高い《強化型魔族》。エイリークだったら旋風剣で吹き飛ばして終わりのところがユンカの場合、素手で人間ミンチを作ってしまうかもしれない。

「いやっ」

小柄なユンカを押しのけて少女の腕を掴む男。その時、

「ぎゃっ、いてえ！」

何かが少女を掴む腕を『射抜いた』。痛みで腕を抑える男。

ユーマではない。男達が見たのは夕日を背に佇む黒髪の少年。ユンカは喜んで彼の名を呼ぶ。

「ジン！！」

ジンは何も持たない両手で『弓を構える』。

男達の目を見る。瞳ではない、その眼球をだ。ジンの視線は彼らに訴える。

――次はあなた達の眼を……

「ヒィッ！！」

男達は一目散に逃げ出した。

「……ふう。大丈夫？　ユン」

「ジン！！」

ジンに飛びかかるように抱きつくユンカ。

「近い！　いつもそれ近いからやめてって。……君も大丈夫だった

？」

座り込む少女に手を差し出すジン。

前髪が少し長めのサラサラの黒髪。先程の鋭い視線とは違う優しい視線を少女に向ける黒い瞳。ジンの手に触れた時、少女はちょっと震えた。

「気をつけてね、女の子1人は危ないから。ユンもだよ。それじゃあ」

背を向けるジンに少女は勇気を振り絞る。

「あ、あの、お名前を」

「ああ。僕はジン・オーバ。君はユンの友達？」

ジンの隣で首をブンブンと横に振るユンカ。

まずい。『いつもの』だとユンカは焦る。ジンの手を引っ張ってこの場を離れるよりも、少女の行動は早かった。

「是非お礼を。ジン様は夕食まだでしょうか。でしたら私と一緒に。いいお店を知っていますから」

「えっ？　あの」

「さあ、行きましょう。ジン様」

ジンの腕を取り、ぐいぐい引っ張るように進む少女。呆然とするユンカ。

「……しまったわ。ジンはまた『射抜いた』の？　なんとか《中央

校》へ編入するのにジン『だけ』を誘って、それからもあれだけ警戒していたのに……ちょっとまちなさい！！」

ユンカはジン達を追いかけた。

「……まあ、いいか」

「きっとああいうのがー、主人公なのですよー」

手にしたガンプレートをホルダーに収めてユーマは思った。

今日は麺にしようと。

＋＋＋

一方その頃。

「何してるのです？　ボロス先生」

「……」

首まで埋まっていた同僚を見つけたオルゾフと、見つけられたグルールの心情は誰にもわからない。

＋＋＋

「ユーマ・ミツルギだな？」
「ん？」

寮への帰り道、呼び止められるユーマ。今日1日はまだ終わらないようだ。

それから10日後。

＋＋＋

2－01　特訓　1（前書き）

第2章スタート

エイリークとポピラ

2－01　特訓　1

＋＋＋

昇級試験。

学園の戦士系、魔術師系の生徒は個人ランクＡになることが学園を卒業する第一条件となる。年３回行われる昇級試験は個人のランクを上げる方法として一番手軽な方法であった。

ランクＡの生徒は必修科目を除けば比較的自由に活動できる。自身の技に磨きをかけるのに時間を費やし、学生ギルドで学園都市以外の他国の依頼や魔獣狩りの依頼を受けることが可能となる。

学園にある特別な施設を利用することもできるランクＡはランクＢ以下と比べれば経験値が違う。そんな彼らを相手にどれだけ戦えるのか？　というのが試験なのだが。

試験の内容は１対１の対戦形式。受験者はそこで審判の教師に実力を評価してもらう。対戦相手の大抵は３年生のランクＡの生徒だが、ランクＢ以下の受験者用に学生ギルドから試験官の募集もしている。

エイリークたちもこの日の為に訓練を重ねていたのだ。しかし、

彼女たちのコーチを引き受けていた《精霊使い》の少年は、試験当日の１０日前から姿を消していた。

＋＋＋
幻創の楽園
第２章　銀の悪魔
＋＋＋

＋＋＋
昇級試験編
＋＋＋

試験の初日。尚、試験は１週間かけて行われる。

仲間たちの内最初に試験を受けるのはエイリーク・ウインディ、彼女だ。

翠の刺繍が施され白を基調とした《風森》の騎士服に身を包んだエイリークは控室で静かに出番を待っていた。

「エイリークさん。これを」

エイリークの様子を見に来たのはエルド兄妹の妹。ポピラはエイリークの為に準備した装備を彼女に渡した。

「これは」

「ミツルギさんがあなたに用意したものです。エイリークさんが新しく習得した術式を補助してくれます。あと私の方で《風盾》の強化も付与しました。1度きりの効果ですが」
「ユーマが？　……十分よ。ありがとう」
エイリークはポピラに礼を言い、少し前のことを思い出す。
彼女とこんな風に話すような関係になったのは最近の事だった。
＋＋＋
出会いはユーマとの特訓中のこと。
「なぜ《螺旋疾風突き》を教えないのよ？」
「いや、教えないじゃなくて教えられないんだ。俺が使うやつはどうも違うみたいだから」
《旋風剣・螺旋疾風突き》
魔法剣の上位剣技であるこれをユーマは《補強》で再現して見せた。
しかしユーマは《旋風剣》の竜巻の形状をドリル状に《補強》したのであり、《螺旋疾風突き》を放ったわけではないので厳密には違う技だったのだ。
「剣技はからきしなんだよ、俺」
「だったら『どりる』よ。あれのイメージを理解できればアンタと同じ技ができるはずよ」

以前エイリークが試したところ、剣が衝突すると同時に纏う竜巻が爆散。1度も成功していない。

「うーん。貫通させる技よりも衝撃波を利用した技の方が向いてると思うんだけどな。風葉、どう思う？」

風属性には風の精霊。ユーマは風葉にアドバイスを求めたのだが。

「風はですねー。いろんなのがあるのですよー」

風葉は語る。

「そよそよーもあればずばーん！　もあってー、ぐるぐるしたらーぶわーになるのですー」

「……？」

「他にもぎゅーってしてどかーん！　もありますねー。エイリっちはきっとこれですよー」

「……ユーマ？」

「……ごめん。俺もあんまり」

理解できなかった。

これでも風葉はユーマの魔術の先生だったりする。

「なんで理解してくれませんかー！？」

ふくれる小さな羽妖精。

「馬鹿ですね」

「えっ？　……ポピラ？」

ユーマとエイリークの前に現れたみつあみの少女。出会い頭の一言は相変わらずだった。

「いきなり何よアンタ」

「ミツルギさん。兄が呼んでいます。ガンプレートのオプションについてですけど……」

ポピラはユーマというよりも彼の肩にしがみ付いている風葉をじいーと見ている。

「ポピラ？」

「……風属性の特徴はその組み合わせの多彩にあります」

ポピラは語る。

「ミツルギさんも《高速移動》、《天駆》、《風乗り》の移動系術式を組み合わせることで高機動戦を実現しているではないですか」

「まあね」

ユーマは頷く。

「風の術式は万能ですが単発では他の属性に劣るのです。まずは術式で操る風の種類を理解して下さい。風葉ちゃんもそう言っています」

「「え？」」

驚く2人。そういう話でしたっけ？

「エイリークさんの場合、空気を圧縮させて一気に解放させる『溜め技』のような術式が向いているそうです。《爆風壁》や《爆風波》。《疾駆》、《衝突風》あたりの術式はどうですか？」

「「……」」

エイリークは何も言えない。ユーマもだ。

「……ポピっちー」

風葉はユーマから離れ、小さな羽を使ってふよふよとポピラへと向かう。

そして彼女の頬に張り付いた。

「やっとー、わたしの理解者にー、出会えましたー」

風葉、涙声。

「……泣かないで風葉ちゃん。気にしてはいけないわ。みんな馬鹿なのですから」

ポピラは慈愛に満ちた表情で風葉を撫でる。シニカルな彼女にしては珍しいことだ。

「行きましょー。こんな日はミサちーのクッキーですー」

「ええ」

そしてポピラは風葉を連れて行ってしまった。

「……何よ、あれ」
「ポピラのやつ、ミサちゃんのこと知ってるのかな？」

＋＋＋

それからユーマが姿を消したあの日。

「今日からミツルギさんの代わりに私があなたの訓練に付き合います」

ポピラから突然の申し出だった。

「……アイツがいなくなったのはアンタから聞いた。でもどうして？」
「教えることはできません。ただ頼まれたので」

ここにいるとポピラは言う。

「私は剣に詳しくありません。私にできることはあなたに風の術式をいくつか習得してもらうくらいです」
「１０日で！？　いくらなんでも無理よ」

エイリークは風属性の術式を扱うが基本は剣士だ。１つの術式を習得するのにも１０日では圧倒的に時間が足りない。

「できませんか？　ミツルギさんは最初からそのつもりでしたけど」
「……なんですって」

これはミツルギさんの意見ですが、と前置きしてポピラは説明す

る。

「エイリークさんの剣技は十分ランクAに通用します。これは私も同意見です。足りないものは『起点となる攻撃パターンの幅の狭さ』と『防御力』。先日までの訓練でミツルギさんはそう判断しています」

エイリークの攻撃の起点は突撃。最近はバックステップを利用したヒットアンドアウェイもあるが、基本は一直線に突っこむだけなのだ。迎撃されやすい。

そして防御力。エイリークはスピード、機動力を重視しているので軽装に細剣を装備している。前衛型としては防御に不安があり、細剣も下手に受け止めると折れてしまう。

「この部分を術式で補うのです。あなたはどちらかといえば《魔法剣士》。魔術の幅を広げるべきです。……あなたの剣を活かすために」

「……」

エイリークは考える。前にユーマは言った。

――努力は足りないものを見つけ出してからはじめるんだ

（もしも今までが「足りないもの探し」ならば、アタシがするべき「努力」は……）

「……できると思う？」

不安だった。あと10日しかない。

「信じますか？」

問い返された。何を信じるのか？

目の前の彼女を？

彼女に頼んだ彼を？

それとも、

自分自身を？

「……やるわ。力を貸して」

ポピラに手を差し出すエイリーク。

「馬鹿ですね」

そんなこと言うけれど、ポピラは確かに彼女の手を握った。

＋＋＋

「不安ですか？」

再び控室にて。

ベンチに座り込んで動かないエイリークにポピラは訊ねる。

「少しね。何しろ『因縁の相手』だから」

そう言ってエイリークは黙り込んだ。元々沈みこんだら深みにはまるタイプである。

だからポピラは、

「……エイリークさん。あなたは馬鹿です」

苦手だったけど伝えることにした。

「突撃馬鹿でいいじゃないですか。あなたの剣技、あなたの習得した術式、あなたの持つ特性もすべてあなたにふさわしいものです」

人を励ますなんてはじめてだった。

「馬鹿馬鹿しいことで悩む必要はありません。馬鹿なのですから。あなたは馬鹿正直にまっすぐであればいい」

だけどそれは、

「私は……あなたのような馬鹿は嫌いではありませんから」

「ポピラ……」

そんな彼女にエイリークは、

「馬鹿馬鹿うるさい」

「――！　あう」

デコピンした。

「さて。そろそろ行くけど最後に聞かせて。アイツは元気？」

「……はい。今は兄と一緒にいるはずです。……あの人も馬鹿ですから」

赤くなったおでこをさすりながらポピラは答えた。

「そう。……まあ《これ》を渡すくらいだからね。心配はしてないわ」

エイリークはポピラから渡されたマントを身につける。その色は鮮やかな緑。

「今までありがとう。おかげで気付いたわ。アタシには『これしかなかった』。それだけのことなのだけど」

少しだけ笑ってエイリークは控室をあとにする。

「いってくるわ。……見てなさい。アタシは負けないのよ」

＋＋＋

「いっちゃいましたねー」

「そうね」

ポピラの制服のポケットから這い出てくるのは、ユーマの精霊である風葉。

「心配ですかー？」

「いいえ」

ポピラは信じている。なぜならエイリークは彼女の、

「ともだち、ですから」

＋＋＋

２－０１　特訓　１（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

エイリークＶＳ《黒鎧の大剣士》。

前回の試験で《旋風剣》が通じずに敗北した重装甲の剣士を前にして、エイリークはリベンジに挑戦する。

次回「旋風の剣士」

――アタシにはこれしかなかった

2－02　旋風の剣士（前書き）

エイリークＶＳ《黒鎧の大剣士》。

2－02　旋風の剣士

＋＋＋

試験会場となる練武館。

自分の試験にあてがわれた戦闘室へ向かう途中でエイリークはアイリーンに出会う。

彼女はエイリークの幼馴染だ。別に応援や激励に来てくれるのは不思議なことではないが、アイリーンは少し怒っているような、呆れている気もする。

「何？」

「様子を見に来ました。何せ貴女はわざわざ『彼』を試験官に『指名』なんてするものですから」

昇級試験は対戦相手を指名することができる。利点は対策を立てやすいこと。ただし相応の実力者を指名しなければ受理されない。

「《黒鎧》は貴女と相性が悪すぎます。前回のこと、忘れたわけではないのでしょう？」

「……」

――軽いな、君の剣は

――ははは、なんだ？　その技は。効かないよ

――君にはがっかりだよ。《旋風の剣士》

折れた細剣。地に伏せた少女。

かつて味あわされた敗北はあまりにも惨めで、屈辱だった。

エイリークは前回の昇級試験で自身の剣を否定された。

ひとつの約束の為に積み上げてきたものを崩されてしまった彼女は一時期不安定に陥ったこともあった。

それは春期休暇の前の話。

「あんなの《甲虫》で十分よ。《黒鎧の大剣士》なんて大げさものじゃないわ」

エイリークはふん、と鼻を鳴らす。思い出すのも嫌な相手らしい。

「勝つわよ。アタシが目指す『先へ』進むにはあの虫は邪魔なのよ。だから今度こそ吹き飛ばす！」

「……乱暴ですわよ、ウインディさん」

アイリーンは正直ほっとした。エイリークのあの迷いのなさ、そのまっすぐさは彼女の強さだ。

1度は折れて失いそうになったもの。それが新学期を迎えて再会した時には失われずに一層と強くなって戻ってきた。

「貴女の勝利を世界に願います。頑張りなさい、エイリィ」

「……ありがと」

今では滅多に呼ばない愛称で呼ぶアイリーンにエイリークは応え、マントを翻して戦闘室へ向かう。

エイリークの試験がはじまる。

「ところでアイリィは試験5日目よね？　応援に来るなんてずいぶんと余裕じゃない」

「休養中です。……私、筋肉痛なんです」

＋＋＋

第31話　旋風の剣士

＋＋＋

エイリークは《防護》の結界に入る時のピリッとした独特の感覚を受けて戦闘室の舞台に立つ。

試験の初日とあって観戦客は少ない。他の生徒は試験対策にギリギリまで時間を費やす為だろう。

ステージは『コロセウム』。直径約１０メートル、円形の闘技場は近接型のエイリークと相性がいい。

それは相手も同じ。

「また君かい？　懲りないね」

ブロト・ラグレス。エイリークの対戦相手であるランクＡの３年生。クラスは《大剣士》。

剣士系から派生するこのクラスはその名の通り大剣を扱うことに特化した剣士である。身の丈に迫る大型の剣から繰り出す、一撃の攻撃力に重視した戦闘スタイルは大型魔獣を相手にする際の主力となる。

大剣士は《竜殺し》や《巨人殺し》といった『バスター系』の戦士が多い為に戦士系の生徒の中では人気が高い。ユーマ達ではリュガがこれにあたる。

しかし扱う武器が武器だけに一撃毎の隙が大きく、狭い場所や対人戦には向いていない。そこでブロトは回避を捨て、防御に徹底した重装甲の戦士スタイルを選んだ。

彼の特徴は《黒鎧》と呼ばれる分厚いフルプレートメイルに両手のグレートソード。そして兜につけられた突き出すような１本の飾

り角。

「出たわね。カブトムシ」
「……相変わらずだな、君は」
「黒くて一本角なら虫で十分よ」

ブロトはこの程度の悪口にめくじらを立てることはない。彼にとってエイリークは1度打ち負かした格下の相手だから。

「教えたはずだよ。君は剣士に向いていない、ただのお姫様だって。あれだけ痛めつけられてまだ気付かなかったのかい？」

エイリークは答えない。

「君の剣と技は《黒鎧》に傷をつけることもできず、その剣も俺の一撃で簡単に折られた。折れた剣で立ち向かう君は戦士として立派だけどそれだけだ。剣を交えずに何度も殴られて倒れた君が、今回の試験で指名してまでして今更俺の前に立つのは何故だい？」

エイリークは答えない。

「ウインディ。君は剣士、いや戦士として致命的な弱点がある。ランクAから先は君は通用しない。だから諦めて欲しかったのだけど……今からでも遅くはない、棄権しないか？」

エイリークは、

「言いたいことはそれだけ？　虫のくせによくしゃべるわね」

恐れも不安もない。翠の瞳はただまっすぐに敵を見る。

「アンタの強さは認める。あの時のアタシの弱さも。でもアンタにアタシの剣を否定される筋合いはない！　今日でケジメをつけるわ。アタシはアンタを倒すことで昔のアタシを越える！」

エイリークは細剣を抜いた。

1度は折れた剣。1度は奪われた剣。それでも彼女は剣を握る。

「……わかった。俺は試験官だ。今日の結果ではっきりと諦めてもらおう」

「うるさいわ。アタシが勝ったらアンタは《黒鎧の甲虫》とでも名乗ればいいのよ」

兜を被るブロト。両手のグレートソードを構える。

審判の合図の鐘が鳴る。

試験、開始。

＋＋＋

先手はエイリーク。重装のブロトは動きが鈍い。果敢に飛び込んで細剣を振るう。

《双月》

弧を描く2連斬撃。

《水月》

真横に振られる大剣をしゃがみこんで躱し、足元を剣で薙ぎ払う回転斬り。

《弧月》

エイリークはその場で跳躍。縦回転の斬撃を叩きつけて後方に下がり、反撃を避けるように間合いをとる。

「はあっ！」

《疾風突き》

突撃。エイリークが得意とする鋭い突き技。

ブロトはここまでの攻撃に反応できず、すべて鎧で受け止めている。ただその鎧が受けた傷はひとつもない。

「……硬いわね」

「言っただろう。君の剣は軽いって。速さだけでは《黒鎧》に傷を付けることも無理だ。次はこちらの番だ。……その剣、折るよ」

時間差で振り下ろされる2刀の大剣。エイリークは受け止めずに左右にステップを刻んで躱す。

そのあとに繰り出される剣も躱し続けて隙あらば細剣を突き出す。

「狙いがぶれるな。それにこの暑さ。《陽炎》か？」

ならば、とブロトは右の大剣で薙ぎ払う。縦よりも横の斬撃ならば攻撃範囲は広い。

エイリークはバックステップ。そこに繰り出される左の突き。

大剣はリーチが長い。槍のように使えばエイリークに届く。身を捻りかろうじて躱すも次には距離を詰められて蹴り飛ばされる。

「ぐっ！」

「終わりだ」

体勢の崩れたエイリークにトドメの一撃。

振り下ろされる大剣をエイリークはただ睨みつけるだけで……

爆発。

「……何をした？」

腕に残る衝撃に顔を顰めるブロト。

「今のアタシじゃ吹き飛ばせずに逸らすのが精一杯みたいね」

エイリークは彼から距離をとり、仕切りなおす。

大気を振るわせた爆音にエイリークは耳を抑えていた。

＋＋＋

「今のは《爆風壁》？」
「いいえ。《爆風波》の方です」

観戦席で呟くアイリーンに答えたのはポピラ・エルド。

「ポピラさん？」
「はい。アイリーンさん、ご無事ですか？」

その一言はアイリーンに思うものがあった。

「……最近意味もなく襲われる回数が増えたことですか？　もちろん返り討ちです。それよりも貴女、何を知っているの？」
「……いいえ。あなたの筋肉痛のことです。特訓で足腰が立たなくなったと聞きましたが、アギさん達と何をしているのです？」

アイリーンの無事を確認したポピラは誤魔化すことにした。

「べ、別になんでもないです。それよりも、ウインディさんのこと、わかりますの？」

ポピラは頷く。

「私が教えましたから」

《爆風波》

風属性範囲攻撃術式。圧縮した空気を前方に向けて爆発、炸裂させる魔術。

範囲攻撃としては射程が短く広いので前衛向きではある。これを防御用に『仕掛ける』のが《爆風壁》なのだが。

「《爆風壁》は受身になるので《爆風波》のほうが相性がいいと思いまして」

「どうやって教えたの？　あれは中位の術式。数日で身に付くとは思いません」

中位以上の術式となるとイメージの構成、ＩＭ（イマジン・モジュール）がかなり複雑化する。魔術を再現するには発動するまでのさらに明確なイメージが必要となるので短期間の習得は難しいはず。

「私が得意とするのは術式のＩＭ化とブースターに補助術式を付与することです。《爆風波》のブースターを創って、エイリークさんにはひたすら使い続けてもらう事でイメージを刷り込ませました」

これは元々ユーマの考えである。

補助輪付きの自転車を全力で漕ぎ続ければ、嫌でも身体が感覚を覚えるだろうという理屈だ。

もちろんこの世界に自転車はないけれど。

「アイリーンさんも覚えますか？　これが『洗脳くん４号』ですけど」
「……その名前だけでどんな訓練をしたのか考えたくもありません」
「そうですか。試験に持ちこめるブースターは１つですので、エイリークさんには『陽炎の外套』を使うために嫌でも習得してもらったのです」

《陽炎》は風と火属性の複合補助術式。

大気に温度変化を与えて空気の密度を乱し、術者の周囲に「もや」をかけて相手の命中率を下げさせる術式だ。

《爆風波》よりもＩＭ構成が複雑であり、火属性の適性がないエイリークはブースターがなければ《陽炎》を使うことができない。

「どうしました？」
「２つの新術式で防御の低さをある程度カバーしているのですね。でもそれだけじゃ《黒鎧》の防御は打ち破れない。《旋風剣》は以前彼には通じなかったのに……」

エイリークの攻撃は軽い。それはアイリーンも理解している。

エイリークが得意とする《旋風剣・疾風突き》はそもそも彼女の《氷晶壁》も正面から突破できない。

「問題ありません。秘策を授けましたから」
「それは？」

ポピラがポケットから取り出したもの。
それは先のとがった金属を螺旋状にしたもの。

「コルクの栓抜きです」

＋＋＋

戦闘は続く。

剣を交える2人の周囲は『陽炎の外套』が放出する熱気に包まれている。

攻め続けるのはエイリーク。しかし不利なのもエイリークだ。

足を使って大剣を躱し、細剣の連続剣技を振るう。

それでも決定打が与えられない。エイリークの消耗が激しい。

「いい加減に……倒れなさいよ」
「……剣の速度に防御と回避の上達。確かに強くなった。評価もきっとランクAだろう。でも……」

ブロトはエイリークを淡々と観察、評価を下して両手の剣を下げる。

「でもそれだけじゃその先が駄目なんだよ。……《強化》を1段階、

上げるよ」

それからブロトは攻勢に出る。エイリークに迫るスピードは今までとは比べ物にならず、彼女に匹敵している。

「くっ！」

「まだだよ」

突き技は躱すことができたがさらに追い打ちをかけてくる《黒鎧の大剣士》。

エイリークは袈裟がけに振るわれる大剣を咄嗟に剣で防ぐ。

（重い！！）

瞬時に発動させた《旋風剣》で刀身を守り、《風盾》で逸らさなければ確実に折れていた。

ブロトの攻撃は止まらない。返す刀で切り上げる剣を捌いても次には2刀の大剣が唸りを上げてエイリークを襲う。

防御力だけでない。攻撃力もスピードもエイリークを上回る。

これがランクA。

2年の後期から半年間、ランクAの環境下で鍛え上げてきた彼の実力。

大剣の二刀流を細剣1つで防ぐエイリーク。

苦し紛れに放った《爆風波》は射程が短く、後ろに下がるだけで難なく躱されてしまう。

「はぁ、はぁ、……はぁ」

体力の限界。判断力が鈍る。

大振りされた剣はフェイント。引っかかったエイリークは次の一撃を躱すことも剣で防ぐこともできない。

エイリークは鞘を抜いて《風盾》を発動。直撃は避けるも鞘は砕かれ、そのまま吹き飛ばされた。

＋＋＋

「これでもわからないのかい？　君の弱点。それは身体強化の術式が使えないことだ」

一瞬の攻防で立場が逆転した。

あれだけ攻め続けたエイリークの攻撃は通じず、逆に数回の攻撃で吹き飛ばされて倒れている。

「適性がないのだろ？　前衛型が強化術式を使えないのなら致命傷だ。攻撃は貧弱でこんなにも脆い。これでは実戦ですぐに死ぬぞ」

ブロトは正しい。エイリークは移動術式は使えても身体強化を使えない。

だからスピードを維持するために装備を軽くするしかなく、《旋風剣》の衝撃波がそのまま彼女の攻撃力に直結するのだ。

「《魔法剣士》の可能性もあるが、君の直系の先輩である《烈火烈風》には遠く及ばない」

ブロトはエイリークの剣を否定する。前回と同様、打ち負かしたそのあとで。

「先輩として忠告する。君はここまでが限界だ。君の剣は攻めるにしても守るにしてもあまりにも軽い」

兜の仮面の中でブロトは目を伏せる。彼だって言いたくなかったことだ。

でもこのまま彼女が実戦に出てむざむざ死ぬようなことはやめてほしかった。

エイリークという少女は彼が出会った頃からまっすぐで、だからこそ惜しい。

「……な」

がつん。

何かが兜にあたる音。ブロトは目を見開く。

「勝手に……アタシを決めつけるな」

エイリークは立ち上がっていた。折れた鞘をブロトに投げつける。

「なぜ？」

「……特訓のおかげでね、吹き飛ばすのも吹き飛ぶのも慣れたのよ」

精一杯強がる。

でも目は逸らさない。

「アタシに言わせればアンタは剣士なんかじゃない」

「何？」

「アンタは鎧の硬さに身を任せて大剣を振り回しているだけ。攻めも守りも技がないのよ」

エイリークは前から彼のことが気に入らなかった。

身体強化に頼りきって装備重量を無視した鉄壁の《黒鎧》を装備し、《重量化》を施した大剣を力任せに振るう《黒鎧の大剣士》。

ブロトには剣技というものがない。

だから6歳から剣を振り続けたエイリークは許せなかった。

剣士を名乗る彼に。

彼に負けた自分に。

「アンタなんて甲虫で十分。なら剣士のアタシが負けるはずない」
「……まだ諦めないのかい？」
エイリークはただ剣を構えるだけ。
（ユーマは言った）
できないからと自分を誤魔化すことは許さないと。
（ポピラは教えてくれた）
エイリークの剣と技には『まだ先』があると。
（だから、アタシは……）
「アタシは決めたの。アタシは剣を選んだ。アタシにはこれしかない。だから」
剣に風が集まる。
纏う風は渦を巻いて吹き荒れる。
竜巻は静かに、でもその力を強く強く見せつける。
彼女の剣を守るように。
エイリークが選んだ剣。

その名は、

《旋風剣》

「次で……決める」

「……わかった。これが最後だ《旋風の剣士》」

合図はなかった。ほぼ同時に2人はぶつかり合う。

《旋風剣・疾風突き》

エイリークの突撃はブロトの右の大剣と衝突して相殺。でも彼女の剣は竜巻が守りきり折れていない。

ブロトの左の大剣が襲いかかる。《旋風剣》が解かれたエイリークは構わずにそのまま前に踏み込む。

（届かない。ならもっと――前へ）

《爆風波》

大剣を直接狙われ、至近距離から放たれた《爆風波》にブロトは左の大剣を吹き飛ばされる。

反動でうしろに下がってしまうエイリーク。すかさず突撃を仕掛ける。

――それはあまりにも愚直で、でもそれがあまりにも彼女らしくまっすぐで

「読みやすいよ。君は！」

振り下ろされる右の大剣。

直撃コース。でもエイリークは止まらない。『陽炎の外套』の留め金を外して前に翳す。

ポピラが付与してくれた《風盾》の強化術式。マントは大剣の一撃を逸らしてそのままブロトの視界を塞ぐ。

「はあああああっ！！」

マントを破いて繰り出される《旋風剣》。ブロトが剣を引き寄せて防いだのは偶然だ。

「まだよ！　吹き、飛べぇえええええ！！！」

エイリークは《旋風剣》の竜巻を前方に向けて解放。

《衝突風》

一点に集中して解き放つ衝撃波は、彼女の細剣と共に大剣を砕き折る。

「くっ！？　君は――」

――ここまでよくやった

ブロトは賞賛をエイリークに送る。大剣を2本とも失うなんて初めてだったのだ。

だからブロトは最後まで戦う。最後の最後に見せるものは彼の《切り札》。

折れた剣を投げ捨てたエイリークは見た。

ブロトの兜に付けられた一本角。それが自ら弾けて砕けていく。

それは《鞘》。擬態から解き放たれるのは《現創》された3本目のグレートソード。

首で振るう兜に付けられた大剣。身体強化されているブロトならばそれでも十分な武器になる。

対するエイリークに細剣はない。

『陽炎の外套』は破いてしまい、《爆風波》は連発できない。

彼女は右の拳を握りしめる。

――ここまで？

そんなことはない。

エイリークにも残された武器はある！

（……ユーマ。《これ》は……貸しよ！！）

左手で腰のホルダーにある柄を掴む。

それは彼女が少し前まで持っていたもの。

銀の装飾に翠の鞘。

《精霊使い》の少年に預けた彼女の御守りだったもの。

《守護の短剣》

ポピラが渡した装備はマントだけではなかった。大剣を前にしてもエイリークは恐れずに短剣を引き抜いて前へ飛び込む。

――もっと早く

その1歩はエイリークが費やした努力。

――前へ、早く、速く

《高速移動》

その1歩だけが適性を持たないエイリークの限界。

――アイツよりも早く……叩きこめ！！！

でもその1歩が彼女の剣を活かす。

《旋風剣・疾風突き》

再び衝突する剣と剣。

大剣を振り切られる前に懐へ飛び込んだエイリークは根元からブロトの切り札を突き砕く。

「もう一撃！」

防ぐ手立てのないブロトに向けて放つ《旋風剣・疾風突き》。

しかし、剣を折ることはできても《黒鎧》の装甲は貫くことができない。

「……まだよ。だってアタシには」

――これしかないから

エイリークは決めたのだ。この先も剣を振るい続けることを。

それは誰かを守るため。それだけじゃない。誰かを助け、共に戦うため。誰かの力になるために。

エイリークにできること。そんなものは少ないのだ。彼女は《剣士》であって《魔術師》でも《精霊使い》でもないのだから。

だからエイリークは前に出る。前へ進む。手にした剣で道を切り拓くために。

この技と共に。

イメージする。

竜巻を纏う短剣の形は先の尖った螺旋。

それをぶつかる装甲を前にして短剣を押しこむ。

竜巻の回転に合わせて短剣を回し入れて、ゆっくりと確実に捩じ込んでいく。

「何……だと？」

ポピラの秘策。

それは旋風剣をぶつけるのではなく、竜巻を捩じ込み剣で捩じ切れということ。

ひび割れた《黒鎧》の兜。エイリークは短剣を引き寄せ、もう再び短剣を突き出した。

「はあああああ！！」

《旋風剣・疾風二段突き》

1撃目で装甲を砕いた兜を2撃目で完全に破壊した。

ブロトは驚きの目でエイリークを見る。

「……見事」

それが最後の言葉。ブロトが最後に見たのは彼女の拳。

「フン！」
「ぐがふっ」
エイリークはブロトを右の拳で殴り飛ばした。
「……アタシの勝ちよ。だからアンタはこれから《甲虫》を名乗りなさい」
積年の恨みと言わんばかりの一撃にブロトは気絶。
エイリークは気に入らない相手に容赦しないのだった。
＋＋＋
試験終了。
「おめでとう。審査はまだだが問題なくランクAだと評価できる。まあ、最後の1撃はちと余計だったが」
担架で運ばれる《黒鎧の大剣士》改め《甲虫》。
「ありがとうございます」
審判を務めた教師に礼を言うとエイリークはその場に倒れこんだ。
「大丈夫かい！？　君？」

心配する教師に目もくれず、疲れたエイリークはひとつ呟いてから目を閉じた。

「……どこかで見てたのなら文句でも言いに来なさい。突撃馬鹿と言われてもアタシにはこれしかないんだから」

エイリーク、戦闘勝利。

決め技は《竜巻ぱんち》

＋＋＋

２－０２　旋風の剣士（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

アイリーン・シルバルム。最高の魔術師を目指す彼女はユーマに言わせれば器用貧乏な《銀の氷姫》。

ユーマがいなくなっても彼女の特訓は続く。ヒントはユーマが前もって残してくれたのだから。

次回「特訓　２」

「決まっています。全部です」

2－03　特訓　2（前書き）

アイリーンの特訓。

2－03　特訓　2

＋＋＋

アイリーン・シルバルムという少女は魔術師だ。

魔術師とは『魔法』を魔力を消費せずにゲンソウ術で『再現』する術者たちのことをいう。

現在の魔術師の扱う術式は2種類存在する。1つはかつての魔法の術式を再現したもの。

《氷弾》、《風刃》などといった４００年以前から存在する術式であり、《召喚》といった高位の術式はイメージできず未だ再現されていないものもある。

もう1つは術者のイメージから術式を編み出したもの。

いわばオリジナルの術式である。術者の強いイメージから生み出される固有の術式。魔術師の切り札ともいえる強さをもつものが多い。

《銀の氷姫》と呼ばれるアイリーンにも彼女だけのとっておきの術式がある。

《氷輝陣》。アイリーンはこの術式さえ発動できればランクＡを相手にしても負けはしないと思っていた。

しかし。

「中途半端だよ。それ」

春先から知り合った少年はこれを2度も打ち破り、そんなことを言うのだ。

＋＋＋
特訓　2
＋＋＋

エイリークの試験を観戦したアイリーン。最後に倒れた彼女をポピラに任せ練武館をあとにした。

「私も負けてはいられません」

《旋風剣》はエイリークの必殺技にして彼女の剣そのもの。

1つの技に全面の信頼を寄せ、すべてを懸けたエイリークの強さはアイリーンにはないものだった。

今の彼女には切り札と呼べる術式がない。

いや、あったと言うべきか、『まだ』なかったと言うべきか。

アイリーンは自分の持つ術式が未完成だということに気付かされて改良を重ねている。

「……でも今日はイメージトレーニングだけにしましょう。身体が持ちません」

彼女の試験まであと4日。魔術師であるアイリーンはこれまでの訓練で筋肉痛に陥っていた。

＋＋＋

2週間ほど前。

屋外演習場前の広場にて。

アイリーンたちは個人で訓練しないのであれば大抵ここに集まる。

広場はかつて洗礼式の時にユーマが砂の精霊、砂更の力で新入生たちを1度に50人も首まで埋めたことがあり、『生首畑』と呼ばれた場所である。

ここは未だに砂地のままであり、ユーマは訓練をするのにいつも利用している。

通称『ユーマの砂場』

その日、アイリーンはユーマに対戦を申し込んだ。

昇級試験を控えた彼女がユーマに助言を求めてきたわけなのだが。

「本当にいいの？」

ユーマは躊躇う。

「構いません。実戦形式がわかりやすいので徹底的に叩いてください」

「それなら……いくよ」

アイリーンは構える。術式を構築して彼女の銀の腕輪が輝く前に……

「きゃっ！」

「はい。おわり」

次の瞬間、アイリーンは腰まで埋まった。

「障害物もフォローする仲間もいないのに敵を前にして突っ立てるままじゃ狙い撃ちだよ」

「……もう1度です」

今度は開始と同時に真横に駆け出す。

移動しながら術式を構築するのに苦労するが、それよりもまず《氷弾》の狙いが定まらない。

さらにユーマがガンプレートで《風弾》を撃つので対処に一杯一杯になる。

「移動射撃は難度が高いんだ。慣れないならこんな風に牽制程度で十分だよ」

「ならば、《氷晶壁》」

アイリーンが得意とする氷の防壁。この術式なら大概の攻撃を弾くことができる。

《氷晶壁》をバリケードにして反撃に出ようとしたアイリーン。ところが突然彼女の足元で砂が盛り上がる。

足場を崩された彼女はその場で尻餅をついた。

「……砂更は反則ですわ」

「まあね。でも足元を狙うのは有効なんだ。対策は立てた方がいいよ」

次からユーマは砂を操らずに彼女の相手をした。

「接近されて《壁》で防ぐにはモノが大きすぎる。小回りが利かないと側面や背面をとられるよ」

《高速移動》からの突撃。近接戦に持ち込まれるのはアイリーンにはよくある敗北パターンだ。

「攻撃を《感知》できても身体が反応しきれていない。魔術で全てを防ごうとすると負荷がかかりすぎて反撃の余裕がなくなるよ」

「もう1度です！」

アイリーンは最初から打って出た。

《氷弾の雨》は容赦なくユーマを襲う。

「攻撃が直線的で単調だよ。連射が効いても怖くない」

ユーマは飛びあがって回避。そのまま《天駆》で空を駆ける。

「風刃、ブーメラン！」

ガンプレートのスリットから発生するカマイタチ。

《風刃》はユーマに《補強》され、弧を描くように旋回。

側面から襲いかかる《風刃》に気をとられたアイリーンは正面から《風弾》を撃ちこまれた。

「手数で攻めるなら多角的に攻めて隙を作らせるんだ。それと上から攻めれば近接型は弱いよ。あと範囲攻撃の術式で炙り出すとかかな？」

「……まだです」

それから十数回と戦闘を繰り返したがまともな戦いにならず、アイリーンは何度も倒されて全身砂まみれになった。

「まだまだ……」

「アイリさん。なんか根本的に戦い方が間違ってる気がする。なんで正面から撃ち合うの？」

ユーマにはそれが疑問だった。アイリーンには向いてないと思うのだ。

「何を言っているのです？　魔術師が攻撃術式で攻めないでどうやって戦うのですか？」

「……そこからか」

ユーマがなぜ溜息をつくのかわからないアイリーン。

「よくわかりませんが私にはまだ《氷輝陣》があります。あの術式を使いこなせれば余程の相手には負けはしません」

「それのせいかな？　わかった。次は最初から《氷輝陣》を出して」

《氷輝陣》

輝く氷晶の世界。

氷属性術式の発動速度を飛躍的に上昇させ、彼女の持つ《感知》特性と組み合わせることで難攻不落の要塞となる氷霧の結界。

「これならまともな戦いになるはずです」

アイリーンの自信。１度はユーマに破られはしたがあれから対策を立て、術式自体も改良している。

アイリーンは動かない。《氷輝陣》の中にいればどんな攻撃にも素早く《氷晶壁》で対応できるし《氷弾》も全周囲打ち放題だ。

この中が彼女の安全圏。

「……やっぱりだ。アイリさん。それじゃ何も変わっていない。それだとエイリークも簡単に破れる」

「なんですって？」

彼女の驚きを無視してユーマは左手で短剣を抜く。

「風葉たちが持たないからこれで最後にするよ。今からアイリさんの魔術（自信）、ぶち壊すから」

ユーマはそう言ったあとに真正面から突撃した。さながらエイリークを真似したような攻撃。

「氷晶壁！」

「はぁっ！！」

《爆風波》

氷の防壁に直接爆風を叩きつける。

氷晶はすぐに再展開されるが一瞬でも周囲の氷霧が吹き飛ぶ。

その隙に側面に回り込んで短剣を突き出す。息を飲むアイリーン。

「というわけ。ポピラが教えてくれたけどエイリークはこの手の術式と相性がいいらしい」

「……」

「至近距離で一瞬でも氷霧を吹き飛ばせばエイリークならその隙を見逃さない。《氷輝陣》は完全な防御結界じゃないから安心したらすぐに負けるよ」

「そんな……」

「今の使い方じゃ《氷輝陣》は中途半端だよ」

あれだけ打ちのめして何もフォローなしでは鬼か悪魔か兄だろうと思うユーマ。

いくつかアドバイスしてみたがアイリーンはその間も茫然としていた。

＋＋＋

それからアイリーンは走りこみを始め、体術の授業に参加するようになった。

「《氷輝陣》の新型はユーマさんのおかげで完成しました。あとは私の持久力が問題です」

それは魔術を使い続ける精神力よりも、動き続けながら戦うことができるかどうかという身体能力の問題。

基礎体力の向上と体捌きの習得が今の彼女の課題だった。

慣れない運動を繰り返して1度はオーバーワークで倒れたアイリーン。それからはユーマやエイリークの助言を受けて体力トレーニ

ングをするようになった。

筋肉痛はその名残である。

「おっ、今日もやってるな。手伝う事あるか？」
「はぁ、はぁ……あとで組手に付き合って下さい」

試験まであと3日。

アイリーンの基礎体力がどれほど向上したのかわからないが、体捌きに関しては驚くほど上達が見られた。

アギのおかげである。

彼は戦士タイプではあるが武器を持たない。

グルールのような格闘家というわけでもないのに体術はユーマどころかエイリーク以上だった。

「あとでリュガも応援団を何人か連れて来るらしいぜ。それまで相手してやる」
「お願いします」

アギはアイリーンにとって最適のコーチだった。

アギは《盾》を使う。彼の盾捌きこそ彼女が必要としていたものだったのだ。

「もっと足を使って身体ごと正面に向けんだよ。じゃねぇと防いでも体勢を崩しちまう」

「はい！」
「重い一撃は受け止めるじゃなくて受け流す。逆に軽い攻撃は押し返して相手の体勢を崩してやれ」
「はい！」

アイリーンがアギと組手をはじめて1時間が経過。そのころになるとリュガがやってきた。

「お前、アイリーンさんに無茶させてないだろうな？」
「睨むなよ。休憩も挟んでるし前に比べればだいぶましだぜ。あの時は足捌きに付いていけなくて姫さん両足が攣ったんだからな」
「アギさん！　それは言わないでください」

睨みつけるアイリーン。皆の前で言われるのは恥ずかしかった。

「おっと、紹介がまだだったな。アイリーンさん。こいつらが『アイリーン公式応援団』の新団員だ。1年生を勧誘してきた」
「また勝手に増やしましたね。……いいですけど」

リュガの他に数人の生徒たちがいる。見れば洗礼式の時に対峙した1年生の顔もあった。

アイリーン公式応援団。彼女の友人が結成したファンクラブは学園の中において珍しいものではない。

いかなる時も団長が姿を現さないことが珍しいことではあるが。

ちなみにリュガは女子比率の高いこの応援団の中では初期メンバーであり、数少ない男子幹部である。

「もちろんアイリーンさんの訓練にも付き合わせるつもりだ。人数は多い方がいいだろ？」
「そうですね。では皆さん、今日もお願いします。……その前にお昼にしましょうか？　お弁当、用意していますから」
取り出したバスケットは3つもある。最近は皆で昼食をとるようになっていたのでアイリーンは十数人分の食事を用意していた。
「皆さんも自分のことで忙しいのに私の訓練に付き合ってくれるので申し訳ありません。お礼にもなりませんけど召し上がってください」
バスケットの中はぎっしり詰まったたくさんのおにぎり。
「ユーマさんが以前用意してくれたもので作り方を教えてもらいました。パンもいいけどお米の方が力になるから、って」
「アイリーンさんが握ったものか。すげーな」
リュガや応援団は感激しておにぎりに手を伸ばし、
「……ユーマが作ったやつの方がうまいな」
失礼なことを言うアギは誰かに氷塊で殴られてぶっ倒れた。
リュガ達は見なかったことにしている。

十十十

「先輩はどんな魔術師なんですか？」

食後の団らんで新団員である1年生がアイリーンに質問した。

「どんな、と言いますと私は見ての通り氷使いですけど？」

「いいえ。扱う属性ではなくて戦闘スタイルの事です。先程青いバンダナの先輩とやっていたのは体術の訓練でした。それに今からやるのは機動回避の訓練ですよね？」

魔術師というよりも戦士のような近接型のクラスが飛び道具に対処する為にやるような訓練を続けるアイリーンに疑問を持ったらしい。

「魔法戦士にでもなるのかと思いまして」

「いいえ。私は魔術師以外のクラスになるつもりはありません。ただ新しい術式を使いこなすために必要だと思ったのです」

アイリーンは立ち上がると今いる皆にもう1度礼を言う。以前ならば誰かに協力してもらうなんて考えもしなかったのだ。

それが力になってくれる人たちがいて、自分の力量が上がっていることを実感することができる。

今はいない少年を含めて彼女は仲間に恵まれたことを世界に感謝した。

「本当に今までありがとう。次の試験では必ず使いこなして見せます。私のあたらしい術式、新しい戦い方を」

白金の髪を靡かせてアイリーンは、皆に応えるためにも決意を新たにした。

＋＋＋

アイリーンは以前ユーマが言っていたことを思い出す。

「アイリさんは1つの術式に多くを求め過ぎてるんだ。あの《銀の魔眼》だって使いこなせていないでしょ？　あれは複雑すぎてまだ早いよ」

ユーマの助言はこうだ。

アイリーンは1つの術式に複数の機能を詰め込み過ぎて汎用性を高めるどころか扱いが難しくなってしまっていること。

それならば複数の術式を使いこなして対応した方が負荷も軽いということ。

「あとは戦術の確立かな。別に攻撃術式だけが魔術じゃない。俺がアイリさんだったら1つの術式だけでも戦えるよ」

それは嘘だろうとアイリーンは思う。

「そんなことないさ。砂更だって砂を操るだけだよ。あとは使い方次第なんだ」
「使い方……」
「ヒントを1つだけ。『壁』は『盾』じゃない。『盾でもある』だよ」
「……」
最後にユーマは彼女に質問した。
「アイリさんはどんな魔術師になるの？」
それはアイリーン・シルバルムの根本を訊ねること。
「大規模な範囲攻撃を扱う攻撃特化の《大魔術師》？　中距離から白兵までこなす《魔法戦士》や機動力が特徴の《魔法騎兵》？」
魔術師から派生するクラスはたくさんある。ユーマが聞きたいのは彼女の目指す魔術師のスタイル。方向性が決まらなければアイリーンはいつまでも中途半端だと思ったのだ。
「《感知》を活かした後方支援型もあるな。これを俺はおススメするけど……」
「ユーマさん」
アイリーンはユーマの言葉を遮った。質問の答えは最初から決まっている。
だから堂々と答える。
「決まっています。全部です。私は最高の魔術師を目指すのですか

ら」

「……そうですか。１つずつ地道に頑張ってください」

頭の悪そうな答えにユーマは額を抑えた。

＋＋＋

そんなユーマが姿を消してから2週間が経過。

その日がアイリーンの試験の日だ。

＋＋＋

２－０３　特訓　２（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

氷姫ＶＳ凍姫。

因縁というよりも一方的に睨みつけられるアイリーン。

しかし相手の実力は本物のランクＡ。苦戦を強いられる。

彼女の反撃の糸口はあたらしい術式しかない。

次回「銀の舞台」

「ここからは私の独壇場です」

2－04　銀の舞台（前書き）

アイリーンＶＳ《凍姫》

2－04　銀の舞台

＋＋＋

戦闘室の中は冷気に包まれている。

1人の魔術師によって。

「氷晶壁」

アイリーンは防御術式を展開。物理防御に高い性能を誇る《氷晶壁》だが、彼女を相手にしては一時しのぎにしかならない。

「何度防いでも無駄なのよ！　氷姫！！」

アイリーンにぶつけられる冷気。《氷晶壁》よって直撃は避けるが氷の防壁は冷気で『凍りつく』。

「破っ！」

続けざまに撃ち込まれた衝撃破に氷晶壁は容易く砕かれた。

「脆いわ！　脆いわよ！！　貴女の氷は私の《凍破》にまったく歯が立たないじゃない」

「くっ……」

ディジー・バラモンド。

3年生の氷使い。彼女がアイリーンの対戦相手。

「その程度でよくランクAに挑戦しようとしたものね？　後悔なさい。この私の前に立ったことを」

ディジーは対戦相手にアイリーン・シルバルムが選ばれたことを喜んでいた。彼女はアイリーンに恨みがある。

「皆の前で完膚無きに打ちのめしてあげるわ。そして貴女に奪われた《氷姫》の名前、返してもらいますわよ」

一方的な私怨だった。

「ほーっほっほ！　ほーっほっほ!!　ほぶっ」

「隙だらけです」

高笑いするディジーに放つ《氷弾》は顔面に直撃。

「よくもやったわね！　私の美貌がそんなにも妬ましいの!!」

「……」

「気に入らない！　気に入らないのよそのすました顔が!!　私の前にひれ伏しなさい！　アイリーン・シルバルム!!」

吹き荒ぶ寒風。

氷属性、特に凍結系の術式を使わせるとディジーに並ぶ者はいな

い。

激昂しながら鼻を赤くして、鼻血を流す姿はまぬけだけれど。

「……困りましたね」

状況はアイリーンの防戦一方であり、彼女は攻略法を見出せないままでいた。

＋＋＋
銀の舞台
＋＋＋

「何なの？　あのお嬢様もどき」

「ディジー・バラモンド。アイリーンさんの前の《氷姫》だ」

観戦席のエイリークに答えるのはリュガ。

「二つ名は報道部が勝手に決めて広げてる俗称だろ？　アイリーンさんのほうが《氷姫》らしいからってあの人の二つ名を報道部は勝手に変えたんだよ」

現在のディジーの二つ名は《氷砕の魔術師》。彼女はこれが気に入らないので《凍姫》と自称している。

「そもそも《姫》のつく二つ名は人気投票の上位にランクインする

美少女に贈られるものだ。北校の《白雪姫》や東校の《桜姫》、あとは《歌姫》とかな。あの先輩もキツめの美人だけど性格が悪くてランクがかなり落ちていた」

「……なんか詳しくて気味が悪いわよアンタ」

リュガ・キカ。バンダナ兄弟の赤いほう。

不良っぽい外見のくせに割と美少女通。

「アイリーンさんを目の敵にしてるかもな。同じ氷使いの魔術師だし」

「だから試験になるのでしょうね。同属性の相手に有効な魔術を使えるのかって」

「そうか。だとしたらアイリーンさんは負けない。俺達とあれだけ特訓したんだ」

リュガは気合を入れる。ここで立ち上がらなくては何が公式応援団なのだ。

応援団は彼女の勝利を信じている。

「……ちょっとアギ、アンタ何してんの」

アギはエイリーク達から離れた所にいる。

「俺、お前たちの近くにいたくねぇ」

リュガとエイリークの周りには約２０人程の公式応援団。

立ち上がる彼らはお揃いのハッピとハチマキを身につけて旗を持

つ。

「ファイ、トォオーーッ」

1人が叫べば皆が唱和して声を張り上げる。

彼らは正真正銘の応援団。ファンクラブではない。

たかが試験の為に彼らは悪目立ちしていた。

「氷の姫さんもこんな恥ずかしいの、よく許してるよな」

＋＋＋

応援されている当の本人に余裕はない。

《凍破》

風と氷属性の複合攻撃術式。

冷気の波動を叩きこんで対象を氷漬けにしてしまい、次の衝撃波で砕いてしまうという2段攻撃。

アイリーンにとって予想外だったのは《氷晶壁》等の『氷属性の魔術』まで氷漬けにされてしまったことだ。

ディジーに凍結されたものは脆くなる。それが彼女の魔術の大きな特徴だった。

アイリーンが《氷弾》で反撃にでても、迎撃されては『氷塊を氷漬け』にされて砕かれてしまう。

「同じ氷使いなのに系統が違うとこんなにも特徴に差があるのですね」

アイリーンの魔術は氷という『固形物』の生成に長けている。

彼女の氷は『冷たい』というイメージが薄い。凍結系の術式も滅多に使うことがない。

「ほらお逃げ！　逃げなさい！！　貴女はそれがお似合いよ」

アイリーンは走る。逃げ回ってはステージに設置してある障害物に隠れ、障害物が砕かれたならまた逃げる、という行動を繰り返している。

時折《氷晶壁》で防ぐがやはり簡単に砕かれる。

「《氷輝陣》を展開する余裕がありません。どうしたら……」

走りつつも考えるアイリーン。思考しながらでも動きに乱れがない。

体力トレーニングの効果がここであらわれている。

――魔術師が最初に使う最大の魔術。それは――

「ディジーさん」

アイリーンは逃げることをやめた。

「どうして《氷姫》の名にこだわるのです？」

対戦相手に向き直り、話しかける。

「決まってるじゃない！　《姫》の名はいい女のステータスよ！！貴女だって毎日たくさんの男を傍においているじゃない」

「私が……ですか？」

意外なことを言われた。

「私は見たわ。ある時は幼い黒髪の少年の手を握って廊下を歩いていたわ」

「……」

特訓に付き合うのを嫌がって逃げるユーマを引っ張って行ったときだろうか？

「青いバンダナの男を親密そうに叩いていたわ。」

「……」

歯に衣を着せぬアギの言動に怒って氷塊でぶん殴ったときだろうか？

「ワイルドな赤い男を踏みつけていたわね！　女王様なの？　貴女！！」

「……ああ」

リュガが秘蔵していた忌わしい文化祭の写真のありかを聞きだすのに彼を締めあげていた時だ。きっと。

「他にも応援団やらファンクラブやら周りにちやほやされて。……決して羨ましくなんてないわよ！　ただ貴女がムカつくのよ！！」

「……えー」

アイリーンの戦意はガタ落ちだった。恨まれる理由がくだらなかった。

「そう言えばディジーさんは彼氏がいると聞いたことがありますけれど」

「――！！　貴女がそんなこと言うのね……彼は！　彼は！！　貴女の応援団の中にいるのよ！！！」

「……え！？」

地雷を踏んだ。

室内の気温がまた下がった気がする。

「許さない、もう許さない！　全身氷漬けにして霜焼けでその顔をパンパンに腫らしてあげるわ！！」

「……ごめんなさい。でもその報復は地味に嫌です。だから」

時間稼ぎは終わった。

魔術師が最初に使う最大の魔術。ユーマは《はったり》だと言っ

ていたが正確には違う。

挑発、冗談、それに嘘。

他にもあるがつまるところ《話術》なのだ。話すことで情報を引き出し時間を稼ぐ《賢者》の技術。

今回は話しかけた相手が勝手にしゃべり続けていたわけだけど。

アイリーンの銀の腕輪が輝く。

「全力で抵抗します。《氷輝陣》、展開」

アイリーンの全身を覆う輝く氷晶。

「無駄よ！　そんなもの氷霧ごと凍らせてしまえば終わりよ！！」

「ええ。だからお見せします。あたらしい私の《氷輝陣》を。……舞台よ、輝け！！」

アイリーンは地面に向けて氷晶を放出する。彼女の周囲ではなくステージの舞台全体を氷霧は薄く覆う。

白銀に輝く氷晶のステージ。

「《氷輝陣・銀の舞台》。ここからは私の独壇場です」

＋＋＋

《氷輝陣・銀の舞台》

以前の《氷輝陣》ならば術者の全周囲５・６メートルくらいの狭い『空間』を展開していたが、この《銀の舞台》の場合術者を中心に半径５０メートル程度の『平面』に展開することができる。

「一緒なのよ！」

ディジーは氷霧に覆われたステージを氷漬けにする。

「同じではありません。以前のままならば《氷輝陣》ごと私も氷漬けになりますから」

氷漬けにされたステージ。しかしその表面を氷霧はまた覆う。

《氷輝陣》はアイリーンを中心に氷晶を展開する。１度展開できたならば何度でも再展開できる。

「いきます。氷滑走」

アイリーンは《銀の舞台》を高速で移動する。氷上をすべることで高速戦闘を可能にしたのだ。

「降れよ、氷弾！」

ディジーを中心に旋回するアイリーンは彼女に向けて《氷弾の雨》を放つ。

ディジーを中心に旋回移動。攻撃は命中率が低いのでばら撒くように連射。

「なめるな！　旋風壁」

全方位から狙われたディジーは竜巻の壁で氷弾を防ぐ。

「氷弾程度の初級術式が私に通じると思っているの？」

「鼻血出したじゃありませんか」

「うるさい！！」

ディジーは《凍破》で応戦。しかし動く的は狙いにくいのかアイリーンには当たらない。

「貴女は足を止めて戦う魔術師ですか？　それはもう古いですよ」

「むきー！」

挑発することを忘れない。ムキになるディジー。

「《氷滑走》なら私も使えるわよ！　見てなさい！！」

氷上決戦。

氷の舞台を2人は高速ですべりながら魔術戦をはじめる。

アイリーンの狙い通り。

「氷晶壁」

「ぶっ」

ディジーの進行方向に《氷晶壁》を展開。高速で壁にぶつかるディジー。

「このっ、てぇ！？」

反撃しようとしたが目の前に《氷晶壁》が展開されてディジーの視界を塞ぐ。

「氷晶壁」

「ふぎゃん」

ディジーの足元から《氷晶壁》が突き出してくる。足元をすくわれたディジーは変な声をあげて尻餅をついてしまった。

「壁は盾ではありません。障害物なのです。この《銀の舞台》にいる限り貴女を自由に行動させません」

生成した氷を知覚することができるアイリーンは《銀の舞台》に踏み入れたものを《感知》できる。位置を捕捉さえすれば防御術式の《氷晶壁》を遠距離でも正確に発動できるのだ。

地形操作。《銀の舞台》を展開することでアイリーンは広範囲の領域を支配することができるようになった。

それは地表だけの薄っぺらい平面だけなのだが、空を飛ばれなければ人間相手に十分である。

「《氷晶壁》」

今度はディジーの四方を囲む。彼女を閉じ込めた。

「……なにしようたって私は貴女の氷を砕けるのよ。もう手加減はしないわ。壊す！　壊す壊す！！」

氷の壁に翻弄されたディジーはブチ切れる。

《旋風凍破》

冷気を纏う竜巻は、彼女を囲む壁を凍結させると同時に砕く砕く砕く。

「どこにいるのよ！　アイリーン・シルバルム！！」

《旋風凍破》の竜巻はそのまま《銀の舞台》を蹂躙。氷漬けにされたステージを砕き割ってしまう。

けれどアイリーンはステージ上のどこにもいない。

「ここです」

展開した複数の《氷晶球》を足場にアイリーンは空中を移動。ディジーの上をとる。

「そ、こ、かぁああ！！」

「集え氷晶。……風よ！　輝け！！」

砕けたステージから氷晶が上空にいるアイリーンに向けてキラキラと輝きながら舞い上がる。

《銀の舞台》に展開していた氷晶のすべてが彼女にに集まると、アイリーンは下にいるディジーに向けて輝く吹雪を放射。

《凍破》ＶＳ《輝風凍波》

同じ凍結系攻撃。

アイリーンは最大の攻撃。でも凍結攻撃ならディジーの方が上だ。

相殺

「これでぇ！　終わりよぉお！！」

アイリーンの着地を狙った攻撃。

「氷晶壁！」

しかしアイリーンは防がなかった。この一手は攻めるためのある。

《氷晶壁》を展開したのは自分の足元。

飛び出す《氷晶壁》の勢いにあわせてアイリーンは高く跳ぶ。

戦闘衣である濃紺のドレスをひらめかせ、宙を舞う《銀の氷姫》はディジーの背後をとることに成功。

「まだよ！！」

ディジーは振り向きざまに氷の棍を形成。真横に振るが近接戦は彼女の専門ではない。

今のアイリーンならば簡単に捌くことができる。

「集え氷晶。……剣よ！　切り裂け！！」

氷の棍は左手の小さな《氷晶の盾》で受け流した。

アイリーンは《輝風凍波》が相殺された氷晶の残りをかき集め、切り札を放つ。

《氷輝刃》

本来の１０分の１程の刃しか形成できなかったが威力はそのまま。至近距離ならば十分だった。

「ああっ！！」

輝く氷の刃はディジーを一閃。

切り裂かれた彼女は傷を負うことはなかったが、そのままの姿で氷漬けになった。

＋＋＋

「私は凍結系は苦手ではありません。……ただ嫌いなのです」

アイリーンは誰にともなく呟く。

暗い表情をしていたがそれは一瞬だけ。すぐにやめてディジーに礼を言う。

「ディジーさん、ありがとうございます。おかげで私の今の力を出し切ることができました」

「……」

ディジーの返事はない。今は氷漬けの像だから。

「ありがとう、みんな」

アイリーンは今とても充実していた。

あたらしい魔術と戦術。力になってくれた仲間たち。試験では満足する成果を出すことができた。

アイリーンは気付いている。著しい成長はあの時からだ。

《精霊使い》の少年。

彼に負けた時からだ。

彼に出会ったから。

彼が教えてくれたからきっと……

「私の魔術はこれからです。だから……」

――はやくもどってきてください

仲間たちは皆ユーマのことを表では心配していない。

でもきっと彼のことを皆が必要としているはずだ。

そんなことを思いながらアイリーンは、応援してくれた皆に優雅に礼をして笑顔をむけた。

＋＋＋

２－０４　銀の舞台（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

アギ。砂漠の民の少年。バンダナ兄弟の青い方。

彼の評価は人それぞれ。

試験前から彼は仲間たちの周りをただうろついていた。……だけなのか？

次回「特訓　？」

「……忘れろよ、それ」

2－05　特訓　？（前書き）

試験前のアギ。

2－05　特訓　？

＋＋＋

「砂更、力を貸してくれ。《全力》、行くぞ！！」

「……」

砂の精霊はあたらしい主の叫びに歓喜して応える。

《西の大砂漠》

かつての《西の大帝国》。４００年前の大破壊で滅んだ国の跡地であるその砂漠地帯は豊富な魔力資源の宝庫にして凶悪に変異した魔獣の棲家だ。

そのど真ん中でユーマは魔獣に囲まれていた。

「集え、集え集え！　風よ集いて螺旋を描け！！」

「ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐー」

風葉は魔法を放つ。

周囲の風は渦を巻いて吹き上がり《竜巻》となる。

「喰らえ喰らえ竜巻よ。砂を喰らいて嵐を起こせ！」

「……」

新たに契約した精霊の砂更は《竜巻》に砂漠の砂を大量に飲み込ませる。

《砂塵》。精霊たちの合体攻撃。

砂嵐は魔獣達に容赦なく砂礫を浴びせて視界を塞ぎ、身動きを取れないようにする。

「オッサン！！」
「……わかった」

ユーマの傍にいて飛び出すのは、金の短髪で巨漢の傭兵。

キリンジは柄の長いハンマーを両手で振り上げ魔獣達に接近。

「落ちろ！！」
「フン！！」

ユーマは砂更の力で魔獣達の足を砂地へ引きずりこむ。その隙にキリンジがハンマーを次々と叩き込んでは一撃で沈めていく。

彼のハンマーは普通と違う。

重量もそうなのだが、キリンジは己の武器に雷を纏わせてハンマーの大きさを何倍にも膨らませ、柄の長さも自在に伸ばしていた。

《雷槌》

それが彼の異名。

雷属性の術式を習得した稀有な戦士。近接戦最強のランクＡハンター。

彼の前では２０メートル級の《砂猿》や強固な装甲を持つ《鋼の甲殻竜》も、俊敏で空を飛ぶ《鷲獣》、《蠍蜂》も相手ではない。

「キシャアァァァ！！」

「！？」

砂に隠れてユーマの足元から飛び出し、襲いかかるのは《砂漠の竜蛇》。

突然のことにユーマは一瞬で丸飲みにされた。

「……まだ。死んで、たまるか！！」

竜蛇の口か喉かわからない中でユーマは《守護の短剣》を前に突き出してイメージする。

――手にしたものは剣ではなくて『銃のようなもの』

――選択する『カートリッジ』は『風属性放射攻撃魔法弾』

「ストーム・ブラストぉ！！」

《旋風砲》は竜蛇の腹を突き破った。

「……まだやるべきことがあるんだ。俺は」

ユーマは短剣を手にキリンジと共に魔獣達に攻め込む。

「俺は！　エイリークに！」

短剣を手にして必死に、生き残るために戦う。

彼女に会うために。

「宿題を届けるんだ！！」

ユーマ、只今おつかい中。

「あああああ！！！」

死闘は続く。

＋＋＋

キリンジは《西の大砂漠》を抜けた。

肩にはぐったりとした黒髪の少年を担いでいる。

「……む？」

足元に振動。気付くのが遅かった。

「ブォオォォォッ！！」

甲殻竜が砂漠の砂に潜んでいた。

甲殻竜が砂に隠れて獲物を狙う習性なんて聞いたことがない。

突進する甲殻竜。奇襲だった。

ユーマを担いでいるのでキリンジは雷の術式を使うことができない。

「……くっ」

その時――

防ぐ手立てのないキリンジの前に駆け出してくるひとつの影。

「大丈夫か？　おっさん」

少年だった。

砂漠の民のもつ独特の砂除けのローブとゴーグルを身につけてい

る。

その少年が全長5メートルの、2トンを超える重量を持つ甲殻竜の突進を、

片手で『防いだ』。

「……いけよ。てめぇの攻撃なんざ効かねぇ。餌が欲しけりゃ他をあたれ」

少年が甲殻竜を睨みつけると、甲殻竜はおとなしく引きさがっていく。

「……驚いた。魔獣と話せるのか？」

「……全然驚いてるようには見えないぜおっさん。この辺の魔獣はアタマがいいのさ。あいつらも生きるのに必死だから変わった行動をする奴もいる」

「……なるほど」

キリンジが驚いたのはそれだけではなく、少年が見せたあの『盾』のほうもなのだが。

＋＋＋

キリンジはあらためて礼を言うと少年の案内で近くの集落へ向かった。

「なーに。近くででっかい砂嵐があったらしいから様子をみてくるよう頼まれたんだ。そのついでだから」

「……そうか」
「それよりもそいつ、生きてんの？」
キリンジの担いだユーマを見て少年は訊ねた。
「……ああ。《西の大砂漠》で出会った」
「大砂漠！？　こんなガキがあの化物の巣窟に？」
少年が驚くのも無理はないとキリンジは思う。
「だが彼は間違いなく戦士だ。……彼がいなければ私も危なかった」
「……へぇ」
青いバンダナを額に巻いた少年は、この時キリンジがあの《雷槌》だと知らなかった。
でも、この屈強な戦士のおっさんが肩に担いだ子供を尊敬した目でみていたのが強く印象に残る。
「集落までもう少しだ」
「……そうか」
ユーマは知らないけど。
アギはこの時にユーマと初めて出会ったのだ。

＋＋＋
特訓　？
＋＋＋

試験前のある日。

「ちょ、待てって」
「問答無用。アタシに切られなさい」

エイリークの細剣が閃き、鋭い斬撃がアギを襲う。

「せめて模擬剣にしてくれ。死んじまう！！」
「必要ないわ」

《双月》

上弦と下弦、２つの弧を描く２連斬撃をアギは両の掌で『弾く』。

《水月》

胴を薙ぐ横回転斬りを右腕で『防ぎ』、

《弧月》

跳躍からの勢いを乗せた縦回転斬りを腕を交差して『耐える』。

「ほら」
「ほら、じゃねぇ！　１つタイミングが外れたらアウトじゃねぇか」

今の技はエイリークが得意とする《月の型》の基本連続剣技だ。
その容赦のなさにアギは怒る。

「でも完璧に防いだわね。その力を模擬戦でなぜ使わないのよ」

手を抜いたアンタは今日もサンドバックね、とはエイリークの弁。

「別にいいじゃねぇか。模擬戦の勝ち負けにこだわるくらいじゃ力をみせる理由にもならねぇよ」

「……」

「力を誇示すんのはお偉いさんのすることさ。ガラじゃねぇ。力は本当に必要な時に使えればいい」

アギは彼なりの力を持つ理由がある。

「俺は手にした力を間違えないようにしたいのさ」

ただ格好つけたのはいけなかった。

「……そう。アンタもアイツと似たようなことを言うのね。……思い出したらむかついてきた」

「あのー姫さん？」

エイリークはいつもの構えをとる。

「吹き飛びなさい」

「ぎゃーっ」

《旋風剣・疾風突き》

しかし、アギはこの技も掌で『受け止める』。

「っの、いい加減に……」

「ここからよ！」

エイリークは剣の切っ先に集中。《旋風剣》の竜巻を解放した。

《衝突風》

……。

「いける。まともなアギに初めて攻撃が通った！！」

「……まともってなんだよ」

瞬間的に膨れ上がった爆発力に不意を突かれ、アギは吹き飛んだ。

＋＋＋

「生きてる？」

「なんとかな」

アギはユーマの次くらいに巻き込まれ吹き飛ばされている。ダメージを最小限に抑える方法はもう身体が覚えてしまった。

自慢にもならなくてアギは悲しくなった。

「ごめん。今はアンタ以外にこの技を試せる相手がいないから」

「ユーマか。何してるんだろうなあいつ」

ユーマがいなくなって数日が経つ。

学園からいなくなったわけではないらしいが、彼は姿を現さない。

大けがをした、停学中、生徒会の特殊任務に就いた、などと噂だけが広がって本当のことが巧妙に隠されていた。

「エルド兄妹は知っているみたいね。でもポピラは教えてくれない」

「無事なのを知らせてくれただけでもよしとしないとな。……じゃあ、俺行くわ。もういいだろ？」

「ええ。ありがと」

アギを見送ってエイリークは呟く。

「……次はアイリィの所かしら？　人のことばっかりで面倒見のいい馬鹿なのよね、アイツ」

＋＋＋

試験期間の間、アギは仲間たちの様子を見てはぶらぶらしている。

この前はリュガの試験を見てきた。その様子を見たアギは今の実力ならランクＢの試験は楽勝だろうと思ったのだ。

「時間は有効活用しねぇとな」

別に遊びに行くわけではない。向かったのは生徒会棟の一室。

自警部本部。

「うーす。ブソウさんいる？」

受付を無視して奥の執務室へむかうアギ。

当然のように武装した生徒に囲まれた。

「……おい」

「誰だ？　ここからは立ち入り禁止だ」

アギを呼びとめた生徒が幹部らしい。自警部の黒い腕章に星を模った飾りがある。

「ブソウさんはいないのか？」

「お前が知る必要はない。連れて行け」

問答無用だった。

「……話が違うぜ、ブソウさん」

「何をごちゃごちゃと。ここは生徒会の上層部だ。お前みたいな一般生徒が来るところじゃないんだよ」

「エリート思考か」

いるよなあ、こんな奴。これがアギの感想。

「だとよ。どう思う？」
「ああ？」
「すまんな。……どけ」
アギが声をかけた男は幹部の襟首を掴んで放り投げる。
男の体格はアギとそう変わらない。その存在感が彼を大きく見せる。
黒い腕章に５つの星飾り。
「ぶ、部長……」
「誰の為に自警部があると思う？　貴様は反省室だ。連れて行け」
「「はっ」」
ブソウ・ナギバ。
学園の治安を守るその組織を統べる部長にして《番号持ち》。
「いきなりで悪かったよ。忙しいんだろ」
「自由に出入りしていいと言ったのは俺だ。それに俺１人抜けても自警部は揺るがん」
「……」
本当かい？　アギは疑問に思うが言うことはなかった。
「用があるのだろう？　どこがいい？」
「それじゃあ外で。……邪魔したな。今度は気をつける」
囲んでいた自警部員に謝るアギは、ブソウを連れて生徒会棟をあ

とにした。

「先輩、あの青バンダナは何者です？」

残った自警部員は部長と親しいアギのことが気になっていた。

「1年や編入組は知らないか。あいつはアギ。《バンダナ兄弟》の青いほうだ」

「あの人が？」

「噂だけなら」

（修学旅行の宿泊先で、女湯を覗きに行った自分に無関係な馬鹿達を守るために1人囮になったという大馬鹿？）

（たった2人で他校に攻め込んでそこの生徒会を1つ潰したというあの問題児？）

（部長と焼きプリンを奪い合って引き分けに持ち込んだという影の実力者？）

（赤いほうは美少女通のストーカーらしい……）

ろくでもない噂ばかりの《バンダナ兄弟》。

（……忘れろよ、それ）

ここにはいない誰かの突っ込み。

幻聴です。

「去年あった侵攻事件には俺達に協力してくれた。あいつ等がいなければ裏門が突破されて普通科棟に被害が出ていたはずだ」
「えー」
先輩の言うことが信じられない1年生。噂が先行して偏見になっている。
「まあ、問題児なのは変わりない。自警部とも散々やりあっている。ひっかきまわすだけで被害はないから《旋風の剣士》に比べればかわいいもんだ」
「あ、僕最近吹き飛ばされました」
「いいなー」
いいのか？　自警部。
「話が逸れたな。でも覚えておけ。ああいう奴が俺達の手が回らないところで学園を守っているんだ」
＋＋＋
「迷惑料だ」
「おっ、さすが」
学園に多数設けられている憩いの広場。小さな公園みたいなものだが利用者は多い。
ベンチに座り、紙パックのジュースを飲む2人。

「……瓶が良かったな。ぬるい」
「贅沢言うな」
ブソウも甘くてぬるいジュースには顔を顰めている。
ジュースに貼ってあるラベルは「のどごしぬるり、とろろりんご」
「最近ああいうの多いのか？　エリートの坊ちゃんみたいな」
話題に上げたのは先程の自警部でのこと。
「多くは編入生だな。指揮官ぶってる奴はいる」
「変わったもんだ」
前の体制がよかったと言いたげなアギにブソウは反論する。
「各棟に派遣している支部の奴は違う。いるのは本部だけだ。あそこはもう『生徒会』の直轄だからな」
「……」
自警部は生徒会とは独立した組織である。
しかし今期の生徒会長の意向で生徒会に統合する案が決まりつつある。
「今の会長さんは2年だったな。《自警部》に《報道部》に《組合》。それに《エース》も。きっと来年になる前に学園のすべてを掌握したいんだろうな」
「滅多な事を言うな。いいから本題を言え」

「ああ」

アギの人脈ではブソウが1番偉い立場にいる。自警部のトップである彼に確認したいことがあった。

「俺のダチが1人いなくなった。でもこの学園に『行方不明者』はいないんだな？」

「……ああ」

『真実』を知るブソウは嘘をつかなかった。

「ブソウさんは知らないかもしれないけど、アイツは《西の大砂漠》を突破している。実力はあの《雷槌》の御墨付き。学園の生徒じゃ束になっても相手にならないはずだ。襲われてやられたとは考えられねぇ」

「何だと？」

《西の大砂漠》、《雷槌》の名に驚くブソウ。

「アイツの相手になれるとしたらブソウさんと同じ《Aナンバー》か先生達しかいねぇ。それに今は昇級試験。《エース》を決める審査期間……」

アギは問う。拳に力が入る。

「アイツは、ユーマは《Aナンバー》の誰かと戦ったのか？　あの生徒会の派閥争いに巻き込まれて！！」

アギは怒りをブソウにぶつける。

やつあたりだとしても矛先を向ける相手がわからないのだ。

「だとしたら俺は……」

「落ち着け」

ブソウは平然としている。アギが尋ねに来たことは予想通りだったから。

「ミツルギは《エース》の1人と戦い、俺もその場にいた。このくだらない争いに巻き込んだことは悪いと思っている」

ブソウは謝った。そして友を心配する真剣なアギを見ては苦笑する。

「しかしな、今ミツルギが姿を現さないのはミツルギの意思だ。もしかしたら……」

ブソウはあの少年のことを考える。実際に会ったあの少年は、精霊の力よりも厄介なモノを持っていることに気付かされた。

――もし奴が暴走した時、俺は止めることができるだろうか？

ブソウはそんな不安を表に出さない。

それは今まで学園を守ってきたエースの意地。

「もしかしたら俺達は、奴に巻き込まれたのかもしれない」

「……そうかい」

冗談を言わないブソウの言葉にアギは怒りを忘れたように笑った。

（あの自警部部長にそこまで言わせるならいつものユーマだ。俺達の力を借りないのは試験期間で気を使ったんだろうな）

「ありがとな、ブソウさん。おかげで心配事はなくなった」

「いいのか？」

「十分。ジュース、ごちそうさん」

もっと詳しく聞いてくるものだと思っていたブソウ。アギならばと全てを話す気でいたのだ。

拍子抜けした彼を尻目にアギはさっさと立ち去って行った。

「信頼しているのか？　……しかしミツルギを止めることができる奴がいるとしたら、それは《盾》であるあいつのなのかもしれん」

＋＋＋

試験７日目、最終日。

最終日ともあって殆どの生徒が試験を終えていて観戦席を賑わせている。

「な！？」

「アイツ……」
「どうして？」
「あれは私も知りませんでした。……馬鹿ですね」

練武館の観戦席でリュガとエイリークとアイリーン、そしてポピラも驚いた。

戦闘ステージに立つのはアギ。そして。

「何してんだよ、お前……」
「ん？　試験官」

アギの前に立つのは黒髪の少年。

学園指定である灰色の簡易戦闘服に砂除けのゴーグル。白い腕輪に「へ」の字に曲がった金属板の変わったブースター。

「……まじかよ」

アギの対戦相手は行方知れずの《精霊使い》だった。

＋＋＋

2－05　特訓　？（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

守るために戦う。その理由は人それぞれ。

アギの理由は1つの憧れ。

手にしたものはひとつの幻想。

次回「盾の少年」

「……ルールを変えるぞ。お前は一発殴る、ユーマぁ！！」

２－０６ａ　盾の少年　前（前書き）

アギＶＳユーマ

2－06a　盾の少年　前

＋＋＋

幾千の刃を防ぎ
幾万の矢を弾く

それは武器ではない

火竜の息吹に耐え
極寒の吹雪を凌ぐ

それは防具ではない

手にすれば臆病になり
手にすれば勇気を得る

それは守るモノ

戦う為に守り

守る為に戦う矛盾

傷つくことで傷つけない

戦士と共にあるモノ

その在り方はもう戦士ではない

それは……

《盾の幻想より》

＋＋＋

盾の少年

＋＋＋

アギは西の砂漠地帯に住む少年だ。

アギは孤児である。戦災孤児。彼は姓を持たない。

卑しい身分だからという理由ではなく、砂漠の民の慣習だった。

＋＋＋

――砂漠の民は俺の家族だ

かつての《大帝国》の流れをくむ《帝国》とその支配に抗う《反乱軍》。

西の砂漠では2つの勢力が長年争い続けてきた。

――子どもはみんな俺の息子で娘

反乱軍の勝利で終わったのは7年前。

――女はみんな俺の娘だ。ああ、おばさんおねえさんはみんな俺の姉貴でお袋な

リーダーだった若い男は新しい国を建てた。

――野郎はみんな兄貴で弟分で親父。文句あるか？

《砂漠の王国》

王となった男は『家族の住む家』を建てたのだ。

――俺は王という国の父として誓う。この国は俺達の家だ。家と家族は俺が守る。いや、俺達で守るぞ

砂漠の民は姓をもたない。

皆が家族だから。

この日、砂漠の民はすべてひとつの家族となる。

今ではその人口が約２０万人を超える西の砂漠唯一の国は、西の国最大の国となった。

青いバンダナを王冠の代わりに額に巻いた、家族を守ると誓う国父によって。

――そうだ、お前らの嫁は俺の嫁な

――死にますか？

建国宣言に冗談を言っては野郎どもに物を投げられ、王妃となる女性に刀を突き付けられる王なんて前代未聞だったが。

閑話休題。

アギは少年時代にこの王に助けられたことがある。

偶然ではない。王は家族の危機には必ず現れる。

王は王であって父であり、ヒーローでもあった。

燃え上がる孤児院。落ちてくる瓦礫。

右手を翳す王の背中。

逃げ遅れた少年、アギは見た。炎を防ぎ、瓦礫を弾く王の右手の『先』を。

「あ、あ……」

「させねぇよ」

《それ》が王の力。

誰も傷つけさせない。

《それ》は家族を守ると誓う王の《幻想》。

「……すげぇ」

アギは魅入られた。

自分を守ったモノを。

孤児である自分なんかを守ってくれた、初めて見た王の背中を。

家族を守る。

王の言葉は本当であり、俺はその家族の1人だったのだとアギは打ち震えた。

助けられたあと「大丈夫か？　息子」と自然に声をかけてくれた王がでっかく見えて、アギは涙を流す。

王はアギの目標だった。

＋＋＋

現在のアギは、試験開始直前で混乱中だった。

「なんで試験官なんてやってんだよ？　しかも俺の」

「ちょっとお金がなくなったから学生ギルドで試験官の募集を受け

てきた。アギの相手をするのは、どうせならと思って学園長に頼んだんだ」
「そこで学園長の名前が出てくんのがわかんねぇ！」
頭を抱えるアギ。久しぶりに見た親友は相変わらずだった。
「おーい。エイリーク！　短剣くれー。　風葉ー、戻ってこーい！」
「はーい」
「……何だってのよっ！」
ポピラのポケットから這い出てきた風葉は《守護の短剣》に飛び込む。その短剣をエイリークはユーマに向けて思いっきり投げた。
「よっ、と。風葉、お勤めご苦労さん」
「いいえー。楽しかったですよー。サラっちも元気ですかー？」
「……」
ユーマは短剣を腰に差し、風葉は定位置であるユーマの肩にしがみつく。
姿を現した砂更はユーマの傍に控えている。
「フル装備じゃねぇか！！　おい、ランクCの俺相手に本気かよ！？」
「もちろん。まともなアギなら最初から《全力》さ」
「……姫さんといいまともな俺って何だよ」
仕方なくアギは構える。
武器はない。徒手だ。

「ユーマ、ルール変えようぜ。俺はお前を倒せるほどの攻撃手段がねぇ。だから俺はお前の攻撃を『全て防ぐ』。制限時間がきたら俺の勝ち。どうだ？」
「いいよ。それでアギが本気出してくれるならね」
ユーマはゴーグルを被り、右手にガンプレート、左手に短剣を持つ。

「いくよ」
「きやがれ」

試験開始。

実はユーマが公式戦で《精霊使い》の力をフルに使うのは初めてであり、彼の力を知らなかった生徒は多い。それが今日この日、嫌と言うほど知らされることになった。

そしてもう1つ。皆は知ることになる。

この先学園の騒ぎの中心となる少年の、その隣にいた青バンダナの少年。

親友を守り、仲間を守る。倒れてもなお守り抜いた《盾》の力を。

＋＋＋

「でりゃっ！」
「やっぱりそれからか」
ユーマは篭手に変形した《白砂の腕輪》で戦闘ステージを叩く。
ステージに広がる僅かな振動。そして一気に石畳が崩れ、ステージ全体が砂地となった。
先制はユーマ。アギに攻める気はない。ユーマはガンプレートで《風弾》を撃つ。６連射。
アギは右手を翳し、全て当たる直前で『防いだ』。
「《風刃》、ダブルブーメラン！！」
短剣とガンプレートの両方からカマイタチを射出。
旋回して左右から迫る《風刃》を両手を左右に突き出してアギは『弾く』。
「砂更」
ユーマは砂の精霊にイメージを伝達。アギの目の前に現れる砂の壁。
「何だ？」

砂の壁は目くらまし。本命は圧縮された空気の爆弾。

ガンプレートで山なりに射出された《風爆弾》は壁越しにアギを襲う。

「ウインド・ボム」

爆発。

砂の壁を吹き飛ばし、辺りの砂を派手にまき散らした《風爆弾》。

「衝撃、斬撃、それに爆撃。どれも効いてないか」

アギは両手を上げた格好で『耐えた』。ダメージはない。

「このくらいはな。まだ序の口なんだろ？」

「もちろん。次、行くよ」

ユーマは短剣を納めるとガンプレートのカートリッジを取り出す。

そして彼の攻撃パターンの1つ、《高速移動》、《天駆》、《風乗り》を使った3次元の高速戦闘を開始した。

＋＋＋

「相変わらず反則ね、アイツ」

観戦席にいるエイリーク達は、縦横無尽に駆け回ってはアギを滅多打ちにするユーマを見ていた。

「《魔法使い》と《魔術師》の違い。それは術式の完成度と速度ですね」

魔術師は術式からイメージで魔術を再現する。

人のイメージは曖昧なもので、術式に詳しい魔術師でもその再現度は初級術式さえ威力・効果は８０パーセント程度だと言われている。

そして速度。これは術式の発動速度のこと。イメージする必要があってどうしても発動までに時間がかかってしまう。

この２点を魔術師は、ブースターに付与されたＩＭでイメージを《補強》することでカバーしている。

「ミツルギさんは風葉ちゃんの、精霊の魔力をもっています。だから風属性の《魔法》を連発できるし、《高速移動》を頻繁に使っても身体に負荷がかかりません」

「そう。適性のないアタシが《高速移動》を使ったら１歩で身体が軋むわ」

エイリークは悔しそうに言った。

魔法は魔力を消費するだけで術式を発動できる。威力・効果はどの術式でも１００パーセント、発動は一瞬。魔術戦では大きなアドバンテージを得る。

ゲンソウ術での魔術の利点はイメージ次第で１００パーセント以上の力を発揮できることなのだが。

「実際に魔法を使用しているのは風葉。ユーマさんはさらにイメージで《補強》して工夫しています。……最近わかりました。私達は『魔法使いの真似ごとをしている魔術師』なのだと。そしてあの人は『魔術師らしい魔法使い』なのです」

魔法使いと魔術師。

魔力が希薄化したこの世界でこの2つを区別するようにしたのは魔術師だ。

今では数えるほどしかいない《魔法使い》。彼らの魔法をゲンソウ術で超える。その目標がかつての魔術師たちの誇りであり、挑戦だった。

ただし研究の為とはいえ既存の術式の再現にこだわり過ぎている魔術師は多い。魔術の使い方も魔法使いとそう変わらなかった。

アイリーンは最高の魔術師を目指す。しかし、その前に『ほんとうの魔術師』というものを考えるようになった。

「それにミツルギさんには《ガンプレート・レプリカ》があります。あのブースターはカートリッジを換装することで複数の属性と術式を扱うことができるミツルギさんだけの武器。ガンプレートの多様性と《補強》があれば、精霊の力がなくてもランクBの中位くらいの実力がミツルギさんにはあるはずです。だから……」

ポピラは戸惑っている。目の前で行われている戦闘の様子を見て。

「あの人、アギさんは何者ですか？　とてもランクCとは思えませ

ん」

火炎放射に氷の刃。

電光の剣に風の弾丸。

砂の壁はアギの視界を制限させ、足元からも沢山の《砂の腕》が殴りかかる。

襲い来る《竜巻》はまるで天災。

それらがたった1人だけを狙い、攻撃の嵐は青バンダナの少年を飲み込む。

圧倒的な力を前に息を飲む観客席の生徒たち。

「……笑ってるぜあいつ。試験なのに楽しむなよ」

「リュガ？」

リュガは笑っていた。

でもその拳は強く握りしめたまま。

（悔しいがあいつの力は思った通り俺以上だ。……いやそれ以上のはずだ。アギは自分の力をユーマで試していやがる。なら見れるはずだ。アギの本当の実力、ユーマの奴が引きだしてくれる）

青いバンダナの親友が実力を隠していたことは知っていた。

でもアギの『力の本質』をリュガは知っている。

それはひとつの幻想。

「リュガさん。私は彼に少しだけ体術を教えてもらいました。だからなんとなくわかります。……アギさんは戦士ではないのですね」

「アイリィ？」

エイリークは理解できなかったがリュガは頷く。

「その通りさアイリーンさん。アギは《盾》。あいつ自身が《盾》なのさ。アギは戦士じゃない。俺のような戦士達の《戦友》なんだ」

共に戦うには最高の相棒。だからこそリュガはアギに力の差をつけられて悔しくても、その力を見たいのだ。

＋＋＋

「ブソウ。ミツルギの力を見てどう思う？」

リーズ学園の自警部部長、ブソウ・ナギバ。

試合を観戦する彼に声をかけるのは、ブソウと同じ《番号持ち》である銀の甲冑を纏う赤毛の騎士。

「……想像以上だな。風と砂を使うとしか知らなかったからあのブースターらしきものには驚いた。いくつの属性を使った？」
「砂を地属性と考えると風、地、火、氷、さらに雷だ。報道部の情報だと水と光も使ったらしい。まるで大昔の魔法使いだな」
騎士は艶やかに笑った。騎士は女性だった。
「いや。いくら多様で万能でもお前やマークといった上位の魔術師達のように極めているとは限らない。見る限り近接戦、剣の腕は大したことはないようだ。これならば……」
「ブソウ」
騎士はブソウの言葉を遮り、彼を咎める。
「ミツルギを敵と判断するのは早い。もちろん敵対した場合は私も容赦しないし遅れもとらない。でもまずは彼を信じろ。ミツルギだけでなくその仲間達もだ。お前が気にかけてる彼も健闘しているじゃないか」
「……ああ」
「ミツルギは1人ではない。何かあったら彼らが止めてくれる。悪いようにはならないさ」
「……」
ブソウもそうだ思うのだが、思いたいけど頷くことができなかった。
「……これは俺個人の意見ではなく自警部部長としての意見なのだが、ミツルギの仲間は《バンダナ兄弟》と《旋風の剣士》がいる。この先ミツルギ達が騒動を起こさないといえるか？　お前がエイリーク・ウインディを信じることができるのか？」

「それよりもだな」

エイリークのことを、あの突撃してくる台風みたいな剣士の少女のことを騎士は『先輩』としてよく知っている。

（あの子も成長したけれど、もう少し落ち着いて欲しいものだな）

騎士は無理やり話題を変えることにした。

「ミツルギの相手をしている彼の力は何だ？　あれほど防御技術に特化した生徒は稀だ。代わりに攻撃手段を持たない。単体では誰にも勝てないぞ」

「勝てなくていい。あいつはそう考えているはずだ」

「何？」

「あいつの、アギの本領は『防ぐ』ことではない。対戦形式の試験でそれを発揮できるかどうかは疑問だが。……俺は自警部に過剰な戦闘力を求めていない。自警部が必要なのはあいつのような《盾》。あいつそのものだ」

「……いい後輩を見つけたね。君も」

それから2人は何も喋ることなくユーマとアギの戦いを観戦していた。

＋＋＋

ユーマはアギの四方に上下、どこからでも一方的に、多彩に攻める。

滅多打ちされるアギ。

ただユーマの攻撃は全て防いでいた。

「まだまだぁ！！」

アギにダメージはない。

＋＋＋

2－06b　盾の少年　後（前書き）

第2章前半のラスト

2－06b　盾の少年　後

＋＋＋

《幻想の盾》

無属性武装術式。それがアギの《盾》の正体。

不可視・無形のこの盾はゲンソウ術における基本的な防御手段である。どの盾よりも軽量で、どの術式よりも最速の発動速度を持つことが最大の特徴。

しかし術者のイメージが防御性能にダイレクトに反映される為、中途半端なイメージでは紙にも等しい盾にもなるので扱いづらい。

ないよりまし、緊急手段といった感じの術式である。

《幻想の盾》は弱い術式というわけではない。どの術式も結局は扱い方次第であり、ゲンソウ術の強さは基本工程の『幻想』、つまりはイメージの強さで決まってしまうのだから。

＋＋＋

アギは盾を使いこなす。アギの《盾》は決して絶対防御の盾ではない。彼は複数の盾を以て《盾》を構成している。

ユーマの持つガンプレート・レプリカはカートリッジを換装することで様々な魔法弾を再現することができる。

複数の属性を扱うユーマ。対してアギはその多様な攻撃の１つ１つに瞬時に応じて《盾》を選ぶ。

「燃えろ！」

薙ぎ払うような火炎放射には泥壁をイメージした横長い耐熱仕様の《盾》を展開して防ぎ、

「アイス・エッジ」

飛来する複数の氷の刃は凍結攻撃ではなく鋭さを活かした斬撃攻撃だと見切り、硬度を重視した大型の《盾》で受け止めて砕く。

「このおっ！」

近接戦を仕掛けるユーマ。ガンプレートは光る刃を放出している。

アギはガンプレートの刃から火花が散るのを見て、《盾》から金属のイメージを除外。小さな《盾》を両手に構えてユーマの《プラズマ・カッター》を受け流し、捌く。

「少しは剣の訓練しろよな。振り回すだけじゃ折角の武器も宝の持ち腐れだぜ」

「うるさい、よっと」

有効打を与えられないユーマは《風弾》で牽制しながら後退。もちろんアギは防ぐ。

「砂更！」

今度は砂の精霊を使役してアギの周囲に８本の《砂の腕》を出現させる。

戦闘ステージは今、砂の精霊の支配下にある。砂更に地形をコントロールさせ、その力を発揮させるためにユーマは序盤に戦闘ステージを《白砂の腕輪》の力で砂地に変えていた。

砂の腕はアギの足元を狙って掴みかかろうとするが、それは巧妙な足捌きと小刻みに動き回ることで躱されている。

「それなら合体パンチだ！」

ユーマの号令で砂の腕が１つになる。

巨大な砂の拳。サイズはアギを潰すのに十分どころではない。指１つだけでも人間１人分の大きさだ。それを容赦なくアギに向けて叩きつけた。

殴ると同時に崩れる巨大な砂の拳。その一撃を見て観戦席から悲鳴が上がる。

一撃を受け止めたとしても砂の質量に押し潰されて埋まってしまったと誰もが思ったが。

「ぐっ、重ぇよ」

アギは耐えた。《盾》の形状を半球状にして全身を覆うように身を守り、砂の圧力を上手く逃がしてみせる。

「てめぇ本当に容赦しねーな……って、げっ！」

ユーマは本当に容赦しない。砂更の次は風の精霊。

「風葉！」

「ぐるぐるぐるぐるー」

風属性局地範囲攻撃術式、《竜巻》。

「どかーん」

身体が半ば埋まった状態のアギはさすがに防ぐことができずに竜巻にのまれて吹き上げられる。

「うおぉぉーーっ！　ーーーーっと」

地面に向けて真っ逆さまのアギだったがすんなりと着地。

「ふぅ、あぶねぇ」

「……あれ？」

静寂。ユーマの常識外れの猛攻を目にして沈黙する観戦席と砂がクッションになって助かったと安堵するアギ。

そして首を傾げるユーマ。

「どうして？」
「お前、俺達がこれまで何回吹き飛ばされたと思ってんだよ」
『彼女』に関わるといつも旋風剣に巻き込まれる。最近のアギは、その打たれ強さに気付かれて剣の相手に付き合わされていた。
あの姫さんは俺の事を動くカカシと考えてるに違いない、アギはそう思う。
「……自慢にもならねぇがこのくらいなんともねぇよ！！」
アギは決して涙は流していない……はず。
「……そうだね」
吹き飛ぶのには慣れた自覚があるユーマ。
「慣れってー、こわいですねー」
「「……」」
風葉のセリフは2人を虚しくさせた。
「何よ」
ユーマとアギの会話が聞こえずとも、《直感》持ちのエイリークがこの一瞬の沈黙に不機嫌になったことを2人は知らない。
「それにな、お前の本命はわかってたさ。落とし穴は効かねえ」

「……ちぇ」

ユーマの本当の狙いはアギの着地と同時に砂地に沈めて埋めてしまうこと。

攻撃を完璧に読んだアギは足元にだだっ広い《盾》を展開して《蟻地獄》の仕掛けを塞いだ。

アギは複数の盾のイメージを持つ。

サイズ、形状、質量、耐性とあらゆる盾の特徴とその運用を研究して使いこなしているのだ。

その《盾》は決して万能ではない。選んだ盾の選択を間違えれば一撃で破られてしまうかもしれないのだから。

アギの《盾》は砕けないのではなくて盾を扱う技術で砕かせない。

ユーマの攻撃をことごとく防ぐアギの技量と経験。これまで積んだ彼の修練は計り知れない。

制限時間が半分を切る。

このままでは時間切れの前に精霊たちが消耗し尽くしてしまう。

そう判断したユーマは焦りを覚えた。

十十十

ユーマは盾というものを考える。アギの弱点を探していた。

盾とは矢などの飛び道具を防ぎながら近接戦に持ち込む為の防具であり、その近接戦では身体の半身を覆い相手の攻撃範囲を制限させる壁である。

盾に種類があるのもユーマは知っている。

盾は手に持つ防具タイプ以外にも敵の侵攻を防ぐ設置型の盾や攻撃に特化したスパイクのあるもの、鬼の面のような威嚇を目的としたものもある。

手持ち式でも素材やサイズで性能に一長一短があって皮や木のような『やわらかい』盾は刃を食い込ませて受け止めることが目的であるし、曲面を持つ盾は刃を受け流すのに適している。

小型の盾は体当たりや殴るなどの格闘戦に使えるが防御範囲が狭く、遠距離からの射撃や足元への攻撃に弱い。逆に大型の盾ならば至近距離では取り回しが悪くて邪魔になり、鋼鉄など重量のある盾は機動力に影響する。

アギの《盾》にはそれらの特徴がない。正確には用途に応じて盾が変化するのでユーマにはわからないのだ。

不可視の盾はサイズと形状を判別することが難しく、また視界を遮らない。

また、盾の変更と展開は自由自在でアギの動きに制限をかけない。だから面でしか防ぐことができない盾でも体術を駆使することであらゆる方向にも対応できる。さらに属性攻撃も防いでいる。

ユーマは考える。

（見えないから《盾》の特徴がわからなくて弱点が突けない。わかったのはアギは右手と左手の2つ、2面分しか《盾》で防ぐことができないことだけ。そうなると……）

《高速移動》で撹乱しても防御の隙を突けないのだから広範囲攻撃による力押ししか思いつかないが、精霊たちの様子からみて大技はあと1回ずつだけ。

「もう1つ手があった。試してみるか」

ユーマはアギの目の前に砂の壁を出現させると突撃。距離を詰める。

砂の壁で視界を塞いで《高速移動》で撹乱。このパターンは何か仕掛けがあるのかアギには通用しない。

「ネタ切れか？　無駄だぜ」

周囲を警戒するアギ。

ユーマだってわかっている。だからこそ一発限りの『仕掛け』になる。ユーマは突撃する。

アギの真っ正面。砂の壁を突き破った。

至近距離から銃口を突き付けられたアギ。咄嗟に右手を突き出す。

「――！？」

「閃光弾！」

ガンプレートから激しい光が弾ける。不可視の盾は視界を遮らずにアギの目を灼いた。

ユーマは被っている砂除けのゴーグルに付与された《遮光》の効果で閃光弾の影響を受けない。

「もらったぁ！！」

ユーマはガンプレートのカートリッジをスタンガンモードに換装。アギに電撃を叩きこむ。

だが。

「……甘ぇよ」

アギはユーマのガンプレートを掌の《盾》で受けとめた。

「えっ！？」

「甘いってんだよ！！」

右腕を打ち払われ体勢を崩すユーマ。アギはユーマが前に倒れ込む勢いにあわせてユーマの腹に膝を打ち込む。そして次の回し蹴りで吹っ飛ばした。

「あー目がイテェ。……油断したか？　体術がなってねぇぞ。そんなんじゃ氷の姫さんとどっこいだな」

「……どうして？」

涙を流しながら目を擦るアギ。ユーマは倒れたまま茫然とした。

「見えてなかったのはずなのに……」

「《気》の流れを読むってやつさ。ウロンのじーさんの授業、人気ないけどあれは大穴だぜ」

ウロン老師は学園最古の教師。《仙人》ともいわれる武術家だが、普段はミイラの置物と勘違いされるような御老体。

魔力ともゲンソウ術とも違う力の存在、《気》というものを後世に伝える数少ない使い手である。

「……ああ。あのおじいちゃん先生か。アギは選択取ってたんだね」

「まあな。最初は胡散臭かったし、今だってよくわかんねぇけど『見えないもの』がわかるのはいろいろと役に立つぜ」

それだけではなかった。アギの体術は老師が扱う型がベースになっている。

《気》の流れを読む技術と老師から学んだ体術。それはアギの《盾》を有効に活用させ、防御範囲の拡大に一役買っている。

ユーマが不意を突くことができた今回唯一のチャンス。それもアギは見事に防いだ。

＋＋＋

「さて。ぼんやりだが目も見えてきたことだし、そろそろいいか。……おいユーマ。お前何を考えてる？」

アギの質問にユーマは戸惑う。

「なんで？」

「らしくねぇんだよ。お前は精霊の力を見せびらかすような真似はしないはずだ。それを必要としない限りはな」

「アギ」

「ブソウさんから少しだけ話を聞いた。詳しくは聞かなかったが、お前が《Ａナンバー》、もしくは生徒会関連のいざこざに巻き込まれたくらいは知ってる。姿を隠していたのはそのためだな？」

「……」

ユーマは沈黙で答えた。構わずにアギは話す。

「そして今になってお前は姿を現してここで存分に力を使ってやがる。何かやる気だな？　そしてそのためにお前は……」

１度口を閉ざすアギ。推測が正しければユーマは……

「俺を利用した」

「――っ！！　アギ！」

動揺するユーマ。気付かれたくなかったことを知られて顔が歪む。

「ごめん」

「謝らなくていい。必要だったんだろ？　わけわかんねーけどな」

アギは笑って許した。自分をダシにしたことは怒りを感じていない。

だけど。

「ただな、俺達を信じられなかったか？　いくら試験期間中だったからってお前の力になれなかったわけはないんだぜ」

ユーマは答えない。

「ユーマ？」

「……知らなかったんだ」

擦れた声でユーマは喋る。

「この学園のこと。生徒会のこと。Ａナンバーのこと。……それに俺のことを」

「何があった？」

ユーマは詳しい事情を話さなかった。肝心のところだけ簡潔に答える。

「狙われたのは俺だけじゃなかった。アギも覚えがない？　最近襲

われたことあるでしょ。……あいつら俺の友達まで狙ってた。そしてティムスは……」

「本当か！？」

そういえば妹の方はよく見かけたが、あの天才少年を最近見ていないことにアギは気付く。

「今は大丈夫。でもあの時、アラム先生が遅かったならティムスは学園にいられなくなったかも知れない」

「……ちくしょうが」

ブソウに詳しい話を聞かなかったことをアギは後悔した。

そしてユーマも。

「俺のせいで皆が巻き込まれるのは嫌なんだ。でも犯人を見つけて殴って埋めるだけじゃ解決できないことに気付いた。それでも早く決着を付けたかったんだ」

アギは怒りを抑える。

ユーマが自分のせいだと苦しんでいたのがわかったから。今までそれを知らずにいてユーマを助けることができなかったから。

でも抑えられなかった。

それはユーマが助けを求めてくれなかったから。

「だから俺……」

「もういい」

「アギ？」
「結局てめぇは俺達を信じてくれなかったわけだ」
――辛そうな顔を見せる癖に誰にも頼らなかったのか？
「違う」
「ちがわねぇ。どうしてティムスのこと黙ってた」
――ブソウさんやポピラは知ってたのにどうして教えてくれなかった？
「それは……」
「ああ、そうだったな。何か事情があったんだよな。でも俺やリュガ、姫さん達が心配していなかったと思ったのか？　１人で勝手に決めて行動しやがって」
――仲間が傷つけられたからって怖じ気づきやがって……
「俺達を巻き込んで良かったんだよ。何も知らされずに蚊帳の外に置かれた俺達の気持ちをわかりやがれ」
――きっと皆がそう思ってるはずだ！！

アギは怒る。

歯痒いのだ。自分を頼らないユーマに。

許せないのだ。仲間を傷つけた犯人に。

悔しいのだ。力になれなかった自分に。

――何の為に俺はあの力を求めた？

「もういい。お前が俺達を信じず、仲間を頼らないなら信じさせるまでだ」

アギは右手をユーマに向けて《盾》を構える。

これっきりにしたかった。力を見せつけるような真似を。誰かを倒すために《盾》を使うことを。

「本気でこい。まずは俺の力を見せてやる。……制限時間はまだあるがルールを変えるぞ。お前は一発殴る、ユーマぁ！！」

それでも見せるしかないとアギは思ったのだ。《盾》は何のため

にあるのかということを。

「アギ……」

アギの叫びにユーマは黙り込んだ。そして左右に持つガンプレートと短剣を持ち替えるとイメージを《補強》するために呪文を唱える。

「集え、集え集え」

ユーマの両手の武器に風が集まる。

「集え集え集え！　風よ集いて螺旋を描け」

ユーマの周りを吹き荒れる竜巻は大量の砂を飲み込み砂嵐を生む。そしてガンプレートの銃口をアギに向けた。

「喰らえ喰らえ竜巻よ。砂を喰らいて血肉となせ！　化身するのは砂の魔獣……」

イメージするのはあの《西の大砂漠》で遭遇し、戦った魔獣の一匹。

「あの《盾》を喰らいつくせ！　サンドワーム・ブラストォ！！」

砂嵐を取り込み巨大な《ストーム・ブラスト》を撃つ。

《砂塵砲》は魔獣の姿に形を変えてアギを襲う。

その魔獣はかつてユーマを丸飲みにし、ユーマとアギの2人を砂漠の果てまで追いかけた全長十数メートル、頭には巨大な口しかない蛇のできそこない。

砂漠の竜蛇。

「てめぇ、よりにもよってそいつかよ!!」

アギの天敵、トラウマの相手だった。

「この、野郎がぁぁぁぁ」

この試合を見ている誰もが巨大な魔獣に飲み込まれ、喰われようとしている少年の姿を見た。

「……何だよ、あれ」

リュガは震えた。

アギが右手ひとつで魔獣の突撃に耐えている。

「まだよ!」

エイリークは気付いた。

ユーマの攻撃がこの程度で終わらないことを。

「ぐるぐるぐるぐるもっともっとー」

砂嵐は目くらまし。使った武器はガンプレートと砂の精霊の砂更だけ。

ユーマの最後の攻撃は力のすべてを出し切った2段構えの奥義戦闘。

「あああああ！！！」

《旋風剣・螺旋疾風突き》

ガンプレートを投げ捨て、風の精霊の魔力を残りすべて《守護の短剣》に注ぎ、ユーマは現時点で最強の一撃を放つ。

自分で生み出した魔獣の化身を尻尾から頭まで貫いてアギを狙う。

激突。

「嘘……」

アイリーンは自分が見たものが信じられない。

かつて彼女の持つ最硬の防御術式、《氷晶牢》を砕いたユーマの奥義をアギは、

左手ひとつで防いでいる。

＋＋＋

左手を突き出したのは咄嗟の判断だった。

砂でできた蛇モドキの圧力に必死に耐えていたアギがユーマの突撃に気付けたのは、《気》の流れが読めたというわけではない。その点はまだ未熟だったのだ。

まだ何かくる。アギはそう信じていたから左手を使わず温存することができた。ただ2撃目に気付く事ができたのは単なる勘であったけど。

アギに《盾》を選択する余地はない。だから最強の《盾》を選ぶ。

それはひとつの幻想。

幾千の刃を防ぎ

幾万の矢を弾く

（それは守るためだ）

手にすれば臆病になり

（そうだ。自分の身を守るだけじゃ駄目なんだ）

手にすれば勇気を得る

（違う。勇気を持って体を張るんだ）

アギはユーマの奥義を左の《盾》で耐えた。

唸りを上げる竜巻のドリル。でもユーマは《盾》を砕けない。

（信じろ）

アギは自分の盾を信じている。

（信じてくれ）

ユーマに自分の盾を信じてもらいたかった。

（俺の《盾》は、俺は！）

それは守るモノ

アギの《盾》は結局のところひとつだった。大きさも形状も実は関係ない。

概念での盾はただひとつ。

アギの《盾》は『守ると決めたものを傷つけさせない』という理想である。

その盾は《砂漠の王国》にいる王のかたちをしている。

アギの『幻想』は昔守ってくれた王への憧れ。アギは憧れと理想で戦う道を選び、守る戦いをはじめた馬鹿野郎である。

アギの《盾》は砕けない。

「どうして？」
「負けたくねぇんだよ」
「なんで砕けない？」
「ここで負けたらお前は信じてくれない」
「アギ？」

アギの《盾》は強い。

守るという想いはエイリークと同じようにまっすぐで、《盾》に重ねる理想の高さはアイリーンの目指すそれに劣らない。

そしてユーマが2人の兄を追いかけるようにアギもまた王の背中を追い続け、今も《盾》を鍛え続けている。

盾はアギという少年そのものだった。

アギは強い。そして今、ここでユーマに負けてしまったらこの親友はこれからも1人で戦い続けるとアギは思ってしまった。

だから。

「俺に！　ダチを！　守らせやがれ！！！」

アギは守ることをやめた。

アギの《盾》はただの盾ではない。一点に集中した掌の《盾》。

盾は掌だ。その《盾》はユーマの短剣を『掴む』。

「なっ！？」

ありえないとユーマは驚く。アギは短剣を握りしめて竜巻の回転と勢いを止めようとする。

「やめろ！　手が」
「なめんな」
ユーマはアギの手を抉り、吹き飛ばすことを恐れて怯む。
それが均衡を崩した。
「馬鹿野郎が！！」
短剣を掴んだ左手でユーマを引き寄せると、アギは右の拳でユーマの顔面を全力で殴った。
竜巻が弾け、砂嵐が止む。
風葉は半透明の姿で目を回して落っこちて、砂更も同じく半透明で体の半分を砂に沈めていた。
立っているのはアギだけ。ユーマは叩きつけられ砂地に沈んだ。
「起きてんだろ？　どうだ？　これが俺の力だ。わかったか！」
「……ぷはっ」
砂に埋まったユーマは起き上がる。そしてアギの左手を見た。
アギにダメージはない。

「……はは、まいった」

ユーマはそれだけ言うと仰向けになってもう1度ぶっ倒れた。

アギ、完勝。

ランクCの生徒が1対1の対戦でランクAを相手に勝つことは、学園では数十年ぶりの快挙だった。

＋＋＋

「さあ、とりあえずお前の悪だくみを聞こうか」

アギはユーマを連れて控室に戻ると尋問を開始した。

ユーマは正座中。自ら座り込んだのは身体に染み付いた習慣だった。

御剣家というよりユーマの姉の説教は正座からはじまるのだ。

「……というわけです」

「この馬鹿が」

ユーマはすべて話した。今までのこと、今からやることすべてだ。

話を聞いたアギが安心したことは1つ。

それはユーマには協力者がいたこと。1人ではなかった。

「そういやエルド妹やブソウさんは知ってたもんな」

「ブソウさんにはお世話になったよ。アギの事も聞いた。焼きプリン事件とか」

「聞かんでいいわ！」

ユーマは頭を叩かれる。

そしてアギが不満に思ったことが1つ。

「俺にできることはないんだな？」

「うん。これだけは『俺達』で決着をつけたいから。そのためにいろいろ準備してきたんだ」

それはアギ達がユーマの作戦に入る余地がなかったことだ。

「でも何が起こるかわからないから」

「わかった。その時は守ってやる。頼りにしろ」

アギはそれだけ言って先に控室を出た。

「……ありがとう」

ユーマの呟きはアギに届いた。

＋＋＋

気にするな。そう思いながらもユーマを気の毒に思うアギ。速足で控室から離れていく。

「すまん。『今回』だけはお前を守れそうにないんだ」

アギはユーマに必ず訪れるであろう災難が怖くて逃げていた。

「そうですね」

「おわっ！　びっくりしたじゃねぇか」

いつの間にかアギの隣にはポピラがいた。

「馬鹿ですね」

「お前にとってそれは挨拶か？　挨拶なんだな!?　……そのデコどうした？」

ポピラの額は赤くなっている。

「ミツルギさんと兄のことを黙っていたから共犯だと制裁を受けました。……エイリークさんのデコピンは痛いです」

「あー」

その程度でよかったじゃねぇか、とアギは言うのをやめた。睨まれそうだ。

「ユーマの奴、生きてるかな？」
「私は風葉ちゃんが無事ならかまいません」
「……」

今頃ユーマはエイリーク達による制裁を受けているはずだ。地下にある控室は出入り口を塞がれたら逃げ場がない。

アギはもうすっきりしたから参加する気はない。彼女たちを止める気はもっとない。

「リュガ1人じゃ止めるのは無理だな」
「斬殺されて氷漬け、砕かれて氷漬け、ですね」
「自業自得だから仕方ないよな」
「そうですね」

時折遠くから叫び声や壁を伝ってくる振動で建物が揺れていることがわかったが、アギは深く考えないようにした。

＋＋＋

２－０６ｂ　盾の少年　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

試験開始の１０日前。１人の生徒に勝負を挑まれたユーマ。

彼は《竜使い》。２年生ながら９番目の《エース》だった。

《皇帝竜》の力に苦戦するユーマ。そしてユーマの前に次々と現れる《Ａナンバー》たち。

次回「放課後にて　２」

2－07　プロローグ－決戦（前書き）

第2章後半、ユーマ編です

2―07　プロローグ―決戦

＋＋＋

もうすぐ地球という世界は壊れてしまう
ぼくの小さな世界が壊れたように

＋＋＋

地球を壊して人を滅ぼすのは人なんだとぼくは学校で教わった。
人は地球の資源を食い潰す生き物だ。
森を切り崩しては海を汚し、動物たちの住む場所を奪って見殺しにした。
人は世界戦争というものを何回か繰り返した。
死ぬのは人。壊れるのも人。それと地球。
人は人の為に人と争い、人の住む場所を壊していく生き物だった。

でもそんなことぼくには関係がない。

ぼくの生きる世界はぼくの家と学校のあるこの町の周辺と家族と友達、その他の人たちでできている。

ぼくの世界は平和なんだ。

そう思っていた。

地球を壊して人を滅ぼすのは人ではなかったんだ。

それは星を壊すイキモノたち。

地下から怪獣が現れた。

ぼくの学校を踏みつぶした。

空から宇宙人が降ってきた。

ぼくの町をビームで焼いた。

地球を狙う侵略者。世界がやつらに壊されていく。

ぼくの世界も。

異次元から化物がやってきた。

そいつがぼくの家を……家族を壊した。

ぼくの、世界を……

ぼくだけが生き残った。今は助かった人たちと一緒にただ必死になって逃げている。

夜なのにあかくあかるい。

町が燃えている。

ゆるさない。

ころしてやる。

悔しくて悲しくて許せなくてぼくは必死に走った。

そしてとまった。

家や学校なんかよりも大きな怪獣。

手も足もひょろ長くて顔のない宇宙人。

眼がいくつもあって昆虫みたいな化物。

ぼくの前に現れた、ぼくの世界を壊したイキモノ。

「ああ……」

怖かった。

戦車の大砲も、戦闘機のミサイルも効かない怪獣たち。

もう駄目だと思った。膝に力が入らなくて座り込んでしまった。

空から星が降ってくる。

きっとあれは宇宙人たちの攻撃だ。地球にある沢山の世界が壊されていくんだ。

「いやっ、来ないで！」

女の子の悲鳴が聞こえる。化物がぼく達に近づいてくる。

ぼくには何もできない。

無力なぼくは星が降る空を見上げるだけ。

「助けて、誰か助けて！」

誰も助けてくれないよ。ぼくはそう思いながら流れ星を見る。

綺麗だなと思った。これが現実逃避ってやつだなとも。

……そういえば流れ星に願い事をすると、その願い事が叶うって誰かが言っていたかな？

だったら……

「お願いします」

空に向かって呟いた。

家族が死んでしまって友達も無事かわからなくて、絶体絶命のぼくだけど。

「助けてください」

怪獣たちを前にして、生きることを諦めてしまったぼくだけど。

「お願いします」

もし叶うのなら……

「守ってください」

まだ壊れていない誰かの世界を。

「地球を守ってください」

星に願った。

――そこまでだ

突然のことだった。

ドカーン！　という激しい音と地響きがして、ぼくの目の前に星が落ちてきた。

「……え？」

星は人のかたちをしていた。逞しい身体をした光り輝く銀色の戦士。

星はぼく達を守るように背を向けて怪獣たちと対峙する。

これがぼくと「彼」の出会い。彼の地球を守る孤独な戦いのはじまり。

ぼくの願いを叶えに来た流れ星。

彼の名は……

＋＋＋

ブチッ

「「「あー！」」」

振り返る3人の少年。見るとテレビのリモコンを持った少女が1人。

「何するんだよ姉ちゃん」

優真は姉を睨みつけるが、その姉は気にせずに2人の幼馴染に質問する。

「何をしてるの？　2人で優君の勉強を見るって言ってたじゃない」

優花はまず大和を見る。

「いやな、優真の奴が最近の特撮ヒーロー物はつまらないっていうものだから……」

「だから？」

「すいません」

大和はここで優花の重圧に負けて折れた。正座。

「こうちゃん？」

黙る大和に詰問するのを諦めて、優花はもう1人の幼馴染に聞こうとしたが。

「……だから言っただろ。俺は改造人間シリーズの方がいいって」

「馬鹿が。優真が言っていたのはこのシリーズだ。こいつの良さはやっぱり初代の奴だろ。それにこの劇場版のディスクを持ってきたのはコウ、お前じゃないか」

「……まあな。俺もこの作品は好きだが、やっぱり秘密ギミックで

満載のあっちの方が俺はいい」
「てめぇ！　全身武器のあの野郎のどこがいいんだ？　男なら身体張った肉弾戦だろ。あとビーム！」
「お前だってロケットパンチは大好物だろうが！！」
「兄さんたち落ち着いて！　姉ちゃんが切れる！」
光輝は無視して大和と言い争いを始めた。
でもって優真はしっかり正座している。
「……もういい。夜姉さんと陽香さんを呼ぶ」
優花は最終手段をいきなりとった。携帯電話に手をかける。
「待て！　師匠はマズイ」
「陽香さんまで！？　俺達に何をさせる気だ？」
「こうちゃんたちも夏休みの宿題まだでしょ。私は手伝わないから2人にお願いするの。……逃がさないでくださいって」
「大和！！」
「おう！！」
その言葉で2人は逃げた。師である義姉とその親友の組み合わせから余程おそろしい目にあうと思ったらしい。
「もう。それで優君、宿題は終わったの？」
「自分の部屋でしてきます！！」
優真も逃げた。

「まったく、これじゃ私が追い出したみたいじゃない。……ドラマの再放送でも見よ」

優花は冷蔵庫からアイスを取り出すと、リビングのテレビを独占した。

「……はぁ。宿題終わったら続きを見よっと」

ユーマこと優真のとある日の思い出

すこしだけ昔の話

＋＋＋

プロローグ

＋＋＋

ユーマはこの時を待っていた。彼の目の前にいるのは《Ａナンバー》の１人、《竜使い》。

「わざわざ《幻創獣》で勝負するとはな。奇策のつもりか？　いくらお前が万全でも、ボクの《皇帝竜》にはかなわないよ」

「いーや。万全ならお前なんか楽勝だよ。俺とアギの試合、見たんだろ？」
「ぐっ」
《竜使い》の彼も気付いている。《精霊使い》と正面からぶつかれば必ず負けてしまうことを。
ユーマは挑発する。
「今のぼろ雑巾みたいな俺が相手してもいいけど、それで俺が勝ったらアンタがかわいそうだろ？　お前の土俵で戦ってやるんだ。ありがたく思え」
はったりだった。
アギとの試合で予想以上に消耗したユーマ。さらにエイリーク達によって冗談ではなく再起不能一歩手前までやられてしまった。
《幻創獣》で対決することは予定通りだが、ここで中断されてルールを変えられると計画が無駄になってしまう。
ユーマの目的は竜殺し。
《竜使い》の《幻創獣》を同じ幻創獣で倒し、彼の力を無力化すること。
「……後悔するなよ」
「そっちこそ」

対決する2人は1度下がった。

「大丈夫か？」

セコンド役の少年がユーマに問う。

「大丈夫さ。所詮ゲームだよ。こんなものが強さだと勘違いして力を振り回す奴らなんかに負けない。……亡くなったティムスの仇は俺が討つ！！」

「おい。俺を勝手に殺すな」

セコンド役の少年ことティムス・エルドは眉間に皺を寄せてユーマを睨む。

「冗談だよ。緊張をほぐすためのね」

「まあいい。わかってるか？」

ティムスは拳を突き出す。

「わかってる。『俺達』で勝つ、だろ？　任せろ」

ユーマはティムスの拳に自分の拳をぶつけた。

＋＋＋

再び対決の場に立つ、《竜使い》と《精霊使い》。

《竜使い》が想造する《幻創獣》はもちろん《皇帝竜》だ。彼は竜を《現創》したことでエースとなったのだから。

対するユーマも自分の《幻創獣》を想造する。

「皇帝竜に敵う幻創獣なんていない」

「《カイゼル・ドラゴン》なんて子供っぽくカッコイイ名前なんてつけるなよ。お前のそれは所詮怪獣だ」

「お前に倒せるものか！」

ユーマの易い挑発に乗る《竜使い》。

「俺が倒すんじゃないよ。怪獣退治はヒーローの仕事だ」

ユーマは自分の幻創獣の名を呼んだ。

「こい、コメットマン！」

銀色の光がユーマの目の前に落ちてきた。

ドシーン！　という衝撃と地響きは会場を揺らす。

「なっ、《隕石落とし》の術式！？」

「違う。ヒーローは格好よく登場しなきゃ」

土煙の中に隠れているが、そこにユーマの幻創獣がいる。

「さあ、やろう。ヒーローショーの始まりだ」

ユーマはこの時を待っていた。敵はもう逃げも隠れもできない状況にいる。

あとは正々堂々と殴って埋めるだけ。

＋＋＋

2－08　長い放課後　2（前書き）

ユーマと《竜使い》

2－08　長い放課後　2

ユーマと《竜使い》の因縁は試験開始の１０日前まで遡る。

＋＋＋

その日の放課後。ユーマは練金科棟にあるエルド兄妹の研究室にいた。

天才錬金術師、ティムス・エルドはユーマのアイデアから『おもちゃ』を作ることを日課としていたのだ。

「この《バズーカ》てやつは簡単にいえば手持ち式の大砲なんだけど、こいつはカートリッジ式だから弾の詰め替えが簡単で連射できるのが特徴かな」

「大型のガンプレートなのか？」

「いや、弾の方に術式を組み込んで着弾時や時限式で発動できるようにするんだ。遠くへ弾を撃ち出すのがバズーカの機能。爆発系や散布系の術式と相性がいいはずだよ」

ユーマのイメージを封入した水晶球を見ながらティムスは質問を続ける。

「この網がでるやつは？」

「ネットガン。捕獲や罠に使うやつ。最近落とし穴ばっかりで芸がなかったから」

「この前作ったトリモチガンと同じ扱いか」
「まあね。これに雷の術式を付与すれば電磁ネットになるから感電による無力化も期待できる。ポピラなら《電撃》の術式を構築できるでしょ？」
「成程な。《雷陣》と同じ効果が望めるな。伝導率の高い鋼糸を使うべきだな」

ユーマはティムスにアイデアを提供するついでに自分が使っていた道具の再現を試みている。

「網は最高だね。兄さんはこれに油を染み込ませたやつを使うんだ。捕縛した奴を一気に燃やせ、って」
「誰だよ、その鬼畜」

呆れるティムス。

その彼から離れた所ではティムスの双子の妹がブースターの調整をしていた。

肩に小さな風の精霊を乗せて。

「ぶおー、ふよふよー、て風にのるんですよー。でもときどきふおふおー、びゅーとなりましたねー」

風葉は独特の表現で試作ブースターの感想を伝える。

「……なるほど。そうなると《風乗りの外套》は１０日では完成しませんね。でしたら《陽炎の外套》を完成させましょう。風葉ちゃん、手伝ってくれますか？」

「まかせてくださいー」

ポピラ・エルド。彼女は風葉が認める唯一の理解者？　らしい。

「なあティムス。どうしてポピラは風葉のあれが理解できるんだ？」

「風の術式は風の精霊に聞けばいいと言ったのはお前だろうが。……ったく。ポピラはな、《同調》の特性持ちなんだよ。だから言葉でなく感性で理解できる。精霊の波長に合わせることができるなんて俺も知らなかったけどな」

他人の精神状態を正確に理解し、波長を合わせることに長けた《同調》スキル持ちの術者は稀少である。

ポピラの場合、補助術式を構築する際にこのスキルで個人の癖を理解し、相手に合わせた細やかな調整を可能にしている。

もっとも、高度な術式の分析と、解析してＩＭ化する能力は彼女の別の才能ではあるが。

「へぇ。でもティムスだってすごいじゃないか。あれだろ？　サイコメトリー」

「《解読》だ。変な呼び方するな。こいつはイメージを『読み取る』以外に使い道ねぇんだよ。おまけだよおまけ。俺は錬金術だけで天才なんだ」

ティムスの能力は他人のイメージした物体のかたちを読み取る《解読》と《錬金術》である。

錬金術の中でも彼は金属を変形・変成させることが得意であり、単一の金属で物を作るならば一瞬でイメージ通りに創造してみせる。

もちろん物質の合成や補助術式の付与など、他の技術も優れているティムスは《天才》の名をその高い能力で証明している。

「そうかな。思念を読めるのなら他にも使い道がありそうなのに」

「俺達のような特性は碌なもんじゃねぇんだよ。他人の心を読むような力なんていらなかったんだ」

「……ごめん」

過去に何かあったのだろう。そう察してユーマは口を噤む。

「謝んな。まあ、これのせいで他人と余り関わりたくなかったのは本当だが。……それとは別でお前には感謝してるんだ」

ティムスは近くで作業している妹の方を見る。

ポピラは表情の変化に乏しいのだが、兄の目から見れば小さな精霊と楽しそうに仕事をしているのがわかる。

（ポピラの持つ《同調》はきっとガキの頃から精霊との対話を望んだあいつの願いのかたちなんだろうな）

忌々しく思っていた特性を望む形で使うことができた妹を、少しだけ羨ましく思うティムス。

ティムスとポピラはそれぞれ『創りたいもの』がある。それは彼らの夢と呼ぶべきもの。

最高の環境を得るために飛び級までして学園で研究を続ける兄妹。

その夢に辿る道を探し続けるが、3年経っても足掛かりが掴めなくて2人は半ば諦めかけていた。

精霊を連れた少年が奇妙な形をしたブースターの製作を依頼するまで。

「おかげで新しいアイデアが生まれる。お前のガンプレートは俺達にブースターの拡張性を示してくれた。だから……」

――ありがとな。これからもよろしく頼む

とは言えなくて。

「《レプリカ2》の実戦データ、早く用意しろよ」
「わかったよ」

ユーマはその日、ここでティムスと別れた。

＋＋＋

「ユーマ・ミツルギだな」

寮への帰り道。呼び止められたユーマ。

「ん？　誰」

覆面を被った見るからに怪しい人が４人。

「……制服くらい着替えろよ。怪しすぎ」

「一緒に来てもらおうか」

突っ込みは無視された。

「なんで？」

覆面達は答えない。

「いやだと言ったら？」

覆面達は一斉に構える。前に突き出した腕には揃いの腕輪を身に付けていた。

「はぁ……。突然拉致されないだけましか。砂更！」

巨大な砂の腕を出現させて真横に振るうユーマ。突然の攻撃に覆面達は不意を突かれ、なす術もなく打ち払われて壁や地面に叩きつけられる。

「本当最近多いよな。いい加減にしてくれよ」

あっさり撃退したユーマ。とりあえず覆面をはがして埋めることにした。

「認めないぞ。……お前がユウイ様の代わりにエースになるなんて……」
「どういうこと？」
覆面の呟きにユーマは思い当たることがない。ただ最近襲ってくる連中の一味だなとそう思った。
「それはですね、君を《Ａナンバー》に推薦する話があるからですよ」
「ユウイ様」
「誰？」
ユーマの前に姿を見せるユウイと呼ばれた男は覆面をつけず素顔を晒していた。
癖のある金の髪を丁寧に整えており、ユーマに向ける青の瞳はやや見下した感じで好ましいものではない。
「はじめまして。《精霊使い》のユーマ君。ボクはユウイ・グナント。《Ａナンバー》の１人、《竜使い》さ」
「それで？　この覆面変態達の親分は何の用？」
別にユーマは《Ａナンバー》や《竜使い》の名に関心はない。ただはた迷惑な奴らだという印象が強かった。
「変態！？……まあいい。彼らはこれでも一般生徒です。何かある

とボクでは庇いきれないので」
「なら制服着替えさせろよ。ただでさえ人を襲う真似してるんだ。馬鹿だろ」
「ぐっ……」
ユウイは覆面達を睨みつける。お前たちのせいだ、と。
「とにかく。君とは1度話がしたかったんだ。一緒に来てくれないか」
「いや、人気のない夜道で襲っておいてそれはないだろ。もういいよ。話はまた明日ね」
ユーマは相手にせず帰ることにした。さわやかな笑顔が不自然なユウイ見て、正直相手にしたくなかった。
「待ちたまえ。《エース》であるボクが君に話があると言ってるんだ」
「俺にはないよ。じゃあ」
「……このボクの話を聞かないだと？　ポッと出の格下のくせに」
相手にされないことがユウイのプライドを傷つけた。彼は自分本位に物事を考える人間だ。
「そうか。穏便に話をつけようと思ったけど君はそんな態度をとるんだね。ならば後悔しろ。《皇帝竜》！」
ユウイは身に付けた、覆面達と同じ腕輪に向けて叫ぶと腕を振るう。
地面に描かれる魔法陣。現れるのは黒い塊。

「何だ？　魔獣を喚んだ？」
「ははははは。何を言ってる。これは《幻創獣》。ボクの力。ボクだけの竜だ」
２階建ての建物程の大きな黒い塊は徐々に姿を変えていく。
漆黒の鱗に覆われた巨躯。巨大な尻尾と翼を持ち、角や爪は黄金に輝く。
「グルァアアア！！」
咆哮。
２本の足で立つその魔獣は、ユーマはゲームやテレビでしか見たことがない。
それはファンタジーな世界では最強と呼ばれるような存在。
ドラゴン。
「というよりも怪獣？」
「やれ。カイゼル！」
黒い竜はその巨大な足でユーマを踏みつける。
「危なっ。人がいないっていってもこの辺はまだ市街地だぞ」

ユーマは《高速移動》で回避。

「思い知らせてやるよ。《精霊使い》。エースに相応しいのはこのボク、《竜使い》だってね」

《皇帝竜》は鋭い爪を持つ腕を振るい、尻尾を叩きつけユーマを襲う。

「正気かよ。通報されたらどうする気だ？　……砂更、あれは魔獣なのか？」

「……」

豊富な知識を持つ砂の精霊に訊ねる。

砂更はこのあたりに存在する魔獣ではない、おそらくゲンソウ術の産物だとユーマに伝えた。

「わかった。近所迷惑だ。術者を一気に叩く」

ユーマはそう言うと薙ぎ払う竜の尾を《天駆》で飛び越え、ユウイに向けてガンプレートを抜いた。

「ストーム・ブラスト」

《皇帝竜》に自信を持ち、高みの見物と決め込んでいたユウイは突然攻撃されたことに驚き慌てる。

「ユウイ様！」

襲い来る竜巻の奔流。直撃するはずだった《ストーム・ブラスト

≫は、ユウイの前に立ちふさがった何かに防がれた。

「お、おおお遅いぞ。お前たち」

「すいません。幻創獣の《想造》に時間がかかりまして」

それはトカゲの頭に盾と剣を持つ戦士。

その隣には人とは違う骨格の骸骨の兵士。

「リザードマンにドラゴントゥース・ウォーリアー？　モンスター、だよな？」

ユーマは実際の魔獣を見たことがあるが、目の前にいる怪物たちは明らかに違う。生物らしくないのだ。

「それこそゲームじゃないか。うわっ！」

空から降って来た《火球》。見れば翼を持ち空を飛ぶ竜のようなモノが2体。

「ドレイク？　それともワイバーン？　マズイ、上をとられた」

「ははは。見たか。これがボクの《騎士団》。グナント竜騎士団の幻創獣たちだ」

ユウイの周りを固めるのは覆面達。彼らも術者のようだ。

「わかっただろ。お前はこのボクには敵わない。だからボクを差し置いてエースになろうなんて考えはやめることだな」

正面に《皇帝竜》を含めて3体、そして上空に2体の竜を模した

怪物が立ちはだかる。

ユーマはこの追い込まれた状況に訳が分からない。

（いきなり襲われるわ、ドラゴンもどきは出てくるわ。エースがなんだって？　一体何なんだよ）

「一斉攻撃。とどめだ。カイゼル・バーストォ！！」

皇帝竜が口から放つ赤い熱線。同時に火球が放たれユーマを襲う。

「くっ、風葉、砂更！」

周囲を《旋風壁》、正面の熱線を砂の壁で凌ぐが突破されるのは時間の問題。

火球はともかく、風や砂では熱線のエネルギーを相殺することができないのだ。

「しぶといじゃないか。でも皇帝竜は最強だ。レベル２の必殺技をくらえ。カイゼル・メガフレア！」

皇帝竜の正面にエネルギーが収束。特大の炎の塊となる。

「バッ」

――バカ野郎！！

ユウイは自分の竜の姿に興奮して周りを見ていない。人気がない離れの場所でもここで巨大な火球が爆発したら甚大な被害が出る。

ユーマは回避する選択肢を選べない。受け止め、相殺させるしかなかった。

覚悟を決めガンプレートを皇帝竜に向ける。

「消えろ。精霊使い！！」

皇帝竜の必殺技。

その巨大な火球が放たれる瞬間――

「……斬る」

刃を振るう黒い影。

「なっ！？」

ユーマは驚いた。

切り裂かれたのは巨大な炎の塊。《カイゼル・メガフレア》の発動を『斬り伏せ』、強制的に無効化（キャンセル）したのだ。

「何？　貴様は……《黙殺》！」

「そこまで」

《黙殺》は黒いローブ姿にデスサイズを持ち、まるで死神のような出立ちをしていた。

「……エースの私闘は禁止。それにまだここはリーズ学園のエリア内。被害を出すわけにはいかない」

フードを目深に被り、顔が見えない。声からして女性のようだ。

「ちっ。説教ですか。『元エース』の分際で。貴女なんかに用はないんですよ」

「……そうね」

「用があるのは俺だ」

ユウイの前に現れた《十人兵》が彼らを囲む。

それを統率するのは自警部部長、ブソウ・ナギバ。

「グナント、私もいるぞ」

ブソウの隣に立つ赤毛の騎士は剣を抜き刀身に炎を疾らせる。

彼女もまたエースの1人。

《烈火烈風》

「《黙殺》を呼んだのは俺だ。お前が本気を出せば周りが火の海になるからな」

「これ以上暴れるなら私達も参戦するがいいか？」

「……何の用ですか先輩」

ユウイは渋々だが話を聞く。自警部を敵に回し、5人でエース級を3人も相手にするのは無理があった。

「何をしていた？」

「何も。強いて言うならば指導ですよ指導。未熟な生徒の指導も《エース》の役目でしょう？」

ブソウの問いにユウイは平然と答えた。

「お前の態度と行動は色々と問題がある。エースの自覚と誇りを持て。剥奪されても仕方ないぞ」

「冗談でしょう。ボクは生徒会長推薦の、正真正銘のエース。そこの《黙殺》さんのように罪を犯して資格の剥奪なんてされませんよ」

ユウイは嘲笑う。

ボクはコイツとは違う、と。

「貴様！」

「……やめて」

騎士は剣をユウイに向けようとする。しかしそれを《黙殺》は騎士の腕を掴み、止めさせた。

「……（ふるふる）」
「しかし、お前は！」
「いいの。本当の事だから。でも……」

《黙殺》はユウイを見る。

「私の後釜にしてはとても……残念」
「何だと！？」

声を荒げる《竜使い》。《黙殺》はただ静かに彼を見据える。

「……あなたは何故エースになることを選んだの？　……いいえ。どうしてエースに『選ばれた』の？」
「力さ。ボクには竜という力がある。ボクの《皇帝竜》はもちろん、ボクが『幻創獣で創られた竜』を与えてやれば誰でも簡単に力を得ることができる。ボクの《騎士団》がＡナンバーの中で最大の勢力を持ってるのがその証拠だ。これだけの力を持って学園の頂点たるエースに選ばれるのは当然じゃないか」

「「「……」」」

３人は黙った。《竜使い》である彼の主張は受け入れられない。

「……何だよ。お前らボクのことを認めないのか。ボクの竜の存在を認めないのか？」

ユウイの肩が怒りで震える。

「グナント」
「黙れ！　認めないなら見せるしかないだろ。やれ、カイゼル！！」
吼える黒い竜。それに合わせてユウイの手下である覆面達も幻創獣に攻撃の指示をする。
「ブソウ。私にやらせろ。あの餓鬼には灸を据える必要がある」
騎士は自身の周囲に風を起こし緋色の剣を構える。
「俺もやる。これは自警部の管轄だ。奴を捕らえる」
ブソウは《十人兵》を下げて《十騎兵》を前に出す。
「……大技は私が斬る」
《黙殺》は自分の役割に徹することにした。
一触即発。
「あー！！！」

少年が吼えた。

「「「――！？」」」

振り返るブソウ達。見るのは黒髪の少年。

「砂更！」

ずしゃぁあああ

盛り上がる地面。

「ぶっ飛べ！！」

突きだす巨大な砂の拳。

強力なアッパーカットにリザードマンの幻創獣が宙を舞う。

「……もういい」

ユーマは切れた。

「黙って聞いていても全く状況がわからない。仲裁に来てくれたと思えば喧嘩をはじめやがって」

巻き込まれたのはわかった。でも誰も説明してくれないし事態は悪化する一方。ユーマは被害者として勘弁してほしかった。

沸々と湧き上がる怒りを誰にぶつけてくれようか。

「とにかく埋めて黙らせる。話はそれからだ」

＋＋＋

2－09　自警部（前書き）

ユーマＶＳ《竜使い》。第１回戦。

209　自警部

＋＋＋

反撃開始。

ユーマはリザードマンを殴り飛ばしたあと、砂の腕を風で分解して《砂塵》を生み出す。

未知の敵を前にして有利に戦う為には相手のペースに乗らないことが重要だ。

ただでさえ1対5という状況。（ブソウ達は中立と判断した）ユーマは《全力》で押しきることにした。

「まずは空を飛んでるヤツ。浮いてるわけじゃないんだろ。落ちろ！」

砂塵の竜巻に飲まれ、暴風に翻弄される2体の飛竜。視界を遮られた覆面達は幻創獣に指示を出せないでいる。

「セイッ」

ユーマは《守護の短剣》を逆手で一気に抜刀。振り上げる。

《風閃刃》

鋭い風の刃が一閃。

居合いのイメージで放たれるカマイタチは上空にいる飛竜の翼を容易く切り裂いた。

「砂更！」

竜の牙でできているといわれる骸骨兵の足を砂の腕が掴み、地面へ引きずり下ろす。

「骨は埋まってろ」

竜牙兵はジタバタと抵抗するが砂の腕が引きずる力の方が強く、容赦なく地に沈む。

瞬殺。耐久値を上回るダメージを受けた４体の幻創獣は姿を維持できずに霧散した。

「あとはアンタだけだ。まだやるか？」

ガンプレートをユウイに向ける。

「……フン。そのくらいで勝ったつもりか？　カイゼル・バースト！」

皇帝竜が再び熱線を放つ。ユーマは《ストーム・ブラスト》で対

抗。イメージを追加して《補強》する。

「喰らえ、喰らえ竜巻よ。砂を食らいて血肉となせ」

大量の砂を飲み込み、１匹の砂の魔獣へと化身した《ストーム・ブラスト》は、熱線をその巨大な口で喰らいながら黒い竜へと襲いかかる。

「喰らい尽くせ、サンドワーム・ブラスト！」

ぶつかり合う竜蛇と皇帝竜。

「竜だと？　いや違う！　そんな砂の化物に皇帝竜が力負けするはずない！」

「これでも押しきれない。それならっ」

均衡状態を打ち崩すべくユーマは『増設』されたガンプレートのスロットにカートリッジを差し込む。

エルド兄妹によって改造・調整された新しいガンプレート、《レプリカ２》は２つの機能が追加された。

１つはガンプレート本体に風属性の属性強化が付与されたこと。ユーマの主力である風葉の魔法を補助する本来の《ブースター》としての機能が加えられた。

もう１つはツインカートリッジに変更したことだ。

これによって火、水、雷のような『属性ＩＭ』と斬撃、放射、爆破などの『術式ＩＭ』の組み合わせによる複数の魔法弾を扱えるようになった。

ただし、既知の術式ならばユーマは属性ＩＭのみで魔力弾を再現することができる。複雑な機能を追加したのは、《レプリカ２》がユーマ以外の誰でも扱うことができることを目的とした量産型の試作品だからだ。

そして《レプリカ２》だからできることもある。

「オーバーブースト！！」

ブースターとはイメージ補強の為のアイテムであるが、用途によって組み込まれる補助術式が違う。例えば属性の威力増加、発動速度の強化などで。

そしてブースターは特定の術式の発動を補助することに特化した《インスタント》などの派生形も存在する。ユーマが追加して差し込んだカートリッジは《イグナイター》と呼ばれる魔石を使用することで術式の威力を瞬間的に増幅させるものだ。

《レプリカ２》は魔法弾の換装に加えてブースターとしての機能の追加・換装を可能にした。

大気が爆発する爆音が響く。

勢いのついた砂の魔獣の突進が少しずつ皇帝竜を押していく。

「ま、まさかぁ……」

「いっ、けぇーーーっ」

そして――

「……斬る」

斬。

死神の鎌が竜蛇の首を刈り取る。

魔獣の化身は崩れ落ち、強制的に砂に戻された。

「なっ？」

「《黙殺》！？」

ユーマ達の間に割り込んだ《黙殺》は、身の丈程もあるデスサイズを肩に担ぎ抑揚のない声で答える。

「……やりすぎよ。これ以上はさせない」
「その通りだ。武器をしまえ」

ユーマの首筋にいつの間にか緋色の剣が当てられていた。

「貴様もだグナント。お前たちも動くなよ。……一緒に来てもらう」

ユウイの目の前ではブソウが警棒を構えている。取り巻きの覆面達はブソウの《十騎兵》に捕らわれていた。

「ちっ。そういえば先輩達がいましたね。卑怯とは思いませんか？」
「何とでも言え。話は自警部で聞く」

学園の規則を違反したとして《竜使い》を捕まえたかったブソウ。

「自警部のお世話にはなりませんよ。カイゼル！」
「グアアアッ」

皇帝竜はその翼をひろげうち、突風を生み出す。

「貴様！」
「今日は退きます。でも覚えておいて下さい。最強のエースは先輩やそこの《精霊使い》の誰でもない、《竜使い》のボク、ユウイ・グナントだということを」

一瞬の隙を突いて皇帝竜に近づいたユウイはその背に飛び乗り、空から脱出した。

覆面達をとり残して。

「仲間を見捨てたか」
「……飛行能力は以前の皇帝竜にはなかった」
「厄介だな。できれば私達の手で捕まえておきたかったのだが」

《竜使い》はこれからも陰で何か仕掛けるはずだ。今後の対策を考え始める3人。

「あのー」

ブソウ達に話しかけるユーマ。

「そろそろその剣を退かしてくれません？　なんかチリチリって焼ける匂いがするんですけど」

＋＋＋
自警部
＋＋＋

「すまない。決して忘れたいた訳ではないんだ」
「……まあ、いいですけど」

赤毛の騎士は謝った。首筋をさすり焦げた髪を気にするユーマ。

「……帰るわ。エースでもない私が深入りするのは良くないから」

《黙殺》はそう言うとユーマをじぃと見つめる。

「ん？　何か」

「……曇りのない目をしている。《エース》は私や彼よりも貴方の方がふさわしいのかもしれない。……気をつけて」

《黙殺》は姿を消した。

「……なんだろうな？」

「さて。ユーマ・ミツルギだな。俺はブソウ。自警部の部長を務めている。俺達と一緒に来てもらおうか。正当防衛とはいえやり過ぎだ」

巨大な《皇帝竜》と戦った後だ。見れば辺りの地面は砕け、周囲に大量の砂を撒き散らしたままだった。

あれだけの騒ぎで人が来ないのは自警部の働きらしい。

「げ。厳罰ものですか？　でもあれは……」

「事情聴取だけさ。君にとって悪いことはない。今回は自警部がどうにかしてくれる」

「おい」

顔を顰めるブソウ。

「君もまだ事情を詳しく理解していないようだ。話を聞きに来てくれないか？」

「……わかりました」

騎士の提案にユーマは頷き、２人と共に自警部へと向かった。

＋＋＋

自警部本部、部長室。

「ブソウ。現場指揮は後輩に任せて少しは片づけたらどうだ？」

「……すまん」

室内はデスク、テーブルの上に書類らしい紙の束が乱雑に積まれていた。

「とにかく座れる所に座ってくれ。さて……」

スペースを作り席に着く３人。

「まず自己紹介がまだだったな。私はリアトリス・ロート。ブソウと同じエースの１人だ」

遅くはなったがユーマに挨拶したのは白銀の鎧を身に付けた女性騎士。赤毛の髪は編込んで１つに束ねている。

「《烈火烈風》の通り名のほうがわかるだろう」

「すいません。学園に来てまだ２ヶ月も経ってないので」

ユーマは《エース》をはじめ、そのあたりの事情に疎かった。

「そうか。ならエイリーク・ウインディ。君は彼女の事は知ってい

るな？　私は風森の国でラゲイル様に剣の手ほどきを受け、師事していたこともある。私は彼女の姉弟子のようなものだよ」
「ああ」
それならユーマも聞いたことがある。
「学園に《旋風剣》を使う先輩がいるって聞いたことがある。あれ？　でもエイリークから聞いた感じとイメージが違うな」
「どういうことだ？」
「確か」
――リア先輩はアタシよりも剣も術式も巧くて格好いいけど、普段は何もない所で転ぶようなドジっ娘なのよ。この前だって……
「林檎亭のアップルパイを間違ってピーチパイを買った挙句、躓いて潰してしまったから泣きそうだったって言ってた」
「……あの子は」
リアトリスは拳を握り震えていた。
「林檎亭のパイは確かに美味い。どれでもな。……それは惜しいことをした」
「黙れブソウ。あの時の後悔を私は繰り返しはしない。現に今だってこう気を引き締める為に普段から鎧を身につけてだな」
「重くないですか？」
「……」
沈黙が返事だった。

「それにブソウさんですっけ？　思い出した。アギ達に聞いたことがある」

――いいかユーマ。校則違反とか派手にやらかした時はブソウっていう中間管理職の苦労人みたいな先輩を頼れ。きっと何とかしてくれる

――というよりも押し付けろ。なぁに、奴は甘党だ。美味い菓子でも渡してやれば何でもしてくれるぞ

「……あのバンダナ共が」

ブソウは誓った。この先何があっても奴等を庇うことはしない、と。

「まいったね。でも君も《精霊使い》である以前に色々と噂があるぞ。例えばエイリーク姫の騎士だとか。最近は《銀の氷姫》との噂もちらほらと聞く」

「はぁ。それこそ噂ですよ」

リアトリスの発言にはユーマは溜息をつくしかない。

彼女達と一緒にいることが多いのは昇級試験に向けて訓練に励む2人に付き合わされているからだ。

ユーマは特待生扱いだ。試験を受ける必要もない上に精霊とガンプレートを使った多様な戦術は試験対策の仮想敵としては最適だっ

た。

「そうかな？　でも君が《守護の短剣》を持っていることは事実。私はこれが風森の姫が持つ国宝だということを知っている。騎士でないのなら所持している理由を是非説明してほしいものだな」

「ほぅ」

「……」

ユーマは手痛い反撃を受けた気分だ。短剣の件は《精霊使い》になったことを含めて説明が面倒だった。

「エイリークの騎士でないのならもしかして姉姫様の方かな？」

「ほぅ」

「……勘弁して」

勝った。そう思う赤毛の騎士。

あとでアップルパイの件を話した仕返しにエイリークもこの話でからかおうとも思った。

「雑談はここまでにして話をしようか。ブソウ」

「ああ」

そしてユーマは今回の事件のあらましを聞く。

＋＋＋

リーズ学園の生徒会は幾つかの組織に別れる。

まずは《生徒会》。

普通科の生徒が主に所属しており、学園での生活や行事の運営、管理を行う組織。一般の委員会は生徒会の傘下になる。

学生ギルド支部も生徒会の中にあり、必要に応じて人を集めることもある。

次に《自警部》。

治安維持を目的としたこの組織は学園内の揉め事を取り締まる警備、巡回が主な役目である。

荒事に対応するために戦士・魔術師の生徒が多い。事務関係に普通科の生徒も在籍している。

《組合》は技術士系の生徒の集まりだ。

技術の発展と普及を目的とした組織である。学園で扱う研究は工学や魔術だけでなく、農業や生活雑貨に関するものまで幅広く取り扱っている。

商業的な要素が大きい為なのか、装備品の取扱いの他にも資材や食糧の搬入なども組合が受け持っている。

そして《報道部》。

この組織が独立したのは最近の事。表向きは学園内の連絡事項や事件を生徒に伝えるのが主な仕事。

実際は学園の内外問わずに情報を集め、操作することで一般生徒の情勢を掴む重要な役割を持つ。

情報を取り扱う報道部員はエリートである。報道部に関する情報は徹底して隠蔽されている。隠密の存在など謎に包まれたところが多い。

「最後に俺達のような《Ａナンバー》の１０人だ」

《Ａナンバー》はいわば学園の代表。生徒会の上層部に個人で意見できるような特別な権限を持つ。

「戦士・魔術師系の生徒だけでなく総合的に見て優秀な生徒に贈られるエースの称号。前年度の３年生が抜けた今の時期は暫定で選ばれるのだが、エースの正式な選定は前期の昇級試験、この時に決まるのだ」

ちなみにブソウとリアトリスは前年度からのエースである。

「あのユウイとかいう奴もエースなんだっけ」

リアトリスは形のいい眉を顰めて鼻を鳴らす。

「あいつは暫定措置の今のエース陣の中でも補欠のようなものだ。

……とある事件があってな、エースが1人称号を剥奪されたのだ。空いた席に座りこんだ奴がアレだよ」

「それって《黙殺》さん？」

頷く2人。

「そうだ。でも今思えばあれは……」

「後輩を相手に愚痴をこぼすな。話が逸れる。それでだなミツルギ、今回お前がグナントに狙われた件だが」

ブソウは本題に入る。

「お前を《Aナンバー》に加える話がある」

「は？　俺が……エース？」

「正確には候補者だな。君は《精霊使い》。発祥の地である南国にも数少ない存在であって、しかも2体の精霊と契約している。実力は今日見た所だと《竜使い》の奴に比べても見劣りしない。むしろ上だと私は思っている」

突然の話だった。

「グナントはエースという今の地位を維持する為に、他のエース候補達に闇打ちを仕掛けている。昇級試験に参加できなければ特別な功績をあげでもしないと選ばれることもないからな」

ユーマは呆れた。

「なんだよそれ。要するに権力に目の眩んだ小悪党なんだろ」

「俺もそう思う。それでもグナントは現在の《エース》なんだ。現行犯でないと奴を捕まえて拘留できる機会がなかったのだが」

今回、《皇帝竜》が飛行能力を持つことがわかった。

他に空中戦に対応できる《エース》は1人しかいない。この先捕らえるのは難しいだろう。

「とにかく気をつけることだ。エースになるかどうかはともかく、巻き込まれたのは災難と思うしかない」

「はぁ。そうですね」

溜息をつくユーマ。犯人がわかっただけでよしとするしかなかった。

「まあ、君はもう大丈夫だろう。手下の幻創獣は相手にならないし、直接やりあった後だ。グナントも迂闊なことはしないはずさ」

「……え？」

何かが引っかかった。

「君『は』？」

ユーマは不安に駆られ、思案に沈む。

「どうした？」

「他のエース候補の人は大丈夫ですか。それと俺の知り合い、エイリーク達に危険はありませんか？」

懸念したことを2人に訊ねる。

「今回はもう君以外に候補者はいない。だから私達2人で君をマー

クすることができたのだが」
「ウインディやアギ達の事か。ランクA未満といってもそれなりの実力者だ。グナントが直接仕掛けない限り問題ないだろう」
「本当に？」
不安が消えない。
「ああ。グナントには報道部の腕利きが尾行している。何かあればすぐにわかる」
「それにエースの選定に関係のない奴を狙うものか。いくらなんでもな」
「……」
ユーマはブソウとリアトリス、2人の目を黒い瞳で見つめた。彼らの本質を探るように。
「何だ？　一体」
「ミツルギ？」
心配そうにユーマを見る2人。
（ああ。そうか）
ユーマは気付く。
（この人たちはいい人だ）
だから気付かないし疑わないのだ。

どんな奴でも心のどこかで人を信じてしまう。もちろんユーマだってそうだ。

ただ真鐘光輝という『悪人』である彼の教えがなければ考えなかった。

どうしようもない馬鹿が考えることなど。

「報告します！」

部長室に飛び込む自警部員。

「どうした？」

ブソウは考えなかった。

《竜使い》は地位を脅かすエース候補者を狙うのであって、『現エース』を襲うなどと。

「学園の西区で重傷者を1名発見。魔獣に襲われたような痕跡があるとのことです」

「被害者は誰だ」

リアトリスはどこかで信じていたのかもしれない。

どうしようもない奴でも彼は《エース》なのだ。『ここまで』はしないだろうと。

「……まさか」

ユーマは知らなかった。

『彼ら』から話を聞いたことがない。もしかするとあえて黙っていたのかもしれないが。

被害者はユーマに関わりのある《Ａナンバー》の第１０位。

《天才錬金術師》

「被害者はティムス・エルド。第１発見者は彼の妹です」

＋＋＋

2－10　犠牲者（前書き）

ユーマ失踪事件の発端。

2－10　犠牲者

＋＋＋

絶望的な状況。

そういったものをこれまで体験したことがあっただろうか？

「兄さん……」

妹を背に庇うように立ち、ティムスは黒い竜と対峙していた。

「いきなり物騒だな。でも覆面しても《皇帝竜》を見せた時点でバレバレだぜ。《竜使い》さんよ」

「……」

技術士のティムスに戦う術はない。

つい妹を見てしまう。せめて戦闘用のブースターがあれば話が違ったのだが。

（何を考えてる？　俺は）

「ポピラ、行け」

「兄さん！？」

「《竜使い》の狙いはおそらくエースの俺だ。お前の『能力』は誰

も知らないからな。……囮になる。誰か呼んで来い」
「馬鹿」
ポピラは兄に背を向けて必死に走り出した。1人だけ逃げたくはなかったが、これが最善の選択だと思わなければいけなかった。
「逃がすか。カイゼル」
「グルァ！」
羽ばたく皇帝竜はティムスを無視して逃げるポピラの前に立ち塞がる。
「あ……」
「やれ」
そして振りかざされる鋭利な黄金の爪。
「畜生が！」
ティムスはポピラに向かって走る。
「がっ！　くはっ」
「兄さん！」
間一髪。ポピラを抱き込むようにして飛び込み、皇帝竜の爪から逃れる。
「……てめぇ。こいつは関係ないだろうが」
「事情が変わったんだ。恨むならあの《精霊使い》を恨め」
「ミツルギさん？」

その一言でティムスは理解した。

「……成程な。《Ａナンバー》の席を空ける為に戦闘タイプじゃない俺を排除し、『会長派』のエースとしてアイツを勧誘する気だな」

ふらつく足を叱咤して立ち上がるティムス。

（いや、あのバケモノは確か幻創獣だ。だとすれば俺だけじゃなくポピラも狙う理由は……）

「それともお前の独断か？　ユーマの奴にエースの席を奪われそうにでもなったのか？」

「貴様には関係ない」

「関係あるのさ。《天才》の俺はともかく、こんな下らないことにアイツまで巻き込むな」

ティムスは隠し持っていた金属片を錬金術でナイフの形状に《変成》。ちっぽけな武器を手にする。

「アイツは一応俺の……友達なんでな。抵抗させてもらう。……ポピラ、今度こそ行け！」

ティムスはダン！　と強く足元の石畳を踏みつけた。

同時に皇帝竜の周囲を石の壁が囲み動きを封じる。彼が《変成》できるものは金属だけではない。

「無茶よ、やめて！」

無理だ。ポピラは身体を震わせて動けないでいる。

彼女の手にたっぷりと付いた生温かいものは、彼女が流したものじゃない。

「……セッ！」

ナイフを投擲。皇帝竜に気をとられた覆面の男は咄嗟に顔を庇い、防いだ腕にナイフが突き刺さった。

「小癪な」

「ちっ、駄目かよ」

無理をしすぎた。今の攻撃でティムスは限界に達してその場に倒れこむ。

「……傷を与えた分は返してやる。消えろ。カイゼル・バースト」

石の壁を破壊し尽くした皇帝竜はエネルギーを溜め、必殺の熱線を撃ち放そうとする。

「駄目。……起きて。起きて逃げて」

「やれ、カイゼル」

ポピラは絶体絶命な兄を助けるどころか恐怖で動くことができない。

「グルァアアア！！」

皇帝竜が吼える。

「やめて、兄さん！！！」

そして――

《カイゼル・バースト》が発動する直前、黒い影が宙を舞う。

「……斬る」

皇帝竜に集められたエネルギーの塊をデスサイズの一振りが刈り取る。

「貴様は！」

「……あなたは誰？」

《黙殺》は倒れたティムスを一瞥したあと、２人を庇うように前に出た。

「……何をしているの？」

「貴様には関係はない。元エースの《仲間殺し》。邪魔をするな」

覆面の男の言葉に《黙殺》は動じない。デスサイズを構えなおす。

「それこそ関係ない。これ以上は……させない」

「皇帝竜に勝てるとでも」

彼女の実力が並でないことは彼も知っている。でも皇帝竜は力の全てを見せていない。

「……勘違いしないで。私が斬り伏せ、殺せるものは『術式』だけじゃない」

張りつめた空気に雰囲気が変わる。冷静ながら怒りに昂る《黙殺》。抑えきれない『魔力』の奔流に風が舞う。

黒のフードが捲り上がり、彼女は素顔を晒した。

流水のように流れる長い髪は水色。そして氷のように冷たく鋭い美貌に際立つのは今の彼女を表わす2つの瞳の色。

蒼と紅のオッドアイ。

「……覚悟して」

デスサイズに宿る魔力は尋常ではない。

元とはいえ彼女は《Aナンバー》の第3位。

その名は《黙殺》。魔術殺しのアサシン。

「魔族？　いやまさかその目は……退くぞカイゼル」

皇帝竜に乗り飛び去る《竜使い》。

「……」

《黙殺》はエルド兄妹を置いては行けず、深追いすることをやめた。

＋＋＋

「兄さん！」

ポピラは自分が助かったことに安堵する間もなく兄へと駆け寄る。

ティムスの様態は酷いものだった。掠ったとはいえ左肩から背にかけてザックリと切り裂かれ、抉られている。

この状態で皇帝竜を一時的にも抑え込み、攻撃までしてみせた精神力は賞賛される強さだ。

「……私が彼を病棟へ連れていく」

「でも、でもこの状態じゃ、こんなにも血が……」

「しっかりして」

フードを被りなおした《黙殺》は、動転するポピラを落ち着かせるように静かに、でも優しく話しかける。

「応急処置なら私ができる。止血まですればしばらく持つから、あなたは近くの自警部と救護班に連絡して」

ポピラは蒼と紅の瞳を見た。無意識に《同調》してしまい彼女の心に触れる。

（消えることのない後悔。それと過酷な、でも揺るがない決意。この人は）

「大丈夫。私の目の前でもう誰も……死なせないから」

「……兄をお願いします」

ポピラは頭を下げ、近くにある自警部の詰所へと急いだ。

「……おい」

激痛に意識を飛ばされていたティムスは気が付き、傍にいる誰かの腕を掴む。

「動いては駄目」

《黙殺》は魔力を持つとはいえ治癒術式どころか魔法を使えない。彼女は魔力をティムスに注ぎ、傷口を抑え止血していた。

「た、のむ……」

――妹を、アイツを――

伝えなければならないことは沢山あった。

でもティムスは今度こそ限界で本当に大事な、彼の願いだけを口にして再び気を失った。

「……わかった」

本当は彼が何を頼みたいのかわからなかった。でもその想いに応えようと思う。

エースではなくなった彼女に使命や義務はもうない。

しかしエースから解放されることで《黙殺》は思うがままにデスサイズを振るう。仲間と離れ、日陰の道を独り歩んだとしても。

今度こそ正しい道を進むために。

＋＋＋

犠牲者

＋＋＋

「ティムス！」

学園都市にある緊急病棟に駆け付けたユーマが見たものは、疲れた顔で座り込むポピラと血まみれの包帯姿でうつ伏せに寝かされたティムスの２人だった。

「ポピラ……」

「兄は一命をとりとめました。でも」

背中の傷はもちろんのことだが、肩は骨まで達する深い傷だった。この先もう左腕を動かすことができない程の。

「風葉！」

「無理ですよー」

精霊は悲しそうに首を横に振る。

「傷が深すぎますー。私の《癒しの風》では治癒が間に合いませんー」

「それでも！　頼む」

ユーマは広域範囲術式である《癒しの風》を《補強》してティムスの傷に直接吹きかける。

風を１点に集中することで治癒効果を高めることができたが、元々の術式の効果が低いのだ。気休めにしかならない。

「畜生。ちくしょう……」

それでもユーマは《癒しの風》をティムスに送り続ける。

諦めたくなかった。それと同時に自分の無力感に襲われ、心が潰れてしまうことをユーマはひどく恐れた。

＋＋＋

３０分が経過。

《竜使い》達と戦闘したあとだったのだ。風葉の魔法は長く持たなかった。

「ミツルギさん……」

「畜生……ティムス」

打ちひしがれるユーマ。

拳を床に叩きつけ、動くことができないでいた。

「失礼するわ」

しばらくして病室に入ってきたのは妙齢の女性。

「あら、生きていたのね。しぶとい子。私の教え子なんだからそうでなくちゃね」

無造作に伸ばした黒髪を振り払って女性はポピラの前に立ち、目線を合わせる。

「頑張ったわね。もう大丈夫よ」

「先生……」

ポピラの頭を優しく撫で、アラムは少年に声をかけた。

「君がユーマ君ね」

「あなたは？」

「アラム・アラド。練金科の教師よ。緊急だからってスニア先生に呼ばれたの。これ使って」

「あ……」

アラムがユーマに手渡したのは1枚の紙の札。

「ヒールの回路紙（サーキットペーパー）……」

「元々君の物でしょう？　研究用に貰ったのはいいけど使い方が分からなかったのよ」

「――！！　これならっ」

ユーマはティムスに回路紙を貼り付け、術式起動の呪文を唱える。

「ヒール！」

輝く回路紙は重症だったティムスの傷を目に見える速さで癒していく。

「……すごいわね。札が保有していた魔力が相当の物だから予想は

していたけれど」

驚きを隠せないアラム。これほどの物を一体どんな術者が作ったのか、実際の効果を目の当たりにしてとても興味深いと関心する。

「……もう大丈夫のはずです。時間が経ち過ぎて筋や神経なんかの再生までできたかどうか分からないけど」

「見せてちょうだい」

アラムはティムスの包帯を取り除くと、傷のあった場所を触り《解析》した。

「……大丈夫。しっかり繋がっている。これは応急処置が良かったおかげね。魔力で傷口を包みこんで状態を『維持』していたわ。これならこれ以上悪化させることもない。できるわね」

「わかるのですか？」

驚くユーマ。ただの触診でできることではない。

「《解読》と《透視》の応用。あとは医療関係の知識と経験ね。知らないかしら？　第3救護室の魔女」

第2救護室のセレスと同様、彼女も自分の研究の合間に救護室に詰めている時がある。ユーマは知らなかった。

「あの札はちょっともったいなかったわね。これも必要なかったし」

そう言ってアラムが取り出すのは赤黒いゼリー状の物体。

「うっ、それは？」

「スライムの細胞で造ったものよ。欠損した筋組織の再生を目的とした代用の人造肉よ」
「なんか動いてません？」
ぐじゅぐじゅ動くソレはグロテスクで気味が悪い。
「ナマモノだから。惜しかったわ。試作品だからちょうどいい被験体が手に入ったと思ったのに」
「先生……」
ユーマはここで彼女を怒るべきか判断できずにいた。
「ってあら、ポピちゃんは？」
「……すぅ」
ポピラは安心したのか、椅子にもたれかかり眠っている。
「緊張が解けて一気に疲れが出たのね。……残念。久しぶりに『馬鹿ですね』って言われると思ったのに」
突っ込み待ちだったアラム。とにかくティムスの無事を確認できた。
「……先生、あとお願いしてもいいですか？」
ユーマは病室の出入り口へ向かう。
「用事が出来ました」
「夜遊びは駄目よ。……気をつけなさい」

アラムはユーマを止めることはせず、無責任に手を振って見送った。

「あれは止まらないわね。よかったわ。この子達にあんな友達ができて」

＋＋＋

「どこへ行く」

病棟の外で呼び止められるユーマ。無視しようとしたが目の前に立つ男はそれを許さなかった。

「グナントを探すのならばやめろ。捕まえるのは無駄だ」

「どいてください」

ブソウは退かなかった。

「詳しくは説明しなかったが、奴のうしろには生徒会長がいる。《会長派》でしかも《エース》であるグナントを手放すはずがない。証拠や目撃者がいても揉み消されるのがオチだ」

だからやめろと言う。

「……」

「聞け。正直《竜使い》がエルド達を襲う理由がはっきりとわからない。しかしこうも考えられるはずだ」

ティムスが襲われた理由。有力なのは2つ。

1つは彼が《竜使い》と同じ下位のエースであるということ。

そしてもう1つはユーマの関係者だということ。

「お前のブースターは兄妹の手によるものらしいな。もし、襲われた理由がお前に対する報復ならば今は抑えろ。エルドだけでない。ウインディやアギ達まで狙われてもおかしくないんだぞ」

ブソウは必死に説得した。今怒りにまかせてユーマが《竜使い》とぶつかり合うのは避けたかった。

もちろんこれ以上の被害は自警部の名にかけて出させないつもりだ。でもここでユーマが騒ぎを起こせば庇うことが難しい。

ユーマは下を向いている。ブソウからでは彼の表情が読めない。

「グナントの行動は俺達が抑える。奴を止める権限があるのは同じ《エース》だけだ。だからお前は」

「関係ないですよ」

ユーマは顔を上げてブソウを見た。

曇りのない黒曜石のような黒の瞳。

「お前……」

（なんて目をする）

そこには憎悪や怒りなどという感情を削ぎ落とし、澄んだ瞳をブソウに向けていた。

だから恐ろしかった。

潰す

何を？　それは知りたくなかった。ただその意志だけははっきりとわかる。

ブソウは無意識に1歩下がろうとした己を恥じた。

「やめろ」

でもブソウは退けなかった。

彼を行かせてはいけない。暴走するユーマを守る為にブソウは立ちはだかる。

リアトリスと別行動をとったことを悔やんだが仕方がない。今の

ユーマならば最悪相討ちだろう。

ブソウは覚悟する。

「どけ」

ユーマは1歩前に出る。そしてブソウの目の前から一瞬で消える。

《高速移動》かと身構えるブソウ。

ズボッ

ユーマは首まで埋まった。

「は？」

「……砂更？」

2人は訳が分からない。

ユーマの前に立つのは彼の精霊たち。

「だめですよー」

風葉は身動きの取れないユーマの鼻を蹴る。容赦なくげしげしと

蹴りまくった。

「イタッ、痛いって風葉、やめて」

「何をしようとしたんですかー。あなたはあなたですー。お兄さんじゃないんですよー」

風葉は蹴ることをやめなかった。

契約者と繋がった精霊は主人の心が理解できる。

ユーマが『彼』と同じように感情を殺し、心を砕きながら復讐しようとするのを精霊たちは我慢できなかった。

「怒っていいんですよー。でもあなたのままでいてくださいー。じっかにかえりますよー」

「ぶっ、やめて、血、鼻血でたから。砂更、お前も地味に砂かけるのやめて。あー」

「……」

「このっ、このー」

「精霊が契約者に攻撃した？　そんなことがあるのか」

ブソウはユーマを助けることを忘れ、ただ茫然としていた。

＋＋＋

「……」

「ぐすっ、ぐすっ」
「……」
風葉が泣きそうになってやっと制裁が終わった。
砂まみれで鼻血を流し、生首状態のユーマ。ブソウはその惨状に目を逸らしている。
「わかった。わかったから。アイツはあとで殴って埋める。それならいいだろ？」
「……ぐすっ、それでいいですよー」
「……」
いいのか？　ブソウは彼らのことがよくわからない。
「はぁ。ブソウさんごめんなさい。ちょっとやりすぎました」
「ああ……」
やりすぎたのは君の精霊たちでは？　という突っ込みは控える。
「でも《竜使い》は俺が懲らしめます。だから力を貸して下さい。俺はまだ知らないことが多すぎる」
まずは情報だ。《生徒会》に《エース》、《竜使い》。それと《幻創獣》。知るべきことが沢山ある。
「わかった。今日は遅い。自警部の本部に泊まっていけ。明日の早朝、今日捕まえたグナントの手下に俺が取調べを行う。同行しろ」
「お願いします」

ブソウは基本的に善人である。

助けを乞うユーマに簡単に応じる彼が苦労人と呼ばれるのは仕方のないことかもしれない。

でもこの先、自警部部長のブソウ、さらに報道部部長の力を借りたユーマがやりたい放題にやらかすことを知っていたなら、彼は今ノーと返事をすることができたのだろうか？

「あとここから出るの手伝ってくれません？」

「……ああ」

未だ生首状態のユーマに手を貸すブソウ。

彼の苦労話はまた別の話。

＋＋＋

2－11a　取調室　前

＋＋＋

イースという少年がいる。リーズ学園の生徒だ。

どこにでもいそうな普通の少年。変わったところがあるとすれば、それは彼がとある《騎士団》に所属していたことくらいだろう。

学園でいう《騎士団》の結成は《Aナンバー》の特権の1つ。

エースは任務や研究の為に有志を集めてチームを創ることができる。学生からなる騎士団はエース直属のエリートである。

ただしどのエースも騎士団を持っているというわけではない。規模も大小の差がある。

たとえば自警部部長であるブソウはそもそも必要ない。ティムスの場合は研究室の提供と補助金狙いで妹のポピラを助手として雇い、『エルド兄妹』というたった2人だけの騎士団を結成していた。

イースはそんな騎士団の中でも大規模な団体、《グナント竜騎士団》に所属していた。

学園のトップであるエースに勧誘されて舞い上がっていたのは最

初だけの話。

傲慢な団長である《竜使い》の下で働くことは自慢できるようなことをするわけでなく、むしろ後ろめたいことばかりで嫌気がさしていた。

《幻創獣》という大きな力を与えられ捨てることができなかった彼は《竜使い》に逆らうことができず、ずるずると命令に従い続けた挙句、最後は団長に見捨てられた。そんな不幸な少年。

そんな彼は今、十字架にかけられている。

「は？」

目が覚めると身動きが取れない状態。おかしい。

「何故だ？　俺は確か自警部に捕まって……」

覚醒したばかりの頭で考えるイースの耳に叫び声が届く。

「う、動けない」
「何だよこいつら」
「俺が、俺達が何をしたー！」

仲間だ。汚いことに手を染め、共に団長に見放された同志。彼らもまた十字架に磔にされている。

「お前たち！」

地獄の光景。

目の前には百人もの兵が武器を持っており、その先頭で覆面の男が悪魔を従えて楽しそうに穴を掘っている。

「ざくざくほいほい、ざくざくほい」
「ひとをーのろわばーあなよっつー」
「……」

穴を掘る覆面の隣で歌う羽付きの小さな悪魔。その隣では貌を隠した金髪の悪魔が踊っていた。

「な、なんだよこれ？　お前は誰だ！！」
『……目覚めたか。罪人よ』

こちらを振り向いた覆面は穴を掘っていた時と違いまるで王のような威厳のある声を出した。

「ざ、罪人だと？」
『《竜使い》の悪事に加担した貴様等の罪は重い。よって』
「もやしてーうめてー、ちきゅーにー、かえれー」

燃やせ、モヤセ

還れ、カエレ

地獄の兵士が悪魔の歌にあわせて武器を鳴らし、唱和する。まるで何かの儀式のようだ。

『助かる道はただひとつ。ブソウ様に隠しごとをせず全てを話せ。さもなくば』

燃やせ、モヤセ

還れ、カエレ

「ブソウだと？　お前たちはまさか自警部なのか！？」

ブソウ！　ブソウ！

部長を崇め讃える兵士達は神の名を叫ぶ。

イースは信じられなかった。学園を守る治安組織がこんな怪しい宗教団体だったなんて。

「……へっ、冗談だろ？　正義の自警部様がこんな脅しをかけるなんて」

イースの仲間の1人が青い顔で虚勢を張る。

「そ、そうだ。俺達は屈したりしないぞ」

声が震えていた。拘束され武装した連中に囲まれているのだ。怖いものは怖い。

『屈しないでどうする？』

覆面は罪人に問う。

『《竜使い》はあの時、貴様等を置いて逃げ出した。見捨てられたお前たちを誰が助けてくれる？』

「……畜生」

４人は答えられなかった。

「司祭様」

兵の１人が覆面に近づき声をかける。

「まもなく神がこちらへ。時間がありません」

『そうか。ならば』

覆面は手にしたスコップを地面に突き刺した。同時に４つの十字架がずぶずぶと沈み始める。

「ヒッ」

『聞こう。我が神、ブソウ様に全てを話すと約束できるか？』

覆面は金属板から火を出す変わった松明を持っている。

モヤセ、カエレ

ブソウ！　ブソウ！

地獄の兵士が足並みを揃え、一歩ずつゆっくりと包囲を狭めて近づいて来る。

「わ、わかった」
「話す。話すから」
「頼む！」
「ブソウ様、万歳！」

必死の命乞いを聞いた覆面は満足して口元に笑みを浮かべた。

『その言葉、忘れるなよ。……引っ立てい！！』

こうしてイース達４人は十字架に磔にされたまま、再び自警部へ連れて行かれた。

＋＋＋

「お疲れさまでした。今日の朝礼はこれで終了とします。皆さん、

お勤め頑張ってください」

覆面を被ったまま男は自警部の皆に礼を言って解散を告げた。

「ふう。さあ、急いで片づけしないと」

「かみさまがきますよー」

小さな悪魔の言うことは遅かった。

「何をしていた？」

怒れる神があらわれた。

覆面の頭を背後から掴む。掴まれた頭がミシミシと軋む。

『おお、お許しください、ブソウ様』

「……何の冗談だ」

自警部部長、ブソウ・ナギバは覆面の男、ユーマをしがみつく風葉ごと掴みあげて放り投げた。

「ぐぇ」

「ぷぎぇ」

「変装に《変声》までしてお前は朝から何をしていたんだ」

「いや、今日あいつ等を尋問するんでしょ。スムーズに行うためにも自警部の皆さんに協力してもらって誰もが素直になる儀式を……

ぐぇ」

今度は吊るし上げ。

「それがあれか。誰が神だ。聞いたこともない宗教をでっちあげて脅迫など朝からふざけるのも大概にしろ」

ブソウが見たものは昇り旗。『天下無双薙刃神教』、『信者募集中』と達筆で書かれている。

薙刃神教とは自警部部長にしてエース、《一騎当千》のブソウを武神として崇め、その武にあやかる宗教団体だ。自警部を中心に武人を自負する生徒に広がりつつある。

というのは嘘でもちろんそんな宗教はない。

「神様っぽい何かがないと説得力がないでしょ。何でもよかったけどブソウさんが東国のとある武神を奉る神殿の家柄だって聞いたから……」

「……どこで聞いた？」

ブソウは苦い顔。ブソウの家系はアギも知らないはずだ。

「それにどうやって自警部を動員した？　こんな悪ふざけができる権限がお前にあるわけがない」

嫌な予感。可能性があるのは《Ａナンバー》をはじめ厄介な数人しかいない。

「それはボクだよ。神様」

声をかけたのはユーマを司祭と呼んだ兵士。兜を脱ぐ。女生徒だ。

「やはりお前かディ……」

「ちょっとまったぁ！　ブソウ君。ボクの名前呼ぶの禁止。ミツルギ君にタダでボクの情報を提供するのはナシ！　情報はお金。お金とらなきゃもったいない」

ショートカットにカシューチャ。活発な印象をもつ彼女は学園一の情報通にして守銭奴。

報道部部長。

名前は本人が出し渋るので非公開。彼女ならば自警部を動員することは容易い。主に脅迫や懐柔での話であるが。

「部長さん。協力ありがとうございます」

「うん。こっちも楽しかったよ。ブソウ君絡みのネタって少ないんだよね。布教活動は任せて司祭様。報道部（ウチ）の噂先行部隊は優秀だから」

「……」

頭痛がするブソウ。彼女がユーマと知り合ったのは多分今朝のはずだ。

「きっと自警部の結束に一役買いますよ」

「そうだね。『セレス教』や『美少女信仰』にも負けない学園一の宗教にしてみせるよ」

もはやそれはファンクラブの類だった。ブソウの頭痛は酷くなる。

「何故そんなに気が合う？　それにお前、どうしてミツルギに協力する？」
「もしかして嫉妬？　そんなわけないか。理由は１つだけ。君はミツルギ君に力を貸すと言ったんでしょ？」
そこで言葉を一度区切ると報道部部長の彼女は意地悪そうな笑顔をブソウに向ける。

「だったらボクも彼に協力する。それだけだよ」

＋＋＋
取調室
＋＋＋

自警部本部。その取調室。

《竜使い》の元騎士団員の４人は『精霊使い襲撃事件』及び『ティムス・エルド暴行事件』に関する重要参考人として自警部部長自ら取調べを行うことになった。

ブソウはユーマと報道部部長を同行させることをやめた。今朝の件から２人がやりすぎることを危惧したのだ。

捕まえた４人はブソウの顔を見て酷く怯えていた。喋ろうにも声

が震えて上手く話せないらしい。

そんな彼らに様付けで呼ばれたブソウは頭が痛い。

「ブソウさん。このスコップどこに片づけたらいい？」

「ブソウ君、今朝の写真だけどこれ新聞に載せていいかな？」

はかどらない取調べに業を煮やしてたユーマと報道部部長。突如乱入して彼らのトラウマを刺激してはとどめを刺してパニックに陥らせる。

「……頼むからおとなしくしてくれ」

混乱する取調室。ブソウは彼らを落ち着かせ、宥めすかせるのに秘蔵のプリンまで捧げた。

＋＋＋

プリンの甲斐あってそれから取調べは順調に進む。

「お、このプリンはこの前ボクが教えた店のやつだね。相変わらずチェックが早いなあ」

「取調べといったらカツ丼が定番だけどプリンもなかなかいいな」

「かつどんて何？　君の国の習慣なのかな？」
「何故お前らまで食べる」
１箱６個入りのプリン。取調室には７人。
ブソウは心で泣いた。
「……もういい。確認するぞ。今回の事件は《竜使い》、ユウイ・グナントの独断であって生徒会長は関わっていない。そうだな？」
「は、はい」
４人の代表としてイースは答えた。
「俺達はやりすぎたんです。団長、いやアイツは騎士団を大きくしすぎました。多分『グナント竜騎士団』は自警部の次に大きな勢力のはずです」
学園の生徒総数はおよそ３千人。その内１２００人が普通科などの非戦闘系で６００人が技術士系である。
戦闘系の戦士・魔術科の生徒は約１２００人。その中で戦闘員の数を誇るのは生徒会公認である自警部の約３００人のはずだった。
「竜騎士団の勢力は約２００人」
「ちょっと待って。ボクの情報、というより生徒会への申告書は確か６２人と記載してたはず。３倍も違うじゃない！　それに２００人全てが戦闘員なの？　だとしたらおかしい。自警部を除いた戦闘系の生徒２割以上が《竜使い》側にいることになる。嘘よそれ」
「あいつにそこまでの人望があるとは思えんな」

イースの言葉を信じることができない部長2人。

「普通科など他の科から人を集めてるんです。戦闘系の生徒は申告書通りだと思います」

「一般生徒だと？」

「そうです。俺の隣にいるアルス、彼も普通科です」

「はい」

アルスと呼ばれた少年は証拠に生徒手帳を見せた。

「本当だね。ボクも事前に調べた時、彼のことは間違いじゃないかと思ってたんだけど……普通科から召集か。盲点だったよ」

報道部部長は自分の情報網に穴があったことを悔やむ。

それから何故騎士団に入団したのか4人に取材した。

「報道部は俺達の事調べたんですよね。だったら知ってるはずです。俺達が落ちこぼれの生徒だってこと」

「……うん。そうだね」

イースは高等部魔術科の2年生。ただしランクはD。中等部レベルの評価である。

「3年で卒業を迎えたいのなら最低でも今年1年でランクBまで昇らないといけない。でも見込みがなかった。普通科に転科願いを出そうかと思ったくらいです」

「……」

「そんな俺達に《幻創獣》、竜の力は魅力的だった。あれを手にするだけで力を得ることができるのだから」

「あの腕輪型のブースターか？」
「そうです。ブースターに分類するならあれはインスタント型。使いこなすことは容易なんです」
「だから普通科の俺でも《幻創獣》は扱える。……俺は戦闘向きじゃないと言われて諦めていたけど戦士になりたかった。そんなときにあの《皇帝竜》を見た。あの巨大で力強い竜を見て、その力が俺でも使えると言われたから」

魅せられ惹かれた。

アルスはイースの言葉を引き継ぎ、そう答えた。

「なるほどね。皇帝竜は力の象徴か。薙刃神教よりもわかりやすいね」
「おい」
「本当のことだよ。すがることのできる力は弱い人にはとても魅力的で手に入れたくなるものだよ。それを拒むことができる人は芯の強い本当の強者だけ。もしくは自惚れの馬鹿くらいかな」
「……」
「それはともかくブソウ君。《皇帝竜》じゃない普通の《幻創獣》はどのくらいの力なの？」

話を本題に戻す。

「なんとも言えんな。実際に戦ったのはミツルギだが相手にならなかったからな。ミツルギ、どう思う」

初めてユーマに発言の機会がまわってきた。

「ランクC。でも1対1ならリュガは勝てると思う。でも問題はそ

こじゃない」

ユーマは考えていた。もし自分が《幻創獣》を率いて指揮をとるならどう運用しようかと。

「幻創獣は思った以上に汎用性が高い《兵器》のはずです。竜のかたちを模倣しても実際は人型なんかの亜種族のモンスターなんだ」

たとえば。

リザードマンは重武装が可能な強靭な前衛型。

竜牙兵は骨だけあって軽量化された敏捷性の高い軽戦士。

「空を飛ぶワイバーンもいましたよね。制空権をとれるだけで圧倒的に有利なんです。飛竜だけじゃなくて水竜や地下に潜ることができる奴、足の速い騎馬の変わりになる竜なんかがいれば戦術の幅は人なんかよりも幅広い」

もう1つ懸念することがあったが、ユーマは《幻創獣》を知らないため確信が持てないので口に出すことをやめた。

「そんな竜が２００体」

「数はこちらが上でもグナントがしっかりとした編成を組んで指揮系統と戦術を確立してしまったら……」

反乱を起こせば学園の治安が覆るかもしれない。

「会長派から独立しようとするわけか。イース君、君は幹部の1人だよね。生徒会長の動向分かる？」

「すいません。幹部と言っても俺は末席なんです。そこまでは」
「そっか残念。どうする？　ブソウ君」
報道部部長はブソウに問う。その目は何か楽しそうだ。
ユーマとしてはこれ以上情報が得られなければ幻創獣の事を詳しく聞いてみようと思ったのだが。
「そうだな。これ以上はお前達から聞きだせることはないだろう。だったら」
ブソウは報道部部長を睨む。彼女を呼んだのは元々彼だ。彼女は学園一の情報通。情報の独占はしないが情報の価値を理解し、代価を求める守銭奴。
「知ってる奴から聞きだせばいい。茶番は終わりだ。報道部の情報、すべて吐き出せ」
＋＋＋

2ー11b　取調室　後（前書き）

ユーマと報道部部長は同盟を結ぶ。

2－11b　取調室　後

＋＋＋

C・リーズ学園中等部。

規模こそ高等部に比べ小さいものだが施設は充実しており高等部のそれと見劣りはしない。

ユーマと報道部部長、そしてイースは《幻創獣》の『生みの親』のところに訪ねに来た。

「中等部は初めて来たよ。ここにいるの？」

「ああ。練金科棟に『あるシステム』を再現して幻創獣を作った天才がいる」

案内役のイースは中等部の練金科棟へ向かう。

「天才ねぇ。どんな人？　名前からあんまりいい印象受けないんだけど」

「秘密にしておく。ルックスはいろいろな意味で予想を裏切る奴だ。お楽しみというわけさ」

イースも大分ユーマ達に打ち解けてきた。イース達４人はユーマに頼まれ《竜使い》の打倒に協力を約束したのだ。

「ふーん。まあ、いいや。それじゃ行こう。……部長さん？」

報道部部長はおとなしい。彼女は反省中だ。

「……はぁ。このボクが弱みを握られるなんて」

「依頼を受けてくれたお礼に俺は部長さんに協力するというだけじゃないですか。しかも無償で。弱みを握ってるなんて違いますよ」

彼女を落ち込ませた張本人は平然としている。

「……握ってるのはブソウさん……」

「ぎゃーっ、行こう。さあ行こう！　ボク達は取材、あくまで取材で来たんだから。さあ、部長であるボクに付いてきなさい」

前を行くイースを追い抜いて走り抜ける部長。

「何だ？」

「さあね」

ユーマは知らないふり。要するにこういうことだ。

情報は品と数を揃えて高額で一度に売り渡すよりも、買い手が欲がる稀少品を安価で確実に提供し続けることが重要なのだと。

＋＋＋

遡って取調室にて。

「さすがブソウ君。ボクがある程度今回の件を把握していることはお見通しか」

報道部部長は微笑むが目が笑っていない。

「イースが竜騎士団の幹部だったとは自警部は調べていない。取調べだけならお前を呼ぶ必要がなかった。ただ今回は生徒会絡みだ。確実な情報が欲しかったからな」

ブソウは彼女を睨むのをやめない。微かに苛立っている。

「お前ことはわかってるつもりだ。情報を扱う報道部は『中立』。そう言いながら代価さえ払えば誰にでも情報を渡す。いくら売った？」

《竜使い》にどれだけの情報を売り渡したということだ。

「生徒会長の《竜使い》への今後の対応とその詳細。それと《精霊使い》の能力と彼の身辺調査。締めて１００万」

「なっ！？」

ユーマは驚くがブソウは動じない。予想通りだ。

「まずはグナントに渡した情報を寄越せ」

「１００万よ。そうしないと贔屓になるからね」

扱う情報に貴賤は問わず、渡す相手の善悪を問わない『中立』の彼女。ブソウは彼女のこういったところが好きになれなかった。

「話して下さい」

報道部部長に渡された1枚のクレジットカード。

記されたポイントは２２９１……

「２００万!?　君、どうやって?」

「ミツルギ!?」

ユーマは驚くブソウ達を無視して報道部部長を見た。

「あなたのしたことが結果ティムスを傷つけた。何か言うことありますか?」

「一因はボクにあるかもね。だったら半額にする?」

「おい!」

流石にマズイと思ったブソウは声を荒げる。

ユーマは彼を制して部長を見据える。あの黒い瞳だ。でも彼女は人の上に立つ1人。怯まなかった。

「いいえ。全額渡します。代わりに力を貸して下さい。部長さんがお金で動くというのならあなたの流儀に合わせるまでです」

「報道部(ボク)の力を君に貸せということ?　金額がまったく足りないね。それに自警部と報道部で《竜使い》を叩くとなれば生徒会が動く。学園が2つに割れるよ」

「そこまでは考えていません。理想は俺と《竜使い》の1対1です。まず１００万。情報を話して下さい」

「……わかったよ」

報道部部長は自分が持つ情報を開示した。

＋＋＋

生徒会長は《竜使い》の不審な動きを事前から察知していた。報道部に依頼して調査したところ、『グナント竜騎士団』が一般生徒から入団者を募り勢力を拡大させていたことがわかった。

最近目障りな態度が目立つ『会長派のエース』、ユウイ・グナントは騎士団の力で生徒会から独立して一大勢力を築こうとしていた。会長派から裏切り者が出るのを防ぐために極秘に対策を立てる生徒会長。

一般生徒が扱う《幻創獣》は戦力になる。

途中でそのことに気付いた生徒会長は《竜使い》の勢力を取り込むことを画策した。

学園の統一を目指す生徒会長がいずれ自警部と相対した時を想定して、生徒会の『防衛戦力』の構築を思いついたのだ。

「というわけで会長はまずグナント君のエース資格を剥奪することを考えた。《Ａナンバー》の権限がなければ武装集団である騎士団は校則違反で解散できるからね。つまり会長は今度の昇級試験までに《竜使い》以上のエース候補１０人を選ばないといけなかった」

報道部部長はブソウの予想以上に生徒会長の動向を把握していた。
『生徒会対自警部』など考えたこともなかった。

「まあブソウ君やリアトリスみたいな前年度からの《エース》もいたし、優秀な編入生を会長が加えたりしたからね。選定は難しくなかった。でも」

「グナントが会長の思惑に気付いた。そうだな？……まさかお前」

「違う！」

報道部部長は否定した。声に怒りの感情がこもっている。

「もちろん相応の額を用意すれば情報を売り渡したかもしれない。でもあいつらは交渉もせずに盗んだんだ。ボクがいないときに。情報戦が主体のウチの戦力じゃ防げなかった」

彼女は報道部を傷つけられた悔しさを思い出す。

「情報を奪われたことは報道部の信用を貶めてしまうから隠すしかない。それにボク達は下手に《エース》を問い詰めることができないよ」

「……すいません」

イースは今までの悪行を思い出し、かつての仲間がしたことを恥じてつい謝った。

「君のことを怒ってる訳じゃないよ。それで生徒会長の思惑に気付いた彼は暗躍しだした。主にエース候補の失脚と暫定エースの排除」

その言葉にブソウは『彼女』のことを思い出す。

「まさか《黙殺》は」
「《黙殺》の件は《竜使い》がエースになる前の話だけど多分ね。《仲間殺し》の汚名……詳細はわからなかった。真実を知ってるのはもう彼女とあと1人だけだから」
「糞が！　リアになんて言えばいい？」
ブソウは机に拳を叩きつける。《黙殺》のことを知る彼は《竜使い》を許せそうにない。
「ブソウ君、《黙殺》や《烈火烈風》のことは置いといて。……とにかく今のエース陣は会長とグナント君の陰で出来上がったのよ。エルド君も元々数合わせの要素が強い。そして昇級試験がある今月。グナント君に1つ問題が生じた」
「そこで俺か」
ユーマは自分が狙われた理由を悟る。
「《精霊使い》。君を《Aナンバー》に加えようとしているのは隠しているけど実は生徒会長なんだ。エースの席から《竜使い》を落とすためにね」
ユーマは完全に巻き込まれただけだった。生徒会も《竜使い》ともなんの因果もない。
「いろいろ襲撃されていたみたいだけど君はこっち方面に強いのかな？　全部撃退したみたいだけど」
「少し心得があって」
ユーマが師と仰ぐ兄が得意だっただけだ。

「心得って何それ？　まあそれで業を煮やしたグナント君は昨晩君に直接仕掛けたみたいだけどそれも撃退。詳細は君たちがよく知ってるよね」

部長以外の全員が頷く。

「そして君が襲われた『ほぼ同時刻に』エルド君が襲われたと。おそらくエースの『余席』を念の為に作っておこうとしたというところかな？　以上よ」

それでどうする？　報道部部長は情報の『受取人』であるユーマに問う。

「《竜使い》を失脚、排除するなら生徒会長は動かない。でもそのあとの竜騎士団は会長が取り込むよ」

「竜騎士団の大半が一般生徒なら自警部としてグナントの勢力と衝突する真似は避けたい。どうする？」

部長2人にユーマは迷いなく答える。

「殴って埋める」

「おい」

基本方針は変わらなかったユーマ。突っ込むブソウ。

「馬鹿は殴る。埋めて反省させる。それは変えません。問題は《幻創獣》の力だ。だから《竜使い》の力を殺します」

「どういうことだ？」

「《竜使い》を皆の前で正面から完膚なきまで打ち破る。竜の力は大したことないと知らしめるんです。アイツの《竜使い》である意味を殺します」

要するに《竜使い》と竜騎士団の持つ『竜』を無力化して『利用する価値なし』と評価を底辺まで落とすということ。

「あとで《幻創獣》のことを詳しく聞いておきたいんだけど……イース、わかる？」

「……専門家を紹介する。それでいいか？」

「ありがとう。それと部長さん」

「何かな」

部長はユーマが依頼してくるのだとわかった。彼女は人格が変わるように表情が冷たくなる。

「時間稼ぎをしてほしいのです。誰にもばれずにユウイを倒す舞台と戦力を準備するために。期間はエースの選定が終わる時まで。頼めますか？」

「５００万」

報道部部長は告げた。

「今から2週間以上情報操作をしろというのね。そのくらい出さないと協力しない」

学園から、生徒会から、そして《竜使い》から1人の人間の行動を隠し、匿うのだ。破格の値段だった。

「これはボクだけじゃ無理だね。報道部を総動員したらこんな額じ

ゃ済まない。おまけして５００万。あと４００万をどうする？」

彼女は試している。報道部すべてを無償で協力することが立場上できないのだ。

そしてユーマには秘策があった。

「情報を部長さんに売ります」

「――！！　何かな？」

ユーマはブソウを見ると彼に自分の武器を預けた。

「ブソウさん。少しだけ席を外します。２人だけで話をさせて下さい。風葉、砂更もここにいてくれ。部長さん、いいですか？」

手荒な真似はしないと確認をとるユーマ。

「わかったよ。楽しみだね」

そして彼女は見事に罠にかかった。

＋＋＋

報道部部長は情報を扱う身としてユーマの売る情報に興味があった。なにせこの少年自体の情報が少ないのだ。

西にある風森の国の出身というわけではない。東国によくいる黒髪の少年。なのに身分証明に使うフリーパスが風森の王族仕様。でも召使いというところから訳がわからない。

風森の姫、エイリークの《守護の短剣》を持ち、2体の精霊と契約した《精霊使い》。おかしなブースターを使うなどと彼に取材するだけでも価値のある情報が得られると彼女は踏んでいた。

さらにユーマは《旋風の剣士》、《銀の氷姫》と知り合い以上の関係だ。他にもエルド兄妹やブソウが目をかけている《盾》の少年など彼の周りには注目の生徒が多い。

その中でも《射抜く視線》、ジン・オーバの情報は喉から手が出るほど欲しい。

噂の1年生で美少年。彼の情報は女生徒に高く売れる。写真なら安くて2千からだ。

最近最速の情報ではジンが新入生で1番と噂の美少女を助け、それがきっかけでその彼女とダークエルフの少女が彼を奪い合っているとか。

とにかく部長の彼女は楽しみでドキドキしていた。知らないことを知るという喜びは今の彼女を作る大きな要素の1つだろう。

「実は部長さんに売ろうと思った情報はまだ持っていません。それでですね」

ユーマ、爆弾を投下。

「部長さんはブソウさんと付き合ってるんですか？」

「ぶっ！」

意表を突かれて噴きだしてしまった。

「あれ？　違った？」

「ぶぶぶブソウ君とボクが！？　ナニヲイッテイルノカナ」

反応は上々だった。

「あれだけ親しそうにしてたのに？　内緒の話でしたか？」

「ちがう。そ、それはボク達が部長同士というわけで……それよりも君、売る情報が今はないってどういうこと？」

「片思いか」

「ちーがーうー」

話を逸らそうにもユーマは話題を変えない。

「違うのか。だったらリアトリスさんかな？」

「……何だと？」

ピク

「《竜使い》に襲われた時ブソウさんと来てくれたんですよ。２人は一緒に行動することが多いんですか？」

「し、知らない」

気にしないふり。

「あの2人も仲よさそうだもんなぁ。同じエースで戦士系だから気が合うのかも。リアトリスさんもキリッとした美人だし」

ピクピク

「きっとそうなんだろうなぁ。俺の事情聴取のあとも2人は裏でこっそり……」

ぶちっ

「だーーーっ!!　話せ。その話を詳しく話せぇえええええ!!!」

「嘘です」

「……へ？」

真っ赤になって固まる部長。リアクションありがとうございます。

「片思いですね」

「ううっ。ボクを脅迫する気？　だとしたら報道部すべてを敵にまわすよ」

あることないことでっちあげて学園から消してやると彼女は脅す。

「まさか。協力ですよ。というわけで俺が提供しようと思うのはブソウさん関係の情報です」

「なんだって？」

「ブソウさんにはしばらくお世話になるつもりだからそれとなく情

報収集しますよ」
「そのくらいの情報ならボクだって」
「警戒されてるでしょ？」
「うっ」

図星だった。

「からかい過ぎたんじゃないですか？　きっとブソウさん好かれてるとは思ってませんよ」
「……君はボクのことなんだと思ってるの？」

ユーマは正直に答えた。

「好きなんだけど素直になれなくていぢめちゃう、恋して悩める女の子」
「……」

言われると恥ずかしいものがあった。

「部長さん秘密主義だから誰にも相談したことないでしょ？　手伝いますよ」
「き、君に何ができるというのさ！」
「俺はベテランです」

カップルをくっつけるのは、とユーマは胸を張る。部長は信じられない。

「君が？　嘘でしょ」
「本当ですよ。実例を話しましょうか。あるところにコーキ君とユーカちゃんという年頃の2人がいましてね……」

それからユーマは小一時間ほど話し込む。最後の方は兄と実姉に対する愚痴のようなものだったが。

「そんなことまでして通じないの！？　ニブイ男なんて死ねばいいのに！！」

部長は面白いほど話に喰いついた。

「俺もじれったい2人を見てやきもちしましたよ。兄ちゃんと2人でどれだけ策をめぐらせた事だか」

「そ、それで2人は？」

ユーマは不敵な笑みを浮かべて親指を立てる。ビシッ

「光輝さんに比べたらブソウさんなんて軽い軽い。彼の個人情報に俺のアドバイス。分割でどうですか？」

それは４００万分の情報と助言を払い終えるまで協力し続けるということ。

部長は揺れる。

「で、でもブソウ君にはリアトリスが……」

「俺にはエイリークがいる！！」

「――！！」

「リアトリスさんの後輩であるあいつからライバル（と部長が決めつけている）の情報も集めましょう。何ならブソウさんはアギやリ

ユガ達から話を聞いてもいい」

揺れる揺れる。

彼らの身近にいる後輩たちならば取材班の情報よりも価値の高いものが得られるかもしれない。

「敵を知り、己を知らば、百戦危うからず。これで『敵』は知ることができます。あとは部長さん次第です。」

情報戦の極意のようなことまで言われた部長。なんでこんなことになったのだろう？

「さらに！　甘党のブソウさんを虜にする姉さん直伝のお菓子のレシピ。これまでつけてどうだぁ！！」

「買ったぁ！！！」

勢いだった。

２人は手を組む。

「商談成立。２人で勝ちましょう」

「ありがとう。ボク、頑張るよ」

頼もしい協力者を得て決意を新たにする報道部部長。卒業するまでに告白してやると意気込む。

「頑張りましょう。だから俺にも力を貸して下さいね？」
「……あ」

＋＋＋

戻って中等部練金科棟。

「突撃！　リイィィィズ学園！！　レポーターは何と部長であるこのボクだぁあああああ」
「「……」」

ハイテンションで練金科棟の１室に飛び込む部長。残された２人はついていけない。

「高等部の取材の方ですね。お待ちしてました。……イースさん？」
「よぉ、ルックス。元気にしてたか？」
「……」

笑顔で迎えてくれたのはかわいらしい少年。くせのある金の髪はふわふわして天使のようだ。

ルックスと呼ばれた少年はイースの顔を見ると顔を曇らせた。

「……何の用ですか。《幻創獣》の取材だと偽って僕の所に来たのは？　あの人には手を貸さない。そう言ったはずです」
「そうだったな。騙したのは謝るが用件は別だ。俺も《竜使い》を裏切ったクチだからな。話があるのはこいつだ。幻創獣のこと教えてやってくれ」

イースはルックスにユーマを紹介する。

「彼はユーマ・ミツルギ。《精霊使い》だ」

「――！！　あなたが。はじめまして、僕は」

話は聞いていたが実際の少年を目の前にしてユーマは信じられなかった。

少女で通じるような彼が《幻創獣》の生みの親。そして、

「僕はルックス・グナントです」

《竜使い》の弟だった。

＋＋＋

2－11b　取調室　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

《幻創獣》の生みの親、ルックスに出会うユーマ。

《皇帝竜》の力の正体を知り、彼は対策を立てはじめる。

次回「幻創獣」

「なんだそれ……豆？」

２－１２ａ　幻創獣　前（前書き）

ユーマＶＳイース。幻創獣対決

？？？ＶＳリザードマン。

2－12a　幻創獣　前

＋＋＋

むかしむかし、ほんのすこしむかしのはなし。

あるところに仲の良い兄弟がいました。

兄は故郷にある竜の伝説が大好きで、小さな頃は弟によく竜の話をしてあげました。

「いつか本物の竜がみたいな」

それは兄の夢でした。

強くて大きな竜。街の美術館にあった空飛ぶ竜の絵に衝撃を受けた兄は、ふと弟に自分の夢を語りました。

弟は兄が大好きでした。

弟は女の子のようなかわいらしい顔をしていたので昔からよくいじめられていたけれど、兄がいつも守ってくれました。

優しかった兄。兄思いの弟。兄の夢を聞いた弟はいつかその夢を

叶えてあげたいと思っていたのでした。

それから。

「……できた。やったぞルックス！　まるで伝説が蘇ったみたいだ」
「うん！　でもここまですごいものを想造できたのは兄さんのおかげだ」

技術士の少年、ルックスは嬉しかった。故郷にある黒竜の伝説。
それを自分の手で再現してみせた偉業は誇れるものだ。

そして何よりも兄が喜ぶ顔を見ることが嬉しかった。

「竜。最強の竜。ボクの、ボクだけの竜。はは、あははははは」
「兄さん？」
「ルックス。これからだ。伝説の竜は最強の存在。こんなものじゃない。俺達で強くするぞ。誰にも負けない最強の竜にするぞ」
「うん」

兄は竜に強い思い入れがある。だから興奮しているのだろうとルックスは思った。でもそれは兄の異変に気付きたくなかっただけかもしれない。

竜を再現したその日。仲の良かった兄弟は少しずつ歪み、すれ違って行く。

＋＋＋
幻創獣
＋＋＋

魔術師系の特殊クラスに《召喚士》というものがあった。過去形である。

召喚士は大量の魔力を媒体に異界から《幻獣》を《召喚》する能力者だ。使役した幻獣の力は精霊以上とされ魔術師系の最強クラスであったと言われている。

しかし世界の魔力が枯渇した現在。４００年前からある召喚術の術式は今も残っているが魔力がなくては幻獣を《召喚》することができない。ゲンソウ術で再現しようとも《召喚》の術式自体が未だ研究中であった。

そもそも人は存在するはずの《異界》というものがイメージできず、《幻獣》がどんなモノかもわからなかった。使い手のいない《召喚士》の存在は《精霊使い》よりも稀少、というよりも幻のクラスである。

それが1年ほど前に『幻獣を再現』しようとし、《召喚士》を再現しようとした技術士がいた。

技術士は崩壊した《召喚陣》のある東の遺跡の資料からとある『システム』を見つけた。そのシステムを召喚士の術式とゲンソウ術を組み合わせて修復し、同時に１つの腕輪を作る。

腕輪は修復したシステムと併用することで力を発揮するブースターだった。それは《幻獣》を創り『育てる』という今までにないものだ。

創られた幻獣を《幻創獣》と呼ぶ。初期の幻創獣は小型の魔獣程度であって幻獣と呼ぶにはその能力はかなり低いものでしかなかったが、研究を重ねついには魔獣のなかでも最強種のひとつである竜を想造するに至った。

それは黄金の角と爪をもつ巨大な黒い竜。

竜を創り《幻獣使い》という新たなクラスを創りだした偉大な無名の技術士。

その正体は当時１４歳になったばかりの少年だったというが公にされていない。

＋＋＋

「幻創獣はまずゲンソウ術で素体を《幻創》してこの《調整器》で初期能力を設定します」

ルックスはユーマ達に《調整器》と呼ぶ筐体を見せながら《幻創

獣》を創る過程を説明した。

「設定を終えた幻創獣は専用の腕輪に《封入》します。腕輪は幻創獣を《現創》して《現操》するためのブースターです」

「……イース君。君はこれ理解できたの？」

「いいえ。俺は与えられた《竜人兵》を使っていただけなもので」

報道部部長、そして実際に幻創獣を扱うイースは説明を聞くことを放棄した。２人にはちんぷんかんぷんな話だったのだ。

「能力設定？　《幻創》した時点で強さなんか決まらないの？」

「いえ。ゲンソウ術を使うのは幻創獣の姿形をＩＭ化するためです。もちろんイメージの情報量が幻創獣の強さを決めるのですけど、ＩＭ化しないと遺跡の『システム』に対応できないんです。幻創獣はあくまで遺跡の産物ですから」

ルックスの話についていけるのはユーマだけ。

ユーマは幾つか質問しながら幻創獣の仕組みを理解していく。

「わかった。ゲンソウ術でモンスターのイメージを抽出して『キャラクターメイキング』する。《調整器》はパワーやスピードなんかの能力にボーナスポイントを割り振る『キャラクターエディット』。そして腕輪のブースターは幻創獣という『キャラクターデータ』を『インストール』して実際に操作する『コントローラー』というわけか」

１人納得するユーマ。

「「???」」
「わかったのですか？　僕にもよくわからない単語があるんですけど」
不信に思う3人。そしてユーマはルックスが驚くことを言う。
「要するにゲームだってことがわかった。ふざけてるね、これ」
「なっ、どういうことですか！」
馬鹿にされたと思ったルックス。研究の成果をゲーム（遊び）だと評価されたのは許せなかった。
「ヒトのかたちに捉われない『もう一つの自分の身体』となる幻創獣には可能性がある。なのにゲームだなんて。何がふざけてるって言うんですか」
「人を傷つけるおもちゃだよ。《竜使い》がそうだ」
「……」
何も言えなかった。
「ごめん。でもこれによく似た物が俺のせか……故郷にはあるんだ。自分だけの《アバター》を作って冒険して競い合わせるゲーム。結構好きだったよ」
友達や兄とよく対戦していた。自分のいた世界の事をふと思い出すユーマ。
「あれは仮想だったけど幻創獣は《現創》する。実体を持つ本物になる。イースは誰でも扱うことができるって言ってた。簡単に遊べ

るゲームの感覚で手にするには大きな力だ。危険すぎる」

ユーマはティムスに重傷を負わせた正体がゲームもどきだとわかって怒りを感じたのだ。

俯いてしまったルックス。兄の事を言われると辛いものがあった。

何も考えず扱うのが簡単だからと《竜人兵》の力を振るい続けたイースもまた沈黙した。

「「「……」」」

重くなる雰囲気。

だがそこは先輩である報道部部長が空気を読んで話題を変える。

「とりあえずさ、ボクにも幻創獣見せてよ。幻創獣の可能性や危険度も実際に見た方がわかりやすいよ」

「そうですね。……ミツルギさん。よかったら創ってみませんか？僕はあなたの意見が聞きたいです」

「ユーマでいい。わかった」

それから３０分後。

「あのうユーマさん？」

「何？」

戸惑うルックス。ユーマは調整器に繋がったヘルメットを被って

いる。

目元まで覆われたヘルメットはユーマのイメージから幻創獣の姿を読み取る装置だった。

「こんなのでいいのですか？　いえどんな姿の幻創獣にしても問題はないですけど」

「そうかな。これ子供向けで人気あったけどな。基本設定だけだけど終わったよ」

「……わかりました」

あとはルックスが腕輪に幻創獣を《封入》するだけ。

「できました。はい」

「よし。それじゃ皆の前でお披露目するか。おーい。イース、対戦しよう」

＋＋＋

練金科棟の実験室。

高等部同様ここは戦闘にも耐える丈夫な構造になっている。

「早速実戦て大丈夫か？」

「まあやってみないとね。いくよ」

ユーマは受け取った腕輪を右腕に付けて（左は白砂の腕輪がある）

幻創獣を想造する。すると腕輪が輝いた。光がユーマの足元の傍に移り、幻創獣の形を創っていく。

ゲンソウ術が発動。腕輪に内蔵された幻創獣の《幻想》が《現創》した。

「おおっ……えっ？」

「……なんかでてきたね」

現れたのは小型の幻創獣。大きさはユーマの膝くらいまでしかない。

ひょろっと長い手足を身体から生やしてシルクハットを頭にのせ、ステッキを持っている。

つぶらなかわいらしい瞳に方眼鏡。外側にくるっと巻いた髭を一丁前に生やしたそれはまるで紳士。

「何だそれ……豆？」

でもそら豆。

緑色の身体はソラマメだった。一頭身の、バカでかいソラマメのばけもの。

「できたよ。はは、懐かしいなー。実寸大なんて初めて見たよ」

デザインの大元はユーマの世界にあった子供向けアニメのキャラ

クターである。ユーマは笑いながらルックスに操作方法を訊ねた。

「これどうやって操作するの？　あとこの半透明のスクリーンは何」

「……えーと幻創獣は思考操作です。イメージすれば腕輪にある《操獣》の術式が補助してくれます。あと幻創獣を呼ぶと目の前に出てくるそれは《ウインドウ》と言うそうです。幻創獣の状態や視点を見ることができます」

どうやらこれが遺跡のシステムらしい。半透明のスクリーンには耐久値などのステータスが表示してある。

「ＨＰに必殺技ゲージ？　ますますゲームだな。どれ」

とりあえず幻創獣を動かしてみるユーマ。

頭を下げるようにイメージすると、首も腰もないソラマメの紳士はシルクハットを脱いで優雅におじぎをして見せる。

滑稽だった。

「はは、おもしろいや。豆のくせに」

ソラマメの頭を小突くユーマ。実体化した幻創獣は棒のような足では支えきれずころころと転がった。

「へぇ。あれが幻創獣。よわっちそうだね。ボクにも創れるかな？」

「幻創獣の姿は術者のイメージ次第です。ぬいぐるみのようなマスコットも創れますよ」

ルックスは部長に説明を捕捉。

「でも姿形に捉われてはいけません。幻創獣の強さは設定時にイメージした情報量（ＩＭＰ）できまるんです」

「よーし。イース、やろう」

「おいおい」

乗り気じゃないイース。ユーマの幻創獣はどう見ても弱そうだ。

ソラマメは手にしたステッキを細剣のように持ってステップを踏む。まるでフェンシングの構えのようだ。豆のくせに様になっているのがむかつく。

「イースさん、本気でいってください」

「本気!?　冗談だろ?　だって豆だぞ」

ルックスは冗談で言ったわけでない。

「ミツルギさんの幻創獣。あれでも初期ＩＭＰが5千あるんです。《竜人兵》の2倍です」

「……まじ?」

ＩＭＰは幻創獣をＩＭ化した際の情報量を数値化したもの。イメージの密度が濃いほどポイントは高い。

このポイントを幻創獣の各ステータスに割り振ることで幻創獣の強さが決まる。ＩＭＰはゲームでいう経験値やアビリティポイントのようなものだ。

つまりＩＭＰの総量が多いほど基本的に幻創獣は強いのだった。

「冗談じゃない。竜人兵！」

イースも幻創獣を呼ぶ。

リザードマン。

イースの幻創獣は黒みのある鱗に覆われた２メートルを超える身体の上に鎧を着込み、手には偃月刀と円形の盾を持つ。

尻尾はあるが翼はない、竜というよりもトカゲ人間といった感じだ。

「準備できた？　ならいくよ。《じぇんとる・ビーン》！！」

「名前あるのかよ。幻創獣同士なら俺に分がある。できたばっかりの豆に負けるか。いけ！」

正面からぶつかり合うリザードマンとソラマメ。

「は、はやい！？」

リザードマンの剣をソラマメはしゃがみ込んで躱した。２撃目はシルクハットを手で押さえながらひょい、と身軽にジャンプする。

「隙あり」

ソラマメがステッキでリザードマンの額を突く。直撃したリザードマンの耐久値の１割を削った。

「くっ、油断しただけだ。切り刻め」
「必殺、エレガント・ローリング！！」

優月刀を振り回すリザードマン。ブンブンと唸る剣は並の力ではない。

対するソラマメの紳士は手足を引っ込めて転がった。

どこがエレガントなのかわからないが歪な楕円形の体を活かして不規則にころころ転がる。弾力があるのか時折大きく飛び跳ねて狙いを絞らせない。

ソラマメは勢いよくリザードマンの頭を跳び越えた。そして鎧の継ぎ目にステッキの曲がった部分をひっかける。

「よいしょーー！」

さらには背負い投げの要領で引っかけたステッキを振り下ろし、リザードマンの巨体を投げ飛ばして床に叩きつけてみせた。

「すごいね。人の動きじゃないよ」
「豆ですよ。あれ」

幻創獣同士の対戦を観戦する部長とルックス。

「イース君の幻創獣は強そうだけど動きが素人っぽいね」
「思考操作は術者のイメージが大きく反映されるんです。魔術師のイースさんに剣の心得があれば竜人兵の動きも多少違ったでしょう

けど」

実は《グナント竜騎士団》の幻創獣は竜といいながら人型のものが多い。思考操作が容易だからだ。

「それじゃあミツルギ君は？　彼もあんな奇抜な動きができるのかな？」

「まさか。でも初めてであれだけ動けるのは不思議です。それにＩＭＰの初期値の高さ。ユーマさんはあの幻創獣にどれだけのイメージを注ぎ込むことができたのだろう？」

アニメ１クール分だった。

ユーマの幻創獣はアニメのキャラクターそのもの。コミカルな動きはユーマがアニメで見たままを再現したものだ。

魔獣がいても擬人化したキャラクターなんてないこの世界では存在自体が意表を突くものである。翻弄されるイースの竜人兵。

「３割切った。あと少しで勝てるぞ」

ユーマの方はまだ８割以上残っている。ＨＰゲージを見ると一方的な展開だった。

「くそ、初心者に使いたくなかったけど負けるよりましだ。喰らえ」

イースは５つまで溜まったリザードマンの『必殺技ゲージ』を１本消費。

するとリザードマンは口を大きく開けて《火球》を放つ。

ソラマメに直撃。

「ちょっ、幻創獣って術式使えるの？　えっ！？」

「必殺！」

動きを止めたソラマメにリザードマンが急接近。今まで見せた動きではない。

「竜波斬（ドラゴンスラッシュ）」

さらに必殺技ゲージを2本消費。リザードマンの剣は青く輝く光の軌跡を残しながら一閃。

ソラマメの幻創獣は目を×にして真っ二つに割れた。

「……俺の勝ちだな」

「待てって。なんだよあれ。反則じゃないの？」

イースに文句を言いたいユーマにルックスが止めに入る。

「ユーマさん。落ち着いてください。イースさんのあれは《必殺技》。幻創獣はＩＭＰを消費して最大３つまで必殺技を設定できるんです」

「というわけだ。反則じゃないぜ。もしかして《精霊使い》に初めて勝ったのは俺じゃないのか」

イースはあははと笑う。初心者相手に必殺技のコンボを使ったことは大人げないような気もするが。

「……もう1回」
「は？」
「対戦ものは先に2本取った方が勝ちなんだ。だからもう1回」
「やだね」
イースは逃げた。ユーマは追いかける。
「ミツルギ君、絶対に遊んでるよね」
「……ええ。でもユーマさん言ってました。僕が修復した遺跡のシステムは本来対戦ゲームだったんじゃないのかって」
対戦を楽しんでいた2人をみるとそう思ってしまうルックス。
「幻創獣の在り方か。僕は間違っていたのかな」
「いいや。君は間違うどころかまだはじまっていない。今の幻創獣は《竜使い》だけのもの。君のものじゃない、利用されてるんだ」
報道部部長は思う。ルックスはまだ子供だ。もしも彼の兄以外にこの少年を導いてくれる誰かがいれば、幻創獣は竜ではないもっと素晴らしいものになったのだろうと。
「とにかく、君のお兄さんを止めよう。それからでもゆっくり考えればいいさ。ルックス君が信じる幻創獣の可能性をさ」
「……はい」
ルックスはユーマ達に協力すると兄の話を聞いてすぐに約束した。
迷いはある。はっきりとした形で兄と敵対することになるのだか

ら。でもルックスは決めたのだ。

学園で間違った道を進もうとする兄と幻創獣を止めるために。

「イースもう1回！　いや待て。ルックス、幻創獣の再設定お願い。必殺技つけて」

「あっ、やめろ。ずるいぞ」

「「……」」

すべては《精霊使い》の手にかかっている。

＋＋＋

2－12b　幻創獣　後（前書き）

ヒーロー見参

2－12b　幻創獣　後

＋＋＋

「……ここは……どこだ？」

緊急病棟の病室で目覚めた茶髪の少年。

「気がつきましたね。兄さん」

少年のベッドの隣にある椅子に腰かけていたのは彼の妹だ。

「ポピラか。……。！！　俺は」

ティムスは《皇帝竜》に襲われたことを思い出した。ベッドから飛び起きようとして自分が何ともないことに気付く。

「傷が？　くっ」

「馬鹿ですね。急に動くからです。傷は治っても流れた血は戻りません。これを」

立ちくらみのするティムスにポピラが差し出したのは真っ赤なボトル。

「飲む造血剤だそうです。アラム先生からの差し入れです」

「アラムの奴か。……ソレ、俺に使ってないよな」

ソレとはポピラの膝の上に乗っている赤黒いゼリー状のナマモノ。

ぐじゅぐじゅと音をたてるのはアラムの試作品である治療用の人造肉。

「ぐろちゃんですか？　いえ。……兄さんと1つになれなくて残念、と言っています」

「そんなモノに名前つけるな《同調》するな気味の悪いこと教えるな。そして笑うなこの愚妹が」

「馬鹿ですね」

兄妹のいつものやりとりだ。ポピラはもう大丈夫だと心の内で安堵した。

「……あれからどのくらい経つ？」

「次の日のお昼過ぎ。もうすぐ夕方です」

「何だと？」

ティムスは確かに重体だった。それが1日も経たずに完治しているのはおかしい。

「ミツルギさんのおかげです。あとあの人」

ポピラは《黙殺》のことをよく知らなかった。

「チッ。借りは作りたくなかったんだがな。それでアイツは？」

「ミツルギはブソウと一緒にいる。彼はどうやら《竜使い》と一戦交えるつもりのようだ」

答えたのはポピラではなく隣にいた赤毛の騎士。

「《烈火烈風》」

「護衛だよ。また襲われる可能性があるからね」

腰に剣を提げた制服姿のリアトリスはティムスが目覚めるまでの事を大まかだが説明した。

「成程な。わかった。俺達の護衛がアンタなのは不満だが」

「なんだと？」

仮にも《Ａナンバー》の１人である《烈火烈風》の騎士。実力は申し分ないのだが。

「病室だから気を使ったのかしらねぇが、鎧着てない《烈火烈風》なんざただのボケねーちゃんなんだよ。おいポピラ、行くぞ」

「ボケ！？　っておいまて。それは聞き捨てならない」

ムッとしてティムスが病室から出て行こうとするのを呼び止める。

「チッ。護衛はお前１人だよな？　この病室に来るまで何度部屋を間違った？」

「……うっ」

「それにこの割れた花瓶は何だ？　大方見舞いの花を飾ろうとして転んだんじゃないのか？」

「ううっ……」

「馬鹿でしたよ」

容赦ないポピラの追い打ち。

図星だったが花瓶を片付けず兄の見える所に置いた彼女は意地が悪い。

「そ、それよりもどこへ行く気だ？　襲われた理由がはっきりしないんだぞ。危険だ」

「理由なら大体わかる。俺だけじゃなくポピラまで狙う理由。確認がとりたい。護衛する気ならさっさと鎧とってきやがれ」

「……わかった」

渋々と病室を出ていくリアトリス。

「兄さん」

「借りは返す。ユーマも、《竜使い》にもな」

借りを返すといってもティムスは《竜使い》、つまり《皇帝竜》に勝つことができない。だからユーマに手を貸すことを決めた。そのほうが勝算が高いからだ。

そう思うことで誰かを助けようとする自分を誤魔化した。

「馬鹿ですね」

（ただ友達だから助けるというだけの話です）

双子の妹には《同調》なしでも筒抜けだったが。

「おい」

「何も思うことはありませんよ。ただこれは飲んでください。血が足りないのは本当ですから」

「……うげぇ」

アラム特製の飲む造血剤は赤くてどろりとしていて、牛乳の味がした。

＋＋＋

一方その頃。

「よっしゃ。これで2本先取で俺の勝ち」

ユーマはイース相手にまだ幻創獣で遊んでいた。

「秒間６０粒射出するステッキ型機関銃、《ダイズガン》。原作通り強いなー」

「なんで必殺技まで豆なんだよ」

幻創獣をルックスに再設定してもらい、ユーマはとことん遊ぶ。

イースと幻創獣を交換したりして今まで3セットマッチを5回ほど繰り返していた。

「くそっ。もう竜人兵じゃ駄目だ。俺も創り直そうかな」

「あのうユーマさん？　これって幻創獣の力を検証するためにやってるんですよね？　遊びすぎなんじゃ……」

「ん？　そうかな。それじゃあ対策を練るか。イース、残りの3人も呼んでまたあとで対戦しよう」

「わかった」

まだ遊ぶつもりらしい。

＋＋＋

再びルックスの研究室。

中等部の生徒で個人の研究室が与えられていることは、彼が優秀な生徒である証拠といえる。

「それでミツルギ君。実際に幻創獣を使った感想は？」

第１回『打倒竜使い作戦会議』。司会進行及び書記、さらに情報提供は報道部部長。

「やっぱりゲームっていう印象が強い。キャラメイクに自由度が高いから実体化させないで対戦ゲーム化したら『ドラゴンライダー』より人気出るかも」

「そうだね。それにこんなかわいいのも創れるし。自分で動かせるのもマルだからヌイグルミにしてもいいかもね」

「……あの、幻創獣を商業化する話じゃないんですけど」

抑え役は最年少のルックス。控えめに突っ込む。

部長は膝の上に自分の創った幻創獣を乗せ、その頬の部分を引っ張って遊んでいる。

「わかってるよルックス。……正直幻創獣の能力は思った以上だ。実力は《必殺技》込みでランクＣ。一般生徒でも数時間で使いこなせる点でも即戦力になるよ」

ユーマは幻創獣の感想を伝えた。

幻創獣の《必殺技》は「一定のダメージを受ける」など発動条件を設定する必要があるが魔術師の術式やゲンソウ術の技に匹敵する威力を持つ。

他にも飛行能力などの特殊能力も設定にＩＭＰを大きく割り振ればどんな能力も不可能ではないらしい。

「だから急に強くなったと勘違いしやすい。扱い易い力は危険だ。ルックス、竜騎士団の幻創獣はイースの《竜人兵》くらいの能力なの？」

「そうです。竜騎士団にある腕輪の数はおよそ８０。幻創獣の総ＩＭＰはユウイ兄さんの《皇帝竜》と上位幹部の人を除けば平均２千程度です」

ルックスはグナント竜騎士団の陣容を説明。

まず団長である《竜使い》、ユウイ・グナントの《皇帝竜》。次に上位幹部４人がそれぞれＩＭＰ１万以上の《竜》を持つという。

「一般の《竜》は僕が兄さんの話を元に創ったものですからわかります。竜は大きく分けて《竜人兵》、《竜牙兵》、《岩蜥蜴》、《火蜥蜴》、《飛竜》の５種です」

リザードマン、ドラゴン・トゥースウォーリアーはそれぞれパワー型、スピード型の主兵力。

大型で岩肌のロックリザードは防御型の壁役、サラマンダーは火

炎の息を使った遠距離型。

「そしてワイバーンが飛行能力を活かした偵察に対地攻撃と輸送を担当か。一通り揃ってるな。あれ？」

「ちょっと待って。幻創獣の腕輪が８０？　確かイース君の話だと竜騎士団の人数は約２００人だって」

ユーマと部長はイースを見る。

「実際に使える腕輪の数はルックスの言うとおりだ。あの腕輪はお前にしか作れない。ルックスが団長から離れたから腕輪の数が足りなくて騎士団の中でも格差ができてしまった」

竜騎士団に入団しても幻創獣が与えられるわけではない。竜は《竜使い》に忠誠を誓うエリートにのみ与えられるらしい。

「ふざけた話だね。まるで今の生徒会長みたいだ」

「似た者同士だから敵対したのでしょう。竜騎士団も学園の技術士を集めて腕輪の研究をしてるんだ。実は腕輪は作れなくても《調整器》のほうは大方完成している。新型の竜やルックスが創った騎士団の竜も強化されるだろうし腕輪の数も時間の問題だ」

「そんな」

ルックスにとって腕輪の数を増やさないことが兄へのささやかな抵抗だったのだ。

「ユーマさん……」

「……」

不安になるルックスはユーマを見る。彼は黙って考えている。

（足りない）

ユーマは考える。勝つ手段が足りない。

《竜使い》に負けはしないと思う。《精霊使い》としてユーマが《本気》をだせば《皇帝竜》だけでなく騎士団もまとめて多分倒せる。ただしそれでは意味がない。

幻創獣を悪用させない為にも《竜》は弱いものだと皆に見せつけなければいけない。辛勝しても「《竜》は強い」「幻創獣は『兵器』になる」ということを広げてはいけない。

ユーマの理想は大舞台で《竜使い》と幻創獣同士１対１で戦い、圧倒的に『ふざけて』勝つこと。馬鹿にした見世物にするのがよかった。

しかし《竜使い》の幻創獣、《皇帝竜》は強い。

ユーマは《じぇんとる・ビーン》をはじめ幻創獣を何度か創ってみたものの、初期ＩＭＰが５千以上から１万前後の幻創獣しか想造できない。

黒竜の伝説をモチーフにした《皇帝竜》の初期ＩＭＰは約１０万。幻創獣は実際に動かしたり戦わせることでイメージを《補強》し、ＩＭＰを増加できるので現在の総ＩＭＰはそれ以上だというのだ。

今のままでは幻創獣では勝負にならない。ユーマには《竜使い》に勝つ手段が足りなかった。

必要なのは《皇帝竜》に勝てる幻創獣。そして《竜》を無力化する方法。

期限はエースの選定が終わる昇級試験の最終日。あと2週間と数日しかない。

（時間がない。手っ取り早いのは幻創獣のシステムに手を加えることだけど俺は専門外だ。ルックスだけじゃ厳しい。腕の立つ技術士の力が要る。せめて……）

「ティムス達がいれば」

その時、困り果てたユーマの呟きに答える少年がいた。

「呼んだか」

「えっ？」

振り向くユーマ。いたのは茶色で長髪の少年と顔立ちが少年にそっくりなみつあみの少女。

「ティムス？　ポピラも」

来たのはエルド兄妹だけではなかった。自警部部長に鎧を着た騎士もいる。

「ったく、自警部にいると聞いて行けば中等部だと？　怪我人を歩かせるな」

「嘘です。もう完治してますよ」

「どうしてここへ？」

元気そうだと安心するユーマ。だがなぜここへ来たのかは疑問だった。

「ブソウ君にリアトリスまで」

「彼らの護衛だ。それにエルド兄妹が狙われた本当の理由がわかった。その確認の為に俺達はここへ来た」

「それって」

「お前がルックスだな」

部長がブソウに問いかけた時、ティムスはルックスと向き合う。

「《竜使い》の弟で幻創獣の生みの親。間違いないな？」

「……はい。それが、ぐぁっ！」

「ルックス！？」

「兄さん！？」

ティムスはルックスを突然殴った。椅子ごと倒れるルックス。

「お前は、お前が創ったモノが何をしたかわかってるのか？　ああ」

「くっ、それは」

ルックスは目を逸らす。

「いいか。俺達技術士は技術、魔術、ゲンソウ術全てを駆使してモノを創ることが全てだ。創ったモノには責任を待たなければならないんだよ。おい、報道部の奴。こいつに幻創獣がやった被害件数を教えやがれ。お前は知ってるはずだ」

「タダじゃボクは教えない」

部長は同学年だが年下であるティムスの尊大な態度に口を尖らせる。

「でもルックス君。ティムス君をはじめ幻創獣が模擬戦や訓練以外の場で負傷者を出しているのは本当だよ」

「……」

ルックスにとって無関係でいられない痛い話だった。

「……僕は」

「創ったモノに対する責任だけじゃない。技術士に必要なものは技術よりも自分の作品を預けるにふさわしい使い手を見定める目だ」

ティムスはルックスを見下し、睨むのをやめない。

「肉親だからといってお前は見誤った。幻創獣の価値を貶めたのは使い手じゃない、創り手のお前だ。どうする？　今のお前は技術士として失格だ」

「責任はとります。だから僕はここにいる」

ルックスは初めてティムスと目を合わせた。

「僕にだって技術士の誇りがある。兄は僕が止めます。僕の幻創獣は僕が正しく扱って見せる！」

技術士であること、幻創獣のシステムを自分が創ったという誇りが少年を奮い立たせた。

しばらく睨みあう技術士の2人。

「……ちっ、最初からその目をしやがれ。オドオドしやがって。どのみちお前だけじゃ無理だ。おい、まずはお前の幻創獣を見せやがれ。話はそれからだ」

「ティムスさん？」

「いくぞ。ポピラ、ユーマも来い」

実験室へ向かうティムスにルックスは茫然。

「いったい……」

「馬鹿ですね」

彼女のいつもの台詞。

「迷っていたのでしょう？　お兄さんと戦うこと。顔に出ていますよ」

ポピラはルックスに《同調》したのだが嘘をついた。

「あなたの意思を兄は確かめたかったのです。あなたの協力は必要だから」

「ポピラ、力を貸してくれるの？」

ユーマはエルド兄妹の思惑がはっきりとわからない。ポピラは簡潔に答える。

「はい。兄は借りを返したいそうです。《天才》の力、必要じゃありませんか？」

十十十

それから数時間後。

「思考操作の技術は他のものよりも優れているな。これだけ別にして応用すればいいモン創れるぞ」
「腕輪の1つに《封入》、《現像》、《操獣》の3つの術式が付与されています。さらに遺跡の技術を無理やり組み合わせているなんて無駄が多いブースターですね」
「そうか。幻創獣の姿もＩＭ化した時に数値化できるのだから一度創った容姿を崩せば還元して余剰したＩＭＰができるんだ」
「改悪、デチューンてやつだね」

エルド兄妹は幻創獣の仕組みを分析、把握するとルックスと一緒になってシステムの改良をはじめた。

「暇だな」
「そうですね」
「……なんだ、それは？」
「ブショー君。かわいいでしょ」

ユーマ以外の4人はついていけずに待ちぼうけ。報道部部長は暇つぶしに自分の幻創獣を弄っていた。

デフォルメされた黄色いオコジョ。ぼさぼさした髪と眉間に皺を寄せた顔はどこかの苦労人みたいだ。

「とりあえずこんなもんだろ。ユーマ、幻創獣を喚べ」
「わかった」

ユーマは1人実験室の真ん中に立つ。

「これも結局はゲンソウ術だ。肝心なのは基本。分かってるか？」
「大丈夫。前におっさんに聞いた」
「……誰だよ」

幻創獣のシステムは遺跡の技術をルックスがゲンソウ術で修復したちぐはぐなモノ。エルド兄妹はそれを完全なゲンソウ術の術式として組み換え、再構成した。

これにより《幻創》したイメージの再現度、《幻操》による能力のチューニング、そして《現操》での操作性が飛躍的に向上している。今まで以上の幻創獣が創れるはずだった。

「《幻想》は純粋な想いと願い。《幻創》、《幻操》は考える力」

それはゲンソウ術を何も知らなかったユーマが《西の大砂漠》で出会った傭兵に唯一つ教わった言葉。

「そして《現操》、《現創》は信じる力。俺はただ自分の想いを信じて創ればいい」

《幻想》からはじまり《幻創》、《幻操》、《現操》、そして《

現創》。ゲンソウ術の基本工程を全て組み込んだ完成型の幻創獣。

ユーマはイメージする。

彼が最強と思うモノは《梟》と《狼》。でもそれとは別にもう1つ。

ユーマは銀の彗星を《幻想》した。

ユーマは信じている。

それは昔見たテレビの中にしかいないヒーローだった。でもテレビはユーマに本物のヒーローを教えてくれた。

凄惨な兄の在り方を知っているからこそユーマは信じたい。

「コメットマン」

室内なのに星が落ちる。

衝突。閃光。衝撃。轟音。

ユーマの目の前には《現創》した銀色に輝く光の戦士。

ヒーロー見参。

「す、すごい。初期ＩＭＰが１０万と２５００！！　ユーマさん、これなら」
「ティムス！」

興奮して叫ぶルックスの声にユーマは天才少年を見た。

「この俺が手を貸したんだ、当たり前だ。これでほぼ互角。やるぞユーマ、俺達は勝つ」
「おう！」

戦う幻創獣は決まった。

ユーマはこの先２週間も中等部や自警部の訓練室に籠り、ティムスとルックス、それにイース達と共に幻創獣の訓練を続けた。

報道部が《精霊使い》の失踪を伝え、噂を流したのもこの日からだった。

＋＋＋

2－12b　幻創獣　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

ティムスの協力を得て幻創獣が完成したユーマ。

特訓を続ける一方でユーマは襲撃される仲間たちを守るために動く。

次回「失踪中のユーマ」

「只今自警部は警備強化キャンペーン中です」

「ロープってどこにあるかな？」

2一xx　ユーマとティムス（前書き）

閑話

ユーマとティムスとガンプレート

2ーxx　ユーマとティムス

＋＋＋

優真が中学生だった頃。

ある日、彼は《桜道場》に忍び込んでいた。

ここは優真の師であり兄と慕う青年、真鐘光輝の義姉で古葉大和の師匠である桜井（さくらい）十六夜（いざよい）が営む武道場である。

師1人門弟1人のボロ道場。2人の兄はここに居候している。

「何をしてる？　優真」

光輝の部屋をガサゴソと漁っていた優真。背後から声をかけられてビクッとした。

「……大和兄ちゃん」

振り向けば長髪を1つに結んだ尻尾頭の巨漢の男。

190近い身長に武闘家として鍛えられた堂々とした体躯は高校生とは決して見えない。

「コウの《工房》で物色するなんて悪い奴だな。……それで面白いもんでもあるのか？」

ただ体に似合わず整った顔立ちで無邪気に笑う大和は魅力的で誰よりも少年だった。

「兄ちゃん。これ」

「……ガンプレートか」

優真が見せた物には流石に大和も顔を顰める。

「見逃して。どうしても必要なんだ」

「なぜだ？」

「友達が危ない。俺は助けたいんだ」

聞くと正義感の強い優真の友達が他校の生徒と諍いを起こし、１人で不良グループを打ち負かしたらしい。

そして報復に多人数で繰り返し何度も襲われるようになった優真の友達はとばっちりを恐れて学校でも孤立するようになったそうだ。

「あいつが悪い訳じゃない。でも１人で敵う数じゃないんだ。だから」

「どうする？」

兄の問いに優真はまっすぐな瞳で見つめ返し、

「俺が潰す、ってがっ！」

拳骨を喰らった。

「馬鹿。なんでそんな突飛な考えが出てくるんだよ。コウの真似するな」

――敵はなるべく作るな。できたら躊躇わず潰せ

確かそう言っていたのは相棒だ。あの馬鹿はあとで殴ると大和は誓う。

「それでガンプレートか」

「俺は兄ちゃんみたいに体でかくないし強くないんだ。光輝兄さんみたいに陰険な外道でもないし」

「おい」

優真の光輝に対する評価は大和もよくわからない。

「目的の為に使えるものは何でも使え、ってあいつなら言うだろうな。でも優真。このガンプレートは何だと思う？　ただの武器か？」

大和は優真に聞いてみたが答えは求めていない。彼は話を続ける。

「これは『コウの力』だ。俺が拳を鍛え上げたように弱いあいつが戦う為に作り上げたあいつの『強さ』なんだ」

この銃の形をした金属板の《杖》は、魔法を使えない人であって

空を飛べない《梟》の爪であり嘴である。

優真は知っている。彼らは天使と悪魔、それに人を守り、また敵として戦う闇を狩るモノだ。

「お前にも譲れないものがあるのはわかる。でもお前の喧嘩の為にこれを使う覚悟があるか？」

大和の手から差し出されるガンプレート。

「兄ちゃん……俺、俺っ」

優真は受け取れなかった。

今すぐ力が欲しい。でも自分とは違う兄の強い在り方を知っているから手を伸ばせない。

悔しさで俯く優真。そんな少年の頭に大和は優しくぽん、と掌をのせる。

「それでいい。お前は力を持つにふさわしい強さがないことに気付いて自分を抑えることができた。誰でもできることじゃない」

「でも」

「焦るな。今は友達の為にお前ができることをやれ。俺達がお前を鍛え、教えたことはガンプレートの扱い方じゃない」

「兄ちゃん」

優真は自分のポケットの中にある《しろいはね》を握りしめる。

もうあの時の自分じゃない。今ならもっと何かができる、そう思

えば力が湧いた。

「わかった。俺、やるよ」

「おう。無茶すんなよ。今日はもう遅いから家に帰れ。『これ』は俺が片づけておく。ユウに気付かれると怖いぞ」

「……うん」

優真は散らかした部屋と『これ』を見て、ばつの悪い顔で道場をあとにした。

「俺みたいなガキが人に説教するなんておかしい話だけどな」

優真を見送り相棒の部屋へ戻る大和。苦笑しては溜息をつき、『これ』を見た。

「で。お前は何してるんだよ」

部屋にいる『これ』とはロープでぐるぐる巻きにされたイモムシ。大和は光輝の猿轡をはずしてやる。

「……あの野郎。うしろから気絶するまで鈍器で殴りやがった。事が済むまで埋めて隠そうなんてふざけたこと言いやがって」

「……」

優真は光輝の事を兄として慕っている。という設定だったのでは？

疑問に思う大和。

「まあ、お前がやりそうなことだけどな」

「俺ならスタンガンで一発だ。こぶができるまで何度も殴らない。普通死ぬぞ」

「どのみち犯罪だろお前」

優真に悪影響を与えるのは相棒だ。やはり弟分の為にも元凶を殴って矯正しなければ、と思う大和も実はさして変わらない。

「とにかく今日の事はユウに黙っておけよ。盗みに来てお前にまで手をかけたのなら正座に説教じゃ済まないぞあいつ」

「ちっ。優真の奴ためらいもなく殴りやがったんだぞ。あの容赦ない思い切りのよさは誰に似たんだ？」

「ユウだろ」

「……」

無言で首肯する光輝。

優真は実姉を含めた3人の影響を絶妙なバランスで受けて成長している。

「優真の周囲を調べるぞ。またあの時みたいに巻き込むのは御免だ」

「たかが中学生同士の喧嘩だろ？　大げさな」

「だといいけどな」

このあと、常に最悪の事態を想定する用心深い相棒が正しかったことを大和は身をもって知る。

「俺にできること。……俺ができること」

優真は家に帰ると物置を漁ってロープとスコップを探した。

1週間後。

余所の学校に兄直伝の罠の数々を複数張り、綿密な作戦を練って3対100という状況を覆した優真。

ぼろぼろになって勝鬨(かちどき)をあげる少年達に頭を抱えるのは遅れて来た大和と光輝。

育て方を間違ったと思うよりも、鬼（優花）にばれず事件を揉み消すことに必死な兄達の姿を優真は知らない。

＋＋＋

「……くぁ」

夢を見た気がする。少し昔の思い出だ。

ぼんやりした頭で周りを見る。ここは御剣家の自室でも寮の部屋でもない。

ユーマは今、中等部にあるルックスの研究室に寝泊まりしている。身を隠している以上なるべく高等部に顔を出さない方がいいとブソウが言うのだ。

かれこれもう1週間。最初はソファの上やクッションを5人でとりあっていたが、固い床の上で寝ることにももう慣れた。

夢の事を思い出してユーマは自分のブースターを手に取る。

「あ」

そして思い出した。

「ティムスー！　起きてー」

「黙れ。朝からうるさい」

怪我人と言い張る天才少年は、1つしかない仮眠用のベッドを占有している癖に今日も朝から不機嫌だ。

＋＋＋

ユーマとティムス

＋＋＋

ティムスは朝に弱い。早朝から騒がしく起された彼は仏頂面だが、ユーマが見せた物を見るとさらに顔を歪ませた。

「ガンプレートにヒビが入ってるじゃねぇか！　スロット廻りなんかもう使い物にならない。これどうしやがった」
「《竜使い》とやりあったときにちょっとね」

ユーマのあたらしいガンプレート、《レプリカ2》はカートリッジの換装が不可能なくらいグリップが破損しており、本体にも小さなヒビが全体に広がっていた。これではただの金属板である。

ティムスはユーマの説明を聞くのと同時にガンプレートに触れて《解読》する。

「形はそのままだから《補強》で風属性くらいは使えるんだけど」
「馬鹿が。見えないところにも亀裂が入ってるんだよ。あと2、3発でぶっ壊れるのがオチだ」

壊れた原因を探るティムス。そしてガンプレートに差し込んだ2枚の金属板を見て目を見開いた。

「スロットに《イグナイター》が2枚だと？　なんて無茶しやがる」

《イグナイター》は魔石に含まれた魔力によって術式の威力を瞬間的に高めるブースターの種類の1つ。このゲンソウ術を半魔法化する機能を持つブースターは暴発する可能性があって扱いが難しく、使い捨ての切り札とすることが多い。

「《皇帝竜》に正面から撃ち合うには今のガンプレートは火力不足だったんだ。《イグナイター》を2倍にして《補強》することで何とか押し勝てた」
「それが砂の魔獣か」

《サンドワーム・ブラスト》

ユーマが編み出した新技の1つ。これは《ストーム・ブラスト》に砂の精霊の力を組み合わせて大量の砂を相手にぶつける質量攻撃、《砂塵砲》をさらにイメージで《補強》している。

それは砂で模造した魔獣の化身。付与したイメージは『喰らう力』。思い出したくはないが、ユーマは《砂漠の竜蛇》に丸飲みにされた経験があるので強力なイメージを付与することができた。

《皇帝竜》の必殺技、《カイゼル・バースト》。あの熱線を『喰らう』事ができなければ、ただの砂の塊を撃つだけでは焼き尽くされていただろう。

「……元々《レプリカ2》は量産モデルでスロットを2つにした分強度が落ちるのはわかっていた。となると大型化するか素材の方にテコ入れするべきだが大型化はあまりしたくないな。素材は今使ってる合成金属もドワーフの奴が練金したい素材だしとなると本体に強化付与してでもそうするとカートリッジの術式との相互作用が……」

「あのー、ティムス？」

「なんだよ。うるせーな」

ユーマを無視して1人考えに没頭する天才錬金術師。思考が口から漏れ出している。

「壊したこと怒ってないの？」

「なんでだよ。俺の作品がお前の力についていけないだけだ。無茶な使い方を想定できなかった俺の方が悪いんだよ」

ティムスは自分の作品の使い手としてユーマを認めている。創り手として使い手に応えることは当たり前だと思っていた。

「応急処置なんて無理だ。俺の研究室に前のガンプレートがあるから修理するまでそれを使え。金属板2枚でできてるあれは仕組みが単純な分強度もあるし、『オーバーブースト』なんてできないから無理しても壊れはしないだろ」

「わかった」

修理はまた後日というわけで《レプリカ2》を預けるユーマ。

「しかし術式換装システムを採用したブースターの試作として創ったのはいいが、テストしてくれる奴が少ないな。データがユーマ1人だと参考にならねぇ」

「ジンはオプションを増設するタイプのテストしてるしね」

ジン・オーバ。弓使いである彼は射撃武器に対する適性が非常に高い。

ティムスはユーマの紹介で彼と知り合い、ガンプレートの《銃》である部分の性能を研究するために専用のガンプレートを彼に与えていた。

「他に俺の作品を使えそうな奴はいないのか？」

「イース達は？」

「おとといきやがれだ」

彼らは元々実力が足りない。

「ブソウさん」
「《Ａナンバー》に余計な力を貸してたまるか」
《竜使い》に襲われた事もあるティムスだが、他のエースにも協力的な態度をとらないのは前からだった。
「じゃあエイリーク」
「あいつはポピラの客だ」
「アギ、リュガ」
「ガチ前衛の馬鹿が俺の作品に触る資格はない」
そもそも他人に厳しいティムスのお眼鏡にかなう人材が少なすぎる。
「あとはアイリさんだけど駄目なんだっけ」
「ああ。あれ以上のブースターは俺は無理だし本人も使う気がないだろう」
アイリーンのブースターは彼女の両腕にある重厚な銀の腕輪。
《氷晶術》に特化した彼女のブースターは《銀の大魔術師》と呼ばれる《銀雹の国》の国王自らが創り上げた物だといわれ、その性能の高さはティムスも実物を見て納得している。
「まあいい。この話も今の件が片づいてからだ。《レプリカ２》とは別にお前専用のガンプレートも必要だな」
「《レプリカ３》だね」
「……」

これでこの話はおしまい。

時間があるから二度寝しようとユーマは思っていたが、ティムスはユーマを呼びとめて話を続けた。

「……なぜレプリカなんだ」

ティムスが前から思っていたことだ。《本物》があることはユーマから聞いている。

「本物はブースターとは違うモノだとお前から聞いた。でも俺が創ったモノに模造品やら複製品などの名前をつけられるのは気にいらねぇ。俺の創ったガンプレートは本物には劣るのか？」

「……うん」

彼のプライドを傷つけると思った。でもユーマは正直に答える。

「うまく説明できないけどゲンソウ術を補助するだけのブースターとは別物なんだ。ガンプレートは『保存した魔法を放つ道具』。使えば誰でも魔法が使える」

「信じられないがそれは聞いた。魔力が少ないこの時代では宝の持ち腐れだってな」

「そうだね」

これが異世界の技術、その中でも特異だということをユーマは誤魔化している。

「俺がガンプレート・レプリカで再現できた魔法弾は８段階の内レベル３まで。実際に使ったことがあるのはここまでだからこれ以上の魔法弾はイメージできないんだ」

「なんだと?」
「《サンドワーム・ブラスト》はオリジナルだけど威力は多分レベル5くらい。今の俺とブースターだとレベル8の威力を出すのは無理だよ」
「チッ。まだまだかよ」
ティムスは持てる力をもってユーマのブースターを創っている。それが本物に届かないとはっきりと言われたなら悔しくても仕方ないと割り切ることができた。
しかし。
「ならなぜ本物を使わない? お前は《精霊使い》。精霊たちに魔力を分けてもらえばそのガンプレートも使えるはずだ」
「……わからないんだ」
本物のガンプレートは今ユーマの手元にない。今は風森の国にいるエイルシアに預けたままだ。
エイリーク誘拐事件の時に《魔法使い》である彼女は何者かに狙われていると知ったユーマ。魔力を扱うことができるエイルシアならガンプレートは彼女の力になると思ったのだ。
ユーマはエイルシアに自分が《魔力喰い》だから使えないと言って渡したがそれは嘘。ガンプレートの魔術妨害対策は完璧で《魔力喰い》の影響を受けなかった。風葉たちの魔力を分けて貰えばカートリッジの補充もできる。
エイルシアが心配だったのは本当だ。でもそれ以外の理由でガン

プレートを手にしない理由があるとすればそれは、

「ガンプレートは兄さんの力そのものだから。あれを使う資格があるのか俺にはわからないよ」

――いつか一人前の強さを身に付けたなら、俺のをお前に譲ってやる

昔そう言ったのは大和だ。そして再生されたこの世界に来たユーマは魔人と戦う直前、偶然か意図的にか分からないが彼のガンプレートを手に入れた。

「《精霊使い》でない俺はこの力を使う『強さ』を身につけることができたのかわからない。兄ちゃんに聞きたくても今は会えないから」

自信がもてない。『御剣優真』としての強さを信じることができない。

だからレプリカ。兄の力を模倣した模造品しか手にすることができなかった。

それを聞いたティムスは一言。

「ヘタレが」

罵った。

「いつまでテメェの兄貴の尻を追いかける気だ。追い越すくらいの気合を見せやがれ」

「ティムス？」

「……約束しろ。今度創るガンプレートでそのレベル８を超えて見せろ。本物を超える最高のヤツを俺は創ってやる。それまでに強くなれユーマ。糞兄貴を超えて見せろ」

ティムスはユーマを選んだ。技術士として彼を最高の使い手として決めた。

ユーマは《竜使い》と違う。力と強さを間違えたりしない。ならばどんなモノでも正しく扱ってくれると確信している。

「その時はもう《レプリカ》なんて言わせねぇ。ガンプレートを超えた《それ》には俺が最高の名前をつけてやる。どうだ、挑戦する気あるか？」

一呼吸置いてユーマは答えた。

「やる。俺もティムスが創るそれを見てみたい」

兄に認められることばかり考えていたユーマ。追いかけても超えようとする気持ちは全くなかった。

１人なら無理だと思う。でも共に挑戦しようと言ってくれるのならばそれに応えたい。

「よし。なら楽しみにしてろ。この話もここまでだ。今は幻創獣の

ほうが先だからな」
「俺は今日学園を見廻りに行くよ。調整のほうお願い」
「わかった」

＋＋＋

ユーマと別れるティムス。気が昂ってもう眠れない。

「やるしかないな。《機巧術》の研究からだと間に合わない。《幻創機巧術》、手を出してみるか？」

ティムスの本来の目標はかつて《西の大帝国》に存在したという機械の技術、《機巧術》の再現。

そして機巧術にゲンソウ術を組み合わせた新技術の開発。それに今挑戦しようとしている。

やる気のあるうちにアイデアをノートに書き留めておきたいティムス。でもルックスやポピラがもうすぐ来るはずだ。

あとどのくらい時間がある？　と時計を見て茫然。

午前４時。３時間も寝ていなかった。

「……」

今の興奮状態が寝不足からくるものだと気付くとティムスのやる

気が一気に失せる。

「あの野郎。おい、お前ら起きやがれ。ユーマの相手になれるよう幻創獣を強化するぞ！！」

眠れなくなったティムスは、雑魚寝するイース達を八つ当たりするように叩き起こした。

＋＋＋

２－１３ａ　失踪中のユーマ　前（前書き）

失踪：行方をくらますこと。

ユーマ、暗躍開始。

２－１３ａ　失踪中のユーマ　前

＋＋＋

昇級試験が近いとある日。

みつあみの少女は握り手のある大きな筒を肩にのせ、金の髪の少女にその筒の先を向けた。

「次、来なさい」

エイリークはポピラの攻撃に備える。

肌に張り付く髪と服が気持ち悪い。ズブ濡れの彼女はいつもの細剣を手にしていなかった。

代わりにあるのは額に付けた金のサークレット。

それはポピラ作の《インスタント》、名を『洗脳くん４号』という。

「いきます」

ポピラがバズーカを撃つ。

ぽーん、といった感じの緩い弾速で山なりに飛ぶ玉をエイリーク

は睨みつけ、術式をイメージ。

サークレットがイメージを増幅。目の前に風を集めて『膨らませる』。

風船が破裂する直前のイメージを保ったまま、飛んでくる玉を引きつけて……今！

「はあっ！」

バァン

爆発。

バシャ

「……ううっ」

「まだまだですね」

《爆風波》で破裂した『水玉』。しかし完全に吹き飛ばしきれず、エイリークは大量の水を頭から被ることになった。

「溜めの時間はだいぶ短縮できましたが威力がいまいちですね。人を吹き飛ばすくらい力がないと使い物になりませんよ」

エイリークはポピラのコーチの下で新術式、《爆風波》の特訓をしていた。インスタント仕様のブースターを使い続けることで術式のイメージを刷り込ませているのだ。

「吹き飛ばすくらい《旋風剣》ならできるわよ」

「馬鹿ですね。《爆風波》は剣で防げなかったときや相手の体勢を崩すのに使うのです。攻撃も防御も《旋風剣》1本で対処するつもりですか？」
「なら剣を2本持つ！」
「馬鹿ですね。付け焼刃の二刀流よりも頭に刷り込んだ術式です」
「あーもう！」

エイリークは何度も水を被ってストレスが溜まっている。ポピラ相手にやつあたりはできないので尚更だった。

「今日は水玉を200個用意しています。はりきっていきましょう」
「……ユーマ……見つかったら……吹き飛ばす」
「……」
（《直感》、でしょうか？　この訓練法を考えたのがミツルギさんだと知らないはずですが）

エイリークの持つ特性スキルは曖昧な部分が多い。しかし何故か今日は勘が冴え渡る。

「……誰かがこっちを見てるわね」
「気のせいです。次、いきますよ」

ポピラはポケットの中に隠れている精霊が冷や汗をかいて制服をくいくい、と引っ張るのでエイリークの気を逸らすことにする。

「まあ、いいわ。試験まであと5日。《爆風波》も《陽炎》も完璧に習得して見せる！」

エイリークは気合を入れなおして特訓を再開した。

＋＋＋

「あぶなっ、気付かれたか？」
（ぎりぎりですねー）

エイリーク達から離れた木の茂みの中で、覆面を被ったユーマは風葉と《交信》する。

「とりあえず監視は片づけたし、エイリークもあれなら大丈夫だな。アドバイスはあとでポピラに伝えてもらおう」
（そうですねー）
「それじゃあ自警部に連絡してくれ。ポピラの護衛は任せたよ風葉」
（はーい）

ユーマはロープでぐるぐる巻きにした学園の生徒を放置して、その場をあとにした。

＋＋＋
失踪中のユーマ
＋＋＋

『第２回　打倒竜使い作戦会議』

ユーマは前回のメンバーにエルド兄妹とブソウ、リアトリスを加えて《竜使い》への今後の対策を立てることにした。

「とりあえず幻創獣はティムス達のおかげで何とかなったよ。《竜殺し》の方も俺とティムスでどうにかできそうだ」

「ユーマの訓練はイース達に手伝ってもらう。おい、自警部。あいつらの処分はこれでいいな」

基本計画はユーマとティムスが立案。ティムスの確認にブソウは頷く。

「本来なら4人は停学、今回の試験は参加不可となるところだろうな。構わん。好きにしろ」

本来ならば自警部に生徒を処分する権利はない。自警部が捕まえた校則違反者は始末書、または教員に直接引き渡して学園の判断で処分を下すようにしている。

ところがイース達4人は処分の決定をブソウの判断で先送りにしていた。それはユーマが司法取引なんて言葉を使ってブソウを説得したからだ。

停学になるはずの生徒が学園から姿を消してもおかしいことではない。ユーマは影で動くことができる協力者を欲し、それで罰則が軽減されるのなら、とイース達もこれを了承した。

「ミツルギ君達は問題ないね。次はボクの方からだけど情報操作は完璧。あることないこと噂を流したからミツルギ君の動向は誰も掴めていないはずだよ」

「ほどほどにしてくださいね」

多少の誹謗中傷は覚悟していたが、報道部部長があまりに自慢顔だったのでユーマはその噂が気になった。

「それに君の指示どおり竜騎士団には噂と違う偽の情報を売り渡したよ。いやぁ、あれは高値で売れた。儲かったよ」

「……」

情報操作のついでに《グナント竜騎士団》に少しでも無駄遣いさせようと思ってやった策だったが、この人に余計な悪知恵を与えてはいけないと思い直すユーマ。

「あとでまたバレないくらいに偽の新情報を売り渡そうかな？」

「本当にほどほどで。次は……何だっけ？」

「《竜使い》が俺達兄妹を狙った理由を話す」

エルド兄妹の話は深刻な問題と疑問を呼んだ。

「幻創獣のシステムを弄ってみて確信した。俺達なら幻創獣を1から創ることができる。《調整器》に腕輪もだ」

「それに幻創獣の《複製》も可能です。元になる幻創獣の術式（データ）があればおそらく《皇帝竜》も」

「なっ！？」

全員が驚く。ユーマだけはゲームに酷似した幻創獣を見てコピーの可能性を予想していたが。

「もし竜騎士団の幻創獣すべてが《皇帝竜》ならば俺達《Ａナンバー》の残りを総動員しても苦戦どころではないぞ」

「でもそれならグナントはエルド達を引き込もうとするはずだ。逆

に排除しようとしたのは何故だ？」
「俺達が『幻創獣そのもの』に対策を立てる可能性があるからだろう。味方にしない理由は幻創獣のシステムと腕輪の生産に目処がたったからだと思う。最悪《皇帝竜》の複製もだな」
リアトリスの疑問にそう答え、ティムスは話を続ける。
「ユウイ・グナントの性格なら幻創獣の独占、《皇帝竜》は自分だけの力にしておきたいと思っている線が1番だと思うが」
「そのあたりの対処は《竜殺し》の計画に含まれています。俺とティムスで何とかするよ」
《竜殺し》の計画。《竜》を無力化する今作戦の最終目標は2人しか知らない最重要機密である。
「今後の活動だがユーマと俺、あと4人組はルックスの研究室を拠点とする。俺も本当なら重傷者扱いだ。表に出て《竜使い》に怪しまれるのはよくない」
「ルックスも俺達と一緒だけど基本は別行動。必要な時はティムスのサポートをお願い」
「わかりました」
ルックスはまだ中等部の生徒だ。仕事を1つ頼みはしたが学業を優先させることにした。
「兄さん、私は？」
「ポピラも別行動。お願いしたいことがあるんだ」
質問に答えたのはユーマ。ポピラも優秀な技術士だが、表だって活動することをやめたユーマの代わりにエイリーク達の事を頼める

のは彼女しかいなかった。

「彼女1人か？　危険だ」

危ぶんだのはリアトリス。騎士はポピラの護衛を買って出てくれたのだがティムスがそれを拒否。

「《烈火烈風》のアンタと2人じゃあからさまで怪しまれる。ポピラの単独行動は囮も兼ねてるんだ。まあ、これに引っ掛かる馬鹿だと助かるけどな」

「エルド、貴様」

「落ち着いてください。ポピラには適役の護衛がいますから」

リアトリスを抑える間、ユーマの意図を汲んで《守護の短剣》から飛び出す風の精霊。

「わたしですかー？」

「風葉ちゃん」

「こいつ中位の精霊だから俺や短剣から離れても活動できるんだ。魔法使えるし何かあったら俺とも《交信》できる。ただエイリーク達にばれないように頼むね」

「わかりました」

「よろしくですー」

ポピラの肩に座る風葉。心なしかポピラも嬉しそうに顔をほころばせる。

「ポピラの件はこれでいいですか？　ティムスや俺達と行動するにもこっちは男ばかりなんだ。エイリーク達と行動した方がいいはずです」

「……わかった。なら私も別行動をとって《竜使い》の動向を探ろう。エースの中でも私は身軽な方だからな」

リアトリスは納得したあと、ユーマ達から一時離れることを伝えた。

「それがいいね。ボクやブソウ君も立場上1つの場所でこそこそするのも固まるのも良くないし。あとミツルギ君、これはサービス（無料）で教えるけど新情報。君の仲間たち、監視が付いているしもう何度か襲われてるよ」

報道部部長はあらたな問題をユーマに教える。

「試験妨害は珍しいことじゃない。それに試験官が寄越した偵察だったり力試しの生徒や単なるファンもいる。みんな気にもしてないし襲われたら返り討ちにしてるけど、中に竜騎士団の下っ端が混じってたからちょっとね」

「……あの野郎」

「探っているのか炙り出そうとしてるのか、よっぽど君の事を警戒しているみたいだね。変なこと企む前にどうにかした方がいいんじゃない？」

「ブソウさん」

直接手を下すより学園の治安を強化する方が穏便だと思い、ユーマはブソウに自警部を派遣できないか聞いてみるが断られる。

「試験のあるこの時期はもう警戒態勢を敷いている。部員達も試験を受けるのだから彼らの時間をこれ以上割きたくない」

「報道部の隠密を使う？　個人契約で別料金になるけど」

「おい、どうする」

ティムスとしては無視しても問題ないと思うが、ユーマは監視されているのが気に入らない。

「……俺が」

ユーマは少しだけ思案して1人で動くことにした。

「……ほどほどにな」

ブソウに嫌な予感がよぎる。無理しても自分の指揮の下で自警部を動かすべきだったのかと。

予感で済まなかった。

＋＋＋

「よし、準備万端」

「……その格好は何だ」

「変装」

イース達が使っていた覆面に砂除けのゴーグル、黒に染めた試作ブースターの《風乗りの外套》。ポピラに頼んでルックスの研究室に持ってきてもらった。

ユーマの変装は怪しい。さらにバズーカを2丁背負っている。

「その《おもちゃ》も持っていくのか？」

「捕獲用にね。前に作ってもらった網が出る玉を装填してる。砂更で埋めたら正体がばれそうだしガンプレートのスタンガンは射程が短いから」

そう言ってバズーカのカートリッジを確認。『網玉』は2丁合わせて計8発。

「それじゃ行ってくるよ。……とう！！」

研究室の窓から飛び降りるユーマ。風葉の補助のない《風乗りの外套》の滑空はふらふらと見るからに不安定だった。

「あれはただ飛びたかっただけだな。悪目立ちするぞ」

どう誤魔化す気だと思ったティムス。でもそれは報道部と自警部の仕事だな、尻拭いは俺じゃねぇ、と彼は気にしないことにした。

＋＋＋

リーズ学園高等部。

「風葉、ポピラは今どこにいる？」

学園に戻ってきたユーマは適当な木の影に隠れて仲間達の居場所を調べる。

（砂場ですよー。みんないますよー）

ポピラについている風葉と《交信》。砂場とは以前に砂更の力を使った屋外演習場前の広場だ。

「まずは監視がいるか調べないとな」

ほどなくしてポピラやエイリーク達を見つけた。ついでに監視していた生徒も。

ポピラはどうやらユーマがしばらく学園に来れないことを説明しているようだった。遠くにいるので声はユーマまで届かない。

エイリーク達から１０メートル離れた茂みに監視が。そのさらに３０メートル離れた所にユーマはいる。ユーマが監視を見つけられたのは彼が木の上に隠れていて上から見渡すことができたからだ。

ユーマはバズーカを構える。バズーカといっても筒の中にある玉を遠くに飛ばすだけのおもちゃ（ティムス談）である。しかしその射程距離はおよそ５０メートル。

「発射」

音もなく発射される『網玉』。《消音》の補助術式はあらかじめ付与されている。

「うわっ」

「な、なんだよこれ？」

監視達の目前で展開して広がる網玉。突然の事に驚く彼らは網に

絡まって身動きが取れない。

「3、2、1……」

バチッ

「ギャアッ」

しばらくして網に付与された《雷撃》が発動。これは《符術師》の札に使われる時間差発動の技を応用した技術である。

捕まった監視達は感電して気絶した。

「これで《おもちゃ》だもんなぁ。……やりすぎだよ」

魔獣相手にも使えるのじゃないかと思うユーマ。後でティムスに伝えようと思った。

「さてみんなは……あれ？　もういないや。風葉？」

（解散しましたー。気にするだけ無駄だと言ってましたよー）

「……そうですか」

心配しないでほしいなー、なんて思っていたが思った以上に薄情だった仲間たち。

（エイリっちはー、あとでー、吹き飛ばすってー）

言ってましたー。と風葉は報告。

試験対策を手伝う約束を破ったのはこっちなのでユーマはがっく

り。

「はぁ。まあ、いいや。こいつらの正体は自警部に調べてもらうとして次はジンのところへでも行くか」

こうしてユーマは自分の特訓の合間に学園に忍び込んではエイリーク達を隠れて見る怪しい生徒を捕獲していった。彼は気晴らしのようにバズーカを撃ちまくったという。

捕まえた生徒の数は試験前日までに１４７人。最終的に２００人を超えた。これは明らかに竜騎士団とは関係のない生徒も混じっている。

乱雑に捕まえたのは《竜使い》に悟られない為。洗い出しは自警部に全て任せることにしたユーマ。

ブソウの力を頼りにしていたのか自分で調べるのが面倒だったのかは定かではない。

＋＋＋

網に捕らわれていたりロープでぐるぐる巻きにされたりした生徒の回収、事情聴取に駆り出される自警部。この時期に警戒態勢を敷いているのは毎年の事だが今年はいつになく忙しい。

「第３練武館付近でイモムシを３匹発見です」

「こっちは普通科棟のカフェテラスで魚が２匹。誰か人を寄越して

下さい」
「部長、今朝捕まえた生徒の持ち物調べましたけど腕輪はありませんでした」
「こいつら釈放していいの？」
「職員棟行きじゃないのか？」
「部長、第４取調室空いてますか？」
「これ報告書です。サインを」
「人手が足りません部長、シフトの見直しを。休務中の部員を呼んでください」
「部長、今日も残業ですか？」
「ナギバ部長」
「ブソウさん」
「部長」
「「部長！」」」

「……なぜこうなった」

ユーマを野放しにした挙句、忙殺する羽目になるブソウ。部下の苦情と悲鳴がすべて彼にのしかかる。

「部長、生徒会長がお呼びです」

眉間に寄せた皺が深くなるブソウ。

生徒会棟、会長室。

「最近自警部から送られてくる書類が多いのだけど、どうしてだろう……」

「……」

紙の束に埋もれ、げっそりした顔をブソウに見せて呟く生徒会長。

ただでさえ受験者と試験官の選定と承認に忙しいのに、彼は自警部からの始末書やら報告書やらの確認の仕事が上乗せされていた。

彼は生徒会の雑務から逃げたくて学園統一と改革を目論んでるのでは？　と疑いたくなるほど消耗している。

きっと恨み事を言いたいがために呼ばれたのだろうとブソウは推測。

「只今自警部は警備強化キャンペーン中です」

愚痴をこぼされる前に先手をとるブソウ。これから先の言い訳は長々と続くが彼は何を言ったのか覚えていない。

すまん。俺のせいじゃない。境遇は俺も同じだ。悪いのはミツルギいやグナントか？　それとも元をたどれば生徒会、いやお前じゃねぇのか、と彼の頭の中はごっちゃ混ぜになっていた。

しばらくしてストレスと疲労で一杯一杯のブソウはユーマを締めあげようとするが、タイミングが悪いのか意図的に避けられているのかなかなか掴まらない。

ユーマを掴まえたのは赤バンダナの少年。

「何してるんだ、お前」

「……油断した」

怪しい覆面黒マントの首根っこを掴む少年。名前をリュガ・キカという。

＋＋＋

２－１３ｂ　失踪中のユーマ　後（前書き）

失踪：行方をくらますこと。でもばれた。

敗者達のその後。

2－13b　失踪中のユーマ　後

＋＋＋

――ここまでバレず順調だったのに

リュガに捕まったユーマはちょっぴり悔しかった。

＋＋＋

話はまず昇級試験初日のことから。

エイリークが試験の直後倒れた。そう聞いたユーマは慌ててリアトリスを頼り、見舞いと偽って彼女の護衛を頼んだ。

彼女はどうやら《陽炎の外套》が放出する熱にあてられたらしい。改良が必要です、と悔しがったのは外套の製作者だったポピラである。

この時、試験で消耗したあとを《竜使い》が仕掛けてくるのでは？　と思ったユーマ。次のリュガとアイリーンの試験をこっそりと観戦することにした。

試験2日目。リュガの時は問題なく監視をすべて捕らえて自警部に押しつけた。アギにみつかりそうになったがその話は割愛。

問題は試験5日目。アイリーンの試験直後のこと。

彼女の時にマークしていた生徒が一斉に動いたのだ。ユーマも動くが1人では対処が間に合わない。

しかしユーマより先に事態を察知した集団がいた。彼らの名は《アイリーン公式応援団》。

正体不明の団長が率いるこの第3勢力が不審者を全て捕まえた。応援団の実力と統率力は並ではなかった。

彼らはアイリーンのことに関われば非常に優秀すぎた。怪しい人物を誰ひとり見逃さない。

そして。

「ここは俺に任せろ」

覆面黒マントの男に大剣を突き付けてリュガは同志たちを先に行かせたのだった。

＋＋＋

「で。裏でこそこそしてたお前はなんだ？」

「通りすがりの正義の味方です」

即答。往生際が悪い。

「いい加減にしろユーマ。アイリーンさんのストーカーだったら遠慮なくぶった切ってるところだぞ」

「似たようなものだったかも」

「ああ？」

仲間たちの様子を影から見守っていたユーマ。怪しい変装をしているのもあってはた目からは変質者やストーカーとさして変わらなかった。

そんな彼をリュガがユーマだと気付いた理由は２つ。

「声、それにアギのゴーグル。戦闘時以外それは身につけないくせに。俺達ならモロバレだ」

「……覆面だけだとカッコ悪いんだ」

凡ミスだった。

「お前はあれか？　噂にあった『報道部の隠密を参考にした自警部の特殊部隊の一員に抜擢された』というやつか」

「それは違う」

「じゃあなんだよ」

「皆には黙ってくれる？」

「アイリーンさんに聞かれたら無理だな」

リュガ・キカ。バンダナ兄弟の赤いほう。

彼はアイリーン公式応援団の幹部であり彼女の忠実な僕である。

「それじゃ理由は話さないから見逃して」
「都合いいなお前。……そうだな、俺は今からやることがある。ついてきたら黙っていてもいいぞ」
「本当？　何するの」
リュガは不敵に笑い、答えた。
「査問会だ」

＋＋＋

連れてこられた空き教室の真ん中に異様なモノが１つあった。
「リュガ、これって」
「丁度いいのがあったから自警部から買い取った」
そこにあったのは巨大な十字架。そしてそれに磔にされてぐったりした男子生徒が１人。応援団がそれを囲っている。
「……俺もやりすぎたかな？」
「何言ってるんだ？　おい、団長は？」
「アイリーンさんと一緒にいます。査問会は私達に任せるそうです」
「相変わらず勘がいいな。驚かせようと思ったのに」
正体不明の団長。リュガの企みは外れた。
「なんのこと？」
「気にするな」
「あのーキカさん？　この覆面は誰？」

訊ねたのは応援団員の女生徒。よく見れば男子生徒の方が少ないことにユーマは気付く。

「飛び入りだがもう1人の特別ゲストだ。顔は訳あって見せられないが俺達の同志だ」

「ちょっとリュガ！」

非難するユーマ。

応援団に入る気なんてない。ファンクラブにいるという自分が嫌なのだ。

「いいから黙ってろ。もう1人のお客さんも来た。はじめるぞ」

そして査問会という処刑の儀式が始まった。

＋＋＋

「それで私を呼びだして何の用なの」

もう1人のゲスト。彼女の名はディジー・バラモンド。アイリーンの試験官だった魔術師の3年生である。

「今日はわざわざ来てくださってありがとうございます。実は貴女とアイリーンさんの仲を取り持とうと思いましてこの場を設けました」

ディジーに応対するのは応援団副団長。

彼女は生徒会役員でもある才媛。どうでもいいことだが。

「なんですって？　どうしてあんな小娘と」

熱り立つ彼女に対して副団長は冷静に話を続ける。

「《氷姫》の二つ名に関しては報道部のせいなので私達には関与できません。でも貴女が彼女を嫌うもう１つの理由は私達も見逃すことができなかったのです」

そう言って副団長はシーツで隠していた十字架をディジーに見せた。さすがに彼女は驚く。

「マ、マックス」

「……ディジー、か？」

磔のされた男はディジーの彼氏であった。

「試験中に貴女が叫んだことは覚えています。マックス・リバー。彼は貴女という恋人がいながら私達応援団の中にいた。これは裏切り行為です」

副団長の声に力が籠る。

「貴女にとっても、私達にとっても裏切り者なのです。……二股なんて最低よ」

私情だった。

「私達応援団は彼の為にアイリーンさんの敵を作りたくはない。だから決めました。彼と2人で話をして和解して下さい。これは平和的解決法です」
「どうして磔なのよ」
もっともな質問。
「自警部の方に聞きました。これは自警部で信仰されているという『天下無双薙刃神教』。そこでおこなわれる誰もが素直になる儀式だそうです」
「……」
「……」
「……ごめんなさい」
ユーマは磔にされた彼に心から謝った。デタラメが噂になっておかしく伝わっている。
後にこの真実を知ったアギとリュガ、報道部部長は爆笑。ブソウの苦難は続く。
「さあ、私達の事は気にせず話し合ってください」
「さあ、と言われても」
戸惑うディジー。彼の事は許せなかったけど、自分の発言のせいでこうなったのなら申し訳ないとも思う。
磔の彼はぐったりしていて気力をごっそり奪われてしまったあとのようだ。

「さっさと喋れ」

業を煮やしたリュガが大剣を十字架に叩きつけた。ガツッ　と根元に刃が食い込む。

「うわっ、たたた倒れる！　わかったから！！　……ディジー、ごめん」

磔にされた罪人は恋人に謝った。

「確かに俺は君と付き合った後で応援団に入団した。でも信じて欲しい。愛しているのは君だ。夕日を背に屋上で告白したあの時の俺の気持ちは今も変わっていない」

「……だったら、だったらどうして！？」

「俺は彼女を見て自分の気持ちに気付いた。これは愛じゃない、崇拝なんだ」

「わかんない！　わからないわよ！！」

「俺はただ近くで彼女を見たくて応援団に入った。それだけだ」

「……どうして」

罪人の彼は覚悟を決めた。

たとえ嫌われても、恋人であるディジーのかなしい顔を見てしまったなら正直に伝えるしかない。

「ディジー。俺、俺は……」

そして彼は告白した。

「貧乳派なんだ。アイリーンさんのあれはイイ」
「……」

沈黙が痛い。そしてこの男も痛かった。

「……そこの赤いの、切り倒して」

ディジーは裁きを下した。

＋＋＋
補足説明
＋＋＋

彼女達の胸の大きさをランキングしてみよう。

第1位　ミサ・クリス

低身長、童顔でそのアンバランスさは学園の一部で好評。

第２位　リアトリス・ロート

着やせというか普段は鎧姿なので分からない。隠れである。

第３位　ディジー・バラモンド

最上級生の面目躍如。並より上。

第４位　エイリーク・ウインディ

決して小さくはない。ただミサを見ては「剣を振るのには邪魔」と愚痴っている。

第５位　ポピラ・エルド、ユンカ

控えめ。でも彼女達はまだ１５歳。

そして最後は《銀の氷姫》ことアイリーン・シルバルム。彼女はスリム、スレンダーなんだと弁解しておく。

尚、エイルシアをはじめ大人陣は割愛。報道部部長の情報は隠蔽され、ラヴニカは現在幼女バージョンの為に論外とする。

＋＋＋

リュガによって切り倒された十字架。正面から倒れたので磔の彼は顔面を床にぶつけて気絶。その上でディジーに氷漬けにされた。

自分の彼女を前に勇気ある告白をした彼の評価は応援団の中でも賛否両論。

彼に同意する男子生徒とそれを非難する女子生徒で対立し難航した協議の結果、彼は条件付きで許されることとなった。

「ありがとう。彼を処刑する機会を与えてくれて」
「いいえ。女の敵は滅ぶべきです。あとはしっかり『調教』してください」
「ええ」

ディジーの彼氏を引き渡す応援団副団長。そして彼女と握手するディジー。

共通の敵を懲らしめて友情が芽生えたらしい。

「よろしければ貴女も応援団に入りませんか？」

そして副団長はいよいよ『本題』に入る。

「入団すれば彼氏の監視もついでにできますし。正直にいえば貴女の氷使いの力が応援団は欲しいのです。後輩であるアイリーンさんの力になってもらえないでしょうか？」

「本気？」
「ええ」

応援団の基本方針は変わった。アイリーンの特訓に初めて付き合った彼らは彼女と直接ふれあい、力になれたことに喜びを感じてこれからも全力でアイリーンをサポートすることに決めたのだ。

「私達だけでは彼女の力になれない。アイリーンさんには貴女の力が必要です。私達と手を取り合うことはできないでしょうか？」
「……貴女のことは嫌いじゃないわ。シルバルムのことも試験で決着がついたからケジメはつけるつもり。でもだからといってシルバルムに協力することは話は別よ」

残念だけど、とディジーは断ろうとする。

「私にメリットがないの。シルバルムに魔術を教えたとして私は何を得るの？」
「それは……」
「メリットならあります」

言葉に詰まった副団長に助け舟をだしたのは怪しい覆面の男。

「誰？」
「通りすがりの正義の味方です」
「それはもういい」

即答してリュガの突っ込みが入る。

「それで、私のメリットって何？」
「あなたの魔術、その弱点をアイリさんは補うことができる」

「――！！　何を言っているの？」

ディジーは驚く。でも怪しい覆面男に言われる筋合いはない。

「今日の試験見ました。ディジーさんの凍結したものは魔術ですら脆くするあれはすごいと思います。でもそれは長所でもあり短所だ。あなたの氷の術式はそのものが脆い」

「……どういうことかしら？」

「この十字架を見て下さい。あなたが凍結した氷は白っぽい。確か急速で冷凍して作る氷がそんなふうになるんです。その氷は空気が混じって気泡が入り割れやすくなる。そして熱に弱く溶けやすい。推測ですけどディジーさんの氷も同じ性質じゃないんですか？」

「……その通りよ」

ディジーは覆面の推測を認めた。

「術式の発動速度を上げると誰でもこうなるけど私の氷はそのなかでも酷いの。私はこの特性を活かすことで凍結した物を脆くする特性を術式に付与させていたのよ」

「成程。でもこれだと《氷晶壁》のように物理攻撃に強い氷が生成できないから防御には使えない。だから攻撃的な戦闘スタイルになるのですね。それとディジーさんは風属性も扱うけどそれだけじゃ火属性、特に熱を使われると弱い。リュガなんか天敵のはずだ」

もしもディジーがリュガと戦う場合、《高熱化》を扱うリュガが凍結した氷を片っ端から溶かして接近戦に持ち込むことができれば、現在ランクCの彼が相手でも彼女は詰む。

「試験では凍結系以外の術式は風属性しか使わなかった。もしかしてあなたは生成する氷の強度が足りなくて他の氷属性の術式が使い

物にならないのではないんですか？」
「あなた、何者なの？」

ディジーの氷使いとしての弱点を見抜いたユーマ。でもこれは事前に試験官の情報を報道部から取り寄せていたから推測できたのだ。

「アイリさんの氷は透き通った透明な色をしている。不純物が混じっていないから強度もあるし溶けにくいんです。彼女の氷の生成はとても繊細で丁寧なんだ。ディジーさんも学ぶべきことがあると思います」
「……それをシルバルムは私に教えると思う？　魔術師が自分の魔術を晒す危険を冒すと思うの？」

ユーマは躊躇いもなく答えた。

「もちろん。彼女は全てを晒してでも魔術師の上を目指します。あなたの魔術を教えてくれるのならきっと何も惜しまない」

アイリさん実は根性の据わった馬鹿なんですよ。とユーマが付け足すとディジーは笑った。

「あのシルバルムに馬鹿と言う男はそういないわよ。……いいわ。私の為に彼女に力を貸す。それでいい？」
「ありがとうございます」

こうしてディジーと応援団の間にアイリーンに関する協力同盟が結ばれた。

「よくやったユーマ。これは副団長からの礼だ。貰ってくれ」

ディジーの説得に成功した覆面男はその功績により応援団の名誉部員に無理やり認定され、報酬として2枚の写真が与えられた。

「これは……バレたらどうしよう?」

この写真を早く処分しなかったことが、後に悲劇を呼ぶことをユーマは知らない。

＋＋＋

「時間くったな。今日はあとミサちゃんのところっと」

リュガを口止めして普通科棟へ向かうユーマ。

ミサは普通の少女だ。もし《竜使い》の連中に襲われたら彼女はなにもできない。

「ブソウさんには普通科棟を特に警戒してもらっているけど……いた」

ミサを見つけた。この時期の普通科の生徒は筆記試験だ。

きっとその帰りだろう。友達と一緒にいる。

そしてユーマは気付いた。彼女を待ち伏せしている黒い鎧を着た

男がいることに。

「ミサちゃんに声をかけた!?　自警部に連絡しなきゃ」

ミサは自分から男について行くようだ。ユーマは校舎から離れる2人を追いかけ、とりあえず様子を見ることにした。

＋＋＋

「それでなんのご用ですか？　ラグレス先輩」

ミサは1人で《黒鎧》の男と向き合った。

ブロト・ラグレス。エイリークの試験官を2度もして、1度は容赦なく彼女を打ちのめした大剣士。ミサにとっても印象の悪い男である。

「リィちゃんはあなたに勝ちました。もうあなたにリィちゃんの剣を否定なんてさせない」

エイリークの親友兼専属侍女を自称する彼女は勇気を振り絞る。エイリークの為ならばミサは決して退くことはない。

たとえ負けた報復に巻き込まれ襲われたとしても、彼女は精一杯抵抗する気でいた。

「ああ、そうだ。彼女は俺に勝った。完敗だ。だから俺は」

「ふぇ？」

「君に謝りに来た」

頭を下げるブロトにミサは驚く。

「君は覚えているかい？　去年俺のところに殴りこみに来たことを」

「あ！　あれはちがいます」

真っ赤になって両手を振り慌てるミサ。思い出したくない出来事だ。

「びっくりした。後期の試験のあと、普通科の女の子がひとりで乗り込んできて、そして泣きながら俺を叩いてくるんだ。もうあのあと大騒ぎだったよ」

「ううっ、忘れて下さい」

「いや忘れられない。……あの時君が俺に言ったこと、覚えているかい」

「……はい」

――リィちゃんは負けない。リィちゃんは弱くない

――今はボロボロでもきっと立ってくれる。リィちゃんの剣は軽くない！　リィちゃんの剣は折れてない！！

――だからっ、リィちゃんを、泣かすなぁぁぁぁ

「……」

思い返せば恥ずかしいことをしたとミサは思う。

「君の言うとおりだった。彼女は強かった。強くなった。それに比べて俺は自分の弱さを知らなかった」

エイリークに3本の剣を折られ、頼りにしていた《黒鎧》の兜まで砕かれたブロト。彼は自分の力が装備にすがったものだと思い知らされた。

「あの時の俺は、君の言葉をただの八つ当たりだと思って信じていなかったよ」

実際はその通りだ。でも今のブロトはそう思わない。

「でも彼女は俺に勝った。君の言葉が正しかったことを証明した。君はエイリーク・ウインディの強さを信じたが俺は信じることができなかったんだ。迷惑かもしれないけど俺はケジメをつけたかった」

「先輩？」

そう言ってもう1度彼は頭を下げる。

「すまなかった。君と彼女を俺は侮辱した。それをただ謝りたかった」

「どうして」

ミサは訊ねた。どうしてあの時、去年の昇級試験でエイリークの剣を否定したのか？　と。

「彼女は危なっかしい。すぐ突撃するし非力なのに《旋風剣》でいつも力押しする。実戦であれならすぐに死んでしまうよ。だから剣を辞めてもらいたかった」

そう言ってブロトは苦笑交じりに本音を言う。

「まあもしかしたら俺は彼女を守りたかっただけなのかもしれない。一応お姫様なんだからな」

そして彼はまた苦笑。

「でもそれは余計だったな。噂では彼女にはもう《騎士》がいるらしいし」

「えーと、そのう」

本人たちがいたら全力で否定しそうなことをブロトが言うのでミサは誤解を解こうと思ったが、

「リィちゃんに必要なのは守ってくれる人じゃありません」

「何？」

去年の事をわざわざ謝った彼は不器用そうだけどいい人だった。だからミサは別の事を言うことにした。

「リィちゃんに必要なのはリィちゃんの隣に立って力になってくれる人です。だからもしもリィちゃんが困っていたら」

「……わかった。その時は彼女の力になろう。約束する」

「お願いします」

ミサはブロトの謝罪を受け入れた。そして1つの約束を交わし、ブロトはミサと別れたのだった。

＋＋＋

「あ。ラグレス先輩に謝るの忘れてた」

実は昔、エイリークを慰めるために「ラグレス先輩なんて黒い甲虫なんだよ」と言ったのはミサである。

今回、彼の二つ名がエイリークによって《甲虫》になってしまった原因は彼女にあった。

そしてブロトは、

「こちら第５小隊２班。目標、捕まえました」

「……俺が何をした？」

勘違いしたユーマのせいで自警部に捕まった。

＋＋＋

２－１３ｂ　失踪中のユーマ　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

アギの試験官として彼と戦い、エイリーク達には容赦なく制裁された。

予定外のこともあったけど、ユーマは決戦の舞台に立つ。

次回「宣戦布告」

「生徒会規約に則って俺は、《Ａナンバー》に挑戦状を叩きつける！」

２－１４ａ　宣戦布告　前（前書き）

話が長くなったのでまた前後編……

アギの試験終了、そのあとまでの話

2－14a　宣戦布告　前

＋＋＋

「見つけたぞミツルギ！　……何をやっている？」
「なべ」

試験６日目の夜。

最終日目前までとうとうユーマを掴まえることができなかったブソウ。

押し付けられた捕縛者の対応に忙殺されて鬱憤が溜まり、今日こそはと押しかけてきたルックスの研究室では何故か宴会が行われていた。

「イース達は外に出られないから携帯食ばかりだし、そろそろ美味い物でも食いたいだろうなーと思って」

ユーマは鍋の中にあるネギをよけて肉を椀に盛る。

「作戦成功の前祝いだよ。ブソウ君も食べる？　こっち来なよ」
「何故お前もいる？」

研究室にいたのはユーマと４人組、そして報道部部長の６人。イース達は久しぶりの肉にむしゃぶりつき、ここにはいないティムス

達技術士の3人は一足先に作戦の最終調整をおこなっていた。

「ほらほら。これボクが作ったんだよ。いいから食べて」

「……うまいな」

「でしょう。さすがボク」

鍋は鳥鍋だった。何の鳥なのかは誰も知らない。

（そうです部長さん。まずは料理のできる女の子をアピール。そしてかいがいしくお世話するのは作戦パターン幼馴染B、王道です）

彼女の協力者たるユーマは作戦通りです部長さん、と正体不明の念を送る。ちなみに鍋を用意したのはユーマとティムス。

ユーマが具材の下ごしらえと出汁を準備、さらには姉直伝のごまだれとぽん酢（柑橘類の果汁と醤油、あとうまみを出汁用の乾物でとり再現）を作り、ティムスが大きな鍋を《練金》して創る。加熱調理器の代用は研究室にあるバーナーを改造した。

部長は具材を鍋に放りこんだだけ。

「ほらほらもっと食べて。ブソウ君最近忙しかったでしょ。栄養摂ってる？　野菜もしっかり食べてね」

「ああ。すまん」

椀によく煮えた具材をよそう部長。とてもうれしそうにブソウの世話をする。

案外尽くす人だな。そう思いながらユーマはよしよしと内心ほくそ笑んだ。

「どうしたミツルギ」
「いいえ。ほら、最後は雑炊しますよ。それとも麺にしますか？」
「……麺だな」

今までブソウから逃げ回っていたユーマが今日になって見つかり、鍋なんかしていたのは彼の作戦通りだ。

それは部長2人の仲を進展させる作戦か、それともユーマに対する憤りを紛らすために仕組んだことなのか、それはユーマしか知らない。

「ブ、ブソウ君ジュース飲む？」
（部長さん、間接キス作戦は早すぎます。ああっ！　しかもブソウさん気にしてねぇ）

＋＋＋

鍋に残った鶏？がらスープの煮込み拉麺まで堪能して一息ついたそのあと。

機嫌を良くしたブソウは今までのことを水に流してユーマと話をした。本当に人の良い苦労人である。

「今日までに自警部に捕まった生徒は２３５人。その内竜騎士団は７４人いた。全員普通科の生徒だ」

幻創獣の腕輪を持たない生徒たちだった。手柄欲しさにユーマの周辺を監視していたらしい。

「２００人以上？　おかしいな」

ユーマは首をかしげる。１００人以上は捕まえた覚えはあったが２００人以上とは思わなかった。

警戒態勢を敷いた上でそれは忙しかっただろうとユーマは少し反省。

「どうした？」

「いえ。……それって下っ端の独断だったんでしょ？　竜騎士団の統率ってずいぶん杜撰みたいですね」

「２００人の規模だからな。騎士団のなかでも派閥を作っているようだから一枚岩ではないのだろう」

捕まえた竜騎士団の中には『腕輪持ち』がいなかった。それはもしかすると腕輪の生産が間に合っていないということなのかもしれない。

「腕輪はひとつも回収できなかったな。竜騎士団は最低でも幻創獣を８０体は保有することになる」

「まずは《皇帝竜》です。頭を潰せばなんとでもなりますよ」

《グナント竜騎士団》と正面からぶつかれば被害は必ず大きくなる。それはなるべく避けたいとブソウは思う。

作戦ではまずユーマが《竜使い》と1対1で決着をつけることになっている。それで終わればよいと彼は思うが。

「『舞台』のほうはどうなった？」

「それも今日話がつきました。部長さんのおかげです」

「ボクはおばーちゃんにアポとっただけだよ」

謙遜する部長。珍しいことかもしれない。

「またまた。極秘で学園長と話ができる機会を設けてくれるのはすごいことですよ」

「学園長だと？」

それを聞いてブソウはまた顔を顰める。大事になってる気がした。

今回ユーマのとばっちりで割に合わないのは間違いなく自警部部長の彼だ。不安になる。

「準備は内緒でしてきたけど流石に学園側に話はつけておかないと。本番で先生達に横やりが入るのはよくないから」

「……教員も巻き込む気だったのか」

呆れた。

「だから学園長に直接許可をもらってきたんです。これまでのこと全部話してきました」

ユーマが学園長に頼んだことは2つ。

まず《竜使い》との決戦の『舞台』。彼に勝負を受けさせ逃げられない状況を作るのに必要だった。

そしてイース達を含めた捕まえた竜騎士団について。停学以上の重い処分は事情聴取の上で幹部クラスの生徒だけにしてほしいとユーマは学園長に直接頼んできた。

「どっちも約束してきました。だから問題がなければ竜騎士団にいた普通科の生徒は釈放して下さい。それとイース」
「なんだ」

なんとはなしに2人の会話を聞いていたイース達4人。

「4人の処分だけど明日の作戦がうまくいったら処分なし。再試験の許可ももらってきたよ」
「本当か!?」

驚く4人。本来停学処分でおかしくない上に潜伏中の2週間以上を無断欠席しているのだ。

「作戦の事は学園長が学生ギルドに依頼したということにしてくれたんだ。公式依頼なら公欠扱いになるしね。俺達に協力してくれたから前に襲った件もチャラ。よかったね」
「いいのか?」
「もちろん」

イースにアルス、それとサンスー兄弟。彼ら4人には世話になったとユーマは思う。

２週間以上寝食を共にして幻創獣の訓練に付き合ってくれたのだ。
彼らのことは仲間だと思い、ユーマは４人に礼をしたかった。

「……ありがとな。明日の作戦中、俺達も近くで待機する。何が起こるかわからないからな」
「ああ。俺達の幻創獣も強化された。役にたてるはずだ」
「この恩は返すぞ弟よ」
「そうだな兄者」

イース達も仲間として最後まで協力する決意をユーマに伝えた。

「……わかった。明日も頼む。打倒《竜使い》！　勝つぞ！！」

「「「「おう！」」」」

ユーマが突き出した拳に４人は自分の拳をぶつける。それで宴会の最後を締めたのだった。

「ブソウ君。これ領収書。お鍋の材料費、自警部で切っといたから」
「おい」
「……」

――部長さん、それ減点です

横目でそれを見たユーマ。

彼女の今日の好感度ポイントはこれで差し引きゼロだな、と密かに溜息をついた。

＋＋＋

宣戦布告

＋＋＋

学園長に作戦の事を頼みはしたが、それを無条件で了解してくれるほど学園長という人は甘くない。

「条件をつけましょう。いきなり《Ａナンバー》に『挑戦』することはできませんので」

――エースと戦うにふさわしい実力を学園にみせてください

そう言った学園長は１つ条件を挙げてユーマの頼みを承諾し、彼の為の『舞台』を試験最終日である次の日に緊急で用意してくれた。

元々《Ａナンバー》の選定直前に自分の存在をアピールして《竜使い》をおびき出そうとしていたユーマ。予定は早まったが条件に対して学園長の用意してくれた『舞台』は悪くなかった。

問題になったのはユーマの実力をみせるのにふさわしい対戦相手。

昇級試験中なので手の空いた実力者がいない。

そもそもユーマ個人の能力ならばエイリークのようなランクBからAの生徒で十分だったが《精霊使い》としての彼ならば相手になれるのがそれこそ《Aナンバー》級の生徒しかいない。

ブソウやリアトリスが相手をしてもよかったが試験中の今にエースといきなり模擬戦をするのはいくらなんでも不自然すぎた。

ユーマは皆に相談した。そして助言してくれたのはブソウ。

「アギはどうだ」

「アギ？」

「あいつは防御……いや『守る』ことに特化したタイプだ。お前の力をみせるだけならランクAを束にして相手するよりもずっといいはずだ」

ブソウは以前自分を訪ねてきたアギにユーマの事を話そうとした。

2人を戦わせる。それは彼がその時から思っていたことだ。

「ブソウ君が目をかけてる後輩だよね？　そう言ってミツルギ君と彼の実力をいっぺんに測りたいだけでしょう？」

報道部部長はそう言ってブソウを茶化すが彼は無言でそれを肯定。

「あれ、本気？」

「ああ。あいつは能力に癖があるから評価されにくい。奴の試験官をしてみないか？　丁度あいつの試験日は最終日の明日だ。ミツルギが相手ならばアギも実力が発揮できるだろう。どうだ？」

「……アギ、か」

ユーマは今更アギを巻き込むことに気が乗らなかったが、代案がなかったので試験官を急遽引き受けることにした。

こうして試験最終日、作戦決行の直前でユーマはアギと試合をすることになった。

2人の初対戦はユーマが降参、アギの勝利で終わったが《精霊使い》そして《盾》の実力は全校生徒の知るところとなる。

もちろん《Aナンバー》の1人である彼にも。

＋＋＋

アギの試験終了後。

練武館の控室ですべてをアギに話し、1人になったユーマ。

「やっぱり気まずかったな。光輝さんは何回こんな気持ちを味わったんだろう？」

疲れた体と頭でぼんやりと考えるのは兄のこと。

彼は独断専行する傾向が強く、事が済むといつも相棒のもう1人の兄や姉にとっちめられていた。

（わたし言いましたよー。お兄さんじゃありませんーって）

ユーマの呟きに応えたのは風葉。風の精霊は魔力が回復しきれなくて姿をあらわさず、短剣の『おうち』から《交信》で話しかける。

「……なんかあとが怖くなってきた。これからはちゃんとみんなと話をしよう」

（そうですねー）

あと3時間。仮眠でも取ろうと思ったその時、控室のドアが開いた。

入ってきたのは金髪の少年。

「貴様、何をする気だ」

「……昼寝」

ユウイ・グナント。《竜使い》の彼が取り巻きを連れてユーマのところへ乗り込んできた。

「ふざけるな！　やっぱり裏でこそこそと仕掛けていたのは貴様だな。ボクに何をする気だ！」

声を荒げて非難するグナントに対し、男のヒステリーてカッコ悪いなぁ、と思うだけのユーマ。

「アンタを潰す気でいた。……やっぱり馬鹿だろ？」

ユーマはガンプレートを抜いた。《竜使い》に狙いを定める。

「姿を見せた途端に直接乗り込んできやがって。こんな狭い所に人数ばかり集めて何する気だ？　自慢の怪獣がここで喚べるのか？」

精霊たちが姿を見せる。アギとの試合を見たのだろう。取り巻きたちが怯んだのがわかった。

「切る焼く蒸す煮る。調理法は要望に応えてやる。文句があるなら退け。フルコースはあとで準備して招待してやる」

「くっ、……覚えておけ。消耗した今のお前なんてボクの竜がいつでも倒せることを」

《竜使い》はあっさりと退いた。後で何かを仕掛けるような言葉を残して。

捨て台詞にユーマは呟く。

「今の俺なら……ね。　さて、どっちが仕掛けるのが早いかな？」

「何のことかしら？」

今度こそ寝ようとしたユーマにまた声がかかる。見れば険のある目つきになった金の髪の少女が１人。

「……怒ってますか？」

彼女たちの試験対策をコーチする約束を途中で放棄したのはユーマだ。やっぱり気まずい。

「言い訳次第ね」

アイリーンとリュガを連れたエイリークが目の前で仁王立ちしていた。

＋＋＋

２－１４ｂ　宣戦布告　後（前書き）

ユーマ、エイリークと遭遇

ＶＳ《竜使い》、決戦直前までの話

2－14b　宣戦布告　後

＋＋＋

「さっきまでいた人達の中にいたのは確か《Ａナンバー》の1人ですね？　貴方に何の用だったのですか？」
「挨拶と世間話を少々」
「……」
ユーマに対するアイリーンの蒼い瞳が冷たい。
「喧嘩か？」
「そんなとこ」
「「……」」
リュガの問いかけに軽く応じたら2人のお姫様に睨まれた。
ユーマは条件反射で正座をしている自分に気付いてない。
「さっきポピラに少しだけ話を聞いた。ティムスが殺られたですってね」
（いきてますよー。字がちがいますよー）
「……」
ユーマにしか聞こえない精霊の突っ込みは今の彼には正直うざかった。

「それで仇討ちの相手があの《竜使い》。間違いない？」
「……おおよそね」

ユーマはエイリークに頷く。

「アタシ達に話もしないで1人で戦おうとしたのは？」
「試験期間だったから。皆に迷惑かけたくなかったから」
「嘘ね」
「どうして？」
「勘よ」

即答に即答で返すエイリーク。

「アタシの《直感》を舐めないで」
「……《竜使い》は」

あまりに自信を持って言う彼女に観念したユーマは正直に話した。

「最初は俺を狙ってきた。俺のせいでティムスが襲われたようなものだったんだ。喧嘩を売られたのは俺だ。ブソウさんたちの力は借りたけどやっぱり俺、1人で決着を……！？」

突然、密室の控室に風が吹いた。彼女の怒気を孕んだ風が。

「アンタはっ、どうしてそうなのよ！！」
「ぶっ！」

エイリーク爆発。正座したユーマに《竜巻きっく》が炸裂した。

蹴り飛ばされたユーマは沈黙。

「ウ、ウインディさん、それはちょっと……」
「黙ってて。コイツは身をもって知らないといけないのよ。……ユーマ。アンタは風森の国で自分がしたことを忘れたの」
エイリークの怒声が響く。
以前ユーマは風森の国で起きた誘拐事件のときに傭兵達のリンチを受け、その傷をエイリークには誤魔化して彼女を救出したことがある。
そのあと気を失った彼はエイルシアの魔法を使っても3日も目を覚まさなかった。
エイリークは詳しく知らないが彼女の姉エイルシアの魔人事件のときもそうだった。《精霊使い》でなかったユーマは姉姫と魔人の戦いに首を突っ込み、1度は《病魔》に侵されて死にかけたという。
「アタシのこと突撃馬鹿と言うくせに1人で突っ込んで行くのはアンタの方じゃない！　わかってるの!?　アンタがそんなだからアタシが、姉さまが……」
――アンタの正体を知っているからアタシ達は、
「心配……するじゃない……」
「……ごめん」

エイルシアからユーマの正体とその問題をエイリークは聞いていた。それは本人がまだ知らないこと。

ユーマはただの異世界人ではない。姉姫の推測が正しければ、彼は世界に招かれて『写されたモノ』。その存在の在り方は不自然で哀しいものだった。

早く還る方法が見つかればいいと彼女は思う。同時にこの世界で暮らした日常が彼にとって『いい思い出』になればいいと彼女は秘かに願っている。

なのにこの少年は自分がいてもいなくても事件に巻き込まれ、さらなる事件を起こしては勝手に行動するのだ。

ユーマに怒りをぶつけるエイリーク。でも1番の理由は魔人事件の時と同様『仲間はずれ』にされたことかもしれない。

しばらくして少しだけ落ち着いた。エイリークは倒れたままのユーマに話しかける。

「昇級試験で確信した。アタシ達は強くなった。アギの力は意外だったけどね。ユーマ、アタシ達はアンタの力になれるわ」

「そうですね。私達は仲間です。だから遠慮はなしですよ」

「というわけだ。今度は俺達も混ぜろよな。また応援団の集会はお前も呼ぶから」

エイリーク、アイリーン、リュガ。それにアギも。今度はユーマを助けると言ってくれた。

「……ほんとうに、ごめんなさい」

ぶっ倒れたままのユーマはいたたまれなくなって起き上がれず、「ごめん、それにありがとう」と小さな声だけど3人に感謝の言葉を伝えるのだった。

――と、ここで話が終わればよかったのだが。

「ユーマさん、立てますか？」

アイリーンが倒れたユーマに手を差し伸べる。

彼女も少年には言いたいことが沢山あったが、エイリークがそのほとんどを代弁してくれた。

感情的になることが多いエイリークだがまっすぐに言いたいことを人に伝えることができることは羨ましいとアイリーンは思っている。

「本当にこれからは気をつけて下さいね。……あら？」

「げっ」

気付くのが早かったのはアイリーン。それは蹴り飛ばされ、吹き

飛ばされたはずみでユーマが落とした2枚の写真。

「ユーマさん。……これは？」

「応援団っていい仕事するよね？」

写真を手にしたアイリーンの声が低くなるので冗談を言って誤魔化すユーマ。もちろん通じない。

「応援団の写真？　それって多分文化祭のやつでしょ？　アイリィのものは相当な数が出回っているからもう諦めたら？」

「……『最新版』でした。それにウインディさんにはこれ」

「アタシ？　なんでって……。――！！」

手に取った写真の1枚をエイリークに渡すアイリーン。彼女の手が怒りで震えている。さらにそれがエイリークに伝播した。

《アイリーン公式応援団》から覆面男ことユーマに贈与された2枚の写真。1枚はアイリーン。試験中でディジーと試合していた時のものだ。

終盤、アイリーンの足元から出現する《氷晶壁》。その勢いに合わせて高く跳び、宙を舞う《銀の氷姫》。

写真の中の彼女はドレス型の戦闘衣を着用しているのでスカートがきわどくひるがえっていた。見る人が見ればナイスアングル！と叫ぶ人もいるだろう。

そして《旋風の剣士》が戦慄したもう1枚の写真。これはもちろ

んエイリークである。去年の文化祭のもののらしい。

写真に写るのは水色と白のエプロンドレスに大きなリボン。金の髪を下ろした笑顔の美少女。

ユーマの記憶が確かならばこれは「鏡の国のアリス」。初めて見たときはこの世界にもあの童話があったのかと驚いたのものだが、これがエイリークと気付いた時の衝撃はすごかった。

ふりふり着てるエイリーク。よく見れば笑顔がぎこちないがこれはレア過ぎる。

あらぬ誤解を受けるのをおそれ、ティムス達に見つからないようにと写真を持ったままだったのがいけなかった。

（以前見たバニーさんなアイリさんの写真といい、文化祭ではホント何をしたのだろう？）

という世界の謎に挑戦しては現実逃避を図るユーマ。

「忘れなさい！」

「氷晶球……展開！」

「ちょっ！　これは応援団の副団長さんが勝手に……ってリュガ！　逃げないで弁護して！　アイリさんはそれ『球』じゃない。トゲ、トゲがついてる！！」

地下にある控室は逃げ場がない。唯一の脱出口である出入口は、とばっちりを恐れたリュガが逃げるときに《高熱化》でドアノブを溶かして3人を閉じ込めた。

「風葉！」
（むりですー）
「砂更！」
（……）

喋ることのできない砂の精霊はとうとう《交信》でも沈黙。

咄嗟に壁を《白砂の腕輪》で叩くも鋼鉄製の壁を砂状にすることはできず突き破れない。

「往生際が」
「悪い！！」
「あーーーーっ」

叫ぶことしかできない。

《白砂の腕輪》のもう1つの能力、防御力の強化が彼を気絶させることを許さず、彼女たちが気のすむまでユーマは滅多打ちにされた。

＋＋＋

ユーマという名前のぼろ雑巾を発見したのはエルド兄妹。

「……洒落にならねぇ」
「馬鹿ですね」
「……」

ポピラがヒールの回路紙のことを覚えていなかったのなら、ユーマの作戦はここで終わっていた。

＋＋＋

昇級試験全日程が終了。

最終日の試験は午前中までであり、午後からは学園の生徒すべてを集めた全校集会がある。

場所は例年とは違って《スタジアム》で行われた。老朽化が著しいが、全生徒の5倍以上を収容できる大規模な施設である。

「みなさん、今日までの試験、お疲れさまでした」

生徒を労うこの挨拶から学園長、イゼット・E・ランスの話ははじまった。

「本来学園都市で決められている個人ランクの基準は目安でしかありません。普通科で学問を学ぶ生徒。技術士、魔術師、戦士とそれぞれの道を歩む生徒。若いあなたたちが目指すものに点数をつけることはしても、わたしたち学園の教師はあなたたちの選ぶ道を何も否定はしませんし誰にも文句は言わせません。ただ前に進むことは決して忘れないでください」

リーズ学園、ひいては学園都市は世界中からこどもたちを集め、再び世界へと送り出すためにある。

数年間の学生生活で生徒の誰もが自分の道を見つけ、歩み出す力を得て欲しいと学園長はいつも願っている。

そして毎年この時期になると学園長は、生徒達すべてに向かってこのことを『お願い』するのだ。

「お話が長くなってしまいましたね。最後になりますが今日は特別に『わたしが』有志を募り、みなさんの為にイベントを用意しました。……突然で申し訳ないですけど《Ａナンバー》の皆さんは前に集合して下さい」

ざわめく生徒。そして驚きながらも集まった１０人のエース達。

ブソウ、リアトリスもいる。

それから。

「貴様!?　どうして」

「どうしたんです？　《竜使い》さんよ」

平然と隣に並ぶティムスに驚くユウイ・グナント。

勢揃いする《Ａナンバー》を前にして学園長は話を続ける。

「ご存知の方は多いと思いますが、新入生の皆さんもいますので改めて紹介します。彼らは《Ａナンバー》。生徒会とは別の意味で当学園の代表といえる１０人の生徒です」

学園長はエース１人１人を自らが紹介していく。

「最後は《天才》の錬金術師、ティムス・エルドさん。１５歳ながら3年生に在籍する彼は、双子の妹さんと共にブースターの製作をはじめ優れた作品を創造する技術士です。実は試験期間中にこの《スタジアム》の構造補強を《組合》の中心となって計画、実行したのもティムスさんなのです」

にこにこと微笑みながら紹介していく学園長。時折拍手が彼らに送られる。

「……ちっ」

それと褒められるのに慣れていない天才少年が1人。

「《Ａナンバー》の１０人はそれぞれの得意分野を突き詰めた生徒たちです。新入生の皆さんは彼らを目標に励むこともいいでしょう」

そう言って学園長は《Ａナンバー》を見て、それから集まった生徒たちを見渡す。

「今日用意したイベントとは彼らの実力を見る機会として公開試合をこの場で行うことです。エースの皆さん、構いませんね？」

確認をとるように話しかける学園長に一部を除いて驚くエース達。

それ以上に大きな反応をみせ、喝采をあげる学園の生徒たち。学園のトップ同士の試合と聞いて誰もがハイレベルな攻防戦を期待している。

しかし、学園長の話はまだ続きがあった。

「そして皆さんはご存知でしょうか？　ランクAの生徒は誰にでもエースの座をかけて彼らに挑戦する権利があるということを。……いいですよ。おいでなさい」

学園長は空を見上げた。じっと、何かを待つように。

「――――――」

「えっ？」

「何」

空の上から何か聞こえてくる。

「ちょっと、あれ」

「嘘だろ？」

聞こえてくるのは叫び声。気付いて空を見上げる生徒が増える。

「どいてっ、くれーーーっ！！」

少年が1人、空から落ちてくる！

「はい。ちょっとみなさん場所を空けましょうね」
「自警部！　誘導！」
穏やかな学園長の声が拡声器を通して響き渡り、ブソウが慌てて部下に指示を送る。
生徒はスタジアムの中心を空けて速やかに散らばった。
＋＋＋
「ストーム・ブラストぉ！」
空から降ってきた少年、ユーマは風葉の補助なしで《風乗りの外套》を使うが落下速度を減衰できず、仕方なしにガンプレートを抜いた。
《ストーム・ブラスト》の衝撃波で落下速度を相殺。用を為さなくなったマントを脱ぎ捨てながら、ユーマは見事に《スタジアム》の中心に着地する。
静寂。
「もちろんランクＡ待遇の《特待生》である『彼』にもその権利があるのです。……紹介します。公開試合に臨む、挑戦者です」

誰もが驚愕する中で学園長だけが淡々と彼を紹介した。

迷惑極まりない派手な登場をした黒髪の少年。

学園の全生徒が注目する中で彼は、

「《精霊使い》、ユーマ・ミツルギ」

腰に差した《守護の短剣》抜いて、

「生徒会規約に則って俺は、《Ａナンバー》に挑戦状を叩きつける！」

剣の切っ先を『彼』に向けた。

「《竜使い》、ユウイ・グナント。エースの座をかけて俺は《幻創獣》での勝負を申し込む。……断れないよな？」

練り上げた作戦と仕組んだ『舞台』の上で、ユーマは最後の罠を発動させた。

２－１４ｂ　宣戦布告　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

ユーマＶＳ《竜使い》、コメットマンＶＳ皇帝竜。

特撮ヒーローの幻創獣は黒竜を倒せるのか？　勝敗の鍵はユーマが設定した《必殺技》にある。

次回「決戦、皇帝竜」

「知らないのか？　ヒーローって奴はな……」

2－15　決戦、皇帝竜（前書き）

ユーマＶＳ《竜使い》。第１ラウンド

2－15　決戦、皇帝竜

＋＋＋

1人の少年は1つの絵に魅入られた。

それは赤い空に黒い翼を広げ、羽ばたく黒竜の絵。

竜の絵はほかにもあったが少年はその黒竜しか目に留まらなかった。黄金の角と爪を持ち、力強く圧倒的な存在感のある竜の姿にただ憧れた。

羽ばたく黒竜の絵。背景の赤い空の下、描かれた炎と燃える街を少年は気にもしなかった。

破壊者たる黒竜に対する畏怖よりもその力への憧れが強かった。

最初はただそれだけだった。

＋＋＋

学園にいるすべての生徒が見守る中で《精霊使い》はエースである《竜使い》に勝負を挑む。

（学園長公認の決闘だと？　……ここで奴に負けたら、ボクはエー

スの資格を簡単に奪われる!!）

離れているのにもかかわらず、向けられた短剣の切っ先は《竜使い》を確かに追い詰めた。

学園の生徒を前にした公開試合、さらにはエースの座をかけた決闘となってしまえばエースはまず断れない。断れば恥さらしもいいところだ。

《Ａナンバー》の１人、ユウイ・グナントの立場が突然今になって揺らいだ。ユウイは挑戦状を叩きつけられた自分以外の《Ａナンバー》を見渡す。

誰もが驚き、面白そうに《精霊使い》を見るエースの中で眉間に皺を寄せて額を抑える自警部部長とその彼を見て苦笑する赤毛の騎士がいた。

それとユウイを見てにやりとする錬金術師。３人が《精霊使い》側だとすぐわかった。

ティムスと目があってとんでもないことに彼は気付く。

（重傷のはずの奴が《コロシアム》の補強工事を指揮した？　それを今日までボク達が知らなかった？）

そこで初めて情報操作の可能性、報道部を敵に回していたことに気付いた。

元々報道部部長がユーマに協力したのは打算だったのだ。彼女は

《竜使い》への報復のきっかけと『隠れ蓑』をずっと探していた。それが《精霊使い》の少年だったというだけだ。

《竜使い》の最大の間違いは《精霊使い》を敵視したことではない。それ以前に報道部の情報を力ずくで盗んだことあったのが失敗だったのである。

その事実を忘れて『中立』である報道部の『とっておきの情報』を信用したことが今の状況を作り出していた。自警部の特殊部隊と噂の『覆面男』のことも彼どころか学園の生徒すべてがその詳細を知らない。

学園の中では全てを欺かれる。報道部を敵に回すということはそういうことだった。

「おい、そろそろ返事をしたらどうだ？　みんな待ってるぜ」

隣にいたティムスが沈黙するユウイに声をかける。

誰もが注目していた。《精霊使い》が、他のエースが、学園長が、それに遠くで見ているであろう報道部部長が、本当の『敵』だった生徒会長が、

学園のすべてが《竜使い》の次の言動に注目している。

これは仕組まれたことだ。ユウイは間違いないと確信するが敵は明らかに消耗している《精霊使い》。

その彼が《幻創獣》で勝負を挑むならば恐れる理由が彼にはなかった。

「……いいだろう。見せてやるよボクの力を、ボクの竜を！　ボクの《皇帝竜》は最強だ！！」

対戦者同士睨みあう2人。《スタジアム》は生徒の歓声で沸いた。

＋＋＋
決戦、皇帝竜
＋＋＋

「というわけではじまりました今期初の『エース争奪戦』。会場はここスタジアム。実況はなんと報道部部長であるこのボクだあぁぁぁぁぁ」
「馬鹿ですね」

解説はポピラ・エルドでお送りします。

「ところで幻創獣にも詳しい《天才》の妹であるポピちゃん。この試合はどんな展開になるのでしょうか？」
「……はぁ」

これは仕組まれたことだ。でもなんで私はここにいるのだろう、とポピラは不思議に思う。

「単純に《竜使い》対《精霊使い》ならばミツルギさんが勝つと思います。アギさんとの試合でもあの人はまだ精霊の力のすべてを見せていません」
「なるほど。では幻創獣同士での対決ならどうでしょう？　《竜使い》、ユウイ・グナントが圧倒的有利じゃないかのな？」
「そうかもしれません。でもミツルギさんはそれをわかっていながら幻創獣で勝負を挑みました。《皇帝竜》への対策は当然しているでしょう」
とりあえず与えられた役割を無難にこなすポピラ。
「彼のセコンドにはポピちゃんの兄である天才君が付いています。やっぱり秘策ありなのか？　面白くなってきましたぁ」
「……」
いいからはじめてください、とポピラ。それに対してわっかりましたぁ！　とテンション上げっぱなしの部長。対極的な2人。
「因縁の対決はもう間もなく開始です！　この放送は学園長主催、スポンサーは『エルドカンパニー』、ほか《組合》の各ギルドの提供でお送りします」
「カンパニー？」
当人の知らないところで兄妹の会社（新設のギルド）が立ち上がっていたらしい。
＋＋＋

「カイゼル！」
「グ、グルァアアアア」
ユウイの幻創獣、《皇帝竜》は１０メートル近い巨体と黒い翼を震わせて咆哮。
《スタジアム》の観客に向けたパフォーマンスだ。
「……大きいわね。ユーマはアレにどう対抗するの？」
「わかんねぇ。そもそも幻創獣同士の戦いを見るのも初めてだぜ」
観戦席ではエイリーク達がユーマの戦いを見守っていた。
「出ました。《竜使い》の代名詞、《皇帝竜》！　対するミツルギ選手の幻創獣は！？」
ユーマも右腕の腕輪を掲げて幻創獣を喚ぶ。
「こい、コメットマン！」
ドシーン！　という衝撃と地響きは会場を揺らした。
先程の彼の登場を彷彿させる空からの落下。銀の彗星が落ちてきた。

「い、《隕石落とし》だぁあああ！？」

魔術師から見ればそれは火属性上位の砲撃術式にもみえた幻創獣の登場。

「ミツルギさん、この登場シーンに無駄なＩＭＰ使ってるんです」

ポピラは呆れるが登場時のパフォーマンスはユーマのこだわりが勝った。大きな歓声。

土煙で見えなかったユーマの幻創獣が姿を現す。

全身が銀色に輝く逞しい体躯。身体のところどころには模様のような赤いラインが描かれている。

「人型？　でもあれ」

頭と一体化した仮面の貌には楕円型の大きな2つの目があり、敵である黒竜をただ見上げていた。

「さあ、やろう。ヒーローショーの始まりだ」

ユーマの幻創獣はファイティングポーズをとる。

「へアッ！」

コメットマン。

地球を狙う侵略者たちから人々を守リ抜いた光輝く銀色の戦士。

「かかってこい、《皇帝竜》！！」

自信満々のユーマ。肩を震わせるユウイ。

「……ふ」

全長がユーマの腰までしかないそのヒーローの姿は、

「ふざけるなぁぁぁぁ！！」

3頭身だった。

＋＋＋

試合開始。

「さあ、《竜使い》の絶叫と同時に試合が始まりました。なお、この勝負は1本勝負。相手の幻創獣に耐久値を上回るダメージを与えて消失させた方の勝ちとします」

報道部部長の簡単なルール説明の間に幻創獣が互いに動きだす。

「そんな雑魚で皇帝竜が倒せるものか。いけ！」

「GO！」

ドシン、と地響きを立てて歩く皇帝竜に対してコメットマンはダッシュ。驚く実況。

「は、はやい！　速いぞコメットマン！　あの短足で一気に皇帝竜に接近！」

「コメットパンチ！」

コメットマンは加速の勢いを加えて短い腕を振るう。ボフッ、と皇帝竜の脚を殴った。

「雑魚が。効くかよ」

皇帝竜は銀色のチビを蹴り上げて鋭い爪で切り裂きにかかる。

「デュア！」

振り下ろされる黄金の爪。コメットマンは空中で体勢を整えて《コメットキック》で応戦。

キックの反動で真上にジャンプして皇帝竜の頭上をとる。

今だ！　ユーマは叫ぶ。

「コメット、ダァァァイブ！！」

ダイビングヘッドバット。先制はユーマの幻創獣。

「グガァッ」

皇帝竜の頭に流星の様な体当たりが炸裂。皇帝竜のＨＰゲージを僅かに削った。

「きまったぁ！　なんと、巨大な竜を相手に一撃を与えたコメットマン！　ちっこいくせに戦えています。さらには皇帝竜のスタンピングをチョコマカとかわすかわすぅ。さあポピちゃん解説！」

「……幻創獣は思考操作なので細かい動作や機敏な動きは術者のイメージ次第になります」

部長、うんうんと相槌をうつ。

「そうだね。皇帝竜が2本足で立っているのもコメットマンが人型なのも動きのイメージしやすいからだね」

「コメットマンは元々8頭身でしたが実は『人並みの動作』しかできなかったんです。ミツルギさんは幻創獣をあえて今の姿にして小さな全身をフルに使った奇抜な動きで人以上の敏捷性と運動性をコメットマンに与えたのです」

ユーマの思考操作では超人じみたパワフルな動きよりコミカルな動きのほうが断然よかった。それを活かすためにデフォルメされた姿の幻創獣を採用したのだ。

コメットマンは皇帝竜の脚や爪、尻尾の攻撃を掻い潜り、ちょこまかと動き回る。

ユーマの幻創獣の操作はイース達との訓練の甲斐あって相当なレベルだった。コメットマンが視界から外れても《ウインドウ》から見る幻創獣の視点から攻撃を予測することができる。

小さな戦士が大きな竜相手に立ちまわる様子は観戦席の生徒に大いにうけた。

「小賢しい。……非力なくせにボクの竜に盾突くな！」

カイゼル・バースト。

皇帝竜が必殺技である高熱線を撃つ態勢をとる。

ユーマは思考操作で射線から離れるようダッシュ操作したが、コメットマンが何かに躓いて転んでしまった。

「さっさと消えろ！　カイゼル・バースト！！」

「――っ！　エレガント・ローリング！！」

咄嗟に《じぇんとる・ビーン》の回避行動をイメージ。コメットマンは転んだはずみを利用してゴロゴロと連続でんぐり返りをして吐き出された熱線を躱してみせる。

「ふぅ。あぶねぇ」

転がったコメットマンは途中で前転とびして綺麗に着地。ユーマの汗をふく仕草を真似て危ない危ない、とポーズをとった。

滑稽な回避運動と幻創獣の人間くさい仕草に笑いが起きる。決闘は単なる見世物と化していた。

「……どこまでボクを馬鹿にする気だ？」

ユウイはずっと怒りで震えていた。笑いを含んだ歓声は彼を苛立

たせる。

「笑うな！　貴様、そんな雑魚で何故ボクに盾突く？　決闘までしてボクからエースの座を奪おうとする！　貴様には関係ないだろ？《精霊使い》！！」

「「「……」」」

悲鳴のような絶叫。沸いていた観戦席が静かになる。

「邪魔をするなよ。ボクは証明するんだ。ボクの竜、ボクの力を見せつけるんだ。……ボクには力がある。ボクの騎士団が、この皇帝竜が！」

「……」

「なのに貴様は馬鹿にしている。ボクの竜と戦うというのになんだそのチビは？　ボクと一緒に笑い者になるためにこんなことをしたのか？　答えろ！」

ユーマは質問には答えずに静かな声で逆に問い返した。

「そんなに自信があるならどうして裏で俺や他のエース候補の人を襲う真似をした？　何人の人をその竜で傷つけた？」

ユウイの悪事を堂々と暴くユーマ。真偽はともかくざわめく観戦席。

「どうして、ティムス達を襲った？　間に合わなかったらあいつの左腕、駄目になっていたんだぞ」

「知るかよ！　ボクは奴らに見せつけただけだ。竜のスゴさをな。そこの錬金術師が怪我したことなどボクには関係ない！」

皇帝竜はコメットマンを無視してユーマを襲いだした。薙ぎ払われる尻尾をユーマは間一髪でコメットマンを割り込ませ全力で蹴り返させる。

「おおーっと、術者を直接攻撃。これは反則だぁ！」

「うるさい！　黙れ！！」

実況相手に怒鳴る。ユウイは頭に血が上って自分が悪役になっていることに気付いていない。

ユーマは反則も気にせずコメットマンで戦い続けた。

「気付いているか？　お前の怪獣が見せてるのはただの暴力だ。そんなもので何がしたいんだ」

「うるさい！　貴様でもその雑魚でもどっちでもいい、消えろ！」

地団駄を踏み、ただ暴れる皇帝竜。大振りな攻撃は小さなコメットマンに当たらない。

ユーマは隙をついてコメットマンのパンチやキックを繰り出す。

攻撃はボフッ、ポカ、といった感じの小さなダメージだが着実に皇帝竜に与え蓄積していく。

コメットマンがギリギリのジャンプで回避するたび、皇帝竜の身体を駆け上って攻撃をするたびに観戦席から歓声が上がった。コメットマンを応援する声が増えていき、《竜使い》はその傲慢さが露見して勝手に孤立していく。

「黙れぇ！　カイゼル・バースト！」
「――！？　跳べ！」

再び放たれる熱線に驚くユーマ。撃たれる直前にコメットマンは皇帝竜の真下に全力移動。そこからロケットのように跳んで皇帝竜のあごに頭突きをかました。

顎を強打して皇帝竜の頭が上を向く。《カイゼル・バースト》は観戦席の上を通り抜けていった。

「お前！　どこを狙った！？」
「観戦席さ。うるさい奴らにボクの竜の力を教えようとしたまでだ」

ユーマは睨むがユウイは平然としている。

「すべて焼き尽くしてやる。……ちっ、ゲージが溜まらない。こんな雑魚が相手だからダメージを受けることも与えることもできない。破壊しろ！　カイゼル」

皇帝竜が狙いを観戦席に変えた。しかし尻尾をぶつけようとして見えない壁に阻まれる。

これはティムスが事前に施した防御結界の術式だ。

「馬鹿が。補強工事したといっただろ？」
「何だ？　なんだよこれぇ！」

《結界》を気にもせずユウイは皇帝竜で殴りかかる。少しずつだが結界から軋むような音が聞こえ、同時に観戦席からも悲鳴が上が

る。

「ユーマ！　攻撃を一点集中されると流石にマズイ。皇帝竜を抑えろ」

「わかった」

コメットマンが無防備な皇帝竜の背後をとって飛びかかる。自身の何倍にもなる高さまでジャンプして攻撃。

「コメットキックっ！？」

「ひぃぃっかかったぁ！！」

ユウイが奇声をあげ皇帝竜が翼を広げた。そして振り向きざまにコメットマンを翼で叩き落とす。

「しまった」

「雑魚が。掴まえたぞ」

コメットマンを掴みあげる皇帝竜。握り潰そうと力を入れる。

「なんだぁ？　潰れないじゃないか。　フン！」

コメットマンの防御力は意外にも高い。皇帝竜は握り潰すのを諦め、気のすむまで地面に叩きつけては何度も踏みつぶした。

「潰れろ。潰れろよ！　ぷちぷちぷちぷち潰れろ！　ヒャハ」

奇声混じりの叫びがスタジアムに響く。いくら幻創獣だからといってもコメットマンをいたぶる戦い方は見ていて酷い。

コメットマンのＨＰゲージが一気に減っていく。

「雑魚が。……さあ、今度はお前たちだ。やれ、カイゼル！」

「グガァァァッ！」

３発目の《カイゼル・バースト》は明らかに観戦席を狙ったものだ。

いくらなんでもあの熱線はティムスの付与した結界でも耐えられない。

「ユーマ！」

「うおおおっ！！」

倒れたコメットマンが再び跳び上がり皇帝竜の正面に出る。さながら観戦席にいる生徒を守るように。

「コメット・シールド！」

ユーマはやむを得ず必殺ゲージを消費してバリアーを張り、《カイゼル・バースト》を正面から受け止めた。

「邪魔を、するなあああああ」

均衡したのは一瞬。すぐに押し切られた。

観戦席への直撃は避けられたがコメットマンは多大なダメージを受ける。ＨＰゲージが２割を切った。

「なんだよお前？　雑魚のくせにまだ消えないのか」

「……コメットマンは怪獣から地球を守る《ヒーロー》なんだよ。負けるか」

満身創痍で立ち上がるコメットマン。みんなを守るように皇帝竜に立ち塞がる。

「ヒーロー？　なんだよそれ。そんなものが竜より強いのか？　その雑魚チビが英雄や勇者だというのか？」

馬鹿にした声。でもユーマ気にもせず答えた。

「違う。そんなものと一緒にするな」

ユーマの声には若干の怒りがあった。

「この世界の勇者なんて結局他人から世界を救う役割を押し付けられた奴の事だ。コメットマンは違う。ヒーローなんだ。ヒーローは……」

「ごちゃごちゃうるさい！　飛べ、カイゼル！」

コメットマンを無造作に蹴り飛ばし、黒い翼を広げてスタジアムから上空へ飛びあがる皇帝竜。

「もういい。スタジアムごと吹き飛ばす」

「馬鹿が。学園の生徒巻き込んだ上にてめぇはどうする」

「構うものか。竜は最強。ボクの皇帝竜が最強だと知らしめればボクはどうなってもいい」

「ちっ」

狂っていた。そうティムスに答えるユウイは正気ではない。

まるで魔力の《狂気》に侵されたような……

「《イグナイター》か。あの野郎、幻創獣の腕輪に魔石を組み込んでやがるな」

「ティムス……あれやるよ」

ユーマの決心にティムスは顔をしかめた。あれとは彼が気に入らない作戦だったのだ。

「フェイズ3か？」

「あいつとはもうまともな勝負にならない。だったらもっと『ふざける』しかない。ポピラに合図お願い」

「……どのみち皇帝竜の暴走を止めないとマズイか」

ティムスは観念してポピラに向けて合図を送った。

スタジアムの破壊を阻止するためにユーマ達はほんとうのヒーローショーをはじめる。

＋＋＋

一方その頃の実況席。

「上空へ飛び出した皇帝竜。一体何をする気だ……ってやばくない？」

誰が見ても皇帝竜は空から必殺技を撃つ気だ。あれだとスタジア

ム全体に被害が出る。

それに気付いた生徒もいたようだ。慌てて非難しようとするが安全圏まではきっと間に合わない。

「グナント君の馬鹿っぷりにはまいったね。これじゃ先生が動いちゃうよ」

「〇〇〇〇さん」

「ちょ！　ポピちゃんボクの名前呼んじゃ駄目！　あぶないなぁ」

ポピラ不意打ちに伏せ字で対処する報道部部長。しょうもない彼女の特異技。

「兄から合図がありました。台本どおりお願いします」

＋＋＋

2－16　銀の彗星（前書き）

コメットマンＶＳ皇帝竜。第2ラウンドの茶番劇

2－16　銀の彗星

＋＋＋

空から威圧する黒竜。

正気でない《竜使い》が自分ごと《スタジアム》を破壊しようとしていた。

「ゲージが溜まらない分はチャージスキルでカバーすればいい。さあ、見せてやる。ボクの、竜の力を！　……ん？」

ドン！　とスタジアムから飛び立つ銀の彗星。

コメットマンが再び皇帝竜に立ち塞がる。

「雑魚のくせに飛行スキルだと？　まだ邪魔する気か」

「空を飛べるのはヒーローのお約束なんだ。……させるかよ」

ユーマは上空にいる幻創獣に注意を払いながらユウイに答える。

時間を稼ぐしかない。ここまできてもユーマはあくまで幻創獣で勝負しなければいけなかった。

作戦の最終段階であるフェイズ４、《竜殺し》を発動させるため

にも『コメットマンが竜を倒した事実』が必要なのだ。そしてそのためのフェイズ3だ。

「お前がそんなに竜の力を見せたいなら俺も見せてやるよ。ヒーローって奴を」

HPゲージがレッドゾーンに突入したコメットマン。しかし必殺ゲージは5本分の満タン状態だ。

「話としてはふざけていてテレビの中にしかいない嘘っぱちでも、俺が見た本当のヒーローの力、お前に見せてやる」

空飛ぶコメットマンは弾丸のように皇帝竜へ突撃。

時間を稼ぐしかない。コメットマンに設定された最大の必殺技。その発動条件はあと1つ。

勝利の鍵は報道部部長にある。

＋＋＋

銀の彗星

＋＋＋

コメットマンは戦い続けた。地球を守るため、ぼくのねがいを叶えるために。

コメットパンチは地底から目覚めた怪獣を殴り飛ばし、コメットキックは深海の魔物を海底に沈めた。

コメットチョップで異次元の侵略者を切り裂き、コメットビームが宇宙艦隊を薙ぎ払う。

コメットマンはずっと戦い続けたんだ。彼は世界中で現れる怪獣たちの脅威に立ち向かう地球のヒーローになった。

コメットマンはぼくたちの世界を守り、平和を少しづつ取り戻してくれた。みんなコメットマンに感謝していたよ。

でもそれだけでぼくたちは気付くことができなかった。

コメットマンは疲れ果て、傷ついてもひとりで戦い続けていたんだ。

誰にも助けを求めることなく、ひとりずっと。

「あなたのせいでお兄ちゃんが苦しまなきゃいけないのよ」

違う星からきたとぼくに告げた女の子がある日そう言った。

「わたしたちは人の願いを叶えるために存在するの。あなたのお願いのせいでお兄ちゃんがこの星に縛られてしまった」

ぼくは知らなかった。

「いつまでたっても平和にならないこの星にいるからあなたのお願いがずっと叶わないでいる。だからお兄ちゃん、いえコメットマンは倒れるまでずっとあなた達のために戦い続けなきゃいけないの」

お兄ちゃんを返してと泣いて叫ぶ女の子。ぼくは何も言うことができなかった。

「どうして自分たちで地球を守ろうとしないのよ！　お兄ちゃんひとりにすべてを背負わせないで！」

ぼくは知らなかった。

――地球を守ってください

ぼくの願いひとつを叶えるために戦うコメットマン。ぼくのせいで故郷に帰れなくなった地球のヒーロー。

そのヒーローが今、地球最大の脅威、最強の敵に1人で挑み倒されようとしている。

ぼくは知らなかったんだ。

コメットマンの正体が、一人ぼっちになったぼくの傍にいつもいてくれた、あのお兄さんだったなんて。

「うわあああああ！」

ぼくは警備隊のブラスターガンを持って怪獣に立ち向かった。ビームは外れたり効いてなかったりするけど構わず撃ち続けた。

「やめろ、やめろよ！」

膝をついたコメットマンは傷だらけで、輝いていた全身はくすんでいて鈍い銀色だった。こんな状態でずっと戦っていたなんて。

「いいんだ。もういいんだ」

もう戦わなくていいんだ。ぼくたちのために傷つかなくてもいいんだ。

いなくなって欲しくない、大切なひとだから。

「戦うから。ぼくが地球を、コメットマンを守るから。だから！」

だから、

――ありがとう。でもこれは私の願いだ

最期の力を振り絞って立ち上がるコメットマンを見てぼくは、

――君たちを守りたい。君の願いだけじゃない。私の願いの為に戦いたいんだ

泣きたくなんてなかったんだ。

＋＋＋

幻創獣の空中戦。

ユーマにとってコメットマンの操作は飛ぶほうが簡単だった。

翼を使わない飛行方法は自由自在。飛ぶというイメージよりもコメットマンという物体を宙に浮かばせて動かしているという感じだ。

一方の皇帝竜の飛行能力は移動手段に等しい。ユウイ自体が空中戦に慣れていないのだ。戦いはユーマの方に分はあった。

撹乱と体当たりを繰り返す小さなコメットマン。しかし攻撃力が足りない。

手数の割には皇帝竜のＨＰゲージはまだ９割残っている。

「いい加減にしろよ《精霊使い》。お前の雑魚はスピードと防御にＩＭＰを割り振っているのだろ？　そんな攻撃じゃ何千殴っても皇帝竜は倒せないんだよ！」

「……」

皇帝竜の圧倒的な力を見て余裕を取り戻す《竜使い》。

「教えてやる。貴様の雑魚は総ＩＭＰ１０万といったところだろうが、ボクの皇帝竜は３２万５千だ。パワー、スピード、タフネス、すべての能力に割り振られたＩＭＰの値が貴様とは違うんだよ」

自慢げに笑うユウイ。そんな彼を見てユーマは、

「……はぁ。やっぱりこれゲームだよな」

溜息をついた。

「何だと？」

「ふざけてるってことさ。こんなので自慢するなよ。アーケード街の《ドラゴンライダー》で８面のハイスコア出した方がよっぽど自慢できる」

本当にくだらないと思っていた。ゲームで暴力をふるう《竜使い》はユーマが見てもガキとしか言いようがない。

「もういいだろ？　勘違い野郎。こっちはお前にとことん付き合ったせいで授業さぼったりブソウさんとかいろんな人に迷惑かけてるんだ。アギには負けるしエイリーク達は怒るし殺されかけるし……」

愚痴を呟く。正直早く終わらせたかったユーマ。

「だから最後はこっちのシナリオに付き合ってもらうぞ。まだ『先』があるんだから」

「何だよ？　何を言ってる」

「２４万」

「は？」

ユーマは勘違い野郎ことユウイに１つずつ訂正するように言った。

「コメットマンの総ＩＭＰは２４万８００７。スピードにはほとんど能力は割り振っていない。これは訓練の成果だ」

「――！？　嘘だ」

「嘘じゃないさ。ゲームってやりこむ時間と操作の熟練度、それと研究して攻略法を編み出せば誰だっていいところまでいけるんだ。この手のジャンルは光輝さんの得意分野だし俺も心得がある」

驚愕するユウイに余裕を見せるユーマ。いつの間にか精神的優位が逆転していることにユウイは気付いていない。

「……何をする気だ？」

「ヒーローショー。１つずつ教えてやる。まずコメットマンにＩＭＰを大きく割り振った能力は防御力と飛行能力だ。そして、」

ユーマは空を指差す。皇帝竜やコメットマンのいる空よりもはるかに高い空の上を。

あるいは星の降る宇宙を。

「これが必殺技だ。２号、Ｖ３、コメット、キィィィク！！」

銀の彗星が２つ、皇帝竜めがけて落ちてきた。

ドガッッ！！

「グ、ガアアアッ」

直撃。皇帝竜が彗星ごと地に墜ちる。

スタジアムの中心に叩きつけられた皇帝竜。結界が観戦席を守るがその衝撃はスタジアム全体を大きく揺らす。

同時に降り立つユーマのコメットマン。

その隣には仮面のディティールが微妙に違う、もう2体のコメットマンが並び立つ。

「3体の幻創獣だと？　貴様、反則だ！」

「違う。これはコメットマンのレベル5の必殺技、《コメットマン・ファミリー》。知らないのか？　ヒーローって奴はな……」

驚き憤るユウイに対し、この一言からヒーローとは何かをユーマは語る。

「ヒーローってシリーズものなんだ」

逆襲のコメットマン。皇帝竜めがけて空から次々と星が落ちてくる。

＋＋＋

「スカイ、アクア、ガイア！」

起き上がる皇帝竜に3体のコメットマンが追撃のダイビングキック。

「セブン、エース、ジャック！！」

地上にいる6体のコメットマン達が皇帝竜の脚を抑えた所で腹に向かってコメットパンチ。

「ちいっ、飛べ！　カイゼル」

「逃がすかよ。V、W、X、ゼロ！」

羽ばたこうとする皇帝竜だが9体のコメットマンがわらわらと翼にまとわりつき、その間に4つの流星が皇帝竜の黒い翼を撃ち貫く。

「まだまだ。ファイヤー、サンダー、メタル、バイオ、ネオ、コスモ、セイバー、ブレード、パワード、ルナ、シャイン、武者、騎士、ブラック、ホワイト、パパ、ママ、ブラザー、シスター、ツインズ、ドラゴン、ライガー、クイーン、レオ、デビル、劇場版にジ・アニ

メーション、おまけに新、真、神コメットマン！」

落ちる落ちる落ちる。銀の彗星は雨のごとく皇帝竜を襲う。

落ちた彗星はコメットマンとして戦闘に参加。４０体以上のコメットマンが力を合わせて皇帝竜に挑みかかる。

「コメットパンチ！」

「「「「デュワ」」」」

皇帝竜に張り付いて動きを抑えた所に複数のパンチ。

「コメットキック！」

「「「「ヘアッ」」」」

２人組になり片方が踏み台になってコメットマンが高くジャンプ。流星キックを連続で皇帝竜の頭に叩きこむ。

「コメット、スウィィィィング！！！」

「「「「ダァアッ」」」」

コメットマンを振り払うように暴れる皇帝竜の尻尾を十数体のコメットマンが掴む。そしてすべてのコメットマンが集まって綱引きの要領で引っ張り、全長１０メートルもの巨体を投げ飛ばした。

「Z、グレート、カイザァアアア！！」

追撃の3連星。皇帝竜のHPゲージがついに半分を切った。

「どうだ！　ヒーローは1人じゃない。1体の攻撃力がなくても力を合わせれば負けはしない」

「……《隕石落とし》の再現に幻創獣の複数同時召喚!?　いくらレベル5の必殺技でもそんなものできるはずがない」

信じられなかった。どうしても反則としか思えなかったユウイ。皇帝竜が一方的に押されている。

「カイゼル・バーストォ！」

「キィィィング、コメットマン！」

皇帝竜が口を開いたところで王冠をのせたコメットマンが飛び込む。口に異物を突っ込まれて《カイゼル・バースト》が暴発。ダメージを受ける皇帝竜。

「なんだよ。なんなんだよそれ。カイゼルが、ボクの竜がこんな雑魚なんかに。貴様ぁ、反則だ！」

「うるさいよ。ちゃんと発動条件満たしてるんだ。反則じゃない。聞こえないのか？　この歓声」

「何が？　……！！」

騒音にしか聞こえなかった周囲の音。ユウイはやっと気付いた。

観戦席から聞こえるのは沢山のコメットマンコール。

＋＋＋

実況席では報道部部長が拡声器片手に声を張り上げ叫びまくる。

「さあさあスタジアムごと吹き飛ばそうとした皇帝竜に大ピンチのボクたち。そして1人立ち向かうコメットマンの奮闘に仲間たちが次々と集まってくるぅ！　もう少しだ。頑張れコメットマン。皇帝竜を倒し、ボクらを守るんだコメットマン！」

ノリノリだった。ユーマの台本通り部長は観戦席の生徒を誘導。味方につけてコメットマンの応援を続けている。

「さあ、みんなもボクと一緒に応援するんだ。頑張れ、コメットマーーーーン！！」

実況から司会進行のおねえさんへ見事な転身をとげる部長。観戦席では繰り返されるコメットマンへの応援でスタジアムが震える。

「馬鹿ですけど流石ですね」

一方でポピラは解説のお仕事終了で暇していた。

「《コメットマン・ファミリー》の発動条件は複雑ですけど、その中で一番難度が高いのは『コメットマンへの千人以上の声援が必要』、でしょうか？」

＋＋＋

「ふざけてる。そんなもの実戦的じゃない」
「いいんだよ。コメットマンは今日ここでしか使わないから」

幻創獣は《竜使い》のユウイにとって力そのもの。でもユーマにすれば幻創獣は戦う手段の１つにすぎない。

「皇帝竜を『この場』で倒すために創った幻創獣なんだ。もとから負けるつもりなんてない。……《竜使い》、ユウイ・グナント。お前らの竜は今日すべて潰す。暴力にしか使えない間違った幻創獣の可能性を正すために」

必殺技の発動時間が３０秒を切った。ユーマは勝負に出る。

「舐めるな！　皇帝竜の必殺ゲージは溜まった。……間違えるなよ。ボクの創る竜こそ幻創獣の究極だぁ！！」

ユウイの考えることはひとつ。あの銀色の雑魚どもをすべて消し去るただそれだけ。

「すべて消えろ！　カイゼル・ギガ・フレア！！」
「全員突撃！　いくぞ。ファイナルゥ、コメットマァァァァン！！」

切り裂かれた翼を広げ、最大級の火球を撃ち放つ皇帝竜。その必殺技に果敢に突撃していく沢山のコメットマン。

そして空から落ちてくる巨大な彗星。そのすべてがスタジアムの中心でぶつかる。

閃光。そして衝撃。

ティムスの施した防御結界と補強工事が済んでいなければスタジアムは崩壊していた。結界が最後の役目を果たしてパリン、と割れる音を上げて消える。

光と音が世界に戻る。観戦席にいた皆が中央のステージに注目した。

ボロボロの姿で立っているのは……黒い竜。

誰もが茫然とする中でユウイ・グナントが1人笑った。

「は、ははは。あはははは！　消えた。消えたぞ忌々しい雑魚が。見たか！　これが竜だ。これがボクの力。ボクの、勝ち……」

ドシーン！　という衝撃と地響きは会場を揺らした。

彼の登場を予感させる空からの落下。銀の彗星が落ちてきた。

「《帰ってきたコメットマン》」

ヒーロー見参。

ユーマは立ち上がり、隣にいるティムスは舌打ち。

「……計算違いだ。結界がぶっ壊れやがった」

「スタジアムもボロボロだね。建て直したら？　地下からロボットが飛び出すようなやつがいいな」

「なんだよ『ろぼっと』って」

「……何故だ。何故その雑魚は消えない？　カイゼルの最大必殺技を喰らったんだぞ。どうして！？」

驚愕の《竜使い》。そんな彼に対してユーマは簡単に答える。

「ヒーローだから。ヒーローって無敵なんだ」

「ふざけるな！　そんなはずはない。最強は竜だ。そんな雑魚チビに負けるはずがない！」

「負けるさ。お前は間違ったんだから」

ユーマは喚くユウイをまっすぐに見返した。

「竜はお前の力なんかじゃない。皇帝竜は一体誰が創った？　お前は与えられたおもちゃを振りまわしていただけじゃないか。創り手の想いを無視したお前は間違っているんだ」

お互いのＨＰゲージはギリギリ。あと一撃で勝負が決まる。

「コメットマンは人の願いを叶えるために現れたヒーロー。こいつ

だってそうさ。この幻創獣の最終調整、誰がしたと思う？　ティムスじゃない。ルックスだ」
「ルックス……？」
「あいつは俺に頼んだんだ。自分のせいで兄さんは間違った。だから止めてくれって」
弟の名を聞いたユウイ。彼の目に動揺が映る。
「コメットマンはルックスの願いを聞いた。だから負けない。強いからじゃない。誰かの願いの為に立ち上がれるからこいつはヒーローなんだ。ルックスが創った皇帝竜はあいつの願いを聞いたか？　お前は、お前の願いに応えたルックスの想いに応えることができたのか？　答えろよ、《竜使い》！！」
ユウイは答えない。ガタガタと何かに脅え、震えている。
「違う。あいつは関係ない。これはボクのだ。ボクの竜。だからボクは……」
「もういい。決着をつけるぞ。コメットマン、レベル1必殺、変身！」
コメットマンが巨大化して本来の姿を取り戻す。
銀色に輝く8頭身のヒーロー。どんなに傷ついてもその輝きは消えることはない。
「カ、カイゼル・バースト」
「遅い。コメット、パーンチ！」
皇帝竜の熱線を身体を沈みこませるように前へ踏み込んで躱す。

そして、必殺のカウンターが炸裂した。コメットマンに殴り飛ばされながら皇帝竜は消失。

「あ、ああ。ボクの、皇帝竜が……あ」

ユウイの目の前には銀の巨人が立っていた。それだけで恐ろしかった。

「コメットマン……ふめ」

「あっ、ああ、あああああ」

ドシン。

「……やったのか？」

「まさか。直前で砂更の力で埋めた。その上に足をのせただけだよ。ブソウさんには殴って埋めるって宣言しちゃったしね」

「……」

左腕の《白砂の腕輪》をみせてユーマはティムスに笑う。

あれはトラウマものだな、とティムスは《竜使い》に初めて同情した。

「部長さーん。あれはまだ生きてるから。とりあえず試合を締めてー」

「……き、決まったぁ！　最後は巨大化したコメットマンの《コメットパンチ》。まさに怪獣退治はヒーローのお仕事！　勝者はコメットマン、《精霊使い》のユーマ・ミツルギだぁぁぁぁぁぁ」

実況がユーマの勝利宣言を伝えることで試合終了。再びコメットマンコールでスタジアムは沸き上がる。

ステージの中心でユーマは、縮んだコメットマンと一緒に手を振り歓声に応えた。

＋＋＋

「これで《竜使い》とは決着がついた、て事になるかな？」

「一応な。あとはその幻創獣のデータを元にして……」

「カイゼル・バースト」

「「――！？」」

不意打ち。上空から放たれた熱線でコメットマンが消失した。

「……予想よりちょっと早かったな。ティムス、《竜殺し》すぐ使える？」

「……この状況を乗り切って３０分あればな」

空から降り立つのは４体の《皇帝竜》。そしてユーマとティムスを囲む幻創獣の竜たち。

「次は俺達と相手してもらおうか。あたらしいエースさんよ？」

《竜使い》が倒れたと同時に《グナント竜騎士団》のクーデターがはじまった。

＋＋＋

2－16　銀の彗星（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

《幻創獣》を巡る戦いはまだ終わらない。コメットマンを失ったユーマに襲いかかる《グナント竜騎士団》。

量産された皇帝竜と強化された竜に囲まれたユーマ。彼の為に仲間たちが集い、最後の戦いがはじまる。

次回「竜騎士団と仲間たち」

「ユーマ、そろそろアタシたちを混ぜなさい」

２－１７　竜騎士団と仲間たち（前書き）

ユーマＶＳ《グナント竜騎士団》。第３ラウンド

2－17　竜騎士団と仲間たち

＋＋＋

「竜騎士団か？　まずい。いくぞ、ブソウ」

公式戦だからと戦いを静観していた《烈火烈風》の騎士。

囲まれたユーマをみたリアトリスはブソウと共に加勢にいこうとしたが、そこに邪魔が入る。

「彼らへの介入はやめてください」

「生徒会長」

「《獣姫》、それに《青騎士》か」

現れた生徒会長の傍には2人のエースがいた。《会長派》だ。

「報道部の彼女といい先輩たちは《精霊使い》に肩を持ち過ぎです。この件は新エースとなった彼の試練として《Ａナンバー》の介入を禁じます。学園長には了承してもらいました。先生方も動きません」

「学園長が？」

驚くリアトリスに頷く生徒会長。

「だからじっとしてくれませんか？　そうしなければ」

《獣姫》は鉄爪、《青騎士》は槍を構える。エース同士の衝突はさすがにまずい。

「わかった。だが自警部は動かすぞ。生徒の避難と防衛は俺の仕事だ」

「ブソウ！？」

「許可します。ただし指揮は副部長が。先輩方はここにいる。よろしいですか？」

生徒会長にブソウは頷いた。リアトリスはそんなブソウにくってかかる。

「いいのか、それで」

「俺はあいつらを助けん」

「ブソウ！！」

「落ち着け。俺達が無理だというだけだ。でも俺達エースでない奴らは助けにいくことを禁じていない」

「それは」

ブソウの言いたいことにリアトリスは気付く。

「ミツルギとその仲間を信じろ。リア、それはお前が俺に言ったことだ。……俺はもう知らんぞ」

「……」

――あいつらは絶対なんかやるぞ。もうこれ以上は関わらん

ブソウはいつものように眉間に皺をよせ、絶対俺達の方が事件は

まるく収まるのに、とぶつぶつ愚痴をこぼした。

＋＋＋

一方、実況席。

「報道部は『中立』だから表だって参戦することが駄目なんだよね。さて、どうなるかな？」

もう自分に出番はないと静観することにした報道部部長。

「ポピちゃん？」

そしてポピラがいなくなったことに彼女は気付くのが遅れた。

＋＋＋

竜騎士団と仲間たち

＋＋＋

スタジアム、中央ステージ。

「ティムスは戦えるんだっけ？」

「俺は技術士だ。非戦闘系なんだよ。お前の方は？」

「コメットマンはＨＰゲージのリロード中。砂更は限界。風葉は……」

「まだだめですー」
「だってさ」
「……」

未だ半透明の風の精霊は戦えませんー、と自己主張。

「アギの時に消耗しすぎたよ。あとは俺とガンプレートだけなんだけど……」
「おい」
「ごめん。エイリークとアイリさんのせいでボロボロ。戦闘は無理」
「なんでお前の仲間のせいでピンチになってんだよ」

《竜使い》、ユウイ・グナントと皇帝竜を撃破した直後、スタジアムの中央ステージで《グナント竜騎士団》の幻創獣に囲まれたユーマとティムス。

2人は戦闘力の殆どを失い、逃げ場がないという状態だった。

「ウザイ団長を倒してくれたことには礼を言う。ただし騎士団を解散されるのは困るんだ」

幹部Aが話しかけてきた。

「グナントというエースがいなければ竜騎士団は存続する理由も維持する力もなくなる。あいつを倒す分はいいけど《Aナンバー》からは外してもらいたくなかったんだ。やりすぎたよ、君たちは」
「あの馬鹿野郎を見る限り予想はしてたんだけどな」

要するに《竜使い》は幹部達に担がれて利用されていたところがあったということだ。

ティムスは舌打ち。４体の皇帝竜を見る。

「それで皇帝竜の解析と《複製》ができたから利用する価値がなくなったと」

「そういうことだ」

「皇帝竜は４体か。他はどうした？　ざっと数えて幻創獣は４０体くらいしかいないが」

幹部Ａの顔を顰める。

「知らないとは言わせない。自警部に仲間の多くが捕まってしまってね、腕輪を回収されてしまったんだよ。《精霊使い》の腕輪もその１つなんだろ？」

「？」

おかしい。ブソウの話と食い違いがある。しかし確認をとる時間がユーマにはなかった。

「そろそろ本題に入っていいかな？　《精霊使い》」

「私達は新生竜騎士団を維持するため、新エースとなった君に挑戦しようと思う」

これは幹部Ｂ。

「お前を倒せば俺様達がエース、《竜使い》だ。エースになれば騎士団を持つ真っ当な理由になるだろ？」

幹部Ｃ。

「勝負は団体戦。ワタクシたち新生竜騎士団とあなたの騎士団との勝負でどうです？　受けてくれますよね？　そうでなければ」

最後は幹部Ｄ。

幹部達は４体の皇帝竜を前に出してユーマ達にプレッシャーをかける。

「……なんか先生達とか誰も止めにきてくれる感じがしないんだけど？」

「喧嘩は生徒同士で解決しろってか？　騎士団と言っても俺を数に入れても２人だぞ」

とにかくガンプレートを抜くユーマ。隙をついて脱出することで頭がいっぱいになる。

「よろしいですね？　では消えなさい。カイゼル・バースト」

「やばっ」

「ユーマ！」

皇帝竜Ｄが速攻で放つ熱線。そこに割り込む４つの影。

「間に合えぇぇ！」

ユーマ達の前に立ち塞がり、盾となったのは４体の幻創獣。

「イース！？」

「畜生。やっぱり竜人兵程度じゃ盾にもならない」

元竜騎士団の４人だ。でも皇帝竜相手に一般兵扱いの竜ではその場しのぎにしかならなかった。

「裏切り者たちか。今からでもこっちに来るかい？」

「……お断りだ。お前たちでも前の団長でも騎士団は変らない。だったら俺達は負けてもユーマにつく」

「イース、アルス、兄弟も」

ユーマを守るように前に出る４人組。

「悪い。助けに来たけど役に立てなかった。でも最後まで付き合うぜ」

「みんな」

「友情ごっこはもういいか？　今度こそ終わりにする。やれ、カイゼル」

「「「カイゼル・バースト」」」

ＡＢＣ、３体の皇帝竜の同時攻撃。

「……風葉、悪いけど《本気》、いくよ……」

守らなきゃ。その衝動に駆られてユーマはガンプレートを皇帝竜に向けて……

――させねぇよ

「――!?」

その時、ユーマ達の傍に飛び降りたのは青バンダナの少年。

アギは駆けだしながら右手を突き出す。

「う、おおおおお……らあぁっ!!!」

彼は《盾》。守るモノ。

アギの《盾》は《カイゼル・バースト》の集中砲火に耐え、熱線を弾いてユーマ達を守りぬく。

「アギ?」

「間に合ったな。……ったく様子がおかしいと思えばボロボロじゃねぇかお前」

アギの登場になによりも驚いたのは竜騎士団。

「嘘だろ!?　3体分の《カイゼル・バースト》が……竜騎士団、数で一気に叩くぞ。突撃用意!　……なんだ?」

包囲網を狭め、突撃を仕掛けようとする一般兵の竜。その前にス

タジアムのフィールドに変化が起きた。

「……《銀の舞台》、展開。いきます。氷晶壁！！」

スタジアムのステージとフィールドすべてが《氷輝陣》に覆われ、そこから《氷晶壁》が連続で出現。竜騎士団の隊列を崩す。

舞台を支配した彼女の二つ名は《銀の氷姫》。

「アイリさん！」

「周囲の幻創獣に対して障害物を展開しました。しばらく時間稼ぎできるはずです」

白金の髪を靡かせてアイリーンはユーマに微笑む。

「でもアギもアイリさんもあの包囲網をどうやって抜けてきたの？」

「リュガだよ。あいつに大剣使って俺達を撃ちあげてもらったんだよ。見ろ」

アギが指差した観戦席。そこで赤バンダナの少年が大剣に人を乗せ力任せに振り上げたのが見える。

そして宙を飛ぶのは《旋風の剣士》。

「人間カタパルトかよ」

呆れるユーマには気付いていないエイリーク。飛ばされた勢いにのって、近くにいた飛竜へ向かい突撃。

「はあっ！」

剣に風が集まる。

纏う風は渦を巻いて吹き荒れる。

《旋風剣・疾風突き》

飛竜を衝撃波で突き落として彼女は自由落下。その落下地点に幻創獣が集まってくる。

「きなさい。みんなまとめて……吹き飛ばす！！」

《爆風波》

近づく竜牙兵をまとめてぶっ飛ばし、着地に成功するエイリーク。

敵前衛に穴を空けてからユーマと合流。

「ユーマ、そろそろアタシ達を混ぜなさい。いいわね」

ユーマの前に仲間たちが集う。ユーマを守るため、ユーマと共に戦う為に。

「……エイリーク、声擦れてない？」

「うっ。うるさいわよ」

実は《竜使い》戦のときのコメットマンコールで一番声を張り上げていたのがエイリークだったりする。

「そんなことは気にしないで。……とりあえず集まりましたけど勝算、ありますか？」

「ここまで来て逃げるなんてなしよ」

アイリーンの質問に答えたのはティムス。

「お前たちで時間を稼いでもらえば俺とユーマで《竜殺し》を使うことができる。３人で３０分だ」

「厳しいかな……ん？」

「ユーマさーん」

突然空から飛んできてユーマを呼んだのは癖のある金髪のかわいらしい少年。

なぜか巨大なニンジンに掴まりながら、ユーマのもとへ降りてきた。

「なにその大きな野菜？」

「《キャロケット》だよ。野菜嫌いな子どもに人参を食わせるために畑から旅立ち、偏食家と戦うカロチン豊富なベジタリアンだ」
「わけがわかんねぇよ」
「ん？　そうかな」

ユーマ作の幻創獣だった。ロケットのように空を飛ぶことができる手足の生えたニンジンだ。

「それよりルックス、どうしてここに？」
「報道部の部長さんが連絡してくれました。これを使ってください」
「これは……腕輪か」

ルックス自身は戦えないが、彼は代わりになる戦力を用意してくれた。

「イースさん達に幻創獣の腕輪を持ってきました。ユーマさんの創った幻創獣です」
「よくやったルックス！　ユーマ、これなら俺達も戦えるぞ」
「またふざけたやつか？」
「それも野菜とかだったりするのですか？」

腕輪を交換して喜ぶイース。幻創獣の力をいまいち信用できないエイリーク達。

「アンタ達、使えるの？」
「任せてくれ。俺達はユーマの訓練につきあったおかげでこの幻創獣も使いこなせる。足手まといにはならない」

イースの言葉に頷く元竜騎士団の3人。見た目はともかくユーマの試作幻創獣は独特の強さがある。

「これで7人だな。あとはリュガが応援団連れてくれば戦力は整うぞユーマ」
「ティムス？」
「ルックスに手伝わせて１５分で《竜殺し》を使えるようにしてやる」

アギとティムスの話を聞いてユーマは作戦を考える。

「よし。前衛はアギとエイリーク。特にアギは皇帝竜の攻撃を防ぐのに専念して。アイリさんは後方で牽制と対空砲火。イース達は近づいてくる竜を片っ端から叩いていく。作戦はこれでいくよ」
「任せろ」
「特にエイリークは突撃禁止。乱戦になるから皆のフォロー期待しないでよ」
「……わかったわよ」

ユーマに力がみなぎる。みんなが来てくれた。だから負けたくない。

「みんな……今日までいろいろとごめん。でも今は力を貸してくれ。あいつらまとめてぶっ飛ばす」

「いくわよっ！！」

エイリークの突撃と同時に仲間たちは散開。竜騎士団の幻創獣とそれぞれ激突した。

＋＋＋

《旋風剣・疾風突き》

先陣を切るエイリークはリザードマンの部隊と衝突。陣形を崩すと同時に3体を相手に切り結ぶ。

「そんな素人の剣で」

幻創獣は思考操作。術者に剣の心得がなければ剣士である彼女の相手にならない。《旋風剣》を使うまでもなく剣技のみで圧倒する。

《双月》で襲い来る剣を打ち払い、《水月》で牽制。間合いに踏み込ませない。

「遅い！！」

素早く飛び込み《閃月》の高速斬撃で竜人兵を切り裂き、円を描くように繰り出す連続突き、《雨月》でもう1体を倒す。

「セイッ！」

《断月》

《弧月》の派生形である剛剣。最後の1体は兜ごと砕いてみせた。

「次は」

突進してくるロックリザード。エイリークが苦手とする重装甲タイプだ。

「さがれ、姫さん」

叫び声に反応してバックステップ。そこにアギが割り込む。

「うおっ……おらっ！！」

アギは岩蜥蜴の突進を《盾》でブロック。体格差をものともせず逆に跳ね返す。

「どきなさい、アギ！」

岩蜥蜴が怯んだところにエイリークがさらに飛び込んで《爆風波》を竜の頭に叩きつける。

「その術式便利じゃねぇか」

「ええ。それよりアンタ、皇帝竜は？」

「デカブツは後方で高見の見物だ。熱線だけなら射線上にいれば《盾》で防げる。それより上がりすぎだぜ。氷の姫さんに防衛と飛竜の相手を任せきりにしたら負担がでかい」

「……わかったわよ。戻るわ」

＋＋＋

一方、アイリーンは1人飛竜相手に《氷弾》の弾幕を張り続けていた。

「《銀の舞台》では空の敵を《感知》できませんね。以前の《氷輝陣》では展開範囲が狭いですし」

飛び交う数体の飛竜は弾幕で近づくことができないでいるが、飛竜を捕捉できず致命的なダメージを与えることができないでいる。
《氷弾の雨》を使う傍らでひたすら考える。

「……氷晶球、展開」

アイリーンは氷の球体を上空にばら撒いた。

展開数は２０。特訓の成果で最大展開数が増加している。

ただ空を浮遊し続ける《氷晶球》。《氷弾》を回避しながら飛行する飛竜の一体が不意に氷の球体へと近づき、アイリーンがそれを《感知》する。

「破っ！！」

《氷晶球》が爆発。飛散した氷の破片が飛竜に突き刺さる。

「……なるほど。これがユーマさんが言っていた『浮遊機雷』ですか。罠を張るというのも面白いですね」

追撃の《氷弾》で飛竜を撃ち落とすアイリーン。元々彼女は防衛戦が得意なので飛竜を相手にするだけなら余裕だった。

「楽しそうじゃねぇか。ならオレ様とも遊ぼうぜ、氷姫さんよぉ」
「――！？　氷晶壁」

上空から放たれる《カイゼル・バースト》。アイリーンは咄嗟に

防御したが熱攻撃は相性が悪い。

氷の防壁は蒸発。

「アイリさん！」

「大丈夫です。……そうでしたね。皇帝竜も空を飛べたのでした」

後方にいた皇帝竜の1体がアイリーンやユーマの近くまで飛んできたのだ。

「折角手に入れた皇帝竜なんだ。相手してくれよ、なあ！」

好戦的な幹部Cが皇帝竜でアイリーンを狙う。

「氷晶壁！　ぐうっ」

「そんな氷でカイゼルを止められるか」

巨大な《氷晶壁》は皇帝竜の爪を何度か防ぐが、徐々に亀裂が入り叩きつけられた尻尾で完全に砕かれる。

「アイリさん、退いて」

「退けません！　まだ時間が必要なのでしょう？　だったら私が」

アイリーンは皇帝竜Cの周囲を《氷晶壁》で囲んだ。砕かれたところから氷の壁を《銀の舞台》の効果で瞬時に再展開して皇帝竜の動きを封じる。

「いくらでも時間を稼いでみせます」

「だったらワタクシの相手もして貰いましょうか」

皇帝竜を連れた幹部Dだ。

「カイゼル・バースト」

「やらせねぇ！」

アイリーンの前にアギが駆けつけ《盾》を展開。熱線から彼女を守る。

「わりぃ。遅くなった」

「いえ、こちらこそ助かります」

「俺様を忘れてるぜぇぇぇぇ」

《氷晶壁》の包囲を破って皇帝竜Cの爪が2人を襲う。

「舐めんなぁ！」

ガキィッ！！

「チィッ、何だよてめぇ。片手でなんでカイゼルの攻撃止めれんだよぉ、ええ青バンダナ！！」

アギは皇帝竜の攻撃に耐える。

叩きつけるような爪の連撃にも《盾》は砕けない。

彼の背にはアイリーンが、それにユーマが、彼の守るべき仲間がいる。

「やらせねぇ、って言ってるだろが」

アギはただ《盾》を使い皇帝竜から仲間を守り続ける。

「守るだけかよ、バンダナぁ！」

「……言われたい放題じゃねぇか。早く来いよ、……リュガ！」

「うるせーよ、アギ」

灼熱の剛剣が一閃。大剣が皇帝竜の爪を焼き切る。

《熔斬剣》。リュガの得意とする《高熱化》を使った魔法剣だ。

「てめぇ、遅いんだよ」

「文句があるのはこっちだ。俺1人取り残されたんだぞ。お前以外にもアイリーンさん達も飛ばしたし、応援団の招集もかけなきゃいけねぇし。散々こき使いやがって……」

「リュガさん」

ぼやいてたリュガだがアイリーンの前では態度を改める。

「《アイリーン公式応援団》は全員集合した。アイリーンさんはあいつ等を支援してまわりの雑魚を頼む。こいつらは俺とアギで」

「でも2人だけじゃ」

「いいんだよ。《竜殺し（ドラグンバスター）》は大剣士の目標の1つだもんなぁ、リュガ」

「まあな。というよりも俺に出番をよこせ。活躍させろ」

「赤バンダナ！　俺様のカイゼルに傷をつけやがったな。お前は俺が殺す！」

「《バンダナ兄弟》ですか。小物だと聞いてましたけど……」

皇帝竜2体を相手にするアギとリュガ。

「おい、作戦は？」
「いつも通り。俺が守ってお前が攻める」
「そして勝つのは俺達か。まったく……いつも通りだな」

＋＋＋

「アギ、リュガ。みんな……」
「集中しろ。お前が《幻創》できないと完成しないんだよ」

ユーマはティムスとルックスと共に《竜殺し》の術式完成を急ぐ。

「ティムスさん！　皇帝竜です」
「ちっ。3体目かよ」

3体目の皇帝竜がユーマめがけてまっすぐ飛んでくる。

「俺が行く」
「イース！」
「任せろ」

イースは走り1人皇帝竜を迎えうつ。

相手は幹部B。顔見知りだった。

「《精霊使い》が何かしているようだが？」

「おい待て。無視するなよジュオ」
「……イース。裏切り者が何の用だ？」
「《竜使い》の裏切り者ならお前たちもだろ？　お前の相手は俺がする。こいよ！」
「……やれ、カイゼル」
イースへ襲いかかる皇帝竜Ｂ。
「頼むぜ。こい！」
対するイースの幻創獣は《じぇんとる・ビーン》。
黒竜対ソラマメの戦いがはじまった。
＋＋＋

２－１７　竜騎士団と仲間たち（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

ＶＳ竜騎士団。最終決着

次回「発動、竜殺し」

「エイリークさん、私を信じてくれますか？」

「……この剣こそ《竜殺し》」

２－１８ａ　発動、竜殺し　前（前書き）

エイリーク、アギ、リュガ、イースＶＳ皇帝竜。第４ラウンドは駆け足でお送りします。

2－18ａ　発動、竜殺し　前

＋＋＋

アギとリュガ、それにイースがそれぞれ皇帝竜に挑んでいた時、竜騎士団の副団長を務めていた幹部Ａに立ち向かう１人の少女がいた。

「意外だな。１人でここまで来るなんて」

少女の名はポピラ・エルド。

「見つけました。あなたですよね？　私と兄を襲った《竜使い》は」

「その通りだ。証拠を見せようか？」

幹部Ａは包帯を巻いた腕をポピラに見せる。

「君の兄にやられた傷だ」

「……」

「俺に何の用だ？　どうやら彼は無事だったようだが。まさか仕返しにでも来たのか？」

「その通りです」

幹部Ａの顔つきが変わった。みつあみの少女は相変わらず淡々としている。

「私も兄同様、借りを返したいだけです」

「面白い冗談だな。でも君は役不足だ。お前達が相手をしろ」
「「はっ」」

幹部Ａの取り巻きたちが動いた。彼らの幻創獣、サラマンダーが火炎弾を吐き出す。

「馬鹿にしすぎです。バブル・ショット」

ポピラは手にしたブースター使い、大きな水の泡を前方に散布して火炎弾を相殺。

「何？」
「ストーム・ブラスト」

防御されたことに驚く取り巻きたち。その隙にポピラは『カートリッジ』を換装して《旋風砲》の術式で火蜥蜴の１体を吹き飛ばす。

「そのブースターはまさか《精霊使い》の！？　……近接戦に持ちこめ！」

ポピラに飛びかかる火蜥蜴。彼女は避けようともせず竜を引き寄せて……

「爆風破」

左手を振るい、火蜥蜴をもう１体吹き飛ばした。

「馬鹿ですね」
「……」

幹部Ａは何も答えない。

「グルァアア！！」

「えっ」

《爆風波》の発動直後。砂埃を吹き払って皇帝竜が爪を振るう。

狙ったかのような不意打ちにポピラは動けない。

「仕留めたと思ったが……上手くいかないな」

切り裂かれる直前。竜巻を纏う細剣がポピラの前に割り込み、皇帝竜の爪撃を弾く。

《旋風剣・疾風突き》

「……エイリークさん？」

「アンタね、人に馬鹿馬鹿言うくせにアンタが一番馬鹿してるじゃないの！」

間一髪のところで皇帝竜に突撃したエイリーク。

アギと一緒に後方へ戻ろうとした彼女だが、急に自分の《直感》に従って逆走してきたのだ。

「《旋風の剣士》」

「親玉が不意打ちなんて……やってくれるじゃない」

ポピラに庇い剣を構えるエイリーク。

「それ、アンタ使えるの？」
「……ミツルギさんの次くらいには」
ポピラが手にしているブースターはユーマが壊したガンプレートを修理したもの、《レプリカ２》だ。
左腕には腕輪型に改修した《洗脳くん４号》もある。
「それならアタシを援護して。こいつの相手をするわよ」
「わかりました。バレット・ボム」
ポピラが爆発する魔法弾を連射する間にエイリークは皇帝竜へと果敢に突撃していく。
＋＋＋
発動、竜殺し
＋＋＋
エイリーク達の後方、ユーマのいる場所は混戦状態が続いていた。
《竜殺し》の準備をするユーマ達３人をアイリーンと彼女の応援団達が囲んで防御陣を構築。２０体以上の竜の攻撃に耐える。
「Ａ班は１回下がってＣ班と交代。Ｂ班は９時方向のカバー。アイリーンさん、援護を」
「ええ。氷散弾」
アイリーンの援護と副団長の指揮の下で奮闘する《アイリーン公

式応援団》。

「副団長さん！」
「なんでしょう？　通りすがりの正義の味方でうちの名誉部員さん」
「……人違いですよ」

あのときは覆面してたけど正体はバレている。

「みんなを1度下げて固まってください。アイリさんは《氷晶壁》でみんなを囲って」
「どうしたのですか？」
「そろそろあいつ等の必殺ゲージが溜まる。来るよ！」

ユーマの叫びと同時にリザードマンの斬撃が、サラマンダーの火炎が一斉に襲いかかる。

「「「竜波斬」」」
「「「火炎弾」」」

「っ、氷晶壁！」

アイリーンの防御が間に合った。しかし必殺技の波状攻撃で身動きは取れなくなってしまう。

「はぁ、はぁ。このまま接近を許してしまうと流石に」
「だったら俺達に」
「「任せてもらう」」

敵側の幻創獣の必殺ゲージが溜まったということは、ユーマ側の幻創獣もまた必殺技が使える状態になったということだ。

「走れ、猫騎士！」

アルスの幻創獣、長靴を履いた2足歩行の黒猫が剣を投げ捨て火炎弾の中を4脚で走り抜ける。

「分身・猫騙し」

黒猫は敵幻創獣の目の前で残像を残す高速移動し敵陣を撹乱。

速さに優れる竜牙兵を翻弄し、伸ばした爪といつの間にか口にくわえた剣で火蜥蜴を1度に3体も切り伏せる。

「ブロックマン」

「合体！」

一方、サンスー兄弟は赤、青、黄色で配色されたカラフルな2体のゴーレムを分解、再構築して1体の巨大なゴーレムを作り出した。

「見ろ！」

「これが！」

「「兄弟パワー！！」」

合体ゴーレムのパワーは2体分以上の力を発揮することができる。

竜人兵の剣にビクともせず、逆に岩蜥蜴を掴み投げつけて反撃。

「なんだよこいつら？」

「俺達の竜は強化されてＩＭＰ1万以上あるんだぞ」

「そんなふざけた幻創獣がどうして！？」

「お前らは竜の姿と人型の動作にこだわりすぎたんだよ」
「幻創獣を創る自由度の高さに思考操作の柔軟さを活かせばこんなこともできる」
「あとは訓練時間の差だな。俺達は2週間以上みっちり操作特訓したんだ。癖はあるけど使いこなせれば基本能力以上に強いぜ」

ティムスの指導のもと、ユーマの訓練に付き合い続けた彼らは《幻獣使い》として頭一つ抜き出る実力を手に入れたのだ。

「敵の陣形か崩れました。今です」
「……いきます！　降れよ、氷弾」

《氷弾の雨》が竜を襲い、アイリーンと応援団が反撃に転じる。
《竜殺し》発動まであと5分。

＋＋＋

「カイゼル・バースト」
「――ぐうっ、効かねぇ！」

一方、皇帝竜2体を相手にしていたアギとリュガ。

「そこもらうぜ」

アギが攻撃を《盾》で防いだ隙にリュガが《熔斬剣》で皇帝竜の脚を切りつけ、背後に回る。

「くそっ、また俺のカイゼルに傷をつけたな、赤バンダナぁ！」

幹部Cはリュガに向けて尻尾を振るったが、それをアギが回り込み《盾》でブロック。

「なんだよ、邪魔するなよこの青バンダナがぁ！！」

「邪魔よクフト。カイゼル・バースト」

空を飛んだ皇帝竜Dが味方諸共熱線で焼き払う。

「ぐおっ、リュガ！？」

「大丈夫だ。当たってねぇ」

「おい！　どういうつもりだベスカ」

「隙をついたと思ったんですけどね」

「てめぇ！」

どうやら幹部同士は仲が良くないらしい。

「まずいな。空飛ばれると攻撃手段がねぇ。どうする？　うおっ！」

「そろそろですね。飛竜隊、対地攻撃開始」

幹部Dがここぞと温存していた飛竜隊を動かして空襲を仕掛ける。

空からの火球の爆撃に皆が見動きを取れなくなる。

「狙うのは《精霊使い》です。飛竜隊、突撃！」

アギ達を無視してスタジアムの上空を旋回する飛竜。

「畜生。空への攻撃手段が氷の姫さんとユーマしかいねぇ。やばいぞ」
「今はアイリーンさんだけだ。くそっ、たとえアギなんか撃ち上げても役に立たねぇ」
「悪かったよ！」

アイリーンは地上戦の援護で手一杯。誰も飛竜の攻撃を阻止できない。

「《精霊使い》、これでチェックですよ」
「弾幕が間に合いません。ユーマさん！」
「もう少しなんだ。みんな伏せて！」

飛竜の攻撃に再び晒されそうになったその時――

――墜ちろ！

観戦席の最上段で黒髪の少年が《幻想の弓》を引いた。

彼の視線の先には『射抜かれて』墜ちていく飛竜が。

「リン先輩」
「任せてよジン」

彼の隣にいたフェアリー族の少女が《妖精の羽》を少年に与え、両手に銀色の金属板を手にした少年は観戦席から飛竜に向かって空を飛ぶ。

「ジン！」
「加勢します。飛竜は僕が」
一定時間飛行能力を与えられたジンは飛竜の集団に飛び込んでガンプレートを振るう。
「……すべての敵を――」
ジンは見る。飛竜の翼を、口を、そして目を。
「射抜け！！」
そして狙ったものすべてに対して『引金を引いた』。
飛び交う飛竜の隙間を掻い潜って2丁拳銃スタイルで無属性の魔法弾を乱射するジン。専用のガンプレートが持つ連射性能を手にした《射抜く視線》は飛竜の弱点を射抜き、すべて撃ち墜とす。
「ジン・オーバ！　あなたまでも……カイゼル！！」
奥の手の飛竜隊を潰された幹部D。皇帝竜をジンにけしかける。
「《アローモード》」
狙われたジンは慌てず対になっているガンプレートを接続して左手に持ち、『矢をつがえ』、『弦を引く』。
ジンは鋭くした黒の瞳で『射抜くもの』を見る。それは襲い来る皇帝竜ではなく幹部Dの、彼女が身に付けた幻創獣の腕輪を、

見る。

「カイゼル・バースト！」
「――っ！！」

皇帝竜Ｄは熱線を放つ前に突然消失。ジンの《幻想の矢》が幹部Ｄの腕ごと腕輪を射抜くほうが一瞬早かった。

「あああああっ！　痛い、ワタクシの、カイゼルが！！」
「ベスカ！　てめぇ」

「ジンはやらせない」
「当たって！」

《妖精の羽》の効力を失ったジンに皇帝竜Ｃが爪を振るったが、そこにダークエルフの少女が力任せの双剣でジンを庇い、さらに白い修道服型の戦闘衣を纏う少女が《光の矢》を放ちジンの着地を援護する。

「ユン！　セリカさんも」
「ジン様、大丈夫ですか？」
「うわっ」
「こらっセリカ、ジンにくっつくな！　ああっ、リンもいつの間に！」
「へへっ。私は先輩だもんねー」
「あー！！」

ジンにくっつく少女２人に叫ぶユンカ。

「あいつのまわりの女の子……増えてるな」
「あの金髪の美少女は新入生の中でも噂のセリカ・フォンデュじゃないか。……畜生、ジンの奴に助けてもらっても嬉しくねー」

《射抜く視線》の少年を慕う少女が増えていることに呆れるアギと羨ましいのか悔しいのか唸るリュガ。

「みんなお願いだから離れて！　……先輩、僕らも手伝います」
「……ああ。だったらもう1体の方、いやユーマの方を頼む。氷の姫さんがそろそろマズイはずだ」

＋＋＋

「はあっ、……くっ。氷晶壁、氷晶球、はぁっ！」

竜の進撃を氷の壁で妨害し、氷塊で殴りつける。頭痛の酷くなる頭を押さえながらもアイリーンはなおも魔術を使う。

ユーマ防衛の核は間違いなく彼女だった。《銀の舞台》を展開した状態で入り乱れる敵味方を《感知》し、攻守両面に渡って的確な援護を続けるアイリーン。味方に高レベルの魔術師がいない為にペース配分を無視して魔術を多様するしかなかった彼女の限界が近い。

「アイリさん」
「もう少し、……もう少しなら」

「見てられないわね。どきなさい！　氷姫！！」
「あっ」

《銀の舞台》に冷気が駆け抜けた。《旋風壁》がアイリーンたちを囲み、一時的にも竜を押し返す。

「凍れ！　砕けろ！！　そして消し飛びなさい！！！」

《凍破》。《氷砕の魔術師》、自称《凍姫》の得意とする術式が竜を砕き、風で吹き払う。

「ディジーさん？　どうして」

「遅いですよ。名誉部員その２」

「？」

副団長の言葉が理解できなかったアイリーン。

「貴女達が駆け付けるのが早過ぎるのよ。それに勘違いしないで！私は協力するだけ。応援団なんて入らないわよ！！」

「協力？　助けてくれるのですか」

「うっ」

言葉に詰まるディジー。

「お願いします。……もう少しなんです。もう少ししたらユーマさんが……」

「ああーもうっ、なんで倒れそうになるまで魔術使ってるのよ！いいわよ。助けるわよ！！　黙って私の活躍を見てなさい！！」

「……はい。お願い……」

そしてアイリーンは副団長に支えられて目を閉じた。

「……気絶しても氷の壁は展開したままか。まったく大したものね。

……さあ、トカゲ達！　今度は私が相手をするわよ。氷河期まで送り飛ばしてあげる！！」

ディジーは消失しかかった《銀の舞台》の氷霧を利用して幻創獣の足元を凍りつかせると《凍破》を放つ。

そこに応援団とアルス達の幻創獣が竜の軍団に最後の突撃を仕掛ける。

「猫騎士で後方の術者を直接狙う。兄弟はユーマを守る壁を作れ」
「任せろ。分解！」
「ブロックマン、城壁形態」

「応援団！　正念場です。アイリーンさんを守りなさい」
「「「はい！」」」

＋＋＋

「イース、そんなものか？」
「まだまだっ」

皇帝竜ＶＳソラマメ。一方的と思われる戦いだがイースの《じぇんとる・ビーン》は思いのほか善戦していた。

「ダイズガン」

ひたすら転がっていたソラマメは跳びはねて手足を伸ばすと、手にしたステッキから豆鉄砲を撃つ。

「ふざけてるな」
「そうかよ！」

撃ち出された豆粒の多くは黒い鱗に弾かれてしまい、まともなダメージを与えられない。

「ＨＰゲージを減らせない必殺技を繰り返して何になる？」
「ゲージが減っていないのはお互い様だ。豆粒１つに一撃も与えられない竜が何言ってる」
「……カイゼル・バースト」
「おおっ！」

ＨＰゲージだけみれば２人の戦いは互角。ソラマメはひたすら攻撃を回避し続けていた。

コメットマンの戦いを見ていたイースは皇帝竜の攻撃パターンをある程度理解している。ソラマメの非常識な運動能力と訓練の成果を持ってすれば攻撃を躱すことだけは難しくなかった。

ただ必殺技だろうが通常技だろうが一撃で終わってしまうことに間違いなかったが。

「惜しいな。その雑魚でそれだけ戦えるのだ。こちら側で竜を扱えば上位幹部にもなれただろうに」
「汚い仕事はもう沢山だ。竜の力なんてもういらない。俺はもう一度やり直すんだ！」
「……カイゼル」

皇帝竜が翼で風を起こしてイースとソラマメの動きを封じる。その隙にソラマメが捕まった。

「まだだ。《シルクハット・マジック》」

握りつぶされる直前、ソラマメは頭に被ったシルクハットの中に身体を引っ込めて皇帝竜の腕から脱出。

風で飛ばされたシルクハットから再び本体が飛び出した。

「ダイズガン」

「小賢しいぞ。イース！」

しぶとくしつこいソラマメとイースに激昂する幹部Ｂ。

「皇帝竜にお前は絶対に勝てない。なのにそんな豆で何故立ち向かう？」

「……」

「わからないのか？　幻創獣を独占し、皇帝竜の数が揃えば俺達は学園の誰にも負けない。これは生徒会とも《Ａナンバー》にも匹敵する力なんだぞ」

「そんなことはないさ。ジュオ、ベスカのやつ皇帝竜を消せれてるぜ」

「何だと！？」

見れば幹部Ｄが腕を抑えて喚いている。

「隙ありだ！」

「っ！　甘い」

幹部Ｂの腕輪を狙ったソラマメの一撃。だが彼がいつの間にか抜いた剣で容易く打ち払われる。

「さすが。俺と違って優等生だったもんな、お前」

イースは攻撃が失敗したにも関わらず笑った。

「何がおかしい」

「でも俺達は同類だった。皇帝竜の力に魅入られて自分の力を伸ばすことを諦めてしまった。……竜さえ手に入れれば強くなれる。そんな団長の妄想に囚われてしまってたんだよ」

「私は違う」

「違わない！　ジュオ、お前達はまだ」

「もういい！　カイゼル」

「ジュオ！」

イースの言葉は遮られた。皇帝竜が羽ばたく。

「どうせお前は時間稼ぎだろ？　《精霊使い》さえ抑えれば私達の勝ちだ」

「行かせない。お前は俺が止める！　……頼むぜ相棒。お前がユーマの言う『主人公』なら」

イースはソラマメの紳士を見る。

《じぇんとる・ビーン》。雲の上にある天の国から地上に落ちたソラマメ。

離ればなれになった家族や恋人と再び会えることを信じ、彼は天まで届く巨大な豆の木を登る果てのない帰郷の旅に出た。

旅の途中で豆の木の上にあるたくさんの国に立ち寄るソラマメ。
幾多の出会いと別れを繰り返し、時には天敵である空賊カラスの襲撃に1粒で立ち向かいもした。

手にした武器は地上の友、ダイズ男爵から贈られたステッキとシルクハットのみ。あと蝶ネクタイさえあれば彼は紳士として誰を相手にしても優雅に振る舞うことができたのだ。

ソラマメは礼儀と品格、そして優しさを持って同胞を助け、ひたすらに豆の木を登り続けた。

それは天を目指す一粒の紳士の物語。

「諦めずに天を目指し続けたお前の力をあいつに見せてやれ！　伸びろ、《豆の木》！！」

ぴょこ。

ソラマメの頭から『芽』が出た。

発芽した《じぇんとる・ビーン》は急成長して？　巨大な豆の木となる。

豆の木はそれからさらに成長。空を飛ぶ皇帝竜に向かって天まで届く勢いで伸びていく。

「必殺技か？　回避しろ……なんだと！？」

皇帝竜の全身はいつの間にか蔓や根が巻き付き、張り付いて身動きを封じられている。

「《ダイズガン》は拘束技だよ。あれだけ撃ちまくったんだ。鱗の隙間に食い込んだ豆も何発かあるだろうさ」

「イース！！」

「くらえ、ジュオ！！」

伸びる豆の木が直撃。しかしそれでも豆の木の成長は止まらず皇帝竜を取り込み、同化しながらひたすら伸びていく。

「なんだ、これは！？」

「これで相討ちだ。皇帝竜はこいつじゃ倒せない。でも動きを封じることくらいはできるんだよ」

豆の木を見上げ、イースは昔からの友人に手を差し出す。

「なあ、もういいだろ？　あの時お前が騎士団に誘ってくれたのは嬉しかった。……今度は俺の番だ。一緒にやりなおそう。《竜殺し》はもうすぐ発動する。《竜使い》の幻想は今日で終わりだ」

「イース……」

幹部Ｂ、ジュオは裏切られた友人に何も答えられなかった。

＋＋＋

「ポピラっ！」

「合わせます」

エイリークとポピラは同時に《爆風波》を発動。皇帝竜の爪撃を2人して何とか逸らす。

「こっちだぞ、黒竜！」

予備の武器である矛槍を振るい、皇帝竜を引きつけるのはブロト・ラグレス。

元《黒鎧の大剣士》、現《甲虫》の彼はミサとの約束を守りエイリークのもとへ駆け付け参戦。

「……くっ。アタシの剣は鱗に弾かれる。有効打にならない」

「私もです。はあ、はあ。……私ではミツルギさんのように大技は使えません」

「君たちは下がれ！　体力が持たないぞ」

「駄目よ！　アンタがポピラを連れて行って」

非戦闘系のポピラはもちろんだが、動き回って皇帝竜を牽制し続けているエイリークも消耗が激しい。

「何を言っている？」

「あいつはあれから1度も熱線を撃っていないのよ。必殺技だっけ？　《竜使い》が見せたあの特大の火球を撃たれたらいくらアギでも防ぐことができるかわからない」

エイリークは呼吸を整えて重く感じるようになった剣を構える。

確かに《黒鎧》を装備したブロトなら皇帝竜の攻撃に耐えられる。

しかし、

「撃たせたら駄目。空を飛ばれても駄目。アンタの鈍重な動きじゃ皇帝竜を止められないのよ！　ここはアタシがやる。……もう少し、アイツがどうにかするなら、もう少しくらいアタシの力で！」

「エイリークさん……」

ポピラはわかってしまった。エイリークは強がっている。そして悔しがっていることに《同調》の能力で気付いてしまった。

――いつだってアタシの剣は

エイリークの剣では皇帝竜にダメージを与えられない。ブロトの攻撃は少なからず効いているのにだ。

いくら試験では彼に勝ったとしても実戦では役に立たなかった。そして結局はユーマ頼りの戦いになってしまう。エイリークはその事実に打ちのめされないように自分のできることに専念し、気丈に振る舞っているだけだったのだ。

（あなたはずっと自分の無力に耐えていた。でもエイリークさん、あなたは決して弱くありません。たとえ敵わなくてもあなたの剣はただまっすぐに、折れまいと戦い続けているのだから……）

「勝ちたいですか？」

「えっ」

問いかける。

「皇帝竜にあなたは……勝ちたいのですか？」

ポピラはエイリークの心に問いかける。

「ポピラ？　アタシは……」

「お前、何を！？」

2人を庇い、皇帝竜の攻撃に耐えるブロトは驚いた。ポピラはエイリークにガンプレートを向けている。

「エイリークさん。私を信じてくれますか？」

ポピラにとってもこれはイチかバチだった。この『カートリッジ』はユーマが使えなかったものだ。

でも《同調》持ちである彼女ならばあるいは。

「……いくわよポピラ。アタシはあの竜を、吹き飛ばす！」

「――！！　はい！」

躊躇うことはなかった。エイリークはポピラをただ信じたのだ。

ポピラは信じてくれた彼女に応え、エイリークに《同調》してガンプレートを撃つ。

「サポート・バレット、《剛力》、《迅速》」

「――！？　これって」

《レプリカ２》のツインカートリッジを換装。もう１度エイリークに向けて強化系の『支援術式』を撃ち放つ。

「《戦声》、《暴君の風》。エイリークさん！」

ゲンソウ術による魔術の発動はイメージの精度次第。その中でも回復・補助術式を相手に使うならば、他人を理解しなければうまくいかない。

――あなたとあなたの剣に……力を！

「はあああああっ！　風よ！！」

沸きたつ力を抑えられずにエイリークは跳んだ。

移動術式を使わない軽くて力強い跳躍。身体強化を使えないエイリークにとって未知の感覚だった。

これはエイリークが願っていた力。《同調》したポピラが彼女を理解し、与えてくれた力。

《戦声》による高揚感に一時的に疲労感を忘れ、暴れ狂うような《旋風剣》を皇帝竜に振るう。

エイリークは皇帝竜を剣でぶん殴って膝をつかせた。

「なっ、カイゼルが！？」
「嘘だろ、おい」
「まだよっ！」
驚きの声を上げるブロト達を無視して皇帝竜の頭まで跳んでいたエイリークは、１歩だけの《天駆》で宙を蹴ると皇帝竜に突撃。
《疾風突き》を腹に突き刺すと今度は連続技を繰り出して皇帝竜の鱗を砕き、思うがままに剣を叩きこむ。
月の型連続剣技、《皐月》
破砕攻撃である《断月》で防御を崩し《双月》、《水月》、《弧月》と繋げる５連続攻撃だ。
「貴様よくも！　カイゼル・バースト」
「させない！」
《爆風波》を皇帝竜の下顎に叩きつけて無理やり上に向けて熱線を撃たせる。
「いける！　パワーにスピード、それに風の術式の威力も！　これならアタシは」
「《旋風の剣士》！　お前ごときにこのカイゼルが！！」
幹部Ａは皇帝竜を温存することをやめてエイリークを潰すことにした。

対してエイリークは剣を構える。鞘に納めていればそれは居合抜きのような構え。

「今のアタシなら……もう1つの《旋風剣》が使える！！」

剣に荒れ狂う風が集まる。

纏う竜巻はただ無軌道に暴れたがり、それをエイリークは必死に制御する。

「ありがとうポピラ。あなたのおかげでアタシは一段階上の《旋風剣》を放つことができる。……見てなさい！　これがアタシの剣」

「消えろ！　カイゼル・メガフレアだ」

皇帝竜の必殺技とエイリークの奥義が激突。

「黒竜よ、天へ、還れ！！」

その剣は天へと向けて放ち、敵を空へ葬る対空剣技。

第2の《旋風剣》。

《旋風剣・昇華斬》

剣の纏う竜巻は火球をかき消し、斬り上げた斬撃は竜の腹を斬り裂く。

そして皇帝竜は暴風に巻き込まれて空へと連れ去られた。

あとには何も残らなかった。

「アタシの……勝ちよ」

《昇華斬》の制御がうまくいかずに刀身を砕いてしまう。

しかしエイリークは構わずに折れた細剣を幹部Ａに向けた。

「まさかエース以外に皇帝竜が破られるなんて……くくっ、ははは。……こい、カイゼル」

「なっ！？」

消し去ったはずの皇帝竜が再び現れた。これには誰もが驚く。

「嘘よ。だってさっき」

「予備の腕輪だ。保険代わりだったんだがな」

「グゥ……ガァアッ！」

「危ない！　ぐあっ」

「きゃあっ！」

薙ぎ払う尻尾の攻撃。ブロトはエイリークを庇うが2人まとめて叩き飛ばされる。

「……」

「うっ。……ちょっと起きて、しっかりしなさい。このままじゃ」

「今度こそ終わりだ。カイゼル・バースト」

ブロトが気絶してしまった。支援術式が解けたエイリークでは重装の彼を抱えて逃げることができない。

「エイリークさん！」

間に合わない。でもそこに《カイゼル・バースト》の射線に――

銀の彗星が飛び込む。

「コメット、キィィィク！！」

「「――！！」」

復活のコメットマン。

エイリーク達の盾となりＨＰゲージの９割を消費して皇帝竜から２人を守る。

「ギリギリ間に合った」

「ミツルギさん！」

「……遅いわよ、バカ」

ユーマはエイリーク達に並び、幹部Ａと向き合う。

「《精霊使い》！」

「勝敗はもう決まったよ。俺達の勝ちだ」

「今更その人形に何ができる？」

そして再び対峙するコメットマンＶＳ皇帝竜。

「みんなのおかげで術式は完成したんだ。エイリーク、剣がないなら『こいつ』を使え。『それ』が《竜殺し》だ」

「……はい？」

『こいつ』とはきっとこのコメットマンのことであって、『それ』を使えと言われても……

「ヘアッ」

コメットマンはエイリークを見上げ「さあ、はやく」と言わんばかりにそわそわしている。

「……アタシにどうしろというのよ？」

エイリークは途方に暮れた。

＋＋＋

2－18b　発動、竜殺し　後（前書き）

最終ラウンド。　最大の敵は味方の中にいたという話

2－18b　発動、竜殺し　後

＋＋＋

「エイリーク、これで決着をつけるぞ」
「だから《これ》をどうしろっていうのよ」
エイリークの目の前には寝転がって彼女を見上げるコメットマン。
足を掴んで皇帝竜を殴れとでも言うのか？
「デュワ」
「いえそんな『さあ、』と言わんばかりに足を差し出されても」
ちなみにコメットマンの操作と掛け声はもちろんユーマによるものだ。
「冗談なんだけどね。見てろよ。コメットマン、レベル1必殺、《変身》！」
「ジュワ！」
コメットマンは空へ向かって急上昇。見えなくなるまで彼方へと飛んでいく。
「何をする気？」
「時間稼ぎしてもらった間に《変身》の必殺技を再設定したんだ。

皇帝竜を倒したことで大幅に上昇したＩＭＰと《竜》を倒した実体験、それに『俺の世界にある物語』を組み合わせれば……来い！」

銀の彗星が姿を変え、ユーマ達の目の前に落ちてくる。

キィィィン

墜落の衝撃や地響きは起きず《それ》は地に突き刺さった。

「これって……剣？」

澄んだ音を立てたのは鍔のない銀の柄に透明感のある氷のような薄い刀身。

空から生み落とされた一振りの剣。

とても実戦で使えるような代物ではなかったが神器と呼べるような美しさが《それ》にはあった。

「綺麗……」

「まさか。これが幻創獣なのか？」

透き通る刃の輝きに見惚れるエイリークと幻創獣の根本を覆す《それ》に戸惑う幹部Ａ。

「人の手により生まれし宝具は数知れず、伝説となる剣の名は今も尚、再成の地にて語り継がれる」

ユーマは語る。その剣の正体を昔教わったままに。

兄から教わった、少年の知る剣の伝説は３つ。

ひとつは《神殺し》。

世界が壊される直前まで運命に抗い、神の従僕だった天使達の運命を切り開いた生贄の少女の神話。

ひとつは《王道》。

自らを悪魔と名乗る種族の青年が異界の地で魔王を名乗り、人との共存を目指した英雄譚。

そして最後のひとつ。突然変異で生まれた竜の脅威。

それに立ち向かった武人が語る、最高の友を得た時の自慢話。

ユーマの世界に現存する伝説。

「５０年も昔。武人の技ならば山の如き竜さえ斬れると信じた鍛冶師がいた。この剣は鍛冶師が武人の為に鍛えあげた生涯最後の一振り」

その武人は鍛冶師の業に見事に応え、竜の額を切り裂いたという。

ユーマはこの伝説を幻創獣で再現する。

「この剣こそ《竜殺し》」

「５０年前だと？　そんな話は聞いたこともない。法螺話なら付き合わん。やれ、カイゼル！」

「というわけで試し切りお願いしてもいい？」

「なっ、冗談でしょ！？」

皇帝竜は巨体を震わせて回避不可能の突進を仕掛ける。

咄嗟に剣を掴んだエイリーク。手にしたその重さに不安を抱いた。

（軽すぎる！　なんて頼りないのよ）

「いけ、エイリーク！」

「ああーっ、もう！」

エイリークは突撃。ユーマを信じたというよりも突発的に体が動いたという感じだった。

この少女、危機に陥るほど前に突き進む傾向にある。

エイリークは出会い頭に《閃月》を皇帝竜の角に叩きつけ、その

手ごたえのなさと飛んでいく黄金の角を見て茫然とした。

「斬れ……た？」

「馬鹿な！！」

「グルァアアアア！！」

断末魔の咆哮。

角を切り落とされた皇帝竜はＨＰゲージを全損して消失。余りにも呆気ない。

「ユーマ、これって」

「うん、上出来。これが《コメットマン・ドラゴンスレイヤーモード》。ティムス！」

「やっと出番だな」

「「「「――――！！」」」」

突然スタジアムの全域に複数の剣が出現。

宙に浮いている剣のすべてがエイリークが今持っている《竜殺し》の剣だ。

「これが俺達の切り札だ。皇帝竜すら一撃で消し去るこの剣の力見ただろ？　観念しろ」

「なんだそれは！？　いつの間に、どうやって」

幹部Ａにティムスは当然のように答える。

「俺は《天才》なんだよ。竜を消す剣くらいいくらでも《複製》できる」

エルド兄妹が《天才》たる所以であるそれぞれの能力。

例えばポピラは自分や兄が創るブースターならば調整しなくても本来の使い手並みに扱うことができる。

《爆風波》の補助術式を付与した《洗脳くん４号》はもちろん、完全なブースターとしてデザインされたガンプレート、《レプリカ２》もインスタント仕様のカートリッジならば訓練なしに使いこなせるのだ。

ポピラの特異能力はブースターを使った《模倣》である。

そしてティムスの能力は《複製》。詳細なデータを彼自身が理解し、素材が揃えば同じ物が、付与された特殊効果まで複製できるのだ。

幻創獣は《調整器》で１度ＩＭ化するのでデータは簡単に収集できる上、ゲンソウ術の産物なので永続効果がなくても素材を揃える必要がない。いくらでも《複製》が可能だったのだ。

幻創獣を創るシステムはティムスの能力と相性が良すぎた。

そしてユーマはコメットマンを創る時に世界中にある竜を倒した伝説や文献などとにかくいろんなイメージを注ぎ込んで『竜を即死

させる特殊スキル』の設定を予め組み込んでいた。

「《竜殺しスキル》を完全な物にするために俺はコメットマンで皇帝竜を倒し、『幻創獣の竜を倒すイメージ』を手に入れた」

「あとはこのスキルを使えるようにして俺が幻創獣のＩＭＰの振り分けを再設定するだけ。俺は物しか《複製》できないんでユーマには《竜殺し》に最適な剣への《変身》を設定してもらった」

《竜殺し》の本命。それは特定の幻創獣を狩る幻創獣を創り、《複製》して竜騎士団の数に対抗すること。

「《竜殺しスキル》は皇帝竜戦で急激に増加したコメットマンのＩＭＰを９割以上も消費して実現できた規格外のスキルだ。最初からコメットマンは《ドラゴンスレイヤー》を創る材料だったんだよ」

剣の切っ先が全ての竜に向けられた。元々ユーマの幻創獣なので思考操作で動かすことができる。

これでユーマとティムスは竜騎士団にチェックをかける。

「コメットマンの再設定を阻止できなかった時点で俺達の勝ちは決まっていたよ……何度も言うけど幻創獣はどう見たってゲームなんだ。これでどんなに強いモンスター創っても対策立ててアンチキャラ創ればそれで詰み。《ドラゴンスレイヤー》がある限り竜はもう最強じゃない」

「嘘だ。こんなことで竜が……最強の力が、俺達の、俺の騎士団が……」

「《竜使い》のおもちゃを振りまわすことしかできないくせに最強なんて言うな。幻創獣はすべて返してもらうぞ」

ユーマはひとつ溜息をついて敵にもならない幹部Ａを見下す。

「こっちはどれだけ準備してこの『舞台』を用意したと思ってる？《竜使い》とその騎士団はここで潰す。これで終わりだ」

「《精霊使い》！！」

「幻創獣は今度こそルックスが正しい使い方を見つける。……結局俺はみんなに迷惑かけてお前たちを相手に勝てるゲームを仕掛けただけ。それだけだよ」

そう呟いてユーマは残っていた竜に剣を突き刺し、すべて消し去った。

「あとお前らみんな罰ゲームな。とりあえず串刺しの刑だ」

「う、ああ」

「わあああああっ！」

ついでとばかりに幹部や竜騎士団員に剣を向ける。何本もの剣が彼らに突き刺さり、みんな倒れた。

竜騎士団はこれで全滅。《竜殺し》は幕を閉じるのだった。

＋＋＋

「処刑完了っと」

「ユーマ、アンタ……」
「大丈夫。この剣じゃ誰も死なない。《ドラゴンスレイヤー》は竜しか殺せない最弱の幻創獣だからショックで気絶しただけだよ。ほら」
ユーマはエイリークが持っていた剣で自分の腕を切る。剣は貫通するが傷一つ付かなかった。
「ＩＭＰ増やすためにかなりの制約をかけたからね。実はコメットマンも竜と呼ばれるものにしかダメージを与えられないように制限しているんだ。このくらいしないと２週間で皇帝竜を倒す幻創獣なんて創れなかったから」
「……精霊の、アンタの力なら面倒なことしなくても十分勝てたんじゃないの？」
「学園の半分を吹き飛ばしたり砂漠化したりして生徒会の派閥同士が争うきっかけを作ってもいいならね」
「まさか」
それだけ大事になればユーマ１人に《Ａナンバー》や教師陣が動員されるだろう。
エイリークもまだ《精霊使い》の力を把握できていないのでユーマの冗談かどうかが判断できない。
それに生徒会の派閥争いなんていまいちピンとこなかった。
「あいつらみんな誘い出して人的被害も抑えるつもりだったけど、やりすぎたよ。ティムスの結界が壊れたのが最大の誤算だ」
「これで済んだならきっとマシよ」
「そうかな？」

スタジアムは半壊。１０メートル級の皇帝竜が４体も暴れまわったので当然だが最小限の被害といえばそうなのだろう。

「ティムス。俺達どんな処分を受けることになるかな？」

「先に学園長に話をつけていたのは正解だったな。ここまでやっても退学まではならないだろう。竜騎士団が動いた時に生徒会や《Ａナンバー》が動かなかったから生徒会長や不測の事態に出遅れた自警部の判断ミスにしてもいい」

さらっとブソウに押し付けることを考える天才少年。

「まあ今回の件で《竜使い》と俺達のエース資格は絶対剥奪だな。いいことだ。これでやっと余計な肩書きがなくなる」

「いらないの？」

「いらん。元々俺達兄妹はお前と同じ特待生だ。学園に貢献すれば研究室と資金は提供してもらえる。《派遣》なんてこりごりだ」

《Ａナンバー》は学園の代表として他校へ赴くことや学生ギルドの依頼に強制で派遣されることが多い。大きな権限がある分面倒なのだ。

「特待生の待遇まで失うとちょっとキツイがその時は《組合》の幹部にでもなればいい話だ」

「それならいいや。俺は別に一般生徒で構わないし」

「それ、本気で言ってる？」

エイリークは突っ込む。精霊を使わずに《竜使い》の勢力を一網打尽にした《精霊使い》が何を言うのかと。

ただし風森の姫でいて今回の事件で《竜殺し》の異名まで報道部から拝命されることとなるエイリークも一般生徒とは言えない。

「馬鹿ですね」

そう言うポピラも同様。明らかになった彼女の能力はガンプレートを使えることからユーマ、ジンに次ぐ3人目の《魔銃士》と認定され、学園から魔術師系ランクCの評価を受けることになる。

ユーマの周りにいて一般生徒と呼ばれるのは辛うじてミサくらいしかいなかった。

「ん？　アギ達がいない」

「逃げましたよ。気絶した竜騎士団を捕らえるのに自警部もそろそろ動くでしょうから」

「早いわね」

「この手のプロらしいです。よくわかりませんが」

《バンダナ兄弟》にとって自警部は宿敵である。気絶したアイリーンや応援団、ジン、イース達を連れた大所帯で厄介なことになる前に自警部の包囲網を脱出。

残ったのはユーマとエイリークにエルド兄妹の4人のみ。

「脱出用の幻創獣は確保してある。ポピラ、お前たちも早く行け」

ティムスが喚びだした幻創獣は飛行能力を持つ《キャロケット》。ルックスが渡してくれたらしい。

「……このニンジンで飛んで行けと？」

「エイリークとポピラはね。俺達は腕輪を回収しないといけないから」

巨大な人参から生えた細長い腕を掴むエイリークとポピラ。

「これで逃げるのは格好がつかないわよ」

「それを言わないでください。……しっかり掴まって」

腕輪を兄から受け取るとポピラは幻創獣を操作して《キャロケット》の必殺技を使う。人参は空の彼方へ少女2人を連れ去った。

「ひどい絵だな」

「なんかすごいもの見たよ」

シュールだった。報道部あたりが怪奇現象として写真を撮っているかもしれない。

ユーマとティムスだけならば自警部に見つかってもブソウを通せばどうにかなる。そんな甘い見通しで2人は残り、気絶した竜騎士団から幻創獣の腕輪を回収しはじめた。

第2章のラスボスが自警部の中にいることをユーマは知らなかった。

＋＋＋

「これで全部かな？　腕輪の数が合わないんだけど」

「……ちっ」

「ティムス？」
「ところでユーマ。お前は自警部部長の二つ名を覚えているか？」
不審に思うユーマ。ティムスが話題を振ること自体が珍しい。
「《一騎当千》。あの男は戦士系に勘違いされやすいが、《紙兵》を駆使して最大千人の兵力を運用できる操作系の《符術士》なんだよ」
「……えーと。もしかして囲まれた？」
「ああ、最悪だ。あの野郎本気できやがったぞ」

《千人兵》

ざく、ざく、ざく、と規則的な足音を立て、白い鎧姿の兵たちが近づいてくる。
「ミツルギ……エルド。スタジアムをぶち壊して気が済んだか？」
「ブソウ……さん？」
「俺は、俺はもう……限界だ」
巨大な十字架を担いだ自警部部長が自前の兵を引き連れて鬼の形相で現れた。
「これだけの……被害を出して……また俺に仕事をさせる気だな。……捕まえた奴らの面倒と……始末書のチェックをまた……俺に……させる気だな？」
「「……」」
怖かった。

ブソウはまだ遠くにいるのに彼の呟きがはっきりと聞こえることにユーマは戦慄した。

「ブソウさん。とりあえず俺達今後の事を話そうと思って残っていたんですけど……」

「今後？　徹夜だよ。徹夜。寮に戻らず本部に何日も何日も寝泊まりするんだよ。部下には休み寄越せ、残業代払えと文句言われながら俺は1人紙の束と向き合うのさ」

「ブソウさん……」

「最初から俺が動けばこんなことにはならなかったんだ。なのに生徒会長が……でもなミツルギ。お前はよくやったよ。よくやったがやりすぎたんだよ。だから」

ブソウが担いだ十字架を地面に突き刺す。

「さあ、儀式をはじめよう。祈ればきっと紙の束は減ってくれる。1週間分くらいはきっと！」

ドス黒い隈を目の下に浮かばせてブソウは濁った目でユーマ（生贄）を見る。

ブソウが今日までのストレスと寝不足で壊れてしまった。彼はとうとう『天下無双薙刃神教』の神に堕ちてしまったのだ。

逃げないとあの十字架に磔にされる。でも恐怖でユーマの体が動かない。

「嘘だ。俺がでっちあげた宗教が《現創》した！？」

「どうやったら寝不足で化物になれるんだよ……」

「ミツルギィ、エルドォォ！　神の、紙ノ、カミノイケニエニィィィィナァァァァ！！！」
「「怖っ！」」

「ブショーくん、キィィィィクっ！！」

ユーマの第2章最大の危機に黄色いオコジョが飛び出した。強襲してブソウの後頭部を蹴り飛ばす。

「グハァッ」
「ぶ、部長さん！」
「ふう。ブソウ君、八つ当たりは良くないなぁ。あのくらいの机仕事ボクも組合長もやってるんだよ。もちろん生徒会長もね」
「……」

ブソウは報道部部長の幻創獣の一撃で気絶。話を聞いていなかった。

オコジョキックでブソウの意識がぶっ飛んだと同時にユーマ達を囲んでいた《千人兵》も消え去る。

「助かりました！　部長さん」
「いやぁ流石にあの顔はヤバいかなと思って。……彼に恋する乙女としても止めないといけないと思っていました」
「ヒトじゃなかったよな、アレ」

とにかく落ち着いた。自警部の副部長に連絡をとって気絶したブソウと竜騎士団を任せる。

彼女はルックスに連絡をとったあと、ユーマ達が竜騎士団と戦っている間に学園長と話をつけていたのだ。

「さて。おばーちゃんとはもう話をしたよ。ミツルギ君に協力したメンバーは不問。自警部が動くよりも事態に早く駆け付けて一般生徒が避難する時間を稼いでくれたという見方ができるからね」

「そっか。よかった」

「元々《Aナンバー》を動かさなかった生徒会長にも非があるから大目に見てくれたんだ。ただ《旋風の剣士》が皇帝竜を消し飛ばした《あれ》がスタジアムを壊していたら彼女は危なかったね」

「……《旋風剣》の奥義っていくつあるんだろう？」

今はポピラの支援なしに《昇華斬》を使うことができないエイリーク。もしも彼女が1人で使いこなせるようになったのなら、いつかあれで自分かアギが吹き飛ぶだろうと予感めいたものがユーマにはあった。

「あと君達と竜騎士団への対応は後日というわけで。エースの選定もあるからここでは判断できないんだ。今日はもう帰っていいよ」

「わかりました。あと部長さん」

「何かな？」

「献身的な看病もポイント高いですよ。患者と看護師の出会いパターンAです」

「……ブソウ君の所はあとで行くよ。じゃあね」

最後におせっかいを焼いてユーマとティムスはスタジアムを後にした。

「これでおしまい。いや、はじまりかな？　生徒会長や他の《Ａナンバー》はミツルギ君をどう見ることやら。……あとおかゆってどうやって作るんだっけ？」

今回起きた《皇帝竜事件》。その当事者達への処罰は今日から一週間後、昇級試験の結果発表と同時にユーマ達に伝えられた。

＋＋＋

2－19a　エピローグ－エルドカンパニー（前書き）

その後のルックスと幻創獣

2－19a　エピローグ－エルドカンパニー

＋＋＋

C・リーズ学園報道部。

情報の宝庫と呼ばれるその部長室に珍しい客が訪れていた。

「以上が《皇帝竜事件》に関わる《精霊使い》の動向だよ」

「……」

生徒会長は事件の詳細を確認し、報道部部長の話に額を抑えた。

＋＋＋

《グナント竜騎士団》は学園集会中に事件を起こし、スタジアムを破壊したことで結局解散。

幹部以下の主謀者は生徒会襲撃の計画が明らかになることで退学、または付属校への転校という処分を受けることになった。

幻創獣の腕輪はユーマとティムスが回収。竜の幻創獣は封印。幻創獣のシステム自体が学園長の依頼でティムスの管理下におかれた。

試験期間に起きた一連の《皇帝竜事件》。生徒会長は《竜使い》のことを邪魔にはしていたが結果的に《会長派》であるエースを1人失う痛手を負い、生徒会の陣営に加える気でいた幻創獣を手にすることなく終わる。

それとは別に報道部が堂々と偽の情報をばら撒いていたことを彼は当人から初めて知らされた。

「会長さんどうしたのかな？」

「今回あなた達が仕掛けた情報操作はどう説明してくれますか？」

「ボクは《精霊使い》から『仕入れた情報』を欲しがっていた竜騎士団や噂好きな子達に売り渡しただけ。情報の真偽はおいといてね」

《精霊使い》の指示通り動いたことになるのだが、形だけは今まで通りなので今回も報道部は『中立』だったと彼女は言い張る。

もちろんそんな理屈で納得する生徒会長ではない。

「……自警部部長はともかく、今回のように学園の勢力バランスが貴女のために崩れる危険性があります。一緒に来てもらいますよ」

「やだね」

にべもなく断る部長。

「報道部は生徒会の管轄には入らない。君が生徒会長だからって学園のすべてを率いる必要はないんだ」

「そんなことはない。僕なら学園をもっと」

「今の君をボクは信じられないんだよ」

生徒会長の言葉を遮る。

「君は学園のためを思って行動しているわけじゃない。私情なんでしょ？　ねぇ、亡国の王子サマ」

「っ！」

どうせ話が長くなるからと彼女は手札を1枚切った。

生徒会長は隠していた正体を暴かれて絶句。これには護衛として来ていた《会長派》が動く。

「貴様」

「まて。……勘違いしないでください。僕は生徒会長として貴女の横暴な振る舞いを止めなければいけないのです。だから一緒に来て下さい。さもなければ」

《青騎士》と《獣姫》はそれぞれの武器を取り出すが部長は態度を崩さない。

「脅す気？　《Aナンバー》を子分にしてる君のほうが横暴じゃないか」

「彼らはただの協力者です」

平然と嘯く生徒会長。

「ふーん。そんなことするならボクも考えがあるよ。《Aナンバー》は報道部にもいるんだ」

とはいってもその彼は部長からすれば隠し撮りのプロでしかないのだが。

「《霧影》ですか。残念ですけど彼や隠密が今日出払っていることを僕は知って……」
「黙って」
「「「――!!」」」
気付かなかった。エースの2人ですら。
いつの間にか生徒会長の首に突き付けられたデスサイズの刃。現れたのはフード付きの黒いローブを纏ったアサシン。
「《黙殺》」
「彼女はボクの協力者だよ。どうする？　おとなしく帰ることをおススメするけど」
誰もが動けない中で報道部部長だけが喋り続ける。
「会長さん。君は今回ボクと《精霊使い》に感謝すべきなんだよ。試験最終日のあの日、《竜使い》と竜騎士団は全校集会の時に生徒会棟を襲撃するはずだったんだ」
《黙殺》に続く3枚目の手札。貸しを作っていた事実を公開して自身を守る。
「いつも使う講堂は大規模な《牢獄》の術式を使って罠を張っていたよ。きっと集会の時に一般生徒ごと自警部や《Aナンバー》を閉じ込める気でいたんだね」
「……」
「ボク達はこれでも余計な混乱と騒乱を抑えたんだ。ミツルギ君に

矛先が向いたから生徒会に直接の被害はなかった。せいぜい報告書の束が机の上に山を作ったくらいでしょ」
「くらい？　……あれが？」

未だ残っている雑務を思い出しげっそりする生徒会長。彼は十分被害を被っていた。

「あれだけの事をしたんだからミツルギ君やエルド君だって学園長から処罰を受けたんだ。だから《皇帝竜事件》は誰も得るものがなった。それでいいじゃないか」
「……わかりました。今日はこれで失礼します」

敵地と言える報道部の中で元エースである《黙殺》までいては不利だと悟る生徒会長。

護衛を連れて立ち去った。

「会長さん。お願いだからはやく気付いて。ここはみんなのためにあるんだ。王様なんていらないし学園を支配しても未来に繋がるものは何も手に入らないよ」

彼女は学園の先輩として生徒会長の事を思う。

「昔辛いことがあったとしても、せめて学園都市にいる間は世界のしがらみから解放されるべきなんだ。ここはボクらにとって楽園なんだから」
「……そうね。だから私はここからまたやり直すことができる」

《黙殺》の呟きに部長は気持ちを切り替え、彼女のほうへ振り返る。

「それにしても助かったよ。今日はミスト君が忙しくてね」

「構わないわ。貴女のサポートがなければ私も動くのが難しいから」

後ろ盾のなかった元エースの《黙殺》。今は報道部部長に個人的に雇われている。

彼女は報道部の幽霊部員として暗躍していた。今回は誰にも悟られずにユーマのフォローをしていたのだ。

「しーちゃんが捕まえた竜騎士団から回収した腕輪、あれをなんとか使えるようにしないとね。エルド兄妹やルックス君の力を借りれれば良かったんだけど」

そう言って彼女は袖の下に隠していた幻創獣の腕輪からブショーくんを喚びだす。

「この子達はいざという時の切り札になるからね。まだ誰にも知られたくないな」

「……しーちゃんはやめて〇〇〇〇。……？」

「ふっ。ボクの情報規制能力をなめるな」

「……」

何でも伏せ字にする役に立たない反則技に《黙殺》は呆れる。

「でも君はこのままでよかったの？　今なら《Ａナンバー》にも戻れただろうに」

「……いいの」

部長の問いに《黙殺》は首を横に振る。

「あの子たちが表にいれば大丈夫。裏の仕事はきっと向いていない」

「隠れて行動するのはミツルギ君には無理そうだね。無茶苦茶だし」

「でもきっと……面白いわ」

蒼い『両の瞳』を細めて《黙殺》は微笑む。

「そうかな？　それじゃあ日影者同士これからも学園のためによろしくね」

「……貴女も十分日向の人よ。でもこちらこそお願い」

『戦闘用の』幻創獣の腕輪と元エースである《黙殺》の協力を得た報道部部長。

ユーマ達とも良好な関係を築く事ができた彼女のいる報道部こそ《皇帝竜事件》の本当の勝者だった。

＋＋＋

エピローグ

＋＋＋

「納得がいかねぇ！」

正門を抜けた大通りの掲示板に貼られた試験の結果。それを見た

リュガはアギの首を絞める。

「……落ちつけよ」

「だってお前、お前だけが2ランクアップだぞ。ここ十何年なかったことじゃねえか！」

「いや、それは俺も信じられないんだが」

ユーマ達のメンバーは全員無事にランクアップを果たした。

その中でもアギは特別でランクCからランクAに昇級したのだ。

リュガのように疑う生徒もいたが実際に彼の戦いぶりを見ていた生徒も多く、納得する生徒もまた多かった。

「当然と言えばそうなのでしょうね。《精霊使い》と互角に戦って《皇帝竜》の攻撃を無傷で凌いだ。その評価がランクBとはいえないでしょうから」

今までアギが評価されなかったのは試験官の攻撃を防ぐことしかしなかったからだ。

受け身になるアギは試験官が大したことなければそれ以上の評価を受けない。だから彼の《盾》がエース級の必殺技すら無傷で防ぐとは誰も知らなかった。

「アイリーンさんまで。くっ、俺だけランクBかよ」

「昇級試験はあと2回あるんです。すぐ追いつきますよ」

「いいから離してくれ。苦しいんだよ！」

アイリーンから慰められて気を良くしたリュガにやっと解放され

たアギ。

「ったく。そういや姫さん、ユーマはどうした？」

「エルド兄妹のところです。もうすぐイベントがはじまりますから」

《Ａナンバー》のままとなったティムスはポピラ以外に新しくメンバーを集めて新騎士団を結成した。《組合》にも属した新設の技術士ギルドでもある。

「私、もう予約したんですよ」

「まじかよそれ」

「ユーマなら俺達の分確保してくれるんじゃねぇのか？」

試験の結果が発表されて一段落する休日の今日。この日を狙ってティムス達は新製品を販売することにした。

「ウインディさんもポピラさんに連れていかれましたし、私達も手伝いに行きましょう」

《皇帝竜事件》から１週間。

幻創獣は《エルドカンパニー》によって新しく生まれ変わることになる。

＋＋＋

「お待たせしました。《エルドカンパニー》は本日より開店。新商品、《ＰＣリング》の説明会を今から始めます」

屋外演習場前の広場。

未だ《ユーマの砂場》であるここで《エルドカンパニー》の社員が多くの人が注目する中で新製品のイベントをはじめた。

「予約券をお持ちの方は先にリングをお渡しします。実際に操作しながら説明をお聞きください」

「対戦モードを使用したイベントは午後3時からです。今日手に入れることができなかった人にも体験コーナーを用意してます。参加希望者は説明会のあとで申し込み下さい」

「ちょっと待て。このあと俺達４人でこの人数を捌くのかよ？　ユーマはどうした！」

「とりあえず盛況だな」

「はい。……よかったです」

ティムスに連れられてイベントの様子を覗きに来たルックス。

「遺跡の技術をふんだんに使った《ＰＣリング》。破格の値段だぞあれは」

「でも調整や機能の拡張は僕らにしかできませんから採算はとれますよ」

「まあな」

ＰＣリングは《竜殺し》の準備と並行して開発を進めていた、再設計の新しい幻創獣の腕輪だ。幻創獣の性能を大幅に落として遺跡の技術を前面に押し出した、愛玩用にしては多機能なアイテムである。

ユーマはＰＣリングを《ウインドウ》を使った電子手帳、携帯端末と評した。仮想ディスプレイを利用したスケジュール帳やメモ帳、辞書の機能に加えてアラームのお知らせ機能で幻創獣が飛び出してくる。

手のひらサイズの幻創獣は芸術科の生徒が商業用にデザインしたものだ。《録音》することで歌ったりもでき、もちろん思考操作は可能で専用のフィールドを使うことで大きくなって対戦できるのが売り込みのひとつ。カスタマイズ機能付きだ。

ティムス達はＰＣリングのアップデートをサービスで、幻創獣のデザインと対戦用オプションなどを今後も追加して販売するつもりだった。

「個人用の通信装置になったのが一番大きいですね。ユーマさんが幻創獣ではなく遺跡の技術そのものに注目してなかったら思いつきませんでしたよ」

「ケータイ機能というんだとさ。あれを使えるように学園中に《アンテナ》とかいう装置創ったりして《組合》の一大事業になったぞ」

「いずれ学園都市全体に普及させるつもりですからね。貸し出し用の幻創獣も好評みたいです」

「イース達が実際に使って見せるんだ。実用性はわかってもらえる」

竜騎士団から回収した腕輪も初期化して警備用や工事で使えるような作業用幻創獣を創った。

高所作業の足場や重機の代わりになるそれは《組合》などに貸し出すことにしている。操作に慣れない内は術者も派遣するようにもした。

《エルドカンパニー》は幻創獣と遺跡の技術を独占せずに一般化して有効活用するために立ちあげた会社なのだ。

「ルックス、よくやった。これは幻創獣の実用化を進めてきたお前の成果だ」

「ティムスさん？」

ティムスは初めてルックスを褒めた。

「ＰＣリングの開発もだが悪用を防ぐ為に自警部と相談して取り締まりの規則を作り、《幻獣使い》の資格制度を提案したこと。そしてこのイベントの成功もお前が技術士として為したことだ」

途中から手伝いはしたが《竜殺し》の準備段階から１人で作業を続けてきたルックス。この少年の実力を知っているからこそティムスは同じ技術士として教えなければいけないことがあった。

「技術士はモノを創ったら終わりではいけない。正しく使ってくれる人を選び、もしくは正しい使い方を伝えなければいけないんだ。お前が間違ったのはここだ。わかるな？」

「はい。……幻創獣はもう人を傷つける竜にはならない。今度こそみんなが正しく使ってくれる」

ルックスは兄の事を含めて責任を果たした。これもユーマと隣にいる彼のおかげだ。

自分のできることは全て成し遂げた。だからルックスは頭を下げる。

「ティムスさん。今までありがとうございました。幻創獣のことをこれからもお願いします」

「はぁ？　何を言ってやがる。俺は管理の為に名前を貸しているだけだ。これからもお前が『ここ』で幻創獣の面倒をみるんだよ」

馬鹿が、途中で投げ出すなよ、とティムスは言う。

「ええっ！？　でも僕はまだ中等部で……」

「進学だよ進学。俺の持つエースの権限でお前は飛び級。今度から高等部の1年でカンパニーの幻創獣課課長だ」

初めてエースの肩書きが役に立ったと邪悪に笑う天才少年。

「社長の俺は自分の研究に忙しいんだ」

「それは関係ないんじゃ」

「黙れ」

ちなみにカンパニーの人員構成は以下の通り。

社長：ティムス・エルド

秘書兼取締役：ポピラ・エルド
幻創獣課課長：ルックス・グナント
幻創獣課社員：イース他３名
契約社員？：ユーマ・ミツルギ

《皇帝竜事件》のあとイース達４人は技術士を目指して転科届をだした。今は《幻獣使い》の資格取得者として幻創獣の指導員と派遣の仕事をしている。

ユーマは気まぐれで時々手伝いに来る。何故か課長より偉い。

「４人組を部下にくれてやるからさっさと一人前の技術士にしやがれ」
「そんな」

幻創獣だけでなく見習い技術士の面倒まで押し付けられた。流石にルックスは困る。

「お前の兄貴が帰ってくるまでの面倒は俺が見ることになったんだよ。いいからお前もイベントを手伝え。忙しくなるぞ」
「は、はい！」

《竜使い》は皇帝竜を失い、今は療養のために学園都市を離れている。

ルックスは兄の復帰を願いながら天才少年の下であたらしい学園生活を送ることになった。

「売り子が欲しいな……おい、女装しろ」
「絶対に嫌です！！」

＋＋＋

エルドカンパニーの開店イベントが盛り上がってきたその頃。忙しくなるのはわかっていたユーマはサボってのんびりしていた。

『めーるー、ですよー』

昼寝でもしようかと思ったところで全身ピンク色の風葉？　が飛び出てメールの受信を知らせてくれた。

「お。ティムスからだ。えーと『いそがしいからはやくきやがれ』か」

ユーマはＰＣリングの仮想ディスプレイをスムーズに操作してメールの内容を確認。この世界でユーマほどリングの機能を使いこなせる人はいないはずだ。

ＰＣリングの幻創獣は『おともだち機能』が備わっておりアイテム交換を利用したメールが使える。

操作は簡単。思考操作を応用した代筆機能で文章を作成して『おともだちにおくる』を選ぶだけ。

「……うん。対戦イベントがはじまるまでサボろう」
「ひどいですねー」

今度は定位置の肩にしがみついた緑色の風葉が喋る。

「なんだ？　1号」
「やめてくださいー。なんですかそれー」

ピンクの風葉はユーマがＰＣリング用に創った非売品の幻創獣だ。力の2号と彼は呼ぶ。

「そっくりにできてるだろ？」
「そうですかー？　わたしはもっとぷりちーですよー」

不満をぶつける風の精霊。

「そうかな？」
「これは肖像権の侵害なんですよー」
「どこで覚えたんだよそれ？」

訴えますよー、と文句を言い続ける風葉を宥めているとＰＣリングから着信音が鳴る。

『……ユーマ！　今どこにいるのよ！』
「うわっ」

通話機能をオンにすると、ピンクの風葉がエイリークの声で怒鳴る。

『アイリィやミサが手伝いに来てくれたけどリングの詳しい説明は兄妹とルックスしかできないのよ。早く来なさい！』

それからプンプン怒って幻創獣は姿を消した。

「この幻創獣を経由しないと機能が使えない仕様はどうにもならなかったんだよなぁ」

元々待ち受けキャラクターのつもりだった幻創獣。ＰＣリングは幻創獣の腕輪をベースに創ったもので遺跡の技術だけを利用することがうまくできなかった。

これに関して通話機能への弊害は顕著であり、もしこれがアギやリュガの声でピンクの風葉が喋るのならば違和感どころではなく気持ち悪い。

「一般のデザインを動物のマスコットを中心にしてよかったな。２号はポピラにでもあげて俺のは創りなおすか」

ティムスの声で風葉が喋ったらポピラは幻滅するかもしれない。そんな事を考えながらユーマは賑わうイベント会場へ向かう。

「おそい！！」

案の定《旋風剣》で吹き飛ばされた。

＋＋＋

遅れてきたユーマは罰でこき使われた。アドバイザー役の技術士3人を手伝いながら右往左往する。

「すいません。自警部の応援、増員を頼みたいんですけど……」

「俺は忙しいんだ。勝手に連れて行け」

書類に埋もれたブソウ（正気）に連絡をとってお客の誘導員や警備員を確保。

「大型の工具と一体化したこのボディ！　解体や運搬、各種工事に応じて創られたゴーレム達です」

「他にも農業や漁業、清掃用の幻創獣も用意しています」

「高所作業にはこの浮遊型。乗り心地は実際にお試しください」

イース達と共に貸し出し用の幻創獣を実際に操作して業者（組合に所属して工事やサービス業を営む生徒）に売り込む。

「次の販売はいつなんですか？　もう売り切れちゃったじゃない！」

「すいません。リングの材料が不足しているんです。補充次第すぐに工場『が』千も二千も《複製》して出荷致します」

「おい」

《複製》を使える社長兼生産工場のティムスをげんなりさせながら苦情を処理。

目玉である対戦モードを使ったデモンストレーションの司会も務めた。

「いくわよ、アイリィ！」

「私、操作系の術式も得意なんです。負けませんよ」

簡単なレクチャーのあと知名度と人気が高い《旋風の剣士》と《銀の氷姫》をゲストに行った幻創獣対決。

エイリークの猫騎士が自分と同じ鋭い剣技を披露すれば、アイリーンのブロックマンは体を分解してオールレンジ攻撃を仕掛ける。

今日一番の歓声。名勝負となった。

＋＋＋

「本日のイベントはこれで終了といたします。ＰＣリングの再販は後日報道部を通して連絡します」

「お集まりになったみなさん。今日は本当にありがとうございました。今後も《エルドカンパニー》をよろしくお願いします」

サボったツケを支払ってもお釣りがくるくらいに働いたユーマ。

こうしてＰＣリングの販売イベントは大成功に終わった。

ティムス達はＰＣリングを今月までに学園中に普及させ利用データを集めることにしている。不具合の発見と改良を繰り返して世界対応の『完全版』を完成させる為だ。

学園の生徒にはモニター役として破格の値段で販売した。いつか世界中にＰＣリングを大々的に売り出す一大事業なのだ。まずは学園都市全域で通信機能が使えるようすることが目標だった。

ルックスが創りだした幻創獣。遺跡の技術を独占することを望まなかった少年の発明は今日からゆっくりと世界へ向かって広がっていく。

竜という名の兵器としてではなく人々の日常を支える小さなパートナーとして。

＋＋＋

はるか先の未来の話。

数十年後、世界に広がった幻創獣を軍事利用しようとする国が次々と現れることになる。

その後のルックスは師の教えを守って幻創獣の行く末を見守り、技術士の使命と責任をもって戦い続けることとなる。

彼の弟子と彼に見出された《幻獣使い》達と共に。

そしてかの偉大な技術士の隣には彼を守護する黒竜の使い手がい

たという説がある。

でもそれは不確定な未来の話。

＋＋＋

2－19ａ　エピローグ－エルドカンパニー（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

次回の更新で第2章は完結。ユーマとエイリークの反省会（予定）です。

そのあとは日常編をお送りして第3章へ。章管理もしてみようと思います。

2－19b　エピローグ－銀の悪魔（前書き）

第2章ラストはユーマとエイリーク。あと学園長

2－19b　エピローグ－銀の悪魔

＋＋＋

イベント終了後。打ち上げの準備や今後の打ち合わせなど役割を分担した結果、会場に使ったステージを片づけることになったユーマとエイリーク。

「あー喉痛いし。いい加減もう疲れたよ」
「さぼったアンタが悪いのよ」

一息ついた所でエイリークは身に付けたリングをかざし、ユーマに話しかけた。

「それにしてもこんなものよく思いついたわね。もしかしてアンタの世界の物なの？」
「似たようなものがあるんだ。腕輪じゃなくてポケットに入るようなものだけど」

ユーマが学園で『むこうの世界』のことを平気で話せる相手はエイリークしかいない。

「こっちにはゲンソウ術を使った仮想体験のゲームがあるけど、幻創獣に使っていた技術は能力設定を組んだり、《ウインドウ》みたいな仮想ディスプレイなんてあってコンピュータゲームぽい所があったんだ」

ティムス達を交えてルックスの発見した遺跡の技術を解析したところ、応用すれば携帯端末に使えそうな部分を見つけたユーマ。

「専門的なことはさっぱりだけど俺が思いついたままに言ったアイデアや技術をティムス達が再現してくれたんだ。やっぱり天才だよあいつら」

「その遺跡の技術って結局何だったの？」

「ゲーム。俺が思った通り対戦物のゲームとしか言いようがなかった。しかも《精霊紀》の頃の物だよ」

「嘘！」

千年前に再生されたというこの世界。つまり以前の世界には魔術以外の高度な技術があったということになる。

「問題はそこじゃないんだけどね」

エイリークに聞こえないように呟く。

（ティムスには砂更の知識を借りたと言って誤魔化したけど、遺跡に使われていた文字は俺の世界で使われているものだった。あれは……どういうことだ？）

ユーマに読むことができた遺跡のゲーム内容。

ゲームに浸食された世界において対死霊に作られた唯一対抗できるゲームシステム。世界防衛の最終プログラム。

精霊を使役して戦うゲームのタイトル。その名は――

「まあ、いいか。いくら今の俺が《精霊使い》だからって関係ないよな」
「……？　何の話よ」
何でもないと言って誤魔化す。考えてもどうしようもないことだった。
「まったく、試験期間だったのにとんでもなかったわよ。最後は皇帝竜なんか相手にしたし」
結果2体の皇帝竜を倒したことになるエイリーク。《竜殺しの剣士》の二つ名はまんざらでもない。
「大体コメットマンなんて何なのよ？　架空の話の主役なんでしょ。あの銀色そんなに思い入れのあるものなの？」
「まあね。兄さんに似ているんだ。なんとなく」
「全身銀色で目が金色なのが？」
「それもね。でも生き方がきっと一番似ている。光輝さんはきっと嫌そうに否定するけど」
「？」
少し笑ってからユーマは思い出す。少年の兄の事を。
＋＋＋
「光輝さん。これ」
「ああ？」

陰気に答えた黒髪の眼鏡男。優真にディスクを貸していたことも忘れていた。

「劇場版コメットマン、最後まで見たよ。結局コメットマンは世界から消えてしまうんだね」

誰かの願いを叶え続けることでしか存在できなかったヒーローの最後。

コメットマンは地球を守りたいという自分の願いと共に最後の敵を倒し、燃え尽きた流星のように少年の前から消えてしまう。

どんな願いでも自分の願いの為に力を使ってしまったコメットマンは消失する運命だったのだ。

「そんな話だったか？　もう忘れた」

「光輝さん……」

たかが特撮ヒーローの話。でも優真はコメットマンと銀髪金眼の誰かの姿を何故か重ねてしまう。

「自己犠牲なんて最悪だ。報われない戦いを続けてきたなんて辛いよ。きっと」

誰もいないように別の作業に没頭する光輝。

「……報われたさ。コメットマンは」

でも優真の沈み込んだ呟きにはぼそっと答えた。

「どうして？」

「コメットマンは最後少年に“ありがとう”と言って貰えた。それだけでよかったんだ」

「話、忘れてないじゃないか」

「忘れたさ。覚えていただけだ」

うるさいよお前、そう言って光輝は優真の頭をはたく。

「ひどいよ。……じゃあさ光輝さん、《梟》は誰かに“ありがとう”って言ってもらえた？」

優真は聞いてみたかった。彼の在り方を知ったあの日からずっと。

人ならざる力に蝕まれ、人も天使も悪魔も関係なく夜を棲家に闇を狩り続けた彼の所業。

彼の行動理由がわからない。大和も姉も、特に光輝の義姉である十六夜は辛そうな顔をする。

誰も教えてくれない。だから聞きたかった。

兄のしてきたことに意味と救いはあったのか？

「知るかよ。夜行性の鳥に感謝する馬鹿なんているのか？」

投げやりに答える光輝。

「世界中の恨みを買った《梟》の最期は地獄の業火で焼き鳥になると決まってるんだよ」

「……《狼》は？」

「首輪付けて御剣家で飼われる」

「食費がかかるから嫌だな」

「じゃあ野良しかない」

「兄ちゃんはそれで十分生きていけるよ」

はぐらかされた。でも優真は深く問い詰めることはしない。光輝の心の内に踏み込む覚悟はなかった。

あとで聞いても彼は『見てしまった』、あるいは『見せられた』ものに対する八つ当たりを繰り返してきたにすぎないというのだ。

優真が遭遇した『しろい少女』の事件だってそうだったと言い張る。

「ヒーローと言っても特撮だろ。怪獣なんてわかりやすい悪を倒して地球が平和になるならここにも怪獣が来ればいいんだ。大和がぶん殴ればそれで終わる」

光輝は相棒の非常識さをよく知っているので割と本気で言った。

優真もあながち嘘じゃないと思っている。

「大和兄ちゃん1人で世界を平和にできるね」

「武器も軍隊も世界中からなくなるぞ。あいつの飯だけ用意すれば１００年は平和を維持できる」

「世界中で怪獣が現れたら？」

「本気で走らせる。間に合わないなら俺か優花が飛ばせばいい。怪獣退治は一発で終わるんだから時間もかからない」

「そうか！　だったらどこかに怪獣いないかな？」

「そういや５０年前にでっかいのがいたらしいな。天使や悪魔がいるんだ。その辺の山に埋まっているだろ？」

大和云々に関しては2人は何も疑っていない。優花（ツッコミ）がいないので言いたい放題だった。

光輝につきあって散々言ったあとに優真は溜息。

「……もういいよ。とりあえず光輝さんの『しつけ』は姉さんに任せる。地獄に落ちる前にいい加減真人間になってね」

「おい」

「俺は兄さん達のようにはなれないしヒーローにもなりたくない。それでいいや」

そう言いながらも優真は兄のように強くありたかったし《梟》はヒーローであってほしかった。

「何の話だ？　自己完結かよお前」

「うん」

弟分である少年は願う。

兄がコメットマンのように誰かから“ありがとう”と言われて救われてほしいと。

＋＋＋

「裏でこそこそやってみたけど俺には向いていなかった。俺は兄さんにはなれない。《皇帝竜事件》でわかったのは結局それだけ」

「アンタって」

光輝なら手段はともかくきっと1人で解決できたこと。ユーマは1人じゃ何も解決できなかった。

ティムスやブソウ達には最初から手伝ってもらったし、最後は結局エイリーク達の力も借りてやっと《竜殺し》を成し遂げることができたのだから。

反省するユーマにエイリークは一言。

「実は相当のブラコン？」

「なっ！？」

衝撃が走る。

この世界にもその言葉があったなんて。

「聞いてればアンタの行動のほとんどがお兄さんの真似ごとみたい

じゃない。ガンプレートだってそうでしょ？」
「……師匠でもあるんだ。似てるのはしょうがない」
痛いところを突かれた。
エイリーク（突撃馬鹿）には口で負けたくないユーマ。
「でも俺はブラコンじゃない。だったらエイリークのほうがシスコンじゃないか。姉さま姉さまって」
「いつそんな事言ったのよ！！」
でも長年母親の代わりだった姉姫のことを大事に思っているのは確かであってシスコンを否定できないエイリーク。この話は2人して有耶無耶にした。
「とにかく。アンタは何してもみんなを巻き込むのよ。だったら最初から話をしなさい。きっとそれでうまくいくから」
「そうかな？」
「そうよ。アンタには《竜使い》とは違って頼りになる仲間がいるのよ。竜殺しの《旋風の剣士》とか」
「……」
沈黙。本気か冗談かわからない。
「む。何か言いなさいよ」
「《竜使い》か。でも俺は一歩間違えればあいつと同じだった」
「……どういうこと？」
「初めて皇帝竜と戦った時、俺は《イグナイター》を使ったんだ。魔石の魔力に引きずられて俺は……」

魔力には狂気が宿る。

この狂気を抑える術を得てこそ魔力を扱う《魔法使い》といえるのだがユーマ自身は魔力を持たない少年だ。簡単に狂気に囚われた。ティムスもこれは《精霊使い》だから扱えると勘違いしていた。

「あの日、風葉達が止めてくれなければ俺は無差別に暴力を振るって《竜使い》達を殺していたと思う。それこそ学園の半分を吹き飛ばしてでもね。……きっとラヴニカと戦ったシアさんもあんなドス黒い気持ちになったんだと思う」

風森の魔人事件の事を思い出す。初めての実戦だったエイルシアも魔力にあてられて途中から人が変わったかのように好戦的になったのだ。

「……それが《竜使い》とどんな関係があるのよ」

「皇帝竜の腕輪は特別で高純度の魔石が使われているんだ。常備型の《イグナイター》だったんだよ」

「なっ！？」

驚くエイリーク。専門の知識がなくてもその危険性は理解できた。

「だって《イグナイター》は術式の威力を大幅に増加する代わり精神に支障をきたすから使い捨てなんでしょ？　常備型って」

「おかしいと思ったんだ。俺はティムスが腕輪を改良しなければＭＰ１万前後の幻創獣しか創れなかった。なのにグナント兄弟はＭＰ１０万以上の皇帝竜を創った」

ルックスが最初に創った腕輪では皇帝竜を制御どころか《現創》

することもできなかったのだ。

そして彼等は手っ取り早く魔石の力に頼った。きっとそれが今回の事件の本当のはじまり。

「竜騎士団の幹部たちも少しおかしかっただろ？　《竜使い》は長年魔石付きの腕輪を身に付けて魔力の狂気に侵されていた。中毒者だったんだよ」

「ルックスは知っているの？」

ユーマは首を横に振る。

「回収した皇帝竜の腕輪を調べたティムスが激怒してルックスを殴ろうとしたよ。みんなで抑えて口止めするのが大変だった」

イース達を含めた5人がかりでやっと抑えたのだ。彼の技術士としての誇りがルックスの未熟を許さなかった。

「だって可哀相だろ。兄貴が自分の創ったもののせいで変わってしまったなんて。……ユウイは治療ために学園を離れた。精神的なショックを受けたせいだと偽ってこれだけはルックスも知ってる」

「そんな」

エイリークは兄弟の悲劇に何も答えられない。

「ルックスは幻創獣を創るのが早過ぎたんだ。あと数年技術士の腕を磨けば、それにあいつに頼りになる師匠がいたなら……《皇帝竜事件》はきっと起きなかった」

「それでティムスが飛び級までさせてルックスの面倒を？」

「いや、それは別の話。ルックスの件は学園長からティムスに与え

られた『処罰』なんだよ」

あいつがルックスのことをどう思っているかはわからないけど、と言葉を付け足す。

《皇帝竜事件》におけるティムス・エルドへの処罰は以下の４つ。

1．今後も《Ａナンバー》の１人として学園に貢献すること。

2．事件の原因である幻創獣の管理を引き受け、事件の再発を防ぐことに努めること。

3．後進の技術士達の指導を怠らないこと。《組合》の参加も義務とする。

4．壊した《スタジアム》の解体と新設工事の総監督に任命します。無償で働きなさい。以上

「《エルドカンパニー》やＰＣリングの販売もこのへんが噛んでるんだ。ティムスはエース資格を剥奪されて自分の研究に没頭できればよかったんだとさ」

「アンタの処罰はどうなのよ」

「これ」

１枚の紙をエイリークに見せる。

“壊した《スタジアム》を弁償して下さい。働き口はこちらで用意

します　――学園長――　”

「……」

「怖いよね。なんかあったら手伝ってくれる？」

絶対に関わりたくないと思ったエイリーク。不自然に話題を変えた。

「そ、それよりも幻創獣よ。アタシの猫騎士はアイリィに負けたから別のがいいわ」

「アイリさんはあのときしかブロックマン使ってないし。自分用に別のデザイン選んでいたよ」

「いいから。アンタも開発者の1人なんだから特別なの持ってるんでしょ？」

「……2号？」

ピンクの風葉を喚び出す。

「駄目よ。あの子怒ったでしょ？」

「風葉もポピラも食ってかかってきた」

これは違うと本気で怒られた。ガンプレートを無言で向けられるほど。

「他は？」

「《じぇんとる・ビーン》」

「豆は結構よ。野菜も嫌」

ユーマが喚び出したソラマメはしょんぼりして消える。芸が細かい。

「俺がデザインしたの殆ど採用されなかったんだ。非売品の限定品なんだぞ」

「知らないわよ。もっと他にはないの？」

「1体だけあるにはあるけど……」

一般仕様の幻創獣の色を変えたものがユーマのＰＣリングの中にある。

でもそれを見せることを彼は一瞬躊躇った。

「まあ、いいや。もうこれしかないよ。……おいで、しろ」

喚んだのは《森の賢者》という魔術師向けに創った梟の幻創獣。アイリーンもこのタイプを選んでいる。

「なにこれ？　全身真っ白じゃない。手抜き？」

「まさか。本当に特別なんだぞ」

翼も嘴も、つぶらな瞳さえまっしろでぽわぽわした梟。

梟はユーマの頭に乗って髪を引っ張る。

「痛い、いたいってばしろ！」

「えっ？　思考操作じゃないの？」

演技と思っていたので驚いた。今度は頭の上で勝手に寝る。

「アップデート用のオプションで試験的に性格と行動パターンを組み込んでいるんだ。放置してると勝手に動く」

「へえ。それでいいわ。こっちに移して」

ＰＣリング同士を接続して幻創獣の術式を送る。

「大事にしてくれよ」

「わかってる。よろしくね、しろ」

エイリークのものとなった梟の幻創獣は「ほう？」と鳴いた。

ユーマが創ったしろい梟。

少年が想う2人の姿を重ねたこの幻創獣の『特別』にエイリークが気付く日がくるのかどうか、

今はわからない。

＋＋＋

学園長室。

「学園長。これは？」

「今期の《Ａナンバー》。その選定結果ですよ」

「……」

学園長から渡された資料を見てオルゾフは絶句。

「どうかしましたか？　何か喋らないと今回オルゾフさんはここしか出番がありませんよ」

「何を言ってるんです？　それよりもこの《特例》は前代未聞ですよ。付属の４校と学園都市内の他校にはどう説明するつもりですか」

生徒会で選ばれた《Ａナンバー》の１０名。そこには《精霊使い》の名前はなかったのだが。

「わたしは思うのです。学園には優秀な生徒は多いのですから別に１０人にこだわらくてもいいじゃないのかと」

「学園長！」

「彼の実力は本物です。ＰＣリングの件もあります。特待生でいるだけではもったいなくありませんか？」

「それは、そうなのですが……」

それに関してはオルゾフも同意だった。

彼は教員側としてＰＣリングの販売を許可する際にリングの性能を実際に確認したのだが、あれは魔術魔法の類でないと衝撃を受けたのだ。

ＰＣリングにはゲンソウ術も使用しているが根本は今までにない技術の産物だった。

遺跡の技術というだけでは説明できないほどのアイデアの塊。あれに《精霊使い》の少年が関わっているとすれば彼の存在は学園に

とって有益である。

それこそ《Aナンバー》クラスの高い権限を与えて学園で何かをさせたほどがいいと思うほどの。

「PCリングの開発はエルドが代表ということになってますし《精霊使い》というだけでは特例をつける理由としてはまだ弱いです。昇級試験では負けています。なにより彼はまだ実力を隠している。精霊の力なしで皇帝竜を倒したのですから」

「それも十分な理由になると思うんですけどね」

でもそれでは別に《精霊使い》でなくてもいいという話になってしまう。一貫した実力を他に示すことができない。

「では彼が使った幻創獣。あれも彼の精霊ということにしましょう。他校への報告書をでっちあげてユーマさんはものすごい精霊をもっていることにしましょう」

「は？」

堂々と他校を騙すと学園長はおっしゃった。

「今でも2体の精霊を連れているんです。『3体目』となればそれこそ前代未聞ですよ」

「学園長……」

確かに風森の国の守護精霊（その一部）に《西の大砂漠》で拾われた砂の精霊。それに加えて『もう1体』がいるとなれば……

「いえ。嘘の報告はいけません」

「さあ今から書きますよ。オルゾフさんも手伝ってください」

話を聞いてくれなかった。オルゾフは溜息。

「……ミツルギが辞退したらどうする気ですか」

「大丈夫ですよ」

それには先手を打っていた学園長。こうしてユーマの『働き口』が決まった。

異例のエース。１１番目の《Ａナンバー》。

その正体はスタジアムの弁償代を稼ぐ理由で任命された、タダ働きの《精霊使い》である。

「コメットマン、だったかしら？　他になにかこう強いインパクトのある名前ないかしら？」

「……」

そして再生世界の学園に現れたヒーローは学園長によってその存在を捻じ曲げられていく。

＋＋＋

他校に送られた新エースの報告書。その一部にはこう記載されている。

“幾多の星の矢となりて敵を滅ぼすそれは銀の流星群”

“一撃で巨竜を屠る空飛ぶそれは銀の巨人”

“それは銀の剣。数多の刃を操り定めた敵のみを消し去る《竜殺し》の奥義”

当学園の《精霊使い》が契約した最強の精霊。その名は

“銀の悪魔”

それを聞いたその《精霊使い》が、学園長室に割と本気で襲撃を仕掛けたのは別の話。

＋＋＋

第2章　銀の悪魔　完

＋＋＋

日常編へ続く

第3章　夏季休暇／王たちと少年へ続く

＋＋＋

ジン戦記　1（前書き）

第2章の番外編。

ジン戦記　1

＋＋＋

C・リーズ学園にはジン・オーバという名の少年がいる。

《幻想の弓》を使った遠距離狙撃を得意とする弓使い。東国にある《E・リーズ学園》から《中央校》へやってきた編入生だ。

サラサラの黒髪に優しく儚げな面立ちの美少年。

外見からくる人気はもちろん、春先に行われた洗礼式では新入生の中で唯一《銀の氷姫》に一矢報いたことで実力も評価されている。

彼の能力の名は《射抜く視線》。ジンは視線の先にある狙い定めた物に必ず当てるができる。

彼の二つ名でもある百発百中の特異能力。

そしてジンの事をよく知るダークエルフの少女はその『副作用』が厄介なものであることをよく知っているのだった。

＋＋＋

「はい、ジン様。お弁当です」

昼休み。とある校舎の中庭にて。

ジンに差しだされたかわいらしい包みに男子生徒が目を光らせる。

「いつも悪いよセリカさん。僕の分まで用意するの大変でしょ？」

「そんなことありません。前の日に下ごしらえをしてますから。誰かに食べて貰えるのが嬉しくてつい作りすぎてしまうんです」

セリカ・フォンデュ。

先日他校の生徒に絡まれていたところをジンに助けてもらった、ジンと同じ1年生の少女。

ウェーブのかかった金のロングヘア。慎ましくも華やかな雰囲気を持つこの少女はいいところのお嬢様らしい。

新入生の中でも一番と噂の美少女。さらには珍しい回復系の術式が使えることから救護室のセレスに次ぐ待望の癒し系といわれている。

そんな彼女を独占する少年が1人。

「いただきましょう。この卵焼きなんてどうですか？　はい、あーん」

「ちょっとセリカさん？」

「「「「……」」」」

これには慌てるジン。周囲の視線が気になってしょうがない。

「ぱく。うーん、甘すぎ」

「あっ」

卵焼きを食べたのはジンではない。早業でセリカの箸に食い付いたのは銀髪の魔族の少女。

「……ユンカさん、はしたないですよ」

「うるさい。ジンを食べ物で釣るなんて卑怯よセリカ」

「何のことでしょう？」

抜け駆けするなと睨むユンカを笑顔で受け流すセリカ。案外強かである。

「ユン。よかったら一緒にお昼しよう。セリカさんもいいよね」

「……まあ」

「いいですけど……」

不承不承と言った感じの少女達。ジンはただ2人に仲良くしてほしいなー、なんて思ってるはずだから断れるはずがない。

「東校にいた時はよく一緒にお昼したね。みんな元気にしてるかな？」

「……ジン。あいつらのことなんて思い出さなくていいから」

ユンカ、苦い顔。

「ユンカさん？」
「……セリカは他の子と違ってもう『手遅れ』だし、仕方ないから言っておくけど……ジンの言う『みんな』って全部女の子よ」
「えっ？」

セリカは驚いた。

「あんただけじゃないのよ。今までジンに『射抜かれた』子は。だから気をつけて。ジンに女の子を近づけちゃダメ。見せたらダメなのよ」

変質者に対する扱いだがユンカは本気だった。

ジンの瞳は何故か女の子を引き寄せる。特に《射抜く視線》を使ったあとの彼を見た異性は問答無用でハートを射抜かれてしまうのだ。（ユンカ談）

ジンは普通の少年なのに無自覚無節操な力のせいでユンカはとても苦労している。ジンと仲良くしようにも増えるライバルにいつも邪魔されるし彼女達の邪魔をしなければ彼の貞操（！？）が危ないと中等部時代の彼女は本気で思っていた。

そこでユンカは彼女たちとの関係をリセットするべく極秘で慎重かつ大胆な作戦を立てた。

進学先に《中央校》を選択してジンだけを騙すように誘い、他の子達には中等部を卒業するギリギリまでジンの進路先を内緒にしたのだ。

強化系魔族のくせに知恵を振り絞り、あらゆる手段と策を巡らせることができたのはダークエルフの面目躍如なのかもしれない。

ユンカの人生（誇張表現）を懸けた作戦は無事に成功。

これから先ジンの周囲に気をつけさえすれば彼を独り占めできると中央校での学園生活に期待していたのだが。

高等部にあがってまだ2ヶ月足らず。警戒していたのにすでにジンは1人射抜いてしまっている。（このあたりの判別はユンカの独自の分析と経験による）

セリカを見てユンカは言葉に力を込める。助言はしたくないがこれは予防策なのだ。これ以上悪い虫が増えない為の。

「経験上言うけど、何十人も女の子がジンに集まったらアタシ達のことをジンは勘違いするの。みんな仲良しグループの“お友達”としか見てくれないのよ！　わかったらセリカも協力して……って！」

「この唐揚げはじめて試す味付けなんですけど、お口に合いますか？」

「うん。いいと思うよ」

「あー！！」

変わってない。昔から繰り返されるパターンにユンカはいつも通りに叫び、いつも通りライバル（セリカ）を引っ張る。

「セリカ！」
「何ですか？　お話は分かりましたけど私、退きませんよ」
笑顔を崩さずに彼女は宣戦布告。
「両親に決められた許嫁と結婚するのが嫌で私は無理を言って学園都市に来たのです。運命の人は自分で決めるって。だから私、ジン様に決めたんです」
「……なんでジンに惚れた子はみんなこうも厄介なのよ。それにジンも」
「ユン。早く食べないと訓練場の予約取れなくなるよ。試験前だから2時間は欲しいよね」
「……」
のほほんしていた。いやきっと2人で内緒話して「ユンも仲のいい友達ができてよかったなー」なんて思っているに違いない。
「……はぁ」
「ユンカさん。もちろんライバルが増えていくことを私も黙って見てはいません。でもそれとは別にジン様にアタックするのは構いませんよね？」
「好きにして。どうせジンもそう簡単には靡かないんだから」
諦念。これも毎度のことなので容認する。
「ユン？　もしかしてお弁当忘れたの？　だったらこれ半分あげるよ。1人じゃ食べきれないから」

ジンがバッグから取り出したのは購買部の新作スペシャル、《大海獣ギガグリルサンド》だ。

「うわ。どうしたのそれ？　購買部に速攻で買いに行かないと新作は手に入らないよ」

ただ巨大なパンからはみだした触手のような下足はハズレではないかと思う。

「中庭に向かう途中でユーマが分けてくれたんだ。今日はボロス先生と協力して購買部に群がるハイエナどもを蹴散らしたって自慢してた」

「……なんなのよあいつ」

学内最強の筋肉を誇る格闘技顧問と《精霊使い》のタッグ。きっと購買部の前に屍の山ができたに違いない。

「なんか嬉しいな。友達だからってくれたんだ。同世代の男友達って少なかったから」

「「……」」

あんまり嬉しそうなのでジンに一抹の不安を覚える2人。

「ユンカさん……」

「盲点だったわ。東校にいた時は私達といつも一緒だったから男に免疫がないのかも」

すごいこと考えだしたがジンはノーマルである。

「早くご飯食べよう、ユン。セリカさんも」

「ええ」
「そうね」

ジンに勧められてギガグリルサンドを頬張るユンカ。噛みごたえのある巨大な下足の正体がイカであることを信じたい。

「おなかとあごにくるわよ、これ……」

ユンカは先輩である《旋風の剣士》にあの《精霊使い》の吹き飛ばし方を学ぼうと少し思った。

この物語は番外編

ジンと彼を取り巻く少女達の戦いの記録である

＋＋＋
ジン戦記
＋＋＋

手にした矢をつがえ、弦を引く。

ジンは射撃用の訓練施設で離れた的にめがけて矢を放つ。

珍しく1人だった。昇級試験を控えユンカは戦士系、セリカは魔

術師系とクラスが違うために今は個別で訓練をしている。

ジンは訓練の時だけ実際に武器を手にする。《幻想の弓》を扱うイメージ感覚をなくさない為だ。

「中心には１０発中７発か」

的自体には全部当たっている。調子は悪くない。《射抜く視線》の力なしでもジンの腕前はなかなかのものだ。

「でも試験のステージが遠距離戦向きになるとは限らないんだよな。……近接戦や機動戦は苦手なんだけど」

今回の昇級試験でジンはランクＢを受験する。

普通１年生は実力不足で前期はランクＣ以上の受験を見送るのだが、この点からでもジンの能力が高いことがうかがわれる。

でもそれは新入生の中での話。ランクＣまでは特化能力など個性が評価されるがランクＢの評価基準は一定の汎用性を求められた。ランクＡはもちろん格上を相手に立ち向かえるだけの総合力を試される。

ジンは遠距離特化タイプ。個人戦よりも集団戦での後方支援で真価を発揮するので今回のような試験はどうしても向いていなかった。

弓を得物にする以上近接戦には弱い。魔術のように連射もきかなければジンは《幻想の矢》に属性付与もできない。

彼の強みは隠蔽と狙撃。特定の状況以外ではあまりにもジンは脆かった。

克服する方法はいくらでもある。しかし彼は一番手っ取り早い方法、ブースターを手にすることを何故か躊躇っていた。

「別に焦らなくてもいいか。試験はこれきりじゃない。体術は今からじゃ間に合わないから走りこみを増やして移動射撃の訓練を重視しよう」

腰に提げた金属板に触れながらジンは訓練の方針を決めた。

用意してくれたユーマ達には悪いけど、そう思いながらもジンは武器と呼ぶものを手にしたくなかった。

＋＋＋

数日後。

ユンカとセリカの2人は表面上仲良くしているし試験対策の訓練も順調。

彼女達の時折過剰なスキンシップと周囲の視線はジンを困らせるがそれも彼にとっての日常。中等部時代からの環境が彼に異常を自覚させなかった。

クラスメイト、特に男子生徒達は普通でないことに気付けよ馬鹿

野郎、と思念を飛ばすが届くことはない。ジンと男子生徒の溝は深くなる。

彼によからぬことを企む生徒は男子だろうが女子だろうが事前に阻止された。親衛隊が結成されたことが公になったのは昇級試験後の話。

それはさておき。当時のジンの心配事はひとつ。友達の《精霊使い》がいなくなったことだ。しかもあらぬ噂が広がっている。

その日の放課後。気になったので彼と親しい先輩に事情を聞いてみたが、詳しいことはわからなかった。

「心配をするだけ無駄よ。アンタも今は試験、自分にできることに専念しなさい。……アイツもそう言って自分勝手にやっているはずだから」

彼女はそう言ってジンと一緒に来ていたユンカを連れていった。剣の相手が欲しかったらしい。

「セリカ！　ジンに近づく子は必ず排除するのよ。　あと抜け駆けは……」

「いいから来なさい」

あー。引きずられ、叫ぶユンカを見送るジンとセリカ。

「ユンは何が言いたかったの？」

「気にしないでください。戻りましょう」

ここぞとジンに腕を絡ませるセリカ。だが彼女の至福の時間は長く続かなかった。

「ジンさん？　珍しいですね。ウインディさんを見ませんでしたか？」

帰る途中に出会ったのは《銀の氷姫》。２年生でも有名な先輩だ。

《姫》の二つ名を持ってしかも正真正銘のお姫様。セリカは緊張して咄嗟にジンから離れる。

「さっきまで一緒でしたけど。ユンを連れて練武館の方へ行きましたよ」

顔見知りであるジンは普通に彼女と会話できた。

「そうですか。体力トレーニングについて相談をしたかったのですが……。そうでしたらジンさん、私と模擬戦でもしませんか？　丁度『森の木々に隠れて狙撃する弓使い』対策の魔術を試したかったのですけど」

「……いえ。僕も用事があるので」

やけに具体的すぎた。この先輩、洗礼式でやられたことをまだ根に持っている。

「残念ですね。……ふふ。そうなると試験本番が楽しみです」

「……」

意味ありげな微笑み。

まさかこの人が僕の試験官なのか？　そんな疑問が浮かぶ。

ジンはこの魔術師の先輩にまぐれでも一撃を与えた負い目から苦手意識を持っていた。

見つめあう2人。強弱関係は明らかだった。

「あ、あのっシルバルム先輩！　よかったら私に魔術を教えて下さい」

「えっ」

「セリカさん？」

たじたじのジンに気付いて突然2人に割り込んだセリカ。

「私は扱う属性と系統は先輩と違うけれど《銀の氷姫》の氷晶術を一度見てみたかったんです」

「……貴女の魔術は何でしょう？」

魔術に関しては貪欲な《銀の氷姫》。話に食いついてくれたことに拳を握り、セリカは胸を張って答える。

「光属性を中心に《活性》の術式を扱うことができます」

《活性》の術式は珍しい付与術式だ。植物の成長や身体の機能を活発化させる効果がある。

セリカは医療に携わる名家の出であり、幼少より培ったその知識を活かして《活性》で人の治癒能力を高めることができるのだ。

「医療系魔術の本家であるフォンデュ家……セリカさんでしたか？私のほうからお願いします。あなたの魔術、是非見せて下さい」

「――！？　はい！　こちらこそお願いします。……この人をジン様に近づけてはいけないわ。私が阻止しないと……」

「何か言いましたか？」

先輩に頭を下げられたのには驚いたがセリカには彼女なりの思惑がある。後半の呟きは誰も聞き取れなかった。

この時、ユンカがいれば彼女の勘違いと過ちを正せたかもしれない。

ジンを1人にするという愚行を。

「そういうわけですのでジン様。残念ですけど私はこれで失礼します」

「わかった。頑張ってね」

残念がる態度も見せない相変わらずの彼に不安を覚えたセリカは念を押す。

「くれぐれも誰とも会わずにまっすぐお帰り下さい。当然知らない女の子について行ってはいけま……」

「さあ、行きましょう」

あー。引きずられ、叫ぶセリカを見送るジン。どこかで見た気がする。

幼馴染のお姫様2人。どこか行動が似ていた。

「……射撃訓練場の予約はもう取れないよね？　屋外演習場の森林ステージへ行こうかな」

ジンは今日の訓練を障害物付きのロードワーク、サーキットトレーニングを行うことにした。

この時点ではユンカしか理解できなかったことなのだが、彼女が懸念するような事件にジンが巻き込まれるのはいつも彼が1人になった時からはじまるのだ。

このあとジンは森林ステージで追われているフェアリーの少女、そして《竜使い》の彼女と遭遇することになる。

＋＋＋

ジン戦記　2（前書き）

中編。

ジン、リン、ユンカ、セリカ……名前が似通いすぎ

ジン戦記　2

＋＋＋

屋外演習場、森林ステージ。

演習場といっても学園に隣接する林山に少し手を加えただけの場所。ジンは洗礼式のときにユーマやアイリーンとここで戦っている。

森林ステージは樹木に覆われて障害物に恵まれている。探索や隠蔽の訓練などに使われる他、毒にも薬にもなる草花が多く群生しているため薬学を専攻する生徒が足を運ぶことも多い。

フェアリーと呼ばれる魔族であるリン・エリンもそんな生徒の１人だった。

《薬師》見習いのリンは試験で使う薬草の採取に森林ステージへ立ち寄っただけだった。今は木陰に身を隠して追手をやり過ごしたところである。

「本当にいたのか？」

「間違いない。外見の特徴が一致している」

隠れた茂みの付近で話をしているのは覆面を被った怪しい奴ら。リンが気付いた時にはもう彼らに付きまとわれていた。今も追いか

けっこの途中だ。

顔だけ隠した彼らの正体は《グナント騎士団》。その下っ端である。

「捕まえるぞ。あの精霊から《精霊使い》の居場所を聞きだすんだ」
「手柄を独り占めするなよ」

「……精霊って私のこと？　どういうことなの」

精霊を使役する少年が春先に転入してきたのはリンも知っている。最近行方不明になっていることも。

ただしリンは《精霊使い》との接点はない。なぜ自分が追われているのかわからない。

「そこだ。いたぞ！」
「あわっ」

見つかった。

リンは逃げ回っていてもうヘトヘト。背中の羽は疲労で使い物にならない。

「さあ、いい加減に……うわっ！！」
「なんだ！？」

リンに近づいた途端、覆面の足元にみえない何かが突き刺さった。

「誰だ！」

返事はなかった。代わりに無音で飛ぶ《幻想の矢》が覆面の耳元を掠める。

「ひぃっ」

「何なのよ、もう！」

リンにとっては訳のわからないことの連続。つい叫んでしまう。

丁度その時に風が吹いた。

「……風？　まさかこれが精霊の魔法！？」

偶然の勘違い。

「おい、まずいぞ」

「精霊は契約者なしで魔法が使えるのか？」

「近くに《精霊使い》がいるんじゃ……」

《精霊使い》に関する情報は曖昧。慌てだした覆面達にあわせて不可視の矢が再び飛ぶ。

わからないけど『あれ』は私の敵じゃない。そう思ったリンは賭けに出た。

「いい加減にしてよ。私に近づいてただで済むとは思わないで」

精一杯の虚勢。

リンは疲れた羽を震わせて宙に浮かび、何かを放とうとする仕草を見せる。その間も牽制の矢は尽きることなく彼女を守ってくれた。

「……退くぞ。発見しただけでも十分だ」

「クフトさんに知らせるぞ」

逃げ去る覆面達。彼ら下っ端は元々戦闘系でない一般生徒だから脅しに弱かった。

「大丈夫ですか、風葉……さん？」

それからすぐに木の上から飛び降りてきてリンの前に現れたのは黒髪の少年。

「……人違いだよぉ」

座り込んだリンは差し出された手を見て情けない声をだした。

＋＋＋

「私はリン。フェアリー族だけど精霊なんかじゃないの！」

「うん。でも本当にそっくりなんだ」

リンはくりくりした目でジンを睨むが迫力がない。

ジンが追われていたリンを偶然見かけ、追いかけたのは彼女があまりにも似ていたから。

ポニーテールにした緑の髪と同じ色の瞳。背中にある透明な４枚羽はフェアリーの大きな特徴だ。

《風森》の一部であるあの精霊の姿はなぜか本体に似ずフェアリーに酷似している。

リンという少女は顔立ちもジンの友達が使役している風の精霊にどことなく似ていた。

「ごめん。風葉はこんなに大きな子じゃなかった。……考えたら分かることだったのに」

ジンはリンに謝った。いなくなった友達のことを考えてつい人違い？をしてしまったようだ。

でもリンは謝られたことよりも別の事に反応する。

「大きい？　私が？」

「え？　……うん。そうだね」

ジンの隣を歩く少女はあまりにもちいさい。身長が１５０に届かないと嘆いていたユンカよりもさらに低い。

「大きいなんて初めて言われたの。なんか嬉しいな」

ホバリングして一回転。リンは喜んだが比較対象が１０センチ大の女の子だと知ったらどう思うだろうか。

「私、学園にいるフェアリーの中でも小さい方だから。友達だけじゃなくて後輩にもリンちゃんとかりんりんとか言われてるし」

「……先輩？」

ジンはつい疑問を口に出す。リンの制服の色は臙脂。高等部のものだがまさか年上とは思わなかった。

「そうなの！！　進級してもうすぐふた月だけど先輩って呼ばれたのも初めて。……うん。今日は嫌なこともあったけどいいこともあったあった～」

ふよふよ～、くるくる～

ゆっくり歩くジンに追従しながら鼻歌交じりに飛び回るリン。やっぱり風葉にそっくりだとジンは思った。

友達の精霊は滅多なことで姿を現さないが、彼やミサ先輩がクッキーをとりだしたときはこんな風に小躍りするのだ。

先輩と呼んだだけで喜ぶ彼女にジンはもう一度心の中で謝る。

（ごめんなさい。やっぱり年上に見えないです。……高等部どころか中等部の子にも）

それでも気を遣って何も言わないのが優しさである。

「ねぇ、もう１回先輩って呼んで～」

「なんですか？　リン先輩」

ジンはただ優しく微笑み、子供のようなリンをあぶないからと寮へ送っていくことにした。

何故彼女、いや友達の精霊が狙われていたのかを考えるのを後回しにして。

＋＋＋

「ジン？　……あー！！」

女子寮への帰り道でジンを見かけたユンカ。

セリカもいないので思いっきり抱きつこうと思ったが、ジンの隣にいたフェアリーの少女を見てストップ。

思いっきり叫ぶ。セリカに出会ってからの彼女はいつもこうだ。

「ユンは最近昔みたいに叫ぶことが多くなったよね？　それになんだかボロボロだ」

「……姐さんに何度も吹き飛ばされたの。パワーもスピードもアタシの方が上なのに……」

やられた時のことを思い出してむすっとするユンカ。

ユンカと《旋風の剣士》の違いは技量にある。

一撃の速さは強化系魔族のユンカが上。ただ次に繋ぐ彼女の剣の速さが尋常ではないのだ。

ユンカは攻撃をステップで躱されたり受け流されたりしたと同時に反撃を受けて手数で押し切られる。大技を繰り出そうとすれば牽制の斬撃が飛んできてすぐに《旋風剣》で吹き飛ばされた。

訓練の相手だけでなく、同じ剣士の後輩だからとユンカの剣の指導までやった《旋風の剣士》。

実のところユンカの力任せな猪突猛進ぶりに自分の姿を重ねてちょっぴり反省した彼女だったりする。

「そんな事よりジン！　この子は誰なの？」
「追われていたから寮まで送ってきたんだ。先輩だよ」
「追われていたってやっぱり……先輩？」

リンを見るユンカ。疑惑の視線。

「そうよ。私は2年生！」

胸を張って自慢することではない。それにユンカが問題にしているのはそこではなかった。

「……大丈夫。この子はまだ『射抜かれて』いない。……セリカめ。あれだけ念を押したのにジンを1人にして……」
「ユン？」

ユンカは長年の経験をもってリンのことを見抜くとやっと一安心。

でも油断はできないからとここにいないライバルに向かって恨み事をぶつぶつ呟く。

そのライバル、セリカは魔術に目がない《銀の氷姫》にせがまれて散々《活性》を使った上に魔術戦闘の訓練まで付き合わされたので先に寮へ戻りぐったりしていた。

「ユン。リン先輩のこと寮までお願いしてもいい？　……尾行がまだいるんだ」

「えっ？」

「先輩は風葉にそっくりだから追われてたみたいなんだ。狙いは多分ユーマだと思う。

小声で話すジン。ユンカにはしー、と人差し指を見せる。

「だから僕は今から確認してくるよ」

「ならアタシも」

首を振るジン。リンもそうだがユンカのことだって彼は心配している。

「今日はもう疲れているでしょ。魔力どれだけ残ってる？」

「それはっ」

ユンカは魔力がなければ筋力が普通の少女並に激減する。今日は全力を出したあとなので最低2時間は休まないと戦闘どころか愛用の双剣を持つことも無理だった。

「はやく帰ってセリカさんに《活性》をかけてもらうといいよ。魔力の回復は無理でも明日筋肉痛にならないから」

相変わらずの優しい笑み。単独行動の方がジンは強いことをユンカは知っているけどそれでも心配だ。

「ジン」

「大丈夫。危なかったらちゃんと逃げるよ。僕が隠れるの上手いのユンは知っているでしょ？　とっておきもあるから。ほら」

腰の両サイドに提げた金属板をユンカに見せる。

それからジンは内緒話をやめ、放置していたリンに向かって別れの挨拶を告げた。

「それじゃあリン先輩、僕はここで。寮までユンをお願いしてもいいですか？」

「うん！　先輩に任せなさい」

「……なによ、それ」

頼りにされた方が嬉しいだろうと思って言ったのだが思いのほか張り切るリンにジンは苦笑。ユンカも呆れていた。

やっぱり年上に見えませんよ。そう思いながらジンは彼女達に背を向け、尾行のいる方に向かって走り出した。

「ジン……」

「彼が心配？　追いかけてもいいよ」

ユンカは驚いた。

「なんで？」

「フェアリーはエルフと一緒で目も耳もいいんだよ。それに男子寮とは逆方向に走っていったんだし」

ユンカから見ても２つ３つは年下だろうと思うこの先輩はわかった上で「私は大丈夫」とユンカの背中を押す。

「でもアタシは」

「魔力の消耗は私がどうにかしてあげる。彼を……私の後輩を助けてあげて」

リンはユンカに向けて優しく微笑んだ。

この時だけでも私のことお姉さんに見えてほしいな～、なんて思いながら。

「君を助けてあげる。私は『フェアリー』で君たちの先輩なんだよ」

＋＋＋

再び屋外演習場、森林ステージ。

日が暮れて街灯に光が灯る頃。ジンは夕闇に紛れるように姿を隠

し、集まった覆面達を観察していた。

あのあとジンたちを尾行をしていた生徒はジンに気付かれたことに気付いてすぐに撤退。ジンはそれを逆尾行することにした。

相手は素人だ。尾行されていることに気付かずジンを仲間の所まで連れて行った。

「あいつらが……」

しばらく様子見して覆面達の話を聞いていたジン。

愚痴をこぼすように不満を口にする彼らはいろいろなことを喋っていた。

《竜使い》とその騎士団……褒美の幻創獣……生徒会の派閥争い……

そして《竜使い》と戦ったらしい《精霊使い》に竜に襲われた錬金術師の兄妹。

おぼろげながら友達がいなくなった理由を察した。

リンが追われていた理由も。

――いいか、お前らが竜を手にするには手柄が必要だ

――団長が警戒しているあの《精霊使い》。あいつを捕まえれば

一発で幹部になれるぞ

――『精霊』は見つけたんだろ。あれやあいつの仲間を捕まえて居場所を聞き出せ。

――聞き出せたらあとは好きにしろ。いなくなった《精霊使い》が悪いんだからな

「……」

ジンは怒りにまかせて『弓を持ち』、６つある『的』の中で覆面を被っていないリーダー格の男を狙い……

「……おい、誰かつけられていたな。姿を見せろ！」

「――っ！！」

気付かれた。

《射抜く視線》の弱点はその視線が強すぎることだ。油断すれば実力者にすぐ位置を特定されてしまう。

狙撃手としての致命的な弱点。

構わず『矢を放った』。同時に《火球》が飛んでくる。

爆発。

ジンは隠れていた茂みから飛び出すと同時に腰の金属板を手にした。近づきすぎて６人を相手するには弓は相性がよくないのだ。

「黒髪にそのブースター……いや、《精霊使い》じゃねぇな。誰だお前」

ジンは答えない。見れば敵は6人ではなかった。

いつのまにか彼らは『魔獣』を従えている。どうやらジンの矢は《あれ》が防いだようだ。

上半身が鱗に覆われた人型。頭から伸びた綱のような太い髪は蛇であって怪物の下半身も爬虫類のそれだった。

ナーガと呼ばれる幻創獣。どこかの国の宗教では竜神とみなされていたはずだ。

「どうして」

ジンはリーダー格の男に聞き返した。

「あん？」

「どうしてユーマ達を狙うのですか？」

「奴を知っているのか？　……ちっ、だから生徒会や《Aナンバー》よりもルールに縛られていない《無印》ほど厄介なものはねぇ」

リーダー格の男、クフトは苛立ってジンを睨みつけた。

「……どうして簡単に人を傷つけようとするのですか？」

「いいだろ別に。俺様たち戦闘系は結局のところ殺しの訓練をやってるんだよ。殺せば実戦、殺さなきゃただの訓練だ。なら楽しもうぜ。学園生活」

「あなたはっ」

卑下した笑い声。ジンは握りしめたブースターに力を込める。

でも撃てなかった。彼と目を合わせてしまったから。

（今撃ったら僕は――）

「丁度いい。奴の事喋ってもらうぜ。痛めつけたあとでなぁ！」

幻創獣のナーガは地を這うようにジンへ襲いかかった。近接戦に持ち込まれたらジンに勝ち目はない。

「やぁあああああっ！」

力任せに叩きつける双剣。ユンカはナーガを殴り飛ばした。

「ユン！？」

「ジンは、やらせない！！」

抜群のタイミングで飛び込んだユンカ。

実は尾行を追いかけていったジンをさらに尾行していたのだ。

この少女、ジンを追跡する能力だけは特化していて彼がデートに誘われる度に尾行を繰り返し偶然を装っていつも邪魔をしている。

ターゲット（ジン）には絶対に気付かせず、ここぞという時に彼を助ける（ポイントを稼ぐ）。これは恋敵と戦う彼女の特異能力（

ストーカー行為）のなせる技であった。

「また無印か。邪魔するな、くろちびぃ！」
「なんだとぉ」

簡単に挑発に乗ってしまうユンカ。だから倒れたナーガの動きに気付かない。

「ユン！」
「えっ？　きゃあっ！」

髪のような蛇がユンカに絡みつき動きを封じる。

「まず1人だ。どうする？　ガキ」
「……あなたはユンの力を見くびっている」

「ぐっ、ああっ」

身体を締めつけられるユンカ。抵抗して体内の魔力を巡らせて強化を図る。

「あああああっ！！」
「なんだ！？　このちび」

ユンカはフルパワーでナーガの髪を引きちぎった。ジンはここぞとばかりにブースターから《幻想の矢》を連射。

目、口、関節。矢が突き刺さりそうな部位を『見て』ジンはナーガを射抜く。

耐久値を上回るダメージに幻創獣は消失した。

「大丈夫？」

「うん。……せっかくリンに魔力を分けて貰ったけどもうからっぽ」

「今の内に逃げよう」

「糞が。お前ら、追えよ！」

「で、でも……」

幻創獣を倒した2人を見て怯む覆面達。ジンはユンカを手を引いてこの場を離れようとしたのだが。

「何をしてるのですか？　クフト」

「何？　上から……！！」

空から女の声。見上げて誰もが《それ》に驚いた。

月の光に照らされて浮かび上がる巨大な黒い影。

禍々しく光る黄金の角と爪。

黒い翼の、竜。

「ベスカ！　その《皇帝竜》はどうした？」

「複製の幻創獣です。飛行の操作訓練の途中でしたが……」

クフト、それにジンを皇帝竜から見下ろすベスカ。

「……ワタクシが彼の相手をしましょう。貴方達は逃げなさい、クフト」

「何言ってやがる」

こっちはやられっぱなしなんだよ、と喚く。

「自警部や《彼女》が動いています。それとも『ワタクシのカイゼル』で連れて帰りましょうか？」

「ちっ。俺様の分はあるんだろうな」

「ええ」

頷いたベスカにクフトは気をよくし、楽しそうに撤退の指示を出した。

「よーし。まってろよ俺様のカイゼルちゃん。お前ら、行くぞ」

「……」

残されたのはジンとユンカ。それにベスカと呼ばれた女と皇帝竜。

「……行きなさい。見逃してあげる」

「――！！　どうして」

魔力切れのユンカを庇い、ブースターを構えていたジンはベスカの言葉に驚いた。

「本当にワタクシ達は弱い者の集まりなのよ。……こんなモノでしか学園の皆を見返すことができない、ほんとうの落ちこぼれ」

自虐的な言葉。皇帝竜を見上げて話す彼女にジンは何も言えなかった。

「こんなことしかワタクシ達はできない。力があれば何でもできると思ってたけど」

ベスカは背を向けて皇帝竜に飛び乗る。

「昇級試験が終わるまでおとなしくしてなさい……りんりんを助けてくれてありがとう」

「あ……」

――友達だけじゃなくて後輩にもリンちゃんとかりんりんとか言われてるし

何かを言う前に竜は去ってしまった。

「……ジン？」

ジンは動けなかった。頭の中にいろんな言葉が浮かんではごちゃまぜになっていく。

――力があれば何でもできると思ってたけど

違う。

――結局のところ殺しの訓練をやってるんだよ

違う。

――お前の力の正体は

違う！！

――視線を合わせただけで人を殺せる邪眼だ

「僕は……」

――こんなこと（殺し）しかワタクシ達は（僕は）できなかった

ジンは決して殺しの技を学ぶために学園に来たのではない。

「僕は……」

ただ自分と向き合い、戦う覚悟を学びたかったのだ。

ジン戦記　3（前書き）

中編その2。

サブキャラとしてポピラは何故か扱いやすいです。リュガの使い勝手はイマイチ

ジン戦記　3

＋＋＋

これは幻

実際には起きなかった彼の幻想

＋＋＋

「……」

ジンは感情を殺して『弓を持ち』、６つある『的』の中で覆面を被っていないリーダー格の男を狙い……

「……おい、誰かつけられていたな。姿を見せろ！」

「――っ！」

ジンの次の行動は早かった。街灯の光を睨みつけ、《幻想の矢》ですべて射抜く。

街灯のランプが割れる音が次々と鳴り響き、暗闇が覆面達を襲った。

“夜”の怖さをジンはよく知っている。だから彼はまずそれから

味方にすることにした。

それから覆面、竜騎士団の下っ端達に不可視、無音の矢を容赦なく撃ち放つ。

まずは脚。逃がさない。

次に腕。武器を持たせない。

顔は見ないようにした。『見たら』射抜いてしまうから。

狙撃手として夜目も鍛えているジンは暗闇の中でも射抜くものを見ることができる。

《射抜く視線》

視線の先にあるものに必ず物を当てる特異能力。

投げた石でもとばした紙飛行機でも物理的に届くのなら当たる、そんな力。

だから《幻想の弓》の有効射程はジンの視力そのまま。小さく見えても見えるならジンはその力で矢を当てることができた。

《幻想の矢》は追加効果を付与できない無属性の術式。威力も普

通の矢と変わらない弱い術式だがジンには関係ない。

どんなに防御を固めても、そうたとえ《黒鎧》を身に纏った戦士でも視線を合わせることができたなら……

その目を射抜くことが彼にはできた。

その手はただ『弓を引き』、その目はただ射抜くモノしか見ない。

ジンの黒く暗い瞳。

この目をダークエルフの少女は知っているのだろうか？

狙撃による暗殺。それがジンの本領だった。

「痛い」
「イテェよ」
「なんで……」

「知らないからですよ」

覆面を被った竜騎士団の四肢をすべて射抜き、地に這いつくばる彼らをジンは見下ろす。

「傷つけられた人の痛みも、傷つける人の痛みも……」

ジンのその目、その瞳は3年前と変わらない。

初めて彼が戦場に立ったその時と。

「あなた達は知っているのですか？」

――その手で人を殺す痛みを

「だから僕は……」

本当は殺せる武器なんて持ちたくない。

だから

手にした弓は幻想だった。

＋＋＋

射撃訓練場。

「……」

ジンは貸し切り状態にしたここで両手にブースターを持ち、ひた

すらに撃ち続けた。

「……」

撃つ。

「……」

撃つ。

「……あの」

「何でしょうか？」

ジンの訓練をじっと見つめるみつあみの少女。

「あなたほどの人が私1人の為に気が散るなんてことはないでしょうに」

「いえ、そういうわけではなくて……」

その通りだったりする。

ポピラのしていることはまさに観察。ジンのブースターを調整する為なのだがポピラの視線は自分の何をどう見ているのかジンにはわからずむず痒かった。

「馬鹿ですね。……あなたのガンプレート、使い勝手はどうですか？」

「悪くないよ。射程は短いけど連射がきくし近距離での取り回しがすごく楽だ」

ジンが手にしている1組のブースター。名前を《ボウ・ガンプレート》という。

エルド兄妹が開発した《ガンプレート・レプリカ2》の試作モデルでジン専用。

《幻想の矢》に変化を与えて強化するブースターだった。

対になっている「へ」の字型の金属板に付与された補助術式は《ハンドガン》。ジンやエルド兄妹の共通の友人である《精霊使い》のイメージを元に創られたオリジナルの術式だ。

ボウ・ガンプレートは片手で《幻想の矢》を放つことができ、6連射が可能となる。

射程を犠牲にしたが2丁持ちの連射で手数と火力を増加。これでジンは近距離戦にも対応できるようになった。

カートリッジを廃した為に術式や属性を換装できないが、『4種類あるガンプレート』を接続して『機能』を組み合わせることで様々な《銃》を再現できる。

「《ハンドガン》は分かりました。他の機能はどうですか？」

「《アロー》、《アサルト》、《バースト》は大丈夫。《ショットガン》は僕の能力と相性が悪いね。《ブレード》もちょっと」

「なるほど。《ダガー》はどうしました？」

ジンは金属板に収納してある刃を伸ばす。

「ユンに訓練を手伝ってもらってるよ。使い方は双剣に似ているから」

ジンの答えに満足したポピラ。ガンプレートを一通り使ってもらったのでデータが十分にとれた。

「調整はしなくてもよさそうです。……それにしてもいきなりでしたね。あなたが私の所に来て『ちょっとつきあってください』って。ユンカさんすごい顔でしたよ」

あまりにもベタな展開は経験済みだったらしいので誤解はしていなかったみたいだが、

――アタシも1度は言われてみたーい!!

とユンカは絶叫して走り去っていった。憧れらしい。

「うん。たまにおかしなことをするけどユンはいい子だよ。ポピラさんも仲良くしてあげて」

「……馬鹿ですね」

兄というよりもユンカの保護者のようだった。

「ジン、おわった?」

「お昼ご一緒しませんか?」

ユンカとセリカだ。

気がつけば正午。かれこれ3時間も経っていた。

「オーバさん。お迎えが来ましたよ」

「えーと、ポピラさん？」

「ここはもういいですよ。私が片づけておきます」

だから私をお昼（修羅場）に誘わないでください、とはポピラの心の声。

「今日はありがとう。訓練場の貸し切りまでしてもらって」

持つべきものは友達であり、双子の兄（エースの権限）である。

「いいえ。私もあとで使う気でいましたから」

「えっ？」

「じーん」

「呼んでますよ」

「……うん。ティムス君にもお礼を言っておいて。それじゃ」

ジンが立ち去り、ポピラは1人になった。

「では始めましょう」

「がんばってくださいー」

ポケットから這い出てきたのはフェアリーそっくりな風の精霊。

今は彼女の護衛だ。

その応援にポピラは滅多に見せない微笑みを浮かべ、手にしたガンプレートを的に向けた。

「問題はカートリッジの換装ですね。……いきます。《ストーム・ブラスト》」

＋＋＋

昇級試験が始まり自分の番まであと3日、というところでジンは訓練の方針を一気に変えた。使うことを躊躇っていたガンプレートを手にしたのだ。

基本は《ハンドガン》で攻撃と牽制、《ダガー》で防御という簡単なものだが近接・近距離戦のスタイルを習得しようとしていた。

訓練の内容としては今まで以上の瞬発力と運動量が要求されたのでまず走り込みの量を増やした。

また《射抜く視線》を使うための動体視力と瞬時の判断力も必要となり、動く的を使ったショートレンジの射撃訓練も始めた。

《ダガー》を使った近接戦の訓練はユンカに相手してもらったが彼女相手に1分も持たなかった。

これには男としてジンはさすがにへこむ。

「……僕は弱いね」
「ジン様は弱くありません。ユンカさんが馬鹿力なだけです」
「セリカっ！」

実際にジンはユンカの剣を両手で受けて吹っ飛んだこともある。
受け流すといった技術はまだまだだった。

その度に自分の出番だとライバルを押しやって手当てをするセリカ。

ユンカはおもしろくない。

「ジン様の試験まであと3日。大丈夫ですか？」
「試験には間に合わなくていいんだ。それとは別に僕は強くなりたい。それだけだから」
「……」

変わらなければいけない。

ジンは竜騎士団の2人に出会い、強くそう思った。

「だからブースターを手にしたの？　今まで何度も勧めたけど《幻想の弓矢》しか使わなかったのに」

昔から知るジンの心境の変化にユンカは少し驚いていた。

「これから先は狙撃スタイルだけじゃ通用しないと思ってね。いつまでも前衛のユンに守ってもらうわけにもいかないし」

きっかけはある。でもうまく言えないので誤魔化すジン。

「ほら。僕もユンを守れるようにならないと」
「ジン！　ねぇセリカ、今、今の聞いた!?」
大はしゃぎ。セリカ、おもしろくない。
「ジン様は私の事も守ってくれますよね？」
「もちろんだよ」
即答。
「ユンとセリカさん、ユーマやティムス君にポピラさん。先輩たちも。僕だって友達くらいは守れる男になりたいよ」
「「……」」
うん、わかってたけどね。とは2人の心の声。
「僕の『力』を誰かを助けることに使えるようになりたいな」
それがジンの望み。
そのためにも《射抜く視線》を使いこなすしかないと決心したジン。
――こんなことしかワタクシ達はできなかった
（そんなことないですよ）

ジンはあのフェアリーの先輩の友達である彼女にそう伝えたかった。だから強くなりたかった。

人の目を射抜くことしかできない自分が変われることでそれを証明したかった。

「……ユーマはちゃんとご飯食べてるかな？」

「「……」」

手作りのお弁当を食べながら、ふと姿を現さない友達のことを思い出す。

事件に巻き込まれたことは分かった。友達なんだから彼の力にもなってあげたいなー、なんて純粋に思っていればそれを邪推に思う少女が２人。

それとは別にもうひとつ。彼女達には気になることが。

「ジン様？　そのお弁当、ジン様が作ったものですか？」

セリカの記憶だとジンはいつも購買部のパンで昼食を済ませていたはずだ。

「ちがうよ。ポピラさんがくれたんだ。余り物で量が多いから食べきれないって」

「「――！！」」

ノーマーク。

あのみつあみ油断ならねぇ！　とは2人の心の叫び。

「おいしいよ。セリカさんも食べる？　ユンも」

「「……！！」」

口にすれば文句なくおいしかった。

魚の付け焼きに煮物を中心とした和食。彩りに欠けるが汁気を切りご飯に染み込まないように器にも工夫している。

ソースのかかったハンバーグと思ったものは魚のすり身だ。肉じゃがとは違う味付けで煮込まれていた。

「ちょっと違うけど東国っぽい味付けだね。懐かしいな」

美味しいものを食べれば自然と頬がほころぶ。

「「……」」

その笑顔に敗北した。

料理ができないユンカは元よりセリカも。

「こ、これが、あの天才兄妹の実力だというの？」

「……肉じゃがを美味しく作れる女性は殿方の憧れだと聞いたことがありますけど、まさかこんなに威力が……」

伏兵の思わぬ攻撃力に2人は戦慄。

でも勘違いだった。

実はこの弁当、ポピラではなくジンの友達であるあの《精霊使い》が彼女に作ったものだ。

現在中等部に潜伏中のかの少年、料理の腕前は姉直伝。大喰らいの兄もいるため相当な経験値を積んでいる。

その日、たまたま時間のあった彼はとある研究室に備え付けられた仮設キッチンに立ってみた。気まぐれで仲間たちの分にと作った弁当がこれ。

一応自炊して弁当も作るポピラは味見をした段階で彼女たちと同様妙な敗北感にへこんだ。

そして食べる気が失せたところ、たまたまいたジンに弁当を押し付けただけだったりする。

そんなこと知る由もなくポピラを敵視するようになるユンカとセリカ。

後にポピラは2人を「馬鹿ですね」と容赦なく一蹴。

手作り弁当の真実を知り、彼女達は2重のダメージを受けることになるのだがそれは別の話。

「すごいよねポピラさん。ほら、デザートもあるよ」
「「……」」

ジンにとってはいつもと変わらない昼休みだった。

＋＋＋

ジンの試験当日。

ガンプレートと近距離戦の訓練を続けてきたが所詮まだ3日。付け焼刃の感は否めなかった。

「さて、どうしよう？」

ここにきてジンは悩んでいた。作戦が決まらない。

元々使う気がなかったので試験で使うブースターの登録をしていなかったのだ。

使えば違反行為となるのでガンプレートなしで試験に挑まなければならなかった。

「お。今からか？」
「……先輩」

頭に青いバンダナと赤いバンダナを巻いた2年の先輩だ。

《バンダナ兄弟》と揶揄する人もいる。

「なるほどな。第3戦闘室が人で一杯だったのはお前の番だからか」

「……けっ」

赤バンダナ、観客の多くが女生徒だったので面白くない。

「今日は《それ》、使うのか？」

ガンプレートを指差す青バンダナの先輩。ジンは首を横に振る。

「実はブースターの登録を忘れていたんです。訓練は始めたばかりだけど実戦で試してみたかったですね」

実は今日どう戦おうか迷ってます、とは言えなかったジン。

「ふーん。なら時間あるか？　ウォーミングアップ、付き合ってやる」

「え？」

突然の提案。

先輩が一肌脱いでやる、と言えば聞こえがいいが親友と同じブースターに興味があっただけの青バンダナだったりする。

＋＋＋

練武館から外に出た3人。

ジンは裏の空きスペースで青バンダナの先輩と5メートルほど距離を空けて向き合う。

「やれ、アギ。叩き潰せ」

「しねーよ。……いいぜ。撃ちな」

丸腰で立つ先輩。でも油断できない。

「いきます」

クイックドロウ。

右のガンプレートで肩を狙い撃つが身体をひねるだけで躱された。

「っ！」

左を抜き連射。

腕、腿、もう一度肩、と狙い撃つがすべて何かに『弾かれた』。

「いくぜっ」

左右6発ずつを撃ち切った所で青バンダナの先輩は前に出た。迎撃するもすべて見えない何かに弾かれる。

（この人の力は！）

近づかれてやっとジンは自分と同じ無属性の武装術式を使われていることに気付いた。

ジンはガンプレートの《ダガー》を伸ばして打ち込む。バックステップで躱されたところに《ハンドガン》で追撃。

「今のパターンはいいぜ」

左腕で払う動作。それで容易く弾かれた。

それからも近距離、ジンを中心に半径2メートル前後の範囲で攻防を繰り返すが、一方的なジンの攻撃はまったく通用しない。

フェイントとスウェーイングに翻弄されさすがに熱くなるジン。

（これだけの実力があって僕と同じランクCだなんて。だとしたらBやAの先輩の実力は一体……）

まだ1年とはいえ自分は思った以上に弱い。強くなりたいと誓ったばかりのジンは否定したくてムキになった。

「このぉっ！」

「――！！」

つい《射抜く視線》で先輩の目を『見た』。

ガンプレートが矢を放つ。

「あ……」

「アギ！」

「っ！　……これで終わりだな」

茫然としたジンの隙を突いて殴る――とみせて彼の肩を叩く先輩。
矢は目の前に翳した《盾》で弾いたようだ。

それで手合わせは終わった。

＋＋＋

「今のが《射抜く視線》か。ユーマが狙われると隠れたくなるって言ってたのは本当だな。目があって正直ビビった」
「ああ。最後の一撃はいい気迫だった。殺気でてたぜ」
「……すいません」
「なに謝ってんだお前？」

青白い顔をしてジンは謝った。

（まただ。下手をしたら僕はまた……）

「すいません」
「「……」」

震えていた。

後輩の様子がおかしいことは分かるが理由が分からない先輩２人。

「……殺す気だったか？」
「――！！　……はい」

直接彼の目を見た青バンダナの先輩は直感的にそう思った。

ジンはそれを肯定し、また頭を下げる。

「どういうことだ、おい！」
「落ち着けよリュガ。……無意識だな。お前の力、危険なのか？」
「……」

答えられなかった。

《射抜く視線》が危険なのか？

それともジンという少年が危険なのか？

わかりたくない。だからジンは頭を下げたまま答えなかった。

「アギ」
「……お前は戦い方も素直だな。弾道がまっすぐで防ぐのも躱すのも楽勝だ」
「……え？」

顔を上げたジンの前にはあきれ顔の青バンダナ。

「あの距離で足を止めて撃つのも駄目だな。移動しながらの牽制、そして障害物に隠れて狙い撃ちなんてのもできたはずだ。戦士より間合いが長いんだ。フットワークと一定の距離を保つことを忘れてるぜ」

「先輩？」

困惑するジン。続いて赤バンダナの先輩もジンの戦闘を批評してきた。

「アギの相手くらいで緊張するな。近接戦も下手糞だったな。なんだあの打ち込み？　ユーマ並みだ」

「いや、ユーマは近づくとすぐ逃げるぞ。《高速移動》や砂で障害物作って」

「攻撃も術式の軌道を変えてくるな。知ってるかアギ？　あの野郎《風刃》曲げて飛ばせるぜ」

「まじかよ。どんだけ器用なんだあいつ」

「あの……？」

放置されたジン。

男友達同士の会話っていいなー、なんてちょっと羨ましがったりする。

「ああ、悪い。でもまぁそういうわけだ。ジン、お前はまだまだって話だろ？」

「鍛えればいいだけの話さ。力を制御できないならできるようになればいい」

当然だろ、と簡単に物を言う《バンダナ兄弟》。

単純明快。だから説得力があった。

「手伝ってやるぜ。何せ俺達は先輩だ」

「お前も見ただろ、アギの《盾》。いくら撃っても死にはしねぇ。訓練にはいい的だぜこいつ」
「それ言うな！　今だって俺は姫さんのカカシなんだぜ」
「……ありがとうございます」
ジンは感激してまた頭を下げた。
今までこんなに頼りになる男の先輩をジンは見たことがない。
（……ユーマは駄目だったからな。奴よりも素直な弟分が欲しかったし）
（ジンの周りには女の子が集まる。仲良くして損はしない！）
残念ながらジンの買い被りだった。
「何でも相談に乗るぜ」
「試験のアドバイスなんてどうだ？」
ジンは是非お願いします、と先輩達の助言を受けた。
そして試験本番。
＋＋＋

ジン戦記　４（前書き）

後編。でも終わらない。次回が完結編です

＋＋＋

第2練武館、第3戦闘室。

その観戦席はほぼ満席。ほとんどがジン目当てだった。

応援に来たセリカは窮屈な思いをして彼の出番を待つ。

「ジン様は大丈夫でしょうか？」

「……男でありますように男でありますように……」

一緒にいるユンカはただ一心に祈っていた。

「ユンカさん？　なにを」

「……1体1の対戦形式……向いあう2人……邪魔する者がいない2人だけの世界……」

「――！！」

まさかとは思う。しかし彼女はセリカ以上にジン・オーバという少年を知っているのだ。

ユンカは彼女なりに《射抜く視線》の分析し、一定の法則を理解していた。

「男だったらまず『射抜けない』。女でも彼氏持ちと既婚者は大丈夫。恋にまったく興味がない子も。危ないのは……」
「……ごくっ」
「潜在的に恋に憧れる女の子。思い人がいない子ほど『射抜かれやすい』のよ」

思春期に入ったばかりの中等部時代はだからすごいことになったとユンカは語る。

「ジン様……」

緊張してきた。彼の試験とは別のところで。

そしてセリカも神に祈りだした。

（どうかジン様に男性を……）

意味は少し違うようにとれるけど。

＋＋＋

2人の祈りが神に届くことはない。この世界、神は殺されたことになっている。

ジンの試験官はランクBの生徒で幅広の片手剣に盾を構えた典型的な戦士タイプ。

もちろん女性だった。

「まいったね。君の人気は知っているんだ。とっちめたら他の子にひんしゅくを買っちまうよ」

日焼けした肌にショートカット。さばさばした性格の彼女は世界が違えばスポーツ少女のようだ。

「よろしくお願いします」

《銀の氷姫》ではなかった。それだけでジンは安堵して目の前の女戦士に嬉しそうに微笑む。

「うっ。なんかやりにくね」

ジンは先輩に対して一礼すると表情を引き締め、無言で『弓を構えた』。

「棒立ち……正気なのかい？」

「……」

ジンは答えずただ試験官の彼女を見る。

――いいかジン、白兵戦は喧嘩と同じ一発勝負だ。だから

（最初の睨み合いで勝負が決まる。目を逸らした方が……）

負ける。と言ったのは赤バンダナの先輩。

正面から戦うことをジンは苦手としていたが初めての男の先輩がくれたアドバイス。彼の助言を信じることにした。

当然だがリュガはジンの力の恐ろしさ知らなかった。

その戦い方が特定の相手に対してどれだけ有効なのかを。

試験開始から5分。ジンは微動だにせず相手から目を離さない。

戦士の彼女は牽制するように構えを変えながらぐるぐると動き回るが、ジンの迫力の前に踏み込めずにいた。

「……」

「……」

武器を構えたまま見つめあう2人。

「……」

「……ぐっ」

鋭いまなざしに上気する頬。

「……」

「……ううっ」

時が止まったかのような静けさに破裂しそうに高なる心臓。

「うわぁぁぁぁっ」

彼女は我慢しきれず剣を振り上げ飛びかかった。

足が震えてきてあのまま見つめられたらどうにかなってしまう。

一気に間合いを詰められるジン。でも動かない。

ただ女戦士の目を見つめる。彼女もまたその視線から逃げられず、意識しても逸らせずにいた。

激昂したように赤い顔のまま盾を投げ捨て、繰り出されるのは両手持ちの上段。

勝負は一瞬。一撃で決まる。

ジンは『弓を構えたまま』先輩の言いつけどおりに目をそらさず、真剣なまなざしで彼女の目を『見て』……

「はぅ」

射抜いた。

「「あー！！」」

膝から崩れ落ち、荒い息をつく女戦士。

「……大丈夫ですか？」

突然倒れたので心配したジンは試験中に構わず彼女に近づく。

「さ、触るな！」

立ち上がるのに手を貸そうとしたジンの腕を打ち払い、あとずさる。

「あの……ベルティナさん？」

「――！！　ど、どどど、どうして、名前！？」

審判から互いの紹介があったことを忘れるほど動揺していた。

「嘘だ。このあたしがこんな気持ち……」

「体調を崩したまま試験官の役を引き受けてくれたのですか？　すいません。気付きませんでした」

「違う！」

実はジンの試験官役の選抜は希望者が多く（彼を妬む男子生徒も多い）、抽選になるほどだった。

試験官全員参加の抽選会。そして脅威の引きを見せた女戦士。

美少年に興味のなかった彼女はこの偶然を余り喜んではいなかったのだが。

女戦士ことベルティナは赤い顔でジンを睨みつける。うるんだ瞳はちょっと涙目。

「先生。僕は棄権します。だから今からベルティナさんを救護室へ」

「やめろ、違うから。いやだからあたしのことそんな心配した目で見るな」

審判の教師に躊躇いなく試験放棄を告げるジン。

ベルティナは申し訳なくて、勘違いするなこのっ、と怒りたくて、でも心配してくれるのが嬉しく恥ずかしくて……

とにかく自分の突然の変化と持て余した感情に錯乱した彼女は、

「頼むからあたしに……優しく、するなぁぁあああ！」

全力でジンから逃げた。

試験中に敵前逃亡。

「……勝者、ジン・オーバ。……試験の結果は余り期待するなよ」

「はぁ」

釈然としないまま試験が終わったジン。

「……ユンカさん？」
「あれは……重傷よ」

ベルティナ・アスク。突出した能力はないが視野が広く前線指揮から後方支援までこなせる万能タイプの女戦士。

後にユンカ達が結成するジンの守護騎士団、《戦乙女の矢》を率いる初代リーダーである。

「どうしてよ……これがジンの、アタシの宿命なの？」
「私はジン様の事を甘く見てました。……あんなに容易く……」

そもそも彼らしくない戦い方だった。

何故あんなことをしたのかジンを問い詰めるユンカ達。

そして。

「余計なこと……するなーーっ！」

その日の夜。赤いバンダナを巻いた2年生が闇打ちにあったのは別の話。

「リュガ……まあ、いいや。竜騎士団とは別件だし」

友達の危機に駆け付けたのはいいが、両手を合わせるだけで特に何もしなかった少年がいたのもまた。

＋＋＋

昇級試験で見た先輩たちの戦いはジンを大いに刺激した。

――勝手に……アタシを決めつけるな

――アタシは剣を選んだ。アタシにはこれしかない

自分の剣を信じ、貫いた《旋風の剣士》。

――お見せします。あたらしい私の《氷輝陣》を

――私の魔術はこれからです

得意とする魔術の新型を披露し、さらにその先を目指そうとする《銀の氷姫》。

そして。

――お前が俺達を信じず、仲間を頼らないなら信じさせるまでだ

――俺に！　ダチを！　守らせやがれ！！！

《盾》を持つあの青いバンダナの先輩は親友を思って本気でぶつかった。

「ユン。先輩達すごいね」

「……うん」

ジンが求めるような強さを持って輝く先輩達。その輪の中に溶け込んでいるジンの友達。

「僕は、ユーマの事が羨ましいよ」

あの輪の中に自分も混ざることができたら強くなれるだろうか？

友達や先輩たちのように自分の力に誇りを持てるようになれるだろうか？

そんなとりとめのないことを考えるジン。

「……」

ジンの視線の先にある男同士のじゃれあい（首根っこを掴まれながら控え室へ引きずられていく《精霊使い》の図）を見たユンカは嫌そうな顔をした。

＋＋＋

ジンの友達である《精霊使い》。ユーマはたまに無茶苦茶なことをする少年である。

初めて彼を見た時は広場を砂地に変えて５０人の新入生を一度に埋めるなんてことをした。

初対戦では《射抜く視線》を無理やり逸らされたこともある。今までにないやり方で破られたのでジンは驚いた。（《旋風剣》で吹き飛ぶのも初めてでこれにも驚いた）

いきなり友達を紹介されたと思ったら新型ブースターのテストに付き合わされたこともある。

紹介された茶髪の少年、ティムス・エルドは学年こそ違うが同い年でジンにとって２人目の男友達だ。

ティムスは口が少し悪いけど妹思いで面倒見のいいお兄さん（ジン主観）。彼の遠慮のない言動と罵倒は新鮮でジンはちょっぴり嬉しかったりする。

これがポピラの手作り弁当の件もあって『エルド兄妹要注意』という共通認識がユンカ達の中に刻まれることになるのだが。

閑話休題。

そのジンの友達2人だが、今は全校生徒の目の前で学園のトップである《Aナンバー》の1人に挑んでいる。

ジンも見たことがある巨大な黒い竜。銀色の小人たちが力を合わせてそれを投げ飛ばしたところだ。

（ユーマが隠れていたのはあの人達と戦うため？）

皇帝竜を見たときに思い出すのはクフトとベスカ、あの2人だ。

――複製の幻創獣です。飛行の操作訓練の途中でしたが……

――ちっ。俺様の分はあるんだろうな

ジンは気付いた。皇帝竜は1体だけじゃない。ユーマ達の戦いがこのまま試合で終わるとは思えない。

「ユン、セリカさん。僕はちょっと行ってくる」

「ジン！？」

振り返らず観戦席をあとにした。

＋＋＋

「ベスカちゃん！」

外周の通路を回ってスタジアムの外へ。その途中で聞き覚えのある声がした。

ジンが見たのは竜騎士団を従えて歩き出す女幹部と、その背に向けて叫ぶフェアリーの先輩。

「どうして、どうしてよ……」

「リン先輩？」

リンはジンに気付いていない。

「友達なのに。悩み事があったなら私が助けてあげるのに……」

「……」

「気付いてあげれたら……いつだって、そばにいてあげれたのに」

2人のやりとりはジンにはわからない。ただ友達である彼女はあの人を引きとどめることができなかった。

だからジンも何もできない。そう思った。

「――っ、先輩！」

「きゃっ」

ジンは咄嗟にリンを押し倒し、頭を庇う。

同時に大きな揺れと轟音、それこそスタジアムを覆う結界が壊れ

るほどの衝撃が2人を襲った。

しばらくして大きな歓声が上がった。

「ユーマの決着がついた？　……リン先輩、大丈夫ですか？」
「ジン……君？」

茫然としたままのリン。

いなくなっていた友達の事でいっぱいになった時にいきなり倒されて、それから激しく揺れて、気付いたら目の前に自分の事を先輩と呼んでくれる少年がいた。

際どい距離感で見つめあう状態。リンは今の状況に頭が追いつかずぼんやりと彼の瞳を見る。

ああ、いつ見てもこの子の目はきれいだなー、なんて思う。

「……リン先輩。あの人、ベスカさんは何を」
「っ！！　ベスカちゃん」

ジンの言葉がリンを正気に戻す。

「ベスカちゃん達本当は集会の時に騒ぎを起こす気だったらしいの。それがいきなり公開試合になったから……」

全校集会の場所の変更とその後の《竜使い》と《精霊使い》の対決は竜騎士団の予定をすべて狂わせた。

台無しになった企み。彼女らは生徒会棟を襲撃するはずだった戦力を集結し、学園に竜の力を見せつける気でいるらしい。

「それで？」

「試合が終わった直後の隙を狙うって」

「だったら急がないと」

ジンにできることは限られている。だから状況の確認の上で狙撃ポジションを探しに行った。

「私も！」

リンはジンを追いかけた。

＋＋＋

観戦席の最上段。

ジンはユーマの、彼の仲間たちの戦いを見ていた。

友達の彼はいつだって1人じゃない。自分だってこうやって駆け付けている。

「ジン君？」

「……いえ、ちょっと」

仲間、狙撃、孤独、友達

……言葉の羅列が彼の頭によぎる。

「そろそろですね。飛竜隊、対地攻撃開始」

竜騎士団の後方に待機していた飛竜が飛び立った。

アイリーンが撃ち落としたのもあって飛竜の数は8と少ないが、ユーマ達は迎撃の手段を欠いて空襲に晒される。

「いけない！」

「狙うのは《精霊使い》です。飛竜隊、突撃！」

幹部D、ベスカの指揮で編隊を組み、スタジアムを旋回する飛竜は再び《精霊使い》を襲う。

アイリーンは地上戦の援護で手一杯。誰も飛竜の攻撃を阻止できない。

「《精霊使い》、これでチェックですよ」

「弾幕が間に合いません。ユーマさん！」

「もう少しなんだ。みんな伏せて！」

飛竜の攻撃に再び晒されそうになったその時、

「《バーストモード》」

ジンは2つのガンプレートを繋ぎ《幻想の弓》を引いた。

――墜ちろ！

1度に3連射。《射抜く視線》に誘導された幻想の矢は先頭の飛竜に命中。

矢は3本とも同じ個所に当たった。幻想の矢同士がぶつかり合うことで衝撃波が発生。一撃で飛竜を射ち墜とす。

「ダメだ。《バースト》は連射できない。《ハンドガン》が届く距離じゃないと……」

あと7体いる飛竜を一度に止められない。ジンは届かない空を見上げる。

「……私が助けてあげる」

「先輩？」

「私の『羽』を君にあげる。だから……」

自分のあらゆる力を他人に分け与えるフェアリー族の特異能力。その中でも羽を与えることの意味は1つの覚悟を表わす。

それはリンの決意。

「ベスカちゃんは悪い何かに囚われているの。私にはそれが『見え

る』けど何もしてあげられない」

リンの《妖精の目》は確かに魔力の狂気を見た。彼女の腕輪から。

「お願い。ベスカちゃんを止めて」

リンはまっすぐにジンを見た。

友達を助けたい。君を助けたい。だから私はあなたに……

合わせる視線に乗せた思い。ジンは確かにそれを受け止めた。

わかりました。それを伝えるように彼女に向けて彼はいつも通り優しく微笑む。

――誰かを思う心があるなら、君だって笑えるから

師匠の声を聞いた気がした。

「リン先輩」

「任せてよジン」

そして観戦席から身を乗り出し、ジンは空を飛ぶ。

ジンの友達と、彼女の友達。２人の為に彼は自分の意思で武器を

手にした。

＋＋＋

ジン戦記　5（完）（前書き）

完結編。話が続けば？がでます

皇帝竜事件の裏。その後の日常

＋＋＋

「……すべての敵を――射抜け！！」

空を飛ぶことで竜騎士団の虚を突いたジンは《ハンドガン》を連射。正確に飛竜の弱点と翼を射抜いていく。

「ジン・オーバ！　あなたまでも……カイゼル！！」

奥の手の飛竜隊を潰されたベスカは皇帝竜をジンにけしかける。

その形相はあの時見た愁いを帯びた表情とは程遠く、それがジンには哀しかった。

（あなたには、本当にそれしかなかったのですか？）

「《アローモード》」

狙われたジンは慌てず対になっているガンプレートを接続して左手に持ち、『矢をつがえ』、『弦を引く』。

（ごめんなさい）

ジンは心の中でベスカに謝った。

（僕はあなたの事を知らない。友達を振り切ってまでそこにいるあなたの葛藤を僕は理解できなかった）

森林ステージでの彼女の独白は哀しくて、ジンはそれは違うと伝えたかった。

強くなりたいと願って手にしたガンプレート。それを今、彼女に向ける。

弱いから。射抜くことしかできないジンはそれしかできないから。

（僕はあなたを救うことができない）

それでも。

（僕は……）

《アローモード》のガンプレートは《幻想の弓》の展開と同時にレンズを前方に出現させる。

狙撃スコープの役割を持つ《望遠》の補助術式。それは《射抜く視線》の射程と精度を飛躍的に向上させるのだ。

――お願い。ベスカちゃんを止めて

背中に感じる想いの羽。そのあたたかさ。

せめて彼女の願いだけでも。

ジンは鋭くした黒の瞳で『射抜くもの』を見る。それは襲い来る皇帝竜ではなくベスカの、彼女が身に付けた幻創獣の腕輪を、見る。

「カイゼル・バースト！」

「――っ！！」

皇帝竜は熱線を放つ前に突然消失。ジンの《幻想の矢》が彼女の腕ごと腕輪を射抜くほうが一瞬早かった。

射抜いた瞬間、ジンは彼女と目があった気がした。ベスカがどんな気持ちでジンを見たのか彼にはわからない。

痛いと喚くベスカ。幻創獣の腕輪を壊された彼女はここではもう何もできないはずだ。

彼女を止めるためとはいえ助けたかった人を傷つけたという事実にジンは苦い気持ちを噛み締める。

「ベスカ！　てめぇ」

幹部C、クフトは仲間をやられ、怒りの矛先と皇帝竜をジンに向ける。

ベスカを撃ったジンはそれでもう終わったと思っていた。その気持ちに合わせたかのように《妖精の羽》も効力を失う。

ジンに防ぐ手段はない。躱す気もなかった。

「ジンはやらせない」

「当たって！」

皇帝竜は爪を振るったが、そこにダークエルフの少女が力任せの双剣でジンを庇い、さらに白い修道服型の戦闘衣を纏う少女が《光の矢》を放ちジンの着地を援護する。

「ユン！　セリカさんも」

飛竜と戦うの彼の姿を見て急いで駆け付けた2人。

ジンはどうして？　と驚くしかない。

「ジン様、大丈夫ですか？」

「うわっ」

ジンに駆け寄るセリカ。

でもそれよりも早くジンの背中に飛び付いたのは急に現れたリン。

「先輩？」

「……ありがとう。ベスカちゃんの悪いモノ、ちゃんと消えたよ」

「……」

ジンにしか聞こえない声で伝える。涙交じりの声で、「ごめんね」

とそう彼女は言った。

僕にじゃない。きっと友達の彼女に向けていったのだとジンは思う。

返事は何もしてあげれなかった。

「こらっセリカ、ジンにくっつくな！　ああっ、リンもいつの間に！」

「へへっ。私は先輩だもんねー」

泣き顔を隠し、いつもの調子でユンカに答えるリン。

「あー！！」

ユンカは気付いた。リンもまたジンに『射抜かれている』ことに。

「あいつのまわりの女の子……増えてるな」

呆れかえる先輩2人。ジンは先輩たちの視線に恥ずかしさを覚える。

「みんなお願いだから離れて！　……先輩、僕らも手伝います」

気持ちを切り替えるジン。まだ終わっていない。友達はまだ戦っているのだから。

《竜殺し》の発動までの数分。ジンは仲間と共に竜の幻創獣と戦

った。

ジンが駆け付けてくれたユンカ達を友達ではなく仲間だと思ったのはきっとこの日からだと思う。

＋＋＋

竜騎士団に向けて放たれた複数の《竜殺し》の剣。

敵という敵をすべて突き刺し、倒されたのを見届けたジンたちは先輩の誘導で一足先にスタジアムから脱出することになった。

「まだユーマ達が」

「大丈夫です。脱出用の幻創獣をティムスさんに渡してますから」

そう言ったのはくせ毛のかわいらしい少年。

中等部の子らしい。女の子かとジンは思った。

一方、気絶したアイリーンをどちらが運ぶか揉める《バンダナ兄弟》。

「姫さんは俺が背負っていく」

「おい」

リュガは倒れたアイリーンに向かうアギの肩を掴んで止める。

「何故お前だ？」

「リュガ、お前片腕怪我した上に自分の剣忘れんじゃねぇよ。あのクソ重いの担いで姫さんも運べるのか？」

「そうですね。彼女はアギさんにお願いします」

２人の間に割って入るのは《アイリーン公式応援団》の副団長。

「他の応援団員も手負いですし、何より幹部の貴方が１人抜け駆けなんて許されると思いますか？」

「……ちっ。アギ、役得なんて思うんじゃねえぞ」

「そんな事言ってる場合かよ」

散々文句を言われながらアイリーンを背負うアギ。

「……軽いけどもうちょっとボリュームが欲しい……ぐぇ」

「テメェ！　アイリーンさんの薄氷の如き胸になんてこと……ぐはっ！」

首を締めつけられ、氷塊を叩きつけられた。

「……あのう先輩？　どうしてそんなに急いで逃げるのですか」

ジンは疑問に思う。事情を話せば自警部にも捕まることはないだろうと思っていた。

アギは目を覚ましたアイリーンに首を絞められて喋れない。代わりに赤バンダナの先輩、リュガが額から血を流しながらジンに答える。

「理屈というより経験だな。俺達はやりすぎた。多分《鬼》がでてくるからその前に逃げるんだよ」
「鬼？」
一般的に鬼とは魔力を持たないオーガや巨人種等の亜人を指す言葉だが、ここでは特定の人物を指す。
「いいから行くぞ。アギ、アイリーンさんを落とすような真似すんなよ」
「いや、その前に俺が、落ち……」
「……誰が……薄氷……」
「……」
やっぱりあの先輩は苦手だな。そうジンは思った。
＋＋＋
３０人を超える大所帯で自警部の包囲網を抜けることができたのは、やはりこの手の経験が豊富な《バンダナ兄弟》によるところが大きい。
「来た！　隠れろ」
スタジアムを脱出した直後。叫ぶ先輩に慌てて散開して身を隠す。
しばらくして現れたのは白で統一された大軍を率いて幽鬼の如く

歩いてくる男。

「……ミツルギぃ……エルドぉ……俺は、オレハ……」

肩には巨大な十字架を背負っている。

「新しい得物か？　あれを取りに行ったから俺達逃げ切れたんだな」

「先輩。あの人は一体？」

あの禍々しさに息を飲んだ。ジンだってアレが自警部部長とは知っているが。

「今のブソウさんは鬼だ。毎晩の徹夜漬けを覚悟した鬼なんだよ」

「久々に爆発したな。どんだけストレス溜めてんだよ」

原因が自分達にもあるのは棚上げ。

「アレが自警部の奉る神なのですね」

十字架をみて納得顔の副団長。

ジンたち1年生にはまだ理解できない世界だった。

「ユーマは大丈夫なんですか？」

「……アレは味方だ」

ユーマは間違いなくスタジアムへ向かったあの鬼神のターゲットだろう。嘘つきの先輩。

「よし。もう大丈夫だ。一度解散しよう」
「あとの話はユーマが戻ってからだな」

誰もが気を抜いて油断してしまった。《感知》能力のあるアイリーンはもちろん、気を読めるアギもやはり消耗していた。

「先輩！」

その『視線』に気付くことができたのはジン１人。

自警部部長の冗談のようなドス黒いオーラに紛れていた本当の悪意。

「バンダナどもがぁぁぁぁ！！！」

ナーガ。

人蛇の幻創獣が蛇の髪をいっぱいに広げて突進してくる。

「お前が、お前らが俺の、俺様のカイゼルをぉぉぉぉぉぉ」

皇帝竜の腕輪に組み込まれた魔石。その魔力の狂気に囚われたままのクフトは激情のまま、隠し持っていたもう１つの幻創獣の腕輪を使いナーガと共に襲いかかる。

先輩達は間に合わない。

最速で対処できるのは《盾》を使えるアギ。その彼はアイリーンを背負ったままで両手が塞がっている。

このままでは態勢を整える間に確実に一撃は喰らってしまう。

「やめろ！」

２つのガンプレートを抜いて接続。そしてジンは叫ぶ。叫んでしまった。

ナーガの動きは止まらない。でもクフトはジンの声で彼を見た。

ジンは彼の目を『見てしまった』。

「あ……」

撃てない。

この一瞬しかない状況で《射抜く視線》はもう逸らせない。

（今撃ったら僕は）

「邪魔ぁ、すんじゃ、ねぇえええ！！」

ナーガは止まらない。止めるにはクフトの腕輪を狙うしかない。

でもジンはもうクフトの目を逸らせない。不意打ちの強襲を止めるには彼を撃つしかない。

ナーガとは別にクフトはジンを狙ってくる。
無謀な突撃だが鬼気迫るクフトの形相がジンには恐ろしかった。
その手に握った武器を使うことも。
「ジン！」
ユンカやセリカ、リンが必死で向かってくる。
（違うんだユン！　僕なんか守っても竜は止まらない）
先輩たちを守れない。
「あ、ああ」
ガンプレートをクフトに向けたままジンは葛藤する。
（撃たなきゃ先輩達も、僕だってやられる。でも！）
ベスカの時とは違う。今度は必ずクフトの目を射抜く。
――視線を合わせただけで人を殺せる邪眼だ
違うと叫びたい。

昔は身を隠して『敵』を射抜き、気付かれても視線を合わせて『的』を射抜く、そんな子供だった。

子供だったのだ。自分が何をしていたのか分からずひたすら弓を引いた。『テキ』を射抜き続けた。

人を殺す恐怖と痛みに気付いたのは12の時。それでもまだ子供だった。

（僕は）

自分を救ってくれた師匠を思い出す。オーバの名前をくれた養父母の事も。

中等部から友達のダークエルフの少女。世話好きの同級生。友達思いのフェアリーの先輩。

危うく殺しかけた未熟な自分をこれからだ、手伝ってやると言ってくれた友達の仲間である先輩達。

――ただみんなを守りたいだけなのに

殺しをして守る。それしかできないジンはガンプレートでクフトを狙う。《射抜く視線》で目を合わせる。

（僕は！）

そしてジンに向かって突撃してくるクフトは、

斬り飛ばされた。

飛ぶ斬撃はクフトと同時にナーガの首も飛ばす。アギ達を襲おうとしたナーガはそれで消失した。

「……」

「……助かったぜ、ジン」

奇襲に驚いたアギ達はガンプレートを構えたままのジンを見て2度驚き、助けてくれたことに礼を言う。

先輩達は本当に不意を突かれていた。本当に危機一髪の状況だったようだ。

「……先に行ってください。念のため僕はあとから来るユーマの援護をします」

「ジン？」

「行ってください。ユン達も」

追い出すように先輩達を先に行かせた。

強張ったジンの表情。

「……先に、行くから」

ユンカもそれ以上、何も言えなかった。

「……誰だ？」

クフトに外傷はない。意識を刈り取られただけだ。

ジンのガンプレートには斬撃を飛ばす機能、《ブレード》がある。しかしジンが構えていた今のガンプレートは《アロー》だった。最初は腕輪だけを狙撃する気でいたから。

第3者がいる。先輩達は気付かなかったのか？　この『視線』に。

ジンと同じ、《暗殺者》が向けるそれを。

ジンは《アロー》のスコープ・レンズで『視線』の先を見る。

はるか後方、スタジアム外壁の上端。黒い影はまだそこにいた。

黒いローブにデスサイズ。片目だけを紅く光らせた死神。

「……」

《黙殺》の名をジンは知らない。

「さっきのはあの人の《翔ける斬撃》？　どうして……」

そしてジンは呟く彼女の唇を呼んで愕然とした。

――あなたはその年で3年前の、あの《最後の戦場》にいたのね？

――あの子たちと一緒に『向こう』にいなさい。あなただって日向を歩くことができるはずから

見ていることに気付かれていた。だからこんな遠くから話しかけられた。ジンはスコープを覗いたまま動けない。

《最後の戦場》

3年前に起きた召喚陣の遺跡を巡る、歴史では最後となる戦争にジンは参加していた。誰も知らないはずのジンの過去。

黒い影はいつの間にか姿を消していた。でもジンは動けない。

「……どうして」

僕を知っている？

「どうして？」

あの人はなんで？

「どうして！！」

自分と『同類』なのに、影の中にいてあんなに強く、堂々としているんだ！？

「強く……なりたい」

あの人のように影にいても誰かを助けられるようになりたい。

先輩達のように自分の力に誇りを持ちたい。

友達のように、本当に笑顔で仲間たちと笑い合いたい。

「――っ、僕はっ！！」

ジンはユーマとティムスが外へ出てくるまでその場から動くことができなかった。

守ることも、殺すこともできなかった。

ジンは引き金を引く覚悟がなかったのだ。

《黙殺》のおかげでジンは人を殺さなかった。彼の仲間達は無事だった。

ジンにとって今日の戦いはそれだけの話で終わってしまった。

＋＋＋

「はい、ジン様。お弁当です」

昼休み。とある校舎の中庭にて。

ジンに差しだされたかわいらしい包みに男子生徒が目を光らせる。

「いつも悪いよセリカさん」

「いいえ。最近は本格的に料理の勉強をしているんです。ぜひ味の感想を聞かせて下さい」

セリカ・フォンデュ。彼女は最近ポピラの実力（勘違い）に打ちのめされ、ジンの故郷である東国の味付け（要は和食）に挑戦していた。

「この肉じゃがはどうでしょう？　はい、あーん」

「セリカさん？」

そしていつものようにお邪魔虫が。

「ぱく。うーん、やっぱり甘すぎ」

「ねぇねぇ、この黒いの何かな？　セリカちゃん」

肉じゃがを頬張るユンカと黒豆を指でつつくリン。

「……2人ともはしたないですよ」

「うるさいセリカ。ちょっと料理ができるからって」

「リン先輩もお昼ですか？」

学年も専攻も違うリンはあの《皇帝竜事件》以来ちょこちょことジンのところへ顔を出す。

最近の昼休みはこの4人で過ごしていた。

ジンは『彼女』のその後のことをリンから聞いた。

「ベスカちゃん事件の責任で転校しちゃった。転校先は教えてくれなかったけどお手紙が来たの」

リンは嬉しそうに話してくれた。文面から滲み出る人柄は昔の彼女のままだったと。

「夏休みに会う約束したの。離ればなれになったけどベスカちゃん

はベスカちゃんだったから」

また友達でいてくれるからいいんだ。とリンは笑顔で言う。

「リン先輩、その時は僕も連れて行って下さい」

ジンはあの時彼女の腕を射抜き、傷つけた事を忘れない。ベスカには許されなくても謝りたかった。

「え？　えーと。……それって夏休みに私（達）と遊ぶ約束？」

「駄目ですか？」

リン、ぶんぶんとポニーテールごと首を振る。

「そんなことない。……別にベスカちゃんがいなくても私はいつだって……」

「？」

とにかくベスカに謝る機会を手に入れたジン。

夏季休暇時にリンとデートをする約束になったことに気付いていなかった。

「……ごめん。ベスカちゃん」

リンは罪悪感から友情ってなんだろう？　という悩み事を抱えることになるが、彼女の後輩がそれに気付くことはない。

＋＋＋

「じーん。一緒にメシ食っていい？」
「うん。いいよ」

友達のユーマは事件以降再び学園に来るようになった。

今のように顔を出してくれるのはジンにとって嬉しいことだ。

「3号さんもこんにちは」
「3号言うな！」

ユーマがリンの事をなぜ『3号』と呼ぶのかジンにはわからない。

ジンの隣にはユンカとセリカ。なのでユーマはリンの隣、ジンの正前に座って弁当を広げた。

「ユーマは今日弁当なんだ」
「そうなんだ。今朝は食堂の仕込みの手伝いをしたんだけど、そのあと余った食材を分けてもらったんで厨房を借してもらったんだ」
「……アンタ、普段何してんの？」

ユンカはやっぱりこの《精霊使い》のことがよくわからない。

「今日は中華風にしてみました。チャーハンは一度冷めるとマズいからやめたけど」

春巻きに焼売。肉団子の甘酢かけなどジンたちにすれば珍しい料理だ。余り物で作ったとは思えない。

姉直伝、恐るべし。

「美味しそうだね。まだほかほかだ」
「ティムスに頼んで保温パックの試作品作ってもらったんだ。……うん。これだけ温かいならチャーハンもよかったな」
ほかほかのご飯を満足そうに食べるユーマ。
「……みんなも食べる？」
そのあとユーマの弁当を口にした少女達は敗北感から膝をつき、ジンとユーマは弁当のおかずを交換したりして仲良く食べた。
「この肉じゃが変に甘いね。味醂なしで砂糖だけかな？」
「！？」
「僕はもう少し辛いのが好きなんだ。ピリ辛ってやつ」
「――っ！！」
「へぇ。外のお店はアギが詳しいから聞いてみるよ」
「楽しみだな」
「……」
男同士の気兼ねのない食事。ついジンもちょっと本音が出た。
「セリカ？」
「……あの人、敵です」
「ちょっとセリカちゃん！　どこからメイスなんて出したの！？」
プライドを傷つけられたセリカの暴走を必死に止める2人。新パターンだった。

＋＋＋

「オーバ、今日の放課後はあたしと訓練だ。わかってるな？」

突然現れてそう言ったのはジンの試験官をしたあの女戦士。

「ベルティナさん？　僕はもう試験の結果は気にしていませんよ」

「うるさい。君が試験に落ちたのはあたしのせいでもあるんだ。……責任はとってやる」

ジンの昇級試験の結果はその実力を殆ど披露できなかったため失格。彼はランクＣのままだった。（《皇帝竜事件》の活躍はリンの補助があったためアギのように加味されていない。）

ジンを前にして逃げたベルティナはそのことに責任を感じ、次回の試験では必ずランクアップさせるとジンに約束して彼のコーチを買って出たのだ。

「ベルティナ！　またジンを独り占めする気だな」

「なっ！？」

「先輩。魂胆がみえみえですよ」

「うっ」

まあ、そんなのはジンと一緒に過ごしたい口実なので後輩２人に詰め寄られても仕方がない。

「だ、黙れ！　……だったらユンカ、今日はお前をしごいてやる。セリカもだ。そのメイスは飾りじゃないんだろうな？」

「ええっ？」

「先輩？」

体育会系の先輩。不器用な彼女の照れ隠しはもう勢いだった。

ベルティナは自爆。そして道連れの共倒れ。

「もういい。行くぞ、今からだ！！」

「ちょっと！」

「待って下さ……」

あー。引きずられ、叫ぶユンカとセリカを見送るジン。

「……ジンは今日どうする？　私、放課後は薬草の採取に行くの」

「手伝いますよ」

リン、1人勝ち。

「……ジンというかあいつの周りは面白いね」

「それはー、主人公だからですよー」

ユーマは肩に乗せた精霊と一緒に友達の日常を面白そうに眺めていた。

ジンはまだ過去を乗り越えていない。抱え込んだまま日常を送っている。

でも彼も彼女達も成長するのはこれからであって学園での戦いもまたはじまったばかりなのだ。

《射抜く視線》の少年がその力に意味を見出すのはまだ先の話。

＋＋＋

おまけの話。

気絶していた彼女は目覚めた。

「ここは？」

「目が覚めた？　リリーナさん」

「……名前で呼ぶのはやめて。嫌いなの」

知らない部屋だった。目の前にいるのは変わった風体だが見知った2人の女生徒。

1人はフード付きの黒いローブを纏い、もう1人は黄色いオコジョを頭にのせている。

「話がしたくて君をここへ運んだんだ。君だよね？　皇帝竜の《複製》に成功した技術士は」

「……あれは偶然のまぐれ。それで？」

「ボク達に協力してくれないかな？　表向きは処罰を受けたことにして学籍をこっそり夜間部に移行するんだ。待遇はボクの名にかけて保証するけど」

「……」

そんなこと言っても目の前の彼女の本名を知らない。その意味するところも。

もう1人に訊ねてみる。

「貴女もなんですか？　《黙殺》」

「ええ。彼女は見かけ以上に優秀よ。表でも、裏でも」

「……少し考えさせて。まだ痛いの」

そう言って包帯が巻かれた左腕を、腕輪のあったところを抑える。

「無理はしないでね。いい返事を期待して持ってるよ」

それだけ言うと彼女を残し部屋を後にする2人。

最後に一言。

「リリーナ・コンベスカさん。ボク達報道部は幽霊部員を随時募集してるから」

そして彼女は1人になった。

「……参ったわ。嫌な別れ方しちゃったし。せめてあの子と連絡がとれないかしら？」

ベッドの上で彼女、ベスカは今後の事を考える。

「まだ学園にいられるってことね。裏の報道部……か」

射抜かれた左腕はまだ痛い。

「りんりん。それに……」

傷が癒えてもきっと忘れることはないだろう。

この痛みも、あの瞳も。

「ジン・オーバ」

ここにも『射抜かれた』少女が１人。

＋＋＋

ジン戦記？　完

＋＋＋

風森の精霊と（前書き）

風葉と彼女に関わる彼女達と。物語の謎を少々

十十十

昇級試験、そして《皇帝竜事件》から数日。久しぶりの学園生活を送るユーマ。

「ミサちーのクッキーが食べたいですー」

そんな彼の前にいきなり現れてこんなことを言うのはユーマの精霊である風葉だ。

「なんだよいきなり」
「わたしはずっとー、ポピっちの護衛をしてたんですよー。正当な報酬をくださいー」
「そう言われればしばらくミサちゃんにも会いに行ってないな」

試験期間中のユーマは対《竜使い》戦に備えてずっと身を隠していた。

風葉もポピラの護衛として彼女のポケットの中にいたのでミサに会うこともクッキーをおねだりする機会もしばらくなかったのだ。

「わかった。今日までのご褒美と砂更の分もあわせてたくさん焼いてもらおう」

「はーい」

さあいきましょー、とユーマの肩の上で彼を急かす風葉。

「今日は3枚食べますよー」

「……まあ、いいや。一体どこに入るんだろうな？」

１０センチほどしかない小さな精霊に胃袋があるかどうかの疑問はとりあえず考えないことにした。

その日の放課後は普通科棟へ。

途中でユーマはエイリークに呼び止められた。

「ユーマ。ちょっと待って」

「ん？　用事？」

「ええ。一応無事に試験が終わったでしょ。結果はまだだけど」

「……」

おかしい。ユーマの頭の中で何故か警鐘が鳴り響く。

「いろいろあったんだし、今日にでもパァーっとみんなで打ち上げをしようと思ったんだけど」

「あ！」

そして。

「バァカアアアアア！！！」

訳あってユーマは吹き飛びました。

飛距離が伸びていることにエイリークの成長が窺える。

「エイリっちー。ミサちーのところまで連れっててくださいー」

風葉はユーマを置いて緊急脱出。

主人の安否より今はミサのクッキー。そんな風の精霊。

「……仕方ないわね」

こうして風葉はエイリークの肩に乗ってミサの下へ向かうことに。

＋＋＋

「……あの時は非常時だったんだ」

木に引っ掛かって宙ぶらりんのユーマ。今回の出番はこれでおしまい。

「……」

＋＋＋
風森の精霊と
＋＋＋

「ミサ」
「あれ、リィちゃん？」
「今日時間ある？　風葉を連れてきたんだけど」

ミサ・クリス。風森の国の出身でエイリークの幼馴染。彼女の親友兼専属侍女を名乗っている。

「ユーマ君はどうしたの？」
「飛んだわ」
「……そっかあ。大変だね」

ミサは流した。

小さな頃は彼女も『飛ばされる側』だったので理由はどうあれユーマに同情した。

「それで今日は一緒にお茶にしない？」
「うん。リィちゃんが放課後に誘ってくれるなんて久しぶり。でも紅茶の葉、切らしてたよ」
「少しくらい待つわよ」

そのあたりで風葉と時間を潰すからと言いかけたエイリークだが。

「リィちゃん、買いに行って」

「え？」

「《組合》の商店でいいお店見つけたの。今からクッキーを焼いてくるからその間にお願い」

「……仕方ないわね」

「ついでにお夕飯の買い物もいいかな？　パンと卵とそれから……」

「ちょっと」

「駄目？」

相部屋の寮でミサと住むエイリーク。家事全般、特に食事は彼女の世話になっているので強く言えない。

「もう。ついでだからね」

「ありがとー。それじゃあいつものテラスで待ち合わせね」

にこにこと笑顔のミサ。

幼馴染とはいえ自国の姫を使い走りに使うことに疑問を持っていないのはその親密さ故か。

「行こう。風葉ちゃん」

「はーい」

さらにミサは買い物のメモをエイリークの渡すと風葉を連れて行ってしまった。

「あの子は《精霊使い》の素質があるのかしら？」

いくらクッキーで餌付け（？）しているとはいえ風葉は風森の、ウインディ家を守護する精霊のはずだ。

でも風葉は迷わずミサについて行く。1人取り残された風森の第2王女様。

「……買い物、多いわよ」

姫であることは置いておくとしても、エイリークは親友にも精霊にもないがしろにされている気がした。

＋＋＋

焼きたてのクッキーとお茶の準備をするのに1時間弱。

待ち合わせの場所でエイリークを待っているミサと風葉。

「ポピっちですー」
「ポピラちゃん？　こんにちは」
「……風葉ちゃん？」

ポピラ・エルドは精霊の風葉をかわいがっている。

ポピラは《同調》スキル持ちで風葉の独特の感性（ぐるぐるーのどかーん！　など）を理解できる。なので彼女達は仲が良い。

通りすがりのポピラはミサの肩にともだちの精霊がいたので立ち止った。

「ミツルギさんはどうしました?」
「飛びましたー」
「馬鹿ですね」

理由は問わなかった。どうでもよかったともいう。

「今からリィちゃんとお茶にするんだけどポピラちゃんも一緒にどう?」
「リィ……ああ。エイリークさんですか。仲がいいのですね」
「わたしの親友なんだ」
「……」

にこにこと自信を持って答えるミサ。ポピラは言葉に詰まった。

何者だろう? ポピラは顔見知りでしかない彼女を探るように観察する。

こげ茶の髪をエイリークと同じように1つに結んでいる。違いはミサが大きなリボンを使っていること。

背はやや低め。156センチのポピラより低い。

体格も小柄で童顔。学年は2年と聞いているが中等部の方じゃないかと疑ってしまう。

ただ中等部の生徒とは思えないものが1つ。

「……大きい」

「このバスケットの事？　クッキーの他に今日は本格的にティーセットも用意したから」

風森の城で使う高級品だよ、と自慢するミサだがポピラは聞いていない。

「もしかして紅茶は苦手？」

「いいえ。……私の成長期はまだでしょうから」

「？」

ポピラは自分の胸を抑え、ミサのそれと比べるとあの人は年上なんだから、と自分に言い聞かせた。

「クッキー食べていいですかー」

「駄目だよ。リィちゃんをちゃんと待とうね」

「うーん。わかりましたー」

「……」

風葉はミサによくなついている。風葉の唯一の理解者と自認するポピラはそれがおもしろくない。

「ミサさん。わたしはその……エイリークさんのともだちです」

「うん。知ってるよ。いつもリィちゃんを助けてくれてありがとう」

にこにこ

「……風葉ちゃんもともだちです。仲良しさんです」
「そうですよー。クッキー食べていいですかー？」
「もう風葉ちゃんたら。駄目だよ」
「……」

この前までポピラのポケットの中にいたともだちは今はミサの肩の上にいる。

おもしろくない

「風葉ちゃんは試験期間中私の護衛をしてくれたんです」
「そうなの？」
「そうですよー。今日はミサちーにご褒美もらいにきたんですー」
「そうだったの？　だったらつまみ食いに1枚だけ」
「わー。ありがとうですー」

風葉はクッキーを抱き寄せ幸せそうにくるくる回る。

「……呼び方が違う」
「ポピラちゃん？」

おもしろくない

「……試験期間中はずっとエイリークさんの特訓を手伝いました」
「うん。わたしはそっちの方はリィちゃんを助けてあげられないからポピラちゃんがいてくれて嬉しいよ」

にこにこ

「時間が合えば最近はお昼も一緒です。お弁当のおかずを交換した

りしました」
「あ。どうだった？　リィちゃんったらわたしの作ったお弁当に感想１つ言ってくれないの」
「……美味しかったですよ」
ポピラが食べたそれはエイリークへの愛妻（？）弁当だったらしい。
「リィちゃん遅いね」
「そうですねー」
ぽやーとしてミサと風葉はエイリークを待つ。
「……」
ポピラにとってエイリークと風葉は数少ない彼女のともだちだ。
その２人と自分以上に仲の良いミサにポピラは脅威を感じた。
単に嫉妬しただけだが。
「……ミサさん」
「何かな？　あっ、ポピラちゃんもクッキー食べる？」
「あなたは私の……敵です」
「え？」
いきなりの宣戦布告。
「今の私は全てにおいてあなたに敵わないようです。ですがわたしは負けたくありません」
「ちょっと、何と戦うの？　わたし！？」

「あなたはただのちちでか小娘ではありませんでした。……私のともだちはそう簡単にあなたには譲りません」

ミサ、絶句。

ちちでか小娘発言はできれば聞きたくなかった。

「今日はこれで失礼します。私も忙しいので」

「……」

ミサはショックを受けているが彼女に敗北感を味わったポピラはそれに気付かず、珍しく負け惜しみの捨て台詞を吐くのだった。

「……あなたのお弁当、確かに美味しかったです。でもおかずのバリエーションと発想は……ミツルギさんの方が上でしたよ」

「――!!」

「また会いましょう」

こうしてミサはポピラにとってはじめての強敵（とも）と認定された。

「ユーマ君が……お母さん（風森の城の侍従長）直伝のわたしのよりも腕が上？」

「ジンっちもおいしーて言ってー、セリっち達がっくりしてましたよー」

「……」

ポピラは確かに一矢報いた。

＋＋＋

学園内にある売店の多くは商学科の生徒や《組合》の技術士が運営している。

ミサお勧めの紅茶の茶葉を取り扱っている店もその中の1つであり、そこはフェアリーの少女が開いているという。

「いらっしゃいませ～」
「お邪魔するわ……ってあら？」

エイリークはその店員に見覚えがあった。

「確かアンタは……3号？」
「違うの！」

リンはお客に対して本気で怒った。

リン・エリン。《皇帝竜事件》ではジンと共にユーマに協力してくれたフェアリーの2年生。薬学を専攻。

「ユーマがそう言っていたからつい」
「その呼び名は一体何なの？」
「ジンに関する事じゃない？」

エイリークが思う1号2号とはユンカとセリカの1年生コンビ。

彼女の周りもその認識である。しかし実はユーマが『3号』と呼ぶのはリンが余りにも風葉にそっくりなためである。

この時点では2号（幻創獣のピンク風葉）は公開されていない。大きな3号と彼は呼ぶ。

「ち、違うよ。ジンは私の後輩なの。ユンカちゃん達と私は違うの」
「そんな真っ赤になって否定しなくても」
「うう、だからっ」

あくまで首を振るリン。

「往生際が悪いわね。……リン。アンタもしかして西国出身のフェアリー？」
「？　そうだけど」
「あの時ジンは空を飛んだわよね？　……《妖精の羽》を彼に与えた？」
「――！！」

驚いて口をぱくぱくとするリン。顔どころか全身真っ赤だ。

「知ってるの！？」
「何をかしら？」

意地悪そうな顔。

「そ、それは……」
「伝説の勇者に告白した妖精の話よね」
「知ってるじゃない！！」

絶叫。

４００年前に世界を救った勇者の伝説。その仲間の１人だった魔法使いの話。

――傍にいるわ。いつだって。私の風は貴方と共に

それは故郷を救う為に仲間と離別した彼女の告白。

《風使い》のフェアリーは《剣》の勇者に自分の想いと共に羽の力を彼に与え、最期は１人魔人と戦い命を散らしたという。

「彼女はいなくなって勇者の羽も消えてしまったけど、想いだけは残った。それは加護となって勇者を救うことになる」

「……」

「『離れても共に』、『永遠の愛をあなたに』。女性のフェアリーが異性に羽の力を与える意味あいってこんなだったかしら？」

「……フェアリーの女の子だったら憧れなんだよぉ」

リンは観念した。西方のフェアリー族に伝わる伝説の挿話を知られていたら誤魔化しようがなかった。

「ユンカ達が知っていたら大騒ぎするわね」
「他の子は誰も知らないと思っていたのに……どうして？」

リンにとってそれはいつか彼に気付いてほしいなー、なんて淡い期待を込めた内緒の告白だったのだ。

それなのに色恋に程遠く疎そうなエイリークにばれたのは予想外でしかない。

「その話、発祥の地が風森よ。《風使い》の故郷だから」
「嘘！　ほんとうなの！？」

フェアリーのリンも知らないことだった。

「ウインディ家は元をたどればフェアリーの血を引いているって昔聞いたことがあるわ」
「だからあなたも《旋風の剣士》？」
「かもね」

実際それは関係ないと思うエイリーク。彼女がフェアリーの血を引くことに納得しているのは《魔法使い》である姉姫や王妃がいるからだった。

《風邪守の巫女》と呼ばれる風使い。彼女達が人でいて魔力を持つ理由だとすれば納得がいく。

そして《風使い》が最後に戦った魔人というのはきっと……

「ああ。だからかも」
「なに？」

「別の事。風葉がアンタにそっくりな理由」
「？」

それよりも、とエイリークは遅くなっているのに気がついて茶葉を買い求める。

「ミサ・クリスって子が買いに来るものがわかるならそれをお願い」
「ミサちゃんですね。お得意様だからおまけしますよ」
「それじゃあ割引きして」
「……えーと」
「ジンに今日のこと話すわよ」
「……1割引きで」
「わかったわ。ユンカに用事があるからまた今度」
「3割！」
「ベルティナって子がアタシと同じ戦士科で最近話かけてくるんだけど」
「……」

半額で倍の量をお買い上げになりました。

買い物を終え久しぶりに親友とゆっくりとした時間を過ごすエイリーク。

ひたすらクッキーを貪る風葉。ミサは終始なんとなくしょんぼり

気味だったけど。

＋＋＋

２人と精霊のお茶会が終わるとエイリークは風葉をユーマの所へ送っていく。

正しくはお土産のクッキーをユーマの部屋へ届けに向かっているのだが。

「明日もきっと3枚食べていいんですよー」

エイリークが持つ紙袋を見てほくほくした顔をする風の精霊。

風葉はユーマがいつもクッキーを1枚しかくれないのが不満らしい。

「アンタも好きね。いっそのことミサの精霊になる？」

「だめですよー。わたしは《風森》なんですからー」

「なによ、それ？」

エイリークが冗談で言ってみたら意外にも風葉ははっきりと断った。ただ理由がよくわからない。

風葉はエイリークの故郷である《風森の国》の守護精霊、《風森》の一部である。それはエイリークだって知っている。

「約束なんですー」

「約束？　ユーマと契約した時のこと？」

ちがいますー、と風葉。

「むかしむかし、ずーっと昔にしたあの人との約束なんですー」

それは時を経て精霊となった《彼女》と、ずっと昔にこの世界からいなくなった《彼》がした約束。

「あの人は約束を守って会いに来てくれましたー。だからわたしは傍にいるんですー」

「……よくわからないわ」

「そうですかー？　でもきっと覚えてますよー。エイりっちもー、シアっちもですー」

エイリークとエイルシア、それと精霊の風森。

その共通点は？

「……《風使い》、ウインディの話？」

風葉はにこーと笑った。

「やっぱり。もしかして《風森》に『羽がない』のもアンタがフェアリーの姿をしているのもだからなの？」

精霊は答えなかった。でもきっとそれが正解だという確信がエイリークにはある。

だとしたら。《あの人》というのは……

「だったらユーマは……異世界の勇者、《剣》の子孫？」

「違います。多分」

答えたのは風葉ではなかった。

小さな精霊に姿を重ねて話すのは故郷の守護精霊。

「あの子に《剣》の因子はありません。……彼を追った《裏切りの魔女》の魔力も感じませんでした」

「風森？」

「でもよく似ています。黒髪も。あの子供っぽさも」

翠の髪をした女性は昔を思い出すように優しく微笑む。

「救えなかった、助けたかったと泣いたあの涙も」

少年の心に触れた精霊は

「《梟》に《狼》。それに『しろいいのち』が。あの子もまたあの人と同じようにたくさんのものに護られながら、自分を見失わずに誰よりも強くなろうとしている」

いとしくて

「あの人と同じように貴女を、エイルシアを救ってくれた」

――守るから。だからまた会おう、きっと

「あの人は約束を守ってくれた。私は再びめぐりあえた」

うれしかった

「あの人じゃない。でも彼と同じ心があの子にはある。だから私は傍にいます。風森の風はあの人と共に……」

思い違いかもしれない。それでも精霊は少年との出会いを奇跡と信じたい。

「だからユーマは姉さまの所に来たの？」

いいえ、と風森。

「彼女とあの子の運命を変えようとしている《彼》にとってこの世界へ送ることは不本意だったず。……私があの子を《精霊使い》にその存在を書き換えた真実は、この世界に来てしまったあの子を私が護りたいため」

「《彼》とは誰」

「今のあの子を《勇者》にしてはいけない」

風森はエイリークの問いに答えなかった。エイリークは『その域』に達していない。

精霊は《世界》に譲歩してただ伝えるだけ。

「エイルシアはあの子を救う為に還す方法を模索しています」

「姉さまが？」

「僅かな時間ですが貴女も私（風葉）を知覚するようになりとうとう私（風森）と《交信》することができるようになりました。……魔力を受け継がなかった貴女もいつか目覚めるかもしれません」

――風森の精霊使いに

「貴女の運命は貴女のもの」

風森の声が遠くなる。

「でも叶うならば私の血を引く貴女たちが彼の助けとなってください。あの子はきっと――」

最後のほうは聞き取れなかった。

「ねぇ、風森」

その願いはきっと精霊の我儘。本当はエイリークに関係のないこと。

エイリークは自分や姉の、あの少年の運命なんて急に考えることはできなかったけど。

「よかったわね。またあえて」

遠い祖先である彼女の幸せを祝福することはできた。

「そうですねー」

エイリークの隣で風葉はにこーと笑った。

＋＋＋

エースの初仕事　任命編（前書き）

導入編。ユーマと学園長、ユーマとティムス

エースの初仕事　任命編

＋＋＋

はじめに《皇帝竜事件》のおさらいをしようと思う。

まず事件が起きた背景は《竜使い》、ユウイ・グナントと彼の騎士団が所属していた生徒会派閥の１つである《会長派》から独立を謀り、生徒会にクーデーターを計画したことがはじまりだった。

この企みを事前に察した生徒会長は《会長派》から彼を切り捨てることを派閥内で取り決め、暫定でしかないエースの資格を《竜使い》から剥奪することをにした。

ところが生徒会長はついでに《竜使い》が独占する幻創獣の技術を《会長派》の私兵戦力として秘密裏に取り込もうとした。《竜使い》を査問会にかけ処罰すれば終わる話がこの為にこじれてしまう。

査問会や事件を起こせば学園の教師が動く。エースの選定は昇級試験の後なのでそれまでの間に《竜使い》を除く１０人でエースの席を埋めようとする生徒会長。その席を無理やり空けようとエース候補を襲う《竜使い》。隠してはいるが重傷者も数名出してしまっている。

この争いは裏で密かに続くことになる。そして２人の矛先は新しいエース候補として新参の《精霊使い》に向くことになるのだが。

《精霊使い》、ユーマの話は割愛。

結果を見れば《竜使い》の勢力は壊滅。《会長派》は幻創獣の腕輪とその技術を学園長の判断で技術士でエースの1人である《天才》の管理下におかれてしまう。生徒会長が手に入れたのは報告書等の紙の束のみ。

《皇帝竜事件》は誰も得るものがなった（嘘）とは報道部部長の言葉である。

ここまでが事件の裏の話。表向きの《皇帝竜事件》は少し話が違う。

“ランクA以上の生徒はエース資格をかけて《Aナンバー》挑戦する権利を持つ”

これを知った《精霊使い》が学園長の推薦を受けて《Aナンバー》に挑戦。秘密特訓をして《竜使い》に挑んだ事になっている。

皇帝竜を倒し《竜使い》のエースの座を奪いとった《精霊使い》。そのあと《グナント竜騎士団》が量産した皇帝竜で襲撃してきたが彼は仲間たちと共にこれを迎え撃ち、最後は《銀の悪魔》で竜を全滅させた。

《竜使い》の勢力と《精霊使い》とその仲間たちの対立。これが

表の《皇帝竜事件》である。

どちらにしても事件の被害は少なくはない。半壊したスタジアムに怪我人が１００名弱。《竜殺し》の剣に貫かれたショックがトラウマなった生徒もいた。

ほかにも3名の魔力中毒者や寝不足とストレスで暴走した自警部部長、雑務に追われ倒れた生徒会長などがいる。生徒同士の諍いにしては規模も大きく学園側も見逃すことはできなかった。

事件を起こした《グナント竜騎士団》の幹部以下６０名程が転校または退学処分に、《精霊使い》側は主にユーマとティムスの2名が学園長から直に処罰を受けることになる。

＋＋＋

“壊した《スタジアム》を弁償して下さい。働き口はこちらで用意します”

学園長から処罰の内容を聞いて数日。ユーマはその働き口が決定したとのことで学園長に呼び出された。

「任命式をおこないます」

「はい？」

この日、正式にエースになったこと初めて聞いたユーマだったりする。

＋＋＋
エースの初仕事
＋＋＋

学園長の話を聞いてみるとユーマに特例が与えられたらしい。

「生徒会の資料によりますとあなたはなぜか《Ａナンバー》に選ばれていません」
「まあ公式戦で一応《竜使い》は倒したけどあれだけの事をしましたからね」

受講した科目の無断欠席の上で中等部に潜伏。

怪しい生徒の無差別捕縛や報道部（の部長）を懐柔して情報撹乱。

試験には飛び入りで参加でその後の全校集会は飛び降り乱入。

エース資格争奪戦を起こしスタジアムをぶっ壊す被害をだしながら竜騎士団を壊滅。

結果的にユーマは最終的に主犯を学園から全部追い出している。

「……うん。いくらなんでもやりすぎた」

「生徒会長さんもあなたのことを危険視していますね」

生徒会長はユーマを《会長派》に組み込むよりも余計な権限を与えず無印（無所属の生徒。新入生や新規編入生を指す）のままが良いと判断した。関わることを避けたともいう。

「というわけで学園長の一存で《Ａナンバー》の『別枠』を設けました。格好よくアナザーナンバーと呼びましょうか？」

どうでしょう？　と学園長。

「それもＡ（Ａｎｏｔｈｅｒ）ですよ。でもそこまでして俺をエースにする必要はあるのですか？」

ユーマはわからない。これは処罰ではなく昇進の間違いではないかと考える。

「ユーマさん。あなたには広くこの学園に関わってもらいたいと思います」

それは学園長の願望だった。

「エイリークさんやアイリーンさん、ほかにもあなたに関わった生徒たちの成長はめざましい」

例を挙げればブースターを手にしたジン・オーバや応援団を通してアイリーンと互いに魔術の訓練に励むようになったディジー・バラモンド。

自警部で流行り出した怪しい宗教や報道部部長が改めてブソウへ

アタックしはじめたことも学園長は知っている。

「ティムスさんたち兄妹が《エルドカンパニー》を設立して生徒たちと交流するようになったのは素晴らしいことです」

「……PCリングですか」

「そうですね。あの発明品も素晴らしいものですね。あなたも開発に携わっていると聞いています」

ユーマは少し眉根を寄せる。

「勘違いしないでくださいね。学園のため、あなたを利用するために特別枠を設けたわけではありません。あくまで生徒たちのためです」

利益は人を成長する糧とはならないと学園長は言う。

「PCリングを作るまでのあなたたちの過程が素晴らしいとわたしは思うのです」

例えばエルド兄妹は自分の研究のみに没頭し他を遠ざけていた。

ルックスは自分が創った幻創獣を悪用する兄に苦しんでいた。

イース達は悪事を働く自分に嫌気がさしてもう1度やり直すことを望んでいた。

「あなたと共にいた彼らは互いに協力して素晴らしいものをつくりだしました。《エルドカンパニー》の設立と運営は彼らの成長の成果です。わたしはそれが嬉しい」

生徒を思う学園長の声は孫を見るときのようにやさしい。

「だからユーマさん。あなたにはもっといろんな人と交流を持ってほしいのです。あなたとの出会いはきっと何かのきっかけになる」

「きっかけ？」

ユーマにはもちろんその自覚はない。しかもそのくらいならエースである必要がない。

「《Ａナンバー》となれば特待生以上に活動の幅が広がるのであなたのためにもなるはずです」

「俺の？」

「ええ。初めてお会いした時のことを覚えていますか？」

穏やかな雰囲気はそのままに探るような目つきをする学園長。

「あなたにとってキリンジさんの推薦は突然の話でしたね」

「そう言えばそうですね」

「思えば精霊使いでありながら風森の城で召使いをしていたというあなたが今更ながら学園に通う理由が不明瞭でした」

そして少しだけ少年の内側に踏み込む。

「……本当は推薦文に書いてあったようにあなたは学園に何か目的があって来たのではないですか？」

「……」

学園長はユーマの正体をおぼろげながら理解している。異界の存在の可能性をだ。

それでもユーマが学園の生徒でいる限り彼女は自分の信念に従い他のの生徒と同様、彼の力にもなろうと思った。

そのためにも学園長が確認しなければならないことがひとつ。

C・リーズ学園。《聖王国》の跡地でもあるここにあるモノを彼は知っているのか？

ユーマは無言。何も答えない。

「……そうですか。ならば理由は問いません」

「……すいません」

「いいえ。……ところで《Aナンバー》はランクAより上の、学園の教師以上が閲覧できる資料も見ることができます」

「――！！　本当ですか！？」

「……」

もう少し探ってもよかったが十分だった。あまりにも子供らしく素直な反応に学園長は毒気を抜かれる。

（ほんとうに、よくわからない子ね）

知ることも知られることもまだ早いと学園長は思い直した。

学園にある秘蔵書の数々は学園長が懸念していたことではない。

元々ユーマの正体や目的を問い質してどうこうする気は彼女になかった。

「あなたの目的のためにエースの権限は必要ではありませんか？」

「え？」

特例を出してまでエースの資格をユーマに与えるのは学園の生徒のため。彼は誰のためにでも力になってくれると思ったから。

「あなたが手にした力。それがいくら正しい行いでも学園で使うのならば問題が大きい。だからわたしに少しだけ支援させてください。《皇帝竜事件》のときのようにこそこそされるとわたしにも限度があります」

突然スタジアムの使用許可を得ることができたりしたのは学園長の『わがまま』で無理を通したらしい。

やっぱりいろんな人に迷惑をかけたとユーマは申し訳なく思った。

「だからエース……生徒個人で持てる最高の権限を俺に？　それでいいのですか？」

「もちろんスタジアムの弁償の件もありますから他のエースの皆さんと同じようにお仕事もしてもらいます」

「それが働き口か。……スタジアムの弁償代を体で払えと？」

「学生ギルドの報酬よりもはるかに高額ですよ」

それこそスタジアムの弁償代を1年以内で払えるほどだという。

「もしかしてブソウさんとか年収は余裕で億越え？」

「人によっては研究費や騎士団の運営などにも必要になりますから

ね。ユーマさんは主に弁償にこれをあてます」

それが表向きの処罰。ちょっとした雑用、奉仕活動をしてもらうことにしますと学園長。

「学園内での生活は今までとそう変わらないでしょう。お仕事も必要ならばエイリークさん達に協力を仰いでもらっても構いません」

ティムスをはじめ他のエースも権限を持つことをいいことに好き勝手にしていると補足。

「悪いようにはしません。なのでエースの資格、受けてとってもらえませんか？」

「……わかりました」

お互いの思惑はどうあれユーマは２ヶ月前と同じように頭を下げて《Ａナンバー》の加入を承諾。

簡単な任命式を終えて初となる１１番目のエースが誕生した。

「これで今期の《Ａナンバー》は全員きまりましたね。では早速わたしから最初の依頼なのですけど……」

＋＋＋

学園の西区。《組合》の本部もある技術士達の研究棟の中に《エルドカンパニー》の事務所はある。

「しゃちょー。いるー？」

「その呼び方をやめろ」

エルドカンパニーの社長ことティムスは顰め面でユーマを迎えた。

「ＰＣリングの方はどう？」

「生産はまずまずだ。夏季休暇に入る前に学園の生徒全員に普及させる。今のままだと俺とポピラが生産と調整で手一杯になって利用者のデータ収集と分析に人手が足りないが」

「学生ギルドで一般募集すれば？　使っているのも同じ学生なんだし」

最終的に学園の生徒3千人のデータを集めようとすれば7人では無理がある。

「……そこにイースを使うか。あいつに人を集めさせてアルスに意見をまとめさせよう」

元グナント竜騎士団の幹部だったイースはグループリーダーに向いている。アルスは普通科出身でノートとペンを使う仕事が比較的得意。

「サンスーの兄弟は？」

「あいつらは頭脳労働向きじゃない。今は幻創獣を使って解体工事のほうに派遣している」

今は半壊のスタジアムを取り壊す大仕事があるので彼らの幻創獣

は大活躍。貸し出し用の幻創獣のレクチャーもしている。

「あとルックスは高等部への編入試験中だっけ。ポピラは？」

「……秘密特訓だそうだ」

「は？　もしかしてガンプレートの？」

「いや。護身用に持ってはいるみたいなんだが」

双子の兄は最近活動的になった妹の行動が把握できていないらしい。

「よくわからんがライバルがいるらしい。……学園であいつに匹敵する技術士なんて数えるほどしかいないはずだ」

「ふーん。ポピラも対抗意識なんて持つんだね」

「他校の奴かもな。どれほどの奴か会ってみたい気もする」

後にポピラから「強敵（とも）です」と普通科の少女を紹介されて呆気な顔をすることになるティムス。

「まあ、いいや。カンパニー、うまくいってるね」

「そうだな」

相変わらず素っ気ないがティムスはブースター関連や仕事の話以外にも雑談には軽く応じてくれる。

前に比べると性格が丸くなっているような気がした。

（俺に関わった影響……ね？）

ぼんやりとティムスの顔を見る。

「……気味が悪い。どうした？　新人」
「あ。やっぱり知ってる？」
「生徒会から一報は受けた。俺は処罰と言いながら結局幻創獣の管理を押し付けられた上でエースのままだったからな。異例の１１番か」
「やっぱりマズイ？」
エースの事はエースに聞くに限る。ユーマは訊ねてみた。
「いや、それほど悪くない。文句を言いそうなのはお前を選定の最終段階で候補から外していた生徒会の一部、要は《会長派》くらいだろう」
《皇帝竜事件》においてユーマは自警部部長、報道部部長の力を借りている。生徒会の大勢力である２人の部長とユーマの関係は悪くない。
「《組合》の方は俺やＰＣリングと工事用幻創獣の事がある。《会長派》は生徒会の中心だが外部の４大勢力の内３つはお前に友好的だ。まあ組合の長には１度挨拶に行った方がいいな」
長の方からユーマに会いたいと話があったという。
やはりティムスに会いに来て正解だったと思うユーマ。
「わかった。近いうちに《組合》に行ってみる。他に気をつけることある？」
「あの《銀の氷姫》のファンクラブ。あの副団長とかいう女は見たことがある。生徒会役員、しかも総会の書記だったはず。接点があるならあいつから話を聞くといい。１枚岩じゃない生徒会は内部の

人間が詳しい」

アイリーン公式応援団は意外にもエリート集団であったりする。

「へえ。あの人が」

「エースになれば学園の情報は嫌でも必要になるぞ」

「情報収集か。……ＰＣリングにデータベース機能を加えたいな。あとメルマガも」

「なんだそれは？　詳しく話せ」

話が脱線した。

「……成程な。要は新聞の配布とバックナンバーを保存していつでも読み返せる機能か。便利だが俺の分野じゃない」

「報道部や《図書委員》あたりに今の話をしてみよう。学園に普及してしまえば広告や宣伝代わりにも使うことができる」

「外注か。ＰＣリング用に読める情報を作ってもらうわけだな」

「そう。なんか本当に会社っぽくなってきたね」

さらにＰＣリングの新サービスを考案してみるが１時間を過ぎるとティムスが興味を失くした。

「……面倒だからもういい。俺の本職は練金術、技術士だ。サービス業じゃない。あとはルックスに任せて俺は『おもちゃ』に専念する」

「ひどいね」

社長になっても自分の研究が１番な所は変わらないティムス。

一番弟子（げぼく）にすべてを任せることにした。

「話を《Ａナンバー》に戻すけどティムスは他のエースのこと知ってる？」
「この前の全校集会で紹介されたぞ。……ああ、お前はあの時何故か空の上だったな。それが？」
「実は今日来たのはこれが本題なんだけど……」
「カード？　俺にか？」

ユーマがティムスの渡した１枚の紙。それは

“今期Ａナンバー親睦会のおしらせ”

「……」
「エース１０人にこのカードを渡して出欠の確認を明後日までにとらないといけないんだ」

これがユーマのエースとしての初仕事だった。

報酬はカードを１枚渡す毎に１０万。親睦会の出席を約束させればさらに１人につき１０万と破格。

もちろんそれだけ厄介な話だというわけなのだが。

「ちょうどお金がすぐに欲しかったんだ。だから出席して」
「……めんどくせぇ」

などと言われながらも２０万ゲット。残るエースはあと９人。

＋＋＋

エースの初仕事　任命編（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

親睦会の招待状はあと9枚。ユーマはまず《Aナンバー》の情報を求めて報道部へ。

それからブソウをはじめ知り合いのエースから探すことにした。

次回「エースの初仕事　知人編」

「部長さん。その人誰？」

「うちの幽霊部員だよ」

エースの初仕事　報道部編（前書き）

報道部にて。彼女の受難

エースの初仕事　報道部編

＋＋＋

前回までの話

エースとなったユーマは早速小遣い稼ぎに学園長の依頼を受け親睦会の招待状を１０人の《Ａナンバー》に届けることにはじめに友達でエースの１人である《天才》、ティムスに相談してみたところ……

＋＋＋

「あと９人か。お前が知ってる奴はあと誰だ？」
「ティムスとブソウさん、リアトリスさん」

《天才》、《一騎当千》、《烈火烈風》の３人。

「《皇帝竜事件》の面子だけか。となると」

思案するティムス。

ユーマはそんなティムスをみて「キャラがなんかアドバイス役に落ち着いたよな」なんて相談しておきながら失礼なことを考える。

「まず報道部だな。あそこにも1人エースがいる」
「報道部……部長さんを頼るの？」

報道部部長は報酬次第で学園のあらゆる情報を提供してくれる。
その値段は破格ではあるが。

「それはお前次第だ。ただあいつら全員の居場所を探るとなるとあの女の組織ほど役立つものはない」
「とりあえず連絡するか」

ユーマはＰＣリングを起動してピンクの風葉を喚びだした。

＋＋＋

報道部部長室。

「……うん。あ、それ本当？　だったらいいよ。待ってるね」

部長は客を招いていたが彼女はそれを放置し離れて長い耳を持つ『くま』の幻創獣と会話していた。

「……通話しているのはわかっているけど、ぬいぐるみ相手に話してるみたいね」
「……（こくん）」

部長の客は最近報道部の幽霊部員になった2人。

「いやー、ごめんごめん。依頼が入ってね。ちょっとおもしろいことになったよ」
「貴女の話は別にいいです。いいから話の続きをしましょう」
1人はリリーナ・コンベスカこと元竜騎士団幹部のベスカ。
報道部が内緒で確保した幻創獣の腕輪。その調整の為に彼女は部長にスカウトされた。今はそのことについて話をしている。
「ワタクシは技術士といっても何かを創る才能はまったくありません。できることはブースターの付与術式を盗むか壊すだけ」
「盗む？」
「そう。皇帝竜を複製できたのは皇帝竜のＩＭを解析したわけでなく直に覗くことができたからですわ」
つまりＩＭの構築式を丸覚えしたらしい。
ただしベスカは自らをおちこぼれと自負するだけあってＩＭや術式の構築は並以下の能力である。物を作る技術もない。
「ワタクシ1人じゃ皇帝竜の複製は1体につき1年以上かかります」
「他の腕輪は？」
「回収した腕輪をみましたけど殆どは修理が可能。普通の竜は使えるようにできます
報道部が回収した腕輪は《黙殺》が試験期間中に捕まえた竜騎士団のものだ。数にして３０近くある。
「ただ調整器がないと新規で幻創獣を創るのと強化は無理。もちろ

ん調整器を作ることもね」
「そっかー。それでも十分かな。竜のままだとミツルギ君たちに簡単に無力化されちゃうけど」
「……」

《竜殺し》の術式は現在ユーマの持つ《銀の悪魔》とティムス、そして自警部が所持している。

ブソウを通して自警部に《竜殺し》が渡っているのは、行方の知れない幻創獣の腕輪があるので竜騎士団の残党対策のためである。
（報道部のデマでもある）

ベスカは《皇帝竜事件》の際《精霊使い》と敵対していた。竜殺しの剣に貫かれたこともあるので当時の事はあまり思い出したくない。

無意識に左腕を抑える。

「……（こくん、こくん）」

ところで話に混ざらず船をこぐのはもう1人の幽霊部員。

「《黙殺》、寝ようとしないで」
「……朝は……ねむいの」
「今は4時過ぎです！」

ベスカの同僚である黒いローブを纏った彼女は日中意外とだらしない。

「ほら、貴女はもういいからそこのソファで横になってなさい。……ちょっと、ローブは脱いで。皺になるわよ」
「……くー」
「立ったまま寝ないで！」
部長、爆笑中。
「何この子？　これで年上？　元エースだというの？」
憤りながらも《黙殺》をソファに寝かせるベスカ。
「まあしーちゃんの実力は君も嫌というほど知っているでしょ？伊達に《アサシン》なんて学園にないクラスを名乗ってないよ」
「そうですけど」
以前は敵対する組織にいた2人。ベスカは直接対決することはなかったが誰にも悟られず影で彼女に掴まった竜騎士団は多い。
《黙殺》は熟睡。ローブを脱がされ素顔を晒している。
あらわになる美貌と流れる水色の髪。長身の上にローブ下のだとわからなかったがスタイルも良い。
安らかに眠る彼女はまさに眠り姫。
「それにしーちゃんはこんなに美人さん。……これでボクと同い年なんて詐欺だよね」
「……貴女も3年生でしたわね」
ベスカにすれば年相応に見えない《黙殺》よりも生徒会の上層部

の一員なのに落ち着きがなく、やりたい放題の部長の方が詐欺だと思う。

「本当に……もう」

ベスカは彼女の頭の下にクッションを敷き、どこからとなく毛布を取り出した。

「リリーナさん。君、意外と世話焼きさん？」

「なっ！？　違います。それに名前で呼ばないで」

無意識だった。ベスカにはそそっかしくて頼りない友達がいて彼女がいつも世話をしていたのだ。

反射で動いていた自分がベスカは恥ずかしかった。

「ワタクシの事はいいですから話の続きを」

「待って。そろそろだから……はい。これあげる」

「はぁ！？」

訳が分からない。部長から渡されたのはかつらとか帽子とか変装セットのようなもの。

「何を……？」

「部長さーん。お客っす」

ベスカが訝しんだその時、報道部の部員が来客を告げた。

「ミツルギさんっすよー」
「なっ！？」

ベスカは慌てた。来客はかつての敵。竜騎士団を壊滅させた張本人だ。

「来た来た。うん、予想通りの時間」
「貴女！　一体」
「さっき依頼を受けたんだよ。今は君もここの部員なんだし堂々としたら？」
「冗談じゃありません！」

ならばどうして変装セットなど渡すのか。

ベスカは一応《皇帝竜事件》の主犯の1人として処罰され転校していることになっているのだ。

「抜き打ち！　報道部員適性テストぉぉぉぉ！！」
「貴女って人は！！」

ブチ切れた。

ルールは簡単。《精霊使い》に顔が知られているベスカが正体を見破られずこの場を乗り切ること。

「ばれたら今度こそ退学ね。転校の手続きはしてあげない」
「こ、このっ」

「部長さん。俺です。入りますよ」

「いいよん」
「!?」

《精霊使い》はもうそこまで来ている。

ベスカに逃げ場はない。

＋＋＋

部長に連絡をとったユーマはエースの情報を求めて報道部へ。

「こんにちはー」
「うん。いらっしゃい」

上機嫌でユーマを迎え入れる部長。

「楽しそうですね。何かあったんですか?」
「うん。今からなんだよ」
「?」

思い当たることはあるがユーマは首をかしげた。

「それよりミツルギ君、エース就任おめでとう。１１番目ってやっぱりおばーちゃんのわがまま?」
「いえ。表向きは奉仕活動ですけど学園長が便宜を図ってくれたんです。むやみに精霊たちを使わないようにって」
「へーえ。……本気出せば学園を半分吹き飛ばせるなんて本当?」
「風葉で半分。砂更がもう半分を砂に変えるから学園は崩壊です」

「ははは」

朗らかに物騒な話をするユーマと部長。

（……冗談？　それとも本気？）

２人の会話を聞いているベスカは敵に回した彼らのことを測りかねていた。

「ところで部長さん。その人誰？」

「――！！」

気付かれた。

「うちの幽霊部員だよ」

「……おばけ？　なんかもぞもぞしてるけど」

「……」

ベスカは部屋の隅で《黙殺》のローブを頭から被り背を向けている。しゃがみ込み変装している最中だ。

端から見れば怪しいまっ黒おばけである。

「まあ、いいや。それで部長さん、さっき連絡したことなんだけど……」

「部長さーん。またお客さんっす。あ、サイン貰っていいっすか？」

「僕なんかの貰ってどうするの？」

ユーマに続く来客。実はユーマが『彼』を報道部へ呼んだのだ。

「じーん。こっちだよ」

（！！！？）

ベスカは動揺。鼓動が跳ね上がる。

（じ、ジン・オーバ！？　どうして？）

「失礼します」

「いらっしゃい。ようこそ報道部へ。ボクがここの部長だよ」

ボクのフルネームが知りたいならお金ね、と相変わらずの部長。

ジンはそうですか、と微笑みながら流した。

「呼ばれてきたけど僕は何をすればいいの？」

「まずはボクの取材に付き合ってね」

ジンはユーマに訊ねたのだが、そこにぐいっ、とジンの前に出て割り込んでくる部長。

「新入生の話を聞きたいんだけどなかなか取材を受けてくれる人がいなくてね。ミツルギ君に友達を紹介してもらったんだ」

方便である。

部長の思惑は新入生の中で人気のあるジンの個人情報の入手。仕

入れた情報は出すところに出せば高値で売れるのだ。

そしてユーマはジンを紹介し、取材の機会を設けることでエースの情報を部長からタダで手に入れる話をつけていた。

要するに友達を売りやがった《精霊使い》。

「わかりました。僕でよければ」

そしてジンは友達を疑うことがないほど人がよかった。

（何故断ってくれないのよ！）

部屋の隅にいたベスカことまっ黒おばけは声にならない絶叫。

ジンとはいろいろあったのでますます正体がばれるわけにいかなくなった。

「本当？　ありがとね」

「ええ。……ところで、あの人は誰ですか？」

「――！！」

気付かれた？

「うちの幽霊部員だよ」

「はぁ。……よく眠ってますね」

「うちは自警部に負けないくらい激務なんだよ」

「……ＺＺＺ」

違った。どうやらソファで眠っている《黙殺》のことらしい。

注目された彼女は今も静かにしている。

「綺麗なひとですね」

「あれ？　彼女はジン君の好み？」

（なんですって！？）

「いえ。どこかで会った気がするんです」

「ジンも？　実はこの人俺も初めて見た気がしないんだ」

ユーマとジンが思い浮かべるのは同じ人物。

「《黙殺》さん？　……いや、こんな無防備な人じゃなかったよな」

ユーマの中の彼女は皇帝竜の必殺技をぶった切るクールですごい人。第一印象が先行して目の前の彼女とローブ姿の《黙殺》が結びつかなかった。

この時だけは素顔を見られても正体がばれない彼女が恨めしく思うベスカ。

「ユーマ、《黙殺》ってどんな人？」

「前に助けてもらったことがあるんだ。黒装束で大きな鎌を持った人。あと片方の目を紅く光らせてたな」

「……あの人だ」

ジンは《皇帝竜事件》のことを思い出す。

「知ってる？」
「うん。僕も助けてもらったから。確かそこにあるような黒いローブを着ていて……」
（ああっ！？）
今度こそ気付かれた。
「ユーマ？」
「……うん。そう言われると見覚えがある。本物？」
「そうかもねー」
無責任な部長。
（さーて、どうするかなー）
（覚えてなさいっ！）
ベスカはもうパニック寸前。
「あの」
「ひゃっ！」
ジンに声を掛けられて悲鳴を上げるまっ黒おばけ。
「大丈夫ですか？　ずっと蹲っていたみたいですけど」
「ち、ちょっと目眩がして。だ、大丈夫ですから」
早く出ていってー、とはベスカの心の声。

「ほら、そんなもの脱いでちゃんと挨拶したら？　リリーナさん？」
「だから名前を呼ばないで！！」
思わず怒鳴って部長を睨みつける。
もちろんローブはその時に勢いで脱いでしまった。
「あ……」
ベスカの目の前には彼がいた。怒りとは別に顔が赤くなる。
彼女を『射抜いた』黒髪の少年。忘れられなかった黒の瞳。
「……どこかで会いませんでしたか？」
「そんなことありません！」
咄嗟に手にした毛糸のニット帽を『かつら』の上から目深に被った。
肩までの長さで毛先を内巻きにした金髪。化粧は時間がなかったので逆に落としてすっぴんにした。
ただし彼女の小豆色の瞳は隠しようがなかったのでここは賭けだ。
（ばれませんようにばれませんように）
ジンのうしろでニタニタしている部長が憎らしい。それ以上にベスカはジンを見て激しく動揺する自分が恨めしかった。
（何よ。彼はワタクシを傷つけた男。敵だったのよ。なんで……）

ベスカはジンに『射抜かれた』自覚がない。

「あなたは？」

「ワタク……いえワタシは」

「彼女はリリーナさん。今度報道部が行う新しい企画の責任者なんだよ」

「……ええ」

嘘はついてない。秘密保持した幻創獣の管理者であることは内緒だ。

部長の助け船（？）にジンとユーマは「へぇ」と納得。不本意だがベスカの本名がそのまま偽名で通った。

「さあ、本題に入ろうか。みんな座って。あ、リリーナさんはジン君の隣ね」

「くっ」

絶対にわざとだ。部長の彼女はなにをどう知っているのだろうか？

「ミツルギ君。確か今期の《Ａナンバー》の資料が欲しかったんだよね」

「はい。まだ足りませんか？」

首を振る部長。ジンを連れてきたことが報酬以上に楽しむことができた。

「これからもごひいきにね。資料はもう用意しているから。……ミ

スト君」

ぱん、ぱん、と部長は手を叩く。すると

スタッ

「これです」
「うん。御苦労さま」
「……え？」

部長以外の全員が驚いた。突然現れた1人の男子生徒。

口元をなぜかマフラーで隠している。

「では部長」
「これがお駄賃ね。期間限定の特ダネ」

ミストと呼ばれた男子生徒は渡されたメモを見て目を見開いた。

「流石です！　俺、一生あなたに付いて行きます」
「気持ち悪いからそれは卒業するまでにして。もういいよ」
「では。――っ！」

消えた。遠くでヒャッホーッ、と叫び声が聞こえるのは気のせいか？

「……部長さん？」
「ああ。あれが報道部に所属するエース、《霧影》のミスト君だよ」

「《忍者》ですか？　東校以外にもいるんだ」

「ワタシも初めて見ました。……どこから？」

ジンとベスカは驚いたまま茫然。

報道部の部室は普通の校舎の一室で天井裏なんてないはずだが、実は隠し通路がたくさんある。

「あ。招待状を渡しそびれた」

「居場所はボクがわかるからあとで行けばいいよ」

《霧影》の行く先はきっと部長が渡したメモに書いてある場所のはず。

部長の渡した特ダネ。それは

“《烈火烈風》、ただいま喫茶『ハイドランジア』にてご奉仕中”

“あの女騎士のドジっ娘ウェイトレス姿が見られるかも”

ｂｙ部長

「ミスト君はただの変態なんだよ」

ミスト・クロイツ。３年生で《Ａナンバー》の１人。報道部隠密班筆頭。

隠し撮りが趣味の《念写》能力者（カメラマン）だったりもする。

エースの初仕事　喫茶店編（前書き）

《霧影》、《烈火烈風》……

……3話目でまだ3人かぁ

エースの初仕事　喫茶店編

＋＋＋

前回までの話

報道部で《Ａナンバー》の情報を入手したユーマ。その時にエースの１人、《霧影》に出会うが招待状を渡しそびれてしまう

彼を追いかけるため、ユーマは喫茶『ハイドランジア』へ向かうことに

「ボクも行くよ。だからリリーナさん、ジン君の取材お願いね」

「ええっ！？」

というわけでベスカの試練はまだまだ続く

＋＋＋

ハイドランジアは学園内で経営している喫茶店。創業５０年、当代の学園長が女生徒だった頃からあるという。

ここに今《Ａナンバー》である《霧影》、そして《烈火烈風》の

2人がいるらしい。

「リアトリスさんはどうしてここに？」

「奉仕活動。《皇帝竜事件》ではブソウ君と一緒に君を匿っていたからね。ちょっとした罰ゲームだよ」

ユーマに協力してくれた赤毛の騎士もまたユーマやティムス同様学園長から処罰を受けていた。

「おばーちゃんに生徒会からエースの責任問題を問われる前に手を打ってもらったんだ。これを理由に彼女がエースの資格を奪われるのはボクにとっても痛い話だからね。ちなみに罰ゲームを考えたのはボク」

聞けばその喫茶店の店長は学園長の茶飲み友達という。彼女の伝手でリアトリスは数日の間接客の仕事をすることになった。

「あの人にも迷惑かけたんだな。もしかしてブソウさんも？」

「ブソウ君はお咎めなし。というよりも彼は君の被害者でしょ？あそこまでやつれると流石に」

「……」

自警部は試験期間から続く《皇帝竜事件》の事後処理と通常業務で組織自体が潰れかかっていた。特に部長であるブソウは報告書の確認が終わらず今も本部で寝泊まりしているらしい。

「日に日に弱ってくる彼を見るとなんかこう……きゅん　ってこない？」

「それはおかしいです」

ユーマはブソウを憐れみ、今度甘いものを持っていこうと思った。

＋＋＋

「ここだよ」

「うわっ、人多いですね。こんなに人気のあるお店知りませんでしたよ」

部長と2人例の喫茶店へと来たユーマ。外にいる客の多さに驚く。

行列ができているわけではない。窓という窓に人が張り付いている。

「多くは一見さんだね。お昼はともかくこの時間帯ならいつもは常連だけなんだけど、期間限定であの《烈火烈風》がウェイトレスなんだから」

「確かにイメージにギャップはあると思いますけどそんなに注目されるものなんですか？」

常に甲冑姿の女騎士を思い出しながらその店構えを見る。木造のこぢんまりとしたお店。

ペンキで白く塗られた花壇の柵。店の外回りは花で飾られている。

「紫陽花。ハイドランジアってそう呼ぶんでしたっけ？」

「詳しいね。もう少し先が咲き頃なんだよ。ここは学園の花の名所のひとつ」

「『水の容器』の花でお茶屋さんか」

店の中に入る。そこでユーマは怪奇現象を見た。

ティーカップやケーキが宙を浮いている。

「……いらっしゃいませ」

「……」

「……ぶふっ」

部長は思わず吹きだした。

リアトリス・ロート。《烈火列風》の魔法騎士。学園では渉外（他校との連絡と交渉役）の任を受け持ちエースとしても上位の実力を誇る。

そんな彼女が身の纏うのはいつもの銀の甲冑ではなく淡い青紫のスカートにフリル付きの白いエプロンを組み合わせたエプロンドレス。

店の制服だが意匠としては可もなく不可もなくといったところ。リアトリスにも似合うしそれは問題ではない。

リアトリスは転んでいた。ユーマと部長に「いらっしゃいませ」と言った時はおしりを2人に向けたまま。

「何で転んだんですか？」

「……バナナだ」

フルーツパフェをこぼしてそれを踏んだらしい。

＋＋＋

一方その頃。

「あのう、取材の方は？」
「ち、ちょっと待って下さい」

ジンと2人きりにされたリリーナことベスカは焦りを抑え部長から渡された取材メモを取り出す。

“ズバリ、あなたの女性遍歴は？”

ぐしゃ

「聞けるか！！」

握りつぶした。

＋＋＋

「あはははは。君はボクの予想を裏切らないね。チーズケーキに紅茶ね」
「うん。今のはエイリークが言ってる『リア先輩』だった。俺はこのホットケーキセットで」
「……かしこまりました」
憮然とした表情で注文を受けるリアトリス。
「君たちも私を笑いに来たのか？　言っておくが私は皿もカップも1度も割ってないんだぞ」
「さっきみたいに《浮遊》を瞬時に発動させるのはすごいんだけど、使わざる得ない状況になるのがありえないんだよ」
自慢する彼女を部長は切り捨てる。
「……少々お待ち下さい」
逃げた。
「あー今日は楽しいな。リリーナさんでもリアトリスでも遊べるし」
「何気に酷いこと言ってますね？　でもあんな調子でお店に迷惑かけてないんですか？」
「大丈夫みたいだよ。ウェイトレスさんは他にもいるんだし」
確かに青、紫、赤紫と色違いの制服を着るウェイトレスがいる。
しかし部長には他にも思うところがあった。
しばらくしてユーマ達の注文を持って来るリアトリス。ふらふらと危なっかしい。鎧を着てないと彼女はどうも注意力が散漫になる。

すれ違う客に気付かず肩をぶつけた。転びそうになる彼女を支えるのは金髪のウェイター。

「ああもう、休憩終わりましたから手伝います」

リアトリスに手を貸すウェイターはワイシャツとスラックスという服装の上にエプロンを身に付け、髪をまとめ上げた美少年。

「いつもすまない。８番のテーブルに持って行ってくれないか？」
「わかりました……って」

ウェイターはユーマを見た。翠の瞳は驚きで大きく開かれる。

「なんでアンタが！？」
「エイリーク？　どうしてここに？　……なんで男物なの？」
「誰が好き好んでひらひら着なきゃいけないのよ！！」

先輩であるリアトリスにヘルプを頼まれたエイリークだった。

「もったいない。ここの制服は被服科の生徒が毎年デザインする人気のある服なのに」
「アンタは確か……」
「部長さん」

顔見知り程度のエイリークに適当な紹介。

「残念。《竜殺し》で人気上昇中の《旋風の剣士》のウェイトレス姿が見れると思ったのに」
「こんな人」
「……わかったわ」

十分に伝わったようだ。

「それで？　アタシはアンタのせいでお金なくて、今仕事しなきゃいけないんだけど」

なのにアンタは働くアタシの前でホットケーキ？　と剣呑なウェイターさん。

「悪かったよ。とりあえず預かってた２００万をすぐに返すアテはできたんだ。それでリアトリスさんに用があるんだけど……」

「あっ！」

少し目を離していたらリアトリスはティーポットと一緒に宙を飛んでいる。何故？

「間に合えっ！！」

エイリークは駆け出すと床を蹴りジャンプ。

空中でリアトリスとティーポットをキャッチするとお姫様だっこのまま着地。ティーポットの中身を溢さなかったのは神業である。

「お騒がせしました」

何事もなかったかのように接客用の笑顔をお客に向けるエイリーク。拍手に歓声があがる。

「……慣れてるなぁ」

「あの見世物、このお店の名物なんだよ。女性客が多いのも男装の

彼女がいるからなんだ。今のも美男美女でお似合いでしょ？」
「エイリークばっかり負担かかってますね」

それから先もリアトリスをフォローし続けるというかそれしかしないエイリーク。

先輩想いというより騎士の本望なんだろうということでユーマは納得した。

＋＋＋

その頃のベスカさん。

ジンに正体がばれないかと冷や冷やしながら適当な質問を繰り返す。

（これ、いつになったら終わるの？）

遂に話題がなくなった。

「これで終わりですか？」
「い、いえ。待って下さい」

（ワタクシのバカー！）

平常心を保てないベスカは切り上げるタイミングを誤った。

決して彼ともう少し話がしたかった訳ではない、と思う。

「えと、えーと」

「リリーナさん？」

錯乱するベスカ。

ジンとの共通の話題を探した挙句、彼女はやってしまった。

「……りんりんって知ってる？」

＋＋＋

ユーマは店長に話をしてリアトリスを強制で休憩にしてもらう。

彼女は仕事しない方が店の負担にならないので快く了承された。

「親睦会？　わかった。出席しよう」

「やった。これで４０万」

「……親睦会なんて今までしなかったのだが」

リアトリスは学園長の意図が読めない。

「いや、私の事もある。学園長には何か思うところがあるのだろう」

「ん？」

刑罰でウェイトレスをやらせたのは学園長ではない。リアトリス

の目の前でケーキのおかわりをほおばっている彼女なのだが。

「あと8人。そういえば部長さん、《霧影》のミストさんもここに来ているって言ってませんでしたか？」

「なんだと？」

「ミスト君？　そうだねぇ……そこっ！」

部長は突然手にしたフォークを壁に向けて投げる。

「……流石です。部長」

「いや、ハズレてるし」

ユーマはもう驚きはしなかったが《霧影》はフォークを投げた反対方向から歩いてきた。

「ミスト君！　この場合は出てこないのが正解なんだよ！　当てずっぽうでも『ちっ、はずしたか』って言うのがかっこいいんじゃないか！」

「俺が普通にで出てくることで馬鹿っぽくなりましたね」

部長、羞恥で震える。珍しい反応。

「……フフ。素で恥ずかしがる部長もイイですよ。撮りますか？」

「この変態マフラー！！」

念写器（便宜上カメラと呼ぶ）を構えるミストを蹴り飛ばすと部長は容赦なくスタンピング。

「……フフ」

「こ、このっ」

「待て！　……ミスト。貴様、何を撮った？」
「真実」
《霧影》は《烈火烈風》に向けて堂々と答えた。
「俺は真の念写能力者。妄想に囚われず目の当たりにした真実のみをカメラで写し撮る。それがエースとしての俺の使命……」
血を流しボコボコにされた《霧影》は何事もなく立ち上がる。
彼の使命感から溢れる誇り高きオーラに誰もが息を飲む。
「そう！　エプロンドレス姿で笑顔を振りまく《烈火烈風》、リアトリス・ロート。転んで魅せるその真実（チラリズム）に俺は感動した！！」
でも紛れもない変態だった。
「それ以上に俺は見た。あたふたと動き回る彼女に合わせて揺れる胸、鎧の下に隠されていたその真実（いーかっぷ）！！　そして……」
溜めに溜めて……叫ぶ。
「彼女が1人でこっそりこう……くるっ、とスカートを翻して照れていたときなんかもう……サイコウ！！！」
店内の男共は湧いた。
ミスト・クロイツ。彼の求める真実は美少女の意外な一面、ただそれのみ。そのためならば変態と呼ばれようが彼はあらゆる場所に潜みありのままを《念写》する。

強い信念（せいへき）を持ち、高い潜伏能力に加え捜索、追跡の能力にも長け、さらに隠密性を買われてエースとなった強者（へんたい）である。

男子生徒はこの真実の伝導者を影で勇者と讃え、彼の新作に想いを馳せるのだった。

「変態がっ」

リアトリスは剣を抜く。それで男共を黙らせた。

剣をどこから出したかはともかく、《烈火剣》と羞恥心で剣と顔を赤くして完全に切れた。

「まだ現像していないのだろう？　カメラは壊して貴様の記憶を抹消。そのあとで消し炭にしてやる」

「フフ。できるか？　あの《天才》は言っていたぞ」

不敵のマフラー男《霧影》。歪む口元は赤いマフラーで見えない。

「鎧を着てない《烈火烈風》などただのボケねーちゃんだと」

「戯言を」

一触即発。

「ちょっとまったあぁぁぁぁ」

対峙する2人のエースに割り込むのは部長。

「落ち着きなよ。お店の中で暴れない。ただでさえエース同士の喧

囁はご法度なんだよ」
「何を言ってる！　貴様の部下だぞ」
食ってかかるリアトリス。いつもの落ち着きがない。
「わかってる。さすがに今日のミスト君にはボクも怒った。でも今の君じゃ無理だよ。だからミツルギ君、君に任せる」
「……え？　ここで俺なの？」
ご指名のユーマは話を無視して《Ａナンバー》の資料を読んでいた。
「えーと、とりあえずこれエース親睦会の招待状です。是非出席して下さい」
「それはどーも。この場を見逃してくれたなら出席してもいいよ」
とりあえず１０万ゲット。
「ミツルギ」
でもって剣を持って睨むウェイトレスさんが怖い。
「……ミストさん、とにかく勝負です。俺が勝ったらカメラの没収と親睦会の出席。ミストさんが勝ったらこの場は見逃すということで」
「条件が対等じゃないな。君の要求は２つもある。だから」
ミストは大騒ぎする自分達を無視して接客する給仕人を見た。
「俺が勝ったらそこの《旋風の剣士》、彼女にハイドラの制服を着

せる。どうだ？」
「ん？　別にいいですよ」
即答して了承するユーマ。勝手にエイリークを巻き込んだ。
「ミツルギ、いいのか？」
「いや、制服をちゃんと着ないあいつのほうがおかしいんだし。リアトリスさんだって嫌々ながらも着てるんでしょ？」
「……まぁな」
内心自分のウェイトレス姿にちょっと喜んでいたとは言えなくなったリアトリス。
「フフ。見どころのある後輩だ。報道部に入らないか？」
「それはまた今度で。ルールは？」
「決闘はマズイだろう。それに俺は真実を追い求める報道部員。だから後輩、君は俺に真実を見せてくれ」
両手を広げさぁ、と言わんばかりのミスト。
どうでもいいがマフラーを口元で隠しているのに彼の声はよく通る。
「真実？」
「インパクトのある写真を見せればいいんだよ。主に美少女」
部長が通訳してくれた。
「写真ってそんなすぐに……ってあった」

偶然にもＰＣリング販売イベント後に打ち上げした時に撮ったものがユーマの鞄の中にあった。

「ほう、用意がいい。流石は《アナザー》。１１番は伊達ではないと」

「……もし写真持ってなかったらどうしたんですか？」

「撮りに行かせる間に逃げる」

ミストは卑怯者だった。

「ここからが勝負だよ」

「部長さん？」

ユーマが写真を受け取ったのは今日、報道部を出る前だ。彼女はこの展開を予想してたのではないだろうか？

「ならば正々堂々と戦うしかない！　３回勝負だ。１度でも俺の魂を震わせる真実を見せてみろ！」

ミストは戦闘しないのに無駄に構えをとる。ユーマはとりあえず無視して写真を選んだ。

「えーと、これ？」

「ガフッ」

「何だと！？」

驚いたのはリアトリス。

吐血するミスト。彼のマフラーが赤いのは血のせいかもしれない。

「……キサマ、ナンダソレハ」

「リュガ子とアギ美」

打ち上げの時の悪ふざけで罰ゲームの写真だった。

詳細は割愛するが女装したバンダナ兄弟は攻撃力が高い。

それを見たリアトリスが顔を背ける程。

「魂、震えました？」

「吸い取られそうだ……あと2回」

ミストはこの真実（あくむ）を認めなかった。

「インパクト勝負かぁ……これ？」

バタン！！　ぴくぴく

「何が起きた！！」

リアトリスは戦慄。

ミストが倒れた。たかが写真を見ただけで痙攣している。

「……ミツルギ？　何を見せた」

「あー。見ない方がいいかも」

それはお世話になった先輩の見舞いに行った時、丁度眠っていたのでついやってしまった悪戯。

ブソ代。

リアトリスは病室で安らかに眠る自警部部長の写真を見て泣きそうになった。

「……あと1回だ」

「もういい！　ミスト、ミツルギは君を殺す気でいるぞ」

震える身体で起き上がるミストにリアトリスは同情した。ユーマの悪質な写真は《真実の目》を持つミストにとって害悪でしかない。彼女は気付いたのだ。

ミストは勘違いをしている。ミストの敵はユーマではない。その背後には報道部部長がいる。

写真の現像は彼女がしたはず。だからユーマの写真の中身をきっと知っている。

部下であるミストの事をよく知った上でこの展開に持っていった部長の彼女が真の敵なのだ。

からかわれたことがそんなに許せなかったのか？

「降参はしない。……忘れるな。この勝負は《烈火烈風》、お前の写真と《旋風の剣士》のエプロンドレスが懸っていることを」

退く理由がミストにはなかった。それさえも彼女の罠だと知らずに。

「……さあ来い。俺の魂はこの程度では消されはせんぞ！！」

「魂震わせろって言ったのに……とっておきがあるよ？」

「……いや、できれば美少女がいい。どうせ死ぬなら絶世の美少女を見て死にたい」

恐るべき真実（じごくのおに）を見たあとのミストはちょっと引いた。

どの道次の写真で死ぬ覚悟はあるらしい。

「じゃあそれで。はい」

ぷしゃぁぁぁぁ

「……もう、なんだこれは」

リアトリスは呆れた。

ミストは天を仰ぎ、それから倒れた。満足な笑みを浮かべている。

「……ありがとう後輩。俺は……」

――天使を見たよ

「……ミツルギ」

「これです」

ユーマが見せた写真は半脱ぎの美少女が野郎どもに着替えさせられる図。

天使は癖のあるふわふわした金の髪をしており覗く肌は写真で見てもきめ細やか。

涙目でこちらを見る幼い顔立ちは保護欲を煽られ、男女問わず誰もが魅了される。

天使の名はルックス・グナントという。

「……君達は一体何をしてたんだ？」

「打ち上げ中にやったゲームで罰ゲームが女装だったんだ」

他にもエルド『姉弟』や４人組の写真がある。

「みんな弱いよね。ババ抜き」

「……」

罰ゲームを免れたのはユーマと《直感》持ちのエイリークのみ。

（彼女の罰ゲームは男装ではなくフリルスカートの着用）

「ミツルギ君も酷いよねー。《銀の氷姫》の男装写真でも見せればミスト君なんか一発なのに」
「そう仕向けたのは部長さんですよ。自分の男装写真だけ抜いたでしょ？」
えへへ、と誤魔化す部長。
「それに俺も恨みがあるから。……この人ですよね？　去年の文化祭の写真撮った人」
「……まあいい。この馬鹿のカメラは取り上げるぞ」
「……そうは、いかない」
女装少年の写真で昇天したはずのミストは幽鬼の如く立ち上がる。
「ミスト！？」
「この勝負、俺の負けだ。約束通り親睦会には出席しよう。……しかし！　この俺の半身（カメラ）はやはり渡せん」
「貴様、鼻血の出し過ぎでふらふらの癖に何を？」
「こうするのさ！」
ミストは残る力を振り絞りカメラを遠くに投げた。
「フッ。後は任せぞ。ブラザー……」
カメラを受け取ったのは店の出入り口にいた緑髪のトサカ頭。
「任されたぜ、ブラザー！」

トサカ頭はカメラを持って店を出ると空を翔けていく。

「《鳥人》か！　あのトリ頭め」
「だれ？」
「《Ａナンバー》の１人だよ。ミツルギ君、追って！」
「えー」

まさか他のメンバーも同じノリの人ではないのだろうかとユーマは不安になる。

「はぁ。いくよ、風葉」
「はーい」

久しぶりの出番の精霊を連れてユーマは《天駆》で空を駆ける。

成り行きでカメラを持つ《鳥人》を追いかけた。

「リア先輩、いい加減片づけてもいい？」
「これを埋めてくれ」

撒き散らした鼻血を拭くモップとゴミ袋を持ってきたエイリークにミストを差し出すリアトリス。

エイリークは面倒になってゴミは《旋風剣》で遠くに飛ばした。

＋＋＋

一方その頃。

「へぇ。リン先輩って《組合》でお店出してたんですね」
「そうよ。あの子ったらお茶淹れるのへたくそなのに茶葉を発酵させたりするのは上手なのよ」

ベスカはジンに正体がばれないまま、共通の友人の話で何故か盛り上がっていた。

＋＋＋

エースの初仕事　自警部編（前書き）

《鳥人》、《一騎当千》……これで5人

＋＋＋

前回までのベスカさん

報道部の幽霊部員として暗躍する彼女は部長の罠にかかりジンと対面。２人きりに

気になる少年に正体がばれるのを恐れるベスカだが思いのほか彼女の変装にジンが気付かない

「一度あの子のお茶を飲むといいわ。よかったらワタシが淹れて差し上げます」
「はい。今度ユンやセリカさんにも教えよう。ベルティナさんや先輩たちは知っているのかな？」
「……女のひとばかりね」

２人の雑談は続く

＋＋＋

ユーマは今空を駆けている。前を翔けるトサカ頭を追いかけているのだ。

「《鳥人》。たしか部長さんのメモによると……」

先程読んだ資料を思い出す。

《鳥人》、ヒュウナー・フライシュ。戦士科の2年生で《天翔術》を扱う学園の特攻隊長。（自称）

空中戦に特化。これしか能がない。鳥頭。

無所属の《会長派》。不良というよりも悪童。悪戯しては空に逃げる馬鹿。

“《Aナンバー》である前に学園のバカ代表なんだよ。トリ頭だし”

by部長

「なんだかなぁ」

辛辣だった。

しかしユーマは彼に追いつけない。《鳥人》の飛行方法は宙を走る《天駆》と根本的に違うようだ。

「埒が明かない。風葉」

「びゅーん、ですねー」

《高速移動》を併用して一気に距離を詰める。

「捕まえた！」
「甘いわ」

背後からのタックルをひらりと躱すヒュウナー。そのまま空中でターン。

ユーマは勢い余ってつんのめり、地面に向けて真っ逆さま。

慌てて《突風》で姿勢を制御して着地した。

「……もう1度だ」

直線のスピードならユーマが上。でも追いついくことができてもなかなか捕まえることができない。

「ステップ！」
「いなずまー、あたーく」

正面に回り込んでフェイントを交えたジグザグ走法で突進。《高速移動》を使うユーマの得意技。

しかし《鳥人》はユーマを相手にせず上昇と下降、縦方向の飛行移動ですり抜けた。

ユーマは捕まえきれずにまた着地。

《天駆》で宙を蹴り上げれば上昇はできるが下降は自由落下もしくは《風乗り》による滑空しかできない。疑似的な飛行には限界が

ある。

「駄目だ。スピードで勝ってもあの身のこなしと立体的な動きをされたら」

「ワイに空で挑もうたぁ甘すぎるわ。新人」

余裕の《鳥人》。ヒュウナーは今度は空中で『制止』している。

「《天翔術》は自由自在や。お前さんの紛いモンの飛行とは違うんやで」

実際にヒュウナーの飛行は軽やか。ユーマのように走ったり風で制御するような無駄がない。マンガで見る超能力者のような飛び方をしている。

「つーわけでブラザーの魂（カメラ）は貰うとく。赤騎士の姐さんのレアな写真燃やしてたまるかい」

「下手すると俺が燃やされそうなんだけど」

「知らん」

ヒュウナーは空を逃げる。ユーマは撒かれないようとにかく追いかけた。

直線ダッシュで追い付いて切り返しで離される。この繰り返し。鬼ごっこに終わりが見えない。

「どうにかしてカメラをとり返さないと。風葉、あれと同じ術式は使えないの？」

「きっとオリジナルのゲンソウ術ですよー。《天翔》とはべつものですねー」

「その《天翔》は？」
「習得にはー、あと２０万のけいけんちがー」
「……要は高位の術式で使えないんだな」

最近の風の精霊はどこで覚えるのか俗っぽい。

「どうする？　それにどうして俺がカメラをとり返さないといけないんだ？」
「それですけどー」

根本的な疑問を口にするユーマに風葉も疑問があった。

「カメラはー、壊していいのではないですかー？」

＋＋＋

逃げる《鳥人》、ヒュウナー・フライシュ。実はユーマの事が前から気に入らない。

彼は《会長派》。生徒会長が《竜使い》の代わりにとスカウトしたのだ。

《皇帝竜事件》を通してユーマを危険視した生徒会長。本来の《Ａナンバー》の候補１０人から無理やりユーマを外し、空いた席に選ばれたのがヒュウナーである。

知る人から言わせれば彼は間に合わせの第９位と揶揄される。（ティムスは技術士なので１０位に固定）それでいてユーマが異例の

１１番、《アナザー》のエースとなったのでますますヒュウナーの立つ瀬はない。

ただし彼はこれに関しては気にしていない。エースなんて本当は柄じゃない、いわくつきの方がアウトローな感じで箔がつくと彼は思っている。

それに次点だとしてもまだ2年生である彼の評価は正当なもの。隠れる場所のない空を戦場とする《鳥人》は常に相手に姿を晒さねばならない。ただ飛べるだけでは対空攻撃の的にしかならないのだ。

ヒュウナーの実力は並ではない。ただ1人に向けられる火線を掻い潜る度胸と空からの強襲、その突破力は現エースのツートップをぶち破ったこともあるのだから。

彼がユーマの事を気に入らないのは別に理由があった。

空中鬼ごっこは続く。しかしヒュウナーの後方にいるユーマは意外とおとなしい。

「なんや。アギの『舎弟』と聞いとったが根性なしかい？」

すると

びゅん

「……な」

《風刃》のカマイタチがヒュウナーのトサカを掠めた。

「外したか」
「まてぇい！」

短剣を構えていたユーマに突っ込み。

「おまっ、本気かい！？」
「作戦変更。捕まえれないなら撃ち墜とす」
「てめっ、こっちには人質（カメラ）が」
「どうせ壊すからついでに……」
「ついでで人を撃つんかい！！」

絶叫の《鳥人》にユーマはガンプレートを抜く。

「ジンがいれば狙撃で一発なんだろうけどなぁ」
「へたなー、てっぽもかずうちゃあたるー」
「黙らんかい！」

うたう風葉にも突っ込む《鳥人》。

「というわけで勝負」
「ええい、逃げ切ったる」

ハンティング開始。

「ストーム・ブラスト」
「なんの」

容易く躱されるがこれは牽制。

「ダブルブーメラン、風葉も」
「ばんばんばんばん」

左右に旋回する《風刃》に《風弾》の連射。

「バブル・ボム、《突風》」
「ばんばんばんばんばんばんばん」

浮遊機雷の水の泡を風で周囲にばら撒く。障害物だ。

「ちょ……」
「フレア・ミサイル、プラズマ・ビュート」
「ばんばんばんばんばんばんばんばんばんばん」

誘導火炎弾に不規則な軌道を描きながら襲う電撃。

「ばん……」
「多いわ！！」

風葉、トリガーハッピー。

「すげ。全部躱してる」
「この程度の修羅場何度もくぐったわ……ぜはー」

息を切らしながらもヒュウナーは凌いだ。さすがはエース。

ただし怒り心頭。

「なんやそのちび！　馬鹿のように撃ちやががって何のつもりや！！」
「だんまくしゅーてぃんぐですよー」
「……本当にどこで覚えるんだ？　それ」
精霊のふしぎその2。
その1はどうしてミサのクッキーだけ食べれるのか？
「《精霊使い》！　もう勘弁ならん、そのちび諸共シメたるわ！！」
ヒュウナーは爆発的に加速してユーマに突撃した。
瞬間速度が《高速移動》を超えるヒュウナーの術式は《疾駆》だ。これで空から強襲する彼はまさに人間ミサイル。最速のエースでもある。
それは泡の機雷が破裂するよりも速く、風葉の展開する弾幕に当たるよりも迅く――
「爆風壁」
「どわっ！」
爆発。ユーマが予め仕掛けておいた風の防壁によるカウンターが炸裂。
「ばんばんばんばんばん」
爆発の反動で退くヒュウナーに風葉は追撃。再び乱射。《風弾》

を躱すことができなかった《鳥人》は遂に地に墜ちた。

「ちび！　覚えておれ！！」

どかーん

「あの人も突撃馬鹿か……」

正面からの攻撃には滅法強いユーマ。

「それよりも……風葉？」

「あの緑色はー、品がないですよー」

「……」

精霊さんがやけに好戦的だったのは、彼のトサカがお気に召さなかったせいらしい。

＋＋＋

「……ここは、どこや？」

「自警部」

墜落して気絶したヒュウナー。目が覚めるとロープでぐるぐる巻きにされていた。

「てめ、《精霊使い》」

「ユーマだよ。あとここは正確に言うとその部長室前だね」

カメラを破壊したユーマはヒュウナーを捕らえた後に報道部部長に連絡。

「だったら彼に用はないや。ミスト君と一緒に自警部に引き渡して」

ブソウ君のところで反省させてとは彼女の言葉。

というわけで吹き飛んだ《霧影》を回収したユーマは2人をイモムシにするともう1体の精霊、砂更の砂で自警部本部まで運んできた。

地面を這う砂に運ばれるイモムシはまるで蟻が巣穴へ運ぶ餌のようだったという。

「フフ。散々だったな、ブラザー」
「すまん。お前さんの魂、壊されてもうたわ」
「それも計算通り」
「何やて？」
「……フフ」

簀巻きになっても不敵に笑うマフラー男。

「ブソウさーん、ユーマです。入りますよー」

そんな2人のやりとりは置いといて、ユーマは直接部長であるブソウに2人を引き渡そうとする。

何せミストもヒュウナーもエースなので他の自警部部員には任せられない。

むしろ部員たちが彼に押し付けた。

ブソウ・ナギバ。自警部部長、3年生。

《紙兵》を操り1人で最大千人もの兵力を運用できる《一騎当千》。戦士に見られがちだが魔術師系の1つ、《符術士》である。

苦労人、貧乏くじが彼の2つ名だという噂もある。甘党。

彼には本当に世話になっているユーマ。会うのも久しぶりだ。

「……なんだ、この組み合わせは？」

でもってブソウが見たものは今期のエースにして問題児の3トップ。

一度に見ると頭が痛くなる。

「盗撮犯とその協力者を捕まえました。部長さんがブソウさんに反省させてって」

「部長……ああ、あいつか」

それを聞くとますます頭が痛いブソウ。また俺に厄介事を……と愚痴をこぼす。

「この部屋、前より汚いですね」
「……誰のせいだと思ってる」

部長室に備え付けられたデスクやテーブルは相変わらず、椅子の上まで書類の束が占領している。同じ部長室でも報道部とは比べ物にならない。

特に前来た時にはなかった巨大な十字架は嫌にも目に付いた。

（……鬼神モードの記憶はなかったって聞いてたけど）

ユーマは見なかったことにした。

「ほとんどが《皇帝竜事件》に関する報告書だ。捕まえた生徒と竜騎士団残党の取調べに壊したスタジアムの被害報告と苦情。職員に提出するものもある」

あと3日も寝泊まりして作業すれば寮に帰れるなとブソウ。

「へへ。ザマないなぁ、《一騎当千》」
「……フフ」

嘲笑うイモムシ。彼らはブソウと敵対関係にある。

捕まえる側（自警部）と掴まる側（不良&変態）の関係。

「貴様等」
「ブソウさん落ち着いて」

ユーマは慌てた。寝不足と疲労でブソウのリミッターが外れやす

くなっている。

この中で《鬼神モード》を知っているのはユーマのみ。ヒトではないアレになればイモムシたちと協力しても逃げ切れる自信がない。

あの十字架を手に持たせたら……終わりだ。

「これ、これあげますから」

「ナンダ……？　クッキーか」

変わりかかっていた。間一髪でユーマは甘いものでブソウの気を引く。

「……美味いな。どこの店だ」

「特注品です。風森の知る人ぞ知る名菓、ミサちゃんクッキー」

「ほう」

でたらめを信じるブソウ。まあ、元々風森の王妃がミサに託したレシピなのであながち間違いではない。

「入手手段があるなら是非教えてくれ。　これは……いいものだ」

クッキーを噛み締める甘党。

「はい。今度職人（ミサちゃん）を紹介します。（この人本当に機嫌よくなったよ。アギの言った通りだ）」

「本当か？　それは楽しみだ」

クッキー1枚で平穏を取り戻せる自警部部長。

連日の激務に身を置く彼にとってちいさなしあわせは明日への活力だったりする。

「む〜」

そしてそのしあわせを奪われたのは風の精霊。

「風葉？」

「わたしのー、クッキー……」

恨みがましい視線をユーマに送る。ちょっと涙目。

しがみつく肩に爪（あるのか？）を立てては地味に痛い。

「なんやちび。がめついやっちゃなー。……太るで」

「むー！」

それからデリカシーのない鳥頭が1人。

＋＋＋

一方その頃、喫茶ハイドランジア。

「カメラはミツルギ君が壊したって」

「そうか」

「もしかして残念に思ってない？」

「まさか」

今日の勤務時間を終えた《烈火烈風》、リアトリスはそのまま報道部部長とお茶を楽しむ。

「ミスト君は変態でも腕は本物だよ。『これが貴女の真実！』とか言って綺麗に撮ってくれるからね。彼の写真集見たことない？」

ミストの写真の腕前は有名。男女問わずモデルを志願したり指名で写真を頼みに来る人がいるほど。

彼のだす写真集は人気商品で報道部の収入源でも主力である。

「確かにそうなのだが彼の態度は何というか生理的に」

「照れ隠しだよ」

1割くらい

「君も騎士である前に女の子なんだから興味あったでしょ？　きっとかわいく撮れてたと思うんだ」

「何と言われようがもう遅いさ。……まぁウェイトレスをやるのは大変でも楽しいよ」

その陰には《旋風の剣士》の涙ぐましい努力があったりするけど。

「ところでこれなーんだ？」

「？　念写器の記憶媒体……！？　まさか」

「そう。ミスト君の魂（さくひん）」

リアトリスは驚いた。いつの間に？

「ミスト君を踏みつけたときにね。一度検閲にかけるのが報道部の

ルールだから」
「……ミツルギに追わせたのは演技か？」
「裏で売るとしても生徒会や自警部の目を欺く必要があるんだよ」
「よこせ」
「やだ」
リアトリスに緊張が走る。……斬るか？
「というわけで一度現像してみない？　マズイと判断するのは君に任せるし気に入ったものはサービスするよ」
「……わかった。同行しよう」
内心ほくそ笑む部長。リアトリスに隠さずとも写真を燃やされない自信が彼女にはあった。
そう。《烈火烈風》は自分の写真（ウェイトレス姿）に絶対興味がある。
だって勤務が終わった今でも着替えずエプロンドレスのままだから。
「報道部へ行くぞ」
「……いいけどね」
さらにそのまま外へ出ようとする彼女を見ると「ただの素ボケかも」と思いなおす部長だった。
＋＋＋

戻って自警部本部。事件が起きた。

それは精霊の凶行

すぱーん。……ふぁさ

「「「……」」」

絶句。

風葉の《風刃》がヒュウナーのトサカ状の髪を刈り取ったのだ。

「ぶいはかいー」

「風葉！　『おうち』に帰りなさい！！」

「ぎゅむ」

ユーマは風葉を《守護の短剣》に無理やり押し込んだ。最近の奔放ぶりは誰に似たのやら目に余る。

「なんや？　なんか頭が軽く……」

イモムシ状態のヒュウナーは確認できず惨劇にまだ気付いていない。

「フフ。ブラザー、これが真実だ」

「ミストさん！？」

なのにいつの間にか縄抜けしたミストがどこからとなく鏡を取り出す。

彼は《忍者》。いつでも脱出できたらしい。

「何してんの!?」
「ヒュウ。それはイカスぜ」
「……」
「ヒュウナーさん?」
「……なんやて」

茫然としていたヒュウナーはミストの言葉に遅れて反応した。

「前から思っていた。ブラザー、お前の髪型は古い」
「なんやて!?」
「だがその髪型は斬新だ。ただの伸びすぎたモヒカンが無造作にも切り揃えられさっぱり感がある」
「……」

まるで鎌で草を根元から刈り取ったようなさっぱり感。

「後輩、この髪型はなんだ?」
「……ソフトモヒカン?」

急にふられても困るユーマ。しかしミストのフリにユーマは賭けにでる。

ごまかせ

「ヒュウナーさん。実は俺があなたを撃ち落とせたのはその髪型のせいです。あのトサカはきっと空気抵抗がでかい。つまり……あなたの特性（みりょく）を損なっています！」
「なんやて！？」
衝撃。あとヒュウナーに突っ込みの才能はない。
「風葉は風の精霊。実はヒュウナーさんの力を引き出すイカした髪型を知っていたのです」
「そうやったのか……」
誤解していく《鳥人》。そんなわけないのに。
（わたしはー、品がないからー）
（風葉は黙れ）
「これなら空気抵抗を減らしつつセットに時間がかからないはず。風葉が早まったのは謝りますけど気に入りませんか？」
「いや、そう言われれば悪うないかも……」
「パンクでファニーです」
＊パンク……過激、攻撃的な意味で
＊ファニー……やっぱり滑稽だから
意味はあんまり通じていないようだ。ユーマは疑問を持たせないよう話を変えつつ畳み掛ける。
「どうせなら二つ名も変えましょう。《鳥人》なんてブソウさんや

ミストさんに比べたらダサいですよ。そう、《コンドル》なんてどうですか？」
「それええな！」
＊コンドル……禿鷹（はげたか）
「大空を舞う猛禽類。ぴったりです」
「《精霊使い》、いやユーマ！　気に入らん奴やと思うとったけどええ奴やったんやな」
お前さんは《皇帝竜事件》でワイのお株を奪うように空から登場したりしたけれど、とヒュウナー。
彼がユーマを気に入らなかったのはそれだけである。
馬鹿なのだ。
（……フフ。さすがだ後輩、教えることはないようだ）
（ミストさん？）
（君は『天使』を見せてくれたからな。ブラザーはそうやって扱うのさ）
（……）
彼が憐れになってきた。
「……ヒュウナーさん。あとこれはエース親睦会の招待状です。ブソウさんも」

でもちゃっかり自分の仕事は果たすユーマ。2人は快く承諾してくれた。

「今日はええ日や。久々に地下の反省室で飲もうでブラザー。ユーマも来い」
「え？」
「フフ。慣れるとあそこも良い隠れ家さ」

自警部部長の目の前で飲み騒ぐと堂々と言い張る常連2人。

「ブソウさん？」
「……どうせお前らは反省室行きだ。ミツルギは好きにしろ」

諦めがちのブソウ。

「反省室は最近リフォームしたばかりだ。……快適だろう」
「お。ええやないか」

上機嫌の《鳥人》改め《禿鷹（コンドル）》。ブソウの含むところが理解できなかった。

「いくでー」
「……では」
「失礼します」

部長室を去るユーマ達3人。

「あいつら……」

残るはブソウと室内に撒き散らされたヒュウナーの緑髪。

「誰が片づけると思ってるんだ？」

虚しくなった。

そのあと反省室でユーマ達を待っていたのはお仕置き用《十人兵》3小隊と磔用の巨大十字架。外から鍵を掛けられ、協力して脱出を図る3人がいたのは別の話。

＋＋＋

最後に

「……くー」

報道部部長室。ソファで眠る《黙殺》。

（……おなかすいた……ごはん……）

夕方6時を過ぎて覚醒した彼女。今はジンとベスカ、2人の邪魔をしてはいけないと起きるタイミングを失って寝たふりを続けていた。

「ただいまー。リアトリス連れて来たよー」

「「！？」」

部長とウェイトレス姿の《烈火烈風》に驚くベスカ。やっぱり気付いていない。

それよりも《黙殺》の反応はすさまじかった。

リアトリスは元エース仲間。《黙殺》の素顔を知っているし行方を眩ませていたものだから無防備に寝ていたら彼女に捕まってしまう。

《黙殺》にも苦手なものはある。

（リアの小言を聞くのは……いや）

瞬間芸といえる《黙殺》の脱出劇は見ものだったとのちに部長は語る。

＋＋＋

エースの初仕事　自警部編（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

残るエースはあと5人。

ユーマはついに《会長派》、生徒会長と対面する

次回「エースの初仕事　生徒会編」

「俺がここにいて悪いか？」

「……くま？」

エースの初仕事　生徒会編（前書き）

《賢姫》、《獣姫》。３年生の《姫》２人

この話はあと２回で終わりそう

エースの初仕事　生徒会編

＋＋＋

自警部の反省室でひと騒動起こした次の日。

その早朝にユーマは学園の誇る大図書館にやってきた。

報道部情報によると今日この時間帯に《Ａナンバー》の１人がいるらしい。

エースの名は《賢姫》。部長曰く、「本の虫でタチが悪い」だそうだ。

「……たかいな」

大図書館を見上げるユーマ。

大図書館は学園の重要施設のひとつ。世界中の文献を集めた知識の宝庫でありその外見から通称で《塔》と呼ばれている。ちなみに《塔》の隣には閲覧室を兼ねた大きな書店もある。

《塔》は８階建てと聞くがそれよりも高く見える。上に行くほど古くて高度な技術書や歴史書、魔術書が保管され個人ランクによって閲覧許可に制限をかけている。ランクＡでも６階までしか昇れな

い。

ただし1階のフロアは展示スペースで最新の知識と技術が公開されている。

学園の各学科の研究成果も展示されており《エルドカンパニー》のＰＣリングや幻創獣のパンフレットもある。あと学内行事関連で昇級試験時の写真なども。

大図書館の書庫や展示物は管理運営は《図書委員会》がしている。《賢姫》はそこに所属していた。

というわけでユーマは親睦会の招待状配りに《塔》へ来たのだが、そこで彼はショックを受けた。

「……」

「俺がここにいて悪いか？」

《塔》に入ってすぐのところ、ユーマは赤いバンダナの友人に出くわした。

＋＋＋

「ああ。昼寝に来たんだね」

それがユーマのベストアンサー。リュガは呆れる。

「今は朝だ」
「確かにまだ7時だけど……」
「勉強だよ勉強。俺は朝方なんだ。それで今日の予習が……ってその顔は何が言いたい？」
「俺、リュガの立ち位置がよくわかんないよ」

リュガ・キカ。大剣士でアギの相棒、《バンダナ兄弟》の赤いほう。

着崩した制服に赤い髪の不良っぽい外見、だけど《アイリーン公式応援団》の幹部。

意外に真面目である。一般教科の筆記試験で戦士科の上位にいることは知られていない。

「まあ、いいや。リュガはここによく来るの？」
「本を借りに週2くらいだ。最近ランクBに上がって《塔》の5階まで行けるようになったからな」

《塔》の書庫は2階までが一般公開。あとは上の階に昇る毎にD、C、B、Aと個人ランクによる制限がかかる。

「やっぱりここの本は違う？　普通の教棟にも図書室はあるじゃないか」
「質も量も別格だな。ランクAになったのにアギはもったいないと思うぜ。あいつは1度もここ来たことない」

歴史書を中心に大抵の本は読んだというリュガ。

「お前も6階まで行けるんだよな？　特待生だし。上の階には《炎翼のイカロス》の原文があるらしいぞ」
「……ラノベ？」
精霊紀の戦争で活躍した《エレメンタル》の1人、その軌跡を追った戦記物らしい。
「たぶんもっと上かな？　俺エースになったから」
11番目のエースのことはまだ一部の生徒しか知らないことだ。
リュガは驚いた。
ユーマにすればリュガが文学少年だった方が驚いたのだが。
（いや。きっと歴史オタクみたいな感じだよな。きっと）
ユーマは友人に偏見を持つことで納得した。
「おい、エースってなんだそれは」
「俺の事はいいから《賢姫》さんって知らない？　ここにいるって聞いたけれど」
「……なぜ知っている？　彼女が今日の朝当番だという情報は幹部級だぞ」
「今度はなんの幹部だよ」
のちに《美少女信仰》の信者とわかるとますますリュガがわからなくなるユーマだった。

ところで《賢姫》、ミヅル・カンナは普通科の3年生だ。

「普通科？　なのにエース？」

「会えばわかる。《賢姫》ってのはエースになってからの2つ名だ。筆記試験のトップで昔は《文武両道》だった」

「名前から堅そうな人だね」

何故かリュガがついていた。優真は気にせず受付カウンターに座る彼女に挨拶する。

「ようこそ大図書館。学園の《塔》へ。それともはじめましてかしら？　11番さん」

ミヅルはユーマを友好的に迎えた。

すらりとした体型に艶のある黒髪のロング。東国系の顔立ちは《姫》の2つ名で呼ばれるのだ。目は鋭いけどおっとりとした口調の美人。

普通科に所属すると言われれば確かに戦士や魔術師には見えない。

ましてエースなんて。

「ここは私の管轄。騒ぎを起こさなければ誰だって歓迎するわ。本は共有すべき知の財産なんだから」

「質問してもいいですか？」

「何かしら。本の貸し出し？」

「それはあとでお願いします」

まず聞かねばならないことがある。

「その立て掛けている刀、あなたのですか？」

ミヅルは頷いた。

「護身刀よ」

「……うそだぁ」

そんなやさしいものじゃないと思う。

彼女の身の丈ほどもある大太刀なのだから。

彼女は《賢姫》にして《剣姫》。本をこよなく愛する彼女は剣の才を見込まれて戦士科に転科されるのが嫌だった。なので学園の猛者共を薙ぎ払ってまで普通の女の子を主張し、挙句今の立場にいる。

「初めて会う人は皆聞いてくるわ。私だって普通の女の子なのに物騒だって」

「はぁ」

「でも今の私はエース。重要文化財を守る名目でここの治安維持担当、警護役をしているの。おかげで本に囲まれたここに住めるのは幸せね」

「「……」」

住めるの？　知らなかった、とユーマとリュガ。

「もしここで騒いだり本を紛失したりしたら覚悟してね。あれを抜くことになるわ」

そのあとどうなるのかは話してくれなかった。

寒気を覚えて話題を変えるユーマ。

「そう言えば学園長からエースはランクA以上の閲覧権限があるって聞いたんですけど、俺は《塔》の8階まで昇れるんですか？」

「上は7階までよ。8階は《塔の主》の住居だから」

「主？」

「気にしないで。エースになって手にできる資料や文献はこっち」

と床を指さすミヅル。

「地下？」

「重要機密」

《塔》の真下は《迷宮》だという。入り口の鍵を管理しているのは図書委員長だ。

「あ。そこの赤い君は知られちゃいけなかったわ。……飛ばさなきゃ」

何を、とは話さなかった。

「ま、まってくれ先輩！　喋りませんから！」

大太刀を手にしたミヅルに青ざめる2人。特にリュガは必死だ。彼女の武勇伝を知っているから。

魔獣の首を飛ばした数とか危険種指定の巨人の首を落としたとか、あと首とか。

「そう？　わたしうっかりさんだから今でも『これ』に頼らないといけないのよ。ねぇ、斬鬼首切丸？」
「……なんて名前つけてるんですか」
「銘よ。あ。肩に糸くずが……」
突っ込みは無視された。それでもってミヅルは抜刀。
「……リュガ？」
太刀筋は見えなかった。ユーマはリュガの首が飛ぶ幻を見る。
「とれたわ」
「今！　あんた今！！」
手で取れるでしょうが！　とは声がでない。
リュガは石像と化している。ちびってないか心配だ。
「生きてる。生きてるから！」
「……ああ」
「彼の背が高いから届かないのよ」
何事もなかったかのように振る舞う《剣姫》。《剣鬼》かもしれない。
「そういえば私2階の本を整理をするの。ちょうど男手が欲しかったんだけどなぁ」
「……わかりました。おい、ユーマ」
「……手伝うよ」

わかりやすい脅迫だった。始業時間ぎりぎりまでこき使われる2人。

その間のミヅルは何もしなかった。幸せそうに詩集を読む。お手製のかわいらしいブックカバーをしている。

あと片手で首切丸を持ってる。

「西の古代文学もいいけど現代文学はやっぱり北よね。洗練されているわ」

「「……」」

「あ。その棚は総入れ替えよ。埃はちゃんと払って。ほら」

「わかったから！　鞘でつつかないでくれ」

「……はぁ」

報道部の情報通り、《賢姫》ミヅルはタチが悪い。

とにかく6人目。

＋＋＋

「あと4人か」

放課後は生徒会棟へ。残るエースの内2人はここにいる。

《会長派》のエースだ。

「そういや生徒会長とは敵対してることになってないかな？　ユウイの件があるから」

《皇帝竜事件》では間接的に生徒会長の邪魔をしたことになるユーマ。

要警戒とティムスも報道部部長も言っていたのだが。

会長室。

「生徒会へようこそ。歓迎するよ。君の精霊もね」

受付に話をしたらまっすぐ会長室に案内された。

それから生徒会長直々に歓迎を受けるユーマ。なんか拍子抜け。

「怒ってません？　《竜使い》の事」

「彼は残念だったよ。しかし生徒会襲撃を企てたことは事実なんだ。仕方がない」

割り切ったと生徒会長。

切り捨てたともいえる。

「幻創獣もティムス君を中心に管理しているのなら僕が口出しする

必要はないさ」

もう口出しできないとも読みとれるのは邪推かもしれないけど。

「君とは話をしてみたかった。時間はいいかい？　お茶を出すよ」

「……はい」

柔和、物腰がやわらかい印象。意外にも会長自らがお茶を淹れている。

生徒会長は北国の出身らしい銀の髪を丁寧に整え制服もきっちりと着こなしている。

眼鏡は知的に見えるアクセサリーのようだ。ちょっとした変装アイテムかもしれない。

「どうかしたかい？」

「質問があります」

まず聞かねばならないことがある。

「そこに並べてあるぬいぐるみは私物ですか？」

「……」

実は生徒会長の部屋はいぬ、くま、らいおん、さる、とら、ひつじ……と巨大なぬいぐるみたちで占領されていた。

つぶらな瞳に監視されている中、何事もないように振る舞う彼は不自然だ。

「……違うんだ」

突っ込んで欲しくなかったらしい。とても苦い顔をして耳の長いくま、『うさベアさん』を指差す会長。

「彼女の物だ」

「くま？」

見ればくまはもぞもぞと動いている。

「え？　着ぐるみ？」

「ぐおー」

「「……」」

くまは豪快にいびきをかいた。

「……頼むから寝ないでくれ。メリィ」

「……敵か？」

「お客さんだよ。ほら、あの《精霊使い》君」

「敵じゃないか！！」

がばっと起きたくまの手から爪が伸びる。鉄のカギ爪。くまはがるるーとユーマを威嚇した。

「セイ言った。《精霊使い》はいつか敵になるって。だからメリィはやる！」

殺る？

「メリィ！　頼むから黙ってくれ」

頭を抱えたくなる生徒会長。気まずそう。

「誤解しないでくれ。報道部の部長からあの時の君の事情は聞いているから。君をどうこうする気はない」

「はぁ。いいですけどそのくまは一体？」

もうなにがなんだか。

「これでも僕の護衛だよ」

「生徒会長専属の護衛……」

ユーマはその話に聞き覚えがある。報道部情報だ。

「それって《獣姫》？　まさかくまがエース！？」

「いや彼女はちゃんとした人なんだけどね」

ちょっと野生児入ってるんだと生徒会長。

もうこんな人ばっかりだとユーマはうんざりする。

《獣姫》、メリィベル・セルクス。３年生で生徒会所属。現生徒会長が就任した際に護衛役に指名されて今に至る。

彼女は《狂戦士》。近接戦最強のクラスに加えて特殊な能力を持つ。

それは《幻装術》というものの１種で魔獣の毛皮を被ることで身体能力を上げることができるのだ。

「何故に着ぐるみ？」
「裁縫は彼女の趣味なんだ。素材は獣皮や体毛だから同じらしい」
着ぐるみは狩りで素材を調達して自分で作っているという。狩人にして針子。
「スゴかわいいだろ」
何をどう自慢しているかわからない。あとくまは迫力がない。
「メリィ。いい加減それ脱いで彼に挨拶して」
「わかった」
「ここで脱がない！！」
脱いだらすごかった。
下着と言うよりも際どいビキニスタイルなんだからユーマだって勘弁してほしい。
「セイ。文句多い」
「常識なんだ。頼むよ」
やっと制服に着替えてくれた。もちろん隣の部屋で。
着ぐるみを脱げばメリィベルも《姫》の二つ名をもつほどの美女だ。灰色に近い銀髪はワイルドに、でも顔つきは大人びてすっきりしている。抜群のスタイルは見てしまったのでユーマは思い出さないようにした。

彼女は《賢姫》と2人、3年生の美少女2トップと言われている。

「セイ。肉が食べたい」

……2人とも黙っていればの注釈がつくけど。

「それでなんでメリィベルさんの着ぐるみがここに？」

メリィベル曰く、

「陰干しだ。セイの部屋は広いからな」

「……」

「着ぐるみの中で寝てたのは？」

曰く、

「寝てないぞ。メリィはセイの護衛なんだからな」

「……」

「大変ですね」

「これでも優秀なんだ」

慣れてるよと苦笑する生徒会長。《獣姫》は外見より数段幼い思考で残念な子だった。

「メリィは戦士としての能力だけでなく気配察知にも優れている。あの《霧影》の居場所も突き止められる程で襲撃に強いんだ」

「アレは独特のニオイがあるぞ」

「……へぇ」

ニオイ……気配察知？

ところで、と生徒会長。

「君はその新任のエースとして挨拶回りをしているのだろう？　どうだい？　この学園のエースは」

「無茶苦茶自由（フリーダム）ですね」

ユーマはそう答えた。生徒会長の隣を見てますますそう思う。

「騎士がお姫様にフォローさせながらウェイトレスやって、それを忍者が盗撮するんです。その忍者は写真見て血を流すし」

「……クロイツさんは」

「空飛んで逃げる奴がいれば捕まえて磔にしようとする人もいる。……密室でファランクス戦術はやめてほしかったなぁ」

「……ナギバ先輩まで」

あの時ミストが抜け穴を作りヒュウナーが上へ引っ張って逃がしてくれなかったら増殖するブソウの《紙兵》に圧殺されていた。

自警部部長は同格を相手に容赦しないのだ。

「前は巨大な竜に襲われたな。今日は刀で脅されて雑用したんですよ。本も無理やり押し付けられたな」

ミヅルにはリュガと一緒に感想文を強要された。

主題となる本は古文書の写本に『オトコノコの友情』なる桃色に装丁された怪しい１冊。

……どちらも読みたくない。

「君は何というか……結構エース向きだね」

人に会うだけで事件に巻き込まれすぎている。割と平気にしているのは才能だと思う。

「そうは言っても今は君もエースだ。……それも異例の１１番」

「そうですね」

「だから君は……この学園で何を為す？」

いきなりだった。生徒会長の凄味が増したのは。

「エースとして彼らのように一定の役割をこなしながら自由に振る舞う？　それもいいがこの学園で本当にやりたいことはあるのかい？」

「……何が言いたいんです？」

「僕を手伝わないか？　学園の為に」

切り出した話は《会長派》への誘い。

「学園都市は中央中立地帯にあって世界中の少年少女が集まり教育を受けることができる場所。……ここは世界の縮図だ」

ユーマは知らなかったがこの世界は１２歳以上の子供ならば学園都市に住み、教育を受ける権利を誰もが持っている。

「リーズ学園は学園都市での中でもすばらしいところなんだ。ここの卒業生がどれだけ優秀か君も知っているだろう？」

「……」

「ここは学園都市の中心となるべき場所だ。だから生徒たちは学園

都市の鑑となるべきだ。自由であっても無秩序ではいけない。僕はそう思う」
「……それで」
「……ぐぅ」

力説する生徒会長。護衛の彼女は寝た。

「改革したいんだ。生徒会組織を。生徒会から分裂した3つの組織、そして《Aナンバー》達をひとつにまとめたい」
「学園統一？」
「学園都市統一だ。リーズ学園が一丸となればそれができる」
「……」

他校へ侵攻するとでも言いたいのか？

生徒会長は野心家だった。でも『その先』にあるものがユーマにはわからない。

一時の支配が何になると？

「どうして？」
「脅威が迫っている」
「？」
「……冗談だよ」

力を抜いた生徒会長。

「僕が本気なのは学園統一まで。ここをひとつにまとめあげたらそれだけで偉業だ」

それも冗談のようだ。

「生徒会長の任期はまだある。3年まで頑張っても挑戦の価値はあるよ。どうだい？　君も一緒に挑戦しないかい？」

「すいませんけど」

ユーマは断った。

「俺はやるべきことがあります。エースを承諾したのもそのためなんです。理由は言えませんけど」

「そうか」

本当は学園にも長居する気はないんです、とユーマ。

ユーマは会長の目を見る。自分の意思を伝えるために。

「ここに来てまだ2ヶ月くらいですけどこの学園は好きです。だから学園の生徒として手伝えることは手伝います。間違っているのなら全力で止めます」

「……うん。それがエースの在り方だよ」

頑張って。そう言った生徒会長は《青騎士》の居場所を教えてユーマを送りだした。

＋＋＋

「……セイ。よかったのか？」

寝たふりをしていた護衛は彼に問う。

「敵対しなければいいよ。学園長の意図は読めないけれど」

ユーマを正規の《Ａナンバー》から外したのは余計な混乱は避けたい。そう思っただけ。

現れた《精霊使い》を異質と感じたのは彼だけではないはず。

「《アナザー》を作ってまで彼女は《精霊使い》に何を見たのだろう？」

学園長だけが知っていることがある。

学園にあるモノ、そして異世界の可能性。

「大丈夫だ。メリィとクオは約束した。何があってもセイは守ってやる」

「ああ。頼りにしてる。……1年以内だ。それで対抗できる力を集める」

でも生徒会長だけが知っていることもある。

「間に合うか？」

学園にあるモノ。そして異世界の脅威。

エースの初仕事　事件編（前書き）

《青騎士》……これで8人。そしてユーマの初任務

＋＋＋

《青騎士》は南区にいる

生徒会長からそう教えてもらったユーマは学園の南区へ。

「短距離移動用の《門》があるといっても……広いなぁ」

広大な敷地面積を持つＣ・リーズ学園。そこは中央校舎、一般教棟を中心に東西南北の４つの区画に分けられている。

北区は魔術と工業

西区は技術と商業

東区は武術と学業

南区は芸術と農業

とそれぞれの区画に備えられた施設、設備が世界の各地方の特色を持つ。その中で南区は他の区画に比べると耕作スペースに広い敷地が与えられている。

「移動用の術式があるから乗り物が発展しなかったのはわかるんだけど」

歩いて廻るには少し距離がある。目ぼしい建物は平屋で大きなものがぽつぽつとあり《組合》の拠点のある西区が市街地であればここはのどかな田舎のような雰囲気があった。

南区で有名なのは植物園と美術館に水族館。音楽ホールや《皇帝竜事件》の舞台となったスタジアム（解体工事中）もここにあり、南区は学園内にある大きな娯楽施設が集約している場所でもある。

《Ａナンバー》の１人である《青騎士》は、そんな南区にある厩舎にいるという。

「こんにちはー」

ユーマはいかにもといった『青い人』を見つけた。

「……《精霊使い》」
「ユーマです。《青騎士》、クオーツさんですね？」
「何故ここに？」
「生徒会長さんが教えてくれました」
「セイ？　……そうか」

生徒会長と聞いてクオーツはユーマに対する警戒を解いた。

《青騎士》、クオーツ・ロア。《会長派》、生徒会長の側近で右腕と呼ばれる男。水使い。

学園では学外警備隊の隊長を務め、同じ騎士として《烈火烈風》のライバルとも言われている。

「馬ですか？」

「ああ。俺の新しい相棒だ」

今の彼は『半身』を失った騎士。《騎兵》である《青騎士》は以前に愛馬を失っていて本領を発揮できずにいた。

クオーツは青い毛並みをした馬の鬣を撫でる。鬣の色は主人と同じ銀色だ。

「前の相棒の兄弟だ。今は訓練中でこうやって世話をしている」

「名前、あるんですか？」

「……まだだな。いいものが思い浮かばない」

優しさと悲しさの混じった瞳は前の相棒を想ってのこと。騎士はやさしい男だ。

「以前の名前は？」

「蒼雷。気性が荒く、走る姿はその名の通りだった」

「ソウライ」

ユーマは目の前の青い馬を見て考えてみる。名前をつけたりするのは好きだったりする。

蒼雷の弟という馬は温和でどこかのんびりした印象がある。

「……青嵐なんてどうです？」

「セイラン？」

「そう。あおあらし」

青嵐は南風。青葉を吹き送る初夏の風。

「薫風と同じ意味です。こいつ元気で優しそうだから。あと兄貴が『雷』なら対になるものはやっぱり『風』かなと」

「悪くはないが……よりによってあいつの名前か」

「セイ」、名前の一部に彼が仕える少年と同じものがあってクオーツは苦笑した。

「候補に挙げておく。こいつのデビューはまだ先だからな」

「そうですか」

それからしばらくほけー、としながら2人して馬面を見ていた。

なんだかな、とまた苦笑する《青騎士》。

「君は思っていたのと大分印象が違うな。竜騎士団を壊滅させたというのに」

「俺もですよ。《会長派》は学園の支配を目論む奴らだって聞いてたから」

だけどくまですよ、くま、とユーマが続けたのでクオーツは苦笑。

「セルクスを甘く見ると痛い目を見るぞ。《会長派》の最高戦力だ」

「生徒会長と敵対する気はないですよ」
「今は、だろ？　先はわからない」
「……」
あなたはどうして《会長派》に？　とユーマ。
「誓い、かな。俺とセルクスはセイに忠誠を誓った。《騎士の誓い》さ」
ユーマに向き直るクオーツ。胸に手を当てる仕草は何かの儀礼のようだ。
「俺達は昔から弟としてあいつを可愛がってたからな。守りたいと思う。……今度こそ」
「……」
それは3年前の誓い。
そのあとに彼らは北の故郷を抜け、学園都市にやってきた。
故郷の名は《雪羅の国》という。
「セイはお坊ちゃんなんだ。理想が高くて夢想家。いつか目的の為に無茶をするかもしれない」
「クオーツさん？」
「できればセイの邪魔をしないでくれ。《竜使い》のように」
「……警告？」

クオーツがいつの間にか手にした槍をユーマは見る。

「頼みさ。これは学園の為でもあるから」

そう言うとクオーツは武装術式をあっさり解いた。槍は水でできていた。

《水槍》を出した瞬間、《精霊使い》の砂の腕輪が瞬時に篭手に変化したのをクオーツは見逃さなかった。

それで相棒のいない《青騎士》は《精霊使い》相手にただで済まない、そう彼は判断したようだ。

「クオーツさん」

あなた達は何を知っている？　そう訊ねようとしたユーマだが、

『きんきゅー、でんわですよー』

その前にユーマのＰＣリングから突然ピンクの風葉が飛び出す。

「召集か」

同じく連絡を受けたクオーツはそう言った。

事件の発生。

ユーマはエースとして初めて召集され、《派遣》されることになる。

＋＋＋

生徒会棟、緊急会議室。

集まったのは《Ａナンバー》１０人と彼らの副官役が数人。ティムスにはポピラが付いていた。

加えて生徒会長と報道部部長。そして《アナザー》のユーマ。

「部長さんはどうしてここに？」

「ボクは情報を扱うからね。参謀役なんだよ」

「席につけ。はじめるぞ」

進行役はブソウ。

「ウズミ学園で立てこもり事件が起きた。俺達は……」

「チョイ待ち」

遮ったのはヒュウナー。

「他校の事件やないか。ワイ達が動く必要がどこにあんねん」

「そうか、新人もいたな」

思い出したかのようにヒュウナーを見るブソウ。

「いいか。俺達エースは『他校に介入できる』権利を持っている」
「なんやて！？」
「えっ？」

驚いたのはヒュウナーとユーマの新米エース２人。

「学園都市にある学校すべてが戦士や魔術師を育成しているわけではない。非常事態に対応できる人間がいないところもある」

学園都市で有志を募った警備隊はいるが、彼らは基本活動は学外の治安維持。学生が「学園都市全体で起きる有事の解決に協力できる」という権利を持つのはエースの資格を持つ者だけ。

「エースの資格を持つということは学園都市を守れる力があると認められること。ならばその為に力を使うべきだ」
「他校にもエースがいるところはあるけど、１０人もいるのはリーズ学園くらいだね。あと《学院》くらいかな」

ブソウに補足するリアトリスと部長。

エースの資格は学園都市の規定に基づいたものであり、エースを名乗る学生は学園以外にも存在する。

《Ａナンバー》はリーズ学園のエース達の総称だ。

「それでも１０人で動くのは少ないんじゃ」
「そのための騎士団だ」

ユーマの疑問は隣に座るティムスが答えた。

リーズ学園は戦闘系だけでなくティムスのような後方支援役でも人材が充実している。

ひとつの学校にエースが複数いて組織だった活動ができるのが他校との大きな違いだ。

「それで、事件ってのは？」

「立てこもりだ。校舎の屋上に陣取っている」

厄介なのは爆弾を仕掛けていること。

「仕掛けた爆弾はどうやら複数。ひとつは人質と一緒に屋上。残りは校舎の中らしい」

「犯人とその目的は？」

「同じ学校の生徒。彼らの目的なんだけど……どうもついカッとなってやったって感じなんだよね。最初の要求で校舎から人を追いだしたのはいいけどそれきり」

苦い顔をする説明役の部長。

「屋上にいるのも何かを訴えるつもりみたいなんだけど何が言いたいのかさっぱり。自己顕示しすぎて引っ込みがつかなくなったのかな？　若気の至り？」

「最低だな」

「飛ばしますか？」

ミヅルの発言。何をとは話さなかった。

「事件が発生して1時間が経った。ウズミ学園はここから近いが一刻を争う」
「作戦としてはまずミスト君が校舎に潜入して爆弾の発見。解析と解体はティムス君ね」
「……フフ」
「ちっ」

自分に役割を与えられて不満のティムス。

「それから人質の救出と犯人の捕縛。正直言えば残りのメンバー全員を出す必要はないと思うよ」

彼らにすれば難度が低い事件らしい。

問題は誰を派遣するか。

「ならどうして全員呼んだ？」
「今期のメンバーでは初仕事だからね。顔合わせでしょ？」
「その通りです。先輩」

頷く生徒会長。他校の要請を受け派遣するかどうかを決めるのは彼の権限である。

「まあいい。それでどうする？　リーダー」
「その呼び方はやめてくれ」

ブソウが問う相手はユーマが知らない人物。彼こそ《Aナンバー》のトップ、つまり学園の生徒における最強の男だ。

その彼がユーマを見た。

「新人がいる。『本番』での実力が見たい」

この一言でユーマとヒュウナーを中心に人質救出作戦を実行することになった。

生徒会長は「彼らは初任務だから」とお目付け役とバックアップとして《青騎士》、《獣姫》の2人をつけることでこれを承認した。

「では《Aナンバー》、出撃」

生徒会長が最後にそう言って皆は解散した。

この一言を言えるだけでも生徒会長の役職はカッコイイなとユーマは密かに思った。

「別働隊含めてエースが6人。豪勢なことだ」

「そうなの？」

作戦会議終了後。集まるのは実動部隊のユーマとティムス達。

「過剰戦力の投入で瞬殺。非戦闘系の俺はともかく、この程度《霧影》1人で十分なんだよ」

そのマフラー男は一足先に調査と探索のため現場へ向かっている。

《青騎士》がユーマ達に話しかけてきた。

「というわけでお手並み拝見だ。俺とセルクスは待機……」

「メリィは出るぞ。暴れたいから。クオも来い」

「……周囲の警戒と警備に俺の騎士団を動かそう」

頭が痛そうに額を抑えたクオーツはそう言って会議室を出た。彼も振りまわされる側のようだ。

「で、どうするん？　ワイは空を飛ぶしかできん」

「犯人をやればいいんだろ？　楽勝だ」

「馬鹿ですね」

ポピラがそう言いたくなる（実際にもう言った）2人が残ってしまった。

「……ティムス。助っ人呼んでもいい？」

「……呼んでくれ。いくらなんでも向き不向きがあるだろ」

不安になった。

＋＋＋

救出作戦。その第1段階は《霧影》の侵入行為、校舎に仕掛けられた爆弾を探すことからはじまる。

『ひとつめの爆弾を発見。実物の画像を送る……フフ。便利だな、これ』
「エース仕様だ。でもお前には任務以外で使わせる気ないからな」
「残念だ」

ウズミ学園の外、移動式仮設アンテナの隣に立つティムスはＰＣリングでミストからデータを受け取る。

エース仕様のＰＣリングとは初期型でリミッター―を解除したものをいう。

一般のＰＣリングは『仮想ディスプレイから見る幻創獣の視点を録画』など悪用の可能性がある機能を厳重に封印しているのだ。エースの物はＰＣリングの性能をフルに使えるようにしている。

それ以外にもエース仕様は独自のチューニングが施されていて高性能となっている。

同時通話機能もそのひとつ。ティムスの目の前にはピンクの風葉とマフラーをした蝙蝠がいる。通話モードの幻創獣だ。

「学園の外で使うのは初めてだったが、エース仕様の奴はアンテナ１本でも問題ないな。……爆弾を発見した。確認したがこれは連動タイプ、起爆装置を取り押さえた方が早い。ミストは爆弾に何もするな」
『了解』
『俺は他の爆弾と校舎の中を探る』

蝙蝠は消えた。

「ユーマ、どうやら犯人は4人グループだ。起爆装置はその内1人が持ってるはず。……屋上で何か喚いているな。錯乱して起爆なんて真似させるなよ」

『わかった。一気に行く』

ピンクの風葉も消えた。

「……考えてみたらあいつが一番無茶苦茶する奴じゃなかったか？」

ティムスは空を見上げてからそう思い、それからカンペを取り出す。

作戦第2段階、開始。

＋＋＋

「なんだよ、あの青い奴ら。学園都市の警備団か？」

ウズミ学園、その屋上では人質をとった犯人たちが怖じ気づいていた。

校舎に突入してくる者は誰もいなかったが、しばらくして青い装備を身に付けた集団が現れ校舎前で待機しているのだ。

《青騎士》を団長とする学生騎士団、《蒼玉騎士団》の面々だ。

『あー。犯人に告ぐ犯人に告ぐ。お前らに逃げ場はない。だから降

伏してくれ』

下にいる茶髪の少年が拡声器を使い、やる気のない声で降伏を促してきた。

『さっさと人質を解放してお縄に付きやがれ。酷い目にあうぞ』

そして面倒くさくなって言葉が悪くなっていく。

「う、うるさい！　誰だよお前ら！　こっちには人質が、爆弾が……」

『そうかよ。だったらもう知らん』

「なっ！？」

ティムスに聞く耳はなかった。所詮時間稼ぎだ。

『馬鹿が。覚えておけ』

ティムスは犯人たちの置かれている今の状況を一言で伝える。

もう終わりだと。

『俺達はリーズ学園のエース。《Ａナンバー》だよ』

「――！！」

同時に屋上は何かが高速で墜落する衝撃に襲われた。

衝撃はたて続けに３つ。

「鷲爪撃！！」
「うさキィィィク！！」
「ストーム・ブラスト！！」

《鳥人》と《獣姫》の飛び蹴りが、ユーマのガンプレートが犯人を3人ぶっ飛ばす。

「！？　このっ」
「フッ」

最後の1人は《霧影》が背後から仕留めた。

あっさりとした結末。犯人と彼らでは実力が違いすぎた。

「悪は滅びる。それが真実」

風にたなびくマフラーが無駄にカッコイイ。

「ミストさんはいつの間に……？」
「起爆装置を探せ。人質を解放するぞ」

ユーマ達と同じく上空から突入したクオーツは指示を飛ばす。

「怪我はないか？　もう大丈夫だ」
「ありがとうございます」
「あの、あなた達は……？」

未だ震えている人質たちを安心させるようにクオーツは笑顔をみせる。

「気にしないでくれ。君達を守るのは騎士の務め、エースとして当然の事さ」

「エース……」

「騎士様」

さわやか好青年。人質だった女生徒達が《青騎士》に熱っぽい視線を送る。

「クオーツさん。起爆装置見つけましたよ」

「……任務中は二つ名で呼んでくれ。あとは蒼玉を突入させ俺達は撤収するぞ」

「はい」

犯人たちをイモムシにしたユーマとヒュウナーは屋上から難なく飛び降りていった。

「さらばだ。セイッ！」

彼女達は颯爽と去りゆく騎士の姿を見送った。

白い兎（の着ぐるみ）に跨って飛び降りる、青い騎士様を

「「……」」

残念だがいくらクオーツがエースでもできないことはある。

「……騎士？」

幻滅した。

＋＋＋

作戦『ウズミの３連星』の解説

ユーマの提案したのは降下作戦、上空からの強襲だった。

まずティムス作の『おもちゃ』、《浮遊》の付与効果を持たせた風船で監視偵察器が届かない高度にユーマ達は待機。ティムスが下に注意を引きつける間に突入を仕掛けた。

まず人間ミサイル、ヒュウナーが《鷲爪撃》で突撃。続けて脚力強化の着ぐるみ、『白うささん』を装備したメリィベルがクオーツを背負い、ユーマの《盾》を蹴って急降下した。

最後にユーマが《盾》を前にして《ストーム・ブラスト》の衝撃波で加速して突貫。３人がほぼ同時に屋上に強襲をかけ、一瞬で鎮

圧した。

尚、最後にミストがしゃしゃり出たのでクオーツは出番なしのいいところなし。

そしてこの作戦で貢献したユーマの《盾》は……

「……なにが、短期で高額の仕事、だ……」

助っ人のアギは《獣姫》の踏み台とユーマの降下装備の役割を果たし、ウズミ学園の屋上に

がくっ

埋まった。

＋＋＋

学園最強　前（前書き）

「エースの初仕事」の続編。残る2人のエース

学園最強　前

＋＋＋

前回までの話

アギはユーマの盾となって埋まった

＋＋＋

というのは話の端折りすぎなのでテイク２。

他校で起きた立てこもり事件。ユーマはエースの初任務として降下作戦を実行。犯人をぶっ飛ばす。

事後処理は《青騎士》の騎士団に任せ事件は難なく解決した。

その次の日。

「お前、普通死ぬぞ。わかってんのか？　ああ？」

「……生きてるじゃないか」

ユーマは朝早くから《バンダナ兄弟》の青いほうに絡まれていた。

「俺だってあの高さからあんなスピードで落ちたら死ぬよ。ヒュウさんやメリィさんが異常なんだよ」

上空１５００メートルからの降下強襲を生身と着ぐるみで敢行した《鳥人》と《獣姫》。これには《精霊使い》もついていけない。

なのでユーマは２人について行けるように合体奥義、『シールド突撃』を行った。

ガンプレートでブースト、墜落時の衝撃をアギの《盾》で防いだのはいいが、アギは着地時にユーマのクッションがわりに潰されて気絶。そのまま忘れ去られ放置という酷い扱いを受けていた。

「他にもマシな手段があっただろうが。それになんだよ、あのうさぎ」

「思い付きで言った作戦が２人には受けがよくて……メリィさんのうさぎは俺もよくわからない」

「お前が言い出しっぺじゃないか！」

アギはユーマの首を締めながら学園のエース達に不安を覚える。

「今期の《Ａナンバー》は大丈夫なのかよ？　ヒュウやお前がいて今までにないメンバー構成してるぞ」

「放して……ぷはっ。……実力あってのエースらしいよ。それに《入れ替え戦》だってあるからずっとこのままとは言えないから」

《竜使い》の闇打ちにあったエース候補たちもいる。学園にはアギのような隠れた実力者がまだいるとユーマは思っていた。

「世代交代の時期ならともかく、お前が《１１番》の時点でしばらく入れ替えはねえよ」
「そうかな」
昇級試験の試合とはいえ、その《１１番》のユーマに勝ったアギが次のエース候補の１人だろうに。
「あ。渡しそびれたアギの報酬。今渡すよ。カード出して」
「そうだよ。何のために俺は空から落ちたと思ってんだ？」
「親友の為でしょ？」
「……ほらよ」
アギは答えなかった。そして追加されたクレジットポイントの数値を見て黙り込む。
思っていた額よりも桁が２つも違った。
「……ユーマ君。なんだい、これ？」
「俺がエースとして貰った報酬を２人で分けたんだよ。びっくりするよね？」
「ぼろ儲けじゃねえか！！　……いや、俺は命懸けだったから足りないのか？」
ユーマにやられた仕打ちを考えて思い直すアギ。
「俺の場合、殆どスタジアムの弁償になくなるんだけどね」
エースの任務で得られる報酬は学園都市のどこで働くよりも高額。だがそれは任務の経費込みだ。それから装備や騎士団の運営費にあ

てがうと人によっては足りない場合もある。

普通エースは個人で動く。エース同士で組むこともあるがそれは要請があった場合のことが多い。

1人で任務を請け負う場合、エースにも個人で向き不向きがあるはず。そこで彼らは任務をサポートしてくれるチーム、騎士団を持つことが許されている。

「騎士団ねぇ……竜騎士団を思い出すな」

「……うん」

思い出すのは《皇帝竜事件》。学園内で最大の勢力だったはずの《竜使い》の騎士団。

「誰でも操れる幻創獣。あの《竜》は魔獣とかわんねぇ。どう見ても戦闘向け、破壊行動しかできなかったぞ」

リーズ学園はともかく他の学校、戦士や魔術師のいない所は皇帝竜どころか数体の飛竜や竜人兵でも脅威となるはず。

「幻創獣の竜は武力制圧に向いてたと思う。それに俺はエースが他校に介入できるなんて知らなかったよ」

学園都市で起きる事件、他校の揉め事を解決するためならばエースは独自に動くことができる。

もしもあの《竜使い》がエースのままだったら……

「他校の救援を名目に堂々と竜を派遣できる。そのまま騎士団を駐

在して皇帝竜で支配……なんてな」
「生徒会長の学園都市統一の話は本当かも」

生徒会長の権限のひとつに「必要に応じて学内のエースを派遣、要請することができる」というのがあるからだ。

エースを私有する危険な権利。現に《会長派》のエース2人は彼の思惑で動くことがある。

「……まあ、いいや」
「そうだな」

それでどうなるのか、ということは2人は考えなかった。

竜騎士団は《竜使い》諸共壊滅した。幻創獣だって今はティムス達の管理下にあり、工事用の労働力かPCリングの待受キャラクター程度でしか扱われていない。

「まずあり得ないんだよ。学園都市の統一なんて」
「ん？　やっぱり？」
「他校のエースだってうちの学園に介入できる。下手すれば『リーズ学園対学園都市』なんて事態もありうる話だ」

アギは『常識』を言った。

「それに俺達学生よりも先生達がはるかに強い。学園都市の教師は余程の事がないと動かないけど、戦闘タイプの教師に俺達はまず敵わない」

学園都市における個人ランクは世界基準に置き換えれば2つか3

つ下がる。そして教員資格は何の能力であれ世界ランクC以上が必須とされていた。

「例えばグルール先生が本気出したら？」

「あの人は世界ランク基準でBの格闘家だぞ。学園中の購買部が支配下に置かれてギガグリルサンド以外のパンがなくなる」

それは嫌だなとユーマ。

「つーわけで学園都市どころか学園統一も武力制圧じゃ無理。仮にできたとして、そんな問題が起きたら今度は世界各国が相手だ。中央中立地帯は最初から包囲されてるもんだぜ」

「ああ。そうか」

「学園都市は世界中の国から保護された『子供の国』なんだよ」

それが現実。何が起きても最後は世界中の『大人たち』が守ると。

世界の中央中立地帯。そこにある学園都市は世界中から子供たちが集まる。

裏を言えば世界中の国は何かあれば『子供たち』を盾にする事ができる。だから何も起きない。

学園都市は4地方が互いを牽制するために存在する場所にある。

「だから俺達はいろんなことに挑戦できる。誰もがそれを許されてる。……ここは世界から隔離されてるからな。各国が協力し、干渉

しないことで成り立つんだから」
「アギ？」
アギは故郷の砂漠を想う。
比べたくもないが学園都市の環境は何をするにしても最高の環境だ。リーズ学園はその中でも最高峰だとアギは身を持って知っている。
身分も種族も関係ない。誰もが個人の能力を伸ばすことができる。学園都市にいる学生は未来に可能性とチャンスを与えられている。
だからここを《楽園》だと言う人がいる。
それが思惑があってつくられた、もしくは管理下に置かれた、『子供の時間』に与えられた有限のものだとしても。
生徒会長だってそんなことは知ってるはず。
「だから学園の組織改革を行っていても『学園の統一、学園都市の統一の企み』というのは噂どまり。本当のところがわからないが、今の会長は実際よくやってるから誰も不満がない」
アギの言うところが生徒会長に対する一般生徒の見解。
「その辺は《会長派》にでもなればわかるのかな？」
「さあな。会って話したんだろ？　お前がわかんなきゃ俺にはさっ

ぱりだ」
「そうかな？」
「そうなんだよ」

今のアギはユーマやエイリークが言う『まともなアギ』だ。ユーマは時々だがリュガとは違う意味で彼の事がわからなくなる。

やけに事情に詳しい。真面目に考えることだってある。3枚目から2枚目半にランクアップしてカッコイイ。

……所詮エイリークに吹き飛ばされる同志だというのに

そんなことを考えるユーマをアギは知らない。

「俺は今の学園のままがいい。それを脅かすなら俺なりに何からでも守ってやるさ」
「……そっか」

アギが無意識に突き出した右手。その先にある《盾》を見てユーマは思う。同じだと。

「アギは兄ちゃんに似てるね」
「いきなりなんだよ、それ」
「カッコイイって話」
「……気色悪い」
「ははっ」

鳥肌を立てるアギにユーマは笑った。

笑ったけれど《盾》は《狼》の拳に負けない、同じ力をもってるとユーマは本当に思ったのだ。

揺るがない信念。ユーマが未だ持たない強い在り方をアギはもう築いている。

だから《盾》は強いのだとそう思った。

＋＋＋
学園最強
＋＋＋

生徒会棟、緊急会議室。

昼休みに集まったのは正規の《Ａナンバー》１０人。そして学園長。

実は学内のエースを招集できるのは生徒会長と彼女だけ。

「いきなり集めてごめんなさいね。お昼はこちらで用意したけどよかったかしら？」

「構いませんよ」

ブソウは学園長から人数分の『職員弁当』を受け取った。購買部に出回らないある意味レアな弁当だ。

「集まってもらったのは親睦会……ではなかった彼のことです」
「ミツルギですか？」

頷く学園長。

「そうです。元々招待状配りはあなた達に1人ずつ会わせようとしたことですから」
「ちっ。話聞いた時にそう思った」
「親睦会なんて今までしたこともないからな」

察していたのはティムスとリアトリス。

「ユーマが言っていたあの破格の報酬は何だ？　招待状1人に付き10万、20万と言うやつ」
「なんやて！？　そんなオイシイことしてたんか、あいつ」

ヒュウナーは驚いた。羨ましかったらしい。

「あれはエース就任時に与えられる支度金を使いました。ヒュウナーさんにはもうお渡ししましたよね？」
「……ああ。はい」

学園長には200万なんて豪遊して使い切ってしまったなんて言えない。

「ユーマさんには期限を今日までと言っていたのですが……昨日の事件で皆さんと顔合わせしてしまいましたからね。だからお訊ねしようと思いまして」

怪訝な表情を浮かべるエース達。

「わたしが勝手に作りだした異例のエース。現エースのあなた達がどう思ったかをわたしは知りたいのです。それでどうでしょうか？あなた達は１１番の彼を同じエースとして迎えてくれますか？」

「別にどっちでもいい」

一番に口を開いたのはティムスだ。

「エースだろうが違おうが俺はあいつに協力する。逆も然りだ」

「私も構わない。目に付けている後輩が彼にとられる可能性はあるが……」

「ワイもやな。元々おこぼれのエースはワイの方やし」

「……フフ。彼は同志」

リアトリス、ヒュウナー、ミストはすぐに同意。

「あの子は面白いわ。特に砂の精霊」

これはミヅル。

「試しに感想文を書かせてみたんだけど、渡した古文書の意訳がまったく違うと言ってきたわ。《塔》の７階レベルよ」

「古文書で感想文？　またタチの悪いことを」

でもユーマは書いて次の日の今日に渡してきた。彼女の大太刀が怖かったらしい。

精霊使いというクラスの特性として、力量に合った知識を精霊か

ら引きだすことができるといわれている。

世界と繋がる精霊は真実を知っている。中でもユーマの精霊である砂更は世界最大の遺跡である《西の大砂漠》、そこに忘れ去られた砂の精霊だ。《西の大帝国》の遺産ともいえる豊富な知識を持っている。

ユーマにとって砂更は優秀な歴史家で翻訳家だった。

「証言が精霊というのは何とも言えないけど、これが正しいと証明できれば……『私が』歴史を変えることになるわ！　聞いて。実は大帝国は……」

「長くなるなら後にしてくれ」

知的好奇心が旺盛で興奮すると周りが見えなくなる《賢姫》の癖は皆が承知している。なので学園長まで聞き流すことにした。

とここまでが賛成派。残りは反対とは言わずとも保留だった。

ブソウは《皇帝竜事件》の際に彼の面倒を見て酷い目にあっているから眉間に皺を寄せたまま、クオーツは生徒会長の敵になるかどうかを見極めきれないでいる。

「なんか違うんだ。あいつ」

「メリィベルさん？」

おかしいと首を傾げるのは《獣姫》。

「魔族じゃない。でも人でもない気がする。メリィ達と何かが違うんだ」

《直感》持ちなのかメリィベルは鋭い。ちなみに着ぐるみではない。

「何だ？　だとしたらミツルギは魔人だとでもいうのか？」

「《精霊使い》なんだ。それはない」

魔人は魔神、精霊は世界に属するというのが常識だ。だからありえないという。

人とは違うおかしなことを《獣姫》が言うのは皆が承知なのでこれも聞き流すことにした。

学園長を除いてだが。

「……おふたりはどう思いますか？　ツートップさん」

「……学園長。こいつとコンビ扱いするのはやめて下さい」

「あはは。ひどいな」

《剣闘士》と《黒鉄》。それが学園の最強コンビである彼らの二つ名。

「実は僕たち、彼とまともに話してないんですよ。昨日も顔合わせただけで」

「そうなんですか？　マークさん」

マークと呼ばれた少年はそうなんです、と朗らかに笑う。彼の中性的な外見は実際の年齢より1つか2つ幼く見える。

明るい表情が似合う彼が纏うのは黒衣。マーク・K・フィーは魔術師である。

「ほら、僕らのリーダーは遠征試合とか多くて学園にはほとんどいないから。僕も応援に行くのが忙しいし」

「リーダーって呼ぶな。柄じゃない」

赤茶のツンツン頭の青年は不機嫌そうにマークを睨む。

「お前は俺の応援とか言いながら無料で旅行したくて付いてきてるだけだろ」

「あはは」

「誤魔化すな」

2人のやりとりはエース達のお馴染のものだ。

「つまりあなた達はユーマさんのことがまったくわからない、そういうわけですね？」

「はい」

《剣闘士》、学園最強のトップエースは学園長に頷き、最後にこう付け加えた。

「だから今日にでも試してきます。《精霊使い》が本物かどうか」

剣を交えればわかる。彼はそう言った。

＋＋＋

その日の放課後。

「どうした？　ユーマ」

「果たし状、かな？」

“今から学園の北、離れの丘に1人で来い。待ってる”

僕らのリーダーより

「リーダー？」

PCリングに届いたメールにユーマは首を傾げた。

＋＋＋

「抜け。闘るぞ」

呼び出しに応じて離れの丘に来て聞いた台詞がこれ。

「は？」

「ごめんね。言葉が少ない戦闘狂で」

黒衣の少年に謝られて、ユーマは誰かを思い出す。

「確か《黒鉄》のマークさんで……あなたがリーダーさん」

「クルスだ。リーダーはやめてくれ」

「でもメールの差出人は……」

『僕らのリーダー』と書いてある。送信したのはマーク。

「おい、マーク」

「あはは」

睨むツンツン頭。クルスはとにかくリーダーと呼ばれるのが嫌だった。

クルス・リンド。現在の学園最強。トップエース。

《剣闘士》と呼ばれる彼は本物の剣闘士（職業の方）で在学中に世界ランクCの資格をとった、卒業後にデビュー戦を控えるプロでもある。

剣闘士は世界各地の闘技場で客を集め、その前で武技を競い合う戦士たちの総称。今のクルスは学園を中心に世界各地に飛び回り、武者修行に励んでいる。

「クルスはね、新米エースである君の力を見たいんだとさ」

クルスの相棒であるマークはユーマに説明した。これは力試しだと。

「だから本気出してね。僕らのリーダーは手加減を知らない脳みそ筋肉だから」
「マーク」
不機嫌ツンツン頭は目がつり上がる。
「何だい？」
「お前は何もするなよ。1対1だ」
「……君は戦いに集中しだすと僕の悪口を無視するんだよね」
つまらなそうにマークは2人から離れた。
「マークさん？」
「君は確か親睦会の招待状を配ってたよね？　僕ら2人が出席するにはクルスに1撃入れるのを条件にするよ」
だからがんばってね、と手を振る。
「……もうこんな人ばっかりだ」
「いくぞ」
うんざりしたユーマの隙を突くようにクルスは抜刀。距離を一気に詰める。
クルスの剣は二刀流。ただし彼は腰に4本の剣を提げていた。
「風葉、砂更！」
すぐさま反応しユーマは大きくバックステップ。《高速移動》で

詰められた距離を離すと同時に《白砂の腕輪》を篭手に変形させ地面を叩く。

「モグラ落とし、砂人の腕」

地面を砂地に変えながら砂を操作して攻撃。足場を崩して足元を狙う。

クルスは砂の腕に掴まれまいと砂上を駆け回った。

驚いたのは落とし穴にかからないこと。

「浮いてる？　超低空の《天駆》？」

「その手はそこにいる黒い優男の得意技だ」

「あはは。昔はしょっちゅうひっかかってたね」

「……」

マークは地属性の魔術師。地形操作は得意とした。

次にユーマはガンプレートを抜く。

「ストーム・ブラスト」

「甘い」

竜巻の放射は難なく切り払われた。

「え？　風弾、ガトリング！！」

今度は小型の《風弾》を速射。クルスは2刀の高速剣技ですべて打ち払う。

対風属性魔法剣、《裂風剣》。二刀流剣技は《五月雨》。

「どうした？　風を切り裂くのは《烈火烈風》だけじゃない」

「だったら」

ガンプレートが使えるのは風属性だけではない。ユーマはカートリッジを換装する。

「バブル・ボム」

「同じだ」

今度は《旋風剣》。巻き起こす風で泡の浮遊機雷をぶつけあわせ誘爆させる。

「（風使いだ！）フレイム・ブラスト！」

再びカートリッジを換装。火属性のＩＭで《補強》して炎が渦巻く《ストーム・ブラスト》を放つ。

風で強化された火属性放射攻撃は流石に躱すクルス。

「ちっ」

「いける」

そう思ったユーマ。風使いでもある彼はその弱点を熟知している。

有効なのは火属性や雷属性ならエネルギーの放射攻撃、地属性や氷属性ならば硬い物理攻撃だ。

「これだから魔術師みたいな間接攻撃を扱う奴は面倒だ」
「もういっちょう！」
２発目の《フレイム・ブラスト》。
「でも……やはり甘い」
今度のクルスは躱さずに迎え撃つ。
クルスの剣に風が集まる。
剣に纏う風は竜巻となって吹き荒れる。
「うわっ！？」
《旋風剣・疾風突き》
お馴染の技に意表を突かれた。しかしエイリークの技よりも重く、鋭い。
クルスは炎の竜巻を突き破りながら剣でユーマを貫こうとする。
「っ！　砂さ……」
ところがクルスの剣、ユーマの指示よりも主人を守ろうとする精霊たちの反応が早い。
風葉は《風盾》を発動させて剣の直撃を逸らせば砂更が砂の壁で

衝撃波を防ぐ。

ついでに砂はクルスの視界を塞ぎ、その隙にユーマは距離をとることができた。

「あぶないですねー」

「風葉、助かったよ。砂更も」

「……」

姿を現した精霊たち。

「……今の防御は精霊か」

クルスは《精霊使い》の本領を見た。ユーマには彼を守る精霊たちがいる。

「だからお前は甘いのか？　魔法剣と言ってもゲンソウ術だ。『破る』イメージができれば属性など関係ない」

ユーマは少しだけど怯んだ。

強い。《剣闘士》というだけあって近接戦に持ち込まれたら勝ち目がない。

《全力》を出すと決めたその時、クルスがユーマに話しかけた。

「そんなものか？　だとしたらお前はやはり１１番。番外の、最弱のエースだ」

＋＋＋

学園最強　後（前書き）

ユーマＶＳ《剣闘士》

＋＋＋

それは失望した声。

「ブースターを使った小手先のゲンソウ術。《幻想》に込められた意志に強さが感じられない。精霊に子守りされたままのガキかお前は」

ユーマがこの世界で初めて受けた酷評。クルスは冷めた瞳でユーマを見る。

「《竜使い》、ユウイ・グナントにもあった強さがお前にない。お前は何者だ？　何故ここにいる」

ユーマに問う。

「何故お前は学園にいる？　何を学びに来た？　何を探している？」

ユーマは答えられない。

「ここで何を望み何を願う？」

答えられない。実は異世界人で元の世界に還る方法を探しているなんて。

「精霊の力は何のために得た？」
「……守るためだ」
それだけは言えた。事実風森と契約して《精霊使い》となったのは、傭兵に捕まり心の折れたエイリークを助けるため。
なら今は？　成り行きで手にした精霊の力は何のために？
ユーマが密かに抱えていた疑問と悩み。だから精霊の力よりもガンプレートを多用している。
そのガンプレートですら《レプリカ》だというのに。
剣を交えた《剣闘士》は見抜く。ユーマの弱さを露見させる。
「それでも弱い。そんな薄弱な意志で振るう力が何かを守れるはずがない」
――弱いくせに。誰かをなんて守れるはずがない
誰かが言った言葉と重なる。ユーマは違う！　と叫びそうになり、とどまった。
ユーマはこの世界に来たばかりの時、風森の国でエイリークとエイルシア、それに魔人のラヴニカや王妃エイリアを助けている。

実績がある。ユーマに誰かを守れる力があるはずだ。

でも本当に？　ユーマは自問しても否としか答えられない。

だってあの人は俺を元の世界に還せないと苦しんで――

俺のせいで泣いていたのを俺は知っているのに？

助けることはできた。でもきっと……守れない。

「……黙れよ」

ユーマの心が荒れる。

「黙れ！　砂更！！」

怒りのまま、感情のままにユーマは巨大な砂の拳を振るう。

「……感情が昂れば意志がこもる。その方が少しマシだ」

クルスは冷静に剣を納めて『第５の剣』を取り出した。

柄だけの剣。クルスはそれに『水色のカートリッジを差し込んで』
……
「!?　その剣、ブースターはもしかして」
クルスは水の刃を持つ剣を創りだすと一閃。砂の拳を手首のところから切り飛ばす。
「《天才》、ティムス・エルドの最新作だ。砂は水で固めれば斬れる」
クルスは、ユーマよりずっと前からティムスの目に適う彼の作品の使い手だった。
《ガンプレート・レプリカ》のノウハウを注ぎ込んだブースター。刃の属性を換装できる魔法剣。
これにはユーマも驚いたが、構わず《砂人の腕》を出現させ、殴りかかる。
複数同時に襲いかかるそれさえ容易く切り捨てるクルス。
「砂の攻撃は見切った。この程度多対一でも《青騎士》なら、蒼雷がいない今のあいつでも容易い」
「なめるなよ。砂塵!!」
《全力》戦闘、開始。
「目眩し……む?」
「コメット、キィィィク!!」

砂嵐に注意を引きつけたユーマは空から銀の流星群を撃ち落とす。

「《銀の悪魔》？　いや虚仮脅しか」

幻創獣のコメットマンは封印している。これはユーマがＰＣリングで出した幻（記録映像）だ。

雨のように降りかかるコメットマンをクルスは無視。『本命』だけを迎え撃つ。

左右に旋回して飛んできたのは《アイス・エッジ》と《フレイム・カッター》。

それと同時にユーマが短剣を抜き、ガンプレートから紫電の刃を放出して《高速移動》で突撃してくる。

《旋風剣・二段疾風突き》

ユーマはエイリークのような剣技、二段突きができない。でも二刀流で同時に突き出せば似たような技になるはず。

氷、火、風、雷の四点同時攻撃。２刀で防げるものかとユーマは思っていたが、それさえもクルスに予想を裏切られる。

ユーマの攻撃をクルスは『４本の剣』で受け止めたのだ。

そのうち２本の剣は宙を浮いている。

「思考操作！？」

「俺はブソウみたいに百も千も同時操作なんてできない。剣2本で十分だ」

それは《操剣術》を駆使した四刀流。

ユーマの背筋が凍る。迂闊に近づきすぎた。

近接戦。彼の剣が届く距離。

（マズイ、離れないと）

4本の剣を必死に防ごうとするユーマ。

それでも《爆風壁》は発動前に《裂風剣》で無力化され《風盾》も通じない。砂の壁は水の刃に破られる。クルスは宙を舞う2刀でも魔法剣を使えた。

そのクルスがユーマの防御を崩し、2刀を持って踏み込んでくる。

「このっ！」

ユーマは初撃をガンプレートで受け止めようとした。それはギリギリで仕掛ける罠。

スタンガンモード

剣を通じて感電を狙うユーマだがそれも失敗した。

《斬鉄》の一太刀。《雷撃》の発動前にガンプレートの銃身が斬り飛ばされる。

「あっ……」

「遅い」

いつ斬られたのかがわからない。驚愕してユーマは硬直した。

クルスの二の太刀でユーマは斬り飛ぶ。

悲鳴を上げる風葉の声をユーマは遠くに感じた。

＋＋＋

「あの距離での打ち合いだとミヅルは俺の剣を斬り飛ばしてしまうのだが……」

クルスは剣に手ごたえを感じたがユーマを倒したとは思えなかった。ユーマが飛ばされすぎているのだ。

あれは自分からうしろに飛んで再び距離をとろうとしている。そのくらいはすぐにわかった。

ただわかっていてもクルスは追撃できなかった。タイミングを外されたのだ。

「……」
「むー」

ちいさな風の精霊によって。

風葉は風を無力化されると知るとあの瞬間になんと決死のダイビングキックをクルスにかました。

そのままクルスの顔にしがみついている。

「……邪魔だ」
「あうー」

ぺちん

はたきおとされた。

「しかしまだやるか。しぶとい」

そこで初めてクルスは笑った。楽しくなってきたと。

彼は《剣闘士》。がむしゃらに強さを求める者。

学園の誰よりも戦闘経験がある。今のエース達とも剣を交えたことがある。

そしてマークからは魔術師戦の戦い方を

リアトリスからは対属性の魔法剣を

ティムスに自分の武器を求め
ブソウの術から《操剣術》を編み出した

彼は戦う毎、剣を交える毎に何かを学び、己を磨いてきた。
ミヅルの大太刀、クオーツの騎馬戦術、メリィベルの《幻装術》もヒュウナーの《天翔術》だってクルスは自分の糧としている。
学園にいる誰もが彼と戦った。だから誰もが彼を認めている。
クルス・リンド、《剣闘士》こそ学園最強、頂点にいると。

「もっと力をみせろ《精霊使い》。《獣姫》も《鳥人》も、俺には一発叩きこんだぞ」

クルスは紛れもなくバトルマニアだった。

＋＋＋

「集え。集え集え」

ユーマは吹き飛びながら、イメージの《補強》の為に呪文を唱え

る。

クルスの1撃は風葉のおかげで狙いが甘くなった。なんとか左腕の篭手で受け止めることができたのだ。

本当にただ受け止めただけ、篭手に当てることができただけなのだが。

ユーマの左腕は折れた。激痛で手にした《守護の短剣》を落としそうになったがそうはいかない。

ガンプレートを失って風葉と離れてしまったユーマ。今はこれがないと唯一の武器を失くしてしまい風の魔法も使えなくなってしまう。

「風よ集いて螺旋を描け」

ユーマは空の右手で銃の形を作ると指先をクルスに向けた。

ガンプレートがなくても馴染みの風と砂ならゲンソウ術でユーマは魔法弾を撃てる。

右手に集める風。創る竜巻は砂をかき集め、さらなるイメージで魔獣を想造する。

「喰らい尽くせ、サンドワーム・ブラストォ！！」

ユーマの怒りを喰らい、砂漠の竜蛇は突進。飲み込まんとクルス

に襲いかかる。

「それが切り札か？　ならば」

クルスもイメージする。『第６の剣』を。

ゲンソウ術、それも武装術式の剣。

魔力とは違う力、《気》を媒体に創りだす巨大な剣。

対魔獣戦用の《闘気剣》。

一刀、両断

「そこだぁあああ！！」

竜蛇の化身を一刀のもと、砂に還したクルスに向けてユーマが叫ぶ。

《サンドワーム・ブラスト》はユーマの切り札ではない。強力な技ではあるがこれはもう《黙殺》やアギに破られてもいる。クルスを倒せるとはユーマも思っていない。

竜蛇は囮。クルスに大技を使わせて隙を作る為の見せ技。

ユーマの真の切り札。それは吹き飛んだと同時に待機させていた、

「砂更ぁ！！」

「っ、これは？」

クルスの足元に潜む砂の精霊

クルスは気付くのに遅れた。砂更が魔力を解放し、最終トラップは発動する。

「あんたはあの大砂漠に、砂の奈落に落とされたことがあるのか？」

ユーマはある。それがこの世界で受けた最大最悪の体験。

そのイメージがこの術式を創り上げる。

《砂縛陣》。流砂に飲み込み圧殺する巨大な蟻地獄。

抵抗されても足を封じた。クルスはもう動けない。

『次は』逃げられないはず。

《砂縛陣》は二段構成の巨大術式。とどめは精霊の合わせ技。

「埋まれ、そして爆ぜろ！！　風葉、砂更、爆砂……」

「うおおおおお！！！」

「――っ！？」

戦慄して発動が遅れる。半ば埋まった状態でクルスが吼えた。

狂戦士さながらの雄叫びをあげ、全力で《砂縛陣》に飲み込まれ

まいと抵抗している。

そして爆ぜる。ユーマが《爆砂陣》を発動する前にクルスが自力で《砂縛陣》を振り解く。

《闘気剣》を解除して剣を抜いたクルスが４刀の《旋風剣》で流砂を吹き飛ばしたのだ。ありえない。

砂更はここで魔力が尽きてしまった。

この時点でユーマは悟る。勝てないと。

必殺技の応酬、奥義戦闘で《全力》を超え、半ば《本気》のユーマは手の内を晒しつくした。その全てが打ち破られた。

これ以上の技がユーマにはない。

「あ……あああああ」

それでもユーマは短剣を右手に持ち替え、最後の突撃を仕掛ける。

《旋風剣・螺旋疾風突き》

諦めなかったのではない。単なる自棄だった。

何故怒り、何を恐れて何故戦うのか。もうわかっていない。ユー

マは我を忘れている。

闘争本能をむき出しにした、《剣闘士》の彼もまた。

「砕け砕け砕け！　つらぬけぇぇぇぇ！！！」

「お……おあああ！！！」

吹き荒れる暴風。竜巻のドリル。

４刀を投げ捨て《現創》するのは闘気の宝剣。

衝突するその時――

「まったく。熱くなりすぎだよ」

静観する《黒鉄》の魔術師が初めて動いた。

《黒鋼壁》。地属性防御術式。

鋼の魔術

このままぶつかればただでは済まないと判断したマークは、２人の間に鋼鉄の壁を割り込ませたのだ。

「終わりにしよう。もう十分彼の力は……――っ！？」

あの馬鹿！！　マークは驚きの声を上げ、愚かな相棒を罵倒した。

でももう間に合わない。

マークの防御術式は地属性かつ鋼属性でもあって《氷晶牢》よりもはるかに硬い。

まさに鉄壁。ユーマの放つ《旋風剣・螺旋疾風突き》も完全にシャットアウト。傷一つつかない。

「！？」

渾身の突撃を弾かれて驚くユーマは目を見開いてそれを見た。

クルスの《闘気剣》が、その《黒鋼壁》を切り裂くのを。

もう誰も止められない。

狂気にも近い、昂る闘気に身を任せる《剣闘士》は目の前の敵を斬ることしか考えられない。

とっくにクルスは本気だった。もう彼の前を遮るものが何もない。

クルスが放つのは《闘剣技》のひとつ。必殺技。

これがユーマへの、最期の、

一撃――

「させねぇ！！」

エースであるマークさえも諦めた瞬間、彼は飛び込んだ。

前に出ることを恐れず、勇気を持って振るう力。

背にしたものを守る力。その幻想。

青いバンダナを巻いた少年はユーマを突き飛ばし右手を翳す。

それは《盾》。守るモノ

「!?　お前は……」

驚愕したのはクルス。

土壇場でアギの守る力は学内最強のエースを凌駕した。

《闘気剣》を片手で防いだ。クルスが驚いたのはそれではない。

どうやって割り込んできた?

アギが近くまで来て様子を見ていたのを《気》が読めるクルスは知っていた。しかしそれでも遠い。駆け付けるよりもマークの魔術の方が遥かに早いはずなのに。

アギは間に合った。《盾》はユーマを守りきった。アギは自分の在り方をクルスに見せつけたのだ。

ダチは守ると

アギの瞬間移動とも呼べる技にクルスとマークは思い当たる術式がない。学園都市にそんな使い手がいることを2人は知らない。

「……もう退いてくれよ、先輩」

クルスの剣を防いだアギは苦しそうに訴えた。使った技の負荷が大きすぎた。

「それはヤバい。《気》を使ったゲンソウ術は、じいさんが禁じていたはずだ」

「老師を知っているのか？」

誰だ？　その疑問がクルスに隙を作らせた。

その隙を、忘我していてもユーマは見逃さない。

突然の、アギが与えてくれたチャンス。《盾》を見てユーマは新たな切り札を見出した。

最後の攻撃。残る力を振り絞り、ユーマは短剣で《旋風砲》を放つ。

背面に向けて、ブースト。合体奥義

《シールド突撃》

「うおおおお！！」

「ちょ、お前、馬鹿野郎がぁあああ」

「何を？　ぐはっ」

ユーマはアギを巻き込んでクルスに体当たり。
そして3人で仲良く吹き飛んだ。

静寂。

「「「……」」」

目まぐるしい展開と最後のオチにマークは笑うしかない。

「……あはは」

乾いた笑い声だった。

＋＋＋

「お前、普通死ぬぞ。わかってんのか？　ああ？」
「……やっぱり生きてるじゃないか」

しばらくしてユーマは正気に戻った。何を必死になって戦っていたかを忘れ、今はアギに締めあげられている。

「でもアギはどうしてここに？」
「お前が果たし状なんて物騒なこと言ったんじゃねーか。つけてみたら学園最強とガチで戦ってるし。無謀なんだよ。死んでもおかしくない真似すんな」
「……ごめん」

大体エース同士の決闘は禁止だろ、と怒りが収まらないアギが説教をはじめると残り2人のエースもばつが悪そうな顔をする。

「最初から僕が仲裁に入るつもりだったんだけどね。腕試しといったくせに、この大馬鹿狂戦士が我を忘れるものだから」
「……すまん」

マークは笑顔、クルスは仏頂面で謝る。

「クルスが本気で斬りかかったらエース全員で止めないと無傷じゃすまないんだよ。いやぁ、君がいてくれて助かった。死人出してたら僕もクルスもエース資格の剥奪どころじゃないよ」
「青いバンダナ。お前は誰だ」

バトルマニアはあまり反省していないようだ。

「アギ。戦士科の無印だよ」
「……成程、ブソウの後輩か」

無所属無名だとアギは言うが一度聞いたことがある名にクルスは納得。

「その呼び方はやめてくれ。俺は自警部の部員じゃない」

「そうか。ところでお前はウロン老師の教えを受けたのか？」

アギは頷く。

「ああ。初歩だけだが先輩と同じだ。だからヤバいとわかった」

「……老師には黙ってくれ。後が怖い」

アギが同じ師を持つとわかるとクルスは苦い顔をする。《闘気剣》及び《闘剣技》は禁じ手だったのについ使ってしまった。

学園最強のエースは学園最古の教師が一番恐ろしかったのだ。

「アギ。俺の剣を止めたその名は覚えておく。しかしお前ほどの戦士がどうしてエースにならない？」

クルスの疑問に簡単に答えるアギ。

「そりゃ《盾》しか出せない俺よりもユーマの方がいいに決まってる……ってユーマ？」

「寝ちゃってるよ」

マークは倒れていたユーマに気付くとすぐに様子を見てくれていた。

「左腕の応急処置はしておいた。消耗してるけどどちらかというと睡眠不足かな？」

「ああ。確か《賢姫》の先輩がどうとかって言ってたな。徹夜してるんだよ、こいつ」

ミヅルに強要された古文書の読書感想文のことだ。

「……そう言えばあいつが何か言っていたな」
「ミヅルちゃんの大太刀は……ちょっとね」
「というわけで先輩、今日はお開きにしてくれ。もう十分だろ？」
アギの提案に2人は頷く。
「そうだね。この勝負はユーマ君の勝ちだし」
「なんだと？　おいマーク」
「何だろうが彼は君に一撃入れた。文句はないよね？」
「……くっ」
俺が決めたルールじゃないと言いたい学園最強だが、先輩としての面子があるので押し黙ることにした。
「アギ。《精霊使い》に伝えておいてくれ。また闘る時までに強くなれと」
「まだやる気なの？　この戦闘狂」
呆れるマークに当然と言う学園最強。
「マーク。それは剣闘士にとって褒め言葉だ」
「……はぁ。それじゃあね。ユーマ君にもよろしく」
アギを置いて去っていく学園のツートップ。
こうして《精霊使い》対《剣闘士》の初対戦はユーマの完全敗北

に終わった。

＋＋＋

「で。剣を交えた感想は？」

学園に戻る途中でマークは相棒に訊ねた。

「弱い。なまじ技がある分ゲンソウ術の《幻想》が弱く感じてしまう」

「いきなり仕掛けてきたんだ。君みたいにいつでも本気出せるわけないじゃないか」

「……それでもだ」

無理強いした自覚はあるらしい。

「信念みたいなものが感じられなかった？」

「そうだ。あれなら《盾》の方が遥かに強い。アギの見せた正体不明の移動術式はきっとオリジナルのゲンソウ術だ。強力な意志を感じた」

《幻想》を《現創》する力。想いを現す力、ゲンソウ術。

技や術式のイメージも大事だが込める想い、描く幻想が何よりも力となる。

ユーマの技や術式のイメージは豊富だがクルスの闘志はそれを打ち破るほど強い。闘うことに対する意識、姿勢が違う。

《幻想》の質が違う。クルスが戦闘に特化してるのもある。

だからクルスはアギを高く評価している。クルスの闘争心を受け止めるほどの《盾》の幻想に。

「あれは僕も驚いた。ブソウ君はいい後輩を見つけたよ」

「ああ。あいつは人を使うのと指導するのは下手くそな癖に見る目だけはある」

「あはは」

自警部部長が雑務に追われる一番の理由だった。

「お前はどう思う？　《精霊使い》を」

今度はマークが訊ねられる。

「お前が探してる《精霊使い》と似ていたか？」

「うん。君から守ろうと彼の精霊が飛び蹴りしてきたところなんか。あの人も自分の精霊に慕われてたよ」

「……」

笑顔で答えるマークにクルスは仏頂面。

実際にやられた本人はわかるが、風葉は的確に鼻を狙って蹴ってくる。地味に痛い。

「今度機会があったらユーマ君にあの人の事を聞いてみるか。手掛かりがあるといいな」

「今度……か」

クルスは先程の戦いを思い返す。アギが割り込んだ直前、ユーマを斬ろうとしたその時。

もしもあの時、邪魔が入らなければ……

（あいつは何を繰り出そうとした？）

ただでは済まないと思った。ユーマが最期の一太刀に反応したのを感じたから。

あの一瞬の目の光だけにユーマの闘志を見たから。自分と同じものを。

（次だ）

ゾクゾクした悪寒に気が昂る。思い出すだけで笑みが浮かぶ。

あの意志の弱さであれだけの戦闘ができる《精霊使い》。

自分とは違う。きっと力の引き出し方を知らないはず。ならばこの先《精霊使い》のゲンソウ術は何倍にもなる可能性がある。

「次が……勝負だ」

楽しみができたとクルスは獰猛に笑う。

それに気付いて呆れた相棒の魔術師は、剣闘士の褒め言葉で彼を

罵るのだった。

＋＋＋

「……ん」
「気付いたか？」
「アギ？」

アギに背負われた状態で目を覚ますユーマ。

「俺……」
「寝不足で戦闘して最後ぶっ倒れた。腕は痛むか？」

学園最強が使う痛み止めだぜ、とアギ。

「大丈夫。……俺、負けたんだ」
「ああ。あの人に勝てる学生は学園都市にいねぇ」
「全部出し切って負けた」
「……」

アギは黙った。

「弱いって……守れないって言われて負けたんだ」

折られた腕。銃身を失ったガンプレート。砂更は完全に沈黙している。

風葉も回復する必要があるが、ユーマを心情を思って半透明のまま傍にいてしがみついている。

「何故ここにいる？　何を願う？　って聞かれて……何も答えられなかったんだ」
「探せばいい。そのための学園、学園都市だ」
慰めにもならない言葉。ユーマは打ちのめされていた。
「アギ。あの時割り込んできたあれは何？　おじいちゃん先生が教えてくれるやつ？」
「……違う。俺の国の王様が使っているやつだ」
教えを受けたわけではない。《盾》と同じくアギが望んで手に入れた力だという。
「我流で覚えた。大した距離はとべないが、遠くにいても《盾》は何も守れないからな」
「……そっか」
あてがはずれた。そう簡単に強くはなれないようだ。
「何ならじいさんに話してやる。氷の姫さんも俺が紹介して体術を学んでるからな」
「……うん」
おんぶなんて久しぶりだなとユーマは思った。兄は肩に担いで運ぶものだから。

「やっぱりアギは兄ちゃんに似てるね」
「またかよ。それ」

一体誰何だよ、とアギ。

「カッコイイんだ。本当だよ」
「なら俺をもっと敬え」
「ははっ」

ユーマの冗談に付き合うことにしたアギ。2人で笑う。

自分の危機に躊躇いもなく飛び込んだアギ。学園最強の剣を防ぎ、守り抜いた《盾》。

ユーマは本当に思ったのだ。《盾》の持つ強さは《狼》と同じもの。だからアギは強いと。

迷った時、悩んだ時はいつも2人の兄をユーマは思い浮かべる。2人ならどうするのか。今もそう。

（……それ以前にきっと負けなかったよな。アギみたいに）

そう思うと悔しかった。

＋＋＋

旋風姫　嵐の前編（前書き）

今年もよろしくお願いします。

＋＋＋

午前５時半。

エイリークの朝は早い。この時間になると彼女の目覚ましが『動きだす』。

「……ほぅ？」

つんつん。目覚ましが彼女の頬をつつく。

「……んん」

「ほー」

それから手のひらサイズの『しろい梟』はそのしろい嘴でエイリークの髪を引っ張った。

「イタッ！　……もう。なんでアンタの起こし方はいつもそれなのよ」

「ほぅ？」

梟の幻創獣は首を傾げた。

エイリークのＰＣリングに設定されている幻創獣、梟の「しろ」

は特別製。一般仕様の色違いでもあるが、アップデート用の試作オプションとして簡単な思考パターンが組み込まれている。

しろは待機状態になると思考操作とは別に勝手に動き出すのだ。眠りこけたり首を傾げたりする仕草は愛嬌がある。

ところがこの幻創獣は髪を引っ張る悪癖があった。アラーム機能にもこの癖（バグ）があってエイリークの朝はこの梟から髪を守ることからはじまる。

「……苦しい」

「ほぅ？」

朝の戦いはまだ続く。今度の敵はいつものようにベッドに潜り込んでくる親友。

「……にへへ。リィちゃん……」

ミサだった。

彼女はエイリークと寮の相部屋に住み、身の回りの世話をしている。

お姫様というエイリークの立場からというわけでなく、ミサが親友兼専属侍女であるこだわりからそうなった。

「ただでさえ学園は学部が違って一緒にいられないんだよ？」

とこれがミサの弁。

ミサはたまに寝ぼけてエイリークのベッドに潜り込む。抱きついてはすり寄って、成長著しいその胸に抱きしめてくる。息苦しい。

ミサの抱き枕状態。これはエイリークが知られたくない隠し事ベスト3に入っている。今のところ幼馴染であるアイリーンにしかばれていない。

ミサの拘束から苦労して脱出するとエイリークは手早く着替えて剣の素振りに出かける。

腰には細剣、頭の上にしろい梟を乗せて。

「今日もいくわよ」

「ほー」

相槌も打ってくれるこの幻創獣の梟、エイリークは結構気に入っているのだった。

＋＋＋

午前6時半。朝練から帰宅すればミサが朝食の準備をしてくれている。

「リィちゃんおはよう」

「ええ。ミサ」

この時間になるとミサもしゃきっとしている。とても寝ぼけて抱きついてくるとは思えない仕事ぶり。

「早く汗を流しておいでよ。制服とかカバンを用意しておくから」
「ミサ、あのね……」
「ほら急いで。朝ごはんもすぐだよ」
急かされてしまい、エイリークは今日もミサに言えなかった。
下着の選択（洗濯ではない）までミサがしなくてもいいのに、と。

「いただきます」
7時過ぎ。汗を流して制服に着替えると2人で朝食。エイリークは普段からミサの2倍は食べる。

「おかわり、ある？」
「まだ食べるの？　訓練で身体を動かすといっても太っちゃうよ」
「いくら食べても筋肉がつかないのよ。身体強化が使えないアタシはとにかく食べて鍛えないと」

エイリークは体質に加えてその運動量からか太りにくい。ミサとしては自分の料理をたくさん食べてくれるのは嬉しいのだけど、体重を気にせず食べるエイリークが心配だったりする。
（ムキムキリィちゃんもぶくぶくリィちゃんも嫌だなぁ）
なので一計を謀るミサ。

「実はね、リィちゃん」
「何よ。食べないならミサの分貰うわよ」
ウインナーをフォークで守るミサは真剣な面持ち。
「リィちゃんの制服、最近ウエストを補正したの。気付いた？」
ぴた。エイリークは４枚目のトーストに伸ばした手を止める。
「……まさか」
「食事ってね、バランスが大事なんだよ。がむしゃらに食べたって栄養が偏っておなかぽっこりなんだから」
「……」
黙って自分のおなかを触ってみるエイリーク。嘘だから変化はないのだけれど。
「リィちゃんにいつも抱きついてるわたしが言うのよ」
ミサの妙な迫力に押された。あとベッドに潜りこむ癖は故意なのかもしれない。
「これからはリィちゃんもわたしを見習ってダイエットを……」
「……ミサだって偏ってる癖に」
「なっ！？」
エイリークの反撃。
「２年前から身長が止まって胸ばかり大きくなってるくせに」

「うっ」

その胸でアタシをいつか寝ぼけて圧殺する気ね、とまでは言わないが軽く睨むエイリーク。

「……」
「おかわり」
「……はい」

ミサは手にした牛乳をエイリークに差し出した。

エイリークのとある朝の風景。ミサはコンプレックスを突かれしょんぼり。

それで今朝風森の城から届いた手紙のことをミサは忘れてしまった。

＋＋＋

数日前から学園にある看板が立てられている。

“只今新エース《精霊使い》の体験キャンペーン中”

“善戦すればエルドカンパニーより豪華景品。ぜひ1度模擬戦に参加して下さい”

放課後の屋外演習場前、『ユーマの砂場』では最近《精霊使い》が挑戦者を募り模擬戦を繰り返していた。

今もユーマは数人の生徒を相手にガンプレートを振るう。

「風刃、スパイラル」
「うわっ？」
「ＶＴＦ・フレア」
「熱ぢー！！」

戦士タイプの生徒は錐揉み状に飛ぶ3枚刃のカマイタチを捌き切れずに武器を弾かれ、魔術師は回避する前に爆発した火球にひっくり返った。

「当たる前に爆発した？　なんだそのＶＴＦとかいうのは」
「ヴァリアヴルタイムなんとか。あと忘れた」

いい加減な答えを言うユーマに顔を顰め考えるティムス。

「一定時間……違うな。一定の距離に近づくと起爆する仕掛けか」
「そんな感じ。これなら速い奴にも確実なダメージを与えられる」

Ｖａｒｉａｂｌｅ　Ｔｉｍｅ　Ｆｕｓｅ　近接信管ともいう。

前に竜騎士団の幻創獣、飛竜の空襲に苦戦したユーマが対空戦にと考えたものだ。イメージの大元はロボットアクションゲームの武装。

器用な奴め、と思いながらもアイデアをノートに書き留めるティムス。

「基本術式とそれに変化を与える補助術式の合成。ツインカートリッジの方向性に間違いはないな」

ユーマとティムスは新型ブースター、《レプリカ２》の性能テストをしていた。

ブースターとはゲンソウ術の発動を補助するイメージ増幅器。特定の属性や特定の術式を補助するＩＭを付与したもの。

ユーマオリジナルのゲンソウ術はブースターでない本物のガンプレート、その魔法弾を再現したものだ。それからユーマのゲンソウ術を補助するブースター、《ガンプレート・レプリカ》は銃の形を模した本体とカートリッジの２枚の金属板で構成されている。

《ガンプレート・レプリカ》のブースターとしての機能。それは本体が『魔法弾を撃つ』『銃身からエネルギー刃を放出する』の２つ。カートリッジに『属性のイメージ補助』と２枚の金属板に別々のＩＭを付与して組み合わせている。

実はこの仕組みが既存のブースターになかった。

つまり『火属性の弾を撃つ』というブースターはあっても『火属性＋弾を撃つ』というブースターはなかったのだ。特に後者の『火

属性』の部分をカートリッジの換装で別の属性に変更できてしまうのが《ガンプレート・レプリカ》の最大の特徴。

１つのブースターで６種以上の属性を操る《精霊使い》は学園の生徒達に衝撃を与えた。

このユーマのブースターを元にエルド兄妹が換装型ブースターの雛形として開発した新型ガンプレート。それが《レプリカ２》。最大の特徴はツインカートリッジの採用。誰もがユーマのように複数の属性と術式を操れるようにと考えた、量産化を前提としたブースターだ。

ティムスは《レプリカ２》の開発する前に属性を換装する簡易タイプとして《剣闘士》、クルス・リンドが持つ剣を創っているが、《レプリカ２》で再現しようとしたのはユーマが時折見せる既存術式に変化を与えることの方だった。

例えば《風刃》の軌道を曲げる《風刃ブーメラン》。これはユーマが既存術式を《補強》することで可能としているが、この『ブーメラン』の部分をＩＭ化して補助術式のカートリッジを創りツインカートリッジで組み合わせれば《インスタント（１つの術式に特化し発動を容易にしたブースター）》並に誰でも『風刃＋ブーメラン』が再現できるのではないかというのだ。

この発想の過程で『幻想の矢＋補助術式』というジン専用のガンプレート、《ボウ・ガンプレート》が創られている。

《レプリカ２》は『基本術式＋補助術式』の性質変化、『属性＋基本術式』の属性変化に加えて『属性＋属性』の複合術式の発動補

助、『基本術式＋基本術式』で2種類の魔法弾を撃ち分けるなど組み合わせの幅を広げている。

ツインカートリッジによる換装の難しさと本体強度の低下は否めないが、ティムスの考えとしては下位の術式しか使えない生徒でも《レプリカ2》を使うことで中位から上位クラスの技巧派になれるはずだった。

実際はガンプレートの《銃》の特性を理解できる生徒が殆どおらず、今もユーマとポピラの2人しか使いきれなかったのだが。

紆余曲折あって制式採用される換装型ブースターは結局剣や杖といったものにカートリッジを付け足すものになりそうだった。

それで今やっている《レプリカ2》の性能テスト。その目的はユーマの《補強》から繰り出す魔法弾から補助術式のカートリッジを創るためのデータ収集だった。

「参った。やはりエースには敵わない」
「ありがとうございました。……ティムス、次」
「ああ」

ユーマは相手をしてくれたランクCのグループに頭を下げると次の対戦相手を呼んだ。

淡々と準備するユーマに対してティムスは釈然としないものを感

じている。戦闘データを取ることはティムスが言ったことなのだが、実戦形式を提案したのはユーマの方だ。

目的がデータ収集とはいえユーマは思った以上に新術を披露している。皆に手の内を晒し過ぎているのだ。それが引っかかる。

ティムスに思い当たることはある。それはユーマが《彼》に負けたこと。

（あの戦闘馬鹿に何か言われたな）

《剣闘士》の強さ、他を圧倒する闘志を目の当たりにすれば誰もがその影響を受けてしまう。良くも悪くも。

あの脳筋のせいで自分を見失わなければいいが、そう思うティムスだがユーマの力を測る良い機会なのも事実。特に触れずにいた。

「ユーマ。次はランクBの戦士タイプ1人。術式は2種類まで、近接戦だけでいけ」

「わかった」

ティムスの指示を受けるとユーマはガンプレートのカートリッジを換装して赤い刃を放出した。

キャンペーンと言って人を集めて行っている模擬戦は変則式。

まずティムスが挑戦者のタイプと力量を測りユーマのハンデを決める。その上でランクC以下の挑戦者に10名以下複数での参加を認めた。挑戦者グループにランクBが混ざるならば4人以下、ランクAは1人でハンデのみといった具合だ。

挑戦者の目的は腕試しよりも豪華景品。なにせ《天才》ティムス・エルドが創るブースターは優秀なのだ。彼の作品やＰＣリングの限定オプションを手にする機会は見逃せない。

「ヒート・カッタ……あ」

ユーマはガンプレートで対戦相手の武器を焼き切ってしまう。

「ああ！　俺の剣が」

「ちっ。こっちで完全破壊した装備はサービスしてやる」

「いや、それより……」

ティムスが修復するのを断るランクＢの生徒。

「参加賞の人形、好きなもの選んでいいか？　彼女が欲しがっていたんだ」

「……好きにしろ」

原価が１００もしないやつなのに割に合わないだろうが、と不可解に思うティムス。

ユーマが参加賞（えさ）にと言うので《複製》で用意した幻創獣のストラップ付きマスコットは思いのほか好評。これだけを狙いに参加してくる生徒もいる。

「何が流行るかわかんねぇもんだな」

「ティムス、次は？」

「アタシよアタシ」

ダークエルフのユンカだ。

「ジンを誑かすアンタ達を倒してマスコットも貰う！」

「……ユーマ、アレはハンデなしだ」

吹き飛ばした。

「次は？」

「俺だ」

「ハンデなし。精霊も使え」

リュガは埋めた。

＋＋＋

リーズ学園の授業は午後3時で終わる。放課後が長い。

小学校かよ、とはじめはユーマも思っていた。実際は生徒たちに自主的な活動時間を与えられているわけなのだが。

学園の生徒にとって放課後からが学園生活のはじまりという人も多い。戦士や魔術師など戦闘系の生徒で多いのは授業で集団訓練や個人指導受け、放課後に自主訓練に励むパターン。

他に技術系、文化芸術系の生徒は研究や創作活動。生徒会の各委員会の運営や《組合》の商店で店舗を開く生徒もいる。もちろん遊びに学外へ行く生徒も。

その日の放課後。エイリークは《エルドカンパニー》の帰りに西区の商店に立ち寄っていた。

「まさか２００万じゃ足りないなんて」

エイリークは学園の《組合》が運営する武具店と鍛冶屋を見て回ってきたのだ。

新しい剣を求めて。

ポピラの援護を得て《旋風剣》の奥義、《昇華斬》を放つことができたエイリーク。それがきっかけなのか彼女の成長は目覚ましいものがある。

《旋風剣》で剣に付与する竜巻が一層力強くなったのだ。一度実践、成功したことでイメージを掴めたのが大きい。その結果

よく剣を砕くようになった。

エイリークの制御に問題があるかもしれないが、その兆しは昇級試験時のブロト戦から見られている。最近では全力で《旋風剣》を振るえなくなってしまっていた。

剣がエイリークの能力に耐えきれない。実は彼女が愛用する細剣は風森から取り寄せた特注品（オーダー）。それなりの業物なのでエイリークは折れる度、砕ける度に錬金術で《修復》して使っている。

今度は錬金術で強化しようと考えたのだが。

「これは修復のしすぎで耐久度がかなり落ちています。強化してもあまり期待できませんよ」

とは腕利きの錬金術師であるポピラの言葉。

「刀身の強度を上げるのは無理なのね」

「はい。剣に風属性への耐性を付与することはできますけど」

「……全力で振るっても折れなくなる。けれど《旋風剣》の威力は格段に落ちる」

「そうです」

それでは意味がない。エイリークはうんざり。

「結局剣を新調する必要があるのね。あーあ。折角お金戻ってきたのに」

「ミツルギさんですか？」

それは昇級試験前の話。

エイリークは試験終了後に打ち上げを計画してその幹事をユーマに任せていた。ユーマは特待生で試験を受ける必要がなかったからだ。

「準備のお金、立て替えるつもりでアタシの貯金カードをアイツに渡してたんだけど別の事に全部使ってたのよ全部」

思い出して怒りが込み上げてきたエイリーク。

でもってとっくに《竜巻ぱんち》を喰らい制裁を受けているユーマ。＊番外編「風森の精霊と」より

「アタシが学生ギルドでコツコツと貯めてきた２００万！　一体何に使ったっていうのよ」

「それは……」

ユーマは《皇帝竜事件》の時に報道部の部長から情報を買い、情報操作を頼んでいた。

その辺りの事情は当事者なのでポピラは知っている。彼女の兄が襲われてユーマが怒りを現していたことも。

（しかしエイリークさんはミツルギさんに全額渡す必要はなかったのではないしょうか？）

ユーマを信頼してなのか。それともエイリークの金銭管理がただ杜撰なだけなのか。

「ミサに内緒で貯めていたのに」

「……」

しかもへそくりだった。

実はエイリークの財布（カード）はミサに管理されている。エイリークが稼いだお金は１度徴収され必要な分だけミサから渡されていた。

「無駄遣いは駄目だよ。リィちゃんの家計はわたしが守るから」

とはミサの言葉。何か違う。

風森の妹姫様、学園ではまさかのおこづかい制。それを聞いたポピラは「やはりあの人は侮れません」と改めて思う。

「でもミツルギさんは全額返したんですよね？」

「ええ。利子までつけてたわ。エースって儲かるのよ」

それはユーマのエース就任時の支度金と初任務の報酬（アギと山分け済み）からだしたものだ。

「私も時々兄の手伝いに行きますけど割に合いませんよ」

「そうかもね。アタシもリア先輩に頼まれて手伝ったことあるわ。そう言えばポピラ、その兄はどうしたの？　いないみたいだけど」

《エルドカンパニー》の事務所はエルド兄妹のデスクと応接スペースのある社長室と幻創獣課の面々が使う会議室の2部屋がある。研究室兼工房は以前から兄妹が使っている研究室を利用していた。

「今日はガンプレートのデータを収集しています。ルックスちゃんが編入してきてPCリングの方は余裕ができましたから」

「ユーマもそっちね。あとルックスにちゃん付けはどうなの？」

いくらなんでも可哀相でしょ、と言うエイリークにポピラは言った。

「かわいいものはちゃん付けです」

堂々と言い切った。

「……そう。まああの子の女装は……ね」

天使ですから。

というわけでポピラに相談した結果、剣を新調してそれを強化することにしたエイリーク。

錬金術による剣の強化に関しては「ともだち割しますよ」と言うポピラの言葉がありがたかった。

ところが。

話はエイリークが学園西区の商店を出た後に戻る。エイリークが調べてわかったことは今使っている細剣より良いものは武具店（武器１つにつき１０万～１００万）にはなく鍛冶屋にオーダー（１００万～）するしかないということ。

学園にはランクＡ又はエース御用達の優秀な鍛冶師がいる。その鍛冶師にオーダーしてエイリークの要求を満たす剣を作るとなると全財産を注ぎ込んでも全く足りないことがわかった。

最低限の見積りでも３００万。錬金術で強化してもらうならそれ以上の費用がかかってしまう。学生ギルドで集中して稼ぐにしてもすぐに集まる額ではない。

余談だが放課後に学生ギルドへ足を運ぶ生徒は多い。もちろん依頼を受けた報酬でお金を稼ぐためだ。

学園都市にいれば最低限の衣食住を保証されてはいるがそれで10代の少年少女が満足するはずがない。よりよい生活を送るにはまずお金が必要になるのはどこにいても同じだった。

あと学園都市内の貨幣制度は他国とは独立しておりクレジットポイント（CP）制である。学生個人では他国の通貨と換金ができない。金品の持ち込みも当然制限されている。

なので学生は個人ランクによる支給ポイント以外での収入は学生ギルド等の報酬で稼ぐか《組合》から出店し商売をするしかない。金銭面においては学生の誰もが同じ条件である。

たとえそれがどこかの国の、姫らしくないお姫様だとしても欲しいものは自分で稼いで手に入れるしかないのだ。

エイリークは考える。剣は今すぐにでも欲しい。

「戦士系は装備にお金がかかるから問題よね。素材をこちらで用意すれば大分安くなるみたいだけど……あ」

名案が思いついた。むしろ思い出した。今のエイリークは以前にはできないことができる。

「アタシ、今はランクＡだわ。今以上の高額の依頼を受けることができるじゃない」

答えは戦闘系の生徒がランクＡになると誰もが考えること。すなわち

「狩りに行くしかないわね」

魔獣狩りだった。

高額の報酬に素材の採取、実戦も兼ねて学園都市の外へも行けるとなると魅力的な話だ。

「他のランクＡだと……アタシとユーマとアイリィ。あとアギでパーティーを組めば……いけるわ。早速学生ギルドへ」

意気込んで依頼を探しに行こうとするエイリーク。

ところがそこへ水を差すように現れるしろい梟。

「ほう！」

「何よアンタ。連絡って誰が……リア先輩？」

相手はエイリークの先輩である《烈火烈風》のリアトリス。ＰＣリングの通話機能を通して梟のしろが喋る。

『エイリーク。今何処にいる？　まだ学園か？』

「西区のあたりですけど」

リアトリスは焦っているようだ。

『急いで屋外演習場前に来い。ミツルギがよくいる場所だ』

「あの砂場？　どうして」

『来ればわかる。あとミサにも連絡してくれ。私は彼女の連絡先を知らないんだ』

「ミサ？」

普通科の彼女を呼ぶ理由がエイリークはわからない。

「リア先輩、一体何が」

『今そこでミツルギが……』

「――！？」

リアトリスから状況を聞くとエイリークは全力で走りだした。

簡単に言うとこうだ。

《剣闘士》に続いてユーマはまた、しかも《Ａナンバー》以外を相手にして《全力》で戦っていると。

＋＋＋

旋風姫　来襲編（前書き）

ユーマＶＳ？？？。誰だか１発なんですけどね

十十十

屋外演習場前、『ユーマの砂場』。

一番遠くにいたせいかエイリークが駆け付けたのはどうやら最後らしい。リアトリスの他にもアギ、アイリーン、リュガといつものメンバーが揃っていた。ミサもいる。

逸る気持ちを抑えてエイリークはまず連絡をくれたリアトリスに訊ねる。

「リア先輩。一体どうして」
「話は後にしてくれ。あとこれは一応模擬戦だ」

防御結界は張ってあるとリアトリスは言うが、彼女はいつでも仲裁に入れるよう今もユーマ達の戦いを注視していた。

それはアギ達も同じ。ただその中でアイリーンは誰よりも驚いている。

「ウインディさん。どうしてあの人が」
「聞かないで。アタシもさっき知ったのよ」
「リィちゃん。あのね」

ミサは意外と落ち着いていた。手にしていた手紙をエイリークに渡す。

「これは？」

「忘れていたの。今朝渡して教えるつもりだったんだけど」

「！！　あの子……」

ミサは先に読んで事情を知っていたらしい。手紙を読んだエイリークは文面以上に差出人の名に驚いた。

「なんだよ。《あれ》は」

動揺というよりも動転しているのは最初から見ているティムス。

「俺以外に《あれ》を創った奴なんて知らない。いや、仕組みは単純だから創れはするんだ。……ただ、ただあの性能は一体なんなんだよ！」

《天才》の彼は《本物》を見て技術士としての敗北を味わっている。

そんな周りの驚きも気にせずユーマ達の手合わせは続く。

2人は互いに武器を向け、同時に叫ぶ。

「「ストーム・ブラスト！」」

ユーマと戦う騎士服の彼女が手に持つ武器は……ガンプレートだ。

＋＋＋

相殺。と思いきやユーマは撃ち負けた。飲み込まれ巨大化した旋風の放射を前にしてユーマは横に飛ぶ。

それを見た彼女が手を広げ、追撃の《風弾》を撃てばユーマは続けて《高速移動》で回避。２人はその攻防の合間にカートリッジを換装。

「えいっ！」

「げ。砂塵」

経験上ガンプレートの魔法弾をある程度見分けられるユーマ。攻撃が広範囲に広がる拡散レーザーだとわかると砂埃を起こしてレーザーの威力を減衰。ダメージを抑えつつ回避運動。

「流石に風属性は力負けするよな。他の属性で攻めなきゃ」

レーザーを掻い潜っての反撃は《フレイム・ブラスト》。ユーマの炎の旋風を彼女は片腕を振り、《旋風壁》で直撃を避けて逸らした。風に煽られて彼女が炎にのまれるようなこともない。

「弾いた？　火属性の非実体系（エネルギー）なのに」

「《風盾》の応用で当たった瞬間、受けた攻撃の軌道に変化を与えるのです。風の防御では基本ですよ」

「いや、衝撃も逃してるし上級者の技だよそれ」

基本にして極意なんです、と彼女。顔はゴーグルで隠れて見えないが声は楽しそうに弾んでいる。

２人戦いはガンプレートの応酬。ユーマは動き回りながらの攻撃、それを彼女が迎え撃ち火、風、氷、雷と多くの魔法弾が飛び交う。

機動力、そしてカートリッジの換装速度と射撃精度は熟練度の差でユーマが上。しかし彼女はガンプレートを扱いながら風の術式で牽制と防御をこなして換装の時間を稼ぎ、拡散や誘導タイプの魔法弾で命中率を補っている。

それで互角。むしろ４対６くらいでユーマが押されている。

「これはどうだ！」

ユーマが《レプリカ２》で撃つのは《裂風弾》。クルスがユーマに見せた対風属性の術式。

これなら風の防御を無効化できる。しかし彼女はユーマのそれを理解してガンプレートを構えていた。

対風属性も風属性。ユーマは《風読み》で相手の風属性の術式を先読みできるなんて知らない。

「あ」

しまった。ユーマは彼女の《風使い》のイメージが先行しすぎてガンプレートの機能を失念していた。

本来ガンプレートの銃剣は機能のひとつでしかない。それと特殊

なカートリッジがあることを忘れていたのだ。

「シールド」

彼女のガンプレートは前方に緑色に光るエネルギーの膜を展開。その『シールド』に当たった《裂風弾》をガンプレートのカートリッジが《吸収》する。

それから《裂風弾》を撃ち返した。

「リバース・ショット」

「うわっ！？」

ユーマは辛うじて《ヒート・カッター》で打ち払った。対属性の術式は対応する属性以外だと非常に弱い。

「……それは使ったことなかったから忘れてた。《ドレイン》と《リバース》はレベル４でも扱いの難しいやつなのに」

でも１番驚いたのはティムスだろう。《ガンプレート・レプリカ》では再現できなかった魔法弾だったから。ユーマの想像以上に彼女はガンプレートを使いこなしている。

手合わせの前に模擬戦を繰り返していたユーマは疲れている。そんな彼の状態をわかってか彼女は話しかけてきた。

「ユーマさん。ガンプレートの事はお互い手の内を知っているので埒が明きませんね。次で最後にしましょう。……本気で行きますよ」

正直言えばユーマは彼女の浮かべる笑みが怖かった。笑顔を返したかったが引き攣ってしまう。ユーマはつい思ってしまうのだ。

やっぱり怒ってません？　と。

「……あと1分だけね。風葉」

「ふー。わかりましたー」

お疲れの風の精霊が姿を現してユーマの肩にしがみつく。

「いくよ」

「……」

ユーマは近接戦で勝負をつけるために《高速移動》で走りだす。

ところが対する彼女は動かず、腰に差した《短剣》に語りかけた。

力を貸して、と。

「お任せ下さい」

「えっ！？」

次に起きたことは誰もが驚いた。彼女が名前を呼び、それに応えるモノが現れたからだ。

「……嘘だろ」

魔力を帯びた風が吹く。彼女の前に姿を現すのは紅葉色の髪の、それもフェアリーの姿をした小さな風の精霊。

ユーマやエイリーク、当然ミサだって知らなかった。

彼女が《精霊使い》だと。

「風は決して貴女を傷つけさせません」

そう言った紅葉色の精霊は風の奔流を操作。守るべき彼女を中心に無軌道に周回する風の帯を展開。

触れたものを切り裂く風の帯。これは風属性操作系斬撃術式、《風刃結界・竜牙》。

ユーマどころか魔術師のアイリーン、エースのリアトリスも知らない術式。ゲンソウ術では再現できない本物の魔法。

不可視の風の竜はユーマが近接戦を仕掛ける度に牙を剥き、彼女に近づけさせない。

「カレハ、そのまま援護を」

「くっ、風葉」

近づくことを封じられたユーマは彼女の戦闘スタイルに合わせるしかない。再び風魔法とガンプレートの応酬になる。

しかしガンプレートの性能差はユーマの技量でなんとかなるも風属性の熟練度はユーマより彼女が上。それでいて同じ《精霊使い》なのだからユーマは明らかに不利だ。

彼女は精霊の力なしに魔法が使えるのだから。

「加速円陣……」

「やばっ、スパーク・ブ」

「させません」

ユーマが邪魔しようにも紅葉色の精霊が彼女を守る。対抗できる大技を仕掛ける隙もない。

その間に魔法陣は完成してしまう。

「展開！　しっかり防御して下さいね。撃ちます」

「ちょっと待って！！」

アレの威力をユーマは知っている。いくら精霊の補助があっても人の反応速度で躱すなんて無理だ。

彼女は《加速円陣》を前方に展開してガンプレートをユーマに向ける。容赦なし。

「アクセル・シュート！！」

ただの《風弾》が音速を突き破り風属性最速の魔法弾となる。

４００年前に失われたはずの魔術奥義、ソニック・ブレイカー。

正面から何が来るのかまで知らされていたユーマは前面に《旋風壁》、さらに短剣とガンプレート交差して《風盾》を2重展開。それで攻撃を防ごうとした。

「ぐっ！　うわあああーーっ」

それでも一瞬で弾き飛ばされ、錐揉み状に高く吹き飛ぶユーマ。
そのまま砂地に墜落。

後にユーマは語る。

戦闘機に轢かれるってこんな感じかなぁ、と。

ぐしゃ。

「あれは……姫さんの比じゃねぇ」

エイリークによく吹き飛ばされ、もう慣れたと豪語するアギさえも恐れる一撃だった。

うつ伏せに倒れ沈黙するユーマに彼女は近づいた。

「私の勝ちですね」
「……」
「……ユーマさん？」

沈黙。ぴくりとも動かないユーマ。

「嘘。手加減しましたし大丈夫ですよね？」
「……」
こころなしか呼吸していないような気がする。
「ユーマさん！！」
慌てだした彼女は迂闊にもユーマに触れようとして……
「きゃあ！」
ズボッと腰まで埋まった。
「ううっ、一体何が」
「……フフ」
聞こえるのは学園にいる年中マフラー男のような含み笑い。
「ユーマさん？」
「ふっふっふっふっ。奥義、《死んだふり》」
むくっと起き上がるユーマはガンプレートを彼女に向ける。
チェックメイト。それと同時に現れるのは貌を隠した金髪の男。
「えっ、まさか別の精霊？」
「砂更の事は知らないはずだからね。切り札に最後まで隠してたんだ」

したり顔のユーマに大人げなくむくれる彼女。

「ずるいですよ。ユーマさん」

「こっちだって最初から驚きっぱなしなんだから。とにかく今回は俺の勝……はっ」

卑怯にも勝ち誇ったユーマは油断した。彼女がいるのだからエイリークが来る可能性があること気付けなかった。

次の展開が予想できてももう遅い。

「何てことをするのよ、アンタはあああああ！！」

「やっぱりぃぃぃぃ」

強襲、《竜巻ダイビングきっく》で今度こそ飛ばされるユーマ。

「ちょっとリィちゃん！？」

「いいの。当然の仕打ちでいつものことよ」

「いつものって」

「それより！」

非難を無視して埋まった彼女を引っ張りだすエイリーク。

それから故郷にいるはずの彼女に文句を言った。

それはもう最初から言いたかった。

「その服、アタシのじゃないの、姉さま！！」

とっくにおわかりだと思いますが、学園に風森の姉姫様がやってきました。

＋＋＋
旋風姫、襲来
＋＋＋

エイルシア・ウインディ。

西国の1つ、風森の国の第一王女。エイリークの姉で《風邪守の巫女》と呼ばれた風使いの《魔法使い》。

「勝手に借りてごめんなさい。1人旅するのに丁度いい服を持っていなかったから」

エイルシア旅装ヴァージョン。それは白地に翠の刺繍を施された風森の騎士服上からフード付きのマント。それからはちみつ色の長い髪をまとめあげた男装スタイル。といっても女性らしい体つきは隠しようがない。

「似合わないかしら」
「そんなことないわよ。……アタシの服じゃなければ」

複雑そうな顔をするエイリーク。

エイリークとエイルシアの背格好はほぼ同じだ。同じ服を着ればその『ほぼ』の部分が如実に顕れる。

胸まわりとか腰まわりとか。

それとエイルシアの服装はエイリークの戦闘衣に近いが装備はユーマと同じ。

専用のガンベルトにオリジナルのガンプレートとカートリッジ、《回路紙》を使った魔法カードのデッキケース。腰のソードホルダーには《守護の短剣》。変装用なのか額にはユーマが風森の国に置いてきたデバイスゴーグルのレプリカ（未使用）をしている。

おまけは肩に乗せた紅葉色の精霊。

「姉さま。その子はやっぱり」

「そうよ。カレハは私の《守護の短剣》に宿る《風森》の一部。カレハ、私の妹にユーマさんよ」

カレハと呼ばれた紅葉色の精霊はぺこりと礼をする。

「はじめまして。エイリーク様にユーマ様。私はエイルシア様に仕えるカレハと申します。それから」

ユーマの肩に乗る風葉を見ると、カレハは頬を紅潮して嬉しそうに言った。

「お会いしたかったです。風葉お姉様」

「わたしですかー？」

ユーマとエイリークはびっくり。

「姉ぇ？　風葉が？」

「どう見たって逆じゃ」

「ひどいですねー」

ふくれる風葉。カレハに比べれば言動が明らかにアレだ。

風葉はふよふよー、とカレハに近づくとくるくるー、と周囲を飛び回り観察。最後にうわぁ、と喜びカレハに抱きついた。

「わたしはー、元気ですかー？」

「はい！　名を与えられ、別れても私達はひとつ。お姉様の活躍は風の便りで風森（わたし）にも届いています」

抱き合って喜ぶ精霊の姉妹。ちなみに名を与えられた順で風葉が姉だという。

活躍？　ユーマは毎日クッキーをおねだりする風葉しか思い出せない。

「そんなことありません。最近でもお姉様はユーマ様を守る為、勇敢にも飛び蹴りを繰り出したではありませんか」

「……ああ、クルスさんの時。ってなんでわかった？」

当然です、とカレハ。

「私もまた《風森》です。ユーマ様とは契約で繋がっておりますか

ら」
「……えーと、シアさん？」
「大丈夫ですよ」

気まずそうな顔をするユーマが何を考えたのか、エイルシアは察していた。

「私と風森、ユーマさんと風森。繋がっているのはそれだけです。私とユーマさんがお互いの思考を読み取れるわけではありません。風葉を通じて私のことわかりますか？」
「いや。でも……」

ひとつだけわかっていることがある。

「シアさん怒ってるよね」
「当然です」

ユーマ、正解。

「いいですかユーマさん……ってユーマさん？」
「えっ？」

当然のように正座するユーマに戸惑うエイルシア。

ユーマはエイルシアの声音が姉の説教モードに似ていたので無意識の行動だった。

「……ユーマさんがリィちゃんの宿題を届けに行ってもうすぐ3ヶ月になります。あの時は少しくらい寄り道するだろうと思っていましたが、まさか風森に帰らず学園に通い出すなんて……いえ、それ

はいいです」

愚痴りだしたら止まりそうになかったので無理やり飲み込んだ。

エイルシアが聞きたかったのは1つだけだから。

「元気でしたか？　心配したんですよ」

「……うん。みんなとうまくやってる」

今はそれだけ聞ければよかったエイルシア。微笑んだ。

「驚いたよ。リアトリスさんがいきなりシアさんを連れてきてさ。シアさんはシアさんで折角だから手合わせしましょう、って」

「ガンプレートの腕前はやっぱりユーマさんに見てもらわないとわかりませんから。どうでしたか？」

「もう驚いた。でもシアさん1人で学園まできたの？　狙われたこともあったんだし危険だったんじゃ」

「ユーマ様。今のエイルシア様は常に私が傍にいます。何人たりとも触れさせはしません」

「……ああ」

何とも頼もしいことを言う風の精霊。同じ《風森》なのに何故こうも風葉と違うのか疑問に思う。

教育方針の違いか？

「《精霊使い》。シアさんもなれたんだね。ガンプレートもだけど相当訓練したんでしょ？　手合わせしても信じられないよ」

「精霊の力は風森から直に教わりました。ガンプレートの訓練はラヴちゃんと一緒に」

「へぇ。ラヴニカは元気？」
「もちろん。今度会ったらびっくりしますよ」

エイルシアもあれから風森の国で色々とあった。その中で義妹となった魔人の少女とも歩み寄ることができたという。

お姉ちゃんとは呼んでくれないんですけどね、とエイルシアが言うので2人して笑う。

ユーマが風森の国にいた頃はいつもそうだった。少しだけ懐かしい。

「姉さま。リア先輩が待ってる」
「……そうね。ユーマさん、先に行ってください。被った砂を払ってエイリークと一緒にきますから」
「わかった」

仲間たちの所に走るユーマ。アギ達が絡んでくるよりも早く、ガンプレートの事でティムスが食ってかかっている。

そしてその場に残ったエイリークとエイルシア。

突然の再会。エイリークは彼女に言いたいこと、聞きたいことが沢山ある。

「エイリークも元気そうね。嬉しいわ」
「……あのね姉さま、風森がね」

沢山あったのにすぐに思いついたのは、エイリークが風葉を通じて初めて風森と《交信》した時の事。

精霊は告げた。

――今のあの子を《勇者》にしてはいけない

――叶うならば私の血を引く貴女たちが彼の助けとなってください

きっとエイルシアは何か知っているはずだ。風森はこうも言ったのだから。

――エイルシアはあの子を救う為に還す方法を模索しています

「姉さまが1人学園に来たのはもしかして」

「……これです」

エイルシアは1枚の紙を見せた。それは

“リーズ学園運動会のご案内”

「……え？」

「これです」

目を疑うエイリーク。

運動会は学園の公開授業を兼ねたレクリエーション大会。3日後にある。

エイリークが見せてもらった紙は保護者宛てに毎年送られる案内状だ。“ご父兄の皆さまのお越しをお待ち申し上げております”と書いてある。

「私も1度くらい学園に来てみたかったの。毎年運動会はこっそりお父様がリィちゃんを見に行ってるけれど、今回は代わってもらったわ」

「嘘!?」

「気付いてなかったの?」

2重の意味でびっくり。

まず国王様、仕事して下さい。

「本当にそれだけ?」

「ええ。カレハのおかげで国から離れても精霊の加護が私を守ってくれる。特訓して護身術もばっちり」

「……」

それにしても姉さま、強くなりすぎです。

実はエイリーク、ガンプレートや《精霊使い》の力を除いても《魔法使い》としての姉の戦闘力を知らなかった。初めて見たのだから余計に驚いている。

「そろそろ行きましょう。カレハ」

「はい。エイルシア様」

精霊が風で主人の服や髪の砂を吹き払い、髪を整えるとエイルシアは皆のもとへ颯爽と歩いて行く。茫然と見送るエイリーク。

「……昔の姉さまだわ。でも」

稀に突拍子もないをことをするのは昔からだった姉姫様。

ただ自然に振る舞う笑顔は少し前までエイリークが取り戻したいと願ったもの。素直に嬉しいと思う。

《風邪守の巫女》という重い宿命から解放されたエイルシア。それでも国の事、目覚めて間もない王妃の事、義妹となった魔人の事、そしてエイルシア自身が世界で確認されている数少ない《魔法使い》であること。今も彼女にかかる負担は大きい。

事情を知り彼女が羽を伸ばしに学園に来たと言われれば納得できる。

普通ならば。でもエイルシアの妹達は違う。

「ラヴニカ。アンタが言いたいことは何？　ここで姉さまは何をしようとしてるの？　それに……」

風森の国から届いた手紙。その最後の1枚はエイリークにとっても義妹である彼女からのメッセージ。

“あねうえがにつまっておる。ゆーまをかしてやれ”

「アイツはアタシのじゃないわよっ！！」

今のラヴニカを知る由もないが、１度帰って話をする必要があるとエイリークは思った。

＋＋＋

旋風姫　来襲編（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

色々とパワーアップして登場のエイルシア。しばらく学園に滞在することに。

風森の姉姫様は召使い（ユーマ）を連れ、仲間たちを巻き込み学園をゆく。

次回「旋風姫　学園横断編」

「それってデートなんじゃ……」

旋風姫　学園横断編１（前書き）

ユーマの学園案内序章。

注意書き：このシリーズは第３章の伏線を張るためにあります。

＋＋＋

エイリークとアイリーンは学園の正門前で毎朝顔を合わせる。別に約束事ではないがずっとそうしている。

「おはようございます。ウイ……エイリィ」

「別に無理して昔の呼び方にしなくてもいいわよ」

それから2人は少し話をしてから学園へ。この時のやりとりは他愛のないものが多いが、時には些細なことで揉めて喧嘩になることもある。

「そうもいきません。今はシア様もいますし」

「……『シアおねえちゃん』じゃなくて？」

「む、昔の話です！」

「その昔からずっと姉さまみたいになるって真似してたじゃない。髪とか服とか。仕草もそうよ」

「う……」

今朝の話題はやはり昨日の事。今学園にはエイリークの姉であるエイルシアが滞在している。明後日に行われる運動会を見に来ているのだ。

2人は幼馴染。アイリーンは昔風森の城で暮らしていたことがある。当時のアイリーンはエイルシアの事を実の姉のように慕ってい

た。

幼少の頃の思い出を2人は共有している。なので昔の事でからかおうとしたエイリークだったが。

「……そんな私に『姉さまはあたしのだ！』って剣まで持ちだして喧嘩をふってきたのはどなた？」

「うっ」

「シア様に怒られて謝りに来たのはいいけれど、私に謝るのが嫌で泣きだしたのはどなただったかしら？」

「ちょっとまって」

「夕食の時に嫌いな「あー！！」」

脆刃の剣だった。むしろやんちゃだったエイリークの方が分が悪い。

「とにかく！　アタシ達の関係は今更変わりはしないから別になんて呼んでも構わないわよ」

「変わらないって……貴女随分変わりましたね。6年前のこともあって一時期私とは口もきかなかったのに」

アイリーンが言うのはエイルシアに関わること。それも幼馴染である2人の関係を変えてしまうような。

エイリークはこの件でアイリーンというより彼女の故郷である《銀雹の国》を敵視していた時期があった。彼女のちょっとした反抗期。今も銀雹の王を毛嫌いしている。

銀雹の国は風森の国と同盟国だ。彼の国の王は風森の秘密、魔人の事を知っている。

《風邪守の巫女》の役目も。

「私たちが卒業するまでもう2年もありません。今でも反対しているのでしょう？　だってシア様は……」

「6年前？　ああ。それはもういいわ」

「はい？」

あっけらかんとした態度にアイリーンは驚いた。話題にすればエイリークが怒り狂うような話なのに。

「いろいろあったから忘れてた」

「忘れたって、貴女が自分の国とシア様の事を？」

「同盟の事はどうなるかわからないけど、きっと姉さまが上手くやってくれるわ。もう銀雹の王の力を借りる必要もなければ……そうよ。姉さまを差し出す真似もしなくてよくなったのよ！　もう理由がないから」

言ってみて思いついたエイリークはそれはもう嬉しそうな顔をする。アイリーンを前にして「ザマミロ銀雹」と言いだしそうな感じ。

「よくわかりません。『理由がない』……それって風森の魔人が消えたとでもいうのですか？」

「ラヴニカ……魔人はまだいるけど多分問題ない。風森の、いえ姉さまの運命は変わったの。アイツのおかげで」

「アイツ？」

アイツと言われてアイリーンが思い浮かべるのは風森の精霊を使役する《精霊使い》の少年。

「まさかユーマさん!?　彼が魔人を?」
「そう。アタシが春に帰省する前の話。ユーマは姉さまの恩人。それだけは感謝しないといけないわね」
「貴女の帰省前って……ちょっと待って。ユーマさんの風葉は貴女の《守護の短剣》の精霊ですよね?　あと砂更はこの春学園に来る途中で拾ったと前にユーマさんは言ってましたし」
「それが?」
「精霊のいないユーマさんが魔人をどうにかしたのですか?　一体どうやって」
「さあ?　ユーマも姉さまも詳しく話してくれなかったから」
「さあ、って」

魔術師でないエイリークはいまいち理解していないようだが、改めてユーマの異様さを思い知るアイリーン。魔人の事を父である王に聞いたことがあるから尚の事。

魔人の恐ろしさはその魔力総量にある。比較するとこうだ。

ゲンソウ術の使用限界を魔力に換算した場合、一般の魔術師（学園ランクA）を１０とするとアイリーンは５０。《氷輝陣》は消耗しやすく並の術者では長時間展開できない。彼女の能力の高さが窺える。

次に魔力を扱える《精霊使い》のユーマ。彼は2体の精霊を合わせて５００程。《魔力喰い》の制限付きでもアイリーンの１０倍もある。ちなみに世界で確認されている《魔法使い》の平均は２００。

そしてエイルシア。彼女は個人で２４０くらい。精霊込み（カレハ）でなんと１０００を超える。

普通に魔術の撃ち合いをすればユーマがエイルシアに勝てないのは当たり前なのだ。《精霊使い》となった彼女は最強の《魔法使い》になりつつある。

ならば魔人はどうか。

全盛期のラヴニカは３０万。人では話にならなかった。（現在の彼女は２）

圧倒的な魔力を誇る魔人に人は魔法では対抗できない。実は《魔法使い》であるエイルシアよりもゲンソウ術を使う《魔術師》のアイリーンの方がまだ勝てる可能性がある。

魔人に打ち勝てる程の《幻想》を《現創》すればいいのだ。ただそれができたのはゲンソウ術を編み出したかつての《勇者》たちくらいなのだが。

だからアイリーンは興味を覚える。《精霊使い》でさえなかったユーマが魔人を相手に何をしたのか。

「ところでシア様はどちらへ？　昨晩は貴女の部屋に泊まったのでしょう？」

「今日の姉さまは１日学園見学よ。明日はミサを連れて３人で学外で遊ぶの。アイリィも行く？」

「予定があるので昼食くらいは。……もう。そんなにシア様が大事なら学園の案内も貴女がしたらよかったのではなくて？」

姉と一緒に遊びに行くなんて初めてのエイリーク。今だって機嫌

よく遠足前の子供のように生き生きとしている。

「今日の案内はユーマがするからいいのよ。あー、早く明日にならないかなー」

「……エイリィ？」

「何よ」

「もしかしてシア様とユーマさんの２人？」

「……それが？」

「貴女まさか気付いてないの？　それってデートなんじゃ……」

「言わないで！　……我慢、してるんだから」

明日に浮かれていたのは逃避だったようだ。エイリークが凄んでアイリーンは怯む。

「……今日だけ。今日だけはユーマに姉さまを譲ると決めたのよ。そうあの子に頼まれたから。……明日以降は指一本触れさせはしない」

言い聞かせるように呟くエイリークに呆れたアイリーン。

ユーマではなくエイルシアだと言うエイリークに。

「……シスコン」

「何か言った？」

「いえ何も。でも唸るくらいならそう無理しなくても」

「いもうとがね」

「はい？」

「実はアタシ、姉になったの。それで姉さまのことお願いされたのよ」

“あねうえがにつまっておる。ゆ一まをかしてやれ”

エイリークに手紙を送ったラヴニカ。エイルシアの事を『姉』と呼んでいる。

最後まで手紙を読み、あの魔人がエイルシアを気遣っていることにエイリークは何より驚いていた。何があったか知らないが、彼女は『ラヴニカ・C・ウインディ』となった自分を受け入れエイルシア達と一緒にいることを選んだようなのだ。

家族として。

ならばエイリークはラヴニカの頼みを断るわけにはいかない。

彼女の姉として義妹の我儘を聞いてあげると思えば悪い気分ではなかったから。

「だから今日だけよ」

「はぁ……？」

事情を知らないアイリーンはわからないことだらけで首を捻るだけだった。

＋＋＋

エイルシアはユーマと一緒に学園見学。待ち合わせは正門前、エ

イリーク達が登校してから1時間後のこと。

エイリークの配慮は別にしてもエイルシアは一国の王女様にして《魔法使い》、さらには《精霊使い》なのだ。学園も要人警護に気を配り、案内にはユーマのような彼女の気心が知れたエースを配置してくれた。

しかも2人。

「それじゃあ行こうシアさん。リアトリスさんも」
「ああ。エイルシア様、大丈夫だと思いますが学内のトラブルは多いのでくれぐれもお気を付け下さい」
「……ええ」

学園の《烈火烈風》、リアトリス・ロートのことはエイルシアもよく知っている。リアトリスは風森の国へ剣を学びに留学していたこともあるから。

「シアさん。どうかした？」
「いえ、別になんでもありません」
「ミツルギ、行く先は決めているか？　南区のステージは午後からだぞ」
「中央の校舎から行きましょう。一般の展示を見て回ってから昼ごはんを《組合》の出店で適当に」
「昼食は食堂がよくないか？　特別メニューが出回るぞ」

というわけで3人で学園を見て廻ることに。

今の学園は運動会の準備中。運動会は公開授業の一環で行われるがエイルシアのように前日から学園を見学に来る保護者は多い。な

ので準備と同時に生徒たちによる歓迎イベントを行っている。

出店なんてあってちょっとしたお祭りのような雰囲気がある。規模は小さいが生徒にして見れば保護者歓迎の催しは学園祭の予行演習も兼ねていた。

校舎の中に入りあれこれと見学ルートを話合いながら進むユーマとリアトリス。エイルシアは話に付いていけず面白くない。

「あのな、あくまでこれは学園の案内だぞ。これだと食べ歩いて終わりじゃないか」

「でもなぁ。シアさんはどこ行きたい？」

「……」

「シアさん？」

このままではいけない。とにかく主導権を握らねばと思い立つエイルシア。ユーマには返事をせず彼女はリアトリスに向き直った。

「リアトリスさん。忘れる前にこれをお渡しします」

「何でしょう？」

彼女に渡したのは手紙。エイルシアにしてもこんな形で渡すのは不本意ではあったが。

「ツアイさんからです」

「！！」

その一言でリアトリスは真っ赤。

「リアトリスさん？　それにツアイさんて確か風森の」

ツアイとは風森の国の騎士で若くして小隊長を務める青年。ユーマも面識がある。

「彼も忙しいのでたまには連絡をするなりあなたのほうから会いに行くなりしてくださいね」

「え、えええエイルシア様！」

リアトリスは動揺しっぱなし。エイルシアそれを気にせず、まるで諭すように話を続ける。

「いいですか？　あなたはどうかわかりませんけど、遠距離って辛い……むぐっ」

「――！！」

「シアさん！！」

そこまで聞いてユーマも察した。リアトリスは風森の国に恋人がいるのだと。

突然の暴露にユーマは慌ててエイルシアの口を塞いだ。リアトリスは動揺を隠せずとも剣を構え、周囲を警戒。

「むーんんん！？　んー！」

「ミツルギ！　どうだ？」

「わかりません。《風読み》じゃさっぱり」

「ユーマ様、上です」

「「「――！！」」」

気付いたのはエイルシアの精霊であるカレハ。３人は天井を見上げて絶句。

「……フフ」

彼はそこにいた。

とにかく迂闊だった。学園に来たばかりのエイルシアが事情を知る由もないが報道部は特ダネを求めて常に暗躍している。

どう考えても特ダネの匂いしかしないエイルシア。そこに3人目のエース、《霧影》がこっそり嗅ぎ回っていた。

「ミスト……やはりいたか」

「本当は風森の姫君と後輩のスクープを狙っていたんだが思わぬ収穫。君の浮いた話を学園で聞かないわけだ」

まさか外で男を作っていたとはな、とミスト。

恐るべきは天井に張り付いていたくせに誰も気づかなかったこと。彼のマフラーが垂れ下がらないでいるのが何とも不思議だ。

「《紅玉》の面々も知らなかっただろう。『お姉様』と慕う彼女らが団長である君の真実を知ったなら……フフ。今夜少女たちの枕は涙で濡れるな」

ああ、お姉様が知らない男の餌食にー、と泣き真似をするミスト。

「黙れ、変態!!」

問答無用で斬りかかったリアトリスだがミストは袖口から暗器を取り出し受け止め、そのまま鍔迫り合いのように膠着。

「私の騎士団は本当に……本当に洒落にならない子もいるんだ。余計なことをしてみろ、今ここで焼くぞ！」
「その台詞をそっくりそのまま返そう。無粋な真似をして《青騎士》の馬に蹴られるのは君の方だ」
「なんだと」
ミストは顔を寄せ、リアトリスだけが聞き取れるような声で喋る。
「以前後輩があの《旋風の剣士》の騎士だという噂があった。昨日話を聞き俺は思ったのだ。もしや噂の真実は姉の方ではないのか？」
「っ！？　それは」
それは以前リアトリスもユーマに冗談で言ったことがある。でも本当に冗談でまさかと彼女は思っている。
「俺はその真実を確認しに潜んでいただけだ。しかし！　いざ見てみれば君も一緒じゃないか。２人の邪魔するとは騎士の風上にも置けないな、《烈火烈風》」
出歯亀のミストは自分の事を棚に上げてリアトリスを非難。それに気付かず彼女はたじろぐ。
「い、いや待て。私もミツルギと同じ彼女の護衛で……それにいくらなんでも２人は年の差が」
「フフ。君も女だというのにその辺りの機微がわからないのか？　なら君と君の彼氏はどうなんだ？」
「……。はっ。騙されんぞミスト！」
「ちっ。残念」

危うく言いかけたリアトリス。これ以上秘密をばらすわけにはいかない。

「この先2人に付いて行って気まずい思いをするのは君だぞ。引き際を見極めるんだな」

そう言ってミストは飛び退くとユーマの傍に着地。また小声で喋る。

「ミストさん？」

「隅に置けないな後輩。そんな君にはこの報道部の割引券をあげよう」

「……えーと、それはどうも。でもリアトリスさんの事は」

「大丈夫だ。同志として言いたいことはわかる。この特ダネを部長に渡すのはまだ早い」

ユーマとミスト。2人の関係は『報道部部長とブソウをくっつけようとしつつ2人をからかおうの会』の同志である。

リアトリスを最大のライバルと思っている部長の彼女。誤解を解くのは面白くないとユーマ達は判断した。

「彼女は任せたまえ。学園の案内、うまくやれよ。……さあ！　貴様の秘密をばらされたくなければこの俺を止めることだな。さらばっ！！」

「待て！」

大声を上げ走り去るミスト。何事かと余計に注目を浴びる3人。

リアトリスはミストの背を睨み、追いかけようとしたがユーマと

エイルシアを見て逡巡する。

「……エイルシア様。申しありませんが急用ができました。貴女の護衛はそのままミツルギをつけます。構いませんか？」

「……ごめんなさい。何か大変なことになってしまって」

エイルシアは流石に気まずい。ちょっとからかおうと思っただけなのに。

「いえ。手紙のことはわざわざありがとうございます。風森へは夏季休暇の時にでも行くことにします」

「ツアイにはそう伝えましょう。きっと彼も喜びます」

「ありがとうございます。あと学園の報道部を甘く見ないように。あまり羽目をはずすと貴女もミツルギも彼らの餌食になりますよ」

「よくわかりました」

神妙に頷いた。

「ではミツルギ。あとは任せる」

エイルシアに向けて一度騎士の礼をしたリアトリスは、振り返り背を向けると次の1歩で全速移動。ミストを追いかけた。

剣を抜いたまま、割と必死で。

「あの変態。今日こそ消し炭だ！！」

なにかが爆発する音がする。

「「……」」

火災の発生で呼び出されないといいなー、なんて考えるユーマ。

「まあ、いいや。シアさん、これからどうする？」

「……本当にごめんなさい」

「シアさん？」

「え？　ああ。そうですね。それでしたら」

とりあえずミストの乱入と計らいで２人きりになれたエイルシア。まず学園に来た目的を１つずつやることにした。

「ユーマさんやエイリークがいつも行くところへ。まずはあなた達が見ている学園を見てみたいです」

「それでいいの？　わかった」

というわけでユーマは彼女を連れて《エルドカンパニー》へ。

今ならエルド兄妹がＰＣリングや幻創獣を使ったイベントを準備しているはずだ。

ところが。

「頼む！　そのガンプレート、是非見せてくれ」

「……風葉ちゃんの妹……」

来てみれば思いのほか兄妹に歓迎された。エイルシアよりもその付属品（おまけ）が。

ティムスは土下座しそうな勢いだしポピラは紅葉色の精霊に夢中。
そしてエイルシアは、

「ユーマさん！　この子可愛いです！」
「うわあああああ」

天使のような美少女？（ルックス）を一目見ると思いっきり抱きしめていた。

「ど、どこかでかわいいお洋服を」
「や、やめて。僕は男……ぎゅう」
「髪なんてこんなにもふわふわ……櫛を入れてもいいですか？」
「シアさん……」

エイルシアの胸に埋まってもがくルックス。それを見たユーマは思ったのだ。

「かわいいものをかわいがる癖が前よりパワーアップしてる。ラヴのやつも大変だったんだろうなぁ」

とルックスの災難をしみじみと眺めていた。

＋＋＋

旋風姫　学園横断編２（前書き）

案内、とはいいつつ学園をなかなか歩かない２人

＋＋＋

それはユーマがまだ風森の国にいた頃の話。

「ユーマさん？　あっ……」

「……」

エイルシアが見つけたのは木陰で昼寝をする少年。

「またこんなところで。怪我もまだ完治していないのに……えっ？」

ユーマは傭兵と戦って怪我をして、ついこの間まで寝込んでいた。

彼は体質で治療の魔法が効きづらい。身体中のあちこちに包帯を巻いていたはずなのに。

「包帯を外してる。怪我は……嘘。治ってる」

それで彼女はやっぱり、と思った。

――精霊は……アイツが《転写体》だから存在を書きかえることができるって言ってた

「傷が癒えたのではなくて、時間をかけて『元の姿に戻った』のですね。……ごめんなさい」

エイルシアは少年の側に寄ると髪を撫でる。辛そうな、泣きそうな顔で。

「あの時、ラヴちゃんの魔力があった時にユーマさんを《送還》してあげることができたらよかったのに」

あの時なら少年を無事に元の世界に還すことができた。

なのに少年はその機会を不意にして代わりに彼女の母を救ってくれた。

「それだけならまだよかった。でもリィちゃんのことがあって……ねぇ風森、あなたはどうして」

――ユーマさんを縛りつけたの？

妹を助けるためとはいえ、精霊のしたことは許せなかった。少年が躊躇わずそれを選択したことも。

「……ずっとこの世界に居続けることになれば、あなたはきっと辛いことになる。でも私は……」

苦しい。締めつけられる。

「私は魔法使いなのに」

悲しい。少年の存在が。自分の無力が。

「あれだけのことをしてくれたあなたに何もしてあげられない。わからないの。私は……『今のあなた』をあなたの世界に還すことができない」

ごめんなさい、今はそれだけしか言えない。

「……シアさん？」

「起きましたか？　風邪を引きますよ？」

ユーマが見る彼女はいつだって笑顔だ。今だって。

「リィちゃん達が学園都市に戻るんです。お見送りに行きますよ」

「わかった」

「……身体の方は大丈夫ですか？」

「ん。シアさんと風葉が何度も《癒しの風》を使ってくれたからほら。どうしたの？」

「いえ。みんなが待ってます。行きましょう」

そう言って先を行くエイルシア。内に秘めた悲しみと決意を少年に見せることは決してない。

「……」

少年は気付かなかったわけではない。

なにもしてあげられなかっただけ。

＋＋＋

ティムスが鼻血を流した。

「ティムス！？」

「な、なんだよこれ」

彼が手に持つのはオリジナルのガンプレート。興奮して手にした瞬間、いきなりだった。

「兄さん……まさかそんな性癖が」

「馬鹿言うな。《解読》しようとしただけだ。なんつう情報量だよこれ」

別にポピラが思ったようなことではない。《解読》してガンプレートの仕組みを理解しようとしたティムスだが、膨大な情報量を前に脳がパンクしそうになったのだ。

「前に話を聞いた時は銃器、機械の類だと思ったが別物だ。ブース

ターに近いがそれでもない。金属板と思ったものが複数の複雑なパーツで構成されているし隅々に刻まれた極小の紋様がとても精密、整然に刻まれていやがる」

とても人の手で作れる代物じゃねぇ、とティムス。

「そりゃ兄さんはパソコンとかでプログラム組んで魔術回路を作るからね」

「あとこの材質はなんだ？　いくらなんでもミスリルやオリハルコンじゃないよな？」

「通称マガネ合金。魔法で練鉄した兄さんのオリジナルだよ。オリハルコンなんて本当にあるの？」

「……」

似たようなモンじゃねえか、と絶句。今度はカートリッジに付与された魔力許容量を計測してまた絶句。

「大砂漠や氷霊山にしかないような魔石が入ってるのか？　なんだこの魔力総量、こんなものが……え？　これも同じ金属？　どうやって金属にこれだけの魔力を付与して蓄積すんだよ！？」

「魔術回路に魔力を込める？」

ユーマもよくわかっていない。

「技術力が違いすぎる。俺のガンプレートが《レプリカ》と言われても仕方ねぇ」

「いや、ブースターとは別物だって前にも」

「黙れ。くそっ、何が《天才》だ。上にはやっぱり上がいやがる。行方不明のお前の兄貴って何者だよ」

「陰険外道の根暗眼鏡。もしくは夜行性の鳥類」

断言した。

「……魔術回路ってやつがこの技術の肝なのはわかった。他にないか？　研究がしたい。頼む！」

ティムスにすれば突然金山を見つけたようなものだ。技術士として負けたなんて思うどころではない。

掘り起こして、知り尽くしたい。ユーマの兄という彼の技術からは学ぶべきことが沢山あるとわかったから、ティムスはプライドをかなぐり捨てる。

「……うーん。シアさん」

「はい？」

エイルシアはポピラとルックスに相手してもらっていた。

女物の服を着せられそうになったルックスがスケープゴートにＰＣリングをプレゼントしたらしい。

「見て下さい。幻創獣、かわいいですよね？」

「それってラヴニカがモデル？　しっぽ？」

彼女はオリジナルの幻創獣を作ってもらったようだ。ベースはお姫さまで３頭身のお人形。

紫の長い髪をしていてなぜか悪魔の尻尾と羽、触角がある。あと八重歯。

「でびるラヴちゃんです」
「そっくりですわエイルシア様。あの生意気なちび魔人に」
精霊のカレハは絶賛。風葉もだったがやっぱりラヴニカとは相性がよくないらしい。
「それもいいけど、ここはあえて猫耳を……じゃなくてシアさん。今度風森から俺の荷物を学園に送ってもらえないかな？　俺のおもちゃとか。光輝さんの作ったやつが色々あるから」
「本当か！？　頼む！」
「それでしたら」
エイルシアは旅装の鞄から大きめの箱を取り出す。鞄の中にはこれしか入っていなかった。
「それって圧縮ボックスじゃ」
「物がたくさん入るので荷づくりの時ユーマさんのお部屋から借りてきちゃいました。使い方がわからないものがあって、学園に来るついでに聞いてみようといくつか持ってきたのですが」
「俺のものを勝手に……いいけど俺の部屋で何かしてない？」
エイルシアは黙った。
「シアさん？」
「い、いえですね、ラヴちゃんはユーマさんのもので勝手に遊んでましたけど、私はただユーマさんの部屋のお掃除を……何もしてませんよ？」
へたくそに誤魔化した。ちなみに風森の城にあるユーマの部屋はもうない。

爆発した。

「……まあ、いいや。それで何を持ってきたの？」

「えーとですね」

箱の中から出てくる物ものモノ。明らかに箱の容積を無視している。

「おい、ユーマ」

「あとで説明するから。あっ、ワイヤーガンだ。これあの時ぶっ壊したんだよな。ティムス、これ修理できる？」

「……すげぇ」

機械であるそれを見てティムスは感激している。珍しく子供のようにはしゃぐ。

「すげぇ！　これ。おい、これっ！！」

「わかったから。あとシアさん、このお土産の山は？」

「城の皆にと思ってここに来る途中で買ってきたものですけど」

「……賞味期限て知ってる？」

あと2、3日学園都市に滞在することを考えても、食べ物は日持ちしそうにないものばかりだった。

＋＋＋

ユーマによるちょっとした実演ショー（さながらテレビ通販のよ

うだった）とエイルシアのお土産の処分（皆で分けて食べる分の仕分け）をしてエルドカンパニーから出る2人。

エイルシアはポピラ達に創ってもらった幻創獣がお気に入りだ。

『おねえちゃん、おねえちゃん』

「ああーーっ、もうラヴちゃん！」

「……」

人形のラヴニカに自分で言わせておいてうっとりしている。

「PCリング、通話とかメールは学園でしか無理だからね」

「ええ。……本物のラヴちゃんも言ってくれないかなぁ」

本当に変わったもんだなぁ、とユーマ。彼女の素なのかもしれないが。

「でもよかったのですか？　彼にガンプレートや他にも色々と見せて」

「ティムスならいいよ。悪用なんてしないし光輝さんの技術は『むこう』でもオーバーテクっぽいところがあるから。完全な再現は無理だよ」

「……」

エイルシアは少しだけ不安になる。ガンプレートがこの世界にない技術の産物だとしても、少年もまたゲンソウ術の技術を理解していないと。

あれだけ複雑な機構をしたガンプレートを《レプリカ》がある程度再現しているその凄さを。

「それに約束したから。いつか2人で本物のガンプレートを超えるって。そういやシアさんは魔法弾のレベルいくつまで使えるの？」

「レベル？　よくわかりませんが使えたものの中で凄かったのは…《ゴッドフリート》ですね」

「……え？」

聞き間違いでなければそれは、レベル7の掃討殲滅術式。

実のところレベル6以上はほぼ《梟》専用の魔法弾といったもので扱いが難しく、ユーマは使えるわけがないと思っていたが。

「ああ。あれは風属性だからシアさんに適性があるのか」

「あとこれもわからないカートリッジがあって」

そのカートリッジを見て目を剥いた。

「封神解放弾だって！？　……使った？」

おそるおそる聞いてみると。

「ラヴちゃんがひっくり返りました」

「……使えたんだ」

最上位のレベル8。ユーマはショック。聞かなければよかった。

「光輝さんが姉さんに持たせない理由がわかった。ガンプレートは《魔法使い》に持たせたら危ない。世界が滅ぶ」

「いくらなんでも大げさな」
「ゴッドフリートやこれを使って風森の国は無事？」
「……ええ。『国は』無事です」
「……」
ラヴニカのおかげで城の半壊で済んだ。かつての魔人は救世主だ。
「ほんと扱いには気をつけてね。さて。大分時間が過ぎたしお昼を……」
出店で賑わう西区の一帯に足を運ぶ。そこでユーマは親友を見つけた。
「アギ？」
「げ」
青バンダナの少年は見つかってしまった、という顔をする。
アギは着物姿の女性を連れていた。結構な美人。
「よ、よう。ユーマはデートか？」
「違う。シアさんの案内だよ」
「そうか、じゃあな」
早々と立ち去ろうとするアギ。それを止めるのはアギの隣にいた女性。
「待ちなさい。アギの友達ですか？　息子がお世話になっています」
「……ええっ！？」

理解するのが遅れた。

桜色の着物に結い上げた黒髪の女性。エイルシア程ではないにしても若い。

年の離れた姉で通じるのに。

「息子って、アギのお母さん!?　若っ」

「嬉しいことを言ってくれるわ。でも私、おばさんなんですよ」

「さ、サヨコ様っ!?」

艶やかに笑う大人の女性にアギは慌てる。

「違うからなユーマ、サヨコ様は……」

「お久しぶりです。サヨコ様」

「あら？　珍しいわね。こんなところで」

「シアさん？」

実はエイルシアとサヨコと呼ばれた女性は面識があった。

「ユーマさん、サヨコ様は《砂漠の王国》の王妃様です」

「へぇ。……えっ？　だったらアギは馬鹿王子？」

「だから勘違いすんな！　俺は砂漠の民の一般人。あと馬鹿ってなんだ馬鹿って」

掴みかかりたいがサヨコの手前アギはぐっとこらえる。

「じゃあなんで息子って」

「砂漠の民の習慣ですよ」

砂漠の王国は民を家族とする。砂漠の民の子供たちは皆王の息子で娘だ。

王妃であるサヨコもまた国母として砂漠の民に慕われ、彼女も民の子供たちに愛情を注いでいる。

「俺はサヨコ様の付き添い。学園にいる兄弟、つまり砂漠の民の生徒の所へ案内してるんだよ」

「ふーん」

サヨコはエイルシアとなにか話をしている。

「ったく。さっきもリュガにからかわれたばかりなんだ。サヨコ様があんまり」

「私が何かしら？」

気がつけばサヨコが側にいた。彼女はユーマに話しかけてくる。

「学園での息子はどうかしら？　この子は昔から王様王様ってあの人に憧れていてね、いろんなこと真似して無茶してたから心配なのよ」

「サヨコ様っ」

それはもう親戚のおばさんが自分が覚えていない昔の事を話してくるようで。

「しょっちゅう城に忍び込んだりして子供たちの中でも聞きわけの悪い子だったわ。学園都市に行くのも嫌がって『俺は勉強なんて嫌

だ、近衛隊に入って王様を守るんだー』って、それからね」
「サヨコ様！！」

こっ恥ずかしい思いをするアギ。ユーマは自分から遠ざかろうとしたアギの気持ちがわかって同情した。

「みんながサヨコ様を待ってるからもう行きましょう。じゃあユーマ、行くからな」
「待って。サヨコさん」
「何かしら」

ユーマは改めて彼女に頭を下げる。

「アギには本当にお世話になってます。アギの《盾》に俺は何度も助けられてる。アギがいなかったら俺、だから」

アギの母といえる彼女にお礼を言いたい。

「ありがとうございます。俺、アギに会えてよかった」
「……そう。だってよ、アギ」

嬉しそうに微笑むサヨコ。アギはそっぽ向いている。

実はリュガにもサヨコの前で似たようなこと言われていたアギ。こんな時ばかりベタ褒めする親友たちが恨めしい。

「この子はほんとうにあの人そっくり。自慢の息子よ。これからもよろしくね」

先に行こうと背を向けるサヨコ。

「君もいつか国へ、私達の家に遊びにいらっしゃい。歓迎するわ」

そう言って砂漠の国の王妃はアギを連れ、行ってしまった。

「砂漠の王国。アギがいつも言ってる《盾》の王の国……か。そういえばあの人。ねぇシアさん、……シアさん？」

「……」

見れば真っ赤になってぼんやりしているエイルシア。

『姐さん女房』はまだしも『若いうちに』『自分好みに教育』『調教』と何か危険な言葉を呟いている。

サヨコに何か言われたようだがユーマはあえて訊ねないようにした。

あの王妃からは《彼女》と同種のニオイがしたから。

とにかく。エイルシアにガンプレートを向けて目の前でバチッ、と火花を散らす。

「きゃっ！　あ。私……」

それで正気に戻った。何事もなかったかのようにユーマは訊ねる。

「そういえばシアさん。サヨコさんってなんで着物なの？」

「……えーと、サヨコ様のお母様が確か東国の出身でその血がサヨコ様に色濃く継がれているんです」

そして本当に何もなかったようにエイルシアも話をする。ユーマはちょっとした催眠術を使った。

「あの人は昔から綺麗な人で学生時代は《桜姫》って呼ばれていたんですよ。リーズ学園でも東校では有名な二つ名ですね。サヨコ様が初代の《桜姫》なんです」

「へぇ。……じゃあ、あの『刀』は？」

ユーマが1番気にしていたのは、着物姿のサヨコが腰に提げていた黒塗りの鞘。

「あれは《宵ノ桜》。世界有数の刀使いでもサヨコ様は有名ですね。ユーマさん？」

「やっぱり」

東国の女性で刀使い。ユーマが知る人で該当するのはただ1人。

《賢姫》、ミヅル・カンナ

大図書館、《塔》で会うたびにユーマの精霊、砂更の知識を借りようと彼女は大太刀やら何やらで脅しにかかるし無理難題を言う。ユーマはあの先輩が苦手だ。

きっとサヨコも同じタイプだろうと推測する。

「俺、刀使う女の人は好きになれそうにないよ。いきなりばっさりいかれそうで怖いや」

「……剣はいいのですか？　例えばリィちゃんとか」
「え？」
エイルシアの質問に少し考えてみる。
……旋風剣で吹き飛ばされる自分が見えて嫌になった。
それよりも今、剣と言われて１番に思い浮かぶのは《彼》の剣。
「剣は……うん。エイリークなんかよりあの人の剣がずっと怖い。怖かったよ」
４刀の剣、それに《闘気剣》。
ユーマを打ちのめした《剣闘士》の剣。
「……」
一瞬でも暗く沈むユーマをエイルシアは見逃さなかった。
（ユーマさん、学園で何かあったのね……あと剣を使う女の人は駄目と）
勘違いした。
「それよりも早くお店に行こう。おなか空いたよ」
「そうですね」

「そういやさっきミストさんから割引券もらったんだけど」

報道部は何をしてるのかなー、と券を見てみると、

“懺悔室やってます。あなたのお悩みは報道部でスッキリ”

「……」

「ユーマさん？」

「金とって弱み握る気かよ、あの部長さん」

割引券は握りつぶした。

＋＋＋

旋風姫　学園横断編３（前書き）

１話でまとまらなかった……

登場キャラをほぼ動員。姉姫様のターンはあと１回

旋風姫　学園横断編3

＋＋＋

昼食は出店のものを適当に食べ歩いた。

ユーマとしてはたこ焼や焼きそばが食べたかったが、生憎そんなものはない。生徒が作ったお菓子やハンバーガーのようなパンを食べる。

あくまでようなもの。それは試作品だったらしくパンと挟む具材、ソースの組み合わせが微妙だ。

「……ハズレだ。購買部のパンが無難だったかも」

「美味しいですよ。こんな風に外で食べるのは」

味に関しては何もコメントしてくれないエイルシア。

「アギにおススメを聞いとけばよかった。誰か詳しい人いないかな？」

そう思って辺りを見回す。すると見つけた。

緑モヒカンの頭を。

「ヒュウさーん」

「ん？　……！？　お前！！」

エースの1人、《鳥人》ヒュウナーはユーマの隣を見て絶句。

「ワイは1人で見廻りちゅうのに……お前まで女連れかい！」

「護衛兼案内役。俺も仕事してるんだよ。ヒュウさんの方がそんな風に見えないよ」

ヒュウナーは食べ物をたくさん抱えている。1人でも十分満喫しているようだ。

「うるさい。ワイにも彼女紹介せい」

「シアさんだよ。ところでヒュウさんは髪が伸びたね」

「そんだけかい！？」

護衛役として怪しいモヒカン男は遠ざけようと思うユーマ。何よりエイルシアの精霊が送る警戒するような視線が痛い。

加えてヒュウナーと風葉は相性が悪い。また彼の身に惨劇が起きることをユーマは恐れた。

「あの髪型も悪うなかったが、イマイチ《天翔術》の調子がようなくてな。髪戻したらこれがバッチリ決まるんや」

前のトサカまではいかないがヒュウナーの髪は異様なほど伸びている。

曰く、練金科の育毛剤はすごいとのこと。都合のいい被検体にされたことには気付いていない。

どや？　モヒカンにした髪をかきあげるキメ顔のヒュウナー。
短剣からひょっこり出てきた風葉がそれを見て――
すぽーん
《風刃》で刈り取った。
「……は？」
「ええっ！？」
「風葉！　おまっ、また！？」
満足顔のユーマの精霊。
「品のないー、雑そ…むぎゅ」
前の時のように精霊を短剣に押し込んだ。それからユーマは驚いているエイルシアの手を掴む。
「ごめんヒュウさん！　お詫びはまたあとで。シアさん、行くよ！」
「えっ？　きゃっ」
逃げた。
「待たんかい！　あのちび今度こそ……なんや？」
怒れる《鳥人》の目の前には紅葉色の精霊。
カレハは冷めた視線をヒュウナーに送る。

「あなたのような輩、エイルシア様に近づくことは私が許しません」

カレハは至近距離で《爆風波》を叩きこむ。

爆発。続けて爆発、爆発！

「……ワイが……なにしたっちゅうねん……」

出会ったことが災難でした。

＋＋＋

ユーマ、逃げながら風葉に説教中。

「お前、ヒュウさんにはいっつもこうだよな？　勝手に攻撃魔法使うなよ」

「だってー、あの緑はー」

「いいわけは聞かない。もうしないって約束しないと今度からクッキーあげないぞ」

「あーん」

風葉は涙目。あとユーマの目の前で飛びながら正座のポーズと器用なことをしている。

お説教中は正座というのが御剣家の（むしろユーマの姉と兄達の）しきたりだ。精霊だって容赦はしない。

「ふーん、いいですよー。今度からはミサちーに貰いに行きますー」
「このっ。また1号呼ばわりするぞ」
「いやですー。あの子（ピンクの風葉2号）は早く変えて下さいー」

《精霊使い》が自分の精霊と喧嘩。エイルシアはそんなユーマ達に苦笑い。

「ユーマさん……」
「お姉様は悪くありません」

風葉を弁護するのは同じ精霊のカレハ。

「私達はウインディを守護する精霊。エイルシア様に危険を及ぼす不埒な輩を殲滅しないで何が《風森》でしょうか」
「殲滅って。お前はお前で過激だな」
「あの品のない雑草頭には甘いくらいです。むしろお姉様は寛大ですユーマ様」
「カレっちー」

風葉は涙ながら妹に抱きつく。

美しき？　姉妹愛。

「お叱りするのならばお姉様よりあの男にとどめを刺した私が先です」
「お前！　ヒュウさんに何した！？」

確認。カレハはエイルシア至上主義。

それとヒュウナーはあのあと追い打ちを喰らいましたがちゃんと生きてます。

「……まあ、いいや。風葉は今度ヒュウさんに謝るんだぞ。……何だ？」

「クッキーくださいー」

「……」

反省してないのか、にこーっとしておねだり。流石に呆れるし毒気を抜かれる。

「はぁ。今日は2枚あげるからカレハとおとなしくしろよ」

「はーい」

嬉しさで踊る風葉は2枚のクッキーを抱え、カレハをユーマの頭の上へ引っ張る。

「一緒に食べましょー」

「はい。……これが風の噂に聞くミサ様のクッキー」

どこで噂になっているなんてユーマが知る由もない。

クッキーを細かく割り上品に口にするカレハ。直にかぶりつく風

葉とえらい違いだ。

どちらにしてもクッキーを割った時に出る粉や食べかすはユーマの頭に降りかかるのだが。

「美味しい！　やはり信じられません。私たち精霊がものを食べられるなんて」

「そうですねー。ミサちーはすごいんですよー」

仲良くクッキーを食べる精霊たち。

ただし誰が見てもカレハの方が姉に見える。

「ミサちゃんがすごいのは俺もわかるんだけどね」

ユーマは頭にかかる食べかすを気にしながら、ふとした疑問をエイルシアに訊ねた。

「同じ《風森》なのにどうしてこうも風葉達は違うの？」

「カレハ達は随分昔から風森から別れ《守護の短剣》に宿っています。その時その時、短剣の持ち主の影響を受けているのかもしれません。風葉だってそうですよ？」

「えー」

となると風葉が『ああ』なのはユーマのせいになる。認めたくない。

「いや。風葉は初めて会った時から『ああ』だったぞ。前の持ち主はエイリークだから……うん。風葉の事は全部エイリークのせいだ」

その後にユーマが風葉に与えた影響のことは気にしないことにする。

ヒュウナーへの凶行はユーマでもエイリークでも同じような気がするけど。

「カレハが意外と過激なのはシアさんの影響？」

「……前の持ち主だったお母様のせいです」

本当は2刀で1組の《守護の短剣》。エイルシア達の前の持ち主は王妃エイリアだ。

しかしエイルシア言うとおりだと風葉とカレハはまだ似たような性格をしているはずなのだが。

エイルシアは誤魔化している。

「それよりもですねユーマさん。あの……」

「ん？」

「……いえ。何でもありません」

「そう？　じゃあ次、行こうか」

「ええ」

それで2人は再び学園を歩きだした。ヒュウナーから逃げた時のまま、

手をつないだまま。

十十十

エイルシアは考える。

（外から見たらどう見られてるのだろう？）

今日も騎士服の男装スタイルのエイルシアに学園の制服を着たユーマ。

風森の国にいた頃は誰がどう見ても王女様と少年召使いだったので新鮮といえばそうだ。

（姉弟は……無理よね。髪の色も顔立ちも違うし）

隣を歩く少年は妹のひとつ下。エイルシアとは６つか７つ年が離れている。

それに少年は顔立ちが幼い。

年相応といえばそうなのだが、なにより子供なのだ。だから余計に年の差を感じる。

だからちょっとだけ想像してみる。

5年、いや3年後の、成長した少年の姿を。
その隣を歩く自分を。

（でも……）

そこまで考えて悲しくなった。

少年はきっと……

（この手の温もりは本物？　それとも……幻想？）

少年の未来。それを考えることが辛かった。

＋＋＋

そのあとも2人で学園のいろんなところを歩いた。

まずは《組合》にあるフェアリーのお店。

冷やかしだけど、風葉そっくりなリンにカレハがすごく驚いていた。

「おおきなお姉様！？」
「こちら3号さん」
「違うの！」

手芸品のお店に行けば、そこにあるぬいぐるみにエイルシアが夢中。

「かわいい！　ここは楽園ですか？」
「シアさん……」
「メリィ達の手づくりなんだぞ」

そこは《獣姫》、メリィベルのお店だ。着ぐるみを扱う彼女の騎士団は手芸部でもある。

「買います！　全部でおいくら…あう」
「落ち着こうね。いくらなんでも圧縮ボックスに入らないから」

頭をぬいぐるみで叩き、彼女にはじめて突っ込む事になるユーマ。

「……」

あと客寄せの着ぐるみ（青い馬）がどうも《青騎士》の彼のような気がしたが、あえて触れないでおくことにした。

「ミツルギさん。ジン様を見ませんでしたか？」
「ジン？　また？」

偶然出会い、訊ねてきたのはセリカ・フォンデュ。その前はユンカだ。

「折角の機会なんです。お父様に『私の運命の人』を紹介しようと思ったのですが」
「……」

渋い顔をするセリカの父らしき人。

友達に迫る修羅場にユーマは合掌。

「ユーマ。君も案内？」

その友達とセリカと別れた直後に出会う。エイルシアを見てそう言う彼は相変わらず……

「何だジン。お前にも友達（男）はいたのか？」

美女を連れている。また知らない人だ。

「ジン……」
「？　紹介するよ。僕の師匠なんだ」
「アロウだ。今はそう名乗っている」
「……」

それを聞いて彼はそういう星の巡りなんだな、と納得することにする。

さりげなく腕を組まれ、師弟関係に見えないのは気のせいか？

とりあえず友達思いのユーマはセリカのいる逆方向にジンを誘導してあげた。

「アロウ。だとすると彼女が今の《弓》……」

エイルシアの呟きは聞こえなかった。

職員の所にも立ち寄る。

独身男性のグルールは避けて救護室、セレスの所へ。

「アラム先生？」
「久しぶりね」

練金科の教師、アラム・アラドに会うのは《皇帝竜事件》の時、

ティムスが襲われた時以来だ。

「どうしたんです？　ここは第3じゃなくて第2救護室ですよ」
「ちょっとね。大人の女性としてスニア先生にアドバイスを」
「アラド先生！」

慌てるセレス。

「いいじゃない。でも坊やにする話でもないわ」
「では私が」
「シアさん？」

というわけで救護室から1人追い出されるユーマ。

「……いいけどね」

大人の姦しい話とやらの為に小1時間ほど放置された。

結局報道部にも行くことにした。

報道部に置いてあるパンフレットは情報が秀逸。予め手に入れておけばお昼はハズレなかったのにと後悔するユーマ。

もちろん懺悔室は行かなかった。部長にも会えずじまい。

丸焼けで磔にされたマフラー男も当然無視する。

《塔》の展示コーナーを見て廻り、休憩は《ハイドランジア》で。

どういう経緯があったのか、そこにはまたウエイトレスをしている《烈火烈風》がいた。

それともう1人。

「リィちゃん……どうして？」

「ううっ」

またもやリアトリスのヘルプに駆り出されていたエイリーク。

前回同様ウェイター姿の彼女。それを見たエイルシアが視線で非難している。

どうして男物なの？　と。

悲しそうな瞳で見つめられたエイリークは、

「リィちゃん……」

「ああもう！！　わかったわよ姉さま。制服……着るから」

「本当！」

その発言に店内がどよめく。

エイリークは姉にほんと弱かった。それで彼女はエイルシアのい

る間だけハイドラのエプロンドレスを着ることに。

着替えて登場したエイリークは羞恥で顔が真っ赤。

フリル付きのスカートにオーバーニー、髪も下ろしてる。

レアな《旋風の剣士》は口コミで広がり客が瞬間的に急増。

「かわいい！　写真撮ってお父様達にも見せなきゃ」

それはもうはしゃぎっぱなしの姉姫様。エイリークもきっと妹冥利に尽きるだろう。

そう思わなければ彼女もやっていけない。

「ユーマさん、カメラあります？」

「……うん。写真はあとでいいのが手に入るよ」

「？」

どこかで「これが真実！」と叫ぶ彼の声がする。いつの間に復活したことやら。

「ユーマ……わかってるわね」

「わかってる。長居はしないよ」

よくも姉さまを連れてきたわね、と恨み声のエイリーク。

ユーマだって知らなかったからそこは勘弁してほしい。

「馴れないのはわかるけど似合ってるんだからいいじゃないか。いつも通り堂々とすればいいさ」
「……ふん」

そっぽ向かれた。

＋＋＋

最後は有志で出し物をしている南区のステージへ。

「本日のトリを飾るのはこの人。当学園のトップエース、学園最強のクルス・リンドさんです」

歓声の中、ステージに現れるのは赤茶の髪をした青年と黒衣の魔術師。

「いつでもいい」
「そう？　それじゃ、いくよ」

《黒鉄》のマークは《黒鋼術》を発動。ステージのど真ん中に巨大な鋼の円柱を出現させる。

「……」

円柱を前にしたクルスは４刀提げた剣のうち、２刀を抜いて宙へ投げる。

ほぼ同時にもう2刀を抜刀。投げた剣はクルスの前で浮遊している。これはクルスの得意とする《操剣術》を使った四刀流だ。

「――っ、はあああああっ！！」

集中、それから一気に乱舞。

クルスは円柱の周囲を回りながら剣を次々と叩き込む。

４刀の剣は黒光りする鋼の円柱を容易く斬り裂き、削り取る。

息を飲む観客。クルスが高速で剣を振るう度、次第にある形が浮き彫りになった。

鱗に覆われた逞しい体躯に鋭い角、牙や爪。

雄々しく広げる翼。咆哮するその姿は忘れもしない。ユーマも見たことがある。

「皇帝竜……」

完成したのは彫刻としては荒々しい鋼の竜。

でもその迫力は《剣闘士》の見せた剣技も相まって観客に大いに

受けた。大きな拍手がステージの2人に送られる。

「ありがとうございます。流石は学園の誇るツートップ。隠し芸も一流です」

ちなみに司会の彼女は派遣された報道部の中堅。

「実はこの像、マークさんの計らいで運動会まで正門に展示されることになりました」

「何だと!?」

驚いたのはクルス。知らされていなかった。

マークは笑顔。

「あはは。クルスの粗雑で荒っぽい作品を近くでみてぜひ笑ってやってください」

「マーク！　おい、ちょっと待て」

「明日のこのステージは自警部部長、ブソウ・ナギバによる《紙兵》を使った紙芝居が行われます」

強引に締めにかかる司会。

その辺りはさすが報道部員。鍛えられている。

「運動会は明後日です。保護者の皆さまは明日も是非お立ち寄りください。ではまたこのステージで」

「さよならー」

マークが笑顔で手を振り、観客の拍手で終わる今日のステージ。

「待て！　話はまだ……どわっ」

喚く学園最強の前に現れたのは、屈強な身体をした黒子達。

多勢に無勢。剣を取り上げられたクルスは強制退場。司会の彼女の指揮で連れ去られる。

それさえ笑顔で見送るマーク。彼が1番楽しそうだった。

「マーク！　覚えてろよ」

「忘れてるよ。脳みそ筋肉の君の方がね」

黒子も実は報道部員だ。報道部の実態は謎が深まるばかりだったり。

冗談のような楽しい一幕。

でもユーマはそれを、クルスの演目だけは素直に楽しめなかった。

＋＋＋

旋風姫　彼女の戦い（前書き）

フラグが立ちました。……パワーアップの

＋＋＋

1日が終わる。

楽しかった。振り返ってエイルシアはそう思う。

「ユーマさん。あの剣捌きはすごかったですね。昔のお母様もあのくらいできたのかしら？」

初代《旋風の剣士》である母の勇士はエイリークも知らない幼いシアの思い出だ。エイルシアだって憧れなかったわけではない。

「……」

「ユーマさん？」

「え？」

彼女の話を聞いてはいない。ユーマはイベントの終わったステージあとにしてからずっと、ただぼんやりとしていた。

「どうしたのですか？」

「ちょっとね。クルスさんの剣がすごかったから」

「……」

そう言ったユーマの表情をエイルシアが見るのは今日2度目だ。

風森の国を合わせれば3度目。

だから嘘だと思った。エイルシアは問い質すようにじっとユーマを見つめる。

「……」

「……」

「……」

「……違うんだ」

ユーマは観念した。

「今日見たあれもすごかったけど……あの人の剣は違う。芸を披露するような剣じゃない」

ステージの上のクルスは相変わらずの仏頂面だった。

彼は即席の余興で作った鋼の竜を展示されることよりも、本当はあの場で剣を振るうことを嫌がっていたはずだ。

「本当のクルスさんの剣は……」

誰が相手だろうと正面から堂々と打ち勝つ、

闘う為の剣

ユーマがクルスに打ちのめされてからもう数日が経つ。

あの日以降は他の《Ａナンバー》と同様、クルスともそれなりの付き合いをしている。だからわかることがある。

クルスは自分の本質を理解している。

闘いに悦ぶ異質を。

クルスは皆から1歩下がって線を引いている節がある。それをマークは知っているから彼を無理して皆の輪の中に引き込もうとしているようだ。

今から話すことはユーマが誰にも話したことのない胸の内、そんな話。

「俺、あの人と1度戦って負けたんだ。歯が立たなかった。ガンプレートも、精霊の力も」

「……」

「弱かったんだ。《精霊使い》である以前に、俺が」

――そんな薄弱な意志で振るう力が何かを守れるはずがない

「強くなりたいって思った。そうしないと何も守れそうになかったから。……いや」

声に出してみて違和感を感じた。本音は違うから。

《剣闘士》と剣を交えた誰もが思うこと。当然ユーマも、彼の剣を受けきったアギさえも。

それは――恐怖。

「怖かったんだ。あの人の闘志が。悪意もない、まっすぐで純粋なクルスさんの強さが」

強者と闘う。そして勝つ。それだけがクルスの力、その根源。

『最強の戦士』という《幻想》。単純で強い想いがクルスの《闘気剣》を創りだす。

立ち塞がるモノをすべて打ち破り、斬り捨てる。それだけの剣。

その剣を止めることがユーマはできない。

「闘う為だけの力、下手したら暴力と呼べるあの人の力が怖い。否定したくても俺は負けたから。だから強くなりたいんだ。クルスさんに立ち向かえるくらい。でも」

ユーマは沈み込む。

「強く、なりたいんだけど……」

上手くいかない。

ガンプレートを振るい、新技を編み出してもそれは今の延長。ク

ルスには小手先と言われた《幻操》の強化でしかない。

ゲンソウ術の強さの根幹である《幻想》を強化することがユーマはどうしてもできない。アギの《盾》のような強い《幻想》をユーマは新たに生み出すことができずにいる。

技術ではなく基本能力の問題。

しかし先生や仲間たちの助言を受け、訓練に工夫を凝らしてもユーマは手ごたえを感じることができない。

クルスの《剣闘士》としての在り方が怖い。彼の剣を認めたくない。

だから強くなりたい。払拭したくて、打ちのめされたままじゃいられなくて。

でもどうしても届かない。

ユーマが望む自分だけの強さ、その《幻想》に。

行き詰ってしまった。でも仕方がない。

ユーマにはまだ気付いていない致命的な弱点があるから。

それに気付いてるのはおそらく彼女だけ。

「でも俺っ、……シアさん？」

「……」

弱音ともいえるユーマの話を聞いていたエイルシア。

彼女は目を閉じて、そっとユーマの胸のあたりに触れた。服の上から手探りであるものを探してみる。

あればいいとエイルシアは思う。ユーマが《それ》を首に提げるかポケットに入れるかは日によって違うのを彼女は知っているから。

エイルシアは見つけた。

《しろいはね》だ。

（ごめんなさい。ちょっとだけ起きて）

エイルシアは《交信》してみる。精霊に近い《彼女》にはきっと声が届くはずだ。

精霊の風森から《精霊使い》の力を直に学んだエイルシア。その能力は我流でしかないユーマを遥かに上回る。

ユーマはわかってさえいないが、そもそも《精霊使い》の本領は戦闘ではない。

《精霊使い》の本来の在り方。他の魔術師系のクラスと一線を画する能力とは《交信》を使うことで精霊に問いかけ、《世界》を知ること。

神託にも近いこの力こそエイルシアが望んだものだ。

ちょっとした反則技だが力を応用してエイルシアは《彼女》に語りかける。

（力を貸して。私と一緒にユーマさんを助けてあげて）

《精霊使い》になれて初めてよかったと彼女は思った。

《世界》を知るほど『手掛かり』がなくて途方にくれたのだから。

学園に来てよかったとエイルシアは本当に思った。

今の自分でも強くなりたいと願う少年と何もできない《彼女》の手助けができるから。

彼女はユーマが強くなれない本質的な理由を知っている。でも言うわけにはいかない。少年が還るその時まで。

それにユーマは『他の精霊と契約する』といった別の手段でも勿論、今のままでも強くなれる方法があるのだ。

きっかけとなる最高の言葉を贈ってあげたい。

ただそれが何かエイルシアはわからない。自信がなかったともいう。

だけど常に少年の傍にいる《彼女》なら。

訊ねたエイルシアに返事が返ってきた。

ねむそうな声で、このくらい1人で頑張ってよ。そんな声で、

しろい少女は教えてくれた。

「こー」と。

「……えーと」

「シアさん？」

本当に寝言だったのかも知れない。あまりに酷いヒントをもらって内心焦る。

「……覚えてますか？　風森の国でラヴちゃんと私が争った時のこと」

「え？」

エイルシアはユーマに伸ばした手を自分の胸に当てると静かに目

を開き、想いをこめて少年を見つめる。

「私は覚えてます。あなたがしてくれたこと、あなたが言ったこと
すべてを私は……この先ずっと忘れません」
「シアさん……」

その言葉はエイルシアにとって誓いのようなものだ。

少年のことを、離れても絶対に忘れないと。

「ユーマさん。あなたはラヴニカに言ったはずです。『弟だ』と」

――俺は真鐘光輝と古葉大和の弟なんだ。だからあきらめるもんか

「思い出して。お兄さんの事」
「……駄目だ。大和兄ちゃんはデタラメに強くてクルスさんに近い。
俺は兄ちゃんみたいにはなれない」

次元が違う。大和の力は常軌を逸した身体能力にあるのだから。

「違います。もう1人の方です」
「光輝さん？　……どうして？」

ユーマは彼の事を考えようとして……あれ？　と疑問に思う。

あの人が一体どうしたの？　と。

（やっぱり……）

その鈍い反応でエイルシアは確信した。

ユーマの中の『御剣優真』の記憶。そこにある彼のことが少しずつ忘れられ、封じられようとしている。

『鍵』がかけられているのだ。

でもそこにユーマの求める強さ、《幻想》があるはずだ。

手を伸ばせばまだ届くはず。

「思い出して。本当の意味であの人を。『あの子』が教えてくれた『こー』ってユーマさんにとってどんな人なの？」

「？　光輝さんは……」

ユーマは……優真は彼のことを思い出そうと自分の記憶、その深いところを探り、『鍵』に触れて……

罠にかかった

＋＋＋

ユーマはエイルシアの言っていることがよくわからない。

第一『あの子』とは誰の事だろうか？　わからない。

（光輝さんは陰険外道の根暗眼鏡。あとなんだっけ？）

思い出そうとすれば、意識すればする程ぼんやりとした靄がかかる。

少し前、エルドカンパニーでは意識せず話していたことさえもうろ覚えだ。

（姉さんの幼馴染で大和兄ちゃんの相棒。あれ？　何の相棒だっけ？　ただの親友じゃ……）

「ユーマさん？」

ユーマの瞳が虚ろになる。エイルシアは異変に気付いた。

無理に思い出そうとして余計に『鍵』の力が強くなったのだ。

特定の記憶を封じる『鍵』は起爆装置でもあった。箱の中身を開かせない為の。

（光輝さんは……兄さん？　苗字が違うじゃないか。義兄？　いやいや、姉さんはまだ１８だぞ。それ以前にそんな関係じゃなかった。

大和兄ちゃんと同じで……？　同じ？）

思い出せない。

「《交信》のリバウンド現象？　似ているけど……違う。まさか！」

呆然として動かなくなったユーマ。エイルシアは事態の重大さに気付いた。

改竄だ。世界を修正する力がユーマに働いている。

少年は『向こう』の人間ではない、『こちら側』だと無理に言い聞かせられている。

思い出すなと。

「しっかりしてユーマさん。奪われたら駄目。あなたが『向こう』の思い出まで失くしたら」

今度こそ還れなくなる。

この世界に縛られてしまう。

（シアさん？　どうしてそんな顔をするの？　……そうだ。帰らなきゃ。そうしないとシアさんは俺のせいで……でもどこに帰ればいいんだ？　俺は）

思い出せない。

仕掛けられていた罠。意識が記憶の深層に囚われてしまった。ここぞとばかりに《世界》は少年に介入しようとする。

ユーマという存在は《世界》にとって必要な都合のいいモノ。《転写体》だから。

風森が《精霊使い》にすることで施した『ユーマが優真であるという事実』。その安全装置さえ破られようとしている。

このままでは書き換えられる。その存在が、今度こそ、

《世界》の望むモノに

＋＋＋

――わたしはいつだって人の運命を人が選びとることを願います

エイルシアにそう言った人がいた。今ならわかる。

だから。

「……そう。だから私は今ここにいます」

エイルシアは知っていた。精霊を通して《世界》を探り出した彼女は少年の秘密も、仕掛けられたその罠の正体にも気付いている。

起爆させても放っておいてもいけない《忘却》の罠。少年にとって致命的になるその前に取り除く必要があったもの。

ユーマの『鍵』を探り、破壊する。それも彼女が学園に来た理由の1つだ。

ここからが彼女の戦い。

「《世界》よ。あなたにユーマさんの運命を決めさせません」

訴えるようにその決意を《世界》に向ける。

「私たちの世界のことは私たちが決めます。この先どんな危機が訪れようと《勇者》なんて必要ありません!!」

エイルシアの叫びに応じて紅葉色の精霊が元の色に戻る。

緑の小さな精霊に姿を重ね、現れるのは翠の髪の女性。

「カレハ、いえ風森。『鍵』の場所はわかりますね？」

彼女は《精霊使い》、そしてウインディの血を引く者。エイルシアはカレハを通して守護精霊たる風森をいつでも喚ぶことができる。

「おそらく、前にあの子が矢を撃たれたところです」

風森はエイルシアに答える。

「矢？　それってエイリークが攫われたあの時の？」

「そうです。その時にはもう接触されていたようです。……早く気付くことができてよかった。今取り除けばさして影響はありません」

「どうすればいいの？」

《精霊使い》は自身の能力に合わせて精霊の知識を引き出すことができる。

精霊の風森は修練を積んだ今のエイルシアになら、その方法をリスクなしに教えることができる。

「方法は３つ。１番良いのは以前と同じようにあなたと私が同化してあの子の中に直接介入すること」

「き、却下です！」

以前とはユーマがラヴニカの攻撃を受け《病魔》に侵された時の事。

思い出してエイルシアは頬を染める。

「それってユーマさんとキ、キキキ、キス……」

「何を言っていますか。その年であまり奥手だとこのまま行き遅れ……武器を向けないでください」

割と本気でガンプレートを精霊に向けるエイルシア。

禁句だった。

「そもそも今のユーマさんは《魔力喰い》です。直接介入は精霊のあなたが危険じゃないですか」

「そうですね。では2つ目の方法を。彼の封神解放弾、あれを使えば」

「却下です！　私にリィちゃんのいる学園を壊滅させたいのですか！」

「……国を滅ぼしかけたあなたが何を今更」

「風森！！」

しれっと彼女の失態を言う精霊。

エイルシアにすれば年上のお姉さんにからかわれている気分だ。

「真剣にやってください」

「でも大したことないので実際余裕なのです。今のあなたは相当の力量ですから。この程度の罠、私の力さえ必要ありません」

「……」

風森に褒められたようなので黙るエイルシア。煽てられたともいう。

「3つ目は何ですか？」

「思い出させるのです」

彼の事を、と風森。

「エイルシア。あなたがしようとしたことは間違っていません」
「えっ？」
「あの子の記憶を想起させる。それが自分の力で『鍵』を壊し、自分自身を取り戻すことに繋がります」

少年だけの《幻想》を手にする。それがユーマが優真であることを思い出し、もう忘れさせない方法だと。

「あの子の心。その中を1番占めているのは間違いなく彼です」
「……それはそれで複雑です」
「……ならばあの子と繋がっている私が教えましょうか？」

何でも知っていますよ、と風森。

少年の心の中を占める異性。その上位を上から順に言いましょう、と言われれば流石にエイルシアは黙っていられない。

「風森！」
「冗談です。最近私の中の『彼女』の要素が強くなっているのでつい……とにかく。彼を思い起こさせるきっかけをあの子に与えて下さい」
「きっかけ」

言われて思いつくものは……

――今だけ。今だけでいい……兄さん、力を貸して

そう言って震えながら彼が手にしたもの

――とりあえず兄さんの力を借りずに頑張ることにしたよ。俺も強くなりたいから

そう言って彼がエイルシアに渡したもの

これしかない。

「ユーマさん」

「……」

エイルシアは茫然自失といった状態のユーマの手をとり、ガンプレートを握らせる。

「これを見て。そして自分の力で思い出して」

＋＋＋

「……？」

ぼんやりとした目でユーマは手にしたガンプレートを見る。

（シアさん？　俺だって《レプリカ２》は持ってるよ？　……レプ

リカ？）

上書きされていく記憶の中、ふとした疑問がユーマの中で波紋のように広がる。

（何のレプリカだっけ？　これは……似ているけど違う。このガンプレートは……あっ）

まじまじと見つめて、睨みつけられた。

ガンプレートに。

それに付けられたエンブレムに。

銀の翼を持つ、金の眼をした――

ユーマはまだ彼の事を思い出せない。けれどオリジナルのガンプレートを見て大和が言っていたことを思い出した。

――これは『コウの力』だ。俺が拳を鍛え上げたように弱いあいつが戦う為に作り上げたあいつの『強さ』なんだ

（光輝さんの力……銀髪金眼の……痛っ！）

『鍵』がユーマの記憶を抑えつける。思い出すなと。

（……もう少し、もう少しなんだ）

届く。ユーマの、優真の中にある大事なものに。

手を伸ばす。『鍵』に触れて灼けつくような痛みに襲われる。

「があっ！　ああっ」

「ユーマさん！？」

激痛にエイルシアの声にも気付かない。

でもきっかけは手にした。ここからはユーマの戦いだ。

（……邪魔するなよ。『これ』は俺のものだ）

ユーマの意識は『鍵』睨みつける。

それから拳を握り、構える。

彼とは別の、もう1人の兄のように。

大和はいつだって彼の前に立つ。親友をこれ以上傷付けさせないために。

少年の中にある彼を守れるのはきっと大和だ。だから拳を握る。

手を伸ばす。

優真の中にある《狼》の幻想に。

握り締め、何かを掴んだ拳。彼の相棒である《狼》からユーマは彼の事を少しだけ思い出した。

彼は、真鐘光輝は戦うのだ。どれだけ力に翻弄され、蝕まれても、許せないからと。

見たくないものを見せられ、抗って力を振るい、また傷付いて…

…でもまた立ち向かう。

許せないからと。

あの時、『しろい夜』の時だってそうだったはずだ。

ユーマは『鍵』に向けて拳を振るう。取り戻すために。

このまま奪われたままなんて決して許せない。

そう。彼は――

「――っ！」

大和のようにぶっ飛ばして『鍵』を壊す。

光輝のように叫びながら。

「ざっ、けるなぁぁぁぁぁぁ！！！」

彼は《梟》

夜を識る者。闇を狩るモノ

＋＋＋

「あれ？」

ユーマは正気に戻った。目の前には驚いた表情のエイルシア。

突然叫び、拳を突き出したユーマに彼女は目を見開いたまま。

「シアさん？」

「……『鍵』を壊すことに成功したんですね。よかった」

「？」

よく覚えていない。

「なんで俺シアさんのガンプレート持ってるの？」

首を捻る少年を見てエイルシアは精霊に訊ねる。

（これも改竄です。あの子が『鍵』が壊したので《世界》が介入したという事実が揉み消されました。バランスを保つための当然の処置でしょうけど）

（……）

なかったことにされたらしい。

ユーマは釈然としないままガンプレートを彼女に返す。

「そういや何の話をしてたっけ？」

「あなたのお兄さんの事です。覚えてますか？」

「兄さん？　えっと大和兄ちゃんは馬鹿でかくて馬鹿みたいにカッコ良くて、馬鹿強くて馬鹿のように大食らいで馬鹿馬鹿しいくらい……」

「そんなに馬鹿って」

連呼するユーマ。エイルシアは苦笑い。

「同じ戦闘馬鹿でもクルスさんなんか1発だよ……俺はどうやったって兄ちゃんみたいになれないや」

「ユーマさん……」

そこまで言って自爆。ずーんと沈んだ。

ユーマは弱音を吐いていたことを思い出したらしい。

エイルシアは試すように訊いてみる。

「もう1人のお兄さんならどうなのですか？」
「……光輝さん？　光輝さんがクルスさんと？　そりゃもちろん面倒だからって大和兄ちゃんに押し付けるよ」

断言した。

「そうじゃなければ光輝さんは陰険だからまずは脅しをかけておびき寄せるよな。それから罠にかけて……いや、外道だから狙撃とか暗殺とかを企むはずだ。下剤を飲ませたりして弱らせる絡め手なんかも得意だし」
「ええっ？」
「根暗だから対策練ってわざわざ変なもの作るかも。『クルスバスター・クラウド』みたいな感じで細菌兵器なんか……そういえばいつか機動兵器作って大和兄ちゃんとタイマンするって話どうなったかな？」
「……一体どんな人なのですか」

エイルシアが呆気にとられている内にユーマは結論を出す。

「うん。光輝さんは正々堂々と戦わないからクルスさんは絶対敵わないよ。眼鏡だし」
「もう言ってることがわかりません」
「そう？　光輝さんは陰険外道の根暗眼鏡。それだけだよ。あと夜行性の鳥類」

そう言ってユーマは1人笑う。2人の事はいつでも思い出せるから。

「《梟》だろうが《狼》だろうが関係ない。光輝さんと大和兄ちゃんは俺の兄さんだ。俺は2人みたいに強くありたい。弟だから」

ユーマは拳を握る。今まで悩んでいたのが嘘みたいだ。些細なことに感じる。

「そうだ！　シアさん一緒に来て。試したいことができたんだ」

「どうしたんですか？」

「新技、いや必殺技だな。今思いついた」

嬉しそうに笑うユーマにエイルシアは戸惑うばかり。

でもユーマは思い出した。だいじなものを、少年だけの《幻想》を取り戻せた。

「行こう。シアさん」

「ちょっと、ユーマさん！」

だからよかったと彼女は思ったのだ。今日1日はきっと忘れられない思い出になるはずだ。

エイルシアの戦いは《世界》からユーマを守り、彼を元の世界に還してあげること。今回はそのはじまりにすぎない。

少年に引っ張られながら彼女は今後の事を考える。

まずここの学園長に会うことが先決。できれば今日出会った《弓》の勇者とも話がしたいと考える。

エイルシアは手掛かりを探している。《送還》以外の方法を何としても見つけなければいけないから。

少年が自分の秘密に気付き、絶望するその前に。

＋＋＋

おまけの話

日没に差しかかった頃、《Ａナンバー》に緊急招集がかかる。事件は学内で起きた。

現在解体工事中のスタジアム。それが何者かによって破壊、いや消失させられたのだ。

「あの辺りはここ数日人払いをしているから人的被害はゼロなんだけど」

「膨大な魔力反応があったらしい。現場は塵しか残ってない」

「なんやて！？」

「犯人の目撃情報は？」

「１番それらしいのは『女と子供の２人組』。それだけだよ」

「……フフ。子供」

「……」

皆の視線が痛い。

冷や汗だらだらの《精霊使い》。ちなみに制服はボロボロだ。

言えるわけがない。人がいないことをいいことにスタジアムにこっそり忍び込み、思いついた必殺技を試してみたなんて。

その時エイルシアに《ゴッドフリート》を2発も使ってもらったなんて尚更言えない。

逃げようにもエース１０人に囲まれた状態。絶体絶命。

「どうした、ミツルギ」

「いえ。スタジアムの解体と撤去の手間が省けてよかったですね」

「そうだな。……さて。反省室行くか？」

「……はい」

犯人はブソウに首根っこ掴まれ、自警部に連行された。

＋＋＋

ラヴとシア　前（前書き）

風森の国で

＋＋＋

誰もがそろそろ帰ろうと思う頃。エイリークにユーマから連絡があった。

「シアさんを迎えに来て」と。

ユーマは急用が入ったとかエイルシアを逃がす時間を稼ぐとかわからないことを言っていた。

とにかく、エイリークは指定された場所（スタジアム跡から離れている）へ迎えに行きエイルシアと一緒に寮へ戻ったのだが。

部屋に戻ってからのエイルシアは沈んでいた。

と言うよりも拗ねていた。

エイリークのベッドで不貞寝する姉姫様。

「どうせ私は……」

「姉さま？」

訳がわからないエイリーク。

「まさか、ユーマが何かしたの！？」

想像するだけで殺意が湧き上がる。

「……いいえ。２人でちょっと工事中の建物を消し飛ばしたりしましたがそれは関係ありません」

「は？」

詳しいことは明日の新聞に載っていた。

「……ユーマ『に』何かしたの？」

「それも大したことありません。《世界》の仕掛けた罠にしては陳腐だって風森も言ってましたし」

「はぁ？」

勘で訊いてみたらとんでもなく謎なことを言われた。

エイルシアはいじけ過ぎて秘密を暴露していることに気付いていない。

「……今は別にいいわ。なら姉さまは一体なんでそんなに気落ちしてるのよ」

「……ユーマさんがね」

ユーマの『鍵』を壊して『優真の記憶』が改竄されるのを阻止したエイルシア。ただ当の本人はその辺りの記憶が曖昧になっている。

どうやら彼の抱えていた悩みがエイルシアが聞いてくれたおかげで解決したということになっているようだ。

彼女にお礼を言ったユーマの余計な一言がこれ。

――シアさんはなんか優花姉さんに似てるや

これが思いのほか堪えた。複雑です、とエイルシア。

「私はユーマさんにとってもお姉さんなのかなって」

「……」

ラヴニカには散々「お姉ちゃん」と言わせたがっている癖にそれとは話が別だったようだ。

「リィちゃん。私ってそんなにお姉さんしてる？」

言葉に詰まる彼女の妹。

もしも「もちろん姉さまは私の自慢の姉さまよ」なんて言ったらこの人また拗ねはしないかと考える。

「ほ、ほら。アイツもそれだけ姉さまを頼りにしてるわけよ。姉さまはユーマに比べたらずっと大人なんだし」

「ずっと……」

地雷だった。年の差を気にしてまた沈む。

「姉さま……」

「ううっ。ラヴちゃん……」

エイルシアは自分のＰＣリングから幻創獣を喚び出して癒しを求める。

それから『でびるラヴちゃん』に「おねえちゃん」と呼ばせて自爆。しくしく言いだした。

エイリークはこんなうっとおしい姉を見るのは初めてだ。

「なんでアタシがアイツのフォローしなきゃいけないのよ」

改めてユーマをぶっ飛ばす決意を固めた。

これから先も姉と少年の板挟みに会うエイリーク。彼女の苦労を分かち合えるのは義妹だけだと彼女が知るのは少しあとの話だ。

どうせ私は年上のお姉さんです、と一層酷く拗ねはじめるエイルシア。

そんな姉を余所にエイリークは『でびるラヴちゃん』を見た。今にも「けけけ」と言いだしそうな生意気な目がそっくりで腹が立つ。（エイリークの偏見）

とにかく話題を変えて気を逸らしてみる。

「その幻創獣はポピラ達に創ってもらったのね。モデルはラヴニカ？」

「そうなの！　かわいいでしょ？」

「……まぁ」

食い付きがよかった。

「ラヴちゃんはまるで昔のリィちゃんみたいでつい抱きしめたくなっちゃうのよ」

「姉さまはあいつと随分仲良くしてるのね」

あの生意気なちび魔人が自分に似ていると言われるのは心外だが。

不満そうな声が気になったのだろう。エイルシアが訊ねる。

「リィちゃんはあの子が妹なのは嫌？」

「あんな小さな子を姉なんて呼びたくない。だから妹よ」

それは本心だ。ラヴニカと姉妹、ひいては家族になることをエイリークは拒絶しない。

ラヴニカの瞳に映る色をエイリークは知っているし、何より手紙を読んだから。

だからもっと彼女の事を知りたいと思う。

「姉さま。よかったら教えて。風森の国にいるあの子のこと」

「……そうね。それじゃあ少しだけ話すわね」

私達の義妹の話を。

それはエイルシアが学園に向かう前の話。

風森の国にいる魔人の彼女の話。

＋＋＋

ラヴとシア

＋＋＋

風森の城から少し離れた北の森。

とある少年曰く、そこが彼女の『生息地』。

「……おおぅ。なんじゃ、おまえは」

木の上に登り、感嘆の声をあげるのはちいさな子ども。

綺麗な紫の髪に葉っぱをたくさんつけて、着せられたふりふりのドレスが破けるのは気にしない。

紫の瞳を大きく開いてその立派な一本角を指でつつく。

「今までで1番艶のある奴じゃ。大きさも申し分ない。この前の茶色の入ったのもよかったがこれは……よいものじゃ」

うんうんと1人納得。

「これからも精進せよ。今後のお主に期待するぞ」

カブトムシ（のような虫）を相手に偉そうに別れを告げると、彼女は次に登る木を探す。

甲虫を探して観賞、もしくは鑑賞するのは最近の彼女に起きた密かなブームだ。とある少年の影響でもある。

「あやつ程の虫にまた会えるとよいのう。……また、か」

捕まえようとは思わない。囚われることを彼女は何よりも嫌っているから。

彼女は風。だから自由。

魔力を奪われ小さな体となった彼女。何かと不便な思いをしているがそれは些細なことだ。

４００年も憧れ渇望していたものに触れること、感じることができるのだから。

風が運ぶ匂い。森の木々を揺らす音。

木漏れ日の光。青い空。

彼女、ラヴニカ・コルデイクが《病魔》の魔人として生み落とされ、彼女が初めて見たものと同じもの。

変わらない世界。

先程と違う木の上から飽きることなく景色を眺めるラヴニカ。

それから誰にともなく彼女は訊ねた。

「これが貴様の守りたかったもの……我らが奪おうとしたものか？」

「そうですね」

答えるのはこの国の守護精霊。

翠の髪をした精霊はそれを否定する。

「……《風使い》。久しぶりじゃの」

「いいえ。私は風森。あなたの言う彼女、『ウインディ』は人が精霊の私を認識しやすいようにと選ばれた私の主人格にすぎません」

「どちらでも構わん。かつて我を封じたのは貴様だ。何の用じゃ？」

我は（遊ぶのに）忙しいとラヴニカ。

「あなたとは1度話をしようと思っていましたが……それは次の機会に」

「何？」

訝しむラヴニカに風森は言った。

「彼女が来ますよ」

「うっ」

嫌そうな顔。遠くから声が聞こえてきた。

「ラヴちゃーーーーん」

ラヴニカを呼ぶのはこの国の王女様、エイルシア・ウインディ。彼女は小さなラヴニカの保護者、義姉ということになっている。

エイルシアはいつものように城を飛び出したラヴニカを探しに来たのだ。

「カレハ、ここなの？」

「間違いありません。私（風森）が先に見つけましたから」

エイルシアの肩にちょこんと座るのは紅葉色の小さな精霊。彼女が最近契約した《守護の短剣》に宿る精霊だ。

与えられた名はカレハ。風森から独立した同一の存在でもある。

「ちっ。見つかったのは貴様のせいではないか」

「……」

気付くと風森は姿を消していた。ラヴニカは精霊に恨み事を呟く。

そこへ――

バアアアアアアアン！！

「のおおう！？」

突然轟く爆音。驚いたラヴニカは耳を塞ぎ、はずみで木から落ちてしまう。

ぽてっ、と

「ふぎゃ」

「やっと見つけました。もうラヴちゃんたらまたお城を抜け出したりして」

「エイルシア！！　その札はやめいと言ったじゃろうが！」

エイルシアは《音爆弾》のカードを持っていた。ユーマから伝授されたラヴニカ捕獲法の１つだ。

「おでかけするときはちゃんと行き先と帰ってくる時間を伝えないといけませんよ？　あと『いってきます』も言わなきゃだめ」

「我が何しようと勝手じゃろ。我は自由じゃ。なのにお主は……」

何かと『おねえちゃん』なエイルシアに憤慨するラヴニカ。

だが今の彼女の姿はかわいらしいちび姫様。かつての迫力もなければぷりぷり怒った姿はそれはもう、

エイルシアのツボだった。

「かわいい！　ねぇ、家に連れ帰ってもいいですか？」

「何をわからぬ事を言っておる！　離さぬか」

汚れるのも構わずエイルシアは抱き締める。

「午前のお仕事が終わったんです。だから一緒に遊びましょう」

「むぅ」

にこっとした笑顔に渋々と頷く。ラヴニカにすればエイルシアと『遊ぶ』というのは悪くない誘いだ。

着せ替え人形みたいな扱いを受けたり一緒にお風呂なんてことに比べれば断然いい。

「仕方ない。付き合ってやろう。我は自由なんじゃから」

そう。今じゃなくても世界と風はいつだって感じられるから。

「はい。行きましょ。ラヴちゃん」

ラヴニカに差し出されたエイルシアの手。

「……ふん」

その手を取らずにラヴニカは先を行く。

それが2人の距離。一緒にいても繋がることはない。

封印の呪縛から解かれた魔人。ラヴニカが今も風森の国にいるのは彼女の気まぐれ、自由だからだ。

そう彼女が自分に言い聞かせているから。

＋＋＋

城の練鍛場で激しく『遊んだ』あとはやっぱりお風呂へ連れて行かれるラヴニカ。

彼女はお風呂が苦手だ。

何がってエイルシアと一緒に入るのが。

「髪も身体もしっかり洗いましょうね」

「やめい！　やめ……ああー」

丹念に、隅々と、

エイルシアが洗うものだから。

サービスカット？　しませんよそんなの

「……いつもやめんかと言うておるのに」

ぐったりとして湯船につかる。

「ラヴちゃんも女の子だから身だしなみは気をつけないと。髪やお

肌はすぐ傷んじゃうから」
「ふん。そんなもの魔人の我に必要ないわ。見よ！」
立ちあがって仁王立ち。
「瑞々しく張りのある我のこの肌。羨ましいじゃろ」
「ラヴちゃんは子どもじゃない」
つるんとしてぷにぷにしてる。
「む。魔力さえ取り戻せばお主の身体など相手にならんわ」
「むぅ」
エイルシアは1度だけ見た彼女の本来の姿を思い出して唸る。
あれほどのスタイルに勝てる女性は世界にいないかもしれない。
「ふっ。思い知ったかエイルシア。我に言わせればお主は『そこそこ』じゃ」
「！？」
「『年を取って』『小僧』に嫌われない努力をせいぜい頑張るのじゃな」
「……」
地雷踏みまくり。押し黙ったエイルシアにラヴニカは調子に乗った。
「我を崇めよ。さすれば御利益があるかも知れぬぞ。ははははは、あははははは」
「……ラヴちゃん」

高笑いを余所に1人湯船から上がるエイルシア。

「ん？　なんじゃ」

「ユーマさんが教えてくれたのですけど、『せんたくき』って知ってる？」

「は？　……！？」

魔法発動。風の気流を湯船の中で生み出し渦を作る。

「こうやってたくさんの服を洗えるものですって。……洗ってあげる」

流石にかちんときたらしい。張り付いた笑顔が怖い。

高速回転。渦に飲み込まれるラヴニカ。

「やめい！　あばっ……わあああああああ」

「……どうせ私はそこそこです」

ラヴニカが溺れながら目を回し、エイルシアがいじけるというお昼前の惨劇。

＋＋＋

お昼ごはんは国王である父を加えて3人で。食事はいつもエイルシアが用意する。

城にはもちろん使用人達はいるのだが彼女は家族の食事、その準備だけは誰にも譲らない。

「ごちそうさまでした。お父様、先に失礼してお母様のお食事のお世話をしてきます」

「ああ。今日も美味しかったよ。いつもありがとう」

娘を笑顔で見送る国王、ラゲイル・ウインディ。

この時間になるとラヴニカは彼と2人きりになる事が多い。

かつて戦いもした2人だがそんなこと気にせずラゲイルの方がよくラヴニカに話しかけてくる。

「食事をするのにも大分慣れたようだね」

「ふん。我にとっては不要な行為じゃ」

そう返事をして付け合わせのグラッセを嫌そうに口にする。

ニンジンは嫌いらしい。

「好き嫌いもせず偉いじゃないか」

「子供扱いするな。残すとシアの奴が煩いのじゃぞ」

反応がまるっきり子どもなのでラゲイルは微笑ましく思う。

「……のう。あ奴はなぜ自分らの食事を作るのじゃ？　使用人にも料理人はいるのじゃろ」

「エイルシアの料理は口に合わないかい？」

「誤魔化すな」

ラヴニカだって料理は美味しいと素直に言えない。ただラゲイルは理由を話すことができない。

言えば彼女が傷付くとこれまで一緒に過ごしてわかっているから。

「ユーマ君だよ。あの子はプロとはいかなくても中々の腕だからね。10年も料理をしているエイルシアは彼に負けたくなくて色々勉強してるのだよ」

「……そうか」

納得した。

10年。その言葉で。

「ラヴニカ。君には感謝している。エイリークもユーマ君もいないこの国でエイルシアが笑っていられるのは間違いなく君のおかげだ」

「付きまとわれて迷惑じゃよ」

「そうは言っても構ってくれている。娘が《精霊使い》となり色々と頑張っていることも知っているのだろ？」

「……」

無言の返事。構わずラゲイルは話す。

「迷惑かもしれないがエイルシアが無理をしないようにみてあげてくれないか？　ウインディの血筋は甘えるのがへたくそなんだよ」

「……」

エイルシアが自ら選んだ、いずれ訪れるであろう試練。

娘を支え、力になれるのは騎士である自分ではなく魔人である彼女と精霊だとラゲイルはわかっているから。

見た目は幼女でしかないラヴニカに王は父として頭を下げる。

そんなラゲイルにラヴニカは、

「王よ」

「何だね」

「娘を思うならお主はまず国の仕事をせい。シア1人に任せ過ぎるな」

そう言ってすたすたと部屋を出て行った。

「……」

人にものを頼む前に自分から。

ラゲイルには痛い言葉だった。

＋＋＋

ラヴニカの遊び場は北の森だけではない。ユーマが使っていた部屋もそうだ。

ユーマが学園に行ったっきりそのままの部屋はおもちゃ箱みたいなものだ。異世界の見たこともないものが沢山ある。

まずは危険なものとそうでないものを分別。特に機械の類は下手に扱うと酷い目に合うことを彼女は身を持って学習している。

罠を見破るのも彼女の遊びだ。今日もごそごそと圧縮ボックスの中身を漁る。

「ラヴちゃん。何してるの？」
「ん？」

再びラヴニカを探していたエイルシア。ユーマの部屋で彼女を見つけて唖然。

ラヴニカは部屋を散々散らかした挙句、ベッドの上で寝転がって本を読んでいる。

しかもユーマが隠し持っていたポテトチップスを食べながら。

「またこんなに散らかして。だめじゃないですか」
「うるさい。お主だって勝手に入ってきておるでないか」
「わ、私はユーマさんのお部屋に来るのはお掃除に来ているのです」

動揺したのはあえて詮索しない。

「それよりもこれを見よ。この2本角の奴、まるで鋏のよう……はっ。これがユーマの言っておったオオクワガタという奴か。よいのう」

「リィちゃんだけじゃなくラヴちゃんまで男の子っぽいものに興味を持って……」

妹達はかわいい女の子でいて欲しい姉姫様は嘆いた。

最近のラヴニカのお気に入りは昆虫図鑑だ。実はラヴニカは『向こう』の文字が読める。魔神から与えられた知識らしい。

「再成の世界のものか。我に与えられた知識ではそうこっちと変わらぬはずじゃが……おおー」

そのページはホログラフィックシートだった。写真に触れると昆虫が浮かびあがってきた。

「動いておる！　すごいぞ。何と力強い鋏なんじゃ」

立体映像のクワガタがキシャー、と鳴いて丸太を角で挟み、引っこ抜いている。

他にもカブトムシと取っ組み合いをして鋏で掴みあげるとその場で高速スピン、投げ飛ばすという荒技を見せるクワガタ。

クワガタ？

「強い！　何という虫じゃ。シアよ、この森にはおらぬか？」

「いません！　第一巨大化する虫なんていたら困ります」

昆虫図鑑と思った本のタイトルは『昆虫王、必殺大図鑑』という。リアルを追求したＣＧアニメのファンブックだ。

「魔獣はいないってユーマさんは言っていたけど危険な世界なのかしら？」

勘違いされた。

「とにかくラヴちゃん。１度片づけますよ」

２人でお片づけ。圧縮ボックスの中に物を放り込むラヴニカにエイルシアはお説教。

そのエイルシアは何故か猫耳バンドを見つけ、ラヴニカに無理やり付けさせてみて骨抜きになったりしたのだが割愛する。

「すっきりしましたね」

「……のう、シアよ」

ひと段落したところでラヴニカは真剣な顔をする。

「どうしたの？」

「我は魔人であり、我が神から生まれた時に色々と知識を与えられておるのをお主は知っておったな？」

「……それが？」

「気になることがあっての」

「……」

「思い出したのじゃ」

そう言ってラヴニカ１点を見つめる。

固唾を飲むエイルシア。

「年頃の男子とは寝台の下に危険なものを隠す習性があるという。気にならんか？」
「……」
単なる好奇心だった。
「……お掃除します」
「うむ」
エイルシアも乗った。
＋＋＋
「それでうっかりベッドの下に仕掛けてあった罠にかかっちゃったんですけど……あ。でもそれで私とラヴちゃんがユーマさんのお部屋を爆発させたことは内緒にしてね」
「……いつも何してるの？」
エイリークは何とも言えない顔をした。
＋＋＋

ラヴとシア　中（前書き）

中編。蛇足だけど風森で起きた事件をひとつ

ラヴとシア　中

十十十

エイルシアが初めて精霊と契約した時のこと。

「ひと月足らずですか。まさかこんなにも早くあなたが《精霊使い》になれるとは思いませんでした」

精霊の風森は、紅葉色をした精霊を従えるエイルシアにそう言った。

「元々ウインディの血筋であり私と同化した経験が大きかったですね。……あなたの願いは確かに受け取りました」

エイルシアが修行を積み、精霊の力を求めたのは自分を救ってくれた少年を彼の世界に還す為だ。

「では風森」

「はい」

彼女は《召喚》に関して独自に調べたところ、わかったことがある。それは精霊と魔人、比べれば保有する魔力総量は魔人の方が遥かに多いということ。

結論から言えば中位精霊単体の魔力だけでは異世界への《送還》

は無理だということだ。必要となる魔力が足りない。

たとえエイルシアが風森を完全に使役できたとしても絶対量が不足している。

「エイルシア、あなたの力になりましょう。私を通して《世界》を探ってください」

だから探さなければいけない。少年を還す方法を。その為にもエイルシアは精霊の助けを必要としていた。

「ありがとう風森。でもどうすればいいの？　《世界》を探るなんて」

《精霊使い》の特性は《世界》に属する精霊から知識を引きだせること。

膨大な数の真実、その情報を《世界》は内包している。

「1番の方法は《世界》の《心像》に触れることですが、今のあなたでは逆に情報の海に飲み込まれてしまう。だから《世界》の末端ともいえる私（精霊）と対話して情報を引き出して下さい」

「対話」

そうです、と風森。

「あなたの質問に私が答える。あなたの力量に合う問いならば私は答えることができます」

それがエイルシアと風森、2人にとってリスクが少ない方法だと

いう。

試しにエイルシアは訊いてみる。

「ユーマさんは今何をしてるの？」

「エイリークに吹き飛ばされた所ですね。今日は木にぶら下がっています」

「今日は、って」

冗談で訊ねたが気になる話だ。

気を取り直してもう1度。

「風森、私はあなたの子孫？」

「いいえ。正確には私の主人格であるウインディ、彼女の妹があなた達の血筋です」

エイルシアも聞いたことのある仮説のひとつだ。これが真実らしい。

「《世界》とは何？」

「答えられません。質問が漠然としすぎています」

「魔神が転生するという預言は本当？」

「答えられません」

「精霊はどこに住んでいるの？」

「世界中に遍在しています。人が認識できないだけでその辺りの石ころのように存在します」

「……魔人はラヴちゃんの他にもまだ残っているの？」

「いるでしょうね。もしくはその血を引くものが。国には彼女以外にいませんけど」

「……」

この調子で質問を繰り返すことでおおよそ理解した。

「明日の天気は晴れかしら？」

「晴れですね。午後から風が強くなるようですが」

「……なるほど。《交信》を使うから質問の内容に応じて私の魔力を消費するのね。それと今の私に風森が答えられる質問はほんの一握りだけ」

世界中の情勢や秘密を探ると風森が答えられる内容が少ない上に大きく消耗する。雑談程度の問いなら問題がない。

「具体的な質問を心がけて下さい。それだけ正確な情報をあなたに教えることができます」

風森は補足する。

「あなたが世界に影響する力、個人の能力が高いほど《世界》を識る権利があなたに与えられます。魔術でもなんでも構いません、自分を高める努力、修行を怠らないように」

「……」

正直言えばまどろっこしい。

「焦らないで。時間はまだあります」

「わかってます。……質問するわ。ユーマさんは《転写体》、間違いない？」

「……はい」

「でしたら」

エイルシアは少年に関して自分の仮説が『間違っている』ことを信じて精霊に確認してみる。

間違っていなかった。

「エイルシア……」

「……ユーマさんを元の世界に還せる方法はある？」

「あります。私ができるのはその答えを導き出す手助けだけですが」

それが希望の言葉。

エイルシアは決意を固める。

「まず強くならないといけないのね。それで風森からたくさんの事を聞きだせるようにならなきゃ」

「修行の際も私を活用して下さい。私の中の『ウインディ』の記憶が役に立つはずです」

エイルシアはこの日から風森の指導を受けるようになった。

その後彼女は伝説の勇者の仲間だった《風使い》の力、失われた上位術式や奥義を授かることになる。

「今日はこれまでにしましょう。今までの《交信》とは違い、あなたが思うよりも消耗しているはずです」

「待って。最後に聞かせて欲しいことがあるの」

消えようとした風森をエイルシアは呼び止める。

「何でしょうか」

「ラヴちゃん、いえあなたの知るラヴニカのことを教えて」

「……」

黙る風森。答えられないのではなく逡巡している。

あの魔人の彼女と風森、ひいては『ウインディ』との縁は深い。

４００年も続く。

精霊の主人格である『彼女』が話すことを躊躇った。

「私にはまだ答えられない？」

「……いえ」

「ならお願い。私はもっと彼女のことを知らないといけない。彼女を傷つけた私はもう過ちを犯したくないの」

「エイルシア……」

エイルシアは《魔人事件》のことが忘れられない。

魔力の狂気に呑まれた自分。彼女を知らず、ただラヴニカに憎しみしかぶつけられなかった愚かさを。

彼女と今度こそ向き合うのだと決めたのは、エイルシア自身が定めた決意のひとつだ。

「……わかりました。少し長くなりますよ」

話をするに置いて、まず風森は彼女のことをこう言った。

「ラヴニカ・コルデイクは《病魔》の魔人。魔神の生み出した邪なる風。下位の魔力生命体である彼女は彼の手駒のひとつにすぎませんでした」

＋＋＋

ラヴニカは日課のようにエイルシアと『遊ぶ』。遊び場は兵たちの練鍛場だ。

エイルシアは何かと忙しい毎日を送っている。

国の政治は議会制ではあるが彼女も代表の1人として国の運営に携わっているし治癒魔法を使った国の巡回もまだ続けている。

リハビリ中の母の世話もするし精霊との修行も怠らない。彼女は調べ物をするために最近は召喚に関する《西の遺跡》の資料を取り寄せていた。

エイルシアがラヴニカをかわいがるのは息抜きのようなものかもしれない。

それから少し前からガンプレートの射撃訓練もはじめた。

ユーマから「護身用に使って」と預かったオリジナルのガンプレート。しかし彼が学園に行ったきりなので用途不明なカートリッジが多く彼女は使いこなせないでいた。

エイルシアは折角だからと射撃訓練を行い、同時に実験のように魔法弾の試し撃ちをするようにした。

ラヴニカはその際模擬戦の相手に付き合わされるのだが彼女はそれを『遊び』と称している。

模擬戦でラヴニカが使うのはユーマが置いていった回路紙の魔法カード。魔力がなく子ども状態の彼女でも扱える便利で強力なアイテムだ。

また、回路紙とカートリッジの魔力補充は精霊のカレハからまかなっている。

ラヴニカはこの『遊び』が結構気に入っている。消費型アイテムを駆使し、効率よい戦闘を工夫することが以前の彼女は必要なかったのでそれがまた楽しいらしい。

ところがその日は違った。

現在、風森の城の上空は完全に包囲されている。

空に浮かぶのは艦の形をした巨大な雷雲。その数ざっと１００ほど。

「ラヴちゃん……」

「ええい！　情けない声を上げるな」

風森の国は今年3度目の大事件、2度目の崩壊の危機に陥っていた。

エイルシアの手によって。彼女はガンプレートをラヴニカに向けておろおろしている。

「エイルシア、一体何を使った?」

「あの、新しいケースからカートリッジを取り出したのですけど」

「お主は向こうの文字が読めぬから勝手に使うなと前にも言うておったろうが!!」

エイルシアのガンプレートには度々酷い目に合うラヴニカだが今回は特に酷い。

雷雲の艦隊が包囲しているのは城ではなくガンプレートを向けられた彼女だから。

屋外の練鍛場にいたことが不幸中の幸い。屋内で使われたらどうなっていたか考えたくもない。

エイルシアの使ったカートリッジはレベル7。対艦隊戦用の掃討殲滅術式、

ゴッドフリート

ラヴニカはここにはいない少年に向けて舌打ち。

「ユーマめ、厄介なものを置いて行きおって。我とやりあった時は手加減していたとでもいうのか」

単に扱えなかっただけだ。エイルシアが使えた方が驚きだともいう。

「シア！　それは制御できとるのか？　お主の方で止められんのか？」

「消し方がわかりません！　今も『溜め』の状態なんです」

「溜め？　……成程。典型的な大規模術式か」

「エイルシア様！！」

事態の重大さに集まる武装した騎士や兵たち。ラヴニカは叱りつける。

「貴様ら！　早く城から離れんか」

「しかし」

「ただの人であの術式を止められぬものか。あやつに犠牲をださせたいのか、この達磨ヒゲ！！」

「ひ、ひげ？」

小さな子どもに罵られあんぐりとする騎士隊長の１人。

「シアよ。止められぬのなら時間を稼げ。撃つなら城の者を避難させてからにしろ」

「ラヴちゃん？」

「……ふん。思い出したわ。《神の艦隊》とかいうふざけた名の魔術」

険しい目つきのまま、ラヴニカはエイルシア達に命令する。

「よいか。それが我の知る魔術と同じならば『指揮』を執ることができるはず。ならばシア、艦隊の照準を我1人に絞り順次砲撃せよ。一斉砲撃は今の我では捌き切れぬかもしれぬからな」

「ラヴちゃん!?」

「黙れ！　我はもう照準に入っておる。お主が完全に制御できぬから仕方なかろう。……尻拭いも大概にしろ。ヒゲはさっさと城の者を避難させい」

「お嬢ちゃん1人で何を」

動転する騎士と兵。

「舐めるなよ小僧。我を誰と思うておる」

「っ!?」

カードを扇のように広げ、彼女は不敵に笑う。

この時だけはふりふりドレスの幼女であることが不自然なほど凄惨に。

「5分。いや3分で動け。……行かぬか!!」

「……は、はっ！」

紫の瞳が放つ迫力に押され、騎士と兵は散開。城内だけでなく周囲の住民にも避難勧告がだされた。

「ラヴちゃん」

「うろたえるな。お主がそんなだから兵が機敏に動けぬのじゃ……3分」

ラヴニカは装備を確認。カードを両手に持ち構える。

「なるべく被害を抑える。我が上空に飛んだら放て。よいな」

「でも」

尚も躊躇うエイルシアに苛立つラヴニカ。何と言えばこの女は納得するのかと考える。

「我にすればこれも所詮遊びじゃ。できればお主には制御できるようになってもらいたいが」

「……」

まだ駄目だ。エイルシアは不安そう。

「……我を信じよ。ゆくぞ」

「ラヴちゃん！」

その一言ではっとした。

ラヴニカはカードの1枚を叩きつけ、カードが放出する魔力の推進力で高く飛ぶ。

「今じゃ！」

「っ、撃ちます！」

砲撃、開始。

《ゴッドフリート》の艦隊砲撃は雷撃と衝撃砲が主力だ。包囲された城の真下に対地攻撃をされたらひとたまりもない。

それでラヴニカは自分1人を狙わせ、上空で迎えうつことにしたのだ。

ラヴニカが両手に持つカードは火属性や風属性の推進力となるもの。彼女はこれをブースターやスラスター代わりにして機動戦、砲撃を回避し続ける気だ。

「フン！」

ホバリングして雷撃を引き寄せブースト。急上昇。

次にカードを持つ両手を振り姿勢制御。カードの推力を小刻みに噴かすことでバーニア制御をこなす。

子どもの姿でもラヴニカは魔人。急加速によるGの負荷にも身体は耐え得るし空気抵抗も風属性無効の特性を持つ彼女ならば問題ない。

集中砲火を掻い潜るラヴニカ。稀に防御系や爆発系のカードを振るって相殺や衝撃波を利用した緊急回避も使って見せる。

「くっ、問題は手持ちの札が尽きる前に砲撃が終わるかどうかじゃが……」

一定の高度を保たなければならないので節約できずカードが保有する魔力が長時間持たない。

常に全力状態。このままもって5分。

ラヴニカは叫ぶ。

「エイルシア！　術式の魔力はあとどのくらいじゃ？」
「あと8割くらいです！」
「砲撃の数を10倍に増やせ！　このままでは我の札の数が足りん」
「ラヴちゃん！？」

心配する余りエイルシアの制御が甘くなる。砲撃の誤射が城の一部を破壊。

「馬鹿もの！　しっかり我を狙わんか！」
「で、でも……」
「このっ！　くっ、こんなにも魔力がなくて恨めしいと思ったことはないわ」

誘導式の雷球をスピードで振り切りながら舌打ち。

ラヴニカが《ゴッドフリート》のターゲットから外れることはない。彼女が地に落ちた時点で艦隊の集中砲火が大被害を起こしてしまう。

「あと3分弱で撃ち尽くさねばならぬというのに」

エイルシアの甘さに苛立つ。必死になる自分が馬鹿馬鹿しくなる。

「仕方ない。ならばっ」

だったらその甘さを捨てさせるまでだ。秘策はある。

なぜならエイルシアはエイリークの姉であるだけあって実は怒りっぽいから。

何よりラヴニカは彼女の地雷、起爆装置をよく知っているのだから。

「エイルシア、聞け！！」
「ラヴちゃん？」

戸惑うエイルシアにラヴニカは叫ぶ。上空から思いっきり怒鳴る。

「この年増！　行かず後家が！！」
「！！？」

エイルシアに落雷のような衝撃が走る。

行かず後家：適齢期を過ぎても嫁に行かない女性のこと。そういった女性を嘲う言葉。

ショックを受けたエイルシア。

その間も砲撃は続き、ラヴニカは艦隊に急接近してはインメルマンターンを繰り出して火線をやり過ごす。

それから罵り、嘲笑う。

「いつまでも姫でいられると思うなよ。我に言わせればお主などもうばばあじゃ」
「ばっ！？」
現在１０歳未満の容姿のラヴニカは容赦ない砲撃に対し容赦ない言葉を浴びせる。
「我の持つ知識に加えユーマの部屋にある書物（まんが）を読み、鑑みてはっきりした。今求められるのは『ろり』じゃ。今の我のような『ようぢょ』の時代なんじゃよ」
「よっ！？」
「２０代のお主は古い遺物。もう終いなのじゃ！！」
「いぶつ！？」
計り知れないダメージが彼女を襲う。
「我も、くっ、残念じゃよ……エイルシア。ははっ、ははは、あははははは」
「……」
とどめの高笑い。でも手札の消耗と共に弾幕の回避に余裕がない。
「……」
ガンプレートを握り締め沈黙するエイルシア。
ラヴニカが飛べなくなるまであと１分。
（そろそろじゃな……来た！）

「……ラヴちゃん、私は」

エイルシアが、

「私はまだ２２です。私はまだ……」

キレる。

「若いんです！！」

ブチ切れた。もう涙目で。

この時、エイルシアは完全に《ゴッドフリート》を掌握した。手にしたガンプレートを通じて艦隊指揮を執る。

「のおう！？」

支援砲撃と同時にラヴニカに突っ込んでくる雷雲の艦。特攻だ。

危うく上に逃げるラヴニカだが、

「逃がしません！」

対空砲火と同時に艦隊は包囲網を狭める。

ラヴニカ、絶体絶命。

「ゴッドフリート、全砲門開け。照準……」

ガンプレートで狙いを絞り、怒りに満ちた声でエイルシアは叫ぶ。

「４００歳を超えるろりばばあ！！」

「何じゃと！？」

ラヴニカもその暴言は聞き捨てならない。それよりお姫様がそんなこと言ってはいけない。

「てーーーっ！！」

「ぬおっ？」

十字砲火の一斉砲撃。

風森の国の空は轟音と閃光に包まれた。

静寂。

魔力を放出しきって艦隊は消失。雲ひとつない青い空だけが残る。

「……はっ」

不毛な争いだった。空を見上げ虚しさが込み上げてきたエイルシアは正気に戻る。

それから見た。

空から墜ちてくるぼろ雑巾のような女の子を。

「!?　ら、らら、ラヴちゃーーーーん」

どかーん!　墜落の衝撃は練鍛場の中心に大きな穴を作る。

「ふぎゃ」

ラヴニカはなんとか生還した。

＋＋＋

「それでラヴちゃんは国の危機を救って一躍有名になったの」

「姉さま……」

エイルシアから風森の国で今話題の『風森の特大花火大会』、『空飛ぶちび姫様事件』を聞いたエイリーク。

その真相が姉のうっかりからはじまり姉妹喧嘩で終わったなんて知りたくもなかった。

国では大事にならないよう誤魔化したらしい。

エイルシアが《精霊使い》の《魔法使い》であることと、ラヴニカが幼くてもものすごい《符術士》だという嘘を理由にこじつけた力技だ。

それで納得する国民もなんだか。

元はと言えばユーマがガンプレートをエイルシアに預けたせいだと結論をだしたエイリークは2回ぶっとばすと決意。

「なんであの子はそんな攻撃を受けて生きてるのよ」

「《ゴッドフリート》は雲の艦隊を操作して風属性の衝撃砲と雷属性の雷撃を一斉掃射する大規模な術式。ラヴちゃんは魔人の特性で風属性が効かないのよ」

「雷は？」

それがね、とエイルシア。

「ユーマさんが置いていった装備の中に雷撃を弾くグローブがあるの。それと防御用のカードで受け捌いたらしいわ」

「なによそれ」

信じられない話だ。

「あの時の事は私が悪かったけどラヴちゃんだって酷いのよ。私のこと行かず後家ってわざと悪口言ったりして」

「反省してないわね、姉さま」

聞けばまだ何かありそうだ。

「ラヴニカが姉さまのせいでものすごく大変だったことはわかったわ。でもその時はそんなに仲良くなかったのでしょ？」

話の中のラヴニカとエイリークの読んだ彼女の手紙から読みとれ

る人柄に違和感を感じる。

「あの子が姉さまのことを『姉上』と呼ぶようになったのはいつ？」

「それは」

思い出すエイルシア。

忘れもしない。その日は彼女が抱えていたすべてをさらけ出した日。

ラヴニカが《風邪守の巫女》だった彼女と初めて向き合った日。

「それは……あの子を最後に封印したお母様と再会して初めてお話した日のことです」

＋＋＋

ラヴとシア（の母）（前書き）

後編は次回

ラヴとシア（の母）

＋＋＋

「ラヴニカ・コルデイクは《病魔》の魔人。魔神の生み出した邪なる風。下位の魔力生命体である彼女は彼の手駒のひとつにすぎませんでした」

４００年前。人と魔族が争う時代。

勇者たちの活躍で露わになった種族間の誤解と黒幕の存在。戦局が大きく動き始めたその時、ソレは世界中に現れた。

魔人。魔神が自ら生み出した世界侵攻の為の駒。

単体で一国を滅ぼす事ができるほどの魔力を持つ戦略兵器。

たった一晩で世界が変わったと戦史で語られる戦争の序章。それはたった数人の魔人による虐殺だったという。

７人の勇者たちを中核とした人と魔族の混成軍が反撃に転じるまで１年。

《魔人戦争》と呼ばれることとなる戦争がはじまるその間に魔人

の犠牲者になったのは十数億人、当時の世界人口の４割を超えていた。

しかし４割で済んだという見方が正しい。魔人が現れた早い段階で《彼女》がリタイアしたからだ。

生物を効率よく大量に殺せる細菌兵器、《病魔》の魔人が。

《風使い》が命を賭して彼女を封じなければ一月と持たずに人と魔族、勇者さえも死滅していただろう。

《世界》はそう記憶する。

「我が神の望みは《世界》をもう１度創りかえること。我ら魔人が受けた命は世界に要らぬものを排除することじゃ」

「創りかえるならすべて壊せばよかったじゃないの？」

その言葉に紫の髪をした艶美な女はこう返した。

勿体ないじゃろ？　と。

「我は好きじゃよ。この世界が。特にこのあたりの風は我の肌に合う」

「あなた……」

「生まれ落ちた地がここでよかった」

魔人は眩しそうに紫の瞳を細める。

初めて見た世界。その感動は魔人の何かを変えた。

そして思う。「欲しい」と。

「我が神は次の世界を《再生》ではなく《再成》させるつもりらしい。『つくりかえる』だけならばこの地はそのままで残しておきたいのじゃ」

「その世界に私達はいらない？」

「らしいぞ」

「……人を滅ぼしたいのはあなたの意思？」

「違う。我が神のじゃ」

「……」

彼女は、《風使い》と呼ばれるフェアリーの彼女はそれで覚悟を決めた。

「それなら私はあなたを絶対に止める」

「無理じゃよ」

魔人は言った。

「羽なしのフェアリー。お主は魔法使いじゃろ？　魔法では魔人には勝てぬ。勇者どものゲンソウの力でもなければな」

「それでも」

「無駄じゃ」

「私は」

「無」

「うるさいわよ！」
「！？」

史実では語られないが、《風使い》の彼女は短気だったという説がある。

「アタシ達を皆殺しにしてこの地を残しておきたい？　ふざけるな。ここはアタシの故郷だ。アンタのものじゃない」

彼女はイラッときてつい地を出してしまった。

「ここには妹が、アタシの守りたい人たちがいる。この世界にはアタシの大切な、大好きな人がいるのよ。だからアタシは戦う。アンタ達から皆を守るんだ」
「その気持ち、我にはわからぬよ」

守る。自己防衛とは違うその意味を駒でしかない魔人は理解できない。

「当然よ。アンタは知らないから」
「何？」
「この世界が好きだといったアンタ自身が世界の半分しか知らないからよ」

翠の瞳が魔人をまっすぐに見つめる。

「アンタの見た世界って何？　まさか風を感じながら風景を眺めて美しいなんて気取ってるだけじゃないでしょうね」
「……」

魔人は答えない。図星だったからではない。

見つめられたその強い瞳の色にのまれた自分にただ驚いていたから。

《風使い》は言った。

「だったらアタシは退けない。何も知らないアンタに滅ばされたくない。世界の素晴らしさはそんな単純なものじゃないから。だって世界は」

世界の半分は――

＋＋＋

「……む」

目が覚めた。

「起きましたか」

目の前には何故かこの国の守護精霊がいる。

寝ぼけているのか、彼女は精霊に向かって柔らかく微笑んだ。

「……驚いたよ。魔人でも夢を見れるとは今日初めて知った」

「そうですか」

ラヴニカはいつものように北の森で自然を満喫し、そのあと木の上でつい眠ってしまったようだ。

彼女は魔人ではあるが体力は今の外見通り程でしかない。

早寝早起きで夜更かしができず、お昼寝は必須なのだ。

「のう、《風使い》」

「いいえ。何度も言いますが私は風森……」

「貴様はエイルシアよりも妹の方に似ておったな」

「……」

黙る風森。

「精霊になっても猫を被っておるのか？」

「……」

精霊は誤魔化すように消えた。

「……勝った。さて」

因縁の相手にひと泡吹かせたことで気をよくしたラヴニカ。それからいそいそと木から降りてその場を離れることにした。

精霊が現れた時点で彼女に居場所が知られたも同然だったからだ。

「ラヴちゃーーん！　……あら？」

間一髪。

「今日の我は絶好調じゃな」

ラヴニカはエイルシアの意表を突く為に城の方へ向かった。

＋＋＋

今日のエイルシアはおそらく街の巡回に行くはずだ。

連れまわされるだろうと思ったラヴニカは城の中へ逃げた。

それが失敗した。

「ラヴニカ様は見つかりませんね」

「お部屋の方にも戻られていません」

「ちっ。ここは駄目か」

城にいる使用人の中でも侍女とよばれる一部の人たちをラヴニカは苦手としている。

彼女達はエイルシアの味方であってラヴニカの敵だからだ。

「今日用意したお召しものはきっと気に入るはずですのに」

別名『ラヴちゃん着せ替え隊』。ウインディ家の養女をかわいがるだけに存在する特殊チーム。姉姫様公認である。

エイルシアは長年巫女でいたから今も着飾らないし長期休暇に帰ってくるエイリークもドレスなんて絶対着ることがない。

世話係である彼女達もエイルシア同様、可愛いものをかわいがるものに飢えていたのだ。

「動きやすいものとエイルシア様がお選びになったものですしね」
「お似合いだわ」

侍女の1人が手にしているのはパステルカラーのワンピース。

ではない。

「シアめ。どこでそれを知りどうやって手に入れおった」

自称『ラヴちゃんのおねえちゃん』に向かって唸るラヴニカ。彼女の持つ知識がその服がどれだけ危険なものかを訴えていた。

それはスモックだ。作業着ではなく幼稚園児が着るようなアレ。オプションとして黄色い帽子とひよこのポーチまである。

「冗談ではない。我はそこまで縮んでおらん」

捕まったら最後だ。今日は幼稚園児のコスプレ（魔人は博識だ）で街へ連れて行かれる。

ただでさえラヴニカは城の外へ連れ出されるのが嫌なのに。

「中にいるのは確かよ。城の出入り口をしっかり見張って。裏口もよ」

「兵舎の方はどうかしら？」

「ありえるわ。すぐに人を遣って」

「はい」

「中庭を見てきます」

「倉庫の方は私が」

「待って。2日前は毛布にくるまって冷凍庫に隠れていたこともあったわ。そっちもお願い」

「わかりました」

「奴らめ。日に日に統率がとれてきておる」

幾多の戦い（かくれんぼ）を繰り広げてユーマ以上の強敵となった捕獲班。城の兵まで派遣していた頃に比べればすごい進歩だ。

他の国には自慢できないけど。

「隠れてやり過ごすしかないの。札は先日使いきったからシアに補充してもらわねばならんし」

上の階から飛んで逃げることを諦めて別の逃走ルートを思案していたところ、

「ラヴニカ様？」

「っ！？」

見つかった。

「皆さん！　こちらにラヴ……」
「このっ！」
ラヴニカはユーマの部屋から物色した煙玉を叩きつけて逃走。
「きゃあ」
「甘い。我はそう簡単に捕まらぬぞ」
煙幕の中で「あはははは」と幼い高笑いが響き、遠ざかっていく。
「大丈夫？」
「ええ。この先にラヴニカ様が」
「追いかけるわ。向こうにも人がいるから挟み撃ちよ」
「「はい」」
侍女たちは白煙でいっぱいの廊下を駆け抜けて行った。
「……行ったかの」
ラヴニカは煙幕が展開しているうちに『囮』を放り投げ、近くの部屋に飛び込んで侍女たちの追跡をやり過ごした。
「ぬかったわ。まさか切り札を使う羽目になろうとは」
囮とはユーマのおもちゃである録音機能付きのボール。

しかもランダムに跳ねまわる代物なので今もラヴニカの高笑いが廊下を駆け回っている。

「このまま隠れておくか。しかしこの部屋は」

入ったことのない部屋だった。内装は豪華とは言えないが調度品が他の部屋のものより高級な感じがする。

それよりもラヴニカは部屋の中で懐かしい『風』を感じた。

あたたかい、エイルシアよりも落ち着いたやわらかな風を。

「誰かいるのかしら？」

「！」

その部屋が誰の部屋なのかに気付き、ラヴニカは後悔した。

煙幕を使ったとはいえ隠れる部屋を確認しなかった自分の愚かさに。

「あら？　あなたは……」

ずっと遠ざけていたかった。

城にいてもできるなら出会いたくなくて避けていた。

「あ……」

娘によく似たはちみつ色の髪も精霊になった彼女にも似た翠の瞳も見たくなかった。

１０年前と変わらないその姿がラヴニカに罪を意識させる。

「久しぶりね。ラヴニカ」

エイリア・ウインディとの再会。

彼女が向ける微笑みを前にしてラヴニカは逃げたくてしょうがなかった。

＋＋＋

エイリア・ウインディ。風森の王妃にして先代の《風邪守の巫女》。若い頃は《旋風の剣士》と呼ばれていたこともある。

１０年前の《封印の儀》ではラヴニカの再封印と共に石像化した彼女だが最近になって解放された。

ただ衰弱しきった彼女が目覚めるまでそれから2週間ほどかかっている。誰もが王妃の目覚めを待ち遠しにしていた。

彼女が目覚めたその時のことをラヴニカはよく覚えている。

泣いて喜んだエイルシア達のことを彼女はどこか遠いところから眺めていた。

「いらっしゃい。こうして会うのははじめてね」
「……ああ」

ぎこちない返事。

ラヴニカは逃げたくても足が思うように動かずその場で硬直。

「お主は……変わらぬな。我を前にしてよくも笑っていられる」
「？　ごめんなさい。まだ身体の調子がよくなくて耳が遠いのよ」
「そうか」
「少しずつリハビリはしているのよ」

１０年前から姿が変わっていないといってもエイリアは弱っていた。感覚は完全に回復しておらず体は今も満足に動かせない。

「よかったらこっちへ来て。お話しましょう」
「……うむ」

何を恐れておる！　自分を叱咤してラヴニカはがちごちに強張った足を動かす。

おずおずと近づいた彼女にエイリアは、

「つかまえた」
「のお！？」

抱きしめた。

「かわいいわ。リィちゃんみたい」

「は、離さぬか」

力が入らないのか、エイリアにふんわりと抱きしめられたラヴニカは無理やり振り解くことができず真っ赤になって困惑する。

「綺麗な髪ね。櫛はどこかしら？」

「……親子じゃよ。お主らは」

間違いない。迷惑な遺伝だ。

なんとか無理をせずにエイリアの腕から抜け出した。

ラヴニカは警戒しながらも彼女のベッドにちょこんと座る。

「そういえば、あなたはどうしてここにきたのかしら？」

「……ふん。たまたまじゃ。シアや侍女どもから逃げておった」

「どうして？」

「うっ。そうじゃ。そもそもお主の娘が」

いつものように？　抱きつかれたせいか緊張のほぐれたラヴニカはエイリアに色々と愚痴をこぼした。

エイルシアのせいでどれだけ自分に迷惑がかかっているか延々と。

「自分は着ぬくせに我にばかりふりふりしたものを着せおる。動きづらくて敵わん」

「そうなの？」
「そうじゃ。あ奴は自分勝手ですぐうっかりするボケ女じゃ。この前だって我がおらねば国は崩壊しとったぞ。知らぬか？」
「まあ」

娘への罵倒を笑顔で聞くエイリア。

「それに我をどこへでも連れて行こうとし世話を焼こうとする。縮んだとはいえ我は子どもではないのじゃぞ」
「ねぇ、ラヴニカ」
「何じゃ。我はまだ文句があって言い足りぬぞ」
「今、楽しい？」

ラヴニカは言葉に詰まる。

「あの子といる時間をあなたは楽しんでくれてる？」
「そんなことない！　わ、我は」

違うのだと否定する。

否定しないといけない。

なぜならラヴニカは……

「我はお主の」
「ごめんなさい」

エイリアが何故謝るのかラヴニカは理解できない。

「エイルシアがあなたのこと話してくれたの。私達ウインディの人

間はあなたの話も聞かずあなたをずっと縛り付けていた。私達は間違っていたのじゃないかって」
「何を」
「私もそう思うわ。あなたはこんなにもいい子だから。だから謝りたいの」
「違う！」
ラヴニカは叫ぶ。悲鳴のように。
「何故お主が謝る？　謝罪し償わねばならぬのは我の方じゃろうが！」
「ラヴニカ？」
「お主と娘たちの時間を奪ったのは我じゃぞ。魔人の我がいたからお主ら《風邪守の巫女》は親しいものたちと別れなければならなかったのじゃぞ」
「それは」
「わかるのじゃよ。お主らが我に向けた憎しみの意味が。……《風使い》が守ると必死になったその想いが。やっと」
そう言ったラヴニカは子どものように泣きそうな顔をする。
「奪われたくなかったのじゃな。誰かと共におることのできる時を、誰かと繋がることのできる世界を。共に過ごし創り出す思い出は何よりも世界を彩ることをお主らは知っておったから」
懺悔にも近い彼女の告白。
「お主には正直に言おう。封印から解かれ今日までの日々は楽しかったよ。だから思い知った。かつて我が欲した世界はちっぽけで、お主らから奪おうとした世界の素晴らしさを知らなかったと」

笑う。ぎこちない笑顔で彼女はかつての自分を嗤う。

「知らなくて当然じゃ。魔人である我はずっと1人じゃったから」

「でも今はちがうのでしょう？　今のあなたにはエイルシアがいる。あの子とすごした日々があなたの思い出になっている。そうでしょ？」

「そうじゃな」

エイリアに力なく返事をした。肯定ではなくただの相槌。

「だから辛い。エイルシアが楽しそうにするたびにお主の居場所に居座っている気がして申しわけない」

「そんなこと」

「あるのじゃよ。あ奴はすぐ無理をする。いろんなものを抱え込む。お主がいなくなった１０年の時。国を支え家族を必死に繋ぎとめておったのはエイルシアじゃ。そのくらい我にもわかる」

「……」

「あ奴が我まで抱え込む必要はない」

幼い妹に愛する人を失った父。その2人を支え続けたエイルシア。

当時１2歳だった娘に背負わせたもの重さを再確認してエイリアは顔を伏せる。

「顔をあげよエイリア。誇ってよいぞ。お主の娘は良い女じゃ。……人の運命に喧嘩を売るだけの厄介なあの魔女が、あ奴の為に小僧を寄越したと思えば納得するほどに」

「魔女？」

「おとぎ話じゃよ。……さて」

ラヴニカはベッドから降りるとエイリアに背を向ける。

「お主と話ができたのはよい機会じゃった。……行くよ。この国には長居し過ぎた」

ラヴニカは別れを告げる。この先ずっと会うことがないだろうから。

「失った時はもう戻らぬが、お主はこれからでも家族と共に過ごし大切な思い出を作るがよい」

「……あなたは？」

「さあな。だがもう誰もお主たちの邪魔はせんよ。お主も我も、エイルシアも縛られるものがない。自由なのじゃから」

「ラヴニカ」

立ち去ろうとするラヴニカをエイリアは背中から抱きしめる。

あまりにも寂しそうなちいさな背中を。

「離せ」

「……あなたが、あなたが自由だというならばここにいてもいいのよ？」

「ならぬよ」

「どうして」

「魔人を国で野放しにしておくリスクを考えろ王妃。事が公になれば我の存在は災いを呼ぶぞ」

「……」

ラヴニカは押し黙るエイリアの腕をそっと振り解く。

人のぬくもりから離れることを惜しむ、その心と一緒に。

「《ラヴニカ・C・ウインディ》の名は返す。王とエイルシアにはよろしく伝えてくれ」

「まって」

「さよならじゃ。……母上」

最後に逢えてよかった。

その一言を最後にラヴニカは、ウインディ家の養女でいることを辞めた。

「でも、でもねラヴニカ。あなたの時間を奪い、世界から隔絶してあなたをずっと独りにしたのは私たちなのよ」

エイリアの言葉はもう届かない。

＋＋＋

ラヴニカが立ち去ったあと。1人では立つこともままならないエイリアは彼女を追いかけることもできずその場に座り込む。

「お母様？」

しばらくして現れたのは母の様子を見に来たエイルシアだ。

「どうしてベッドから……」
「エイルシア！　あの子は」
「え？」

突然腕を掴まれてエイルシアは戸惑う。

「ラヴニカ、あの子はいないの？」
「それが城の皆とずっと探してるのですけど……ラヴちゃんたらまた新しい隠れ場所でも見つけたのかしら？　でもお夕飯には必ず戻ってきますよ」

今日はハンバーグなんです、と言うエイルシアにエイリアはぷっつん。

「なにを暢気なことを言っているの」
「いたっ」

エイリア、娘にチョップ。

「ううっ。……１０年ぶりです」
「……あの子の言うとおり本当にうっかりボケ女なのあなた？」

事情がわからないことは仕方ないと思うが、なんとなく嬉しそうだった娘にもう１発。

「……酷いですよお母様」
「いいから聞きなさいエイルシア。ラヴニカはここから出て行く気よ」
「えっ？」
「帰ってこないつもりなのよ」

「ええっ！？」

エイルシアはおろおろしだした。

「どうしよう。やっぱりあのお洋服が嫌だったからラヴちゃんは家出を……」

「いい加減シリアスモードに切り替えなさい」

「あいた！」

3発目のチョップが炸裂。

「でもどうしていきなり」

「私と話をしたことでけじめをつけた気でいるのよ」

「……お母様が悪いじゃないですか」

「黙りなさい」

エイルシアは咄嗟に額を庇う。

フェイントにひっかかった。

「……うう」

「いいからラヴニカを追いかけなさい。子どもの姿のままならまだ追いつけるはずよ」

「わかりました」

精霊のカレハに探索を頼み部屋を飛びだそうとしたエイルシア。

それをエイリアは呼び止める。

「エイルシア。あなたは魔人であるあの子と一緒にいるのは嫌？」

「なにを言ってるんですか。ラヴちゃんから毎日ラヴちゃん成分を補給しないと私はもう生きていけません！」
「……あなたは」
立派になったと思ったのに。
今の娘を見て呆れ、嘆きたくなったエイリア。
「大丈夫です。ラヴちゃんはもう1人じゃない。……ひとりぼっちにはさせません」
「エイルシア？」
「いってきます」
別にふざけてなどいない。今度こそエイルシアは追いかける。
いつか来ると思っていた。ほんとうの彼女と向き合えるその時を待っていた。
エイルシアは追いかけて今度こそラヴニカに手を伸ばす。繋ぐために。
今がきっとその時
＋＋＋

ラヴとシア　後（前書き）

後編。シリアスは難しい。他のシーンもだけど

次回から主人公が頑張ります

ラヴとシア　後

＋＋＋

エイリアと別れ城から抜けだしたラヴニカは街へ向かう。

街から町へ。郊外にある転移門へ。国の外へと向かう。

出て行くと決めた以上長居はできない。風森の国にいる限り彼女の居場所は精霊に筒抜けだからだ。

今だって風森がラヴニカに話しかけてくる。

「よかったのですか？」

「放っておいてくれ。我は自由じゃ。どこへ行こうが文句は言わせん」

ラヴニカはひたすらに外へ向かう。

移動術式も使えない小さな体を忌々しく思いながら足を動かす。

「我にはもう縛られるものがない。運命に見初められた貴様のように世界に繋がれているわけでもないのじゃからな」

「……」

「羨ましいじゃろ、《風使い》。我は完全に自由なんじゃぞ。貴様とは違いこの国から離れて世界のどこへでも行けるのじゃ」

精霊の方には振り向かず、まっすぐに前を見つめたままラヴニカはそんな事を言う。

「精霊となった貴様のように人に使役されることもない。貴様は自分の意志では何にも触れることができず、何も感じられない。今も幽鬼の如く彷徨う貴様に比べれば……封印されていたかつての我に比べれば今以上幸せなことはないんじゃぞ」

「あなたは……」

こちらを見ないラヴニカに風森は悲しそうな視線を送る。

「それが本当に幸せというのですか？　この世界で独りなることがどういうことか知っているあなたが」

「ここに我の居場所はない！！」

「！！」

「あってはならんのじゃよ。我が、《病魔》の魔人が犯した罪はエイルシア達母娘を引き裂いたことではない。我のようなモノに……幸せなど」

「……」

風森はこれ以上何も言えず、ただ彼女のうしろを付いて行く。

＋＋＋

ひたすらに外へ向かって歩くラヴニカ。

歩き続けて……疲れた。

「……」

「大丈夫ですか？」
「……黙れ。消えろ」

国の外縁部にある町まできたものの、子どもの足、子どもの体力で休みなく2時間以上も歩き続ければ流石に疲れて動けなくなる。

仕方なくラヴニカは町の広場で休みを取ることにした。

それはもうぐったりとした。

ドレスが皺になるのも構わずベンチで横になるラヴニカ。

「もう少しじゃ。もう少しで国の外へ行ける。長年続いた貴様との腐れ縁も今日までじゃな」
「……」

側にいた風森は何も言わずに姿を消した。人が来たからだ。

郊外にあって人気のない広場にやってきたのは老婆と小さな男の子。

男の子は1番にラヴニカを見つけた。

「おばあちゃん。誰かいるよ」
「おや？　あの髪の色は……」

この国では珍しい紫の髪を見て老婆はウインディ家の養女の事を思い出した。

「もしかして末姫様ですか？　これはこれは。こんなところによう

こそいらっしゃいました」
「……誰じゃ？　我はお主の事など知らぬぞ」
不機嫌そうにむくりと起き上がるラヴニカ。老婆は気にせずゆっくりとおじぎをした。
「知らなくて当然でしょう。お目にかかったのは1度だけ。エイルシア様が治療の巡回に来て下さった時でしたから」
「このあたりに覚えがあったのは来たことがあったからじゃな」
エイルシアには国中を散々連れまわされた。そのことをふと思い出す。
「ねぇおばあちゃん。この子お姫さまなの？」
「そうだよ。名前は確かラブチャン様……」
「一体誰じゃよ」
これもエイルシアのせいだろう。彼女はどこでもラヴニカのことをそう呼んでいたから。
どうせ国から立ち去る気だ。訂正する気にはならなかった。
「座るがよい」
「お気遣いは感謝致しますが」
「座れ。足、不自由なんじゃろ」
「……ありがとうございます」
独占していたひとつしかないベンチの隣を空けて老婆を座らせた。
その時男の子は持ってきたクッションを手際よく老婆の腰のあた

りに敷いてあげる。

「いつもありがとうね。ここはいいから遊びに行っておいで」

「うん。……いっしょにあそびませんか？」

「我は疲れておる。放っておいてくれ」

ラヴニカは男の子の誘いを無下に断る。

男の子は別にしょげることなく「はい」と元気に返事をしてベンチから離れて行った。

老婆と2人きりになる。

ラヴニカは人が来た時点で先へ進もうと思っていたがまだ疲れていた。

「……」

「……」

「……孫か？」

「いいえ。私は生まれつき身体が弱く子を為すことができませんでしたから」

「……」

「あの子は養護施設の近くに住む子です。1人では満足に外へ出歩けない私をあの子はいつも連れ出してくれるのです」

「そうか」

「優しい子です」

ラヴニカは男の子が遊ぶのを眺める老婆を見た。

彼女はその紫の瞳で、魔人の瞳で老婆の『中身』を視る。

「今もどこか病んでおるのか？」
「え？」
「足腰は老衰からくるようじゃが……肺と左の肩から腕、手先が僅かに痺れておるのは別のようじゃな」
「！　わかりますか」
生まれつきなんです。と老婆。
「辛くはないか？」
「いいえ。施設の方もよくしてくださいますし、まったく動かせないわけでもありません。それに昔から王家の方が診て下さいますので」
ゆっくりと首を振る老婆。
「エイリア様にエイルシア様。それにあなたにも気を遣って頂いて私は幸せ者です」
「……今もその身体は治っておらぬのに？」
「そんなことはありません。エイルシア様の魔法の風を受けると身体が軽くなるんですよ」
「……」
しかし、とラヴニカは思う。
この老婆の病はエイルシアの魔法では症状を和らげることはできても治せまいと。
「……この国で最後に会ったというのも何かの縁じゃろう。お主の病、我が治してやる」

「はい？」

ラヴニカは困惑する老婆の左手を掴み、念じる。

「《病魔》の眷族よ。主（我）の元へ還るがよい」

その力は《魔力喰い》。

老婆に中に巣食う魔力をラヴニカは奪う。

「どうじゃ？」

「ま、まさか」

恐る恐る老婆は左腕を動かす。

痺れなどなかった。

「……信じられません。もしやあなたも巫女の力を」

「そんなもの持っておらぬよ。身体の巡りを悪くしておった『カス』を食らっただけじゃ。ぬおっ？」

ラヴニカは驚いた。老婆が突然彼女の手をとったのだ。

自由となった両手で、皺だらけの手で縋るようにラヴニカの小さな手を包む。

「……ありがとう……ございます」

きっと不自由な思いをしてきたはずだ。理不尽な思いもずっと。

「すまぬな」

包まれた手のぬくもりが、向けられた感謝の言葉が余りにも心に痛くて、ラヴニカは謝ることしかできなかった。

＋＋＋

老婆と男の子に別れを告げ、ラヴニカは広場をあとにする。

国外へ出る門まであと少し。

「まったく。らしくないことをした。……そう思わぬか？」

ラヴニカは背後にいる彼女に問いかける。

ほんの少しの間、さっきまで義姉であった彼女に。

「そんなことないですよ。ラヴちゃんはいつだって私を助けてくれたじゃないですか」

エイルシアは隠れて覗き見していたことをおくびにも出さずそう答えた。

カレハ、風森を経由してラヴニカの居場所をすぐに付きとめていたエイルシア。彼女は広場でのやり取りをずっと見ていた。

「ロイゼさんの身体は私の力ではどうしようもなかったんです。風属性は決して治療魔術に長けていないから」
「あ奴を知っておるのか？」
「ええ。私はこの国の人や出会った人たちの事を忘れないように心がけているんです」
「……そうか」
ラヴニカはそれ以上何も言わない。でも足も動かせない。
そのまま立ち尽くす。エイルシアに背を向けたまま。
「……あの者は」
しばらくそうしていたが、ラヴニカはぼそりと話しだした。
最後に彼女に、この国の人に謝ろうと思って。
「この世界に生を受けてからずっと不自由な思いをしていたはずじゃ。我は別に病を治す力など持たぬ。ただあ奴の病が特別じゃった」
「えっ？」
「あ奴の中にあって身体の障害をきたしておったのは魔力じゃ。我の《病魔》の魔力なんじゃよ」
だから一目でわかった。そしてはっきりと気付かされた。
自分が封印されて４００年。この国はずっと《病魔》に苦しめられていたと。

「あれは封印されておった我が漏らしていたような極微小の魔力ではない。４００年前我がばら撒いたものじゃ。感染し大概の者は即死じゃったろうが……食らっても尚生き残った者がおったようじゃな。そ奴らの子孫と呼べる者たちが我の魔力を引き継いでおる」

つまりは４００年前《病魔》に冒された生存者の子が《病魔》を引き継いで産まれて来たと言うのだ。

「あの老婆が引き継いだのは魔力の残滓だけで症状も軽い麻痺程度ではあったが……昔の者はもっと酷かったはずじゃ。お主にはわからない話じゃろうが《病魔》に冒された遺伝子が引き継がれたのじゃ。傷ついた遺伝子を持って生まれた者の病を治すことはどんな魔法でも治せん。元が壊れておるからな」

「……」

エイルシアは口を挟められず、ラヴニカの話は続く。

「別に子に引き継がれるだけではない。我の《病魔》に冒された生物は人だけではなかろう。植物や動物もそうじゃ。食物の摂取で感染した者もおったろう。４００年も経ち世代を重ねればどれだけの人が我の《病魔》を引継ぎ先天的な、もしくはいつ発症してもおかしくない病を抱え込んでおるのかわからん。それに苦しんでおる人の数も」

「……」

「我は４００年前に多くの人を殺したが……封印されたその先もずっと人を傷つけていた。多くの者に不自由な思いをさせておった」

そう思えば辛い。そう思うからここにはいられない。

「我は封印されて当然のモノじゃった。その封印にもお主ら《風邪

守の巫女》を犠牲にしておる。今更じゃがすまなかったな。じゃからここには居れぬ。この国に我の居場所はあってはならん」

ここは居心地が良くて悪いから。

「じゃから我は」

これからもずっとひとりで……

「逃げるのですか？」

静かに、

「あなたは自分のしたことを罪と認めながら、この国から逃げるというのですか」

「っ！」

静かにエイルシアはそう訊いた。

彼女の心を抉るように。

「……そうじゃ。そうじゃよ。逃げたい。逃げたいのじゃ。我はここにずっと居ることが怖い」

痛いところを突かれて本音が漏れる。

「魔人であることを隠し、知らないふりをしてのほほんと暮らせるわけがなかろう。罪人と呼べる我がこの国の姫じゃと？　冗談にも程がある」

「そんなことないわ。あなたはもう《病魔》の魔人で在り続ける必要がない。違う生き方もできるはず。だから」

エイルシアはラヴニカに1歩だけ近づく。

「一緒に帰りましょう。だってあなたは……」

「本気で言っておるのか？」

言葉を遮る。ラヴニカの中で何かが静かに沸き上がる。

「帰る？　一緒に？　……エイルシア。貴様はいつまで我につきまとう」

ラヴニカは込み上げてくる怒りを我慢できず、

「ふざけるな！！」

思わず振り返りエイルシアに癇癪にも近いその感情をぶつける。

「我はこの地に災厄をもたらした《病魔》の魔人！　貴様だって我の為に母と１０年も引き裂かれ、我に殺されかけたことを忘れたとでも言うのか！」

彼女は言った。

貴様は我を恨んでいるはずじゃと。

「いいえ。私はあなたに憎しみをぶつけたことは決して忘れません。あの時私達は命の奪い合いをしたのです」

彼女は返した。

だから恨むなんて筋違いですと。

「それに私もお母様も、あなただってユーマさんのおかげで救われた。あなたに人を襲う意思がない以上封印はもう必要ない。私達を縛るものはもうありません」

「……だからすべて水に流しこれからは仲良くしましょう、そう言いたいのか？」

頷くエイルシア。

「できるか！　できるわけがない。我が、我がしたことは……」

「ラヴちゃん」

「そう呼ぶのはやめい！」

ラヴニカは反発するように怒鳴り、それで少し冷静になる。

「そうか。そんな暢気なことが言えるのは貴様がうっかりボケ女だからじゃな」

「ラヴちゃん酷い」

「黙れ！　……わかった。我がこんな姿をしておるからわからぬのじゃな。じゃったら」

ラヴニカは先程奪った僅かな魔力を媒体に力を込める。

活性した魔力は彼女の小さな姿を創りかえていく。

「!?」

一陣の風はエイルシアの視界を奪い、次の瞬間、彼女が現れた。

「貴様が我を愛でておったのは『あの姿』だからじゃろ？　思い出せエイルシア。我の本当の姿を」

長い紫の髪をした妖艶な美女。

《病魔》の魔人。魔神の生み出した細菌兵器。

エイルシアが彼女を目の当たりにして戦ったのは最近の事だ。

あの時感じた恐怖を忘れるはずがない。

「……ラヴニカ」

「そう。我はラヴニカ・コルデイク。邪なる風、《病魔》の魔人」

エイルシアが怯んだのをラヴニカは気配で察した。それが少しだけ悲しい。

だが改めて彼女は名乗る。今の姿こそ本当の自分なのだと。

「今代の《風邪守の巫女》よ。前に言ったはずじゃ。人と魔人は相容れぬと」

「それはっ！」
「こうも言ったはずじゃ。我はただ自由を求めただけじゃと。……もう何にも囚われとうない」
封印にもエイルシアにも、風森の国にも。
何より自分の犯した罪にも。
「だから……行かせてくれ」
それは懇願にも近い別れの言葉だった。
この時、ラヴニカは視線を逸らしエイルシアを見ないでそう言っている。
だからラヴニカは気付かなかった。
「ラヴちゃん」
「なっ！？」
エイルシアがただまっすぐにラヴニカを見ていたことに。
彼女の翠の瞳がラヴニカのすぐ目の前にあったことに。
「だったら……だったらあなたもう独りになったら駄目。それこそ

あなたは囚われてしまう。あなたはこんなにも優しいのだから」
「何を言うておる！」
咄嗟に逃げようとしたラヴニカだが、腕をエイルシアが掴み、離さない。
「私、あなたと今日まで一緒に過ごしてわかったことが沢山あるの」
小さな彼女は森の中で風を感じるのが何より大好きだった。
昆虫を探して観賞するのが趣味でニンジンが嫌い。お風呂が苦手で後片付けがへたくそ。
嫌々いいながらもいつも付いてきてくれた。誰を相手にしても拒絶なんてしなかった。
「今のあなたを見たからはっきりとわかる。あなたの瞳はあの子と一緒。私が一緒だった『ラヴちゃん』と同じなの」
「離せ！」
「あなたは偽っていなかった。あなたはずっと本当の姿を私達に見せてくれていた」
エイルシアは離さない。
「人の前では笑顔は見せなくていつも不機嫌な顔をするあなただけど、毎日を楽しく過ごしてくれた。私達との時間を大切にしてくれた」
「違う！」
「偶然出会っただけのロイゼさんを助けてくれた。昔のことで自分を責めて今の、それに亡くなった国の人たちの事を想ってくれた。

……ほんとうのあなたは魔人と呼ばれるにはとても優しくて、こんなにも傷つきやすい。だからあなたは素直に笑うこともできなかった」

「黙れ！！」

「あなたはいつも！」

エイルシアは話すのをやめない。

「今のその瞳を、悲しい顔を私達には決して見せないようにしてくれた！」

「っ」

エイルシアは決して離しはしない。彼女をこのままにはしておけない。

「お願い。こんな別れ方をするのは嫌なの。辛いこと、悲しいことを1人で抱え込んだまま行ってしまわないで。そんなことしたらあなたはこの先ずっと苦しんで自分の中に囚われてしまう。そんなのあなたの望む自由なんかじゃない」

「……ならば、ならばどうすればよい？」

ラヴニカは問う。幼い子が泣くように顔を歪ませて。

「エイルシア。我を行かせてくれぬというのなら……我はどうすればよい」

「それはあなたが決めて」

紫と翠。視線を交えながらエイルシアは言葉を彼女に突きつける。

「酷いかもしれないけどその答えはきっと自分で出さないといけな

いから」
「……」
「でもね」

でもその声は優しく、腕を掴むその手の熱が確かにラヴニカに伝える。

「1人でいる必要はないの。1人じゃきっと何もできない。何も見つからない。……でも誰かといたなら、皆でいろんなものを分け合って支えてあっていけたら」

ひとりじゃないと。

「私達はどんなことにも耐えられる。乗り越えられるわ。ラヴニカ、あなただって」

――辛いことも悲しいことも、嬉しいこともなんだって

私達は共にあることができる。

助け合うことができると。

＋＋＋

「というわけで家出したラヴちゃんを私が連れ戻して一件落着となりました」
「……」

エイルシアの話を最後までを聞いてみたところ、エイリークは思った。

それは嘘だ。

「誤魔化したわね、姉さま」

「……そんなことないですよ？」

見るからに怪しい態度をとられた。視線を合わせようとしない。

「最後の方は明らかに端折っているじゃない。どうして『ハンバーグを大盛りにする約束』をしたら帰ってくるのよ。子どもじゃないのに」

「美味しいですよ？　私のハンバーグ。ユーマさんのものを参考にかなりアレンジしたんですから」

「姉さま……」

あまりに酷い嘘をそのまま通そうとするエイルシア。

エイリークは姉のとぼけぶりに呆れるばかり。

「でもね」

急にエイルシアは真剣な表情をする。

「ほんとのことを言うと秘密なの。私とラヴニカの」

「姉さま？」

「あの日、彼女はやっと話してくれた」

辛かったと、寂しかったと。

「彼女が抱えていたものを私から誰かに話すなんてできないの」

「姉さまは」

エイリークは訊ねる。

「姉さまはそのラヴニカの話を聞いてどうしたのよ？」

「それこそ秘密。絶対言えないわ」

そう言ってエイルシアは悪戯っぽく笑った。

「私はただお願いして我儘を言っただけだから」

＋＋＋

その後も散々言いあった2人。それこそエイルシアとラヴニカの2人だけの秘密だ。

「妹が嫌なら私のお姉ちゃんになってください！」

「嫌じゃ！」

……最後の方はこんな感じ。

結局ラヴニカは城に帰ることにした。姿も僅かな魔力では身体を維持できず子どもの姿に逆戻り。

すっかり夜になってしまった。月明かりの下を2人はゆっくりと歩いて帰る。

2人は歩きながら話をした。主にエイルシアがラヴニカにいろいろと話しかけていた。

例えば４００年前《病魔》に感染した人の話。

当時の感染した人の多くは酷い最期を迎えてしまったが、その後の被害はかなり抑えられていたという。

「元々《風邪守の巫女》は癒し手として誕生したんです。それに遺伝による感染や食物連鎖による毒物の感染も当時の人は知っていました」

「何じゃと？」

「私たちが知らないことを教えてくれた人がいたんです」

「……勇者か？」

エイルシアは頷く。

「異世界の《剣》。あの人が『向こうの知識』を私たちに伝え、徹底した浄化を行わなかったならこの辺りの国はとっくの昔に滅んでいます」

「……」

「だからあまり気にしないで」

「そうじゃな」

気持ちだけは受け取っておくことにした。

この話のあともエイルシアはころころと話題を変える。

「ねぇ。ラヴちゃんは知ってる？　ユーマさんの世界の月には天使がいるらしいの」

「そうか」

知っておるよ。でもラヴニカはそうは答えない。

空を見上げる。残念だが今夜は満月ではなかった。

「天使ってどんな『人』なんだと思う？　やっぱり翼があるのかしら？」

「人……か」

少しだけおかしかった。魔神が与えた知識によれば天使も魔人もそうは変わらない。

神が創ったか魔神が創ったかの違い。この世界では目覚めなかったモノたち。

ラヴニカは彼らを思う。

向こうの世界で彼らは人として扱われているだろうか？

『渡ってしまった』同胞たちもまた。

ラヴニカはエイルシアに訊ねてみる。

「気になるか？　ユーマの世界の事が」
「え？」
「あ奴を還すこともじゃが……お主自身が行きたいと思うか？」
「……はい」

彼女は一瞬驚いたようだが、それからはっきりと返事をした。

「いつか行きたい。ユーマさんの世界を見てみたい」
「我もじゃよ」
「ラヴちゃん？」

エイルシアはさらに驚く。

「我も行ってみたい。再成の世界。天使と……悪魔と呼ぶモノ達が人と共に居る世界を」

ラヴニカはエイルシアを見る。

笑ってみた。

「行くか？　いつか、一緒に」
「！！」
「行かぬか？」
「い、いい、行きます！　絶対、一緒に！」
「そうじゃな」

とりあえずはこれを『言い訳』にしようと彼女は思う。しばらく一緒にいるための。

このお節介で厄介な姉がどうしてもと言うのだから。

「私、頑張りますから。だからラヴちゃんも手伝ってくださいね」
「そうじゃな」
「約束ですよ」
「……ああ」

エイルシアは嬉しそうに歩いて帰る。

余りにも嬉しくて、ついにはラヴニカを引きずっていき、ラヴニカは諦めたように引きずられていく。

どちらも繋いだ手を離さないから。

＋＋＋

運動会の前日（前書き）

運動会編の序章。久々で相変わらずの主人公

運動会の前日

＋＋＋

前回までの話

リーズ学園運動会が行われる2日前。運動会を観戦にエイルシアが学園へやってきた。

ユーマはエイルシアに学園を案内しながら催し事を見て廻り、その日の最後に2人は《剣闘士》の剣技を見た。

クルスに負けた時の事を思い出したユーマ。彼はそれ以来訓練を続けていたが、自分のゲンソウ術を今以上強くできないことに悩んでいたとエイルシアに告げた

ユーマはエイルシアによって自分の中にかけられた『鍵』の存在に気付きこれを壊すことに成功。その辺りの記憶は《世界》によって改竄され『鍵』自体がなかったことにされる

これによってユーマは『優真の記憶』を改めて思い起こし、新たな《幻想》を手にすることになるのだが

「ミツルギ、反省室行くか？」

「……はい」

思いついた必殺技を迂闊に試してみて……やりすぎた

＋＋＋

「ぐおーーっと」

自警部の反省室で一晩『磔』になっていたユーマは早朝に解放された。

強張った背筋を思いっきり伸ばす。

「……意外とよく寝れたな。頭の中がすっきりしてる」

いつも以上に清々しさを感じる。睡眠をとることで取り戻した記憶が整理されたのだ。

もっとも、何も覚えていないユーマはそんな事わかるわけないのだが。

自警部から出る前にユーマはブソウに挨拶していこうと思い部長室へ。

まだ朝の7時前だが、勤勉な彼はもういるはずだ。

「おはようございまーす」
「……なぜそんなに元気なんだ？」

今日も徹夜明けのブソウはユーマの爽やかぶりに驚きよりも気疲れを感じる。

「お前は一晩磔になっていたんだぞ？」
「意外と快適かもしれませんよ。あの反省室リフォームしたばかりだし」

身動きは取れないけど立ったまま寝るだけですよ、とユーマ。反省の色なし。

「……新しい刑罰だったが改善が必要か？」
「それよりブソウさんまた徹夜ですか？　スタジアムの件は学園側で処理するって言ってたじゃないですか」

解体工事中だったスタジアムが昨日、何者かによって消し飛ばされるという事件があった。

犯人の1人は今ブソウの目の前にいるのだが。

「エイルシア姫が関わっている時点で大問題なんだ。揉み消すしかないだろ。幸い人的被害がゼロでスタジアムが消し飛んだところを誰も『見ても聞いてもいない』。……お前ら一体どうやったんだ？」
「《ゴッドフリート》は流石にばれると思って誰にも気付かれないように《消音》と《幻影》を広範囲に広げていたんです。シアさんが言うには結界術式の応用らしいですよ」
「なんだと？」

魔法による隠蔽工作だ。《消音》はともかく《幻影》は単体に効果を及ぼす撹乱術式なのだが、それをスタジアム周辺に広げてしまうエイルシアの能力は相当に高いという証拠だ。

「《魔法使い》の力か。俺達なんか遥かに及ばない力だな」

「それはいいのでブソウさんが徹夜したのはどうしてですか？」

ユーマは割とブソウことを気にしていた。健康面で。

今年の運動会の準備は生徒会や手の空いたエース達が主に行い、来賓の警備や接待もリアトリスの《紅玉騎士団》やクオーツの《蒼玉騎士団》が引き受けている。

しばらくオーバーワーク気味だったブソウ以下自警部部員は休みを与えられていたのだ。

ブソウも何もなければ寮のベッドで寝てもいいはずなのに。

「今日ステージでやる紙芝居用の《紙兵》を作っていた。劇となると命令が複雑で札に書き込む量が多くて困る」

「ブソウさん……」

ユーマは言えなかった。

折角の休みになんて面倒くさいことをしているんですかと。

見ればブソウがいつも使う符術の白い札は黒くなるまでびっしり文字が刻まれている。

それが数百枚。これが使い捨てだというから信じられない。魔術

師でも汎用性の高い《符術士》の弱点でもあった。

ここまでしてブソウは1人でどんな大作を演じるのかユーマはかなり気になる。

ところがこの話は続かず、ブソウが次に話してきたのは全く別の事だった。

「ミツルギ。お前がここに来たのは丁度よかった。昨日の事件、表向き何もないが流石に学園側からも注意と処罰が言い渡されている」

「げ」

「しばらく謹慎だ。エースの資格は凍結。運動会の参加も認められないとのことだ」

「嘘！？」

痛い話だった。ユーマは自分が用意した種目を誰よりも楽しみにしていたのだ。

それは困る。そこでユーマはアギやリュガから伝授された切り札を使うことにする。

対自警部部長用の切り札。

「お前のしていた準備はエルドが引き継ぐことになっている。問題はない。安心して静かにしてろ」

「ブソウさん。そこはこれで……」

「何？　それは」

ポケットから取り出したのは隠し持っていたカスタード（多分）まんじゅう。昨日食べ歩いた出店の中でも当たりの逸品。

甘いものを賄賂に運動会だけでも参加しようとしたユーマだったが。

「……その手はもう効かん」

「馬鹿な！？」

でもまんじゅうは分捕られた。

＋＋＋

運動会の前日というだけあって準備はほぼ終わっている。

生徒たちも催し事を楽しむ余裕が出てきて学園は昨日以上にお祭の雰囲気があった。

「氷晶球、展開」

そんな中アイリーンは今日も魔術の訓練を行う。彼女は余程の事がない限り訓練を怠ることがない。

氷の球体は４つ。それぞれにバラバラな回転を与え、別々の軌道で自分の周囲を巡らせる。同時操作の訓練だ。

普段より訓練に力が入る。きっと彼女を見たからだろう。

エイルシア・ウインディ。数年ぶりに再会した幼馴染の姉はアイリーンが昔から憧れていた《魔法使い》。《精霊使い》ともなった彼女の実力を目の当たりにしてアイリーンは大いに刺激を受けていた。

昔からあの人のようになりたいと思っていた。強く綺麗で聡明でいて、彼女が側にいると幼馴染の少女は昨日のように嬉しそうな顔をする。

あの少年だって……

「破っ！」

雑念が入った。誤魔化すように《氷晶球》を砕く。

「シルバルム。こんなところにいたのね」

「ディジーさん？」

ディジー・バラモンド。3年生の魔術師でアイリーンと同じ氷使い。氷を砕き破片を飛ばすといった技術は先輩である彼女に教わったものだ。

アイリーンは彼女に一方的な因縁をつけられていたこともあったが、《アイリーン公式応援団》のお陰で和解。今はお互いの魔術を教え合うようなことをしている。

ディジーは人気のない屋外演習場でアイリーンを見つけた。

「運動会の日は訓練施設の使用は禁止だったんじゃないかしら？」
「そうでしたね。忘れていました」
「あなたね」

絶対嘘だ。《銀の氷姫》がそんな簡単なことを忘れるわけがない。

「こんなところに1人でいて。ご両親はいらしてないの？」
「忙しい人ですから」

そう言って寂しく微笑むアイリーン。それでディジーは失言だったことに気付いた。

彼女は《銀雹の国》の王女。彼の国の王は北国の盟主でもある偉大な魔術師だ。そう簡単に学園に来れるわけがない。

「ディジーさん」
「な、何よ」
「ありがとうございます。色々と気遣ってくれて」
「勘違いしないで。偶然よ。偶然見かけたから話しかけただけ。それだけなんだから」

ばつの悪そうな顔をしていたところに「ありがとう」と言われたディジーはぷいっと顔を背ける。

その仕草がおかしくてアイリーンは口元を手で押さえた。

ディジーはとっつきにくいところもあるが実は優しい女性だ。一緒にいるとよくわかる。

本人はキツイ性格と攻撃的な戦闘スタイルを気にしているが、それでも気配りができる人だ。不器用で十分かわいらしい人だとアイリーンは思っている。

そうでなければ彼氏（でも噂では調教中らしい）なんていないはずだ。

「私の方はいいですからディジーさんもマックスさんと一緒に楽しんできたらどうですか？」

「あんな男、一日くらい放っておいて問題ないわ」

「でも」

「私の方はいいの。……昨日見てたわよ。まだ『あの男』、付きまとっているんでしょ？」

「……ええ」

見られていたんですね、とアイリーンは困った顔をする。

実は運動会の準備がはじまった日くらいからアイリーンは1人の男子生徒に交際を申し込まれていた。北にあるとある国の王子様らしい。

その王子様は編入生。皇帝竜事件の際に多数の退学や転校の処分の生徒を出してしまった学園が追加募集をかけて集めた学生の1人だった。

彼に関して周りは「《銀の氷姫》になんて無謀なことを」と楽観視していたのが思いのほかしつこい。昨日はとうとうリュガ達応援団と一悶着あった。

「リュガさん達にあまり迷惑かけたくなかったんですけどね」

「まさかそれで引きこもっているわけじゃ……他の子には相談しなかったの？」

アイリーンは頷く。

「ウインディさんやユーマさんに相談したらあの人相当酷い目に合いますよ」

「……それはそれで見たい気もするわ」

覆面を被った応援団の名誉部員（本人否定）、彼の所業を思い出すディジー。

「それに今日は2人ともシア様、ウインディさんのお姉様と一緒のはずですから」

「そう。……《精霊使い》のあの子、学園に来る前は召使いだったらしいわね。まったく見えないわ」

「そうですよね」

本当に。だからアイリーンはくすりと笑う。

ユーマという少年はアイリーンが見てもよくわからない少年だ。聞いてみたいことが沢山ある。

風森の国に来た経緯や魔人と戦ったらしいこと、エイリーク達との出会いや《精霊使い》になった時のこと。

《雷槌》の傭兵と《西の大砂漠》での冒険。魔術に関する知識も独特でガンプレートが放つ魔法弾にはいつも驚かされる。

幻創獣、ＰＣリングのアイデアも。《竜殺し》の剣の挿話なんかもあってアイリーンは興味が尽きない。

いつか話がしてみたいと思う。少年の物語をもっと知りたいと。

それは好意ではなく興味。多分。

彼女の笑みを見てディジーはどう思ったのだろう？

「……まあいいわ。シルバルム、あなたもこんなとこにいないで楽しみなさい。付き合ってあげるわ」

「ディジーさん？」

「今日みたいな日も訓練なんてしてるから彼に魔術根性馬鹿なんて言われるのよ、あなた」

「……アギさんですか」

一瞬アイリーンの表情に怒りが見えた。

ここで彼の名前が出るのは日頃の行ないだろうか？　ディジーにアイリーンのことをそう言ったのは覆面名誉部員の彼なのだが。

ともかく。アイリーンはディジーに連れられて学園の催しを見て廻ることに。

ディジーはアイリーンを連れ出すために時間を空けてくれたのかもしれない。だからアイリーンは彼女の厚意を無下にできなかった。

「例の馬鹿王子が来たら私が追い払ってもいいわ。なんなら付き合うのもいいんじゃない？」

「私、そんな気易い立場じゃないんですけどね」

ところが。

「おお。アイリーン姫ではないですか。今日も美しく……」

「「……」」

中央校舎付近で例の王子様に早くも遭遇した2人。うんざりする長い口上は速攻無視。

そんなことはどうでもよかった。唖然としたのはそこではない。

「……何をしているのですか？」

「謹慎中なんだ」

王子様の傍に従者のように控える2人の少年。その内1人は何故かアイリーンとディジーがよく知る黒髪の少年だったのだ。

＋＋＋

「氷晶壁」

アイリーンの行動は早かった。少年をいきなり引っ張ると氷の壁で周囲を遮断。2人きりの場所を即席で作る。

「アイリさん？」
「……もう1度訊きます。ユーマさん、貴方何をしてるのですか？」
「いやだから今朝ブソウさんから謹慎だって言われて、それから色々あってエイヴんの召使いを……」
「もっと詳しくです！　どうしたら彼と一緒にいることになるのですか。それにその格好も」
「これ？　昨日制服をボロボロにしたから。替えは洗濯中なんだ」

ユーマの服装は風森の使用人が着る制服の略式のもの。初めてアイリーンが彼と会った時と同じ格好だった。

「……いい加減話してくれませんか？　あまりにわけがわからなくて、貴方に氷塊をぶつけたくてたまりません」
「そんなエイリークみたいな……いえ何でもありません」

氷の如き蒼の視線で睨みつけられたユーマは今朝の出来事をアイリーンに話した。

ブソウから謹慎処分を言い渡されたユーマはまず武器の所持を禁じられた。精霊もだ。

「風葉たちはいないのですか？」
「さすがに《守護の短剣》は風森の国宝だから自警部じゃなくてエイリークに預かってもらうようにしてる。ついでに風葉と砂更も」

ユーマは左腕の袖を捲る。《白砂の腕輪》はそこになかった。

「ガンプレートは没収。それはもちろんだけどＰＣリングも機能を制限されたよ。俺のリングはかなり弄ってあるってブソウさんには

バレてるから」

やろうと思えばユーマのＰＣリングは《コメットマン》や《じぇんとるビーン》といった戦闘型幻創獣を喚ぶことができるのだ。

「まさか丸腰なんですか？」

「うん。エースの資格も凍結されたし今の俺はほんとにか弱い一般生徒」

胸を張るが自慢にならなかった。

「それから１度寮に戻って着替えてから外をぶらぶらしてたんだけど……途中で他校の生徒に絡まれて」

「……なぜ謹慎を受けていながら簡単に外へ出るのですか」

「おなかへってたんだ」

一晩磔になって夕食はなしだったから。

「あの時間帯から学外にいる学生はみんなワルなんだね。ここ（この世界）でカツアゲされるなんて思わなかったよ」

「制服を着なければ誰だって狙われますよ」

「ああ。なるほど」

アイリーンは呆れるしかない。

そもそも何故ユーマが謹慎になっているのか彼女はまだ聞いていない。

聞いたら聞いたで呆れるだけだろうが。

「囲まれたんでどうやって逃げようかって思ったところで」
「まさか彼、エイヴンさんが貴方を助けた？」
「いや。お供のシラヌイ君に」
「そうでしょうね」

なんとなくそう思っていた。

王子様の従者は思いのほか腕が立つ。昨日はランクBであるリュガと互角に戦っていたところをアイリーンは見ていたのだ。

ちなみに王子様の実力は未知数。従者のうしろに引っ込んでいた。

「シラヌイ君にお礼を言ってたらエイヴんが調子に乗ってね。『シラヌイが助けた者は私が助けたのも同然』って」
「まさか」
「私に付き従がえ、って感じになってそのままあいつに付いて学園に戻ってきたんだ」
「貴方は……」

何度呆れればよいのだろう。

「それで従者の『ふり』をしているのですか？」
「うん。恩のあるシラヌイ君にも友達になって下さいって頼まれたし。エイヴんは面白いよ。馬鹿で」

ユーマは王子様に「良い主君は下々の者に恵むものだ」と言い張って朝ご飯を奢ってもらっている。

「……まだありますよね？　いえ、本当の目的は何でしょう？」

それなりの付き合いだ。ユーマの狙いが別にあることをアイリーンは確信している。

「従者のふりして紛れたら運動会に参加できないかなーって」

「……」

ユーマは本当に楽しみにしていたのだ。

「……事情はわかりました。もういいです」

アイリーンは溜息。ユーマがあの王子様としばらく一緒にいるなら離れた方がいい。

「だったらもう壁を壊さない？　２人きりはさすがに怪しまれるよ」

「そうですね」

思えば大胆なことをしたと思いつつ、アイリーンは《氷晶壁》の展開を解いた。

そこで２人が１番に目にしたのは氷漬けになった王子様とその従者。

それを踏みつけるディジー。

「この！　このっ！！」

「ディジーさん！？」

ディジーはブチ切れていた。

「一体何が」
「この馬鹿王子が！　シルバルムを狙っている癖に私にまでナンパしてきたのよ！！」
話しながらもディジーは蹴りつけるのをやめない。
「私にはマックスがいるの！　あんたみたいな馬鹿よりずっといい男なんだからっ！！」
「ディジーさん……」
きっと彼女は気づいてないだろう。自分が注目されながら大声で惚気ていることに。
ディジーは彼が目の前にいなければデレデレなのだ。
「マックスさん……よかったですね。愛されてますよ」
ユーマはかつて磔にされた彼を思い出して、涙を拭くふりをした。
＋＋＋

捜索、精霊使い　1（前書き）

ユーマの行動パターン。困った時は報道部へ行こう

捜索、精霊使い　1

＋＋＋

エイヴンというどこかの国の王子は基本馬鹿である。学習しないからだ。

典型的なナンパ男。長身で北国特有のさらりとした銀髪。外見は整っているのに身に纏う雰囲気と行動がすべてを台無しにしている。

「ツンとした綺麗なお嬢さん！　今夜は是非私と」
「しつこい！　しつこいわよ！！」
「ぐはっ」

先程氷漬けにされたばかりなのにエイヴンはディジーに再アタック。それで彼は再び凍らされて彼女に踏まれていた。

「……」
「砕くわ。この馬鹿砕いてもいいわよね！」
「流石に全力の《凍破》はちょっと」

また、とばっちりを受けた従者の少年シラヌイ君は氷漬けにされた寒さでがちがちと震えている。

「シラヌイ君大丈夫？」

彼の為にユーマはあたたかい飲み物を取りに行った。幸い近くに

知り合いの出した出店がある。

ユーマは恩人に優しいのだ。シラヌイ君に紅茶を渡す。

「……変わった味がします」

「生姜入りなんだ。あったまるよ」

お茶に詳しいフェアリーの少女によると、茶葉を完全に発酵させる紅茶は体を温める効果があるという。逆に緑茶は発酵させないので身体を冷やすらしい。

「私にはないのか？」

「ない。自業自得じゃないか」

「そ、そうか」

ユーマはエイヴンには優しくなかった。

気を取り直してエイヴンはアイリーンに話しかける。

「ところでアイリーン姫、私の従者をご存知でしたか？　先程ユーマと何か話をしていたようですが」

「ここは学園都市。中央中立地帯にあるここで私を姫と呼ぶのはやめてください。……はぁ」

この人本気で言ってるのかしらとアイリーンは溜息。ユーマはまったく従者らしい素振りを見せていないというのに。

「何か悩んでいますか？　もしや私との交際の話、今度こそ考えて貰えるのでしょうか」

「……そうですね」

しつこいので軽くあしらおうとしたアイリーンだったが、ちょっとした悪戯を思いついた。

困っているのにこちらを助けようともせず、今は従者の少年と楽しそうに話をするあのマイペースな少年を困らせようと思ったのだ。

「エイヴンさん。条件を1つのんでくださるなら、お付き合いの件考えてもいいですよ」

「……え？　ほ、ほんとうですか！？」

実は諦めていたのではないだろうか。言われたことが信じられなかったのか思いのほか驚くエイヴン。

「ちょっとシルバルム、本気？」

「アイリさん？」

ディジーもそれには驚いたが、ユーマの方はなにか嫌な予感がする。

アイリーンの視線はエイヴンのうしろにいるユーマに向けたままだったから。

「そ、そそれでその条件とはいったい？」

「貴方は最近こちらに来た編入生。だから『彼』の事を知らないのでしょう。ですから……」

喰いつくエイヴンにアイリーンはその条件を言った。

「この学園にいる《精霊使い》。彼を私の前に連れてきてください」

「……え？」

貴女の目の前にいますけど。

アイリーンがユーマに向ける微笑みが、彼にその一言を言わせなかった。

＋＋＋
捜索、精霊使い
＋＋＋

「さあシラヌイ、それとユーマ。私とアイリーン姫の未来の為にその《精霊使い》とやらを見つけ出すんだ」

張りきるエイヴン。

「へぇ。それじゃあシラヌイ君は生徒会長さんの推薦で学園に来たんだ」

「はい。それで王子が当然のように僕に付いてくるって」

「あはは」

その彼を無視して歩きながら雑談に盛り上がる従者の2人。

「シラヌイ！　お前まで私を無視するとはどういう……」

「エイヴんうるさい。俺達は今作戦会議中なんだ。作戦決まったらあとで教えるから黙ってて」
「そ、そうか？」

上に立つ者はどっしり構えてなさいとユーマは彼を黙らせる。

エイヴンは打たれ弱かった。怒られてしょんぼり。

「あの、王子が……」
「いいから。あの歳で甘やかすのはよくないよ。それでやっぱり2人は《会長派》なの？」
「？　ごめんなさい。まだ学園のことはよくわからなくて」
「そっか。俺も生徒会の勢力はよくわからないけどね」

そう言ってユーマは笑う。恐縮していたシラヌイ君もそれで少し顔をほころばせた。

シラヌイ君の話でユーマは2人が学園に来た大体の経緯がわかった。彼らはスカウト組だ。

《竜使い》の造反と騎士団の壊滅により《会長派》の勢力（特に戦力）は大幅に減少している。皇帝竜事件以降人材を補充する機会を生徒会長は窺っていた。

学園が生徒の追加募集をかける際に生徒会長はここぞとばかりに情報を集め、推薦者のリストを学園に提出したのだ。

生徒会長は学園に来る見込みのある優秀な学生を学園都市内だけでなく4地方にあるリーズ学園の付属校からも集めていた。

養成学校と名高い《学院》からも。

新規編入生約７０名の内半数以上が生徒会長の推薦だった。シラヌイ君もその１人だ。（エイヴンはシラヌイ君を学園に入れる為の条件だったらしい）

シラヌイ君は《刀使い》。東国にはよくいる剣士系のクラスだ。その剣技は１年生ながら見どころがある。

ユーマやジンと同じ黒眼黒髪の少年。彼らに比べるとやや引っ込み思案なきらいがある。

東国系の彼がなぜ北国系のエイヴンと主従関係にあるのか、ユーマはわからなかった。

「王子は国から離れたせいで羽目を外してしまって」

「それでナンパか。アイリさんに目をつけるあたり目ざといというか」

「おい」

しばらく放置されて痺れをきらしたエイヴン。

「作戦は決まったのか？　それにユーマ、お前はどこへ向かっている？」

「報道部だよ。情報収集するならここが１番なんだ」

「なるほど。そこで《精霊使い》の情報を集めるんですね」

詳しいですね、と感心するシラヌイ君。でもユーマの思惑は違うところにあった。

報道部が学園の情報を集めるのに最適なのはもちろんだが、情報を隠し誤魔化すのも報道部が1番なのだ。

アイリーンと別れる前にユーマは彼女にこう言われた。

「ユーマさん。これでも私、一国の王女なんです。私は北の大国である《銀雹の国》を背負う立場にあります」

「アイリさん？」

「勿論私の伴侶となる方もその責任があるでしょう」

彼女の微笑みは決して笑っていなかった。ユーマを脅しているのだから。

「もしも私が彼と付き合うことになって万が一の事があったら……責任、とってくれますか？」

『万が一』とは彼女ではなく国の将来の事だろうか。その責任の取り方に関してユーマは考えたくもない。

幸いアイリーンは期限をつけてくれた。明日の運動会が終わるまでだ。

ならば今日明日と報道部に情報規制をかけてもらい、エイヴン達

2人を見張っていれば問題ないはず。

「俺はただ運動会にこっそり参加して騎馬戦がしたかっただけなのに」

どうしてこんな面倒なことになったのだろう。

2日分の情報操作を頼むことで支払うことになるだろう金額を想像してユーマはがっくり。エースの仕事で得る収入はほとんど手元に戻らないのに。

「ユーマ君？　どうしたの」

「……いや、何でもない」

「どうでもいいから早く案内をしろ」

「エイヴんうるさい。あんまり偉そうにするなら部長さん紹介しないからね」

軽く睨まれたエイヴンはすぐに引っ込んだ。

「す、すまない」

「王子……」

3人はこうして報道部へ。ほぼ顔パスで部長室まで案内されるユーマ達。

ここが生徒会の中枢の1つであって気易く入れる所でないとわかっていたなら、彼らはユーマのことに疑問を持ってもよかったのだろうが。

新参者の2人はそのことに気付かない。

＋＋＋

「2人はこの学園いる《精霊使い》を探しているそうです」

「へ？　……ちょっとまってね」

突然の来訪と依頼。ユーマを見てきょとんとした部長は迂闊なことを言わずすぐさま自分のＰＣリングから仮想ディスプレイを呼びだして情報を集め出した。

彼女は僅か数分でユーマとエイヴン、それとアイリーンの事情を察した。

「あー、成程。アイリーンさんは君に彼を押し付けた。そういうわけね」

「あれ？　ネットワークのシステム、もう完成したんですか？」

情報収集の速やかさにユーマは驚く。

「ウチの部員達は優秀なんだ。これに慣れるとボク達の仕事はもう早くて早くて。大助かり」

ＰＣリングの通信機能を駆使した情報の共有化を図るシステムは元々ユーマのアイデアだったが、実用化させたのは報道部だった。

報道部は学園の各地に派遣した取材班から情報を逐一収集し、集めた情報を編集班が整理を行っている。部長はその情報をいつでも

引き出せるのだ。

部長のＰＣリングは特別にエース仕様であり大量の情報を一気に処理できたりする。

「そんなことは別にどうでもいい。早く《精霊使い》のことを教えてくれ」

エイヴンはユーマを押しのけて部長に詰め寄る。

その態度は些か横柄でいて、それで部長は目を細めて彼を見据えた。

彼女の持つもう１つの顔が覗く。

「新参の編入生で、しかも１年生のくせに口の聞き方が随分となってないね。エイヴン・コロデ君」

「！？　どうして名前を」

驚くエイヴンに淡々と答える部長。ついでにユーマはエイヴンが同い年だと今さらだが知らされた。

「あまりボクを舐めないでもらいたいな。王子と言っても北東にあるド田舎の出のくせに。目上に対する礼儀がなってないよ」

部長は冷淡にエイヴンの情報を暴く。

「個人ランクがＥでしかない君は所詮そこにいる《不知火流》の後継者である彼のおまけなんだ」

「僕のことまで知ってるのですか？」

シラヌイ君も驚いた。

「もちろん。修行の為に隣国にあるコロデ家へ奉公に出てたんだよね。彼の下に付くくらいなら君は学園にいた方ずっといい。いやぁ、君に関しては会長さんいい仕事したね」

うんうんと1人頷く部長。ちなみに彼らの個人情報も先程ＰＣリングで生徒会の機密資料を確認したのだ。

裏の情報を集めることに関して報道部は優秀な幽霊部員がいるのだった。

このあとも部長に散々と言われるエイヴン。

ヘタレな彼もいい加減ブチ切れて彼女に飛びかかろうとしたが、直前で1枚の写真を突きつけられて沈黙。

一瞬で屈服した。相当にマズイ個人情報だったらしい。

報道部、ひいては部長の彼女を敵に回すということを彼は身をもって思い知るのだった。

流石に可哀相になったのでユーマはエイヴンに助け船を送る。

「部長さん。エイヴんをいぢめるのはそろそろ」

「ミツルギ君。君もアイリーンさんも面倒な子と関わったね」

でも彼は弄り甲斐があって面白いや、と部長。これにはユーマもこっそり同意。

「《精霊使い》の情報だね。いいよ。ミツルギ君にはいつもお世話になってるし特別サービスしてあげる」

意訳すると「君の遊びに付き合ってあげる」とのこと。

エイヴンが多大な精神的ダメージを被って手にした《精霊使い》の情報はもちろん嘘だ。

＋＋＋

エイヴンは部長から《精霊使い》に関する資料（ダミー）を受け取った。

即席とは思えない電話帳ほど厚みのある紙の束。

「こんなにか？　でも名前が載ってないぞ。それに写真はないのか？」

「彼はこの学園のエースだからね。顔とかは情報の規制対象なんだよ。それでも欲しいと言うならそれなりにお金とるよ」

「む」

お金と聞いてエイヴンは黙る。案外ケチくさい。

エイヴンは部屋に備え付けられたソファにどかっと座ると、（その態度に部長は睨みを利かせたのでビクッとしたが）シラヌイ君と

共にその資料を読みだした。

分厚い資料はちょっとした時間稼ぎ。読み終えるのに1時間以上かかるだろう。

大人しくなった2人を余所に、部長は内緒話をする。ちょうどユーマに話があったのだ。

「ボクの権限で緘口令を敷いたよ。“学外から密偵が侵入している”って。君だけじゃなく《Aナンバー》全員のことを口に出さないように注意を促しておいた」

部長はそう言ってPCリングをユーマに向けて翳して見せる。

個人の通信装置として学園の全生徒にPCリングが普及した為、緊急連絡などの通達が容易になったのだ。

「助かります。でもスパイっておおげさじゃないですか？」

「そうでもないよ。公開授業を行うこの時期は将来スカウトするために生徒を見に来る国もいるんだ」

冗談ではないと部長は真面目な顔つきになり、「あと他校の生徒がこっそり偵察に来るね」とも彼女は付け足した。

「注目されるのは学園最強のクルス君とか技術士の天才であるエルド君」

「やっぱり」

「あとミツルギ君、君もだよ」

「……へ？」

ユーマは自分でびっくりするくらい間抜けな声が出た。

「なんで？」

「本気で言ってる？　世界でも稀少な《精霊使い》の君は、学園に今まで１０人しかいないはずだった《Ａナンバー》の中で異例の１１人目、《アナザー》のエースなんだよ」

部長は呆れた。実はユーマに関しては他校に情報が漏れるのを極秘に防いでいるのだ。

「注目されるに決まっているじゃないか。エルド君達と違ってミツルギ君の活躍はここ１、２ヵ月のこと。他校も君に関しては噂レベルの情報しか持ってないんだ。君はいわば学園の秘密兵器なんだよ」

「秘密兵器？　ってまたどうして」

「あれ？　代表選抜のこと知らない？　学園都市の対抗試合、夏季休暇明けにあるアレの事だよ」

「アレって言われても」

ユーマはまったく知らない。

学園では結構盛り上がる話題なのだが、ユーマの反応がイマイチだったので部長は話題を変えた。

「その話は今度でいいや。ボクにすれば次が本題なんだけど」

「本題？」

「明日の事でちょっとね。……ねぇ、ボクとまた悪巧みしない？」

ニマッっと笑う部長。

突然のお誘いにユーマは顔を顰めたが、彼女は構わず話を続ける。

「明日の運動会は生徒会の派閥でもアピールするのは絶好の機会。特に《会長派》は思いっきりアピールしてくると思うんだ」

「別にいいじゃないですか」

「普通ならね。でもあそこの主力は《獣姫》、《青騎士》とその騎士団を除けば編入生なんだよ」

部長はそれが気に入らない。

生徒会長がどこからか連れて来た編入生はシラヌイ君のような無名の実力者ばかり。油断すると運動会は彼らの独壇場になるかもしれないという。

「編入生の多くは会長さんがスカウトして来た子たち。だけど彼らはなぜか《会長派》を名乗っていない。気になるのは他にもあって、運動会のチーム分けで編入生は1つに固まらないで均等にバラけている」

「ああ。なるほど」

「何がかな？」

ユーマは話の途中で納得。目を鋭くして訊ねる部長。

「学園では無名の編入生達に名を挙げせようとしてるんですね。しかもなるべく自然に」

ユーマはこう考える。

運動会で活躍して一躍有名になる編入生達。そんな彼らを生徒会長が一同に集めてスカウト。纏め上げたように見せれば彼はリーダ

ーとして、それに《会長派》は勢力として大きなアピールになると。

「多分ね。それじゃあ編入生を1つのチームに固めないのはどう思う？　《会長派》の圧倒的勝利、みたいな方がわかりやすくない？」

「競技に勝つことだけがアピールとは限りませんよ。……まさか」

ユーマは気付いた。でもこれは陰険な方の兄が考えるようなことだ。

「競い合うことで生まれる名勝負も立派なアピール。むしろそっちの方が強く印象に残るけど……もしかして部長さんは八百長、編入生同士が自作自演で運動会を盛り上げる可能性を気にしているんですか？」

まさかとユーマは驚いたが、部長もまた驚いていた。

考えていたことが概ね正解だったからだ。

「君もよくそんなひねくれたこと思いつくね。……うん。でもそれだけはボクは避けたい。今度の編入生達は生徒会長との契約――多くはお金と学園内での権力の保証だね――それで動いているから可能性がある。ボクはそこが気に入らない」

「金額次第でどんな情報でも売り飛ばす部長さんが言うことじゃないですよ」

ここであれ？　とユーマは思う。

「でもシラヌイ君は《会長派》のこと知らないみたいでしたけど」

「彼の場合早い内に会長さんから見切られてるんだよ。もれなくお荷物が付いてくるから」

「ああ」

だからシラヌイ君は普通の編入生だという。

ユーマはエイヴンを見て納得した。でも酷い話だ。

「彼らの仕組む売名行為のために運動会をひっかきまわされたくないんだ。運動会や学園祭くらいボクだって純粋に楽しみたい。ミツルギ君だって運動会の準備、頑張ってたよね？」

確認するように訊ねる部長にユーマは頷いた。ユーマは自分の考えた競技をティムスたち《エルドカンパニー》の面々とはりきって準備していたのだ。

ユーマは謹慎で運動会に参加することを禁じられているけれど、できれば参加して運動会を楽しみたいし、皆にも楽しんでもらいたいと思う。

「だからミツルギ君、どうせ君は謹慎でまともに参加できないのだからボクの方に協力してくれないかな？」

「《会長派》の妨害工作をですか？　あんまりしたくないですけど」

「別にボク達を手伝わなくていいんだよ」

また覆面かとユーマは思っていたところ、部長は意外なことにそうじゃなくてと言う。

「勘違いされがちだけど報道部が裏でしていることは妨害に対する妨害、あくまで防衛なんだ。こっちは人材も揃っているからミツルギ君は君が思うようにしてほしい」

「部長さん？」

「別に何もしなくてもボクは何も言わない。実際杞憂に終わる可能性もあるしね。……ミツルギ君。これはお願いなんだ。資格を凍結されても君はエース。いくら生徒会幹部のボクでもミスト君のように報道部の部員でない君に命令はできないよ」

とは言いつつその本音は皇帝竜事件での自警部の二の舞を避けたいだけ。

部長は力を貸してほしくてもユーマがやりすぎた場合を想定して責任を取らないようにしたいのだ。

少し考えてユーマは答えた。

「わかりました。運動会で何か不審なことに気付いたら部長さんかブソウさんに連絡します。場合によっては俺も動く、それでいいですか？」

「うん。それでいいよ」

それで話はおわりだ。

「ところでミツルギ君の私服は初めて見たけど君は精霊と短剣、あとブースター持ってないとあんまり目立たないね。制服も着ないと完璧どこにでもいる一般人のこどもだよ」

最後にユーマがへこむようなことを笑顔で言う部長。

実際にユーマはへこんだ。

＋＋＋

捜索、精霊使い　2　（前書き）

シラヌイ君ＶＳリュガ

騎馬戦に意気込むユーマに空気なエイヴン

捜索、精霊使い　2

＋＋＋

報道部をあとにした3人が今いるのは学園の南区にあるスタジアムの跡地。現場検証はもう終わった後なので人が少なくがらんとしている。

《精霊使い》を探す2人に対し正体をバラしたくないユーマが人がいないところへと案内していったところ、自然とここへきてしまった。

「《精霊使い》。なんて恐ろしい奴だ」
「そうですね王子。この惨状を一晩でやったとなると僕も彼が恐いです」
「……」

跡地といってもそこには何もない、だだの更地。学園最大の施設のあった場所は今や学園最大の空き地となっていた。

噂では《精霊使い》が一晩で消し飛ばしたと言うが。

《精霊使い》の所業を目の当たりにしたエイヴンとシラヌイ君。
主従2人の会話にユーマは苦い顔。

ユーマの苦い顔を見て心配するのは従者の少年。刀使いのシラヌイ君。

「王子、ユーマ君はどうしたのでしょう？」

「……ふふん。今頃になって怖じ気づいたかい？　ユーマ」

「黙れエイヴん。いや、そんなに酷い奴じゃないと思うよ。その《精霊使い》は」

ニヤリとしたエイヴンを黙らせる。あと怖じ気づいているのはエイヴンだったり。

ユーマが自分に対してさりげなくフォローを入れると、エイヴンはすかさず反論。

「何を言っている。報道部で得た資料によると、奴は多くの生徒を埋めたり木に吊るしたりしているんだぞ」

「いや、それは」

「エースと言ってもその資格は前任者を蹴落として得たものだ。騎士団を1つ潰して多くの退学者もだしている」

これがまた言ってることが事実なのでユーマはエイヴンを黙らせることができない。

「《精霊使い》は酷い奴で間違いない。アイリーン姫だって彼にやられているそうじゃないか」

「そうですよユーマ君。《精霊使い》は1人で巨大な竜さえも倒したらしいです。分身して空から降ってきたり巨大化したりする人外なんですよ」

「シラヌイ君。それはちょっと違うから」

報道部の部長が用意した《精霊使い》の偽情報は偽と言いながら7割は事実だ。おもしろおかしく捻じ曲げた所がある。

エイヴン達は部長に個人情報を瞬時に暴かれることでその恐ろしさと扱う情報の信憑性を理解し、そのため渡された偽の情報をまるまる信じてしまい余計にタチが悪い。

「ユーマ君、一体何を？」
「部長さんにちょっと呪いの念を……」

先程の事を思い出して腹がたったらしい。

「ここはもういい。別の所に捜しに行くぞ」
「そうですね。ユーマ君、次はどこに行きましょう？」
「……」
「ユーマ君？」
「……えっ？　そうだな」

次はどこで時間を潰そうかと思ったところ、彼女が現れた。

「ミツルギさん？」

ユーマに声をかけたのはポピラ・エルド。ティムスの双子の妹だ。

ナンパ師の王子、エイヴンはすぐさま彼女に喰いついた。

「みつあみが素敵なお嬢さん！」
「！？」

「ここで出会ったのも何かの縁、今夜は私と……」
「ストーム・ブラスト！！」

ポピラは護身用に持っていたガンプレート、《レプリカ２》をエイヴンに向け容赦なくぶっ放す。

周囲になにもないのでエイヴンは竜巻の放射に弾かれて、はるか遠くまで吹き飛んでいく。

「王子！？」

放物線を描き飛んでいくエイヴン。シラヌイ君は慌てて追いかけていった。

「……なんですかあの馬鹿は」
「ポピラ？」

口調は淡々としているが、ポピラは珍しく顔が真っ赤だ。

「あの猿から私に向けた、桃色の最低なイメージを感じ取りました」
「……あー」

《同調》持ちの彼女はエイヴンの思念から身の危険をすぐさま感じ取ったらしい。怯まず撃退したのは流石だ。

エイヴン達が離れたので心おきなく話すことができるユーマ。

スタジアムの跡地であるここにはポピラだけでなくルックス、イースといったカンパニーのメンバーや《組合》の生徒たちが集まってきた。

「ポピラ達はどうしてここに？　ティムスは？」
「運動会の準備です。兄は昨日、ミツルギさんとエイリークさんのお姉さんに色々と見せてもらったので自分の研究に没頭しています」
ポピラは心なしかユーマを睨んでいる。ユーマは少しだけたじろいだ。
「あのーポピラさん？　いったいどうしたのでしょうか」
「今日の私は仕事をしない兄の代理なんです。しかもその仕事が兄が引き継いだミツルギさんが担当するはずの種目の準備で」
ポピラがここにいるのは全部ユーマのせいのようだ。
「ミツルギさん。私、本当は今日休みだったんです。エイリークさん達と遊びに行くはずだったんです」
「……ごめん。今度風葉を1日貸してあげるから許して」
ユーマは自分の不始末のために自分の精霊を売り飛ばした。
この一言でともだちの精霊がいないことに気付くポピラ。
「風葉ちゃん、今いないのですか？」
「俺は謹慎中だから今エイリークの所に……」
「私だけおいてけぼり……」
「ごめん！　3日、いや俺の謹慎中は風葉をずっとポピラに預けるから機嫌直して！」
「……わかりました」
それでポピラはユーマにガンプレートを向けるのをやめた。

最近ポピラが攻撃的なのは彼女のともだちであるエイリークの影響じゃないのかとユーマは思っている。

「まあ、いいや。それで準備って何するの？　俺の考えた種目だからこれ騎馬戦の準備なんでしょ？」

「はい。理由はともかくこんなに広い空き地があるのでせっかくだからここを主戦場にしようと兄が。先程生徒会からもここの使用許可を貰って来ました」

「成程。さすがティムス、この辺がよくわかってるや」

「馬鹿ですね」

よくわからない男の子の思考だったので、ポピラはいつもの台詞を口にした。

「それでどうしましょうか？　ただの平地だと面白みがないので障害物を作ろうと思ったんですけど。要望はありますか？」

「そうだな。これだけ広いとなると……うーん。砂更がいれば障害物なんてすぐ作れるけど」

「工事用の幻創獣を十分に用意していますので色々とできますよ」

そう言って穴掘り用幻創獣の《モグラット》や《ドーザー・ブル》、《土木ゴーレム》を喚び出すポピラ。

「そっか。こいつらがあるか。それなら陣地が構築できる所に塹壕を掘って落とし穴を適当に。周囲を見渡せる高台もいくつか作って。それと……」

ユーマはポピラに色々と注文する。

「中央は何もしなくていいや。集団戦の邪魔になるものばかりあっても面白くないし」
「わかりました。ではイースさん達に伝えてお手伝いの人の指揮をとってもらいましょう」
今日のポピラは現場の総監督だ。
元々彼女はカンパニーの秘書兼取締役。エースでいうところ騎士団の副団長でその権限を持っている。
穴を掘りはじめた幻創獣を見てユーマは満足そうに頷いた。
「よし。また一段と面白そうになってきた」
「そうですか。でもミツルギさんの言う騎馬戦とはこんな大掛かりなものなんですか？」
今更だが彼女は訊ねてみた。実はユーマの考案した競技はポピラが初めて聞くものだ。
「いいや。本当はもっと単純な取っ組み合いなんだけどね。俺が中学の時は危険だからって禁止されてた」
「はぁ」
「それで運動会って聞いてせっかく『こっち』に来たのだからここで大規模なものがやりたいなーと」
エイリークやアイリーン、アギ、ジンといった仲間たちにクルスたち《Ａナンバー》。それに実力が未知数である《会長派》の編入生たち。
学園全域を戦場とし、この全員が参加する大規模な集団戦闘の騎

馬戦は下手すれば大惨事だ。

だから楽しそうで、自分でももっと面白くしたいとユーマは思う。

「ここまでやるともう合戦だね。……うん。やっぱり俺も参加したいな」

「馬鹿ですね」

ユーマはしみじみとそう言って、ポピラに呆れられた。

あとポピラに遠くに吹き飛ばされて気絶したエイヴンは、シラヌイ君が引きずって運んでいた。

＋＋＋

運動会の準備をするポピラと別れたユーマ達3人。

気絶したエイヴンをユーマはシラヌイ君と一緒に介抱すると、改めて《精霊使い》の捜索を続行することに。

ところがなかなか進展しない。本人であるユーマが妨害しているので当然ともいえるが。

何よりエイヴンの手癖が悪かった。ちょっとかわいい女の子を見ると彼はすぐナンパに走るのだ。そして撃沈を繰り返す。彼は本当にアイリーンと付き合いたいのだろうか？

そんな主を咎めることもせず真面目に聞き込みをするのは従者のシラヌイ君。

彼の外見と雰囲気は小動物なので庇護欲とか母性をくすぐられた女生徒達はエイヴンなんかそっちのけで話を聞いてくれる。

しかし「《精霊使い》を知りませんか？」と訊ねられた彼女達は、側にいるユーマを見て複雑そうで曖昧な笑みを浮かべるだけ。

「ごめんね」と断られる度に気落ちするシラヌイ君。

それでもめげずに聞き込みをする彼を見ると、自分のせいとはいえユーマは可哀相になってきた。

あと「こんな健気な子に何をさせてるの、いじめ？」といった感じでユーマが睨まれることもある。

とりあえずユーマは女の子にがっつくだけのエイヴンは殴っておく。

聞き込みとみせかけたエイヴンのナンパが連続１０回失敗して１１回目のアタックに踏み込もうとしたその時、遂に彼を邪魔する者が現れた。

長身でがっしりした体躯の、赤いバンダナの少年だ。

「リュガ？」

「お、お前はっ！」

「……ちっ、またてめぇか」

リュガは舌打ち。エイヴンを見て不機嫌になる。

アイリーンに下心丸出しでしつこく付きまとうエイヴンは、大分前から《アイリーン公式応援団》の中で排除対象になっていたのだ。

怯えだしたエイヴンの前に護衛も兼ねている従者のシラヌイ君が立つ。

「シ、シラヌイ……」

「王子、さがってください」

「んでまたこいつか。……いいぜ。昨日の決着をつけてやる」

刀の柄に手を添えるシラヌイ君に対して大剣を持たないリュガは腰から警棒を抜いた。

鋼鉄製の警棒は自警部から支給されるものだ。

「リュガ、ちょっと」

「邪魔するなよユーマ。つーか何でこいつらと一緒にいる？」

「まあいろいろと」

アイリーン絡みなので説明できなかった。リュガという火に油を注ぐ必要はない。

「でもいきなり喧嘩は」

「これは仕事だ。軽薄なナンパ野郎を取り締まるという立派な仕事なんだよ」

言い訳するリュガの左腕には自警部の黒い腕章があった。

彼は今学生ギルドの依頼を受けて臨時の警備員をしているのだ。

「いいから見てろ。あの馬鹿はともかくこいつの剣はなかなかだ。……強いぞ」

ユーマの制止を無視したリュガは、構えたままのシラヌイ君と対峙する。

「おい。一応聞いておくが退く気はないんだな？　お前があの馬鹿を庇うことが納得できねぇが」

「はい。不知火流の剣は主を守る剣なんです」

シラヌイ君は答えた。

「王子がどんなに馬鹿で女性にだらしない駄目人間だとしても、王子を支え守ることが僕の修行です」

彼はぶっちゃげた。

今の主従関係を修行と言いきったシラヌイ君。

「シラヌイ……」

「シラヌイ君……」

1番可哀相なのは今ショックを受けているエイヴンなのかもしれないと思った。

「だから王子の敵は僕が相手をします」

「……まあいい。先手はくれてやる。こいよ、1年」

リュガ対シラヌイ君。これが2度目の対決。

＋＋＋

「参ります」

鋭い踏み込み。シラヌイ君は抜刀と同時にリュガに斬りかかった。

「太刀筋は昨日で見切ったぜ」

シラヌイ君の刀をリュガは警棒を使わずに紙一重で躱す。

攻撃に特化した《大剣士》であるリュガは剣の打ち合いを好まない。1撃で押し切るタイプだ。

正面からの面打ち。リュガはそこに狙いを絞っていた。シラヌイ君の渾身の上段に合わせて警棒を叩きつける。

「ぐっ」

リュガ愛用の大剣ならばその重量でシラヌイ君を弾き飛ばせるのだが、大剣に比べればはるかに軽くちゃちな警棒は刀を受け止めただけ。

リュガはそのまま鍔迫り合いに持っていく。

「うらっ！」

体格と腕力でシラヌイ君に勝るリュガは、そのパワーで警棒を振り抜く。シラヌイ君はそれに合わせ自分からうしろに飛んで仕切り直す。

「……いい判断だ。1年にしては上出来だな」

「まだです」

そのあとも何度か打ち合う2人。だがシラヌイ君の方は内心焦っていた。

大剣を持たないリュガは小回りが効いて刀を警棒で容易く防ぐ。加えて彼の牽制の一撃は警棒の割には重くて油断できない。

シラヌイ君は攻撃一本に集中できず、前回のように剣の速さと手数だけでは押し切れずにいた。

（まさか2度目で僕の剣が見切られるなんて）

従者の少年はそれをショックとは受け取らず、むしろ喜んだ。

学園にいる生徒は皆強い。ここで修業を積むことは自分にとってプラスだと肌で感じたのだ。

彼は戦士だった。自分より強い相手を前にして、無意識に口に笑みを浮かべる。

それからシラヌイ君は突然刀を鞘に納めた。

「もう終わりか？　ゲンソウ術を使ってもいいぞ」
「いいえ。あなたは確かに強い。ですが僕が《不知火》を使うのは……僕がすべてを出し切ってからです」
「……居合いか？」
刀を納めたままのシラヌイ君は擦り足でじわじわとリュガに近づく。
間合いを測るシラヌイ君に対し、油断なく警棒を構えるリュガ。
「――っ、セイッ！」
高速斬撃の一閃。
「おせぇ！」
しかしリュガの反応はシラヌイ君の速度を上回った。切り上げる刀を警棒で叩き落とす。
「痛っ！？　そんな」
「それ（居合い）は初見の一撃だから意味があるんだ。散々やりあってあとで使うには今更なんだよっ」
前に《賢姫》の放つ大太刀の一閃を間近で見て、自分の首が飛ぶところを幻視したことがあるリュガ。
エースであるミヅルに比べればシラヌイ君の剣速は数段劣る。彼の間合いはもう見切っているので単なる居合い斬りではリュガには通じない。

刀を落としてしまったシラヌイ君はリュガから距離をとろうとバックステップ。

とどめとばかりにリュガは追撃をかけて警棒を振りあげる。

「シラヌイ君！」

危ない！　とここでユーマは2人の間に飛び込んだ。

「ばっ、お前！？」
「ユーマ君！？」

驚く2人。振り下ろされたリュガの警棒はもう止まらない。

構わずユーマはシラヌイ君を庇い、右の拳をぐっ、と握り締めて

――

「何してんだよお前ら」

シラヌイ君を庇うユーマの前にさらに割り込んだのは、青バンダナの少年だ。

＋＋＋

捜索、精霊使い　3（前書き）

《歌姫》のエピソードは第3章が終わってからでもお送りします

＋＋＋

アギは右手で《盾》を翳し、リュガの警棒を打ち払った。

「アギ？」

リュガと同じく臨時の警備員をしていたアギ。リュガの騒ぎを聞いて駆け付けたようだ。

呆気にとられる3人。アギの接近に全く気付かなかったのは以前ユーマを助けた時に使った謎の瞬間移動を使ったらしい。

「おいリュガ。仕事中に喧嘩して怪我人なんてだしたらブソウさんに絞られるぞ」

「待てよアギ。俺は最初から当てる気なんてねぇよ。掠める距離で打ち込んだのに勝手にユーマが飛び込んできたんだ」

「ユーマ？　……ああこいつか」

アギが飛び込んだのは咄嗟だった。それで彼は制服を着ていないユーマに気付かなかったようだ。

そのユーマ。突き出そうとした拳が不発におわったので握り締めていた右手とアギを見ては不満そうな顔をしている。

それから出番を取られた、とアギに小言を漏らした。

「アギはいつもおいしいところだけ持っていくね」
「はぁ？　お前何言って」
「そうだな」

ユーマに同意するリュガ。

「そうなんだよユーマ。こいつな、ブソウさんやヒュウナーとかに一目置かれていて昔から知る人ぞ知るって感じの奴なんだ。さらに昇級試験で一気に有名になったからな」

《バンダナ兄弟》の相棒としてはアギに色々と思うところがあったらしい。

「なんだよ、リュガまで」
「ちょっと調子乗ってねぇかと俺も思っていたところなんだ」

それで最近のアギの活躍を振り返ってみる。

まず昇級試験で《精霊使い》の猛攻を《盾》で防ぎ切って勝利。ランクCからAへと2ランクアップの快挙を成し遂げる。

皇帝竜事件でも仲間たちを皇帝竜から守り抜き、特に3体同時の《カイゼル・バースト》を凌いだインパクトは全校生徒の知るところだ。

エースである《精霊使い》の相棒として学外へ任務を請け負うことも多い。噂では学園最強の《剣闘士》、クルス・リンドの全力の剣を無傷で受け止めたことで《Aナンバー》の全員が彼に注目して

いるという。

攻撃技をもたないアギはユーマに比べるとやりすぎたということもなく、良い噂だけが学園に広がっていたのだ。

リュガはそんなアギに悲しそうな顔を向ける。

「アギ、お前変わったよ。俺を置いて1人だけランクAになってさ。最近付き合い悪いし」

「この二階級特進男！」

友情とは何だろうなとリュガは思い、ユーマは叫ぶ。

「お前には時期エース候補とか時期自警部部長とかの噂もあって出世街道まっしぐらだよな」

「このブソウさん2号！」

離れて行く親友をリュガは寂しく思い、ユーマは叫ぶ。

「去年が懐かしい。お前とつるんでいたあの頃が。ヒュウナーのグループと対立して、一緒にブソウさんに追いまわされていたあの日々が」

「この《焼きプリン事件》の主犯！」

「お前黙れよ！！」

流石にアギはキレた。叫ぶユーマの首を絞める。

焼きプリン事件。去年に起きた事件であの自警部部長を巻き込み、

彼を停学に追いやった自爆事件はそれこそ知る人ぞ知るアギの大戦果である。

「ぐぇ」

「……リュガ。最近付き合い悪くなってるのは俺も悪いと思ってるが、原因はこいつや姫さんたちだぜ」

アギはユーマを絞めながらリュガに向けて説得というよりも愚痴をこぼす。

「他校の事件に引っ張りまわされるわ訓練に付き合わされるわ。つーかお前は氷の姫さんの誘い断れるのか？　俺は断っていいのか？」

「いや」

リュガは即答。彼はアイリーンの頼みなら喜んで引き受け、彼女の為になるなら喜んで親友を差し出すだろう。

アギはどちらかというとアイリーンの体術指南よりもエイリークの剣を受ける『動くカカシ役』をすぐにやめたい。

「お前はむしろアイリーンさんの為に頑張れ」

「……はぁ。お前だって応援団やら何やら付き合いがあるくせに。それとブソウさん2号ってなんだよ。ああ？」

「……」

さらに絞めあげられたユーマはアギの腕をタップ。それでやっと解放された。

「ぷはっ、……ごめんなさい。つい調子に乗りました」

「ったく。でもそのブソウさんから聞いたぜ。お前今日から謹慎だってな」

ニヤリ、とアギ。ユーマが学園に来ていることは別に咎める気はないらしい。

「昨日はお前姫さんの姉さんとデートだったじゃねぇか。一体何したんだよ」

「いや、それに昨日はデートじゃ……」

2人でこっそりスタジアムを消し飛ばしました。とは《精霊使いの所業を見たシラヌイ君もいるので冗談でも言えない。

デートと聞いてリュガの目の色が変わる。

「なんだそれは」

「リュガ、それ違うから。だいたいアギだって昨日は美人な人妻と一緒にいて……」

「サヨコ様に向かって何てこと言いやがる！！」

「ぐぇ」

ユーマは再び首を絞められる。

「あー、ユーマ。砂漠の民に王妃の悪口は禁句だ。アギどころか砂漠の民全部敵に回すことになるぞ」

「……」

訳知り顔のリュガ。彼もこの件でアギとガチの喧嘩をしたことがある。

さっきより強く絞めあげられたユーマはアギの腕をタップ。

「ぷはっ、……ごめんなさい。アギはサヨコさんのエスコートをしていただけです。アギは紳士です」

「……まあいい。リュガ、見廻りに戻ろうぜ」

「ああ」

リュガはもうどうでもよくなった。

シラヌイ君は3人のやりとりを呆然と見ているだけ。エイヴンはもう空気だし。

「じゃあまた明日な。謹慎と言ってもどうせ運動会はでるんだろ？」

「もちろん。騎馬戦には絶対参加する」

そこは譲らないと言うユーマに2人は笑う。

「ああ。俺達はチームバラバラだからな。勝負だぜ」

「おう」

「次こそ俺も大活躍だな」

最後に3人で明日の健闘を祈り、アギとリュガはユーマと別れた。

2人と距離が離れたところでユーマはアギに向かって叫ぶ。

首を絞められた仕返しにと爆弾を投下。

「アギー！　《歌姫》のあの子から手紙来たー？」

「なっ！？」

アギは驚いてユーマの方へ振り返る。

「何でお前がそれを知って」

「なぁ、アギ」

「……なんだよ」

アギは恐る恐る隣の親友を見る。

そこには赤い鬼がいた。

「《歌姫》ってなんだ？　お前あの時は彼女に興味ないって言ってたよな？　なのに……手紙だと？」

「違う！　それはお前の言うあの女じゃなくて」

「ほう。じゃあ誰だ？」

「げっ」

墓穴を掘った次の瞬間、アギは全力で逃げた。凄みの増すリュガ。

「てめぇ、待ちやがれ」

「ユーマ！　覚えてろよ！！」

見廻りの仕事そっちのけで鬼ごっこ開始。

ユーマは赤鬼から必死で逃げるアギに手を振ってあげた。

それはもう笑顔で。

「よし。仕返しはすんだし次に行こうか」
「……」
「シラヌイ君？」

アギが登場してからしばらく放置されていたシラヌイ君。

彼はユーマを見て今更この人何者だろうと考える。

「そういやエイヴんは？」
「……えっ？」

そう言えばと2人は辺りを見回してみる。彼がいない。

＋＋＋

2人が目を離している間にエイヴンはいなくなっていた。

相手にされなくて1人でまたナンパに行ったのだろうとユーマはシラヌイ君と2人で彼を捜す。

「あいつ本気で《精霊使い》を捜す気あるのか？　遊んでばっかりじゃないか」

でも見つけられる気はまったくないその《精霊使い》。

「実際遊ぶ気で学園に来ましたからね。王子は」

そう言って苦笑するのはシラヌイ君。

「国ではいつも『地味な修行ばかりで嫌だ』と愚痴をこぼしてましたから」

「ん？　エイヴんの修行って？」

「それは」

シラヌイ君が答えようとしたその時、ユーマはエイヴンを見つけた。

エイヴンは数人の男女に囲まれている。

「いた。でも何やってんだ、あいつ」

「待って下さい」

彼らに近づこうとしたユーマをシラヌイ君は止めた。

「あの人達は見覚えがあります。彼らは僕と同じ時期に来た編入生です」

「もしかして《会長派》か？」

人目のつかないところへ連れて行かれるエイヴン。ユーマは彼らを追いかけてしばらく様子を窺うことにする。

＋＋＋

ユーマ達に放置された空気なエイヴンはしばらく1人拗ねた後、案の定ナンパに出かけた。

それで3度目のアタックの時にうっかり編入生の女生徒に声をかけてしまい、エイヴンを見て集まった編入生のグループにそのまま絡まれてしまったのだ。

彼らはエイヴンの駄目さ加減をよく知っていた。だから馬鹿にした態度で彼に接する。

「今日はお供はいないのか？　おまけの屑王子」

「……」

エイヴンは答えない。

「まだいたんだな。このランクE。とっくに自主退学してたと思ったぜ」

「……」

エイヴンは答えない。

卑下した笑い声に彼は下を向いたまま、感情を凍らせてただ耐えるだけ。

「何か言えよ。女の尻を追いかけるだけの駄目王子さんよ」

「鉄屑にまみれた北のヘボ国も、お前の代でとうとう終……」

「黙れ」

「ああ？」

ここでエイヴンは顔を上げた。

その目には怒りを宿し、編入生達を睨みつける。

「取り消せ。私の故郷を馬鹿にするな」

エイヴンはどんなに自分を馬鹿にされてもそれだけは許せなかった。

一国の王子としての誇りが彼を奮い立たせる。

「んだと」

「私の国、《凍坑の国》は北と東、2地方の業を併せ持つ素晴らしい国だ。貴様らに馬鹿にされる筋合いはない！」

「うるせぇ！」

「っ！」

殴り飛ばされるエイヴン。一発で沈む。

「……取り消せ」

「まだ言うか、てめぇ」

編入生の1人が腰から長剣を鞘ごと抜いた。それを見た他の編入生が驚く。

「おい、いくらなんでもそれは」

「うるせぇ！　その目が気に入らねぇ。馬鹿王子の癖に」

「……」

軽い脳震盪を起こしたらしい。エイヴンは立ちあがれずにいる。

でも彼は編入生達を睨むのをやめない。

「……ちっ、屑が。くたばれよっ！」

「っ」

エイヴンに向けて振り下ろされる鈍器。

そこに黒髪の少年は飛び込んできて――

「ふっ、ざけるなっ！！」

ユーマが右の拳で鞘付きの長剣を殴り飛ばす。彼を知る人が見ればそのパンチは誰もが驚いただろう。

今のユーマには精霊がいない。ガンプレートもなければ本当に普通の少年と変わらないはずなのだ。

突然の乱入に驚いたエイヴンと編入生。

「……ユーマ？」

「やめろよ。お前」

エイヴンに武器を叩きつけようとした編入生はユーマに睨まれると思わず怯み、一歩下がった。

それは以前にブソウさえも怯ませた、感情を研ぎ澄ますことで透き通る黒の瞳。

兄譲りの静かな怒りの瞳。

「そこまでです」

そしてもう1人。従者の少年がエイヴンの前に現れる。

「シラヌイ……」

「王子の言うとおりです。凍坑の民の、彼らの業は世界に誇るものだ」

シラヌイ君は刀を抜いた。そしてその刃の輝きを編入生達に見せつける。

「この刀は僕が王子から賜ったもの。そして毎晩王子自ら砥いでくださるこれは、何を斬っても刃毀れひとつできない。刃の輝きだって曇ることがない！」

先程リュガと激しく打ち合ったばかりのシラヌイ君の刀。

それは彼の言うとおり最高の切れ味を保ちながらも、その刃は曇りひとつなく銀色に輝く。

「この方は《銀匠》の王であるコロデの王子。数多くの刀匠を世界に送りだした王子の国を馬鹿にするな」

エイヴンを庇うように刀を構えるシラヌイ君。

「これ以上王子の誇りを汚すのならば、不知火流の名にかけて僕が相手をします」

彼の周囲で闘気のように揺らめく熱気。これは風属性と火属性の複合術式、《陽炎》だ。

しかし編入生達はそれで怖じ気づくわけがない。

シラヌイ君の実力では1人を相手するのが精一杯。数の上で編入生達が断然有利だからだ。

「シラヌイ。てめぇ1人でこの人数とやる気か？」

「……」

シラヌイ君は答えない。彼はもう覚悟している。

「違う。2人だ」

代わりに編入生達に答えるのはユーマ。

「はぁ？　たかがガキが2人になったところ……で」

「おい、あれって」

「えっ？」

戸惑う編入生達。改めてユーマを見た彼らは目を見張った。エイヴンとシラヌイ君も驚きの目でユーマを見ている。

なぜなら彼の肩にはいつの間にか、緑の髪をした小さな羽付き妖精がしがみついているから。

「まさかお前」
「誰だと思う？」

編入生達に向けて不敵に笑うユーマ。

ついでに風葉もにこー、と笑った。

＋＋＋

「大丈夫？」
「ああ……」

編入生達は追い払ったあと。ユーマは倒れたままのエイヴンに手を貸す。

風葉を見た編入生達は何故かあっさりと退いたのだ。

「ユーマ君は僕達を騙してたいたんですか？」
「ん？　何が」

静かな怒りに震えるシラヌイ君に対してとぼけるユーマ。

「だってそれ、精霊じゃ……」
「ああこれ。違う違う」
ユーマはシラヌイ君にＰＣリングを見せ、偽造していた風葉２号をもとのピンク色に戻した。
「これはＰＣリングの幻創獣。よくできてるでしょ？」
「はぁ？」
ユーマの思考操作でくるくる踊るピンクの風葉。
「はったりだよ。あいつらが騙されて潔く去ったのは意外だったけど」
もしかすると生徒会長あたりに《精霊使い》のことは彼らに知らされていたのかもしれない。
シラヌイ君は訊ねた。
「もしも精霊が嘘だと気付かれたらどうしたんですか？」
「事前にリングでアギ達に連絡しておいたからね。逃げたふりして挟み撃ち。それから一網打尽かな」
「……はぁ」
シラヌイ君は編入生達と対峙してからずっと緊張していたので一気に脱力した。
「僕はやられる覚悟もしてたのに」
「あのくらいの喧嘩でそんなんじゃこの先学園でやっていけないよ。ところで」

ユーマは先程の事を思いだして訊ねてみる。

「さっき言ってたけどシラヌイ君の刀ってもしかしてエイヴんが打ったものなの？　それにトウコウの国って？」

「それは」

「シラヌイ」

質問に答えようとしたシラヌイ君をエイヴンが止める。

「何か冷やす物を持ってきてくれ。喋るのも痛い」

「は、はい」

エイヴンの頬は殴られてぶっくりと腫れていてる。見るからに痛々しい。

「でも王子」

「話はあとでいいよ。　エイヴんは俺が見ておくから」

エイヴンの意図を察してシラヌイ君を促すユーマ。

「それとも皆で救護室に行く？　セレス先生の湿布はよく効くよ」

「私はしばらく動きたくない」

「だとさ」

「……わかりました」

不審に思いながらもシラヌイ君は氷かなにかを探しに走って行った。

「行ったよ」

「ああ」

改めてユーマはエイヴンを見た。彼の軽薄で臆病な雰囲気が一転して引き締まったものに変わっているのがわかる。

「これで話せる？」

「なんのことだ」

とぼけられた。本当に何もなかったかもしれない。

「じゃあいいや。聞かない」

「そうしてくれ。私は学園で馬鹿らしく遊びたいだけだ」

「……」

「もっとも、馬鹿で落ちこぼれであることは間違いないが」

エイヴンは自嘲して笑う。腫れた頬が痛いのか笑顔が歪んでいた。

「私は剣も魔術も使えない技術士くずれの《鍛冶師》。それも未だなまくらしか打てない《銀匠》の息子だからな」

「その年で刀を打てるのに？　シラヌイ君はエイヴんの刀を褒めていたよ」

学園の生徒で武器職人といえば見習いしかいない。彼の刀を見る限りエイヴンは職人としては天才ではなかろうかとユーマは思いもする。

ティムスでさえ武具を強化でなく作るとなると、既存品の《複製》しかできないのだ。

「シラヌイのあれもただのなまくらだ。そこらの武具店のものがよ

ほど切れる」
「でも」
「あの刀は毎日《気刃》を砥いでおかないとシラヌイの腕についていけず折れてしまう」
「きば？」
「知らないだろうな。ブースターが主流となる今では廃れてしまった、古臭い職人の技さ」

馬鹿にしたようにエイヴンは言う。でもユーマには自慢にも誇っているようにも感じた。

《気刃》とは剣や刀のような鋼の刃に宿る魂のようなもの。古い文献では鍛冶師が刀剣に叩き込み、剣士が振るうことで刻む魂そのもの、『刃金の魂』と記されている。

エイヴンの故郷である《凍坑の国》の鍛冶師達はその魂を砥ぐことができるのだ。凍坑の鍛冶師は昔から刀剣の心身を鍛え上げる刀匠として有名だった。

彼らの技はゲンソウ術のなかでも古いもので、職人によって研ぎ澄まされた魂は刀身に影響を及ぼして切れ味と強度を飛躍的に上昇させる。

ユーマは知らないがエイヴンのいう『古臭い技術』とは彼の国にしかないものだ。初代の《銀匠》であるコロデは４００年前の勇者の１人である《刀》を極限まで鍛え上げたという逸話もある。

ところがエイヴンはその刀匠達の王である《銀匠》の息子でいながら、故郷では落ちこぼれだといわれていた。彼は《気刃》を砥ぐ

こととしかできなかったからだ。刀を打つ技量は並以下だった。

エイヴンが物心ついた時から学んだ鍛冶師の技術は上達の兆しが見えず、彼はこの年で自分の才能に見切りをつけていたのだ。

修行としてエイヴンの従者をしているシラヌイ君の推薦に乗じてエイヴンは自分の修行から逃げた。

彼は逃げた自覚があるから誰よりも自分を卑下して馬鹿を演じる。自分を誇ることができないから。

しかし彼の身に付けた《気刃》を砥ぐその技の価値を知る人がどれだけいるだろうか。

鍛冶師としては最低でも、砥ぎ師としてならば彼は世界でも通用するのに。

ユーマは訊ねた。

「あの時さ、馬鹿にされて悔しかった？」

「そんなことはない。あのくらいなら言わせておけばいい」

「本当に？　自分の国の事も？」

「……」

エイヴンは答えない。

自分は未熟だから馬鹿にされて当然。しかしいくら片田舎の小国

でも故郷の職人は世界に誇れるものだ。エイヴンはそう思っている。

エイヴンは何も知らない人間に故郷を馬鹿にされて何も言わなかったわけじゃない。ただ殴られて終わってしまった。

ユーマには何も言わないエイヴンだが、ただ固く握り締めた拳は何も言わずとも彼の悔しさを伝えている。

「……よし。見返そう」

「ユーマ？」

それでユーマは決めた。思い付きをエイヴンに提案する。

「明日の運動会でさ、エイヴんはあいつらを差し置いて大活躍しよう」

「無茶を言わないでくれ」

エイヴンの個人ランクは戦士、技術士、魔術師、どのクラスでもランクE。普通科の生徒と混じっても並以下の能力でしかない。無理がある。

「大丈夫。エイヴんでも活躍できる種目が1つあるんだ。俺が協力する」

その種目とは騎馬戦だ。ユーマが考案したこの種目ならばエイヴンにもチャンスがあるはず。

ないなら策を巡らせて見せ場を作ればいいだけだ。

「しかし」

「チャンスだよ。全校生徒の前でチームの勝利に貢献すればエイヴんだって一躍有名人！　女の子にだってもてること間違いなしさ」
「だが」
「ノリが悪いな。だったらあとで知り合いの女の子を1人紹介するよ。多分エイヴンを気に入ってくれる」
「乗った！」

エイヴンはやはり馬鹿だった。あと調子に乗るのが早い。

「いつの時代も英雄はもてる。そうだな？」
「そうだね。シラヌイ君が戻ったら作戦を立てよう。エイヴんのチームはどこ？」
「東軍だ。シラヌイもいる」

本当ならユーマは東軍ではなかったが、謹慎中で運動会出場禁止の今となってはもうどこでもいい。

「問題あるか？」
「いいや。どのチームでも戦力はあまり変わらないよ。むしろ東軍の大将は融通が効くし」

参加するなら彼、ブソウの所がいいとユーマも思っていたところだ。

「よし。俺達で東軍を勝たせよう」
「おお」
「声が小さい！」
「おおー！」
「もっと！」

空に向けて拳を突き出して叫ぶ。

「天下獲るぞ！」

「おお！　いいなそれ」

エイヴンもユーマを真似してみる。

「目指すは学園最強、クルスさんの首！」

「それはいくらなんでも」

ユーマも言ってみて無理があったと思った。

「……うん。俺も無理。でもルールがあるしあの人用の対策も一応あるんだ。だからやろう、エイヴん」

「お、おぅ」

エイヴンは怖じ気づいた。

このあとシラヌイ君を交えて打ち合わせをするユーマ達。

事情が呑み込めないまま会議に参加するシラヌイ君は、作戦を熱弁するユーマとそれを聞き入るエイヴンの2人に「《精霊使い》はどうしたんですか？」と言えずにいた。

この日はこれで終了。ユーマの狙い通りだ。

戦の前（前書き）

運動会、そのお昼までのこと

戦の前

＋＋＋

リーズ学園の運動会は公開授業を兼ねたレクリエーション大会。戦士や魔術師のような戦闘系、技術士その他一般生徒の非戦闘系を問わず生徒は競技に参加しなければならない。

学園の生徒総数は約3千人。なので競技はすべて１００人単位で行う団体戦だ。

競技の種目はユーマが知っているようで知らないものが多い。

例えば玉入れ。玉を籠に投げ入れるのではなかった。

１００メートル程の縦長いフィールドを2つに分け、相手陣地の後方に備え付けられたサッカーのゴールポストを大きくしたような枠内に玉を投げ入れるのだ。

チームのポイントを稼ぐには自陣から玉を持って相手陣地へ侵攻しなければならない。相手の妨害で玉を投げつけられるので中々過酷な玉入れだ。

２００人もの生徒が相手陣地へ投げ合う様子はどちらかというと雪合戦に似ている。

「弾幕を張って侵攻を防いで」
「遠距離投擲はまったく入んないよ」
「近くにバリケード作られたぞ！」
「破壊するわ。人に向けなければ攻撃術式は使っていいよね？」
「駄目に決まってるだろ。玉を防ぐのに使え」

競技でゲンソウ術の使用は許可されている。勿論制限付きでだが。

生徒が額に巻いているハチマキ。これは術式を使い一定の威力や使用時間を超えると切れるようになっている。ハチマキが切れた生徒はその競技で失格となるのだ。

中級以上の大技だと1回使えるかどうか。使いどころが見極められる。

現在玉入れので対戦しているのは西軍対東軍。優勢は西軍。

「西軍の攻撃、人数が多くないか？」
「もしかして全員攻撃？　まだ時間があるわよ」
「違う！　戻ってきた攻撃班によると向こうに《盾》がいるらしいぞ。こっちの投げる玉はあいつにことごとく防がれてる」
「なんだって」

青いバンダナの代わりに青いハチマキを巻いたアギ。彼はゴールキーパーよろしく1人で自陣の枠に入る玉を防いでいた。

「さあ、どっからでもきやがれだ」

術式の使用を制限されてさすがに全部を防ぐことは無理だったが、玉が一度に飛んでくるここぞという時に《盾》を枠いっぱいに広げて大量失点を防ぐのだ。

攻撃の応酬となるこの玉入れで失点を抑えるアギの奮戦は点を取る誰よりもチームに貢献している。

「っ、しまった。アギ！　大玉がそっちいったぞ」

アギに向かってくるのは直系3メートル程の大きな玉。相手チームが一発逆転を狙って転がしながら突進してくる。

玉入れのルールではこの大玉は1回の競技で1度しか使えない。しかし枠に入れると１００点分の価値がある。

普通大玉突撃は１０人以上束になり、身体を張って進路を防ぐのがセオリーだが、アギのチームは全員攻撃を行っているので守備に誰も残っていない。

「ちょっと待て。あれ俺一人で防ぐのかよ！？」

しかも相手チームは大玉を転がす味方を援護するためにアギに向かって玉を投げてくる。

集中砲火を浴び、堪らずアギは《盾》で自分の身を守るのだが、

「げ」

《盾》の連続使用の結果、アギのハチマキが切れた。これ以上《盾》を使うと反則で大幅減点だ。

大玉はもうアギの目前。反則してでも身を守るかと逡巡したところでもう遅い。

「ちょっとまっ、ぶっ！！」

アギは大玉に押し潰された。大玉をアギごとを押し込んで東軍の逆転、と思ったところ、直前で1人の少女が大玉に立ち塞がる。

「間にあった！」

自軍のピンチに最前線から全速力で戻ってきたのは《旋風の剣士》ことエイリーク。彼女は両足に竜巻を纏わせると軸足の竜巻を利用して全身を回転。

遠心力をフルに使って《竜巻きっく》を大玉に叩きこむ。

「いっけぇえええええ」

ハイパートルネードシュート！！（これを見たユーマが命名）

エイリークは勢いの乗った大玉を蹴り飛ばし、はるか遠くにある

相手陣地の枠内にブチ込んだ。

「なんだよ、それ……」

敵味方どちらも呆然。

「今よ！　こっちの大玉も転がして」

「は、はい」

エイリークの1撃で陣形も勢いも粉砕された東軍はこのあと西軍に大玉を簡単に入れられて一気に２００点の差をつけられる。

西軍の圧倒的勝利だった。

＋＋＋

エイリークとアギの出る玉入れを観戦していたユーマ。隣にいるのはシラヌイ君。

「シラヌイ君。どう？」

「東軍の大玉を転がしていた2人とアギさんに集中砲火の指揮を執った人。この3人が編入生です」

「そっか」

応援の傍らでユーマは《会長派》の編入生達をチェックしている。シラヌイ君は先日の一件もあって、ユーマが協力を頼むと快く引き受けてくれたのだった。

ちなみにエイヴンは昨日ユーマによる秘密特訓の疲れで爆睡中。騎馬戦までは寝かせておくつもりだ。

「西軍で大玉を転がしてたのも編入生でしたけど、あの2人の活躍に比べると霞んでしまいますね」

「そうだね」

編入生達は今のところ不正をしている様子はないが、遠くから様子を見ているだけなので実際はよくわからない。

所々ポイントは抑えているようで競技の幾つかは目に見える活躍もしている。

「《会長派》の暗躍なんて思いすごしかな？　それにしても」

ユーマは玉入れのフィールドにいるエイリークを見た。

「姉さまー！　勝ったわよ。見てるー？」

エイリークは応援席にいるエイルシアに向けて大きく手を振っている。満面の笑顔。

「エイリークは身体強化使えないのにあのパワーとスピードは何だ？　あんな遠くまで大玉蹴り飛ばすし１００メートルなんて１０秒切らなかった？」

「これが《旋風の剣士》なんですね」

皇帝竜事件以降エイリークの成長が著しいことはユーマも気付い

ていたが、いくらエイルシアが見に来ているとはいえこれは張り切り過ぎではないか。

「……もしやシスコンパワー？」

「ユーマ君？」

「いや、何でもないよ。次の競技を確認してみよう」

でもパンチやキックで何でも吹き飛ばせるのだから彼女はもう《旋風の拳士》でいいんじゃないかとユーマは思う。

＋＋＋

午前の競技終了。昼食はみんなで食べると約束していたのでエイヴンを迎えに行くというシラヌイ君と別れ、エイリークと合流する。

そのエイリーク。なんだか不機嫌だ。

「どうした？」

「さっきの玉入れ。アタシが相手チームの大玉を蹴って得点したでしょ。なのにその得点アギが入れたことになってるのよ」

エイリークはあの時、大玉に押し潰されたアギごと蹴り飛ばしたらしい。

大玉を掴んだままのアギが最後に触れていたというわけで、審判は彼が得点したことにしたそうだ。

「そのアギは？」

「吹っ飛ばした」
「八つ当たりかよ」

ご愁傷様。ユーマはここにいない親友に手を合わせる。

「アタシだって入賞狙っているのよ。上位入賞者の特典と賞金は欲しいんだから」

運動会は生徒のモチベーションを上げる為、競技毎に参加賞や個人賞が送られ豪華景品が用意されている。

アギは先程玉入れの個人賞として学園内にある武具店の５０％割引券を貰ったのだ。実はエイリークはこれが欲しかった。

「へぇ。賞金っていくらだっけ」
「最優秀で５００万。これだけあれば新しい剣がオーダーできるのよ」
「剣か。エイリーク、それなんだけど」
「ほらいくわよ。姉さまやアイリィを待たせてるんだから」
「ちょっと待って」

ユーマはエイヴンの事をエイリークに話そうとしたが、他にもすることがあってあと回しになった。

＋＋＋
戦の前
＋＋＋

昼食に集まったのはエイリーク、エイルシア、アイリーン、ミサ、ポピラ、リュガの6人。

ユーマはいない。「用事があるから先に食べてて」とエイリークに伝えてどこかへ行ってしまった。

「アギとティムスがいないわね」

「アギの奴は砂漠の民の奴らと集まって食うんだとさ」

「兄は夜が遅かったのでまだ寝てます。騎馬戦までにはちゃんと起きるそうです」

リュガは男1人になって居心地が悪そうだ。

彼はどこかで女の子に囲まれているであろうジンの気持ちが少しわかった気がした。

「リィちゃん。ユーマさんはどうしたの？」

「アイツ用事があるらしいわ。姉さま」

「そう。……お弁当くらい一緒に食べたかったんですけど」

運動会をずっと1人で（精霊のカレハはいるが）観戦していたエイルシアは少し寂しそう。

エイリークはそれでまた不機嫌になる。

「アイツなんてほっといていいのよ。それより早く食べましょ」

皆で食べれるようにと用意した重箱を広げ、食事を楽しむ。

お弁当はエイルシアやミサ、ポピラといった料理ができる面々で用意したものだ。

「ミサさん。この卵焼きならあなたに負けません」

「あ、あのうポピラちゃん？」

色々あってミサをライバル視しているポピラ。ミサはたじたじ。

「今日もおいしーですねー」

「はい。お姉様」

これは精霊の風葉とカレハ。

精霊たちはミサのクッキーを頬張っている。砂更もいてクッキーを粉状にして啜っている。

「今日は４枚いけそうですー」

「お腹壊さないよう気をつけてくださいね」

エイリークやポピラに預けられている風葉。クッキーがたくさん食べることができてユーマといない今の方が幸せそう。

「姉さまの料理なんて久しぶり。アイリィもでしょ？」

「ええ」

アイリーンも風森の国で過ごした日々を思い出して顔をほころばせる。

「本当にあの頃が懐かしいです」

「よかったわ。遠慮しないで食べて」

「はい」

アイリーンはエイルシアに勧められておにぎりに手を伸ばす。

おにぎりの中身は『おかか』。最近どこかで食べたような味だったのでアイリーンは不思議に思う。

「それにしても姉さまの料理、随分変わったわね。……これ、ユーマのやつ？」

「そうよ。前に教えてもらったの」

エイルシアが作ったのは鳥の照り焼きに炒めた野菜をパリッとした皮で包んだ春巻き。魚の唐揚げにはタレが絡めてある。南蛮漬けというやつだ。

その味にエイリークは覚えがあった。

「ユーマさんの料理は簡単で珍しいものばかり。最初はパスタをお醤油で炒めるなんてしていたから驚いたわ」

ユーマが風森の国にいた頃、彼の珍しい料理に負けた気がして複雑だったエイルシア。

彼女は妹同様、割と負けず嫌いだったのでユーマの料理に対抗すべく特訓を重ねていた。

ある時はユーマの味を真似て、またある時は風森の料理人に学び……

そして味見に付き合わされて毎日お腹いっぱいのラヴニカ。

「今の私なら……ユーマさんにも負けません」

「姉さま……」

またユーマか、とエイリークは忌々しく思う。アイリーンも微妙な顔。

彼女はこのおにぎりの『おかか』は以前ユーマから教わったものと同じものだと気付いた。

アイリーンはエイルシアに訊いてみた。

「彼は風森では召使いだと聞きましたけど、本当は料理人か何かだったのですか？」

「いいえ。ユーマさんがお料理ができるのはお姉さんに教わったらしいです」

「姉？」

「小さな頃からお兄さんの『おやつ係』だったそうですよ」

「おやつ？」

正確には『はらぺこ狼の餌やり係』が御剣家におけるユーマの役職。

「よくわかりませんね」

何かを知っているような笑顔を2人に向けるエイルシア。

（……アイツはなんなのよ）

（シア様はあの人の何を知っているのでしょうか？）

まったくわけのわからない2人は何とも言えない顔をした。

＋＋＋

「まだ残ってる？」

ユーマ登場。

「大丈夫ですよ。はい、ユーマさん」

「ありがとうシアさん」

取り皿をエイルシアから受け取り、空いていたリュガの隣に座る。

ユーマはさりげなくエイルシアが隣を空けていたことに気付いていない。

ちょっとがっくりした姉の表情をみてエイリークはイライラ。

「遅いわ。どこ行ってたのよ」
「騎馬戦の事でね。ちょっとブソウさんに相談を……お。シアさんこれ前に教えた漬けダレ？」

喋りながら唐揚げと照り焼きに手を伸ばすユーマ。

「そうです。どうですか？」
「うん完璧。このタレ肉にも魚にも合うから使い勝手いいでしょ？」
「いいから話の続きをしなさい」

嬉しそうな姉の表情をみてエイリークはまたイライラ。

「俺も腹減ってるんだけど」
「うるさい。それで騎馬戦がどうしたのよ。アンタ謹慎中で競技に参加できないでしょ」
「まあね。だから頼んだのは別の事」
「お前、騎馬戦出ないのか？」

リュガが訊ねた。ユーマは皇帝竜事件の事もあって皆には事情を話すことにする。

「編入生のことで気になることがあるから俺は自由に動けた方がいいんだ」
「《会長派》か」

編入生と聞いてリュガはヒュウナーとのやりとりを思い出す。

昨日、リュガとアギはユーマに頼まれて警備員の仕事のついでにエイヴンを囲んでいた編入生達を調べようとしたのだ。

元々ユーマの通報でその編入生達は暴行の容疑がある。何人か捕まえて取り調べをしようとしたところ、邪魔してきたのは旧知の間柄でエースである《鳥人》、ヒュウナー。

彼は一応《会長派》のエースだ。聞くと編入生達は今度編成するヒュウナーの騎士団に組み込む予定らしい。

「ヒュウ。お前たち《会長派》は何をする気だ？」
「学園を統一して学園都市を制覇する、やったらどうする？」
「現実的じゃねぇ」
「せやな。でも必要なんや。いつか学園（ここ）でワイらが結束しても勝てん奴らと戦うかもしれんから」
「なんだよ、それ」
「こいつらもその時に備える布石のひとつらしいで。会長さんによると」

ヒュウナーはエースになって生徒会長の秘密を知ってしまった。迂闊に話せない内容だ。

それ以上彼は何も言わず、捕まった編入生を解放すると飛び去ってしまった。

あの時、ヒュウナーの言う事情がわからなくて悪友と溝ができてしまった気がしたリュガ。

思い出して苦い気持ちになる。

「……それで午前中姿をみせなかったのか？」

「うん。いまのところ大したことなくて報道部の部長さんと相談したんだけど、残りの競技ででかいのを仕掛けられそうなのはあと騎馬戦くらいなんだ」

「まあ今年の種目の中じゃあれが1番大規模だからな。でも参加できなくていいのか？　お前が1番楽しみにしていただろ？」

「代わりといってなんだけど、ブソウさんにエイヴんを東軍の小隊長へ推薦してきた」

「はあ？」

「彼をですか？」

エイヴンを知るリュガとアイリーンは驚く。

「なんであの野郎を」

「エイヴんがナンパ野郎なのは色々と燻ってるからだよ。更生も兼ねてちょっと発散させようと思って」

今回の騎馬戦でエイヴンを活躍させることはユーマの目標の1つだ。

「だがあいつ自身はお供に比べると大したことないぞ」

「騎馬戦は団体戦。最初から力だけで勝てるような競技に俺はしてない」

と騎馬戦の考案者。

「エイヴんには一晩で俺が使える策を可能な限り詰め込ませた。仕込みも十分」
「何？」
「今日の騎馬戦においてエイヴんは俺の代理なんだ。甘く見ない方がいいよ」
「……いいじゃねぇか」
リュガは面白そうに笑う。
「ならあいつと勝負してやるよ。あの馬鹿もアギも俺が討ちとってやる」
「いいよ。エイヴんが帰り討ちにするさ」
ユーマとリュガはお互いしばらく睨みあっていたが、同時に表情を崩して笑い、拳を突き合わせる。
リュガは勢いでそのままどこかへ行ってしまった。ユーマもどこか満足気な顔をしている。
「……なんなのよアイツら？」
「えーと」
「男の子なんですよ」
「いえ。あれは馬鹿というんです」
ポピラが1番酷かった。
「エイヴンって誰よ？」

「弟子。後で紹介するよ。あいつはエイリークに会わせたかったんだ」
「はぁ？　一体なんで」
エイリークは不審に思う。実はユーマは昨晩エイヴンが《気刃》を砥ぐところを見せてもらった。
剣の性能を飛躍させるエイヴンのあの技は剣士であるエイリークの役に立つとユーマは思ったのだ。
「彼は弟子なんですか？」
「今回においてはね」
一方でアイリーンはまた呆れた。昨日はユーマの方が従者？　だったはず。いつの間にか主従関係が逆転している。
アイリーンの場合、元々エイヴンは彼女の悪戯でユーマに難題をつけて押し付けたはずなのに。
「ユーマさん。あのあとエイヴンさんとは一体何を？」
「あのあと？」
「ほら。エイヴンさんが《精霊使い》を捜してくるという」
エイヴンにユーマの正体に気付かれたらアイリーンが彼と付き合うというあれ。
「ああ。俺の事は多分ばれてないよ。今はエイヴん騎馬戦に集中してるし」
「それだけですか？」
「ん？　他に何が」

あっさりと素っ気ない反応。アイリーンは面白くない。

「アイリさん。エイヴんは普段あんなで誤解されがちだけど本当はすごい奴だよ。昨日シラヌイ君の刀を研ぐところ見せてもらったんだけど……」

「もういいです」

「アイリさん？」

ユーマにどうでもいいエイヴンのことを弁護されて不愉快になった。自分の事はどうもないがしろにされてる気がする。

出番も少ないし。

アイリーンは立ち上がり、若干の怒りを込めてユーマを見下ろした。

「ユーマさん。貴方は元々北軍でしたのに同じチームの私の応援もしてくれないのですね」

「えっ？」

「いいでしょう。騎馬戦では貴方の弟子というエイヴンさんは私が倒します。覚悟して下さい」

そしてアイリーンもどこかへ行ってしまった。

これでエイヴンは少なくとも2人から狙われることになった。ユーマは呆然とアイリーンを見送る。

「アイリさん？」
「アンタは一体何してたのよ」
「馬鹿ですね」
「うん。そうだね」

エイリーク、ポピラ、ミサとユーマは残った女性陣に非難の集中砲火を食らう。

「な、なんだよ。みんなして」
「ユーマさん。いいですか？」

とどめはエイルシア。

「事情はよくわかりませんが、アイリィちゃんが拗ねるのは当然なんです。男の子ばかりじゃなくて女の子もちゃんと構ってあげないといけません」
「シアさん……」

一体なんですかその理屈、とユーマ。

そして1番不機嫌そうなのは彼女であって、ユーマはお弁当を取り上げるのだけは勘弁してほしかった。

＋＋＋

騎馬戦　―編成フェイズ―（前書き）

騎馬戦におけるルールと各チームの紹介

騎馬戦　―編成フェイズ―

＋＋＋

報道部特設、屋外実況席より。

「遂にはじまります、運動会のメインイベント。全生徒強制参加の《Ａナンバー杯》。総合実況はもちろん、報道部の部長であるこのボクだぁぁぁぁぁぁ！！」

「……はぁ」

解説はポピラ・エルドがお送りします。

＋＋＋

騎馬戦　―編成フェイズ―

＋＋＋

まずはじめにポピラは疑問を口にした。

「なぜ報道部でもない私は実況席（ここ）にいるのでしょうか？」

「ポピちゃんはこの競技の責任者の１人でルールに詳しいからだよ」

エルド君にはちゃんと解説役の依頼してるよ、と部長。

「解説も2回目だから別にいいじゃない。続いて特別ゲストも呼んじゃいましょう。こちらに来てお名前をどうぞ！」

部長に呼ばれたのは風森の姉姫様とお付きの精霊たち。

「こんにちは。エイルシア・ウインディです」

「カレハと申します」

「かぜはー、ですよー」

騎士服で男装の王女様に湧き上がる歓声。

部長がエイルシアを紹介する。

「彼女は何と《旋風の剣士》のお姉さん。そしてこの学園にいるあの《精霊使い》のご主人さまです！」

「ええっ？」

ざわめく生徒たちよりも1番に驚くエイルシア。

「ちょっとまってください」

「え？　確か彼はエイルシアさんの国で召使いをしていたそうじゃないですか？　間違いないですよね」

「それは……そうなんですけど。その言い方はちょっと」

エイルシアの非難に構わず部長は勢いに乗って取材モードに突入。

「ところでエイルシアさん。一昨日は色々と目撃情報があるんですけど、彼との学園デートはどうでしたか？　やっぱりその格好は妹さんに対抗してですか？」

「あ、あのっ」

衆人の前でとんでもないことを訊かれて慌てふためくエイルシア。

顔を赤くして恥じ入る仕草を見せれば、生徒たちから《精霊使い》、すなわちユーマに向けてブーイングの嵐が飛ぶ。

リュガとかヒュウナーとかエイヴンとかが特に。

エイリークなんか怒り狂い、実況席に突撃しようところをアギが必死に抑え込んでいる。

騒ぎ立てる観衆に悪ノリが過ぎた部長。

「それとも……ひゃっ！？」

そこに風の刃が飛んできて彼女の頬を掠めた。それから激しい突風が吹いて周囲を黙らせる。

部長を睨みつけるのはエイルシアの精霊。

「そこまでです。これ以上エイルシア様を辱めるならば排除します」

容赦しません、とカレハ。殺気が出ている。

思わず部長は冷や汗。そんな彼女に風葉はふよふよーと近寄って耳打ち。

「あまりふざけるとー、ブソっちにいろいろバラすそうですよー」

《交信》によるユーマの伝言だった。

加えて「ブソウさんに女の子紹介しまくって彼女作らせてやる！」と言っている。

「……。そんなことより今は運動会！　仕事、仕事だよ」

部長は屈した。エイルシアに迂闊に絡んではいけないと理解した。

「さぁポピちゃん。各チームがスタート地点に移動してる間に競技の説明をよろしく！」

「馬鹿ですね」

そう言いながらも風葉が来てくれたので気をよくしたポピラ。騎馬戦のルール説明を行った。

＋＋＋

この騎馬戦は旗取り合戦。大まかなルールとして最後まで自軍の大将旗を守り抜いたチームが勝者となる。

各チームは学園にある４つの拠点から自軍の部隊を進軍。敵チームの妨害をはねのけながら主戦場を目指し、決戦の舞台で旗を取り

争うのだ。

「騎馬戦は主に３つの局面（フェイズ）に分けられます。編成、進軍、決戦の各フェイズです」

編成フェイズはその名の通り自軍の部隊編成。

大将以下チーム内の役割を決めるもので、このフェイズは競技開始前に終わっている。違反がないかもチェック済み。

全校生徒約３千人が参加する騎馬戦は東西南北の４チームに別れるので１チームあたり約７５０人。

内訳はどのチームも戦士系１５０、魔術師系１５０、技術士系１５０、一般生徒３００。彼らをどの役割にどう配置するかでチームの運用が大きく変わるのだ。

編成する部隊の役割（ユニット）は４つある。

まず主力となる『騎兵』。ルール上、旗を取れるのはこのユニットだけなので騎兵の全滅はチームの敗北に直結する。どのユニットにも攻撃が可能。

騎兵は脚のない馬の像（１体約６０キロ）を４人で担いだ騎馬に乗る。５人１組で１ユニット。馬に乗る騎兵が地面に足をつけると失格となる。

馬の脚となる生徒は他のユニットと交代が可能。騎兵の交代は認められない。

次に『工作兵』。進軍フェイズのみ参加できる相手チームの妨害担当。工作兵は騎兵に攻撃ができる。

騎馬戦では工作兵が敵チームの騎兵をどれだけ減らせるかがポイントの1つとなる。

間接攻撃が可能な魔術師系の生徒が主力となるだろうが、一般生徒にも《エルドカンパニー》の用意した妨害アイテムが支給される。

工作兵とは逆に『防衛兵』は自軍の騎兵を守るユニット。決戦フェイズにも参加できるが、騎兵への攻撃は一切禁止されている。

騎兵を進攻を妨げる障害物を取り除くのも防衛兵の役割。技術士系の生徒の出番だ。

最後は『偵察兵』。扱いは防衛兵に近いがどのユニットにも攻撃できない。PCリングの使用が許可されている特殊ユニット。

相手の出方を探り、速やかな作戦展開を行うにはPCリングの通話機能は必須となるだろう。

また、チームの大将、副将は騎兵とする。将を2人とも失ったチ

ームは敗北となる。

「本戦の決戦フェイズでメインとなるのは騎兵です。進軍フェイズの妨害で自軍の騎兵をなるべく減らさないことが重要となります」
「騎兵はやっぱり丈夫な戦士系の生徒だけで組むのが1番かな？」

部長の質問は補足説明を入れるため。ポピラは質問に答えた。

「馬まで戦士系で組みますと1チーム最大３０騎ですが、他のユニットを無視して上を戦士系、下４人を他で組むと騎兵は最大で１５０騎できたりします。他ユニットとの兼ね合いが大事です」
「なるほど。工作兵は決戦フェイズに参加できないから相手チームの妨害にどれだけ人数を割くのかもポイントになるね」
「各進軍ルートや主戦場には罠や騎兵が進めないような障害物があります。進軍フェイズでは偵察兵が事前にルートを調べれば騎兵の安全を確保できるでしょうし、防衛兵が対処しなければ進めない場合もあります」
「どのユニットも必要なんだね。つまり競技前の準備から騎馬戦の勝負ははじまっていたんだ」
「そうですね。なので騎馬戦では準備も他のフェイズと同じように編成フェイズと区分けするそうです」
「それじゃあ開戦前に各チームの編成を確認してみよう」

＋＋＋

部長は各地チームが提出した編成表を取り出した。

「まずは優勝候補の南軍。大将は学園最強の《剣闘士》、クルス・リンド！　副将には《黒鉄》、マーク・K・フィーとなんと学園の誇るツートップが並び立ちます！　もうこの2人が組むだけで南軍の勝ちは決まりでしょう」
「そうとは限りません」
「おや、ポピちゃん。それはどうしてかな？」
「実は、エースのチーム分けで大将副将を決める際、この2人の組み合わせになったのはリンドさんの暴走を抑えるのにマークさんが適任だったからです。あの人に本気出されると競技が成り立ちません」
「ああ。彼は抑え役なんだね」

＋＋＋

その頃の南軍拠点。

クルスは檻の中にいた。

「おい、マーク」
「どうしたんだい？　僕らの大将」
「この扱いはなんだ？」
「あはは」
「笑うな」

目が覚めたらもうこの囚人状態。

すべてマークの仕業だ。クルスの昼食に睡眠薬をこっそり混ぜて

眠らせ、《黒鋼術》の檻に閉じ込めたのだ。

「この手の競技で君が見境なくなるのは目に見えてるんだ。専用の馬を僕が用意したからこれで頑張ってね」

「どうやって戦うんだよ」

クルスの入った檻は屈強な戦士系の生徒が担いでいる。馬というよりも籠だった。

＋＋＋

「というわけでリンドさんは檻の中、鋼鉄の手枷をつけたままの参戦です。戦力になるのでしょうか？」

「でもここにはエースがもう1人報道部の誇る変態、《霧影》のミスト君がいるからね。報道部仕込みの情報戦も南軍の強みだよ」

「マークさんの率いる騎士団、《黒耀騎士団》の魔術師部隊もいますね」

南軍の編成は騎兵が４チーム中最も少なく精鋭で固めている。

代わりに支援役のユニットが充実しており偵察兵が４チーム中最も多いのが特徴といえる。

＋＋＋

南軍　ユニット配分

騎　４０（２００）

工１５０
防２００
偵２００

主力メンバー：クルス（ハンデ付）、マーク（黒耀騎士団）、ミスト（報道部隠密部隊）、リュガ、ユンカ、セリカ

＋＋＋

「次は北軍。大将は《青騎士》、クオーツ・ロア。副将は《獣姫》、メリィベル・セルクスの２人。生徒会長の側近コンビ」
「いわゆる《会長派》の２人が中心のチームですね」
「北軍の主力はやはり《青騎士》が率いる《蒼玉騎士団》！　彼らを中心とした騎兵隊は注目だね」

＋＋＋

北軍拠点にて。

「この競技、騎兵である俺向きだ」
「メリィに続け！　ぶっ飛ばしていくぞぉ！」

メリィベルが檄を飛ばし、盛り上がる北軍。

「……」
「シルバルム。あなた大丈夫？」

「ディジーさん」

ディジーはアイリーンの様子に違和感を感じて声をかけた。

アイリーン自身は落ち着いているつもりだが、内から溢れる沸々としたものを抑えきれないでいる。

それはエイヴン（東軍）についたユーマに対する苛立ち。

自分のいるはずだったチーム（北軍）を応援しないなんて裏切り行為だと思っている。

（この競技でユーマさんを見返してあげます）

「私は大丈夫です。ディジーさん、勝ちにいきましょう。……東軍には絶対に負けません」

「え、ええ」

ディジーはアイリーンの迫力に押された。

＋＋＋

「北軍にはもう1人、エースの《精霊使い》がいるはずだったけど、今回彼は諸事情で騎馬戦には不参加。このアクシデントで北軍は部隊を今朝編成し直してるんだよね。これが吉となるか凶となるか」

「あの人とロアさんは集団戦の部隊運用の考え方が全く違います。セルクスさんもあんな人ですし、作戦の立案は大分揉めたそうです

よ」

再編成した北軍は４チーム中最大の騎兵部隊を編成。工作兵を置かず主力を充実させた。

騎士らしい正々堂々とした戦術が予想される。

「それがボクは気になっちゃうんだけどね」

部長は各チームに散らばった編入生の存在を危惧していた。

＋＋＋

北軍　ユニット配分

騎１００（５００）
工　０
防２００
偵　５０

主力メンバー：クオーツ（蒼玉騎士団）、メリィベル、アイリーン（公式応援団）、ディジー、ブロト、ユーマ？（出場禁止）

＋＋＋

「《青騎士》に対抗するのはやはり《赤騎士》である彼女。《烈火烈風》が率いる西軍だぁ！」

「西軍の大将はリアトリス・ロートさん。副将は《鳥人》、ヒュウナー・フライシュさんです」
「ボケねぇちゃんに鳥頭と《Ａナンバー》でも珍しい組み合わせ。大丈夫か？」
「あと西軍は《旋風の剣士》、エイリークさんとアギさんがいます」
「さらに突撃台風姫に青バンダナ！　本当に大丈夫か西軍！？」

＋＋＋

西軍の大将は、部長に言われるまでもなく問題児達に頭を抱えている。

「さあ、行くわよ！」
「……大玉と一緒に蹴り飛ばされた次は姫さんの馬かよ」
「うるさい。ちゃんと進みなさいよね」

アギは足蹴にされる。今日は蹴られてばかりだ。

エイリークの馬を担ぐアギを見て、ヒュウナーはげらげらと馬鹿笑い。

「尻に敷かれるどころか踏まれるたぁ……お似合いやで、アギ」
「ぐっ……ヒュウめ。飛ぶことしかできない阿呆鳥の癖に馬なんか乗りやがって」
「なんやて」
「アギ、ぶつぶつうるさい」

今度は騎馬戦用の武器として支給された棒で小突かれるアギ。な

んか惨めだ。

ヒュウナーは笑いすぎて馬から転げ落ちた。本番ならこれで西軍の副将はアウト。

「エイリーク達をメインで使う作戦を考えてはみたが……実際に彼女達を1ヶ所にまとめてみるとどうもな」

リアトリスはエイリークとヒュウナーの突破力と、アギの防御力を主軸に主力部隊を編成したものの、開戦直前で彼らが他のメンバーと上手く連携してくれるのか不安になった。

「特別ルールがどこまで有効に働くかどうかだな」

＋＋＋

「西軍はリアトリスさんの率いる《紅玉騎士団》をはじめ、女生徒が多いので4チームの中で1番特別ルールが活かせるはずです」

「確か騎兵1ユニットが女子5人で組まれている場合、担ぐ馬を重量が20キロの物と交換できるんだよね？」

「そうです。軽くなっても馬の強度は問題ありません。これで機動力のある騎兵を組むことができます」

「兵は神速を尊ぶ！　というわけだね」

西軍の編成はバランス重視。偏りがない分どのチームにも勝る点がない。

エイリーク達主力部隊が勝利の鍵を握る。

＋＋＋

西軍　ユニット配分

騎　６０（３００）
工１５０
防１８０
偵１２０

主力メンバー：リアトリス（紅玉騎士団）、ヒュウナー、エイリーク、アギ、ミサ、リン、ベルティナ

＋＋＋

「最後は東軍ですね。大将は自警部部長の《一騎当千》、ブソウ・ナギバ。副将は大図書館《塔》の守護者、《賢姫》のミヅル・カンナ」

「あと東軍のエースはもう1人、ポピちゃんの双子のお兄さんで《天才》のティムス・エルド君がいるね。ここは他のチームに比べると武闘派って感じはしないけど」

「そんな事はないです。自警部の精鋭もいますし、なによりミヅルさんの大太刀は怖いです」

「今回は棒だけど大丈夫かな？」

＋＋＋

ここは東軍拠点。異常事態発生。

東軍の精鋭たちが、謎の覆面司祭によって扇動されている。

「答えよ武人達。我等が神の名を」

「「ブソウ！　ブソウ！」」

「叫べ、神の戦士達！　学園に東軍大将の名を轟かせろ！！」

「「ブソウ！　ブソウ！」」

怒声と雄叫び。

自警部の部員を中心に戦士系の生徒たちが、それから戦士でなくても心は武人という漢たちが、声を張り上げる。

彼らは目覚めた。我は武人、戦人だと。

天下無双薙刃神教。以前にとある少年がでっちあげて報道部部長が悪戯に布教した、ブソウを武神と崇める謎の宗教だ。

遂に彼らが表舞台に立つ。

「「ブソウ！　ブソウ！」」

全く関係のない生徒たちも勢いとノリでブソウコールを連呼する。

この集まりの末席に加えられたシラヌイ君なんか武人の血が騒ぐのか、興奮しながら一緒に叫び、頬を紅潮させている。

「この戦、勝利して我等が神に武勲（ブソウさん）を捧げよ。勝つのは我等、東軍だ！！」

「「「オオーーッ！！」」」

東軍は開戦前から最高潮。

「さあ、ブソウさん。舞台は整いました。征きましょう」

「何もしないと言っただろうが」

「ぐぇ」

約束を反故にされたブソウは覆面野郎（ユーマ）を絞め上げた。

＋＋＋

「東軍の主力となるのは自警部の部員と兄をはじめとする技術士系の生徒ですね」

「そうだね。《エルドカンパニー》の用意した一般生徒用のアイテムやＰＣリングを使う点では開発者のいる東軍が有利。他のチーム

とは違う戦術が見られそうだね」

東軍は工作兵寄りの編成。進軍フェイズに仕掛ける模様。

防衛兵が少ないが、技術士系の精鋭と盾役の戦士系をこちらに配置しているようだ。

＋＋＋

東軍　ユニット配分

騎　５０（２５０）
工２５０
防１００
偵１５０

＋＋＋

主力メンバー：ブソウ（自警部）、ミヅル、ティムス（エルドカンパニー）、ジン、シラヌイ、エイヴン？

＋＋＋

「あとこれは追加情報。東軍も今日になって編成の変更をしてるんだよね」

「それはどんな風にですか？」

この情報は前もってユーマから聞いている2人。少しだけ芝居かかっている。

「1年生でもあの有名な《射抜く視線》のジン・オーバ君を騎兵から下ろして代わりの子を入れてるんだ」
「ジンさんをですか？　確かに弓使いの彼は他のユニットが向いていると思いますけど」

ジンが主役の騎兵じゃないと聞いて、女生徒達から東軍に向けてブーイングの嵐。

ユンカとかセリカとか、あとリンやベルティナも非難している。

「ジン君の代わりは今度学園に編入してきたエイヴン・コロデ君。しかも彼は小隊長とのこと。突然の抜擢に彼はこの騎馬戦の台風の目となるのか？　ボクも彼がどう動くのか気になってきたよ」
「そうですね」

とは言いつつも実況席の2人はもちろん知っている。本当の台風の目はエイヴンではないと。

「さあ、いよいよ騎馬戦の開幕。進軍フェイズのスタートだぁ！」

開戦の空砲が学園中に響きわたり、各チームが主戦場へ進軍を開始する。

一方、エイヴンに表舞台を譲った精霊を連れていない《精霊使い》。

ユーマの騎馬戦は舞台裏からはじまった。

＋＋＋

騎馬戦　―進軍フェイズ―　1（前書き）

生まれ変わるエイヴン

短くまとめたいけれど、どうも長くなりそうで……

騎馬戦　―進軍フェイズ―　1

＋＋＋

騎馬戦の進軍フェイズがはじまる少し前。

東軍のスタート地点である拠点では、小隊長となったエイヴンことコロデ訓練兵もまた出陣を時を待っていた。

そこに現れる彼の『教官』。エイヴンは慌てて姿勢を正す。

「教官！」

「楽にしろ。……たった1日で立派になったな」

なぜか覆面を被っている鬼教官の声はやさしい。エイヴンはそれだけで泣きそうになった。

訓練ではあんなに厳しく、人間扱いさえしてくれなかったのに。これで終わりだと思うと胸に来るものがある。

「もう教えることは何もない。ウジ虫以下のクソ野郎だった貴様も、今この時から少尉。立派な士官だ」

「でも、私はまだ」

「馬鹿野郎！」

教官はエイヴンの頬を殴る。結構本気。

「ぐはっ」

「自信を持て。俺はあの一晩で貴様にすべてを叩き込んだ。あとはお前の心次第だ」

「教官……」

「餞別だ」

教官は被っていた覆面を脱ぐとエイヴンに差し出す。

「これは？」

「《天下無双薙刃神教》、その司祭の証」

「！？」

エイヴンは驚いた。

この覆面、元は《グナント竜騎士団》の刺客として現れたイース達が被っていたもの。教官はこの覆面を被り先の皇帝竜事件の裏で暗躍し続けた。

《天下無双薙刃神教》を興してイース達を脅迫し、仲間たちをつけ狙う竜騎士団を捕まえては自警部に押し付けた。ディジーを説得したせいで《アイリーン公式応援団》の名誉部員になったりもした。

エースになってからも任務でしばしば着用しており、彼が碌でもないことをする時はいつもこの覆面と共にあった。

「これを被れば東軍の武人達も力を貸してくれるはず」

「こんな大事なもの」

「貴官は実績のないルーキーだ。使えるものは使え。俺の師（兄）

もそう言っていた」
「……ありがとうございます」
エイヴンは感涙して覆面を受け取り、被る。
……見るからに怪しい不審者ができあがった。
「どうでしょうか？」
「……」
覆面教官もといユーマは笑いを堪えた。
マズイ。妙なテンションから素に戻りそう。
「……よく似合うぞ」
「はっ。ありがとうございます」
エイヴンは敬礼。彼の場合、ノリではなく本気だった。
「集合！」
ユーマの号令で集まる5人の仲間たち。
彼らはエイヴンと同じ覆面を被っている。《エルドカンパニー》の社員たちだ。
「突然の招集に皆よく集まってくれた。……イース曹長！」
「はっ」
覆面野郎達のリーダーは前に出て敬礼。

「曹長はアルス伍長、サンスー伍長達と共にコロデ少尉の馬になってもらう。作戦上４人には相当な負担がかかるが……」
「問題ありません。勝つまで走り続けます」
「頼む。少尉を下から支えてやってくれ」
「「「はっ」」」

元竜騎士団である４人組は起用してくれたユーマに感謝の敬礼。

皇帝竜事件編が終わり、モブになりつつある彼らは返り咲く活躍の機会を待ち望んでいたのだ。

「次。ルックス少尉」
「はい！」
「……ルックス、返事が違う」
「は、はっ」

ぎこちなく敬礼する天使のような美少年もまた覆面を被っていた。

「少尉は偵察兵だ。隊の目となり耳となって状況を把握し、口となってコロデ少尉の声を東軍の皆に伝えてくれ」
「僕にできるでしょうか」
「ＰＣリングを使うことに関しては少尉の右に出る者はいない。……男を上げるんだろ？」
「！！　はっ」

ユーマの言葉でルックスは弱音を吐いた自分を恥じ入り、気合を入れ直した。

（そうだ。僕はこの騎馬戦で男であることをもっと主張するんだ。

女装させられるのも女の人に可愛がられるのももうまっぴらだ）

イース達もそうなのだが、存在を主張するにも覆面を被った時点で誰だかわからないのだけれど。

5人の他もう1人。最後はシラヌイ君。

「シラヌイ君軍曹。防衛兵だね」

「なぜ僕だけ君付け？」

メンバーの中で唯一覆面を被っていないシラヌイ君。彼の時だけユーマは素に戻った。

「何となく。駄目かな？」

「いえ、別にいいんですけど」

仲間はずれにされたみたいでちょっと不満そう。

「まあ、いいや。シラヌイ君はエイヴんを守る盾役なんだけど大盾使わなくて大丈夫？」

「刀使いの僕は盾は合わないんです。代わりに長物を使って薙ぎ払います」

シラヌイ君は大盾の代わりに長刀のように長い棒を手にしていた。

基本武器となる棒や盾の素材は《組合》の開発した新素材を採用したもの。ソフトな肌触りで軽く、芯があってもどこか柔らかい。

棒の中身は空洞。風船のように空気で膨らませる衝撃緩和材だと

いう。この棒は持ち手の空気調節器を使うことで槍のように伸ばすことや棍棒のように太くすることができる。

「そっか。機動力を重視するとそっちがいいかもね……さて」

ユーマは改めてエイヴンの方に向き直ると教官モードに戻る。

「コロデ少尉。以上が君に与えられる部下、いや仲間たちだ。彼らと共に戦い、東軍に勝利をもたらしてくれ」

「はっ」

ユーマに向けて全員が敬礼。ユーマもまた彼らに敬礼を返す。

1日限りの伝説となるミツルギ戦隊、コロデ小隊結成の瞬間。

「さあ行け。将軍（ブソウさん）が待ってる」

実際ブソウは裏でこそこそとするユーマ達を睨んでいた。冗談はここまでらしい。

「教官、お世話になりました。コロデ小隊、出撃します」

ユーマはエイヴン以下7人の男たちにすべてを託し、彼らを戦場へ送り出すのだった。

「頑張れエイヴん。……よし。俺も行くか」

そしてユーマはポケットからあらたな覆面を取り出して被った。

愛着があるらしい。

＋＋＋

騎馬戦－進軍フェイズ－

＋＋＋

騎馬戦の進軍フェイズ。ここでは各チームが学園の４方に指定された拠点から決戦フェイズの舞台となる主戦場に騎兵を移動させることが目的となる。

各チームの攻略目標で自軍の防衛対象である『大将旗』は主戦場の各本陣にある。

決戦フェイズは騎兵が１騎でも主戦場に入れば開始されるので、いち早く騎兵を主戦場へ進軍させれば防備を固められる前に旗を奪いに行ける。早期決着もあり得る。

ポイントとなるのは進軍ルートの選定と『工作兵』の配置。

工作兵は進軍フェイズでしか活躍できないが騎兵を攻撃できる。相手チームの足止めと騎兵の数を減らす役割を持つ工作兵を活かすことができれば、決戦フェイズの序盤から有利な展開に持ち込むこ

とができるのだ。

ところがスタート地点となる拠点は決められているが進軍フェイズの舞台は学園全域。どのチームも進軍ルートは無数にある。

工作兵で妨害、逆に敵の妨害をなるべく回避するにはお互いの進軍ルートの読み合う必要があるのだが。

「部隊を3つに分ける」

工作兵のいない北軍は進軍ルートだけを考えればよかった。

妨害は相手任せ。他の3チームで潰しあえというのが北軍。

「これだけの大部隊を1度に引き連れると流石に隊列が伸びすぎて奇襲が怖い。一網打尽の恐れがある。先行した偵察部隊によると安全と思われるルートは3つ。3方向から同時に進軍することにする」

大将であるクオーツは学園全域の地図を広げて各ルートを説明。

小隊長達に作戦を告げた。

「どの部隊も本命で囮だ。1部隊あたり騎兵は約30騎、北軍だけを集中して妨害でもしない限りすべての部隊を止めることはできないはず」

「よろしいですか」

質問するのは今回魔術師の騎兵部隊を率いるアイリーン。

「3部隊の内2部隊を大将、副将の先輩方が率いるとして残り1部隊の指揮は一体どなたが？」

「僕がやろう」

名乗り出るのは生徒会長。彼は一般生徒ながら騎兵だった。

「貴方が？」

「セイ。しかし」

「クオーツ。僕に任せてくれないか？　生徒会長として君やメリィがいなくてもできるところをアピールしておきたいんだけど」

生徒会長の脇を固めるのは《会長派》の生徒たち。他にもアイリーンの見知らぬ生徒たちがいる。

（編入生……）

おそらくそうだろう。アイリーンは編入生達が何か仕掛けるだろうとユーマが言っていたのを覚えていたがこれを無視する。

クオーツは生徒会長に答えた。

「わかりました。ただし決戦フェイズではメリィを護衛に付けます。いいですね？」

「ああ。わかった」

過保護な騎士に苦笑する生徒会長。

そんな彼らにアイリーンは「もう1つ」とユーマの話をする。

彼女は今回ばかりは本当に敵とみなしている。

「《精霊使い》。元北軍だった彼は今東軍に身を潜めていますけど」

「何？」

「こちらの考えは東軍に読まれているのでは？」

「問題ない。編成は今朝組み直したもので北軍でミツルギが立てていた作戦も把握している。その傾向もだ」

対策は立てることができると自信を持って答えるクオーツ。

「逆にミツルギの策をこちらで使ってやろう。……メリィ。あれをやるぞ」

「おお！　あれだな。すぐ準備するぞ」

「あれ……？」

どこか嬉しそうな着ぐるみ狂戦士の声を聞くと、アイリーンはどことなく不安を覚えた。

＋＋＋

一方、東軍の指揮官たちも北軍同様、偵察兵の情報を得て進軍の作戦を練り直していた。

「工作兵の指揮はエルド、お前に任せているが問題ないか？」

「ああ。配置は済ませている」

東軍工作兵の総指揮官であるティムスはブソウに頷いた。

「工作兵の全員が一般生徒で女ばかりだが、支給してある妨害アイテムの使えばそれなりに戦果を出せるはずだ」

ティムス自身が作った妨害アイテム。これは以前ユーマのアイデアを元に創った『おもちゃ』の数々であり、前にユーマが使ったバズーカや各種捕縛アイテムが用意されている。

これらのアイテムは自警部の新装備となるものの試作品で簡易版。性能テストも兼ねている。

「南に割振った工作兵が少ないようだが？」

「あそこは牽制程度しかできないだろ。南は騎兵を馬まで精鋭で固めた上に1騎につき防衛兵が4、5人つく計算だ。足止めはできても騎兵を削ることは難しい」

「そうかもな」

ティムスはそれで北と西の2チームを中心に攻めることにしたのだ。

「まあ、南軍に何もしないわけじゃないが」

「《射抜く視線》か」

ブソウは急遽配置換えをした1年生の事を思い出す。

「そうだ。あんたは女子の機嫌取りにあいつを騎兵にしたみたいだが、正直勿体ないと思ってたぜ。ジンは遊撃に使うのが正解だ」

「俺にも色々あるんだ」

元々ジンのファンという女生徒達の熱烈な要望に仕方なくの配置だった。いきなりの変更は彼女達にきっと非難されるだろうとブソウは頭どころか胃を痛めている。

「……もういい。そっちはエルド、お前に任せる。次は進軍ルートの方だが」

「将軍」

「……何だ」

側に控えていた小隊長達から1歩前に出る覆面野郎。

エイヴンの挙手にブソウは顔を顰め、ミヅルは疑問を抱く。誰？

「何、この子」

「エイヴン・コロデ少尉であります。カンナ大佐」

エイヴンはミヅルに向けて敬礼。

《姫》の二つ名を持つ大和撫子のミヅルを見てもがっつかなくなったエイヴンの態度は教育（洗脳？）の賜物である。

でも今のエイヴンは誰が見ても怪しい奴にしか見えない。覆面だし。

「大佐、って何かしら？　昔の帝国軍？」

「進軍に関して提案があります。発言よろしいでしょうか」

「なんだよ、言ってみろ」

「ありがとうございます。少佐」

俺は少佐、《賢姫》の下かよ、とティムス。

発言を許可されたエイヴンは自分の用意した地図を広げた。

「これは？」

「昨晩考えた進軍ルートです」

地図には書かれた矢印は途中まで一本道。ある地点を境に無数に枝分かれしている。

「森林ステージか」

「はい。我が軍の拠点は屋外演習場に近い。ここで散開して敵工作兵の妨害と偵察兵を撒きます」

「愚策だ。近いと言っても主戦場へは遠回りになって進軍に時間がかかる」

「あと分散したこのルートはなんだ？　どれも隊列を組んで通れる道なんて１つも……」

エイヴンの地図の見てティムスは気付いた。

書かれたルートは５０通り以上。東軍の騎兵の数だけある。

「お前、まさか」

「我が軍の兵は精鋭と言っても所詮一般兵。《剣闘士》や《獣姫》、《旋風の剣士》といった突出した者には敵いません」

ティムスには目もくれず、エイヴンは大将であるブソウを見ながら作戦の概要をすべて説明した。

「決戦フェイズで彼らに勝つには《一騎当千》の指揮の下、皆が一丸となって戦いに臨む必要があるのです」

エイヴンは真剣なまなざしでこれしかないと訴えた。
覆面では隠されないその目は言っている。勝ちたいと。
「進軍フェイズで1人も脱落者を出さない。これはその為の策です」
「しかしこいつは……」
「0か100か、そんな策ね」
「……1つ質問する。これはミツルギの作戦か？」
「いえ。『私達』の作戦です」
ブソウの質問にエイヴンは自信を持って答えた。
ブソウはエイヴンの本気の目を無下にできず悩みだす。
使えるのか？
「……ミヅル」
「無理、と言いたいけれど今の皆の士気を考えるとね。不可能を可能にするかも」
「エルド」
「やるなら徹底的だ。工作兵の配置も今なら動かせる」
「……」
2人はブソウに判断を委ねた。他の小隊長もだ。それでブソウはますます悩む。
――ブソウさん。エイヴんをお願いします

「……わかった」

思い出すのは昼休みに頼みこんできた少年のこと。結局決め手となるのはこれらしい。

ブソウはやっぱり人が良かった。

「コロデの案を採用する。エルドは偵察兵を通して工作兵の再配置。ミヅルは防衛兵、各小隊長は騎兵部隊に進軍ルートすぐに叩き込め」

指示を送るとブソウは見渡せる舞台の上に立ち、全軍に向けて声を張り上げた。

「全軍に告ぐ。いいか、俺達が勝つには全員の力が要る。前哨戦で脱落することは俺は許さん」

再び湧き上がるブソウコール。道化になろうが構わんとブソウは腹を括る。

勢いに乗るしかない。ユーマにのせられっぱなしで気に入らないが、この勢いは替えがたいものだと理解もしている。

そして開戦の空砲が学園全域に響き渡る。

「準備はいいか？　決戦の舞台でまた会おう。東軍、出陣！！」

ブソウの号令の下、東軍は怒声を上げて進軍開始。

まず目指すは屋外演習場、森林ステージだ。

その頃のユーマ。

現在移動中。工作兵の装備を手にして南軍のいる方へ向かっていた。

＋＋＋

開戦から１０分が経過。

クルス率いる南軍は１つに固まり、広い道をゆっくり進軍していた。

騎兵が少ない分、防衛兵と偵察兵が多い南軍は奇襲に強く防御が固い。罠も事前に発見して回避、又は解除して行くのでつけ入る隙がない。

ゆっくり進むのは馬を担ぐ生徒の疲労を抑えるのと迂闊に罠にかかるのを防ぐためだ。どのチームもそうだろう。

「マーク」

「なんだい？」
「ここから俺を出せ」
「あはは」

マークは檻の中のクルスを見て朗らかに笑った。

「楽しいじゃないか。罪人を護送してるみたいで」
「この野郎」

マークを睨むクルスの顔は、まるで悪人のように険しかった。

南軍は基本クルスを中心に騎兵、防衛兵、偵察兵と3重に囲むように隊列を組んで進軍している。

「俺は楽しくない」
「本番はまだだからね。いいからほら、探って探って」
「覚えてろよ」

仏頂面のクルスはマークに言われて目を瞑り、黙り込んだ。

それからしばらく部隊を進軍させる。

「止まれ。……1時方向と11時方向に2人ずつだ」
「挟み撃ちかな？　偵察をお願い」
「はい」

先行する偵察兵たち。

彼らは花壇の茂みに待ち伏せしていた工作兵を発見。見つかった

彼らは驚いている。

《闘士》という特殊クラスであるクルスは人の《気》を読むことができ、ちょっとした感知能力がある。

集中すればクルスは最大半径約２００メートル内にある《気》を察知できる。南軍の大将は人間レーダーにもなるのだ。

偵察兵はＰＣリングで本隊に連絡して応援の防衛兵を呼ぶ。ルール上偵察兵は攻撃できないのだ。

「嘘、ばれた？」
「くそっ」

工作兵は拘束される前にバズーカを撃った。撃ち出すのは捕縛用のネットボールだ。

しかしこのバズーカの有効射程は１０メートル程。南軍の本隊には十分に近づけなかったので騎兵まで届かないのだが。

別に彼らは騎兵だけを狙っているわけではなかった。

本隊にいるマークは連絡係の偵察兵に訊ねる。どうも様子がおかしい。

「どうしたの？」
「先行した偵察兵達がやられました。網に絡めとられてハチマキを

とられた模様」
「被害は偵察兵2に防衛兵1。敵工作兵には逃げられました」
「工作兵のハチマキの色は青。西軍です」

ハチマキが切れる、あるいは紛失による失格は運動会の総合ルール。騎馬戦にも採用される。

偵察兵の報告に少し困った顔をするマーク。

「……まただね。騎兵は無事なんだけど少しずつ人を削られてる」
「おかしい。《烈火烈風》のやり方じゃない」

クルスは西軍のゲリラのような妨害に疑問を持つ。

散発的でじわじわ痛めつけるようなやり方。対騎兵用の妨害アイテムを偵察兵や防衛兵に使うのはまだしも、動けなくしてハチマキを奪う行為は彼女らしくない。

「そうだね。リアちゃんがこんな手段をとるとは思えない。姑息だよ」
「思いついて実行するような奴といえば……」
「ユーマ君？」

マークの発言に頷くクルス。エース達の《精霊使い》に対する認識はけっこうひどい。

「まさかね」
「エースの中ではの話だ。あの工作兵の独断かもしれん」

「進軍ルートを先行していた部隊からの報告です」

偵察兵の女生徒がクルス達の会話に割り込んだ。

「拘束された敵工作兵を発見。どうやら先程逃げられた工作兵のようです」

「はい？」

「なんだと？」

言われたことがよくわからなくて、顔を見合わせる2人。

「誰が捕まえたの？　ミスト君？」

「いや、あいつは北軍の妨害に行ってるぞ」

「あとこれは不確定情報ですが、覆面を被った男子生徒が近くにいたらしいです。すぐに姿を消したそうですが」

「「……」」

クルスとマークは黙り込んだ。

「……うん。こっちが彼だね」

「大体謹慎中だろ。何してるんだ？」

考えてもしょうがない、攻めてきたら返り討ちにすればいいと2人は部隊を再び進軍させた。

この時、2人のエースは気付いていなかった。南軍を尾行している彼の存在に。

ユーマではない黒髪の少年。弓使いの彼。

東軍の工作兵、《射抜く視線》のジンがティムスから受けた任務はただ１つ。

学園最強、クルス・リンドの狙撃。電撃作戦だ。

＋＋＋

騎馬戦　―進軍フェイズ―　2（前書き）

『ジン戦記』再び

騎馬戦　―進軍フェイズ―　2

＋＋＋

進軍フェイズの中盤。

西軍の先陣を切り突破口を開くのは《旋風の剣士》、エイリーク・ウインディ。

彼女はアギ達男子生徒が担ぐ馬の上で、手にした棒を振るい《旋風剣》を使う。

「邪魔よ！」

覆いかぶさるように広がる網を風で吹き払い、衝撃波を利用して東軍の工作兵を攻撃。

嫌がらせの水風船もエイリークはまとめて吹き飛ばし、ぶつけ返す。

騎兵ユニットに並走する防衛兵達は側面をカバー。大盾で南軍の魔術攻撃を防ぐと、そこにヒュウナーが騎兵を率いて突撃。魔術師の生徒たちを蹴散らしていく。

「ある程度片付けたわね。ミサ、本隊に連絡して」

「う、うん」

エイリーク付きの偵察兵（役割的には通信兵なのだが、この騎馬戦のルールでは偵察兵と混同）をしているのはエイリークの親友兼専属侍女を自称するミサ。

彼女は「せっかく同じチームだからリィちゃんと一緒がいい」と志願したものの、そのせいで最前線に飛び込むことになりちょっぴり後悔している。

「近くに安全地帯があるわ。そこで馬を下ろして少し休みましょう」
「ああ。ヒュウ達にも言っておこう」

各地に用意された安全地帯は一定時間ながら休憩を許された非戦闘エリア。騎兵も人馬から降りることができる。

そこでエイリーク達先行部隊は後続の本隊を待つことにした。

＋＋＋

西軍は特別ルールもあって機動力があるかわり、女生徒で多くの騎兵を構成しているので持久力に難点がある。

大将であるリアトリスはそこで部隊を2つに分けて本隊を温存。体力のある男子生徒を中心に結成した先行部隊に露払いをさせながら強行突破を図ることにしたのだ。

前哨戦といえる進軍フェイズから激戦を繰り広げる西軍。

このチームは敵工作兵を正面から打ち破りながら最短距離を進軍

している。

馬を下ろして一息つけるようになったアギは、先程の戦闘を思い出して疑問を口にした。

「しかしおかしくないか？　東軍が仕掛けて来たと思えば次は南軍、それからすぐに東軍。ずっとこんな調子だ」

「東と南が連携して妨害してるとでもいうの？」

「そうかもな。敵の敵は味方だって。……なぁ、姫さん」

アギはエイリークに訊ねた。

「俺達（西軍）で姫さんが知ってる奴はどのくらいいる？」

「はぁ？　……戦士科の2年生は大体わかるけど、あとはミサの友達とリア先輩の騎士団の人くらい」

「だよなぁ」

アギも似たようなものだ。全生徒の顔なんて覚えているわけがない。

「それが何？」

「ユーマが言ってたんだろ？　《会長派》の編入生が各チームにいるって。そいつらのせいかと思ったんだが確認がとれねぇ」

「考えすぎよ。大体そのくらい悪質でもなんでもないわ」

「そうなんだけどなぁ」

無意識にアギは近くで彼と同じように休む《鳥人》の方を見たが、それだけだった。

確かにヒュウナーは《会長派》のエース。でも疑うのは楽しくない。

「リィちゃん。もうすぐ本隊の人達が来るって」

「そう。休憩はおわりね」

ミサの報告を受けてエイリークは立ち上がると、ぐぐっと背筋を伸ばす。正直人馬は乗り心地が悪い。

「ねぇミサ。他のチームの情報、入ってる？」

「うん。南軍は何人か脱落してるけど騎兵の損害はなし。今は正門付近を通ってるって」

「正門か。なら南区に入ったこっちが先を進んでるな」

相手チームを視察する部隊がＰＣリングで送ってくる情報。分析班がまとめたものをミサは掻い摘んで話す。

「北軍はチームを分割して広がって進軍してる。南軍から《霧影》の先輩が足留めに参加してるらしいけど、半数はもう突破されたみたい。東軍は大きく迂回して屋外演習場の方へ向かってる。わたし達と違って工作兵の妨害を避けてるのかな？」

今現在目的地である主戦場に近いのは西軍。順に南、北、東の各チーム。このままいけば決戦フェイズで大きなアドバンテージが得られる。

しかし、チームの損耗具合考えると西軍は騎兵をもう１５騎も失っている。

南軍の騎兵は無傷の４０騎。ミストによって足留めされている北

軍は、このまま半数しか残らなかったとしても１００騎の半数、５０騎は残る計算だ。

「西軍の騎兵は残り４５騎。これ以上減るのはマズイわね」
「せめて温存してる本隊の３０騎は無傷で送り届けないとな」
「そうね。さぁ、そろそろ行きましょう」

西軍の先行部隊は本隊と合流。進軍を再開する。

西軍騎兵：６０→４５

備考：温存した３０騎の体力は十分。決戦フェイズに備える。

＋＋＋

エイリーク達が西軍本隊と合流する少し前。

南軍の本隊では副将のマークが人馬に揺られてのんびりと、歌いながら進軍していた。

マークの隣では人間レーダーと化した南軍大将が鋼鉄の檻の中、むっつりとして瞑想中。

「マーク」
「なんだい？　僕らの大将」

周辺の《気》を探るのを止め、クルスが口を開いた。

「その歌はなんだ？」

「前にユーマ君が教えてくれたんだ。こんな時に歌う歌なんだって」

「どんな時だよ」

それは、市場に売られていく子牛のうた。子牛の部分がクルスになっている。

「さぁ。でもどこか哀しくて、虚しくなる歌だね」

「俺がな」

学園の誇るツートップはいつもこんな感じ。なおものんびり歌い続けるマーク。

その間、クルスはずっと黒衣の魔術師を睨んでいた。

クルスの殺気が渦巻く南軍。

敵工作兵はその気に当てられ、迂闊に攻められずにいた。

そんな彼ら南軍を待ちかまえているのは《射抜く視線》の弓使い。ジン・オーバ。

彼は待ち伏せの隠蔽工作や追跡など、遊撃として単独で行動する能力が非常に高い。

南軍を尾行していたジンは途中から進軍ルートを先読みして先行。敵偵察兵の目を掻い潜って狙撃ポジションを確保し、今は近くにある校舎の2階に潜んでいた。

ジンは久しぶりの感覚に緊張している。なにせ狙撃する相手は学園最強の《剣闘士》だ。

クルスに気配を探られる度に全身に寒気が走る。狙撃する前からジンは格の違いを見せつけられていた。

それでもジンは今もクルス達に存在を気付かれていない。それは彼の過去、戦場での実戦経験に因るところが大きいのだろう。

ふとジンは東軍工作兵を指揮するティムスの指令を思い出した。

（東軍の強みはブソウが前線指揮を執ることだ。用兵術ならあいつが学園一だろう。だが《剣闘士》に陣形や戦術なんて関係ない。正面から叩き潰されてるのがオチだ）

学園のバランスブレイカー。クルス1人でチームを1つ潰しかねないとティムスは言っていた。

（檻に入ってようが枷を嵌められていようができるなら相手にしたくない。お前に頼む狙撃（それ）は成功すりゃ恩の字ってくらいだ。期待してないから気楽に撃ち落としてこい）

頼まれた時もそうだったが、思い出してもう1度苦笑するジン。
成功しなくてもいいのかどうだか。

「ティムス君もなんだかな。でもどうする？」

南軍の部隊が来るまであと数分。ジンは考える。

騎兵が失格になる条件は以下の通り。

1、馬に乗る騎兵が地面に体をつけた時

2、馬を人が乗れないほど破壊された時

3、ａ　制限を超える術式を使うことでハチマキが切れてしまった時

ｂ　戦闘行為等によるハチマキの紛失

4、悪質な反則行為（殺傷行為等）

クルスの馬？　は鋼鉄の檻。ジンの《幻想の矢》で破壊するのは無理だ。

となるとジンが狙撃でクルスを失格に追いやるには、彼のハチマキを撃ち落とすしかない。

「……駄目だ。頭を掠めるように矢を撃つなんて危険すぎる」

ルール上、ブースターは使用禁止なのでジンは《ボウ・ガンプレート》を使うことができない。

《アローモード》の精密狙撃や《バーストモード》の破壊力があればとジンはつい考えてしまう。

せめて進軍の動きが止まれば……

「ジン・オーバだな」

「！？」

不意に声をかけられてジンは咄嗟に《幻想の弓》を構える。

振り返った先にいるのは見知らぬ男子生徒だ。

「誰だ」

弓を構える時、普段は穏やかなジンの視線は、冷たく鋭いものになる。

必殺必中である視線を向けられ、慌てて両手を上げる男子生徒。

「ま、待て。味方だよ味方。ハチマキを見ろ。俺は東軍の偵察兵だ」

「え？　……す、すいません」

ハチマキの色はジンと同じ黄色。ジンは慌てて謝る。

「驚きました。でもよくこの場所がわかりましたね」
「これでもずっとお前を探してたんだ。見つけたのは偶然、１年のくせにたいしたもんだよ」
「いえ、そんなことないです」

男子生徒は先輩らしい。ジンは弓の構えを解くと、彼に向かって安心したように微笑んだ。

まだ少年の幼さが残る爽やかな笑顔。それでいてどこか儚げで、憂いを帯びた瞳。

「……成程。これが《射抜く視線》……女殺しか」
「？　何か言いましたか」

観察する彼の呟きをジンは聞き取れなかった。

「何でもない。それよりも聞いてくれ。お前の任務は聞いている。俺達はその援護に来た」
「援護？」

聞き返すジン。

「この先で仲間の工作兵と偵察兵が１０人待ち伏せしてある。一斉に仕掛けて場を撹乱させるからそこを狙ってくれ」
「陽動ですか？」
「ああ。俺は号令係さ。タイミングは狙撃するお前に任せる」

絶好の狙撃ポジションを捨てるかどうか。ジンは少し悩んだ結果、味方である先輩を頼ることにした。

「……わかりました。すぐ移動しましょう」

ジンは先輩の偵察兵と共に攻撃ポイントへ移動を開始。

「頼むぜ。『俺達』で学園最強を討ちとるんだ」

＋＋＋

再び南軍本隊。

正門の大通りを抜け、南区へ向かう道を進む。

「……いるな。１１人だ」

クルスは敵の気配を察知した。

「うん。確かに仕掛けるならここだろうね」

「お前が変な歌を歌うせいで気が逸れた。かなり近いぞ」

早期発見できなかったのは痛い。今いるところは校舎に挟まれていて見晴らしが悪く、大人数で進むには道が若干狭いのだ。

隊列も密集するのを避けたので縦に伸びてしまっている。

「どうする？　騎兵は小回りが効かないから引き返すには時間がかかる。偵察を出して捕まえる？」
「もう遅い。来たぞ」

部隊の正面から来るのは直軽3メートル程の大玉。連続して2個、勢いよく転がってくる。

大玉は中身が詰まっていて思いのほか質量がある。このままだとボウリングかドミノ倒しだ。

「あれってもしかして玉入れのやつ？」
「マーク先輩、指示を」
「そうだね。……防衛兵は『左右』に展開！　騎兵の側面を防御して」
「えっ？　左右にですか」

マークの指示に思わず聞き返す通信担当の女生徒。

「陽動の可能性が高いから伏兵に備えて。正面は僕が止める」
「は、はい！」

偵察兵のＰＣリングを通して全軍に通達。即時に防衛兵が動き出す。

マークは《黒鋼術》を発動すべく術式に集中。そこへ見計らったように東軍の工作兵が姿を現し、偵察兵と共に強襲を仕掛けてきた。

最後に、無音で飛ぶ《幻想の矢》が放たれる。

矢は南軍の大将が閉じ込められた檻に向かって――

＋＋＋

「3……2……1、今です」

「攻撃開始だ」

向い合う校舎を繋ぐ渡り廊下の中間地点で、ギリギリまで南軍を引き寄せたジンは《幻想の弓》を構えたまま合図を送る。

ジンの合図に合わせ、先輩の偵察兵が散開して待機する偵察兵に連絡。陽動の強襲作戦が開始された。

まずは正面からの大玉転がし。

作戦としてはこれで部隊の前方に防衛兵を集中させ、周囲の守りを甘くさせるつもりだったが、《黒鉄》の魔術師であるマークがこれに対処。

彼が《黒鋼壁》でＵの字に曲面を描く鋼の壁を展開すると、大玉は壁にぶつかり曲面に沿ってループ、進行方向を１８０。変えてしまった。

マークがＵの字の壁を作ったのは術式に制限がかけられて大玉を

跳ね返すほどの分厚い壁を創れなかったからだ。薄い壁は大玉の衝撃に負けて倒れる可能性があった。

彼は鋼の壁を曲げることで全体の強度を上げ、大玉の衝撃を受け流し利用する工夫をしている。これはユーマもよく使う既存術式に変化を与えるゲンソウ術の《幻操》、《補強》の技術だ。

大玉攻撃に南軍が完璧に対処したため、強襲部隊の作戦第２段階、挟み撃ちによる撹乱はほぼ不発に終わっている。左右に展開した防衛兵に拘束される奇襲部隊の１０人。

南軍は周囲の警戒を固め、偵察兵を走らせる。

ジンの隣にいた偵察兵の先輩は作戦が失敗したことがわかり舌打ち。

「くそっ、あいつら失敗しやがって」

「まだです」

しかし、ジンは諦めていなかった。

なぜなら警戒の為に南軍の足は止まり、マークが《黒鋼術》を使ったからだ。

ゲンソウ術を連続使用すれば、その分負荷がかかってハチマキが切れやすくなる。

もしもマークがクルスを守るために《黒鋼術》を使えばハチマキが切れて失格、南軍は大将を守って副将を失うことになる。マークだって瞬時の判断になれば躊躇うはずだ。

先輩たちがくれたチャンス。今、撃つしかない。

覚悟を決めたジンは『矢をつがえて』『弦を引く』。

《射抜く視線》で狙いをつける。

ジンが『見る』のは南軍部隊の中心、黒衣の魔術師の隣にある担がれた檻の中。

鋼鉄の柵の隙間から見える、赤茶の髪をした囚われの剣士。

彼の額、その緑のハチマキを、

「――見えた」

ジンは《幻想の矢》を放つ。

無属性の特性を持つ不可視の矢。

ジンの視線に誘導され、《幻想の矢》はクルスの額に巻かれたハ

チマキを掠めるように――

（――えっ？）

矢を放った瞬間。不意に、ジンの視線とクルスの視線が重なった。

「まさか……」

偶然じゃない。見られている？

ジンがそう思った時にはクルスは両腕を上げ、手首に嵌められた枷で柵の隙間を抜けた《幻想の矢》を防いでいた。マークが驚いている。

それ以上に驚愕するジン。いくら《射抜く視線》の副作用、『強すぎる視線』に感づかれたとしても矢は放たれた後だ。

視界の悪い檻の中で、音も色もない攻撃に瞬時に反応できるのはどうしてもおかしい。

そしてジンは戦慄する。

ジンの視線の先、彼には届かない《剣闘士》の呟く声。唇はこう言っている。

――12人。もう1人いたか

最初から待ち伏せに気付かれていた。位置を特定されていたから防がれたとジンは悟る。

「……先輩、すぐ逃げて本隊に合流して下さい」

驚愕と戦慄が抜けきれないまま、僅かに震える声でジンは偵察兵の先輩にそう言った。

「お前は？　狙撃は失敗したんだろ？　だったらもう」

「僕が時間を稼ぎます。懐に飛び込んで、できれば捕まった人達に逃げるチャンスを……」

「何を馬鹿な！　たった1人で突撃なんて無駄死にだ」

「でも！」

ジンの瞳は揺るがない。

その意志は彼を射抜く。

「僕に協力してくれた先輩たちを、仲間を僕は見捨てたくない」

「っ」

偵察兵の先輩はジンのまっすぐな目を見ることができず、視線を逸らす。

彼はうしろめたい気持ちに押し潰されそうだった。ジンは気付かない。

「……急いでください。僕たちの位置はとっくにあの人に気付かれてる」
「待て。……行くというならこれを持って行け」
差し出されたのは小さな球体が２つ。
この玉は攻撃が禁止されている偵察兵が使える唯一の妨害アイテム。
「俺がついて行くよりよっぽど役に立つはずだ」
「そんなことないです。でも、ありがとうございます」
ジンは喜んでこれを受け取り、彼にお礼を言った。
「行きます。先輩、また会いましょう」
「ああ。……すまなかった。今度会う時にちゃんと詫びを入れる」
「先輩？」
「今は気にするな。南軍の奴らに一矢報いてこい、ジン！」
「……はい！」
先輩に背中を押され、ジンは渡り廊下の窓から飛び降りた。
……別に突き落とされたわけじゃないですよ。
＋＋＋

一方、ジンに狙撃されたクルスにマークは話しかける。

「いやぁ、驚いたよ。僕が助ける隙なんて全くなかった」

「嘘つけ」

「あはは」

睨みつけるクルスにマークは笑って誤魔化す。助ける気はさらさらなかった。

「まあ、クルスは１１人て言ってたのに１０人しかいなかったからね。１人くらい見逃しても問題ないかなって」

「いや。１２人だった。狙撃した奴が１２人目だ」

「……へぇ」

これにはマークも感嘆の声を漏らす。

「天下の学園最強、《剣闘士》様が攻撃されるまで気付かなかったなんて凄いじゃないか。もしかしてミスト君以上？」

「どうかな。あいつはふざけなければ一流の《忍者》だからな」

「だよね。３年生でクルスに負けてないのは彼だけだし」

変態マフラー、最強説浮上。

「違う。あいつとは闘ってさえいない。こっちから仕掛けても煙に巻かれる」

「賢明な判断だよ」

嘘だった。

「それで誰だい？　クルスの暗殺を企み、学園最強の座を狙う物騒な相手は」
「お前の発言が物騒だ。……最初は《気》の感じから《黙殺》かと思ったが違った。男だ」
クルスは一瞬視線を合わせた少年を思い出す。
「3年じゃない。見覚えはあるんだが2年でもなかったと思う」
「まさか1年生？　編入生じゃなくて」
「多分。実力があっても詰めの甘さがいかにもといった感じだ」
「詰め？」
マークは狙撃された状況を思い出し推理してみる。
「ああ。狙撃した彼の近くに『11人目』がいたんだね。クルスそれを警戒していたから余裕で狙撃に対応できた。そういうこと」
「というわけだ。1人だけ気配を消してもあれだと無意味だ。……まあ、不意を突かれても俺は負けんが」
クルスは自信を持って答える。
「……実は結構ヤバかった？」
「ハチマキだけを狙われた。大した腕だ」
マークの問いにクルスは答えなかった。
「ふーん」
「……なんだよ。いくら腕が立っても千載一遇のチャンスを奴は凡ミスでしくじった。それだけだ」
「そうなんだけど、僕はますます興味がでてきたね。そろそろ偵察

兵が彼を見つけると思うんだけど……」

「ジン！？」
「ジン様！？」

突如聞こえてくる驚く少女達の叫び声。

「何だ？」
「クルス、上だ」

見上げれば3階の渡り廊下から黒髪の少年が飛び降りて、部隊の中心めがけて飛び込んでくる。

「うわ。特攻？」
「あいつが狙撃手だ。……そうか」

飛び降りたジンを見てクルスは思い出した。

皇帝竜事件。あの時も狙撃手の少年は空を飛んでいた。

学園最強の《剣闘士》は思い出した少年の名を呟く。

「《射抜く視線》」

＋＋＋

ジンは3階から飛び降りながら先輩にもらった玉を投げると、『弓を構え』、『矢をつがえる』。

《幻想の矢》に射抜かれた玉は空中で爆発。

この爆発から、南軍の部隊すべてを相手にジンの『一矢報いる』戦いがはじまる。

（先輩達の戦いを僕は……無駄にはしない！）

ジンが射抜いたのは、煙玉だ。

＋＋＋

騎馬戦　―進軍フェイズ―　3（前書き）

話はジンからユーマへ

＋＋＋

「？　この感じ」

工作兵を捕まえていたダークエルフの少女、ユンカは突然エルフ族特有の先のとがった耳をピクッと震わせた。

ユンカは南軍の防衛兵だ。強化系魔族である彼女のパワーとスピードを活かした、小回りと機動力のある壁役としての配置である。

加えてユンカは対人戦の能力も高い。彼女はクルスが早期発見する敵工作兵にいち早く追撃をかけ、無力化することで活躍。今は猟兵のような役割をしている。

また、ユンカとペアを組むのは彼女とジンを奪い合うライバルのセリカ・フォンデュ。

２人で組むと偵察兵であるセリカよりも索敵はユンカの方が得意。なのでもっぱら通信担当のセリカであるが、彼女の本領は別の所にある。

それは《活性》を使った後方支援だ。馬を担ぐ生徒の疲労回復や、度重なる妨害で怪我した生徒の治療ができるセリカは衛生兵と呼ぶべき稀少な回復ユニットだった。

セリカはユンカの様子がおかしいことに気付き、声をかける。

「ユンカさん？」

「ジンが近くにいる」

「えっ？　……！　たった今本隊から連絡がありました。大将である先輩が狙撃を受けたそうです。狙撃手を捜索する指示がきてます。おそらく……」

「うん。ジンが危ない」

ジンが動くその時、彼女たちもまた動き出す。

「でもどうしてジン様がいることがわかったのですか？」

「矢が風を切る音、あと風にのったジンのにおい」

「……そうですか」

においか……私はまだまだですね、とセリカ。

別にユンカはエルフだから鼻が効くわけではない。

＋＋＋

状況確認。ここは校舎に挟まれていて道が狭い。

故に南軍は密集を避けるために騎兵を2列にし、縦の間隔を空けて長蛇の列を作っていた。防衛兵は騎兵1騎につき3、4人付いて今も周囲を固めている。

ジンが狙撃した位置は向かい合う校舎を繋ぐ3階の渡り廊下。クルスは隊列の中央付近にいたので全軍の3分の1はすでに渡り廊下をくぐりぬけている。

そこにジンは飛び降りた。渡り廊下を境に南軍の隊列を分断するように。

「《射抜く視線》」

クルスがそう呟いた時、その時にはもう渡り廊下の真下にいた部隊が煙幕に覆われていた。

＋＋＋

ジンの射抜いた煙幕玉は《組合》の特製。特別なキノコとその胞子を材料に使ったもので、強い衝撃を与えるとそれだけ勢いよく、広範囲に粉塵が飛び広がる。

人が飛び降りた。それだけで驚きなのに、さらに南軍の生徒たちは続く爆発と共に煙幕で視界を奪われる。

「敵襲です。数は1！」

「わかってるよ。全軍待機。直ちに停止して対衝撃防御を急いで」

パニックを起こさないようにマークが指示を送る。

「まず煙幕をどうにかする。僕らの大将が」

「俺かよ」

クルスは「せめて剣を使わせろ」とぼやき、手枷を嵌めた両手を突き出して《旋風砲》の構えをとる。

＋＋＋

落下しながら煙幕を張ったジン。だが何の装備もなしに3階から飛び降りれば流石に無事ではすまない。彼は《天駆》のような術式は習得していなかった。

かわりにジンは煙幕を張る前、飛び降りる場所に狙いをつけていた。それは真下にいた防衛兵。

落下の勢いそのままに、ジンは防衛兵が構える大盾を思いっきり踏みつける。

「ごめん！」

「何？　どわっ！？」

騎馬戦で使われる盾は特殊な衝撃吸収材でできている。ジンはそれをクッションに利用したのだ。

踏み台にされた防衛兵はそのまま蹴り飛ばされて転倒。ジンは盾を蹴った反動を利用して大きく飛び退き、腰のポーチから工作兵に

支給される妨害アイテムを取り出す。

煙幕の中では視界が遮られ《射抜く視線》を使った攻撃ができない。ジンにできるのはせいぜい煙に乗じて南軍をかき乱すだけ。

ところがジンが飛び降りてすぐに煙幕が突然の強風に吹き飛ばされた。クルスによる加減された《旋風砲》の衝撃波だ。

「!?　煙幕が」

「囲め！」

敵陣のど真ん中で姿を晒し、孤立するジン。南軍の生徒に前後を挟まれる。

「動くな」

ジンはアイテムをポーチに戻すと《幻想の弓》を構えて牽制。近づこうとした生徒が《射抜く視線》に身を竦まされる。

「……ふん。《射抜く視線》なら知っている。奴の弓は連射はできない」

「初撃を凌いだら集団でかかるぞ。防衛兵は前へ」

小隊長の指示で騎兵の前に大盾を構えた防衛兵が出る。騎兵たちも自分の頭を守るように盾や棒を構え出した。

鉄壁の防御布陣を敷いたままにじり寄る防衛兵。

それでもジンは諦めない。

彼はただ一緒に戦った先輩たちの為に全力を尽くすだけ。

「……この矢は、あらゆるものを『射抜かない』」

ジンは矢をつがえる。小隊長の判断ミスは彼に1度でも撃つ隙を与えたことだ。

手にした『矢』は4本。それをジンは1度に放つ。

束ね撃ちだ。拡散して飛ぶ矢が南軍の生徒たちに向かい、盾を貫通する。

「あっ……うぁあああああ」

矢の1つが眉間を撃ち抜いた。

他の矢も防衛兵を貫いて騎兵へと向かっていき、突き抜ける。

「嘘っ」

「盾が……うわぁ！？」

「矢が、あ、頭にいぃぃ」

続けてジンは矢の束を狙いもつけずに撃ち放つ。防御の上から貫通する矢を撃たれた生徒はパニックに陥った。

ジンの新術式、《幻影の矢》。その矢に防御など無意味、『すり抜ける』からだ。

《幻想の矢》の矢が不可視で実体があるのに比べ《幻影の矢》は目に見えるが実体がない。幻の矢なのだ。

撹乱と牽制を目的とした騙し技。しかし実際に矢を受けた者はどう感じるだろう。

盾を突き破り目前に迫る矢。意表を突かれた上で撃ち抜かれる頭や体。やられたと幻覚してもおかしくない。

ジンの《幻創》した矢は風を切る音や衝撃を再現し、撃たれた生徒の混乱に拍車をかける。

「今だ！」

包囲が崩れた。ジンは南軍の前方の方へ駆け出し（後方にクルス達がいるのでジンは相手にしたくない）、防衛兵の壁の隙間を飛び込むようにして抜ける。

狙うのは騎兵のみ。ジンは地面を転がりながら、今度こそポーチから妨害アイテムを取り出した。煙幕玉とは違う玉。

ジンはそれを《射抜く視線》を使い連続で投擲。狙い通り騎兵たちの足元に玉を落として、粘着質の物体を地面に飛散させる。

その玉は『トリモチ玉』だ。ティムスがユーマと共同で開発した『おもちゃ』の1つ。

即席の罠を張るとジンは膝をついたまま《幻想の弓》を構え、大声で叫ぶ。

「撃つぞ。死にたくなかったら……どけぇぇぇぇ！！」

精一杯脅しながら《幻影の矢》の束ね撃ちを騎兵に向けて放つ。

ジンの気迫と向かってくる矢の雨に慌てた騎兵は逃げようとしてトリモチの罠にかかり、足をとられて勢い余って転んでしまう。

「慌てるな！　矢は幻だ」

流石に何度も撃てば《幻影の矢》の正体が見破られた。落ち着きを取り戻した小隊長の指揮が飛ぶ。

「ここまでだ。盾を構えながら囲んで突撃、奴を拘束しろ！」

「まだ！」

突撃する防衛兵。でもまだ捕まっていない。

最後にもう一騎、小隊長を道連れにしようとジンは《幻想の矢》をつがえる。

《射抜く視線》で小隊長のハチマキに狙いをつけ、しかしジンがその矢を放つことはなかった。

彼女たちが駆け付けて来たのだ。

「ああっ、手がすべったぁ！」

ユンカが投げた棒が弧を描き、小隊長の頭部に直撃。そのまま人馬から転げ落ちる。

「ぶふっ！」

「皆さん、援護します」

セリカの《光の矢》はジンに向かう防衛兵を阻むように降り注ぐ。

味方からの攻撃に再び混乱する南軍。これにはジンも唖然。

「ユン？　それにセリカさん」

「お、お前達、何をする！」

「だから手がすべったのよ」

「援護ですわ。先輩」

しれっと嘯くユンカとセリカ。

彼女達にとって敵（ジン）の敵は味方でさえ敵だった。

「今のうちです、ジン様」

「早く逃げて」

「でも」

今の僕は君たちの敵なんじゃ……、とジンが戸惑ったところで不意を突かれた。

突如ジンの足元から鋼鉄の円柱が出現する。

「なっ！？」
「ジン！？」

ズシンと響く衝撃。

突き出す円柱に打ち上げられ、上空へ高く突き上げられるジン。

彼は不意打ちに何も対応できずに落下、受け身も取れないまま地面に墜落する。

（そんな……僕だけを狙って）

周りを巻き込まない地形操作の攻撃。

囲まれたこの位置からだとジンの姿はあの黒衣の魔術師には見えないはずなのに。

「がはっ」
「ジン様！」
「……い、今だ。捕えろ」

背中を強く打ちつけたジンは衝撃で息を吐き出す。

ジンは驚いたようなセリカ達や小隊長の声を聞きながら、そのまま意識を失った。

＋＋＋

「動きが止まった。距離は前方３８、いや９。左に６。だ」
「んー。ほいっと」
クルスの『目』を頼りにマークは《黒鋼柱》を展開した。
これがピンポイント攻撃の正体。クルスが《気》を探って観測手を務め、マークがそこへ正確に攻撃術式を発動したのだ。
「どうかな？」
「現場の偵察兵より連絡。攻撃は目標に直撃、沈黙しました」
「やったね。さすがは僕らの大将」
「ふん」
クルスは不服そうに鼻を鳴らす。間接的な手段は好みでなかった。
「被害はどうだ？」
「はい。騒ぎの割に怪我人は少なく、軽傷ばかりです」
ひどいのはジンに踏み台にされて倒れた防衛兵。あとユンカに棒をぶつけられた人馬から落ちた小隊長くらいだ。
「あと騎兵がトリモチに足をとられて転倒しています。小隊長を含めて４騎やられました」
「４騎も」
南軍の編成した騎兵は４０騎。１割の損害となる。
小隊長を落としたのは味方（ユンカ）だけど。

「4騎ですんだ、と考えるべきかな？　彼が先に奇襲をかけて、そのあとに大玉を転がされたらもっとやられていたかも」
「そうだな。……マーク」
「なんだい？」
「いい加減俺をここから出せ」
何度目になるかわからない抗議。ジンの奮闘に疼いてきたらしい。
「あはは。……全軍に通達。進軍を再開するよ」
マークはこれを無視した。
「おい」
「怪我をした人は手当てを急いで。トリモチは防衛兵に支給された『はがし液』を使えばとれるはずだから、やられた子に渡してあげて」
「無視するな」
こうして、奇襲を乗り切った南軍は主戦場のある南区へ進軍を再開する。
「みんな、戦場まであと少しだよ。頑張ろう！」
「覚えてろよ」
クルスは我慢の限界らしく、爪先に小さな《気》の刃を創りだすとこっそり手枷を削りはじめた。

南軍騎兵：４０→３６

備考：南軍はこの先騎兵に損害を出すことはなかった。

「後方の部隊より連絡。ジン・オーバが何者かによって連れ去られました」

この報告をクルス達が受けたのは進軍を再開してすぐの話。

＋＋＋

一方、その頃のユーマ。

「少佐、応答願います」

『誰が少佐だ』

騎馬戦とは別に暗躍するユーマはティムスに連絡をとっていた。

足元にはユーマが捕まえた男子生徒が2人いる。

「そっちはどう？」

『あの覆面馬鹿のせいで酷い行軍（ピクニック）をしている。何だ？』

「ジンは狙撃に失敗したよ」

ユーマは途中、偶然追われている東軍の生徒を見つけた。ジンと一緒にいたあの偵察兵の先輩だ。

彼を助け事情を聞いたユーマはそのままジンの様子を見に行くが、その時にはもうジンが気絶したあと。ハチマキもとられてしまっていた。

「気絶したジンを放置させとくといろいろと危ないことがわかったから『保護』しておいた。あとで人を寄越して回収に来て。男を」

眠れる美少年ジン・オーバ。彼を捕虜として連れて行こうとした女生徒たちを思い出してユーマは身震いする。

彼女達はユンカ達がいない（味方を攻撃した疑いがあるので監視されている）ことをいいことにジンに近づいた。

取り上げたジンのハチマキを奪い合いはじめ、ジンの寝顔を撮ったり髪や頬、唇まで手で触れてくるジンのファン達。

それからさらにエスカレートして、遂には彼の服に手を伸ばし……

「……うん。危なかったよ」

ユーマによってジンの貞操は守られたのだ。

『わかった。……あいつには無理させたな』

「ジンは頑張ったよ」

それでさ、とユーマは本題に入る。

「ティムスは工作兵の指揮を執ってるけど、ジンの所へ応援の部隊を寄越すよう指示したの？」
『何？』
ティムスは何を言われたのかわからなかった。
『ジンは単独行動をさせていたはずだ。《剣闘士》を相手に狙撃するとなれば他は足手まといになる』
「俺もそう思う。クルスさんの感知能力は半端ない。遠距離から不意打ちを仕掛けられるのは、俺が知る中じゃジンだけだ」
それでユーマも南軍が進軍するまで身動きが取れなかったのだ。
「でも実際ジンの足を引っ張る奴らがいた」
『……お前はどう思う？』
ティムスは訊ねる。
「手柄欲しさにジンに便乗した、ってところかな。あとで詳しく聞こうと思うけど」
『誰にだ？』
「その援軍に来た部隊の人」
ちらっと下を見るユーマ。
捕まえてぐるぐる巻きにしている生徒はあの東軍の偵察兵だった。
何故かジンまでイモムシ状態。持ち運びやすいから。

「また何かあったら連絡する」

通話を切った。次にユーマは捕まえた偵察兵の話を聞くことにする。

「さて。ティムスの裏は取れたし、話してくれるよね？　ジンに近づいた編入生さん」

「ああ」

編入生と呼ばれた偵察兵の彼は、すでに観念していた。

＋＋＋

「助けられたと思えばすぐに捕まえられるとは思わなかった。気付いてたのか？」

「まあね」

編入生に関しては報道部の情報に合わせ、ユーマは運動会の当日もシラヌイ君にチェックを入れてもらっている。

「独断で部隊を組んでジンの加勢をしたのは『《剣闘士》を討ちとった1人』という功績が欲しかった。そうですね？」

ユーマが訊ねると彼は肯定した。

「そうだ。本隊からの指示は偵察兵を通して前線に伝えられる。俺は偵察兵であることをいいことに偽の指示で部隊を動かしたんだ」

「そのせいでクルスさんにジンの居場所がばれて失敗したと」

「……」

偵察兵は苦い顔。彼はユーマに言われるまで自分の失敗に気付かなかった。

ユーマは話を続ける。

「『俺達』は騎馬戦の選手に紛れて不正な行為、不審な行動をとる生徒を取り締まっています。それで西軍の工作兵にもあなたのように独断で動く生徒がいました。捕まえたのはみんな最近来た編入生です」

「……」

「あなた達は《会長派》ですね。彼らの狙いが何で、何の目的で動いているのか話して下さい」

「わかった。でもお前は勘違いしている。俺達はまだ生徒会、《会長派》と呼ばれる組織の人間じゃない」

「えっ？」

ユーマは驚く。

「《会長派》じゃ、ない？」

「そうだ。俺を含め編入生のほとんどは確かに生徒会長に招待されて学園に来た。だがここに来た俺達はまだ試されている。生徒会長にだ」

「……」

話を聞いて編入生の事情を知るとユーマは黙り込んだ。

要するに、編入生たちにとって運動会は《会長派》への採用試験

だったのだ。

彼ら編入生は功績を上げて《会長派》に取り入るために、編入生同士で競い合っている。

何も知らない生徒たちまで巻き込んで。

「どうした？」

「……部長さんの言うとおりだ。会長さんのやり方は楽しくない」

「餌の事か？」

編入生達は生徒会に入るメリットと《会長派》の特典を予め説明されていた。

豊富な装備の貸し出しに個人ランクとは別に支給される高額なクレジットポイント。

学園のイベント以外にも学生ギルドの依頼も優遇される等、それはエースとは言わずともランクＡ以上、特待生と遜色がない待遇である。

「確かに他校ではありえない待遇に目が眩んだ奴だっている」

「違う。運動会でも賞金や景品は出ているんだ。ご褒美の話じゃない。こういったみんなでやるイベントは『みんな』でやるべきなんだ。なのに」

手柄欲しさに独断で動き、チームの和を乱す編入生たち。

編入生たちは《会長派》の試験だのどうだの、運動会とは別の余計なことに気をとられて『みんな』の輪の中から外れてしまってる。

彼らは『編入生』、もしくは《会長派》という枠に収まろうとして自らほかの生徒達と壁を作り、孤立しはじめているようにユーマは感じるのだ。

「あなた達だってもう同じ学園の生徒、仲間なのに」

「そうだな。でもこの学園は広いんだ。俺達新参者の肩身が狭くなるくらい」

編入生である彼は「はじめて訪れた時は驚いた」と、そう言った。

《組合》をはじめとするたくさんの集まりと、自由に活動する学園の生徒たちに。

「できあがった輪の中に入るのはとても勇気がいるんだ。編入生同士だって知り合いは少ない」

「あ……」

編入生のすべてが優遇されたくて《会長派》に入ろうとしたわけじゃなかった。

彼らはただ学園に居場所が欲しかっただけ。

「わかります。俺も編入生だったから」

すこしだけ編入生達の気持ちがわかった気がした。

ユーマの場合少し違う。学園に向かう途中で彼はもうアギに出会い、学園にエイリークがいることを知っていたから。

多少の事件を起こしたが、ユーマは2人のおかげですんなりと彼女達の輪の中に入ることができた。

でもユーマは1人だけ取り残された、居場所のない寂しさを知っている。

それはユーマが異世界の人間だから。

『こっち』へきてすぐエイルシアに出会えなかったら、ユーマはこの世界でどんな思いをしたのかわからない。

俺は恵まれている。ユーマは改めてそう思う。

「俺達を呼んだ生徒会長が1番に誘いをかけてくれた。皆の輪の中に入るきっかけ、新しい学園生活を送るに《会長派》は好条件だったのさ」

「でも俺は運動会とか、こんなイベントでこそみんなと交流して、あなた達に輪の中に入って欲しかったです」

「そうだな。……その通りだった」

ユーマに同意した彼は、気絶して眠るジンを見た。

――僕は協力してくれた先輩たち、仲間を見捨てたくない――

「ジンは騙していた俺に、協力してくれたから仲間だと言ってくれた。《会長派》にならなくてもそれだけでよかったんだ」

ジンが先輩と呼んでくれるだけで、彼は居場所を手にすることができたのだ。

「俺はもう大丈夫だ。この学園で後輩ができたからな」

「そうですか」

よかったです、とユーマ。

彼はもう完全に学園の生徒だ。仲間がいるから。

「これからもジンと仲良くしてあげて下さい。こいつ、体質なのか運命なのか友達（男）が少ないんで」

「？　そうか」

よくわからないまま、それでも快く引き受けた編入生。

彼が《射抜く視線》の先輩としてジンを取り巻く彼女達に巻き込まれ、翻弄されるようになるのはまだ先の話である。

「まだ騎馬戦は終わっていません。主戦場へ。今度こそチームの、同じ学園の仲間の為に頑張ってください」

「ああ。何をしているのかわからんが、お前も頑張れよ」

ジンを彼に任せ、ユーマは《霧影》、《黙殺》の2人と連絡をと

ると再び舞台裏へ姿を消した。

取り残された編入生、ジンの先輩はそれからずっと考えていた。

「どうして彼は覆面を被っているのだろう？」

＋＋＋

騎馬戦　―進軍フェイズ―　4（前書き）

決戦フェイズまでの繋ぎの話。短いです

騎馬戦　―進軍フェイズ―　4

＋＋＋

騎馬戦は現在進軍フェイズ
以降ダイジェストでお送りします。

＋＋＋

報道部特設、屋外実況席。

ポピラの肩に乗っていたユーマの精霊は突然ぴくん、と体を震わせる。

「風葉ちゃん？」

風葉はそのままふよふよーとポピラの前に飛び、向かって敬礼した。

びしっ。

「かぜはじょうとうへー、出陣しますー」

びしっ。

「？　もしかしてミツルギさんがあなたを呼んでるのですか？」

風葉は敬礼で肯定した。びしっ。

＋＋＋

撃墜王の紹介。

進軍フェイズで計２９騎の騎兵を落としたのはこの人。

「……フフ」

赤いマフラーを靡かせ、忍者はまた１人北軍の騎兵を背後から吊るし上げる。

北軍を妨害するのは南軍に所属するエース、《霧影》のミスト・クロイツ。

彼の率いる報道部の隠密班は北軍の偵察兵を瞬く間に掌握。３隊に別れた北軍を完全に分断し、１部隊を壊滅させた。

尚、ミストは額に立派な１本角を生やしたうさぎの着ぐるみを背

負っていたという。

「捕獲成功。チームへの貢献はこれくらいにしてそろそろ後輩と合流するとしよう」

＋＋＋

進軍中の西軍本隊。

「何？　オーバが何者かに連れ去られただと？」

『そうなんだよベルちゃん』

偵察兵の報告を受けた、ショートカットの似合う彼女はベルティナ・アスク。

生まれる世界が違ったらソフトボール部のエースでもやってたんじゃないか、といった感じの彼女は戦士科の２年生。

《烈火烈風》の率いる騎士団、《紅玉騎士団》の団員でもある。

『ジンが南軍の女の子に捕まって、危ない！って思ったところで覆面の怪しい人がジンを攫って行ったの』

「なんだと？　……いや、まずその『危ない！』ってどのくらい危なかったんだ？」

『それは……うぅ。ものすごかったの』

「そ、そんなにか」

赤くなるベルティナ。偵察兵の態度からものすごい想像をした。

『ユンカちゃん達も身動きがとれなくて、私だけじゃジンを助けられないんだよう』

「わかった。すぐに行く」

ベルティナは勝手に偵察兵の通信を切った。

＋＋＋

「というわけで団長。あたしはオーバの、じゃない友軍の救援に行きます」

「馬鹿を言わないでくれ」

1人で南軍に突っ込もうとした後輩に、リアトリスは呆れて自らの額を抑える。

「いいかベルティナ。連絡してきた彼女もそうだが、西軍の騎兵であるお前が東軍の工作兵を助けに行ってどうする。そんなに彼が大事か？」

「い、いいいや、そんなこと……彼だなんて……」

「……はぁ」

ベルティナはもじもじとして否定。

すっかり恋する乙女に変わってしまった女戦士の変貌にリアトリスは溜息をつくしかない。

「頼むから勝手なことをせずここにいてくれ。……ただでさえ私の事を『団長』と呼んでくれるまともな団員はお前だけなのに」
「は？」
「いいから待機だ。これは命令」
「……了解しました」

命令と言われて渋々頷くベルティナにほっとするリアトリス。

「よし。戦場までもう一息だ。先行部隊に合流し、このまま一気に行くぞ！」

《紅玉騎士団》をはじめとする本隊のメンバーに向けて、リアトリスは檄を飛ばす。

それに応える彼女達。

「「「はい。お姉様！」」」

女生徒のみで構成される《紅玉騎士団》の伝統とはいえ、このノリだけは廃れて欲しいと願う《烈火烈風》の騎士だったりする。

「……はぁ」
「団長……」

十十十

南軍の進軍ルート。その上空。

そこにいるのはベルティナに助けを求めた西軍の偵察兵、リン・エリン。

彼女がベルティナと知り合ったのは最近のこと。共通点は同じ2年生であることと、後輩の少年に『射抜かれた』ことくらい。

自力で飛行できるフェアリー族のリンは上空から南軍の動向を探っており、そこでジンを発見。

彼の活躍を遠くからこっそり見て応援していた。

「ベルちゃんが来てくれるまで私が頑張らないと」

攫われたジンの行方を探るため（この時点でジンを見失っている）、謎の覆面男を追って北軍の進軍ルートまで飛んでいくリン。

そして迷子になった。

「ふえーん。どうしてこの辺りだけ霧に覆われてるの？」

十十十

北軍は早い段階から偵察兵を掌握されていた。開戦前の偵察で安全と判断した進軍ルートでさえミストが流した偽情報だったのだ。

ミストの罠にかかった北軍は、3隊とも待ち伏せに遭い集中砲火に晒されている。

「偵察兵同士で通信ができません。他の部隊と連絡がとれず状況が不明です」

「はじめに相手の目と耳を封じるやり方は……《霧影》か？　マズイな」

しかし、北軍の大将もやられっぱなしではない。

水使いでもあるクオーツは《濃霧》という霧を発生する術式で部隊を眩ませた。《霧影》の御株を奪う手段で対抗したのだ。

しかも霧は別ルートを進む他の2隊を覆うほど広範囲に展開している。これは反則すれすれの、1度しか使えない北軍の切り札。

「これで飛び道具は狙いをつけられないはず。……やられたな。セイやセルクスは無事なのか？」

クオーツは霧の中で自分の部隊をまとめ、そのまま全速移動の指示を飛ばしながら南軍の工作兵を蹴散らして突破口を開く。

十十十

同じく北軍。3隊に別れた部隊の内、ミストに襲われずクオーツとは別の残り1部隊。

待ち伏せされた南軍の攻撃をディジーと共に耐えていたアイリーンは、周囲が霧に包まれたことに異常を感じ取った。

「シルバルム。この霧はおそらく《青騎士》よ」

「ディジーさん。……ええ。決戦フェイズで使うはずだった集団儀式魔術。これを使うほどの事が本隊であったと思います」

「おかげで私たちも助かったけどね」

霧による妨害で敵の攻撃が弱くなった。視界が悪いのでアイリーンはすぐさま《氷晶球》を展開。

彼女は《感知》の特性スキルを頼りにして《氷晶球》に辺りを哨戒させる。

《氷晶球》の感知範囲に何か引っかかった。

「そこっ！」

アイリーンは氷の球体が感知した方向に向けて《氷弾》を放つ。

「うわっ？」

「！　今の声は」

霧の中から聞こえるのは驚いた少年の声。

アイリーンの知っている、敵の声だ。

＋＋＋

騎馬戦の裏舞台。

ミストと合流しようと急いで移動していた覆面野郎のユーマ。

彼は途中立ち込める霧で北軍の部隊にすれ違ったことに気付かず、不意打ちを受けた。

目の前を掠めて飛んできたのは氷の塊。

「うわっ？」

ユーマは驚き、転がるようにしてうしろに跳ぶ。

「！　今の声は」

聞こえてきたのはアイリーンの声。

（アイリさんか！　マズイ。この霧の中でもしも感知範囲に入ってたら一方的にやられる！）

アイリーンから離れようと、一目散に逃げようとするユーマ。だが彼女に位置を探られる前に思わぬ助けが来た。

北軍本隊から来た伝令だ。

＋＋＋

「どうしてここにいるか知りませんが、逃がしません！」

ユーマを発見したアイリーン。感知した《氷晶球》に意識を集中して感知範囲を広げるが、そこに思わぬ邪魔が入った。

クオーツは北軍の偵察兵がほぼ無力化されていると読んで《蒼玉騎士団》の団員を直接伝令に派遣したのだ。

「本隊より伝令です！　この霧に乗じて包囲を突破して下さい」

「偵察兵を通さない伝令？　これは相当危ない展開みたいね」

事態を重く見たディジーはアイリーンに声をかける。

「聞いたわね。急いでここを突破するわよ」

「……」

だがアイリーンはユーマの探索に集中して返事をしない。

「シルバルム！　急ぎなさい！！」

「……わかりました。騎馬の皆さん、お願いします」

急かされて仕方なく指示に従うアイリーン。最後に声のした方へ一睨みしてディジーの騎兵に追随した。

ユーマを見逃したことが吉と出るか凶と出るか、今はわからない。

＋＋＋

東軍の工作兵を率いたティムスは本隊の殿を務めて敵の追撃部隊の猛攻を凌いでいた。

「少佐！　もうここは持ちそうにありません」

「だから誰が少佐だよ」

あの覆面野郎共め、とティムスは舌打ちしてトリモチ弾を装填したバズーカを撃つ。

指揮官でもある彼は命中の確認もせずにバズーカを投げ捨て、すぐに部隊へ撤退の指示を出した。

「持ち場を放棄する。偵察兵が煙幕を張ったそのあとで囮部隊を出せ。俺達も『前進』して次のポイントで奴らを迎え撃つ」

「「「了解」」」

西軍が強行突破なら東軍は鬼ごっこ。

彼らはあえて敵を引き寄せ、追撃されることで敵工作兵の進路と妨害をコントロールしている。

撤退戦のような行動をとっているが決して後退はしていない。東軍はあくまで前進、進軍していた。

＋＋＋

北軍の通信妨害をしていたのは報道部の幽霊部員。

彼女は元落ちこぼれの技術士崩れであったが、《エルドカンパニー》を除いて唯一ＰＣリングの解析に成功した人物でもあった。

ただその在り方はいわゆるハッカーである。今回は試験的に通信を傍受したり阻害したりしているが、ティムスの施したＰＣリングのリミッターの解除にもすでに成功している危険な存在。

その彼女、リリーナ・コンベスカは傍受した通信から迷子を発見。

迷子は少し前に別離した、今は簡単に会うことができない親友だった。

「……《黙殺》？　ちょっと出かけるわ。貴女はそのまま狩りを続けて。あとで連絡するから」

＋＋＋

「……了解」

黒いローブを纏う死神は宙を舞う。いつものデスサイズの代わりに騎馬戦用の棒を担いで。

元エース、現報道部幽霊部員の《黙殺》はユーマと同じく裏舞台で暗躍していた。

彼女が見かけたのは校舎の屋上で佇む東軍の偵察兵。

隣には何故かぐるぐる巻きにされた美少年が寝かされている。

「……何をしてるの？」

「ん？　……どわっ！？　ま、待て。味方だよ味方。ハチマキを見ろ。俺は東軍の偵察兵だ」

突然現れて棒を突きつけられた彼は慌てて両手を上げた。

「……味方？」

ちなみに《黙殺》は一応東軍の偵察兵に所属している。フード上

からハチマキを巻いて怪しさ抜群。

＋＋＋

ティムス率いる東軍の工作兵に足留めされる西と南の工作兵たち。

東軍はその隙に森林ステージへと姿を消して妨害部隊を撤いて行く。

「東軍が撤退していきます」

「追うぞ。ここまできて絶対に逃がすな」

森林ステージからさらに逃げるように散開していく東軍。

彼らはまるで枝分かれするように先へ進むほど部隊が細かく分かれ、散り散りになっていく。

迎撃部隊を突破した工作兵たちもさらに追撃をかけるべく、同じように部隊を分けた。

孤立した東軍の騎兵を次々と追い詰めていく。

しかし。

「くそっ、こいつらよく見れば騎兵じゃない。偵察兵だ」

「あっ、馬も下ろして逃げていくぞ」

「この馬も偽物だ」

かれこれ２０騎以上騎兵を倒した妨害部隊だがすべてハズレ。中には突然姿を消した騎兵もいたという。

「放っておけ。それより本隊はどこに……」

「うしろから東の工作兵だ！」

「挟まれただと？」

１度は撤退したティムス達の横やりが入った。そのまま工作兵同士の乱戦に突入。

「ここまで頑張ってもらったが悪いな。こっちはすべて陽動だ」

＋＋＋

「本当に撤退戦のようだな」

追撃から逃げる今の東軍の大将は敗戦の将そのもの。

だが彼は大将ながら陽動の要。敵の餌でもある。絶対に捕まらず、逃げ続けなければならない。

「作戦とはいえ敵は攻めることに気をとられ過ぎているな。いい加減陽動だと気付いてもいいだろうに」

ブソウはそう呟いて地図を確認。分岐ルートを確認して部隊をさらに分割する。

屋外演習場へ向かった東軍の部隊はすべて囮だった。

追撃されている東軍の騎兵は大将のブソウ、副将のミヅル除いて全て防衛兵や偵察兵、あるいはブソウの《紙兵》やティムスの《複製》したカカシで偽装したもの。もう３０騎ほど敵の工作兵にやられたが、本物の騎兵に実害はまったくない。

「いや、相手も偽物ばかり相手にしてムキになっているかもしれないな」

ブソウは分かれる囮部隊に指示を送りながらそう思い直した。

「ブソウ君。これで囮部隊はすべて行ったわ。次は？」

「このまま森林ステージから出て南区へ行く。エルドや囮のおかげで向こうもかなり分散した。これなら俺達２人だけでも突破できる」

「まったく。とんだ逃避行ね」

ミヅルは自分の身長よりも長い棒を手にし、軽く振って握りを確かめるとブソウに向けてにっこり微笑んだ。

「あなたも男なんだから、か弱い女の子１人くらいちゃんとエスコートしてね」

「クルスの剣を斬り飛ばしたお前のどこがか弱……いや、喜んで貴女様をお守りいたします」

いつの間にか喉元に突きつけられた棒。冷や汗をかいてブソウは発言を訂正した。

森林ステージを抜けて南区に向かう東軍の部隊はたった２騎。

残りの騎兵４８騎の行方は知れない。

＋＋＋

ふよふよー、と空を飛ぶユーマの精霊。

《交信》でユーマに呼ばれた風葉は砂の精霊が宿る《白砂の腕輪》をエイルシアから受け取り、「サラっちは重いですー」と文句を言いながらユーマの元へ向かっていた。心なしか飛び方が不安定。

一方、主戦場までもう少しといったところの西軍先行部隊。

敵工作兵を退け、一段落したヒュウナーは人馬の上でのんびりとモヒカンにした髪をを弄っていた。

「うし。セットは完璧。しっかしこの育毛剤はよう伸びよる」

ヒュウナーは一昨日、自慢のモヒカンを風葉に刈り取られたばかり。まさか2日で元に戻るとは思いもしなかった。

恐るべし、練金科の試作育毛剤。

ヒュウナーが風葉と遭遇したのはこの瞬間。

「ん？」

「あー」

すぱーん。

「あのチビ！　今度こそシメたるわ！！」

モヒカンを3度も刈られて怒り狂うヒュウナーを呆れた目で見るのはエイリークとアギ。

「何してんだあいつ？　落ちるぞ」

「暴れ足りないんでしょ」

小さな風の精霊に2人は気付かなかった。

モヒカンを刈り取った風葉は満足そうにふよふよー、と飛んで行く。

「さっぱりしましたー」

＋＋＋

最後は南軍。

ジンの奇襲以降ここは安定している。

「俺の、出番はっ、まだかぁあああああ」

以上。リュガの心の叫びでした。

＋＋＋

現在の各チーム損害状況

東軍騎兵：　５０→？？
西軍騎兵：　６０→４５
南軍騎兵：　４０→３６
北軍騎兵：１００→６２

そして騎馬戦はいよいよ決戦フェイズへ。

＋＋＋

騎馬戦　―決戦フェイズ―　1（前書き）

騎馬戦本戦、開始

騎馬戦　－決戦フェイズ－　1

＋＋＋

騎馬戦はいよいよ決戦フェイズ。

東西南北。４つのチームは激しい妨害と障害を乗り越え、決戦の舞台に現れようとしていた。

＋＋＋

騎馬戦　－決戦フェイズ－

＋＋＋

報道部特設、屋外実況席。

総合実況は報道部部長。

「進軍フェイズも終盤。この辺りでここ主戦場（メインステージ）で行われる決戦フェイズのルールを確認しようと思います」

部長は「ポピちゃんよろしく！」と解説役にバトンタッチ。

「説明が面倒だからって私に押し付けないでください。……決戦フェイズでは各チームの本陣に設置された大将旗を奪い合うことにな

ります」

解説役のポピラは仕事と割り切った。

騎馬戦の本戦となる決戦フェイズ。基本ルールは自軍の大将旗を最後まで守り抜くこと。

チームの勝利条件及び敗北条件は2つである。

1．大将旗の奪取

2．大将、副将両名の失格

各ユニットのルールは以下の通り。

騎兵：大将旗を奪うことができる。すべてのユニットに攻撃が可能

工作兵：参加不可。応援しましょう

防衛兵：騎兵への直接攻撃は禁止。妨害行為（進路を阻むなど）まで

偵察兵：全ユニットへの攻撃が禁止。ＰＣリング使用可

主力となるのはあくまで騎兵。飛び道具といえる魔術攻撃は騎兵

のみが許可される。

防衛兵と偵察兵は騎兵のサポートとして追随、あるいは障害物の設置や破壊を行う。

尚、特殊ルールとして大将の騎兵は自軍の大将旗を本陣から持ち運ぶことができる。ただし本陣以外の場で旗を落とすとチーム失格となる。

「もちろん運動会の総合ルール、ハチマキを奪われたりゲンソウ術を使うことによる負荷でハチマキを切ってしまうのも失格です」

「決戦フェイズは騎兵が１騎でも主戦場に入れば即開始！　さぁ、先陣を切って現れるのはどのチームだ？」

開始されたのはこれより１０分後のこと。

最初に主戦場に現れた『騎兵』は、西軍だった。

「遂にはじまりました騎馬戦の決戦フェイズ！　先攻を取って戦場を走り抜けるのは西軍大将、《烈火烈風》だぁ！」

＋＋＋

西軍騎兵：４５→３９

騎兵の進軍が1番早かったのは、やはり強行突破してきた西軍。

露払いを続けてきた先行部隊はもう10騎も残っていなかったが、本隊を1騎も失わずここまでやってきた。

西軍の先陣を切るのは副将の《鳥人》、ヒュウナー・フライシュと《旋風の剣士》、エイリーク・ウインディ。

「1番乗りはワイやで！」
「別にいいわよそんなの。このまま一気に行くわよ！」
「待て！」

勢いのまま主戦場へ突撃しようとする2人。彼らを呼び止めたのは西軍大将のリアトリスだった。

先行部隊はいつの間にか本隊に追いつかれていた。

「リア先輩？」
「お前達は本陣で1度休め。まず私達が行く」
「なんやて？　姐さん、あんたオイシイとこだけ独り占め……あああっ、待たんかい！」

ヒュウナーの文句に構わず、本隊は先行部隊を追い抜いて行く。

「お前たちの馬をしている奴らを見ろ。ここまでの強行軍で疲弊してしまっている」
「それは」

進軍の途中で休憩を挟んではいるが、騎兵の馬役が全ユニット中

1番疲れるのは確かだ。

1番近い敵の陣地まで２００メートル以上ある。今の状態で全速で走り抜けるのは正直きつい。

「5分でいい。馬を下ろして休め。いいな」

「リア先輩！」

リアトリスは陣地に本隊の騎兵を１０騎残して出撃。西軍の先陣に立って駆け抜ける。

彼女が主戦場へ駆け込むのとほぼ同時に、決戦フェイズの開戦を知らせる銅鑼が鳴った。

＋＋＋

進軍フェイズを1番に抜けることで得られるメリットは時間だ。

防備を整えていない敵本陣に攻め込める時間。逆に攻められる前に防備を固める時間。そして進軍フェイズで疲弊した騎馬の生徒を休ませる時間。

長丁場になる。リアトリスはそう思いエイリーク達を休ませることにした。西軍最大の武器はやはり彼女達の突破力だからだ。

何より大将である彼女は、この先制攻撃で敵陣の旗を取れるとは思っていなかった。

「団長！　東軍はもう」
「ああ」

リアトリスは本隊を追い越して先頭に立つと、まず周囲を見て３つある敵陣を確認した。

注目したのは東軍の陣地。遠くからでも進路妨害の柵など障害物が設置されているのが見える。東軍だけがすでに陣地構築を終えていた。

「成程。『騎兵』の到着だけは私達が早かった、というわけか」
「まさか、防衛兵だけを先行させた？」
「多分な。防衛兵や偵察兵は騎兵よりも身軽だ。全速で走らせれば騎兵より早く主戦場へ向かうことができる」

東軍は進軍するのに大掛かりな陽動をかけた上で遠回りをしている。進軍が遅れるのは当然であり、決戦フェイズに間に合わないことは彼らも理解していた。

だが開戦に騎兵は間に合わなくても防衛兵だけなら間に合うとも計算していた。森林ステージで散り散りになった東軍の防衛兵たちはそのまま主戦場へ向かったのだ。

工作兵のターゲットは騎兵が優先。ティムス達味方の工作兵の援護に加えて騎兵を囮（それさえ囮だったが）にすることで東軍の防衛兵たちは最小の被害で１番に主戦場に到着。決戦フェイズに十分備えることができた。

「騎兵の防衛よりも本陣の防御を優先させるなんて……」

「『騎兵の到着まで開戦されない』か。ルールの裏を突いてきたな。ブソウというよりもミヅルの案か？」

何か罠を仕掛けているかもしれない。とにかく東軍を強襲するのは難しいことがわかった。

リアトリスは狙いを陣地構築の終わっていない北軍に定め、本陣を攻めに行く。

＋＋＋

東軍騎兵：　？？
西軍騎兵：　３９
南軍騎兵：　？？
北軍騎兵：　３０

＋＋＋

「初戦は彼女を相手に防衛戦か」

北軍大将、《青騎士》のクオーツはリアトリスの接近を確認すると本陣の前に部隊を展開。迎え撃つことにした。

「迎撃する。防衛兵は急いで柵を用意。敵に橋をかけられないように気を付けろ！」

各陣地は大将旗を中心に周囲を四角に溝が掘られているだけの代物。防壁や柵等各種トラップは各チームで用意しなければならない。

溝は幅、深さ共に２メートル程。ユーマは塹壕と呼んでいたが、役割は騎兵の侵攻を妨げる障害物そのもの。最終防衛ラインでもある。

陣地構築が終わっていない北軍はクオーツの部隊が突破されるとこの塹壕しか大将旗を守るものがないのだ。

攻めてくる西軍の騎兵２０騎を前に、北軍の騎兵３０騎が横に並ぶ。

「西軍の陣形は魚鱗か。……単純な一点突破が俺に通じると思うなよ」

西軍の仕掛ける魚鱗の陣とは、左右をやや後方に下げ、中央を突出させた陣形。

攻撃的な布陣だが、部隊を密集させることで集団戦に対して防御にも厚みを増している。

対する北軍は中央に構えるクオーツの指揮で左右の部隊が進出した。

鶴翼の陣。左右に部隊を広がるように展開させ、敵軍を覆い包む陣形。兵力に有利な程効果を発揮する包囲戦術だ。

西軍は一騎でも抜ければ旗は取れる。包囲されていくのも構わず北軍の大将旗を目指して突撃。

騎馬戦の初戦は《青騎士》対《烈火烈風》。蒼紅の騎士対決。

「《青騎士》！」

「勢いはあっても数はこっちが上。初撃さえ凌げば俺の勝ちだ、《烈火烈風》！」

部隊の後方でリアトリスの突撃を迎え撃つクオーツ。

リアトリスは突っ込んだ。

「お前は！」

彼女はそう、《青騎士》らしいものに向かって突っ込んだのだ。

「お前たちは一体何だ、そのっ、着ぐるみはぁあああ！！」

リアトリスは絶叫しながら人馬に乗った青い馬と武器を交える。

北軍はもこもこだった。

＋＋＋

着ぐるみは北軍の秘策の１つ。彼らは進軍中、《濃霧》に身を隠した時に着替えていた。

うさぎ、たぬき、きつね、くま、りす……とデフォルメされたかわいらしい動物たちが西軍を囲みだす。

「でたぁ！　愉快な森の仲間たち！！　北軍はなんと全員着ぐるみ装備だー」

「かわいい！　あれ、一体なんですか？」

「一応、《組合》で作った防具です」

実況席でもこもこ軍団に目を輝かせるエイルシア。ポピラは目を逸らしながら質問に答えた。

「防具と言ってもメリィベルさんの使う魔獣から作った着ぐるみとは違う、本当の着ぐるみです。ですが無駄に素材の良いものが使われていて、打撃や衝撃に強くできています」

強くかわいらしくをコンセプトに開発された着ぐるみ防具。デザインはＰＣリングの幻創獣も任された芸術科の人気絵師による。

武器が制限されている騎馬戦においてこの着ぐるみは、簡易戦闘衣よりも丈夫で鎧なんかよりもはるかに軽い。全身を守れることもポイントだ。

「量産されていただけでなく躊躇いもなくこれを着る人がいたなんて……馬鹿ですか？」

ポピラは北軍すべてに向かって言った。

十十十

激突する北軍本隊と西軍主力部隊。

ここで問題になるのは、北軍がすべてかわいい着ぐるみ軍団であり、西軍の騎兵が《紅玉騎士団》をはじめとする女生徒ばかりだということ。

「完全に囲まれる前に包囲を突破するぞ」

「でも……敵がかわいすぎます！」

「この子達を叩くなんて」

西軍は、着ぐるみのせいで突撃の勢いを殺されるほど戦意が削がれている。

「この子なんて言うな！　ええい」

武器を振り上げるのはリアトリスが騎士団で最も信頼を置くベルティナ。

蹴散らそうと手にした棒で着ぐるみの頭を殴る。

きゅーん

叩かれたきつねさんが悲しそうに鳴いた。

「あ……」

つぶらな瞳がベルティナに訴えている。

――ぼくをいじめないで

ベルティナはときめいてしまった。次に激しく後悔。

「あ、あたしはなんてことを……」

「きゃーっ。もう駄目！」

「このかわいさ、凶悪すぎよ」

この着ぐるみ、頭を叩くとかわいい鳴き声で鳴く仕掛けが施されていた。

もしかすると着ぐるみには《魅了》の術式を付与されてるかもしれない。西軍の大半が戦意喪失し、攻撃できないでいる。

北軍はそのまま鶴翼の翼を広げるように西軍を包囲してしまう。敵軍本陣の前で四方に攻められて防戦一方の西軍。

彼女達のささやかな抵抗は、もこもこした着ぐるみとかわいい鳴き声が防いでしまう。

「クオーツ！　貴様、なんて卑劣な」

あまりの展開にクオーツの馬面（文字どおりの）を睨みつけるリアトリス。

「これは運動会だ。このくらいの余興はいいと思うぞ」

何故か彼の被り物だけは妙にリアルだ。見つめると怖い。

リアトリスが真面目に戦うのが馬鹿らしくなる時点で着ぐるみ効果は存分に発揮されていた。

「まあ、本当はミツルギの置き土産だ。戦意を削ぐか挑発するだけの策だと思ったが……まさかここまでとはな」

クオーツは苦笑したようだがよくわからない。馬面だし。

「こうなったら、疾れ、炎！」

状況を打開しようとリアトリスは棒に炎を纏わせる。

「着ぐるみなど私が燃やせば」

「させないさ。こんななりをしても忘れるな。お前の相手をしているのはこの俺、《青騎士》だ」

リアトリスは着ぐるみたちを燃やそうと炎を飛ばすが、クオーツが水の散弾ですぐにかき消してしまう。

そのまま2人は《烈火剣》と《水槍》をぶつけ合った。打ち合う度に周囲に立ち込める水蒸気。

「くっ、馬のくせに。それこそ貴様の手は蹄じゃないのか？」

「そこまではな。でもいいのか？　北軍には俺だけではなくあいつもいるぞ」
「！　まさか、この着ぐるみは」
リアトリスは気付いた。
この『もこもこ動物大作戦』が、別に余興でふざけたわけではなかったとしたら。
「《獣姫》か！」
「そうだ。セルクスは近接戦、いやパワーなら《剣闘士》を上回る《狂戦士》。普段のあいつなら目立ってしょうがないが」
さあ、どうする？　青い馬は挑発するようにわざとヒヒン、と鳴いてみせる。
「この着ぐるみ軍団に紛れたセルクスの強襲。いつ来るかわからないそれに、お前たちは耐えられるのか？」
クオーツの部隊の後方から、北軍の分隊が現れたのはこの時だった。
＋＋＋
東軍騎兵：　？？
西軍騎兵：　３９
南軍騎兵：　３６
北軍騎兵：　３０→５１

十十十

南軍本陣。

「偵察兵からの情報は？」
「はい。西軍の陣地には騎兵１０、防衛兵約５０」
「東は防衛兵が約７０。あとは大将と副将のみです」
「ブソウ君とミヅルちゃんだけ？」

副将で総指揮を執るマークは、本陣で防備を固めながら作戦を考える。

檻の中の大将、クルスはなぜか大人しい。

「進軍に遅れてる？　クルス、東軍をどう思う？」
「どうでもいい。あの2人は攻めよりも守りに長けている。たった2騎でも防衛兵がいればすぐには落とせない」
「そうなんだよね」

でもチャンスなのは違いない。リアトリス達のいない西軍の本陣も。

「よし。東に２０騎、西に《黒耀》の魔術師騎兵を6騎出そう。防衛兵はそれぞれ５０ずつ。それで僕が西に行く」
「俺は？」
「留守番だよ。本陣に8騎置いておくから僕らの大将は防衛の指揮を執ってね」
「……」

クルスは顔を顰める。

「やっぱり怒ってる？」

「そんなことはない。悪いと思うならさっさと西軍を落としてこい」

「うん。……ごめんね。ロア君かリアちゃんが来た時はちゃんと君に任せるから」

「ああ」

マーク出撃。南軍は東と西の２面同時攻略をはじめた。

（あれ？　もしかして僕は何か見落としてる？）

（気付かれてないな。時間はかかったが手枷は切れた。あとはこいつさえいなくなれば……）

マークが見落としているのは、かつてクルスが《闘気剣》で《黒鋼壁》を切り裂いたことがあるということ。

クルスが脱獄するのは時間の問題。

＋＋＋

東軍騎兵：　２
西軍騎兵：　３９→３４
南軍騎兵：　３６
北軍騎兵：　５１

＋＋＋

東軍本陣。

「北軍です。数は騎兵１０、防衛兵５０」
「ミヅル、そっちを頼む。防衛兵は５０で足りるか？」
「それでなんとかするしかないでしょ。あの子たちが来るまで」

ブソウはミヅルの返事を聞くと、すぐに残りの防衛兵２０人を連れて南軍の侵攻を抑えに行った。

正直言って東軍は騎兵が圧倒的に足りない。騎兵を攻撃することができない防衛兵は、動く壁にしかならないからだ。

防衛兵同士をぶつけあわせれば必然と騎兵同士の戦いになってしまう。

侵攻してくる北軍に対するミヅル隊の戦力比。単純な数にして１対１０。

「こうなると……打って出たほうがいいわね」

そう言ってミヅルは防衛兵に指示を出す。

「あなた達は塹壕付近で待機。私も敵の防衛兵には流石に突破されるでしょうけれど、橋をかけられたりしなければ、騎兵にこの溝を越えることは難しいから」

「まさか大佐1人で立ち回るのですか？」
「……まだ続けるの？　その帝国風階級制度」

呆れながらも仕方ないでしょ？　とミヅル。

「守るより抑え込んだほうが確実なのよ。……いい？　敵防衛兵に騎兵を通す『道』を作らせないでね」
「「はっ」」

東軍の副将は陣地を守る防衛兵達に見送られ、たった1騎で出撃した。

ミヅルが単騎で進んで、対峙したのはかわいい森の動物たち。

「くーん」
「なー」
「こんこん」
「あら？　随分と可愛らしい襲撃者ね」

ミヅルは着ぐるみ達の前で人馬を止めて、背負った棒を抜いた。

「にゃー」
「そうね。私も普通科に所属する、本が好きで大人しい『普通の女の子』だから、あなたたちみたいな子を棒（これ）で『斬り飛ばす』なんて躊躇うわ」
「……ぽこぽん」

誰も突っ込めない。

たぬきさんもおなかを叩くだけ。

「でも……」

ミヅルは微笑んだまま、手にした棒を振るった。

「中身もかわいい子だったらね」

「「「！？」」」

その振りは彼女が愛用する大太刀、《斬鬼首切丸》だと誰もが幻視してしまうほどの鋭い剣閃。

彼女は《賢姫》。数々の武勇伝を持つエースにして普通科の学年主席。

裏の２つ名は《剣姫》。あるいは《剣鬼》だといわれ恐れられている。

ミヅルが飛ばした『斬撃』は、地面に線を引いた。

１０メートルほど離れた動物たちの足元に。

「あ、あのっ、これは……」

「あら、幻聴かしら？　くまさんが人の言葉を喋るなんて。……飛ばすわよ」

微笑む大和撫子。何を飛ばすのかミヅルは話さなかった。

「が、がうー」

うすら寒い笑みを見て、くまさんは怯えるように鳴いた。中身は泣いてるかもしれない。

ミヅルの武勇伝は学園でも有名。ほかの動物たちも首の付け根を手で抑えながらびくびくしている。

「いい？　その線が私の間合い。動物さんたちは線から先へ越えないでね。……狩るわよ」
「ヒィッ！？」

ミヅルは北軍の侵攻を威圧するだけでしばらく抑え込んだ。

＋＋＋

騎馬戦　―決戦フェイズ―　2（前書き）

中盤戦

騎馬戦　―決戦フェイズ―　2

＋＋＋

東軍騎兵：　2
西軍騎兵：　30
南軍騎兵：　36
北軍騎兵：　50

＋＋＋

北軍対西軍、北軍本陣防衛戦。

北軍の着ぐるみのかわいさに出鼻を挫かれた西軍は先制攻撃に失敗してしまった。

その間に北軍は増援が到着。布陣が厚みを増すことで、西軍はますます包囲を突破することが困難になる。

「要は仮面と同じなんだ。顔を隠すことで本性を晒し、積極性や攻撃性が増す。いや、動物になりきることでセルクスのように力を引き出しているのかもしれん」

着ぐるみは単にかわいさアピールや生徒の見分けをつけなくするだけではなかったと、クオーツは改めて着ぐるみ作戦を語る。

「馬鹿にはできんな。ミツルギの言う『コスプレ』というやつは」
「何を馬鹿なこと！」
リアトリスは棒に付与した《烈火剣》の刀身を伸ばし、ノーモーションで突き技を繰り出した。
不意を突いたつもりだったが、対するクオーツは手にした《水槍》を瞬時に《水盾》に切り替えて剣を受け止める。
「ええい、駄馬め。ふざけるのも大概にしろ」
「やめろ。鬣が焦げる」
クオーツは《水盾》で《烈火剣》を押し返した。
騎兵同士、騎馬同士の単純な力押し合い。リアトリスは押し負けて騎馬ごとうしろに下がる。
「くっ！」
「《紅玉》の副団長を連れてこなかったのは失敗だったな。隊を包囲した以上、お前を抑えてしまえば俺達が負けることはない」
「まだだ」
そうは言っても西軍の攻撃部隊は残り１１騎。包囲された状態で壊滅は時間の問題。
だからリアトリスは待った。
「リア先輩！」
「！　来たか」

リアトリスの隊の後方から駆けてくるのはエイリークを先頭にした西軍の増援部隊。

進軍フェイズで消耗していた先行部隊の騎兵たちだ。

「覚悟しろよ北軍。ここからが私達の攻撃だ」

リアトリスは、苦戦する自分の隊に向かって声を張り上げる。

「全軍に告ぐ！」

「「「！」」」

「人形遊びはここまでだ。お姫様の道を開けろ！」

「「「はい！　お姉様！！」」」

「……」

この返事を聞く度に微妙な顔をするリアトリス。

それはさておき、リアトリスの指示（お姉様パワー）を受けた彼女達は戦意を取り戻し、今までの態度が嘘だったように着ぐるみたちを押し返しはじめた。

元々北軍が編成した１００騎もの騎兵は半数以上が一般生徒だ。戦闘訓練を受けている《紅玉騎士団》の敵ではない。

少しの間だけ隊列を2つに割って中央を空け、エイリークの騎兵隊はその道を突き進む。

そしてエイリークは単騎でリアトリスとクオーツのもとへ。

「エイリーク、任せたぞ」
「はい！」
「何だと？」

驚いたのはクオーツ。リアトリスがエイリークと入れ替わるように下がったのだ。

「行くわよ！」

そのままエイリークはクオーツに挑みかかる。

＋＋＋

「《旋風の剣士》。君がエースに挑むのはまだ早い」
「馬に跨る馬が偉そうなこと言うな」

エイリークが振り上げる《旋風剣》に対し、クオーツは《水槍》で迎え撃つ。

激突。しかし、クオーツの槍を正面から受けたのはエイリークではなかった。

「うぉらっ！」
「この力は？」

アギだ。エイリークの馬を担いでいる彼がクオーツの槍を《盾》で受け止めた。

「……そうか。君が《盾》。だが2人がかりでも」

「悪いな、馬の先輩。ここは俺達だけじゃないんだ」

「何？」

その時、エイリーク達の背後から飛びだし、クオーツの頭上を越えて翔け抜けるのは西軍の副将。

ヒュウナーだ。

西軍は狙いは最初から一点突破。北軍に主力をすべてぶつけて波状攻撃を仕掛けて来た。

「《鳥人》！？　待……」

「今よ！」

エイリークの掛け声でアギは《盾》を解いた。

均衡が崩れた所にエイリークは、クオーツに向けて必殺の突き技を放つ。

《旋風剣・疾風突き》

＋＋＋

突撃するエイリークのほぼ真うしろについていたヒュウナーの騎

兵。

「もらったで《青騎士》。北軍の大将旗はワイらのもんや！」

エイリークとアギがクオーツと激突したとほぼ同時にヒュウナーは自分の馬から宙へ飛びだした。エイリーク達の妨害もあってクオーツは出遅れた。

クオーツの頭上を抜けたヒュウナーは《天駆》で宙を踏み切り、急上昇。上空から北軍の本陣へ飛び込んでいく。

ヒュウナーもハチマキの制限で《天翔術》による長時間の飛行はできないが、大将旗まであと少し。一気に勝負に出る。

アイリーンやディジーが率いるうさぎさんたちが魔術による対空砲火でヒュウナーを迎撃するも、幾多の修羅場をくぐりぬけた《鳥人》を撃ち落とすことは誰にもできない。

「うさ公が、大人しくワイに狩られろ！！」

ヒュウナーはうさぎさんの群れに突っ込んだ。

ガキィッ！

《鷲爪撃》を受け止めるのは《氷晶壁》。

「負けません！」

「そうかい」

ヒュウナーの攻撃を防ぎきるアイリーン。

だが、上手だったのは彼の方。

「よっ、とぉ」

「なっ！？」

「ナイスアシストやったで」

氷の壁を足場にしてヒュウナーはもう1度空へ。これで北軍の最終防衛ラインを飛び越えた。

残るは北軍の大将旗のみ。

「貰ったぁ！」

飛び込みながら大将旗に手を伸ばすヒュウナー。

そこに、ヒュウナーの逆方向から土埃を上げて走る1騎の騎兵が。

＋＋＋

「うおぉぉぉぉぉっ」

うさぎのように長い耳を垂らしたくまさんが、雄叫びをあげながら大将旗めがけて突進してきた。

「ん？　なんや……ぶっ！？」

ヒュウナーの顔面を捉え、『うさベアさん』のぶっとくて、もこもこした拳が唸る。

クリティカルヒット！

「あれは……もしかして《獣姫》？」

「やっと来たわね。どこをほっつき歩いていたのかしら」

呆れたように拳を振るうくまさんを見て呟くディジー。

「べあーっ、なっこぉーーっ！！」

《獣姫》の拳は、突撃の勢いとくまさんパワーを合わせ、ヒュウナーを空の彼方へ殴り飛ばした。

＋＋＋

一方、エイリークは渾身の必殺技をクオーツに容易く止められて戸惑っている。

「……何よ、その術式」

「渦潮だ。あらゆる攻撃を『飲み込む』特性がある」

《旋風剣》を受け止めたクオーツの水の盾は円形で、中心で盾を形成する水が渦を巻いている。

《渦潮の盾》は《水盾》から派生する水属性と風属性の複合術式。エイリークが棒に付与した竜巻は、すべてこの渦潮に飲み込まれてしまった。

「旋風剣が通じないなんて」

「まずいぜ姫さん。ヒュウも失敗しやがった」

「だから言っただろう。君たちがエースに挑戦するのはまだ早「クオーっ！」」

「……」

クオーツの台詞に被さるように叫ぶのは《獣姫》、メリィベル・セルクス。

彼女はヒュウナーをぶっ飛ばしたあと、慌てるようにクオーツの下に人馬を走らせてきた。

クオーツは溜息をもらす。

「……セルクス。間に合ったのはいいが、今までお前はどこで」

「セイがいないんだ」

「何？」

クオーツの顔色が変わった。

いや、今も彼は馬面で表情がわからないのだが。

＋＋＋

メリィベルは進軍フェイズの時から部隊を離れ、ずっと生徒会長を探していた。

でも彼女は生徒会長を見つけられず、学園中を散々探しまわった挙句にもしかしたらと主戦場にやってきたのだ。

ヒュウナーの襲撃に間に合ったのは偶然だった。

「クオが進軍中に《濃霧》を展開しただろ？　その時メリィはセイが危ないって思ったんだ。でも……」

「あの時からいないというのか？」

「うん。クオ、セイはここにはいないのか？　だったらメリィは……どうしよう」

うなだれるうさべアさん。

メリィベルは生徒会長の護衛という立場以上に彼を守るという使命を大事にしている。

それはクオーツも同じこと。彼はエイリークと対峙しながら必死になって考える。

（落ちつけ。……今はまだ深刻な事態になるわけがない）

どうでもいいが、傍目からは馬とくまの会話だ。

なんともシリアスに欠ける生徒会長の側近。

（セイが行方不明になったのが《濃霧》を発動した時からだとすれば、一番怪しいのは……）

あの赤いマフラーが思い浮かぶ。

――フフ。真実（はんにん）は……俺だ！

「あの似非忍者が」

「クオ？」

「セルクス、南軍だ。セイは《霧影》に捕らわれている可能性が高い」

「セイはそこにいるのか？」

縋るようなくまさんのつぶらな瞳。

「かもしれん。だからセルクス、このまま西軍を蹴散らして南軍を攻めるぞ」

「わかった！」

途端に元気になったメリィベル。彼女はいそいそと着ぐるみを脱いで……

「「「「ぶっ！」」」」

露わになる半裸の美女。

近くにいたエイリークの馬を務めるアギ以下の男子達が思わず噴いた。

「だから人前で脱ぐな！」
「ん？」

無頓着なメリィベルをクオーツは慌てて霧で覆った。

＋＋＋

「何してるのよ。ほら、今の内に」
「ち、ちょっと待て」

リアトリス達が離脱し、ヒュウナーが襲撃に失敗した為にエイリークとアギは北軍のど真ん中で孤立している。

エイリークはクオーツが油断してる隙に、鼻を抑えるアギ達を足蹴にして離脱を急がせていた。

「早く、リア先輩の所へ」
「わかったから後頭部を蹴るな。また血が」
「うるさい！　さっさと走る」

北軍に背を向けてエイリーク達は全力疾走。

道を阻む敵は2人が《旋風剣》と《盾》を交互に繰り出して、強引に押し進む。

「悪いが、このまますんなりとは逃がさん」

クオーツはエイリークの逃走に気付くと、追い掛けずに狙撃することを選んだ。

「君たちは厄介だ。倒せる内に倒させてもらう」

《水弓》を構え、背を向けるエイリークを背後から狙う。

「させないぞ。《青騎士》！」

クオーツを呼び止めるのは彼の前方、エイリークの向かう先にいる《烈火烈風》の騎士。

＋＋＋

一時離脱したリアトリスはエイリークの連れて来た増援と共に部

隊をまとめ直し、新たな布陣を敷いてきた。

「《烈火烈風》！　それはまさか」

「鳳翼の陣。今回のとっておきだ」

その陣形は、北軍の敷いた『鶴翼の陣』とは真逆の配置。中心に立つリアトリスを前に、左右の部隊が後方に広がるように展開している。

この陣形に戦術的な意味はあまりない。これはルールの下でリアトリスの力を最大に発揮する為の布陣だ。

運動会の総合ルールで制限をかけられたゲンソウ術。ハチマキを切らずに大技を繰り出す方法は１つだけ。

集団で術式を発動させること、つまりは力を合わせること。

進軍フェイズではクオーツが広範囲に《濃霧》を展開したのと同じ方法だ。特殊な準備、又は陣形を組むことで術者の負荷を皆に分散させるのだ。

それは集団で行う古い魔術の発動方法。

儀式魔術と呼ばれる技術の応用だ。

「倒せる内に一気に倒す。これで勝負を決めるぞ！」

リアトリスはゲンソウ術を発動。彼女の背後から左右に炎が疾り、翼のように広がって後方の部隊を包み込む。

鳳翼の陣。リアトリス達が一体となり、鳳凰が翼を広げた姿を模した陣形から放たれるのは、火属性殲滅術式。

リアトリスが《幻創》するのは炎を纏う大鳥。

《烈火烈風》。《Ａナンバー》で最高の火力を誇る第３位の魔法騎士。

彼女だけのゲンソウ術。

巨大な鳳凰を前にした北軍は被り物の中で誰もが青褪めていた。

噂レベルだとしても、誰もがその技の恐ろしさを知っているからだ。

「あ、ああ……」

「逃げろ！　《鳳》が来るぞ！！」

「残念だがこっちは《凰》だ。……凰よ、大鳥の女王よ。啼いて炎を喚び起こせ」

凰は雌の鳳凰。翼を広げた凰の啼哭が戦場に響き渡る。

「嘘だろ。このデカさは皇帝竜どころじゃねえぞ」

「これがリア先輩の《鳳凰術》。……これで半分以下の力なんて」

エイリークとアギは鳳凰の姿に驚きながらもリアトリスの射線から外れる為に急いで走る。

鳳はその間もリアトリスの呼びかけに応じるように啼き続け、特大の炎を招き寄せる。

その啼き声は敵味方問わず、戦場に立つすべての生徒を震わせた。

「リア先輩、今です！」

エイリークが今、リアトリス隊の前を走り抜けた。

「散開して遠くへ離れろ！　くっ、駄目だ。間に合わん」

「食らえ北軍！」

クオーツは悪あがきのように部隊に指示を飛ばすがもう遅い。

《烈火烈風》がその力を遂に発揮する。

「鳳啼波！！」

幻創の鳳凰が啼き叫ぶ。

鳳が熾す炎の大波がクオーツ達を飲み込み、北軍の本陣へと向かっていく。

『うさべアさん』の頭が熱風でどこかへ飛んで行った。

＋＋＋

東軍騎兵：　２
西軍騎兵：　３０→２７
南軍騎兵：　３６
北軍騎兵：　５０→？？

＋＋＋

「被害の確認を急げ！　隊列を組み直すぞ」
「了解です」

《凰啼波》の被害は直接攻撃を受けた北軍だけでなく、リアトリスの隊までも及んでいた。

《鳳凰術》の多大な負荷に耐えきれず、術式の負担を請け負った騎兵や防衛兵がハチマキを切ってしまっていたのだ。

「反動で騎兵がやられてしまいました。エイリーク騎を合わせて本隊は残り１２騎です」
「やはり威力の調整に無理があったか。だがこれで」
「そんな……北軍の大将旗は健在。さらに前方より《獣姫》及び《青騎士》、来ます！」
「なんだと！？」

偵察兵からの報告にリアトリスは耳を疑った。

《凰啼波》はハチマキのルールに合わせた為か本来の３割程度の

威力しか発揮していない。加減したとはいえ、着ぐるみごと全身を炎で焼かれた北軍がすぐに動けるとは思いもしなかったのだ。

「ばうわうー！」

北軍の先頭を走るのはメリィベル。間一髪で着替えに間に合ったらしい。

彼女の新たな着ぐるみは黒いわんちゃん。両手にも犬の顔を模した人形型グローブをつけて、口をぱくぱくさせている。

３つの頭を持つそれはケルベロス。炎を食らう地獄の番犬。

またの名を『けるベル子』。

「全軍、突撃！！」

「「「「あ〝ーー」」」」

焼け焦げた嫌なにおい。地の底から這いずるような呻き声。

炎の波を突き破って迫りくるのは『かわいかった』動物たちだ。

『かわいい鳴き声機能』も壊れてしまっている。

北軍の、無駄に高性能な着ぐるみは耐火性能にも優れ、《鳳啼波》に飲み込まれても『中身』を守りきっていた。

ただ、流石に無傷とまではいかなかったようだ。着ぐるみは焼け爛れ、原型を留めないほど溶解したり炭化してしまっている。

青い馬だったクオーツも無残な姿だ。ドロドロに溶けた馬面。鬣は燃やされたせいか炎色反応を起こし、青い炎を靡かせている。

まるで死霊系の魔獣のよう。業火に焼かれて尚も動く、アニマルゾンビと化した北軍。

火葬行列というべきか？　燃えながら集団で襲いかかる姿はまさにホラーだ。

「耐えられただと？　なんだ、あの着ぐるみは！？」
「どうしましょう。正直あんなの相手にしたくありません」
「気持ち悪い……」

西軍の彼女達は燃えるゾンビと化した着ぐるみたちを前に、明らかに引いている。

まだ愉快な森の仲間たちのほうがよかった。

「くっ……退却する。一旦本陣まで下がるぞ」
「リア先輩！？」
「君も下がれ、エイリーク。私達は切り札を使いきり《鳥人》もやられた。これ以上の戦闘は無理だ」

大敗を認めるリアトリス。自軍のガタ落ちした士気を見て、北軍を迎え撃つことは不可能と考えた。

「ここまで追い詰めたのに」

「ああ。だがこれ以上の損害はいけない。君までやられると逆転は不可能になる」
「……わかりました」

エイリークも先輩の指示には大人しく従い後退。

西軍は敗走し、北軍の追撃を受けることになる。

＋＋＋

東軍騎兵：　２
西軍騎兵：　２７→２２
南軍騎兵：　３６→３２
北軍騎兵：　５０→３１

＋＋＋

北軍対西軍の戦いにひとまずの決着がついた頃。南軍対東軍の戦いも新たな展開を迎えようとしていた。

南軍の部隊は騎兵２０に防衛兵５０。

対する東軍は大将のブソウと防衛兵２０。

この戦力差で今まで東軍が持ちこたえられたのは、周到な準備をして構築した防御陣地によるところが大きい。

張り巡らされた防護柵が敵騎兵の進路を限定させ、少ない防衛兵で対処できるようにしていたのだ。

さらには妨害トラップまで用意。中でもブソウの符術トラップは強力だった。予め進路の要所に仕掛けておいた札を媒体に《紙兵》を突然喚びだすのだ。

ブソウもルール制限で同時展開、操作できる《紙兵》は限定されている。彼は伏兵として《紙兵》をピンポイントに展開することで伏兵のように扱い、兵の数を補っていた。

《一騎当千》。ブソウの二つ名であるその由来は、1人で千もの兵力を展開できることだけでなく、《紙兵》を用いた千もの戦術を扱えることにもある。

南軍の騎兵が1騎、防衛兵を蹴散らそうと突進を仕掛ける。

「このっ、邪魔するな！」
「うわっ」
「札を構えろ！」
「！」

ブソウの掛け声に防衛兵は、事前に持たされた《紙兵》の札を取り出す。

「疾ッ！　《五衛兵》、押し返せ」

ブソウは轢かれそうになった防衛兵の前に五人組の《紙兵》を展

開した。

盾を使った5人同時の体当たりに騎馬を崩される南軍の騎兵。

騎兵を倒すと同時にブソウは《五衛兵》を消した。ハチマキにかかる負荷を抑える為だ。

「将軍、助かりました」

「その呼び方はどうにかならないか？　……防衛ラインを下げる。皆に伝えてくれ」

「はっ！」

善戦するブソウ達。しかし彼の《紙兵》は使い捨てであり、仕掛けている罠も数に限りがある。消耗する一方の防衛戦。

限界が近いとブソウは思っていた。

そこに悪い知らせがブソウに届く。

「北軍が本陣を攻撃！　残された防衛兵が迎撃を開始」

「何？　ミヅルはどうした」

「大佐は《獣姫》と交戦。苦戦しています」

北軍は膠着状態だった東軍の侵攻部隊にメリィベルを派遣。それで均衡が崩されてしまった。

「くそっ。まだか、コロデは」

「将軍！　南軍が1騎、第3次防衛網を突破」

「こっちもか！？」

「は、速い！　あの障害物の中を通常の騎兵の3倍のスピードでこ

ちらに向かってきます」

驚愕してブソウに報告する偵察兵。

「1騎だと？　まさかクルスが」

「違います。あの赤い髪は……《バンダナ兄弟》の赤いほうです」

「リュガだと！？」

気付いた時にはもう、リュガはすぐ傍まで接近していた。

＋＋＋

脅威的なスピードで駆けるリュガの騎兵。これには1つ仕掛けがあった。

彼と同じく南軍に所属するセリカ・フォンデュ。彼女が使う《活性》の術式でリュガの馬を担ぐ生徒を一時的に強化しているのだ。ドーピングである。

東軍の罠を力づくで蹴散らし、突き破って進むリュガ。人馬なのに落とし穴を走りながら跳び越えるという荒技まで使ってきた。

ブソウの展開する《紙兵》の壁にリュガは《高熱化》を付与した棒を振るう。

特性上、熱や火に弱いブソウの《十人兵》は1撃で燃やされた。

「悪いなブソウさん。通してもらうぜ」

「……あまり俺を舐めるなよ」

大将自ら棒を手にしてリュガに攻撃を仕掛ける。

ぶつかり合う2人。

騎手の力は互角だったが、彼らを支える馬のパワーに大きな差があった。

「押せぇ！！」

「「「「うおおおおっ」」」」

「っ、この力は」

《活性》されたリュガの騎馬がブソウの騎馬を押し始める。

力負けしたブソウの騎馬が一瞬だけぐらついた。その隙を見逃さず、リュガはブソウを抜き去る。

「おっしゃああ！」

「しまった。まて！」

ブソウは急いで後方に仕掛けた《紙兵》トラップを次々と発動させた。だが《高熱化》や《熔斬剣》を使えるリュガの前では文字通り紙の壁でしかない。

リュガは進路の邪魔をする最後の障害物、塹壕の溝を馬と一緒に跳び越える。

同時にリュガは手にした棒を投げ捨てた。彼の目の前にあるのは東軍の大将旗。

「もらったぁ！！」

リュガは騎馬ごとジャンプ。大将旗に手を伸ばす。

しかし、リュガは知らなかった。

同じ展開でヒュウナーは失敗していたことに。

「キエエ――イ！！」

奇声のような雄叫びをあげてリュガに飛びかかるのは、彼と因縁のあるサムライ少年。

シラヌイ君だ。

＋＋＋

騎馬戦　最終決戦１（前書き）

終盤戦。エイヴンの戦い

騎馬戦　最終決戦1

＋＋＋

一方その頃。

西軍の本陣で行われていた攻防戦は呆気ない結末を迎えていた。

南軍の攻撃指揮を執っていた副将のマークが何者かに倒されたのだ。

背後からの1撃だった。

「……あはは。まさか君がそんな手でくるとは思わなかったよ」

馬を叩き壊され、地に伏せるマーク。彼は自分を倒した騎兵を見上げた。

それは少しタレ気味の、長い耳を焦がしたくまさん。

うさベアさんだった。

「覚えてなよ。クぐっ……」

「寝てろ」

マークはとどめをさされて気絶。

「……」

「これでうるさい奴はいなくなった。……次の相手は誰だ？」

着ぐるみの頭を被った謎の騎兵は、続けて西軍の本陣を襲いかかった。

＋＋＋

東軍の本陣では、大将旗を目前にしてリュガＶＳシラヌイ君の３度目の対決。

「キエエ――イ！！」

シラヌイ君は大将旗に手を伸ばしたリュガの手の甲を狙い、薙刀のように伸ばした棒を思いっきり振り下ろした。

牽制の一振り。防衛兵であるシラヌイ君が、騎兵を直接攻撃するのは反則なのであくまでフリだ。

「うおっ、お前はお供の……」

戦士の勘か、それともシラヌイ君の気迫に押されたのか。リュガは体勢を崩しながらも攻撃に素早く反応して手を引っ込める。

「今です！」

その隙を突いてリュガに詰め寄る一騎の騎兵。

「――！！」

「なっ」

覆面を被った彼は、そのままリュガの脇を駆け抜けた。

「……んだと」

すれ違った瞬間に奪われたハチマキ。

いくら隙を突かれたとはいえ、リュガは『彼』の見せた身のこなしに戦慄する。

「その覆面……まさか、お前」

「時は来た」

覆面騎兵、エイヴンは倒したリュガを無視して、ただまっすぐに進む。

彼は本陣まで駆け戻ってきたブソウの前まで進むと、そこでルックスの用意したＰＣリングの拡声機能と通信機能を通して合図を送り、叫んだ。

今、策は成ったと。

「集え、武人達よ！」

征こう。今こそ我等の武勇を知らしめる時。

＋＋＋

本陣に向かって、怒声を上げて駆け集まるのは東軍の騎兵。それだけではない。

北、南、西、各チームの本陣付近からも東軍の騎兵は現れ、我先にと大将旗を奪いに突撃を仕掛けていく。

３面同時奇襲だ。

疲弊した西軍と北軍、騎兵のほとんどが出払ってしまい完全に不意を突かれた形になった南軍の３チームは、無傷と言っていい東軍の騎兵の猛攻に晒される。

「ちいっ、この戦術パターンは……まさかミツルギの」

クオーツはいち早くこの奇襲の考案者を思い浮かべた。

彼の知るユーマの基本戦術は、囮を使って敵を本隊まで誘導する『釣り野伏せ』や、別働隊で揺さぶり浮足立ったところに主力部隊をぶつける『啄木鳥戦法』など、陽動、罠、奇襲といった要素で構成されたものが多い。

「いくらなんでも遅すぎると思ったが、東軍はわざと進軍を遅らせ

ていたのか。大将旗を晒し、囮にして敵を誘い出す為に」

しかし実際はクオーツが思った以上に大胆な策だった。

東軍はティムス達による大掛かりな陽動を仕掛けて騎兵の行方を眩ませたように見せておきながら、実はブソウとミヅルを除く騎兵は進軍フェイズ中スタート地点から一歩も出ていない。

彼らが動き出したのは決戦フェイズ開始直後なのだ。スタート地点に身を隠し、工作兵が撤収したのを見計らい安全を確認して進軍を開始している。

おかげで東軍の騎兵は遅れながらも全くの無傷で主戦場に到着したのだが、これはブソウと防衛兵たちが、騎兵の到着まで持ちこたえなければすべてが無駄になってしまう、そんな作戦だった。

急いで本陣の防衛に戻るクオーツ、メリィベル、リアトリスといったエース達。襲撃を受けていた東軍の本陣は増援の到着で場を盛り返す。

「やられたよ。……ミツルギはどこにいる？」

クオーツはこの奇襲をユーマが仕掛けたものだと疑わなかったが、彼は東軍にはいない。

そもそも奇襲を企てたのはユーマでも、ブソウでもなかった。

十十十

『教官』の教えを参考に奇襲を行ったエイヴン。

彼は作戦成功の報告にブソウのもとへ。

「……コロデ。予定より到着が遅れたのはこの為か？」

「はっ。思いのほか早く到着しましたので、勝手ながら部隊を散開させ伏せておきました」

いつでも防衛に駆け付け、いつでも奇襲を仕掛けられるようにしてエイヴンはずっと戦況を見つめていた。

「将軍達の鉄壁の守りがあれば上手くいくと思っておりました」

「……まあ、いい」

「それでは将軍。お預かりした兵をお返しします。私はこのまま奇襲部隊と合流して南軍を落とそうと思います」

「なんだと？」

驚くブソウ。

ここから南軍の本陣に向かうには、まず南軍の侵攻部隊を突破しなければならない。

それに南軍にはまだ大将の《剣闘士》がいるはず。

「おい、待て」

「急がないと折角の機会を失います。先行します。ルックス少尉は将軍に状況説明を頼む」

「わかりました」
「コロデ小隊出撃。行くぞ！」
「「「「おう！」」」」
「行きましょう。王子！」

彼も場の雰囲気の飲まれて興奮しているらしい。

エイヴンはシラヌイ君を連れて、ブソウの話も聞かずに出撃する。

「……なんだ、あいつは」
「随分と活き活きしてるじゃないか、あの覆面馬鹿王子」

ブソウに声をかけるのは失格になったばかりのリュガ。

「リュガか。……あっさりと負けたな」
「うるせー。あの野郎はユーマに鍛えてもらったらしいんだが、どうもな」

リュガはハチマキを失くした頭を掻いて、エイヴンにやられた瞬間を思い出す。

「あいつの動きは戦士とかそういう《騎兵》のそれじゃなかった」
「何？」
「最初からハチマキを狙っていたとしか思えねぇ」

それもそのはず。本当の騎馬戦を知らない学園の生徒たちは騎兵の真似ごとをして武器を振るっているにすぎないのだから。

エイヴンがユーマから教わったのは騎馬戦本来の戦い方。

それもなるべく取っ組み合いを避けてハチマキの奪う奥義を彼は伝授されていた。

「ちっ。やられたもんはしょうがねぇ。それよりも東軍の大将であるあんたはこれからどうすんだよ」

「……」

面白そうにリュガはブソウに問う。

ブソウが何か言おうとして口を開くと。

「あの、いいでしょうか」

そこに割り込む覆面を被った小柄な少年。

ブソウは彼の事を覚えている。

「ルックス・グナントか。久しぶりだな」

「はい。ブソウさんには兄や幻創獣の事で随分お世話になりました。……これを見て下さい」

ルックスはＰＣリングの仮想スクリーンを展開してブソウに見せた。

「これは？」

「今の騎馬戦の状況です」

＋＋＋

－ＡＢＣＤＥＦＧＨＩＫ

１　？

２　？北北

３　北☆　　？

４　　？？

５　　？

６

７　？

８　東☆？？　☆南

９？東東　　南南？

０　？　　？

東西南北：陣地

☆：大将旗

？リアトリス＆エイリーク

？クオーツ

？メリィベル

？うさベアさん？

？ブソウ

？ミヅル

？南軍

？東軍

東軍騎兵：　５０→４０

西軍騎兵：　７

南軍騎兵：　２４

北軍騎兵：　２９

＊西軍、本陣を放棄。大将旗はリアトリスが所持

＋＋＋

PCリングの開発者でもあるルックスは、誰よりもその扱い方と応用を熟知している。

ルックスは進軍中から飛行型の幻創獣を使った上空からの視点を見て主戦場の俯瞰図を作成。

さらに同じように友軍の偵察兵が幻創獣で行っている航空偵察の情報をリンクすることで、即席ながらリアルタイム更新の戦術マップを作りだしていた。

ルックスは戦況を説明。

「西軍は南軍に本陣を襲撃されてほぼ壊滅しました。今は大将であるリアトリスさんを護衛する数騎のみとなっています」

「ここまでくるとリアに逆転の手はないな」

「はい。それでこれから僕達が攻めに行くとなれば北か南になるんですけど、南軍の騎兵のほとんどがこちらに出払っていて本陣の守備はとても薄いんです。それは大将である《剣闘士》がいるからだと思うのですが」

「どうした？」

「強襲部隊についている偵察兵の情報によると、南軍の本陣に《剣闘士》はいません。それに副将の《黒鉄》はもう脱落してるんです」

「何？」

「攻めるなら南です。攻撃に来た南軍部隊を突破して、大将旗さえ取ってしまえば《剣闘士》だって」

「そうか。……実は俺の《紙兵》の札はもう尽きている。本陣の防衛網もこれまでの攻撃でボロボロだ」

ブソウはそこまで言うと口を閉じ、本陣の中心に向かった。

それから突き刺していた大将旗を引き抜いた。

ルールでは大将はチームの大将旗を本陣から持ち運ぶことができる。ブソウは拠点である本陣を放棄する気だ。

「だが、これ以上耐える必要はない」

ブソウは大将旗を掲げて前進。一気に駆け出す。

「東軍の全部隊に告ぐ！　俺に着いてこい。まずは南軍を蹴散らす」

「「おおっ！」」

どよめく東軍。彼らはついにきたと打ち震える。

「『遅刻』した奴らは死に物狂いで働け。でないと自警部の反省室にぶち込むぞ」

「「おう」」

自警部の部員は、我らが部長のお約束の脅しに苦笑しながら応え、

「もしくは俺の雑務を手伝わせる」
「お、おお」

その恐ろしさよく知る彼らはガクガク震えた。

「みせてやるぞ、俺達の力をあいつらに」

敵本陣を奇襲する《天下無双薙刃神教》の信者達もＰＣリングを通してブソウの声を聞いた。

武神の降臨に血を滾らせ、攻撃の勢いを増す。

「「ブソウ！　ブソウ！」」

待ってましたとばかりに鳴り響くブソウコール。

そんな彼らにブソウは顔を顰めるのを何とか抑え、不敵に笑って見せた。

大将らしく、堂々としたその勇姿。

「いくぞ！！」

「「オオーーーーッ!!」」

東軍の残り４０騎、全騎出撃。

怒涛の反撃がはじまった。

＋＋＋

現在の戦況で大きな戦いは２つ。

１つは東軍対南軍。もう１つの戦いはエース達による乱戦だった。

西軍のリアトリスとエイリーク、北軍のクオーツとメリィベル。

さらに東軍のミヅルの５人は、たった１騎の騎兵を相手にしている。

『うさベアさん』の頭を被って素顔を隠した騎兵。

南軍のマークを倒し、西軍を壊滅状態に追いやった謎の襲撃者だ。

「……お前までふざけてるのか？」

「がるるー。それはメリィのベアさんだぞ！」

馬ゾンビは流石に止めたクオーツとケルベロスの着ぐるみを纏うメリィベル。

「リア先輩……」

「エイリーク、無理をするな。あいつのせいで私達の敗北は確実となったが、このまま負けるのは気に入らない」
「それはアタシもよ」

リアトリスは大将旗を担ぎながらも油断なく構え、エイリークもそれに倣う。

「参ったわ。本当は《獣姫》に仕返ししたかっただけなのに」

ミヅルは本陣防衛に撤退するメリィベルを追いかけて、この争いに巻き込まれた。

正直『彼』を相手にしたくはなかったが、遭遇した以上逃げるのは難しい。

「ねぇ貴方、その着ぐるみどうしたの？」
「……飛んできたので拾った」

うさべアさんの頭は、リアトリスの《凰啼波》の熱風で彼のもとへ吹き飛んできたらしい。

顔を隠すのに丁度良かったとうさべアさん。

「馬鹿ね。そんなので正体隠せるわけないじゃない。律儀に南軍のハチマキも巻いてるし」
「！！」

ミヅルの指摘に今気付いたと言わんばかりに驚くうさべアさん。

「俺の正体に気付かれた以上、お前達は生かしてはおかん」

「……ほんと馬鹿ね」

みんなに呆れられたうさベアさん。

「……いいから、こい」

「っ！？」

うさベアさんが周囲に放つ闘気で皆に緊張が走る。

「……仕方がないわね」

「ミヅル、クオーツ。ここは共闘といこう。いいな？」

「断る理由はないな。セルクス、いくぞ」

「もちろんだ。ベアさんの頭は返してもらうぞ」

「だったら」

皆一斉に武器を構えた。

「行くわよ！」

エイリークの掛け声と同時に、４人のエースがうさベアさんに襲い掛かる。

＋＋＋

東軍本隊より先行するエイヴン。

彼は防衛兵のシラヌイ君のみを連れて、たった１騎で南軍１６騎

を相手に突破を図ろうとしていた。

南軍の部隊はこのまま攻め続けるか奇襲を受けている本陣に引き返そうか迷っているようだ。動きがない。

エイヴンは目前で1度立ち止まった。

「王子、いくらなんでも無茶じゃ」

「大丈夫だ」

無謀だとはエイヴンもわかっている。振り落とされまいと、馬を掴んでいたその手は震えていた。

エイヴンは敵を目の前にして怖じ気づいていた。彼が蛮勇に振る舞うのは、そうでないと今すぐにでも馬を下りて逃げだしてしまいそうだから。

覆面の下の顔は恐怖で青褪めてしまっている。それでも、逃げるという選択を彼はどうしてもできなかった。

「怖いか？　少尉殿」

「曹長……」

エイヴンの様子がおかしいことに気付いたのか、馬を担ぐ覆面リーダーのイースは訊ねた。

「わ、私は」

「無理するな。どんな時も自分の感情を素直に受け止めた方が楽に

なるんだ。ほら、深呼吸」

素直に従うエイヴン。

「落ち着いたか。周りが見えるようになったら少しでいい。うしろを見てくれ」

「うしろ……」

エイヴンは見た。

「コロデに後れをとるな。続けぇ！」

「「オオーーーッ！！」」

ブソウが、ルックスが、東軍のみんなが全速でこちらに向かっている。

「あ……」

「見たか？　1人で戦おうとするなよ。みんないるんだ。俺達もな」

「……。私は」

エイヴンはわかった。どんなに怖くても、どうして逃げたくなかったのか。

「私は……ずっと、ずっと誰かに認めてもらいたかった」

鍛冶師の修行は上手くいかなかった。故郷の父は厳しく、師には蔑まれた。

褒められることなんてない。師に罵られている内にいつの間にか同じ鍛冶師見習い達にも見下されていた。

自分に才能はない。だからすぐに見切りをつけた。エイヴンは馬鹿を演じて人を遠ざけた。自分から遠ざかった。

鍛冶師として大成しなければ故郷に居場所はない。

エイヴンは遂には故郷からも遠ざかり、彼はシラヌイ君を除けば1人も同然となっていた。

なのに。

なのに今はこんなにも仲間がいる。

皆で何かを為そうとする気持ちが、為したいと思う心がエイヴンを満たしている。

「故郷では認められなかった私はずっと……誰かの期待に応えられる人になりたかったんだ。だから、逃げたくない」

「王子……」

きっとシラヌイ君も彼の本音は1度も聞いたことがなかったのだろう。

エイヴンはシラヌイ君やイース達に頭を下げた。

「私に力を貸して下さい。私は、皆と共に戦い、勝ちたいのです」
「だったら、わかってるよな？　少尉殿」
「……もちろんです。曹長」

エイヴンは笑った。イース達も、シラヌイ君も。

「コロデ小隊はこれより南軍の部隊を強行突破。本隊の先陣を切り突破口を開く」
「それだけか？」
「まさか。そのまま敵本陣へ突入して南軍の大将旗も私達が奪取。勝利を我らの手に！　どうです？」
「上出来だ。なあ？　みんな」
「もちろんだ」
「元竜騎士団の力をみせてやるぜ」
「エルドカンパニー社員の実力もな」

イースが確認すればアルスが、サンスー兄弟が、皆がエイヴンに応じてくれた。

エイヴンの手はまだ震えている。でもこれはきっと……武者震いだ。

「本隊もすぐそこまで来ています。行きましょう、王子」
「わかった。みんな」
「「「「おう！」」」」

エイヴンはただまっすぐに目標を見た。

南軍の大将旗を。

「コロデ小隊、突撃！！」

うおおおっ！！　コロデ小隊の誰もが雄叫びをあげて南軍の騎兵に飛び込む。

さらにブソウが率いる東軍本隊の２０騎が続く。

「くそっ」

「絶対に東軍を通すな！」

浮足立っていた南軍も東軍の本気を見て迎撃体勢をとった。

その戦いに策も陣形といった戦術や、戦闘の技術なんて必要なかった。

体当たり。相手を倒し、破壊してやるといった純粋な力のぶつかり合い。

南軍の編成した騎兵は戦士系の精鋭ばかりだ。その強靭さは東軍の果敢な猛攻さえも耐え凌ぐほど。

それでも1騎、たった1騎だけ南軍の防御を抜けた騎兵がいた。

その騎兵は戦わず、武器も待たずに形振り構わず馬の首にしがみついていた。

頭を低くしてハチマキを庇い、敵騎兵にぶつかって、叩きのめされても、落とされまいと必死に耐えていた。

自分を支えてくれるイース達が包囲を突破してくれる。それだけを信じて。

「行けっ、コロデ!!」

ブソウは手にした大将旗を振り回し、薙ぎ払いながら叫ぶ。

エイヴンは本陣へ突き進む。

＋＋＋

騎馬戦　最終決戦２（前書き）

コロデ小隊、最後の戦い

騎馬戦　最終決戦２

＋＋＋

激闘。

エイリークの《旋風剣》にリアトリスの《烈火剣》。

ミヅルの高速斬撃にクオーツの《水槍》。

「その程度で」

集中攻撃されるうさべアさんは、四方から来る４人の攻撃をほぼ同時に受け止めた。

「嘘」

「くっ、この非常識め」

ミヅルとクオーツの攻撃を両手の棒で防がれた。

問題はエイリークとリアトリスの攻撃。うさべアさんはその長い耳を自在に操って２人の攻撃を防いだのだ。

「なによ、あの耳」

「《操剣術》の応用か。うっ！」

うさベアさんが４人の攻撃を１度に跳ね返した。

「メリィもいるぞ！」

すぐさま攻撃を仕掛けるケルベロス、の着ぐるみ。

『けるベル子』ことメリィベルは、両手に付けた犬の人形型グローブをパクパクさせて攻撃。

見ため以上に鋭いワン・ツー。それからラッシュ。

スピード型の着ぐるみを身に付けた彼女の攻撃の速さに残像が見える。

うさベアさんは２刀流高速剣技、《五月雨》で対抗。スピード勝負は互角。

「わううううう。今だ、クオ」

「くらえっ」

クオーツはその隙にうさベアさんの背後をとり、《水弓》で狙い撃つ。

３連射。でも、それさえうさベアさんは、うしろからくる水の矢

をうさ耳で器用に弾き返す。

「やはり《気》で読まれるか」
「それでも攻め続けるしかないでしょ」

今度はミヅルだ。

「飛ばすわよ」

斬撃を飛ばすという意外とポピュラーなその技は《翔ける斬撃》。

ミヅルはメリィベルごと、うさベアさんを斬り飛ばそうと斬撃を飛ばす。

「っ！」
「うわぁぁっ」

うさベアさんは騎馬から真上に高くジャンプして斬撃を回避。

メリィベルも慌てて頭を引っ込めた。

「あら、残念」
「ミヅル！　よくもやったな」
「今は喧嘩をするな。来るぞ」

騎馬の上に難なく着地するうさベアさん。今までの波状攻撃に全く応えていない様子。

「メリィベル、合わせろ！」
「わかったぞ。ベル子さんファイヤー」

リアトリスの放つ火属性、放射攻撃術式の《凰火砲》に加えて、
メリィベルの３つの口から吐きだされる火炎放射。

集中砲火。

「燃えろ！」
「単一の属性攻撃ならば」

うさべアさんは対火属性の魔法剣、《炎斬剣》で炎を切り払う。

「対応し易い」
「ならば」
「これで！」

続けてエイリークとクオーツの、風属性と水属性の同時攻撃。

《衝突風》

《激流槍》

すべてを吹き飛ばそうとする衝撃波と、すべてを飲み込まんとする水流波。

「ぐっ、流石にこれは……」

左右からくる攻撃の圧力にうさべアさんは２刀流の棒を盾に耐え凌ぐ。

そこへ、両手が塞がったうさベアさんをミヅルが強襲。

「――っ、斬！」

騎馬の上から跳び上がっての上段斬り。

必殺！

「……やっぱり貴方、反則よ」

「今の一太刀。見事だ」

真剣、白刃取り！

うさ耳で！

うさベアさんはそのまま耳で、ミヅルを掴んだ棒ごと投げ飛ばした。

騎馬から落とされるミヅル。失格。

「これを被っていなければ危なかった。……あと４人だ。さあ、かかってこい」

何事もなく棒を構えるうさべアさん。心なしか気が弾んでいるように感じる。

「あの馬鹿、１人だけ楽しんでるぞ」
「戦闘狂め」
「なあクオ。あれは絶対メリィより《狂戦士》だよな」

あまりの無敵ぶりに正直戦意を失くしつつあるエース達。むしろ呆れている。

「もうこれって騎馬戦関係ないじゃない」

エイリークが思うのはごもっとも。

エースでさえない彼女はこのまま彼らの戦いに付き合わされることに。

そして――

＋＋＋

南軍の本陣を前にしたエイヴンはボロボロだった。

強行突破を図った際に滅多打ちにされたダメージは、思いのほか酷かったのだ。

騎手であるエイヴンがボコボコにされていたのは元より、騎兵同士でぶつかりあったイース達もまた、散々痛めつけられていた。

「少尉殿、まだいけるか？」

「……無論だ」

イース達はともかく、荒事に慣れていないエイヴンは今にもぶっ倒れそうな状態。

それでも、燃えたぎるような闘志が彼らを支えていた。

大将旗を獲るまでは倒れない。その思いがエイヴンを奮い立てる。

「南軍の騎兵は残り少ない。あとは奇襲部隊と合流すれば……」

「残念だったな」

「！？」

声をかけられた南軍の騎兵達にエイヴンは見覚えがあった。

編入生。それも運動会の前日にエイヴンに絡んできた奴らだ。

「お前は」

「覆面してようがわかるぜ、この屑王子」

「……」

「おっと。味方の援護なんて期待すんなよ。ここを奇襲してきた奴らは全部倒したんだからな」

南軍の本陣で健在なのはエイヴン達と編入生達の騎兵5騎だけ。
あとは皆倒れて気絶している。

彼ら編入生達の実力は本物だ。1人1人がランクB、ランクA並の力を持っていた。

「ここまでご苦労だったな。見逃してやるからさっさと尻尾を巻いて帰んな」
「断る」
「んだと？」

恐怖はない。皆と共に最後まで闘うとエイヴンは決めたから。

「王子！」
「エイヴンさん！」

遅れていたシラヌイ君とルックスも来てくれた。

小隊集結。

相手はたった5騎だ。向こうだって消耗している。

恐れる必要は、ない。

「……コロデ少尉、突貫します」

エイヴン達は突撃する。目標は大将旗。目指すは勝利だ。

「てめぇ。やってしまえ！」

編入生達はエイヴンに襲いかかる。

決戦開始。

「くたばれ！」

「王子はやらせません」

エイヴンに向けて振り下ろされる棒をシラヌイ君は前に出て受け止めた。

「そこだ！」

隙を突いて、エイヴンは攻撃してきた騎兵に向けて手を伸ばし、ハチマキを奪う。

シラヌイ君が隙を作りエイヴンが仕留める。これはエイヴンが『教官』から授かった必勝パターン。

「ちっ。一丁前に連携なんかしやがって。防衛兵はシラヌイを抑えろ。クズには2人がかりで行け」

未だにエイヴンを見下しながら次の手を打つリーダー格の編入生。

シラヌイ君はすぐに防衛兵に囲まれて身動きを封じられてしまった。

「シラヌイ！」
「王子！　負けないでください」
「……わかってる」

シラヌイ君を置いて先に進むエイヴン。今度は2騎同時に襲われた。

「僕だって！」

エイヴンのうしろを追従していたルックスが前に出た。

彼が手にしているのは、偵察兵が持つ唯一の妨害アイテム。

煙玉だ。

途端に立ち込める煙幕に紛れて、エイヴンは編入生を抜き去る。

「エイヴンさん、今の内です。うわっ！？」
「少尉！」

ルックスは敵の防衛兵に捕まってしまった。

「少尉……」
「振り返るな。次が来るぞ」

正面からさらにもう1騎。うしろからも抜き去った2騎の騎兵が追撃をかけている。

このままでは挟み撃ちだ。

「アルス！」
「了解だ」

イース達が動いた。

エイヴンの馬を担いでいた４人組の内、イースとアルスは馬から離れて後方の騎兵の足留めに向かう。

２人は落ちていた防衛兵の大盾を拾い、騎兵の追撃を阻む。

「曹長！　アルス伍長！」
「行け、少尉殿！」
「兄弟！　あとは任せるぞ」
「「任せろ！」」

元戦士系であるサンスー兄弟は２人で馬を担ぎ直すとエイヴンを支えた。

「曹長……」
「振り返るな少尉殿」
「俺達は皆、まだ闘っている」
「……はい」

コロデ小隊はとうとう３人になってしまった。人馬にも欠員をだして、スピードもパワーも格段に落ちてしまっている。

でも、だからこそ負けられない。

後方はイース達が抑えてくれた。彼らに報いる為にも、正面から迫る騎兵は何としても突破しなければ。

「この先は通さん」
「いや、通してもらう」

ここで初めてエイヴンは武器をとった。

真向勝負。

「「兄弟パワー！！」」

たった2人の人馬。サンスー兄弟はここぞとばかりに底力を発揮して敵騎兵の体当たりに踏みとどまる。

同時に、エイヴンも多少押されながらも鍔迫り合いの状態に持ちこんだ。

「……やるじゃないか。見直したぞ」
「私も……意地があるんでね」

先に打ち込んだのはエイヴンだった。自分の弱さを知る彼は、守りに入れば一瞬で倒されるとわかっていたから。

捨て身にも近いエイヴンの攻撃には編入生も防御せざるえなかった。

「だが、それだけだ」

腕力で劣るエイヴンは少しずつ押し込まれていく。

「どんなに足掻いてもお前じゃ俺達に敵わない」

「普通にやり合えばそうだろうな」
「何？」
剣で勝てないのは当たり前。でも、エイヴンはもう退けないのだ。
勝ちたいから。だからエイヴンは切り札を切った。彼の手にした棒が一気に膨らんでいく。
騎馬戦で使われる武器の棒は風船のように空気で膨らませる特殊な衝撃緩和材。持ち手の空気調節器を使うことで槍のように伸ばすことや棍棒のように太くすることができる。
もしも、その空気調節器のリミッター―を外し、限界以上に棒を膨らませたらどうなるのか。
エイヴンは『教官』と一緒に試したことがある。
……酷い目に遭った。
エイヴンの棒は、空気調節器からどんどん空気を取り込んで、棍棒どころか丸く、それこそ風船のように球体となってとてつもなく大きく膨らんでいく。
それは、裏技ともいえる必殺技。
触れたらそれだけで爆発するようなエイブンの棒（？）。その危うさに戦く編入生。

「なっ、なんだよ、それは!?」
「食らえ!」
エイヴンは容赦なく振り下ろして彼にぶつけた。

大、爆、発。

空気爆弾と化して破裂した棒の威力は、エイリークの得意とする《爆風波》にも匹敵する。
直撃を受けた騎兵は爆音と同時に吹き飛ばされた。
その衝撃と爆音はエイヴン達にもダメージを与える。

「――っ!　大丈夫か、伍長」
「ああ?」
「音が飛んだ。全く聞こえん」
2人とも無事のようだ。

大将旗を守る敵はあと1騎。エイヴンは遂にここまできた。
「……なんだよ、お前。クズのくせに」
追い詰められる編入生のリーダー。構わずエイヴンは進む。

残るは編入生と……本陣を囲む塹壕。

深さ2メートルもある溝が、最後にエイヴンを阻んでいる。

塹壕に橋をかけてくれる味方はここにはいない。

「……」

エイヴンは立ち止った。

「……へっ。どうした？　先に行けなくて困ってます、ってか」

立ち止ったエイヴンを見て嘲る編入生。

しかし、エイヴンは彼の嘲笑を聞いてさえいなかった。

「私は、皆の力を借りてとうとうここまできた。ブソウ将軍、カンナ大佐、エルド少佐……」

これまでの戦いを振り返るエイヴン。

「シラヌイにルックス少尉。イース曹長、アルス伍長。それにサンスー伍長達も。東軍の仲間たち皆に支えられて私は」

ここまでこれた。

大将旗は目の前だ。

だから、最後は。

「皆の為に、私達東軍の勝利の為に。……伍長、頼みます」
「少尉殿の覚悟」
「確かに受け取った」

サンスー兄弟は最後の力を振り絞る。

「兄弟パワー」
「フル！」
「「パワーーッ！！」」

投げた。

兄弟は担いだ馬ごとエイヴンを投げ飛ばした。

「いっ！？」

驚く編入生。エイヴンは飛んだのだ。

塹壕を飛び越え、大将旗めがけて。

勝利の為に、特攻！

「クズがぁぁぁ！！！」

驚きは一瞬。怒りで真っ赤になった編入生はエイヴンを迎え撃つ。

「屑が、糞覆面が！　この俺を、《会長派》に選ばれた俺を散々虚仮にしやがって」

編入生はハチマキの制限を無視して、エイヴンを叩き潰さんと強力な攻撃術式を放つ構えをとる。

「俺はエリートだ。いずれエースとなり、生徒会の上層部に入って学園の頂点に立つこの俺が、お前なんかに負けるわけねぇ！！」

――ぶっ殺す

「っ！」

エイヴンに向けられた悪意と殺意。寒気が走る。

「死ねよ。お前みたいな駄目王子は学園には不要だ。だから……死ねぇえええええ！！」

両手を突き出し、一直線に向かってくるエイヴンに狙いを絞る編入生。

攻撃が放たれようとした瞬間――

ぺしっ

「あ？」

編入生の視界が真っ暗になった。

エイヴンは注意を逸らす為に、被っていた覆面を彼の顔に投げつけ、叩きつける。

「何だ、こりゃ……がはっ！？」

続けて激しい衝撃が彼を襲った。

エイヴンの乗っている馬が編入生に衝突。

直撃。

「……確かに、今の私は馬鹿で屑の駄目王子だ」

エイヴンは編入生を弾き飛ばしながら、手を伸ばした。

「私のような男はこの学園には相応しくないのだろう」

掴んだ。

「だったら、今日から私は生まれ変わろう。学園の生徒として相応しくあれるように」

エイヴンは大将旗をその手に掴む。

「誰よりも私は……皆がいるここに居たいのだから」

「王子！」

エイヴンに駆け寄るシラヌイ君たち。

南軍は皆エイヴンを見て呆然としている。

「ルックス少尉、将軍に連絡を」

「は、はい！」

「報告の内容は……コロデ小隊、大将旗の奪取に成功、と」

「……」

「私達の、勝利だ」

「……」

「……」

「「「「うおぉぉぉぉっ！！」」」」

イースが、アルスが、サンスー兄弟達が。倒された東軍の仲間た

ちも勝鬨を上げる。

南軍陥落。エイヴンは皆と共に勝利を掴み取った。

「「エイヴン！　エイヴン！」」

湧き上がるエイヴンコール。

「やったな、少尉殿！」

「王子！　僕は、僕は感動です……」

イース達もエイヴンを称え、従者の少年シラヌイ君なんて主が見せてくれた勇姿に涙ぐむ。

「みんな……」

エイヴンはここまで皆の注目を浴びて、褒め称えられるのは生まれて初めてだ。

感動も一入。素直に喜びたい。

だけど。

「……シラヌイ。曹長達」

「どうした」

「王子？」

「頼むから早く馬を持って来てくれ。この体勢は……辛い」

実は、大将旗を手にする前に馬を乗り捨て飛びだしたエイヴン。

もちろん騎兵であるエイヴンは地に足をつけた時点で失格だ。折角大将旗を手にしてもそれが失格者であったなら無効である。

なのでエイヴンは今までずっと大将旗に抱きつき、しがみついていた。

ボコボコに腫らした素顔を晒して、猿のように。

「シラヌイ。実は、今の私は凄く格好悪くないか？」

「……。そんなことないですよ」

嘘をつかれた。

「いつも通りの王子です」

「……そうか」

シラヌイ君。それもどうかと思うよ。

＋＋＋

エイヴンが南軍の大将旗を奪取した時とほぼ同じ頃。
北軍の本陣でも最後の戦いが繰り広げられていた。

襲撃者は棒を2刀流に持ったうさべアさん。

大将旗を守るうさぎさんはアイリーン。ディジーをはじめとする北軍の防衛部隊はすでにやられてしまっていた。

そして、アイリーンを庇うようにうさべアさんの前に立ち塞がるのもうさぎさん。

そのうさぎさんは、額にある立派な1本角でうさべアさんの攻撃を受け止めていた。

《氷晶壁》さえも容易く打ち砕いた、うさべアさんの攻撃を。

「なっ！？」
「お前は」
「……」

アイリーンは自分を守ってくれた角付きうさぎさんに見覚えがある。

「あれはトニカ君……でも」

隊長専用の着ぐるみである『トニカ君』は生徒会長が着ていたものだ。

「一般生徒である生徒会長が、氷晶壁を砕いてしまうような攻撃を受け止められるはずがない。貴方は……誰？」

「……」

トニカ君は答えない。

＋＋＋

騎馬戦　－延長戦－（前書き）

これで１００話目。終わらなかった

2021

騎馬戦　ー延長戦ー

＋＋＋

南軍の本陣跡。勝利の余韻に浸っていたエイヴンたち。

しばらくしてブソウ達東軍の本隊へ合流しようとしたところで。

事件は起きた。

「……待てよ。糞王子ぃ！」

「危ない！」

エイヴンの騎兵に襲いかかるリーダーだった編入生。

すぐさまシラヌイ君がエイヴンを庇うが、彼が手にしていた棒が簡単に斬り飛ぶ。

「シラヌイ！」

「大丈夫です。でも」

どこに隠していたのか、彼が持つ武器は実戦用の本物。

「お前ら、囲めぇ！」

「えっ、でも……」

「俺達があんな屑に馬鹿にされたままでいいってのかよ、ああ？」

本陣にいた南軍の数人の生徒が喚く彼に従ってエイヴン達を囲み、武器を取りだしてきた。殆どの生徒は突然のことに戸惑っている。

包囲する生徒には東軍の生徒もいた。皆編入生だ。

「認めねぇ。こんな糞競技でも、てめぇなんかに負けたなんて事実は俺には必要ねぇ！」

「くそっ」

似てやがる。イースは男の狂気染みた言動をみて、かつて自分の上司であった《竜使い》を思い出した。

ルックスのいる手前口には出さなかったが、竜騎士団にいた頃の自分までも思い出して嫌気が差す。

編入生の男は脅すように剣を向けた。

「おい、こっちに来て跪けよエイヴン。そしたらシラヌイ達は見逃してやる」

仲間まで危険に晒されて押し黙るエイヴン。

「……」

自分が許しを請えば皆は助かるのか？

躊躇わずに馬から降りようとしたエイヴン。シラヌイ君は彼を止める。

「駄目です、王子」
「シラヌイ」
「そうだ。馬鹿な真似はよせ」
「ブソウさんだってこちらの異常には気付いているはずです。時間を稼げば」
「曹長、少尉……」
「一蓮托生だ。俺達はチーム、仲間だからな」

イースとルックスだけでない。アルスも、サンスー兄弟も賛同してエイヴンを見て頷いてくれる。

エイヴンにとって、それがどれだけ嬉しいことか。

「みんな……」
「おいどうした！」

だけど状況は最悪。包囲されてしまっては脱出の手立てがない。

他の生徒も武器を持った相手に迂闊なことができず、助けも期待できない。

内緒話をされて苛立つ男。癇癪を起して剣を何度も地面に叩きつける。

「さっさと馬から降りてきやがれ！　みんなまとめてブチ殺されてぇのか」
「……わかった」

そう言いながらもエイヴンは馬から降りず、彼に向けて口を開いた。

「ひとつ言っておくが……剣は大事に使え。お前みたいな屑に使われて刃毀れする剣の気持ちを考えてみろ」

「なんだと!?」

「かわいそうだろ?」

あからさまな挑発。エイヴンは戦うことを決意したのだ。

「私達がお前に屈する理由はない」

「……つ、潰せぇ！　斬り殺してやる!!」

「すまない、みんな」

「それでいいんだよ。来るぞ」

リーダーの男は怒り狂い、包囲する連中に命令を下すように剣を振り下ろす。覚悟を決めるエイヴン。

しかし。

「……斬る」

剣は振り下ろせなかった。彼の剣は根元からすっぱりと斬り落とされたから。

呆然。

「あ？」
「もうやめなさい」

デスサイズの替わりに長い棒を担ぎ、フードの上からハチマキを巻いた妙な死神は、いつの間にかそこにいた。

＋＋＋

「貴方は……誰？」

アイリーンの問いに、角付きウサギの着ぐるみ『トニカ君』は答えない。

「……」
「誰でもいい。俺の前に立ちはだかるなら相手してもらう」

うさベアさんは構わずトニカ君が庇うアイリーンごと、蹴散らそうと武器を振るう。

「――！！」

ガキッ

トニカ君はまたもやその１本角で攻撃を受け止めた。

「……！」
「防ぐだけなのか、お前は？」
トニカ君は答えない。
「まだ、その程度なのか？」
トニカ君は答えない。
ギチギチと軋む1本角。力負けするトニカ君は、それでもなんとか踏みとどまる。
攻撃を躱すことができないのはうしろにアイリーンがいるから。
退き下がれないのは、彼女を守ろうとして飛び出してしまったから。
うさべアさんは手にした棒にさらに力を込めてきた。このままでは押し切られてしまう。
尚もアイリーンを庇うトニカ君。思い出すのは『彼』と初めて会った時のこと。
――弱い。そんな薄弱な意志で振るう力で誰かを守れるはずが――
「……っ！」

そんなことは――ない！

「……集え。集え集え」

トニカ君は唱える。風のイメージを強く《補強》する。

「風よ集いて螺旋を描け」

「何？」

「その呪文は」

集まる風の力。渦巻く竜巻はトニカ君の1本角に収束。

負けたくない、2度も。

退くことはできない。だったら、

立ち向かえ！

「うおおおっ！！」

《旋風剣・螺旋疾風突き》

角付きは伊達じゃない。ドリルのように高速回転する角を振り上

げ、トニカ君はうさべアさんの棒を弾き飛ばす。

「貴方は」

今の技でトニカ君の『中身』がはっきりとわかったアイリーン。

どうして？　今はその言葉しか思い浮かばない。

「そうだ。それでいい」

思わぬ反撃を受けて退くうさべアさんは、トニカ君と少しだけ距離をとる。

トニカ君はうさべアさんに話しかけた。

「いいですか、クル……うわっ！？」

慌てて角で防ぐトニカ君。突然斬撃が飛んできた。

「誰かと勘違いしてないか？」

曰く、《剣闘士》とは誰のことだ？

「俺はどこにでもいる森のクマだミツル……！」

今度はうさべアさんを《風刃》のカマイタチが襲う。

咄嗟に手にした棒で打ち払ううさべアさん。着ぐるみの２人は睨

みあう。

「お前」

「何言ってるんです？　俺はどこにでもいるかわいいウサギさんですよ？」

曰く、《精霊使い》なんてここにはいませんよ？

「そうなんですよー」

ひょっこり現れてトニカ君の頭に乗っかるのは、ちいさな風の精霊さん。

「空気よめー」

「「「……」」」

台無し。

アイリーンを含む3人が風葉に突っ込めないでいる。

「兎に角。ク…マさん。南軍は大将旗を奪われたのであなたも失格です」

「何？」

遠くから聞こえてくるエイヴンコールが南軍の陥落を伝えている。

「騎馬戦のルールは覚えてますよね？　だからもう暴れないで大人しく退場してください」

しかし、うさべアさんは納得しなかった。

「ならばウサギ、お前は何だ？　謹慎中で運動会に参加できないはずのお前が、何故ここにいる？」
「俺？」
「お前こそ自分勝手に競技を楽しんでいたのではないのか？」
北軍が着ぐるみを使ってきたことをいいことに正体を隠し、紛れ込んで騎馬戦に参加したりして。
だったら俺も少しは楽しませろ、と訴えるうさべアさん。
「またそんな我儘を……俺だって最初はそんなことも考えましたよ。でも編入生のこととかあって、俺は一応騎馬戦の立案者で主催者だから責任も取らないといけないし」
「責任？」
「裏方は人手が足りないんですよ」
《Ａナンバー杯》の競技である騎馬戦は、基本的に生徒全員が参加しなければならないのだから。
別に遊んでいたわけではないと、トニカ君は堂々とその正体を明かした。
「俺は、俺達は……」
＋＋＋

「ワタシ達は騎馬戦の実行委員会。この競技の不正を取り締まる為に集められたチームです」

《黙殺》に続いて南軍の本陣に突如現れた謎の集団。先頭に立つのは報道部から派遣された幽霊部員のベスカ。

彼女は情報統制と部隊指揮を一手に任された（押し付けられた）実行委員会、委員長代理である。

元竜騎士団幹部という昔の経験を活かし、彼女は見事な指揮でエイヴン達を囲む編入生達をさらに包囲する。

元々実行委員会は騎馬戦が問題なく行われるようにと、ユーマが運動会の準備段階から用意していた、ハプニング対策で結成されていた組織だ。構成員は報道部の部長や《組合》から借り受けた人員と学生ギルドで依頼して集めた有志たち。

実行委員長だったユーマは、彼らを競技に参加させる傍らでＰＣリングの情報網を駆使して４チームすべてを監視。有事の際は《黙殺》やミストなど主力メンバーで対処するようにしていた。

もちろん、編入生の不審な行動も筒抜け。

武器を捨てなさいとベスカは編入生に告げた。

「最低ね。いくら生徒会長がけしかけたせいとはいえ、まさかここまでやるとは思いませんでした」

「何？　女、お前何を言って」
「彼の思惑は何となくわかります。面白くない話ですわ」
元《会長派》でもあるベスカはつまらなそうに言った。生徒会長は泳がせていたと。
「彼が所望する人材に、権力に惹かれるだけの悪党は必要ないでしょうから」
生徒会長は彼らを試していた。
学園に来て間もない編入生たち。彼らに権力をちらつかせるとどう動くのかを。
運動会を試験場にして、《会長派》の特権という餌を用意して、彼らの本質を探るように。
生徒会長はこのことで編入生たちが不正行為を働いて問題を起こすことさえ想定済みだった。
《Ａナンバー》をはじめとする学園の生徒たちが彼らの行いを阻止することも。
また、学園には春に洗礼式という行事がある。思いあがった新入生たちの鼻っ柱を折るという手荒い歓迎会のことだ。

同じように生徒会長は編入生たちに学園の生徒の実力を思い知らせようともしていた。

すべては生徒会長の掌の上。

餌を与えられて踊らされ、叩きのめされるまで、すべて。

「ふ、ふざけやがって」

「全くです。それに彼は事前に炙り出したかったのでしょうね。第2の《竜使い》となる存在を」

ベスカもまた、醜くも憤る男を見てイースと同じく彼を思い出していた。

かつての自分も。

「汚い手まで使い、力を振りかざして自分を誇示する真似なんてやめなさい。そうやって失敗して、学園から追い出された生徒はたくさんいます」

でも、彼ら編入生はかつて竜の力を振りかざし、生徒会に反旗を翻そうとした竜騎士団とは違う。

落ちこぼれであることを嘆き、学園を見返そうと皇帝竜の複製に手を出した彼女とも違う。

生徒会長に試され、振り回されただけ。

だからベスカは編入生たちを止めることに全力を注いだ。彼らに竜騎士団と同じ末路を辿らせまいと。

それが親友を振り切ってまでして暴力に走り、皇帝竜事件を起こした彼女が幽霊部員として今も学園に留まる理由。

償い。

「貴方たちに不正させるきっかけを作った生徒会長とはもう《精霊使い》が話をつけましたわ。今日のことで学園から追放なんてことはしないから大人しくなさい」

編入生たちに動揺が走る。

「……俺は、リーダーであるこいつの指示に従っただけだ」
「なっ!?」
「俺もだ」
「ここまでされて《会長派》なんてなりたくない」
「学園にいられなくなるよりましだ」

リーダーの男以外の編入生たちが武器を地面に捨てはじめた。力による統率はあまりにも脆い。

「テメェら……」
「容易く仲間を裏切るのも最低だと思いますけどね。さぁ、貴方も」
「うるせぇ！」
引き抜かれる隠しナイフ。
それを見た《黙殺》が静かにベスカの前に立つが、彼女はそれを制した。
「やめなさい」
「黙れ！　女ぁ。エイヴンだけじゃねぇ、生徒会長も、俺を虚仮にしたテメェらは俺が」
「……無駄よ」
ナイフを持つ男を前にして動じないベスカ。
「俺がぁっ」
一瞬だけ見せた怯えの表情。
それを見逃さず、男がベスカに飛び込む。
恐怖を煽るように見せびらかせたナイフ。鈍く光るその刃は――
《幻想の矢》が射抜く。

不可視の攻撃にナイフを弾かれた彼はわけがわからない。

「な、何が……ひっ！？」

それで次に迫ってくる矢に対して反応が遅れた。

直撃。矢は正確に男の左目を射抜き、貫いて……

「ぎぃやぁぁぁぁぁぁ！！！」

殺された。

そんな自分を幻視して男は絶叫して、倒れた。

「だから無駄ですと言ったのに……遅いですわよ」

平然としつつも、危険に晒されたベスカは緊張でバクバクとする胸を抑えている。

《幻影の矢》を放ったのは、ベスカの遥か後方に控えた、『弓を構える』黒髪の少年。

「簡単に人を傷つけ、命を奪おうとするのなら……次こそ僕は撃ちます」

彼は《射抜く視線》の弓使い。ジン・オーバ。

「お前、やっぱかっこいいな」
「ジン……」
ジンの隣にいるのは彼の先輩となった編入生と、ジンの勇姿にぱやー、とするリン。
3人は《黙殺》やベスカに『回収』され、実行委員会を手伝っていた。

「……私より彼に助けて貰いたかったのね」
「違います！」

あと、《黙殺》の一言をすぐに否定するベスカさんでした。

＋＋＋

一方、うさベアさん対トニカ君。

「実行委員会。トラブル処理を目的とした、《精霊使い》がエース権限で用意していた即席の騎士団か」
「まあ、そんなとこです。俺は《精霊使い》の忠実な僕であるウサギです」

往生際の悪いトニカ君。

でもってタチの悪いうさべアさん。

「ならばこの暴れる獣1匹くらい取り押さえて見ろ、小動物」
「……あんた、顔を隠していることをいいことに思いっきり暴れたいだけでしょうが」

ちなみに。

先程までうさべアさんと戦っていたリアトリスやクオーツ達は騎馬戦のルールの上では全滅。

最終的に東軍の勝利という結果で騎馬戦は終わっているのだが、うさべアさんが暴れるので競技を締められないでいる。

ここからは延長戦。

「だったら、こっちも容赦なくいきますよ。ヒュウさん！」
「どるぁ！！」

はるか上空からの急降下。これは《鳥人》の鷲爪撃。

強襲されたうさべアさんは、慌てず飛び蹴りを受け止める。

「なんだ？　いきなり」
「覚悟せい。ワイはお前を倒す為に地獄から帰って来たんや」

彼は《鳥人》ではない。

覆面を被ったその男のコードネームは『不死鳥』。実行委員会に魂を売って蘇った復讐者（リベンジャー）。

「どうした《獣姫》、かかってこんかい！」

「……クマ違いだ」

「なんやて？」

襲撃した相手がメリィベルでないことに今頃気付く『不死鳥』。驚いてトニカ君の方を見る。

「ヒュウさん。メリィさんを倒したのはあのクマです。あいつを倒せばリベンジ達成です」

「！　そうやな」

「相手になるならどうでもいいが……むっ？」

唸る鉄拳。

うさベアさんの後頭部を狙い、飛んでくるのは《黒鋼術》で創られた鋼鉄の篭手。

これはうさ耳で受け止めた。

「あはは。流石に不意打ちは無理か」

次に現れたのは黒衣の覆面魔術師。

コードネームは『鉄仮面』。

「マーク、お前」

「元はと言えば僕が君を檻の中に閉じ込めきれなかったせいだからね。さっきのお礼も兼ねて僕も手伝うよ」
「……フフ」
最後に覆面忍者の『抜け忍』。
エース達が熊狩りに集結。
「砂更！」
トニカ君は砂の精霊の力で馬らしいものを作った。覆面エース達はそれぞれ馬に跳び乗る。
「流石にこのメンバーでガチ勝負だとすごい被害が出そうだから騎馬戦と同じルールで。最後まで付き合いますから負けたら大人しくして下さいよ」
「いいだろう」
喜んで承諾するバトルマニアのうさべアさん。
「あの、そろそろ俺達……」
「最後まで付き合え」
うさべアさんの馬を担ぐ生徒たちは度重なる戦闘で疲労困憊。
なのに問答無用で最後まで付き合わされた。憐れ。
「……はい」

「いくぞ」

いざ開戦。

ところが。トニカ君に庇われていたアイリーンはここで彼を呼び止めた。

「待ちなさい。貴方、一体どうして」

「アイリさん」

振り返るトニカ君。

「な、何です？」

「熱くなるのはいいけど、周りを見るのを忘れないようにね」

「なっ」

「クオーツさん達がやられた時点で北軍は負けてたんだから、無理して大将旗を守らなくても」

「私は！」

アイリーンは憤って1度大きな声を上げるが、言われたことはもっともなのでそのまま萎んでいく。

「アイリさん？」

「私は……この競技で誰にも負けたくなかっただけです」

目の前にいる少年を見返したかったから。

ムキになっていた自覚はある。だけど少年は相変わらず。彼がト

ニカ君の着ぐるみ手に入れて今まで何をしていたのかは知る由もない。

あの時、アイリーンは敵を求めて襲撃してきたうさベアさんに立ち向かっていた。

あらゆる氷の魔術をぶつけ、そのすべてを打ち砕かれても最後まで戦った。負けないと意地になって。

そして最後の《氷晶壁》が破られ、うさベアさんに武器を振るわれた瞬間。トニカ君はいきなり飛び出してきたのだ。

自分勝手な理由で敵視していたのに。

そんなの馬鹿馬鹿しい、関係ないとばかりに少年は彼女の前に現れた。

自分が敵わなかったうさベアさんを相手に互角に戦った。

何も見返せないまま。それでいて庇われた。

「私は、ただ……」

悔しい。アイリーンは着ぐるみの中で俯いてしまう。

「なんだかなぁ」

そんなアイリーンの心情も知らないまま、トニカ君は彼女の頭を

ぽふぽふと撫でるように叩いた。

「やめてください」

「……1つ聞いていい？　アイリさんはクルスさん、じゃなかったあのクマさんと戦って怖くなかった？」

「何を言ってるんです。誰を相手にしても気迫で負けては話になりません」

「……そうですか」

なんというか、彼女は魔術師のくせに気合と根性論が成立している。

熱血の《銀の氷姫》。

「だったらアイリさんは十分強いよ。アギやエイリークだってそうだけど、みんな強い。……俺は怖かったから」

「えっ？」

アイリーンにとって意外な言葉。

「今だって俺はあの人の、《剣闘士》の剣が怖い。正面から受けて立つなんてとても」

「でも貴方は」

「おいユーマぁ！」

叫んだのは『不死鳥』。

「早よ来いっちゅーに。このままじゃ幾らワイらでも……どわっ」

「余所見するな」

彼はうさべアさんの目の前で滞空して連続で蹴り技を放っているが、すべて受け捌かれて苦戦中。

『鉄仮面』が彼を援護するが、ロケットパンチはあまり効果がないようだ。

やれやれと首を振るトニカ君。

「ヒュウさんめ。何のためにコードネームつけたんだか。名前で呼んだらばれるでしょうが」

砂更の力を使い、風葉が頭に乗っかっている時点で何を言うのか。

「呼ばれたから行ってくるよ。あまり時間かけると残りの競技にも影響して迷惑かけるし」

「待って下さい。ユーマさん、怖いってどうして」

「ちょっとしたトラウマ。まあ、こんな風にふざけていればいろいろと誤魔化せるんだけどね」

「貴方は」

何も言えなくなるアイリーン。

「出撃だ。砂更、俺の馬も動かして。風葉、行くぞ」

「……」

「はーい」

「なんで……」

彼女を置いてトニカ君は、砂の馬に跨って最後の戦いに赴いた。

1人取り残されることになるアイリーン。

彼女の頭の中は戸惑いと困惑、疑問で一杯。

「あの人は一体、何なのですか」

「お嬢さん。真実が知りたいかい？」

「……」

「……フフ」

『抜け忍』はいつも怪しい。

＋＋＋

「かぜはぐんそー、突撃ー」

「お前、いつ昇進した？」

風葉上等兵は進軍フェイズ中にヒュウナーのモヒカンを刈り取り、エースを1人撃破したことにしている。

2階級特進の戦果らしい。

「まあ、いいや。……ヒュウさん！」

熊狩りに合流するトニカ君。まずは『不死鳥』に呼びかける。

「お待たせました。俺達の合体技、いきましょう！」
「なんやて？」

何も聞かされていない。勢い任せのアドリブ。

「いくぞ。風葉、鳥人スピンだ」
「たーつーまーきー」
「なんやそれ、えっ、ちょい待てって……ぎゃあーーっ」

竜巻の奔流に飲み込まれた『不死鳥』は1度高く舞い上がり、高速回転しながらうさべアさんに体当たり。

「だあああああっ、ぶっ！　……」

だけど大技すぎて容易に躱されてしまった。

「外したか」
「……」

沈黙。頭から突き刺さるように地面に埋まる『不死鳥』。

狙われたうさべアさんも呆れるばかり。

「何がしたいんだ、お前ら」
「……うん。これは改良が必要だな。よし。次は必殺、烈風鳥人突きを」
「死ねや！」
「うわっ？」

ブチキレながら蘇る『不死鳥』。仲間割れしてトニカ君に襲いかかった。

そのまま乱闘へ突入。

＋＋＋

「結局、あの人はリンドさんと同じ。みんなと混ざって騎馬戦をしたかっただけかもしれません」

屋外実況席。ポピラは乱闘を続けるトニカ君を見てそう解説した。

「競技は終わりましたし、もう滅茶苦茶ですけど」

「ポピちゃん。完結編は次回やるからこの場を無理矢理締めちゃって」

「……なんの話ですか？」

部長さん、それはこっちの話です。

「ダラダラ続けてもしょうがないんだよ。はい、いつもの台詞どうぞ！」

「馬鹿ですね」

「ＯＫ！　いつもの入りました」

強引に締めにかかる報道部部長。

「これをもちまして騎馬戦は終了！　ありがとうございましたー」

「……この人も馬鹿なんです」

次回が完結編

＋＋＋

騎馬戦　－完結編－（前書き）

騎馬戦はこれで終了。次回が番外編のエピローグ

……ほんと長々と続けてすいません

騎馬戦　―完結編―

＋＋＋

前回からの続き。まずはエース達から。

うさベアさんこと《剣闘士》、クルスの暴走にエース３人がかりで対抗したトニカ君こと《精霊使い》のユーマ。

途中、リアトリスとミヅル、それにエイリークがクルスを止める為に救援に駆けつけてくれた。

稀に起きる《剣闘士》の暴走はエース全員で止めるのが暗黙のルールなのだ。

ところが。

その１０分後。彼らの奮闘虚しく、クルス１人に６人は全滅しかけていた。

「なんや。６人がかりでこのザマかい。……くそっ、いっそのこと本気を出せば」

「あはは。そしたらクルスも容赦なく《闘気剣》を使ってくるよ。殺し合いになるけどいい？」

「うっ、それは」
「そんなの私の方からお断りよ。でも、エースが5人もいてこの結果はちょっと、ね」
同じ《Aナンバー》である彼らさえも、学園最強との実力差を改めて思い知らされる結果に。
「生徒会長を探しに行ったクオーツ達はともかく、ミストの奴はどうした！」
また、『抜け忍』こと《霧影》のミストは参戦もせずアイリーンと何か話をすると、そのままどこかへと消え去った。
「……」
アイリーンはどこかぼんやりとした様子で突っ立ったまま。
彼女はトニカ君のほうをじっと見ている。
「もう終わりか？」
「散々暴れたくせに何つまらなそうに言ってるんですか」
突っ込むユーマ。トニカ君の着ぐるみはボロボロだ。角は折れて耳も片方が千切れてしまっている。
勝機が全く見えない。エイリークはユーマに訊ねてみる。
「どうするのよ？　アギもどこかへ行ったっきり帰ってこないし」

「アギか」

エイリークの馬を担いでいたアギは随分前からいない。それはユーマが彼に1つ頼みごとをしていたからなのだが。

そろそろアギも『仕込み』を終えているだろう。切り札は何時だって使えるはず。

「こうなったらもう、あれしかないか」
「あれ？　何か手があるの？」
「ああ。クルスさん相手なら最初から『痛み分け』には持って行けたんだ。ただ俺が使いたくなかっただけで」
「そんなの、もったいぶらないでさっさと使いなさい」
「……了解」

切り札はユーマにとって諸刃の剣。

エイリークに急かされたことはともかく、覚悟を決めた。

ユーマは最強最後の手段、精霊の力さえも使わない無敵の呪文を、叫ぶ。

「出番です。先生、せんせぇーーい！！」

悪党の小物くさいそのセリフ。

「……は？」

「何だと」

奥義、《教師召喚》。

唖然とするエイリーク達。

拍子抜けしたその一瞬がクルスの致命傷となる。

「先生、ってまさか」

「……クルス」

「「！」」

速すぎて、もう遅かった。

現れたのは、枯れ木ような体躯の小柄な老人。ヒヒの仮面を被っている。

この老人こそ《剣闘士》の師匠である《気》の伝道者。学園最古の教師。

またの名を《超闘士》。

とん、と軽い跳躍。ウロン老師は一瞬でクルスとの距離を詰める。

「老師！？」

「弟子よ。お前はまた教えを破り学園で《闘気剣》を振るったそうじゃな」

「まさか！　今日『は』１度も使っておりません」

必死に、冷や汗だらだらで嘘をつくクルス。彼はマークの檻から脱出する際に闘気の刃を創りだしていたりする。

「そうか。……アギからお前に口止めされていた件があると聞いたが」

「！？　ミツルギぃ！！」

――老師に話しやがったな！？

学園最強といわれる彼が余裕を失くしている。パニック状態。

クルスは教えを破った時の老師が死ぬほど怖かった。

ちなみに。

この時ユーマは風葉と一緒にトニカ君の顔で「あっかんべー」の仕草をしている。

ジェスチャーを言葉にするとこうなる。

『運動会で何1人マジでやってるんですか。騎馬戦もめちゃくちゃにしやがって、この戦闘狂脳筋』

『俺が相手するまでもないんですよ。クルスさんなんて、おじいちゃん先生にやられてしまえ！』

『ばーか、ばーか、ばーか』

兄である光輝の真似をした、馬鹿にしたユーマの態度。

クルスは風葉の罵倒まで聞こえた気がした。

「この野郎」

「馬鹿弟子が。3年にもなって少しは自制を覚えんか。では」

「違っ、待ってくれ、老……」

「制裁」

放たれたのはクルスの首を狩り取るような鋭い回し蹴り。次の瞬間、クルスの姿は消えた。

弾丸のように一直線。水平にまっすぐ、彼方へ。

クルスは蹴り飛ばされた。

瞬殺。

まざまざと見せつけられた生徒と教師の力の差。

そして何故か勝ち誇るユーマ。

「ふっ。勝った」

「んなわけ、あるかぁあああああ！！！」

唸る旋風。

エイリーク新必殺のツッコミ、《昇華斬あっぱー》がユーマに炸裂。

「ぐはーっ！！」

「生徒のいざこざに教師を介入させるのは学園の生徒の、暗黙の禁じ手よ。覚えときなさい！」

垂直に、まっすぐ、天に向かって打ち上げられるユーマ。

それから地に墜ちた。

ぐちゃ。

「……」
「思い切りの良い拳じゃ。鍛えれば立派な《闘士》になれそうじゃが、どうかの？」
「お断りします。私は剣士を志すので」
感心する老師の誘いをやんわりと笑顔で断るエイリーク。
「それは残念。では教師としてこ奴らを連れて行こう」
「どうぞ」
「「……」」
老師が不肖の弟子と謹慎処分中の生徒を連れ去ることで騎馬戦は本当に幕を閉じた。

＋＋＋

「……ブソウ。これお願い」
「お前という奴は。久々に顔を見せたと思えばこれか？」
捕まえた編入生たちをブソウに押し付ける《黙殺》。
「……仕事する貴方は素敵よ？」
「棒読みで疑問形。それで褒めたつもりなのか？」
自警部部長の宿命か。今日も彼は職務に追われることに。

2つ目の話は編入生を捕まえたあとの、彼女の話。

一段落したベスカは、この場を去る前にかつての仲間であるイース達に声をかけた。

「久しぶりね。……正直羨ましいわ。かつては同じ竜騎士団にいて、堂々と学園に残ることができた貴方達が」

「……」

イース達は彼女を目にして戸惑っている。彼らの態度にベスカは少しだけ寂しく思う。

同時に仕方ないとも彼女は思った。《竜使い》を裏切ったのはお互い様ではあるが、皇帝竜事件で《精霊使い》についたイース達とは敵対した関係でもある。

「それじゃあね。ワタクシとはもう、会うことはないでしょう」

「あのう、ちょっと待って」

代表してイースが彼女を呼び止めた。

「何かしら?」

「失礼ですけど、どなたですか?」

「……」

ベスカは沈黙した。

（まさか。彼らでさえワタクシの『変装』に気付いてないというの？）

表向きは学園にいないことになっている、ベスカさんことリリーナ・コンベスカ。今も彼女は金髪のかつらとニット帽を被った『リリーナさん』の変装をしている。

ベスカだと気付かずに疑問を口にするイース達。

「あなたみたいな人が本当に竜騎士団にいたのですか？」
「曹長！　女性に対してなんと失礼な。早く思い出して私に紹介して下さい」
「王子、戻ってます」
「兄弟、覚えてるか？」
「いいや」
「こんな美人、忘れるわけがない」

内緒話どころかがやがやと騒ぎたてる。エイヴンなんて素に戻ってしまってる。

「貴方達は」

ベスカは呆れを通り越して怒りを覚えた。

何より、変装した自分を美人と褒められても嬉しくともなんともない。

ベスカは憤ってうっかり正体を明かそうとした。

「い、いいですか。ワタクシは竜騎士団の幹部の1人だった……」

「リリちゃん！」

「大丈夫でしたか？　リリーナさん」

「リリーナ？　そんな名前の奴いたか？」

「さあ？」

「……」

またもや押し黙ることになるベスカ。諦めた。

彼女に駆け寄って来たのはリンとジン。

ベスカは変装でジンに正体を気付かれてないことは前から知っている。むしろ絶対に気付かれたくないのだが。

「リリちゃん。大丈夫だった？　刃物向けられて怖くなかった？」

「……ええ」

問題は抱きついて彼女を心配するフェアリーの親友。

相変わらずね。そう思いつつもベスカは曖昧な返事をした。

実は《濃霧》の中で迷子になったリンを、ベスカは正体がばれる覚悟で保護に向かったのだが、変装した自分にまさか全く気付かれないとは思いもしなかった。

リンは変装した彼女のことを『リリーナ』という別人で認識してしまっている。

「……親友と思っていたのはワタクシだけだったのかしら」

正体はばれない方が良いに決まっているけれど。内心複雑。

「ねぇねぇ、リリちゃん」

そんな彼女の心情を知らないリンは『リリーナ』に声をかける。

にこーっとした無邪気な笑顔は相変わらず。意地悪で耳をつねってやりたくなる。

「……なんでしょうか？」

「よかったね。ジンに助けてもらって」

「っ！？」

ドキリとする発言をいきなり言うのも相変わらず。

「ジンは弓を使うと一段とかっこいいんだよ。ちょっと羨ましいな」

「……！」

だけど、この照れ気味に恥じらう親友の表情は初めて見た。

（この子はっ！）

ジンに『射抜かれている』。

ユンカのみが習得しているという識別能力をベスカは、《射抜く視線》の副作用も何も知らないまま本能で理解してしまった。

ベスカは無意識にリンの尖った耳をつねり、ジンを睨みつける。

「リリーナさん？」
「リリちゃん！？　痛い、痛いよ～」

じたばたするリンはこの際無視。

「あの、リン先輩が」
「いいのよ。手加減してるから。それよりも貴方。この子に手を出したら許さないわよ」
「はぁ」

それよりも手を離してあげた方が……。ジンはベスカの剣幕の前にその一言が言えず、リンを助けられなくておろおろ。

「た、助けて～」
「先輩！？」

（何よ。りんりんばかり心配して。先程はワタクシのこと守ってくれたくせに……って！？）

ベスカは何かとんでもないことに気付きそうになって、慌てて思

考をシャットアウト。

「リリーナさん？」

「黙って。……ちょっと落ち着きたいから」

「いえ、その前に手を……」

「やめてリリちゃん。耳がのびる～」

「先輩！？」

ベスカは顔を真っ赤にしながら、手慰みにリンの耳をいじりまわし続ける。

彼女の奇行はジンに対するリンへの嫉妬か。それともリンに対するジンへの嫉妬故か。

未だジンに『射抜かれた』自覚のないベスカの心情は親友の存在で一層複雑となり、１人でずっとぐるぐるすることに。

「リリーナさん、いい加減にしないとリン先輩の耳が」

「ああっ！　でもこの絶妙な力加減は怒った時のベスカちゃんそっくり……」

「……そこまでわかっていながら、貴女という子は！」

「きゃあ～」

リン（天然）、ベスカ（無自覚）、そしてジン（無節操？）の三角関係。

「あいつは、私の生涯の敵ではないだろうか？」
「王子……」

傍目からは美少年が女の子2人と楽しそうにはしゃいでいるようにしか見えない。

ジンを羨み、嫉妬する彼の敵は増える一方。

＋＋＋

運動会の騎馬戦、そこで起きた編入生の事件とエースの場外乱闘、そのすべてが終わろうとした頃。

生徒会長はとある校舎の裏で佇んでいた。報道部の中継で騎馬戦を観戦しながら。

彼はトニカ君が現れたのを見ると、そろそろ迎えが来るはずと踏んでいた。

「セイ！」
「無事か？」
「やあ。クオーツ、メリィ」

現れたのはクオーツとメリィベル。

「早かったね。騎馬戦を途中で放棄してロートさん達にリンド先輩を押し付けてきたなら当然か」
「何を呑気なことを。……こいつらは？」
生徒会長の近くに積まれているのはロープで縛られた学園の生徒たち。
中には編入生でない生徒も、まして学園の生徒でさえない者もいる。
「襲撃者。僕を狙ったね」
「……！」
「拉致か暗殺か。目的はまだわからないけど『本物』だよ。《濃霧》を発動したあの時にね」
襲われたんだよ、と生徒会長。
本物。
生徒会長の素性を知り、彼を狙って密偵や暗殺者を学園に送り込んだり、潜伏させていた誰か。
「やっと捕まえたよ。こんな物騒な奴ら、僕のせいで学園にのさばらせたままなんてできなかったら」
「まさか、わざと囮になったのか？　騎馬戦で俺やセルクスと離れて行動しようとしたのは」
「その通りだよクオーツ。彼らもだから油断して……メリィ。いい加減止めてくれ」
「がう、がう」

メリィベルは、両手に付けたベル子さんグローブで生徒会長をかぷかぷしていた。うっとおしい。

生徒会長の護衛としては心配以上にとても憤慨している。

「セイ。メリィは怒ってるんだぞ。1人で危ないことしたら駄目じゃないか」

「悪かった。でもちゃんと護衛は頼んでいたから僕に危険はなかったよ」

心配する2人の精神衛生上、気絶させられたことは黙っておく生徒会長。

「護衛……もしや《霧影》が」

「そうだよ。裏の戦いで《忍者》である彼ほど頼りになる人はいないからね。僕の事情も容易く口にすることはしないだろう」

「……あいつ」

「ううー。変態め、よくもセイを」

頼りにされず、若干拗ねている生徒会長の側近たち。ミストに嫉妬してさえいる。

これはユーマも知らない裏舞台の裏の話。生徒会長の事情。

もう終わったことだと、クオーツは溜息をついた。

「今度からは俺達にも相談してくれ。そうでないと俺とセルクスがお前の側にいる意味がない」

生徒会長の《騎士》は念の為釘をさしておく。

「わかった。今度から気をつける」

「そうしてくれ。ミツルギのように動かれては困る」

「……彼か」

ここからは裏舞台の話。

「あのあと僕は彼の実行委員会に連れ去……いや、保護されてね。メリィ、睨まないでくれ。僕は大丈夫だったから……それで彼と話をしたんだよ。編入生の扱いのことで、ってクオーツ？」

「そのことも俺は聞いてなかったな」

クオーツもメリィベルと同じく、問い詰めるように生徒会長を睨みつけた。

「編入生は《会長派》の戦力に取り込むだけだったはずだ。どうして彼らに功を急ぐように唆せた？　それで学園に余計な混乱を招くことはお前には想定できたはずだ」

「学園の生徒が問題なく治めることもね」

平然と答える生徒会長。

「その点でもミツルギ君は大したものだ。編入生のことも知らない段階から、あらゆる事態を想定して実行委員会を編成していたのだから」

また、ユーマの作った実行委員会を承認したのは生徒会長である。

「話を逸らすな。俺はお前がなぜそうしたかを聞いている」

「……クオーツ。君が気に入らない話だよ」

そう前置きして生徒会長は話した。

編入生を使った生徒会長の思惑。それは『敵』を用意すること。

生徒の成長を促す刺激、事件を彼は編入生を使って起こそうとした。

勿論《会長派》の戦力増強も考えてはいたが、それは彼の優先順位の中では下でしかない。

学園の総合力が高くなる方が彼にとって後々都合がよかった。

「僕達は今以上に強くならないといけない。来るべき時の為に」

「……」

「事件を起こした編入生は学園ではこれからずっと悪者だ。居場所を失くした彼らは裏で援助してやれば僕に縋りつくようになり、使いやすい駒になる」

「！　セイ、お前」

「比較的平和な学園にいる僕たちが急成長するには、皇帝竜事件のような試練がもっと必要なんだ。僕はそう思う」

「その為に編入生を自分で集めておきながら、切り捨てる気なのか？」

窘めるべきだ。目的の為とはいえ、生徒会長の行いをクオーツは許せそうにない。

だが、その前に生徒会長を咎めた少年がいた。

「いいや。このことを知ったミツルギ君は僕に言ってきたよ」

――道具じゃないんだ。彼らを同じ学園の仲間だと扱ってください

――あなたが責任を取るべきだ。編入生を捨てるような真似をするなら、俺は……

以前ユーマは生徒会長にこう言ったことがある。学園のことで手伝うことがあれば手伝うし、間違っているのなら全力で止めると。

ユーマの《本気》を生徒会長はついさっき目の当たりにした。

恐ろしかった。生徒会長はユーマに選択を迫られたのだ。

自分の態度1つで《会長派》どころか学園を潰しにかかると。

ユーマが見せたのはあらゆる力を駆使してでも喰らい、潰すという暴虐なほどの決意。

それでいながら生徒会長に対して敵意も殺意も映さなかった、澄んだ色をした黒い瞳。

あんな矛盾を孕んだ瞳の色を彼は知らない。

（いや。僕は2人、あんな目をした人を知っている）

正義や悪という余計な概念を捨てた、力を振るうことに躊躇いを失くした目を。

（あの人と違い、彼は自分の意志で切り替えることができるのか？だとしたら）

彼の知る2人の内の1人、《剣闘士》と同じだ。

生徒会長は思い知らされた。《精霊使い》は《剣闘士》と本質は同じだと。

学園の守護者にも破壊者にもなれる危険を孕む存在だと。

（学園長が《Aナンバー》とは別の《アナザー》のエースを作った狙いはまさか……）

その考えは無理矢理封じ込めた。推測でしかない。

「クオーツ。それにメリィベル。編入生は皆、僕らで面倒をみるよ。……彼を敵に回したくないからね」
「……そうか」
「軽蔑するかい？」
「いや。俺もセルクスもお前の《騎士》だ。最後までお前を守り、信じよう」
「ありがとう。まあ、編入生のことは最初からそのつもりだったけどね。やり方が少し変わるだけさ」
「……」
クオーツは不審に思ったが、顔と口には出さなかった。
生徒会長は今後のことを彼に伝える。
「編入生たちは一旦君達に預けるから指導を頼む。使える者は早速《蒼玉》で鍛えてくれ。人格に問題のある者は今度結成するヒュウナーの騎士団へ。荒っぽい連中の扱いは君より彼の方が向いているはずだ」
「……了解した」
「セイ。メリィはどうする？」
難しい話が終わったと、話に混ざってくるメリィベル。
「そうだね」
生徒会長は無邪気に抱きつく着ぐるみに辟易しながら――中身の柔らかい何かを意識しないようにしながら――彼女に１つ頼みごとをした。

「とりあえず着替えを用意してくれないかな？　まだ外は寒いよ」
「あ」
ユーマにトニカ君の着ぐるみを剥ぎ取られた生徒会長は今も下着姿のまま。
クオーツは言われてやっと気付き、配慮のない自分を恥じた。
「……すまん」
「セイ。水中戦用のかえるさんでいいか？」
「……とりあえずはね」
なぜカエルで、メリィベルがどこから着ぐるみを取り出したのか、生徒会長は突っ込みさえしない。
運動会、ひいては騎馬戦内で起きた事件と争いの数々は、これで一応の決着がついた。
＋＋＋
運動会が終わった翌日。

学園の正門前には磔にされた2人の姿があった。

ユーマとクルスだ。

ユーマは謹慎処分を破った罰、クルスは以前老師の教えを破ったことがばれたせいで、とりあえず2人は一晩外で反省させられることになった。

その日、エイルシアは磔にされたユーマを複雑そうに見て、こう訊ねている。

「ユーマさん。あなたは学園にいて、楽しいですか？」

ユーマは彼女に正直に答えた。

「……まぁ。割と」

＋＋＋

エピローグ―姉姫様のお帰り（前書き）

４０話以上も続けた番外編もこれでおしまい

次から3章です

エピローグ―姉姫様のお帰り

＋＋＋

早朝。学園長室。

「ごめんなさいね。こんな朝早くしか時間が取れなかったもので」
「いいえ、そんなことは。無理を頼んだのは私ですから」

謝りたいのはむしろ彼女、エイルシアの方だった。学園長に頭を下げる。

運動会の終わった次の日。

エイルシアは学園長と面会する約束をようやく取り付け、こうして学園長室にやってきた。

「わざわざ機会を設けてくださりありがとうございます。それにアロウさんも」
「構わないさ」

学園で出会ったのは偶然。学園長を通して会って話がしたいと頼んだエイルシアに『アロウ』と呼ばれる彼女は快く応じてくれた。

女性としては長身で華奢。全身を構成するパーツがすべて細い。
ある意味理想のプロポーションを持つエイルシアよりも年上の美女。
珍しい黒髪のエルフ。今は襲名しているのだが、『オーバ』の姓を名乗っていたこともある。

彼女は今代の《弓》。勇者である。

アロウは気さくにエイルシアに話しかけてくる。

「イゼットさんとは《盟約》もあるからね。学園を発つ前に挨拶するつもりでいたから丁度よかった。……それにしても」

「？」

まじまじとエイルシアは見つめられる。

「何か」

「君はもしかして……年下が好みかい？」

「なっ！？」

さらりと爆弾投下。

「いきなり何を言うんです！？」

「いや、初めて会った時ジンと同じくらいの子を連れていたからね。姉弟には見えなかったし、もしかしたらと」

もしかしたらなんだというのか。

その先は言わないアロウ。エイルシアをからかっている。

エイルシアは激しく動揺。あと「姉弟に見えない」と言われたのは案外嬉しかったり。

「そんなこと言うならあなただって」

年下の美少年と平然と腕を組んだりして……

「ジンは私の弟子だ。私はあいつを拾った責任を取る義務がある」

「責任？　義務って」

「私が持つすべての技を注ぎ、ジンを全力でいい男に仕上げる。それからいい女とくっつけてやって、私があいつを幸せにしてやるのだ」

「……」

なにか雰囲気に圧倒されてしまう。

「私の目に適う女がいないなら、ジンは私が食うけどな」

「食べちゃうんですか！？」

アロウ。弟子（ジン）に『射抜かれている』かどうかは微妙なところ。

流石は勇者。外見に似合わず豪快なエルフにエイルシアはたじたじ。

「ああ。でも何かをしてあげたい、幸せにしてあげたいと思う気持ちはわかります」
「やはり。君とは気が合うと思っていたよ」
共感した。固く手を握り合う。
「４００年前の《弓》と《風使い》は《剣》を取りあう程の険悪な仲だと聞いていたがな」
「時代は変わったんですよ」
「そろそろいいでしょうか」
学園長が年下好き同盟に割り込んだ。
「エイルシアさん。アロウさん。盛り上がるのは構いませんけど、わたしもあまり時間が取れませんから。そろそろ本題に入ってもよろしいでしょうか？」
「あっ、すいません。……でも」
エイルシアは困ったように室内を見回した。
彼女が話をしたいのは学園長とアロウの２人だけ。だけど学園長室にはもう２人いる。
１人は魔術科の教師で学園長の側近ともいえるオルゾフ。エイルシアは彼から得体のしれない何かを感じる。
感じ取ったのは厳重に抑え込んでいる膨大な魔力。彼は表向き《魔術師》とのことらしいが、エイルシアには違うことがはっきりとわかった。

でも、オルゾフと名乗る教師はエイルシアのような《魔法使い》よりもむしろ、『彼女』の方に気配が似ていて……

「流石は《風邪守の巫女》。気付きましたか」

「！」

急にオルゾフに声をかけられる。エイルシアは酷く驚いた。

「あなたは、まさか」

「エイルシア姫。私のことはご内密に。それと今はいないものだと思ってくださって結構です」

「そんな、でも」

「落ち着いてください。……そうですね。気になるのなら国にいる妹君にでも訊いて下さい」

「妹……」

「私の名は《心火》。言えば彼女も思い出してくれるでしょう」

心火。燃え立つような激しい憎悪、憤怒の情。

死者の魂が飛び交う炎。

エイルシアは学園長を見た。変わらず穏やかに微笑んでいる。

知っている？　オルゾフの正体だけではない。

エイルシアの義妹のことまでも。

「土産話にでもしてください。彼女が私のことを知ってどう思うか気になりますが」
「きっと」
言葉を失っていたエイルシアだったが、苦笑するオルゾフを見ると思いなおして笑みを返した。
「ラヴちゃんはすごく驚くと思います。そのあとできっと……あなたがいてくれたことをすごく喜んでくれます」
「そうだといいですけどね」
ラヴちゃん？
オルゾフは今の《病魔》を想像できなくて可笑しそうに笑った。
「エイルシアさん。オルゾフさんを呼んだのは機密保持の為の結界を張ってもらう為なのです。ご了承ください」
「わかりました。……彼女は？」
「孫娘です」
エイルシアが集まった最後の1人を見て訊ねると、学園長はそう答えた。
孫娘と呼ばれた彼女は不機嫌そうな顔をしている。彼女とはもうエイルシアは会っていた。
報道部部長。

エイルシアは彼女が学園長の血縁者と聞いてここにいる理由を納得する。

「では彼女が次の《槍》……」

「違う！　おばーちゃん。ボクは『ランス』の名前を継ぐ気は全くないって言ったはずだよ。『ナクル』だって」

特ダネという餌に釣られ、誘い出された部長。騙されて祖母である学園長を睨みつける。

「あらあら。だったら早くわたしに旦那さんを紹介しなさいな」

「うっ」

「どこかへ嫁ぐというのならわたしだって強制はしないわ。お祖父さんは知らないけれど」

「ううぅ……」

「そのお祖父さんから匿ってあげてるのはわたしですけどね」

「……」

部長の家柄は複雑であり、それに伴い彼女は厄介な事情を抱えていた。

黙り込む部長。昔から学園長には勝てないらしい。

「まあ、今日あなたを呼んだのは《槍》や《拳》といった継承者の話とはさほど関係ないですけど」

「イゼットさん？」

「ええっ？　じゃあなんでボクはここにいるのさ」

驚くエイルシアと部長に学園長は説明した。

「エイルシアさん。あなたが話そうとしていることは大体察しがついています。……ユーマさんのことですね」
「……！」
「ミツルギ君？」
部長はまだ事情が飲み込めない。
「何の縁があってか、この子は今日までの間に何度もユーマさんを助けています。まあ、それは持ちつ持たれつつの関係ですが」
「それが、なぜ？」
「彼女にもユーマさんの正体を話してあげてください」
「！？」
「勇者の継承者であることとは別にして、学園にいる間はわたしよりもこの子の方が力になってくれるはずです」
「……どこまで」
知っているの！？
エイルシアは学園長に畏れさえ抱く。
イゼット・Ｅ・ランス。
リーズ学園の学園長。かつての《聖王国》、その王家の血に連なる者。
４００年も昔より、《槍》の名を預かる者の末裔。

「世界のあらゆる情報を集める癖は、祖先リーゼリットから続くわたしたちの宿命みたいなものです。この子もそうですし」

そうでしょう？　と穏やかな笑みを孫娘に向ける学園長。

報道部の部長はばつが悪そうにそっぽ向いた。

「エイルシアさん。あなたが確認したいのは……わたしたち勇者の継承者が《残された者の盟約》を守る気があるかどうか、そうですね」

「……はい」

「ならばわたしは、わたしの預かる《槍》の名にかけて遠い約束を守りましょう。アロウさん？」

「いいだろう。その彼が本物ならば」

「ち、ちょっと《盟約》って？　まさかミツルギ君は」

「お話します」

ここまで知られているならば話は早い。エイルシアは学園長の言葉を信じた。

《盟約》とは最後まで生き残った勇者たちの償いと誓い。

それは、もう2度と《剣》を生み出さないということ。

この世界の危機に対して、世界は同じ世界の人たちが守っていく

ということ。

《剣》の恩に報いること。それは今後異世界の住人が現れたなら必ず救い出し、元の世界へ還すことに協力を惜しまないこと。

《残された者の盟約》とは、エイルシアの願いと同じもの。

＋＋＋

学園長達の協力という確約を取り付けることができたエイルシア。

学園に来た最後の目的を果たした彼女は、残った時間で学園にいる時のユーマやエイリークの話を聞いた。

それからは楽しい会談となった。

学園長室をあとにすると、エイルシアは帰り支度の為に1度妹の寮へ。

途中、彼女は正門前で大きな十字架を2つ発見した。

「……ぐー」

「……」

エイルシアは、磔のままぐったりしているウサギの着ぐるみを発見してしまった。

「ユーマさん」

「……ん？　あれ？　おはようシアさん。早いね」

「ええ」

割と平気な様子で朝の挨拶をするボロボロのトニカ君。謹慎処分を破ったユーマは只今反省中。

隣の十字架はうさべアさんの頭を被ったクルスが磔になっている。

そもそも謹慎処分のきっかけ、スタジアムを消し飛ばしたのはユーマではなくエイルシアなので、彼女は少年に対してちょっと申しわけない。

「体、痛くなりませんか？」

「2度目だから慣れたもんだよ。ちゃんと着込んでるから寒くないし」

「2度目……着込んでるって」

着ぐるみを、である。

「こんな朝早くどうしたの？」

「今日学園を発つので学園長先生にご挨拶を。あとユーマさんやリィちゃんのこともたくさん聞いてきましたよ」

「えー」

ユーマはちょっとばつが悪い。

昨日のこととといい碌な事をしてない自覚は彼にもある。

「変なこと、聞いてないよね？」

「どうでしょう？　たとえば……《歌姫》さんを護衛するお仕事なのに彼女を埋めてしまったり」

「もういいです」

聞かなければよかった。

「もちろんいいお話も聞きましたよ。ユーマさんのおかげでリィちゃんがむやみに物や人を吹き飛ばすことが少なくなったとか」

「……うん。まあね」

被害がユーマやアギに集約しているだけだ。

がっくりするユーマ。片耳になったトニカ君のうさ耳もしょんぼりうなだれている。

エイルシアはそんなユーマを複雑そうに見て、改めて訊ねてみる。

「ユーマさん。あなたは学園にいて、楽しいですか？」

ユーマは彼女に正直に答えた。

「……まぁ。割と」

「そうですか」

エイルシアは僅かに微笑んだ。

よかったかもしれない。ずっと風森の国にいるよりは。

エイルシアはユーマの秘密を学園長達に話したのだが、学園長達もまた、彼女の知らないユーマの秘密を教えてくれた。

まず学園長が学園のエースとなったユーマが沢山の依頼をこなしてどれだけ学園に貢献しているのかを話してくれた。

《エルドカンパニー》をはじめとする《組合》の技術士たちと共同で物を作ったり、ある時は食堂の新メニューを考えだしたり。戦闘関連の訓練や指導も積極的で魔術師用の新術式も幾つか開発したらしい。

自警部の仕事を手伝って学園の治安に努めもすれば、運動会のような生徒会の企画運営の手伝いなんてことも。

新しい企画や試みを興せば、エースの任務で得た報酬を元手に学生ギルドで募集をかけて多くの生徒にテストや作業を頼み仕事も斡旋している。

エースの任務となれば使役する精霊たちの力やガンプレートの高い汎用性が大いに役立つ。

癖の強い《Ａナンバー》の誰と組んでも相性が良く、どんな困難な任務も仲間たちと協力して達成。多くの戦果をあげている。

もちろんアギ達と無茶苦茶やって自警部部長や生徒会長に迷惑かけることも多々あるし、学園に大損害を与えることだってある。

ユーマが未だ学園を追放されずエースのままでいられるのは、今までの功績というか善行が辛うじて彼の悪行を上回っているおかげである。

いつだって首の皮１枚のような気もするけれど。

また、エイルシアは学年主任であるオルゾフの話からユーマが主に社会系、世界史や地理の授業を選択し学んでいることを知った。

報道部の部長の情報では、彼は時間があればしょっちゅう大図書館、《塔》の地下に潜り込み、秘蔵の著書や研究資料を漁っているという。

エイルシアはわかったことがある。

ユーマは積極的に学園の皆と関わることでここに自分の居場所を自分の力で確保しようとしている。

ユーマはこの世界のことを詳しく学び、調べることで何か大事なものを探そうとしている。

ユーマが風森の国へ戻らず学園に留まった理由。エイルシアが知りたかったその答え。

ユーマは。

長期戦の覚悟で自分の世界へ還る方法を探している。

諦めていない。エイルシアはユーマの還る意志をはっきりと理解した。

なぜなら《塔》の地下、《迷宮》に遺されたものの多くは《召喚》に関する研究書と異世界の勇者、《剣》の伝記ばかりなのだから。

ユーマが学園にいるはきっと準備期間なのだ。時がくればきっと旅立つ。

「ユーマさん」

「何？　シアさん」
「約束しましょう」

いつか。

自分を救ってくれたこの少年は、本当に自分1人の力で元の世界へ還ってしまうのかもしれない。

（私の力なんて必要ないかも）

そう思うと少し寂しい。いつの間にかいなくなってたりしていたら、もっと。

「夏休み。必ずリィちゃんと一緒に風森の国へ帰ってきてくださいね」
「？　わかった」

だから約束をしよう。

もう1度、再会する約束を。

「待ってますから。ラヴちゃんも、お母様だって」
「そっか。王妃様は目を覚ましたんだっけ。快気祝い、何がいいかな？」

「？　何のお祝いなんですか、それ？」
「あれ？　ないの？」
「ないんですよ」
笑い合う2人。

いつまでも笑顔でありたいと彼女は思う。
少年が還る、その時まで。
ずっと。

＋＋＋

エイルシアが立ち去ったあと。

「エイルシア・ウインディか」
「クルスさん？　起きてたんですか」
「彼女は、強いな」
「……まさか」
「ミツルギ」
「……」
「闘っていいか？」
「あんた、ほんとそれしかないんですか」

以上。礫バトルマニアの話。

＋＋＋

「リィちゃん？」
「……シア様ですか」

次にエイルシアが出会ったのはアイリーン。

エイルシアは昔から妹と同じくらいアイリーンを可愛がっており、区別する必要がなければ2人とも同じ呼び名で呼んでいる。

「リィちゃんはリィちゃんみたいに朝の稽古？」
「わかりにくいですよ」

本人以外は。

「いえ、今朝はちょっと散歩していました。魔術の訓練をするには今ひとつ集中できなくて」
「そう。ゲンソウ術の魔術は魔法と違って集中の仕方が違うものね」
「ええ」
「……」

会話が続かない。

昔はもっと『シアおねえちゃん』と慕ってくれていたのでちょっともの寂しいエイルシア。

「何か悩みごとでもあるの？」
「そんなことは」
「ユーマさんと仲直りした？」
「っ！？」

いきなり核心を突かれた。驚いてアイリーンの蒼い瞳は大きく開かれる。

「どうしてそうお思いに？」
「昨日のお昼のやり取りを見てますから」
「そうでしたね」
「それに私、《魔法使い》ですよ？」
「……ふふっ」

アイリーンは思わず笑ってしまった。《魔法使い》のくだりは幼少の頃によく言われていたことだ。

「懐かしいです。私やエイリィが何でもできるシア様に『どうして？』って訊ねると、いつもこう返されてましたね」

――私はお姫様で魔法使い。しかもお姉ちゃんだからすごいんですよ

「……そんなこと言ってたんですか、私」
「ええ。よく覚えてます」
「恥ずかしいですね」
「あの頃のシア様は今の私よりも子どもでしたから」

けれどその『魔法使いのお姉ちゃん』こそがアイリーンの憧れで、理想だった。

今でもそう。

綺麗で何でもできて、困った時はいつも助けに来てくれた幼馴染のお姉ちゃんは、魔法使い。

「それでは……ちいさなお姫様。この魔法使いめにお話し下さい。あなたの願い、私が叶えてあげましょう」

昔を思い出し、芝居ががった台詞で相談に乗るエイルシア。

「魔法使い様。あなたに願うことはありません。ただ、１つだけ貴女にお訊ねします」

「何でしょう」

アイリーンは訊ねる。

エイルシアに話すのは少し躊躇いがあるけれど、きっと確かな答えを与えてくれるはず。

「ユーマさんはどうして、あの時私の前に現れたのでしょうか？」

「……え？」

昨日、アイリーンは『抜け忍』という怪しい忍者に真実というものを話された。

聞いたことはユーマは1度《剣闘士》と戦い完全敗北しているということ。彼女が知ったことは《闘気剣》はユーマに刻まれた恐怖の《幻想》だということだ。

ユーマは斬られそうになった時に感じた死の感触を、叩きのめされた敗北感も相まって払拭しきれずにいたらしい。

「なのにどうして、あの人は私を庇ってくれたのでしょうか？　怖いと言っていた《剣闘士》を前にして」

一応の答えは『抜け忍』から聞いている。わかるようでわかりたくないようなもどかしい答え。

鵜呑みしてしまえば何かが変わってしまう。だからアイリーンはぐるぐるしていた。

「たかが運動会の競技です。庇われなくとも私が多少怪我をするくらいで済むことだったのです」

「……」

「あの人が謹慎を破ってまで、正体を明かすような真似をする必要はなかったのに」

「リィちゃん」

エイルシアはちょっと呆れる。

「はい」

「本気で聞いてる？」
「え？」
「そんなのリィちゃんだからに決まってるじゃないですか」

――『あの子』みたいに大切なものを傷つけられ、失うことこそユーマさんが1番怖れていることだから

――お姫様、貴女だから後輩は

形振り構わず、《剣闘士》に刻まれた恐怖の《幻想》を打ち破ってまでして。

「あなたを守ってくれたんですよ？」

＋＋＋

アイリーンが真っ赤になって走り去るのを見送ったあと。

『お姉ちゃん』の義務を果たしたエイルシアは、自分の精霊を喚びだした。

「……ねぇ、カレハ」
「何でしょう、エイルシア様」
「こういうの、何といったかしら？」

紅葉色の精霊は答える。

「確か……素敵なお塩を差し上げる、かと」

ユーマ（原文）→風葉（変換）→カレハ（意訳）と伝わった謎の故事。

「複雑です」

しょっぱい顔をした。

＋＋＋

出立の時間になった。

「リィちゃん。毎日ちゃんとごはん食べてね。夜更かししないで寝る前に歯も磨くのよ」

「姉さま……」

今度の「リィちゃん」はエイリーク。またもや『お姉ちゃんモード』全開のエイルシア。

「剣の修行ばかりじゃなくてお勉強もしっかりしてね。あと女の子なんだからお肌と髪の手入れにもっと気を配らなきゃ駄目よ。身だ

しなみも髪型とか服ももっと可愛いの着て欲しい……」
「姉さま！」
暴走中。
「大丈夫ですシア様。リィちゃんにはわたしがいますから」
お任せ下さいと胸を張るミサ。
ここ数日でエイルシアは気付いたのだが、この妹の幼馴染は『リィちゃんの親友兼専属侍女』と名乗る割にむしろ保護者として過剰に振る舞うきらいがある。
「リィちゃんはわたしが必ず、騎士服よりもドレス姿が似合うお姫様に矯正して見せます」
「よろしくお願いね」
姉としては問題なかった。
エイルシアのお見送りはエイリークとミサの2人だけ。
「姉さま。ユーマには会わなくていいの？」
「今朝のうちに挨拶は済ませましたから。あ、でも」
エイルシアは大事なことを忘れていた。
「エイリーク。あなたにお願いするわ。ユーマさんに気をつけて」
「姉さま？」
「ユーマさんが無茶するのを止めて欲しいの」

「……アイツはいつも無茶苦茶よ」

嫌な顔をするエイリークだったが、エイルシアの表情は真剣。

「そういうことではないの。……本当に、誰もがどうしようもない窮地に立たされた時。ユーマさんは必ず《本気》で立ち向かうはず。私とラヴちゃん、それにあなたの時と同じように」

「……」

「それだけはやめて欲しいの」

「わかったわ」

「リィちゃん？」

あっさりと頷く妹に姉は呆気にとられる。

「皇帝竜事件も、運動会の時もそう。アイツはいつもあんなだから姉さまは心配するのよね？」

「リィちゃん」

「だから面倒をみてあげるわ。アタシやアイリィ、アギやポピラ。みんなで」

「うん。……ありがとう」

伝えなくても妹はわかってくれていた。

1人じゃきっと何もできない。何も見つからない。

でも誰かといたなら、皆でいろんなものを分け合って支えてあっていけたら。

ひとりじゃないと伝えることができたなら。

「……ユーマさんだって1人で無茶なんてしない。どんな困難も、みんなの力で乗り越えてくれる」

「姉さま？」

「お願い。ガンプレートや精霊の力まではいいの。ユーマさんに拳を、それを使わせないで」

「拳？」

「右だけならともかく、左だけは絶対」

スタジアムを消し飛ばしたのはエイルシア。だがスタジアムを消し飛ばした《ゴッドフリート》を消し飛ばしたのはユーマだ。

あの力を得るきっかけを与えたことをエイルシアは後悔している。

「それって」

「ユーマさんだけの《幻想》、あの人だけのゲンソウ術。あれを多用しだしたらユーマさんはきっと誰も頼らなくなってしまうから」

「わかったわ」

姉妹はあたらしい約束を交わした。

「そろそろ行くわね。楽しかった。学園に来ることができて本当によかった」

「またね。姉さま」

「ええ。今度は夏の風森の国で。……カレハ、行きましょう」

「はい。エイルシア様」

こうしてエイルシアはちいさな護衛を連れて風森の国へ帰って行った。

ユーマやアイリーン、報道部部長など学園にいる多くの人に影響を与えて。

そしてエイリークは。

のちに、この日に交わした約束を破ってしまうことで、彼女は1つの転機を迎えることになる。

＋＋＋

おまけの話。

「……アンタ、何してんの」

「打ち上げ」

全校生徒で一斉に行われた運動会の片づけが終わった頃。

食堂の1室を間借りして、『コロデ小隊祝勝会』なるものを開いているのは『教官』ことユーマ。

室内の熱気がすごいことになっている。覆面野郎共が数人どころ

か数十人も集まった異様な空間。

祝勝会。またの名を『天下無双薙刃神教、武人たちの宴』。

「磔はどうしたのよ」

「着ぐるみから抜け出して、中に砂更の砂を詰めておいた。しばらくはバレないよ」

覆面パーティーは一応自分を隠すためらしい。

「……」

「エイリークも食べる？」

どうもまた食堂の厨房を借りたらしい。テーブルにはメニューにない料理がたくさんある。

「教官！　第3テーブルの部隊はすべて撃破。至急増援を」

「司祭様。おかわりをお願いします！」

「よし！　次は姉さんの師匠、陽香先生直伝のミックス玉だ」

「おおっ！？」

お好み焼きだった。

エイルシアの心配を余所に、今日も少年はマイペース。

「姉さまの心配を、返せぇぇぇぇ！！」

だから今日も吹き飛んだ。

＋＋＋

３－００　夏休みへの旅立ち（前書き）

第３章、夏季休暇編のスタート

3－00　夏休みへの旅立ち

＋＋＋

御剣家リビング。

中学の終業式を終えた優真が家に帰って1番に見たものは尻尾頭。

冷蔵庫を漁るはらぺこ狼。

「大和兄ちゃん……」
「おう。早かったな」
「うん。母さんは？　姉さんもいないの？」
「環さんは急な仕事が入ったとか。ユウは今日から夏季講習とか言ってたはず。だからタマ公もいない」
「ふーん」

それでこの兄は人の家で何してんだろう、と今更ながら考える優真。

「優真、飯作ってくれ」
「……ああ」

昼飯をたかりに来ただけだった。よくあることだ。

優真の母が出かけてしまいアテが外れたのだろう。ただ自分が帰ってくるまでこの兄に留守を任せる母は、一体どういう神経をしているというのか。

優真は冷蔵庫の中身が無事なことを祈りながら、自分の昼食と『餌』の準備をする。

３０分後。

「優真君」
「何？　大和兄ちゃん」
「これはなんだい？」
「焼きそば」

優真の目の前にあるのはソース焼きそば。

豚肉、キャベツ、もやし、たまねぎ、とよくある具材と炒め、紅ショウガをのせた普通の焼きそば。

優真のこだわりは麺にちゃんぽん麺を使い、予め醤油で炒め下味をつけておくことだ。

カリカリでモチモチの太麺にソースとはまた別の醤油の香ばしさが堪らない。

ただし、大和の目の前にあるのはもやし。

「どう見ても特盛りもやし炒めにしか見えないのは気のせいか？」

「かさましだよ」

焼きそばを覆い隠し山のように乗せられたもやし炒め。優真の焼きそばの４、５倍のボリュームがある。

「いや、増やすなら麺か肉の方がよかったが」

「うるさいよ。大体どうして家で食べようとしたの？　光輝さんは？」

「死人は飯を作らない」

「そっか」

突っ込まない。

あとで飼い主（光輝）に餌代を請求しようと考える優真。

「ほら。冷めるから食べよう。もやしに罪はないよ」

「そうだな」

親の敵とばかりにもやしを睨みつける大和。

食べることに関してはどうしようもない駄目兄貴である。

「優真」

「ほい」

どんぶりにご飯をよそいお茶を用意。

よくできた弟だと少年は自負している。

＋＋＋

黙々と焼きそばともやし炒めを食べる優真と大和。

「ごちそうさん。うまかったぞ」

「……相変わらず早いね」

炊飯器の中身を空にして満足気の大和。

「あー。久々に『こっち』の飯食ったからな。もやしだろうが最高」

「俺はもやし炒めだろうが手を抜かないんだ。でも久々って？　どこか行ってきたの？」

「夏休みだからな」

大和たちの高校は優真より一足先に夏休みに突入していた。

非難する目で兄を見る当時中学3年生の優真。高校受験生。

「旅行？　兄ちゃん達だって3年生なのに」

「なんだよ。今更俺に受験生でもやれって言うのか？」

「十六夜さんみたいになるのもどうかと思うけど」

「……師匠か。まあ俺のことはいい。今回は旅行なんかじゃなくてコウに連れていかれたんだ。もうすぐユウの誕生日だから」

「姉さん？」

「珍しい鉱物を探しにどこかの砂漠へ」

「はあ？」
「コウが必要だって言うからな」
「よくわかんないよ」

後のユーマが突飛な行動に走るのは、やはり彼らの影響に因るところが大きい。

「誕生日のプレゼントだよ。あいつ金属細工とかアクセサリー作るのも上手いぞ。お前だってほら」

言われてみればそうだと優真は納得する。彼が首に提げている『しろいはね』も光輝の作品だ。

それでふと思い出す。

「あれ？　姉さんは誕生日を迎える毎に髪飾りとかネックレスとか、毎年アクセサリーを付け替えてるけどもしかしてあれって全部」
「そうだ。コウの手製」
「……そこまでしてるのになんで付き合わないの？」
「いろいろあるんだよ」

訳知り顔の大和。

でも彼が1番やきもきしていたりする。

「……《梟》のこと？」
「関係なくもないが、ユウは知ってるし別だろ？　あれは幼馴染によくある『近すぎて見えない』の症状だ」
「詳しいね」

天然タラシのくせに、とは言わない。光輝と優花、2人を1番近くで見ている大和だからわかるのだろう。

余談だがこの兄、昔からよくモテる。優真はバレンタインデーがくる度にチョコの仕分けと混乱を避けるための『イベント』の整理券配りに光輝から駆り出されたりする。

「2人のことはなるようになるだろうと俺も静観していたんだが」
「が？」
「問題が起きた。長くなるからあとで話す」
「？　わかった」

優真と大和。

姉と相棒をくっつけようと本気で行動に移るのはこの日からである。

「それで光輝さんは？　今日も工房に籠っているの？」
「いや。多分何もしてない。道場に行ってもしばらく放っておいてやれ」
「……何かあった？」
「何も」

違和感を覚える大和の態度。優真はじっと彼を見つめる。

「その目はやめろ。ユウにそっくりだぞ」
「姉弟だからね。光輝さん、また殺したの？」
「……。ああ」

大和は観念した。優真は《梟》を知っている。

嘘をつくにしてもこの弟分は相棒のことも、自分のことも知りすぎていた。

「向こうでな。止められなかった。……止める理由がなかった」

「……」

黙り込む2人。大和が何を思い出したのか、優真にわかるわけがない。

そしてもう1人の兄はきっと、力の反動でまた『見せられたもの』を思い出してしまったのだろう。

世界のどこかで。

きっと兄達は理不尽なモノを見たのだ。

だから潰しにかかったのだろう。

許せなかったから。

《梟》そのものが理不尽なモノと理解しながら、自分を蝕むその力を……

「痛っ！」

優真は大和から拳骨を喰らい、とりとめのない思考を吹っ飛ばされる。

「兄ちゃん？」

「切り替えろ。お前が抱え込むモノじゃない」

「でも」

「だから言いたくなかったんだよ。変に聡くなりやがって」

「……観察眼鍛えろって言ったの兄ちゃんじゃないか」

ぶーたれ優真。

「黙れよ。とにかくコウは放っておけ。あいつが今更潰れることはない。ユウの誕生日までには元に戻る」

「でも姉さんには絶対にばれるよ」

姉は心配どころかお説教すると実の弟は予想。

「とばっちりで大和兄ちゃんだって」

「甘いな。コウが本気になれば《世界》も騙す。御剣優花、恐るるに足らずだ」

「その台詞、本人の前で言いなよ」

「無理だ」

古葉大和は潔い男だ。

今のが優真的にカッコイイかどうかは別にして。

「……」

「……話を変えよう。優真、今年はどうする？　山籠り着いて来るか？」

「やめとくよ。受験生だし」

夏休みの数日を大和と彼の師匠と過ごすのは毎年のこと。でも今回優真は高校受験を理由に遠慮することにした。

「そうか。でも飯係がいないとなると困るな」

「光輝さんは？」

「あいつが山に登る時は埋める時だけだ」

「そっか」

優真は突っ込まない。

あと海に行く時は沈めに行くというのが光輝である。

「ともかく今年俺はパス。来年はちゃんと行くよ。兄ちゃん」

「わかった。あーでも飯、どうすっかな」

「その辺の獣でも狩って焼けば？」

「それしかないか」

大和は突っ込まなかった。優真も。

ところで。

この１年後。その年も優真は大和と山籠りをすることはなかったのだが。

まさか自分（ユーマ）も魔獣を狩り、焼いて食おうとしているとは当時の彼は思いもしない。

＋＋＋

夏休みへの旅立ち

＋＋＋

再生紀１０１１年、７月終旬。

ここは《再生世界》。ユーマがいた《再成世界》とは異なる、別の世界。

この世界の中心、中央中立地帯にある学園都市。その中にある多くの学校は前期日程を終えて夏季休暇期間に移ろうとしていた。

Ｃ・リーズ学園もそう。今年は特に破損した校舎や設備が多く、生徒が帰郷する夏季休暇中に大掛かりなメンテナンスが学園全域で行われることになっている。

前期以上に騒がしくなると予想される後期に備えて。

そしてその騒がしい要因の1つである学園の生徒の1人、学園を大改修するきっかけを作ったとされる《精霊使い》の少年もまた学園を離れる準備をしていた。

「べつに追い出されてはないですよー」

「風葉？」

ユーマの精霊は相変わらず。

＋＋＋

ユーマは休暇中に1度風森の国へ戻ることにしている。

「振り返ってみると、俺ってエイリークの宿題を届けに学園に来たんだよな」

「うっ。またそんな昔のことを」

同じく帰郷の準備をしているのはエイリーク・ウインディ。

ユーマが向かう風森の国の第2王女。学園ではお姫様であることよりも《旋風の剣士》という通り名のほうが有名。

「それで来て早々吹っ飛ばされて絡まれて、また吹っ飛ばされて」

「……」

「アイリさんに喧嘩を売られたと」
「なっ！？」

以上。主人公による序章解説。

いきなり話を振られ、オチにされたのはアイリーン・シルバルム。

こちらはエイリークとは違い学園でもお姫様として有名な魔術師、《銀の氷姫》である。

「ユーマさん！　あの時は貴方の編入試験で」
「おっさんの推薦があってパスだったんだけどね。なのにアイリさんが無理矢理」
「うっ」

からかわれているのはわかるが、学園長に無理を頼んで模擬戦を申し込んだことは間違いない。

泣き真似をするユーマに何も言い返せないアイリーン。

「……いじわる」
「はいはい。さっさと次行くわよ。リア先輩も挨拶済んだし。ユーマ、あとは？」
「ティムスのとこ。あいつ学園に残るらしいから」

ユーマ達は学園を発つ前に挨拶回りをしている。お世話になった先生や先輩、友人たちへの礼儀だ。

夏季休暇中、帰郷する生徒が大半ではあるが学園に残る生徒も多い。

学生ギルドは年中運営しているのだ。長期休暇が稼ぎ時なのはどこの学生も一緒だった。

どこかの自警部部長のように前期の残務処理に追われていたり、補習から逃げる《鳥人》なんかは知らないけれど。

そんな中でもユーマの友達の技術士で、天才錬金術師のエルド兄妹は大分前から学園に残ることを皆に告げていた。

前期中に起きた《皇帝竜事件》。兄妹の兄、ティムス・エルドはその後始末、というか処罰で半壊したスタジアムの解体と新設工事の総監督に任命されていたのだ。タダ働き。

また、彼にそんな大役が任せられるのは、学園に11人しかいないエース、《Aナンバー》の1人であるからでもある。

本来スタジアムの解体、撤去作業を夏季休暇中までに終え、後期から新設工事の着手に取りかかる予定ではあったのだが。

「どこかの馬鹿がスタジアムごと瓦礫を消し飛ばしたからな」

工程が予定以上に早まり、夏季休暇中に工事をはじめることになってしまったという。

＋＋＋

「せいぜい休暇を楽しんできな。風森の国は西国でも避暑地として最高だからな」

「なんか、ごめん」

《エルドカンパニー》の社長室兼応接室。やさぐれたティムスに謝るのはどこかの馬鹿。

「冗談だよ。どの道学園には残る気でいたんだ。ＰＣリング用のアンテナ増設工事もあるし自分の研究もある。ついでだ」

ちなみに。

皇帝竜事件をはじめ多くの事件と問題を起こしていたユーマ。彼は夏季休暇を潰されない為に今日までの間、様々な任務と雑用をこなし学園から恩赦を得ている。

《アナザー》のエースでもあるユーマは何かと忙しい学園生活を送っていた。

「ティムスはそれでいいの？」

「総監督といっても現場工事は《組合》中心、組合長が指揮を執るからな。やるのは最終的な打ち合わせくらいだ。工程の確認と人員資材の調整程度ならイース達でも問題ない」

「流石は社長。人使いが荒い」

ユーマは《エルドカンパニー》の社長を褒め称えた。

「褒めてんのかよ。あいつらがマシになって余裕ができたのは本当だけどな。……それでだ」

「ん？」

「まあ、なんだ」

言葉を区切るティムス。物事はズバズバと言うタイプなのに珍しく口篭もる。

「お前、というかウインディ。あんたに頼みがある」

「アタシ？」

珍しいことにきょとんとするエイリーク。

彼女はティムスの双子の妹であるポピラに別れの挨拶をしていたのだが、いきなりティムスに話しかけられて驚いた。

２人はあまり接点がない。ティムスがエイリークのことを『ポピラの客』として扱い、自分では依頼を受け付けないこともあるのだが。

「何よ」

「ポピラだがな。休暇中お前の国で預かってくれないか」

「兄さん！？」

ポピラどころかこの場にいる皆が驚いた。

「でも、私だって仕事が」

「いいんだよ。ルックスやイースがいるから人手は十分だ。それでどうだ？」
「別に構わないわよ。居候はここにもいるし、もう1人くらい」
「エイリークさん」
あっさりと了承するものだからポピラは余計に戸惑う。
「……いいの？」
「お前には運動会の準備の代役や報道部に派遣して解説の仕事なんかもやらせたからな。社長自ら有休をつけてやる」
「兄さん」
「折角できた『ともだち』だろ？　だったらお泊まり会でもしてこい」
「……うん。ありがとう、兄さん」
素直に嬉しがる妹をみて、気恥かしい思いをするティムス。ユーマ達はにやにや。
普段から接点の少ないエイリークやアイリーンさえも、最近はぶっきらぼうで口の悪いティムスが実は面倒見が良い妹思いな兄だということがわかってきている。
「な、なんだよ」
「いえ」
「だってね」
「ティムスも兄ちゃんなんだなって」
「黙れ」
シスコンとは軽口でも言わないユーマ。エイリークが過剰に反応するから。

「俺達もお泊まり会する？」
「冗談じゃねぇ」

ティムスは皇帝竜事件中、中等部に潜伏していた時を思い出して顔を顰める。

「野郎共とソファを奪い合って雑魚寝して、何が楽しい」
「まぁね」
「もういい。俺はもう用はないからさっさと行きやがれ。ポピラも準備してこい」
「はい。風葉ちゃん、おいで」
「わかりましたー」

部屋を出るポピラに風葉はユーマをおいてふよふよー、と彼女について行く。

「……風葉のやつ、俺よりもポピラやミサちゃんの方になついてるのは気のせい？」
「知るかよ」

にべもないティムス。

挨拶はここまで。ユーマは彼に一時の別れを告げる。

「それじゃ。１度くらいは学園の様子見に来るよ」
「別にいい、と言いたいが休暇の中頃にでも来てくれ。その頃にはテストしてもらいたいものが完成する」
「え？　それって」

「ああ」

できたの？　問いかけるユーマにティムスはニヤリと笑う。

「《精霊使い》専用の新型ブースター。開発コード『ガンプレート・レプリカ３』。お披露目は夏季休暇明けだ」

＋＋＋

ポピラが旅行の準備を終えると、ユーマ達は普通科に所属するミサと正門前で合流。

５人は学園を出て市街地から近くの国へ行く《転移門》へと向かった。

今のグループ構成は男子１人にタイプの違う女子４人。

一見友達の弓使いのようだとユーマは思ったのだが、実際はそうでないことはわかっている。

「エイリークはモテるね」

「は？」

エイリークを中心に見た彼女達との関係はこうなる。

アイリーン：幼馴染のお姫様

ミサ：親友兼専属侍女（自称）

ポピラ：ともだち

風葉：ウインディを守護する精霊（一応）

ユーマ：風森の城の召使い（一応）

今のメンバーはエイリークを中心としたグループだとユーマは認識している。

もしも《旋風の剣士》が王子様だったなら彼女のハーレム。ユーマが友人Aとなる予想はあながち間違っていない。

そんな考えをエイリークに伝えてみる。

「アンタ、何言ってるの？」

「今の俺の状況を見てジンみたいだと思うよりはね」

「なによ、それ」

嫌な顔をするエイリーク。続く言葉は「それだとアタシ達がアンタに気があるみたいじゃない」といったところだろう。

それがわかってかユーマは無邪気に笑う。

「問題児の俺がモテるわけないし」

「……まったくよ」

そう言われれば言われればで、エイリークは故郷で帰りを待つ姉姫様のことを思い出して苦い顔。

また、彼女はちらり、とうしろを歩くアイリーンを見る。

「何か？」
「何も」
「？」

（普段は平然としているけど、意識、してるわよね？）

エイリークの《直感》はそう告げていた。

最初は《精霊使い》、《魔銃使い》といった物珍しさからユーマに興味を持っていたはずのアイリーン。でもエイリークが思うに彼女の幼馴染は、興味からもう1歩先へ進んでいるような気がする。

それは好意の1歩手前。

そもそも北国出身の彼女は、西国方面にある風森の国へ帰郷するエイリーク達と同行する必要はないのだ。

途中までだとしても遠回りになるから。今までこんなことはなかった。

さりげない態度。自然な振る舞い。

その中で彼女は少年を見ている。

「もどかしいわね」
「エイリーク？」
隣を歩くユーマは相変わらず。そして彼の正体と事情を知るのはエイリークだけ。
アイリーンのこともそう。
だから思わずぼやいてしまう。
「……人の秘密ばっかり。それでアタシに何させたいのよ」
「何言ってんの？　あ。俺こっちだから」
そう言ってユーマは次の十字路でエイリーク達と別れようとした。
すかさずエイリークはユーマの襟を掴み引っ張る。
「ぐぇ」
「待ちなさい。《門》はこっちよ。そっちは学園都市の外へ出る方じゃない」
「わかってるよ。俺はちょっと寄り道して風森にもどるから。シアさんにはそう言っててよ」
「寄り道って。……アンタまさか」
エイリークは初めてユーマが学園に来た時のことを思い出す。
「懲りずにまた《西の大砂漠》渡る気？」

「いや。あそこにはもう絶対行きたくない」

かつて体験した砂地獄を思い出したユーマは、青褪めて首を大げさに振る。

「大砂漠行くくらいなら《門》をくぐって国をいくつか観光しながら行くよ」

「じゃあどうして外へ出るのよ」

「外でアギが準備して待ってるんだ」

「アギ？　準備って」

「砂漠越えの」

「やっぱり砂漠じゃない」

「違うって。大砂漠は死んでも行かない」

説明を面倒くさがるユーマ。

「1度見てもらった方がわかるかな？　気になるなら見においでよ。とにかく俺はアギと一緒に行くから」

「ちょっと、待ちなさい」

構わずすたすたと先を行くユーマ。

足取りが軽い。どうも先のことが楽しみでわくわくしているところがある。

取り残される4人の少女。

「見に来いって、怪しいわね」

「リィちゃん？」

「私も気になります」
「まあ、大体の予想は着いてますけど」

これはポピラ。

「ポピラ？」
「ミツルギさん、兄や《組合》の人達と色々相談してましたから」
「それで。アイツら何をする気？」
「それは」

ポピラは彼女達に説明しようとして、思い直した。

「確かにあれは見た方が早いです」

私も気になりますので、とポピラ。

結局ユーマを追いかけることに賛成多数で可決。

危ないのはいやだなぁ、というミサの意見は封殺された。

＋＋＋

学園都市の外。外郭から外は未開の地。

国と国はすべて転移門で繋がっているので商人や旅人が利用していた街路が廃れて久しい。どこの国でもそうである。

学園都市から西は砂漠地帯。ユーマが向かったのはその入り口といったところ。

「遅いぞユーマ。お。姫さん達も一緒か？」
「見送りだよ。気になるってさ」
「何よ、これ」

ユーマ達を迎えたのはいつもの青いバンダナを額に巻き、久しぶりに砂除けのローブを纏ったアギ。

そして、砂地に半ば埋もれた一艘の、舟。

＋＋＋

３－００　夏休みへの旅立ち（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

《西の大砂漠》、さらにそこから学園に向かう途中と2度も地獄を見たはずのユーマ。彼は懲りたようで実はそうでもなかった。

2度あることは3度ある。3たび彼を襲う砂漠地獄。

次回「砂漠の航海」

「誰よ！　夏休みは冒険だって言った奴！？」

３－０１ａ　砂漠の航海　前（前書き）

エンカウント率０％

3－01a　砂漠の航海　前

＋＋＋

照りつける太陽、青い空。

心地よい風、白い『砂浜』。

夏休みの定番のスポットといえばここ。果てのない『地平線』を見れば、無限に広がるイベントに期待が膨らむ。

さあ、叫ぼう。

波が、俺達を、待っている。

「砂だ！！」

「だから何よ」

エイリークはわかってくれない。

＋＋＋
砂漠の航海
＋＋＋

エイリーク達が見たものは1艘の帆船。帆はまだ張られていない。

全長は約9メートル、全幅約3メートル程。学園の貯水池や南区の湖に浮かぶ小舟と比べればとても大きい。小型艇といったところか。

白い船体の上部は前から半分以上を蓋のように覆っていて船底が見えない。似ているのは靴の形。

異様な流線形のフォルムで更に際立つのは、なぜか船首に取り付けてある真っ赤な衝角（ラム）。

「舟？」

「そ。クルーザー？　それともキャンピング・ヨットかな？　サーフィンの次はクルージングをやろうってアギと前から準備してたんだ」

それはユーマが初めて学園に向かった時のこと。

《西の大砂漠》を抜けたあと、ユーマはとある砂漠の民の集落で同じく学園に向かうアギと出会い行動を共にした。

その日2人は寝坊してしまい、1日1回しか使えない集落の《転移門》の利用時間に間に合わずくぐりそこなってしまった。それでアギは始業式に間に合わないと遅刻による大幅減点を覚悟した。

何せ《門》を使わなければ集落から学園都市まで最低10日はかかる。距離はそうでもないが砂漠越えを考えるとそうなる。熱砂の中を全力マラソンする馬鹿はいない。

始業式は明日。次の《門》の利用も明日。アギが諦めたその時、ユーマは言ったのだ。

「それじゃあさ、全速力で砂漠を渡ろう。こいつで」

それを聞いてユーマの隣を見たアギは驚いた。現れたのは長身長髪の、貌を隠した砂の精霊。

偶然出会った同行者の少年はなんと、《精霊使い》だったのです。
（当時、アギの頭の中に流れたナレーション）

2人は精霊が操作する追い風と砂の波に乗り、10日もかかる距離を1日で走破。

アギはユーマのおかげで無事に（？）始業式に間に合う（？）のだった。

「サーフィン、てアンタ達がたまに砂場で板に乗って遊んでるあれよね。今度は舟でそれをやる気？」
「そんなとこ。本当はもっと小型のヨットを作る気だったんだけど、《組合》の大倉庫に試作段階で放棄された船体とかパーツがあってね」
「買い取って俺達で組み上げたんだ。中もすげーんだぜ」
ユーマとアギは、まるで秘密基地を自慢するように小型艇を説明。エイリーク達を中へ案内する。

船体の後部にあるコックピットから舟の中へ。立ちあがると頭をぶつけてしまいそうな天井の低い船室は、意外にも立派なものだった。

メインキャビンには壁と天井に採光用の小さな窓があり、調度品は木製で作られている。

壁と天井の白にオーク系の茶色がアクセントになっており、いわゆるモダンな雰囲気のある室内。

中央に折り畳み式のテーブル、その両脇にマットが敷かれたベンチ。このベンチも折り畳み式で広げるとベッドの代わりになる。

「メインルームはベッドルーム兼用なんだ。歩きまわるには不自由だけど座ったり寝転んでいるとそうでもないよ」
「……すごいわね」
「あっ、リィちゃん。キッチンもあるよ」

ミサが目に付けたのは入口から入ってすぐ隣にあるキッチンスペース。

小型のシンクと加熱調理器が1つになったカウンター、食器棚と食糧庫もセットでコンパクトにまとめられている。

「船内に備えられたキッチンは『ギャレー』って言うんだよ。保存食ばかりじゃ味気ないからね。向かいの壁で仕切っているスペースはトイレ。シャワー室はこのサイズの舟じゃ無理だった」

「水も使えるのですか？」

「もちろん。二層になっている船底とフォクスル（最前部の空きスペース）の一部はポンプ式の給水タンクなんだ。この舟の生命線」

砂漠越えするから、とユーマはアイリーンに答える。

「こいつを砂更の砂の波に乗せて、風葉の風を帆で受けて走らせるんだ。これなら帆走技術がなくても舟を動かせる」

「確かにこの舟はサイズの割に重量があるようです。水上ならともかく、砂地の上を1本のマストで走らせようとするなら揚力や推力といった力が全く足りないでしょう」

技術士のポピラは観察の結果「これはもう《精霊使い》専用といえます」と言葉を付け足す。

「転移門がない昔は砂上船なんてものもありましたけど、今時これを再現して遊びに使おうとする馬鹿がいるとは思いませんでした」

「そう？　ティムスに相談したら散々『なってねぇ』と文句言いいながらいきなり図面引きだしたんだけど」

「小型高性能化がどうとかって、あいつが1番こだわりをもってた

な」
「……馬鹿ですね」
こだわりにこだわりを重ねた結果がこの舟でこの内装。
ジャンク品で組むつもりだったヨットは、ティムスが再設計し、《組合》に新規パーツを発注することでインテリア、水道設備と次々とオプションが組み込まれていくことに。
「……いくらで作ったのよ？」
「設計費込み、テストとモニター料を差し引いて約１５００万」
「せっ！？」
まさにヨット。贅沢な遊行船。
「凄いのができたけど、エースの任務で稼いだお金が全部ティムスにもっていかれた」
「俺がユーマを手伝って山分けした分もな」
そこまでして作ったものだ。今乗らないで何時乗るというのか。
豪遊したかったわけではないが、楽しまなければあの激務の日々がすべて無駄になる。
「そんなにして砂漠越えしたいの？　アンタ達は」
「あの時の俺とは違うんだ。今は砂更がいてガンプレートもある。……短剣１本で《西の大砂漠》を突っ切ろうとしたあの頃の俺はもういない！」
「わたしもいましたよー」

風葉の文句は無視。そもそも砂漠が見たいと罠に誘い込んだのはこの精霊である。

語尾が強くなったのは、あの頃の無知で無謀な自分を思い出して震えてきたから。過去の惨劇を無理矢理振り切る。

「なんか、震えてない？」

「そんなことない。……それに母さんが」

「え？」

「昔、俺の母さんが言ってたんだ」

神妙な顔をするユーマ。確かこの少年が兄以外で家族のことを話すのははじめてだ。

――いい？　優君

「女はいつまでも少女だから夢を見ていいけれど、男が少年でいられるのは長くて家庭を持つまで。冒険するなら今の内だけにしなさいって」

「……」

これにはアギもせつない顔をした。

世界的に有名な考古学教授、その助手を務める夫を持つ母の言葉。

「とにかく、夏休みは冒険なんだ」

「……わかったわ」

子も子なら親も、ということが。

「それで。どこまで行くの？」

「前にアギと会った集落まで。途中で砂上サーフィンして遊ぶから1日半くらいの航海の予定」

「そこで1度船体をチェックして不備を発見したら舟は《門》を使って学園都市に送り返す。問題なかったら水とかを補給して長距離運転のテスト。《砂漠の王国》まで行くつもりだ」

計算では集落から王国まで3日。学園都市からは5日程で到着する予定らしい。

ユーマは王国から風森の国直通の《門》を使って帰るという。1週間足らずで風森の国へ帰るというならば、《門》を使い数ヶ国経由して風森へ帰るのとそう変わらない。

「ふーん。ところでこの舟の大きさで2人乗りってわけはないでしょうね？」

「ティムスの話じゃ4人か5人くらいは。ベッドは2つしかないけど寝袋あるし。……まさか」

ユーマは改めてエイリークを見る。

とおーーーっても楽しそうな笑顔。旅行ではなくて冒険、というのに剣士の少女は刺激を受けたようだ。

アイリーンとポピラもそれぞれ興味津津。ミサなんて諦めてしまっている。

「エイリーク。まさか」
「ここまで見せて仲間はずれ、なんてないわよね？」

＋＋＋

うっかり「6人だと『重量』オーバー」と言ってしまい、「女は2人で1人分よ！」と強く主張する女子達の手痛い仕返しを受けてしまう男子の2人。

諦めて学園都市に戻り、物資の追加と人数分の砂除けのロープを用意していると1時間が経過した。

「お前が姫さん達を上手く撒かなかったせいだぞ」
「ごめん。でもエイリークはともかく3人が反対しないのは意外だった」
「あの4人なら姫さん中心のグループだ。当然と言えば当然だな」
「そっか」

追加物資をまとめた木箱を、砂更の砂で運ばせながら舟に戻るユーマとアギ。

「でも久しぶりだな」
「何が？」
「俺とお前と姫さん達。4人で一緒に行動するのがさ。初めてお前が学園に来た時からのメンバーだよ」
「ああ」

ユーマはエースになってからもアギ達とはそれぞれ行動を共にすることもあったが、４人揃うことは滅多になかった。

「気楽な男２人旅もいいけどさ、これはこれでよかったんじゃねぇか？」
「そうだね……アギ」
「……なんだよ」

ユーマは先攻を取った。

「襲うなよ」
「うるせ！」

こういった話は先に言ったもの勝ちである。

＋＋＋

そして場面は「砂だ！！」に戻る。

「準備はいい？　荷物の固定終わった？」
「ええ。終わりました」
「水と食料もばっちり」

キャビンからコックピットへ戻るアイリーンとミサ。

「アギ、ポピラ？」
「はい」

「いつでもいいぜ」

船体に不備があるかの最終チェックをポピラが、アギはマストに帆を張る。

「帆を張るって言ってもレバーを回すだけでいいんだけどな」
「兄さんが設計しただけあって簡略化と簡易化できるところは徹底的にしたみたいですね。船体もかなり堅牢ですし」
「何が起きるかわからないからね。よし」

コックピットに全員集合。発進時の衝撃と揺れに備えて安全帯をつける。

ユーマは舵を握り、精霊たちを喚ぶ。

「砂更、船体をゆっくりと持ち上げて。風葉、用意」
「……」
「はーい」

砂の精霊が砂漠の砂を盛り上げると、それに合わせて砂上にある舟はゆっくりと上昇。横転しないように操る風でバランスを取る。

標高約３０メートルに到達。

「高っ！」
「みんなしっかり掴まってろよ。ユーマ！」
「おう。いくぞ」

砂の腕が舟を押し出し、巨大な砂のスロープをゆっくりと滑りだす。

滑走の勢いに合わせて舟の縦帆は風を切り、疾走。

「リュガキカ丸、発進！！」
「――って、何よ、そ、れぇぇぇぇぇ！！！」
「きゃあぁぁぁぁ」

絶叫。ユーマが巨大スロープの勾配を計算違いした為に舟はとんでもない加速をつけて出航。

遊園地の急流すべりというよりもジェットコースターに近い。まるで旅先の行方を顕すようだった。

ちなみに。

赤い衝角を持つこの舟の名は『竜牙鬼化丸』。

帰郷する方向が違う為に乗り損なった、可哀相な赤バンダナを想って、２人の友人が付けたのだった。

＋＋＋

ユーマは予告もなく皆に絶叫マシンを味わわせたので、怒れるエイリークに吹き飛ばされた。

安全帯のロープがなければ、ユーマは砂の海に放りだされるところだった。

……安全帯のロープがあったせいで、ユーマは砂の海で引き回しの刑を味わうことになった。

酷い目に遭った。皆にロープを引っ張ってもらい舟の上に這い上がる。

全身砂まみれのユーマはこんな場面のあるゲームをふと思い出す。

「……まあ、こんな感じで危ないからデッキ（コックピット以外を覆う舟の屋根部分）に登るときは安全帯を外さないようにね」

「あっても危険じゃない」

「舟を止めなかったからだよ。ブレーキは帆でかけないといけないから。あと安全帯はもっと短くていいな。これじゃ命綱だ」

エイリークのおかげ（？）で航行時の危険を再確認。もしものことに備えてユーマとアギは舟の操縦を皆に教えた。

出航時に一悶着あったものの、その後のクルージングは良好。

前進する舟に合わせて砂更が作る砂の波で船体を押し出し、スロ

ープを滑走した際に得たスピードを維持するのだ。

旋回は帆の向きを変え、風葉が風を吹き付けることで推力を補助。帆の向きを変える作業もティムスが簡易化してくれたおかげで女の子でもできる。

舵取りは進路の微調整のみ。元々《精霊使い》ともう1人いれば動かせる仕様なので、これだけで舟は砂の海を軽快に走った。

舟こと『リュガキカ丸』は思いのほか高スピードで力強く走る。どのくらいかというと、人1人くらい平気で牽引してしまうほど。

「これ、いいわね！」

砂除けのロープを風に靡かせ、砂の海で声を上げるのはエイリーク。

彼女は《エルドカンパニー》特注のサーフボードの上に乗り、足を固定してロープで『リュガキカ丸』に引っ張ってもらっている。

砂上スキーである。ユーマが引き回しの刑をしたことで生まれた偶然の産物。

サーフィンなんてしたことのないエイリークはこれにハマった。バランスをとることに慣れると砂の隆起を利用してジャンプなんてことも。

砂除けのゴーグルをしているのでエイリークの表情はわからないが、きっと喜色を浮かべているに違いない。

「ユーマ、舟のスピードを上げなさい」
「こっちは波だ。でっかいの頼むぜ」

アギは自前のボードでサーフィン。彼はこの日の為に足の裏で《盾》を展開する特訓を重ねてきた。

《盾》のボードを使うことで可能となる、文字通り一体化したライディング。

砂の操作して作った、延々と続く波に乗るアギは『リュガキカ丸』に並走。大波を作ってもらえばそれを利用して練習したトリックターンにも挑戦。

「やっぱ広いとこでやると格別だな。学園の『ユーマの砂場』でやってたのはままごとみてぇだ」
「アギー、あと5分で交代ー」

舵取りをするユーマは、恨めしそうにアギを見て叫ぶ。

進路の確認をとりながら舵が取れるのはアギとユーマ（ユーマの場合、進路は砂更が確認）しかいない。『リュガキカ丸』を動かしながら遊ぶとなれば2人の内どちらか残らなければならなかった。

「アギめ。《盾》のくせにグーだしやがって。パーだろ、普通」
「何の理屈ですか？」
ユーマに話しかけてくるのはアイリーン。
「遊びたければ1度舟を止めればいいでしょうに」
「いや、それだと砂上スキーができないからエイリークが怒る。まあおかげで予定より早く集落に着きそうだけどね」
この調子だと明日の夕方に到着する予定が午前中になりそうだ。
「アイリさん、まだ日差し強いけど暑くない？」
「ええ。でもこれ着てますし。風も気持ちいいですよ」
頭までずっぽり被った砂除けのローブの中でアイリーンは微笑む。
ユーマは備え付けのボックスから水の入ったボトルを取り出して彼女に差し出した。
「そう？　でも水分はこまめにね。ちびちび飲むんだよ。汗がでなくなったらもうあぶないんだからね」
「はい」
今度はおかしそうに笑うアイリーン。ユーマはたまにこうやって誰を相手にしても世話を焼くことがある。
根っからの弟体質。

（年下、でしたものね）

「何？」

「いいえ。でも、ひとつ訊いていいですか？」

アイリーンはユーマに精霊のことで訊ねた。

「もう大分長い時間砂更の力を使っているようですけど、大丈夫なのですか？」

「ああ」

ユーマは皆に隠しているが、《魔力喰い》の特性を持っている。それが《精霊使い》としては１つ制限をかけてしまっていた。

現界した精霊たちの魔力を少しずつ奪ってしまうのだ。魔力の尽きた精霊は消失してしまうので、ユーマは精霊を長時間使役できなかった。

でも今日の砂の精霊はもう3時間も『リュガキカ丸』を動かしている。

「ここが砂漠だからだよ。精霊は土地の影響を大きく受けるんだ。今の砂更は学園にいた時より何倍も強い」

「そうなのですか？」

「うん。一番力を発揮できるのは精霊の縁の地。砂更だったら《西の大砂漠》、風葉だったら風森の国だね。この辺りは大砂漠に近いから」

「成程」

下位の精霊である砂更でも今ならば中位の精霊並だという。

その中位精霊である風葉だが、彼女は《風森》の一部なので実は下位精霊より少し強いくらいだったりする。

「まあ、風葉は風葉で」

「ぐるぐるぐるぐるー」

風葉は吹く風に合わせてくるくる回っている。

「……何をしているのですか？」

「自然の風を魔力に変換してるってさ」

風力発電？

「べるとのー、ふーしゃにー、かぜをあつめー」

「……いつもどこで覚えてくるんだ？」

風葉の言動はユーマにもわからないことがある。

おそらく『繋がって』いることによる知識の共有だと思うのだが。

「まあ、いいや。それにしても砂漠の海をクルージングか。……偉くなったもんだ」

金持ちの道楽だよなこれ、とユーマ。アイリーンはこれもおかしかったらしい。

「王族や世界に名を連ねる名家の方でもしませんよ」

「そう？」
「お金持ちと言うと、これはどこかの商人、大富豪のする贅沢な遊びなのでしょうか」
「かもね」
ユーマがこの世界の大富豪の道楽事情なんて知るわけがない。
今度のアイリーンは悪戯っぽく微笑んだ。これはエイリークをからかう時と同じ顔。
「でもこんなことを知っているなら、もしかすると貴方も実は……どこかの商人の子だったりして」
「俺はずっと庶民だよ」
大ハズレ、とユーマは笑う。
ついでに一応『カウンター』を発動しておく。
「それなら現役のお姫様に訊くけどさ、大富豪ってどんな遊びするの？　王族は？」
「えっ？」
「銀雹の国って今の時期何が面白い？」
「それは……」
口籠ってしまった。アイリーンは不自然に会話が止まりそうになって彼女は内心焦る。
そんな彼女に助け船を寄越すのもユーマ。
「ま、そんなことより。俺のボトル温くなったからアイリさん冷や

してくれない？」
「そんなこと、ってもう」
呆れたように彼女はボトルを受け取り、氷属性の魔術を使いだした。
ユーマの作戦通り。これを機に話題を変えてしまえば、アイリーンも気まずい思いをしないですむはず。
（探られてる、よな？）
最近ユーマが感じることだ。
以前も、それこそユーマが初めてアイリーンと出会った頃もそうであったのだが、最近になってまた。
（エースだから、《精霊使い》だからって、結構無茶しても怪しまれなかったから気にしてなかったけど、今頃になってまた俺の素性に疑問を持たれてる？　何が原因だ？）
元々公式の素性は『風森の召使い』ということだけだ。誰からもいつ怪しまれてもおかしくはない。
ただの雑談だったかもしれない。でもユーマの中の『陰険な方の兄』は念を入れて手を打っておけというのだ。
それでカウンター。アイリーンは自分の故郷のことは極力話すことを避けている。このくらいならユーマだって気付いている。

（アイリさんは賢い。今のやりとりで気付いてくれるといいけど）

彼女のタブーと同じ。話したくない内容があったのだと。

アイリーンがボトルを冷やしている内に、誤魔化す話題をユーマが考えていると。

「ミツルギさん、アイリーンさん。夕食の準備ができました」

キャビンでミサと一緒に支度していたポピラが呼びに来てくれた。

「わかった。ミサちゃんは？」

「加熱調理器の余熱を使ったオーブンで風葉ちゃんたちのクッキーを焼いています。……ミツルギさん」

ポピラの声が一段と低くなる。

「どうした？」

「先程ミサさんがクッキー作るのを観察していたのですが……」

「うん？」

「どんなに見ても、普通のクッキーと作り方も材料の分量もそう変わらないのです。風葉ちゃん達がどうして食べれるのか、その秘密がわかりません」

「……あー。あのサクサク感がどうしてもね」

ユーマも以前、風森の国で『ミサちゃんクッキー』に挑戦したことがあるが、彼も完成に至らなかった過去がある。

「ミサちゃんは前に完成に１０年の月日がかかるって言ってたけど」
「そんなにも」
「風森の国で色々と教えてもらったら？」
「……そうですね」
力ない返事をするポピラ。風葉（ともだち）に自分のクッキーを食べてもらえるのはまだ先の話のようだ。
彼女が唯一認めた強敵（ミサ）に勝てる日は……遠い。
「とにかく。一旦舟を止めて飯にしよう。早めに休んで明日、日が高くなる前に集落に辿り着けるように」
ユーマは明日の航海の予定を２人に告げ、ついでにポピラに夕飯の献立を訊いてみる。
「ミサちゃんは外で食べれる物用意してくれた？　中に６人はちょっと狭いけど」
「はい。トレイで持ち運べるようにしています」
「流石。それじゃあ２人はミサちゃんの手伝いをお願い。俺はアギ達を呼んでくるから」
「わかりました」
船内へ入って行く２人。
そしてユーマはエイリーク達に向かって叫んだ。
「エイリーク、飯にするよー！　……アギー！」

ここでユーマはガンプレートを抜いた。

「5分、とっくに過ぎてるじゃないか、うらぁ！」
「ちょっ、待て。ぎゃあーーっ」

はらいせと、食前の運動を兼ねてアギを撃ちまくった。

＋＋＋

３－０１ｂ　砂漠の航海　後（前書き）

エンカウント率５０、６０、……９０、１００％

3－01b　砂漠の航海　後

＋＋＋

日が沈む前に早めの夕食。

食事は燻製やオイル漬けなど保存食に手を加えたものばかりだったが、温めたり火を通すといった調理を行えば味は全く違う。外で食べるのも格別。

夕食のあとは夜営の準備にとりかかった。

舟のベッドは2つしかない。それに狭い船室に女の子を4人も詰め込むわけにもいかず寝床を確保する必要になる。

しかし寝袋はあってもテントはない。そこでユーマは砂更に頼み砂漠の砂で『かまくら』を作った。

「砂更がしっかり固めてくれたから崩れはしないと思うよ」

「……便利ね、アンタの精霊」

最後は水浴び。流石に汗もかいてるし頭や体に砂が付着したまま寝るのは気持ち悪い。

舟の水を使うのはもったいない。そこでゲンソウ術を使うことに

した。活躍するのはガンプレートだ。

ゲンソウ術を使う際、術式発動に必要なイメージを補助してくれるアイテム、それがブースター。ユーマとポピラが所持するブースターを《ガンプレート・レプリカ２》という。

この銃の形をした金属板のブースターは、属性の性質や補助術式のＩＭ（イマジン・モジュールと呼ぶ規格概念）を付与したカートリッジを換装することであらゆる属性と術式を扱うことができる。

これで水属性散水放射術式、要するに《シャワー》を使うのだ。

ちなみにガンプレートで《幻創》するのは『水で洗い流す』という現象。

「水そのものを《現創》できるのは水だけ」ともいわれているだけあって、人の想像力を使うゲンソウ術では本物の水を創ることはまず不可能。

まあ、本物でなくてもシャワーを再現できるのだから問題ない。

砂の壁で間仕切りをして、ユーマとポピラのガンプレートで皆の身体を洗い流す。

「ほんと、便利ね」

「エイリークさん、湯加減はどうですか？」

《レプリカ２》はツインカートリッジを採用。《シャワー》に加

えて熱を付与するカートリッジを使うことで温水も再現。

応用すれば《ドライヤー》も可能だ。

「ちょうどいいわよ。でも悪いわね。それアンタとユーマしか使えないから」

「いいえ。そんなことありませんよ」

ポピラとしては「ともだちとながしっこ」ができて嬉しいらしい。

「ウォーター・ブラスト！」

「てめっ、それっ、ぶふぅーーっ！？」

違う場所では真っ裸のアギがユーマの悪ふざけで水責めにあっていた。

こうして航海の初日は過ぎてゆく。

船番をすると言い、寝袋を持って『リュガキカ丸』のデッキの上に登るユーマ。

夜空を見上げる。澄んだ星空は高く、やはり風森の国や学園で見上げた空とは違う。

昔、初めて空を飛んだ時に見た夜とも。

それに広大な砂漠の中で1人になると、ユーマはつい思ってしまう。

ここはあまりにも広く、比べて自分はちっぽけだから。

つい思い出してしまう。

「……うん。やっぱりここは」

知らない、世界だ

＋＋＋

朝日が昇る前から出発。

予定通り陽が高くなる前に砂漠の民の集落に到着した。1番暑くなる昼間はここで過ごす。

まず二手に分かれて船体と物資のチェック。

「熱砂による船底の磨耗を懸念していましたが問題ありません。補給が済み次第すぐに出られます」

「わかった。俺とアギはこのまま《砂漠の王国》へ行くけど、他のみんなはどうする？」
「もちろんついて行くわよ。まだまだ滑り足りないんだから」
と言うエイリーク。すっかり波乗り仲間の一員となった。
ミサの「じゃあ、わたしはここで」は封殺され、水と食糧の補給を済ませると６人は陽が傾く時間に合わせて集落を出発した。

ここから《砂漠の王国》まで約３日間の航海。
３日という時間がどれだけ長いのか、エイリークは気付いていない。

＋＋＋

つまり飽きたのだ。

集落を出て次の日、学園都市を出発して３日目になると砂上スキーもサーフィンも十分堪能してしまい、やることがなくなってしまった。
見渡す限り砂砂砂。景色に飽きもすれば舟の疾走感にも慣れてしまった。こうなるとただ暑いだけ。
今は２人ずつ交代で舟を操縦し、残り４人はキャビンで思い思いに過ごしていた。

「カードも飽きたわね。王国はまだかしら？」

エイリークは青の６のカードの上に手札の黄色の６のカードを出す。

「舟の速度は上げてるんだ。砂更が言うには明日の昼くらいに着くらしいよ」

ユーマ、黄色のスキップ。ミサは飛ばされた。

「ううっ。あと２枚なのに」

「でも正直言うと拍子抜けですね。砂漠越えはユーマさんが散々酷い目にあったとおっしゃってましたから」

アイリーンは黄色のドロー２。エイリークは嫌そうに山札に手を伸ばす。

「そうよね。だけど実際は何もなし。どうせなら魔獣でも出てこないかしら。……赤ね」

ワイルドカード。

「エイリーク、滅多なこと言うなよ。俺とアギがどれだけ進路に気を配ってると思ってるんだよ」

赤の３のカードを出しながらユーマは文句を言う。

「万全の準備はしてるけど魔獣なんて遭遇しない方がいいんだ。安

全な航海が1番」
「何よ。冒険だって言ってたくせに」
「リィちゃん、ユーマ君の言うことが正しいよ」

非戦闘員のミサはここぞとばかりに強く主張。

「危ないことも乱暴なこともしないのが1番。ウノだよ！」
「ドロー2です」
「ワイルドドロー4、緑」
「ドロー2、2枚」
「ええっ！？」

ミサの主張と「ウノ」宣言（コール）は、累積10枚のカードによって否定された。

ローカルルールである。

「でもミサちゃんの言う通りだよ。それに口は災いの元って言うくらいだから、こんなこと言ってると」
「ユーマ！　魔獣だ」

アギが外から叫んでいる。同時に精霊の「たすけてー」という《交信》がユーマに届く。

「……ほらね」
「行くわよ！」

エイリークは愛用の細剣を手にして元気よく飛び出して行った。

エンカウント！

＋＋＋

外へ出たユーマ達が見たものは、飛行型の虫と砂地を泳ぐ魚型の魔獣。

スピードで振り切ろうにも『砂鮫』が進路を阻むのでまっすぐに走ることができないようだ。その間に『蠍蜂』が舟に群がっていく。

アギは帆を操りセーリング。巧みに『砂鮫』の体当たりを回避しているのだが、そうなると蠍蜂への対応が非戦闘員のポピラしかいない状態。彼女は風葉に庇われながらガンプレートを撃ち続けている。

「アギ！」

「早く手を貸してくれ。エルド妹だけじゃ『リュガ』がやられちまう」

「わかった。エイリーク、アイリさん」

「ええ」

「いきましょう」

ユーマはガンプレート、エイリークは細剣を抜いて戦闘体勢に入る。

「アギはそのまま舟を操縦して」

「おう！」

「舟は止めないの？」

「いや、動きを止めたら囲まれて舟が狙い撃ちだ。それに増援を呼ばれて延々と戦う羽目になる」

過去の経験から追い払うくらいで十分と判断するユーマ。

「鮫は砂更で打ち上げるから2人はそれを頼む。俺は蜂を」

「わかったわ」

「行くぞ。砂更！」

主人の呼びかけに応じた砂の精霊は、周囲の砂漠から『異物』を排除。砂を操り隆起して『砂鮫』をすべて宙へ打ち上げる。

「ギョョッ！？」

「行くわよ！」

エイリークは『リュガキカ丸』のデッキから躊躇わず砂漠へ飛び出し、近くにいた『砂鮫』に竜巻を纏う細剣を叩きつける。

砂地に沈む魔獣。エイリークは叩きつけた反動を利用してジャンプ。次の魔獣に向かって飛び剣を突き刺す。

「はあっ！！」

《爆風波》

圧縮した空気を爆発させ、広角に炸裂させるエイリークの得意技の1つ。

エイリークは突き刺した『砂鮫』を遥か遠くへ吹き飛ばすと、今度は爆風の反動で『リュガキカ丸』に向かって飛んだ。

一方、アイリーンも身動きの取れない『砂鮫』に向かって魔術を発動。

「氷晶樹、貫け！」

放たれるのは丸太のように太い氷の槍。

《氷晶樹》は魔獣に向かってまっすぐ細くなりながら伸びていき、途中で無数に枝分かれして1度に3体の『砂鮫』を串刺しにした。

「3体。私の勝ちですね」

「……何よ。こんなの魔術師のアイリィが有利に決まってるじゃない」

アイリーンの軽口にエイリークが文句を言っている間、ユーマはガンプレートで火炎放射を放ち『蠍蜂』の群れを焼き払い、追い払った。

「助かりました」

「どういたしまして。でもポピラも《フレイム・バーナー》使えるんじゃない？」

「火遊びは不良のやることです」

「……そうですか」

「ユーマ！！」

慌てるように叫ぶエイリーク。魔獣がもう1体、砂地に潜んでい

たらしい。

見れば舟の進路の先、正面で口を大きく広げて待ちかまえているのは。

巨大な蛇のできそこない。

「キシャァァァ！！」

「いいっ！？　竜巻よ、砂を喰らいて血肉となせ、サンドワーム・ブラストぉ！！」

驚いたユーマはガンプレートを正面に向け、慌てて呪文を短縮詠唱。

『砂漠の竜蛇』に同じく砂で模造した『砂漠の竜蛇』をぶつけた。

「喰らえ！」

「グォ！？　ウオォォォォォ……グゥプ！？」

大量の砂を飲み込まされ、『砂漠の竜蛇』は窒息してぶっ倒れた。

「ユーマさん！」

「わかってる」

でもこのままだと舟は竜蛇と正面衝突してしまう。

「アギ！　緊急回避、急いで！」

「……」

「アギ？」
「（ガクガクプルプル）」

アギは以前『砂漠の竜蛇』に飲み込まれかけたことがある。

彼は今それを思い出してトラウマを引き起こし、ガタガタ震えている。

「ちょっとアギ！？」
「危ない！」
「砂更ぁ！！」

エイリークとアイリーンは急いでマストに飛びつき、使い物にならないアギの代わりに帆を制御。

ユーマは砂で特大の大波を作り、それに舟を乗せて『砂漠の竜蛇』を飛び越えようとした。

高波に乗ってジャンプする『リュガキカ丸』。直後に訪れた浮遊感に誰もが肝を冷やす。『砂漠の竜蛇』は砂の波に飲み込まれていった。

そして自由落下。

「お、落ち……」
「きゃあ！」
「風葉、突風！」
「ふー、ふー」

エイリーク達が必死に抑える帆に向かってぶつけるように風を送

り、揚力を発生。それで落下速度を減衰してなんとか不時着した。

戦闘終了。

危機は去ったのだが恐怖と驚きの連続の直後。心臓の鼓動がやけに激しい。

緊張の解けたユーマ達は、すぐに動くことができなかった。

「……」
「……」
「……」
「……はっ。俺は一体」
「「「アギ！」」」

アギは制裁を受けた。

しかし仮にも学園のランクＡが３人とエース１人がいるパーティーだ。この程度の魔獣の群れなら十分に対処できる。彼らにすればちょっとした運動だ。

ただし、王国に近づくにつれてユーマ達が魔獣と遭遇する回数は次第に増えていく。

戦闘回数が増えるに従い、この先ユーマ達は舟を破壊されないよ

う警戒を強くし、緊張感のある航海を続けることになった。

＋＋＋

集落を出発して3日目。

「誰よ。夏休みは冒険だって言った奴！？」

絶対絶命の状況に陥ることでエイリークは、とうとう砂漠に嫌気がさした。

はじまりはこの日、ユーマ達が『砂漠の竜蛇』、『砂鮫』といった高速で砂漠を泳ぐ魔獣から逃げ回っていたところから。

昨日から続く連戦。誰もが疲弊していたので今日の彼らは魔獣を相手にせず逃げることにしていた。

でも続けて『蠍蜂』や『鷲獣』といった飛行型の魔獣に襲われ、さらには『甲殻竜』、『蟻喰亀』の待ち伏せにもあった。

進路を阻む魔獣の群れを突き破り、追撃を振り切った先に待っていたのは近づいたものに針を飛ばすサボテンやら巨大蟻地獄などのトラップの数々。

まるで魔獣達に誘導されるように『リュガキカ丸』は砂漠の海を逃げ回る。

そして。

逃げ回るユーマ達を最後に迎えたのは、砂漠地帯の魔獣の中でも２０メートル級と大型の『砂猿』。

あと山。

山のような蜥蜴。

それは『王蜥蜴（デザート・ロード）』と呼ばれる全長約８０メートルの魔獣。

《西の大砂漠》を棲家とする砂漠のヌシの１匹と謂われている。

今の状況は魔獣に追いかけられたまま、『王蜥蜴』との接触まであと数分といったところ。

山のような魔獣を前にしてエイリーク達も、地元であるアギさえも呆然としていた。

「何よあの山。あれも魔獣なの？」

「ヌシだ。じいさん達の迷信かと思ってた」

「嘘だろ、あいつ」

「ユーマさん？」

ユーマはあの魔獣のヌシに見覚えがある。

『王蜥蜴』は以前ユーマが《西の大砂漠》を脱出する際最後に立ち塞がったボスキャラともいえる魔獣だった。

「でもあいつは前に《雷槌》おっさんが……あれ喰らって生きてたのか？」

そうならばユーマは今の状況にも納得できる。

彼の知る『王蜥蜴』ならば他種族の魔獣を配下に置き、命令して『餌』をおびき寄せる真似なんてやってのけるはず。

「王国って大砂漠に近いんだっけ？」

「ああ。王国も大砂漠も元は《西の大帝国》の跡地だからな」

アギは未だ『王蜥蜴』から目を離さずに答える。

「だが王国もこの辺りだって大砂漠に棲む魔獣達の縄張りの外だ。ここまでヌシがでしゃばる理由がわかんねぇ」

「……まさか逃がした俺をわざわざ食いに来たわけじゃないよな？」

冗談でも洒落にならない。

「もしかして」

「アイリさん？」

アイリーンはとんでもないことに気付き、ユーマの方を見る。

「魔獣とは本来魔力によって変異した生物の総称。害獣扱いされるのは魔獣の多くが魔力の狂気に侵されて凶暴化してしまうわけです

が」

補足説明すると、世界中の魔力が希薄化、枯渇化した現在では魔獣は弱体化の一方であり、数は年々減少の傾向にある。

４００年前ほどの力を持つ魔獣はそれこそ《西の大砂漠》のような魔力資源が遺された特別な地域にしかいない。

「アイリィ、前置きはいいから早く」

「……生態的に魔獣も食物の摂取で栄養を摂ることはできます。でも彼らの力の源で最高の栄養源はやはり魔力です。そして、ここには精霊という最高の魔力が」

「まさか」

ユーマは思い返す。

かつて《西の大砂漠》で執拗に何度も魔獣に襲われたのも、アギと一緒に『砂漠の竜蛇』に追いまわされたことも。

今の現状も。

「魔獣は風葉たちの魔力に釣られて？」

「おそらく。私達はずっと精霊たちの力で舟を動かしていましたから補足されたのでしょう」

となると『王蜥蜴』は、ユーマ達が餌の匂いを撒き散らしながら縄張り付近までやってきたので、御馳走を前に迎えに来てくれたらしい。

「俺が砂漠でしょっちゅう酷い目に遭ってたのは精霊のせいだった

のか……」

ユーマは真実を知りショックを受けた。この先も《精霊使い》で居続ける限り、彼は国の外へ出れば魔獣に狙われる運命だという。

風葉も餌と言われてしょんぼり。

「わたしはー、おいしくないですよー」
「風葉ちゃんを魔獣なんかに食べさせません」
「とにかく。この状況、どうするのよ？」
「アギ。進路は？」
「王国はこの先だ。迂回するルートはすべて魔獣に塞がれてる。引き返すのも駄目だ」
「突っ切るしかないのか」

覚悟を決めるしかなかった。

「エイリーク、中にいるミサちゃんをベッドに縛り付けておいて。アギは帆をしまってマストを折り畳んで」
「ミサ？」
「帆を、ですか？」

ユーマの指示に首を傾げるエイリーク達。

「おい、まさか」
「うん。リュガキカ丸の《ＢＭモード》を使う。酷く揺れるからミサちゃんには舌を噛まないように何か噛ませておいてね」
「……わかったわ」

説明。バトル・マニューバモードとは。

『リュガキカ丸』はユーマが《全力》を出すことで戦闘機動が可能となるのだ。

「ポピラはこれ」

ユーマが彼女に渡したのはガンプレート用の数枚のカートリッジ。

「これは？　初めて見ましたけど」

「《ミサイル・トリガー》。これでリュガキカ丸の火器管制をお願い。扱い方はガンプレートで狙いを付けるだけ」

「……私は非戦闘員なんですけどね」

でも断れる状況でもなく、風葉の命もかかっているのでポピラはカートリッジを受け取る。

このサイズで武器も積んでたんですね、と対魔獣戦も想定して設計していた兄（ティムス）を呆れるように感心する彼女。

「魔獣の群れを突破して、『王蜥蜴』を抜いたら一目散だ」

「やるしか、ないわね」

「みんな振り落とされないようにね。……行くぞ」

コックピットにアイリーンとポピラ。後方支援の2人はシートに身体を固定。

デッキ上の3人は命綱の装着を確認するとアギを先頭にして3角形の陣形を敷いた。

「リュガキカ丸、発進！！」

砂更の生み出す砂の激流に流されながら、『リュガキカ丸』は『王蜥蜴』が率いる魔獣の群れに飛び込んだ。

＋＋＋

操る砂の流れのままに突撃する『リュガキカ丸』。舟の動きを止めようと小型魔獣が群がる。

ユーマ達は前方に展開したアギの巨大な《盾》で魔獣を弾き飛ばしながら『王蜥蜴』に向かって突き進む。

「……氷輝陣、展開」

アイリーンの魔術が『リュガキカ丸』を包み込んだ。

彼女の輝く氷霧の結界は氷属性術式の発動速度を上昇させると同時に、《感知》特性の効果範囲を拡大させる。

アイリーンは《氷輝陣》を構成する氷晶を媒体にして、舟の全周囲と上空に《氷弾の雨》をばら撒いて魔獣を牽制。

「数が多すぎます」
「全部を相手にする余裕はない。一気に行くぞ」
「ポピラ、お願い！」
「わかりました」

エイリークはポピラのガンプレートが放つ《サポート・バレット》の効果を得ることで、身体能力ほかすべての能力を一時的に飛躍することができる。

いわゆるスーパーモード。この状態になったエイリークは《旋風剣》の奥義が使えるようになる。

目前に迫る巨大な『砂猿』が舟を掴みあげようと手を伸ばしている。

エイリークはその巨大な腕を暴風のように荒れ狂う《旋風剣》で弾き返した。

そのままエイリークは『砂猿』に向けて奥義を放つ。

「はぁぁぁぁあっ！」

《旋風剣・昇華斬》

切り上げる斬撃が暴風を巻き起こし、膨大なエネルギーがすべて天に向かって解き放たれる。

斬られた『砂猿』は２０メートルもある巨体を暴風に飲み込まれてしまい、空に消え去った。

スーパーモードが解除されるエイリーク。決まったとばかりに振り上げた細剣をビシッと真横に振る。

「……いけるわ。《気刃》を研いだこの剣なら昇華斬にも耐えられる！」

「いきなり切り札を使うなよ。次が来るぞ」

仲間をやられたことに怒ったのか、『砂猿』の集団が離れた所から岩や砂を巨大な手で使って投げつけてくる。特に大量の砂礫は広範囲に広がるので回避しづらい。

ユーマは風葉の魔法で砂礫を吹き払い、砂更の力で砂漠の砂ごと『リュガキカ丸』を動かし岩礫を回避した。

ＢＭモードの『リュガキカ丸』は無軌道な砂のレールの上を高速で滑らせているようなものだ。不規則なその走りは既存の船ではまず不可能。

巨大な砂の腕で船体を押し出して真横に移動したり、突き上げてジャンプなんて無茶な回避機動もやってみせる。

そんな舟に乗ってるユーマ達もただではすまない。

コックピットの２人はともかく、エイリークは大地震のように縦にも横にも激しく揺れる舟に剣を振るうこともできず、手摺にしが

みついていた。ユーマも似たようなもの。

ちなみにアギは『シールド発生装置』なる専用の固定シートが舟の先頭に用意されており、ベルトでぐるぐる巻きにされている。

設計段階から《盾》を使うことは折り込み済みだった。

「ちょっと、ユーマ！」

「だから揺れるって言ったじゃないか。このくらい無茶な動きしないと躱せない」

「でもユーマさん、このままだと。反撃しようにももっと近づかないと攻撃術式が届きません」

「わかってる。ポピラ、《リュガキカミサイル》を使う。1番と3番で前方を狙って」

「何？　それ」

「わかりました」

ポピラは先程渡されたカートリッジの1番と3番をガンプレートに差し込み、前方の『砂猿』の集団を狙う。

ポピラが発射態勢に入ると、『リュガキカ丸』の両舷に存在した内蔵の『ミサイルラック』４つの内前方の2つがカバーを展開。

「弾幕で撹乱して距離を詰める。ミサイル、撃てーーーっ！！」

「発射」

ポピラは《ミサイル・トリガー》の術式を発動。それに応じてミサイルラックから次々と筒型の弾頭が撃ち上げられ火を噴いて前方へ飛んでいく。

計8発の《リュガキカミサイル》はポピラが狙った『砂猿』に命中。次々と炸裂して爆発音が響き渡る。

「グオオオッ!?」

「今のは、『バズーカ』ですか？」

「ちょっと違う。弾頭自体に推進剤が仕込まれていてガンプレートでターゲットのロックと発射を制御するんだ」

これはティムスと共同で開発、再現した装備だ。

ミサイルにしては誘導性能は皆無でマルチロックもできないけどね、とユーマ。

「？　よくわかりません」

「説明はまたあとでね。魔獣が怯んだ今の内に」

「ユーマ！」

「ミツルギさん、前！」

「えっ？」

『砂猿』の集団を抜き去った直後。舟は突然巨大な影に覆われた。

「……マジ？」

ユーマも知らなかった攻撃パターン。

全長80メートルもの巨体にもかかわらず、『王蜥蜴』が2本足で立ちあがっている。

3－02a　プロローグ－馴れ初め（前書き）

砂漠の王国編の導入部。その前編

3－02a　プロローグ－馴れ初め

＋＋＋

砂漠の民の少年は1人、数頭のラクダを率いて故郷の集落へ向かい砂漠を渡っていた。少年は旅商人だった。

今も昔も、砂漠の民の主な仕事は遺跡掘りだった。

《大災厄》と呼ばれるようになる大破壊を起こし、西国の大半を砂漠化して滅んだ《西の大帝国》の遺産。それを掘り出して他国へ売りだすことで砂漠の民は収入を得ていた。

少年は遺跡掘りのオヤジが掘り出した遺物を他国へ運ぶことで生計を立てていた。特に『機械』と呼ばれるものは西国南部にある《技術交流都市》で《機巧術》の研究用に高く買い取ってもらえる。

旅商人というよりも少年は下請けの輸送屋だった。《転移門》のない時代、魔獣も棲む広大な砂漠地帯を徒歩で往復するのは過酷な労働であり大人でも音を上げる。それでこの運び屋の仕事を黙々とこなす少年は皆に重宝された。

砂上船なんて一部の大富豪が所持するものであり、《帝国》に『墓荒らし』、『砂喰い』と揶揄される砂漠の民には縁のないものであった。

その日、少年は隣にある大きな集落の市へ食糧の買出しに向かい、帰りに1人の男をみつけた。

不思議というか無謀な男だった。天候の厳しい砂漠地帯にいてまともな装備をしていなかったのだ。

武器もなく荷物らしいものを1つ肩に担いでいるだけ。

自殺志願者か？　見かねた少年はつい砂漠のど真ん中を歩く男に声をかけた。

「馬鹿かお前！　日除け砂除けの装備もなしで焼け死にてぇのか！？」

「いや。でも死にそうだ。助けてくれ」

「はぁ！？」

あっけらかんと助けを請う男。男の体は少年よりも1回りも大きかったが、年はさほど変わらないように見える。

男は少年の連れた食糧を積んだラクダを見て頼みこんだ。

「空腹で死ぬ。頼むから飯を分けてくれ」

「め、めしだと！？」

とんでもなくズレた男だった。

「……おい、さ、きに……み、ずだろ……テメェ」

それで男の担いだ『荷物らしいもの』が息絶え絶えに突っ込んでいた。

担がれたその男は、悪魔だった。

＋＋＋

今より２０年も昔。西国の砂漠地帯に《帝国》があった時代。

青いバンダナを額に巻いた少年は、１７の年からずっと戦火の中にいた。

長年《帝国》に虐げられいた、砂漠の民の起こした反乱だった。

＋＋＋

プロローグ

＋＋＋

西国は砂漠地帯を離れながらも《西の大帝国》の文化を引き継ぎ、その流れを組む国は多い。その中で皇族の血を引き、《大帝国》を

正統に継承する国と主張して砂漠に国を置いたのが《帝国》である。

《帝国》は豊かで腐敗した国だった。昔から『帝国貴族』と自称する者達が砂漠の民と貴賤の区別をつけていた。差別は元より、ある時期は砂漠の民を攫うように徴収し奴隷として扱っていたこともあった。

末期になると『帝国貴族』は身勝手に砂漠地帯を『領土』として分割し、そこに住む砂漠の民を支配という統治と搾取という義務を以て砂漠地帯を治めはじめた。

少年の住んでいた砂漠の民の集落も、その『政治ごっこ』によって《帝国》が擁する軍に焼かれた。

――滅ぼせばいい。お前達には報復する権利がある

――平和は勝ち取るものなんだろ？　戦争しろよ戦争

――憎っくき敵を根絶やしにして新しい帝国でも作れ。そこでお前らが幸せに暮らせばいい

――幸せになれるものならな

悪魔のような男の言葉。少年は真向から否定した。

だけど集落が焼かれた直後に結成された反乱軍に少年は身を置いた。

何かを変えるには戦わねばならないことも、悪魔によって彼は思い知らされたから。

潜伏期も合わせて１０数年も続いた紛争。多くの同胞が殺され、多くの『帝国人』を殺した。流した血も流された血も、すべて砂漠の海に流され、染み込んでゆく。

少年はその砂と血の地獄の中で戦い、生き残った。青年となると次第に戦場で活躍しだし、最後は反乱軍を統べるリーダーとまで成りあがった。彼がリーダーとなった後の２年で戦況は反乱軍に一気に傾くことになる。

青年は戦い続けた。身体中を血の色に染めながら、自由の空を表す反乱軍の青い旗を帝国軍の前に掲げ続けた。

悪魔の目の前で誓ったことを忘れることもなかった。

＋＋＋

そして現在より7年前。

《帝国》の最期の日。

その日の夜。反乱軍は帝都攻略戦を前に栄気を養っていた。

次ですべてが終わる。そう思えば気が昂って誰もが眠れないらしく、宴は深夜まで続いた。

酒瓶を片手に宴の中を闊歩するのは、額に青いバンダナを巻いた男。

リーダーは酒で顔を赤くした男に声をかけられた。

「おうリーダー。飲んでるか？」
「うるせ。さっさと歯ぁ磨いてネンネしやがれ」
「何言ってやがる。夜はこれからだぜ」
「そうだそうだ！」
「ねぇんリーダぁ。今夜は……ね？」
「今夜も何も、男と寝る趣味はねぇ！？」

がはは。と馬鹿笑い。とにかく騒がしかった。

いくら《帝国》が１０年以上続いた争いで孤立し、疲弊しきっているだろうとも油断し過ぎてはいないか。

「……悲願が成就する前祝いか。まっ、しゃあねぇ」

彼ら砂漠の民の気持ちはわかる。《帝国》が夜襲をかける余裕がないことも事実なのでリーダーは苦笑するだけにした。

《帝国》の存在は今や風前の灯。

反乱軍という風が帝都に吹けばそれだけで。

「終わる、か。……いや、やっとはじめられる。俺の戦いはここからなんだ」

それはかつて彼が悪魔に誓ったこと。

悪魔に叩きつけた彼の挑戦。

リーダーは手にした酒瓶を誰かに見せつけるように夜空に掲げた。

「見てろよ。どこかで。俺は……お前みたいに絶対ならないからな」

それを見た仲間たちが何を思ったか乾杯してまた騒ぎ出した。

＋＋＋

うっかり仲間を焚きつけてしまったリーダーは少しだけ反省。１人になりたくて外の見張りを強引に変わった。

「いいんですか？」

「さっさと行け。鬼軍曹秘蔵の酒がなくなるぞ」

適当に嘘をつきながら見張りの兵を展望用の櫓（やぐら）から追い出す。

そのまま彼は酒瓶をお供に月見と洒落こんだ。

「……終わる、か」

再びその言葉が漏れる。

終わるのは《帝国》だ。彼は明日滅ぼす国の、そこに住む人のことを思った。

『帝国貴族』とそれに与する帝国軍、またその上に立つ皇族の人間は許せそうにない。でも民はどうか。

多くの『帝国人』を殺した反乱軍。砂漠の民は《帝国》に住む人にどんな手を下せばよいのか。

何もしなくとも故郷の砂漠はもう多くの血を吸い、傷を残したというのに。

報復、反乱、戦争、粛清、憎悪、そして報復。

次の戦いで争いは本当に終わるのか？

リーダーの頭の中はこの先の期待よりも、迷いの方が強く浮き彫りになる。

「俺達は……武器を捨てることができるのか？　砂漠の民は本当に自由になれるのか？」

どうしたら正しい？　考えがまとまらない。

彼は酒の回り方が半端だと悪態をついて瓶を投げ捨てた。

それから意味もなく夜空に浮かぶ月を褒めた。

気を紛らわせようとした。

「畜生。いい満月だな」

――いいえ。今宵は小望月（こもちづき）。満月は明日です

不意に、櫓の下から声をかけられた。

気付かなかっただと？　リーダーは慌てて下を覗き、侵入者を確認した。

いたのは東国の着物を着た――砂漠の国にいてやけに異彩を放つ――黒髪の女。

外見と雰囲気からして２０代前半といったところ。月明かりの下、女は彼に向かって微笑んだ。

その笑みは身に付けた着物の色と同じように淡く、儚くて、見惚れるほど美しい。

（桜……だったか？）

その色は。

「ですが小望月は幾望（きぼう）の月。幾が近いという意味では確かに良い月です」

「誰だい？　あんた」

女は彼の問いに答えず、代わりに別のことを言った。

「お月見の誘いにあがりました。お酒も用意しましたので、ご一緒に如何ですか？」

＋＋＋

なんだかなぁ。

そう思いながらも、のこのこと着物美人について行くリーダーの男。

美人と月見酒。

うん。野郎として理由はこれで十分。それにどうも罠のように彼は思えなかった。

「お久しぶりですね」

「久しぶり？　俺はお前さんみたいな美人さんに知り合いの覚えはねぇぜ」

「……そうですね。もう１０年以上も昔のことですから」

と女。

「私も貴方が反乱軍のリーダーとなるまで貴方のお名前を知りませんでしたし」

「なんだそりゃ？　知り合いですらねぇじゃねぇか」

「そうですね」

女は変わらず微笑してみせる。

それからはっきりと言った。

「でも私は、貴方のこと良く知っています。私が子どもの頃からず

っと、貴方のことは覚えています。……青いバンダナを巻いたお兄さん、そしてあの人達のことを」
「あの人？　……まさかそいつらは」
「……」
女は答えず先を急いだ。
黒塗りの鞘を腰に差した女の姿は凛と毅然としている。その佇まいから、相当腕の立つ《刀使い》だろうと思った。
リーダーは彼女の背を追いかけた。同時に彼はますます彼女のことを知りたくなった。
《帝国》の人間なのは間違いない。でも東国人の容姿だからなのだろうか。貴族とも軍人とも雰囲気が違う。
『奴ら』を知っているらしい、しかも1度会ったことがあるという謎の女。
「あんた、名前は？」
「サヨコ・K・レヴァイア。《帝国》の第3皇女です」
「姫さんだと！？」
つまり先程は一国の姫が1人、敵対する反乱軍の拠点に姿を晒したというのだ。なんと無謀な。
驚愕するリーダーにサヨコは告げた。

「帝国（ここ）にはもう『私達の敵』はいません」

＋＋＋

気付けば反乱軍の野営地から随分と離れてしまっていた。

目的地に着くまでの間、歩きながらサヨコはリーダーに淡々と話をした。今の《帝国》の話だ。

《帝国》は彼が知る、反乱軍の情報以上に酷い惨状だった。

まず帝国軍の戦力。『帝国貴族』の命の下、砂漠の民を蹂躙し続けた帝国軍は度重なる敗戦で壊滅状態。それ以前に兵は消耗品のように扱われていた。

「帝都に残る兵はすべて義勇兵、つまり民間人です。将だった者はほとんどが戦死か逃亡。尉官も多くが戦死してしまい新米少尉ばかり。元々軍のトップは『帝国貴族』で占めていましたから」

帝都に残る帝国軍の戦力は、戦時特例でも異例の３階級昇進した准将（つまりは元少尉）が率いる義勇兵、女子供を含めた３００人（これは反乱軍の１割にも満たない）だけ。もちろん《機巧兵器》を扱える者もいない。

「……嘘だろ」

「本当です。明日、彼らと戦いますか？」

「冗談じゃねぇ。だったら電撃戦を仕掛けて、うしろで踏ん反り返ってる貴族どもを」

「無理です。あれはもう砂漠の地にはいませんから」
「なっ！？」

反乱軍の憎むべき最大の敵、『帝国貴族』はもういない。彼らは滅びゆく《帝国》を見捨て他国へ逃亡した。

国の財も徴収した民の私財も、全部彼らが持ち出して。

「……なんだよ、貴族って奴らは。自分の国も守れねェ腰抜けなのか？」
「あれは大昔から貴族などではありません。偽りの特権を振りかざして奪うことしかできない愚者の集まり。虐げられていたのは砂漠の民だけではないのです。最後までこの国、この砂漠の地からあらゆるものを吸い上げ奪い去って行きました」
「あんたは」

怒りで声が震える。

「あんた、この国の姫さんなんだろ？　あんた達皇族は貴族どもがここまで荒らすまで何してたんだ！」
「知っていますか？　あれにとって皇族は政治の道具でしかないのですよ」

感情のない声。

「兄や弟達は派閥の代表として傀儡となり戦争の矢面に立たされました。姉や妹達はあれに政略的な婚姻を強要され他国へ。今どうされてるか知りたいですか？」
「……」

何も言えない。彼女の言う『私達の敵』の意味がわかった。

すべての元凶は『帝国貴族』。砂漠の地に《帝国》を建国してからずっと貪り続けた国賊。

でももういない。

リーダーは怒りのやり場を失い、乱暴に足元の砂を蹴る。

「……姫さんはどこにも嫁がなかったのか？」

「私は……政治の道具にもならない欠陥品の姫でしたから」

「あ？」

「ほら。あれを相手に刀を振りまわす乱暴な女なんてどこにも貰い手がない、というわけです」

「ちげぇねぇ」

リーダーはサヨコの冗談に笑った。

彼女の嘘だとわかっても笑ってやった。

「でも勿体ねぇ話だぜ。姫さんみたいな別嬪さん、俺が貰いてぇくらいだ」

「お上手ですね」

「だろ？　……ずっと戦ってたんだな。あんた達も」

「はい。でも私達は、中から国を変えることはできませんでした」

《帝国》に巣食う闇は余りにも深くて。

「そうかい」

リーダーは、淋しく微笑むサヨコにそれ以上かける言葉がなかった。

＋＋＋

リーダーはサヨコに連れられるまま、とうとう単身で帝都に入ってしまう。

「おいおい」

リーダーの呟きに振り返るサヨコ。

「姫さん。一体どこまで連れて行く気だい？　ついて行く俺も俺だが」

「お月見に良い場所を知っているのです。ところで」

サヨコは話題を変える。

「貴方は今の皇帝陛下のこと、どれ程ご存知でしょうか？」

「皇帝？　そういやよく知らねぇな。噂じゃ血も涙も流さねぇ冷血野郎だとか」

「……」

「あ。１つだけ知ってるな。姫さんの親父だ。そうだろ？」

「ええ。まあ」

あけすけなリーダーに苦笑するサヨコ。

「ではジャファル将軍。彼のことは？」
「強かった。奴が率いる部隊を相手にして多くの仲間が死んだ。勝てる戦は殆どなかった」
ほぼ即答するリーダー。
ジャファルという将軍はそれほど彼の印象に残る軍人だった。
「でも、奴は決して俺達反乱軍以外の、砂漠の民に決して手を下さなかったし下させなかった。集落を魔獣から守ってくれたこともあったな。立派なオッサンだった」
弱者を守る剣であり盾。軍人の鑑ともいえる人物だった。
「英雄だよ。敵ながら尊敬さえしたさ。でも俺達が殺した。先の戦でな」
「……」
帝都を守る最後の砦、その攻防戦でジャファル将軍は最期まで《帝国》を想い、守るために戦い、砂の上に倒れた。
「知り合いだったか？」
「はい。彼から貴方のことを聞いたこともあります。……《帝国》の敵なれど、砂漠の未来を想う荒々しくも新しい風だと」
「……ちっ」
「戦争、ですから」
だから敵対し、殺し合った。

互いに守るものと譲れないものがあったから。

サヨコは黙り込んだリーダーに「貴方のことを責めているわけではありません」と言葉を足した。

「将軍は陛下の最後の友人でした。陛下の心を理解する者、傍にいる者はもう私しかいません」

ある者は不正を正そうとして『帝国貴族』の姦計にかかり、ある者はジャファル将軍のように戦場で。

誰もが皇帝と《帝国》を想い、守ろうとして皇帝の前からいなくなった。

「陛下は王です。だから下の者の為に涙を流すことは許されません。けれど、陛下は何かを失う度に泣いておられます。ここで」

そう言ってサヨコは拳を握り、もう片方の手で拳を包み。

「ここで」

今度は口元に手を当て。

「ここで泣くのです」

最後に胸に手を当てた。

「貴方は、どうでしょうか？」

「泣けるさ。死んでいったダチを想うのなら、ちゃんと」

「そうですか」

「ああ」

皇帝は馬鹿だとリーダーは思った。

爪が掌を食い破るほど拳を握り締めなくても。

口の中を噛み切るほど歯を食い縛らなくても。

心から涙を流し、王ではなく人として、人を想って泣いてやればいいのに。

リーダーはサヨコに訊ねた。

「姫さん、いい加減教えてくれ。何故俺を帝都へ連れ出した？　今の話をしたかったからなのか？」

「今宵貴方をお誘いしたのは今の《帝国》を知ってもらいたかったから。その上で考えてもらいたかったのです」

「？　何を」

「貴方の未来」

「俺の、だと」

わけがわからないといったリーダーにサヨコは構わず話を続ける。

「《帝国》にはもう金も宝石も、水も食糧もありません。あるのはただ国を想い、最後まで守ろうとして残った民だけです。私達の故郷は砂漠の地にあるこの国だけだから」

「……」

「貴方にはそのことを知ってもらいたかった。知ってもらった上で貴方に訊きたかった。貴方の描く、砂漠の未来を」

「俺は」

リーダーの男はサヨコの問いに答えた。答えはずっと昔からあったものだ。

「俺は変えるんだ。この砂漠の世界を」

争わなくても滅ぼさなくても、奪わなくても。

そんなことしなくても砂漠に住む皆が幸せに暮らせる場所を作ると。

そう言って彼は昔、悪魔のような男に啖呵をきったことがあった。

そのことを彼は思い出した。

「確かに理想だ。でも夢じゃねぇ。《技術交流都市》で実験してい

る緑地化の計画も、砂漠に強い作物の苗の研究も実用化の目処が立った。水だって《大帝国》が使っていた地下水脈と水道施設が使えることを俺は知ってるんだ」

「それはっ、本当なんですか？」

「ああ」

リーダーは驚くサヨコの前で思いのままに言葉をまくしたてた。

「知っているか？　『あの野郎』が言うには《大帝国》の地下はまだ使えるところがあるらしいんだ。それを基盤に国を興せば……住める場所ができれば人を呼ぶことができる。交流都市から技術士を呼べるようになれば、砂漠越えして遺跡を売りに行かなくてもその場で研究して貰えるし新しいものも作れるようになる。それに……」

止まらない。彼は遠々と理想の未来と希望を語る。

「砂漠の地は決して貧しい国なんかじゃねぇ。ここにはまだ《大帝国》の遺したものが、《機巧兵器》なんてもんじゃねぇのが、可能性が残っている。それを正しく使えさえすれば……そうだよ。俺はこんな戦争なんてしたかったわけじゃねぇ。さっさと終わらせてはじめたかったんだ」

「……何を？」

訊ねるサヨコの声は僅かに震えていた。リーダーは気付かずに少年のように笑う。

「あたらしい国づくりをさ。生活の基盤がしっかりした国があれば今のように争う理由なんてねぇんだ。砂漠の民も《帝国》も関係ねぇ。砂漠に住む皆が暮らせる理想郷を実現して、砂漠の地に広げるんだ。それであの野郎を見返し……っ！？」

「……よかった」

突然、サヨコは近づきリーダーの手を取った。

そしてだいじなもののように、その手を胸に抱いた。

「貴方を待っててよかった。……貴方はあの日から、変わらないまま夢を実現しようとしてくれていた」

「姫さん!?　なにを」

抱きしめられるほど近い距離。彼はいきなりのことに戸惑う。

「私は覚えてます。貴方が『彼』に言ったこと。それが私の希望だった。砂漠の地、私達皆の故郷であるこの砂漠の世界を変えると、変えることができると言った貴方の言葉が」

「あんた」

「貴方がいたから、戦い続けてくれたから、私もこの国の闇と戦うことができた」

「……」

この期におよんで、リーダーは昔のサヨコのことを思い出せなかった。

だけど彼女の言う『彼』とはきっと『あいつ』だと、それだけはわかった。

悪魔のように振舞ったあの男。

今宵は小望月。幾望の月。

帝都から遠くへ離れることのできないサヨコにとって、反乱軍のリーダーとなった彼に会うことができる機会は決戦前の今夜しかなかった。

この幾を何よりも待ち望んだのは彼女だったのだ。

ただ確認したくて、ひとつだけ、彼に伝えたくて。

「ありがとう」

この時の、涙交じりのサヨコの微笑みが致命的だったと、後に彼は語る。

＋＋＋

3－02b　プロローグ－建国秘話（前書き）

連載1周年記念、2話連続更新！

……いや、1話にまとめきれなかっただけで

3－02b　プロローグ－建国秘話

＋＋＋

帝城にある庭の1つに案内されたリーダーは、そこで当初の目的である月見をした。

サヨコが酌をし、『先客』と一緒になって月見酒を味わう。

酒は砂漠でとれる穀物を使った、いわゆる地酒だった。

「こいつは」

「何だ」

「……よく飲む酒だ。帝都でこれを飲むとは思わなかった」

リーダーは先客の男にそう返した。

初老に差し掛かった体の大きな男。どこか疲れた顔をしており、両の手には血の滲んだ包帯を巻いている。

最初、男とサヨコと見比べたリーダーは「似てねぇ」と吹き出すのを堪えたりもした。

「貴族どもに他国の酒を何度も勧められたが、ワインなどより俺はこいつが1番美味い。その度に思った。俺は砂漠の人間だと」

「だろうな。砂漠に住む野郎なら1度は必ず飲む酒だ」

「そうか」
「忘れちゃいけねぇ味だ」
あとはただ黙々と2人で酒を飲み続けた。小望月の昇る空を見上げて。

夜が明ければ反乱軍の帝都攻略戦がはじまる。幾は近い。

「馳走さん。あんたと飲む酒も悪くなかった」
「……今日、都の中心で貴様を待つ」
「何？」
「俺の首は貴様にやる。それで終わらせよう」
「！　おい」

皇帝はそう言ってリーダーの返事も聞かずに城の中へ。そのまま月見は開きとなった。

「あの野郎」
「……外までお送りしましょう」
「いい。危険なんてないんだろ？　1人で帰るさ。……じゃあな」

丁寧に頭を下げるサヨコに見送られ、リーダーは帝都を離れた。

「陛下をよろしくお願いします……か」

親父とくらい呼んでやれよと思う。

彼はこの夜に彼女と出会い、《帝国》のすべてと皇帝の覚悟を知った。

それで1つの決意をした。

＋＋＋

反乱軍の帝都攻略戦。それは無血開城というあっさりした展開で幕を閉じた。

サヨコの説得や手引きもあったのだろう。《帝国》はもう戦う力がないのだから。

戸惑う仲間たちを尻目に、リーダーはまっすぐ帝都の中心を目指す。

「リーダー。いくらなんでも無謀だ」

「黙ってついてこい。絶対こっちから手を出すなよ」

「だせるかよ。……なんだよ、これは」

リーダーが深夜に来たその時はわからなかったのだが、日の下に晒された帝都は酷い有様だった。

戦時中とはいえ1度も侵攻されてないはずなのに荒れ果てた街並み。彼らは『帝国貴族』に散々絞り尽くされていた。

食べるためなのか草木はむしり取られ、賊に侵入されたように家屋を壊された所もある。

反乱軍を見上げる《帝国》の民もそうだ。誰もが痩せ細り、目が据わっている。これなら集落に住む砂漠の民の方がよっぽどましな生活をしているはずだ。

反乱軍は驚くよりも同情し、罪悪感さえも覚えた。

彼らの生活を壊した一端は《帝国》の敵である反乱軍にもあるのだから。

そんな中でもリーダーは帝都の惨状に目を逸らさず、ひたすらに先を急ぐ。人を待たせてあるから。

＋＋＋

途中、リーダーは石を投げつけられた。投げたのは年端もいかない男の子だ。

「かえれよ。はんらんぐん」

男の子を庇おうとも止めようともする者は誰もいなかった。民は誰もが疲れ切っていた。

「ここにはなにもないんだ。きぞくさまがいっぱいもっていったから」

おかねも、ごはんも、おとうさんも。

「だから……かえってよぉ」

おかあさんを守れるのはぼくしかいないから。

泣きながら石を投げる男の子。

「……ちっ」

リーダーは石が当たるのにも構わず男の子に近づいた。男の子は背の高い男に見下ろされて怖気付いてしまう。

「ひっ」

「……そうだ。俺達も坊主と同じようにたくさんのものを奪われちまった。だから戦ったんだ。守りたくて、坊主と同じように」

「おんなじ？」

「ああ」

男の子と目線を合わせ、頭を少し乱暴に撫でた。手荒にも優しくされた男の子はきょとんとして彼を見ている。

国を想う男の子の勇気を、リーダーは褒めてあげたかった。

「でもこのままじゃ奪い合うだけでたくさん大事なもんを失くしちまう。坊主、俺達は奪いに来たんじゃねぇ。何も奪わず、奪われないように俺達は争いを止めに来たんだ」

「……どうやったらとまるの？」

リーダーは男の子に笑いながら「まあ見てろよ」と、それだけ言って都の中心にある広場へ向かった。

＋＋＋

広場にはたくさんの民が集まっていた。その中心で反乱軍を待っていたのは、皇帝その人。

そのうしろには変わらず桜色の着物を身に纏うサヨコもいる。

「待ちかねた」

「ああ。悪ぃ」

正装の鎧を纏う皇帝は覇王と呼ぶにふさわしい出で立ちだった。

戦鎧に施された紋章はレヴァイアサン。古くから西国に棲むといわれている伝説の大海竜を模したもの。

それと同じ紋章を施した豪奢な長剣を1本携え、皇帝はリーダーを待っていた。

「あれが、皇帝……」
「ここからは俺1人でいい。邪魔すんじゃねぇぞ」
「おい！」
仲間の制止を振り切り、リーダーは1人皇帝と対峙。
反乱軍も帝国の民も、サヨコもあの男の子も、中心に立つ2人を見ていた。
皇帝はリーダーに自分の長剣を差し出した。
「約束通り貴様に首をやる。それでこの戦は終わりだ」
周囲がどよめいた。皇帝の話は続く。
「首と一緒に《帝国》もくれてやる。だが民の自由は保障してくれ。……娘も」
「っ、お父様」
「これだけが俺に残された、俺が守りたかったものだ。頼む」
皇帝の言葉に民は動くこともできず、ただ涙を流した。
今、1つの国が終わりを迎えようとしている。
「……」
リーダーは皇帝から長剣を受け取り、鞘から剣を抜いた。

その剣を彼は――

「!?」

自ら生み出した《盾》にぶつけ、剣を叩き折った。

「……何を?」

「皇帝。あんたに、それに皆にも俺は誓おう。俺はこの先、決して武器を手にしねぇ」

折れた剣を投げ捨てた。

＋＋＋

後の戦史では反乱軍の若きリーダーが皇帝と決闘し、これに勝利して皆の前で皇帝を許したと記されている。

また、《帝国》と砂漠の民、同じ砂漠に住む者として垣根を取り払い共に新たな国を創ったと。

でも実際は……

反乱軍のリーダーは皇帝の前で土下座した。

娘さんを俺に下さいと彼は言った。

「……は？」

「《帝国》なんていらねぇ。国はてめぇで創る。だけど、姫さんは良い女だ。俺はこの人と一緒に新しい国を創りてぇ」

反乱軍、帝国の民、皇帝、そしてサヨコ本人の目の前でリーダーは土下座して大告白。

しかも彼女へのプロポーズも飛ばして皇帝（親御さん）に、である。

「幸せにします。姫さんも砂漠の民も、帝国の奴らも。砂漠に住む誰もが幸せになる国を創って、一生守り続けます。だから、お願いします！」

リーダーは《帝国》の中心で「お義父さん！」と叫んだ。

唖然。

「……だ、だれが……お義父さんじゃぁぁぁぁ！！！」

「ぐはぁっ！」

皇帝、ご乱心。

《帝国》最期の日。その顛末の真実とは。

1日中続いた婿と舅の殴り合いにはじまり、サヨコの仲裁（刀で）で幕を閉じていたりする。

＋＋＋

その後。

一応サヨコと婚約（仮）という形をとった反乱軍のリーダーは身を粉にして働き、あたらしい国の基盤を創るとその功績を認められ、半年後にようやく元皇帝から結婚のお許しを頂いた。

彼はそれから俄然やる気を出し、急いで建国式の準備に取り掛かる。単に新たな国で早く結婚式をあげたかったともいう。

現金な新王であった。

尚、リーダーだった男は王になる際、元皇帝たっての願いで名を改めることになった。

レヴァイア。《西の大帝国》から続く皇族の姓だ。《帝国》とは別の意味で深い意味があるらしい。

それで彼はこの先「レヴァイア王」又は「レヴァン」と名乗り、そう呼ばれることとなる。

そして建国式当日。

反乱軍のリーダー改めレヴァイア王は砂漠の民と帝国の民、同じ砂漠に住む者として1つとなった新たな砂漠の民約5万人の前で宣言した。

――砂漠の民は俺の家族

――子どもはみんな俺の息子で娘

――女は俺の娘で姉貴でお袋さん

――野郎は兄貴で弟で親父だ

その国の名は《砂漠の王国》

レヴァイアは右手に家族を守る《盾》を、左手に新たな国旗を掲げた。

砂漠の民の自由と未来を表す、空のような青。旗に散りばめられた桜色の花弁はこの国の国母となる王妃を称えている。

この日、砂漠の民はすべてひとつの家族となる。レヴァイアは国を『家』だと言った。

「俺は王という国の父として誓う。この国は俺達の家だ。家と家族は俺が守る。いや、俺達で守るぞ」

青いバンダナを王冠の代わりに額に巻いた、家族を守ると誓う国父の誕生である。

「そして、オメェらの嫁は、俺の嫁だぁあああああ！！」
「……死にますか」
王妃となる彼女は、レヴァイアの喉元に刀を突きつけた。
よく悪ふざけする王は、とっくの昔に尻に敷かれていた。
冗談はさておき。彼の王の国が、建国して数年で西国最大の国となったことは真実である。
＋＋＋
現在。
国王付き宰相補佐なる妙な役職を持つ男ミハエルは今、《砂漠の王国》から数キロ離れた地点に調査に向っていた。
「全く、レヴァン様は人使いが荒い。幾ら警備隊と近衛隊がすべて出払ってるからって」

愚痴を零しながらも調査隊を率いて砂地を歩くミハエル。

王国は現在、国全体に警戒態勢を敷いていた。

パトロール隊の報告で《西の大砂漠》より『王蜥蜴』が縄張りから離れて現れたというからだ。これは建国以来の大事件である。

もしもあの山のような魔獣が王国に向かってくるのならば、どれ程の被害がでるのかわからない。なので王国の全部隊が動員され『王蜥蜴』の偵察と防衛ラインの構築に取り掛かっていた。

そんな中でもう1つ事件が起きた。それが今ミハエルが行っている「謎の飛来物の調査」である。

だが調査に向おうにも動かせる兵がすべて出払っている。そこで王の一声でこの一件は政務担当であるはずの彼が調査することになったのだ。

お前、ちょっと訓練兵の息子共を連れて行って来い、である。

「何かの前触れですかね。こうも事件が立て続けに……」

「ミハエルさん。見つけました」

今年17になる近衛隊見習いの少年、シュリはミハエルに報告。

彼は《遠見》の特性持ちである。

「あれはなんでしょう？　……舟？」

シュリが見つけた謎の飛来物は巨大な岩盤に突き刺さった、一艘の舟らしきものだった。

＋＋＋

ミハエル達調査隊はそのまま舟（？）に接近。

調査しようと踏み込んだところで何者かに遮られた。

それは、白いローブに身を包んだ長身の男。

金の長髪とローブで目元と口元を隠していて貌が見えないが、どうやら舟を守っているようだ。

「……」

「どなたでしょうか？　私は《砂漠の王国》で宰相補佐を務めるミハエルと申します」

「……」

「貴方はこの舟の持ち主ですか？」

「……」

「無口な方ですね」

ミハエルが訊ねても下位の精霊である砂更は話すことができない。

「……」
「どうしましょうか？」
「あ。ミハエルさん。下です」
「下？　……これは」

シュリに言われて足元を見るミハエル。

そこには砂更が砂地に書いた文字があった。

――我等の末裔達よ、主を頼みます

ミハエルが読んだのを確認した砂更はそのまま姿を消した。

「今のは……精霊？　主、ということは中に人が」
「ああっ！？　ミハエルさん！」

一足先に舟の様子を見たシュリが驚きの声を上げる。

「今度はなんですかシュリ。おや」

改めて岩盤に頭から突き刺さった白い舟を見たミハエル。

彼らは折れかかったマストにぶら下がった黒髪の少年を1人、それと舟の先頭、岩盤に衝突寸前といったところでシートにぐるぐるに縛り付けられていた青バンダナの少年を1人ずつ発見。

特に後者の少年はミハエルのよく知る、シュリの幼馴染である少

年だった。

「2人共気絶してるだけみたいです。……何してたんだ、こいつ」
「舟の中も調べましょう。まだ人がいるかもしれません」
「了解です」
「それにしても」

ミハエルは気絶している青バンダナの少年を見て苦笑した。

「今年は何時になく面白迷惑な帰郷でしたね。でもお帰りなさい、アギ」

＋＋＋

3－02b　プロローグ－建国秘話（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

『王蜥蜴』との激闘の果て、ユーマ達は《砂漠の王国》になんとか到着する。

アギの故郷である王国、ユーマはここで《盾》の王、レヴァイアに出会った。

次回「砂漠の王国」

「これは罠だ！　光輝さん、いるんだろ！？（ユーマ、錯乱中）」

３－０３ａ　砂漠の王国１（前書き）

ユーマＶＳ王蜥蜴。その顛末

あとシュリ君の災難

3－03a　砂漠の王国1

＋＋＋

頭が重い。

身体が思うように動かない。

目覚めたばかりの少年は覚醒しきれておらず、頭がぼんやりしていた。

そこにどこからともなく男の声が聞こえる。

少年は今までずっと誰かに話しかけられていたようだ。もう何か喋ったのかもしれない。

「――では話してください。君はあの時、砂漠の海で何をしていたのですか？」

「？」

（あの時？　どうなったんだっけ？　確か……）

ユーマは少しずつ、思い出す。

十十十

1撃だった。魔獣の群れが全滅したのは。

『王蜥蜴』。魔獣の群れを突破した直後、あの山のようなトカゲの化物がいきなり2本足で立ち上がり、ちっぽけな舟に向かってのしかかってきた。

それは前に戦ったことがあるユーマさえも知らなかった攻撃パターン。全長80メートルもある巨体を使ったボディプレスは凄まじかった。

『王蜥蜴』の攻撃はこれだけでは終わらない。ボディプレスの激しい衝撃が波紋のように広がり、雪崩か津波のように砂漠の砂を周囲に押し流したのだ。魔獣のほとんどがこれに呑み込まれてしまった。

ユーマ達の舟はアギが咄嗟に展開してくれた《盾》でほんの一瞬だけ堪え、その間にユーマが砂更の力で地下へ潜り緊急回避。

《盾》が『膜』の役割を果たし、砂をクッションにしてボディプレスの直撃は避けたのだが、災害のような攻撃の余波に巻き込まれてしまい、舟は砂中からまた外へと押し流されてしまう。

精霊たちのおかげで砂の荒波に呑まれても舟の転覆だけは何とかせずにすんだのだが、激しい揺れの連続にエイリークをはじめアイリーン、ポピラが耐えきれず気絶。

無事だったのは精霊に守られていたユーマと専用シートに固定されているアギの2人だけという状態。

幸か不幸か。『シールド発生装置』というアギの固定装置は、ティムスの設計もあってとんでもなく対ショック性能が優秀だったのだ。

舟を守る《盾》でもあったアギは、気絶することさえも許されなかったともいう。

気絶したエイリーク達はユーマが舟の中へ押し込み、2人は『王蜥蜴』を前にどうするかを考えた。

「『王蜥蜴』はでかすぎる。俺の《盾》じゃ掠っても舟ごとぶっ飛ばされるぞ」

状況は最悪。彼らは『王蜥蜴』を何とか振り切り、撒いて逃げ切らなければならない。

『王蜥蜴』を倒すことはほぼ不可能。サイズが違いすぎてどんな攻撃も焼け石に水なのだ。

なのにユーマは。

「あいつに1撃叩き込む」
「はぁ！？」

『王蜥蜴』はその大きさに似合わず砂地を這う速さも尋常ではない。下手をすると『リュガキカ丸』の全速力よりも上かもしれないという。

1度怯ませて隙を作らなければ、脱出の糸口も見出せないことをユーマは身を以て知っていた。

「やるぞアギ。俺とアギ、それに『リュガ』。3人の力を合わせれば」
「3人、ってまさか」

アギは嫌な予感がした。

同時に『リュガキカ丸』の船首に取り付けられた真っ赤な衝角を見て、青褪めた。

そして。

「集え、集え集え。風よ集いて螺旋を描け」

『王蜥蜴』の攻撃はどれも致命傷。この魔獣を前に舟は1撃も耐えることができない。だからユーマは舟の操作を砂更にすべて委ねた。

砂の精霊は主人の期待に応え、砂地を操作して舟を自在に滑らせる。

激しくも、流れるように滑る『リュガキカ丸』。砂更はジャンプ、ドリフト走法など舟にあるまじき動きで素早く切り返し、砂の壁で『王蜥蜴』の尻尾や前脚の前にワンクッション入れるなどしてすべての攻撃を回避してみせた。こうして反撃の為の時間を稼ぐ。

攻撃の度に撒き散らされる砂礫の雨はアギが《盾》で傘のように弾いた。

「回れ回れ竜巻よ。風を束ねて一振りの槍へ」
「ぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐー」

ユーマは次の1撃にすべてを出し切る為に《全力》モードで集中、それで風葉はずっと回っている。

仕掛けるのは合体攻撃だ。今できる最大の攻撃を『王蜥蜴』の頭に叩き込む以外に活路はない。

ユーマはエイリークのスーパーモードなど及びもしない程の風の力を風葉の魔法で集めてもらい、ゲンソウ術で《補強》して必死に制御している。

その力は『リュガキカ丸』の衝角にすべて収束。纏う竜巻の槍は今は嵐の前のように静かに、解放されるのを待っている。

「……よし。いくぞ、アギ」
「畜生、やるしかねぇんだろ！？」
アギは自棄になった。
どの道やらなければ終わりなのだ。《雷槌》の傭兵がいたとはいえ、1度は『王蜥蜴』から逃げ切っているユーマに懸けるしかない。
アギが衝撃に備えて船体を《盾》で覆い、準備完了。
ユーマは風の制御に苦しみながらもコックピットから『王蜥蜴』を睨む。
「前におっさんとやった手だけど、これしかないんだ。効いてくれよ」
いざ、勝負。
まずは風葉が溜め込んだ魔力を一気に解放。
「たーつーまーきー」
巨大な竜巻の奔流が『リュガキカ丸』を呑み込み上空へ高く突き飛ばした。竜巻に合わせて船体は錐揉みして高速回転。
急上昇。そのまま急降下。竜巻の高速回転に落下速度も加え、真

下にいる『王蜥蜴』脳天めがけて突撃。

さらに回転しながら牽制の《リュガキカミサイル》を撃ち込む。

炸裂するミサイル攻撃に『王蜥蜴』が上を向いて額を見せた。

そこがこの魔獣の弱点だと、ユーマは知っている。

今だ。ユーマは叫ぶ。

「3つの心を1つに束ね、今必殺の！」

アギの《盾》に覆われた『リュガキカ丸』でユーマの必殺技。これが『3人の』合体攻撃。

「リュガキカ丸ーっ、スピーーン！！」

赤バンダナの彼のように、赤く塗られた衝角を覆う竜巻のドリル。

この衝角は『リュガキカ丸』の、いやリュガの魂だ（多分）。

3人の力を合わせれば、『王蜥蜴』だって（きっと）。

「いけぇぇぇぇ！！」

「ぎゃあああ！！」

《旋風剣・螺旋疾風突き》

突貫！！

しかし、それでも『王蜥蜴』の地層のようになった分厚い皮膚を突き破るに至らない。

「……？」

効いていない。

『リュガキカ丸』は纏う竜巻の勢いで『王蜥蜴』の額を押すのだが、うしろに下がらせることも怯ませることもできず、また弾かれることもなく拮抗してしまい宙に停滞。

「駄目じゃねぇか！？」

アギは絶叫。《盾》のおかげで船体はバラバラにならずに済んではいるが、自壊してしまうのは時間の問題。

「くそっ、やっぱり『リュガ』じゃ……」

「まだだ」

「……ユーマ？」

ユーマはこのタイミングでガンプレートを抜いた。

気絶したポピラから拝借したのだろうか。ガンプレートを2丁持

っている。

「おい、まさか」

「押す」

「ちょっ！？」

アギは慌てて《盾》を前方に向けて集中した。失敗すると追突の衝撃で自爆してしまう。

一方、ユーマは舟の後方、天に向かって2つのガンプレートを構えた。

既存術式をイメージで《補強》して、《ストーム・ブラスト》の強化を図る。

「いくぞ、ダブルストーム・ビッグ・ブラストぉ！！」

「馬鹿、野郎がぁぁぁぁぁ！？」

『リュガキカ丸』はオーバーブースト。

シールド突撃！

ズシン！！　ゼロ距離からの体当たりは衝撃を逃さずに『王蜥蜴』の装甲のような皮膚に浸透。

「!?　ーーーーァアアッ」

この一撃は『王蜥蜴』の頭まで衝撃が行き渡った。悲鳴のような奇声が砂漠に響き渡る。

バキッ

同時に『リュガキカ丸』の衝角が攻撃に耐えきれず折れてしまった。

《旋風剣・螺旋疾風突き》を構成していた竜巻のドリルが弾け飛ぶ。

「リュガぁーーっ!?」

ぐらついた『王蜥蜴』。粉々に飛び散る赤い衝角(リュガのたましい)を見て悲鳴を上げるアギ。

かけがえのない友（?）を犠牲にして、『王蜥蜴』に脳震盪を起こさせることに成功するユーマ達。

だが『リュガキカ丸』は体当たりの勢いを失くしてしまい、『王蜥蜴』の皮膚に船体を弾かれてしまう。

この時、ユーマは弾かれた舟が斜め上を向いた一瞬に光明を見た。

「今っ！　とべぇぇぇぇぇ！！！」

そのまま特大の《ストーム・ブラスト》で舟を空へと押し出す。

「ちょっ、おま……リュ、リュガぁぁぁぁぁぁ！！？」

衝角を失くした『リュガキカ丸』。アギの絶叫が砂漠の地に木霊する。

舟はそのまま、ユーマの放つ竜巻を推力にしてまっすぐ飛んで行き――

＋＋＋

「……そうですか。『王蜥蜴』を相手にしてなんともまた」

ミハエルは未だぼんやりとしている少年の話を聞いて、何というか呆れるしかなかった。

アギに話を聞いた時も信じられなかったのだが、《西の大砂漠》のヌシを相手に1発入れて逃げるなんて誰がやれるというのか。

（レヴァン様ならあるいは……いやいや）

妙なことを考えたミハエルは頭を振る。

「あんな場所にいた事情はわかりました。では最後に確認しましょう」

「……確認？」

「君のことです」

ミハエルは改めて真顔を作るとユーマに訊ねた。

「ユーマ・ミツルギ君。学園都市から数人の女の子を拉致、それとあの舟に監禁していた犯人は君で間違いないでしょうか？」

「……は？」

目が覚めた。なんだそれは。

＋＋＋
砂漠の王国
＋＋＋

調査隊が謎の舟を調べた時に船内で発見したものは、毛布やらロープやらで全身を包み、ぐるぐる巻きにされた上でベッドに固定された４人の女の子。（ユーマが『王蜥蜴』に突撃する前に縛り付けていた）

気絶ししていた少女達は猿轡までされており、まるで人売りに連れ去られてしまったような有様。ミハエルはすぐに彼女達を保護した。

それから彼が生徒手帳などで少女達の身元を確認したところ、４人の内１人はなんと風森の妹姫。

さらに１人は北の大国、銀雹の姫君だったのだ。これは驚くしかない。

要するに。

ユーマにかけられた嫌疑は『王女誘拐』。

世界中で指名手配されてもおかしくない罪状だ。

「もしかすると別に犯人がいて舟から離れていたかもしれません。しかし、あの場で君だけ拘束されていなかったのが気になって。もしかすると……」

「ちょ、ちょっと待っ……！？」

起き上がろうとしたユーマは、ここで初めて自分が拘束されていることに気付いた。

「な、なんで？」

大の字に寝かされた上で両手両足を拘束。

妙な威圧感を感じ、首を捻って周囲を見渡せば黒い頭巾を被った男達に囲まれている。

まるで改造人間を造る昔の秘密結社のよう。

こんなことを冗談でも本気でも、実際にやってしまう人間をユーマは1人しか知らない。

「罠だ！　光輝さん、いるんだろ！？」

「何を言ってるんです？　これは、えーと……我が国に伝わる誰もが素直に自白する儀式という」

「あああああああ！！？」

間違いない。ユーマは確信した。

罠だ罠だと拘束状態にもかかわらず暴れ出すユーマ。何に対する罠なのか本人もわかっていない。

相当切羽詰まっている。1度落ち着けばエイリーク達に弁護してもらうなど思いつくだろうに。

しかし。

安全確保の為とはいえ彼女達を縛り付けたのはユーマだ。

しかも彼女達が気絶していた間だって彼女たちを乗せたままの舟で山のような魔獣に『空中殺法、回転体当たり』なんて真似をして相当危険な目に遭わせてもいる。

事情を説明してエイリーク辺りに知られたら制裁されるのはほぼ確定。

意外と打つ手がない。絶対絶命？

いないはずの兄の影に怯え、冷静になれないユーマ。

それで『光輝の罠説』に拍車がかかった。

「やっぱり罠だ。光輝さんが絡んでやがった。きっと俺が前に大砂漠を彷徨ったのも、『王蜥蜴』に2度も遭遇したのも、俺が今『ここ』にいることだってあの陰険眼鏡のせいなんだな！？　俺が何したっていうんだ！！」

「……あの」

「逃げなきゃ、とにかく逃げて反撃の準備をしないと。最悪姉さんに連絡をとって……もしかして大和兄ちゃんも敵か？　だとしたら

十六夜さんと陽香先生を味方に、武器は……」
「落ち着いて下さい」
「あんた達も！　あの人に利用されたんでしょ？　担がれたんでしょ？　脅されたんでしょ？　だったら、だったら俺と一緒に戦いましょう！　光輝さんについたって破滅しかしないんですよ！？　わかってるんですか！？」

1人で大パニック。

ユーマのあまりの錯乱ぶりに絶句するミハエル。

彼は隣にいる黒頭巾の1人に声をかけた。

「……アギ。やり過ぎでは？」
「いいんですよミハエルさん。しかしこいつ、学園で自分がやったこと忘れてねぇか？」

そう。決して真鐘光輝がいるわけではない。これは彼の罠ではなくアギの罠。

ユーマに散々酷い目に遭わせられたアギがミハエル達に頼み、大掛かりに仕掛けたドッキリなのだ。

大体この世界で『誰もが素直になる儀式』と言って、学園の生徒を磔にした事があるのはユーマだけだというのに。

「こいつもたまには灸を据えてやらねぇとな」
「あなたからそんな言葉が出てくるとは思いませんでしたよ」
「離せぇ！！　卑怯だぞ光輝さん！　こんなことばかりするから、あんたは最低なんだぁーー！？」
「「……」」

しばらくして正体を現したアギを見て再度怒り狂ったユーマが落ち着くまで約１時間。

それでやっとユーマは拘束を解かれた。

＋＋＋

説明すると、砂漠で気絶していたユーマ達はミハエルの達に保護され、そのまま王国まで運ばれたきた。

ここは《砂漠の王国》の外縁部にある、警備隊の詰め所の１つ。その１室。

今この部屋に残っているのはユーマとアギ、そしてシュリというアギの幼馴染だという少年だけ。

ミハエルは事後報告に城へ。彼は黒頭巾のエキストラをしていた近衛隊見習いの少年達を連れて大分前に取調室らしいこの部屋から出て行った。

拘束を解かれたあともブツブツと文句を言うユーマ。

「ほんと酷いよ。光輝さんが仕返しに来たかと思った」
「コウキ、つうと確かお前の兄貴の1人だったか？　俺はお前が学園でやってたことをそのまましてやっただけだぞ」
アギは想像以上にドッキリが大成功して満足していた。
今までの仕打ちに対する仕返しも兼ねていたので留飲が下がる思いだったのだろう。今のアギは何されても笑って許してしまいそう。
「でも仕返しって何だよ？　お前兄貴にこんなことされてもおかしくないことやったのか？」
「……それはさておき」
誤魔化した。思い当たる節が沢山あった。
「みんなは無事？」
「ああ。一足先に城の方へ行ってる。氷の姫さんがちょっとな」
「アイリさん？」
「航海中少し無理してたみたいだ。軽い熱射病にかかってた」
「ええっ？」
ユーマより先に目覚めた5人の内、アイリーンは王国に辿り着いたことに安堵したのか、1人だけまた気を失ってしまった。
彼女に熱があることに気付いたのはその時だったという。
「それっ、大丈夫なの？」
「医者には診てもらってる。1日2日休めば問題ないとさ。一応姫さんだからミハエルさんに頼んで王城で休ませてもらうことになっ

た」
「それでエイリーク達も？」
「ああ」
アギは頷く。
「魔獣との連戦で疲れてたのもあるだろうけど、やっぱり北国の出身に砂漠の日照りはきつかったんだろうな」
「……そっか」
ユーマは気付いてあげられなかった。
アイリーンは航海中もいつも通り毅然としていて、「大丈夫？」と訊ねてもいつも微笑みを返してくれていたから。
みんなの体調は気にかけていたはずなのに。ユーマは舟で行くのは集落までで止めておけばよかったと今更後悔した。
それはあのメンバーの中で砂漠を1番よく知っていたアギも同じこと。
「あまり気にすんなよ。幼馴染の風森の姫さんだって気付かなかったんだとさ。ずっと黙って隠していた氷の姫さんも悪い、ってあいつは言ってたぜ」
「……うん。アイリさんも強情だからね」
「そういうこった」
見舞いにはあとで行くということで、アギは話を変えた。
「それでだ。お前が寝てる間残った4人で今後のことを話し合った

んだが」
「うん」
「今日はもう夕方だ。それに氷の姫さんのこともあるから様子を見て、みんな2日くらい王国に滞在することにしたんだ。お前もそれでいいか？」
ちょっとした観光旅行だな、とアギ。
「いいよ。アギがいろいろ案内してくれるんだろ？」
「任せな。砂漠のうまいもんをばっちり食わせてやる」
得意げに笑うアギ。
彼は学園でも食べ物に関しては随分と鼻が効くのでこれは期待できる。ユーマも笑った。
「楽しみだな。それじゃまず泊まるとこ探さないと。アギ、荷物は？」
「宿は俺が用意してやる。あと荷物はまだ舟の中だ」
『リュガキカ丸』は今も砂漠のど真ん中で岩盤に突き刺さったままらしい。
「あれは精霊に運んでもらわないと無理だろ？　だからお前が起きるのを待ってたんだよ。とりあえずほら」
「あ。俺の」
アギから渡されたのはユーマの装備品。
《精霊器》である《守護の短剣》と《白砂の腕輪》。それにブー

スターの《ガンプレート・レプリカ2》とそのカートリッジ。

アギにお礼を言ったユーマはそれらを受け取ると、《精霊器》を通して精霊達に呼びかけた。

すぐに現れる精霊たち。

「風葉、砂更。大丈夫か」

「ふえ～。もうちょっと眠らせて下さいー」

「……」

ユーマの肩にへばりついたのは、魔力を消耗しきって半透明になったちいさな風の精霊。

逆にユーマの傍に控えた砂の精霊は砂漠地帯にいる為かまだ元気なようだ。

「うん。砂更が平気なら今からでもサーフィンして舟を取りに行けるよ」

「よし。だったら日が暮れる前に行こうぜ。シュリ、案内がてら手伝ってくれ」

「あ、ああ」

シュリは生返事。彼は改めて精霊を目の当たりにして驚いていた。

シュリという少年は、《砂漠の王国》が建国して以来のアギの幼馴染。

背はやや低めで童顔。日によく焼けた肌がユーマよりもやんちゃ

そうに彼を見せている。

彼は王国近衛隊の見習いでもある。身に付けているのは訓練兵用の簡易戦闘衣（装甲のない丈夫な服）の上に皮の胸当て。アギと同じ青いバンダナを左腕に巻いていた。

「アギ？」

「ん？　ああ。こいつはシュリ。俺の昔からのダチ。俺達を砂漠で見つけたのもこいつだ」

「そうなんだ。ありがとう」

「う、うん。《精霊使い》なんて初めて会ったよ」

シュリは戸惑いながらユーマと握手。

「あと俺達を泊めてくれるすげぇいい奴」

「……はぁ！？　アギ、お前何いってんの」

いきなりそんなことを言うアギに驚くシュリ。

「しょうがねぇだろ。大人数で城に厄介になるのは気が引けるし、宿なんて金がもったいねぇ」

「だからって」

「俺の部屋は今人が住める状態じゃねぇだろうからさ、お袋さんによろしく言っといてくれよ」

幼馴染同士の気兼ねないやり取り。孤児院育ちのアギは大抵彼の家に厄介になっていたりする。

「シュリ。今更だろ？」

「ったく。お前、あとで俺の仕事手伝えよ」
「わかってるて。ユーマにも手伝わせるから」
「えー」

とりあえず宿は確保。

「これで寝床と飯は問題ねぇ。さっさと舟を回収しに行こうぜ」
「そうだね。エイリーク達も色々困るだろうし」
「ちょ、ちょっと」

外へ出ようとする2人。シュリは慌てて呼び止める。

「今から外へ行く気なのか？　あの舟を運ぶにしても人がいないし、今日中になんてまず無理だろ」
「これが無理じゃねぇんだ。いいからついてこいって。お前しか舟の場所わかんねぇんだから」
「ねぇシュリ君。この立て掛けてる木の大盾借りて行ってもいい？」
「はぁ？」

わけがわからない。

あとどうもユーマはシュリを年下だと勘違いしているようだ。

「よし。『板』持ったし、行こう」
「おう。晩飯には間に合わせないとな」
「……一体何する気だよ、お前ら」

こうしてシュリは久しぶりに会ってよくわからなくなった幼馴染

と、これまたよくわからない《精霊使い》の少年と一緒に再び外の砂漠へ向かうことに。

＋＋＋

《砂漠の王国》、その王城。

玉座の前に膝をつくのは、国王付き宰相補佐なる妙な役職を持つ男ミハエル。

彼は珍しく玉座に座る国王レヴァイアに『謎の飛来物』の調査結果を報告した。

「……というわけで『王蜥蜴』の出現した原因は先程説明した少年の使役する精霊、その魔力を縄張り付近で嗅ぎ取ったせいだと」

「……」

「先遣隊からの報告では『王蜥蜴』は大砂漠へ撤退した模様です。アギ達は上手く撒いてくれたようで魔獣が王国にまで来る心配はないようですが、一応《消魔石》の準備を……」

「……」

「……レヴァン様？」

「……サヨコさーん……」

「……聞いてましたか？」

玉座には王妃が里帰りしてものすごくしょげている、額に青いバンダナを巻いたおっさんが１人。

＋＋＋

「「「ぎゃあーーっ！？」」」

そして、性懲りもなく砂漠で波乗りをして魔獣に追いかけられている少年たち。

＋＋＋

３－０３ｂ　砂漠の王国２（前書き）

王様は３７歳です

3－03b　砂漠の王国2

＋＋＋

やけにハードな1日を乗り越えたユーマ達の次の日の朝。

ここは元帝都、《再開発地区》と呼ばれる区域の、住居区の中のとある一軒家。

またの名をシュリの家。

テーブルの上に並べられたたくさんの料理を貪り食う少年たち。

昨晩は結局夕飯を食べることができなかった彼らの食欲は無尽蔵だった。

＋＋＋

昨日『リュガキカ丸』の回収に砂漠へ向かったユーマ達はまたもや魔獣と遭遇。

戦闘するにも疲弊していたユーマとアギ、魔獣戦の経験のない訓練兵のシュリの3人パーティーでは頼りなく、波乗りで逃げ回り命からがら『リュガキカ丸』に乗り込むと、今度はミサイルで魔獣を蹴散らしながら砂漠を突っ切り、夜遅くになってやっと王国へと戻

った。

砂の精霊に運んでもらった舟は王国の『整備工場』に預け、エイリーク達の荷物を王城に届けるよう人に頼むと3人はまっすぐシュリの家へ。

玄関前で疲労の限界がきて、3人ともそこでぶっ倒れた。それを見たシュリの母が夜遊びしてきたと勘違い。

シュリの母は怒りながら彼らをシュリの部屋に押し込み、そのまま一夜明けて今に至る。

「ほら。昨晩折角用意してたんだ。無駄にしないで全部食べな」
「わかってるて、おばちゃん」
「しっかりいただきます」

恰幅の良い肝っ玉母ちゃんといったシュリの母に言われるまでもなく、とにかく飢えていたユーマとアギは食べに食べまくった。

窯で焼かれた鳥の腿肉はすり潰した野菜と香草のソースをかけてかぶりつく。

同じく窯で焼いた平たいパンは2種類。それぞれ干しブドウとチーズが練り込まれていてそのままでも美味い。

スープは汁物というより具材ばかりでまるで煮物のよう。食卓を彩る果物の盛り合わせは瑞々しく、特に搾りたてのジュースは絶品。

これは……メロンか？

「うめぇ。ここ数日侍女ちゃんのおかげで碌なもん食ってねぇってわけじゃねぇが、やっぱりうめぇ」
「うん。俺は今、完全に蘇った」
「腿肉はまだあるよ。焼くかい？」
「「お願いします！！」」

「……アギが食うのはわかってたけど、ユーマもよく朝からこんなに食えるな」

２人の暴食ぶりに勢いをなくしたシュリ。

このごちそうの数々はシュリの母が「アギが友達を連れて帰って来た」と聞いてわざわざ用意してくれたもの。

３人が帰ってすぐぶっ倒れたせいで豪華な夕食は台無しになったのだが、シュリの母が朝食に合わせて温め直してくれのだ。

もっとも、「折角用意したのにどこほっつき歩いてたんだい」とシュリだけが母に文句を言われてしまったのだが。

そんなシュリの事情も知らず、ユーマとアギは食べまくる。

「食える時に食えるやつが強いって兄ちゃんは言ってたしね。思えば昨日は朝から何も食ってなかったし」
「実際食う暇なんてなかったよな。魔獣が次々と舟に迫ってきて」
「王蜥蜴がね」
「……」
「「……」」

料理に伸ばした手が自然と引っ込んだ。

黙り込んだユーマとアギ。思い出さなければよかったと後悔。

シュリはシュリで昨晩初めて魔獣の群れに追いかけられた悪夢を思い出し震えだした。

「よく生きて帰ってきたな、俺達」
「そうだね」
「俺も」
「「「……」」」

「……よし！　お前ら食え。嫌なことは美味いもん食って何もかも忘れるのが1番だ。ほら乾杯！」

3人は顔を見合わせた。

「「「「乾杯！」」」」

というわけでフレッシュジュースで乾杯する『4人』。

朝から宴の勢いで盛り上がりだした。

丁度よいタイミングで腿肉が焼き上がる。シュリの母が大皿を持ってきた。

先程食べた腿肉は温めなおしたものだったが、やはり焼きたては違う。滴る肉汁とカリカリした皮の香ばしさが堪らない。

「追加だよ」
「きたきた。ありがとうおばさん。おじさん、そこのソースとってくれません？」
「ほらよ坊主。こいつはこっちの辛いのを混ぜるとまたうまいぜ」
「へぇ」

早速ユーマは緑色の香草ソースに加え、赤いソースをかけて腿肉を食べてみる。

「！　ほんとだ。なんか足りないと思ってたんだ」
「だろ？　……かあーーっ。たまには甘いもんも悪くねぇ。おい、つまみねぇか？　塩っぽいもんが食いてぇ」
「ジュースでつまみって。そういや舟に積んでた食糧に燻製なかったけ？」
「あったな。塩ものといやお前が作った海鮮せんべいがあるぜ」

ユーマの呟きにアギが答えた。

ここでいう海鮮せんべいとは、魚介類を高熱で熱した分厚い鉄板で焼きながらプレスしたもの。

これはユーマがリュガの《高熱化》を利用して作ったもので、骨までパリパリとなった魚介類はそのまま食べても出汁を取るのもよしという逸品。

「それだ！　坊主」
「ユーマ、わりぃが王様に持ってきてやってくれ」
「わかったよ。舟の食べ物はシュリ君ちのお土産代わりでこっちに持ってきたから……」

立ち上がったユーマはそのまま荷物を置いた部屋に向って。

思い直して振り返った。

「……王様？」
「なんだ坊主？」

返事をするのはアギのように青いバンダナを額に巻いた、３０代後半ほどのおっさん。

最初から違和感なく食卓にいたこのおっさん。ユーマはシュリの家族だと思い、なにも疑問に思っていなかった。

「シュリ君のお父さんじゃなくて？」
「まぁそれでも間違っちゃいねぇが」
「？」

おっさんの返答に疑問符が浮かぶ。どうもおっさんの正体に疑問に思っているのはユーマだけのようだ。

誰？

「シュリ君？　アギ？」
「あー。俺も普通に流したからな。紹介するとこの人がうちの王様。レヴァイア様だよ」
「レヴァンでいいぜ坊主。どうもこの名前は堅苦しくてな」
「……。はあ！？　王様って、何でそんな人がシュリ君ちで飯食ってんの？」

もっともな疑問にレヴァンは悪気もなく答えた。

「悪いか？　他の王は知らねぇが、この国は俺ん家だ。俺はいつだって『家』で『家族』と一緒に飯が食いたいのさ」

『家』とは国。『家族』とは砂漠の民のことだ。

この破天荒な王こそアギの憧れであり、彼の目標である《盾》の王。

シュリの家に来たのは久々に帰って来た息子（アギ）がいたからだとレヴァンは言う。

「しっかしこの時期は忙しいぜ。ガキどもが一斉に帰ってくるから会いに行くのも1日じゃ全く足りねぇ」

「はぁ。なんかイメージが違う」

どこまでも王というイメージからかけ離れているレヴァン。

ユーマはシュリの家にいて親戚のおっさんのように振る舞うこの王がどこか釈然としない。

アギは気にするな、とユーマの肩を叩く。

「こういう人なんだよ。……王様、遅くなったけど只今戻りました。わざわざ会いに来てくれて嬉しいです」

「おう。学園で大分揉まれてきたみてぇだな。見違えたぜ」

「はい！　こいつと一緒にいると碌な目に遭わないんで」
「ちょっと」
レヴァンの言葉にアギは嬉しそうに笑い、アギの軽口にユーマはふてくされた。
アギはレヴァンにユーマを紹介した。
「そうか。坊主が《精霊使い》の」
「王女誘拐犯なんです。俺も舟じゃこいつに捕まって酷い扱いを受けてたんだ」
「アギ！」
「おっと。文句あるならお前が今日まで俺を巻き込んで何してきたか、この場で言ってみやがれ」
「うっ」
言葉に詰まるユーマ。多少は酷いことして迷惑かけている自覚があるらしい。
昨日の磔尋問といい、どうもこの国はアギの故郷（ホーム）だけあって彼はいつになく強気だ。
ユーマはアウェーな感じが拭えない。
「俺がアギにしたことって……アギが生まれて初めて女の子にデートに誘われたから、その相談にのってデートプランを……」
「なんだって？　よしそれ、詳しく話せ！」
「てめぇ！　よりにもよってそれを言うんじゃねぇ！？」
でも口での勝負ならやっぱりユーマの方が上だった。

皆の前でわざとアギの地雷を踏み、爆発させるユーマ。2人のやり取りに爆笑するレヴァン。

「ははは。間違いなく息子（アギ）のダチだな。城にいる嬢ちゃん達と一緒に歓迎するぜ、坊主」

これがユーマと《砂漠の王国》の国父、レヴァイアとの出会い。

少年と王。2人はこの出会いが奇縁だということに今は気付かない。

＋＋＋

「失礼します。……レヴァン様、探しましたよ」

シュリの家へ王を迎えに現れたのは国王付き宰相補佐のミハエル。

なぜか彼はダークグレーのスーツを着ている。眼鏡もかけてどこかビジネスマンのような風体。

「その格好はなんです？」

「？　ああ。この服、《技術交流都市》での流行りなんですよ。仕事のできる男みたいで似合いませんかね？」

「……いえ。いい生地を使ってるみたいですね」
「そうなんです。意外と通気性がいいんですよ」

砂漠の国には場違いだなとユーマは思うが、これが異国異世界文化なのだろうと黙っておく。

「レヴァン様。今朝の朝食は3丁目のドマさん宅でお世話になると言ってませんでしたか？」
「気にすんな。ほら、お前も食えよ」
「はぁ。食事が済んだら1度城に戻って下さいね。君たちもシュリと一緒に」
「俺達もですか？」
「ええ。お友達のお姫様たちが待っていますよ」

エイリークとアイリーンは一国の姫君。アイリーンが熱射病で倒れたこともあってポピラとミサを含めた彼女達4人は、来賓扱いで昨晩から王城に滞在していた。

ミハエルは王を呼び戻すついでにユーマ達を城まで案内に来てくれたのだ。

「それでレヴァン様。今日の予定なのですが」
「おいおいミハエル。あとにしろよ。飯食ってるんだぜ」
「ですが」
「それと午前中は俺休みな。腹いっぱいで動きたくねぇ」
「……あなたという人は」

まったくと言わんばかりにミハエルは溜息。

彼は聞き取れないほど小さな声でぼそりと呟いた。

「……サヨコ様に言いつけますよ」
「……何？」

でもって王妃の名前はしっかり聞きとる王様。餌に獲物かかって内心ほくそ笑むミハエル。

「若しくはお郷帰りなさったサヨコ様宛に一筆送りましょう。こちらは問題ないので、あと1週間くらいごゆっくりくださいと」
「冗談じゃねぇ！　淋しさで俺を殺す気か！？」
「情けないのでそんな理由で死のうとしないでくださいね」

この王様、ガキっぽい反面非常に扱いやすい。

「だったら働いて下さい」
「ちっ」
「……はぁ」

「……アギ」
「こういう人なんだよ」

アギはユーマにそれだけを言った。

「それで今日のことなのですけど」
「んだよ。政務関係は宰相のジジイとお前らがいりゃ十分だろ？新開区の方は工事の親方と話し合って資材の搬入はもう済ませてるぞ。ああ、6区の職人共は今日休ませるぜ。あいつら働き過ぎだ。再開区の水道設備の拡張も順調。そういや節水の政策に関してだが生活用水の消費量は調査報告を読んだ。でもここ数年で人が一気に増えたんだ。1人あたりはそうでもねぇししばらく様子を見る」

レヴァンはすらすらと国の様子を語り、自分の仕事はもう済ませたとばかりにミハエルに話をする。

「ガキどもが帰ってくるのを考えて食糧の備蓄をどうにかしておきたいな。俺が調べた小麦の流通ルートはどうだった？　同じ品質で今より1割安く仕入れられると思うが」

「はい。1割3分といったところですね。ここはほかにもいくつか安価で手に入る物が……資料はこれです」

「どれ。国でとれるもんとかぶらねぇといいが」

「……普段からこうされていれば優秀な方ですのに」

「なんか言ったか？」

レヴァンに紙の束を渡したミハエルはまたもや溜息。

「レヴァン様は奔放で、事ある毎に我儘言う割には仕事はしっかりとしてくださるんですよね」

「当たり前だろ。単なる駄目親父じゃサヨコさんに見捨てられちまうじゃねぇか」

「……はぁ」

「……アギ」

「こういう人なんだよ」

アギは先程と同じセリフにもう一言付け足した。

「サヨコ様がいる限り王様は無敵なんだよ」

これにユーマを除いた誰もが頷くので、妙な国に来たとユーマは思ってしまった。

「逆にサヨコ様がいないと、反動がきて昨日のように全く使い物にならない時があるんですけど」
「うるせ。まあとにかくミハエル、国のことは把握しているし指示も送っている。それでも俺が動く必要のあるとこがあるのか？」
「はい。『王蜥蜴』の件で」

大砂漠のヌシの名を聞くと、レヴァンどころかユーマ達も顔を顰めた。

「……また現れたのか？」
「いえ。そういうわけでは。念の為防衛線の周辺に《消魔石》を散布しようという話ですが」

《消魔石》とは西国の砂漠地帯で採掘される特殊な鉱石。魔力の『匂い』を消す効果がある。

魔獣の多くは魔力に惹かれる性質がある。なので魔獣は魔石のような魔力資源のあるところに多く生息するし体内に魔力を持つ魔族、《魔法使い》は優先的に魔獣に狙われてしまう。魔力生命体である精霊を連れたユーマも同じ。

《消魔石》は魔獣が嗅ぎとれる魔力の残滓をかき消すことができる。これは魔よけアイテムとしてだけでなく魔獣除けの結界の素材としても重宝されている。

「散布作業を行うとそれに伴い防衛線に派遣していた全部隊の撤収作業と王国への帰還が遅れてしまいます。それで現在国に残る部隊は殆どおらず、治安警備に回せる兵が少ないものでして」
「……俺に警備隊の見廻りをやれってか？」

「お願いします。夏季休暇のこの時期は人の出入りが激しく子供たちも帰ってきます。警備隊にシュリのような訓練兵の子達を入れても人手不足なもので」
「……」
それに、とミハエルが言葉を濁すと、レヴァンは一瞬だけ物騒に目を光らせてみせた。
2人は誰にも悟られずにやりとりを終える。
「レヴァン様なら1人で警備兵百人分の働きが見込めますから」
「百人どころか千人だな。確かに俺向きの仕事じゃあるが」
レヴァンはここで何かを考える。
「アギ。お前らもう今日の予定は決まっているのか？」
「特にないです。ユーマ達に色々案内しようと思ったけど」
「よし。だったら今日は国の仕事手伝え。坊主達も」
「はい？」
「今なら特別に俺の財布から小遣いも出してもいいぜ」
「レヴァン様。いくらなんでもそれは」
ユーマ達の予定を勝手に決めるレヴァンは、名案とばかりに笑った。
「なーに。ちょっとした社会見学の体験学習だ。学生なんだからこの国を知るいい機会だろ？」
＋＋＋

シュリの家をあとにする5人。

日除けも兼ねた砂除けのローブを纏い、ユーマ達はエイリークを迎えに王城へと向かう。

「私は先に《新開発地区》に行って話をしておきますので。途中からはシュリ、あなたに案内を頼みます。城の門番には話を通してますから」

「わかりました」

「それじゃ俺も。……待てよ。ミハエル、今日は俺の『用事』なかったのか？」

「えーと、待って下さい」

レヴァンに訊ねられたミハエルは分厚い手帳を取り出し、何やら調べ出した。

「今日は……再開区2丁目のミミルちゃん（6）ほか149人の子どもたちのお誕生会がありますね。あとは……大通りの花屋を営むメルシェさん（21）と新開区で石切りをしているゴロ（27）が婚約したらしくレヴァン様に挨拶に伺うとか」

「何でそれを先に言わねぇ！！？」

王様、絶叫。

「プレゼント何も準備してねぇ！　お父さん失格じゃねぇか、どうすんだよ！？　あとゴロは殺す。俺のかわいい娘に手を出すなんて……お父さん許さないからね！」

「キャラがぶれてますよ」

ミハエルの冷静な突っ込みが入った。

「子どもたちへのプレゼントは予めサヨコ様が用意しています。お誕生会の時にレヴァン様から渡して下さい」

「流石だぜサヨコさん。愛してるぅ！」

「それとゴロは手加減してあげて下さいね。メルシェさん泣いてしまいますよ？」

「いや、先に俺が泣く。だから俺はこの国の親父としてゴロに『お前に娘はやらんぞ』をやらなきゃいけねぇ」

「……アギ」

「何も言うな」

ユーマにはもうテンションの高い変なおっさんにしか見えなかった。

「つーわけで俺は今からゴロを殴りに行く。じゃあな」

そう言って次の瞬間、レヴァンは『跳んで』姿を消した。

「えっ？　消えっ？」

「……はぁ。昨日は昨日でうっとうしかったのですが、いつもの調子に戻られても。……では私達も行きましょう」

「おう」

「はい」

「ミハエルさん？　アギ？　シュリ君まで」

レヴァンが消えたことは誰も驚かない。

「はい？　ああ。レヴァン様はゲンソウ術で瞬間移動できるだけですから」
「うちの王様は神出鬼没の王様なんだよ。気にすんな」
「気にすんな、って……まぁ、いいや」
流した。
このくらいで動転しては学園でもやっていけない。
＋＋＋
ミハエルと別れたあと。３人は王城目指して人気のない大通りをまっすぐに進む。
《再開発地区》にあたる王都はとにかく雑多な印象を受ける。
以前の《帝国》のものと思われる家屋の間に、砂色の四角い住居施設が混ざり統一感がないのだ。
加えて道端に布団や洗濯物が干してあるような下町といえる生活感のある街並み。大通りはともかく区画同士を繋ぐ裏通りの道はとても複雑になっているらしい。
「だれもいないね」
「働ける奴はみんな新開区の方に行くからな。それと日の高くなる時間帯は日陰になる裏通りや地下の方に人が集まる」
「地下？」
「それはあとのお楽しみだ。夕方になれば大通りも露店市で賑わう

んだけどな」
「へぇ」

アギとシュリの説明を受けながら大通りを抜けるユーマその先は大きな広場になっていた。

王都の中心地になる場所だ。王国の名所の1つで『宣誓の地』と呼ばれている。

「ん？　ここは人だかりができてる。見えないけど何かやってるの？」
「……ああ。王様だよ」
「早速だね」
「は？」

ユーマが訊ね返す前に人だかりの中から叫び声が聞こえてきた。

「王様！　俺達の結婚を認めて下さい！！」
「上等だぁ！　その覚悟、試してやるからかかってきやがれ！！」

殴り合いがはじまったらしい。喧騒が大きくなる。

「……なに、あれ？」
「ここは王様が反乱軍のリーダーだった頃、皇帝の前でサヨコ様を嫁に下さいって土下座して、殴り合ったことで有名な場所なんだよ」
「はい？」
「以来結婚する男はここで王様に誓いを立てるんだ。娘さんを幸せ

にします、って」
「……それでなんで殴り合い？」
「男の気概をみるんだとさ。建国以来の伝統だよ伝統」
貴様なんぞに娘はやらん、誰がお義父さんじゃぁぁぁぁ、のノリだとアギ。
それを聞けばなんだろうこの国と王様、と思うしかないユーマ。
「……異文化だなぁ」
「何言ってんだよ、お前」
「俺は子供の頃に王様と皇帝陛下の殴り合いを実際みたんだけど、あれが1番凄かったなぁ。あとサヨコ様の刀も」
「刀って。……じゃあさ、2人がお嫁さん貰う時はやっぱりここで王様と殴り合うの？」
「……まあ」
「だろうな」
曖昧な返事をされた。
自分の将来を予想して、2人は正直うぜぇと思ってないだろうかとユーマは考える。
広場の殴り合いは無視。3人はその場をあとにした。
もうすぐ城門前。雑談しながら歩く。
「そういやアギ、お前いつの間にあんなにたくさんの女の子と知り

合いになったんだ？　しかもお姫様付き」

シュリは幼馴染に羨む視線を送る。

「いいよな。華やかな学園生活送って」

「なんだそりゃ？　勘違いすんなよ。全部ユーマ繋がりだからな」

「どっちの知り合いでもいいよ。俺が見た時はみんな気絶してたけどみんな可愛かったもんなぁ。なぁ、ちゃんと俺のこと紹介してくれよ」

「まあ……いいけどな」

アギはユーマに意味深な視線を送り。

「あんまり期待しない方がいいよ」

ユーマはアギの視線の意味をはっきり理解してシュリに言った。

「ええっ、なんでさ」

「なんというか……なぁ？」

「うん」

エイリークやアイリーンが美少女だってことくらい2人もわかっている。

でも2人はしょっちゅう風で吹き飛ばされたり、氷塊を叩きつけられたりされているので素直にそう言えない。

「エルド妹もとっつきやすくなったけど、相変わらず興味ないのは『馬鹿ですね』で切り捨てるしな」

「ガンプレートを持った最近のポピラは特に酷いね。普通で1番ま

ともなのはミサちゃんなんだけど……」

と噂をすれば。

「いい加減にして！　吹き飛ばすわよ！！」

向かう先から聞こえてくる彼女の怒声。

「エイリークがいるから、ね？」

「……ああ」

2人は溜息をついた。

どうも城門前で揉め事があったようだ。そこにも人だかりができている。

「……アギ」

「行くしかねぇだろ。どこの馬鹿が絡んだか知らねぇけど、姫さんの犠牲者は俺達だけで十分だ」

「そうだね。……はぁ」

『素人』がエイリークに吹き飛ばされるのは危険だと判断するユーマとアギ。

《旋風剣》の威力を身を以てよく知る2人は「俺達で被害を抑えなければ」と妙な使命感を持って動きだした。

「どうしたんだ、2人とも」
「シュリ。ここは『素人』に任せられない。だから俺達が行く」
「はぁ？　お前、何言って」
「アギ！　急いで」
「わかってる。いいからシュリ、ここで待ってろよ」

ユーマとアギはシュリを置いて城門へ駆けだした。

「ちょっ、素人って。じゃあお前らは何なんだよ」

もちろん、吹き飛ばされるプロです。

＋＋＋

城門前。

人垣を前にしたユーマは初めて学園来た時と同じようにアギを掴むと、風葉の魔法でハイジャンプ。

一気に跳び越える。今回はうまく風の出力を調整していたので2人は見事着地。

「エイリーク！　早まるな」
「一般人を吹き飛ばすんじゃねぇ……って」

エイリークに割り込もうとした2人。

そこで彼らが見たものは。

「なっ！？　邪魔しないで」

「悪かったな。でもちょっと乱暴じゃねぇか、嬢ちゃん」

彼女の《旋風剣》を片手で受け止める、青バンダナのおっさん。

＋＋＋

３－０３ｃ　砂漠の王国３（前書き）

私事ですが、７０万字突破って……

3－03c　砂漠の王国3

＋＋＋

エイリーク渾身の《旋風剣・疾風突き》。

それを難なく掌の《盾》で受け止めるのは、《砂漠の王国》の国王であるレヴァイア王その人。

その《盾》はアギのそれとは違う。『防ぐ』というよりも『受け止めている』。

もしアギがエイリークの相手をするならば、《盾》で受け止めたと同時に受け流して剣と風の衝撃を軌道を逸らす、若しくはより強固で分厚い壁のような《盾》のイメージを《幻創》して弾き返すのどちらかで対処するだろう。

でもレヴァンは手鏡程の大きさの《盾》にもかかわらず、エイリークの剣と《旋風剣》の衝撃波をすべて受け止めていた。

吸収ともいえる現象。攻撃の余波で巻き起こるはずの風さえ吹くことがない。

これだけで王の実力が窺えた。

途中から乱入してきたユーマとアギには状況が全くわからなかった。

「どうなってんだ、こりゃ」
「それ以前に王様ってさっき広場で殴り合いしてたんじゃ」
「ミツルギさん。アギさん」
「ポピラ？」

この場にはエイリークの他にポピラがいた。

彼女に駆け寄り合流すると、ユーマは改めて騒ぎの中心にいるエイリークを見る。

さっきまで喧嘩してましたといわんばかりに顔に青痣をつけているレヴァン。どうやらエイリークから誰かを庇っているらしい。

彼のうしろには尻もちをついた少年が唖然としている。

「倒れたあいつは……ファルケか。あいつが姫さんに絡んだのか？」
「ポピラ、解説お願い」
「状況説明です。私に解説キャラを定着させようとしないでください。……元々私達が迂闊だったんです。ローブを身に付けず制服で外に出てしまったから」

ポピラの状況説明はこうだ。

ユーマ達を城門前で待っていたエイリーク、ポピラ、ミサの３人。リーズ学園の制服を着ていた彼女達は外へ出た途端やたらと目立ってしまっていた。

学園都市内であればリーズ学園の名前が彼女達の身元と安全を保障してくれたのだろうが、異国の地ではただ物珍しいだけ。

大抵は観光客の学生と見てくれる大人達ばかりだが、それだけじゃすまない者たちがいた。

ユーマやエイリークと同世代の少年達だ。

夏季休暇のこの時期、アギのように王国へ帰郷してきた彼らが地元では見ない顔の彼女達に絡んできたのだ。いわゆるナンパである。

特に《中央校》の制服を着たエイリーク達は、西国にあるリーズ学園の付属系列校である《W・リーズ学園》出身の学生にとって羨望と妬みの対象になってもおかしくなかった。

「中には学園都市出身の子もいて、エイリークさんを知る人たちが場を取りなしてくれたので問題なかったのですが」

「そこにファルケの奴か」

アギにポピラが頷いた。

「多分その人です。いきなり西校の制服を着た偉そうな人のグループが割り込んできて、砂喰いがどうだの帝国がどうのって言いながら強引に私達を誘いだしたのです」

「……間違いねぇな」

「エイリークさんだって最初は我慢して穏便に断っていたんです。でもその馬鹿のグループの1人がミサさんの手を引っ張って引き寄せようとしたので」

「まさか」

ポピラが視線を真横に向けるのでユーマ達はそちらの方を見た。

城壁に人がめりこんだ跡が3つもある。

「……アギ」

「遅かった。この国にまで姫さんの犠牲者を出しちまった」

きっと2人が彼女の怒声を聞いたその時だろう。口と同時に手がでたに違いない。

「馬鹿野郎が。……姫さんの被害件数が減ったのは俺達のおかげだって、この前ブソウさんに褒められたばっかだったてのに」

「自警部で表彰までしてくれたのに。夏休みに入ってもう3人も」

「俺たちじゃやっぱり姫さんを止められねぇのか？」

「アギ……」

「畜生……」

「馬鹿ですね」

ユーマ達は、惨劇を止められなかったと己の不甲斐なさを悔やんだ。

悔恨する2人を余所にポピラは話を続けた。

「ミサさんは駆け付けてくれた門番の人に保護してもらいました。怒ったエイリークさんは彼らを一蹴。そのあと最後に残ったリーダーの人が面子を守るためなのかエイリークさんに決闘を申し込みまして」

「蹴散らしたと」

「はい。あの人もランクAだの《鷹狩り》など言ってましたが」

ポピラははっきりと言いきった。

「並のランクAが剣の勝負でエイリークさんに敵うわけないじゃないですか」

エイリークはポピラの支援、つまりスーパーモードなしで圧倒したらしい。

エイリークは《旋風剣》による力押しの印象が強いが、それは身体強化が使えず基本的な攻撃力が不足がちの彼女の唯一の決め技だからでしかない。

彼女の剣士としての本領は高速連続剣技にある。1撃毎の剣速と技と技を繋ぐ速さは学園でもトップクラスなのだ。

エイリークは単純な剣の勝負だけなら学園のエースである《烈火烈風》を相手にしても引けをとらない。

「問題はここからなんですが、エイリークさんがとどめの1撃を放とうとした瞬間、あのアギさんみたいなおじさんがいきなり現れて《旋風剣》を受け止めたんです」

そして今に至る。

エイリークは剣を向けた相手がこの国の王とも知らず、油断なく構えをとった。

一度打ち合わせただけでレヴァンとの力量差を感じ取ることができたのだ。

スーパーモード、もしかすると《昇華斬》が通じるかどうかも怪しいと彼女は判断する。

敵かどうか。判別のつかないままエイリークは口を開いた。

「……何よアンタ。《盾(それ)》、まるでアギみたいじゃない」

「あー違う違う。あいつが俺の真似してんだ。そこんとこは勘違いしないでくれ」

エイリークが発散する怒気を前に平然と答えるレヴァン。

アギを知っている？　それでエイリークの調子が少しだけ狂った。

「誰なのよ、一体」

「親父だよ。こいつらの」

レヴァンは王とは名乗らず、周囲に集まっていた学生、つまりは砂漠の民の子供たちを見渡してそう言った。

続けてレヴァンはエイリークに訊ねる。

「嬢ちゃん。怒ってるとこ悪いが俺に何があったか教えてくれねぇか？」

「なっ！？　どうして」
「俺は騒ぎを『感じて』『跳んで』来たもんだから状況がわかんねぇ。何があった？」
エイリークは驚くしかなかった。
このおっさんは何も知らずに剣の前に飛び込んだのだ。さらには仲介しようとしている。
流石にエイリークもそんな相手に剣を向けるわけにはいかなかった。剣を下ろし、事情を話す。
「……ミサが、アタシの友達がコイツらに怖い目にあわされそうになった。だからアタシは」
レヴァンに庇われた少年をエイリークは睨みつける。
「許さない」
「くっ……」
尻もちをついたままの少年。エイリークに打ち負かされた屈辱の為か、彼は顔を歪ませている。
「……そうか。そいつは嬢ちゃんの友達に悪かった。許さなくていい。ただ俺からも謝らせてくれ」
そう言ってレヴァンは地面に膝をついて頭を下げた。
これにはエイリークはもちろん、周囲に集まっていた少年達も驚きでどよめいた。

「なんでアンタが」
「けじめだよ嬢ちゃん。……ファルケ。それにお前達も謝れ」
レヴァンは頭を上げないまま、背後にいる少年とそのグループに謝罪を促す。
「男だからな。何故こんなことしたかなんて問いはしねぇ。ただ嬢ちゃんたちに手痛い目にあわされるくらい不快な思いをさせたというのなら、けじめだけはつけろ」
「ちょ、ちょっとそこまでは……」
「うるせぇ！」
反発して叫ぶのは、彼に庇われていたファルケという名の少年。
彼が屈辱を感じたのはエイリークに負けたことではない。レヴァンに守られたことの方だったのだ。
「俺は『砂喰い』共と仲良くする女共が気に入らなかっただけだ。こいつらだって『帝国人』である俺達と一緒にいた方がいいんだよ」
「お前、まだそんなこと」
「黙れよ反乱軍。《帝国》を滅ぼすだけで飽き足らず、サヨコ様を誑かして王の座に居座った国賊が。俺は」
仇敵とばかりにファルケは王を睨みつける。
「あんたを絶対にゆるさねぇ」
「……ファルケ」
対してレヴァンは睨む少年と正面から向き合う。

「なんだよ」
「間違えんじゃねぇ。誑かしたんじゃなく俺がサヨコさんラブなんだ！」
「ふ、ふざけんじゃねぇ！！」
「ふざけてねぇ！！　大マジだ」

この場面で王妃への愛を叫ぶ王様。

レヴァンは軽蔑されようがそこだけは譲らなかった。

「……アギ」
「こういう人なんだよ。ほんとに」
「つまり馬鹿なんですね」

呆れるユーマ達はさておき。

ファルケは苛立たしく、もう1度だけ憎悪の目でレヴァンを睨みつけるとそのまま背を向けた。

「ちっ。話にならねぇ。ちょっと俺を助けたくらいでポイント稼いだなんて思うなよ」
「おい。嬢ちゃんへの謝罪はまだ」
「覚えてろ。帝国最後の剣である俺が、いつか必ず……！」
「ファルケ！」

この場から逃げようとするファルケは走り出した。

「待ちなさい！」

エイリークは思わず彼を追いかけようとして、

「たーつーまーきー」

突然発生した竜巻に行く手を阻まれる。

「っ、何よ！　ユーマ、邪魔しないで」
「待って、俺じゃない！　風葉！？」
「むー」

姿を現したちいさな精霊は怒っていた。

謝りもせず逃げたファルケにかちんときたらしい。

エイリークの目の前で竜巻に呑まれたファルケは急上昇、そのまま錐揉み回転しながら急降下。

これは本当にユーマの指示ではなかった。

仲良しのミサに何かあったと聞いた風葉が勝手に報復攻撃をおこなったのだ。

「ミサちーをー、いじめたなー、すぴーん」
「やべっ、砂更！」

ファルケはそのまま地面に叩きつけられる。

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

ドシーン！　ギュルギュル

「……」

ファルケは頭からめりこむようにして腰まで埋まった。

沈黙。この場にいた誰もが彼を襲った災厄に言葉を失う。

「……危なかった。砂更が地面を砂に変えなきゃ追落死してた」

「……坊主、いくらなんでもお前」

「そういう問題？」

ユーマは風葉の凶行に冷や汗をかいた。レヴァンは呆気にとられ、エイリークは怒りのやり場を失ってしまう。

「……はぁ。ユーマまでやっちまったか」

「馬鹿ですね」

こうして不本意にも《精霊使い》もまた、《旋風の剣士》に続いて王国デビュー（？）を果たしたのだった。

＋＋＋

エイリークが倒した少年達やファルケは彼らのグループとは違う他に集まっていた学生達に頼んで近くの診療所へ運んで貰った。

手痛いしっぺ返しを受けた彼らを可哀相に思ったユーマは、一応《癒しの風》をかけておく。

一応騒ぎの収まりをつけた彼らはレヴァンに促されて1度王城の中へ。

城内に入ったユーマはまず、自分の精霊にお説教をした。

「お前な。また勝手に魔法使って、駄目じゃないか」

「だってー、ミサちーがー」

「やり過ぎなんだよ。反省しないならしばらくミサちゃんのクッキーなしだからな」

「あーん」

主人の務めとして風葉の躾を行うユーマ。

やり過ぎなどと言っても彼に説得力はない。

クッキーを取り上げられた風葉はふよふよー、と飛んで行きミサに泣きついた。

「……ミサちー。わたしのー、クッキー……」

「わかってるよ。風葉ちゃんはわたしのために怒ってくれたんだよ

ね。わたしは大丈夫だからクッキーはいつでも焼いてあげるね」
「ミサちゃん、風葉を甘やかさないでよ。でも怪我とかしてないの？」
「うん」
思いのほかミサはけろっとしている。
「掴まれたのは一瞬だったから。リィちゃんが間近で人を吹き飛ばす方が驚いたよ」
「……エイリーク」
「……何よ」
「もしかして過剰防衛だったんじゃ」
「うるさいわね。アタシだけならともかく、ミサとポピラがいる状態で男達に囲まれていたのよ」
ジト目で見るユーマにエイリークはすかさず反論。
「先手を取って場を制さないと2人が何をされたかわからないじゃない」
「それは……そうだけどさ」
「アンタは同じ状況だったらどうするのよ？」
「……砂更で埋めて逃げる」
「ほら」
威張られた。どこか釈然としないユーマ。
「まったく勇ましい嬢ちゃんだ。姉ちゃんに似てねぇな」
ユーマ達の話に入り込んできたのは青バンダナのおっさんことレヴァン。

彼がこの国の王だとエイリーク達はまだ知らされていない。

「そういや誰よ？　この《盾》を使うおじさん。アギの親戚？」

「言っただろ？　親父だって。この国のガキどもはみんな俺の息子で娘さ」

「……何それ？　それにアタシや姉さまを知っているの？」

「まあな。西国で《風邪守の巫女》といや有名じゃねぇか。あの若さで1つの国を支えてんだ。ただの姫さんにできるもんじゃねぇ」

サヨコさん程ではないが良い女だぜ、とレヴァン。

「風森とは最近国交を復旧したばっかでな。ちょっと前に商売の話をしてきたんだが、何故か紫のおちびちゃんに足元掬われていいように買い叩かれちまったよ」

「……商人？」

謎が謎を呼んだ。

あの魔人の義妹は何をしているのだろう、とエイリーク。

結局エイリークはユーマとアギにレヴァンのことを訊いたものの、やはり信じられないようだ。

「王様、って全然らしくないわね」

「そうだね。でも風森にいるおじさんだってこんなんじゃない？」

「父さまと比べないで」

ユーマに言われてエイリークは嫌な顔をした。

夏のこの時期。風森の国王はきっと、城の中庭で雑草と格闘しているであろう。

城の1室にアイリーンを除いたユーマ達5人とレヴァンは集まり、そこに遅れて来たシュリが加わった。

「なぁアギ。城壁に人型ができたんだけど……なにあれ？」
「聞くな。あと気にしない方が身のためだ」
「？」

シュリがこの真相に触れることはなかった。

アギがエイリークに睨まれたので迂闊なことを言えなかったから。

「アイリさんは？」
「アイリーンさんは別の部屋で休ませてるよ。元々暑いの苦手だったから大人しくしてた方がいいみたい」
「とりあえず集まったな。じゃあ、まずは嬢ちゃん達に謝らねぇと」

レヴァンはそう言って、「息子達が迷惑をかけた」と先程の件を謝った。

ただし元々目立つ制服姿で出歩いた彼女達にも非があり、エイリークの過剰防衛のきらいもあった。

だから一応被害者といえるミサが頭を下げる王に恐縮しながら謝

罪を受け入れることで事態を丸く収めることとなった。

「嬢ちゃんは特に自分の立場を理解しておいてくれ。それで一応国の来賓扱いにしてるんだからな」

レヴァンはエイリークへ一応の注意をした。

この国で他国の姫に何かあったら、という話だ。デリケートな国際問題といえる。

もうとっくにその他国のお姫様が、この国の王様に剣を向けてしまっていたりするのだけど。

「何かあったらすぐに呼んでくれ。この国にいる限り俺が『跳んで』きてやるからな」

「……ほんとに『跳んで』来るんだろうなぁ」

ユーマとしてはその『跳ぶ』技の正体を知りたいところだった。

別のことをユーマは訊ねる。

「それでファルケ、だっけ？　エイリーク達に絡んだあいつ等って何なの？」

「あいつか」

答えたのはアギ。ファルケという少年はこの国のアギと同じ世代の少年の中でも割と有名な方だった。

ファルケは《帝国》育ちの少年で《W・リーズ学園》の2年生。エイリークと同じランクAの剣士で西校のエース候補の1人だと言われている。

同じ学校の同世代には随分と幅を利かせてはいるが実力は先程の通り。エイリークの足元にも及ばない。

彼は『帝国人』であることを誇りを持ち、同時にアギのような建国以前からの砂漠の民を見下しているという。

もちろん彼が最も侮蔑するのは《帝国》を滅ぼしたとされるかつて反乱軍、そのリーダーだった今の王である。

「ファルケは《帝国》でも上流階級の家にいたらしい。それで差別意識は強いし今の王国や王様に不満を持ってるんだよ」

「差別」

「『砂食い』ってのは《帝国》に昔からある砂漠の民を指す言葉だ。砂漠の民と《帝国》の昔は省くぜ。学園で習っただろ？」

「そうだね」

ユーマは複雑そうに頷いた。

はじまりは大昔に『帝国貴族』が設けたという階級制度だった。

この階級制度を設けることで歴史的問題になったのは、《帝国》

が帝国国民でさえなかった砂漠の民を『帝国人』であると認め、主張したことだ。

広大な砂漠地帯に集落を形成して点在するだけの砂漠の民に《帝国》が世界各国へ通達したこの主張を政治的な力で覆すことはできなかった。それで砂漠の民は形だけでも《帝国》の庇護を受けたとされ、彼らは３００年以上も《帝国》に従属したと世界各国に認められてしまうことになってしまった。

こうして一般人以下と格付けされた砂漠の民は《帝国》に最下層の地位を持つ『帝国人』であること強要されたのだ。

特権階級を持つことで得られる優越感。

それを満足する為に行われた一部の『帝国人』による砂漠の民への迫害は、それこそレヴァンの世代まで長く続くことになる。

「ここに来る前に集落に寄っただろ？　ああいったところが残ってるのは《門》の中継地点とかの意味合いもあるけど王国に近寄りたくない人がいるからなんだよ。実際に差別や迫害を受けていた世代だからな。じいさんの世代の中にはここは変わらず《帝国》だって言ってるのもいる」

ここまで聞いたユーマは気になったことをアギに訊ねてみる。

「《帝国》から今の体制になったのは7年前だよね？　それじゃアギも子供の頃は」

「俺か？　確かに俺は戦災孤児だが砂漠の民だからって理由でそん

な酷い目には遭ってねぇよ。生活も苦しくなかったぜ」

ユーマは訊いてみて気まずそうだったが、アギは特に気にしていなかった。

「俺達くらいの世代は反乱軍が《帝国》を圧倒しはじめた頃なんだよ。それに反乱軍のリーダーだった王様が《技術交流都市》や他の西国の国々と支援体制を築いてくれていたんだ。おかげで砂漠の民は最低限の生活を保障されていた」

反乱軍の時代からレヴァンの優れた手腕は発揮されていたらしい。

今の王国の国交や流通の基盤もこの頃に築いたものだという。

「むしろ苦しかったのは《帝国》の方だ」

「……そうだな」

アギの話を接いだのはシュリ。

彼は元《帝国》に住んでいた少年だった。

「貴族達の横暴な振る舞いが表沙汰になって各国から孤立してしまった《帝国》。そこに住む俺達は戦争を理由に貴族達からあらゆるものを徴収されて食べる物にも困る生活を送っていたよ」

《帝国》の階級制度で最下層の砂漠の民のすぐ上にいたのは、帝国国民である一般人だ。

彼らは砂漠の民の反乱で階級制度から抜け出したあと、自分達が搾取される側に立たされることで初めて『帝国貴族』の在り方と砂

漠の民の扱いに疑問を持ったのだ。

それは『帝国貴族』が砂漠の地から逃亡する直前の話。彼らは気付くのが余りにも遅かった。

「はっきり言って《帝国》は自滅したんだ。反乱が起きたのも自業自得と言っていい。……砂漠の民の犠牲の上に安穏と暮らしていた俺達も、報復を受けてしょうがない立場だった」

「シュリ君」

「滅ぶのは当然。そうやって諦めて絶望してたんだよ。俺達『帝国人』は」

でも。

シュリの話はこう続く。

「帝都に現れたレヴァイア様、それにサヨコ様が俺達に希望を与えてくれた。砂漠の民も帝国の民も関係ない、同じ砂漠の地に住む皆が家族だって言ってくれて皆が住めるでっかい『家』をここに創ってくれたんだ」

「その『家』つうのはまだ未完成なんだぜ、シュリ」

横から茶々を入れるたのはレヴァン。

「この国はできてまだ7年だ。俺の理想が実現するのはきっと、お前達の次かその次の世代だろう」

「王様……。でも、王様が創ってくれたこの『家』はもう立派な国です。……昔からの因習を断ち切り、誰からも奪わず誰からも奪わ

れることのなく暮らせる、ここは砂漠に住む皆の理想郷、楽園なんだ」
「シュリ」
「だから俺達《帝国》の人間はすんなりこの国を受け入れることができた。なのに」
シュリはアギとは別の、もう1人の幼馴染のことを思う。
「俺は……ファルケがどうしてこの国と砂漠の民を、レヴァイア様を受け入れてくれないのかわからない」
「そういやあいつ、この前会った時は落ち着いてきたと思ったけど、またギスギスしていたな」
「ああ。俺もそう感じた」
「最近か」
レヴァンはシュリとアギのやり取りに何か思うことがあったのだが、特にそのことに触れることはなかった。
「話が随分逸れてるな。とにかく。王である俺が言うのもなんだが、ファルケのような奴もいるしこの国はまだ不安定なところが多い。『王蜥蜴』の件で国を警備する兵の大半が出払っていることもある。外へ出る時は身の回りに気を付けてくれ」
レヴァンはユーマ達に王国を出歩く際の注意を説明した。元々そのつもりで彼は一旦城内へユーマ達を集めたのだ。
「砂除けのローブを被って、なるべく目立たないようにな」
「……わかったわよ」

これはエイリーク。城門前で大立回りを演じたものだから釘を刺されていた。

一通りの国内での注意を説明をしたレヴァンは、次に話を今日の『予定』へと移る。

「でだ。大人しくしろとは言ったが、折角この国に来てもらったのに何もしないのは勿体ねぇ。そんな坊主や嬢ちゃんたちの為、俺は安全も考慮した『砂漠の王国体験学習ツアー』なるものを企画した」
「何それ」
「なんか俺達にこの国の仕事手伝わせるんだってさ」
「ちょっと黙れよな、坊主」

私語は厳禁だと今更なレヴァン。

「それで、まず君達に体験してもらうことは……」
「外？」

レヴァンは城の外、城門の方を指差す。

「この国で使われる建築素材。それを使って先程穴を開けた城壁の補修をやってみよう」
「……は？」
「えー」

レヴァンは都合よくユーマ達を扱おうとして全員からブーイング

を受けるのだった。

「じゃあ城壁の修繕費、風森へ請求してもいいか？」

「……やるわ」

エイリークが1番に折れた。

＋＋＋

3－03d　砂漠の王国4（前書き）

砂漠の王国の体験学習ツアー

3－03d　砂漠の王国4

＋＋＋

というわけで。

エイリークが破砕した城壁の修繕からはじまった、ユーマ達の『砂漠の王国体験学習ツアー』。

「準備はできたでしょうか？」
「はい。着替えてきました」

案内役は王様に代わって国王付き宰相補佐のミハエル。

レヴァンは国の子供たちのお誕生会の準備や国の警備があると、彼を呼び寄せ少年達を押し付けたのだ。

その押し付けられた当人は予想通りなのか溜息さえつかなかったけど。

「レヴァン様。顔が腫れてしまっています。子供たちの前にでるのにそれはどうかと」
「しまった。ゴロの奴がいい右を持ってたんでな。あの気迫の籠ったやつは効いたぜ」
「……仕方ないですね」

そう言ってミハエルが王様へ差し出したのは、もっさりとした白いひげと赤い帽子。それと靴下。

「ミハエル、なんだこりゃ？」

「《精霊紀》の時代にいたという冬の妖精を模したものです。子供たちに贈り物を届けるそうですよ」

これを聞いたユーマはクリスマスとサンタクロースを連想した。

「今は夏ではありますが、余興としてお誕生会はこの妖精に扮装して腫れた顔を隠してはいかがでしょうか？」

「……流石だぜ。お前」

レヴァンは喜んで付けひげを付け、どこかへ『跳んで』消えてしまった。

「……どこへ行かれたのでしょうか？　お誕生会は昼過ぎからなんですけど」

「ミハエルさん……」

あの王様も変だけど、このスーツ姿の青年もどこかおかしいと思うユーマ。

閑話休題。

オーバーオールの作業着に着替えたユーマ達は城門前に集合。ミハエルから修繕作業の説明を受ける。

用意されたのは袋詰めされた粉らしきものと大きなバケツ。他にへらやこて、棒、柄杓といった道具の数々。

「ご存知の方もいると思いますが、この袋の粉は速乾性の凝固剤です。これに砂漠の砂と水を練り、型に流し込んで乾燥、固めたものを我々は建築物などに利用します」

「セメント？」

ユーマの呟きはミハエルは聞こえなかったようだ。彼はそのまま解説に入る。

「説明しますと、この凝固剤はレヴァン様が反乱軍時代に《技術交流都市》の協力を得て開発されたものです。実用化されて１０年以上経ちまして、今では多くの国へ砂漠の砂と共に出荷され使われております。学園都市にある校舎もこれを利用した建物が増えてきましたね」

今からやる作業は砂漠の砂と凝固剤を水で練り合わせ、それで破損部分を補填する充填材を作るという。

本来は大型の装置を使うところ、今回は体験学習ということで充填材を手作業で作ることになった。

「ではまず外から砂を集めて運んできてもらいましょうか。力仕事ですから男の子が頑張ってくださいね」

「ユーマ、頼む」

「砂更」

ユーマは砂の精霊に頼み、周囲の砂を操ってかき集めた。

すぐに小山ほどの砂山が出来上がる。

「このくらいで足りるかな」

「……便利ですね」

次に凝固剤と砂を混ぜる作業。

各々がバケツの中に決められた比率の砂と凝固剤を入れ、専用の撹拌棒で混ぜ合わせる。

ユーマが見るに凝固剤はどうやらセメントとは違うようだ。粉の色は砂漠の砂より白っぽく砕いたガラスのようにキラキラしている。

「塊はよく砕いてしっかり撹拌して下さい。この作業を怠ると強度に影響します」

「次は水だな。ユーマ、その辺に水場があるから先に汲みに行ってくれ」

「わかった」

砂更のおかげでいち早く撹拌作業を終えたユーマ（彼は何もしていない）は水の用意に近くの水場へ向かう。

ユーマは何も考えずに水場にあった『蛇口』を捻り、水をバケツに注いだところで。

「うわっ！？」

驚いた。

「どうした？」
「アギ。み、水が出てる。蛇口から」
「……何言ってんだ？」

水場にあったのは、井戸や溜め池などではなく横1列に並んだたくさんの蛇口。

ユーマが知っているものの中で1番近いのは小学校にある手洗い場や足洗い場のようなやつだ。

砂漠の国に蛇口。

偏見かもしれないが、ユーマにはこれがオーバーテクノロジーのような異質なものに感じる。

蛇口の口の中なんて散水しないようにギザギザの星型にもなってるし。

「そりゃ出るだろ。学園のと同じじゃねぇか」
「違うって。学園のは備え付けの給水タンクから水を落とすやつじゃないか。でも周りにはタンクみたいなのないし、これってまるで水道が」
「あるぜ。水道設備」
「……へ？」
「あるんだよ地下に。《西の大帝国》時代の用水路なんかじゃないすげーのが。この国の周辺どころか大砂漠の方まで網のように張り巡らされてんだよ」

ユーマは絶句した。

「この水道が砂漠地帯の地下に流れる水脈とつながってるらしくてな、王様が発見して使えるようにしたんだ。詳しいことはミハエルさんにでも訊いてくれ」
「発見って……レヴァンさんって何者？」
「そういう人なんですよ」
言ったのはミハエル。アギに続いて水を汲みに来たらしい。
「ミハエルさん」
「レヴァン様はこの砂漠の地に何度も奇跡を起こしたのです。砂を資源として利用したと思えば水を掘り起こし国を潤わせました。物資の流通だってレヴァン様が個人で築いた人間関係を基盤に成り立っているのです」
ミハエルは誇らしそうに語った。
「地下の水道網もそう。レヴァン様は帝国の者以上に大帝国の遺産に可能性を見出し、正しく扱って見せた。だからこそ陛下はあの方に『レヴァイア』の名を託されたのでしょう。誰よりもこの砂漠の国を想い、砂の地を踏みしめてきた。そしてこれからも駆け抜ける方ですから」
「語るね。ミハエルさん。流石は『国王付き』」
アギが茶化したので「いえいえ」と彼は謙遜した。
「君の王様好きも大したものですよ？　まあ、レヴァン様は普段があんな方なんでお仕えするのは大変なんですけど」
ミハエルの本気かもしれない冗談にアギもユーマも笑った。

「水もバケツに溜まりましたね。では行きましょうか」

そう言ってミハエルはユーマの倍以上の容積のある特大バケツを左腕1本で軽々と運んで行った。

「……なんであんなゴミ入れるポリバケツみたいなやつに水一杯に入れて運べるの？」

しかも片腕。

「ミハエルさんはただの宰相補佐官じゃねぇんだよ。なんせ『国王付き』だからな」

「強化系の術式も使ってなかったよね？」

アギの説明では納得できなかった。

ユーマは何となく自分のバケツに汲んだ水を見つめた。

地下には浄化設備まであるのだろうか。水は透き通っている。

「俺、この国の人達は水を半日くらいかけてオアシスへ汲みに行ってるイメージがあったよ」

「はぁ？　《門》もあるのにそれいつの時代の話だよ。行こうぜ」

転移門の話を聞くと、尚更異世界を意識するユーマだった。

戻って修繕作業の続きを行う。

今度は水を加えて砂と凝固剤を更に混ぜ、練り込む。

手作業でやるとこれが1番難しい。特に水加減。

加える水の量が少ないと十分に砂を練ることができず、逆に水の量が多いと泥のようになって最後の充填作業が難しくなるのだ。

「少しずつ水を加えるのがコツです。ダマを残したままだとやはり固まった時に脆い部分ができてしまい、強度が格段と落ちてしまいます」

「水が入ると砂じゃなくなるんだよな」

砂更は砂や粉状のものしか操ることができない。ここはユーマも真面目に手作業で行った。

余談だがこの作業はユーマ達の人間性が表れることになった。

まずアギは目分量で水を入れ過ぎ、あとから砂と凝固剤を加えまた水を加えて……と何度もいい加減を繰り返して大量の砂を練っている。シュリは練る作業が雑でバケツの底の方が混ざっていない。

「小麦粉で生地作ってるみたいだね」

「こういった作業は専門外なんですけど」

これはミサとポピラ。彼女達はお試し程度にボウルサイズの器で

砂を練っている。

料理間隔で砂をサクサクとへらで混ぜ合わせるミサ。少量とはいえできたペースト状のものは理想の練り具合。

ポピラもミサと同様の出来。慎重で丁寧な作業は技術士の面目躍如といったところ。

一方でエイリークは。

「まどろっこしいわね。……えいっ」

《旋風剣》の竜巻を利用して一気に混ぜ合わせようとしたところ、力の加減に失敗してバケツの中身を周囲に飛び散らせた。

ちょっとした大惨事。ユーマも被害を被った。

「ううっ。何よ、もう！」

「……なにしてんの。でもそのアイデアはいただき」

ガンプレートを抜いた。それを見てギョッと目を開くのはミハエル。

そんなミハエルに気付かず、ユーマはバケツの中にガンプレート突っ込んでイメージ。エイリークのように竜巻の回転で混ぜ合わせようとする。

ポイントはエイリークとは違いユーマには『ハンドミキサー』のイメージがあることだ。

そのイメージで《補強》したガンプレートの小さな竜巻は高速でスムーズに砂と水を混ぜ合わせる。

「できた！　ってなんか膨らんだしクリームっぽい」

「練り過ぎです」

とミハエル。

彼が言うにはユーマが作ったクリーム状のそれは空気を多く含み過ぎており、乾くと全体的に極小の気泡が無数にある、軽くて脆い全く別のものができあがるという。

発泡材？

ユーマ、やっぱり何をしてもやり過ぎるきらいがある。

「失敗なんだ」

「いえ。これはこれで完成です。強度の問題で構造物には向いていませんが、同じ体積で比較して従来のものより3分の1以下の重さになるのです。煉瓦や植木鉢のような焼物の代わりを作るのに向いています。石材の補修、接着剤としても使われますね」

この素材は軽量というのが何よりの強みであり、現在強度問題を改善した新素材が研究中だという。

「へぇ」

「君のは修繕した箇所の仕上げに塗りましょう。……しかし手作業でこれはできるものではないんですけどね」

ミハエルはユーマと砂クリーム、それとガンプレートを見て苦笑

した。

「やはりあれは……」

最後に破損した城壁の穴に作った充填材を詰め、ユーマの作ったクリームを表面に塗り込んで修繕作業は完了。

この作業ではアギの《盾》が活躍。

素人がこてで表面を均せばどうしたってムラができるところ、アギの自在に変化する《盾》を大きなこてとして使い1度に壁を均したのだ。

しっかりと練り込まれた充填材は程良い固さであり、垂直な壁面に塗り込んでも垂れ落ちることはなかった。

ミハエルは作業を終えたユーマを労う。

「お疲れさまでした。これに充填材が乾いたあと、日焼けによる劣化を防ぐ対候性塗料を塗って完成です」

「これってすぐ乾くのですか？」

「結構な量を詰めましたので完全に乾燥するのに最低3日はかかりますね。なので今日はここまでです」

「ふう。そんなに時間はかからなかったけど、やっぱりこういう作業は大変だ」

「そうね」

エイリークが同意したところでユーマはもう一言。

「だからエイリークも修理する人のことを考えて《旋風剣》で吹き飛ばしたり、叩きつけたりする真似は控えるようにね」

「そうだぜ。姫さん」

これはアギだけでなくミサもポピラもユーマに同意してくれる。

「うっ。……わかったわよ」

よい教訓になりましたとさ。

＋＋＋

《砂漠の王国》の基盤となったのは元《帝国》の帝都である。

昔から砂漠地帯で資源といえば、遺跡から発掘されるオーパーツと呼べるものか《西の大砂漠》付近で採掘できる魔石のような魔力資源くらい。基本的に資源は乏しい。

特に戦後は困窮を極める状態。新しい国を1から創るよりも帝都を再開発する方がよほど経済的だった。

『帝国貴族』により荒れ果てた帝都は新王レヴァイアの下で復興、王都と名を変えて国の中心に据えられると、《帝国》であったその

都市は王国の《再開発地区》と呼ばれるようになった。

それで《砂漠の王国》の王城は《帝国》のものそのままであり、場所は当然再開発地区にある。城下町ともいえる住居区画にはシュリ少年の家もある。

再開発地区。民を家族、国を家と言う王の言葉を借りるならば、そこは元皇帝より譲られた『借家』を改築した場所である。

また、王の理想とする『マイホーム』は王国の《新開発地区》にて現在も開発を進めている。

レヴァイア王が計画した帝都の再開発、そのノウハウを活かして進められる新開発地区。

それらの計画を構築するものは、大災厄を免れ砂漠の地下に遺されていた水道設備をはじめとするかつての《西の大帝国》の遺産、その技術を再利用した『あたらしい』ものばかりであった。

王の提示したアイデアの数々は当時の《技術交流都市》の技術士、建築士たちが驚愕したものだ。

大帝国の技術の再現。その魅力に惹かれた彼らは喜んでレヴァイア王に協力を誓い、共に国を興すことになる。

西国南部にある《技術交流都市》。この国は王国が建ちあがる前からの同盟国であり、この国の技術士達はレヴァイア王が反乱軍に

いた頃からの盟友達でもあった。

＋＋＋

城壁の修繕を終えたユーマ達が次に行くのは王国の《新開発地区》。

ミハエルの案内で見学することになった。

「そこでは何をするのですか？」

「いえいえ。君たちに工事を手伝わせるわけにはいきませんから。ここは新開区の見学だけです。ああ。工事の皆さん達の昼食の準備は手伝ってもらいますね」

この国の伝統料理を体験しましょう、とミハエル。

「では新開区に着く前に少しだけ説明を。この国、ひいては以前の《帝国》は《西の大帝国》の跡地に建国されました。《帝国》は大帝国の首都を基盤に国を興したと言われていましたが」

「知っています。ここは大帝国の一都市でしかなかったんですね」

「その通りです。流石はエルド先生の娘さん」

「……母は関係ありません。学園で学ぶことです」

「失礼しました」

不機嫌になったポピラにすかさずミハエルは頭を下げる。

「……取り直して話の続きを。ポピラさんの言う通りこの国は大帝国のほんの一部でしかないという事実が数年前にわかりました。こ

れを発見されたのも実はレヴァン様です」
「はー。レヴァンさんってほんと凄い人なんだね」
「ええ。ではレヴァン様がどうやってこの事実を突き止めたのかわかりますか？」

少年達に訊ねるミハエル。

それでユーマは先程のアギとの会話を思い出した。

「……地下の水道？」
「その通りです」

ミハエルは最近の学生は優秀ですね、と感心した。

「レヴァン様が地下で発見された大帝国の水道網。これは歴史的発見でした。この水道を調べることで大帝国の規模を測ることができたのです」

水道網の配置、枝分かれする配管の大小から大帝国の首都は別の所にあるとわかったらしい。

「調査の結果から推測すると、大帝国は人口数千万人という今の時代では信じられない規模の国だったようです。その首都は《西の大砂漠》に存在したと言われています。流石にあの場所を調査するのは困難なので真実は未だ不明なのですが」
「大砂漠ね……ユーマ、何か知ってる？」
「知ってるって、あの時は生き残ることに必死で」

エイリークの問いにユーマは何を思い出したのか、青い顔をして首を振る。

「あ。でも１０回くらい蟻地獄に落ちた所に神殿らしいとこがあったな」
「……え？」
全員がユーマに注目する。
「大砂漠って地下に蟻の巣みたいに空洞ばっかりあって、その１ヶ所にでっかい湖があったんだ。水が飲みたくて近づいたらそこででっかい海蛇に追いかけられてさ、そしたら今度は湖の中に落ちて」
「……アンタ、なんで生きてるの？」
「アギ、彼は一体」
「こいつ、大砂漠を横断してるんです。砂の精霊はその時に拾ったそうですよ」
「はぁ！？」
「何と無謀な」
初めて聞いたシュリとミハエルは開いた口が塞がらない。
「……湖の神殿。海蛇はきっと眷族の守護獣。だとすると……」
「ミハエルさん？」
「１つ訊ねますが、その神殿に大帝国のものを示すなにかありませんでしたか？」
「えっ？　神殿っていってもあくまで『らしい』です。廃墟だったんで」
でも、とユーマ。
「砂更が言うにはそこは精霊を奉る祭壇があったそうです。その精

霊が何なのかは教えてくれなかったけど」

精霊の知識を授かる事ができるのは《精霊使い》の特性のひとつ。

ただしその能力は使い手の力量に応じるものであり、今のユーマは砂更から詳しいことを聞きだすことはできなかった。

「……成程。大変興味深いお話でした。……話を戻しましょう」

ミハエルは王国の《再開発地区》、それと《新開発地区》のことを説明した。

「再開区はもうご覧になりましたね。帝都を再建したここの街並みは《帝国》のそれとそう変わりません。《帝国》との大きな違いはレヴァン様が発見した地下水道を使えるようにしたことです。ただ、家屋のある場所を掘るわけに行かなかったので国中に水場を設置しているわけです」

「あの蛇口の列か」

「ええ。本当は家一軒毎に水道を引っ張りたいのですが、現段階で実現は難しいですね。元々あった都市に次々と新しいものを取り入れたので街の景観は全体的に整合性がない所も見られます」

昔からの家屋の隙間に入り込んだ砂色の四角い建物。これはきっと例の凝固剤と砂で作ったものだろう。

「元の帝国民に砂漠の民、それから都市開発や遺跡の研究にやってきた他国の技術士たちなど、この国は数年でたくさんの人を受け入れました。それに合わせて再開区は住居設備の拡大を図っています」

「それじゃあ……あの横長でたくさんある建物は集合住宅？」

「そうですね」

「何それ？」

エイリークが訊ねると、学園都市の寮みたいなものだとユーマは答えた。

「建国当時は資金不足なものでその時から名残ですね。まあこの国では共有設備が充実してますので個室として使われる住居は概ね好評です。あと元々あった一軒家でも部屋を間借りして一緒に暮らしてる人もいます」

「ルーム、いやホームシェア？」

「俺とシュリみたいにな」

「お前は家に飯食いに来てるだけじゃないか」

「ははは。レヴァン様もそうですね」

笑うミハエル。

「変わった国ね」

「お国柄ですよその辺りは。この国の者は皆が家族。どこの国のどの家族だって１つの家にそれなりの折り合いを以て共に暮らしているはずです。この国だって同じようにして成り立つのです」

そう言われても王国の在り方に違和感があるのだろう。エイリークは自分の故郷と比べて難しい顔をした。

「……だからかな」

ユーマはファルケがこの国に反発していたことを思い出し、そう呟いた。

受け入れられず、馴染めないのだと。

「それにしてもこの国の、再開発地区でしたか。ここはあなたの言うとおり以前の街並みに色々とくっつけた雑多な印象を受けます。新開発地区はどうなのでしょうか」
「もちろん。新開区はその辺を踏まえて都市計画を企てています。でも新開区の凄いところは一目ではわからないでしょうね」

ミハエルはポピラにそう答え、先へ進んだ。

＋＋＋

王国の新開発地区は再開発地区、つまり今の王国の隣にある。

要するにここは王国を拡大するように新たな都市を建設しているのだ。

「どうです？」
「どう、っていわれても」

よくわからない。

計画されたと思われる整然とした街路。でも建物は殆どが未完成で更地ばかり。その割に工事で多くの人が賑わっている。

完成したらきっと素晴らしい街になるだろうと思う。でもそれはきっと『すっきりした再開発地区』といった街だろう。

ミハエルの言う通り、新開発地区の凄さはユーマ達にはわからなかった。

「新開発地区は大帝国にあった1つの都市の『基礎』を掘り起こし、その上に新たな都市を建設しています。地下の水道網を元に街の区画を決めてもいます。もしかすると完成すれば大帝国の街並みを再現できるかもしれませんね」

「基礎？」

「むき出しになっている場所もありますからそちらへ行きましょう」

移動する一同。

向かった先で見たものに1番驚いたのはユーマだった。

「？　この『床』もあの砂で作ったやつ？」

「違う。でもこれって……まさかコンクリートじゃ」

砂地を深く掘り起こして露わになっているのは、石のような素材でできた白灰色の床。

接ぎ目もないそれが区画の1面に広がっている。

「これが大帝国の都市の基礎？　……いや。砂更！」

ユーマは砂更に砂を通してこの床の『下』を探らせた。

「……」

「……えっ？」

しかし、そんなことをせずとも砂更はユーマに答えを伝えた。

この《西の大砂漠》にいた砂の精霊は、《西の大帝国》を何よりも知っているから。

この下に何があるのかも精霊は知っている。

「ユーマ？」

「……シェルターだ。このコンクリート層からもう2階くらい下の地下に大帝国時代の避難施設があったんだ」

砂更の伝えた真実にユーマは愕然とした。ここ一帯がすべて地下シェルターだったのだ。

これほどの設備を創る技術を持ってさえも大帝国の人たちは……

「……ミハエルさん、アギ。ここの地下って」

「では皆さんをご案内しましょう」

ミハエルはそう言った。

これは体験学習ツアーのメインイベントだと。

「レヴァン様が水道網と共に発見した大帝国のもう1つの遺産。それを元に開発しているのがここの地下都市です」

＋＋＋

3－03d　砂漠の王国4（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

《砂漠の王国》の地下都市。そこから《西の大帝国》の過去の一端を知ることになるユーマ達。

まだまだ続く体験学習ツアー。その途中でユーマはファルケと衝突し、レヴァイア王と2人で話をすることになる。

次回「帝国の影」

「見てろ。俺達は……帝国を取り戻す」

「こいつはな。悪魔の武器だ」

３－０４ａ　帝国の影　前（前書き）

久しぶりのアイリーン。事件は後編で

3－04a　帝国の影　前

＋＋＋

昼過ぎ。時間でいえば午後3時といったところ。

再開発地区へ戻ったユーマは熱射病に倒れたアイリーンの見舞いに1人王城へ向かった。

入城して彼女が休んでいるという部屋の前に立つ。

お約束だと迂闊にドアを開けて実は着替え中でした「きゃー」といったラブコメ的展開が予想されるが、生憎彼はこの手のパターンを回避できる少年だった。

ドアのノックを忘れずに入室の確認もとる。

「アイリさん。見舞いに来たよ。入ってもいい？」

「どうぞ」

「失礼しまー……うわっ！」

驚いた。

別に着替え中じゃなかったけど。

「ユーマさん？」

「……アイリさん。暇なのはわかるけど」

ユーマは非難する声をあげた。

「こんな時に夏休みの課題をやるなんて、駄目じゃないか！」

「……怒っている意味がわからないのですけど」

ベッドの上に身を起こして、ノートとペンを手にしていた彼女はきょとんとしている。

「宿題は期限ギリギリまで追い込んで一気にやるのが醍醐味なんだ。それなのに」

「貴方は時に妙なこだわりを持ちますね。違いますよ。ほら」

アイリーンはノートを開きユーマに見せた。

「えっ、これってＩＭの構築式？　しかもこの字はティムスの」

「ええ。ポピラさんからお借りしました」

ＩＭ（イマジン・モジュール）とはゲンソウ術を使う際の明確なイメージ構築、それと汎用性を持たせる為に作る規格概念のこと。

大まかに例えれば、ＩＭの構築式とは「火＝赤い、明るい、熱い、燃える」などといった性質のイメージを事細やかに書き込んだものだ。

この情報の塊ともいえるＩＭを術者のイメージに付与させ、ゲンソウ術の発動と再現を補助するアイテムがブースター（増幅器）である。

「これはエルド兄妹の研究書です。ユーマさんの使う術式をＩＭ化したものが書かれています」
「俺の？　ということはガンプレートの」
「ええ。以前ユーマさんは新型ブースターの性能テストをしていましたね。あの時のです」

以前ユーマはティムスと一緒に人を集め、実戦形式で《レプリカ２》の性能テストをしていたことがある。

その時ティムスが記録していたのがユーマがガンプレートで放つ《ストーム・ブラスト》のような魔法弾と、《風刃ブーメラン》のような既存術式に変化を与える《補強》イメージの詳細だった。

尚、このデータを元に特定の術式発動に特化した『インスタント仕様』のカートリッジが創られており、ポピラはこれを複数使い分けることでユーマのように《レプリカ２》を扱うことができる。

「《補強》は基本イメージである《幻想》に変化を付与する《幻操》の基本。貴方のそれを学ぶことで私は《氷晶術》からの派生術式を考えていたんです」
「へぇ」

相変わらず魔術に熱心なお姫様である。

「この前披露した《氷晶樹》だってそうですよ。ユーマさんのガンプレートを参考にしてるのです」
「あれが？　あれに１番近いのは……スプリットホーミングレーザー？」

以前ユーマはそれをイメージして《水鉄砲》を撃った事がある。

それは『敵に向かって』『枝分かれしながら』『まっすぐ伸びる』といった単純なイメージで既存術式を《補強》したもの。

ユーマはアニメやゲームの映像としての明確なイメージがあるので、ゲンソウ術として容易に再現可能ではあるが、他の術者がこれを再現しようとするとそうはいかない。

ノートを見ると分裂するタイミングと枝分かれする回数や本数、射程距離などの詳細が構築式として書き込まれていた。

「でもあれって威力も拡散するから牽制技にしかならなかったんだよな」

「私は刺突貫通攻撃にして威力を得ることにしましたが、ユーマさんだったら火や雷の属性で延焼や感電を狙ってもいいのでは？」

「いや。俺はその2つの属性を飛び道具に使うと威力がガタ落ちするんだ。拡散なんてもってのほかで《スタンガン》のように至近距離で使うか《フレイム・ブラスト》みたいに風葉の魔法と併用しないと」

「成程」

しばらくノートを見ながらあれこれと新術式のアイデアについて話し合う2人。

会話が弾んでいたところ、アイリーンはふと考えた。

個室に年頃の少年と少女が2人きり。

なのに会話に全然色気がない。

（……私もエイリィとそんなに変わらないのかも）

どうも姫どころか女の子らしくない。

彼女はノートを閉じた。

「アイリさん？　もういいの？」

「……ええ。まだ体調が良くないので」

いつもなら最低1時間は付き合わされる魔術話。

それをアイリーンの方から打ち切られて、ユーマは本当に体調が悪いんだなと思った。

「そっか。熱射病って確か高熱で体温調節機能がおかしくなるんだよね。熱ある？　お昼食べた？」

「少しだけ。今の状態だとぼんやりして魔術は使えそうにないです」

「……危ないね。風葉を呼び戻すから護衛につける？」

「大丈夫ですよ」

気を遣われるのは素直に嬉しいと思うアイリーン。

「そう言えばユーマさん1人ですか？　ウインディさん達は」

「あとから来ると思うよ。今王国の体験学習なんてやってるんだけど、途中からみんなバラバラになって行動してるんだ」

王国の地下都市を見学したあと、ユーマ達は国営の食堂で、工事の人たちの昼食の準備と給仕を手伝いをしてそのまま昼休みをとった。

午後からは自由行動。ユーマ達はレヴァンやミハエルの計らいで、予め用意された見学先を好きに選んで体験学習できるようにしてもらっていた。

ユーマは一通り仕事終えたので集合場所にしていたアイリーンの下へ一足先に来たという。

「皆さんはどちらへ？」

「えーと。まずポピラが王立研究所だったかな」

王立研究所とは大帝国の遺跡発掘とその技術解析を主に研究している場所だ。

《技術交流都市》とは技術提携しており西国でも最先端の技術研究所の１つとしても有名。

「そこに『リュガキカ丸』を預かってもらってるから、舟のデータ採取と学園にいるティムスの所へ送り返す手続きをしてる」

風葉がポピラの護衛についてるという。

＋＋＋

王立研究所、整備工場。

ここは研究所でも工事で使う撹拌器や破砕器などの装置や馬車のような乗り物、兵士用の装備、大型調理器具などあらゆるものの修理点検を行う場所である。

ポピラはその一画に据え置きされた舟をやや呆然と眺めていた。

「……あの人達は『王蜥蜴』を相手に一体どんなを立ち回りをしたのでしょうか？」

無残に破壊された赤い衝角。フレームの歪んだ船体。

外装の表面は熱砂との摩耗で融けた形跡がある。通常航海では問題なかったので戦闘時にどれ程のスピードで砂地を走らせていたというのか。

原型を留めているのは、偏に兄ティムスがユーマの無茶な運用を想定した構造計算を行っていたおかげだとポピラは思う。

気絶していたとはいえこんな状態の舟の中にいたこと思い出すと今でもぞっとしない。

「大丈夫ですかー？」

「……はい。私は大丈夫です。風葉ちゃん」

ポケットから這い出て心配するともだちに、ポピラはそっと微笑み頭を撫でた。

風葉に癒されたポピラは気を取り直して作業をはじめた。

舟のデータ採取は、学園に送り届けさえすればティムスが《解読》で一気にやってしまうだろう。だけど彼は多忙の身だ。

休暇をくれた兄の為に、レポートくらいは作成しておこうとポピラは思いここへ来たのだった。

「戦闘データのレポートはミツルギさんにお願いしましょう。エイリークさん達にもアンケートをとるとして、私は破損状況のチェックを……」

「すげーな。こいつで『王蜥蜴』とやりあったってか」

突然現れたのは、青バンダナの白い付けひげをした王様。

しかも舟の中から。

「酷ぇ外見の割に中はしっかりしてる。随分と頑丈だったんだな」

「……」

「ったく、最近の学生は贅沢でいい趣味してるぜ。小型の砂上船なんてガキの秘密基地にしちゃあ立派すぎる」

「……どうして？」

舟の中にいたのでしょうか？

あと……ひげ？

疑問に思うポピラ。

レヴァンはポピラを見つけると、呆然としている彼女にも構わず声をかけた。

「お。みつあみの嬢ちゃん。よかったらうちの奴らにこいつ触らせてもいいか？　嬢ちゃんにもここの整備器具や人を貸し出すからさ」

「……はぁ。それは私の手伝いをして下さるのならこちらも助かりますけど」

「よっしゃ。おいおめーら、嬢ちゃんから許可が出たぞ」

王の一声でおおーっ、と歓声を上げ、舟に群がって張り付く技術士たち。

「この折り畳み式のマストには帆が巻かれている？　うおっ、レバーを回すだけで帆が張れるのか！？」

「根元を見ろよ。こいつは多分ギアボックスだ。帆の向きを変える際の負荷をこれで軽減させてるんだぜ」

「まさか《機巧術》も取り込んでるのか？」

「《建築士》の奴らも呼んで来い。コンパクトなギャレーといい、キャビンのデザインも凄いぞ」

「外装は錬金術を施してるな。付与された耐熱、耐摩耗性能は……」

「水が出るぞー！」

「「「何だって！？」」」

白熱する技術士達。戸惑うのはポピラ。

「……あのう」

「なーに。悪いようにはしねぇ。学園都市の技術が珍しいだけさ」

そう言うレヴァン自身が珍しいおもちゃを見るように楽しそうであったが。

心の中では王国でも作ろうと考えているに違いない。

「……はぁ」

「嬢ちゃんはどうする？　データ取りならうちの野郎共が喜んでやると思うが」

「……」

「研究所の中でも見学するかい？」

「そうですね」

ここの研究所は遺跡から採掘された『機械』を取り扱っていたはずだ。

ポピラはその資料を兄のお土産にしようと整備工場をあとにした。

＋＋＋

「ウインディさんは？」

「ミサちゃんと一緒に食堂街に残ったよ」

エイリークとミサは夕食の仕込みと、遅めの昼食や休憩に来たお客の給仕を手伝っているらしい。

「朝にちょっと揉め事があってね。エイリークはミサちゃんを1人にしておけなかったみたい。ミサちゃんはミサちゃんでこれを機会

にエイリークに包丁の使い方とかを教えるって張り切っていたよ」
「あの2人らしいです」
アイリーンにとっても幼馴染である2人。
彼女達のやりとりを想像してアイリーンは微笑んだ。
「でも、ミサさんはともかくウインディさんが料理に給仕というのは心配ですね」
「そう？　料理は別としてエイリークは給仕は得意だよ。学園でも喫茶店の『ウェイター』よくしてるし」
「……お客さんを吹き飛ばしたりしてませんか？」
「多分」
大丈夫だと信じておく。
＋＋＋
ユーマ達の心配は杞憂であった。
エイリークは今、細剣の代わりに泡だて器を持ち、大量のクリームを相手に格闘している。
「リィちゃん。クリームまだ？　こっちの生地はもう焼きあがっちゃったよ」
「ちょっと待ちなさい」
ひたすらクリームを作るエイリーク。かれこれもう1時間は泡だ

て器を握っている。

2人は最初食堂の給仕を手伝っていたのだが、急遽子供たちの合同お誕生会の準備に駆り出されていたのだった。

とにかく大量の焼き菓子を作らなければならないらしい。おばさん達に混ざっておまんじゅうのようなケーキを分担作業で作っているのだが、単純作業というのがまた辛かった。

甘いものは決して嫌いでないエイリークだって、ずっと甘い匂いが籠った部屋に軟禁されれば胸やけして嫌気がさしてしまう。

「まだ足りないの、クリーム」

「うん。この国のお誕生会って月に1度のこどものお祭りなんだって。それで国中の子にお菓子をあげてるみたい」

「一体いくつ作ればいいのよっ！」

剣ならば何時間も振り続けると言うエイリークも勝手が違うのか、泡だて器を持つ腕がぱんぱんになってもううんざり。

エイリークは泡だて器を睨みつけ、考える。

「リィちゃん？」

「……そうよ。ユーマのあれを応用すれば……」

《旋風剣》を発動。城壁の修繕をしていた時を思い出し、泡だて器に纏わせた竜巻がミキサーのように高速回転。

それを見たミサが慌てだした。

「よし。これで一気に」
「リィちゃん!?　ちょっとまって」
「いけぇっ！」

エイリークは構わず、クリームが一杯入ったボウルの中に泡だて器を突き刺す。

「きゃあぁぁぁぁ!?」

当然固定されていなかったボウルは泡だて器の竜巻に弾き飛ばされ、部屋中にクリームを飛び散らせた。

「……リィちゃーん……」
「もう……何よ!!」

自爆して頭からクリームを被ったエイリークは、やり場のない怒りに叫ぶしかなかった。

＋＋＋

一方その頃。

「ちびっこどもー。サヨコさんから誕生日プレゼントだぞー」

子供たちのお誕生会。サンタルックで突然現れ、プレゼントを配

るのはこの国の王様その人。

「おおさまー」
「おひげだー。あかーい」
「「「わー」」」

レヴァンは靴下に入れたプレゼントを群がる子供たち1人1人に配っている。

この王様、子供にも人気がある。

「おうさまー。どうしてきょうはおひげなの？」
「あおくないのー？」
「ふっ。それはな、今日の俺は王様じゃないからだ」
「それじゃあ、レヴァイアさまはなにものなのー？」

レヴァンはお菓子を口いっぱいに頬張る子供たちに向かって、真顔で答えた。

「今日の俺は、サヨコさんの愛（プレゼント）を届ける妖精さんなのさ！」
「「「……」」」

王様、大マジ。

「きゃあー」
「きもーい」
「やっぱりおうさまだー」

無邪気にはしゃぐ子供たち。

嫌っているようではないが、時折不敬罪になりそうな酷いことを自称妖精さんに言っている気がする。

それにしても『やっぱり』とは、この国の王様は子供たちにまでどういう認識をされているのだろうか？

「ねー。さよこさまはー？」
「じっかにかえったてほんとう？」
「おうさま、さよこさまににげられちゃったの？」
「なにぃ！？」

王妃様がお誕生会に来れないことを知ると、子供たちは大騒ぎ。

実は国母サヨコは王様以上に人気があるのだ。

「やだー。さよこさまー」
「レヴァンさま。げんきだして」
「さよこさまをはなしちゃだめだよー」
「まけないでおうさま。がんばれー」

何故かレヴァンは慰められた。

「よかったですねレヴァン様。プレゼントは子供たちも大喜びです」

「そうだな。……ミハエル」
「何でしょう？」
「今日も暑いな」
「……あまりお気になさらずに」
汗が目に染みた王様だったりする。
＋＋＋
「あとアギはシュリ君と一緒に近衛隊の兵舎に顔見せに行ってるよ」
「ユーマさんは何をしていたのですか？」
「俺？　俺はほら、砂更がいるから最初採掘工事の手伝いをしようと思ったんだけど」
この国で砂を自在に操る精霊の力は非常に助かるものだとユーマは思っていた。
ところが、試しに砂原を2つに割ってみせると、ミハエルが精霊のその圧倒的な力を前に冷や汗をかき、労働者達の仕事をすべて奪いかねないと危ぶんでユーマを止めたのだった。
「代わりにミハエルさんに別の仕事を頼まれたよ」
「それはなんです？」
「家の掃除」
ミハエルに懇願され、押し付けられるように頼まれたのは住居設備の清掃だった。
ここ砂漠の国ではしょっちゅう砂埃が舞い、こまめに掃除をしな

いと部屋の中が砂まみれになってしまうのだ。

この仕事は主に国の子供たちでやる仕事だという。幼少時のアギやシュリもこれでお小遣いを稼いでいたとミハエルは言っていた。

「要は部屋に溜まった砂を掃いて外に出すだけだから砂更で一気にやれるんだよね。すぐに終わるから子供たちの仕事まで引き受けて全部やっちゃったよ」

砂更が、とユーマ。

仕事の取り分はいらないと言うと、子供たちはとても喜んでいたことを思い出す。

今日はお誕生会があるので、掃除が早く終わると子供たちは急いでお菓子を貰いに外へ駆け出していったのだった。

「そうだ。ここに来る途中レヴァンさんが『跳んで』来て子どもたちのお礼だってお菓子貰ったんだ。アイリさんも食べる？」

「折角ですから。頂きます」

焼き菓子を半分こにして2人で食べる。

レヴァンから貰った焼き菓子は、実はエイリーク達が作っていたおまんじゅうのようなケーキ。ふんわりした生地の中にフルーツクリームがたっぷりと詰まっている。

決して上等なお菓子とは言えなかったが、砂糖よりも果物に甘みがあって酸味も効いている。

「……美味しいです。甘いというよりもやさしい、そんな味です」
「うん。なんとなくわかる。家庭の味って奴かな、きっと」
「そうですか。……これが」
それからアイリーンは噛み締めるように、少しずつ焼き菓子を口にした。
そんな彼女を不思議そうに見るユーマ。
「……女性の食事をまじまじと見るのは失礼だと思いますが」
「あ。ごめん。アイリさんがあんまり嬉しそうに食べるもんだから。半分じゃ足りなかったかなって」
「私は、別にそんな食いしん坊でもありません」
赤くなって拗ねられた。
それでユーマはもう1度アイリーンに謝る。
「……もう。でもこの国の人たちはきっと幸せなんでしょうね」
「ん？」
「子供たちがみんなで手づくりのお菓子を食べたりできることが。私はまだこの国を見ていませんけど、ここは人のあたたかさに包まれた国なんでしょう？」
「そうだね。外は日差しが強くて正直キツいくらい暑いんだけど、それに負けないくらい国の人は元気なんだ。その力をこの国に与えてるのが王様、レヴァンさんなんだよ。きっと」
ユーマはそう思う。
砂の精霊が教えてくれた真実に加えて、レヴァンが計画したとい

うあの地下都市を見たあとだと余計に。

「その方が国王様、ですか？」

「うん。アイリさんはまだ会ってない？　顔は似てないけどアギみたいな人」

「いいえ。でもアギさんみたいな王様って一体どんな」

「いや。アギより変だよな。あの人」

しれっと失礼なことを言うユーマ。

「初めて会った時はさ、知らずに一緒になって飯食ってたんだ。子供っぽく振舞ったと思ったらいきなり真面目になって。でもやっぱりふざけてて」

「それで？」

ユーマはアイリーンにレヴァンのことを話した。

瞬間移動といえる謎のゲンソウ術を使って姿を消したこと。次に見かけたのは王都の広場前で殴り合いをしていたこと。

城門前ではエイリークのトラブルに割り込んで《旋風剣》を容易く受け止めていたこと。

絡んできた少年達の代わりに自ら頭を下げたものだからエイリークが随分戸惑っていたことなんかも。

「俺達がやってる体験学習ツアーも王様の思いつきなんだ。でもこの国を廻りながら、ミハエルさんに色々話を聞いてるとやっぱり凄いと思う。アギが憧れるのもわかる気がするんだ」

反乱軍のリーダーとして《帝国》との争いに終止符を打った英雄。
帝国の姫を妻として迎え、新たな砂漠の王となった彼の国の躍進は、その破天荒な人柄と共に後世に語り継がれるに違いない。

「神出鬼没で無茶苦茶で。でもすごいのを発見したり開発したりもして、とにかく騒がしく楽しそうな人なんだ」
「……ふふっ」
「アイリさん？」
アイリーンは思わず笑ってしまった。
だって少年の言う王はアギというよりもむしろ。

「それって学園にいる時のユーマさんみたいですよ？」
「……えー」

あんな変なおっさんに似ているのは嫌だな。
やっぱりレヴァンに対して失礼なことを思うユーマだった。

＋＋＋

「この国のこと、もっと聞かせて下さい」
「そうだね。もうすぐエイリーク達も来ると思うから、その時にみ

んなで地下都市を見学した話を……」

不自然に口が止まった。

「ユーマさん？」

「……喋り過ぎたね。喉乾いてない？　ちょっと飲み物貰ってこようと思うけど」

「そうですね。では、私のもお願いしてもいいですか？」

「うん。またあとでね」

ユーマはそのまま部屋を退室した。

廊下にでると、ユーマは砂の精霊に促されるままに先を進む。

精霊を通してユーマへと伝わった《危険予知》と呼べるもの。ただだしそれは何が起こるのかはよくわからない。

予知といってもただ悪い予感が近づいてくるといったものだった。

それでもユーマは未だ本調子でないアイリーンを巻き込んではいけないと、部屋の外で迎え撃つことにしたのだ。

「砂更。悪意ある気配って一体」

「……」

程なくしてユーマはその悪意の発生源に遭遇した。

「お前は……確か城門前にいた」

ユーマが城の廊下で出会ったのは、城門前でエイリークに滅多打ちにされた『帝国人』を自負する少年ファルケ。

「悪意、ね。本当ならエイリークの《直感》ってやっぱり当たるのかも」

その彼の取り巻きのように控えた、危険な目をした男達を見てユーマは溜息をつくしかなかった。

＋＋＋

３－０４ｂ　帝国の影　後（前書き）

ユーマとファルケ

＊前回予告のところまで話が進みませんでした。すいません

このパートはあと１話分続けます

３－０４ｂ　帝国の影　後

＋＋＋

城内のとある廊下。ここで思いがけなく行きあうことになるユーマとファルケ。

特に行く先で待ち伏せされたようにユーマとばったり出会すことになったファルケは、驚きの表情を隠しきれていなかった。

ファルケは１人ではなかった。

他に男が２人、連れがいる。明らかに年上のやけに身なりが整った男達。

だけど彼らの顔立ちや歩く姿はあまりにも粗野で違和感がある。イメージとしては格下のチンピラが要人警護の黒服の真似をしたといったところ。

変装ならば１０点。兄ならばそう採点するだろうとユーマは思った。

それに。

男達と似た雰囲気の連中に、ユーマは風森の国で出会ったことがある。

彼らはおそらく、傭兵。

ユーマは先に声をかけた。

「ファルケさん、でしたね。頭とかエイリークにやられたとこは大丈夫でしたか？」

「あ。……ああ。あの程度別になんともない」

ぎこちない返事。

ファルケは埋められたことまで風使いの少女剣士にやられたと思っている。思い出して苦い顔。

「お前、一般の部外者だよな？　何故城の中にいる？」

「友達のお見舞いです。城の出入りは王様に許可貰ってますよ」

「見舞いだと？　ちっ」

ファルケは王と聞いて不機嫌そうに顔を歪めた。

「そういうファルケさんはどうしてお城に？」

「俺は古くから《帝国》に仕えるシュペル家の人間だ。城にいても何の問題もない」

迷いなく答えるファルケ。ただ理由としてはやけに曖昧すぎて腑に落ちない。

この国で《帝国》の姓を名乗っても何の意味もないのに。

「……へぇ」
「いいからどいてくれないか。先を急いでる」
「この先に？　来賓用の客室しかなかったですよ？」
「それは」
「いいんだよ小僧」
言葉に詰まるファルケに代わって、傭兵らしき男が答えた。
「大人しく坊ちゃんの言うことを聞きな」
「ここはガキのいる所じゃねぇぞ」
「アイリーン・シルバルム」
「何？」
男達を無視して呟いた。ユーマを除く誰もが目を見張る。
（砂更はこいつらの悪意を感じたんだ。矛先はアイリさん？）
ユーマは彼女の名を聞いて動揺したファルケを見逃さなかった。
「どうしてその名を」
「見舞いに行った友達の名前ですよ。もしかして、ファルケさん達も彼女に用ですか？」
北の大国、《銀雹の国》の王女に。
「ちいっ」
「小僧！」

男達の次の反応は早かった。だけどユーマの方がさらに早い。

取り押さえられるよりも早くユーマは真横に跳んだ。そのまま石材でできた壁を左腕で思いっきり叩く。

篭手に変形した《白砂の腕輪》。その能力で叩かれた壁は音もなく粉砕。

砂状になった石壁はユーマの精霊、砂更の支配下に置かれ自在に動かすことができるようになるのだ。

「なっ！？」

「遅い」

粉砕された壁に目がいった瞬間、男達は砂礫に目を潰された。

ユーマは続けてガンプレートを抜く。

視界を奪われた傭兵は為すすべもなく《風弾》の連射とスタンガンで無力化され、その場に倒れた。

「お前！」

「動くな」

思わず抜刀したファルケをユーマは声で制した。

ガンプレートを向けるまでもない。砂更が《砂人の腕》でファルケの足首を掴みその場に縛り付けている。

ファルケは何より現れた砂の精霊の、その姿に驚いた。

白いローブに金髪。それは《帝国》の昔から言われている『砂喰い』にそっくりだったのだ。

「……何だ、お前は」

「中央校の《精霊使い》」

「――――！？」

驚愕された。

C・リーズ学園の伝統。10人のエース資格者に送られる《Aナンバー》の称号。

その異例の11番目、《アナザー》のエースというのが《精霊使い》である。

「まさか……学園都市において秩序と破壊を繰り返すというあのっ」

「……まあ、いいや」

それにしては驚き過ぎだ。

一体西校ではどんな噂が立てられているのか気になるところである。

私情はあとにして、ユーマは倒した傭兵達の懐を探った。

「えーと。携帯用の細いロープにこの瓶は……睡眠薬かな？　薬学の講義で嗅いだことある匂いだけど」

ラベルを見るとどうやら市販の薬のようだ。証拠として確保しておく。

「さてと。どういうことか説明してくれる？」

「……」

「何も言い残すことがないのなら、それでもいいよ」

沈黙するファルケ。ユーマはガンプレートから《プラズマ・カッター》を放出。

バチバチと放電する紫電の刃を見せつけるが、脅し程度だとわかっているのかファルケは冷静だった。

「……何をする気だ？　いくらお前がエース資格者だとしてもここは学園都市の外だ。お前に裁く権利はない」

「知ってるさ。学園都市内でもそんな権利はない。だから」

無慈悲に告げる。

「《アイリーン公式応援団》の法に基づき、私刑」

「!?　待ってくれ！」

そんなふざけた理由で裁かれるのはあんまりだった。

＋＋＋

私刑は保留にしてユーマは訊ねた。

「じゃあなんです？　この人達傭兵でしょ？」

「それは」

「これが朝の仕返しだとしても、こんな人達連れてアイリさんに何かしようとするなんて間違ってる」

仕返しならばエイリーク達を狙うはずだ。それにアイリーンはその場にはいなかった。

そもそもファルケは、エイリーク達とアイリーンの関係を知っているのか？

「くっ」

ファルケは何も答えない。

「……質問を変えます。あんた達はこの城に彼女がいることを知っていたんですね？」

「……そうだ」

「アイリさんが銀雹の姫と知っていた？」

「ああ」

「それで誘拐を？」

「違う」

そこは否定するファルケ。

ユーマは切り口を変え、倒れた傭兵を見る。

「俺が彼女の名前を言った途端、あの人達襲ってきましたよ？　何故です？」
「それは……」
「まるで俺という目撃者を消すようでした。ああ。今更無関係を装っても無駄ですよ。あんたのこと『坊ちゃん』って言ってたの聞いてるんですから」
「……保護だ」
「は？」

訊ね返すユーマにファルケは堂々と答えた。

「そうだ。俺は誇りある帝国人、シュペル家の者として《帝国》を代表し、彼女を迎えにあがったのだ」
「……なんだよ、それ」
「《帝国》は今、奴ら砂喰い共の手の中にある。こんなところに銀雹の姫を置いておくわけにはいかない」

言い訳にしては大げさだ。でも怒り混じりの声でファルケは必死に訴える。

この国は《帝国》だと。

ユーマには理解できない。

「どういうこと？」
「俺の話を聞くか？　いいだろう。……奴らはあろうことか皇帝陛下をどこかへ幽閉するとこの国を次々と別のモノへ作り変えていった。国中に砂を家を建てたと思えば多くの仲間と他国の人間を呼び寄せ、この国のあらゆる場所を掘り起こした」
「……そういう見方もあるか」

「そんなことがもう7年も。このまま砂喰いに国を変えられることが、俺は我慢できない！」

故郷を穢された怒り。それはきっと正しい感情だ。

いくら国の再開発で生活環境が改善されたとしても許し難かった。それならばユーマも理解できる。

でも、ファルケは何かが違う。ユーマにはそう感じる。

ファルケの怒りは止まらなかった。

「砂喰いは昔から大帝国の遺跡を掘ることしかしない《墓荒らし》なんだよ。あの地下都市を見てみろ。あれこそ帝国人、いや偉大なる祖先、《西の大帝国》の民に対する砂喰い共の冒涜だ！」

「違う」

「あ？」

「違うよ。それは」

ユーマは否定した。

王国が開発している地下都市。確かにあれは知る人から見れば墓暴きと言われてもおかしくない代物だ。

でも《精霊使い》であるユーマが実際に地下都市を見て『感じた』ことを思うと、砂漠の民の冒涜とは思えなかったのだ。

ファルケにはうまく説明できない。

あの都市はレヴァンなりの……

「確かにこの国はもうファルケさんの知る《帝国》じゃないかもしれない。でも、レヴァンさんはきっと」

「もういい。所詮余所者か」

「ファルケさん……」

「お前たちに俺達『帝国人』の誇りは理解できまい」

ファルケはこれ以上聞く耳を持たなかった。

あまりにも頑なで、一方的な価値観。

「だったら『帝国人』ってなんです？」

「何？」

ユーマはただまっすぐにファルケを見つめた。

「故郷が変わっていくことに嘆くのはわかる。でも『帝国人』であるというあんたは『砂喰い』とか言って昔の因習に引きずられて、この国と砂漠の民を非難しているだけじゃないか」

「何だと？」

「あんたを見ても『帝国人』の誇りなんて俺にはわからない」

「貴様ぁ！」

ファルケが怒鳴ってもユーマが怯むことはなかった。

「余所者が。言わせておけば」

「余所者って誰です？　『帝国人』以外の誰かですか？　そこには俺の他にも、アイリさんだって含まれてますよね？」

ユーマは改めて訊ねた。

「アイリさんに何をしようとしたんです？　『帝国人』でも砂漠の民でもない余所者の彼女に」

「っ」

ファルケは言葉に詰まった。

そしてユーマの視線は次第に醒めたものに変わっていく。

「保護って言わないんですね？　やっぱり嘘だ。他に目的があって彼女に近づいたんですね？」

「ち、違」

「当てて見せましょうか？　あんた達の目的」

淡々と。その中で沸々と。

醒めた雰囲気から漏れ出した怒りを感じ、寒気を覚えたファルケは何も言い返すことができない。

（なんだ、こいつは……？）

一方でユーマは自分に嫌気が差していた。

この振る舞いは彼の兄、光輝を真似たものだったからだ。

エイリークみたいに悪い奴を吹き飛ばして終わりなら、どれだけすっきりして楽だろうかとつい思ってしまう。でも傭兵を見た時点で一筋縄ではいかないことをユーマは理解していた。

辛抱強く自分を抑えて相手に問いかけ、問い詰める。

揺さぶりをかけて情報を引き出す。

所詮真似ごとの尋問術だという自覚はユーマにもあった。だがファルケのような自尊心の強い相手なら脅迫、恫喝の類よりも有効で十分に通用すると踏んでもいる。

光輝の思考をトレースし、吐き気がするような下衆なこと考え、ユーマは口を開いた。

「ファルケさん。あんたはきっと『砂喰い』達のいるこの国を滅ぼしたいんだ。だからアイリさんを利用しようとした」

「なっ！　何を」

「彼女を拉致して事件を起こす。これが簡単方法ですよね、きっと。銀雹の国は大国だ。この国の人が彼女に危害を加えたなんて知られたら戦争の引き金にだってなる」

話しているのはユーマ、考えたのもユーマだ。

でも彼はファルケを責めるように見て言葉を繋ぐ。

「それとも自作自演でもしますか？　悪い国からお姫様を救い出し

た王子さまが大義を得て他国の協力を仰ぎ、この国に一斉に攻め込むんです。悪い国を滅ぼして王子様がお姫様と一緒に新しい国を建てる。英雄譚になりそうなシナリオですよね」
「何が、言いたい」
「違う？　じゃあ……既成事実でも作りに来ましたか？」
「――っ！！」

脅迫材料を作りに来たと言い変えてもいい。

最悪のなのは彼女を利用してファルケ達が《銀雹の国》に取り入ることだ。

その手段は考えたくもない。

この外道、最低の悪党。ユーマは言いたい放題にファルケを罵り、刺激した。

「にっくき砂喰い共を滅ぼす為ならば余所者のお姫様も道具として使う。それが『帝国人』なんですね？　よくわかりました」
「ふざけるな！！　言いたいこと言いやがって。俺達はそんな卑怯なことはしない！！」
「へー」
「馬鹿にするな！！　俺は誇り高き帝国軍人、ジャファル将軍の息子だ！！」

足元を拘束されたにも構わず、ユーマに掴みかかろうと凄み、足掻いている。

ユーマに散々侮辱され、ファルケは激昂した。

「だから俺も、親父のように上の命令に忠実に従って」
「命令？　上って誰に？」
「っ」
激情は一瞬で醒めた。ユーマはやっと漏らしたと内心安堵する。
これは所詮いいがかりだ。ファルケはまんまと引っ掛かった。
「末端だったってわけか。本当はアイリさんに何をしようとした？」
「……」
「まあ、いいや。どうせ連れて来いってくらいで大したこと言われてないんだろうし」
図星だったのか、ファルケの表情がまた驚きに変わる。
「な、なんで」
「経験からかな？　傭兵を使った誘拐に巻き込まれるの２度目だからなんとなく」
主犯は別にいて知らないんだろうな。そう言うユーマにファルケは絶句するしかなかった。
「ファルケさん、考え直した方がいい。あんたの言う『上』が誰かは知らないけれど、こんなことに傭兵まで使う奴は碌なもんじゃない」
「だが、俺は」
「『帝国人』だから、ですか？　誘拐の幇助なんかしてあんたは自分に誇りを持てるんですか？」
「違う！　ただ俺は」
「黙れよ。自分のことばかりで何も考えてない癖に。俺が言ったこ

と、『上』が考えてるかもしれないんだぞ」

睨みつける。《プラズマ・カッター》が一層激しく火花を散らす。

「命令だった。だから知らなかったで済ますわけにはいかない。アイリさんを傷つけようとするなら、今ここで潰す」

「お、俺は……」

「あんたのしていることが自分を、『帝国人』の誇りを汚していることに気付け」

「……」

それがとどめだった。ファルケは力なく項垂れた。

＋＋＋

関わるのはここまで。

ファルケのことは彼を利用する存在もあって思った以上に根深い。

この国の問題に関わることならば余計なことはせず、レヴァンに任せるべきだろうとユーマは考えた。

「ファルケさん。あなたの身柄は傭兵達と一緒にレヴァンさんかミハエルさんに引き渡します。このあとのこと、よく考えて下さい」

「……」

返事はなかった。

ファルケの剣を取り上げ、拘束しようとユーマはガンプレートを下ろした。

その時。

「チチッ」

ユーマが壊した外壁から入りこんで来た1羽の小鳥。

二股の切れ目の長い尾を持つ赤い小鳥が、ファルケの肩に止まった。

「この鳥は」

「燕？」

「チ？」

人間くさい動作で首を傾げる小鳥。

この鳥の正体を一早く察したのは他でもない『同種』である砂更だった。

精霊は急いでユーマに危険を伝えるが、状況が理解できず彼の反応は遅れる。

「……！」

「えっ、砂更？」

「伏せろ！　坊主！！」

次の瞬間。

上空から、外壁の穴から城の中へ。

ユーマ達に向かって無数の赤い矢が降り注いだ。

＋＋＋

「うーん、命中！　……かしらん？」

城の外。砂埃の舞う辺りを見上げ、いい加減なことを呟くのは長身の赤い髪の女。

「どっちだ？」

彼女の隣にいるのは、氷のような冷たい目をした壮年の巨漢。

2人組は『新米』の傭兵だった。

「さあねん。ここからじゃ目視出来ないし。一応火燕ちゃんを目印に放ったけど、狙撃砲撃はあたいの専門外だからん」

けらけらと笑う赤い髪の女。

女は露出の多い服装をしており、褐色に焼けた肌を惜しげもなく晒している。

いい歳してるくせに。そうぼやいて殴られたことがあるので、巨漢はそのことに触れずにいた。

「……おぼっちゃんは？」

「逃げたわよん。火燕ちゃんが誘導してるから大丈夫」

「問題は失敗した傭兵と目撃者の排除、か」

氷の目の巨漢は無表情だった。

淡々と任務をこなすその在り方は理想の傭兵、駒といってもいい。

「いいわよん放っておいて。思いつきで動いたあいつらの尻拭いなんてまっぴらごめんよん」

「……そうか」

「ええ。それにしても傭兵ってお粗末ねぇ。あんなのと一緒にお仕事するなんて先が思いやられるわん」

「……」

「再就職先、間違ったかしらん？」

「何を今更」

巨漢は呆れているようだが表情は変わらない。

「おぼっちゃんを回収して依頼主の所へ戻るぞ。この件で今日中に動く可能性がある」

「今日しかない、でしょ？　このことがなくても動くわよん。きっと」

「……何故だ？」

「依頼主、あたいの嫌いなタイプなの」

美少女の勘ね、おほほ。と笑う。それでも巨漢の表情は変わらな

い。

年齢の割に美人だとは思うが、誰が美少女で『少女』なんだとか。

「おほほ」って一体なんだとか。

巨漢は決して突っ込まなかった。

「……長居は無用だ。行くぞ、《炎槍》」

氷の目をした巨漢は、赤い髪の女を相手にせず場をあとにした。

「ああん。相変わらず冷たい子ねぇ。ちょっと待ちなさい、《氷斧》」

赤い髪の女は巨漢を追いかけようと、その場に立て掛けておいた槍を手にして担いだ。

その槍は彼女の二つ名のような炎の色をしている。

《炎槍》と呼ばれた傭兵の女は、振り返ってふと城の方を見上げた。

「キーくんに免じて見逃してあげる。だからこれ以上この国に深入りしちゃだめよん」

誰に対して呟いたのか。それは彼女しか知らない。

＋＋＋

王城の3階、ユーマのいた廊下。

ユーマは《炎槍》の襲撃を受けたのだが彼は無事だった。

砂更が咄嗟にユーマを庇い砂の壁を展開したこともあったのだが、石壁を壊して作りだした砂はあまりにも少ない。これだけではユーマはきっと無傷では済まなかっただろう。

ユーマが無傷で済んだ理由は1つ。

「無事か。坊主？」

「レヴァン、さん？」

突然現れたレヴァンが外壁の穴を塞ぐように《盾》を展開したからだ。

「砂埃を起こしたのはいい判断だ。狙撃ならこれで目を眩ませられる。坊主、今の内に」

「はい」

レヴァンが庇ったのはユーマだけではない。倒れた傭兵達もだ。

ユーマはレヴァンの意図を察して傭兵達を外壁の穴から遠ざけた。

この時、砂更の拘束が解かれたファルケは襲撃に乗じて姿を消している。

「ファルケさん……」

「馬鹿息子が。……つるむならもっとマシなダチを選べよ」

傭兵を見ると、ここにはいない息子に向かってレヴァンは悪態をついた。

次にレヴァンはユーマの方を向いた。

「悪い、遅くなった。さっき『感じた』のが嬢ちゃんの方だったんで部屋の方にいたんだが」

「はぁ」

何と言ったらいいかユーマはわからない。レヴァンはこの事態まで察知して『跳んで』きたとでもいうのか。

ならばアイリーンもまた、突然現れては消えるという王の神出鬼没ぶりを目の当たりにしたに違いない。

「ともかく。例によって飛び込んだもんだから状況がわからねぇ。話が聞きてぇからちょっと付き合ってもらうぞ」

「はい。……あ。でもアイリさんやエイリーク達が」

「そうだな。じゃあ俺は先にミハエルと話をして城の上で坊主を待

っておく。坊主はその間に嬢ちゃん達と合流して事情を話してくれ」
「上？　……わかりました」
「これほどの騒ぎが起きたんだ。嬢ちゃん達もすぐにここへ集まるだろう。ただし」
レヴァンは言った。
「ファルケとこいつらのことは内緒で頼む。まだ公にしたくない」
「……どうして？」
「この国の問題だから関わるな。それで察してくれ」
「……」
ユーマは無言で頷いた。
「いい子だ。じゃあまたあとでな」
レヴァンはそう言って、もう何度目かわからないがユーマの目の前で『跳んで』消え去った。
＋＋＋
レヴァンが姿を消して、廊下に1人取り残されることになったユーマ。
「……なんて説明しよう？」
レヴァンが外壁の外に《盾》を展開した為に廊下の被害はそう酷くもない。

あるのは自分の空けた壁の大穴だけ。

この状況で彼女達にどう言い訳しようか。ユーマは大いに悩んだ。

＋＋＋

３－０５　ユーマとレヴァン（前書き）

残念ながら『王様１０の秘密』の半分はサヨコさんでできています

3－05　ユーマとレヴァン

＋＋＋

襲撃に乗じて王城から逃げ出したファルケは、赤い燕に誘導されて2人の傭兵と合流した。

「おかえりなさい、火燕ちゃん」

「チ」

赤い髪の女は自分の相棒を肩に乗せて労う。

氷の目をした巨漢は無言でファルケを見つめた。

「所詮おぼっちゃんか」

凍てついた視線は明らかにファルケを蔑んでいた。

ファルケは物怖じせず口を開く。

「任務に失敗したのは確かです。だがそれもあんた達傭兵のせいでもある。文句を言われる筋合いはない」

「……」

「《炎槍》、《氷斧》。大体最初からお前達が動けば」

「そこまでよ坊や」

「っ」

突きつけられる赤い槍。

眉間を狙われたファルケは黙るしかない。

「あたい達は坊やたちのバックアップ。それが将軍様の依頼なのよん。自分の失敗を人になすりつけないでほしいわん」

「……わかりました」

向けられた槍を下ろされてファルケは息をついた。

「さーて。坊やも回収したことだし戻りましょうか」

「……」

そう言いながらも傭兵達はファルケを置いて、密かに設置しておいた《転移》の魔法陣へ向かいさっさと姿を消した。

「……傭兵風情が。いい気になるなよ」

ファルケは『入隊』してからずっと辛酸を舐め続けている。

それでも彼は挫けなかった。ファルケには目的があったから。

帝国人としての誇りを取り戻す為に。

「見てろよ。いつか俺が、俺達が《帝国》を取り戻す」

王城をもう1度睨みつけ、ファルケは『拠点』へと戻った。

＋＋＋

城の上で待つ。

そうレヴァンに言われたユーマは王城の最上階まできたものの、どこを探しても彼の姿は見当たらなかった。

「いないじゃないか。……砂更？」

砂の精霊は姿を現すとユーマを誘導するように先へ進んだ。

「一体どこに」

「……」

「え？　上ってまさか」

砂更が連れて来たのは城の尖塔。屋外へと昇る階段だった。

＋＋＋

ユーマとレヴァン

＋＋＋

尖塔から屋根の上へ。

外へ出た途端、照りつける日差しと少々砂の混じった熱い風にユ

ーマは少しだけ顔を顰める。

ユーマは畳んでいた砂除けのローブを着込むと屋根の上から周囲を見渡した。

王国で1番高い建物である城のてっぺん。そこからは再開発地区の城下町や住居区の集合住宅だけでなく、その先にある新開発地区までも国中を見渡すことができた。

熱風に乗って聞こえてくるのは人の声や工事の喧騒。とても賑やかだ。

「ここは」

「すげーだろ？　ここからなら国だけじゃなく向こうの砂漠まで見渡せる」

王はそこにいた。

遥か遠くの砂漠と青い空を背景に立つレヴァンの姿は、よくある国王のイメージと随分かけ離れていたが彼らしく、よく似合っていた。

「レヴァンさん」

ユーマはここへ来た要件を思い出して話を切り出した。

「さっきの、ファルケさんのことですけど」

「ああ。別にいい」

「……へ？」
「坊主が来る前に調べはつけた。今ミハエルが裏を取ってる」
「……早いですね」
「それでだ。この件、坊主たちはもう首を突っ込むな」
「わかりました」
ユーマは即返事をした。
これにはレヴァンも拍子抜け。
「おいおい。やけに物わかりがいいじゃねぇか」
「多分内政干渉ってやつですよね？　エイリークやアイリさんがいるから」
「……正解だ」
レヴァンは頷いた。
「嬢ちゃん達は一国の姫だ。だから国の客人扱いで滞在している。そんな嬢ちゃん達がこの国の事情にあまり関わってもらうのは色々と問題なんだよ」
「そうでしょうね」
ユーマは相槌を打つ。
国の事情。そこに何か引っ掛かったが、巻き込まれそうになったアイリーンは無事だ。
無暗に干渉すべきじゃないとユーマは身を弁えた。
「ここは学園都市、中央中立地帯にある国じゃねぇ。お前らが勝手

に事件に突っ込んで暴れてもらうのは迷惑だということをわかってくれ」
「はい」
「それに風森の嬢ちゃんもそうだが、どうも坊主たちはやり過ぎるようだ」
1日で城を2度も壊していると言われればユーマは何も言えない。
「明日の朝には直通の転移門を使えるようにしてやるからそれまで大人しくしてくれ」
「……わかりました」
少しばつが悪そうにユーマは返事をした。
これで用件は終わりだ。
エイリーク達に合流しようとレヴァンに挨拶して場を離れようとしたユーマだったが。
「そう言うなよ。城の屋根は王様である俺の特等席なんだぜ」
戻ろうとすれば「まあ、休憩時間の話し相手になれ」とレヴァンはユーマを離さなかった。
このままレヴァンの暇つぶしに付き合わされていることになる。
「なあ坊主。今日1日この国を見てどう思った?」
「どう?」

「建国当時は人口は5万人だったこの国も今じゃ２０万人以上。西国でも最大といわれる国になった。坊主はこれをすげーと思うか？」
「はい。実際ミハエルさんに街を案内して貰って凄いと思いました」
ユーマは素直に答えた。

戦後１０年足らずでここまで復興、発展した国は他にないだろうと思う。
ユーマは正直な感想としてレヴァンの偉業を称えた。

なのにレヴァンは。
「……面白くねぇな」
「はい？」

３０代後半のおっさんがつまらなそうに口を尖らせるのはどうだろうか。

「お前はもっと毒の効いたこと言えねぇのか？　『２０万人なんて所詮地方都市程度だ』とか、『やろうと思えばちっぽけな島国でも１億人以上住める』とか」
「そんな国ないですよ」

風森の国だって人口2万人足らずの国だというに。

この王は自分の国をどうして卑下するようなことを言うのだろうか？　ユーマはレヴァンが何を言いたいのかわからない。

そもそも人口１００万人以上の国なんてこの世界に存在しない。
それがユーマの知る『こっちの世界』の常識なのだ。

「まっ。それが普通か」
「レヴァンさん？」
「いや。変なこと訊いたな。代わりといったら何だが今度は坊主が質問してくれ。今なら特別に『王様１０の秘密』を教えてやらないわけでもねぇ」
「……はぁ」

ユーマは振りまわされている。

でも折角の機会だ。この破天荒で謎の多い王様の秘密とやらを訊いてみることにする。

「レヴァンさんやアギが使う《盾》って結局何なんですか？」
「？　訊きたいことがわかんねぇな。あれは《幻想の盾》。無属性の初級術式だぞ」
「初級？　そんな馬鹿な」

アギの鉄壁ぶりを間近で見ているユーマとしては、どうしたって《盾》が初級術式のそれだとは思えない。

「基本にして奥義ってやつだ。ゲンソウ術は《幻操》による工夫や《現創》の再現度も肝心だが術式に込める想いと願い、《幻想》の力が大きく左右される。俺は学校なんて行ったことねぇがこれは習

うもんなんだろ？」

そう言われるとそうなのだが、どこか釈然としない。

次にユーマはレヴァンがよくする謎の『跳ぶ』に関して訊いてみた。

「『王様１０の秘密』その６だな。こいつは昔交流都市で研究してもらったから大体解析している。蜃気楼って知ってるか？」

ユーマは頷いた。

蜃気楼は空気の密度の違いにより光が屈折して起きる現象。砂漠の地表や海上など、空気が局部的に温度差をもつところに発生しやすい。

「蜃気楼は幻だ。遠くのものが近くに見えたりしちまう。俺はゲンソウ術で『近くに見える幻に足を伸ばしている』。《幻創》からの《現操》で実際の距離を短縮しているらしいな」

要するに思い描いた場所を蜃気楼として目の前に生み出し、その幻を通って目的地へ『跳ぶ』という単体の瞬間移動、ワープの類らしい。

「世界中で俺しか使えねぇ技なんだぜ」

「あれ？　学園じゃアギも使ってましたよ」

「何？　……。成程。多分それは《蜃楼歩》じゃねぇな」

ユーマの話を詳しく聞いてレヴァンはそう結論を出した。

「でも、前にアギは王様が使っていたやつだって」
「じゃあ真似ごとだな。俺も色々試したが《蜃楼歩》は砂漠の日中でしか使うことができねぇ。そりゃ別もんだよ」
「真似ごと？」
「結構曖昧なもんなんだぜ、ゲンソウ術ってやつは」

それならば度々ユーマ達を救ったアギのあの瞬間移動はなんだというのか。

謎のままだった。

「……さて。俺の休憩もそろそろ終わりだな。坊主、次が最後だ。あと1回質問に答えてやる」
「最後」

考える。

レヴァンの謎といえば《蜃楼歩》に合わせて『誰かの危機に駆け付ける』というのがある。

ユーマが目撃したのはエイリークにファルケがやられそうになった城門前の件。それに先刻のアイリーンの誘拐未遂の件ではユーマが離れた間に『跳んで』待機していたらしい。

加えてユーマが受けた謎の赤い矢の襲撃もレヴァンは予知していたかのように現れ、守っている。

偶然なのか、それとも何か仕掛けがあるのか。

レヴァンに訊ねようとしたところ。

――あの地下都市を見てみろ。

――あれこそ大帝国、いや『帝国人』に対する砂喰い共の冒涜だ！

（あ……）

ふと思い出したのは彼の言葉。

「レヴァンさん。この国の地下都市の事ですけど」
「おう。それがなんだ？」
「基盤となったあの地下の空間が何だったのか知ってたんですか？」
「……」

レヴァンの雰囲気が変わった。

「坊主、案内をしたミハエルは何か言ってたか？」
「……いいえ。地下都市は見学しただけで歴史的なことは何も」
「じゃあ慰霊碑も何も見てないんだな」
「慰霊……じゃあ、やっぱりレヴァンさんは『あれ』を知っていながらあそこに街を」
「まあ待て」

レヴァンは間を置いて詰め寄ろうとしたユーマを落ちつかせた。

「まずは坊主、お前が地下都市になる『前』のことで知っているこ

とを教えてくれ。答えるのはそれからだ」
「……わかりました」

精霊が伝えた《西の大帝国》の真実。

今度はそれを、ユーマがレヴァンに話した。

＋＋＋

現在王国で開発中の地下都市は４００年前に存在した《西の大帝国》、その遺跡ともいえる地下の空間を基盤にしている。

その地下の空間はブロック構造を組み合わせた、とてつもなく強固で広い空間だった。今の王国が半分以上収まるほどの規模だ。

大帝国の誇る水道網を取り入れ換気設備も充実。２千万人もの人間を収容できる上に食糧を積み込めば１０年は生活できるという計算の代物。

それは、《西の大帝国》の、その中の一都市にある避難施設。

つまり非常用のシェルターだった。

大帝国は《機巧兵器》をはじめ優れた技術力を誇っており、都市計画の段階から災害対策が十全に施されていたのだ。

４００年前といえばまだ《魔法》が普及していた時代。

とある日。とある都市のに住む大帝国の民は《予知》を通して大帝国が滅ぶ可能性を予見し、予め避難を行っていた。

その時に使われたのがこのシェルターである。

それから結局大災厄が起き、首都を中心に大破壊が起きた。

西国の半分を砂漠化し、多くの国々を巻き添えにして滅んだ《西の大帝国》。だが実は地下の奥深くに避難した大帝国の民は大災厄の被害から逃れていた。

それからが2千万人もの避難民たちの、地獄のはじまりだった。

＋＋＋

「シェルターは砂に埋もれて出口が塞がってしまっていた。給換気設備は無事で空気はあったけど生き埋め状態です」

「……」

「それでもシェルターの中では１０年は生きることができる。それだけの時間があればいつか外から助けが来ると避難民たちは希望を持つことができた。でも……」

１０年が経って、１００年が過ぎた。

彼らが救い出されたのは、それからさらに３００年後のこと。

「……」
「遺体は」
黙り込んだユーマに代わって、レヴァンが口を開いた。
「国の皆ですべて運び出して埋葬した。どんな惨状だったかは話さねぇが、碌なもんじゃなかった」
「……」
「なあ、大帝国の技術ってのはホントすげぇんだぜ。あの地下は４００年経った今でも水があって空気も澄んでいた。でもそれだけじゃ人は何百年も暮らしていけねぇんだよな」
「だから街を？」
「半分はそうだな。でも地下で自給自足できるなんてのは技術的にまだ無理だ」
ただ俺はあの場所に活気を与えてやりたかった。レヴァンはそう言った。
「活気、ですか？」
「精気とか生きる力だな。あの地下空洞を発見した時、俺は怨嗟ようなものを感じた」
「怨嗟」
「ああいうのが国に残っていると人や土地に影響を及ぼす」
魔力に含まれる狂気と同質のものらしい。
ここ砂漠地帯の緑地化が進まないのも、あるいは『帝国人』の歪みもそのせいだったのではないかとレヴァンは言う。
「負には正、死には生。相対するものをぶつけないと浄化なんてで

きねぇ。生憎この国には《巫女》なんていねぇから地下に人を入れることで活気を満たして、それで時間をかけて少しずつ浄化する方法しか俺は思いつかなかった」

「そうか。やっぱり」

地下都市の開発はファルケの言うような墓暴きではなかった。

あれはユーマが思った通り、レヴァンなりの鎮魂であり弔いだったのだ。

ユーマは《精霊使い》。精霊を通して『何か』を感じることができる。砂更を通してユーマが見た王国の地下都市は何の淀みもなかったのだ。

レヴァンと砂漠の民たちはもう十分に遺した怨嗟を祓い、大帝国の民を癒している。

感心したところで、ふと疑問に思ったことをユーマは口にした。

「巫女、ですか？」

「知らねぇか？　世界と《世界》を繋ぎ、秩序の循環を促す者。精霊を通して地を治め、人の魂を還すことができる奴のことだ。《風邪守の巫女》もそうだ」

「シアさんが？」

「風森をはじめ精霊の加護を受けた国は《世界》に守られる。逆に精霊のいない、『精霊を拒絶した国』は例になく滅びの運命を辿る。《帝国》もそうだ」

「王国はどうなんですか？」

ユーマは訊ねた。《砂漠の王国》に《風森》のような精霊が棲んでいるのか。

「さあな。俺は王だからかちょこちょこ何かを『感じる』んだが。坊主、お前の方がわかるんじゃねぇか？」

「俺？」

「《精霊使い》なんだろ？　なら坊主も《巫女》の資格があるんだぜ」

「そう言われても。男が巫女なんてなぁ……」

ぼやきながらユーマは砂更を呼び出して訊ねてみる。

「……」

しかし、今のユーマの力量では砂更は何も答えることができなかった。

「……駄目です。制約のせいで俺じゃわかりませんでした」

「そうか」

残念という感じではなかった。

それにしても、レヴァンの『感じる』というその力がユーマは気になった。

《精霊使い》でもないレヴァンのその力は一体……

「訊きたいことはもうないな？」
「はい」
大分時間が経ってしまった。
レヴァンには他に色々訊きたいことがあったがエイリーク達を待たせている。ユーマは『ここまで』だと自分に言い聞かせた。

結局、ユーマは1番訊きたいことを訊ねなかった。
何故ならユーマが自分のことをレヴァンにうまく説明できないと思ったわけで、何より訊くことに躊躇いがあったから。

訊きたかったこと。それは《西の大帝国》が滅び、大災厄の原因となった『大規模儀式魔術』。その実験の詳細。

《召喚術》について。

＋＋＋

2人はこの場から離れようと屋根から立ち上がった。
その時、レヴァンはユーマの腰のあたりに目をやる。

「そうだ。坊主、ちょっとでいいからそれ、見せてくれねぇか？」
「？　ガンプレートを？」
「珍しいもんだろ、それ」
レヴァンは新しいおもちゃをみつけたように《レプリカ２》を見ている。
「いいですけど」
ユーマは仕方なく腰のホルダーからガンプレートを抜いてレヴァンに手渡した。
レヴァンは何かに期待するようにしげしげとガンプレートを見ていたが、一見すればただの金属板だ。程なくしてがっくり。
「なんだブースターか。昔は増幅器といや魔術師の使う杖や魔導書が定番だったが」
２枚のカートリッジを抜き差しして遊ぶレヴァンを不思議そうにユーマは見た。
（あれ？　なんか手慣れている？）
レヴァンはさらにユーマが驚くべきことをした。
「バァン」
レヴァンはガンプレートのグリップを正しく握ると《水鉄砲》を

放って見せたのだ。

いくら水属性のＩＭカートリッジを差し込んでいたとはいえ、ガンプレートは『銃』の特性がイメージできなければつかえるものではないのに。

「成程な。『拳銃型』のブースターつうわけか。飛び道具として使うなら最適だな」

「嘘」

さらにレヴァンは手にしたガンプレートで、何を思ったか無造作に真横に振った。

次の瞬間。ガンプレートは水の刃を《幻創》。

レヴァンは初見でガンプレートの銃剣までも扱って見せたのだ。

ユーマは、それになぜかレヴァンまでも《ウォーター・カッター》の刃に驚いて目を見開く。

「こいつは……悪魔の武器だな」

「えっ？」

一瞬何を言われたかわからなかった。

レヴァンは何を思い出したのか、急に忌々しいもののように《レプリカ２》を見ている。

「悪魔？　ガンプレートが？」
「……いや」
レヴァンは思い直してユーマに説明した。
「銃のことだよ。《帝国》が持ってた《機巧兵器》と呼ばれたやつにこういうのがあったのさ」
「兵器……」
「昔のことさ。《機巧兵器》なんて人の手に余るモノは反乱軍が全部破壊したからな。だが」
「レヴァンさん？」
「……」
声をかけられてレヴァンは思案するのをやめ、頭を振る。
「なんでもねぇ。どうも俺が『銃』を知っているからこいつを使えるらしいな。それだとアギは無理でもミハエルとかこの国の野郎共も多分使えるんじゃねぇか？」
「そうかもしれません。でもそれを見て普通銃だと思いませんよ」
ガンプレートは見た目「へ」の字に折れ曲がった金属板。おもちゃの銃でもまだマシなものがあるはず。
「かもな。……でもよく似ている」
レヴァンはそう言うが、そんなことはないだろうとその時のユーマは思った。

この話はこれで終わったので、ユーマはレヴァンがなぜ銃剣を使えたのか訊きそびれてしまった。

それで。

レヴァンが《レプリカ２》と《機巧兵器》を見比べていたわけではないことに、ユーマは気付くことはなかった。

＋＋＋

レヴァンと別れたあと。ユーマはエイリーク達と合流しようとアイリーンのいる部屋へと戻った。

「……あれ？」

部屋に入った途端、場の空気が変わった。

全員見舞いに集まっていた仲間たちは生温かい目でユーマを見ている。アイリーンはいきなり布団を頭まで被った。

「？　アイリさん具合悪いの？」

「大したことじゃないわよ」

でも答えたのはエイリーク。

おかしい。

エイリークは呆れているようで素っ気ないし、ミサはユーマを見ては気恥ずかしげにそわそわしている。

ポピラは今でも「馬鹿ですね」と言わんばかり。表情はいつものまま変わらないけれど。

「アギ？　シュリ君？」
「「……」」

気まずそうに目を逸らされた。

「何かあったの？」
「アンタがしたのよ」
「俺？」

エイリークに言われて思い浮かんだのは、やはりファルケの件で城の壁を粉砕したことだろうか。

時間がなかったとはいえ「ついカッとなって思わずやってしまった」のいい訳は苦しかったかと思うユーマ。

通じるわけがない。

「いや、別に俺はわざとお城を壊すようなことしたわけじゃないんだけど……」

「そうでしょうね。じゃあ、アンタが何をしたのか教えてあげる」
「はい？」
「風葉、見せてあげなさい」
「はーい」

ユーマとは別行動をとり、さっきまでミサのクッキーを貪っていた風葉は元気よく返事をした。

しかしこの風の精霊さん。主人であるユーマを余所にエイリーク達の言うことをきくのはどういう了見か？

「風葉？」
「かぜはー、げきじょー」

いきなり小芝居がはじまった。

「ダイジェストでー、いきますよー」
「まさか」

風葉とユーマは繋がっている。

だから離れても風葉はユーマが何をしていたのか知っているのだ。

風葉はふよふよー、と部屋の端のほうへ飛ぶと「えい」と壁をパンチ。

おそらくユーマが壁を壊して砂を作った場面。

それからちいさな手で鉄砲のかたちをつくると「ばんばん」と敵を撃つ真似をした。

傭兵をガンプレートで倒すシーン。

最後に。

風葉は決めポーズを「びしっ」と決めて決め台詞。

『アイリさんを傷つけようとするなら、今ここで潰す』
「風葉ぁ！？」

ユーマは思わず絶叫。

どうしてそのセリフだけ、ピンポイントにセレクトしたのか大いに文句を言いたい。

しかも《変声》まで使って完全再現。

風葉はこだわりの演技派だった。

「これは、ちょっと違っ」
「大まかな流れは『これ』でわかったから。アンタは何があったか

正直に答えなさい」
「……はい」

ユーマは羞恥プレイのあとで尋問を受けるのだった。

「……」

アイリーンは布団から出てこない。

＋＋＋

3－05　ユーマとレヴァン（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

水面下で働く傭兵の暗躍。レヴァンの下へ現れる学園都市からの使者。

事件は起きた。

次回「帝都解放戦」

「放っておけるわけないじゃない！」

３－０６ａ　帝都解放戦　前（前書き）

準備フェイズ。嵐の前の静けさ

3－06a　帝都解放戦　前

＋＋＋

ユーマがエイリークの容赦ない尋問（ユーマが押し黙る度に『かぜはげきじょー』が繰り返されるという拷問）を受けていた頃。

レヴァンは1人、まだ屋根の上にいた。

いや。あともう1人。

「ミハエル。いるんだろ？」

レヴァンが声を掛ける。

それで姿を現したのは、尖塔の影に隠れていた国王付き宰相補佐官。

「気付いてらしたのですか？」

「うおっ！？　ほんといやがった」

「……勘でしたか」

レヴァンが素で驚くのでミハエルは呆れた。

「一体誰に向かって格好つけようと思っていたのでしょう？」
「うるせ。調べはどうだ？」
「はい」

ミハエルは集めた情報をまとめ、端的に明確な答えを述べた。

「間違いありません。相手は『帝国貴族』です」

ミハエルの報告に険しい表情を見せるレヴァン。

「忙しくなるな」
「レヴァン様……」

ミハエルはレヴァンの見せる横顔に何も言えない。

彼が『レヴァイア』と名を改め王となった現在。

それでも砂漠の民の自由を求め、２０年も帝国軍と戦い続けた反乱軍のリーダーは今もここにいた。

反乱軍時代からの仇敵。王国に課せられる試練。

レヴァンはこの日、《帝国》を前にして王の資質を試されることになる。

＋＋＋
帝都解放戦
＋＋＋

ファルケはユーマの思わぬ妨害で任務失敗のまま撤退という屈辱を受け、傭兵達と共におめおめと王都を脱出した。

簡易式の《転移門》である魔法陣をくぐりぬけ『拠点』へと向かう。そこは《帝国》時代に放棄された砦の１つ。

その地下に存在する遺跡を利用した《新帝国軍》の秘密基地であった。

《新帝国軍》の士官候補生であるファルケはこの地下基地に来るといつも陰鬱な気持ちになる。

砂の下、穴倉に住むなんてまるで『砂喰い』ではないかと。

地下基地の基になった遺跡は『墓場』であったらしい。

元帝国軍が潜伏場所として発見した地下の遺跡。広大なブロック構造の空間にあったのは、乾ききった数万人ものの遺体だったというのだ。

大昔に大帝国の遺跡を掘り起こしていた『砂喰い』が事故を起こして生き埋めにあった。

そう帝国軍の兵士に聞いたファルケは当然の報いだ、やはり愚かな奴らだと砂漠の民を嘲け嗤った。

同時に、そんな場所に潜伏せざる得なくなった『帝国人』の惨めさに腹ただしい気持ちになる。

「相変わらず陰気な場所ねぇ」

「……」

ファルケと同じく基地へ戻った2人の傭兵。

赤い髪の女の愚痴はファルケも同意するところであったが、傭兵風情と同じ意見を持つというのが嫌になる。

傭兵は根なし草。

故郷を持たないあぶれ者の荒くれ者。

傭兵は駒の狗。

兵でさえない。金次第で誰にでも尻尾を振るひとでなし。

傭兵は落ちこぼれ。

失敗し、過ちを犯したハンターや騎士、兵士、そして学生たちの成れの果て。

そんな傭兵達と行動を共にしなければならない誇り高き『帝国人』のファルケは、常に彼らへの嫌悪を露わにする。

「《炎槍》、《氷斧》。俺は将軍の下へ報告に行く。あんた達は『工場』で《機巧兵器》の部品でも磨いてろ」

「了解～。おぼっちゃんも任務失敗の報告、しっかりと伝えてらっしゃいねぇん」

《炎槍》はファルケの意にも適わず茶目っ気たっぷりのウインク。

「……」

《氷斧》は凍てついた視線を彼に送り踵を返した。

傭兵達にすればたかが17の餓鬼だ。ファルケは相手にされていない。

「……くそっ。ちょっと腕が立つからと調子に乗って」

力が欲しい。

ファルケはいつも思う。

学生レベルのランクＡでは駄目だ。たとえ任務の邪魔をしたあの《精霊使い》のようにエース資格を得たとしても全く足りない。

傭兵ごときに馬鹿にされない力、帝都に巣食う反乱軍と『砂喰い』共を追い払い、《帝国》を取り戻す力。

何より『レヴァイア』の名を騙る『砂喰い』の王。あれを殺す圧倒的な力をファルケは欲した。

《帝国》を守り砂の地に沈んだ父、ジャファルの無念を引き継ぐのは息子である自分しかいない。

ファルケはそう信じて疑わない。

「失敗したのは傭兵達のせいだ。話せば俺に非がないことくらい中将もわかってくださる」

『銀雹の姫の保護』に失敗したファルケ。

彼は《砂漠の王国》の存在に絶望し、燻っていた自分を見出してくれた恩ある将軍の期待に応える事ができなかった。

それでファルケはさらに陰鬱な気持ちになり、そのまま司令室の扉を叩いた。

＋＋＋

王城の屋根の上。

いるのはこの国の王様と宰相補佐官。

「『帝国貴族』。サヨコさんの言うとおりになったな」

「正確にはイゼット様からの忠告です」

――そろそろ『賊』が『収穫』にきますよ

それはひと月ほど前のこと。

学園都市にいる子供たちの様子を見に行った王妃サヨコは《C・リーズ学園》学園長、イゼット・E・ランスのもとへ挨拶に伺ったところ、彼女は学園長から1つの助言を受けていた。

「《預言者》のばあさんか」

世界中で知る人ぞ知る学園長の異名。

その由来は世界中から集める情報の速さと正確さ、加えて彼女の優れた分析力からはじき出される未来予測にある。

「イゼット様の家系は情報収集にかけて昔から確かなものをお持ちです。『収穫』とはおそらく国の運営が軌道に乗った今の時期を見計らってくるという隠喩だったのでしょう」

「軌道に乗った？　都市の開発に資金を注ぎすぎて借金まみれだぜ、ウチは」

レヴァンは「あと最低２０年は……」とぼやく。

王様はでっかい『マイホーム』のローン完済に勤しむ国父でもあった。

帝国貴族。

長年《帝国》を裏から支配し続けてきた特権階級、砂漠の民を虐げる元凶を作った者たち。

皇帝の名の下に特権を振りかざしては民からあらゆるものを徴収、軍を率いては砂漠の民から略奪行為をするなどして一時の栄華を極めた生粋の『帝国人』。それが『帝国貴族』と呼ばれる国賊である。

彼らは7年以上も昔に帝国軍を退ける反乱軍の猛攻に恐れをなし、1度は《帝国》を棄て砂漠の地から姿を消していた。

終戦後も反乱軍は元凶たる『帝国貴族』の行方を捜すも、その足取りを掴むことができなかった。

おそらく貴族たちは皆彼らを支援する他国へ逃亡したと思われていたが。

「今更かよ」

「今更です。彼らの戦争はあれで終わってなかったのでしょう。帝

国軍に敗北はないのですから」

ミハエルの皮肉。レヴァンには面白くなくて鼻を鳴らす。

「気に入らねぇな。こっちが汗水流して働いて国を興している間、奴らは俺達を追い出す為の軍を再建してた、つう話だろ？」

「そうですね。彼らの狙いは《帝国》の復権による王国の支配。鍵となるのは」

「サヨコさんか」

レヴァン最愛の王妃。彼女の昔の名はサヨコ・K・レヴァイア。

皇帝の正妃の子ではないものの《帝国》の第3皇女、皇族の血を引く者である。

彼女を傀儡の女皇に据えた《新帝国》。きっとそれが『帝国貴族』の狙い。

「だがサヨコさんは」

「関係ありません。『欠陥品』であれサヨコ様が皇女である以上、彼らは皇族救出を大義に乗り込んでくるでしょう」

「てめぇ」

ミハエルは睨みつけられるが涼しい顔をしている。

「欠陥なんて、サヨコさんのことをそんな風に言うんじゃねぇ！！」

「事実です」

ある意味レヴァン以上に《帝国》を知るミハエル。

彼の推測は辛辣で、容赦なかった。

たとえ自らの発言で不快になり、また不快にさせたとしてもミハエルは構わず仕事に徹する。

「貴族たちの得意とする戦場は『政治』です。《帝国》を興しさえすればあとは昔通り思いのまま。傀儡となった新皇帝から帝位を奪う事だって考えるはず。それでサヨコ様は用済みです」

「……ちっ。やりそうなことだな」

「レヴァン様。貴方だってそう思っていたから、今になってサヨコ様にお郷帰りを勧めたのでしょう？」

レヴァンは答えない。ミハエルの言うことは概ね正しかったから。

実は１０年以上も昔に国外へ亡命したサヨコの母と実姉の行方を捜しだしたのはこの王である。

寂しいとか「サヨコさん成分が足りない」なんてふざけている場合でもない。

万が一に備えての避難。

「お前、昔に比べると随分嫌な奴になっちまったな」

「レヴァン様と宰相様。お２人に鍛えてもらえばこうもなります」

「……ジジイめ」

「いえ。貴方にお仕えする方が何倍も大変なんですけど」

国中を『跳び回る』王様を追いかけ、事ある毎に王妃愛を語る彼の相手はそれはもう大事なのだ。

レヴァンに振りまわされず、その上で仕事をこなせるからこその『国王付き』である。

決して名誉職ではない。

ミハエルの愚痴はレヴァンに「話を逸らすな」と無視された。

「とにかく。サヨコさんがいない内に決着がつけるに越したことはねぇ。ミハエル。奴らが襲撃してくる時の予想はつくか？」

「調査の結果、国中に十分な数の『仕掛け』が施されていました。おそらく観光客などに紛れた傭兵の仕業です」

「なんだと？」

「襲撃は数日以内、早くて今晩。しばらくは夜襲への警戒が必要です」

レヴァンは舌を打つしかない。

帝国軍の戦力はおそらく傭兵が主力だろうが詳細は不明。

せめてあと1日あれば『王蜥蜴』の事後処理に派遣した近衛隊以下多くの部隊が王国に戻る。

明日以降ならば万全の状態で迎え撃つことができるというのに。

「今晩は勘弁してぇな」

せめて国に無関係な坊主や嬢ちゃん達を送り出す時間があればいいのだが。

レヴァンはそう思った。

＋＋＋

《新帝国軍》拠点。司令室。

ここは他の部屋に比べるとやけに派手な内装をしていた。決して実用的ではない。

司令室とは名ばかりの私室である。

ファルケは《新帝国軍》の総司令官である中将の前に立ち、硬直していた。

中将は元帝国軍のトップの1人で侯爵の爵位を持つ。

『帝国人』の中でも優れた者とされる、いわゆる『帝国貴族』である。

中将は前の戦争で敗走し散り散りになった兵を時間をかけて秘密

基地に集め、軍の再建に成功した英傑でもある。それで再編した《新帝国軍》の総司令を務めていたりする。

英傑。そうなのだろうか？

きらびやかな階級章と数多くの勲章で軍服を飾る、５０代半ばの小太りな男。

７年以上潜伏していたとは思えないほど肥え太った中将は、戦士には程遠く指揮官としてもどこか頼りない、そんな男であった。

だがファルケは中将のことを疑わない。

中将は父、ジャファル准将の同僚であり戦友だったという。半年前、彼はファルケの存在を知るとわざわざ西校、《Ｗ・リーズ学園》まで会いに来てくれたりもした。

英雄だった父の話をしてくれて、反乱軍に殺された友を悔やみ、涙を流してくれた。そんな中将を不審に思うなんてファルケには出来なかった。

父のことで盲目だったともいえるが。ファルケを《新帝国軍》にスカウトしたのもこの中将だった。

「英雄ジャファルの息子が《帝国》の為に剣を取る。これほど心強いことはない」

帝国最後の剣。その意志を継ぐ者。

ファルケは中将の言葉に酔いしれ、呑まれていた。

そんなファルケだが、今はその中将に任務失敗の報告をせねばならず、失望されないかと内心ビクビクしながら中将の顔を窺っていた。

中将の脂ぎった顔。表情からは何も読めない。

値踏みするような視線に耐えきれず、ファルケは覚悟して口を開いた。

「中将、あの」

「ファルケ君」

中将の声は思いのほか優しかった。

「任務のことは別の者から報告を受けている。残念ではあるが、君が捕まらず無事に帰ってきてくれて何よりだ」

「……は？　でも自分は」

「君は本物の戦場を知らない。失敗がなんだというのだい？　任務で帰ってこなかった兵は沢山いるのだぞ」

そう言われれば何も言い返せない。

「君は英雄だったシュペルの名を継ぐ者。《帝国》の未来になくて

はならない存在だ」
「中将……」
「それに君に何かあっては君の父に申しわけない」
「ありがとうございます」
感激したファルケは敬礼ではなく代わりに頭を下げた。中将に泣き顔を見られるのが恥ずかしかったのだ。
それで彼は、この時ほくそ笑んだ中将の顔を見ることはなかった。
「休みなさい。今夜は忙しくなる」
「……！　では《虎砲》が」
驚いて泣き顔のままにも構わず顔を上げるファルケ。
中将は鷹揚に頷く。
「保有するすべての機体の動力源の換装、改修作業は終わった。場合によっては《雲鯨》も動かす」
「！！」
帝国軍の誇る《機巧兵器》。それは《帝国》が独占していた大帝国の遺産。
今の技術では生産どころかまともな修理、整備さえも出来なかったそれが今日、長い時を経て復活したというのだ。
幼少期に見た《機巧兵器》の勇姿を思い出し、ファルケは思わず胸を躍らせた。

「す、すごい」
「帝都解放作戦。決行は今夜だ。ファルケ君、いやファルケ少尉。君にも出てもらうぞ」
「俺が……少尉」
「作戦の第1段階で傭兵部隊を1つ率いてもらう」
突然の尉官拝命。
中将の作戦に参加せよとの命令にファルケは打ち震える。
武者震いだ。いよいよ来るべき時がやってきたのだ。
『砂喰い』共から『帝国人』の誇りを、英雄の息子である誇りを取り戻す時が。
「君の初陣となるにふさわしい舞台だ。父親にも負けない戦果を期待する」
「はっ！」
ファルケは行きがけとは全く別の気分で、堂々と司令室から退室した。
＋＋＋
ファルケが退室した司令室。

「……とても素直で、それ以上に愚かな少年だ」

中将はファルケをそう評した。

駒としては弱いとも。

「あれの親があのくらい従順ならばもっと使い出があったものを」

「失礼しますよ」

顔を顰めた中将。今の独り言が聞かれたか？

彼の部屋に入って来たのは男だった。

「おお。あなたでしたか」

「先客がいらしていたようなので少し時間を潰してまいりました。今、よろしいですか？」

「もちろんです。ささ、お座り下さい」

中将に椅子を勧められた男。彼は外見に特徴のない、普通の男のようだった。

彼の素性は《帝国》を支援する他国の事業家の１人。それだけしかわかっていない。

しかしこの男がもたらした物資と技術がなければ《機巧兵器》の復活はありえなかったのも事実。それで中将は男を重用していた。

先に男が口を開いた。

「《虎砲》、でしたか。あれの改修具合を見てきました。中々良い仕上がりでしたね」
「そうでしょう。《虎砲改》の完成はあなたが提供して下さった魔石とそれを使う動力器あればこそです」
中将は満足気に頷いたあとで男に謙遜した態度をとった。
「あれはもう《魔導兵器》と呼ばれる代物です」
「ははは。それはまた大げさな。……あんなバカでかい棺桶が？冗談でも酷い」
「……は？」
パチッ。指鳴り音が響く。
次の瞬間、中将は男の暴言を忘れた。
何事もなかったかのように会話を続ける男。
「それで無理を承知でお頼みした件ですけど」
「……銀雹の姫ですか」
アイリーンの拉致を依頼したのはこの男だった。中将は顔を曇らせる。
「すいません。我が軍は只今作戦行動中でして。急ぎならば人を割いてすぐにでも用意しますが」

中将は誘拐に失敗したことを誤魔化した。

しかしアイリーンをすぐに『用意』するとは、まるで物。商品扱いである。

『帝国貴族』にとって王族や皇族、特に『姫』と呼ばれるモノは他国のモノだろうが出世の道具でしかない。

中将の提案に男は「結構です」とやんわりと断った。

「いえいえ。帝国軍も大事な時期だというのは承知しております。偶然手に入れた情報でしたのでつい」

「そうでしたか」

「はい。……《銀雹》のモノならば主様の良いお土産になったと思ったのですが……」

今度の呟きは誰にも聞こえない。

男は話題を変える。

「いよいよ決行するのですね」

「そうです。傭兵をはじめこれだけの戦力を調えられたのは間違いなくあなたのおかげ。感謝しきれませんよ」

「将軍閣下の人徳があってこそです」

上辺だけの褒め合いが続く。

「我が《帝国》を『砂喰い』から取り戻した暁には是非あなたを《

帝国》にお迎えしたい。どうでしょう？」

中将の男をとことん利用する魂胆は丸見えだ。

だが男はわかっていながらそれを了承した。

「その時を楽しみにしています」

「約束ですよ」

「ええ」

固い握手を交わす2人。

「『種』はもう十分に撒きましたし、どうせあなたも忘れるでしょうから」

「……？　何か？」

言ってる傍から。

中将は男との言葉を忘れはじめている。

＋＋＋

レヴァンとミハエルは未だ屋根の上。

2人は帝国軍が仕掛けてくるであろう作戦、それに対抗する王国の戦力について確認した。

兵力は主力部隊は欠いてもなんとかなる。傭兵達が仕掛けたものは分析済みなのでその対応策も立てることができた。

レヴァンに浮かび上がった問題は1つ。

「兵力より兵種のバランスだな。残ってる戦力は戦士系と技術士ばかりだ。あの『仕掛け』に対処するには魔術師が絶対的に不足してる」

「それはなんとかなるかもしれません」

「何？」

レヴァンは怪訝な顔をする。

「おい、そりゃどういうこった」

「実は私が調査している間に学園都市のイゼット様から最新の情報が届きました」

学園から王国へ。

《Aナンバー》の1人と魔術師の学生たちと共に。

「……なんつうタイミングだよ、あのばあさん」

「《C・リーズ学園》だけでなく《W・リーズ学園》からも王国の援軍にと学生が集まっています。学生とはいえエース資格者が率いる部隊です。彼らに後方支援を頼みましょう」

「……仕方ねぇ。編成じゃ学生たちの安全を第一に考えろよ」

ミハエルは了解した。

「それでレヴァン様。イゼット様からの情報ですけど」
「ん？」
「悪いものと悪いもの、それとすごく悪いものがあるのですが」
「全部かよ」
突っ込むしかない。
「如何しましょう」
「……1つ目は？」
「帝国軍が《機巧兵器》を所有している可能性についてです」
「それは予想済みだ。俺らは昔からずっとあれを相手に戦ってたんだ。対処法はいくらでもある」
「それで大丈夫でしょうか？」
ミハエルは不安に駆られる。
この時の彼の直感は不幸にも当たっていた。
「もちろんあんなの市街地で使われたくねぇが。2つ目は？」
「帝国軍の主力となるだろう傭兵部隊のことです」
「あん？　傭兵なんて数ばかりだろ？」
「それが例外がいるようなのです」
次のミハエルの言葉にレヴァンは目を剥いた。
「《炎槍》に《氷斧》。彼女らが帝国軍に雇われている可能性があります」
「待て。そいつらはまさか……《三神器》の内の2人か？」
「おそらく」

「……なんであんなのが傭兵なんてやってるんだよ」

聞きたくなかった。あの2人を相手にすればいくら《盾》の王たるレヴァンでもただでは済まない。

むしろ今の王国の戦力では彼女達に対抗できるのがレヴァンしかいない。

2人の新米傭兵はそれほどの実力者であり、実は有名人であった。

「最悪だ」

「もうひとつありますよ」

ものすごく悪いのが。

「……なんだよ」

これ以上のものなんてないはずだ。

レヴァンは半ば自棄に、投げやりに返事をする。

「サヨコ様のことですが」

「……なんだと？」

これにはレヴァンも目の色が変わる。

構わずミハエルは無慈悲に告げた。

「どのようにしてお知りになったのかわかりませんが……国の事態

に気付いたサヨコ様が、東国のお郷から急いでこちらに向かっているそうです」

「……」

沈黙。

「……」

「……」

「……レヴァン様？」

「ぎゃあー！！」

離れるのも我慢してこっそりと避難させていたのに。

最悪の展開だ。

＋＋＋

3－06b　帝都解放戦　後（前書き）

帝国軍、侵攻開始

新企画、《前書きクイズ》

Q.　ケイオスって誰でしょう？　予想して下さい

3－06b　帝都解放戦　後

＋＋＋

飛んで火に入ろうとする王妃様。

それで王様錯乱中。

「ぎゃあーっ！　ササササ、サヨコさんが来ちまう。駄目ー、今危ないから来ちゃだめぇーー！」

頭を抱え、バンダナごと髪を掻き毟り絶叫。

「でも……今すぐサヨコさんに会いてぇえええええ！」

「どっちですか」

ミハエルはクール。

絶叫するレヴァンに彼は動じない。

慣れていた。

それにミハエルは1つの確信があった。

これでレヴァンに『スイッチ』が入るはず。

アギもユーマに言っていたのだがこの王様、王妃が絡むと無敵になるのだ。

「レヴァン様。落ち着いて下さい。要はサヨコ様が戻られる前に決着をつければいいのです」
「はっ。……そうか。そうだな」
「そうなんです」
「よーしミハエル。お前クビな」
「はい？」

早速効果が発揮した。レヴァンの決断は早い。

「命令だ。お前の宰相補佐官の任を解く。今の仕事ほっぽり出して《技術交流都市》へ行って来い」
「……成程。わかりました」
「そんで6時間以内に帰ってこい」
「無茶苦茶ですね」

ミハエルはレヴァンの意図がわかっている。往復するだけなら直通の《転移門》を利用すれば問題ない。

しかし。

「いくらケイオス様でも数時間で『あれ』の調整は」
「やらせるんだよ。こっちは《三神器》にぶつける戦力がねぇんだから」
「ですが」
「あの野郎がぐちぐち言うなら娘のピンチだって言ってやれ。それでなんとかなる」

「娘……脅してでも間に会わせろと？」
「頼んだぜ。『准将』どの」

昔の肩書で呼ばれ、ミハエルは少しだけ眉を顰める。

「いつの話ですか」
「時間がねぇんだよ。すぐ行って来い。あとは居残り組の野郎どもと宰相のジジイ、他の宰相補佐達で準備する」
「わかりました。……レヴァン様」
「あん？」
「ファルケのことですけど」

ミハエルは気がかりがあって訊ねた。

偉大な父への憧れに付け込まれた、憐れな少年のことを。

「どうなさるのですか？」
「決まってる。とっ捕まえて説教だよ、あの馬鹿息子は」
「……」
「あいつは実の息子のくせに将軍のおっさんのこと、全然わかってねぇ」

レヴァンはそう答えた。

続けてこうも言った。

「ファルケに教えてやりてぇが……おっさんを殺した反乱軍の話なんか聞いてくれねぇよな」
「レヴァン様……」
「ま。説教役は適任者がいる。悪いようにはしねぇ」

「お願いします」

ミハエルは頭を下げる。

「このままだとお世話になったジャファル様に会わせる顔がありません」

「任せな。だからそっちは頼むぜ」

レヴァンはこうして王都防衛の切り札をミハエルに託した。

1人になるレヴァン。

「防衛戦の準備、ジジイにも話しとかねぇとな。あと俺がすべきことは……」

必要なのは《蜃楼歩》が使えなくなる夜戦への対策。

「鍵は……アギか」

襲撃は早くて数時間後。習得は間に合わないかもしれない。

しかし間に合えば大きな力になる。

「よし！」

そう思いレヴァンはアギを連れ出す為に『跳んだ』。

＋＋＋

一方その頃。皆が集まっているアイリーンの部屋。

そこへユーマを訪ねて来たのは、学園から来た彼と同じ《Ａナンバー》の１人。

「お邪魔するよ。ユーマ君は……君、どうしたの？」

「……もう……死にてぇ」

カッコつけた自分を晒された恥ずかしさで。

ユーマは尋問と精神的拷問を受け、正座したまま精も根も尽き果てていた。

とばっちりでアイリーンも再起不能。

それはさておき。

「……どうしてあなたがこの国に？」

「緊急の任務だよ。夏休みだけど仕方ないよね。僕らはエースなんだから」

「ら？」

《新帝国軍》の王国襲撃まで残り５時間。

＋＋＋

この世界で最近起きた戦争といえば３年前。

北国にある《召喚陣》の遺跡を巡った《雪羅の事変》がある。

これは遺跡を占拠した《雪羅の国》対《銀雹の国》を中心とした北国同盟軍の争いであった。結果は多勢に無勢。同盟軍の勝利で終わっている。

この戦争で注目されるのは、北国の盟主であり《銀の大魔術師》と呼ばれる銀雹の王自らが編み出した戦術。

《召喚》を研究する過程で再現された『とある魔術』を活かした新戦術は、世界的に重要な意味を持つ遺跡を盾にして戦った雪羅軍に対して損害をほぼ出さずにして制圧することを可能とした。後の戦術にも大きな影響を与えることになる。

使われた『とある術式』。それは《転移》。今の時代ではなくてはならない移動術式。

その戦術とは、敵地に工作兵を潜入させて簡易式の《転移門》を設置、直接兵力を送り込んで強襲をかける電撃的な制圧作戦であった。

＋＋＋

その日の夜。《新帝国軍》は予定通り王国に夜襲を仕掛けた。

王国から遠く離れた地下基地で準備をするファルケ。

傭兵部隊を率いる彼が総司令である中将から直接聞いた作戦はこうだ。

まず予め傭兵が仕掛けておいた《転移》の魔法陣を使い先行部隊を投入。強襲して王国の防衛隊の撹乱と《転移門》や研究所など主要施設の占拠を図る。

同時に国外に待機させてある《機巧兵器》を含めた攻城部隊が進軍。その火力で一気に城を制圧して王の首を取る。

最後に中将が指揮する本隊が王国全域を虱潰しに反乱軍を駆逐。

以上が帝都解放作戦の内容である。

強襲故に内容はシンプル。傭兵の数と《機巧兵器》の火力に頼り過ぎな感はある。

敵の寝首を掻くことにファルケは不満があるが、相手は人でなし

の『砂喰い』。構うことはないと自分に言い聞かせた。

何よりこの作戦が彼の帝国軍人としての初陣である。

上官の命令に従い任務を完遂する。それが正しい帝国軍人としての在り方。

全幅の信頼を寄せる中将が立てた作戦をファルケは疑うことがなかった。

「これだけの戦力をもって夜中に奇襲ねぇ。軍といってもやることはセコいわん」

「……夜盗の真似ごとか」

ただし雇われである彼女達はファルケと違う意見を持つようだ。

ファルケはすでに準備を終えた傭兵達の話を聞き、振り返る。

「なんだと？」

「何って言った通りよん。やり方が汚い」

赤い髪の女傭兵はきっぱりと言い切った。

「宣戦布告もなく戦争を仕掛ければ民を避難させる時間もない。これじゃ被害が大きくなる」

「……傭兵風情が。狗の癖に中将の作戦に口答えする気か？」

「正規軍はどうした？」

今度は氷の目をした巨漢の傭兵がファルケに問う。

「編成された強襲部隊は指揮官のお前と傭兵だけ。本隊はどこで見物している？」

「それは」

「《帝国》自慢の《機巧兵器》。あれもここには配備されていないな。どういうつもりだ？」

ファルケを見据える彼の目は冷たい。思わず居竦んでしまう。

口籠るファルケに《氷斧》は諦めた。

「所詮駒か。何も知らされてないのだな」

「なっ！？」

「それにねぇ、この作戦なんだけどもしかすると」

「い、いい加減にしろ！！　傭兵の癖に」

ファルケは部下である2人に向かって怒鳴り散らした。

傭兵なんか『砂喰い』なんかと見下すことしかできない彼は話を聞こうとしない。

それが自身の成長の妨げになることに、彼は気付かない。

「命令だ。余計な口出しはするな」

「……わかったわよん。了解です、少尉様」

「少尉……そうだ。俺は《新帝国軍》少尉、ファルケ・シュペルな

んだ」

青褪めた顔を元に戻し、ファルケは与えられた肩書に陶酔しはじめる。

「帝国最後の剣、ジャファルの子。英雄の再来……」

「「……」」

「この戦いに敗北は許されない。そう。『帝国人』の誇りに懸けて」

傭兵達は何も言わない。

《氷斧》はともかく《炎槍》はむしろ少年のことを不憫に思った。

《帝国》という過去に囚われた彼の未来。

それがあまりにも狭く、決めつけられたものだったから。

＋＋＋

今夜が王国最期の時。

先行強襲部隊の傭兵約千人の前に立つファルケ。

彼は指揮官として侵撃の号令を下した。

「行け、《帝国》の剣達よ！　『砂喰い』共から我等の国を取り戻せ！！」

傭兵達に向けて言うにはあまりにも道理に合わない狂言。

一方的な開戦の火蓋は切って落とされた。

１０人単位の部隊に編成された傭兵達は、それぞれ襲撃ポイントに繋がる《転移》の魔法陣へ次々と飛び込んで行く。

「遅れるなよ。お前たちは俺に付いてこい！」
「はぁい」
「……」

最後にファルケも《炎槍》、《氷斧》を連れて魔法陣を抜け、王国へと《転移》する。

揺るがない勝利。

この戦いの先にある栄光。

「でもやっぱりこれって」

《帝国》の復活。そこで英雄となる自分を信じて疑わないファル

ケは。

「……え？」

檻の中に《転移》した。

「な、なんだこりゃ！？」

「基地に戻るぞ。……駄目だ、使えねぇ」

先に捕まった同じ部隊の傭兵達だ。彼らも何が起きたのかわからず慌てふためいている。

ファルケも同じ。想像していなかった展開に頭の中が真っ白。

「な……んで？」

「ほーらねん」

《炎槍》はがっくり。

「この戦術って所詮奇策なのよん。しかも3年も昔のもの」

「《転移》による奇襲は研究され尽くしている。『仕掛け』の位置がバレていたらあまりにも脆い」

つまるところ、「ここから攻めますよ」と言ってるものだ。

魔法陣の仕掛けを施していたのは下っ端の傭兵だった。カムフラージュも杜撰だったに違いない。

予想通りだった展開に溜息を吐くしかない2人。

「他の隊も捕まっただろうな」

「前も思ったけど、傭兵ってお粗末ねぇ。また転職先、考えようかしらん」

「……」

ファルケには《炎槍》の愚痴なんてもう聞こえていない。

呆然。

「嘘だ。こんなの、こんなはずじゃ……うあっ!?」

「っ」

「きゃっ」

次の瞬間。

打ち上げられる照明弾が夜空を白く照らし、ファルケと傭兵達の目を眩ませた。

＋＋＋

ほぼ同時刻。ファルケ達のいる場所とは別の襲撃ポイント。

国全域で打ち上げられた光の玉が夜をかき消す。

この照明弾は技術士の育成に長けた《W・リーズ学園》の学生たちが持ち込んできた試作品。

「やるじゃねぇか、学生さんもよお」

転移先を細工されて、まんまと檻の中に飛び込んでくる傭兵たち。

それを見たレヴァンは、隣に立つ少年を褒めてバシバシと背中を叩いた。

「あはは。お褒めに頂き光栄です」

朗らかに笑い、それでいて背中を叩かれる力強さに少し顔を顰ませるのは、中性的な顔立ちをした黒衣の少年。

彼は《C・リーズ学園》からの援軍でエース資格者。《Aナンバー》のナンバー2。

《黒鉄》の魔術師、マーク・K・フィー。

学園長のイゼットが先見の明を以て王国に派遣したのは、学園でも魔術師の精鋭チーム、《黒耀騎士団》を率いた彼であった。

イゼットの情報とミハエルの調査で奇襲に気付いていた王国軍。彼らは援軍に来た学生たちの助けもあり数時間で見事に対応。

傭兵達を分散して警備隊の詰め所に閉じ込めた。あとは眠り粉でも使って無力化すればいい。

「僕達が上手くやれたのも王様やこの国の人たちのおかげです。国中に仕掛けられた魔法陣を探して貰わなければ細工する時間もありませんでした」

「ガキんちょどもが役に立っただろ？　なんせ国のあちこちで砂の掃き掃除してるからな」

ちなみにマークたち《黒耀騎士団》の魔術師が仕掛けたのは《二重転移》と呼ばれるトラップ。

転移先の上に《転移》を上乗せすることで術者を意図せぬ場所へ飛ばす、魔術の応用だ。

こうして奇襲は完封され、帝国軍は出だしを完全に挫かれた。

対する王国側は国民を地下都市へと避難済み。夜戦の不意打ちに備えた照明弾の数も十分。

「しかし王様。わざわざ転移先を弄るのではなく、使えなくした方が良かったのではないですか？」
「こいつらは全員、撹乱が目的だ。奴らの本隊は国の外にいる」
マークの質問にレヴァンはまだ序盤だと答えた。
「《転移》できねぇと気付かれると本隊に合流される可能性がある。だからおびき寄せて閉じ込めちまった方がいいんだ。今残ってる兵力だけじゃ国に侵入されるのを防ぐので手一杯になるからな」
本番は国の外郭で展開されるであろう防衛戦。
帝国軍の兵力は不明だが、王国は約５千の兵力で侵攻を阻止しなければならない。
正直言って今の王国軍は国内に待機させるだけの兵力がない。外郭を突破されると街も城もすぐに制圧されてしまう。
もしも帝国軍の目論見通り、奇襲が成功して外と内両方から攻められることになっていれば、王国はひとたまりもなかった。
（ばあさんには今度、お礼言わねぇとな）
レヴァンはマークたちを派遣してくれた学園長に密かに感謝した。
「防衛は一晩持てばいい。明日の朝には外に出ていた王国軍の兵３万人が戻ってくる」
「つまり籠城戦ですね。僕たちはどうしましょう？」

マークが学園長に頼まれたのはレヴァイア王と王国の支援。内紛に参加しろとは言われていない。

「外はいい。お前らは国内に待機して避難してる奴らを頼む」

レヴァンも元より学生たちが内紛に巻き込まれるのを良しとしていない。

彼は避難民のいる《新開発地区》の地下都市、国交の要でいざとなったら脱出経路となる大型《転移門》、《技術交流都市》から来た技術士の研究員がまだ多くいる《王立研究所》の3か所に学生たちを待機させ万が一の時に備える。

万が一とは帝国軍の侵入を許した時。学生たちに頼むのはその時に国民を誘導して王国の外へ逃がす重要な役割だ。

マークは了解して王に頷いてみせた。

次にレヴァンは伝令に控えさせていた近衛見習いを呼び、1人の少年に声をかけた。

「シュリ。お前たちも黒い坊主たちと一緒だ。付いて行け」

「はい」

「学生たちの道案内を頼む。こっちの隊長はお前だ」

「王様!?」

突然の抜擢に驚くシュリ。

「なんで」
「お前が強いからだよ」
守ろうと想う心が。
レヴァンは忘れていない。反乱軍のリーダーに泣きながら石を投げつけた、あの小さな男の子の勇気を。
「俺が？」
「お前は絶対に諦めねぇよ。お袋さん、守りてぇんだろ？」
「王様……」
シュリが返事をしようとしたその時。
外からの轟音。振動がレヴァン達のいる詰め所まで響く。
「な」
「何だ？　今のは」
飛び出した先で彼らが見たものは、ここより離れた場所で闇夜を照らす、照明弾とは違う光源。
空を灼く、赤い火柱。
「まさか……あれが《機巧兵器》ですか？」
「違う。こいつは」
レヴァンに誤算があるとすれば、帝国軍の主力部隊に投入される

と予想していた彼らの存在。

「《炎槍》か！　帝国軍の野郎、あいつらを使い捨ての奇襲部隊なんかに組み込みやがって」

＋＋＋

閉じ込められた檻は詰め所ごと火柱で吹き飛ばした。

「……脱出するにしても目立ち過ぎだ」

「いいのよん。どうせ後方撹乱がお仕事なんだから。そうでしょ？」

「あ、ああ」

ファルケは受けたショックでへたり込んでしまい、まともな言葉を発しない。

残ったのは3人。

同じ檻に捕まっていた傭兵達は、《炎槍》が放った火柱の衝撃に巻き込まれ瓦礫の中だ。

「さーて、隊長さん。これからどうするのかしらん？」

「……あ？　俺、俺は……」

「？　……駄目ね。使い物にならないわ。撤退する？」

「だ、だめだ」

うわごとのようにファルケは喚く。

「駄目だ……2度も任務にし、失敗したなんて。中将に知られたら……俺は……」

少年のあまりの哀れさに《炎槍》は同情した。彼女はとっくにファルケの運命に気付いている。

利用されたことに気付かず流された代償。

それが使い捨て上等の前線送りだなんて。

「……わかったわ。任務続行。それで行きましょ。《氷斧》？」
「ならばまず捕まった傭兵の解放だ。数が揃わなければ話にならん」
「あらん。あたいが1人暴れてもいいのよん？」
「……勘弁してくれ」

火の海の中を走り回るなんて、いくら《氷斧》といえど嫌なものは嫌らしい。

調子に乗って来た《炎槍》。《氷斧》も彼女に触発されて心なしか雰囲気が緩む。

「あ、あんたたちは……この状況でどうして」
「ほら。あなたも立ちなさい」

座り込んだままのファルケに彼女は手を差し出し、立ち上がらせる。

「立って。自分の足で立って、自分の目で物事を見なさい」
「あ……」
「信じるのは他人の言葉じゃない。自分の肌で、心で感じたものよ。自分の頭で考えて感じるままに身体を動かしなさい。あなたに欠けたものはそういった想いを描く力よ」
「俺、に？」
諭すような言葉だった。ファルケは彼女のあつい眼差しに魅入られる。
「あなたは……」
「最後まで付き合ってあげる。だからお坊ちゃん。あなたは任務とか関係なく自分の選んだ道の結果ちゃんとを見て、感じとったものをしっかりと受け止めなさい」
それだけ言って《炎槍》は駆け出した。《氷斧》もそれに続く。
「俺は……」
彼女が焼き付けた、ファルケに生まれる迷い。
おぼつかない足取りのまま、彼は赤い髪の傭兵を追いかける。
『帝国人』であり続けることを選んだ自分の道。
その先を見る為に。

十十十

《再開発地区》の街を迷いなく駆ける《炎槍》と《氷斧》、そしてファルケ。

他の傭兵が捕まっているであろう詰め所の場所はすべて把握している。傭兵の2人は事前に国を視察しているし、ファルケにすればここは一応彼の故郷だ。

近くの詰め所に僅か数分で辿りつけるはず。

ところが。

「ねぇ。道に迷ってない？」

「……」

彼女の相棒は答えない。

実は3人はもう10分以上街中を走り回っていた。迷子だ。

「照明弾のおかげでどこも明るいから、暗くて迷いましたなんていい訳できないのよねぇ」

「……引き返すか？」

「そうね。ここは火燕ちゃんに誘導してもらって」

「待って下さい」

踵を返す傭兵達をファルケは呼び止めた。

「どうしたのん？」

「いくらなんでもおかしい。俺の知る限りこの辺りはまだ昔の、帝国風の煉瓦造りの家がたくさんあったはずです。なのに」
「そうは言ってもねぇ」
ファルケ達のいる場所は王国らしい、退黄色の色をした集合住宅ばかりしかない。
「最近建て直したんだろ」
「違う。そんなこと」
そんなことはない。いくらファルケでも最近見た街並みを間違えるはずがない。
おかしい。
砂でできている集合住宅を見て、ファルケは何かが引っ掛かっている。
彼は気付いた。
「砂……そうだ！　あいつなら」
ファルケは思い出した。
今この国には砂を操る《精霊使い》がいることを。
「大声を上げるな」
「聞いて下さい。俺達が道に迷ったのは」
「黙って。来たわよん」
「えっ……！？」

勘づかれたことに気付かれたようだ。

ファルケが見たのは、偽装した砂の家が崩れて大きな波になったところ。

大量の砂が3人を呑みこまんと襲いかかってくる。

「う、うわあああああっ」

「ちょっと、《氷斧》！」

《炎槍》の指示で《氷斧》は背負っている武器を手にした。

彼の二つ名に相応しい巨大な戦斧。

「……フン！」

《氷斧》は斧を振り下ろして風を巻き起こした。

《凍破》。学園ではディジー・バラモンドが得意とする広範囲の凍結破砕術式。

砂の大波はファルケの目の前で凍りつき、砕け散った。

「す、凄い」

「まだよん」

「……！」

続いて周囲から砂がせり上がり、壁のようになって3人を囲む。

「閉じ込める気？」
「また凍らせてもいいが……きりがないな」
「ど、どうすれば」
「突破するわよん。２人とも付いてきて」

《炎槍》は愛用の槍を構えて突撃。砂の壁を突き破って突破口を開く。

「来たわね。そこっ！」
「っ！？」

壁を突き破った先。

《炎槍》を持ち構えていたのは、竜巻を纏う細剣。

《旋風剣・疾風突き》

不意を突かれた《炎槍》。それでも彼女は突き出した槍を手元に引き寄せ、剣を受け止める。

「！？　……傭兵の癖に、やるじゃない」
「そうかし、らん！」

均衡した状態から槍を振るい、剣を弾いた。

バックステップして体勢を整える襲撃者を《炎槍》は改めて見る。

西国の人間らしい金の髪をした、ファルケと同じくらいの少女だった。《砂漠の王国》のものでない白地に翠の刺繍を施した騎士服に身を包んでいる。

何より彼女を見据えるまっすぐな翠の瞳が《炎槍》に強い印象を与えた。

「お嬢ちゃん、何者？　王国の子じゃないわよね？」
「そうよ」
「危ないわよん。部外者ならあたい達やこの国に関わらないで欲しいのだけど」
「……」

エイリークは剣を構えたまま黙る。

「お嬢ちゃん？」
「先輩に聞いたわ。《帝国》が逆恨みしてこの国を襲いに来るって」
「まぁ、間違ってないわねん」
「ユーマは……アタシにも立場があるから関わるなって言ってたけど」

そこでエイリークはキッ、とここにはいない誰かを睨みつけ、叫ぶ。

「そんなの聞いて、放っておけるわけないじゃない！」

《旋風の剣士》、参戦表明の瞬間。

この時、近くに隠れていたユーマは頭を抱えている。

＋＋＋

3－06b　帝都解放戦　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

《新帝国軍》の侵攻と同時に展開された傭兵部隊の強襲作戦。

マークたちのおかげで奇襲は食い止めたものの、それでも《炎槍》と《氷斧》、２人の強敵がまだ王都に残っている。

迎え撃つのはエイリーク達。レヴァンは間に合うのか？

次回「王都防衛戦」

「……見たか。これが新必殺、《王様ジャンプ》だ」

「そんな技じゃねぇ！？」

３－０７ａ　王都防衛戦　１（前書き）

はじめは王国サイドから。初戦はエイリークＶＳ《炎槍》

《前書きクイズ》

＊前回の問題は更新してから３０分以内に解かれました。お見事。

Q.　現在、学園に残っている《Ａナンバー》は３人。誰なのか答えよ（難易度Ｅ：以前までの話に十分なヒントあり）

Q.　今後の展開で王国へ救援に来る《Ａナンバー》は誰か？　１人答えよ（難易度Ａ：僅かな伏線。ほぼノーヒント）

3－07a　王都防衛戦　1

＋＋＋

月明かりに輝くのは銀色の金属板。

『銃口』を向けられた少年は恐怖でただ震えることしかできなかった。

少年は怖かった。アレは悪魔だ。

そうでなければ《帝国》の誇る《機巧兵》一個中隊がたった2人を相手に全滅するはずがない。

全滅。

生存者ゼロ。

撤退した指揮官を除き、生き残ったのは従兵であった少年1人だけ。

その少年も無事とはいえず片腕を潰されて重症。ただ失くした腕

からくる激痛は感じる暇はない。恐怖で麻痺している。

それほど少年は目の前にいる悪魔が恐ろしかった。

悪魔は今、少年の前にいて武器を向けている。

「楽にしてやる」

選択した魔法弾は《ペイン・キラー》。

魔法弾は少年を確実に撃ち抜き――

「やめろぉお！」

アギは彼の前に飛び込むと魔法弾を《盾》で弾いた。

彼はアギの割り込みに一瞬驚いたようだったが、それだけだ。

冷徹な眼差し。煮え滾る怒りを抑え、彼はアギに告げる。

「どけ」

「っ、させねぇ」
「お前等の敵だぞ」
「違う」
「お前が言っていた『帝国人』だぞ」
「違う！！」

アギは少年を彼から庇った。

砂漠の民の敵であるはずの《帝国》の少年をその手で、その《盾》で守る。

とめたかった。

アギはこれ以上の惨劇を見たくなかったのだ。

帝国軍だったモノはすべて彼によって潰された。人も兵器も、残骸と呼べるモノしかここにはない。

彼の一方的な虐殺と蹂躙。人の為せる業ではなかった。

（わかる。お前の怒りはわかるけど、こんなの……違うだろ？）

アギだって変貌した彼と彼のした所業に怖くなかったわけではない。

それでも彼を正面から睨みつける。

訴える。やめろと。

「もういいだろ？　軍の奴らはもういねぇ。だから」

「許せるのか？」

「っ」

彼はアギに問う。

「お前は、あいつらがやったことが許せるのか？」

許せるわけがねぇ。

アギは一晩でたくさんのものを奪われ、傷つけられた。

だけど言えなかった。アギは彼に見せつけられたから。

憤怒、憎悪、復讐、報復。

そういったものをすべて。

彼から感じ取ったのは悪意を狩る悪意。

だからアギは。

「……ねぇよ」

「何？」

「許さねぇよ。《帝国》が俺達にしてきたこと……それにお前が軍の奴らにしたことも全部」

だからこそアギは彼の前で《盾》を構えた。

戦う決意を固める為に。

この先ずっと戦わねばならない本当の『敵』と向き合う為に。

「潰し合ってどうする！？　傷つけるのも傷つけられるのも俺はまっぴらだ！」

「知るかよ。俺は許さない。それだけだ」

彼は揺るがない。

「お前がどんなこと言おうがあいつ等はお前等から奪い続けるぞ。砂漠の民、たったそれだけの、くだらない理由で」

彼は許さない。

理不尽なモノに対する怒り。アギの中にも燻るそれが、心のどこかで彼が正しいと訴えている。

だけど。

アギに宿る《盾》が彼を認めさせなかった。

その《幻想》は守るモノだから。

「だったら、だったら守ってやる。守れるようになってやる」

アギは彼に向かって叫び、手にした《盾》に誓う。

「俺は、お前みたいには絶対にならねぇ！」

これは少し先の未来の話？

それとも――

＋＋＋

現在より数時間前。《砂漠の王国》の王城。

ユーマのもとに訪れた学園のエース、マーク・K・フィーは集まっていた彼らに王国へ来た事情を話し、エースとして《精霊使い》に協力を要請した。

これに対しユーマは後方支援ならとマークに了承。防衛戦に参加することになる。

戦争。

少し前の優真ならばニュースの中の話であって直面することはまずないことだった。

しかし、ここは彼のいた国でなければ世界までも違う。ありえないと思う方がおかしい。

「争いなんて事前に止められたらそれが一番だ。でも今は時間がない」

「マークさん」

「でも被害を最小限に抑えることなら今からでも間に合う。だから僕は王国の手伝いにここへ来たんだ」

「……」

受け入れなければならない現実だったのだ。その上でユーマは自分にできることを考える。

砂漠にある王国ならユーマの精霊である砂更はいつも以上に力を発揮できる。今ならば戦う手段以外のことで国の人を守ることができるはず。

そう思った自分の甘さに彼が気付くのは少しあとの話だ。

ユーマがマークに協力すると伝えたのとほぼ同じタイミングでレヴァンが瞬間移動して現れた。

ドアも開けずいきなりのこと。

「レヴァンさん。それはマナー違反じゃ」

「緊急なんだよ。おっと。そこの黒い坊主がばあさんが寄越したエースだな」

ミハエルの話からマークの正体を見破るレヴァン。

「俺が王様だ。早速だが頼むぜ。この国は魔術師が足りねぇ」

「よろしくお願いします」

「精霊を連れた坊主もだ。関わるなと言ったさっきの話は撤回する。坊主の精霊の力、貸してくれ」

「わかりました」

エースの2人は頷いて了解した。

「西校の学生たちはもう集まってもらってる。近衛隊宿舎の方だ。シュリ、坊主たちを案内してやってくれ」

「は、はい」

「近衛見習いも学生たちと合流。作戦会議にも参加しろ。アギは別件で俺に付き合え」

「俺？」

「急げ」

矢継ぎ早に指示を下すレヴァンはアギを強引に外へ連れ出した。

今度はドアから。どうやら《蜃楼歩》は人を連れて瞬間移動はできないらしい。

マークは初めて会う王を見て一言。

「せわしない人だったね。アギ君みたいなバンダナしてるし」

「非常時でなくても大体あんな人でしたよ」

その後でユーマはマークと少しだけ打ち合わせをすると、シュリの案内で近衛隊宿舎へと向かった。

ところが。

向かおうとしたところでユーマはうしろから首根っこを引っ張られた。

エイリークだ。

「ぐぇ」

「ちょっと。置いてく気？」

「は、はなして……アイリさんの件があるんだ。エイリークも気を付けた方がいい」

「だからって」

「前に傭兵に攫われたこと、忘れてないよね？」

「……わかってる。でもあの時のアタシとは違う」

エイリークは頑なに付いて行くことを主張した。今日までの著しい成長から足手まといにはならないという自信が彼女にはあった。

何より、彼女にはユーマに無茶をさせないとエイルシアの約束があるのだ。

加えてエイリークは以前攫われてユーマを巻き込んでしまったことを忘れていない。

その時彼がどれだけ酷い目に遭って自分を助けだしたことも。

エイリークは、いくら前線に立たない後方支援といってもユーマを信用できなかった。

「俺、シアさんにエイリークが危ないことしないように頼まれてるんだけど」

「そんなのお互いさまよ」

エイリークに「一応お姫様」とか「立場ある身」だからと説得するが、彼女はなかなか納得してくれない。

仕方なく隣の魔術師に援護を求めた。

「……はぁ。マークさん」

「君も大変だね。……ウインディさん。いくら君がリアちゃんの後輩で剣の腕が立つといっても、エース資格者でもなければ僕の騎士

団員でもない。君はただの学生だ」
「先輩」
マークは姫である前に学生であるという視点でエイリークに話をする。
「ここは学園でも学園都市でもない。国民でもない学生に他国の作戦に参加する義務も介入する権限もないよ」
「でも」
「君には君にしかできないことがあるはずだ。僕がユーマ君を連れて行ったあと、もしもの時残された彼女たちは誰が守るんだい？」
「あっ……」
視線を向けられた先にいるのはミサとポピラ。
特にミサは襲撃されると聞いて不安そうにエイリークを見ている。
「リィちゃん……」
「彼女達のこと、頼んでもいいかい？」
「……わかりました」
誰よりも守るべきものがここにいることに気付かされる。
エイリークは頷くしかなかった。
ひと揉めはしたが、こうしてユーマとマークはそのまま近衛隊宿舎へと移動した。
「流石ですね」

「あはは。普段僕が誰の相手をしてると思ってるんだい。じゃあ、行こうか」
「はい。シュリ君、案内をお願い」
ユーマはこのあと、マークが連れて来た《黒耀騎士団》と《W・リーズ学園》の学生たちと合流し王国軍の防衛作戦の会議に参加した。
この時、会議の席に王の姿はなかった。
作戦の内容は防衛戦の準備。マークたち魔術師は《二重転移》トラップの仕掛けを施し、西校の技術士たちが打ち上げ式照明弾の設置作業を、他にも有志で集まった学生たちは近衛見習いの少年達と共に一般人の避難誘導と警備を担当した。
ユーマは砂更の力を使い前線の防御陣地構築の方を手伝った。
砂とはいえあちこちに山を作れば進路妨害の障害物や遮蔽物になる。ユーマは王国軍の指示で砂の山やら谷やらを作り、兵が多くの罠を張った。
また、学生たちの役目は戦の準備まで。防衛戦には基本参加しないことになっている。
その中で義勇部隊となるマークら《黒耀騎士団》、西校から来たエースとその騎士団、そしてユーマの３０数名は有事に備え、遊撃として自らの意思で王都や避難施設となった地下都市の警護に就くのだった。

十十十

一方、ユーマ達が出て行ったあと。

「何よ。アタシだって……アンタのことは姉さまに頼まれてたんだから」

エイリークはユーマ達に付いて行けず不貞腐れていた。どこか言い訳染みた台詞。

ミサはエイリークが残って安心する反面、また仲間外れにされたと拗ねてしまった彼女にちょっぴり申しわけない。

「リィちゃん……ごめんね。でも危ないのは」
「わかってる。けど」
「エイリークさん。よかったら私を手伝ってもらえませんか？」

そこに彼女は1つ提案をした。

「ポピラ？」
「《王立研究所》へ行きます。ミツルギさんに風葉ちゃんを連れて行かれたのでエイリークさんには護衛を頼みたいのですけど」
「……何をする気？」
「私は技術士ですから。私は私なりにこの国の為にできることをやろうと思います」

昔に比べればポピラもエイリークたちに感化されて、多少積極的（あるいは攻撃的）になったものだが。

「らしくないわね」
「そうでしょうか」

今回は流石に気を遣われてるのだとエイリークはわかった。

でも。

「どうでしょう？　付いてきてくれませんか？」
「行くわ」
「リィちゃん？」
「アタシ達もユーマ達と違うことで何かができる。そういうことね」

ポピラは返事を返さなかった。

でもエイリークは概ね正しいとそう思う。

第一じっとしてるなんて性に合わない。

「技術士の名言に『こんなことはあろうかと』というのがあります。これを実践するだけです」
「何よそれ。大体裏でこそこそするのはユーマの専売特許よ」
「ちょ、ちょっと。２人とも待って」

まさかひとりぼっち？

慌てだすミサ。

「ミサさんも行きますよ。私の見立てでは襲撃された時、兵のいないお城よりもあそこや地下都市の方が安全なはずです」
「ええっ！？」
「決まりね。アイリィもいい加減布団から出てきなさい」
「……」
のそりと布団から這い出てくるもう1人のお姫様。
『かぜはげきじょー』の巻き添えを受けて悶えていた彼女も随分落ち着いたようだ。
顔が赤いのは布団を頭から被っていた暑さのせい。多分。
それとは別にしてアイリーンの様子がどこかおかしい。
沈んでいる。どちらかというと……拗ねてる？
「私は……」
「アイリィ？」
「マークさんが来てから私はずっと……相手にされませんでした」
「……アンタねぇ」
エイリークは呆れた。
その間もアイリーンはか細い声で愚痴を零す。
「魔術師が必要って言ってたのに。それこそ私の出番なのに……ユーマさんもマークさんも、私に声をかけず行ってしまいました」
「布団被ってて気付かれなかっただけじゃない。ほら。いいから行

くわよ」
「……」

《銀の氷姫》の復活はまだ先のようだ。

＋＋＋

エースとしてマークと共に王国軍に協力するユーマ。

レヴァンに話があると連れ出されたアギ。

ユーマと別行動をとり《王立研究所》へ向かうエイリーク達。

それぞれが帝国軍の襲撃に備え動きだす。

なんだけど。

「放っておけるわけないじゃない！」

現在。

巨大な火柱を見て研究所から飛びだしたエイリークは今、赤い髪と赤い槍を持つ女傭兵を前に剣を構える。

それを影から見て頭を抱えるのは、傭兵たちを罠へ誘導していたユーマ。

「ああもう。台無しじゃないか」

どうしてこうなった？

＋＋＋
王都防衛戦
＋＋＋

《炎槍》に続いて砂の壁を突破した《氷斧》とファルケ。

ファルケは目の前で剣を構えるエイリークを見て、驚きの声を上げた。

「お前は！」
「成程ね。アンタも傭兵の手先だったわけ」
「ち、違っ」
「はいはい。お喋りしない。お嬢ちゃん、一応3対1よん。だけど退く気ない？」

「ないわよ」

エイリークは即答。

この傭兵達は何としても抑えなければならないことを彼女は理解していた。

王国のどこからでも見渡せたあの巨大な火柱。

あんなもの国のあちこちで連発されたら、王国は中から瓦解してしまう。

「止めるわ」

「……いいわね。まるで正義の味方じゃないのん」

「え、《炎槍》さん!?」

流石に非難するファルケ。

彼はまだ《帝国》に大義があると思っている。

「その言い方まるで俺達が悪役……」

「立場が変われば見方も変わる。あなたの正義なんて個人の価値観の1つでしかないわよん」

「そんな」

「それよりもお坊ちゃん。あの子をちゃんと見てなさい」

「え?」

《炎槍》はファルケの方を振り向かず、調子を確かめるように手

首の返しだけで槍を何度か振り回す。

「手出しは無用よん。あなたはお嬢ちゃんだけを見て、あの子のありのままを感じとってみなさい。わかりやすい子よ」

「感じる？」

レッスン1。そう彼女は言った。

「《氷斧》、あんたも」

「……別行動は？」

「あの坊やが姿も見せずに警戒してるわよ。念の為じっとしてなさい」

「……」

《氷斧》は従がって戦斧を手にしたまま動くことはなかった。

《炎槍》は2人から離れ、1人エイリークの前に進む。

「1人？」

「問題ないでしょ？　正直言えばこんな賊みたいな真似、あたいもしたくないのよん」

ファルケと離れた事をいいことにこっそり本音を漏らす女傭兵。

「ならなんで」

「大人のじ、じょ、う。無職は辛いのよん」

ふざけてる。だけどエイリークは挑発に乗らない。

不意打ちの必殺技を止められた。その事実が彼女の気を引き締めている。

ただまっすぐ翠の瞳で睨みつける。

「……合格。お嬢ちゃん。頑張りなさい。あたいを食い止めればそれだけ街の被害は抑えられるわよ」

「っ！」

槍の穂先に炎が宿る。

その生み出された炎の赤があまりにも澄んだ色をしていて、エイリークは息をのむ。

（あんな炎を《幻創》できるのに、どうして傭兵なんか）

「見せて頂戴。あなたの力。《幻想》を創るあなたの想いを」

「……行くわよ」

エイリークの細剣に風が集まる。

纏う風は剣のまわりで渦を巻き、吹き荒れる。

《炎槍》対《旋風の剣士》

「来なさい。このへそ出し放火魔！！」

「失礼な子ね。これは民俗衣装よん」

激突。

＋＋＋

槍は剣に比べればリーチが長く攻撃範囲が広い。しかし槍のような長柄武器は共通の弱点として至近距離での取り回しの悪さがある。

もちろんエイリークも槍使いである傭兵に対しそこを突く事にした。

（踏み込みの速さなら――）

エイリークは足の裏に溜めのイメージ。

圧縮した空気を爆発させ、その勢いで大きな加速力を得て走り出す。

（負けない！！）

風属性移動術式、《疾駆》。

《疾駆》の加速を十分に活かし、突撃して彼女が繰り出そうとするのは、お馴染の必殺、《旋風剣・疾風突き》。

予想以上のスピードで間合いを詰められた《炎槍》は、エイリークに向けて片手で槍を持ち、カウンター気味に突きを放った。

目前に迫る炎の穂先。

エイリークは肌を灼く感覚、それよりも前に空気を通して伝わる『感覚を灼かれる』感覚を頼りにカウンターに反応。

半身を右に捻り、紙一重で突きを躱す。

エイリークの見せたこの独特の見切りは《烈火剣》を使うリアトリス、《熔斬剣》を使うリュガといった火属性の魔法剣士を相手にすることで身につけたものだ。

これには《炎槍》も驚いた。

「っ！」

「そこおっ！」

捻った体を弓を引き絞るようにして、そこからエイリークは渾身の突き技を放つ。

《旋風剣・疾風突き》

当たると思った次の瞬間、《炎槍》が繰り出したのは火属性の防御術式である《爆炎壁》。

これは爆発の衝撃波で攻撃の威力を相殺させる、《爆風壁》や《

爆風波》と同等の術式だ。

2人は間近で生じた爆発に呑まれ、同時に《旋風剣》の衝撃波はかき消された。

「くっ！」

「仕切り直しよん」

《爆炎壁》の弱点は《爆風壁》と違い術者も爆発の影響を受けるので多少のダメージを負ってしまうこと。

ところが《炎槍》は火傷も気にせず、爆発の反動を利用し大きくバックステップ。詰められた距離を開けた。

「まだよ！」

エイリークは爆発の余波を《旋風剣》で振り払うと、もう1度傭兵に向かって走り距離を詰める。

《炎槍》はカウンターは見切られる事を知り、今度は両手で槍を持ち迎撃する構えを取った。

エイリークの次の手は彼女の得意とする《月の型》の連続剣技だ。

上弦と下弦。2つの弧を描く2連斬撃、《双月》。

対する《炎槍》は放たれた《双月》の2種類の軌道をそのままトレースし、手にした槍でまったく同じ軌道を描き容易く打ち払った。

この技は。

「鏡月！？」

「割と有名な剣技よねぇ。あれくらいなら真似できないわけじゃないわよん」

「だったら」

もっと速く、もっと鋭く。

エイリークは次々と剣を繰り出した。

＋＋＋

真上から飛び込む幹竹割りの《断月》、着地と同時に足元を薙ぐ《水月》。

さらに円を描くように放つ連続突きの《雨月》。

繰り出される剣技の数々。ハイスピードの攻防戦。

ファルケはエイリークの剣の軌道を見るのがやっとだ。

受け捌く《炎槍》が信じられない。

「凄い。なんだよ、あいつ」

《炎槍》はエイリークから何かを感じろとファルケに言った。
だが彼はまだ、凄いといった『表面』しか感じ取れない。

「確かに速いな。だがそれだけだ」

《氷斧》の冷たい視線はエイリークの実力を正確に見切った。

「あのペースではそう長く体力は持つまい」

＋＋＋

《雨月》の連続突きは正確に槍の穂先で合わせられた。

エイリークはそれで《炎槍》との実力差を思い知ることになる。

ポピラを連れてこなかったことが今になって悔やまれる。

（強い！　こうなったら、チャンスは１回きり）

エイリークは再び《双月》を放つ。

＋＋＋

３－０７ｂ　王都防衛戦　２（前書き）

集う仲間たち、動き出す《氷斧》

さらにポピラ、出撃

《前書きクイズ》

＊前回の問題も見事正解されました。展開読まれすぎ？

Q.　本来、《機巧兵器》の仮想敵はなんだったのか？（難易度Ｃ：世界の謎というよりもこの世界の歴史）

Q.　今回更新した話で『男』の前に現れたのは誰か？　彼が現れたその目的を答えよ。（難易度Ａ：誰かだけならば難易度Ｄ。味方です）

3－07b　王都防衛戦　2

＋＋＋

一方その頃。

王立研究所。その中にある整備工場では地下都市へ避難しなかった多くの技術士たちが立て篭もっていた。

ポピラもその1人。

「エイリークさん達には困りましたね」

工場の1番奥の区画に集まった技術士達と共にいる彼女は密かに溜息をつく。

外で巨大な火柱を見たエイリークは様子を見に行くと飛び出したっきり。彼女を追いかけたアイリーンもまた戻ってこない。

それでポピラは考えた。彼女達はもしかしたら今の自分達と同じ状況かもしれないと。

「どうしよう、リィちゃん……」

「ほんと、困りましたね」

閉じられた鉄扉を見て不安に駆られるミサ。ポピラは状況の悪さ

にもう1度溜息をついた。

王立研究所は今、傭兵たちにその大半を占拠されてしまっている。

研究所の技術士の中に内通者がいたのだ。取り押さえた時にはもう遅く、新たに設置された《転移》の魔法陣から傭兵の侵入を許してしまった。

幸い各研究棟はもぬけの殻なので、研究棟に《転移》した傭兵は外から隔壁を下ろして閉じ込めた。人的被害は最小に抑えられている。

現在、整備工場を占拠しようと研究所の外に転移した傭兵と交戦中。だがここに兵はおらず技術士と避難警備に残った学生しかいない。

戦えるのはマークが残した《黒耀騎士団》の魔術師数人。戦闘員の数の差があり過ぎる。

逃げ場もなくバリケードを作って牽制しながら後退することで時間を稼ぐのがやっとの状態だった。

「外の方が気になりますね。早くどうにかしましょう」

「どうにかって。リィちゃん達もいないのにどうするの？」

ミサはいつ傭兵が来るのか、それとエイリークがいないことの不安でいっぱい。怯えてしまっても仕方がない。

ところがポピラはそうでもなかった。むしろ彼女は外へ出た2人の方を心配している。

「大丈夫ですよ」

ミサに声をかけるポピラはどこまでも淡々としている。

いつも通りに振舞うことでミサが安心してくれればと不器用なことを彼女は考えている。

それにポピラは《天才》の妹、エルド兄妹として、1人の技術士として言った。

大丈夫だと。

「万全な準備を済ませた技術士は、傭兵なんかにおくれをとりません」

「その通りだ」

答えたのは油汚れで黒ずむつなぎを着た壮年の技術士。

整備工場の技術士たちをまとめ上げる整備士主任だ。

「主任さん」

「整備は終わった。動力にやっと火が入ったんでな。あれは年代もんの気難しいじいさんだが、動きだすまでの問題だ」

「それで《駱駝》の操縦はどなたが」

「そいつは西校から来た学生たちに任せてある」

その学生とは《W・リーズ学園》から派遣されたエースが率いてきた騎士団員。

《エルドカンパニー》と同様、技術士で構成された珍しいタイプの学生騎士団である。

「西校、というとチェルシーさんの？」

「外にいる仲間を心配している。一緒に連れて行ってくれ」

ここは大丈夫だからと主任。

「ですが《駱駝》はこの国の」

「《駱駝》はお嬢ちゃん達に預ける。飛び出した子達のことも心配なんだろ？」

「……ありがとうございます」

自分の我儘に付き合ってくれた上に稀少な《機巧兵器》を貸してくれた。

ポピラは工場の技術士たちに感謝し、頭を下げた。

「なーに。お嬢ちゃんは俺達にいいもんを触らせてくれた。お礼だよ」

「……馬鹿ですね。その言い方はセクハラみたいですよ」

「手前の区画、もちません。１分後に後退するそうです」

「傭兵、来ます！」

傭兵はもうそこまできている。

これ以上逃げるわけにはいかない。

「俺達も戦える。だから行きな」

「わかりました。《黒耀》の皆さん、すいませんが工場の皆さんをお願いします」

「了解」

快くポピラに応じる学園の魔術師。

ポピラはエースである兄、ティムスが率いる騎士団の副団長でもある。《黒耀騎士団》の平団員である魔術師たちよりも立場が上だったりする。

「ミサさん。エイリークさんが心配です。探しに行きましょう」

「！　うん！」

ミサはその一言で腹を括った。

＋＋＋

双月、双月双月。

双月双月双月双月、双月。

連続して繰り出される2連斬撃の乱舞。

「はぁあああああああっ！」

エイリークは果敢に攻めることで《炎槍》の動きを封じに入った。

たった1度のチャンスを作る為に。

「……っ、こうも速いと」

受けるのが精一杯ねぇん。と《炎槍》。

エイリークの《双月》から《双月》へと繋ぐ時に生じる隙はあまりにも小さい。

《炎槍》ならばその僅かな隙を見抜くこともできるのだが、間合いが近すぎることもあって彼女は槍を突き出すことも薙ぐこともできない。

何よりエイリークの気迫がそれを許さない。

（……ねぇ。ちゃんと見てる？　この子の剣に乗せる気持ち、感じることができる？）

《炎槍》はエイリークが見せる僅かな隙を、呆然とこちらを見るファルケを見る為に使った。

「……」

（あの調子じゃまだみたいねぇん）

傍目から見ればエイリークが押している。ただしそれは、《炎槍》が受け手に回っているからこそ今の状況が長く続いているだけ。

もしも立場が逆ならば、エイリークはおそらく《炎槍》の槍を捌ききれまい。

エイリークが《炎槍》の実力を見せつけられたのは3回、いや4回か。

不意打ちとクロスカウンターで放った《旋風剣・疾風突き》を防がれて2回、《雨月》の連続突きに剣先を槍の穂先ですべて合わせられたことに3回。

そして《鏡月》。あの技は相手の《月の型》を模倣する技で、格上の剣士が『指導用』に用いるものなのだ。おそらく《雨月》も《鏡月》で返されたのだろう。

《鏡月》は模倣する相手の剣技を先読みした上で速度が上回らなければ成り立たない。迎撃用の技でなければ実戦で使うものでもない。あれは芸なのだ。

エイリークはもう1人では《炎槍》には勝てないことを悟っている。赤い髪の槍使いにはもう1人、氷のような目をした斧使いがいるのだからどうしようもない。

だからといって退くわけにはいかなかった。この傭兵達を自由にすれば、王国は致命的な打撃を受けてしまう。

（アタシは……）

エイリークは今、剣を手にした理由を問われている。

姉を、家族を守りたかったと願い手にしたもの。

その力を今度は。

（アタシの剣は）

誰かを守る為に振るうのだと。

スーパーモードが使えない今、チャンスは1回だ。エイリークは体力の限界を迎えつつも諦めずに《双月》を放つ。

1、2、1、2、1、2……

細剣が槍に受け止められる度に生じる剣戟は激しくも、規則正しい2拍子を刻む。

1、2、1、2、1、2……

（ん？　……成程。お嬢ちゃんの狙いは）

（緩んだ？　今！）

1、2、1、2

1、2、3！

2拍子の《双月》からいきなり3拍子の3連斬撃。

《奏月》。《双月》とほぼ同じモーションで放つその剣技は《双月》と組み合わせることで真価を発揮する。

刻みつけたリズムに変化を与えることで相手の調子を狂わせ、隙を作らせる技だ。

しかし、この攻撃パターンも《炎槍》に読まれていた。

「残念」

剣は受け止められ……

「えっ？」

フェイントだ。エイリークは《奏月》の3撃目の斬撃を途中で無理矢理止め、剣を胸元へ強引に引き寄せる。

それから力強く踏み込む。同時に《旋風剣》で風が舞う。

「はあっ！」

3と見せかけてとっておきの1。

疾風突き！

《炎槍》は槍で受けそびれた。

《爆炎壁》を使う暇もなく、首を動きと僅かな身体の捻りで突き技を躱す。

「あぶっ！　ちょっと危な……？」

《炎槍》は剣を躱したあとでおかしいことに気付いた。《旋風剣》の衝撃波が来ない。

ただの《疾風突き》だ。ならば吹き荒れる旋風はどこから？

「もらったわよ」

「！」

この瞬間だけ、エイリークは《炎槍》の先読みを上回り不意を突くことに成功した。

学園の生徒でない傭兵の彼女は知らないはずだ。エイリークのおかしな力を。

エイリークは《旋風剣》の竜巻を腕や足に纏わせることができ、《竜巻ぱんち》のような格闘技（あるいはドツキ系突っ込み）に応用できる。

それはもう《旋風剣》ではない気もするが。

彼女が竜巻を纏わせたのは、突き技を放った時に踏み出した前足。

その足を軸足に竜巻の高速回転に身を委ねることで素早く体の向きを反転。

無理をして体勢を変え《炎槍》に背を向ける。

剣の間合いよりも近づき過ぎたエイリークが次に《炎槍》に向けて放つのは、回し蹴りだ。

「ちょっ！？」

「吹き飛びなさい」

《旋風きっく》、炸裂。

蹴り飛ばされる《炎槍》だが彼女は只者ではない。

直撃を避け、一瞬で槍の柄を盾にしてガードしている。これでも彼女は倒されない。

届かない。おそらくエイリークの最後のチャンスだったはずだ。

それでもエイリークは構わなかった。

この1撃は次のチャンスに繋いだからだ。

彼女は最初から1人ではない。

「今よ！」
「喰らい尽くせ、サンドワーム・ブラスト！！」

機会を窺っていたユーマの追撃。

体勢を崩された《炎槍》に襲いかかるのは、砂で模造された魔獣の突進。

「……！」
「《炎槍》さん！」

巨大な『砂漠の竜蛇』に呑まれそうになる彼女を見てファルケは思わず声を上げる。

今度こそ直撃か？

＋＋＋

《砂漠の王国》では今、３つの戦いが展開されている。

１つは国の外郭で展開される王国軍対《新帝国軍》。

今いるすべてをかき集めた王国軍の兵約５千に対し《新帝国軍》の兵力は帝国兵と傭兵の混成で約１万、そして《機巧兵器》である《虎砲改》１０両。

単純に倍以上ある戦力差。だが帝国兵は序盤、ユーマが作っておいた砂の山々の起伏に足をとられ、《虎砲改》と足並みが揃わず進軍が遅滞している。

そこに王国軍は山越しに長距離砲撃を行い、今のところ王国軍が優勢を保っていた。

王都防衛の序盤戦は《機巧兵器》の有効射程までにどれだけ敵兵に打撃を与えられるか。そういった戦いだ。

残る戦いは国内。

罠を抜け出した《炎槍》らを抑えにかかるユーマ達と、傭兵に制圧されつつある王立研究所の２ヶ所。

どちらも敗北すれば王国は傭兵の内側からの攻撃で中から切り崩されることとなる。

国王であるレヴァンは国内の戦いを問題視し、自ら対処しようと動き出している。

《三神器》の存在を見逃せないレヴァンはマーク、シュリを連れてユーマ達のいる住居区へ。王立研究所は《Ｗ・リーズ学園》のエースが残された仲間を心配して偵察を買って出た。

戦いは序盤ながら一応膠着状態。

その様子を遥か遠く、《新帝国軍》の地下基地から様子を見る男がいた。

《新帝国軍》に《機巧兵器》を改造する技術と資材を提供したあの男。

「戦下手ですねぇ。中将は」

自らの手で生みだした鏡を見て、男はつまらなそうに、ここにはいない中将に不満を漏らす。

「傭兵なんて先行させずさっさと《機巧兵器》を投入して蹂躙すればよいものを」

つまらない。

見世物としておもしろくない。

「ならばちょっと演出でもしましょうか。……おや？」

「ここが《帝国軍》の隠れ家か」

すべての兵と傭兵が出払ったあとの地下基地。闖入者の登場に男は少なくとも驚かされた。

長らく生きた男が久しぶりに出会う、懐かしい顔。

「お前が首謀者だな」
「久しぶりだね」
「……？　お前は」

男は質問に答えず、背の高い、いかにも魔術師といった姿の彼を見る。

誰だかわからないといったその表情に男は、面白そうな笑みを浮かべた。

＋＋＋

「喰らい尽くせ、サンドワーム・ブラスト！！」

姿を隠し、いつでもエイリークの加勢に入れるようにしていたユーマ。

エイリークが蹴りを放つのを見て、ここぞとばかりに大技を女傭兵に向けて撃ち放った。

ユーマがエイリークと遭遇したのは偶然。打ち合わせなしの連携攻撃は傭兵達の意表を突いたはずだ。

直撃コース。ところが。

「このっ、男らしくないわよ坊や。いい加減姿を見せなさいっ！」

《炎槍》はあろうことか守りに入らず、腰の背面に装備した武器を掴み投げつけた。

翼刀と呼ばれる折れ曲がったかたちをした大型の飛刀（投げナイフの類）は、ユーマの位置を特定していたかのようにまっすぐ飛んで行き、円の軌道を描く。

旋回する翼刀は赤い刃を煌めかせ、ユーマの背後を襲う。

「いいっ！？」
「ユーマ！？」

逆にユーマが意表を突かれることとなった。隠れていた建物の屋根から慌てて飛び出す。

「ブーメラン？　ってあんなの実戦で使えるもんじゃ……えっ？」
「嘘！？」

２人が驚くのはそれだけでは済まなかった。

ユーマの放った《サンドワーム・ブラスト》が《炎槍》に当たる前に受け止められていた。

氷の目をした巨漢の戦斧に。

「ちょっと、《氷斧》？」
「油断しすぎだ」

受け止められ、ユーマのコントロールから離れても尚も突進する砂でできた魔獣。

砂の竜蛇は戦斧に触れた先から全身を凍らされていく。

「それに……遊びすぎだ」

《氷斧》の次の1撃が《サンドワーム・ブラスト》を完全に打ち砕いた。

今度は凍り砕けた竜蛇の破片が飛散してユーマ達を襲う。

《氷破弾》。その氷塊1つ1つがあまりにも大きい。

「エイリーク！」
「きゃっ」

ユーマは弾き返すのは無理と判断すると、《高速移動》で駆け出しエイリークに飛びかかった。

彼女の腕を掴み2人で一時離脱を試みるが、エイリークに駆け寄った分時間をロスしてしまう。

回避が間に合わない。

「氷晶壁！」

その時。ユーマ達の危機を凌いだのは目前に現れた透き通る氷の壁。

「アイリィ……？」
「今のうちだ」
「逃がすと思ったか」
「「！！」」

声に振り返った2人が見たものは、いつの間にか背後を取り巨大な戦斧を振り上げる傭兵。

「うらぁっ！！」
「……！」

ユーマに振り下ろされる戦斧を止めたのはアギだ。

例の瞬間移動を使ったアギが、ここでもその《盾》で仲間たちを守る。

前触れもなく突然現れた青バンダナの少年に流石の《氷斧》も驚いた。

「だが、それだけだ」
「!?　あ、うあああっ」
「アギ!」

アギの《盾》が。

凍りついてゆく。

＋＋＋

一方、整備工場。

技術士たちが立て篭もった区画の、その手前の区画。

「工場の制圧も粗方終わったな。あとはこの先だけだ」
「ったく、無駄な抵抗しやがって」

傭兵の言うとおり研究所は整備工場までもがほぼ占拠された。最後の区画を前にして一同に集まる傭兵達。

傭兵はじわじわと追い詰める感覚に愉悦さえ覚えている。

「さっさと奴らを締め上げて研究棟の隔壁を上げねぇとな」
「閉じ込められた奴らなんてやることなくて金目のもんを漁ってるぜ」
「くうぅ。気楽なもんだ」
「真面目に働く俺達の分け前も残しとけって話だな」

思い思いに喋る傭兵達。

彼らは傭兵といわれる者の中でも格下の集団だ。《炎槍》のような腕もなければ、普段していることは盗賊のそれと変わらない。

《新帝国軍》の主力となる傭兵は質よりも量。

何故彼らのような集団を雇ったのか疑問が残る。

「さっさと片付けるか」
「扉を壊すぞ」
「？　待て」

傭兵の侵攻を最後に妨げている巨大な金属の扉。

横にスライドするタイプの扉が傭兵たちが破壊する前に開かれた。

「何だ？」
「連中、やっと諦めたか？」
「いや、何か来るぞ」
「あれは……まさか《虎砲》じゃ」

傭兵の目の前に現れたモノをユーマが見たならば、彼は何と答えるだろうか？

例えるなら砲身のない戦車だ。

全長約7メートル、全幅は約４メートル。

高さは3メートル程あって青く塗られた大きな筐体。

１０センチ以上の分厚い装甲に覆われ、おどろおどろしい唸り声を上げながら動く鉄の塊。

１両とはいえ《機巧兵器》の登場に傭兵達は驚きを隠すことができない。

「そんな。王国が《虎砲》を持ってるなんて話、聞いてねぇぞ！」

「よく見ろ。大砲を積んでない。《虎砲》じゃない」

「じゃあ何だよ、ありゃ？」

それは厳密には兵器ではなかった。

《駱駝》は王国が所持する唯一の《機巧兵器》。終戦後に破棄された《虎砲》の改修機である。

改修時に主砲など武装をすべて取り外されたそれは、いわゆる装軌式装甲車である。装軌式でわからなければ足回りがキャタピラと言い換えても良い。

大型魔獣並のパワーがあり、砂漠のような柔らかくて起伏のある不整地を易々と進む《駱駝》は、王国では主に輸送と牽引作業など工事に用いられ建国時に大活躍した。

決して兵器として扱われることがなかったのは王の意向に依る。

「こいつらも生まれ変わっていいんだ」

人を傷つける以外のモノ、人の役に立つモノに。

前にそうレヴァンは言ったことがあるが、その彼もまた《帝国》同様、《機巧兵器》の在り方を理解していない。

《機巧兵器》は武器であり兵器。民衆を守る剣である。少なくとも《西の大帝国》ではそうだった。《帝国》がその在り方を歪めてしまった。

《帝国》の力の象徴として君臨した《機巧兵器》は侵攻侵略の道具に成り下がってしまっていたのだ。

しかし今日、《機巧兵器》は長い時を経て蘇った。それは《新帝国軍》が保有する《虎砲改》などではない。

その名は《駱駝》。

人を運び物を引っ張ることしかできない、武器を積まれなかったそれは、人を守る為に今でも『剣』を引っ張ることができたのだ。

古びた青い《駱駝》は最後の《機巧兵器》だった。1人の少女のアイデアによって不格好ながら本来の《機巧兵器》としての姿を取

り戻した。

《機巧兵器》。それは脅威に立ち向かう為に生まれ、守る為に作られた《西の大帝国》の剣。

蘇る《機巧兵器》。手にしたその剣は。

ボロボロの舟のかたちをしている。

「駱駝、及びリュガキカ丸、発進」

ポピラは《駱駝》に牽引された舟の名を嫌そうに呼んだ。

＋＋＋

3－07ｘ　間章　－魔人殺し－（前書き）

裏話。またの名を○○○○最強説

あの先生の秘密

《前書きクイズ》

＊前回の問題は時間切れです。今回の話に答えがあります

Q.　現時点までの登場人物の中で最強キャラは誰でしょう？（難易度Ａ：ある意味世界の謎レベル）

Q.　《三神器》と呼ばれる3人を答えよ。二つ名でも可。（難易度Ｅ：おそらく3人目である彼の登場予定は、今のところない）

3－07x　間章　－魔人殺し－

＋＋＋

遡ること数日前。

《C・リーズ学園》の学園長イゼット・E・ランスは、世界中から集めた情報を基に1つの決断を下した。

それは《砂漠の王国》の支援。

西国の中心となりつつあるこの国を抑えられると情勢の悪化は免れない。そう彼女は判断したのだ。

軍事国家である《帝国》の復活、偽りの選民思想を持つ『帝国貴族』の台頭。そして《機巧兵器》の悪用。

この3つを彼女はどうしても未然に防いでおきたかった。

しかし学園長は《預言者》といわれる程の、世界指折りの情報屋ではあるが一介の教育者でしかない。

支援すると決めても派遣できる兵なんていない。そもそも私兵なんて持っていたら問題である。

今の時代《聖王国》の血筋なんてあってないようなものだ。彼女にできることといえば、《エース》という特別な資格を持つ教え子に依頼することしかなかった。

これは学生を戦場（この時点では違う）に派遣することが世界条約で定めた法に触れてしまうことに対し、エースの資格を持つ学生は世界で1人前と認められ例外とされるからだ。

エースは実戦経験を積むことを理由に他国へ派遣、任務を請け負うことが可能であった。

王国を支援するにあたって学園長が白羽の矢を立てたのは、学園でも優秀な生徒である《Aナンバー》の魔術師。

「ごめんなさいね。夏季休暇に入ったばかりなのに。無理な任務をあなた達に頼んでしまって」

「いいえ。学生の間で実戦の経験を積むなんて滅多にない機会ですから」

朗らかに返すマークであるが、学園長はあまりいい顔をしない。

「実戦といっても後方支援が主となるはずです。くれぐれも危険を避けて上手くやって下さい。あなたならできるはずです」

学園長はサヨコを通してレヴァイア王の人となりを理解している。

彼ならば子どもたちを前線に送るなどぞんざいに扱うことはないだろう。マークも無理をするタイプでないので安心して送り出せる。

「わかりました。では《砂漠の王国》は僕と待機している《黒耀》の3年生で行きます。クルスや他のエースは？」
「既にクルスさんには別の任務に就いています」
マークは学園のトップエース、《剣闘士》の相棒でもあり他国への任務は彼と共に行動することが多い。
今回は違ったようだ。それがちょっと心配になる。
（また途中から見境なく剣を振るってないといいけど）
「他の《Aナンバー》の皆さんは殆ど帰郷なさっていて残るのはブソウさん、ティムスさん、ヒュウナーさんの3人です」
「あはは。僕しかいませんね」
前期分の残務処理、新設工事の総監督、補習からの逃避行。
居残り組は何かと忙しい面々だった。
「代わりといってはなんですが《W・リーズ学園》に協力を要請しています。現地で向こうのエースさんと合流して下さい」
「西校。となると来るのは《鉄拳》のレアちゃんかな？」
「もしかするとユーマさんも王国にいるかもしれません」
「ユーマ君？」
マークは意外なことを聞いて聞き返す。
「彼が出立する前にそんなことを言っていましたから。あと《砂漠の王国》はアギさんの故郷です」
「なるほど」

納得するマーク。それは災難だと彼は思った。学園長も同じ思いを抱いている。

特に学園長はユーマの正体を知るので尚更だ。

意図せず国レベルの事件に巻き込まれる異世界の少年。

この世界の分岐点に直面するのは彼の運命だというのか。

（エイルシアさん。あなたが望まずとも彼はこういう運命なのかもしれません）

「彼もエース資格者ですので力を借りるかどうかはあなたの判断に任せます。それと」

学園長は遠征するマーク達に『引率』をつけることにした。

彼女の傍に控えた魔術科の教師に。

「オルゾフさん。お願いしてもいいでしょうか？」

「！　しかし私は」

「お願いします」

有無を言わせない学園長。

その頑な態度にオルゾフは何かを察した。

「……わかりました」
「彼らの安全を確保してあげて下さい」
「では先生、よろしくお願いします」
「ああ。ではフィー、すぐに団員を集め準備をしろ」
「はい」

こうしてマークは《黒耀騎士団》を連れて《砂漠の王国》へ支援に向かうことになる。

王国軍の防衛戦の準備と、奇襲への対策が間に合ったのは彼らの功績によるところが大きい。

「学園長」
「なんでしょう」

マークが旅支度の準備で退室したあと。オルゾフは学園長に訊ねた。

「私が行くのはエイルシア姫との《盟約》の為ですか？」

《盟約》。それは端的に言えば異世界人であるユーマの保護することを指す。

「いえ。今回はあの子に選択を委ねます。王国にとってユーマさんの力は決して小さいものではありませんから」
「ではもしや私を……人の起こした紛争に介入させようと思っていませんか？　私の力は」

「気になることがあります」

オルゾフの追及を学園長はぴしゃりと遮った。

「学園長？」

「《機巧兵器》。もしかするとあれは新たに量産されているかもしれません」

「なっ！？」

オルゾフの驚きは尋常ではなかった。彼は覚えている。

４００年前、魔法戦に絶対的優位を誇る魔人に対しゲンソウ術を除いて唯一対抗できた人の力。

人類最後の砦といわれた《西の大帝国》を守る兵器の数々を。

オルゾフは信じられない。

「ありえません。失われた技術の産物である《機巧兵器》は、特殊な燃料もあって今でも一部の技術を除き再現不可能な代物です。現にエルド兄妹や技術の最先端である《技術交流都市》の研究も一定以上成果を出していない。それを誰が量産なんて」

「だからこそあなたに頼みたいのです」

学園長は命じた。

「《機巧兵器》の出所。その調査をお願いします。おそらくあれをよく知る何者かが『帝国貴族』に手を貸しているはずです」

「それは？」
「わかりません。ですから確実に突き止めておきたいのです。魔人が敵であった時代ならともかく、《機巧兵器》は今のわたしたちにとって過分な力です」
「……」
教え子たちに任せるわけにはいかない。調べるにはあまりにも不確定な要素が多すぎる。
もしも《機巧兵器》を『帝国貴族』にもたらした者が『人』でなかったら……
だからこそ学園長も《砂漠の王国》に切り札を投入する。
「それともうひとつ。《機巧兵器》の量産、その脅威が確認されたのなら」
「焼き尽くしましょう」
言われるまでもないとオルゾフは言葉を返した。
「《機巧兵器》。あれならば私の……《心火》の敵に値する」
憎悪、憤怒といった感情。
この時の彼の表情には、普段は決して見せない獰猛さがあった。

＋＋＋
間章　魔人殺し
＋＋＋

《黒耀騎士団》の引率として《砂漠の王国》へ入国したオルゾフ。

彼はこの国の王と面会を終えるとマークにあとを任せ、《機巧兵器》の捜索の為別行動を取った。

訳あってオルゾフはマークたちと行動を共にし、王国に表だって加勢することができない。自らの力を振るうことに彼は厳しい誓約を誓っていた。

オルゾフは傭兵が襲撃用に設置した《転移》の魔法陣をわざと１つ残し待ち伏せをする。

その日の夜。襲撃で《転移》してきた傭兵を彼は《魔法》で瞬時に無力化すると、傭兵と魔法陣から『転移元』を読み取り逆探知に成功。

地下基地の位置を特定。そのイメージを基に《転移》の魔法陣を発動し、彼は《新帝国軍》の拠点へと侵入を果たした。

もぬけの殻となった基地を探る途中、オルゾフは男に出会い、今に至る。

＋＋＋

久しぶり。

男は気易い態度でオルゾフに言った。だが言われた彼は男の顔に覚えがない。

特徴がない。違和感もない。

どこにでもいて、すぐにでも忘れられそうな男の顔。

「……誰だ？」

「覚えてないのかい？　酷いなぁ。《心火》ともあろう君が、兄弟の顔を忘れたというのかい？」

「何？」

男はオルゾフの正体を知っている。そのことにオルゾフは眉を顰める。

兄弟と言った。だがオルゾフには思い当たる人物がいない。

『忘れてしまっている』

それが鍵だった。

オルゾフは男のことを覚えていないが、魔神から与えられた知識

と教師として４００年蓄えた知識全てを総動員して答えを導き出す。
「《忘却》。お前なのか？」
「……へぇ」
男は感嘆の声を上げた。
「流石だね。覚えてた？」
「忘れてる。ただそういう能力を持つ魔人がいたという知識があった」
「ははっ」
男は笑った。つまりオルゾフは教科書に載る歴史上の人物のようにしか男のことを知らない。
旧知の間柄にも関わらず男のことは全く覚えていないというのだ。
それを男は別に悲しいとは思わなかった。
忘れてるのに覚えてる。その矛盾を目の当たりにして、ただおかしいとそう思った。
「それで《心火》。何の用なんだい？　その様子じゃ僕に会いに来たわけじゃないんだろ？」
「……」
「そう構えないでくれよ。どうせ忘れるんだ。今なら何でも答えてあげるよ」
「帝国軍の残党が持つ《機巧兵器》を作ったのはお前か？」
オルゾフは単刀直入で訊ねる。

男の返事は「いいえ」だった。

「あんな複雑で面倒なもの、作る気にもなれない。僕がやったのは中将たちが持ってた『壊れたおもちゃ』を動かせるように細工しただけさ」

「細工？」

「これだよ」

男が見せたのは拳ほどの大きさの何かの結晶体。

「僕ら魔人が得意とするやつさ」

「魔石……まさか」

「そう。魔力で動くんだよ、あれ。動力だけでなく武器もね」

魔石から魔力を抽出して利用する技術。

「《魔法》だよ。あの《虎砲改》ならば《魔法使い》でなくても人は容易に魔力を扱える」

「それは」

オルゾフは男が用意した《機巧兵器》の危険性に気付き恐れを抱く。

そもそも魔力及び《魔法》は魔神に属する魔人、あるいは魔族に与えられた力だ。《魔法使い》でもない限りその力は人に適合するものではない。

ただの人は魔力が含む狂気への耐性が低い。そんな人が無暗に魔

力を扱えば容易く侵されてしまう。しかも魔力を兵器として争いに使えばそれだけ人は魔力に触発されやすくなる。

狂気に侵された人のその果ては正気を失い、暴れ狂うだけの狂暴な人格変成、あるいは魔獣のような生物の変異体になるかのどちらか。最悪その両方だ。

かつて学園で《竜使い》と呼ばれた少年に起きた性格の変化はこの症状の初期段階だといえる。彼も《幻創獣》の腕輪に魔石を使い魔力中毒を起こした少年だった。

あの時使われた魔石は自然から採れる粗悪品だった。だが男が見せたそれはおそらく彼自らが精製したものだろう。オルゾフは遠くからでもその純度の高い魔力が感じられる。

あんなものが大量に出回り人の手に渡れば……

「この国で、何がしたいんだお前は」
「舞台づくりだよ」
「舞台？」
「勇者が倒すべき悪の帝国。なんてどう？」

人と人が争う最高の舞台。その土台づくりだと男は言う。

「ふざけてる」
「そうでもないでしょう？　《心火》。人の憎悪と憤怒を煽り燃やし尽くす、そして死者の魂を燃やし自らの火とする君にとってそこ

は最高の餌場」
「……」
「睨まないでくれ。それともなんです？　貴方、私と違い本当に人に成り下がったのですか？」
オルゾフは答えない。
代わりに別のことを訪ねる。
「お前は、他の魔人と組しているのか？」
「いいや。そもそも生存している魔人がどれほどいるんだい？」
男はありえないと答えを返す。
「昔から封じられていた《病魔》は死んだようだし、他に僕を覚えている魔人がいるとは思えない。君が僕の正体を見破ったことはとんでもないことなんだよ？」
「そうか」
オルゾフは表情には出さず内心で笑みを浮かべた。
男は《病魔》の魔力消失を理由に彼女が死んだと勘違いしている。
「十分だな」
「何？」
「聞きたいことは十分だ。あとは」
――お前と《機巧兵器》を焼き尽くせばいい。

解放された魔力が周囲の空気を焼いた。

オルゾフは男に殺意を向ける。

「お前っ！？」

「《忘却》。お前を見つけられたのは幸いだった。俺がお前のことを忘れる前に消えてもらう」

「まさか……本当に人に成り下がったのか？」

「いや。俺はどこまでも魔人だ。決められた本質は隠すことができても『彼女』のように変わることはない。変わる気もないが」

「何？」

「約束があるんだ」

昔のことを少しだけ思い出すと、オルゾフの表情が少しだけ緩んだ。

４００年経っても果たされていないその約束を、彼は今も心待ちにしている。

男はオルゾフの言うことがわからない。

自分のように利用する為でもなく、魔人が人につくその理由が。

「……いいでしょう。僕を燃やせるものなら燃やせばいい。ですがいいのですか？」

いつだって炭化できる。そんな殺意を向けられても男はまだ余裕

がある。

「戦闘タイプでないといっても僕も魔人です。無尽蔵の魔力を持つ魔人同士の戦い。それをやる覚悟があるのかい？」

それは決着がつかないということ。

ついたとしても早くて1ヶ月以上、下手をすると1年以上も戦い続けることになるかもしれない。

「そんなことしてると《王国》と《帝国》の争いは終わってしまうよ。僕の用意した《機巧兵器》で」

「……」

「きっと君の教え子たちも無事では済みませんよ。オルゾフ先生」

「『私』を知っていたのか？」

「もちろん。あのイレギュラーの《転写体》のことも知っていますし、会ったこともあります」

彼は忘れているでしょうけど、と男。

それがユーマのことだとオルゾフはすぐに気付いた。

しかし、ユーマをイレギュラーと呼ぶ意味がわからない。

（ミツルギがこちらの世界に現れたのは《忘却》にとって想定外だった？）

それは誰だって同じはずだ。ユーマの召喚者は今も特定されてい

ない。

それとも何か別に意味するところがあるのか？

（他にも奴が知る召喚されたモノがいる？）

推測の域を出ない。オルゾフにしてもこれは学園長に調べてもらうしかない。

「……サービスしすぎたようだね。何を考えてる？」

「どうせ忘れてしまうことだ。お前も気にしていないだろ？」

「そうですね」

ここまで男は多少驚きこそすれずっと笑みを絶やさなかった。

しかし。次のオルゾフの発言は、彼の表情を崩すほど聞き逃せない内容だった。

「だが忘れない方法はある。お前を消せばいい」

「何？」

「《忘却》の魔力を放つお前を消してしまえばいい。それだけだ」

「面白い冗談だね。わかっているでしょう？　魔人同士の戦いは決着がつかないことを」

「戦い方次第だよ」

「……ご教授願いましょうか、先生」

冗談ぶる男。

『オルゾフ先生』はそれに真面目に答えた。

＋＋＋

授業開始。

「魔人や魔族、それと《魔法使い》は体内に内包する魔力を消費することで魔術、《魔法》を発動できる」

オルゾフは《魔法》で指先に火を灯した。

「この火は火であると同時に魔力だ。魔力生命体である魔人にこの火をぶつけても大したダメージにならない」

「そうだね」

相槌を打つ男。

加えて魔人の持つ魔力総量は魔族や《魔法使い》に比べて桁が３つ４つ違う。

《魔法》が主戦力であった４００年前は、それで魔人に人は惨敗しているのである。

続けて男は饒舌に語る。

「あの頃魔人に対抗できたのは魔石や魔力を一切使わなかった《機巧兵器》くらいだったんだよね。でも《西の大帝国》は僕らと戦う前に自爆したんだ。新たな勇者を《召喚》しようとしてね」

「……」

「ほんと、人間って馬鹿な奴らだよ。あの頃だって《精霊紀》レベルの、十分立派な技術力を持ってたくせに。《召喚》なんて異界のオーバーテクノロジーに頼ったりして台無しにしてさ」
「話が脱線している。静かにしろ」
はーい。生徒の真似をする男。
こうして振りをしていると、彼も少年らしく見えるから不思議だ。
「まあ。確かに人は魔術戦闘では魔人に敵わず、唯一対抗できた《機巧兵器》はその力を発揮することなく砂の中に沈んだ。あの時《西の大帝国》が健在であったならば、《魔人戦争》の被害は抑えられ、現在の世界人口はおそらく今の１０倍以上となっていただろう」
「……」
「失礼。……結局の所魔人は人と魔族の連合軍に敗北した。何故負けたのか覚えているか？」
「……勇者達の、ゲンソウ術だ」
「その通り。あれは魔力とは別次元の同等の力だ」
嫌そうに答えた男にオルゾフは苦笑する。
「人は４００年もかけてそのゲンソウ術を研究し実用化に成功した。完成とはまだいえないが、今では人にとって《魔法》の代わりとなる新たな力となり今度は技術として発展した」
オルゾフはもう1度指先に火を灯す。
「例えば《灯火》。『周囲を照らす光』というイメージを再現したこの術式は屋内の照明に付与して使われることが多い。これは火が持つ熱や燃える性質を持たないのが特徴だ。煙も立たないし安心し

て屋内で使える。やろうと思えば水の中でも」
「!?」
「理に縛られた《魔法》ではできない、『曖昧な火』を創ることができるのがゲンソウ術の利点ではあるが……」
「待て」
男はとんでもないことに気付いた。
それで生徒の振りをするどころか、ずっと浮かべていた笑みも完全に消え失せてしまった。
男はオルゾフが指先に《幻創》する《灯火》を見て驚愕している。
「お前、その火は……『ゲンソウ術』だな？　魔人のお前が、どうしてっ!?」
「『私』のことは調べていたんだろ？　俺は正体を偽ってはいるが別に『魔法使いの教師』とは名乗っていない」
「!」
「俺は表向き《魔術師》を名乗っている。『私』が生徒に教えているのは『ゲンソウ術を使った魔術の再現』だよ」
魔人が人のゲンソウ術を使う。
その脅威を目の前にしてさえも、男は信じることができなかった。
＋＋＋

彼は長い時を人と共に過ごした。

最初、彼女に教師をしろと言われた時の驚きは今でも覚えている。魔人の俺にできるもかと散々文句をいったものだ。

――君が学ぶんだよ。子どもたちから

半ば強制的に孤児院の子どもたちとに触れ合うことになる魔人の青年。そこで彼は子どもの成長というものを間近に見て驚き、ひどく関心を持った。

子ども達は物事を教える度に自由な発想と想像力を自分勝手に育て、時折おもしろいとんでもないことをしてみせる。

ゲンソウ術の根幹である《幻想》はきっと子どもの頃に培われていくのだろうと彼は誰よりも早く理解した。

にわか教師として振舞う傍らで子どもの成長を見て学ぶ《心火》の魔人。

彼もまた、自分だけの想いを子どもだちを通してゆっくりと育んでゆく。

『オルゾフ先生』は彼の中で生まれた《幻想》だった。彼は随分昔にゲンソウ術のきっかけを手に入れていたのだ。

教師である自分を思い描くことでオルゾフは魔人でありながらゲンソウ術を使うことができる。

その奇跡を知る者が世界に一体どれだけいるのだろうか？

あれから何百年も経ち、彼女の子孫には代代何かと振りまわされているけど、それでも今は素直に感謝できる。

魔人である自分に居場所を与えてくれた彼女。

《聖王国》最後の女王、リーゼリット・Ｅ・ランスに。

だから。

《心火》の魔人はその本質を偽ってでも守ろうと思う。

今の世界は彼にとっても約束の地。

彼女の用意してくれた居場所の中で、魔人は彼女の子孫と共に《槍》の勇者の再来を待っている。

＋＋＋

オルゾフは《魔法》ではい《烈火剣》を《現創》し、その切っ先を男に向けた。

魔人同士の戦いは決着がつかない。それは互いに魔力生命体でいて魔力を武器とするからお互いに有効打を与えられないからだ。

しかしオルゾフは違う。彼は魔人の天敵たるゲンソウ術が使える。

学園長の切り札たる彼の正体は。

魔人にして魔人殺し

「授業は終わりだ。授業料は高くつけさせてもらう」

「オルゾフ！　お前ぇ！！」

向き合う2人の距離は、決して剣の届く間合いではない。

だけど届く。

ゲンソウ術なら。

「逃がさん。届け、疾れ」

「ひぃっ！？」

――斬る！

その1撃は《疾る斬撃》。

《剣》の勇者が得意とした、遠くに斬撃を当てるだけの《現操》の剣技。

今では初級術式に分類されるこの技が、魔人にとってどれだけ有効なのかは魔人である彼らがよく知っている。

男は魔力による防御などなかったかのように、ばっさりと胸元を大きく斬られた。

しかし男は倒れなかった。

「ぐあっ！！　……お、おのれぇぇぇ、裏切り者がぁぁぁぁ」

「浅かったか？」

怒りのままに男はオルゾフに吠える。

同族に勇者の真似ごとで致命傷を負わされたことは屈辱だった。

オルゾフの剣の構えに怯み、うしろに下がったことで助かった自分が許せなかった。

このことは《忘却》の力でオルゾフは忘れてしまうだろうが、男はもう、この屈辱を一生忘れそうにない。

「もう1撃だ」
「させるか！」

発動させるのは、仕掛けてあった基地の自爆装置。

「畜生がぁぁぁぁ！！」
「何だと？　待て！」

男は《転移》すると、オルゾフを地下基地ごと砂漠の地に沈めた。

＋＋＋

「はぁ、はぁ……」

砂漠地帯。地下基地のあった場所の上空。

男は斬られた胸元を抑え、血を流しながら荒く息をついている。

「……畜生。あの瞬間じゃ《虎砲》に似せたアレをたった3機しか王国に転送できなかった。糞っ、オルゾフめ！」

生き埋めにしたオルゾフに悪態をつく男は、すぐに長距離移動用の《転移》の魔法陣を展開した。

男は撤退するしかなかった。

生き埋めにしたとしても相手は魔人だ。大した時間稼ぎにもならない。

それに早く傷を癒さねば流れる血と共に魔力を無駄に浪費してしまう。

「これ以上の介入は無理だ。あとはせいぜい中将に期待しよう」

王国側の切り札であろうオルゾフは封じた。ここから《転移》なしで王国に戻るには距離があり過ぎて時間がかかり過ぎる。

オルゾフは攻撃に特化した魔人で《転移》の魔法が使えないのだ。ゲンソウ術を使うにしても魔法陣は全て砂の中だ。

ならば《機巧兵器》のある帝国軍の勝利は揺るがないはず。

「今日は負けを認めるさ。だが《忘却》たる僕は覚えておくぞ。オルゾフ、お前は僕の敵だ」

捨て台詞を吐き、男は砂漠地帯から姿を消した。

この戦いは、決して語られることのない戦い。

魔人同士がぶつかりあい痛み分けになったことで王国は、魔人の介入による完全敗北の運命を回避された。

ただそれだけの話。

＋＋＋

３－０７ｃ　王都防衛戦　３（前書き）

対傭兵戦の中盤。４対２

アギの「俺の屍を越えてゆけ」フラグ発動

《前書きクイズ》

Q.　４００年前に活躍した７人の勇者。その二つ名である７つの武器の名を全て答えよ（難易度Ｃ：１度も本文に出ていない勇者は《杖》です。あと６人をどうぞ）

Q.　次回登場予定の西校のエース、チェルシー・レアメダル。彼女はどんなキャラクターなのか？　その設定、正体を予想せよ（難易度Ａ：複数の答えあり。例：　彼女は技術士である）

3－07c　王都防衛戦　3

＋＋＋

戦いは続いている。

たとえオルゾフが裏で黒幕を追い払っていたとしても。

帝国軍と傭兵の脅威は王国から消え去ってはいない。

王国外郭での防衛戦。

砂山に足を取られる傭兵に容赦なく降り注ぐ砲弾の雨は帝国軍の侵攻を食い止めてはいるが、砲弾も限りがあっていつまでも続かない。

魔石を積んだ《虎砲改》は着々と王国に迫る。

＋＋＋

王都防衛戦で最も苦戦し、王国の脅威となっているのはおそらく、ユーマ達と戦う2人の傭兵だろう。

《炎槍》も《氷斧》も、まだ本気を出していない。

戦斧を受け止めると同時に凍りつく《盾》。

アギは《盾》を通して全身を凍り漬けにされたような悪寒を感じ、呻き声を上げる。

「うぅ……ああっ！？」

「アギ！　このっ」

「離れなさい」

《盾》が砕ける前にユーマの《ストーム・ブラスト》とエイリークの《爆風波》が戦斧を弾く。

「ぬうっ？」

「今の内だ」

「すまねぇ」

アギが離脱する時間を稼ぎ、それから2人は後退して傭兵達と距離を取る。

アイリーンの《氷散弾》が《氷斧》を牽制。おかげで追撃を受けることなくユーマ達４人は合流した。

「大丈夫？」

「……ああ」

ユーマに返事を返すアギだが、彼は悪寒で顔が青ざめてしまって

いる。

両腕は今もガタガタと震えていた。

「わりぃ。助けに来たのに逆に助けられた。……くそっ、鳥肌立って震えが止まんねぇ」

「《干渉》ですね。アギさんの《盾》を伝ってあの斧使いのゲンソウ術に浸食されています」

駆け寄ったアイリーンはアギの症状を見て言った。

《干渉》は《補強》のようなゲンソウ術の基本技術であり《幻操》と《現操》の2種類がある上級技。

特に《幻操》の《干渉》は扱い方次第では他人に自己のイメージを押し付け、相手の意思に関係なく無理強いをさせることができる。一種の精神攻撃だ。

《氷斧》の凍結攻撃はゲンソウ術による。彼は凍結したものに《干渉》して自分の心を投影させることができるのだ。また、《干渉》による精神攻撃はゲンソウ術同士の接触が1番効果が高い。

それでアギは震えている。凍らされた《盾》を通して《氷斧》というモノを思い知らされた。

(畜生。何者だよ、あのおっさん)

アギは初めて人のかたちをした化物に出くわし、その恐怖で心が

折れそうになる。

氷の目をした傭兵の心は、その冷徹な視線よりも冷たく、暗い。

「強敵ですね」
「アイリさん」
「ゲンソウ術の防御を通してさえ、いえ、だからこそアギさんがここまで……あの斧使いへの接触は危険です」
「いや、そうじゃなくて」
「どうしてアンタまでここに来てるのよ」

自分のことは棚に上げ、エイリークは「研究所はどうしたのよ」とアイリーンに文句を言う。

「貴女を連れ戻しに来たのです。研究所は今、傭兵達に占拠されています」
「なっ！」
「なんですって」
「私達が飛び出した後すぐの話です。ですが」

アイリーンは傭兵達を見る。

「こちらも問題ですね」
「アイリさん。エイリークとアギを連れて研究所へ行って」
「ユーマさん？」

ユーマの決断は早かった。

「ここは俺1人で」
「なに馬鹿なこと言って」
「馬鹿をしたのはエイリークだ！」

思った以上に余裕がない。焦りからユーマは厳しい声を上げた。

八つ当たりに近かった。

「マークさんから言われたこと忘れたの？　ポピラやミサちゃんから離れて何してるんだ」
「それはっ」
「相談はもういいかしらん？」

声をかけるのは傭兵の女。

「お嬢ちゃん。それと坊や。仕切り直しだけど、お互い飛び入り参加の4対2でいいのかしらん？」
「……」

《炎槍》は槍を、《氷斧》は戦斧を無造作に構え様子を窺っていた。

隙がない。彼らの侵攻を食い止めているはずのユーマ達が、逆に立ち塞がれているような重圧感に襲われている。

答えに詰まるユーマ達。

1番に返事を返したのはアギだった。

「やるぜ」

「アギさん？」
「時間がねぇ。４人で一気に勝負を決めてエルド妹や侍女ちゃんのところへ行こう。それしかねぇ」
「でもアンタ、そんなんじゃ立ってるのがやっと」
「大丈夫だ！」
アギは制止を振り切り仲間たちの前へ出る。
「力を貸してくれ。俺１人じゃ守りきれねぇ」
仲間も、故郷も。
このままでは大事なものは今すぐにでも戦火に晒され、失ってしまう。
それを《盾》であるアギは見過ごすわけにはいかなかった。
アギは震える腕を抑え、拳を握る。
掌に爪を喰い込ませて血を流し、その痛みで無理に自分を奮い立たせる。
流した血の熱さが、心が凍りついてゆく幻に熱を与えた。
「頼む。ユーマ」
「アギ……」
息を呑むしかない。アギの守るという強い意志に。

腕の震えは止まっていた。アギは自分の意思で《氷斧》の凍てつく《干渉》を打ち破った。

「ほう」

「短時間で持ち直したわ。強いわよ、あの子」

これには《炎槍》どころか《氷斧》までもアギの精神力を賞賛した。

「剣士のお嬢ちゃんといい先の楽しみな子達ねぇ」

「まだ遊ぶ気か？」

「もちろん。でもあの子達に失礼だからちょっと本気出そうかしらん」

「ナイトフォーメーション！」

アギの気迫に応えるしかない。

ユーマは連携戦闘の指示を出す。

陣形はユーマを中央に据え、前衛は『盾』であるアギが左、『剣』のエイリークは右。ユーマの後方にアイリーンがついたＹ字隊形。

これが４人が最も得意とするフォーメーションだ。

「アギ、覚悟しろよ」

「わかってる。行くぜ、姫さん！」

「行くわよ！」

第2ラウンド、開始。

＋＋＋

アギとエイリークを前衛にして、４人は傭兵2人に突撃を仕掛けた。

短期決戦だ。エイリークは《炎槍》に、アギは《氷斧》にそれぞれ向かう。

「ストーム・ブラスト！」

先制はユーマ。ガンプレートが放つ竜巻の奔流がアギと迎撃態勢をとった《氷斧》の間に割り込む。

「む？」

「お嬢ちゃん。今度はこっちからも攻めるわよん」

鋭く突き出される赤い槍。

受け止めたのは。

「うらあっ！」

アギだ。ユーマが牽制した隙に４人の陣形が変わる。

アギがワントップとなり、エイリークがユーマのいる2列目に下がった「ト」の字の陣形。

まるで騎士が盾を前方に翳して身を守るように。

そして手にした槍を敵に向けて構え、突き出す直前のように。

アギはサイドステップしてスペースを空け、そこへエイリークは飛び出す。

《旋風剣・疾風突き》

アギとエイリークの連携に虚を突かれた《炎槍》だが、構わず《旋風剣》に槍を打ち合わせた。

剣の纏う竜巻が槍を弾く。

「くっ？」

「まだよ！」

エイリークは受け捌かれた剣を引き、《旋風剣・二段疾風突き》を繰り出そうとする。

そこへ《氷斧》が側面から割り込んだ。エイリークに戦斧を振るう。

振るおうとした。

「させねぇ！」

陣形は「ト」から「T」へ。

アギとユーマがエイリークの間に立ちユーマがエイリークの、アイリーンがアギのバックアップに入る。

「同じ手は、効かねぇ！」
「降れよ、氷弾！」
「ぬぅ！？」

再び戦斧を受け止めるアギは凍りつく前に《盾》を叩きつけるようにして捌き、アイリーンが《氷弾の雨》で弾幕を張って《氷斧》の動きを封じる。

「はぁっ！！」
「まだまだよん」

一方、エイリークが繰り出した《旋風剣・二段疾風突き》は《炎槍》には通じなかった。彼女は《旋風剣》を真正面から受け止めてみせる。

竜巻の中心。剣の切っ先にまたもや槍の穂先を合わせ、《旋風剣》の衝撃波が放たれないようにして受け止めているのだ。

細剣と槍をお互い突き出したまま、拮抗状態。

力と速さ、そして技量の差があまりにも違いすぎる。

「どう？」
「わかってる。でも動きは止まった」
「！？」

それで彼女はガンプレートを向けるユーマの方を見てしまった。

瞬きほどの隙をエイリークは見逃さない。《旋風剣》の竜巻を前方に向けて解放。

《衝突風》の衝撃波で《炎槍》は吹き飛ぶ。

「まだそんな手をっ！？」
「風弾、ガトリング！！」

ユーマの追撃は半分はガードされたものの、初めて彼女にダメージを与えた。

《ナイトフォーメーション》と名付けられた４人の連携戦闘はアギが防御、エイリークが攻撃の主力となって戦う。

棲み分けがはっきりとしているので攻守の切り替えが早く、状況に応じて中央に構えるユーマとアイリーンが２人と連携することで攻撃防御共に層を厚くすることができる。

「やるわね。でも大体読めたわよん。連携の要は坊やね」

《炎槍》は弾き飛ばされたまま距離をとり、腰に付けた翼刀を投

げた。

赤い翼刀は大きく旋回して弧を描き、アギのフォローに入ったユーマの死角を突いてくる。

「氷晶壁！」

氷の壁が翼刀を弾いた。

「あらん？」

「気を付けて」

「ありがとう、アイリさん」

エイリークが剣、アギが盾ならばアイリーンはユーマという騎士の頭を守る兜だ。

彼女は後方に位置して全体を把握する司令塔ポジションにいる。

目まぐるしい攻守の切り替えでエイリーク達の援護に手一杯になるユーマを、アイリーンがカバーすることでこのフォーメーションが成り立っているのだ。

《ナイトフォーメーション》の基本は攻撃がユーマ、防御がアイリーンで連携の指揮を執り、前衛の2人と後衛の2人の組み合わせであらゆる状況に対応することができる。

《炎槍》が距離を取った分4人は《氷斧》に集中できる。彼女が戦列に戻るまでが勝負だ。

再び「Y」の字陣形に戻ったユーマ達は果敢に攻め立てる。

戦斧をアギが弾いた隙をエイリークが狙い、彼女が狙われた隙をアギがフォローして次にユーマが攻める。

《氷斧》が守りに入ったらユーマに続いてエイリークが攻め、波状攻撃を仕掛ける。

反撃がきたらアギが……とローテーションで攻めることで《氷斧》を休ませない。

「お前等っ」
「皆さん、下がって」
「！」

散開した次の瞬間。ブースターである銀の腕輪を輝かせ、アイリーンが《氷斧》に向けて魔術を発動。

氷属性捕縛術式、《氷晶樹・蔓》

貫通攻撃の《氷晶樹》の派生であるこの術式は、無数に枝分かれする氷晶の枝が蔓草のように伸びて《氷斧》の手足に絡まり、束縛する。

「……っ、この程度の氷で」
「今です！」
「ユーマ、合わせて」

「いくぞ」

エイリークの細剣とユーマの短剣が同時に煌めく。

旋風剣。

ダブル疾風突き！

２人の同時突撃は氷の蔦を砕いた《氷斧》の戦斧で受け止められたものの、その勢いは２メートル近い巨漢の身体を地面より浮かせた。

「甘い」

だが浮かせただけだった。

このままでは受け止められた剣を通して２人は《干渉》され、アギのように精神を凍らされてしまう。

「まだだ」

ユーマは諦めない。右手に持ったガンプレートを構える。

「何を」

「ブースト！」

後方に撃ち出した《ストーム・ブラスト》が、ユーマを《氷斧》

ごと前方へ押し出す。

エイリークはユーマに付いていけずに離脱。

「ユーマ！？」

「ぬおっ」

「集え、集え集え」

「……！」

「風よ集いて螺旋を描け」

戦斧を通して凍りつき始めた短剣の切っ先。

その氷を弾き飛ばすように短剣に竜巻が纏い付き、高速回転しながら風を収束させることでドリルを形成する。

《旋風剣・螺旋疾風突き》

ユーマは《氷斧》を押し出しながら風のドリルで戦斧を砕いていく。

「砕け、砕け！　砕け！！」

「っ！？」

ユーマが短剣を真横に振るった瞬間。戦斧は柄を残して砕け散り、武器を弾かれた《氷斧》に大きな隙ができる。

ガンプレートを向ける。ユーマは《氷斧》にとどめの1撃を放つ。

「終わりだ！」
「うおおおおっ！」
「――えっ？」

とどめを撃とうとしたその時。

ユーマ達へ真横から飛び込み、剣を持って割り込んできたのは――

「！　ファルケさ…！？」
「らあっ！！」

ユーマは咄嗟に《ヒート・カッター》でファルケの攻撃を受け止め、その剣を根元から焼き切った。

「くそっ！　駄目かよ」
「どうして？」

戸惑うユーマ。それで千載一遇ともいえるチャンスを不意にしてしまった。

「邪魔だ」
「――！？　があっ！！」

戦斧の柄で思いっきり横腹を殴られ、ユーマはエイリーク達のもとまで吹き飛ばされて地面を転がる。

「……っ、がはっ」
「ユーマ！」

「ユーマさん！」
「しっかりしろ、おい。ファルケ、お前」

アギはここで初めてファルケの存在に気付き、彼が敵であることを悟った。

「お前、やっぱり帝国軍に」
「……そうだ。俺は新帝国軍少尉、ファルケ・シュペルだ」

その目に以前のような傲慢さはなかった。瞳は彼の心情を映すように揺れている。

作戦に失敗し、エリートであるどころか『帝国人』である誇りと自信までも失いつつあったファルケは、今も迷いの中にいる。

自己崩壊しかけていたともいう。ファルケは挫折してアイデンティティーの主軸が大きく揺らぎ、一時は呆然とするだけで立っていられないほど不安定になっていた。

それでも自分の足で立っていられるのは《炎槍》のおかげだ。

自分の足で立ち、自分の目で見て感じとったものをそのまま受け入れろと、彼女がそう言ってくれたからファルケは今ここにいる。

ファルケは《炎槍》の言いつけを守らず、エイリーク達ではなくて2人の戦いをずっと見ていた。

彼女達の戦いを見て、2人が追い込まれて行くのを感じて、思わずユーマに飛びかかった。

「この2人は俺の……部下なんだ。部下がやられそうになって……放っておけるか」

『帝国人』や傭兵なんか関係なく、ファルケは仲間を守ろうとして自分の意思で動いた。

彼が迷いの中から踏みだした、はじめての一歩だ。

それがたとえ、彼女が少年に望んだ答えでなかったとしても。

「しょうがないわね。それがあなたの出した答えなら」
「《炎槍》さん」
「……一応礼を言おう。助かった」
「《氷斧》さん」

傭兵の2人はファルケの傍に立ち、それから前に出た。

「エンソウ……それにヒョウブ？」
「まさか《三神器》の」
「ご名答。今は2人だけど」

《炎槍》、《氷斧》。そして《雷槌》。

世界ギルドランクAの3人が組むハンターチームは《三神器》と

呼ばれ、その名は世界に7人しかいないＡＡに次ぐ実力と功績もあって世界中に轟かせている。

何より《炎槍》と《氷斧》はそれぞれ、次代の《槍》と《斧》の勇者候補の中でも有力といわれている実力者だ。

普通に相手したならば、ユーマ達に敵う道理がない。

驚く少年達。中でもファルケの驚きが1番酷い。

「ほ、本物!?」

「酷いわね。あたい達を何だと思っていたのん?」

「だ、だって傭兵だから名を騙る偽物とばかり」

「……なんで。そんな有名人が傭兵なんか」

「言ったでしょ。大人のじ、じょ、う。ハンターの資格取り上げられて最近まで無職だったのよん」

「……」

「辛かったわん」

エイリークの問いにあっけらかんと答える《炎槍》。

お茶目に振舞う彼女だが相当厳しかったのだろう。《氷斧》の視線が冷たい。

「まっ、それはさておき。お坊ちゃん。どうするの?」

「えっ?」

「この子達。放っておくとまたあたい達の邪魔をするわよ。きっと」

「……」

ここにきて彼女はファルケに指示を仰ぎ、選択を求めた。

何かを試すように。

「……倒します。奴らは《帝国》の敵です」

「そう」

彼女は特に落胆する素振りは見せなかった。

敵とみなしてしまえば、その選択も正しいから。

(結局、この子はあの子達があたい達に立ち向かう、その想いを感じ取れなかったのね)

《炎槍》は槍を、《氷斧》は砕けた柄に斧の刃を氷で《現創》して構える。

「退くなら今よ」

彼女はユーマに話しかけた。

ユーマは横腹を殴られた痛みに呻き、まだ立ちあがれない。

「……どうして？　どうしてあなた達は帝国軍に味方するんです？」

「最初は割のいいお仕事だったからよん。嫌な話だけど戦士って戦争が一番稼げるの」

「そんなこと」

「まあ、今はお坊ちゃんとの約束もあるけど」

「約束？」

訊ね返すユーマ。

「この子が選んだ道。その行く先を見せる為に」

「……」

ユーマは納得がいかない。彼女を睨みつける。

「そんなの……わかっているんでしょ？　帝国軍が勝ったら王国の人たちは」

「『それ』を見せなきゃいけないのよ」

「！」

「いい勉強になるわよ。温室育ちの学生さんには刺激の強い、『現実』ってやつ」

「あなたはっ！」

ユーマは考えたくもない想像に嫌悪し、熱り立つ。

痛みに構わず無理して立ちあがり、よろめいた所をアイリーンに支えられた。

エイリークとアギが前に立ちユーマを庇う。

「痛っ。離して」

「無茶をしたらいけません」

「でもっ」

「嫌だったら覆してみなさい、坊や」

《炎槍》は言う。

「さっきまではお嬢ちゃん達に合わせているせいかもしれないけど、そんなものじゃないでしょ？」
「……え？」
「少なくともあたいがキー君、《雷槌》から聞いた坊やの力は、あたい達ランクＡハンターに匹敵するはずよ」
ユーマを除く誰もが驚いた。だけど彼女は見抜いている。
例えばエイリークと2人で《氷斧》を突き飛ばした時。あの時だってユーマ1人で十分だった。
ただ2人で仕掛けたからこそ《氷斧》はユーマの実力をエイリークと同等と見誤り油断した。ファルケが割り込まなければ彼は手痛いダメージを負っていたはず。
ユーマはあの瞬間の時だけエイリーク達との連携を無視し、自分の手札を切って勝負に出たのだ。
「隠してる？　それとも出せない理由でもあるのん？」
「……」
「ユーマ？」
ユーマは答えない。
もしも《全力》以上の《本気》になれというならば、覚悟しなければならない。
ユーマはその覚悟をするのに躊躇いがあった。

無意識に右の拳を握る。

（大和兄ちゃん……俺は、この人を相手に）

――拳を振るってもいいのか？

少年の、両の拳に宿る２つの《幻想》はあまりにも重い。

ユーマは沈黙した。それでエイリーク達も動揺している。

沈黙が長く続いたので《炎槍》はユーマから答えを聞くのを諦め、突撃の構えをとった。

《氷斧》がそれに倣う。

「仕方ないわね。残念だけど、あたい達と敵対したことを不幸と思って頂戴」

「……」

邪魔者の排除に２人の傭兵が動く。

「来るわよ」

「ユーマさん」

「……くそっ」

迎え撃つユーマ達だが反応が鈍い。

ユーマは迷いから、エイリークは連戦による疲労で。

それにアイリーンは病み上がりだ。フォーメーションを使った連続攻撃の反動も今更来て3人に致命傷となる大きな隙が生まれた。

だからこそ。

3人を守る為、アギは前へ駆け出し1人で迎え撃った。

衝突。

アギが展開した左の《盾》は灼熱の槍が貫き、右の《盾》は氷でできた斧の刃が半ばまで食い込む。

「がぁああっ！！」

熱気と冷気。《盾》を通じて対極する痛みを同時に受けたアギは悲鳴を上げる。

「アギぃ！！」

「……っ、……捕まえたぜ」

「「！？」」

精神的なダメージは受けたものの、刃はアギにまで届いていない。
彼はわざと《盾》に槍を貫通させ、斧を食い込ませた。
言葉の意味を悟り、《炎槍》と《氷斧》はアギに驚かされる。
2人の武器が、《盾》から抜けない。
木でできたような『やわらかい盾』は、わざと刃を食い込ませて武器を奪い、敵の動きを封じることにも使える。
アギがやったのはそれだ。
「どうだ。《盾》には、こんな使い方もある」
「だが、それだけだ」
「そうね。バンダナの坊や、その状態から一体何ができるのん？」
「見せてやるさ。あいつの、ユーマの本気ってやつをな！」
アギは背を向けたままユーマに向かって叫ぶ。
「やれぇ、ユーマぁ！　《砂縛陣》だ！！」
仲間の中でアギだけがその技を知っていた。
今までユーマが精霊たちの力を極力使わなかった理由を悟り、予め『仕掛けていた』ことに確信を持っていたのは彼だけだった。

《砂縛陣》

ユーマが使える最大級のトラップ。

＋＋＋

3－07d　王都防衛戦　4（前書き）

引っ張り過ぎた。満を持して王様登場

《前書きクイズ》

＊ごめんなさい。予告していたチェルシー参戦は次回です。

Q.　《三神器》解散の理由、あるいは《炎槍》たちがハンター資格を剥奪された理由を述べよ（難易度Ｂ：予想問題。《雷槌》は何処へ）

Q.　傭兵、機巧兵器を主力とする帝国軍対し、王国側が投入できる戦力残り（キャラクター）何人か？（難易度Ｃ：カウントされないのは今回の話までに参戦しているユーマ達４人、レヴァンです）

3－07d　王都防衛戦　4

＋＋＋

《砂縛陣》

それは精霊を核にすることで瞬時に展開できる巨大な蟻地獄。広範囲捕縛術式。

対象の身動きを蟻地獄で封じ、生き埋めにして圧殺。さらに《爆砂陣》という大規模殲滅術式に繋ぐことで必殺となる《精霊使い》ユーマの奥義ともいえる技である。

以前に学園のトップエースに破られはしたが、砂漠があり砂更の力が何倍にもなるこの国で《砂縛陣》を使えば、いくら数段格上である《炎槍》たちもあるいは。

「俺にかまうな。やれぇ！！」

アギは叫ぶ。

貫かれ、切り裂かれた《盾》に流しこまれる苦痛のイメージを堪え、アギは傭兵達を逃がすまいと《盾》に彼女たちの武器を食い込ませたまま離さない。

明らかにパワー型である《氷斧》が全力で引き抜こうとしても、氷の斧刃は《盾》から抜けない。

「……むっ」

「ちょっと。この槍特注なのよん。離しなさい」

逃がさない。

そんなアギの奮戦を見て、ユーマは葛藤する。

どうすればいい？

《砂縛陣》、いや《爆砂陣》を使えばアギが無事で済む保証なんてどこにもない。

「馬鹿、やめろ！」

「早くしろ。長く、もたねぇ……」

「しっかりしなさい！」

「ユーマさん」

苦悶するアギにエイリークとアイリーンは何もできない。代わりにユーマを見る。

「このままですとアギさんが」

「どうするのよ？」

「馬鹿野郎」

ユーマはそれしか言えない。

帝国軍の侵入を食い止めるためにも《炎槍》、《氷斧》の2人は何としても止めないといけない。だけどユーマはアギを巻き込み、犠牲にしてまで倒したいだなんて思っていなかった。

それ以上にユーマは冗談ではない展開に頭を悩ませている。

《砂縛陣》は。

（この先の区画に仕掛けてるんだよっ！）

……。

アギは無駄死フラグを立てていた。

自分を信じて、自爆した。

どうしよう？

今ので多分罠があると気取られたかもしれない。

「アギ……」

「ユーマ？」

ユーマはやるせない思いで皆を庇うアギの背中を見つめた。

その視線はアギに何か《気》のようなものを感じ取らせる。

もしくは嫌な予感。

「……おい。まさか……」

――ハズレか？

――うん

コンタクト成立。アギは自分の失敗に気付いて一気に血の気が引き、青褪める。

「嘘だろ？」

「アギ！」

「いけない」

気が緩んだ。《盾》が抑え込んでいた槍と斧が抜け、《炎槍》と《氷斧》が自由になる。

アギに振るわれる槍と斧。

「まず1人」

「くそっ」

ユーマは咄嗟に《高速移動》を使い、アギに向かって駆けだした。

さらには《ストーム・ブラスト》を背後に向けて放ち、竜巻の推力を得てブースト。

アギの《盾》ごと敵へと体当たりする、この合体攻撃は。

シールド突撃？

「ちょっ、待て！」

ところが。ユーマのアギにぶつかる角度が違った。

ユーマはアギの真うしろではなく斜めうしろからぶつかり、アギを押し出す。

「お前！？」

「離れて」

アギのいた場所に入り込むことで、彼が受けるはずの攻撃をユーマが受けた。

ユーマは身体を駒のように回転させ、《炎槍》の槍はガンプレートの《ヒート・カッター》で弾き、《氷斧》の斧は《守護の短剣》に《風盾》を発動させ受け流す。

さらに《爆風波》で《氷斧》を牽制。無理矢理距離をとらせる。

「やるじゃない。じゃあ……これは？」

《炎槍》が上空に展開したのは、以前王城でユーマを襲った無数の赤い矢。

よく見ればそれは槍だ。投擲用の炎の槍。

炎の槍が全周囲を囲む。狙われたのは。

「エイリーク！　アイリさん！　逃げて」

後方にいる彼女たちだ。降り注ぐ赤く鋭い炎の雨。

逃げる暇なんてなかった。

アイリーンは《氷晶壁》を展開するものの、瞬時のことで魔術のイメージが固まらない。

たいした強度を得られなかった氷の防壁は、炎の槍を数発受けて蒸発。

「きゃあっ！」

「アイリィ！　ああっ」

エイリークも《旋風剣》と《風盾》を駆使して凌ぐが長くもたない。

細剣が炎に弾かれる。

無防備になる2人。アギはユーマの体当たりで体勢を崩していて間に合わない。

それでも容赦なく襲いかかる炎の槍。

彼女たちを守ったのは。

「かぜはー、ばーりあー」

ユーマが待機させていた風の精霊だ。

風葉は《旋風壁》を半球型のドーム状に展開。2人を竜巻で覆うことで上空からの攻撃を全て弾く。

「だいじょうぶですかー？」

「……風葉？　アンタ、いつから？」

風葉はいつもユーマにするよう、エイリークの肩にしがみついていた。

姿を隠して、エイリークが乱入してからずっと。

風葉はもしもの時に備えたユーマの保険だったのだ。

このことにエイリークとアイリーン、それにアギもとんでもないことに気付いた。

「おい」
「まさか」
「もしかしてユーマは」

3人は思わず1人で傭兵を食い止めているユーマを見る。

――今まで精霊の力なしで戦っていた？

ユーマは風葉の魔法、砂更の砂を操る力をゲンソウ術で《補強》することで《精霊使い》として真価を発揮する。

以前のユーマなら《サンドワーム・ブラスト》や《旋風剣・螺旋疾風突き》といった大技はもちろん、ガンプレートを使った魔法弾を除けば《高速移動》、《風盾》のような補助術式も彼の精霊、風葉に依存していたのだ。

彼は学園に来てゲンソウ術を本格的に学び、エース資格を得てからは任務を通して実践と経験を積んだ。

その中で《爆風波》、《風読み》のような中位の術式も習得した。学園に来る数ヶ月前まで彼ができなかったことが今ではできるようになり、精霊に頼らなくてもここまで強くなっていた。

そう。ユーマはまだ《精霊使い》として戦っていない。

知らなかったことに3人は驚き、同時に気付かされたことがあって皆がショックを受けた。

この戦い。ユーマが風葉にずっと、自分達のフォローに専念させていたとしたら。

彼女たちはユーマの……

「お見事。思った通りね」
「！　あなたはっ」
「坊や。そのままでいいの？」

彼女は防がれるのを予想してエイリークとアイリーンを狙った。

《炎槍》は槍を受け止められたまま、続けてユーマに言う。

「これでわかった？　お荷物を抱えたまま戦える程、あたい達は甘くないわよん」
「「「――！」」」

お荷物。足手まとい。

はっきりと言われた3人に動揺が走る。

「そんなことであたい達から王国を守れるのん？　あの時も、バン

ダナの坊やごと攻撃すればあたい達を倒せたかもしれなかったのよ」

彼女は問いかける。彼女は問い詰める。

《雷槌》が認めた少年の力は、その程度かと。

「そんなこと」

「一切考えなかったとでもいうの？」

「……！」

ユーマは動揺して躊躇いを見せた。

それだけで《炎槍》は少年のことを理解する。

（できるできないじゃなくて、思いついてもやりたくないのね）

彼女は苛立った。

（なんて……甘い子）

《炎槍》は腕に力を込め、《ヒート・カッター》のエネルギー刃を押しはじめる。

「うっ」

「余裕？　そんなことないわね。なのに半端な気持ちと覚悟であたい達《三神器》の前に立つの？」

「っ！？」

槍の穂先が朱色に染まる。

直感でユーマは咄嗟に身を引いた。

「だったら……最初から戦場（ここ）に出てくるんじゃない！」

次の瞬間。赤い槍が穂先から火を噴き出した。

《炎槍》は火炎放射でユーマを薙ぎ払う。

＋＋＋

ユーマは自分から身を引いた分僅かな余裕ができ、それで噴き出す炎の初撃を躱すことができた。薙ぎ払いはジャンプで回避。

そのまま《天駆》と《高速移動》で空中移動。距離をとった。

「熱っ！　駄目だ。離れないと」

「煮え切らない男は嫌いよ。がっかりさせないで頂戴」

子供が相手だとしても、戦うのなら『戦士』と戦いたい。《炎槍》は常にそう思っている。

例えばたった1人で果敢に挑んだ剣士の少女のように。

例えば身を呈して仲間を庇い、勝つ為に自分を犠牲にすることを厭わなかったバンダナの少年のように。

《炎槍》が見る限り2人は十分に戦士だった。

たとえそれが自分達と比べればあまりにも未熟で無謀であって、簡単に踏みにじられるような強さでも。戦場に立つ者が持つ意志を彼女は垣間見た。

でもあの少年は違う。中途半端だ。

『お友達』を庇って力を発揮できない。

守りたいものに足を引っ張られ、何も守れずにいる。

何故？

誰よりも強いのに、どうしてその力を十全に振るわない？

力を振るうことで守れるものは沢山あるというのに。

今だってそう。少年が最初から全力で立ち向かって自分達を引き受けてしまえば『お友達』を逃がすことができ、危険に晒さなくてもよかったはず。

戦いに身を置く者が、力を振るわずに何を守れるというのか？

仲間を戦士と認めず、戦場で気遣うくらいなら最初から連れてくるな！

少年の戦う姿勢、覚悟。それに伴う意志が読みとれない。彼女の苛立ちはそこに集約していた。

（キー君、見込み違いよ。これで坊やがお坊ちゃんみたいに駄目駄目なら……）

背を向けて逃げるユーマに対し《炎槍》は翼刀を手にした。

赤い翼刀は彼女が手にした槍のように朱色に染まる。

朱く、燃える。

「焼きを入れるわよっ！」

投擲。炎を纏う翼刀は弧を描いてユーマを襲う。

＋＋＋

「砂更、トラップ解除だ。来いっ」

ユーマは退きながら仕掛けていた《砂縛陣》を解いて砂の精霊を呼び戻した。

続けて地形操作。

地面の砂を隆起させて壁を作り、《炎槍》、それと《氷斧》の視界と進路を塞ぐ迷路を創りだす。

時間を稼ぐ。今更ながらエイリーク達を逃がす為に。

「みんな！　一旦退くぞ」

「そんな子供騙しで」

「！」

《氷斧》は砂の壁を氷の戦斧を振るい、片っ端から凍らせ、打ち砕いた。

「あたい達を止められるとでも思ってるの？」

「ユーマ、うしろ！」

「！？」

ユーマに迫り来る炎を纏う翼刀。

飛んで弧を描く翼刀はユーマの後方から右側面を狙う。

ただしユーマは《風読み》で反応。翼刀の軌道を読み切り、ガンプレートで受け止めて弾き返す。

「ブーメランなんて」

「とっておきを見せてあげる。火燕ちゃん」

「チ！」

弾き飛ばされた翼刀がまるで自分の意思を持つかのように飛翔した。

「えっ？」

照明弾に照らされた夜空を、炎が翔ける。炎が舞う。

朱い軌跡を描く。

この炎は、燕のかたちをしている。

「まさか。あのブーメランは」

ユーマはそれ以上驚く暇がない。

火の燕と化した翼刀はでたらめな軌道を描きユーマを襲う。

ユーマはガンプレートに短剣、篭手に変形した《白砂の腕輪》を駆使して何とか直撃を避けるも、掠ったときに炎に炙られ、じわじわといたぶられる。

砂の壁で防御しようにも砂更は《氷斧》の足留めで手一杯だ。

「ユーマ！」

「だめですー」

加勢に飛び出そうとしたエイリークは風葉に止められた。

エイリークは風葉に促されるまま空を見上げると、炎の槍は今も彼女たちに狙いをつけている。

「狙われてますよー。動かないでくださいー」

「くっ、自分のことくらい自分で守るわよ」

「私が氷輝陣を展開します。だから風葉はユーマさんのところへ」

アイリーンはそう言うが、風葉はふるふると首を横に振る。

精霊は見抜いている。病み上がりであるアイリーンの集中力は、戦いが長引くにつれ格段と落ちてしまっている。

今の彼女だと《氷輝陣》の展開はおそらく数分も保たない。

「はやく逃げてくださいー。そうしないとー」

ユーマがもたない。エイリーク達がいて助けに行けない風葉は焦っている。

「お荷物はじっとしてなさい。これは坊やが招いた結果。報いを受けさせるわ」

《炎槍》は余所見をしてエイリーク達に話しかけた。その間も翼刀はユーマを攻撃している。

彼女が操っているわけではないようだ。

「結果ですって」

「あの子は『お友達』を連れてきたせいで自分の首を絞めた。そういうわけ」

「なっ」

《炎槍》は言葉に容赦がなかった。

「余計なことに力を割いて苦戦してるじゃない」

「それはっ」

何も言い返せない。

「剣士のお嬢ちゃんがいいセンいってたから坊やも期待してたけど、非情になりきれずバンダナの坊やの覚悟も無駄にした。要となる精霊はお嬢ちゃんのお世話に使った。格上を相手にそんな余裕ないはずなのに」

「そんな……」

「あの子は戦士じゃない。子供なのよ。甘過ぎて残念」

《炎槍》がちらりとユーマの方を見る。

見ればユーマはボロボロだ。学園指定の簡易戦闘衣はところどころ焼け焦げ、立っているのがやっとの状態。

同じくユーマを見たエイリークとアイリーンは焦燥と罪悪感に駆られる。風葉がいれば彼もこんなことにならなかったはず。

「ユーマさん……」

「……」

特にエイリークは思い出してしまう。風森の国で、引き際を間違って傭兵に捕まった時のことを。

自分のせいでユーマを巻き込んでしまったことを。

あの時の自分とは違う。

でも今の自分に何ができる？

「逃げるわよ」

「エイリィ！？」

それが彼女の決断。

悔しくても、何もできない。

「アタシたちは、ユーマの邪魔になる」

「……わかりました」

「その決断も遅かったようね」

「があっ！！」

ユーマはガンプレートを翼刀に弾き飛ばされ、受けた衝撃を殺しきれず地面を転がる。

「ユーマ！」
「ユーマさん！」
「さーて。これで終わりかしらん？」

何かを期待する《炎槍》。気分屋の彼女の態度は一貫せずよくわからない。

でも言えることがある。絶体絶命。

ユーマが転がった先に待ちかまえていたのは、氷の目をした巨漢の斧使い。

＋＋＋

「……ぐっ、……ああっ！」
「終わりだ」

《氷斧》の斧が振り下ろされる。

ユーマはすぐに立ち上がれない。

回避が間に合わない。

ユーマに向かってアギが駆ける。でも間に合わない。
間に合わないはずなのに。

次の瞬間。アギが、消える。

「させねぇ！」

まだ名前のない瞬間移動の術式。次にアギが現れたのは、ユーマの目の前だった。

ユーマが見たものは、自分を守る為に右手を翳し《盾》を張る青バンダナの少年。

その背中。

「……アギ？」
「っ、……さっきは悪かったな。おらっ！」

受け止めて氷の斧に触れた《盾》はすぐに凍りつきはじめる。

アギは自分から凍りついた《盾》を砕くと、すぐに左腕を突き出し《盾》を展開。

「何？」

「やらせねぇ」

凍りつきはじめたらまた砕いて右の《盾》。次に左、また右とまるで斧に殴りつけるよう交互に《盾》を繰り出す。

ユーマを守る。

「今の内だ。姫さん達を連れて行ってくれ。俺が足留めする」

「アギ！？」

「王様と合流して体勢を立て直すんだ。このままじゃ俺は」

――何も守れねぇ

王国の為に何かができる、守れると信じて疑わなかった自分は甘かった。アギは痛感する。

アギは覚悟した。ここで命を懸けてユーマ達を守ることを。

ユーマを守ることで故郷を守れると信じることを。

ユーマに自分の大事なものを、すべてを託すことを。

「俺の代わりに……守ってくれ」

「！」

愕然とするユーマ。アギの覚悟が、託そうとするものがあまりにも重い。

そんなもの、受け取れない。

「駄目だ、アギ！」

「餓鬼が。水を差すな」

遮るのは《氷斧》。

冷徹なその視線でユーマを一睨みし、それから彼はアギの方を見た。

この時のアギの目は、ユーマからは見えない。

「死に場所を決めたか。良い目だ」

「……」

「ならば同じ戦士として相応に相手をしよう」

「やめろ」

ユーマの声は届かない。

「きやがれ」

「やめろ」

ユーマは遅かった。覚悟を決めることが。

人がなぜ拳を握るのか。その意味を知り、気付くのが遅すぎた。

ユーマはもう間に合わない。

激突するアギと《氷斧》。

突き出した両手の《盾》はあまりにも容易く凍りつき、砕け散った。

アギを守る《盾》はもうない。それにも構わずアギは拳を握り《氷斧》に飛びかかる。

拳に込めたものは、諦めず最後まで戦うことを誓う覚悟そのものだった。

戦え。すべては背にしたものを守る為に。

拳に込めたその想いを、ゲンソウ術に変える力が。

アギには……ない。

「やめろぉおおおおお！！」

ユーマの絶叫が響き渡る。

エイリークが、アイリーンが、それにファルケが。《炎槍》までもがアギの最期を疑わなかった。

アギが《氷斧》に斬られる現実を否定したのは、ただ1人。

＋＋＋

《盾》はアギを守った。

「あ……」

「させねぇよ」

突然現れたその背中を、アギは昔見たことがある。

あの時、住んでいた孤児院が火事にあったアギは1人逃げ遅れた。

いつだって思い出せる。燃え盛る炎と落ちてくる瓦礫から自分を守ってくれたのはこの人だった。

どこから走って来たのかわからない。汗だくなその姿は昔とちっとも変らない。

いつも飄々として、王様らしくなく破天荒で、本当はサヨコさんラヴなだけのおっさんだけど。

アギが憧れるこの人は、家族を守る為ならどこへでも駆け付けるヒーローだった。

「おう、さま？」

「あー、頭イテェ。おいアギ。教えてもらっておいてなんだが、この技の負担はなんとかなんねぇのか？」

《盾》を使い、片手で戦斧を受け止めながら頭を押さえるレヴァンはそんなことを言う。

あまりにも平然としたその態度。この場にいる誰もが唖然としている。

「《蜃楼歩》とは全く別もんじゃねぇか。跳べる距離は極短けぇし、跳べる場所も『守る対象の目の前』だけって制限かけ過ぎつうの」

「あの、王様？」

「まあ、こいつは夜でも使えるし間に合ったからいいけどな。大丈夫か？」

「なんだ、その技は？」

問いかけるのは《氷斧》。アギに続いて見せられた謎の瞬間移動は彼もさえも知らない。

「……ふっ。見たか。これが新必殺《王様ジャンプ》だ」

「そ、そんな技じゃねぇ！？」

自分のオリジナルに酷い名前を付けられ突っ込むアギ。

この瞬間移動自体がレヴァンをイメージしているので間違ってはいない気もするが。

「突っ込みできるくらいならまだ元気だな」

「……ふざけてるな」

「《氷斧》！　そいつがレヴァイア王よ」

《炎槍》は叫ぶ。

「ボーナス対象！　仕留めちゃって」

「レヴァンさん！」

ユーマは《氷斧》の戦斧を受け止めたレヴァンの《盾》が凍りつくのを見た。

凍てつく《干渉》による精神攻撃。

「あん？」

「……っ！？」

ところがおののいて身を引いたのは《氷斧》の方だった。

「何だよ、それ」

「《氷斧》の《干渉》が効いてない？」

「干渉？　ああ。人の心ん中に独身野郎の寂しさを押し付けたさっきのやつか」

「は？」

きょとんとする《炎槍》。

「いいか？」

レヴァンは堂々と叫ぶ。

「んなもんで……俺のサヨコさんへの愛で日夜煮え滾る情熱ハートが屈するわけがねぇ！！」

魂が籠っていた。

誰もがどう突っ込めばいいかわからない。

「アギ……」

「こういう人なんだ。でも」

アギは万感の思いを込めて言った。

「もう大丈夫だ」

＋＋＋

3－07d　王都防衛戦　4（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

遂にレヴァン参戦。2人のエースも駆け付けユーマ達は強敵である傭兵達を前に体勢を立て直す。

そこへ転送される《忘却》の置き土産。現れた謎の《機巧兵器》が王国にさらなる危機を呼ぶ。

次回「機巧魔獣」

「あたしのマシンは」
「僕の鋼は」
「「こんなものじゃない！！」」

３－０８ａ　機巧魔獣　１（前書き）

対傭兵戦決着？　次の展開へ続きます

王様より活躍するエース達

《前書きクイズ》

Q.　１２６０２８。話中に出たこの数字は何か？（難易度Ｂ：読み返さずに気付いたらマニアック）

Q.　マークのクラス（兵種、職業）は魔術師の他にもう１つあります。それは何か？（難易度Ａ：予想問題。『リーズ学園だよりバックナンバーｖｅｒ１．９０』でも非公開）

3－08a　機巧魔獣　1

＋＋＋

レヴァンがユーマ達の前に現れた少し前。王立研究所。

傭兵の侵入を許したここはもう1つの激戦区。

「ミサイル、セット」

ガスマスクを被りガンプレートを構えたポピラに応じて、舟の両舷に備えられたミサイルラックが開く。

「1番、2番。発射」

《ミサイル・トリガー》の発動にリンクしてボトルサイズのミサイルが次々と撃ち上げられる。

ポピラが研究所の技術士に頼み、協力してもらうことで緊急に量産された改良型の《リュガキカミサイル》だ。

ミサイルは密集した傭兵達の中心に炸裂。

爆発の衝撃と同時に散布した『催眠ガス』が傭兵を一瞬で混乱に陥れた。

「ううっ。何かが、沁みる」
「涙が……とまんねぇ」
「かあちゃん、俺……！」

大の大人が揃って感情のままに泣き叫ぶ様は阿鼻叫喚。

と思ったら傭兵は次の瞬間にはすべて眠ってしまった。

あちこちで鼻を啜る音がしてうるさい。

「……ぐすっ」
「催涙弾ではなかったのですか？」
「ポピラちゃん。１番ラックは《泣き寝入りミサイル》だったよ」

それは集団催眠を起こして無理矢理泣かせた上に眠らせるという非殺傷兵器。

試作にも程がある。

「そうでしたか。それで……どうにかならなかったのでしょうか」

このネーミング。

ポピラがうしろを見れば、同じくガスマスクをつけた整備主任や技術士達が親指を立てている。ビシッ。

やったな、と。

「……作ってもらっておいて文句は言えませんね」

諦めた。

「ミサさんは西校の人と一緒に弾薬の運搬と装填作業をお願いします」

「うん」

「外へ出ます。《駱駝》を出して下さい」

「了解。荒っぽい運転は覚悟してくれよ」

そう言って操縦席のハッチを閉めたのは《駱駝》の操縦士を務める西校の男子生徒。

学生騎士団（レアメダル・メカニック）の副団長だ。

彼は《駱駝》の運転に専念すると言って騎士団の全権を部外者ながら同格にあたるポピラに委ねている。

「チェルシーさんと合流するまでですよ」

「もちろんだ。頼んだぜ、義妹さん」

「……発進」

ポピラは時間が惜しいので否定することを諦めた。

《駱駝》はミサイルタンク兼弾薬庫と化した『リュガキカ丸』を牽引して走りだす。

整備工場の壁をミサイルで突き破り、飛び出した。

＋＋＋

そんな彼女達の奮闘をはるか上空から眺める少女が1人。

「やるじゃない。さすがはあたしの騎士団」

夜風にサイドポニーの髪を揺らし、背中から火を噴いてホバリングしている。

汚れたツナギにタンクトップ。被った多目的ゴーグルが彼女の素顔を隠しているが、見える口元は嬉しそうに笑みを浮かべている。

「ポピーもがんばってね」

＋＋＋

ポピラ達が研究所の傭兵をミサイルで蹴散らしていた頃。

「待たせたな坊主。あとは任せな」

「レヴァンさん」

「あの赤いねーちゃんが《炎槍》、デカイのが《氷斧》だな。それに」

レヴァンはファルケの方を見る。

「こんなとこにいやがったか。不良息子」

ファルケは突然現れたレヴァンに呆然としていたが、仇敵であることを思い出して彼を睨みつけた。

あいつこそ親父を殺した――

歯ぎしりをして、憎悪に顔を歪ませる。

「《炎槍》さん。あいつは！」

「言われなくてもわかってるわよん」

国王であるレヴァンの首は帝国軍で最優先とされるターゲットだ。傭兵にも王を仕留めれば莫大な報奨金が約束されている。

のこのこ現れた王の首を狙い、《炎槍》がレヴァンに襲いかかる。

「ボーナス、いただきよ！」

言葉とは裏腹に今までで1番速く、鋭い突き。

それでもレヴァンはその場から動かず、《盾》を使うまでもなく赤い一閃を躱してみせる。

「あらっ？」

「おせぇ。サヨコさんの愛情あふれる突き技に比べればなんてことはねぇ！」

《炎槍》を蹴り飛ばす。

続けてレヴァンの背後を戦斧が襲うが、それは振り向きざま《盾》で容易く受け止める。

斧を受け止めたレヴァンは微動だにしない。

《干渉》による精神攻撃も彼のサヨコさんラヴ情熱ハート（これはたぶん嘘）には通じない。

「そんなもんか？　ヘタレの《氷斧》さんよぉ」

「……くっ」

《氷斧》はもう1撃叩き込もうとして戦斧を大きく振り上げる。

しかし。振り上げた斧は何もない場所で壁のようなものにぶつかり、刃が『何か』に食い込んでしまう。

《氷斧》は『何か』に邪魔をされてレヴァンにうまく攻撃ができない。

「何だ、これは？」

気付くのが遅かった。

いつの間にか《氷斧》の周囲は《盾》に囲まれていたのだ。これでは狭い場所にいるのと同じで戦斧を自由に振りまわせない。

同じく追撃をかけようとした《炎槍》も《盾》に包囲されて身動きが取れずにいる。

《幻想の盾》は無属性の武装術式。無属性は不可視なので2人はすぐには気付けなかった。2人は驚く。

「武装術式を複数同時、遠隔展開ですって？」

「流石にお前さんら2人を相手になんてできねぇよ」

レヴァンはまず彼女達の近接攻撃を封じ込める作戦に出た。

倒す、ではなく制する。それが武器を持たないレヴァンの戦闘スタイル。

ただし相手は《三神器》と呼ばれる凄腕の2人だ。

足留めして邪魔はできても拘束はできない。

「……フン！」

《氷斧》は包囲している《盾》を全て凍らせて破砕。

砕いた氷塊をレヴァンに向けて飛ばす。

「何？　どわっ」

「甘いわよ、王さま！」

《炎槍》は包囲を抜け切れずにいたが、上空に無数に展開している炎の槍のターゲットを変更。

エイリークとアイリーンを狙っていたやつだ。それをすべて《氷

破弾》を《盾》で凌いでいるレヴァンに向けて放つ。

炎の雨による一斉掃射だ。しかも攻撃範囲が広い。

彼女自身が「狙撃砲撃は専門外」と言っていたが、これは火力ばかりで技が大味すぎる。

《炎槍》の無差別攻撃は《氷斧》諸共、レヴァンだけでなくユーマ達にも降り注ぐ。

回避不能。誰もが防御態勢をとる中でレヴァンだけが迎え撃った。

「舐めんじゃねぇ！」

何十、何百と同時展開した《盾》。何重にも重なって強固な壁となり、更にその壁がいくつも並ぶ。

《盾》の防壁は大きく広がってユーマとアギ、それと少し離れたところにいるエイリークとアイリーン、おまけに《氷斧》までも囲み、炎の雨から皆を守り抜く。

《城壁》

この巨大な広範囲防御術式こそレヴァンの奥義だ。

敵も味方もレヴァンの《盾》の凄まじさに驚くしかない。

「す、すごい。無敵じゃないか」

「まさか。何百もの槍を防ぎきったというの？」
「いいこと教えてやる」
レヴァンが語るのは王様１０の秘密。その７。
「俺が同時展開できる《盾》の枚数は――２０万と７１０２だ」
レヴァンは冗談ではなく本気で言った。
王国に住む家族たちの数だけ《盾》があると彼は言ってのける。
国を守る親父、《盾》の王は伊達ではない。
「……冗談でもすごいじゃない。だけど」
《炎槍》は不敵に笑う。
「とったわよ」
「レヴァンさん！」
炎の槍の雨に紛れていたのは、炎の翼刀。
ずっと隙を窺っていたようだ。レヴァンが全力を出したこのタイミングで《城壁》を掻い潜り、死角を突いてきた。
レヴァンの反応は一呼吸遅れる。

致命的だ。

「王様！」

「やらせるか」

近くにいたアギとユーマがフォローしてレヴァンを庇う。しかし翼刀は２人を嘲笑うように急旋回。

陽動だ。

傭兵達の本命は氷で１回りも２回りも大きくなった巨大な戦斧。

一撃必殺の《氷斧》。

レヴァンまでも翼刀の方を注視してしまった。回避も防御も間に合わない。

「王の首。獲らせてもらう」

「しまった」

「ユーマ！」

ユーマ達諸共レヴァンを氷の戦斧が薙ぎ払う。

＋＋＋

ところが。

《氷斧》の攻撃はレヴァン達には届かなかった。

彼らは守られた。氷の斧刃は間一髪で出現した鋼の壁にぶつかり、砕け散る。

「飛べ、鋼星球」

次に《氷斧》に向かって巨大な棘付き鉄球が飛んでくる。

《氷斧》はうしろに跳び、回避することで後退を余儀なくされる。

「このエグい鉄球は……？」

「あはは。お邪魔します」

「マークさん！」

レヴァンを救ったのは《黒鉄》のエース。マーク・K・フィー。

王様に遅れて駆け付けた黒衣の魔術師。彼は息を切らせた様子もなく朗らかに笑う。

急いで来たのかよくわからない。一緒に走って来た近衛見習いの少年なんか疲れきって息も絶え絶えだから尚更。

「シュリ君も」

「ぜーっ、ぜーっ……うぷっ。……全力であんなに走って、信じられない。あなたは本当に魔術師なんですか？」

「一応ね。僕の相棒が脳細胞まで筋肉だから体力がないと大変なん

だ」

流石に王様にはついて行けなかったよ。そう言うマークをシュリは信じられないもののように見ている。

「それにしてもクルスが喜びそうな顔ぶれだね。苦戦してるなら僕も手伝うよ」

「中央校の《Aナンバー》が2人も!?　それに……シュリか」

ファルケは幼馴染であるシュリが現れて複雑な顔をする。

自分が帝国軍にいて彼が王国軍にいる。

敵対することはわかっていたが、まさかこんなに早く遭遇するなんて思いもしなかった。

シュリもファルケがいることに気付いた。

彼が帝国軍の軍服を着ていることにも。

「ファルケ。お前、何してるんだよ」

「……」

「おい！」

「お友達？」

「いえ。今は……敵です」

見習いとはいえ王国軍にいる限り。

《炎槍》の問いにファルケは目を逸らしながら答える。

「ファル！」
「そこまでにしろ。シュリ」
「レヴァン様」
「話はとっ捕まえてからだ。いいな」
「……はい」

シュリはファルケを見つめ、警備用の長い棒を構えた。

マークの参戦で形勢が傾く。

炎の槍の牽制から解放されたエイリークとアイリーンが復帰してこれで7対3。睨みあう10人。

「どうする？」
「ユーマ君。戦いはここだけじゃない。長期戦は不利だし一気に行こう」
「マークさん。研究所の方は」
「そっちはポピラさん達が頑張ってるから大丈夫」

驚くユーマ達。

「ポピラが？」
「だからこっちに『彼女』が来てくれたみたいだ。ここは僕達で」
「わかりました」
「何をする気？」

訊ねるエイリークにマークが答えた。

「君たちは次世代のエース候補だ。だから見ておくといい。僕らの力を」

「エースの？」

「それに」

次のマークの発言がエイリーク達に衝撃を与える。

「この中でユーマ君の力についていけるのは、多分僕だけだ」

＋＋＋

「状況はちょっと不利かしらん？」

《炎槍》はそう判断した。

マークやユーマ達の力を見てではない。彼女達はレヴァンの力を見誤っていたのだ。

「あの盾は早々破れないわ。一体何をイメージしてるのかしら？」

「ただの《幻想》ではないな。おそらく俺達以上の場数を踏み、実戦を経て培われたものだ」

「反乱軍のリーダー、ね」

《氷斧》に言われて納得する彼女。

「あの精神力も半端ではない。２０万の盾。冗談ではないかもな」
「おっそろしいわね。まっ、確かにあたい達の世代であの王さまほど戦争を経験した人はいないでしょうけど」
「年がばれるぞ……ぐっ」
槍の柄がわき腹に食い込んだ。
「一旦退く？　王さま殺しのボーナスは欲しいけど」
「……。（ものすごく痛いらしい）」
「レー君？」
「任務中は二つ名を使え。……傭兵の目的は王都内部の撹乱だ。今更だが散開して暴れ回った方がいい」
「そうね。お坊ちゃんもそれでいい？」
「わかりました。帝国軍が勝つことが先決です」
ファルケはレヴァンを倒すことよりも帝国軍人として任務を遂行することを優先した。
決して私情を捨てたわけではない。彼はシュリと戦うことを避けたかったのだから。
すっかり自分の言いなりになってしまっているファルケを見て《炎槍》は密かに溜息をつく。
（しっかりしてきたけど、もうちょいなのよねー）
「２手に別れるわよ。お坊ちゃんはあたいに付いてきて」

対峙する面子の中で1番の強敵であるレヴァンを警戒しながら、
彼女は散開の合図をカウントする。

3……2……

1。

「いっくよーーっ！」

《炎槍》のものではない甲高い女の子の声。それが反撃の合図。

ドカーン！！

狙い澄ましたかのようなタイミング。砲撃が《炎槍》達を襲う。

しかもユーマ達の攻撃ではない。

「伏兵ですって！？　一体どこから」
「風葉！」
「っ！？」

砲撃の直後。疾風が駆ける。

彼女の目前まで迫っていたのは、全身に風を纏う黒髪の少年。

「なっ！？　はや――」

「あああああっ！」

奇襲は凌いだ。《炎槍》は短剣の突撃を辛うじて防ぐ。

《ヒート・カッター》の追撃を槍で弾き返して反撃に出る《炎槍》。しかし乱れ突きは2刀流でことごとく防がれてしまう。

逆にユーマが強化されたスピードを活かし、でたらめな剣技で押し返す。

エイリークの剣速よりも……速い！

「あたいが手数で押されてる？　火燕ちゃん！」

翼刀は完全に自分の意思で飛んでいた。燕の化身は彼女の指示を受けユーマの背後を突く。

ユーマは体に纏う風を通して翼刀を感知。振り向かずに真上へジャンプ。

尚も追いかけてくる翼刀をガンプレートで撃ち落とした。精霊の援護を得たユーマはその力を存分に発揮する。

今ユーマが使用している《疾風闘衣》は風属性の複合強化術式。《高速移動》のような走行速度だけでなくあらゆる動作速度を飛躍させることができる。

さらに全身を包む風は身体保護の役割だけでなく《風盾》、《風読み》の効果があり防御面と反応速度も強化されている。未だゲンソウ術では再現されていない高度な《魔法》の1つだ。

しかもユーマ達の攻撃は止まっていない。

ユーマのジャンプ直後。《炎槍》が見たものは、勢いをつけて迫ってくる鋼の円柱。

これは破城槌だ。

「突き破れ。鋼城槌」

マークの使う《黒鋼術》は鋼鉄を《現創》する。地属性でも特異な魔術だ。

質量まで再現された巨大な円柱の追突に《炎槍》はガードの上から吹っ飛ばされる。

攻城戦用の魔術を人間相手に使うので彼も容赦ない。

「ああっ！　いきなり何、この子達」

「たーつーまーきー」

攻撃はまだ終わらない。

上空にいるユーマは風葉の魔法で《疾風》の風を変換。

全身を竜巻で覆い、《炎槍》に向かって急降下。

「手加減はなしだ。これがヒュウさん直伝」

《旋風・鷲爪撃》。いわゆるライダーキック。

竜巻の勢いを乗せた大技を前に《炎槍》も目を剥く。

「あんなの食らうなんて冗談じゃ……何？」

「逃がさないよ」

マークがカバーに入る。

彼は鋼鉄の檻《黒鋼牢》に彼女を閉じ込めた上で《鋼針剣》という鋭い投剣を創っては連続で飛ばし、彼女の動きを封じる。

狭い場所に閉じ込められては満足に槍を振るえない。《炎槍》は防戦一方。

「ちょっ、容赦ないわよ、坊や！？」

「くらえ！」

激突する直前で《黒鋼牢》は解かれた。ユーマの必殺キックが《

炎槍》に炸裂。

一方、マークは《氷斧》への攻撃も忘れていない。『彼女』の援護砲撃に合わせて《黒鋼術》で創った武器を次々と射出している。

中距離からの物量戦だ。近接戦闘が主体の《氷斧》が1番嫌とする戦術でもある。

加えて《氷斧》の氷はマークの鋼とは相性が悪いようだ。向かってくる鋼の武器を《氷斧》は《凍破》で片っ端から凍らせて砕いていくが、きりがない。

創られた鋼の武器は思いのほか重量があって《氷破弾》で撃ち返してもすぐ地面に落ちてしまう。《氷晶壁》のような氷の壁で防いでも突き刺さってヒビが入り、今度は質量攻撃の衝撃で砕かれてしまう。

物量戦なんて1人で出来る芸当ではない。マークは最初から全力だ。

格上である《氷斧》を完全に抑え込もうと彼は負担を無視して《黒鋼術》を振るう。

「貴様等っ」
「いくぞ砂更！」

マークが足留めしている間にユーマの仕掛けが整った。

規模は小さいが砂の精霊が創る蟻地獄に《氷斧》は足をとられる。

「ぬぅおっ！？」
「沈めよ。砂縛陣！」

《氷斧》は蟻地獄に抵抗して周囲の砂を凍らせる。しかし《砂縛陣》は容赦なく凍りついた砂ごと呑みこんでゆく。

マークの攻撃も続く中、《氷斧》はそれでも踏みとどまる。

「う……ぉおおおっ」
「くそっ、あと少しなんだ」
「何をする気だい？」
「実はこの下にも、ここからずっと地中深くに使われていない地下スペースがあるんです」

それはエイリークが参戦する前、ユーマが最初に考えて仕掛けていた罠と同じもの。

砂更に地下を探らせた上で仕掛けた落とし穴。

「それが大帝国のシェルターと同じ構造しているから、そこまで落として閉じ込めてしまえば……」

ユーマは蟻地獄に足掻く《氷斧》を見る。

「駄目だ。即席だから砂更が《砂縛陣》に練り込んだ魔力が足りない。このままじゃ破られる」
「成程。なら僕が巨大ハンマーを創って叩きおと」
「させないわよ！」

飛び出したのは赤い髪の女傭兵。

相当なダメージを受けたにもかかわらず、《炎槍》は2人に襲いかかる。

ユーマはガンプレートと短剣を交差して赤い槍を防ぐ。

「嘘。あれ食らってまだ動け……くっ！」

「ユーマ君！」

「だから甘いのよ坊や。直撃を避けて、蹴りの衝撃波だけであたい倒そうだなんて。火燕ちゃん！」

「うわっ！」

力づくで叩きつけて防御を崩し、薙ぎ払いでユーマを弾き飛ばす。

マークは炎の翼刀が牽制。

マークは高速で飛び交う翼刀に翻弄されてユーマの援護ができない。

「《氷斧》！　今の内に脱出なさい。こっちも決めるわよ」

《炎槍》は槍を1度だけ大きく振りまわすと投擲の構えをとる。

手にした赤い槍を媒体にして、彼女は炎を《幻創》して槍に纏わせる。

炎を纏う槍は力を込める毎に次第に長く、太くなっていく。

最終的には大樹をそのまま杭にしたような燃え盛る巨大な槍を形成した。

全長は１０メートルを易々と超える、巨人が使うようなこの槍を《炎槍》はゲンソウ術で操作し自由に振りまわすことができる。

「でかっ！　なにこれ」
「炎樹槍。これがあたいの本当のエモノ。覚悟なさい」
「待てよねーちゃん」

１撃で終わらせようと《炎樹槍》を投げつける気でいた《炎槍》。

そんな彼女の前にレヴァンが、そしてアギが《盾》を構えて立ち塞がる。

「レヴァイア王！？」
「絶対、やらせねぇ！」
「そうだアギ。止めるぜ。おい、人んちで物騒なもん振りまわすんじゃねぇぞ」
「レヴァンさん。アギ」
「おい坊主！　今の内に《氷斧》を抑えろ」
「ちょっとまったぁ！」

彼女の声は空から聞こえた。

見上げてみれば声に似つかわしくない異様なかたちのシルエットが、照明弾に照らされた夜空に浮かんでいる。

人の胴体ほどの太さと長さを備えた、巨大な腕を持つ少女の姿が。

「みんな消耗してるんだ。最後はあたしにおまかせよ」

＋＋＋

「あれは……チェルシーさん？」

「ブースターエンジンカット。自由落下、いっくよおーーっ！！」

彼女は《氷斧》に向かって降下突撃。

彼女の名はチェルシー・レアメダル。《W・リーズ学園》のエース資格者。

『機械』専門の技術士である彼女の武器は、バックパックの動力源に接続されたマシンアーム。

西校で行われている『機巧兵器再利用計画』。その一環で作られたこの機械腕は破棄された《機巧兵器》の部品を流用したもの。試作ながら強靭なパワーと複数の火器を内蔵している。支援砲撃をしていたのは彼女だ。

チェルシーはバックパックから伸びた操縦桿でマシンアームを操作。

左腕を振り上げ全重量を乗せた1撃を《氷斧》に叩き込む。

「はんまぁぁぁぁっ、ナッコォ！」

「ぐおっ！？」

ズシン！

ガードの上から叩き込まれた機械の拳で、《氷斧》は膝まで砂地に沈み込む。

「もういっちょう！　ってありゃ？」

「なめるなよ」

《氷斧》に掴まれた左腕が凍りつきはじめた。マシンのパワーでも引き剥がせない。

チェルシーは宙ぶらりん。足をじたばた。

「は、離せ」

「おもちゃが。ふざけてろ」

「！」

それが彼女の琴線に触れた。自慢の作品をおもちゃと言われてかちんときた。

チェルシーはガチャガチャと操縦桿を弄りボタンを連打する。

「左腕部ロック解除、パージ。自爆装置起動！」

「何？　うおっ！？」

爆発。左腕を切り離し、距離をとったチェルシーはその間も操縦桿を操り残された右腕へ『コマンド入力』。機能を解放する。

唸りを上げるマシンアームの肘から突き出した、これまた巨大なシリンダー・ユニット。

「《パイルストライカー》起動。エンジン全開エアコンプレッサーも最大。……ブーストジャンプ！」

バックパックから火を噴いて飛び上がるチェルシー。真上から攻撃を仕掛ける。

今まで見たこともない武器。そして戦い方。

《氷斧》は彼女の奇抜さに驚き、呆れている。

「……何だ、お前は？」

「見せてあげる。あたしのマシンは、おもちゃじゃないんだからっ」

マシンアームが繰り出す、チェルシー必殺の掌底。

「インパクトォ！！」

ズン！

掌底は戦斧でガードされた。

「同じ手は効かん」

「まだまだ！」

チェルシーは続けてマシンアームの肘から伸びたシリンダーユニット《パイルストライカー》を打ち込む。

ズシン！！

マシンアームの掌底に追加される衝撃波が戦斧を砕く。

「なん！？」

「とどめぇ！！」

ズバァァァァァン！！！

最後はシリンダーユニットに蓄積された圧縮空気を後方に解放してブースト！

マシンアームで《氷斧》の頭を掴み、蟻地獄の底に強引に押し込む。

問答無用。《氷斧》は声を上げる間もなく砂地に沈められた。

＋＋＋

「砂縛陣解除。捕縛成功。でも……」

ユーマは最後の展開に微妙な顔をする。

「何よ、あれ？」

「あはは。いつ見てもレアちゃんは奇抜だね」

「冗談でしょ？　《氷斧》が、あんなのに力負けした？」

「あの娘がピエラのお弟子さんか」

チェルシーの勝利に一同唖然。

「いぇい！」

彼女は残った右腕を操作してぎこちないピースサイン。

ゴーグルを外すとみんなに向かって「にかっ」と笑った。

＋＋＋

3－08b　機巧魔獣　2（前書き）

インターミッション。それから……

《前書きクイズ》

Q.　この世界における魔獣とは何か答えよ（難易度D：次回に備えてのおさらい）

Q.　次回ユーマ達は3チームに分かれます。その内訳を予想せよ。（難易度S：展開先読み問題。1チームでも当たるとすごい）

3－08b　機巧魔獣　2

＋＋＋

「あたしの名前はチェルシー・レアメダル。17歳。西校の3年生でエース。二つ名は可愛くないけど《鉄拳》っていうの。自慢はスタビ（？）にもなるこのポニーテールと、ピエラ・エルド先生の1番弟子ってことだよ」

「「……」」

「好きな食べ物は」

「「いえ。もういいです」」

戦闘終了後。サイドポニーの髪を左側に結び直した（信じられないがこれで片腕を失くしたマシンアームのバランスがとれるらしい）チェルシーは初対面であるエイリーク達に自己紹介を捲し立てる。

扱う武器や服装はアレだが容姿や仕草はかわいらしい。エイリークよりもずっと『女の子』である。

磨けば光るタイプ。握手を求めてマシンアームの右手を差し出すのはご愛嬌。

「よろしくねっ」

不具合があるのか、残されたマシンアームの右腕からは金属の軋む音が聞こえる。

エイリークは、あの《氷斧》を沈めたバカでかい手に握り潰されては堪らないと、握手の代わりにマシンアームの人差し指を握った。

その指先から７０ミリ砲弾を吐きだすなんて彼女は知るわけがない。

「エルド、と言いますともしかしてエルド兄妹の」

「そうだよ。《銀の氷姫》さん」

アイリーンの推測を彼女は肯定した。ピエラはエルド兄妹の母である。

ピエラ・エルドは西国でも有名な技術士の１人。今は《Ｗ・リーズ学園》の教師をしている。

彼女は考古学者でもあり《西の大帝国》の遺産、《機巧兵器》の解析とその技術応用はどの技術士よりも一頭抜き出ている。ティムス最大の敵。チェルシーの師であると同時に里親でもある。

チェルシーは幼少時に修行の一環として親元を離れ、遠縁にあたるエルド家の世話になっている。その関係でエルド兄妹とは幼馴染。

加えて彼女はその才能を師であるピエラに認められ、ピエラの意向とレアメダル家の希望でエルド家の長男、ティムスの許嫁とされてしまうが。

彼女はまんざらでもない様子。「妹がついてお買い得」くらいに思っている。

「エース資格者って、どこの学校も変わり者なのね」

「あはっ。そうかも。あたしも西校では奇抜奇人扱いされるよ。でも学生の枠に収まらず常識を覆してみせるからエースなのさ」

無邪気に笑うチェルシー。

周りの評価を気にないタイプらしい。

「その点じゃ中央校の《Ａナンバー》はとびきりだね。特に《黒鉄》のマー君と《剣闘士》のクル君は」

「クル君って」

いくら同期とはいえ中央校の誇る学園最強のツートップにその呼び名はどうだろうか？

「それにあの子。１１番目の《精霊使い》」

彼女の言葉にエイリークとアイリーンははっとする。

２人はレヴァンと話をしている中央校のエース達を見た。

結局の所、《炎槍》たちとの戦闘はユーマとマークの２人が決着をつけた。チェルシーの支援砲撃ととどめの必殺技はおまけにすぎない。

精霊の魔法を駆使してエイリークのスーパーモードを遥かに超える高速戦闘をこなすユーマ。

その彼に連携して魔術を使う事ができるマーク。

特に《鋼城槌》を放つタイミングは絶妙だった。あの質量攻撃の術式は狙いをつけて放ち、初動から加速を得るまでが極めて遅い。スピード型を相手にするには全く向いていない。

あの連携はマークの予測射撃の正確さ、そしてユーマが《炎槍》に悟られずギリギリまで注意を惹き付けた猛攻があって為せる技だった。

そのあとの《旋風・鷲爪撃》と《黒鋼牢》のコンビネーション、《砂縛陣》を仕掛けるまでの時間を稼いだ物量攻撃も彼ら2人だからできたといえる。エイリーク達ではどちらか片方でも代わりを務めることはできそうにない。

特にマークと同じ魔術師であるアイリーンはエースとの力量差を思い知った。

見た目以上に頑強で質量のある鋼の武器。そのイメージの密度は再現度の高さと実体化の持続時間を見れば一目瞭然。たった1人で物量攻撃を仕掛けられる魔術の展開力、それを支える精神力も桁が違う。

術式の発動速度にしても《氷輝陣》を展開したアイリーンよりも速い。彼の鋼の魔術、そのイメージの根幹である《幻想》はいつだって瞬時に引き出せるほど心身の隅々まで行き渡っている。

エースであるマークとアイリーン、それにエイリークとでは基本能力が違いすぎる。

以前彼女達が戦った《竜使い》なんて比べ物にならない。《黒鉄》は正真正銘、本物のエースだった。

そして《精霊使い》も。

今日初めてエースの実力を目の当たりにし、先程の戦闘を思い返して軽いショックを受ける2人。

チェルシーは2人の様子の変化に気付かない。

彼女は同じエースでありながら、人言のようにユーマとマークを評した。

「ほんとエース資格者ってみんなすごいよねー。《三神器》といえば世界ランクAのハンターでも指折りの実力者だよ。相手が油断してる『だけ』しか利点はなかったのに短期決戦の『博打』にでて、それで《氷斧》さんに勝っちゃうんだから」

「博打？」

「そう。全財産総賭け、イチバチの一発勝負」

ビビっちゃうよね、とチェルシー。

「マー君の力は大体わかるからそれを基にした推測なんだけど、あんな全力戦闘彼でも1分ももたないよ」

「えっ？」

「あの時《炎槍》さんをレヴァイアさまが抑えてくれなかったら危なかったね。丁度1分くらい経ってたからヤバイ！　ってあたしもつい飛び出しちゃったんだけど」
「「……」」
エイリーク達は顔を見合わせる。
驚いた。そんなに余裕のないギリギリの勝負だったなんて。
「レヴァイアさまの実力が不明だからはっきりと言えないけど、普通なら8対1でも敵わないんだよ。あたしたち『学生レベル』じゃ」
「学生レベル……」
「だからあたしも躊躇いなく大事なマシンを自爆させたし《氷斧》さんに必殺の《チェルシークラッシャー？》も使った。残った右腕もこれでダメダメ」
「……」
必殺技の妙なネーミングに突っ込む余裕もない。
2人は何も気付けなかったのだから。目の前にいる彼女とさえ壁を感じる。
エースの壁を。
「自分で言うのも何だけどマシンを使った奇抜気策があたしの強み。あの2人と違ってあたしはこれで打ち止めだよ。例えマシンが無事でも同じ手はもう通じないだろうし、《炎槍》さんが降参してくれてほんとよかったよ」

よかったねと笑顔を見せるチェルシー。

「「……」」

しかし、笑顔を向けられた2人は素直に笑えなかった。

＋＋＋

チェルシーの活躍で《氷斧》が《砂縛陣》に呑みこまれたあと。《炎槍》は呆気なく降参の意を示した。

多勢に無勢。1人では敵わないと彼女は言うが、退却くらいできたはず。その真意はわからない。

《炎槍》は武器である槍と翼刀をレヴァンに差し出し、大人しく《黒鋼術》の枷に捕まった。ファルケも彼女に従い大人しくしている。

傭兵達との戦闘で消耗したユーマ達は、風葉の《癒しの風》で自然回復を促進させ今は小休憩をとっている。

休憩の合間、ユーマとレヴァン、マークの3人は集まり情報交換と今後の事を話し合った。

「坊主。《氷斧》はどうなった？」

「ここから４００メートルくらい地下にある大きな空洞に閉じ込めました。いくらあの人でも砂更の力なしに脱出は不可能です」

「４００だと！？　そんな下にも大帝国の遺跡はあるっていうのか？」

レヴァンは驚く。

地下遺跡の発掘作業といえば、地表の砂を掻き出すことまで踏まえても発掘深度は最高で約１５０メートルほど。

ユーマが砂更の力で見つけた地下空洞は《西の大帝国》時代でも『地底』と呼べる場所のようだ。

「みたいです。砂更の話から考えると遺跡というよりも炭鉱や鉄鉱の採掘現場みたいですけど」

「採掘。つうことは砂漠の地下にはまだ資源がある可能性が」

「その話はあとでいいでしょうか。それで王様、彼女はどうします？」

脱線した話を修正し、マークは《炎槍》の処置について訊ねる。

「手足を封じても攻撃術式は使えるので安心とは言えませんけど」

「そうだな」

「あっ。俺、傭兵から奪った睡眠薬を持ってます。これで眠らせれば」

「やめて」

近くで話を聞いていた《炎槍》はすぐに拒絶する。

「その薬は睡眠薬に見せかけた別物よ。おそらく思考する力を奪う強力なやつ」

「なっ……！？」

「後遺症も残るしクスリで木偶人形になるなんてごめんよ」

絶句するユーマ達。

ファルケも知らなかったようだ。一緒になって驚愕している。

「こんなものを……アイリさんに使おうとしてたんですか？」

「お、俺は……」

震える声。ユーマの顔を見たファルケは青褪めている。

違法である禁薬の使用。本当に知らなかったですまされなかった。

この場にアイリーンがいなくてよかった。ユーマはそう思う。

「ファルケさん。これが帝国軍のやり方ですか？　それとも傭兵の」

「はいはい。あまりお坊ちゃんを責めないでね。末端の兵なんて所詮そんなものだから」

「……やけにファルケの肩をもつじゃねぇか」

「一応あたいの上官なのよん」

レヴァンを相手にして冗談交じりに《炎槍》は答えた。場を和ませるつもりらしい。

今詮索するのは無駄な行為だ。それでユーマも憤りを抑え、彼女の意図に乗じて話題を変えた。

「……訊いてもいいですか？」

「何かしらん」

「あのブーメラン。かえん、でしたっけ？　それがあなたの『精霊』

ですか？」

ユーマは訊ねる。

途中からもしやとは思っていたが、まさかこんな形で自分やエイルシアとも違う、他の《精霊使い》に出会うなんて思いもしなかった。

燕のかたちをした火の下位精霊。《翼刀火燕》は彼女の《精霊器》である。

「そうよ。あたいの故郷の精霊。だから坊や、あたいの火燕ちゃんに変なことしないでね」

「……」

そう言われて微妙に目を泳がせるユーマ。

《炎槍》の精霊はユーマの精霊たちが相手をしていた。

＋＋＋

その頃の精霊たちといえば。

「素直にー、はいてくださいー」

「チ？」

砂の鳥かごに閉じ込められた赤い燕。砂更の魔力が込められていて脱出できない。

火燕は風葉の『じんもん』を受けていた。

すなわち、「どうして赤い人といっしょにいるのですかー？」と「悪事の片棒をかつぐのはだめですよー」である。

「おさとのおっかさんがー、啼いてますよー」
「チチッ」
「ごうじょーですねー」
「チ」

羽妖精と小鳥。

小動物同士、精霊同士の会話は成立してるらしい。

「しかたないですねー。こうなったら『かつどん』ですよー」

風葉はどこからともなく交渉の切り札を取り出した。

ミサちゃんクッキーである。

「チ？」
「おいしーですよー。これ食べてー、吐いてくださいー」
「……」

寡黙な砂の精霊は突っ込まない。

火燕はクッキーを拒んだ。小首を傾げてぷい。

精霊は物を食べることができない。良識ある火の精霊は、それで

食べるのを拒否したのだが。

「むー。下位精霊のくせにー、中位のわたしのクッキーが食べられないというのですかー？」

「チ！？」

風葉は横暴だった。火燕の顔にクッキーをぐいぐいと押し付ける。

まるで先輩上司の絡み酒である。

ちなみに砂更（後輩）は先輩（風葉）に逆らわず、彼女の振る舞いを黙認した。火燕に助けはない。

「たべるんですよー」

「チチ……」

仕方なしにクッキーをついばむ火燕。

食べて……感動した。

「チ！」

「おいしーですねー」

「チ」

肯定する火の精霊。彼（？）は奇跡を味わった。

気の良い返事に風葉は大盤振る舞い。さらに『へそくり』のクッキー3枚を取り出す。

「一緒に食べましょー」
「チチッ」
「……」

こうして風葉と砂更は火燕と仲良くなった。恐るべしはミサちゃんクッキーである。

いずれミサの名声は彼女のクッキーと共に精霊界（多分ある）に名を轟かせることになるだろう。

＋＋＋

「坊やの精霊、火燕ちゃんを餌付けして懐柔してるみたいだけど」
「……まあ、いいや」

放任主義のユーマは黙認した。

でもあとで風葉には『へそくり』をどこに隠していたか問い正さなければならない。

躾の問題である。

「まあ、そんなとこであたいの相棒である《氷斧》と火燕ちゃんが捕まってるの。人質みたいなものだし迂闊なことはしないわ」

《炎槍》はレヴァンに意味ありげな視線を送る。

「王国軍は捕虜に寛容。でしょ？」

「……成程な」

レヴァンは《炎槍》が捕まった真意を悟った。彼女は自分達が使い捨てであることを理解している。

あまりにも見え見えの作戦に担がれた傭兵達。帝国軍からは助けはこないだろうし、王都から脱出したとしても作戦失敗の責任を問われる可能性がある。

捕虜とはいえ大人しく王国の『保護』に入った方が安全だ。

彼女、ではなくファルケが。

「優しいこった。サヨコさんほどではねぇが」

「あらん。これでもあたい娘がいるの。子どもには優しいのよん」

嘘か本当か、冗談かどうかもわからない。

見た目２０代後半の彼女ではあるが年齢不詳。とてもじゃないが外見からして母親には全く見えない。

傭兵だし民俗衣装という彼女の服装は日に焼けた肌を惜しげもなく晒している。おへそなんてまるだし。

「だから『子ども』とは戦いたくないのよ。……坊やみたいな」

「！」

《炎槍》はいきなりユーマを見据えた。眼差しが鋭い。

「いい？　どんなに強くても、精霊が2体もいても坊やは『戦士』じゃない。敵も味方も切り捨てる覚悟がないから。だから仲間を『お友達』扱いするしあたいや《氷斧》を殺さない」

「それはっ」

「殺意がないのよ。坊やは敵にも味方にも優しすぎる」

《炎槍》はユーマを非難する。

彼女はずっと少年に厳しかった。

「……」

「そこの黒い坊やも急所を狙っていたし、あのへんてこお嬢ちゃんも言動とは裏腹に《氷斧》を相手に本気で殺しにかかったわよ。そのくらい気付いてるわよね？　なのに坊やは」

「やめろ《炎槍》。降参したんなら大人しくしろ」

黙り込むユーマにまずいと思ったか、レヴァンが制止に入る。

「坊主を惑わすな」

「違うわよ王さま。これは忠告」

「あ？」

「仮にも《雷槌》が認めた子よ。それで《三神器》の元リーダーとして言わせてもらうわ」

《炎槍》はユーマをもう1度見つめなおし、告げた。

「『子ども』のまま戦うことをやめなさい。そんな脆い覚悟で戦い

続けるというのなら……死ぬわよ」
「……！」

肝心な時に何もできず、無力を噛み締めたまま。

彼女はそう言った。

＋＋＋

（俺は……）

――そんな薄弱な意志で振るう力で

――弱いくせに。誰かをなんて守れるはずがない

クルスが、そして光輝が。

彼女の言葉は、いつか聞いた彼らの言葉と重なる。

少年の在り方を否定し、真向から打ちのめした2人の言葉と。

誰にでも、どんなに足掻いても、

何もできず、何も守ることができないことが、必ずあるという現実。

世界中のどこにでもある理不尽。それに直面した時。

目の前で奪われ、失ってしまったその時。少年が善悪、正負どの方向に進むか彼女は全くわからなかった。

戦いに身を置けば嫌でもその理不尽を目にしてしまう。それで彼女は少年を問い質した。

『戦士』として割り切る覚悟をするか？

『子ども』のまま、戦う世界から身を引くか？

今のままでは少年はいつか、何の覚悟もなしに『現実』とぶつかって、潰れてしまうと彼女は危ぶんだ。

少年が世界の暗い所を何も知らない『子ども』にみえたから。

それでも戦うというのなら変わらなければいけない。そうしないと心から先に死んでしまう。

だからこその忠告。それが《炎槍》の優しさだった。

だけど。

彼女は少年を見くびっていた。

ユーマは世界の闇を知らなくても、『彼ら』が何と戦っているかを知っているから。

――優真、それでもな

今のユーマは思い出せる。

捨てたくない。そう言った彼の言葉を。

「それでも」

ユーマは、自然と右の拳を握った。

「《炎槍》さん。俺は、『俺』のまま戦います。どんなに足掻いても、何もできないまま終わってしまうのなら尚更」

「っ！？」

「捨てたくありません」

《炎槍》が、それにレヴァンとマークが、ユーマの拳に目を見開く。

『相棒』に呼応して僅かに輝く、少年の『左腕』にも。

握り締める右の拳。左腕を纏う銀の燐光。

それがユーマの抱く彼らの《幻想》、そのかたち。

《幻創》である。

（坊やの拳。あの『おもさ』は、一体何？）

（……おいまて。その銀色は）

（この力、まさかクルスを）

（これが……エースの力だというのかよっ！）

「……」

息を呑む。ユーマを含む全員が黙り込んだ。同じ場所にいたファルケもまた。

少し離れた場所にいるエイリーク達も、様子がおかしいことに気付いてこちらを窺っている。

（キリンジ。あんたは坊やの何を見たの？）

《炎槍》は目の前の少年のことがわからなくなった。

沈黙。空気の重さに誰もが動けずにいる。

「只今もどりました」
「王様、偵察行って来たぜ」
場の空気を変えたのはアギとシュリ。
周囲を探るついで、伝令役の近衛見習いの少年達と情報交換しに行った2人だ。
「？　なんかあったか？」
「……なんでも。それで王都の他の場所や防衛戦の様子はどう？」
「ああ」
アギは偵察で集めた情報を皆に伝えた。
「王都の戦闘はここ以外に派手にやったとこはねぇ。傭兵は民間の自警団と学生でうまく無力化させてるみてぇだ」
「そっか」
「でも王立研究所は派手なことになってる。遠くからでも爆発音が酷かった」
「ミサ。ポピラ……」
今更だが、エイリークは2人を研究所に置いて飛び出したことを後悔している。
マークの言いつけを破ったその責は彼女に重くのしかかる。
「あ。それポピー達よ。あたしここに来る前に空から偵察してきたから知ってる」

これはチェルシー。エイリークは食いつく。

「それ、本当!?」

「うん。《駱駝》、だっけ？　あの《機構兵器》におんぼろ舟くっつけてさ、なんかばかばか撃って傭兵を蹴散らしてたよ」

「舟、ってまさかリュガキカ丸？」

「そこまで知らないよ。あたしの騎士団もいるからしばらく大丈夫と思ってこっちに合流したんだけど」

「となると王都の警戒より研究所の奪還が先だな。……シュリ。防衛線の方は？」

訊ねるレヴァン。

「はい。防衛線は2次まで突破されました。砂山の障害物とそこに仕掛けた罠が思った以上に効果的で帝国軍の進軍は予想より遅れています」

「悪くねぇな。外郭までの防衛線はあと3つある」

「損害は死傷者0、重傷者2、軽傷８４です。殆どが自軍の砲撃の余波による火傷と暴発らしいです」

「まあ、白兵戦にならなきゃそんなもんだな。暴発は聞き捨てられねぇが」

今の損害状況を聞いても楽観できなかった。

ちなみに王国軍の長距離砲台はチェルシーのマシンアーム同様、《機巧兵器》を流用して作ったものだ。今の技術力では十分なメンテナンスが不可能だった。

「向こうの《機巧兵器》は確認できたか？」

「はい。現在《虎砲》タイプが１０両確認されてます。これも砂山

の傾斜のせいで射線が取れないのか、向こうからは1発も撃たれていません」

「あれの有効射程を考えると本当の勝負は直接外郭を狙える第4次防衛線あたりだな。……いいぞ。射線の話が本当なら坊主の精霊はいい仕事してくれた」

これは素直に喜ぶレヴァン。悩みの種だった《機巧兵器》は思ったより数が少ない。

それに時間を十分に稼いでいる。

「あとはミハエルが来てくれりゃ」

「待ってくれ」

ところが。ここで水を差したのは誰でもない、帝国軍に属するファルケだった。

同じく《炎槍》も首を傾げている。

「シュリ。《虎砲》は本当に10両なのか？」

「ファルケ？」

「それっておかしいわねぇ」

「しかも《虎砲》だけなんて」

「だけ？　おい。それってどういう――！？」

レヴァンが問い詰めようとしたその時。

悪寒が走った。

「――っ！　風葉、砂更！？」

「これはっ」
「ユーマ？　アイリィ？」
「チ！」
「わかってるわ火燕ちゃん……やばいわね。これ」
気付いたのはレヴァン、ユーマ、アイリーン、それと《炎槍》の4人だけ。
何かが……来る。
「……戦車？」
ユーマは初めて《機巧兵器》を見た。
転移して現れたのは戦車型《機巧兵器》である《虎砲》、いや帝国軍が改修した《虎砲改》である。
高純度の魔石を積み、魔力を扱える《機巧兵器》だったモノ。
《虎砲改》はいきなり皆に向けて主砲を撃った。
警告もなし。完全な不意打ち。味方であるはずのファルケと《炎槍》諸共。
このままでは一か所にまとまっていたユーマ達は、1撃で焼き払われてしまう。
「ああっ！」

「しまっ！？」
「畜生がっ！！」
レヴァンはアギが使う瞬間移動で皆の前に立つと、瞬時に《城壁》を展開。
その直後。攻性エネルギーに変換された魔力の奔流、光がユーマ達を襲った。
＋＋＋
いきなり主砲を撃った《虎砲改》。
その機体はずっと、ギチギチと『殻』を破るような音を発している。
変異はもうはじまっていた。
＋＋＋

３－０８ｃ　機巧魔獣　３（前書き）

チーム散開。そしてミハエル参戦

《前書きクイズ》

＊前回のクイズの回答は今回の話の中に含まれています。

Q.　対機巧魔獣戦。王立研究所付近で戦いに挑むメンバーを予想せよ（難易度Ｄ：メンバーはポピラを除き３人）

Q.　対機巧魔獣戦。新開発地区付近で戦いに挑むメンバーを予想せよ（難易度Ｄ：彼女達の出番です）

3－08c　機巧魔獣　3

＋＋＋

砂漠の王国の命運を握る防衛戦。

王国軍の防衛線は全部で5つ。国内への侵攻を防ぐ最終防衛線の外郭より10キロメートル先に第1次防衛線がある。

防衛線はユーマが作った砂山だった。精霊の力で隆起した砂漠は巨大な砂の山脈を作り王国を何重にも囲った。学園にいた頃の砂更では不可能な力技である。

侵攻してくる1万もの傭兵は砂上戦に慣れない者は砂に足をとられ、慣れた者も山越えの傾斜のキツさに戦う前から体力を奪われていった。

そこへ王国軍は山越しに砲撃を行う。

《機巧兵器》の技術と部品を流用した長距離砲台は数こそ少ないものの、その力を遺憾なく発揮。王国軍は倍以上ある兵力差を前に反撃を受けない遠距離から帝国軍の兵力を確実に削ってゆく。

これも有効射程数百メートル（500～800）という砲台の性能がなせる業だ。命中精度はともかく、射程距離は並の魔術師の10倍以上ある。（比較すると、ユーマの大技である《サンドワーム・ブラスト》は砂の竜蛇を約60メートル走らせたところで竜蛇のか

たちを維持できなくなる）

「やはり砲台の数が少ないな。本来なら散発的な砲撃を繰り返すよりも火力を集中し、飽和攻撃で殲滅するものだが」

王国軍砲撃部隊の隊長の1人は元帝国軍人だった。

元砲兵である彼が訳知り顔で愚痴のようにうんちくを零すと、副官が隊長を窘めた。

副官もまた帝国の出である。

「そう言わないでください。レヴァイア様がどんな思いでこいつをひっぱり出したと思ってるのです？」

「む」

副官は《帝国》の末期に作られてから長らく封じられ、今日最後の日の目を見た長距離砲台を誇らしそうに見上げた。

「今度こそ正しく扱いましょう。こいつは俺達の家族を守る剣です」

「……わかっとる」

「敵軍、山頂到達まで5分」

偵察兵の報告に王国軍の各部隊長が指示を飛ばす。

「後退だ。撃ち切った砲台は破壊して構わん」

「はっ」

「退くぞ！　間違っても仕掛けた罠を踏むなよ」
「「「了解！」」」
「3次防衛線の各部隊に連絡。撤退支援の砲撃準備。急がせろ」

数キロ間隔で配置された砂の山脈。その合間に部隊を展開する王国軍は帝国軍が砂山を登りきる前に後退。砲撃で侵攻を散々邪魔をしては潔い撤退をみせる。

夜明けには王国軍の兵約3万が駆け戻ってくる。それまで無理をする必要はないのだ。

王国軍の目的は帝国軍の殲滅ではなく、あくまで時間稼ぎであった。

「さらばだ。戦友」

起爆装置を作動して砲台を破壊した隊長は、副官と共に燃え上がる砲台に敬礼。そのあとで部隊をまとめ防衛線を放棄した。

＋＋＋

現在王国軍と帝国軍は、王国外郭より5キロ以上離れた第2次防衛線と第3次防衛線の間にて交戦中。

王国軍の損害が軽微なのに対し帝国軍はこの時点で2割強の損害を出してしまっている。

それでも帝国軍の方が数は上であり《虎砲改》も１０両すべて健在。作戦とはいえじわじわと後退する王国軍は決して優勢とはいえる状況ではなかった。

そして。この時に戦況を大きく変える事態が起きた。

《虎砲改》の操縦士の１人が、足並みの揃わない傭兵に合わせてのろのろと前進することしかできず、加えて一方的な王国軍の砲撃に痺れを切らしたのだ。

操縦士はファルケのように王国に馴染めなかった、プライドの高い『帝国人』だった。

彼は砲手に指示した。

「おい。主砲を撃て」
「えっ？　でも作戦ではまだ」
「威嚇でいいんだよ！　『砂食い』にやられっぱなしで気分が悪い。……どうにかなっちまう」
「……」

操縦士に起きた心境の変化。

元々操縦士の性格が乱暴だったこともあるが、原因が機体に積んだ魔石の影響にあるとは砲手は最後まで気付かなかった。

砂山の山頂まで登った《虎砲改》。その頃にはすでに王国軍の部

隊は撤退し、ここから約2キロ先にある次の砂山付近まで後退しきっている。砂山を下り今から追撃を掛けようにも再び砲撃の雨の中だ。

そしてまた山登り。思うように『砂食い』を狩ることができず、操縦士の苛立ちは最高潮に達した。

「撃てぇ！！」

操縦士の怒声に砲手は狙いも付けず、まっすぐに主砲を撃ち放った。

《虎砲改》の砲身から光が奔る。

闇夜を所々照らす照明弾よりも激しい魔力の奔流に時が止まった。

硬直して目を見張る。敵味方どちらも何が起きたのかわからなかったのだ。

稲妻のような唸り声と共に放たれた一条の閃光。それは目の前の砂山を貫き、そのまた数キロ先の砂山まで貫いて王国の外郭に直撃。

《魔導砲》は有効射程外からの砲撃にもかかわらず外郭の上端に当たった。しかも砂に威力を減衰されながらも錬金術で耐熱強化されていた外壁を灼き、大きな穴を穿った。

最終防衛戦で待機している王国軍は兵に被害こそなかっが、思わぬ攻撃に動転してしまっている。

「今の、魔術攻撃なのか？　ど、どこから……」
「2次防衛線から！？　嘘だろ」
誰もがその威力に絶句するしかない。王国軍に戦慄が走る。
今のが有効射程外から超長距離砲撃だからよかったものの、もしもあの《虎砲》の威力を知らないまま、接近を許し外郭付近から一斉攻撃を仕掛けられていたら――
本来帝国軍は《虎砲改》の性能をギリギリまで悟らせず、《魔導砲》の威力を以て一気に外郭を破壊、《機巧兵器》の脅威を効果的に見せつけることで王国軍の士気をどん底にまで叩き伏せ、反撃の意気を挫いてしまってから国内へ侵攻するのが作戦だった。
操縦士の身勝手な行動は帝国軍の作戦を台無しにしてしまうが、王国軍に《虎砲改》への恐れを抱かせるには十分であった。
「……凄い。これが《魔導砲》……」
「は、ははっ。あはは」
操縦席に乾いた笑い声が響く。
「軍曹？」
「ははは。なんだよこれ。《虎砲》の主砲（１２０ミリ）とは別モンじゃねぇか」

操縦士は《魔導砲》の破壊の光に魅入られる。

あの光こそ《帝国》の新たな威光。

『砂喰い』共への神の鉄槌であり、砂漠の地だけでなく西国、そして世界のすべてをひれ伏せる力だと操縦士は確信した。

その力が今、この手にあることに彼は愉悦に浸る。

「……前進する。次弾用意」

「待って下さい。視界が狭くて死角の多いこの機体は周囲の兵と連携することが運用の絶対条件のはずです。それに砲身の冷却に時間が必要です。これじゃ命令違反……」

「黙れ！　外はどうせ傭兵だろ。連携なんてできはしない」

操縦士は血走る目で砲手を見た。

彼はもう、魔力にあてられ狂気に侵されている。

「撃つんだよ。撃って、破壊して、見せつけるんだよぉ。《帝国》の《虎砲改》を、いや俺の力を！」

「軍曹！」

「撃て！　命令だ。撃って、撃って、撃って！　――――あっ」

もう十分だった。

ソレが『殻』を破る糧を得るのは。

「軍曹！？　うあ、あ、あああああっ！」

断末魔の絶叫。それは産声でもあった。

傭兵達が《魔導砲》の威力に呆然とする中。《虎砲改》は『腹の中の異物』を排除すると『殻』を完全に破り、真の姿を露わにする。

ソレは高純度の魔石を核とした、魔力によって変異したモノ。

もっともあたらしい、魔獣誕生の瞬間。

＋＋＋
機巧魔獣
＋＋＋

《魔導砲》が外郭に撃たれたほぼ同時刻。

同じく《虎砲改》の主砲を撃たれたユーマ達は、直撃にもかかわらずレヴァンの《城壁》に守られなんとか無事でいた。

彼らが最初に見たのは、右手を翳し身を呈して庇ってくれた王の背中。

「王様！」
「レヴァンさん！」
「……っ、大丈夫だ。だが」
最前面にいたレヴァンは一早く目の前のモノに気付いた。
「何だ……アレは」
キャタピラや装甲板、砲身といった《虎砲改》の残骸の中にソレはいた。
鋭い金属のパーツで構成された蜘蛛のような多脚の下半身。上半身は細く、鎌のような腕部を見るとカマキリを連想させる。
頭部らしい部分に顔はない。茎のような首の上にあるのは、赤くて鈍い光を放つ巨大な球体が1つ。
おそらくこれが活性化した魔石だ。同じものが腹部にもある。
全高約3メートル、全長約8メートルと大きさは《虎砲改》と変わらない。ただし、全身を包む黒銀の装甲は照明弾に照らされて禍々しい光を発していた。
《虎砲改》だったモノは生まれたてのようだ。何かを探るようにじっとしている。
「こいつ。まるで魔獣じゃねぇか」

「おそらくそうです。……なんて魔力濃度」

レヴァンの疑問にアイリーンは肯定した。彼女はただならぬ魔力の気味悪さに青褪めている。

「アイリさん？」

「……大丈夫です。アレはきっと魔力による《機巧兵器》の変異体。ですから」

「だから魔獣だっていうの？　生物でもないものに魔力が作用するなんて、信じられない」

「ですがそれしか説明がつきません。目の前のモノは」

アイリーンは目の前のソレがもう魔獣にしか見えない。

おそらく誰もが本能で理解している。アレは人の天敵だと。

「機巧魔獣、とでもいうのでしょうね。アレは」

「……むう。技術士としてはあのデザインは気に入らない」

チェルシーは面白くなさそうに呟き、虫のような機巧魔獣を睨みつけた。

その時だ。機巧魔獣が動き出したのは。

まるで睨まれたことに反応したようだ。機巧魔獣は魔石だけの頭をチェルシーの方に向けた。

「うっ。なによぉ」

「……」

もちろん返事はなかった。

ピッ

代わりに僅かな起動音と共に頭部からレーザーが放たれる。

「――え？」

「危ねぇ！！」

近くにいたアギが彼女の前に出てレーザーを《盾》で受け止める。

「ぐっ……熱っ！？」

アギはレーザーを弾いて真上に打ち上げた。

「アギ！」

「心配ねぇ。……なんつう威力だよ」

「嘘。アギの《盾》を……貫通した？」

アギは痛そうに右手を振る。彼の掌には小さな赤い点が穿たれていた。

レーザーを打ち上げたのは《盾》で受け止めるのが数秒も持たないと咄嗟に判断したからのようだ。

危うく瞬殺だった。チェルシーは命拾い。

「あ、ありがと」
「気を付けてくれよ西校の先輩。……氷の姫さんの言うことが正しいぜ。こいつには殺気がある」
「……うん」

だからこそ《気》が読めるアギはレーザーに反応できた。

狙われたチェルシーだけではない。これで誰もが理解した。

機巧魔獣は紛れもなくイキモノだ。ユーマ達は油断なく戦闘態勢をとる。

「……魔力って《機巧兵器》に命を宿せるものなの？　それってすごい発見なんだけど」
「あはは。君も懲りないね」
「危険だぜ。こいつは」
「でも、コイツ1体くらいアタシ達みんなでやれば」
「あらん。そんな悠長なことでいいの？」

割り込んだのは手足を枷で束縛された《炎槍》。

「……何が言いたいの？」
「坊やは気付いてるわよね？」
「……」
「ユーマ？」

ユーマはずっと沈黙していた。じっとりとした汗をかいている。

怪訝な顔をするエイリーク。《炎槍》は構わずユーマに話しかけ

た。

「精霊が2体いるんですもの。しかも風と地である砂。火の火燕ちゃんしかいないあたいよりも『感じ取る』範囲と精度は高いはずよ」
「《炎槍》さん……」
「だから何の話なの」
「他にも機巧魔獣がいます。しかも複数」
「!?」

気付かなかった皆が驚く。しかも答えたのはアイリーンだった。

意外なところから答えが返ってきたので《炎槍》も驚く。

「やるじゃないお姫さま。単なる《感知》能力じゃ遠くにある魔力は把握できないわよ」
「それは」
「アイリィ。じゃあ、一体何体いるっていうの?」
「そんなに数はいません。おそらく5体以下」
「いや。……目の前の奴を合わせて、王都内に3体だ」

レヴァンはアイリーン以上の精度で機巧兵器の位置を特定した。

「王様?」
「マズイ。向かってるのは研究所方面と……新開区の方だ! こいつら人がいる方へ」
「……驚いた。王さま、あなた何者?」

《炎槍》が精霊を通して機巧魔獣の位置を特定した場所もレヴァンの言うとおりだった。

「知るかよ。ただヤバイ時はいつも『感じる』し、『聞こえてくる』。それだけだ」
「まさか」
「レヴァンさん、マークさん。俺達は散開しましょう」
「ユーマ君？」
ユーマの表情には焦りが見える。
「王都内にいるやつは俺達にしか止められません」
「坊主？」
「ファルケさん」
ユーマは蚊帳の外にいるファルケに訊ねた。
「帝国軍の《機巧兵器》はみんな、目の前のアレなんですか？」
「「――！？」」
皆が事態を深刻さに気付いた。
機巧魔獣は《虎砲改》より生まれている。ということは。
「国の外にアレが１０体もいるっていうこと？」
「マズイ。だとしたら軍の奴らが」
「ファルケさん。時間がない。どうなんですか」
「あ、ああ」
「ファルケさん！」
「わ、わからないんだ。なんで……なんで？」
ファルケは《帝国》の誇る《虎砲》が魔獣になったことに大きなショックを受けている。

彼の知らない《帝国》のなにか。

ファルケはずっと信じていたものが揺らぎ、崩れ落ちる音が自分の中から聞こえてくる。

「おい。しっかりしろ、ファルケ！」

「なんで魔獣なんかに。だって中将は」

呆然自失。

「駄目だ。……《炎槍》さん」

「残念だけど。《機巧兵器》って《帝国》の機密だから傭兵は何も知らされてないのよ。お坊ちゃんが知らないならさっぱり」

「くそっ。わからずじまいか」

「最悪の展開は予想するべきね」

《炎槍》は拘束されておきながらまるで他人事のようだった。

「待って。あの機巧兵器、様子が変」

気付いたのはエイリークだ。

レーザーを撃った後しばらく大人しかった機巧魔獣。

その腹部の、頭部よりも大きな魔石の輝きが激しくなっている。

「あれは……最初に撃ったやつか！」

「そんなの、やらせないよっ」

レヴァンが《城壁》を展開する前にチェルシーが前に出る。

「チェルシーさん！」

「散開するのはあたしも賛成。合図は任せて」

チェルシーは残ったマシンアームの右腕を突き出し、拳を機巧魔獣に向ける。

「さっきのおかえしだよ。右腕部ロック解除。自爆装置時限起動」

《鉄拳》チェルシーの放つ、その1撃は。

「強制射出（パージ）、3、2、1！　いっくよぉーーっ！」

唸る鉄拳。ユーマは生で初めてあの必殺技を見た。

チェルシー最後の切り札、《ロケットパンチ》は機巧魔獣の腹に直撃。

同時にマシンアームの自爆装置が起動。誘爆して《魔導砲》は暴発した。

「今の内よ！」

「坊主ども。無茶すんじゃねぇぞ！」

大きな爆発は砂埃を巻き上げ、それに紛れてユーマ達は3つのチ

ームに別れた。

機巧魔獣を食い止める為に。

＋＋＋

「……！？　ギギギッ」

声にならない金属の軋む音を発する機巧魔獣。

機巧魔獣は《魔導砲》の破損による使用不可を確認すると、殲滅モードから近接戦モードに切り替えた。両腕の鎌を伸ばす。

続いてターゲットを探す。何を以て索敵しているのかわからないが、機巧魔獣が発見したのは正面に2人。

砂埃が止み、対峙する2人が姿を現した。

場に残ったのは《黒鉄》のエース、マーク・K・フィーとアギだ。

「あはは。珍しい組み合わせだね」

「ああ。でもいくら先輩の《黒鋼壁》でも頭の攻撃は防げねぇはずだ。防御は任せてくれ」

「うん。期待してるよ」

アギはマークの前に立って《盾》を構え、マークは《氷斧》戦と同じく《黒鋼術》で《現創》した鋼の武器を展開。

「いくよ」
「おう！」

1回戦は即席の鉄壁コンビＶＳ機巧魔獣の対決。

アギは注意を惹こうと果敢に機巧魔獣に詰め寄り、マークは動き封じる為に多脚に向かって鋼の槍をぶつけた。

「……枷、解いてくれないかしらん？」

あとこの場には2人の他、隅の方に置いてけぼりの《炎槍》とフアルケ、シュリがいる。

＋＋＋

一方、王立研究所へ向かうのはユーマ以下エイリーク、アイリーン、チェルシーの４人。レヴァンだけが新開発地区の地下都市へ向かっている。

ユーマ達はまずポピラ達と合流することを最優先とした。

ポピラがいればエイリークは《スーパーモード》が使える。それとマシンアームを失い戦力外となったチェルシーは、彼女の騎士団である《レアメダル・メカニック》と合流してスペアパーツを受け取る必要がある。未知の敵である機巧魔獣を前に戦力の増強は欠か

せなかった。

「ううぅ、推進剤も切れちゃった。バックパック担いで走るの重い～」

「チェルシーさん。しっかりしてください」

「アイリィもへばっちゃだめよ。……それにしてもよかったの？王様1人で」

先頭を走るユーマにエイリークは訊ねる。

「レヴァンさんは強いよ。アギの上位種みたいなもんだから多分俺達が束になっても傷つけられない」

グレーターアギ＝レヴァンというのがユーマの公式。モンスター扱いである。

「言ってることはなんとなくわかるけど」

「それにレヴァンさんは何か手があるって言ってたから。だから大丈夫だよ」

そう言ってユーマは前を見据える。

このメンバーで機巧魔獣の位置を特定できるのは、精霊たちを通して風と砂で周囲を探れるユーマしかいない。

「急ごう。俺達より近くにいるポピラの方が先に機巧魔獣と遭遇するかもしれない」

「……そうですね」

「わかったわ」

「道案内、よろしくね」

頷くエイリーク達。

しかし。この合間にもエイリークとアイリーンには漠然とした疑問と不安を抱いていた。

それは、ユーマが自分達をおいて先行すれば良いのではないかと思ってしまうこと。

そして自分達なんかいなくてもユーマ1人でどうにかなるのではないかということ。

自分はいても何も役立たないのでは？　その疑問に彼女達は不安を覚え苛んでいた。

2人の沈みがちな様子に声を掛けるチェルシー。

「ほらしっかりして。まだ終わってないよ」

「チェルシーさん」

「エースだって疲れるし限界があるんだよ。マシンのない今のあたしは駄目駄目だし、あなた達を頼りにしてるんだからね」

チェルシーは笑顔を見せる。

元々戦闘系ではない技術士である彼女。それでも疲弊してる姿を一瞬もみせない力強い笑みだった。

少しだけ2人は励まされる。

「ね？」

「……わかったわ」

「行きましょう」

「よし。それじゃあ、れっつご……ってあれ？」

「ユーマさん？」

先を走っていたユーマはいつしか立ち止っていた。

「風葉？　……砂更も」

繋がる精霊たちから伝わってくる危機感。

ユーマは国の外の方を向いて、じっと夜空を見上げていた。

＋＋＋

王国の外、第3次防衛線の前では機巧魔獣による虐殺が行われていた。

すべての《虎砲改》が最初の1体に続いて『孵化』したのだ。計10体の機巧魔獣はまず近くにいた傭兵達を狩りはじめた。

機巧魔獣は間違いなく人の天敵、害獣たる魔獣だった。敵味方の区別がなかったのだ。

機巧魔獣はただ無差別に両腕の鎌を振るっては切り裂き、鋭い脚で踏み潰し、貫いた。頭部のレーザーで焼き払った。

犠牲になったのはすべて帝国軍に味方する傭兵だ。機巧魔獣は片っ端から近くの人間を狩り、夢中になっている。

すでに第3次防衛線の砂山まで後退した王国軍は、目の前の惨劇に何もできずにいる。ただ恐れ、おののいていた。

突然のことに恐慌状態に陥った傭兵、残り6千人を狩り終えたあと。機巧魔獣が次に狙うのは間違いなく王国軍であり、王国の民なのだから。

「味方諸共人を襲う《機巧兵器》。帝国軍はなんて危険なモノを……」

「あ、あんなの一体どうしたらいいというのだ。このままだと俺達も、国も奴らに」

「まずは彼らを助けましょう」

何もできず手をこまねいた王国軍の指揮官たちを前にして、彼は言った。

ダークグレーのスラックスにカッターシャツ。それにネクタイ。靴だけは砂上戦に向いたブーツを履いている。

現れたのは砂漠の国にいて、場違いな装いをした青年。

「彼ら傭兵が足留めしてくれているからこそ、国はあの怪物の危険に曝されていないのです。ならば彼らは友軍です。むざむざと死なせるわけにはいきません」
「ミハエル殿」
王の命で現在クビになっている元宰相補佐官は、そこでふと苦笑を洩らした。
「――と、変な理屈を言って傭兵を助けに飛び出すでしょうね。レヴァン様なら」
「ならば私達も？」
「いえ。ここは王の名代として私が出ます」
ミハエルは指揮官に命じた。
「怪物は私が惹き付けます。軍は引き続き支援砲撃と負傷者の救出を」
「……了解です。准将」
「やめて下さい。昔の、しかも名ばかりの階級ですから」
指揮官をはじめ、ミハエルに敬礼する元帝国軍人たちにきょとんとする元反乱軍の兵たち。
知らない者は皆、ミハエルの左腕と彼の武器にただ驚いている。
ミハエルのシャツは左袖がなかった。代わりに彼の左腕は右腕に比べて、1まわり以上巨大なものに『換装』されている。

チェルシーのマシンアームとは比べ物にならない、洗練されたフォルムの機械の腕。さらにその手には2メートルを超える無骨で巨大な武器を携えている。

剣と呼ぶには奇形の機械の塊。複合兵装型《機巧兵器》。

その名も《機巧剣》。

彼こそレヴァイア王の切り札。《技術交流都市》にて封印していたモノを王は事前に解き放っていた。

対機巧兵器戦に備え王の盟友、ケイオス・エルドによって調整された最終兵器。

説明しよう。

《機巧剣士》ミハエルは改造人間である。

「では。参ります」

巨大な《機巧剣》を左片手で軽々と持ち上げ肩に担ぐと、ミハエルは砂山を下り機巧魔獣の群れに挑みかかった。

3－08d　機巧魔獣　4（前書き）

アギ＆マークＶＳ機巧魔獣

エイリークの選択、ファルケの選択

《前書きクイズ》

＊砂漠の王国編もラストが近づいてきました。今回で前書きクイズは一旦終了です。また次章で。

Q.　砂漠の王国編のラスボスはなんでしょう？（難易度Ｓ：展開先読みクイズ。これが《忘却》最後の罠）

3－08d　機巧魔獣　4

＋＋＋

王国に突如転移してきた《忘却》の置き土産、機巧魔獣。

機巧魔獣の脅威を目の当たりにしたユーマ達。それで彼らは3チームに別れ、それぞれが機巧魔獣を食い止めに向かっているのだが。

激しい爆発音はずっと鳴り響いている。おそらく傭兵の攻撃ではなくポピラが《リュガキカミサイル》を乱射しているせいだろう。

王立研究所方面に向かう途中、急に立ち止まったユーマ。

「ユーマ？」

彼は空を見上げ、国の外の方を不安そうに見ている。

「何か気がかりでも？」

「……いや」

アイリーンになんでもないと言うユーマだが、表情は冴えない。

虫の知らせ、というよりも砂風の便りとでも言うべきか。精霊た

ちが感じ取る危機感はユーマを焦燥に駆らせる。

見逃すととんでもないことになる。そんな予感。

だけど。

「ちょっと疲れただけだよ。行こう。ポピラ達が心配だ」

「……そうですね」

どこか不審に思う彼女たち。ユーマは構わず先を急ごうとする。

ところが。

「待ちなさい」

エイリークがユーマを呼び止めた。

彼女はユーマの態度が気になるどころではなかった。癇に障ったのだ。

「外が気になるなら行きなさい。機巧魔獣はアタシ達だけで十分よ」

「エイリィ？」

「ちょっと、どうしたの？」

「《炎槍》が言ってたわね。精霊が2体いるアンタは『感じ取る』範囲と精度が高いって」

「それって。……ユーマさん。一体国の外に何があるというのですか？」

「多分」

観念したユーマは彼女達に話した。

「国の外に帝国軍の増援がいる」
「なっ！？」
驚いた。彼女達は外にいる機巧魔獣を確認していないが、たとえいなかったとしても王国軍はもう手一杯のはずだ。
傭兵が主戦力とはいえ帝国軍はどれだけの兵力を用意していたというのか。
「こっちに向かってる。でもまだ遠くにいるみたいだから少し余裕があるんだ。だから急ごう。早く王都内の機巧魔獣を倒してそれで」
「それで間に合うの？」
ユーマはすぐに答えられなかった。エイリークは間髪を容れず問い詰める。
「だから悩んでるのでしょ？　今なら、砂更とかで『アンタだけ』なら増援に対処できる。違う？」
「……」
「だったら行きなさい。この国の人たちを守る為に」
「でも」
「見くびらないで！！」
込み上げる怒りにエイリークは叫ぶ。それが本音だった。
エイリークは気付いている。ユーマが自分達に気遣って別行動を取れずにいることを。

戦力に余裕はない。増援が本当ならば機巧魔獣を3人に任せて行くべきなのにユーマはそれができなかった。

ユーマは彼女達の安全と王国の危機に秤をかけて彼女達をとってしまったのだ。その選択がエイリークは許せない。戦場で仲間を気遣い、守るべきものを優先しなかったユーマが。エイリークは《炎槍》の言っていたユーマの甘さをはっきりと理解した。

その原因が自分達にあることが何よりも悔しい。自分にユーマが信用してくれるだけの力がないことに。

「行きなさい。アタシ達は守られる為じゃない。守る為にここにいるの」

エイリークはユーマをまっすぐに見つめる。

すぐ傍で彼女を見ていたアイリーンは、エイリークの翠の瞳が力強い光を放っているように感じた。

まるで大丈夫だ、心配ないとユーマに言い聞かせているようにも感じる。

「アタシ達を気遣って国の人たちを守れなかったのなら、アンタを絶対に許さない」

「……わかった」

ユーマはエイリークに頷いた。

続いてユーマはアイリーンとチェルシーの方を見る。2人はユー

マに応えてくれた。

「こちらは大丈夫です。ここまでくれば機巧魔獣の位置は私でも感知できます」

「アイリさん」

「あたしもエースだから。２人のこともポピー達もあたしに任せなさい」

「チェルシーさんも。……お願いします。エイリーク」

「何」

「ごめん。あとを頼むよ」

ユーマは２人にも頷きもう１度向き直ってエイリークに謝った。きっと彼女の誇りを傷つけたのだろうから。

それに行動を別にする前にユーマは、彼女に伝えなければならないことがあった。

「気を付けて。機巧魔獣は多分《昇華斬》でしか倒せない」

「……えっ？」

「ずっと考えてた。アレに似た感じのを俺は『向こう』で見たことがある。もしも同じ性質があったら長期戦は不利だ。消し飛ばせるあの技で１撃で決めて」

「向こう、ってまさか」

「ポピラと急いで合流して。行ってくる」

「ユーマ！」

言うことだけ言ってユーマは《天駆》、《高速移動》を使って先を急いだ。本当に余裕がなかったらしい。

さらなる王国の危機にユーマの背中を押し、送り出すこと選んだエイリーク。

この時ユーマと離れた彼女の選択が自身の分岐点だったとは思いもしない。

「アイツ……」
「急ぎましょう」

少し時間を割いてしまった。アイリーンはエイリークを促す。

「ごめん。ついカッとなったわ」
「いいえ。気持ちはわかりますから」

不調とはいえアイリーンも自分がユーマの役に立たないことを気にしていた。

だけどエイリークのおかげで気持ちを切り替えることができた。
今度は励ます番だ。

「今は為すべきことをやりましょう。心配無用だったとユーマさんに見せつければいいのです」
「……そうね。それじゃアイリィ、機巧魔獣はどこに」
「待って。静かにして」

気付いたのは周囲を警戒していたチェルシー。

耳を澄ます。それで2人も異変に気付いた。

ずっと鳴り響いていた爆発音が……消えた？

「これは」

「もしかしてポピラが」

「走るよ。急いで！」

駆け出す3人。その先で彼女達が見たものは。

船体を無残に突き破られ、切り刻まれた『リュガキカ丸』と、鎌のような腕を振るう機巧魔獣の姿だった。

＋＋＋

居住区での戦い。機巧魔獣を相手に2人で善戦するマークとアギ。

囮役のアギは機巧魔獣に張り付くように前に立ち、鋭い鎌の腕や槍のような脚の攻撃を《盾》で受け捌く。その合間を縫ってマークの《黒鋼術》が炸裂。この戦い方で彼らは機巧魔獣の脚を3本潰した。

マークの攻撃のタイミングとコースはかなり際どい。前衛のアギのことなど構わず隙あらば遠慮なく鋼の武器を射出する。マークが要求するアギの動きはかなり厳しい。

それで仲間にやられないよう前方と後方両方に《気》を配り神経をすり減らすように戦うアギ。その分彼の集中力は格段に上がり、結果だけ言えばアギはマークに無理してついていくことで実力以上

の力を発揮している。

実戦で得る経験は何よりも大きい。アギは激闘の中でもう1段上の強さを身につけようとしていた。

「離れて」

「……！」

マークの指示にアギは真横に跳び、転がって大きく離れる。

放たれたのは機巧魔獣の真上に展開した巨大なトゲ付き鉄球の《鋼星球》。落下させて叩きつけるが機巧魔獣はそれに反応し機敏な動きをみせジャンプして回避。

その時度重なるダメージで限界が来たのか、機巧魔獣は着地時に残った多脚5本の内さらに2本が折れた。

残る3本の脚では上半身を支え切れず、機巧魔獣はその場に座り込むように倒れる。

アギはそこでやっと息を吐いた。

「ぜはっ！　……やったぜ。やっと足を封じた」

「アギ君！」

休む間もない。機巧魔獣は頭部レーザーをアギに向けて撃った。

対してアギは両手で《盾》を構える。

「それはもう効かねぇ！」

もうレーザーに貫通なんてされない。弾く必要もない。

レヴァンの《盾》を間近で見たアギは思考錯誤する内にコツを掴んだ。両手で《盾》を展開するのではない、左右2枚の《盾》を1つに重ね合わせるのだ。

複合展開。今のアギは2枚が限界ではあるが、これを何十何百と《盾》を重ね複層化し広域展開できるようになればレヴァンの《城壁》になる。アギは《盾》の奥義への糸口までも掴んだのだ。

強度は単純に2倍。アギは《二重の盾》で機巧魔獣のレーザーを完璧に受け止めてみせた。

「どうだ！」

「……参ったね。前から見込みはあったけど、たった1戦でここまで」

もう安心して前を任せられる。アギの《盾》は今でも十分にエースに通用する。

アギの成長を目の当たりにしてマークはそう思った。

「アギ。お前いつの間にこんな」

取り残されたシュリはアギ達に加勢することもできず、手足を封

じられた《炎槍》と一緒にただ戦いの行方を見守っていた。ファルケに至っては機巧魔獣に対するショックが抜けていない。

「魔獣……あれが帝国の……違う。でも……」

「ファルケ」

シュリは呆然とするファルケに何も言えない。

機巧魔獣の足は封じた。《魔導砲》は壊れ頭部レーザーも通じない。あと少しで無力化できる。

マークは警戒を解かないまま、疲弊したアギを労う。

「お疲れ様。おかげで僕は攻撃に専念することができたよ」

「……先輩。エースってここまでキツイ戦い方しねぇとやっていけねぇのか？　絶対俺狙って撃ってただろ？」

「あはは。だから意表を突けるんだけどね」

マークは変わらず邪気のない笑みを浮かべる。

「うしろを見ずに味方の『誤射』に気付いて躱すなんて芸当、クルスしかできないと思ってたよ」

「なっ！？　冗談だろ誤射って」

「あはは」

冗談に聞こえない。わざとアギごと機巧魔獣を狙っていたことを弁解しないマークにアギは絶句。

「上出来だよ。2分くらいとはいえクルスの代わりができたんだか

ら」

「たった2分……マジかよ」

「あとは任せて。足が止まりさえすれば」

マークはここぞとばかりに《鋼城槌》を展開。強力な質量攻撃で勝負に出る。

「叩き潰せ。鋼城槌」

巨大な鋼の円柱を機巧魔獣に向け、勢いをつけて射出。

しかし。彼らが機巧魔獣の本当の恐ろしさを知るのはこの時だった。

「……ギギ」

――解析完了。無属性防御術式、発動マデ０．５秒

迫り来る円柱を前に機巧魔獣の腹部と頭部が赤く輝き出した。備えられた魔石から魔力を抽出している。

《鋼城槌》が直撃するその瞬間。

ガキィッ！！

「なっ！　んだと」

アギは驚愕した。マークも驚きで目を見開いている。

脚を失い見動きのとれない機巧魔獣は《鋼城槌》を難なく防いだ。

目に見えない『壁のようなもの』で。

あれは――

「俺の……《盾》？」

＋＋＋

一方その頃。レヴァンは新開発地区に向かい走っていた。

王都内に現れた機巧魔獣3体の内、新開発地区に向かう機巧魔獣はレヴァン達が散開した居住区から1番遠い位置にいる。急がなければ地下都市に非難している家族たち、警備についた学生たちが危ない。

「……わかってる。わかってるけど身体が足りねぇんだ。黙ってくれ！」

レヴァンはずっと幻聴を聞いていた。これが『普段より』煩雑で酷く、頭が痛い。つい叫んでしまう。

何かが「危ない、危ない」とあらゆる場所から国に迫る危機を教えてくれるのを感じるのだが、レヴァンはそれすべてに対処することができないのだ。焦りだけが先走ってしまう。

今はただ1ヶ所に向かって走ることしかできない。

「くそっ、《蜃楼歩》が使えりゃ……だぁーーっ。わかってるよ」

（……）

「言われなくてもこいつだけはわかる。誰でもない、俺がぜってぇに守らなきゃなんねぇもんくらいはな！」

（……）

レヴァンは走る。今日はどれだけ走ったか覚えていないがずっと全速力だ。

へばりそうになると「サヨコさーん！！」と叫んではど根性を発揮する。《魔導砲》を防いだ時にズタズタになった右腕の激痛は、この際無視した。

そして、レヴァンは間に合わなかった。

＋＋＋

機巧魔獣が《盾》を使った？

「まさか。くっ！」

《鋼城槌》を防がれたマークは、続けて鋼の武器を機巧魔獣の全周囲に向けて展開。一斉射撃。

その攻撃を機巧魔獣は何重にも重ねた《盾》を周囲に展開して攻撃を全て弾いた。

「先輩！　今のは」

「間違いない。《城壁》、だね。……あはは。参ったや」

笑うしかない。マークは瞬時に確信を持ち、戦慄した。機巧魔獣はアギやレヴァンのゲンソウ術を『学習』している。

アギは目の前で起きたことが信じられない。思わずマークに訊ねてしまう。

「先輩。魔獣がゲンソウ術を使うなんてあるのか？」

「……いや」

マークは機巧魔獣の魔石が輝いているのを見て、１つの仮説を立てた。

「《魔法》だよあれは。おそらく機巧魔獣は僕達とは逆の手法で魔術を使っている」

「逆？」

「魔力を使って1度見た僕らの『ゲンソウ術を再現』してるんだ。だとしたらまずい」

アギの《盾》、レヴァンの《城壁》。ならばもちろんマークの《黒鋼術》も。

嫌な予感は的中した。いつの間にか無数に展開された鋼の武器が、マークたちを狙っている。

「ギ……ギギィッ！！」

一斉掃射。

容赦なく降り注ぐ鋼の雨。物量攻撃を前にマークとアギは逃げる間もなく《黒鋼壁》や《盾》で耐え凌ぐ。

彼らにはもう鋼の武器が激しく叩きつけられる音しか聞こえなかった。耐える間にも2人は精神力を削り確実に消耗していく。

機巧魔獣の攻撃は無差別だった。周囲にある居住区までも破壊している。故郷が壊されているのにアギは耐えることしかできない。

《黒鋼術》で猛威を振るう機巧魔獣。しかも《盾》や《城壁》で身を守られては手の打ちようがない。

「このっ。どうすりゃいいんだよ！」

「ファルっ！」

「！？」

アギは気付いた。攻撃は少し離れた場所にいるシュリ達の方にも降り注いでいる。

親友の幼馴染までも危険に晒されていることにアギは我を失くした。

「畜生！」

アギはシュリを守る為になけなしの精神力を振り絞り、瞬間移動を使おうとした。そこに隙が生まれる。

アギは跳べなかった。ゲンソウ術の負荷で頭痛が酷くなり意識が朦朧とする。

連戦の上に碌に休んでいなかったアギはもう限界だったのだ。《盾》を維持するのが精一杯。それでアギは向かってくる《鋼城槌》にも気付けなかった。

追突時に右腕から身体の芯に響く鈍い音がした。アギは《盾》ごと巨大な円柱に弾き飛ばされる。

「アギ君！　――っ！？」

マークも倒れたアギを気遣う余裕がない。

いつの間にか彼の目前に迫り、腕を振り上げている機巧魔獣。

破壊したはずの脚が８本に戻っている。

「自己修復だって？」

「ギ……ギガァアッ！」

それ以上驚く暇もなかった。

機巧魔獣の鋭い鎌のような腕の1撃はボロボロになった《黒鋼壁》を削り取り、2撃目でマークの黒衣を袈裟掛けにばっさりと切り裂いた。

＋＋＋

鋼の武器が降る中でもファルケはずっと呆然としていた。彼は何を信じればいいかわからなくなっていた。

最初は失くしたものを取り戻したかっただけだった。取り戻したかったのはかつての故郷である《帝国》と亡き父の誇り。

新王レヴァイアの下で復興された《王国》はかつての故郷とはあまりにも違い、大事なものを塗りつぶされたような気がしてただ反発していた。父を殺した反乱軍のリーダーが王になったのも、そいつに帝国の拠り所だった皇女サヨコが娶られたこともショックだった。

幼馴染だった少年が新王に憧れはじめ、『砂喰い』の子供と遊びはじめたことも。

何もかもが許せなかった。確かに戦時中幼少期の生活は厳しくて昔と比べれば随分と豊かになった。でも困窮した原因は『砂喰い』の反乱にあって、あの頃は帝国軍が『砂喰い』に勝つことを信じてみんなが耐え忍んでいたはずだ。終戦後、掌を返すように反乱軍を受け入れ『砂食い』と仲良くする『一般の』帝国人が当時のファルケは信じられなかった。

決定的だったのは「帝国軍人は酷い奴らだった」と言った元帝国人がいたこと。絶望した。父ジャファルはこんな奴等を守って死んだのかと。だから『帝国貴族』は民を見限ったと思いこんでしまった。父が将軍で裕福層にいたファルケは軍人が民に乱暴を働いていたなんて知らなかった。

勿論ファルケを諭す大人もいたが彼は全て拒絶した。「お前たちはもう帝国人じゃない」と。父の部下だったミハエルやレヴァンの言葉など絶対に聞き入れなかった。

裏切られ、寝返られ、《帝国》は滅んだ。ファルケはそう思った。王国とレヴァンに対する確執はこうして凝り固まってしまう。

当時１１歳。砂漠の王国が建国して間もない頃だった。

それから6年。戦死した父を追うように母を亡くしたファルケは1人で生きることを選んだ。王国の支援を拒否して父の財産を切り崩す生活を送り、がむしゃらに力を求めた。帝国軍の中将という男に出会ったのもその時だ。

――君は英雄だったシュペルの名を継ぐもの。《帝国》の未来になくてはならない存在だ

《帝国》を取り戻す。中将の甘言のせられ、密かに諜報活動をはじめるファルケ。

彼はただ命令に従い、アイリーンの誘拐のようなうしろめたいこともやっていたのが、それらは全て《帝国》を取り戻す為だと自分を言い聞かせていた。

――あんたのしていることが自分を、『帝国人』の誇りを汚していることに気付け

《精霊使い》の少年が言った言葉も彼は聞き入れていなかった。

ファルケはどこまでも『お坊ちゃん』だった。《帝国》の実態、レヴァンが王国に懸ける想い、中将への疑問、そういったもの全てに目を逸らし現実を見ていなかった。

幸せだった過去に想いを馳せ、都合のいい帝国の幻想に囚われていた。自分が何をしているのかに疑問をもたず、ただ同じ志を持つ上官という理由だけで中将に依存した。

だから疑問をもたない。ファルケが『望んだもの』と中将の『欲しいもの』が決定的に違うことに最後まで気付かない。

その結果がこれだ。帝国の剣であったはずの《機巧兵器》が魔獣に姿を変え街を破壊している。

《帝国》の街並みが残る居住区を《機巧兵器》だったモノが踏み荒らす現実はファルケとって耐えがたいものだった。

（中将はどうしてこんなものを……？　どうして俺は）

ここにいる？　《帝国》を取り戻す為に立ち上がった自分が、何をしているのかわからない。

何がしたかったかも。わからない。

（父上は、父上なら……）

どう思うだろう？　どうするだろう？　わからない。

もう記憶の中の父はあまりのも遠くて霞んで見える。

――あなたは自分の選んだ道の結果ちゃんとを見て、感じとったものをしっかりと受け止めなさい

もう考えたくなかった。受け入れたくなかった。

どこかで道を誤ったと、遂に思ってしまった自分なんて。

（俺は……）

――ファルっ！

気付いた時は地面を転がっていた。

「……シュリ？」

「馬鹿野郎！　ぼさっとするな！」

鋼の武器がファルケに当たる直前。シュリはファルケに飛びかかって彼を庇い一緒になって地面を転がった。

倒れ込む2人。ファルケの上にいるシュリは片腕でファルケの胸倉を掴むと上半身を起こさせた。

「立てるな？　だったら逃げろ！」

「なん」

「アギ達がやられたんだ。もう時間がない、早くしろ！」

切羽詰まった必死な声。シュリは額から血を流していた。

シュリは強引にファルケを立たせると彼を背に庇った。シュリの背中を見てファルケは絶句する。

血まみれだった。傷は浅いようだがシュリの背中は皮鎧ごと無数に切り裂かれ、左腕の袖も血の色に染まりだらりとぶらさがっている。ファルケを鋼の武器から庇った時に受けたものだった。

「お前！」

「魔獣は俺達を狙ってくる。時間を稼ぐから早く逃げろ」

どんなに疎遠になっても、シュリにとってファルケはアギよりも古い幼馴染で大事なかけがえのない親友だ。

たとえ敵対する関係になったとしても魔獣なんかに奪われたくなくて、失いたくなかった。

「どうしてだよ」

シュリは獲物をいたぶるようにゆっくりと迫る機巧魔獣を睨みつけ、うわごとのように呟いた。

「どうして戦争になるんだよ。レヴァイア様がつくってくれたこの国で。もう何も奪わないで、誰からも奪うこともなくて、みんなで暮らせるはずのこの国で」

「シュリ……」

「なんで傭兵が襲いに来て、魔獣が現れるんだよ？　街を壊すんだよ？　ダチを殺すんだよ！　ふざけるな。もう十分なんだ。俺達からもう何も奪うな！」

悲痛の叫びがファルケには痛かった。

シュリが叫んだことは、彼が傷ついたのは自分のせいでもあるから。

傷だらけで自分を庇おうとする幼馴染の背中をファルケは目を逸らすことができない。

――信じるのは他人の言葉じゃない

その背中がファルケに何かを訴えている。

「……やらせるか。俺の大事なもの、目の前で奪われてたまるか」
「シュリ、やめろぉ！」
「行けぇ！　ファル！」

突撃するシュリ。時間を稼ぐ為だけの特攻に機巧魔獣は無慈悲に腕の鎌を振るう。

「っざけんじゃねぇ！！」

シュリが切り裂かれるのを阻止したのは《盾》。

守る者は限界を超えて機巧魔獣に立ち塞がった。

「アギ！」
「……おいシュリ、勝手に俺を殺すんじゃ……ぐあっ！？」
「うあぁっ！？」

アギは《盾》で切られはしなかったものの、次の攻撃でシュリごと弾き飛ばされた。２人はファルケのいる場所まで吹っ飛ばされる。

「お前等！」
「……くそっ、シュリ。さっさとファルケ連れて行きやがれ。俺が時間を稼ぐ」

すぐに立ち上がったアギは左腕を突き出す構えをとった。

「おまっ、何言ってるの！？　それっ、右腕折れてるじゃないか！」

「うるせ！　あんなやつ腕1本で十分なんだよ」
「馬鹿野郎！」

アギとシュリは互いを庇い合いながら機巧魔獣に向き合う。まだ諦めていない。

ファルケはボロボロになっていがみ合う2人に圧倒された。

「なんで、お前等は……」

――信じるのは他人の言葉じゃない。自分の肌で、心で感じたものよ

正直眩しくて羨ましかった。同じ砂まみれなのに、その上傷だらけでなのに堂々と立つ2人の姿が。

同時にファルケは自分が情けなくなった。どうして『帝国人』の自分は誇り高くあれないのだろうと。

そこでふと、ファルケは気付いた。

機巧魔獣が『また』大人しくなっている。まさか様子を見ている？

おかしい。見れば腹部の魔石が輝いている。

まさか。

《魔導砲》が修復されている？

ファルケは青褪めた。レヴァンがいない今、次に撃たれたら今度こそ――

――感じるままに身体を動かしなさい

「お前等、どけぇ！！」

ファルケは思いっきりアギとシュリを突き飛ばした。ふらふらだった2人は簡単に地面を転がる。

「うわっ！」

「痛ぇ！　てめぇ、なん……！？」

遅れてアギ達も《魔導砲》に気付いた。ファルケだけが射線上に取り残された。

もう逃げる時間はない。機巧魔獣の腹部の魔石から魔力の光が放たれる。

「あああああーーっ！？」

迫りくる光にファルケは絶叫。自分を滅ぼす光を睨みつけ、雄叫びをあげた。

最後の最後でファルケはすべてのしがらみを捨て、自分の意思だけで、思うがままに身体を突き動かした。

ただ、失いたくなくて。

＋＋＋

３－０８ｅ　機巧魔獣　５（前書き）

総力戦開始までカウントダウン

『リュガ』の最期、《賢姫》の新たな武勇伝

＋＋＋

誰もが戦っている。ただ、守りたくて。

止められるのは今、自分しかいなかったから。

＋＋＋

防衛線の側面を狙うように進軍する帝国軍の増援。その数２千と《虎砲改》が１０。

《精霊使い》の少年は精霊と共に夜の砂漠を駆けた。今、この増援を食い止められるるのは自分しかいなかったら。

帝国軍は夜襲を仕掛ける為か篝火を焚いていないようだ。月と星と、砂だけの世界。ユーマは１人闇を見据える。

「……」

「だいじょうぶですよー」

「風葉？」

「わたしがいますよー。サラっちもですよー」

ユーマの肩にしがみつく風葉は、少年の意を酌んで優しく、力強

く伝えた。

「あなたの思うがままに。わたしたちは、あなたに人を殺めさせません」

「……ありがとう、風葉」

それでユーマは決意する。『選べる手段だけ』で帝国軍を必ず食い止めると。

「行くぞ。砂更！」

ユーマは砂の精霊にイメージを伝える。２千もの兵に対抗できる《一騎当千》の技を。

できるはずだ。今の砂更なら『彼』の真似ごとくらい。

ユーマと砂更が展開したのは、砂で模造した千騎もの騎兵部隊。

《砂人・千騎兵》

「ブソウさん。ちょっと真似します。全軍、突撃！」

ユーマは王国軍の増援と見せかけ１人で逆奇襲を仕掛けた。

砂の津波と砂塵の竜巻が帝国軍を襲ったのはこのあとの話。

＋＋＋

誰もが戦っている。ただ、守りたくて。

彼女達にも意地があったから。

＋＋＋

王立研究所付近で猛威を振るう機巧魔獣。戦うのはエイリーク、アイリーン、チェルシーの３人。

機巧魔獣は腕に《旋風剣》の竜巻を纏っては《氷晶壁》で身を守り、さらに《氷弾の雨》でエイリーク達を攻撃している。どれも戦闘中にコピーされた技だった。

防戦一方。《魔導砲》と頭部レーザーを警戒し牽制するのがやっとの状態。

「このおっ！」

チェルシーは非常用の武器である手榴弾を氷の壁ごしに投擲。これが思った以上に威力があって機巧魔獣は爆発でのけ反る。

ゲンソウ術でないチェルシーの武器は機巧魔獣にコピーされない。唯一有効な攻撃手段であったが。

「……ごめん。これであたしは本当に打ち止め」

そう言ってチェルシーはバックパックから最後の武器である両手

持ちの大型レンチを取り出した。本職が技術士である彼女の近接戦が当てにならないことは誰もがわかっている。

消耗戦の限界をアイリーンは感じた。

「ジリ貧、ですね。まさか自分の魔術で苦戦を強いられることになるなんて」

「せめて氷の壁が使われなかったらね。そしたら関節とか弱い部位を狙えたんだけど」

そこまで言って、チェルシーは思いついたことを自ら否定した。

「やっぱり駄目かな。ずっと見てたんだけどアレ、自分で傷を直してるよ」

「えっ？」

耳を疑う。しかしチェルシーは技術士の視点で観察し、機巧魔獣の『仕組み』におおよその見当をつけていた。

「ほら。エイリーちゃんが《爆風波》で頭部を殴ったやつ。もう痕跡が見当たらない。時々動きが止まるのは光線を出す予備動作だけじゃなくて魔力で自己修復してるみたい」

「そんな」

「魔石の輝き方にも何種類かあるね。機巧魔獣は攻撃も防御も回復も、動くのも魔石の魔力を使ってるみたい。今のあたし達が機巧魔獣を倒せるとしたら、アレの魔力切れを狙うしかないよ」

「……私達が持ちこたえきれればいいですけど」

戦いは自分達の消耗の方が激しい。今だって機巧魔獣が攻撃してこないのは自己修復をしているからだというのに。

エイリークは悔しそうに眉を顰めた。

「じゃあ、ユーマの言ったとおりなのね」

「ええ。長期戦は圧倒的に不利。機巧魔獣を倒すなら技を真似されないよう1撃で。それができるのはエイリィとポピラさんしかいなかった」

「《昇華斬》。でもポピラは」

無意識に無残な姿を晒した舟を見て、エイリークは歯を食いしばる。

おそらくポピラは、それにミサも『リュガキカ丸』に乗っていたはずだ。死体を見つけたわけではないが無事だという保証はない。

もしも《魔導砲》で2人がかたちもなく消し飛ばされていたら……

ギリッ

「倒すしかない。ポピラがいなくても」

エイリークは細剣を握り直す。

何度も折れて砕けても、《気刃》を砥ぐことで今も共にある愛剣から力を分けてもらうように。

「それでもあたし達が食い止めないといけない。先輩が言ってることが本当なら勝機がないわけじゃない」

機巧魔獣は動けば動くほど、攻撃するほど、魔術を使うほど、そして傷を修復するほど魔力を消費していることになる。

「だったらやるしかないじゃない！」

我慢くらべ。上等だ。エイリークは諦めない。

ここで負けたりすれば送り出したユーマに合わせる顔がない。

そうこうする間に機巧魔獣は手榴弾のダメージから回復して動き出した。腹部の魔石が輝き出す。

「前で撹乱するわ。援護お願い」

「エイリィ！」

《氷晶壁》の防壁から飛び出したエイリークは突撃。アイリーンが正面から牽制してくれる間に機巧魔獣の側面に回り込む。

アイリーンの《氷弾の雨》は機巧魔獣の《氷晶壁》に防がれてしまう。術式をコピーされる以上彼女は氷弾以上の魔術を迂闊に使うことができなかった。

氷弾と氷晶壁の攻防戦。

埒が明かないと判断したのか、機巧魔獣は貫通力のあるレーザーを放とうとしている。その隙にノーマーク状態のエイリークは勝負

にでた。

ここで脚の1本や2本折ることができれば……

「いくわよ！」

「――！　まって！」

チェルシーの制止は遅かった。

エイリークは突撃の速さを上乗せした《旋風剣・疾風突き》で機巧魔獣の脚、その関節をピンポイントで狙う。

「駄目っ。あの魔石の光り方は、逃げてーーっ！」

悲鳴を上げるチェルシー。彼女だけが機巧魔獣の頭部にある魔石の輝き方の変化に気付いた。

――左側面ヨリ近接スルモノアリ。《魔導光閃》ノ発動解除

――選択。風属性近接迎撃術式、発動

すなわち、《爆風波》。

エイリークの《旋風剣》は炸裂する圧縮空気の衝撃波に弾かれた。

彼女は反動で体勢を崩してしまう。

そこへ繰り出される機巧魔獣の《旋風剣》。

「あっ――」

「エイリィーーっ！！」

絶体絶命。今、エイリークを救えるのは。

「馬鹿ですね」

みつあみの少女はガンプレートを構えた。

「エイリークさんはやらせません」

「うおおおおおっ！！」

雄叫びと唸るエンジン音に目と耳がいった次の瞬間。その『逆方向から』放たれ、機巧魔獣に直撃したのは放電する竜巻の奔流。

続けて猛スピードで体当たりを仕掛ける装甲車が、感電して動きが止まった機巧魔獣を思いっきり突き飛ばした。

「機巧兵器!?　あれは」

「王国の《駱駝》だよ。乗ってるのはアレッく君?」

「今の内だ、早く！」

「ポピラ！」

間一髪のところを助けられたエイリークは、姿を見せたポピラに駆け寄る。

「エイリークさん」
「アンタ、生きてたならなんで」
「すいません。私達だけでは勝てそうになくて。舟を囮に隠れて作戦を立てていました。ミサさんも無事です」
「作戦？」
「あなたの力が必要です。来てくれることを信じていました」
訊ね返すエイリークにポピラは安堵の笑みを浮かべた。
エイリークはポピラが言ったことの意味を察する。やはり機巧魔獣を倒せるのは。
「昇華斬……」
「そうです。１度態勢を立てなおしましょう」
ポピラは《レプリカ２》のツインカートリッジから風と雷の属性カートリッジを抜き出すと新たなカートリッジを差し込んだ。
「あの攻撃もガンプレートで？」
「ボルテック・ストーム。元が《機巧兵器》であるあれに雷属性は有効みたいですね」
先程のガンプレートの魔法弾は、ポピラがユーマを《模倣》して使える数少ない大技の１つ。ツインカートリッジの特性を活かした２属性の複合術式だ。
「ポピー！　早く乗って」
「機巧魔獣が動き出しました。急いで」

《駱駝》の後部にある人員輸送用の荷台の上から、チェルシーとアイリーンは2人に向けて手を伸ばす。

全員が乗り込んだのを確認すると《駱駝》は全速力で離脱した。

「これが最後です。全弾発射」

《駱駝》を追いかけてくる機巧魔獣に向けて、ポピラは《ミサイル・トリガー》を発動。『リュガキカ丸』が残ったミサイルをすべて打ち上げ機巧魔獣を足止めした。

彼女達が最後に見た『彼』の勇姿は、機巧魔獣のレーザーで体をまっ2つにされる姿だった。

爆発。

「リュガさん……」

「アンタ、男だったわよ」

「馬鹿でしたけど……いい人でしたね」

思わず赤いバンダナの戦友に別れを告げる少女たち。

彼女達は《駱駝》に乗って、決戦の舞台へと急ぐ。

＋＋＋

誰もが戦っている。ただ、守りたくて。

やっと、失くしてはいけないものに気付くことができたから。

＋＋＋

「あああああーーっ！？」

《魔導砲》の光の前にファルケは絶望の叫び声をあげた。

だけど後悔はしていない。シュリを、友を救うことができたから。

十分な戦果だ。帝国軍人として誇れるはず。

（父上……）

光に呑みこまれる。ファルケはそう思った。

「ファルぅーーーーっ！！」

絶叫するシュリ。だけど。

諦めるのは、絶望するのは。

「まだ早いわよん」

《魔導砲》の光を真正面から受け止めるのは赤い刃。

その炎は燕のかたちをしている。

「こいつは……！」

「いきなさい。火燕ちゃん」

炎を纏う《翼刀火燕》は光を切り裂き、そのまま機巧魔獣へと向かい腹部の魔石に傷を負わせた。

そのまま翔け抜けて旋回。翼刀に宿る火の精霊は、主人である彼女の命のままに機巧魔獣へ襲いかかる。翼刀は高熱で炙って装甲を溶かし、両腕の鎌を切り落とす。

そこまでして主人の元へ戻り、パシッ、と彼女は翼刀を片手で受け取った。

いつの間にか彼女は枷を解いていた。

無造作に縛った赤い髪を靡かせ、槍使いの女傭兵はそっと、ファルケの前に歩み寄りそのまま彼の前に立つ。

「……《炎槍》さん。どうして」

「教えて。なぜあんなことしたの？」

有無を言わせない静かで迫力のある声。ファルケはたじろぐ。

「どうして？」

「お、俺は」

思わず目を逸らしそうになって、踏みとどまった。

「俺はただシュリを殺されたくなくて、気付いたら体が動いてた」

「ファルケ……」

1度口に出したら止まらなかった。

答えはそれだけであったが、ファルケはそのまま心の内を全て彼女に吐露した。

取り戻したかった街を壊した後悔と機巧魔獣への疑問。英雄だった父とかけ離れて行く自分の姿に傭兵を主力とした今の帝国軍の在り方への不安。

中将に対し募ってゆく不信感。

「許せなかった。あの、機巧魔獣というやつが。《帝国》の誇る《機巧兵器》はあんな化物じゃない。俺にでもわかる。あれは《帝国》だけでなく世界に不要なモノだ」

「それで。あなたはどうしたいの？」

「中将に会います」

はっきりと口にした。1度死にかかったせいだろうか、憑きものが落ちたような顔をしている。

「俺は知りたい。だから会って本当のことを訊きます。機巧魔獣のことも、これからの《帝国》のことも」

ファルケは自分の意思を言葉にしているうちに決意が固まった。
彼女にしっかりと伝える。

今、何がしたいのかを。

「問い質して中将が間違ってるというのなら、俺は、《帝国》の過ちを正します」

そこにかつての傲慢な姿も、挫折して迷いを見せる頼りない姿もなかった。

『帝国人』で在り続けると誓った少年は、今を見据え自分の意思で理想へ歩み出す。

それがファルケだけが掴める彼の《幻想》。

「そう」

一皮むけた少年に《炎槍》は優しく微笑んだ。

戦士には似つかわしくないやわらかさとあたたかさ。彼女のもう1つの顔。

「ギリギリのギリで合格。『ファルケ』。《それ》をもう忘れたら駄目よ」
「あっ……」
「坊やたちも。覚えておきなさい」

ファルケだけでない。彼女はアギやシュリ、心に宿す強い力を見せてくれた少年達に戦士の先輩として伝えた。

真髄を。

「どんな現実でも正面から受け止め、感じるままに想い、願いなさい。自分は何がしたいのか？　人は《現想》から《幻想》を生み出すのよ」

「現想……」

それは、あまりにも当たり前のことで省かれてしまっている、ゲンソウ術の第６にして第１工程。

現実を前にして願う心。

はじまりは想いを描くことではない。自分が感じ取ったものから願う、想いを知ることからはじまる。

「《幻想》から続く４つの工程は結局すべて一緒。本当は魔術でも魔法でもない。『想いを現す力』。それが真のゲンソウ術」

「《炎槍》さん……」

「あなたはもう大丈夫。迷っても、うちのめされても、自分の力で前へ進める」

ファルケにそう言った《炎槍》は槍を振りまわして前へ進む。

思わぬダメージに自己修復を優先している機巧魔獣へ。

少年達を守ろうとしているその姿に、アギは彼女のことがますますわからなくなる。

「あんたは一体？　なんで？」

「お節介焼きの美人なよーへーのおねーさん。それじゃ不満？」

「うっ」

今度は艶っぽく笑う《炎槍》。それには肌を大胆に晒した格好もあってアギは急に意識してしまい、シュリやファルケも顔を真っ赤にする。

気まぐれを装う彼女は決して本心を悟らせない。だけど彼女は言った。

冗談のように。

「《三神器》って、実は正義の味方なのよん」

「あはは。それを聞いて安心しました」

「――えっ？」

立ちあがるのは、やられたはずの黒衣の魔術師。

＋＋＋

誰もが戦っている。ただ、守りたくて。

愛する人が与えてくれた、大切な家族を。

＋＋＋

新開発地区。レヴァンは間に合わなかった。

王都に転移してきた3体目の機巧魔獣は、誰にも邪魔されることなく遂に避難所である地下都市の入口まで辿りついてしまった。

機巧魔獣を阻むものは1枚の隔壁のみ。それもレーザーで簡単に焼き払われてしまう。

地下への侵入を許してしまえば戦えるのは僅かな学生たちしかいない。このままでは袋小路の避難民は為す術もなく虐殺されるだけ。

機巧魔獣が地下通路へ踏み入ろうとしたその時。

「ここは、立ち入り禁止です」

レヴァンの代わりに彼女が間にあった。遥か遠く、東国の郷から。

用を為さなくなった隔壁を抜け、彼女は機巧魔獣に姿を晒す。

普段と違う着物は結い上げた髪と同じ黒。戦装束。腰に差すのは

黒塗りの鞘。

刀の銘は《宵ノ桜》。それが彼女の覚悟の証。

王妃サヨコは巨大な鋼の化物を前にして、物怖じもせずただ前に進む。

「この先にいるのは、あの人が与えてくれた私の家族です」

前へ。

「皆が私の父と母。兄で姉。そして子供たち。あの人がつくってくれた家族だから、私は……」

前へ進む。

「国の母として、抱きしめ、愛することができた」

叶わなかった願いを彼は叶えてくれた。

サヨコはレヴァンに、すべての家族たちに、どれだけ愛されているかちゃんとわかっている。

だからこそ前へ。王妃として、国母として愛するものを守る為に。

家族を、子供たちを、国も王の想いも全て。

「化物。おまえはこの先に何があるのか知っているのですか？」

前へ進み、彼女は答える。

「未来です。あの人が砂漠に創る理想。その想いを共にし受け継ぐもの達です。この国におまえが踏み躙れるものは何１つありません」

サヨコは前へ。そして立ち塞がる。機巧魔獣の前へ。

その距離。わずか数歩。

サヨコは告げた。

「それでもこの先を進み、皆を手にかけるというのなら」

「ギ、ギギィ！」

無情にも鎌を振り下ろす機巧魔獣。サヨコはそれでも前へ進み――

「私の『桜』で――散りなさい」

サヨコは静かに機巧魔獣の脇を通り抜け、《宵ノ桜》を鞘に納めた。

同時に機巧魔獣の両腕が斬り飛ぶ。

「……ギイ!?」
「叔母様、危ない！」
自分を呼ぶ声に振り返るサヨコ。目に映るのは頭部レーザーを放つ直前の機巧魔獣。
それと、どこか自分と顔立ちの似た、黒髪のストレートを風に靡かせる少女の姿が。
黒髪の東国風の少女は白のブラウスにスカートという学園の夏服を清楚に着こなし、それでいてイメージを台無しにする長大な大太刀を背負っている。
あの少女はサヨコの。
抜刀、一閃。
「……ミヅルちゃん。来ちゃったの？」
「当然です。こんな危険な国、叔母様を1人行かせはしません」
サヨコはつい先日訪れた母の郷で初めて出会い、懐かれた姪に向かって少し困った顔をした。
姪の名はミヅル・カンナ。《C・リーズ学園》では《賢姫》と呼

ばれ、《剣姫》、《剣鬼》と裏で恐れられている《Ａナンバー》の１人。

彼女の持つ大太刀は勿論《斬鬼首切丸》。学園で数々の武勇伝を刻みつけた業物だ。

王国側としては思いもよらぬ助っ人。これはサヨコの人徳かもしれない。

ミヅルは忘れない。

母と祖母がいつも話してくれる憧れの初代《桜姫》。それが実は自分の叔母で想像通りの女性だと知った、今年の夏を。

（叔母様は絶対にカンナの家に連れ帰ってみせるわ）

後にレヴァンの宿敵となる彼女だった。

思いなおしてミヅルは、サヨコを狙った機巧魔獣の方を向いた。

「それにしても……知らない魔獣ね。私の叔母様に何をしようとしたのかしら？」

「……」

機巧魔獣は何も答えられない。

淑やかな雰囲気に騙されてはいけない。ミヅルはかなり怒っている。

大太刀の柄に手をかけ、彼女は告げた。

「飛ばすわよ」

何を、と言われなくても。

機巧魔獣の頭部はもうなくなっていた。

＋＋＋

誰もが戦っている。ただ、守りたくて。

信じるものがあって、譲れないものがあるから。

＋＋＋

居住区での戦い。倒されたはずのマークは平然と戦列に復帰した。

切り裂かれた黒衣のローブだけ見れば致命傷のはず。

「先輩？」

「……ごめん。少し気絶してた」

マークは傷だらけの後輩たちを見ると、『無傷』の自分が申しわけなくてつい謝った。

「無事だったのね。だとしたらわざと枷を外してくれたのかしらん？」
「《炎槍》さん」
マークは訊ねた。
「何？」
「貴女が味方してくれると信じて訊ねます。アレをなるべく被害を抑えて消す方法、ありますか？」
「……少し時間が欲しいわね。迂闊に大技で仕留めようとして技を覚えられると厄介だし、何より下手に核となる魔石を壊して周囲を汚染したくないわ」
《炎槍》は彼女なりに機巧魔獣を分析していたようだ。
「時間は？　方法は？」
「意外とせっかちな子ね。時間は3分くらい。方法は秘密。ヒントは《精霊使い》って《巫女》にもなれるのよん、ってことかしら」
「成程」
「先輩？」
今のでわかったのか？　アギ達は蚊帳の外だ。
「わかりました。では時間稼ぎは僕が」
次のマークの発言は度肝を抜いた。
「ちょっとあれ、ぶん殴って沈めてきます」
「……はい？」

「ちょっ、先輩！？」
「僕はこれでも怒ってるんだ」

マークはズタズタのローブを脱いで半袖のシャツとズボンだけになった。

切り裂かれたシャツの隙間から覗く身体は、細身とはいえ魔術士とは思えぬほど逞しい。袖口から伸びる腕も華奢とは程遠い。

「その身体」
「あの魔獣は僕の《黒鋼術》を使って君たちを傷つけた。僕の鋼は君たちを守れなかった」

マークは両腕に《黒鋼術》で創った篭手を嵌めた。腕全体を覆うような重装騎士の篭手だ。

実はマークの２つ名である《黒鉄》の由来は《黒鋼術》ではない。この漆黒の篭手にある。

マークは自分の不甲斐無さに鋼の拳を握り締める。

「こんなんじゃ僕は、あの人に合わせる顔がない」

自分に鋼の強さを教えてくれた、あの《精霊使い》に。

＋＋＋

一方。《駱駝》で離脱したエイリーク達は、わざと機巧魔獣に追われて決戦の舞台へとおびき寄せていた。

逃げる間に彼女達は情報交換を終える。

「……というわけ。機巧魔獣はアタシ達の使った術式をそのまま使ってくるわ」

「なるほど。ガンプレートは極力使わない方がいいですね。《昇華斬》も1回勝負ですか」

「えっ？」

「躱されて《昇華斬》を覚えられたら手の打ちようがありません」

「あっ」

「それ以前に私の《サポート・バレット》までも覚えられたら」

機巧魔獣が更に強化されるとそれこそ手のつけようがなくなる。

「それにしても『魔石で動く自動兵器』ですか。一体どこの誰がそんなもの」

「ポピラ？」

「いえ。とにかく支援術式は隠れてやりましょう。問題は機巧魔獣の動きを封じる手段です」

「そこはあたしたちの出番だね。アレっく君。予備のマシンは？」

「整備はバッチリですチーフ」

チェルシーに答えたのは《駱駝》の操縦士を務める《レアメダル・メカニック》の副団長、アレックス。

「こんなこともあろうかと左腕のシリンダーは例のアレに換装しときました。『ブーツ』も使えますよ」

「ナイス！　こんなこともあろうかと！」
「馬鹿ですね」
ポピラは一蹴。同じ技術士でもノリが合わないらしい。
作戦の最終確認。
「では。先制は私と待ち伏せしている騎士団で。その後チェルシーさんが撹乱、機巧魔獣の動きを封じるのはアイリーンさん」
「アイリィ、大丈夫なの？」
「ええ。これが最後です」
一発勝負は余力のない彼女の望むところだった。
「とどめはエイリークさん。お願いします」
「いい？　次で決めるわよ」
＋＋＋
誰もが戦っている。ただ、守りたくて。
「いくよ。あの歪な機械にほんとうのマシンを見せてあげる」
許せないから。

「教えてあげるよ。あのマガイモノの金属にあの人の、真の鋼の強さを」

譲れないから。

「あたしのマシンは」
「僕の鋼は」
「「こんなものじゃない！！」」

２人のエースはその力の真価を、すべてを出し切ることを決意する。

機巧魔獣という存在を認めたくないから。

＋＋＋

３－０８ｅ　機巧魔獣　５（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

マークが、チェルシーが、エイリークが。そしてレヴァンとミハエルが。残る力を振り絞り皆が機巧魔獣へと立ち向かう。

でも。もしもそこまでも、誰かのシナリオ通りであったとしたら。

次回「帝国の闇」

「見ろ。これが《雲鯨》の力だ」

３－０９ａ　総力戦　前（前書き）

ＶＳ機巧魔獣。王都防衛戦の決着

＊内容はぎゅうぎゅう詰めです

3－09a　総力戦　前

マーク・フィーは魔術師だった。彼に会うまでは。

＋＋＋

総力戦

＋＋＋

居住区。対機巧魔獣戦。

決戦の時。

「先輩！」

「下がって。僕1人でいい」

漆黒の騎士の篭手。それだけを武器にマークは走る。

自己修復中の機巧魔獣は、マークをさほど脅威と思わず牽制の《黒鋼術》を放った。鋼の武器がマークを襲う。

「単調すぎる。それがお前の見た僕の鋼だというのなら……」

マークの篭手は難なく武器を弾いた。

「僕を舐めるな」

マークは走る。降り注ぐ鋼の武器を篭手で弾き返し、ある時は《黒鋼壁》を壁に使い、足場にして機巧魔獣との距離を詰める。

拳が届くその距離まで。

鋼は刃金。刃物をつくる為に生まれ、鍛えられた鉄だ。鍛鉄とも呼ぶ。

鋼は鍛えられることで強くなる金属。鍛錬を繰り返すことで不純物を除きより硬く、洗練され、強靭となる。

表面は冷たくも芯は熱く、硬く。

鍛えられた鋼は曲がらない。決して折れない。そしてマークは今、腕に鋼を纏った。

マークが自身と共に鍛え上げた、彼だけの鋼を。

《黒鉄》の拳は《鋼星球》を殴り返し、《鋼城槌》の質量攻撃も真正面から受け止めた。

「こんなものか？　いや。所詮こんなものだ。意志の籠らない鋼なんて、ただの鉄クズだ」

熱く、硬く。

鋼の拳が《鋼城槌》を砕く。機巧魔獣がコピーした《黒鋼術》はこうなったマークにはもう通じはしない。

それに。機巧魔獣はマークの篭手をコピーできなかった。

篭手は《黒鋼術》。すでにコピーした鋼の魔術であったから。違いがあるとすれば、それは術式ではなくマークの方にある。

技術だ。力だけで、身体強化の術式だけで出来る芸当ではない。1番に気付いたのはアギだった。

「……武術だ。あの体捌きと体つき。間違いねぇ。先輩はただの魔術師じゃねぇ」

正確には違う。本当の彼は魔術師ではない。かつてのマーク・フィーが魔術師だった。

強くありたかった。強くなればそれでいい。そう思った。彼も男

だったから。

魔術師を選んだのは貧弱な自分の身体を思ってのこと。特にこだわりがなかった。ただ力を求めただけだったから。

それで打ちのめされた。がむしゃらな訓練の果て。成果を得ず、傷つき、死にかけて。本当の強さに彼は守られた。

守られた彼は自分を守った青年に問われる。

「何がしたいんだ？　お前は」

強くありたかった。強くなればそれでよかった。

でも駄目だった。彼には目標がなかった。力を欲する願いが、理想がなかった。

「あなたのようになりたい。あなたの、その黒騎士のように」

あらゆるものを弾き返す強靭で逞しい身体、全てを打ち砕く拳。

剣も盾も必要としない鋼の騎士は、人の強さを体現したように見えた。

彼は願う。青年の持つ精霊のようになりたいと。それで彼は1月ほど青年と黒騎士の旅に同行した。彼にとってかけがえのない1月だった。

旅の中、彼は学んだ。黒騎士の心は、青年の中にあった。黒騎士の拳は、青年の拳だった。

心も体も鍛錬を繰り返すことでより硬く、洗練され、強靭に。

表面は冷たくも心は厚く、堅く。

青年は精霊と共にあった。クロダと名乗る《精霊使い》は、彼そのものが鋼だった。

マークは忘れはしない。黒騎士と共に突き出した青年の拳を。鍛鉄とも呼ばれる、鋼の意志を。

機巧魔獣は《黒鋼術》が通じないとわかると頭部のレーザーを放った。マークは鋼の掌で受け止める。

次に《魔導砲》が撃たれた。破壊をもたらす魔力の奔流。マークは恐れず戦意を、精神を研ぎ澄ます。

刀を抜くような左腰に右腕を添えた構え。腕に纏う鋼に鍛え抜いた技を、心を込める。

「先輩！」
「――っ、セイっ！」
抜刀。
鋼を刃金に変えて、刃となる手刀は《魔導砲》の光を正面から切り裂いた。
「……マジかよ」
「その程度だよ。マガイモノ。僕の鋼はお前のそれとは違う」
マークは鋼の篭手を、黒銀の装甲を持つ機巧魔獣に見せつける。
機巧魔獣の攻撃を全て弾き返し、傷一つ付かなかった漆黒の黒鉄。
厚く、熱く。堅く、硬く。
自分の華奢な身体に見切りを付けず、諦めずにただひたすらに鍛え続けた。
自分だけの鋼を求めて一層魔術を研磨し、《黒鋼術》を究めた。
鍛え上げた心と体、技術と魔術。マークの在り方は、そのすべては鋼と共にある。

青年と精霊。２つで１つの黒騎士だった彼のように。

「見ろ。これが僕の鋼だ」

拳士、マーク・Ｋ・フィーは、鍛鉄の心と拳を以て《黒鉄》を名乗る。

漆黒の篭手が放つ強い輝きに機巧魔獣が怯んだのがわかった。マークは《城壁》で身を固められる前に駆け出し、間合いに踏み込む。

修復された鎌の刃を左の篭手、肘で弾いた。滑るような足捌きで飛び込んだ機巧魔獣の懐。

マークは身体を捩り、右の拳を放つ。

しかし機巧魔獣の展開する《盾》がマークの拳を受け止めた。あと１撃が届かない。それを見たアギが自分の《盾》が使われたことに痛恨の声を漏らす。

「ああっ。俺の《盾》が」

「まだだ！」

マークは右腕を引くとさらに踏み込む。

地面を踏みしめる震脚。同時に放つ魔術は地面を割り、機巧魔獣の足場を崩した上で、真下から突き出す岩盤が機巧魔獣を打ち上げ

る。

《地裂突》。面でしか防御できない《盾》の弱点を突いた、真下からの攻撃。

「！！？」

驚愕した気配がマークに伝わった。

「他人の技に頼るからこうなる。覚悟しろ」

真っ逆さまに落ちる機巧魔獣にマークは拳を構える。

「受け止めれると思うな。僕の鋼は、お前を撃ち抜く」

血潮が腕の鋼に通う。

研ぎ澄ました意志を込め、拳を固める。

熱く。硬く。

腰の回転に加えて腕を捻る螺旋回転を拳に、腕に纏う鋼にすべて伝え、まっすぐに突き出す。

この鋼拳こそマークが受け継いだ黒騎士の拳。

正拳。

「ジオ・インパクト！！」

体勢を崩しつつも《盾》で防ごうとする機巧魔獣。

しかしマークの拳は《盾》にぶつかっても曲がらない。決して折れない。

鋼は撃ち貫く。

《盾》をぶち破り、マークは機巧魔獣の巨体を殴り飛ばした。

「3分。あとはお願いします」

マークは、気が済んだとばかりにとどめを彼女に譲った。

宣言通り機巧魔獣を殴り飛ばしたマーク。

彼らはこのあと、《精霊使い》の本領を彼女から教わることになる。

「――私の名はアニスタリス。エンの巫女」

炎が舞う。

《交信》する彼女は、燕のかたちをした精霊と共に炎を纏う。

「《世界》に問う。私の想いは、燃えるような願いは真か偽か？」

包み込む炎は赤く、朱く彼女を染め上げる。

燃えるような色の髪を靡かせ、熱い眼差しはまっすぐに悪しきモノを見定める。

「これから振るう私の力は正が邪か？　答えよ。もしも偽にして邪なれば、今すぐこの身を、この炎で焼き尽くせ」

それは精霊を通して《世界》に繋がることのできる、《精霊使い》だけが使うことが許される呪文だった。

自身の命を賭け、《世界》に問いかけることで莫大な力を授かる奥義。

そんなものが使えるのは、本来《精霊使い》が《世界》より特定

の使命を与えられるからである。

《炎槍》と呼ぶ彼女、アニスタリス・エンもその1人だった。

《世界》の代行者として秩序の循環を促すこと。精霊を通して地を治め、穢れを祓い、魂を還すこと。

この使命を以て、《世界》の加護を国に与える《精霊使い》を《巫女》と呼ぶ。

「もしも。真にして正なれば――」

元《エンの巫女》としては、悪しき魔力を持つ機巧魔獣を放っておく気はなかった。

《炎槍》は《精霊使い》の奥義を以て機巧魔獣の魔力を祓う。

「応えよ。《世界》よ。私に――浄火の炎を与えよ！」

《世界》は彼女に答えた。真であり、正であると。

《世界》は彼女に応えた。炎は彼女の精霊に力を与えた。

浄火。それは神聖なる破壊の炎。扱うにはその者の真正が試され

る。

おそらく。この炎こそ機巧魔獣を最も安全に破壊できる力だった。

奥義、《浄火燕舞》。

彼女の請願は《世界》に認められ、穢れを祓う炎を熾した。《浄火》の炎は彼女の精霊に宿る。

「祓いなさい。火燕ちゃん」

彼女の声に翔け抜ける炎。縦横無尽に機巧魔獣を切り裂く燕の舞。燕のかたちをした浄火の炎は、最後に巨大な火柱となって機巧魔獣を焼いた。

「これが、ユーマと同じ《精霊使い》の力……」

「違う。これこそが本来の《精霊使い》の在り方だよ」

あの人やユーマ君は異色だよな、とマーク。

燃え盛る炎に焦げ臭さなど微塵も感じない。ただ周囲が清められていくようにアギは感じた。

「……ふぅ。それにしても、こっちのお仕事って実は別料金なのよん」

「《炎槍》さん？」
「でも。坊やたちの手前、サービスしてあげる」
「チ！」

真剣な表情から一転。あっけらかんとした笑みを浮かべ、いつもの調子に戻る《炎槍》。

火の精霊に焼き尽くされた機巧魔獣は、魔力の残滓さえ残さなかった。

＋＋＋

装甲車型機巧兵器、《駱駝》で逃げるエイリーク達は、遂に機巧魔獣を決戦の舞台へと招き寄せた。

舞台は大通りを抜けた王都の中心。宣誓の地と呼ばれる中央広場だ。

「ここって。色々と大丈夫なの？」
「仕方ありません。どの道《昇華斬》を使ったあとの被害を考えると、ここしかありません」
「……ちゃんと真上に打ち上げるから大丈夫よ」

念の為です、と言うポピラに憮然とするエイリーク。

「では手筈通りに」

「任せて」
「いきます」

《駱駝》から降りて機巧魔獣を迎え撃つのはポピラとチェルシー、アイリーンの3人。とどめ役のエイリークは《駱駝》と共に離脱した。

アイリーンは魔術発動の為、すぐに集中しはじめた。遅れて広場に現れる機巧魔獣。

機巧魔獣は殺戮行為において、直接手にかけるのを好む傾向にある。無防備に立つ3人を腕の鎌で斬り殺そうと接近。

作戦通り。最初の彼女達は囮だ。

「いきますよ。皆さん」

広場の中央までおびき寄せられる機巧魔獣。

そして周囲の建物に隠れて待ち伏せしていたのは、大きなバックパックを担いだ《レアメダル・メカニック》の学生たち。ミサもここにいる。

包囲網は完成した。ポピラはガンプレートを構える。

「一斉攻撃」

《ミサイル・トリガー》だ。学生たちのバックパックから撃ち上げられるのは《リュガキカミサイル》。大量の炸裂弾が機巧魔獣を全周囲から襲う。

対する機巧魔獣は迎撃体勢をとった。頭部のレーザーに加えて《氷晶壁》、《氷弾の雨》さらに《旋風剣》、《爆風波》とエイリーク達からコピーした術式でミサイルの集中砲火を防ぎ、耐えきってみせる。

「厄介ですね。この程度では決定打になりませんか」

術式をコピーする能力を間近で確認したポピラは成程、と呟く。

でも時間稼ぎはできた。ここからが彼女達の出番だ。

「みんな！　緊急着装（スクランブル）、いっくよぉーーっ！」

移動中に推進剤を補給したチェルシーはバックパックから火を噴いてブーストジャンプ。

続いて《レアメダル・メカニック》の面々が、専用の移動式カタパルトでマシンパーツをチェルシーに向かって打ち上げる。

「ハンガー2番。発射！」

「次はコネクターだ。タイミングを合わせろ」

「ブーツ発進、どうぞ！」

チェルシーはまず空中で『ハンガー』、マシンアームの両腕のついたパーツをバックパックに装着。

続いてバックパックの下部に取り付ける接続器（コネクター）、『ブーツ』と呼ばれるマシンと装着。チェルシーの両脚はマシンの脚部に覆われた。

チェルシーは《機巧兵器》のエンジンを積んだバックパックを核にマシンを換装することであらゆる局面に対応できる。彼女のマシンは背面から全身を覆うその姿から《機巧外骨格》と呼ばれる。パワードスーツだ。

完全武装。完全復活。

「エンジン起動。システムオールグリーン」

チェルシーは最後、額にかけた多目的ゴーグルを被り、不敵な笑みを浮かべる。

「チェルシぃー、ボクサー！　完、成っ！」

爆誕！　マシンアームを突き出し空中で決めポーズ。

背後の爆発エフェクトは《レアメダル・メカニック》のこだわりだ。ポピラとは一生気が合いそうにない。

チェルシーはそのまま自由落下の勢いを乗せて飛び蹴りを放つ。

機巧魔獣が展開した《氷晶壁》を砕き割った。

「ダイバー、キック！　ハンマーナッコォ！」

マシンアームの剛腕は空振り。意外と機敏な動きができる機巧魔獣は、８本脚でジャンプして距離をとった。

反撃の《氷弾の雨》がチェルシーを襲う。

「なんの。ブーツを装備したあたしのスピード。甘く見ないでよ」

チェルシーはマシンの脚部ユニットから大量の空気を地面に向けて吹き込み、浮力を得て地表より少しだけ浮かび上がった。

『ブーツ』とは推進装置とホバーユニットで構成されるマシンだ。今のチェルシーはブースターによる飛行ができない代わりにホバー走行で地上を高速移動できる。

高機動戦のガンファイト。氷弾の速射を躱しつつ、チェルシーはマシンアームの人差し指から７０ミリ砲弾を撃って応戦。機巧魔獣はチェルシーの動きと砲撃で釘付けになる。

「このままでは流れ弾の被害が尋常になりません。アイリーンさん」

「ええ。――氷輝陣。舞台よ、輝け！」

チェルシーが奮戦する間、ポピラの指示でアイリーンの魔術が発動。

ブースターである銀の腕輪を輝かせ、彼女の足元を中心に氷霧が地表に薄く、広範囲に広がった。

広場全域を覆う氷晶は照明弾に照らされて散光。決戦の舞台を銀色に輝かせる。

《氷輝陣・銀の舞台》

《銀の氷姫》の為に存在する舞台だ。展開した氷晶の補助効果を受けたアイリーンは存分に《氷晶術》を振るう。

《銀の舞台》の外周を覆うように連続展開した《氷晶壁》のバリケードが周囲の被害を抑えた。また、機巧魔獣の周囲からも《氷晶壁》を出現させて障害物として妨害。チェルシーを援護する。

地形操作攻撃。アイリーンは《銀の舞台》の領域内ならば、地表のどこからでも正確、瞬時に《氷晶術》を発動することができる。

「貫け。氷晶樹！」

アイリーンは機巧魔獣の真下から巨大な氷の樹を出現させ、機巧魔獣を足元から突き上げた。

更に無数に枝分かれして伸びる鋭い氷晶の枝が機巧魔獣の脚を貫き、絡めとる。身動きを封じ込める。

「咲けよ。氷晶華！」

包囲を目的とした《氷晶壁》の派生術式。花びら状の《氷晶壁》が機巧魔獣を何重にも囲い込む。

「これでどうです？」
「上出来です。いきますよ、エイリークさん」
これですぐには逃げられない。ポピラは待機中のエイリークに合図を送ろうとした。
しかし。
もしも作戦指揮を執るポピラにミスがあるとすれば、それは念の為といって《リュガキカミサイル》を全弾撃ち尽くさなかった彼女の用心深さにあった。
――無属性操作術式、発動
機巧魔獣が発動したのは《ミサイル・トリガー》。包囲する学生たちのバックパックから打ち上げられる《リュガキカミサイル》。
機巧魔獣は当然のようにポピラの術式までコピーしていた。
「これはっ！？」
「いけません」
機巧魔獣がミサイルで狙ったのは自分自身だ。爆発の衝撃で機巧魔獣は氷の束縛を振り解く。

――風雷複合放射術式、発動

間髪入れずに放つ《ボルテックストーム》。機巧魔獣は放電する竜巻の奔流で彼女たちを薙ぎ払う。

「氷晶壁！」

「きゃあ！」

アイリーンは近くにいたポピラごと《氷晶壁》で身を守った。チェルシーはマシンアームでガード。

バチッ、とマシンから火花が上がった。

「！？　……うっ、動かない」

「チェルシーさん！？」

チェルシーのマシンは機巧魔獣同様、雷に弱かった。《ボルテックストーム》の放電に感電したマシンはガード体勢のまま動かなくなる。

そこへ機巧魔獣が接近。動けなくなったチェルシーに狙いを定める。

「このおっ、動けっ」

「させません」

振り下ろされた鎌はアイリーンの《氷晶壁》が凌いだ。邪魔をするなとばかりに機巧魔獣は彼女に頭部レーザーを撃つ。

これ以上援護できなかった。チェルシーはその間も操縦レバーをガチャガチャ動かす。

「動け。お願い、動いて」

「チェルシーさん、脱出して下さい！」

「嫌だ！　うあっ！？」

「チェルシーさん！」

何度も振るわれる機巧魔獣の鎌は《氷晶壁》を切り裂き、マシンアームの装甲を傷つけた。装甲はあとどれだけもつのかわからない。

絶体絶命。それでもチェルシーは、自分を包み込むマシンを信じていた。

「……動いて。お前はあたしがパーツの１つ１つから組み上げたマシンだ。だから信じてる。お前は私を守ってくれる」

機械にも心がある。そうチェルシーは信じている。

大事にすれば、心をもって接してあげれば、マシンは応えてくれる。そう信じている。

《機械の心臓》。それが彼女の《幻想》。唯一無二のゲンソウ術。

動力であるバックパックのエンジンとは違う、マシンを動かす彼女の熱意（ちから）。

チェルシーは自分の拳をマシンアームに叩きつけた。

「動けぇぇぇぇぇぇ！！！」

……ドクン

叩きつけた衝撃に心臓が動く。鋼のパーツが１つ１つが軋む音を上げ、マシンが咆哮する。

機巧魔獣が振り下ろす両腕の鎌をマシンアームの手が掴み、受け止めた。

マシンは、彼女に応える。

「……ありがとう。――いっくよぉおおおお！！」

フルパワー。機巧魔獣の鎌をチェルシーはマシンアームで握り潰した。

ここで勝負だ。両方のマシンアームの肘からシリンダーユニットが突き出す。

「右腕、パイルストライカー起動。チェルシぃー、クラッシャー！」

必殺の右ストレートをガードの上から叩き込み、シリンダーを打ち込む衝撃波が機巧魔獣の腕を完全破壊する。

「左腕、プラズマストライカー起動。チェルシィー、ブレイカー！」

これが直前に換装した秘密兵器だ。電光石火の左フック。プラズマを纏う鉄拳は頭部の魔石を破壊。

機巧魔獣は全身から火花を散らした。感電して身動きがとれなくなる。

「インパクトォ！！」

最後は右のボディ。

右腕のシリンダーに蓄積した圧縮空気を前方に解放。衝撃弾となって機巧魔獣を弾き飛ばす。

腹部の魔石が割れた。あと1撃。

このタイミングをポピラは見逃さない。

「今です。エイリークさん！」

「アレっく君！　エスコート頼むよ」

「了解だ！」

チェルシーの声に彼女の副団長、アレックスは応える。

広場に《駱駝》が駆け込んだ。機巧魔獣を倒す剣を連れて。

剣の名はエイリーク・ウィンディ。《旋風の剣士》。

修復が追いつかない大ダメージを受けた機巧魔獣は、エイリークが纏う風の凄まじさとこちらを見据える彼女の翠の視線に脅威を感じ取る。

スーパーモードは事前に発動している。エネルギーの消耗を避け、彼女を機巧魔獣の元へ無事に送り届けるのが《駱駝》と操縦士の彼の役目だ。

《氷弾の雨》による迎撃にアレックスは構わず全速力で突撃した。多少の被弾は覚悟の上。

フロントの強化ガラスにヒビが入った。装甲板に氷塊が突き刺さった。それでも《駱駝》は突き進む。

「アレっく君！」

「まだまだぁ！！」

あと少しなのだ。頭部と腕を失くし、感電して動けない機巧魔獣の迎撃手段は限られているから。だけど彼らの前を機巧魔獣の《氷晶壁》が行く手を阻んでいる。

高速で連続展開された《氷晶壁》の防壁。いくらなんでも魔術の発動速度が早過ぎる。

「これは……」

アイリーンは気付いた。《銀の舞台》が機巧魔獣にコピーされている。

チャンスだ。

最後の力を振り絞るのはここしかない。

「それを待っていました。教えてあげます」

いくら模倣されたとしても、

《氷輝陣》は、《心像》に繋がるこの魔術は自分だけのものだと。

アイリーンは《銀の舞台》を構成する氷晶をすべてかき集めた。

自分のものも、機巧魔獣のものも全てだ。彼女が氷晶で創る氷の結晶は普段の倍以上の大きさになる。

アイリーンの最大攻撃。氷晶から生成し、《幻創》するのは輝く銀の剣。

「――集え氷晶。剣よ、斬り裂け！！」

《氷輝刃》

アイリーンは巨大な氷の刃で足元を薙ぎ払う。

その一太刀はエイリーク達を阻む《氷晶壁》を全て斬り払うだけでなく、機巧魔獣の多脚までも斬り飛ばし、その下半身を凍りつかせた。

これで彼女も打ち止め。限界だ。

頭痛でふらつくのを我慢して、アイリーンはエイリークに向かって叫ぶ。

「これで決めなさい。エイリィ！」

「いくわよ！」

御膳立ては十分だ。機巧魔獣の目前で急ターンする《駱駝》から、エイリークは飛び降りた。

そのまま宙を舞い、突撃。

《ボルテックストーム》は《爆風波》で受け止め、《風盾》を併

用して軌道を逸らした。

《爆風波》の迎撃はそのまま《旋風剣》で突き破った。

機巧魔獣はもう、エイリークを止められない。

彼女の渾身の《旋風剣・疾風突き》が腹部の魔石を、機巧魔獣の核を貫く。

「ギ……ィイイッ！？」

「……負けないわよ。アタシは」

ずっと我慢してた。ピンチになる度に飛び出したくてずっと我慢していた。

だけど信じた。チャンスは巡ってくる。みんなが繋いでくれる。そう信じていた。

1人じゃきっと何もできなかった。

でも仲間がいたから、皆で支えあうことができたから。

ひとりじゃなかったから。だからアタシは――

「アタシにはみんながいる。支えてくれるのを信じられる。だから

っ」

細剣を突き刺した魔石から魔力の光が漏れ出した。これが機巧魔獣の自爆攻撃だとは彼女は気付かない。

だけどエイリークは手にした剣に力を込めた。剣から吹き荒れる暴風が魔力の光をかき消していく。

機巧魔獣を倒すには、最初から《これ》しかないとわかっていたから。

「アタシの剣は――」

奥義。

「絶対に、負けないのよ!!」

《旋風剣・昇華斬》

エイリークは全身全霊を懸けて魔石を斬り上げる。

膨大なエネルギーを生み出す剣の暴風は、何もない天へと突き上がり機巧魔獣の身体を夜空へ攫う。

あとは、何も残らなかった。

＋＋＋

３－０９ｂ　総力戦　後（前書き）

レヴァン＆ミハエル。王国最強タッグＶＳ機巧魔獣

副題「ミヅルさんはお邪魔虫」

3－09b　総力戦　後

＋＋＋

機巧魔獣は機械と鋼の体を持ち魔力で動くいわば魔法生物だ。脳であり心臓と呼ぶべき核は魔力を供給する魔石にある。

戦車型機巧兵器《虎砲》をベースとした『威力偵察型』と呼ばれるこの機巧魔獣は、腹部と頭部の2か所に魔石が備えられている。核となる魔石は腹部だ。

頭部の魔石は《魔導光閃》と呼ばれる貫通レーザーの発射口というだけでなく、腹部の核を破損した場合自己修復に使う魔力を蓄えておく非常用の予備電源のような役割があった。

つまるところ。機巧魔獣は頭部の魔石を失っても腹部の魔石が無事ならば問題なく動けるのだ。

新開発地区。地下都市への侵攻を防ぐ彼女達の戦い。

両腕をサヨコ、頭部をミヅルに斬り飛ばされた機巧魔獣は尚も戦闘可能。その鋭く尖った脚で刺し潰そうと2人に突撃を仕掛けようとした。

対するは大太刀の柄に手をかけ、珍しくも勇ましく前に出るミヅル。

「叔母様。さがって」
「大丈夫」
そう言ってサヨコはミヅルを宥めた。
「動いた時点でもう終わっています」
「えっ？」
その通りになった。機巧魔獣が突撃しよう脚を動かしたところ、機巧魔獣の脚は上半身を支え切れず前のめりに倒れたのだ。驚くミヅル。
実は勝敗は初見で決まっていた。見れば機巧魔獣の８本の多脚がすべて『斬り』離されている。何故か自己修復はされなかった。
機巧魔獣は最後に残された腹部の《魔導砲》を撃とうとしたようだが、その核である魔石までも修復不能。細切れにされている。全てサヨコがやったことだ。
淡く儚くさりげない動作から一転。痛烈に繰り出される、気付いた時には誰もがはっとする鮮烈で鮮やかな剣技。
抜刀からの連続剣、そして納刀までの動きが１つに重なって見えるほどの速さ。
その技は彼女の色に合わせて《桜襲（さくらがさね）》という。

「これは。もしかして叔母様が？」
「いけない」

驚きに冷静さを欠いたミヅルよりも、状況判断はサヨコの方が早かった。

手足と頭、魔石、そのすべてを斬っても機巧魔獣はただで終わりはしなかったのだ。致命傷を負った機巧魔獣は最終手段を発動。

魔力の暴発を利用した自爆攻撃。

全身から魔力の光を漏らす機巧魔獣に遅れて気付くミヅル。並々ならぬ様子にその威力は予想もつかない。

せめてできるだけ離れないと。そう思ったミヅルの前にサヨコが立った。

「逃げられないわ。ミヅルちゃん。私のうしろに下がりなさい」
「叔母様！？」
「あなたに何かあったら、郷にいる姉様に申しわけないの」

だけど庇いきれるのか？

刀を手にサヨコが逡巡したその時。思いもよらぬ怒声が飛び込んできた。

「てめぇ！　俺のサヨコさんに何しようとしてやがんだどらぁあああっ！！！」
「「――！？」」

今度こそ間に合った。レヴァンは《王様ジャンプ（仮）》なる瞬間移動でサヨコのピンチに飛び込んだ。

そのまま自爆寸前の機巧魔獣にダイビングキック。前方に展開した《盾》をぶつける1人シールド突撃でレヴァンは機巧魔獣を引き離す。

突然現れたレヴァンに2人は驚いた。サヨコが驚いたのは彼が夜中に《蜃楼歩》を使えないことを知っていたからであったが、ミヅルは別のことに過剰に反応した。

（俺の、ですって？）

私の叔母様よ！　とつい言い返しそうになる彼女。熱心なサヨコ信者（レヴァンをはじめ、アギなど砂漠の民皆が患っている病気）となったミヅルは、青バンダナのおっさんの正体がわからず熱り立つ。

非常事態にもかかわらず大太刀片手にレヴァンを問い質そうとするミヅルだが、その前に機巧魔獣が自爆。彼女は自分達の身の危険をすっかり忘れてしまっていた。

「絶対に、させねぇ！」
「あなた！」
「あなっ、たぁ！？」

驚愕して素っ頓狂な声を上げるミヅル。

サヨコに傷1つつけさせまいと全力で展開したのは、《牢壁》という《城壁》の応用技だ。レヴァンは自分達ではなく機巧魔獣を《城壁》で包囲することでその被害を最小に抑え込む。

雷が大地を割るような激しい轟音。それだけを残し機巧魔獣は跡形もなく消え去った。

＋＋＋

「ちっ。道連れにしようとなんてふざけたヤツだ。……威力も洒落にならねぇ」

自爆攻撃でレヴァンは《牢壁》を構成する20万枚の《盾》の内、1撃で約半数を消し飛ばされた。その威力は彼が間に合わなかったらミヅルとサヨコ、2人だけでなくこの辺り一帯がどうなっていたのかわからない。

「あんなのにサヨコさんを一生寝取らせてたまるかよ」

「まったく。あなたという人は」

「……」

ミヅルはサヨコのおっさんに向ける、呆れながらもどこか安心したような、親密な声音に耳を疑う。

それで愛する王妃の無事を確認したレヴァンはというと。

「さーよこさーーーーん！！」

壊れた。

今日まで約1週間。溜めに溜めこんだ寂しさとか情欲をすべて解放。

レヴァンは野生を解き放ち、男の本能のまま、抱きしめたくてサヨコに飛びかかる。

「サヨコさんサヨコさんサヨコさんサヨコさんサヨコさんサヨ、くぅおっ！？」

「ミヅルちゃん！？」

剣閃が暴走するおっさんを押しとどめた。驚くのはサヨコ。

そう。《賢姫》は敬愛する叔母を守る為、《剣鬼》となる。

《斬鬼首切丸》の刃がレヴァンが咄嗟に展開した《盾》を斬り飛ばした。ミヅルの躊躇いのない首を狙った1撃をレヴァンはブリッジで緊急回避。そのままバク転で後退。

回避できたのはレヴァンがミヅルと似たサヨコの太刀筋を身を以て知っていたことと、奇しくも野生を解放していたおかげだろう。生存本能が彼を生かした。

「てめっ、なにしやがる！？」

「失礼。ところで……どちらさまですか？」

ミヅルはどこか薄ら寒い笑みを浮かべ、レヴァンに訊ね返した。
心なしか黒髪が逆立っている。

「『私の』叔母様に何の御用で？」
「……おい。いまなんつった？」

今の発言はレヴァンにとって聞き捨てならなかった。

どこまでも醒めた視線を送るミヅルに対し、レヴァンは激情のままに叫ぶ。

「『俺の』サヨコさんはおばさんじゃねぇ！　永遠に２０代だ！」
「そんなの当り前です。飛ばすわよ」
「いえ。いくらなんでも。私も来月でさんじゅ……」
「「そんなことねぇ（ないわ）！！」」

実は気が合う？

でも感情が先走って埒が明かない。仕方なくサヨコは仲裁に入った。

「落ち着いて下さい。あなた。この子はカンナの家にいる私の姉の、1番上の子です」
「何？　じゃあミハル姫の娘か」
「母の事まで。何者なの？」
「ミヅルちゃん。この人は私の良人よ。だから刀をしまって頂戴」
「嘘」

レヴァンが王様、ということよりもサヨコの夫であるということにショックを受けるミヅル。

レヴァンはそこそこ背が高く中年にしては無駄のない体つきをしているのだが、青くてださいバンダナを額に巻いてどこか粗野で荒っぽい顔立ちをしている。しかも今は汗まみれ砂まみれのおっさん。思春期の少女が「くさい」と生理的に嫌がりそうな風体。

本の虫でどちらかというと夢見がちな少女であるミヅルが、初対面で無条件で嫌悪するタイプであった。

「こんな人が」

「いい加減なところが目立つ人だけど、《帝国》との縁を絶ったカンナの人たちを説得してくれたのはこの人よ」

「えっ？」

「帝国の皇女だった私が母様のお郷に行くことができたのも、２０年ぶりに亡命した母様や姉様、それにあなたとも会うことができたのもこの人のおかげよ」

「……叔母様がそう言うのなら」

渋々と大太刀を開閉式の鞘に納めるミヅル。だけど視線は厳しくレヴァンを見据えている。今度叔母様に不埒な真似をしたら許さない、そんな感じ。

レヴァンを警戒するミヅルの視線は2点に絞られている。

いつでも抜けるように柄に手をかけ、彼女が見つめるのはレヴァンの首。若しくは――

レヴァンは寒気が走り思わず股間の前に《盾》を構えた。

「怖っ！　サヨコさん何この子。男の敵！？」

「いいえ。何を言ってるのかしら？」

「……仕方がないわね」

サヨコは敵愾心を隠さないミヅルの説得に入った。

「ミヅルちゃん。そんな風に脅したら駄目よ。縮んじゃうから」

「……叔母様？」

「男の人って意外と繊細だから。たたなくなるのよ」

「たっ、たた！？」

何がとはミヅルは訊けない。《賢姫》は耳年増である。

羞恥で真っ赤になるミヅルから殺気が抜けた。もう1度レヴァン（の下の方）を見て大人しくなる。

「あと、年頃の女の子がまじまじと見ちゃ駄目よ」

「～～っ！？」

「初心なのね。かわいいわ」

とは来月で三十路になるサヨコの言葉。

僅かな時間で姪の弱点を見抜く叔母は数段上手だった。

「サヨコさん……」

複雑そうに股間を隠すレヴァンがなんとも情けない。

「冗談はさておき。……大丈夫ですか？」

レヴァンに近づくと身長差から見上げるサヨコ。真面目な話になるとレヴァンは何も答えられない。

すべてを見透かされていそうな彼女の黒耀の瞳。今は見られたくない。

「辛く、ないのですか？」

「っ」

なのにサヨコはレヴァンの心を暴く。一目見て彼女はわかってしまったから。

泣いている。ずっと、ずっと。

「こんなに汗をかいて。ずっと走りまわっていたのですね」

「サヨコさん」

「その右腕。ちゃんと止血してますか？」

「……ああ。血は止まってる」

《魔導砲》からユーマ達を庇った時の傷だった。

あの時、突然のことに《城壁》の展開が少しだけ間に合わなかったのだ。出血はそうでもないが右腕の皮膚はズタズタに裂かれてい

る。

レヴァンは応急処置として右腕を服の帯でぐるぐる巻いて縛っているだけだった。腕全体が赤黒く染まっていた。

心配するサヨコはそっとレヴァンの右腕に触れ、悲しそうに目を伏せる。

彼の手前、涙を流すわけにはいかなかった。

この人が。

血を流してるのはどうして？

水のように全身から汗を流してるのはどうして？

泣けなかったからだ。

泣いても悲しいことは何も変わらないから。彼は走り続け、身体を張り続けた。

理想を掲げた王国を戦火に晒してしまった。戦うしかなかった。そう言い聞かせてきた。

虚勢でもいい。ふざけてでもいい。自分を信じて戦う皆の為に、彼は堂々と在り続けなければいけなかった。

この夜。この人は涙の代わりにどれだけのものを流せばよいのだろう？

その姿にサヨコは、かつての皇帝陛下の姿を重ねてしまう。

「なんだか。お父様に似てきましたね」

「やめてくれ。あんな引きこもりの頑固ジジイに似てるなんて。冗談だろ？」

「そうでしょうか」

本気で嫌そうな顔をするレヴァンにサヨコは微笑みを返した。

大丈夫よ。そんな優しい笑みを。

「なあ、サヨコさん」

「はい」

「地下都市にいるみんなのことを頼むわ」

サヨコの瞳に映る、自分を顔を見るレヴァン。

「俺の為じゃなくて、子供たちの傍にいて今みたいに笑ってあげてくれ」

「あなた……」

「みんなが不安になってる。ちびたちは泣いてるかも知れねぇ。……今日はお誕生会で楽しくやってたのにな」

「……」

「ずっと気になってた。でもこればかっかりは俺じゃ無理だ。……守れねぇよ」

最後に震えた声は、彼が僅かに漏らした弱音だった。

レヴァンは気付いていたし、今確認した。

自分の目が笑っていない。獰猛な笑みはずっと前から戦士のそれに『戻っている』。

それで彼はサヨコに懇願する。

やさしい顔をしてくれ。あなただけは戦わないでくれと。

「傍にいてあげてくれ。安心させてあげてくれ。頼む」

「……はい」

サヨコは頷くと、次の瞬間に自ら1歩踏み出して身体をレヴァンに預けた。ミヅルの「ああっ！？」という悲鳴はこの際無視する。

汗だくで砂まみれのレヴァンを構わずに抱きしめ、腕を背に回した。

傍にいれない代わりに。今だけは。

彼の心を癒す為に。想いを全て全身で伝える為に。

「守ります。あなたの代わりに、あなたの家族を」
「サヨコさん……」
「だから守ってください。私を、私の家族を」
「ああ」
レヴァンもサヨコを抱きしめた。
愛しい人を血で汚したくなくて、左腕だけで力強く。
「信じています。あなたが砂の上に築いた理想は決して崩されないと。あなたが崩させはしないと。だから、行ってください」
「ああ！」
応えなければいけない。誰よりも、この人の為に。
待たせたな。
レヴァンは頭の中に響く『声』に向かってそう答えた。もう大丈夫だと。あとは任せろと。
湧き上がる力はサヨコが与えてくれたものだ。今なら何でもできる。男なんて単純だから。
限界も不可能も、いくらだって超えていける。

「待ってろよ。今行く」

《蜃楼歩》。そしてアギから教わった『守るものの前に立つだけ』の瞬間移動の術式。

２つの力を合わせた、新たなゲンソウ術でレヴァンは『跳んだ』。

全てを守る盾となる為に。

「世界よ。お願いします。レヴァイアの名を背負うあの人に、加護を」

「叔母様……」

愛しくて、せつなくて、胸を締め付けられるほど綺麗で。

レヴァンを想い、祈るサヨコの姿にミヅルは圧倒された。羨ましいとも思ってしまった。

２人の愛を蚊帳の外で見せつけられたミヅル。これが今後の彼女、特に恋愛方面で大きな影響を与えることになるのだが、それはまた別の話。

＋＋＋

王国外郭より外。対帝国軍第３次防衛線付近。

たった１人で１０体もの機巧魔獣を相手にするミハエル。王国軍の支援砲撃はあるものの、それは機巧魔獣の侵攻を食い止め、敵であった傭兵達の撤退を支援するためのものだ。

彼は巨大な《機巧剣》１つで孤軍奮闘していた。

左の機械腕のパワーと武器の重量で叩き潰し、斬り伏せる。しかし、そうやって倒した機巧魔獣はすぐに自己修復してしまう。

砂地を転がりながらレーザーを躱して、ミハエルは溜息をついた。

「倒した傍から復活ですか。こっちは久しぶりの実戦なんですけど」

少しだけ困った顔をするミハエル。

久しぶりとはいっても息が上がっていないのは、きっと毎日あの神出鬼没な王様を追いかけ、国中を駆け回っていたおかげだろうと彼は思う。苦笑するしかない。

それでもミハエルの身体は左腕以外すべて生身だ。改造人間にも体力に限界があった。

「……参りましたね」

機巧魔獣に四方から囲まれ、《魔導砲》を撃たれた時には流石の彼も諦めざるをえなかった。

なのに。

「――ようミハエル。遅刻だぜ」

あの王はいきなり現れて自分を守り、こんなことを言うのだ。

ミハエルは瞬間移動程度ではもう驚きはしない。慣れているから。

「レヴァン様」

「お前６時間で戻れつっただろ。何してたんだ？」

「どこかの王様が直通の《転移門》を封鎖していまして。ケイオス様の『ご厚意』で研究中のロケットなるものを使い空を飛んで参りました」

「そいつは……」

「砂漠を歩いて１０日以上かかる距離を5分で辿りつくなんて、人の乗るものじゃありませんよ。あれは」

《城壁》に囲まれる中、レヴァンと背を合わせ愚痴を零すミハエル。レヴァンは「そりゃご愁傷さん」と一言だけ。

いつもと変わらない飄々とした態度。けれども『国王付き』であるミハエルはレヴァンのことならすぐにわかる。

こんな事態でもいつもと変わらない。ということは。

「サヨコ様にお会いになったのですね」
「わかるか？」
「見違えましたよ。ではどうしましょう？」
ミハエルは改めて《機巧剣》を構えた。
それは、《帝国》から受け継がれた民を守る剣。
「俺が全てを守る。だからお前が全部ぶち壊せ」
「大雑把ですね」
だけど揃った。王国を守護する盾と剣が。
「では王よ。我らにご命令を」
「守るぞ。俺達の国は、俺達の家族は、俺達の手で」
レヴァンは広げる。《盾》を、皆を守れるだけの数を。
レヴァンは叫ぶ。王として、力の限り。
力を貸す。だから力を貸せと。
「野郎共！　《盾》を取れ。守る為に！」

「前進せよ。王国軍！」

王国軍の兵たちが怒声をあげて砂山から飛び出し、王の下へ一斉に駆け出した。

彼らはレヴァンの《盾》を受け取ると、先陣を切るミハエルと共に果敢に機巧魔獣へと立ち向かう。

総力戦。誰もが生き残る為に。

「いくぜ。それと帝国の傭兵ども。おめーらはどっちだ？」

最後にレヴァンは残った傭兵達に訊ねた。

化物と人間。どっちの味方だと。

＋＋＋

王都防衛戦、最終局面。

レヴァンの指揮の下、戦うのは王国軍と傭兵の混成軍約１万。対するは機巧魔獣１０。

帝国軍に与していた傭兵のほとんどがレヴァンの要請に従った。

――死にたくねぇ。それにもう死なせたくねぇ

――みんなで生きたい。だからおめーらの力が欲しい

そんな切実な願いだった。

何より傭兵達はレヴァンの目に惹かれた。

元反乱軍のリーダー。悲惨で非業な死を遂げた同胞を何百、何千人と見届けた、ここにいる誰よりも修羅場を潜った彼の放つ光。王の真の姿に気付いた者は格の違いに息を呑むしかない。

傭兵達は戦士としてのレヴァンに敬意と畏れを抱いた。彼らがレヴァンから貸与された《盾》に触れ、その『あつさ』に全面の信頼を寄せたのも確かだった。

レヴァンが知る機巧魔獣の情報は少ない。そんな彼が兵の指揮を執り、立てた作戦はこうだ。

機巧魔獣1体につき約千人ずつで当たり数にものをいわせて機巧魔獣を分断。次に兵が全員で《盾》を使い身を固めながら機巧魔獣を牽制。その間にミハエルが1体ずつ仕留める。

最後は自爆する機巧魔獣をレヴァンが《牢壁》で被害を抑える。

といったもの。この作戦ですでに機巧魔獣を2体仕留めた。

「まったく。レヴァン様は人使いが荒い」

王国軍唯一のアタッカー、ミハエルは愚痴を零しながら《機巧剣》を振るう。

機巧魔獣の弱点が腹部の魔石だとレヴァンから聞いた彼の猛攻は凄まじかった。

複合型機巧兵器である《機巧剣》は辛うじて剣のかたちをした全く別のモノだ。全長2メートルもの機械の塊は重量そのものが凶器である。ミハエルが左の機械腕のパワーでやっと振りまわせる代物だ。

ミハエルはまず力任せに《機巧剣》の『峰』に当たる部分を叩きつけ、爆発。

火薬で炸裂する《ヒートハンマー》で機巧魔獣の脚を潰す。

続いて返す刀で鎌のような機巧魔獣の腕を刀身で受け止めた。片刃である《機巧剣》の刃は鎖鋸で構成されている。

それはチェーンソーだ。物々しい唸り声を上げ、ミハエルは弾き返すと同時に機巧魔獣の腕を力任せに切り裂く。これで防御を崩した。

最後にミハエルは《機巧剣》の先端、錨のような爪のある切っ先

で腹部の魔石を貫き、グリップを引いて《プラズマアンカー》の放電を放った。魔石を粉砕したミハエルはすぐさま《ヒートハンマー》を機巧魔獣に叩きつけ爆発の反動で飛び退く。

機巧魔獣が自爆する直前、レヴァンがミハエルの前に飛び込む。それから《牢壁》で囲み爆破処理。

これで3体目。

「よし。次！」

レヴァンはすぐに『跳んだ』。彼は縦横無尽に跳び回り、兵が殺されないよう1人で全面をカバーしに走りまわっている。

あらゆる場所から彼の檄が飛ぶ。

「囲めぇ！　正面の奴は身を寄せ合って《盾》を固めろ！」
「側面と後方の奴。注意を引け。前に負担をかけさせんな」
「腹の攻撃は俺に任せろ！」
「うらぁ！　効かねぇんだよ！」
「いいか、あと7体だぜ。手の空いた奴はこっちに来い。へばった奴は無理せず下がれ」
「死ぬなよ。仲間を守れ。誰1人死ぬんじゃねぇ！」

その言葉に、その姿に引き寄せられ、引き込まれる。

守ってくれるから。命を預けられる。

《盾》の王がいる限り、手にした《盾》がある限り、王国軍も傭兵も、誰1人機巧魔獣を恐れはしない。

「ミハエル！　さっさと倒しやがれ！！」
「そんなに働かれると、文句が言えないじゃないですか」
ミハエルは腰だめに《機巧剣》を構えた。《ヒートハンマー》の炸裂弾をグレネード弾として撃ち放ち、不意打ちで機巧魔獣の頭を潰す。
続いてアンカーランチャー。先端の《プラズマアンカー》を射出して機巧魔獣の腹部に突き刺し粉砕。
これで4体。
「次です！」
5体目に斬りかかるミハエル。
しかし。ここにきて彼らは機巧魔獣で最も警戒すべき学習能力を思い知ることになる。
機巧魔獣の《盾》がチェーンソーを防いだのだ。更に《牢壁》でミハエルを封じ込めようとする。
「これは？　まさかレヴァン様の」
閉じ込められる前にミハエルは《ヒートハンマー》を地面に叩きつける反動で真上に跳んだ。そのまま上空からグレネードとアンカーを撃つ。彼が機巧魔獣に本当に驚くのは次だった。

『跳んできた』2体の機巧魔獣が《盾》を構え、ミハエルに狙われた機巧魔獣を庇ったのだ。

「《蜃楼歩》まで使うのですか？　くっ！」

3体の機巧魔獣のレーザーによる対空攻撃がミハエルを襲う。

ミハエルの《機巧兵器》による攻撃は純粋な兵器なので機巧魔獣にコピーされなかったのだが、レヴァンの使った術式は残る6体に完全に解析されてしまった。

攻撃力こそ変わらないものの、《盾》を使い瞬間移動まで使えるというレヴァンそのものの機巧魔獣。

それが残り6体。ミハエルの武器が弾かれるのを見た誰もが絶望を味わった。

ただ1人を除いて。

「ふざけんじゃねぇ！！」

レヴァンはボロボロの右腕を突き出して、機巧魔獣の《盾》に自分の《盾》をぶつける。

「舐めんじゃねぇ。《盾(それ)》は俺の、俺達のものだ。てめぇに貸した覚えはねぇ」

「！！？」

押し返す。レヴァンの気迫が機巧魔獣を圧倒する。

レヴァンは本能で理解し、アイリーンと同じ結論に至っていた。

《盾》は自分のものだということに。

だから。

機巧魔獣の《盾》がそっくりそのままコピーした、『レヴァンの《盾》』というのなら。

「返しやがれ！！」

《干渉》が可能だ。

レヴァンは3体の機巧魔獣が展開する全ての《盾》を奪い、解除する。

均衡が崩れる。

「今だ。ミハエル！」

「はぁあああああっ！」

上空から飛び込むのは《機巧剣》を投げ捨てたミハエル。

機巧魔獣のレーザーを機械腕の装甲で弾いた彼はそのまま素手で

突撃。

《盾》を奪われた5体目の機巧魔獣は、為す術もなくミハエルの左の貫手に核を貫かれ、魔石を引き抜かれた。

＋＋＋

３－１０ａ　帝国の闇　前（前書き）

インターミッション。舞台は最後の局面へ

3－10a　帝国の闇　前

＋＋＋

エイリークは目を覚ました。

「……アタシは……？」

自分が横になっているのがわかる。気絶していた？　……膝枕？

目を開く。見上げても膝を貸してくれた相手が見えない。

盛り上がった胸が邪魔だ。

「……ミサ？」

「！　リィちゃん……」

ミサはエイリークが目覚めたことに気付くと、感極まって彼女に抱きついた。

膝枕状態のまま、覆いかぶさるように。

押しつぶした。

「ちょっ！？　ミサ苦っ……」

「えぐっ、り、りぃちゃぁぁぁん！！」

ミサは大泣き。エイリークは窒息しそうになってじたばた。

あ。動かなくなった。

「潰れましたね」

「うん。潰したね」

「……潰せるんですね」

複雑そうに自分の胸に手を当てる少女たち。

＋＋＋

あれから。

《昇華斬》を放ち機巧魔獣の欠片１つ残さず消し飛ばしたエイリークは、連戦の疲労に加えスーパーモードの反動でそのまま倒れた。

アイリーンもポピラも、チェルシーや彼女の騎士団だって皆が疲労困憊でボロボロだった。

しばらく何もできず、彼女達はなしくずしにその場で休む事にした。

「どのくらい寝てたの？」

「１時間程ですね。アギさんたちとも合流しています」

ポピラはエイリークに彼女が気絶してる間のことを説明。ミサは

エイリークの無事を確認すると、安心して次はアイリーンの世話をしている。

周囲を見れば仲間たちの無事が確認できる。アイリーンは建物の壁にもたれかかってぐったり。アギは折れた右腕を吊っている。

シュリは上半身を包帯でぐるぐる巻き。背中と左腕から血が滲んでいる。チェルシーは《レアメダル・メカニック》のメンバーと一緒にマシンと《駱駝》の応急修理とメンテナンスに取り掛かっていた。

そして《炎槍》とファルケ。今は敵ではないらしいが、離れた場所でなにやら話し込んでいる。

「じゃあ機巧魔獣は」

「はい。近衛見習いの皆さん達の伝令と情報網で確認しました。王都内の敵は全て撃退しました」

「そう。……よかった」

王国を守れた。エイリークは素直に喜んだ。

「目が覚めたんだね。大丈夫かい？」

エイリークの様子を見にやってきたのはマーク。上半身は裸だ。

ローブの上からではわからなかったマークの逞しい体つきには、彼女も多少は驚く。

「その身体……」

「ああ。ローブもシャツも駄目にしちゃってね。女性を前に不躾だったかな？」
「構いません。……すいませんでした。勝手に戦いに参加したりして」
エイリークはマークに謝った。彼女にミサやポピラ、自分が守るべき者の為に残れと諭したのは彼だった。
結局エイリークは先輩の言いつけを破って飛び出してしまったわけで。
だけどマークは簡単に彼女を許した。
「過ぎたことだよ。それに君やポピラさんがいなければこっちの機巧魔獣は倒せなかったし王立研究所も傭兵に占拠されていた。反省してるならそれでいい」
「でも」
「納得いかないかい？　だったら今日のこと、許す代わりに条件をつけよう」
「条件？」
「ウインディさん。君はエース資格を取るべきだ」
「！？」
驚くエイリーク。
「協調性がなく先輩の言うことを聞かない。自分の正義があって力があればすぐに振るいたがる。うん。向いてると思うよ」
「……」
どこの暴君ですか？

それが……アタシ？

エイリークは驚くことも先輩相手に怒ることもできず呆然。

「そんな自分勝手な人ばかりだから。エースは。勿論まかり通るのは成果を上げるからなんだけど」

「変なこと言わないで頂戴。あなたやクルスと一緒にされるのは御免よ」

口を挟んできたのはいつの間にかやって来たミヅル。彼女はサヨコの代理として新開発地区から様子を見に来ていた。

ミヅルは頬を染めて俯き、マークに彼のローブを差し出す。

「ほら。縫い合わせたからいい加減服を着なさい」

「あはは。ごめんね」

ミヅルはサヨコの指摘通り、実は初心で異性に対する耐性が極端に低い。

上半身裸のマークを見て思わず真っ赤になって斬りかかるほど。

笑顔でローブを受け取るマーク。裸の上からいつもの黒衣を纏った。

ばっさり切り裂かれていたとは思えない出来栄え。《賢姫》の家庭科の成績はランクＡである。

「うん。縫い目も目立たないし流石だね」

「ちゃんと前を隠して。……聞いてたわ。それで話は戻すけど、あなたがエースになるのは私も賛成よ。何なら私の《Ａナンバー》の称号を渡してもいいけど」
「駄目だよミヅルちゃん。彼女はリアちゃんから正々堂々剣で奪い取るんだから」
「ちょ、ちょっと。先輩？」

言いたい放題のマークとミヅル。

まさか《烈火烈風》とエース資格をかけて決闘するのは確定なのだろうか？

困惑するエイリーク。

「ああ。でもブソウ君のを奪ってもいいんじゃないかな」
「そうね。元々エースと自警部の２足わらじなんて無理があったんだし」
「あのっ！」
「冗談だよ。半分はね」

あはは。いつもの笑みをマークは浮かべる。

「半分って」
「僕ら《Ａナンバー》に決闘する必要はないってことさ。今まで中央校は伝統でエースは１０人しかいれなかったけど」
「今年は《アナザー》なんて例外ができちゃったのよね」
「あっ……」

《精霊使い》の少年のことだ。

学園長が設けた異例の、11人目のエース。

それに《Aナンバー》に挑戦する以外にもエース資格を取得する方法がある。チェルシーなど他の学校にいるエースがそうだ。

「資格試験」

「そうよ。《Aナンバー》の名前は残るでしょうけど、この先学園には彼の存在を理由にエース資格者が増えてくるでしょうね」

「生徒会長なんてそのままエースを連れてきそうだよ」

「……」

《青騎士》、《獣姫》、《鳥人》を除く《Aナンバー》達には懸念がある。疑念がある。

生徒会長。そして《会長派》に。

生徒会長はまだ2年生だ。来年、自分達が卒業した後の学園の往く先をマーク達は心配している。

マークは言った。

「期待してるんだよ。君たちには。だから目指してみないかい？《Aナンバー》、あるいは次の《アナザー》を」

「先輩……」

エイリークは思わず自分の、鞘に納めた細剣を握り締めた。

姉を、家族を守りたいと願って手にした力。これからも守る為に

振るい続けると決めた剣。

彼女の次なる目標。

エース。なれるだろうか。それに強くなれるだろうか。

自分の先を行く、あの少年のように。

（――あっ）

不意に、エイリークはここにいないユーマのことを思い出した。

彼女の《直感》が漠然とした不安を自身に伝えている。

エイリークはユーマのことをポピラに訊ねようとしたが。

「そういやユーマ君はどうしたの？　君たちと一緒だったよね？」

「そうなんですか？」

先にマークが思い出して訊ねてきた。訊き返すのはポピラ。

ミヅルは勿論、そういえば合流前の話なのでポピラもユーマが別行動をとったことを知らないはず。

……はず？

事情を知るアイリーンもチェルシーも、誰もユーマを確認してい

ないのか？　エイリークの不安が一層強いものになる。

「エイリークさん？」

「先輩。ユーマは……ポピラ達と合流する前にアタシ達と別れました。国の外に増援がいるからって」

「「……」」

マークとミヅルは驚くよりも「またあの子か」といった感じ顔を見合わせる。

「ポピラ。アイリィ達から聞いてない？　何も知らなかったの？」

「……はい。それにわかってるのは王都内の情報だけです」

「外か。まずいね。すぐに動けるのは……」

マークは考える。

アイリーンは消耗しすぎ。アギは腕を折ってはいるが《盾》は使えるだろう。だけど。

今、戦闘が可能なのは。

「僕とミヅルちゃん。それに応急処置を終えればレアちゃんのエース３人。あと《炎槍》さんか」

「先輩、アタシもまだ」

「君はもう駄目だ。最低でも機巧魔獣と戦える力が残ってないと」

ついて行こうとするエイリークを止めるマーク。

「君が大丈夫でもポピラさんが保たない」

「くっ……」

エイリークのスーパーモードによる強化は、ポピラの《同調》を使った支援術式によるものだ。スーパーモード発動の負荷は全てポピラにかかっている。

ポピラがエイリークに《同調》してかける4つの支援術式。その負荷は多大でポピラは《サポート・バレット》を1日に何度も撃つことができなかった。

《ミサイル・トリガー》や《ボルテックストーム》などを使い消耗してしまった彼女なら尚更。

マークからの戦力外通達に歯噛みするエイリーク。ポピラは申しわけなく彼女に謝った。

「すいません。無理すればあと1回はできるでしょうけど……」

「落ち着きなさい。まずは情報よ。外にいる王国軍とは連絡取れてるの？」

「先輩たち！　王さまが来てくれた。こっちに来てくれ」

ミヅルが状況把握の為に皆に訊ねようとしたところ、アギの彼女らを呼ぶ声が。

「……生きてたのね」

「ミヅルちゃん？」

誰が、とは急に不機嫌になったミヅルは話さなかった。

＋＋＋

「レヴァイア様！」
「無事か？　坊主たち」
防衛線での戦闘を終え、王都へ戻ってきたのはレヴァンと《機巧剣》を担いだミハエル。それともう1人。
氷の目をした巨漢の男。
「あら《氷斧》。王さまと一緒？」
「……色々とあった」
問いかける《炎槍》に《氷斧》はそれだけを言った。
ユーマの《砂縛陣》に飲み込まれた《氷斧》は地下４００メートル、《西の大帝国》で使われていた採掘場まで落とされた。
脱出を試みようと彼は坑道を進み、砂で塞がった場所は周囲を凍らせ砕きながら上を目指した。ダンジョンアタックである。
語られることのない孤独な脱出劇。そうして彼が地上へ抜け出た先が王国軍対機巧魔獣の戦場だったという。
「いやー助かったぜ。《氷斧》の旦那が来てくれてよぉ」
レヴァンはそんな《氷斧》を何故かダチのように接して労っている。

「機巧魔獣があと5体ってところでミハエルの剣が動作不良起こしてな。旦那がいなけりゃ防戦一方で打つ手なかったぜ」
「まったくですね。私はもう左腕1本で戦う覚悟をしましたよ」
「……」
《氷斧》は無表情。何も言わない。
彼は《炎槍》が捕まっていることを理由にレヴァンにいいように使われていた。残りの機巧魔獣を倒したのは彼である。
核の魔石ごと機巧魔獣を氷漬けにしたのだ。コピーもされる間もなく、一瞬で。
「やるじゃないの、レー君」
「資格を失くしたとはいえ魔獣退治は俺達ハンターが専門だ。一応仲間である傭兵を助けてもらった恩もある」
「変なところで義理堅い子ねぇ」
「……魔力で動くタイプで自爆すると聞いたので凍らせたまま放置してある。あとで祓ってくれ」
「了解よん」
「……」
《氷斧》はそれ以上彼女には何も言わない。
大丈夫だったか？　無事でよかった。
そんなこと、彼は何も伝えなかった。

一方。ファルケはミハエルの持つ《機巧剣》に釘づけになる。

「それは……まさか！」

「ええ。あなたの父、ジャファル様の物です」

ミハエルの言葉にファルケが驚く。

「な、なんで？　なんであんたが」

「遺言で託されたのです。《帝国》を守る最後の剣として」

「……」

「おもかったですね。当時の私にこの剣は」

ファルケは神妙に父の最後の部下であったミハエルの話を聞いていた。

変わりましたね。ミハエルはそう思う。

「あの最後の戦の前。帝都に1人残された私に『《帝国》の民を守れ』と、将軍は私に仰られました。『決して民を傷つけるな』とも」

「《帝国》の、民……」

「忘れないでください。昔、砂漠の民を了承もなく最下層民と決め、帝国民に仕立て上げたのは私達『帝国人』です。私達は皆、帝国人であり砂漠の民なのです」

ミハエルは今こそファルケに伝える。彼の父、英雄の言葉を。

「私達は同じ砂漠に住む1つの民です。私達は争ってはいけない。共に1つの国を創るべきだった」

「ミハエルさん……」

「いつかあなたも気付くはずです。『レヴァイア』の名を継いだあ

の方もまた、ジャファル様の遺志を継ぐ1人だと」

ミハエルはレヴァンに向けて《機巧剣》を掲げた。

その所作は帝国式ではあるが忠誠を誓う騎士のそれではない。それは、戦友の武運を祈る略式のもの。

想いを共にすると。

「だから私はジャファル様の代理として、この剣と共にあの方といるのです」

「……」

いつかわかってくれる。そう信じてミハエルは話をするのだった。

それにしても。

生身で《機巧剣(これ)》を振れるのだからジャファル様も化物でしたね。

そう思い最後に苦笑するミハエル。

＋＋＋

マークやエイリーク、チェルシー達もレヴァンの元に集まり一同集結。

「嬢ちゃん達も無事だったな。王都内は特に危険を『感じなかった』からそこまで気にしていなかったが」

レヴァンはエイリーク達を労った。

「よくやったぜ。おかげで外の方もケリがついた。俺達の勝ちだ」

おおっ！　盛り上がるのは《レアメダル・メカニック》や《黒耀騎士団》の学生たち。

「ん？　どうした、嬢ちゃん達？　そういや精霊の坊主がいないみてぇだが」

「王さま。それなんだけど」

「あんたに話がある」

エイリークの言葉を遮り、レヴァンに話しかけるのはファルケ。

彼の傍には《炎槍》、《氷斧》が控えている。

「アンタ」

「……どうした？　ちょっと見ねぇ間に随分男らしくなったみてぇだが」

「降伏してくれ。《新帝国軍》に」

「なっ！？」

誰もがファルケの発言に驚く。熱り立つのはアギやエイリーク。

「ファルケ、お前」

「この期に及んで、アンタはまだっ」

「待て。おい。どういうこった？」

「まだ中将が率いる本隊がいる。傭兵なんかじゃない、正規軍の精鋭だ」

「……マジかよ」

思わずアギは声を漏らした。他の生徒たちにも動揺が走る。

「王国軍も、あんた達だってもう戦う力は残ってないはずだ。悪いことは言わない。降伏してくれ」

「それでどうするんだ？　みすみす国を空け渡せってか？」

「無駄な争いをせず時間を稼いでほしい。その間に俺が中将の下へ行き説得する」

「……！」

意外なことを言われ驚くレヴァン。

でもそれがファルケの決意だった。

「機巧魔獣なんてモノを持ち出した中将はおかしい。それくらい俺にだってわかる。だから止めないといけない。アレが国や民を潰す前に」

「お前」

「あんたたちじゃもう勝てない。だから、俺が停戦協定を結ばせる。もうこの国で争わないように」

「本当に、俺達じゃもう守れねぇのか？」

レヴァンは訊ねる。今のファルケの話だけでは説得力が足りない。

それに青臭い少年の熱意に全てを賭けるほどレヴァンは甘くなく、若くなかった。

帝国軍、あるいは『帝国貴族』のやり方というものをよく知っていた。

「例えばそこにいる《炎槍》や《氷斧》の力を借りて、出払ってい

る王国軍3万の将兵が戻っても無理か？」
「それは《炎槍》さんと相談した。勝てるかもしれない。でも確実に甚大な損害が出る。あの機巧魔獣が放たれて集団で乱戦になったりしたら尚更」
「機巧魔獣。まだいやがるのか」
《魔導砲》の威力に術式のコピー能力と自己修復、広範囲の自爆攻撃。単体ならともかく、数が揃えば機巧魔獣は恐ろしいほどの脅威になる。
だからレヴァンも防衛線では数の差を活かした分断、各個撃破を選択したのだ。でもいくらレヴァンでも皆を《盾》でフォローするのは限界がある。
一体帝国軍は、あとどれだけ機巧魔獣を保有している？
「時間がない。本隊はもう近くにいる。俺はすぐに《炎槍》さん達と行くから、あんた達は攻撃されないよう抵抗の意思を見せずに」
「待って」
今度はエイリークがファルケの言葉を遮る。
「本隊はどこ？」
「何？」
「大分前にユーマが帝国軍の増援がいると言って国の外へ向かったわ」
「なんだと」
まさか。

ファルケやレヴァンだけでない。知らなかった全員が驚く。思い出したアイリーンとチェルシーも驚愕している。

「戻って……きていません」

不安が消えない。だからエイリークはファルケと、レヴァンに訊ねる。

「教えなさい。帝国軍は本隊の他に伏兵を用意していたの？　それに王さま、あなたは何も『感じて』いないの？」

「……！　まてよ嬢ちゃん。まさか坊主は」

ファルケはもう帝国軍の作戦を把握していなかった。彼が知っている本隊の陣容、《虎砲改》の数も本当なのか定かではない。

そしてレヴァンは、わからない。機巧魔獣を倒した以降、彼に危険を告げる『声』が聞こえてこない。

何かが阻害している？　何故かレヴァンはそう思った。

それでエイリークに言われてレヴァンにも不安と焦りが募ってくる。

エイリークは言った。

「もしも。ユーマが食い止めようとしているのが伏兵じゃなくて、敵の本隊だとしたら……」

「ミハエル！　シュリ！」

すぐさまレヴァンの指示が飛ぶ。

「外に待機してある王国軍から偵察隊を出せ」

「すでに周囲を警戒させています。私は情報の収集に外へ」

「頼む。シュリは暗視用の望遠鏡だ。どこか高い所に登ってお前の目で外を調べてくれ」

「は、はい！」

「あたしが手伝う。アレッく君、あたし達のスコープレンズ持ってきて」

ミハエルが駆け出し、チェルシーがシュリを手伝った。

ブーツユニットをパージしたチェルシーは、マシンアームでシュリを掴みあげるとブーストジャンプ。ホバリングして高度を維持する。

シュリは空を飛ぶ感覚に驚きながらも手にした《メカニック》特製の暗視スコープを取り出した。彼は《遠見》の特性スキルを併用して周囲を見渡す。

「どうだ！？」

「はっきりとはわかりません！　それに北西の方は砂嵐が酷くてまったく見えません！」

「砂……」

「嵐？」

十分な情報だった。

愕然とした。アギやアイリーン、ユーマを知る誰もが。

「あの馬鹿！」

エイリークが駆け出す。続いてアギが、アイリーンが、マークたちがあとを追う。

ひとりじゃないと伝えることができたなら。

――ユーマさんだって1人で無茶なんてしない。どんな困難も、みんなの力で乗り越えてくれる

（姉さま！！）

エイリークは走るしかない。今は、ただ。

戦っている。ユーマはまだ。

ずっと、１人で。

＋＋＋

「あああああああ！！」

ユーマは戦っている。月と星と、砂の世界で。

暗闇の中、鈍く輝く赤い光に囲まれて。

彼が倒した機巧魔獣の数は、もう１２体になる。

＋＋＋

３－１０ｂ　帝国の闇　後（前書き）

ユーマＶＳ機巧魔獣

3－10b　帝国の闇　後

＋＋＋

月とも星とも違う、赤い光が《砂漠の王国》に迫る。

砂の海の下、王国の命運を分ける戦いはここからが本番だった。

これまでの戦いを台無しにする愚かな策謀と、無謀だった少年の戦い。

＋＋＋
帝国の闇
＋＋＋

帝国軍の増援による奇襲を精霊たちによって逸早く察知したユーマ。

彼はエイリーク達と別れたあと、王国の外郭その北西部（主戦場となった防衛線は南部）にただ1人向かい、暗闇に紛れ帝国軍に強襲を仕掛けた。逆奇襲である。

砂漠の砂で模倣した《千騎兵》による一斉突撃。これを見て王国軍の迎撃部隊と勘違いしたのは2千人もの傭兵達。

「敵襲！」
「なんだと？」
「この足の速さは騎兵か？　それ以上に速い」
「馬鹿な！　砂漠地帯を高速で走れる馬なんて……」
「来るぞ。迎撃ぃ！」

夜襲に失敗したと悟り、浮足立つ彼らが本当に驚くのはこの次だった。

「押し流せ。砂更！」

砂の騎兵隊と共に突撃するユーマは砂の精霊に命じた。

真横に広がった砂の騎兵は、隊列を組む傭兵の前衛部隊にぶつかると同時にかたちを崩して大きな波となる。砂の津波は突撃の勢いそのままに傭兵達を呑み込み、後方の部隊と《虎砲改》までまとめて押し流してゆく。

王国より数キロ離れた場所まで帝国軍を押し流すと、ユーマは次に自分の肩にしがみつく風の精霊に命じた。

「吹き飛ばせ、風葉！」
「ぐるぐるぐー、どかーん」

風属性局地範囲攻撃術式《竜巻》。ゲンソウ術による魔術の再現も大分慣れて来たユーマだが、広範囲にわたる大技や特殊効果のある支援術式等はやはり風葉の魔法に頼るしかない。

発生した巨大な竜巻が砂に呑み込まれた傭兵を砂漠の砂ごと上空に巻き上げ、遥か遠くへ撒き散らす。

それで増援の傭兵部隊は回避不能の天災に巻き込まれたように一瞬で壊滅した。

「……死んでないよな？」

「砂が受け止めてくれますよー」

「……」

風葉の返答に同意する砂更。ある程度の落下の衝撃は砂漠の砂がクッションになるという。

「中級者くらいの難易度ですよー」

「……」

これも肯定する砂更。

障害物の多い学園で《旋風剣》の衝撃波に吹き飛ばされた方が余程危険なのだと精霊たちは言う。

その指摘にユーマ（吹き飛ばされ上級者）はなんだか虚しくなった。

「……俺ってよく今日まで生きて来れたな。さて……」

気を取り直して、ユーマは正面を見据える。彼が見たものは、砂

漠の夜の中で不気味に輝く赤い光。その数は２０。

ユーマの攻撃に脅威を感じたのか、増援部隊に配備された《虎砲改》が腹の中にいる『異物』を排除して変異、偽装を解いたのだ。

腹部と頭部の魔石を輝かせ、１０体もの機巧魔獣がユーマの前に現れる。

対してユーマは装備の最終確認。

右手に火と雷の属性カートリッジを差し込んだ《ガンプレート・レプリカ２》。左は腕に篭手に変形した《白砂の腕輪》、手には《守護の短剣》。腰のガンベルトには別のカートリッジが数枚。さらには応急キットのポーチに『ミサちゃんクッキー』が５枚。

そして肩に風葉、傍に砂更とユーマの精霊たち。これが《精霊使い》のフル装備だ。

「傭兵達の『避難』は済ませた。……いくぞ！」

ユーマは砂に足を取られないよう超低空の《天駆》を使い、《高速移動》で砂漠を駆ける。機巧魔獣のレーザーを躱しながら果敢に距離を詰めにかかった。ユーマはまず、確認しなければならなかったから。

恐れはなかった。ユーマは感づいている。

機巧魔獣をツクり出した技術はおそらく、《再成世界》のモノだと。

＋＋＋

今から（ユーマの主観時間で）３年ほど昔の話になる。《ＭＢ事件》、あるいは《フェンリル事件》と呼ばれる事件があった。発端はとある科学者が魔力（再成世界では《マナ》、あるいは《オド》と呼ぶ）を使い自己進化する機械生物の開発に着手したことにある。

《マシーナリー・ビースト》と呼ばれたソレは、生物の特性が強く自律思考で動くが外部操作を全く受け付けない。使われた動力源の危険性もあって外部から横槍が入り、開発は強制凍結されることになる。これに憤慨した科学者は試作機を暴走させ、街に解き放ち無差別テロを起こした。

試作機の暴走を食い止めたのは当時１５歳であった２人の少年。ライセンスの未取得から《ガード》の隠し玉であった《梟》と《狼》である。試作機《ＭＢ－ＴＯＸ　フェンリル》は《狼》の拳に殴り飛ばされ、彼の『牙』によって砕かれた。

この時。科学者は《梟》の力を目の当たりにし、彼の『不完全な力』を《マーシナリー・ビースト》に導入し自己進化を用いて完全再現、完成させようとしたのだが。

その２年後に科学者の企みは数千の《機獣部隊》ごと《梟》１人に叩き潰されている。

《梟》の持つ『銀の力』は、決して魔術をコピーするものではなかったから。

＋＋＋

機巧魔獣１０体を破壊したユーマは増援を確認。続いて闇夜の向こうから現れた機巧魔獣１０体に挑みかかる。

最初の１０体でユーマは倒すコツを掴んだ。初見で戦ったエイリーク達と比較してユーマは機巧魔獣に対し真鐘光輝から学んだ知識が活かせることが何よりも大きい。

機巧魔獣と戦う際にユーマが確認したかったのは機巧魔獣が《マシーナリー・ビースト》と同じ性質を持つのかということ。

自己修復、術式の学習によるコピー能力は勿論のこと、１番重要だったのは「機巧魔獣はどうやってコピーするのか」ということの確認だった。

要は学習（ラーニング）の条件は『視認』なのか、それとも『ダメージを受ける』などといった別のものなのかということ。牽制を繰り返し幾つか技をコピーされつつも、時間をかけてユーマの検証した結果は視認だった。

機巧魔獣はユーマの《天駆》、《高速移動》に加えガンプレートの魔法弾や風葉の魔法をコピーしたものの、砂嵐を起こし視界を潰してしまえばそれ以上技をコピーされなかったのだ。他に気付いたのは複雑で高度な術式ほど解析に時間がかかるといったところ。

また。砂更の固有能力である砂を操る力もコピー対象ではなかった。《炎槍》の《翼刀火燕》やチェルシーのマシン、サヨコやミヅルの剣技のような術式のかたちをとらない技は、下位の機巧魔獣である《威力偵察型》の学習能力では再現不可能だった。

機巧魔獣の弱点はそれだけでもなかったが。

《虎砲改》から生まれたばかりの、あるいは偽装を解いた機巧魔獣は幼生体ともいえるモノ。装甲も厚くなければ核も剥き出しの状態。

加えると思考能力も高くない。機巧魔獣はエイリークやアギ達の戦いで見せたように多少のダメージを受ければ自己修復を優先するし近接戦を好む傾向にある。

コピーした攻撃も応用できない。アギやレヴァンならばもっと柔軟に《盾》を使えるし《旋風剣》に至っては鎌に竜巻を纏わせただけで剣技は使えない。ただ振りまわすだけ。

ユーマにとって機巧魔獣で本当に厄介なのは、彼では防御できない《魔導砲》と自爆攻撃だけだったのである。

しかもその自爆攻撃さえも市街地での集団戦では脅威になるだろうが、多対一、しかも何もない広い場所で乱戦となればあまり効果がなかった。

「弱点を晒したままでっ」

砂嵐の中、ユーマは全身を覆う《風の衣》で砂礫から身を守り、ガンプレートの《ヒート・カッター》を正面に構える。

視界は最悪。その中で狙いを付けるのは砂嵐の中でも赤く輝く機巧魔獣の魔石。

ユーマがイメージを《補強》し《幻創》することで創る非実体の高熱刃を、今度はゲンソウ術でさらに《補強》。

創りだすのは《炎槍》の持つそれと同じような赤く鋭い、長い槍の穂先。

「ジャベリン、シュート！」

ガンプレートで撃ち出すのは貫通力と爆発力に特化した《ヒート・ジャベリン》。その1撃は砂嵐の暴風をものともせずまっすぐに突き進み、機巧魔獣の腹部に命中。魔石に突き刺さった直後にジャベリンは爆発し、機巧魔獣の核を粉砕した。

ユーマはすぐに《高速移動》で離脱。近くにいた機巧魔獣も自爆した機巧魔獣に巻き込まれ、砂嵐ごと跡形もなく消し飛んだ。

また、この時の砂嵐をシュリは王都上空から確認した。

2体撃破。残り8体。

ここで増援が接近。機巧魔獣が１０体、更にこちらへ向かってくる。

「風葉、闘衣を」

「くろーす、あーっぷ」

皮膚や目鼻を空気の膜で保護する《風の衣》から纏う風を変え、戦闘モードの《疾風闘衣》へ。

超高機動戦闘が可能となるこの複合強化術式はいわば決戦用。風葉の魔法でさえも１分も維持できない。

ユーマは瞬く間に４体の機巧魔獣の核に《ヒートジャベリン》を突き刺し瞬殺。自爆するのを無視して別の機巧魔獣に向かう。

《疾風闘衣》をコピーされる前に先程と同じようにして核のみを狙い、さらに４体の機巧魔獣を倒す。

「うぉおおおおっ！」

闘衣が維持できなくなる前にユーマは身に纏う風を解放。全周囲に放つ強力な衝撃波で自爆する直前の機巧魔獣をすべて爆発圏外まで弾き飛ばす。

これで計２０体撃破。あと１０体。

そしてさらなる増援を確認。

「はぁ、はぁ……。風葉、《疾風闘衣》はあと何回使える？」
「もう無理ですー。《竜巻》でもあと１回ですー」
魔力を消費しすぎて風葉の身体が透け出してきた。
「……辛いな。じゃあ、クッキー食べたらどのくらい回復する？」
「５枚あるなら《疾風闘衣》が２回ですねー」
「２回」
ユーマは考える。今の戦い方だと持久戦は無理だ。
《疾風闘衣》を使った超機動、高速戦闘は機巧魔獣の反応速度を上回る動きが可能なので急所狙いのヒット＆アウェイだけで１０体くらいなら余裕で圧倒できる。しかし、闘衣の持続時間が短い上に風葉の魔力消費が大きい。
もう１つの有効な戦法である砂嵐による撹乱＆各個撃破は、砂嵐を作る《竜巻》の持続時間が長く《疾風闘衣》ほど消費もしないので長期戦が可能ではあるが、機巧魔獣が自爆する度に砂嵐をかき消してしまうので実際効率が悪い。どちらにしてもこれ以上主力となる風葉に負担をかけられない。
「風葉は休憩だ。クッキー食べて『おうち』にいろ」
「でもー」
「大丈夫だ。砂更、行くぞ」
「……」
厳しくはなるがまだ戦える。ユーマは思う。

《精霊使い》のユーマは『優真』と比べれば振るえる力の幅があまりにも違う。今のユーマは師である2人の兄の教えを存分に発揮することができた。学園内、学生相手にはできなかったことも徒広い砂漠の上で魔獣相手なら躊躇うこともない。

ユーマは気付いていない。力を振るうことに高揚し過信している。

心配する風葉を余所に、ユーマは機巧魔獣に向かって走り出す。砂更はユーマに追従した。

今度の増援は機巧魔獣２０体。計３０体。

＋＋＋

《新帝国軍》の本隊は『予定通り』進軍を開始していた。

そう。すべては『帝国貴族』の1人であり《新帝国軍》の総司令官である中将の予定通り。

例え《転移》による王都奇襲の失敗も《虎砲改》が魔獣化するアクシデントも関係ない。彼はそんな現実は見ていない。

《雲鯨》の『艦長席』に座る中将は誰にともなく語る。

「私は《帝国》を救う英雄になるのだ」

＋＋＋

風葉の魔法によるサポートがなくなると、予想通りユーマの戦いは一気に厳しくなった。砂嵐がどれだけ有効だったのかを３０体もの機巧魔獣に思い知らされる。

機巧魔獣は視認でラーニングする。では機巧魔獣の『目』は何かというと頭部と腹部の魔石であった。その視野は頭部に至っては３６０度、全周囲である。魔石の球体だけしかない機巧魔獣の頭部は、全周囲カメラのようなものでもあったらしい。

機巧魔獣はその『目』で常にユーマを観察している。どれだけ隠そうともユーマの使う術式と魔法弾は機巧魔獣にコピーされていった。

照明弾が１つもない暗闇の中。機巧魔獣は夜目に優れているかどうか定かではないが、ユーマは全く見えていない。

ユーマは魔石の光と《風読み》の感覚を頼りに近接戦を仕掛けていた。

《ヒート・カッター》の鎌をユーマは《高速移動》で機巧魔獣の懐に飛び込むことで回避。ゼロ距離で《ヒート・ジャベリン》を核の魔石に撃ち込む。

「砂更！」

砂漠から出現した巨大な砂の腕が機巧魔獣を掴みあげると、砂更は後方でレーザーを撃とうとしている別の機巧魔獣に向けて投擲。

自爆寸前の機巧魔獣を手榴弾のように扱い他の機巧魔獣を屠る。

爆発。砂の壁で爆発の衝撃波を凌ぐ。だがすぐにレーザーの集中砲火がユーマを襲う。

ところが。そこには灼かれた砂の壁だけしかなくユーマの姿はなかった。

「……？」

姿を消したユーマを索敵する機巧魔獣。動きが止まる。その隙を突いてユーマが機巧魔獣の真下から飛び出した。

砂地に潜り攻撃をやり過ごしたユーマは砂更の力を使い砂の中を地中移動。強襲する。

「あああああっ！！」

真下からの攻撃に腹部の魔石を《ヒート・ジャベリン》で撃ち抜かれる機巧魔獣。自爆する前にユーマは《高速移動》で離脱。

すると今度は別の機巧魔獣3体が《高速移動》でユーマを追撃。

高速戦闘。囲まれないよう逃げるユーマの行く先を阻むのは、《魔導砲》の発射態勢を取る5体の機巧魔獣。ユーマは構わず突進した。

「ストーム・ブラストっ」

《魔導砲》が放たれる直前にユーマはガンプレートで足元の砂を撃った。砂埃を巻き上げる《ストーム・ブラスト》の反動を利用してユーマは真上に緊急回避。《魔導砲》は砂に視界を奪われたユーマを追跡する機巧魔獣3体を消し飛ばした。

一方。上空に飛んだユーマは、《天駆》で跳び上がった更に別の機巧魔獣の攻撃を受ける。

振るわれた鎌をユーマはガンプレートに《風盾》を付与して受け捌き、同時に《スタンガン》を機巧魔獣に叩き込んで感電で動きを封じる。

核を撃ち抜いたユーマは《ストーム・ブラスト》で下にいる5体の機巧魔獣に向けて『爆弾』を叩きつけた。爆発。

12体撃破。残り18体。更に増援を確認。

ユーマは気付いていない。この機巧魔獣の群れが《新帝国軍》本隊である機巧師団のなれの果てだということに。

気付いたとしても王国に危機を伝えることもままならない。ユーマは王国に向かってくる機巧魔獣を1人で食い止めるしかなかった。

それが勝ち目の見えない戦いでも。

《ストームブラスト》をコピーした機巧魔獣１２体による一斉攻撃がユーマを襲う。

「裂風、ダブルブーメラン！！」

ユーマはやむを得ず対風属性斬撃術式、《裂風刃》を《風刃ブーメラン》の要領で短剣とガンプレートから射出。

旋回するカマイタチが旋風の一斉放射を切り裂く。しかしこれで《裂風刃》はコピーされてしまうはず。

同じ技の応酬。学習する度に強くなる機巧魔獣。

尽きることのない増援。ユーマは少しずつでも手の内を晒すしかなく、その上で疲弊していく。

消耗戦だった。

＋＋＋

長らく『砂喰い』に留守を預からせた《帝国》。「今日までご苦労だった」と照明弾で光り輝く夜の王都を遠くから眺め中将は言った。

「しかし所詮『砂喰い』だ。きっと私等の《帝国》を守れまい」

中将は言った。

「なにせ《機巧兵器》を持ち出した1万を超える『ならず者の傭兵』が相手なのだ。民を救えるのは我等《新帝国軍》しかおるまい」

占領された《帝国》を中将が軍を颯爽と率いて傭兵を駆逐。民衆を救いだし『帝国貴族』の凱旋を大々的に伝える。きっと民は英雄として軍を迎え入れるだろう。

それで知らしめる。思いあがった『砂喰い』達に。

《帝国》は誰の国なのかを。

妄想をそのままに描いた中将のシナリオ。自作自演の計略。

それはレヴァン達の奮闘と《忘却》が施した機巧魔獣の存在によってとっくに崩壊しかかっているが、中将は何も気付いていない。それ以前に民は圧政に悪政を強いた『帝国貴族』全く支持していない。

それでも。予定通りなのだ。彼にとって。

中将、『帝国貴族』は都合のいい現実をつくるのだから。

中将は《雲鯨》の通信兵に訊ねた。

「先行する機巧部隊はどうか？」
「はっ。……それがどの隊も連絡が一切つきません」
「何？　２００もの《機巧兵器》を擁する機巧師団、そのどこの隊もか？」

流石に不審に思い眉を顰める中将。通信兵達が状況を説明。

「《虎砲改》の魔石を《雲鯨》の魔力探知器で探ったのですが、帝都まで3キロという場所で足留めを受けているようです」
「先行部隊の全滅を確認。損害は《虎砲改》５０。現在後続の部隊が交戦に入った模様」
「確認しました。機巧部隊、一斉に2キロ後退します。これは……何？」
「……反乱軍か」
「いえ。こちらからの観測結果によると魔獣らしきものに遭遇したのかと。しかし」
「使えんな。兵どもはたるんでいる」

魔石は感知しているが《虎砲改》の姿が一切見当たらない。そう通信兵が報告するのを遮り、中将は僅かに苛立った声で命じる。

「《雲鯨》を前に出す。2番艦にも通達しろ。魔獣など《魔導砲》で蹴散らしてしまえ」
「将軍！　それはっ」

異を唱えるのは《雲鯨》の艦長である帝国軍大佐。

「《魔導砲》を対地砲火に使えば下にいる機巧部隊は」
「構わん。《虎砲改》なら『あの男』に頼めばいくらでも用意でき

る」

違う。大佐は味方の将兵に被害が出ることを危惧しているのだ。
そんなこと名ばかりの階級である中将が気にすることではなかった。

兵など金と権力で集まる。

今回は7年もかかったが《帝国》があればすぐにでも。

そういう男だった。

「命令だよ。大佐」
「……了解です」

＋＋＋

巨大な砂の腕が機巧魔獣を殴り飛ばす。

逆手に持った《守護の短剣》を振るい、《突風》で機巧魔獣を弾き飛ばす。

《ボルテックストーム》の放電に多くの機巧魔獣が感電し、動きを止める。

「押し流せっ、砂更ぁーーっ！！」

巨大な砂の津波が５０体近い機巧魔獣を呑み込み、後方数キロ先へ全て押し流す。

仕切り直しだ。そして、更なる増援を確認。

闇の中、ざくざくと砂漠を踏みしめて進む音をユーマは聞いた。

近づいてくる、無数の赤い不気味な光をユーマは見た。

その数はざっと百を超える。

「はぁ、はぁ……はぁ。……砂更」

まだやれるか？　声もなくユーマは訊ねる。砂の精霊は無言でも力強く主人に応えた。

「……そっか。砂漠でのお前はほんと頼りになるなぁ」

ユーマは力なく笑う。軽口を叩いて気を紛らわせたかった。

レーザーや《魔導砲》の熱に、魔力の爆発に何度も煽られ、叩きつけるように降り注ぐ砂を何度も全身に被った。

連戦による疲労もあればゲンソウ術の負荷による頭痛も酷い。気を抜けば足も腕も、首さえもう上がらなくなる。

ユーマはもう限界だった。精神も身体も。

身体が動く内に勝負を決めるなら、今しかない。

「……砂縛陣を使う。風葉」

ユーマは温存させておいた風葉を短剣から呼んだ。

「疾風闘衣を頼む。砂更が陣を張る時間を稼ぐ。あとはお前も爆砂陣の方を」

「待ってくださいー。あれー」

「えっ？」

風葉に促されるままに王国側に振り返り、ユーマが見たものは、こちらに向って来る1台の、装軌式の青い装甲車。

《駱駝》だ。ユーマはポピラ1度も合流していない為、この王国軍が所持する《機巧兵器》の存在を知らない。

「機巧兵器？　――っ！」

ゾクリとする悪寒。今度は機巧魔獣のいる方向だ。

ユーマは夜空を見上げる。

――撃て

遥か遠く上空から撃たれたのは複数の《魔導砲》。魔力の奔流がユーマに迫り来る機巧魔獣ごと砂漠を焼き払う。

思わぬことにユーマは咄嗟に閃光から目を守り、爆発の衝撃波と飛び散る砂礫を砂更が防いだ。

目を瞑る瞬間。ユーマが最後に見たものは。

「あっ――」

《魔導砲》の光に焼き尽くされ、跡形もなく消え去る青い――

「消え……しんだ？」

目の前で見たものが信じられず、ユーマは愕然とした。

機巧魔獣ではなかった。ならあの青いやつには誰かが、人が乗っていたはずだ。

それが呆気なく光に――

《魔導砲》の一斉掃射はまだ終わらない。

攻撃は機巧魔獣を狙ったものではない。この辺り一帯を焼き払う無差別な殲滅砲撃。

危ないのはこの場にいるユーマだけではない。

下手をすれば彼が吹き飛ばした傭兵達にも被害が。

「やめろぉおおおおお！！！」

絶叫。ユーマはガンプレートを上空に向け構える。敵はそこにいるはず。

見えた。あれは……飛行船だ。

爆撃機型機巧兵器《雲鯨》。全長２００メートルを超える空飛ぶ要塞。

それが2隻。

「……なんだよ、それ」

ユーマは8つの砲門を向ける2隻の飛行船を見て、自分の力が抜けていくのがわかった。

遠い。それに届かない。

百体を超える機巧魔獣。《魔導砲》による上空からの一方的な砲撃。その火力による制圧力ならば帝国軍に傭兵なんて必要なかったはず。

最初から王国軍は勝てない戦いを仕組まれていたというのか？

ユーマにわかるわけがない。傭兵は捨て駒であると同時に悪役として利用されたのだから。

《炎槍》も《氷斧》も。切り捨てられたファルケも。

無駄だったのか？　すべてが。

《盾》を凍らされ、砕かれても《氷斧》に立ち向かったアギも、1人飛び出して《炎槍》に挑みかかったエイリークも。

アイリーンは本調子じゃなくても駆け付けてくれたし、マークやチェルシーだってエースという理由だけで戦ったわけじゃない。

誰もが戦っていた。ただ、守りたくて。

今もきっと。

それが、すべて無駄？

脱力した右手からユーマはガンプレートを落とした。

「……ふざけるな」

「ふざけるなよ」

抜けてしまった力の代わりに込み上げてくる、湧き出したモノを抑え込むようにユーマは拳を握った。

尚も降り注いでくる《魔導砲》の光。その中の１つがユーマに直撃しようとしたその時。

「あああああっ！！！」

光に向かってユーマは、右の拳を――

＋＋＋

《雲鯨》の１番艦。メインブリッジ。

高みの見物。中将は目下の光景に歓喜の声をあげた。

光が、すべてを焼き払う。

「……はっ、はは。あはははは。見ろ。これが《雲鯨》の力だ」

まさに中将が望む伝統ある《帝国》の力だった。

圧倒的な《機巧兵器》による蹂躙。武力による支配。

「……観測室より報告。視認で周辺の魔獣の殲滅を確認」

「魔力探知器による《虎砲改》の反応……ありません」

「構わん。まだ置いてきた直援部隊に艦に積んだ《虎砲》も残っている」

通信兵の報告と中将の言葉にやるせない思いをするクルーたち。

傭兵と『砂喰い』を適度に殺し、支配するには十分な戦力がある。

中将は勝利を確信した。

「誰にも止められんよ。この空飛ぶ要塞は」

「待って下さい。……観測室より報告。生存者を確認」

「何？　友軍か？」

訊ね返すのは大佐。

「いえ。ですが少年が1人、砲撃した地帯で確認されています」

「……わかった。直ちに保護を」

「待て。私が出る」
「将軍!?」
「私の《虎砲》を出せ」

言われていることがわからなかったのではない。大佐は中将がやろうとしていることに絶句した。

「聞こえなかったのか?」

中将は言った。後続の部隊が追いつくまでの暇つぶしだと。

「私も久々に人を撃ちたくなったのだよ」

＋＋＋

3－10b　帝国の闇　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

守れない。もう何もできない。だから、ユーマは諦めることができた。

百体を超える機巧魔獣。そして2隻の《雲鯨》を擁する帝国軍を前にユーマは、遂に捨てる覚悟ができた。

ただ、許せなかったから。

次回「闇を狩るゲンソウ」

もう退くことができない戦い。少年は最強のゲンソウを手に拳を握る

３－１１ａ　闇を狩るゲンソウ　１（前書き）

恐れから闇を狩るモノ

目覚めるのは、誰？

3－11a　闇を狩るゲンソウ　1

＋＋＋

《雲鯨》よりパラシュートで砂漠に降り立つ4両の《虎砲改》と《虎砲》。《虎砲》は指揮官機として砂漠戦の迷彩がされず真紅の塗装と金の装飾の施されていた。

趣味の悪い機体だ。中将の乗る《機巧兵器》だった。

また。中将の昔からの趣味に『砂喰い狩り』というものがあった。この時、彼は《雲鯨》の対地砲火の威力を目の当たりにして興奮したという。

つまり「私も久しぶりに狩りをしたくなった」とのこと。砲撃で生き残ったらしい『少年』とは友軍ではないという。ならば好きに扱ってもいいというのが中将の理屈であった。

「《魔導砲》もいいがやはり狩りならば《虎砲》の主砲が良い。肉片が飛び散らんからな。……どこだ？」

焼き払った夜の砂漠は静かだった。走る《虎砲》の駆動音しか聞こえない。ハッチから顔を出し、『獲物』を探し砂漠を見渡す中将。

そして中将は見つけた。突っ立ったままの、黒髪の少年を。

少年の俯いた顔は見えない。服はあちこち焼け焦げており、少年を見た中将の兵は「あの砲撃の中よくこれだけで済んだ」と誰もがそう思った。

少年は重症だった。特に右腕は『形だけが残った』だけ奇跡ではないだろうか。肘から下が炭化している。

《魔導砲》に焼かれたのだろう。少年が受けただろう激痛はショック死してもおかしくない。

「あれは……生きているのでしょうか？」
「構わんよ。的になるのならそれでいい。逃げ回れば尚よかったが」
「……」

《虎砲》の乗員達は中将に返す言葉がなかった。

「主砲用意だ」
「……はっ」

せめてもの慈悲だ。これ以上苦しまないよう一想いにあの世に送ろう。

『砂喰い』であったことを恨んでくれと《虎砲》の砲手は１２０ミリ砲弾を装填した。

これから起こす惨劇に中将は愉悦の笑みを浮かべた。

中将は楽しみをすぐに失くさないようじっくりと、いたぶるように焦らして照準を少年の頭部つける。

「撃て」

主砲が少年に撃たれる。

砲弾が少年の頭を破砕し、吹き飛ばす。

その前に――

「――！」

少年は自分の死に反応した。それは、古葉大和に叩きこまれた刹那の見切りだった。

撃ち出された砲弾は、彼の拳に比べれば。

「遅い！！」

ピシッ

少年の右腕に小さなヒビが入る。だがそれだけだ。中将以下帝国軍の兵は目の前で何が起きたかわからなかった。

少年は砲弾を殴り飛ばす。

「なっ！？　んだと」

「……そうかよ」

撃たれた少年は中将の悪意を正面から受け止めた。それでもう、十分だった。

それは、引き金だった。

それが、スイッチだった。

少年は『理解』する。躊躇わなくていいのだと。振るってもいいのだと。

「――ぁあああああああああ！！」

吠える。

砂混じりの血を吐いて、全身を苛む火傷の熱と痛みを吹き飛ばして。

『切り替わる』

＋＋＋

闇を狩るゲンソウ

＋＋＋

優真は怖かった。あの日、しろい少女を《梟》に撃ち墜とされたその時から。何もできず、泣き叫ぶことしかできなかったから。

ユーマは恐れた。帝国軍を、機巧魔獣の侵攻を許してしまったあとに起きるであろう惨劇を。ユーマは王国の人たちとふれあい、知ってしまったから。

最初迎えてくれたのはシュリの母が振舞ってくれたご馳走。

――俺はいつだって『家』で『家族』と一緒に飯が食いたいのさ

――プレゼント何も準備してねぇ！　お父さん失格じゃねぇか、どうすんだよ！？

――俺のかわいい娘に手を出すなんて……お父さん許さないからね！

国の父として在り続ける破天荒な王。

――誰よりもこの砂漠の国を想い、砂の地を踏みしめてきた。そしてこれからも駆け抜ける方ですから

苦笑しながらも王と共に国を駆ける宰相補佐官。

仲間たちと歩いた砂漠の国はどこも活気にあふれたいた。

――ここは砂漠に住む皆の理想郷、楽園なんだ

――砂喰いに国を変えられることが、俺は我慢できない！

あの幼馴染の2人は、道を違えても故郷を想う気持ちは同じだった。

――美味しいです。甘いというよりもやさしい、そんな味です

――ここは人のあたたかさに包まれた国なんでしょう？

静養していた彼女はこの国を知らない。だけど一緒に食べたお菓子から砂漠の国に想いを馳せた。

――君もいつか国へ、私達の家に遊びにいらっしゃい。歓迎するわ

学園で出会った桜の王妃にちゃんと伝えたい。訪れてよかったと。

一緒に砂の履き掃除をした子供たちのほとんどが前の戦で親を亡くした子だった。だけど皆が翳りもなく笑顔でいた。

誰もが皆の母である王妃のことが大好きだったから。国が家で皆が家族だったから寂しくなんてなかったのだ。

王の描く理想の国。その素晴らしさを知るのに1日もいらなかった。

――争いなんて事前に止められたらそれが1番だ。でも今は時間がない

――被害を最小限に抑えることなら今からでも間に合う。だから僕は王国の手伝いにここへ来たんだ

そう。だから彼に同意した。守れるものなら守りたかったから。それだけの力があることを自負していた。

うぬぼれてた。

「マークさんから言われたこと忘れたの？　ポピラやミサちゃんから離れて何してるんだ」

不測の事態にすぐ動揺してエイリークに八つ当たりした。アギの強い意志に引っ張られなければ戦うどころではなかった。

――嫌だったら覆してみなさい、坊や

――隠してる？　それとも出せない理由でもあるのん？

数段格上の強敵を前に、この期に及んで覚悟することが怖かった。連携を組むことで皆を守って、庇って、それで満足に戦えなくて。

その為にアギが皆を守って犠牲になろうともした。

――俺の代わりに……守ってくれ

「やめろぉおおおおお！！」

情けなかった。あの時も叫ぶことしかできなかった。

レヴァンやマークたちが間にあわなければ、きっとアギは。

――どんなに強くても、精霊が2体もいても坊やは『戦士』じゃない。敵も味方も切り捨てる覚悟がないから。

その通りだった。

「俺は、『俺』のまま戦います。どんなに足掻いても、何もできないまま終わってしまうのなら尚更」

そのあと彼女の前で「それでも」と啖呵を切ったが、きっと反発してのことだ。機巧魔獣が現れた時にまた決意は揺れた。

なぜアレと似たモノがこの世界にある？　思い出してしまう。

《フェンリル事件》。自分の血とも誰かの血ともわからない、全身をアカに染めた2人の兄の姿。大和の食い千切られた肩や腕は勿論のこと、優真はあの時の光輝の目が忘れられない。

刻みつけられた誰かの絶望。もう忘れることのない、救われず終わってしまった命。

怖かった。何も知らなくても、優真は彼を通して闇を見ることがあった。

2度と見たくなかったモノ。だけどソレは王国に現れた。

――坊やは気付いてるわよね？

言われなくてもその脅威は誰よりも知っていた。《マシーナリービースト》と同種だと感じたのは間違いではなかった。

精霊を通して王国に迫る危機にすぐに気付いた。急がなければ間に合わない。だけど優先順位をつけた。まずは彼女たちを守ろうと。

迷いは筒抜けだった。

――行きなさい。この国の人たちを守る為に

――見くびらないで！！

比べるまでもなくエイリークの覚悟は本物だったのだ。誰かの為に命を張り、剣と振るうと。

――アタシ達を気遣って国の人たちを守れなかったのなら、アンタを絶対に許さない

そこまで言われ、彼女達に背中を押されてやっと少年は自分の戦いをはじめたのだった。

全てを守る為に。

だけど。

――そんな薄弱な意志で振るう力が何かを守れるはずがない

かつて、小手先のゲンソウ術と彼は評した。

間違ってはいない。それに小手先というのなら機巧魔獣の能力は何よりも優れていた。

敵わないわけではない。でも押しきれなかった。

圧倒的な数の機巧魔獣を前にたった1人のユーマは限界を迎えた。

――弱いくせに。誰かをなんて守れるはずがない

誰も殺さなければいいと思った。甘かった。

誰も死ななければいいと思った。すごく甘かった。王国の外で傭兵が機巧魔獣にどれだけ殺されたのか彼は知らない。

変わらなかったのだ。《精霊使い》であろうがユーマは優真であり、ちっぽけな1人の少年なのだから。

無謀に挑んで、倒れるだけ。

結局。何もできない。

泣いて喚かなくなっただけで何も、変わらない。

だから。目の前で呆気なく消え去った《駱駝》を見て、夜空を支配する2隻の《雲鯨》を見て、少年は諦めた。

守れない。何もできない。

――《剣》ヲトレ

うるさい。

――《剣》ヲ

うるさい。もう諦めたのだ。《ソレ》はいらない。少年は『声』を突っぱねた。

（好きなようにやらせろ。俺は……）

目の前に広がるすべてを潰したい

絶望への怨恨。怒り。

ユーマは自棄になって《魔導砲》の光に向かい右の拳を――

その時だった。

握り締めた拳が、そこに宿る《幻想》が何かを伝えたのは。

――優真、それでもな

（――！？）

思い出す。誰だった？　捨てたくないと言ったのは。

――俺はコウを見捨てたくない

古葉大和。

――脆いから、すぐ傷つくから。身体を張れる俺が守るしかない

――弱いから、すぐ間違うから。俺が殴ってでも止めなきゃいけない

《梟》、真鐘光輝の相棒。優真の、もう1人の兄。

――あいつが受ける傷を俺が少しでも俺が背負えたら、あいつが少しでも正しく在れるのならきっと

俺達は、

もう少しだけ何かができる。

思い出せる。彼は決して「全てを守れる」とか「何も失わない」なんて言わなかった。それでいて「何もできない」なんて絶対言わなかった。

相棒がいれば。2人なら何かができる。そう言った。

そうだった。2人が揃えばできないことはない。誰にも負けない。優真はずっと信じてきた。

今のユーマだってそう。そうでなければ、『相棒』に呼応した左腕が輝くはずがない。

牙のない狼。飛べない梟。

（大和兄ちゃん……光輝さん）

思い出した。すべてを投げ出す前に、最初に諦めなければならないものがあった。

もう少し。この状況でもう少しだけできることがあった。

――弱いくせに。誰かをなんて守れるはずがない

ユーマは優真だ。思い出せる。なんだかんだいって『彼』が1番諦めが悪かったのだ。

――切り捨てろ。そんなちっぽけな力、できることなんてたかが知れてる

――抱えきれない余計な想いを捨てろ。誰かをなんて考えるな

それでも。

それでも叶えたい願いなら。想いなら。

思い出せる。光輝は言ったのだ。

――かなぐり捨てろ！！

「あああああああああああああ！！」

ユーマはあの時、右の拳で《魔導砲》を殴り飛ばしたのだ。

《狼》の拳

全ての痛みを受け止め、あらゆる脅威に屈することない優真の、右のゲンソウ。

＋＋＋

「あああああああああああああ――――――――！！」

獣の咆哮。叫びと共にユーマは捨てていく。

自分の甘さを。自分の保身を。

――俺の代わりに……守ってくれ

アギが託そうとした願いや想いも。

――アンタを絶対に許さない

許さなくていい。エイリークの檄に込められた想いも捨てる。

アイリーン、ポピラ、マーク、チェルシー。レヴァン、ミハエル、シュリ。

彼女たち、彼らを今は気遣うことも辞めた。

精霊たちもだ。下手をすると喰い潰すかもしれない。だけど無視した。

今はいらない。目の前の脅威を取り除けばあとはどうにでもなる。

すべてが終わったあと。そこに『ユーマ』という少年はいなくてもいい。

退くことはできない。そう決めた。

だから限界まで力を引き出す為にユーマは自分を捨てる。

きっとそれがユーマのできる『もう少し』。

俺は、『俺』のまま――

捨てろ。今は、ただ――

砂漠に響き渡る咆哮。それを聞き、目の前の少年に恐れを抱いたのは、中将たち帝国軍ではなく機巧魔獣だった。

「う……ああーーっ!?」

「な、なんだ?」

中将は護衛である周囲の《虎砲改》がいきなり『殻』を破り変異するのを見た。機巧魔獣の『腹』の中にいる兵の断末魔が聞こえる。

ここでやっと中将は機巧魔獣が《虎砲改》である事実を目の当たりにした。

「なんだこれは? わ、私の《機巧兵器》が……」

「――っ、後退します!」

危険と判断し慌てて後退する中将の《虎砲》。４体の機巧魔獣はこれを無視した。

機巧魔獣は金属の軋み声を上げて悲鳴のように鳴いた。助けを求めるように。

そして。

咆哮のあと。『ユーマ』を搾り尽くした少年は1歩踏み出す。怯みつつも戦闘態勢を取る機巧魔獣。

「……もういい。理解した」

久しぶりに現れた『少年』は、目の前に広がるモノを全てを悪意ある敵とみなした。

ガンプレートを失くした彼は《守護の短剣》を鞘に納めて無手となる。

炭化して感覚もなければ指も開かない右の拳を握り締め、左腕に銀の燐光を纏わせた。

「――覚悟しろ」

誰にでもない。『少年』は自分に言った。

戦う覚悟。守らない覚悟。

戻れない覚悟。何があっても叩き潰す覚悟。

『ユーマ』という存在を、磨り潰す覚悟。

機巧魔獣が少年に感じたものは恐怖だ。『天敵』が現れたことをソレは本能で察した。

だから遠くにいる仲間に助けを求めた。だから恐怖に負けて思わず《魔導砲》を撃った。

直撃？

少年は……優真は迫り来る魔力の光を見て少し考えた。

こんな時、叩き潰すモノを前にして彼は何と言っていただろうか？

夜を識り、闇を狩る《梟》は。

「《魔導砲（ソレ）》は知ってる」

優真はそう言うと、左腕を前に翳した。

それだけでなく優真は手を広げ、腕を振るい、銀の燐光で《魔導砲》を容易く打ち払った。

相殺。

優真は思い出した。《梟》は、絶望を相手に見せつけるようにこう言うのだ。

「――2度目はない」

《梟》の翼

それが、優真の左のゲンソウ。

＋＋＋

月と星、砂だけの夜の世界。辿りついた時にはもう砂嵐は止んでいた。

目的地まであと数百メートルという場所で彼女は立ち止る。暗闇から迫りくる絶望はここからでもはっきりとわかったのだ。空を飛ぶ『何か』が2つ、闇夜を照らしている。

それから地表には機巧魔獣らしい魔石の光が複数。数えたならきっと百は下らない。

これが帝国軍の本隊？

無理だと思った。勝てないと、王国はもう守れないと思ってしまった。

機巧魔獣の力を知り、今の自分達に残された力を知っているからこそそう思わざる得なかった。

敗北。最後まで戦ったその果て。

すべてが無駄だった。本当の意味で絶望というものを彼女は初めて味わったのかもしれない。

なのに。

「あああああああああああ――――――！！」

暗闇の向こう。聞こえてくるのは足掻くモノの叫び。

ここからでは姿は見えない。だけどわかってしまった。まだあの中にいる。

戦っている。今も1人で。

「……なによ。それ」

エイリークは砂漠に響き渡る咆哮に足が竦み、その場に座り込んでしまった。

知りたくなかった。この先にあるモノを。

だからもう先に進めなかった。駆け付けることができなかった。

一斉に放たれた《魔導砲》の光が何かに弾かれる。聞こえてくる咆哮は今も止まらない。

何を怖いと思ったのか、エイリークはわからなかった。

＋＋＋

３－１１ｂ　闇を狩るゲンソウ　２（前書き）

優真（梟狼解放モード）ＶＳ機巧魔獣

3－11b　闇を狩るゲンソウ　2

＋＋＋

1人じゃ何も守れない。

じゃあどうすればいい？

簡単だ。失う前に叩き潰せばい。

守らなくても、同じことだ。

＋＋＋

優真はユーマだ。何かが変わったわけではない。

今までの疲労やダメージが回復したわけでもなければ、エイリークのスーパーモードのように劇的に強くなったわけでもない。彼は元の自分に戻っただけ。

窮地に立たされたユーマは機巧魔獣を叩き潰す為、左右の腕と拳に宿るゲンソウ術にすべてを懸けた。

この切り札を使うには発動条件があり『優真の記憶』から《幻想

≫を想起させる必要があった。そこでユーマがやったのはフォーマット、あるいはオプティマイゼーションと呼べるものである。

『ユーマ』を初期化し、２つのゲンソウ術を使いこなせる『優真』への最適化を行う。当の本人は戦闘における雑念を捨てる自己暗示だと思っているが、彼が無意識にしているのは≪干渉≫を使った自己暗示とは決定的に違う。これは以前精霊の風森が優真に≪精霊使い≫の適性を書き足して『ユーマ』に存在を書き換えたことに似ている。

『存在を書き換える』。これが≪転写体≫の特性１つであり、優真自身を危ういものにするということに彼は気付いていない。

≪精霊使い≫でないただの御剣優真に戻った彼は左右の腕と拳に宿る≪幻想≫を基にイメージを自身に投影する。『優真のゲンソウ術』は彼の２人の兄を模倣しているに過ぎない。

だけど≪幻想≫から≪現創≫し、優真は再現する。

≪梟≫と≪狼≫。闇を狩るモノを。

＋＋＋

４体の機巧魔獣は優真を前にして鳴いて助けを呼ぶ。しばらくして現れるのは百体に近い数の機巧魔獣。

先行した≪雲鯨≫が置き去りにした直援部隊のなれの果てだ。そ

れを見た優真は特に何も思わなかった。

雑魚に用はない。それだけだった。

優真は自分の甘さと躊躇いを捨てた。疲労や痛み、頭痛はすべて無視。その上で機巧魔獣をどう潰すか考えた。《梟》ならどうするか？

アレがイキモノなら心を折ろう。そう決めた。

近くにいる４体の機巧魔獣は《魔導砲》を撃ち払われすっかり怯みきっていた。優真は容赦なく殴り飛ばして蹴散らす。とどめも刺さずに前へ進む。いちいち自爆されると余計なダメージを受けるし、何より乱戦において爆発に視界を奪われることを優真は嫌った。

優真は《天駆》も《高速移動》も使わず、しかし砂に足を取られることもなく砂漠を駆ける。

機巧魔獣の群れによる《魔導砲》の一斉攻撃を優真は躱すことなく左腕ですべて打ち払い、すべて相殺した。《梟》をイメージする今の優真に同じ技は２度と通じない。

優真は雄叫びをあげ、駆ける。機巧魔獣の１体に飛びかかり、右の拳で殴り飛ばす。

機巧魔獣は飛び道具が通じないとわかると腕の鎌を伸ばし、近接戦を仕掛けに優真に群がってゆく。機巧魔獣が優真を無視できなか

ったのは本能からだった。

天敵の出現。今倒さなければ『喰われてしまう』。そんな漠然とした恐怖に機巧魔獣は駆られていた。

「……いくぞ」

2度目はない。余裕もない。優真は賭けに出る。

1体100。乱闘がはじまった。

＋＋＋

優真が機巧魔獣に襲いかかるその時。

上空にいる《雲鯨》1番艦のブリッジは、《虎砲改》のすべてが魔獣になる信じられない光景を目の当たりにして混乱の極みに達していた。

「後方より魔獣接近。……間違いありません。魔力探知器よりあの魔獣から《虎砲改》の魔石が確認されます」

「魔獣の数は《雲鯨》の直援部隊と一致。つまり」

「そんな。それじゃあ機巧部隊の将兵は全部……」

「――！　この艦に積んでいる《虎砲改》を放り出せ！！」

艦長である大佐は《虎砲改》の危険に逸早く対処し、指示を出した。艦の中に魔獣を積んでいるなんてぞっとしない。

《雲鯨》の格納庫はブロック化された増設式だ。船体の下部に取り付けられ容易に切り離せる。

「ブロックごと放棄しろ」

「しかし格納庫にはまだ技術士や兵が」

「構わん！　2番艦との連絡は？」

「……繋がりません」

「遅かったか」

大佐は最悪の事態を想定した。2番艦のクルーが機巧魔獣に襲われ、全滅したと。

魔力を扱う兵器なんて危険だと大佐は薄々気付いていた。これは中将をはじめ、《虎砲改》という未知の技術を使われた兵器を誰も疑わなかった結果だ。自滅と言ってもいい。

彼ら帝国軍は傭兵も含め皆利用されただけだった。しかも黒幕だった魔人はもう、この砂漠にはいない。

仕掛けた戦の実態。それが第3者の思惑で仕掛けを施されたものであったことに彼らは最後までわからなかった。

取り戻すべき《帝国》を目の前にして、2番艦のクルーをはじめとする帝国軍の将兵は遂に故郷に帰ることができなかった。無念だろう。大佐はやるせない怒りを感じた。

「艦長？」

「魔導砲用意。目標は真下の魔獣群」

大佐は真下に広がる魔獣を屠ることで志半ばに散った同胞を弔うことにした。

降下した中将のことはあえて無視した。魔獣の群れの中にいてはおそらく生きてはいまい。

「魔獣どもに見せてやれ。帝国軍の力を！」

「――了解っ」

最後の一兵まで戦うと意気込むクルー達。それでも、彼らは蚊帳の外の存在であることに気付いていない。

彼らは早く脱出するべきだった。《雲鯨》もまた、《虎砲改》と同じ魔石を積まれたモノであるのだから。

＋＋＋

殴っては襲いかかる機巧魔獣の脚を折り、腕の鎌を叩き割った。

殴っては黒銀の装甲を歪ませ胴を突き破り、頭部の魔石を砕いた。

泥沼の乱戦。１対１００とは言っても近接戦ならば1度に戦う相手は限られている。近くに庇うものがなければ優真は十分に対処できた。

優真の武器は炭化した右の拳だけ。殴る度に拳と腕に無数のヒビ

が入るが、拳は決して砕けはしない。

敵と定めた獲物を狩り尽くすまでは《狼》の拳は砕けない。優真は振り下ろされる鎌に合わせて拳を叩き込み、体当たりには拳をぶつけては機巧魔獣を押し返した。

横槍を入れるように撃たれたレーザーも優真は拳で受け止める。感覚のない拳どころか同じく炭化していた肘から下までの腕までも赤熱化し、優真は呻き声をあげた。

でもそれだけだ。優真は吼えながらレーザーさえも殴り飛ばし、続く機巧魔獣のレーザー攻撃は左腕を振るい銀の燐光で相殺。

2度目はない。《魔導砲》に続き、優真は機巧魔獣の主力である2つの技を『理解』し、これで飛び道具を完全に封じた。

それは、《雲鯨》の《魔導砲》にも同じことが言える。

乱戦の中で優真は夜を照らす強い光に気付いた。帝国軍の飛行船が対地砲火を仕掛けようとしている。

再び焼き払われる。優真は目の前で機巧魔獣ごと消え去った、青い装甲車のことを思い出した。

「邪魔っ、するなぁあああああああ――――!!」

叫ぶと同時に優真は左腕を振るい手を伸ばした。優真から光が伸びる。左腕に纏った銀の燐光が遠くに広がる。

優真が再現したこの燐光の『元となる力』の正体を彼は知らない。しかし、この力を以て真鐘光輝は《梟》としてあらゆる魔術を打ち払い、叩き潰した。

空を飛べない《梟》は手を伸ばし、守る為に翼を広げ、あらゆる脅威を叩き潰す為に打ち払うのだ。

優真もまた片翼の銀の光を大きく広げ、《雲鯨》の砲撃を1度にすべて打ち払う。次の砲撃が来ないのを見ると優真はとりあえず無視した。

『《雲鯨》の変異』がはじまってはいたが、魔獣化にはまだ時間がかかる。優真はそう判断し、先に機巧魔獣を潰すことにした。

片っ端から機巧魔獣を殴り飛ばす優真。機巧魔獣は完全に破壊せず邪魔になるモノだけをぶっとばしては果敢に飛び込み、群れの中を左腕と右の拳を使いかき分けて行く。

彼は勝機を探している。最後の最期まで殴り合っていたら、優真が先に倒れるのは当然のこと。

ここが自分が生き残るかどうかの賭け。かくして。優真は賭けに勝った。彼は周囲を囲まれ厳重に守られている1体の機巧魔獣を見つけた。

他のモノとは違い一回り大きくて背中に４枚羽を生やした、頭が２つある変わった機巧魔獣。

指揮官機だ。圧倒的な兵力差を前にして将の頭を狙うのは、兵法だろうが喧嘩だろうが常套手段だ。

機巧魔獣が《マシーナリービースト》と同種のモノならば、頭を潰せば群れとして機能しなくなるはず。そこに一網打尽の機会が生まれることに優真は懸ける。

「うおおっ！」

ここが正念場だ。優真は護衛の機巧魔獣を無視して突撃し、右の拳を突き出して指揮官機を狙う。

それはもう酷使しすぎてヒビ割れ、黒ずんだ腕のようなものであったとしても、優真は《狼》の具現する拳の力を信じた。

対する指揮官機は、余裕を以て優真に対峙する。

――警戒。氷属性、防御術式発動

「……ッ！？」

《氷晶壁》が指揮官機を狙う優真を遮る。次に指揮官機の足元を中心に地を這うように銀色に輝く氷霧が広がった。

《氷輝陣・銀の舞台》の展開。その効果で指揮官機は次々と氷の防壁を周囲に巡らせる。これは間違いなくアイリーンの魔術だ。

指揮官機であるこの機巧魔獣は指揮下にある機巧魔獣すべての情報と同期している。今までコピーされた技がすべて使えた。

アイリーンだけではない。機巧魔獣と戦ったエイリークやアギ、マークやレヴァン、それにユーマのゲンソウ術だってきっと。

「それがっ、どうしたぁ！」

構うことはない。優真は怒り混じりに叫び、左腕を振るう。

アイリーンはユーマが学園で初めて戦った相手だ。《氷晶術（それ）》は知っている。

優真は広げた銀の翼で指揮官機の《銀の舞台》を《氷晶壁》ごと撃ち払い、吹き飛ばす。

指揮官機が驚く気配が優真に伝わった。指揮官機が続けざまに放った《鋼城槌》の巨大円柱は、右の拳で受け止め、殴り返した。

「――！！？」

「……潰せるかよ。そんな真似ごとで」

優真は静かな声で言った。指揮官機は後退しながら迎撃するが、優真はそれを左腕1本で払い除けながら、1歩ずつ歩み寄る。

ストーム・ブラスト。ボルテックストーム。ヒート・ジャベリン。氷弾の雨。氷晶樹。裂風刃。とにかくあらゆる術式をすべて相殺。護衛の機巧魔獣の放った《魔導砲》も足止めにさえならなかった。

それらの技はユーマは身を以て知っている。だから左腕の燐光で打ち払える。

「止められると思うな。《梟》と《狼》を前にしたただのエモノに――」

2度目はない。

優真は暴虐の意思を機巧魔獣すべてに向けた。指揮官機は迫り来る脅威に動けずにいる。

微動だにできず、優真が間合いに入るのを指揮官機は許してしまった。

獣の咆哮と共に放たれる《狼》の拳。《城壁》は近すぎて使えない。指揮官機は咄嗟に《盾》で優真の1撃を食い止めた。

「ぐっ！？　ああ……」

《盾》にぶつかる優真の拳。しかし機巧魔獣に《盾》を使われた

ことが優真の怒りに拍車をかけた。

優真は忘れていない。学園での昇級試験。アギと初めてぶつかったあの試合のことを。

信じろと、守らせろと叫んだあの時のアギの《盾》はこんなモノじゃなかった。もっとあつく、かたかった。

「ああ――」

拳が《盾》を押し始める。同時に優真の右腕と《盾》に亀裂が入る。それでも優真は構わず力を込め、念じる。

砕け、砕け！　砕け！！

あのマガイモノを――壊せ！

壊したいという破壊の願い。これも1種の《現想》だ。想いを現した優真の拳はこれまでにない力を生み出す。

小手先のイメージじゃない。願った想いそのままをぶつける大きな力。

「う……あああああああああ――――――！！」

唸りを上げる叫びは漏れ出した力の一端。優真の拳に込められた

ゲンソウの力は莫大でとうとう指揮官機の《盾》を破壊する。指揮官機が展開する次の《盾》は優真が簡単に左腕で払い除けた。

《狼》が打ち破ったものは《梟》に2度と通じない。優真の力はそういうモノだ。

2度目はない。しかも機巧魔獣はこの優真の2つのゲンソウ術をコピーできなかった。

単に機巧魔獣の腕が鎌であり拳を握れないという理由でコピーしても使えないという理由もあるだろうが、優真が再現した《狼》はただのパンチ、《梟》に至っては魔術でも魔法でもない『できそこないの何か』だった。一方は解析する意味がなく、もう一方は解析しようがかたちにさえならなかったのだ。

しかし。優真は殴り飛ばすだけの拳と、打ち払うだけの燐光を使いこなす。指揮官機を圧倒する力を発揮する。

想いを現す力、それがゲンソウ術の真なる力。闇を狩るモノを再現したこの力を本当に使いこなせるのは、この世界で《梟》と《狼》を知り、最強と信じて疑わない優真しかいない。

追い詰める。指揮官機はもう優真を止められない。優真は拳を以て《狼》を再現する。

牙がなくとも噛みつき、喰らいついて、

噛み千切り、喰い千切る！

これが《狼》。優真の知る爪と嘴を持たない《梟》の相棒にして彼の牙。狩るモノの力。

それでも。機巧魔獣の指揮官機にも群れの頭、指揮官としての矜持があった。ソレは切り札を以て優真を排除しようとする。

《疾風闘衣》。ユーマが使った風属性の複合強化術式。全身を風で纏った指揮官機は姿を消すように高速で移動し、優真の背後を取る。

「っ！？」

不意打ちの鎌の1撃は《ヒート・カッター》。優真は振り向きざまに右腕で受け止めた。高熱の刃が炭化した腕に食い込み赤熱化するものの、《狼》の拳を支える腕は決して折れはしない。

だが。指揮官機の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

バチィ！

「があっ！？」

受け止めた指揮官機の鎌が放電。腕を伝って全身に走る電撃に優真の身体が跳ね上がり、意識が飛ぶ。近接戦において《スタンガン》の不意打ちはあまりにも効果的だ。

次で終わりだと指揮官機は思った。でもとどめを刺そうにも思うようにいかなかった。

優真の腕に半ば食い込んだ腕の鎌が抜けない。

「……終わりだと、思ったか？」

ゾクリとする醒めた声。思わず退こうとした指揮官機は、腕の鎌を優真に取られて下がれずにいた。《疾風闘衣》の力で強引に振り解こうとするも何故か動けなかった。

恐怖だ。指揮官機は倒れなかった目の前のモノにおののいている。

優真の意識が飛んだのは一瞬だ。倒れはしなかった。

この程度、古葉大和ならば倒れはしない。優真はその思い１つだけでその場に踏みとどまっていた。

優真は右腕を払い指揮官機の鎌を弾くと拳を構える。どれだけ傷つき、ボロボロになろうが優真はこの拳を最後まで信じていた。

《狼》を、優真が信じる大和の力を。

「覚悟しろ。俺は――」

決戦の時。

「潰す！」

踏み込んで来る優真に対し指揮官機は《疾風闘衣》を解いた。膨大な風の力を腕の鎌に纏わせ、収束させる。

巻き起こる暴風。この土壇場で指揮官機が苦し紛れで放つのは、これまでコピーした技の中で最強の技。

《旋風剣》の奥義。

旋風剣・昇華――

「遅い！！」

決定的な隙だった。大技で大ぶりな『昇華斬もどき』は剣技でさえなかったのだ。

エイリークよりも遅い斬撃が刹那の見切りができる優真に届くはずがない。

踏み込んだ先より更に大きく1歩踏み込むことで優真は、自分より2回り以上巨大な指揮官機の懐に飛び込み《旋風剣》をやり過ごす。同時に突き出す右の拳。

決着はついた。拳は指揮官機の核である魔石に突き刺さり、そのまま優真は右腕を、魔石ごと力任せに引き抜いた。

＋＋＋

終わった？　いやこれからだ。

ここにいる機巧魔獣をすべて潰すのは。

指揮官機の核を引き抜いた優真は醒めた目のまま、機巧魔獣の群れを眺める。

機巧魔獣はすべて沈黙。動けずにいる。優真が動かないので次の挙動に注目しているようだった。

反撃か退却か？　どうしたらいいのかわからないのだ。頭を潰されて動揺していると優真は感じた。

あとひと押しで機巧魔獣は戦意を失う。２度と抵抗されないよう心をへし折る気でいた優真は、何か手はないかと考えた。

手段を選ぶつもりはなかった。すべて叩き潰すと決意し、甘さはもう捨てたのだから。この時の優真の表情は、《梟》が狩りをはじめる時のそれにどこまでも似ていた。

冷徹で冷酷。今の彼ならば１度敵と定めた相手に凶悪な手段さえ平然と選びとる。

「――ああ。そういえば」

優真は右腕に突き刺さったままの魔石を見て思い出した。『まだ使っていない力』があったことに。

自分の意思でまともに使ったことはないが、試す価値はあると優真は思った。

丁度いい。見せつけてやろう。優真は右腕を掲げ、機巧魔獣に指揮官機の魔石を翳して見せる。

指揮官機は自爆しなかった。優真が突き刺したままの魔石はぼんやりと赤く輝いており、それは核がまだ生きていることを示している。

「見ろよ。魔獣ども」

討ち取った将の首を晒すような仕打ちに場の空気が変わったのを優真は感じた。

肌を刺す空気が痛い。優真は今、機巧魔獣の怒りと憎悪を一身に受けている。

今だ。ここで絶望へ突き落とす。優真は念じる。

喰らえ、と。

３－１１ｃ　闇を狩るゲンソウ　３（前書き）

優真から再びユーマへ

奥義戦闘開始。これが少年の、今持てるすべての力

立ち塞がるのは？

3－11c　闇を狩るゲンソウ　3

＋＋＋

機巧魔獣とは何か？

創った本人に訊ねたならばこう答えるだろう。道具だと。

魔人が創る高純度の魔石、その魔力で動く眷族のようなモノ。厳密には生物ではない。

だけどイキモノだ。それは間違いない。

機巧魔獣には感情がある。《魔導砲》でモノを破壊した時に喜び、ヒトを鎌で切り刻むのを楽しむ。仲間を破壊されて悲しむかどうかはわからないが、指揮官機の核の魔石を生きたまま引き抜かれ、晒し物にされた時は確かに怒りや憎しみを優真にぶつけ感情を現した。

決して無機質な兵器ではなかったのだ。仕様なのか欠陥なのか、それはわからない。

機巧魔獣はイキモノだ。間違いない。だから思い知ることになる。ソレらは恐怖というものを知らなかっただけで感じることができた。

優真という手段を選ばなくなった少年は知っている。自分だけじゃない。相手の感情までもコントロールできるのならば、それは武

器になるということを。

――喰らえ

突き刺され、掲げられた魔石が声にならない悲鳴を上げる。辛うじて生きているといった感じでぼんやりと赤く輝く指揮官機の核はいきなり激しく発光した。まるで激痛に苦しみ呻き声を上げるよう。

優真が自分の意思で『この力』を使うのは2度目だ。エイルシアに禁じられた為に行使することも鍛えることもしなかった（あまりに特異な為に仕様が無かったともいう）が、制御不能なはずの力はいざ使ってみると気持ち悪いほどすんなり従った。

正しい扱い方だったのか、それともただ『飢えていた』のかはわからない。

魔石の発する禍々しい光を奪う。

突き刺した腕がそれを吸い上げる。

優真が喰らうのは、指揮官機の生命力たる魔力。

生きたまま喰われている。すべての機巧魔獣は核だけとなった指揮官機の絶叫に機械の身体をガタガタと震わせた。止めようとすることもできない。機巧魔獣はなぜ優真を恐れていたのかはっきりと気付かされた。

《魔力喰い》。魔力を扱うものすべての天敵。

彼を前にすれば例え魔人でさえも餌食、えさとして喰われるモノでしかない。

やがて。指揮官機の魔石から光が失われただの石となった。石はそのまま砕け散り、砂の海に消えた。

本当ならば演技でも恐怖を煽るように嗤いたかったがそんな余裕はない。優真は右の拳を真上に掲げた、指揮官機の魔力を喰らった状態のままで言った。不快そうに。

「……不味い」

じゃあ、他も同じか？

ゾッとしない一言に機巧魔獣は本能的な恐怖に襲われた。金属の軋む悲鳴を上げる。

あまりに煩いので顰めた顔のまま優真が1歩踏み出すと、絶対の捕食者が牙を剥いたとすべての機巧魔獣が同じ思いを抱く。

アレの前から今すぐ逃げたい。

いとも簡単に自爆する機巧魔獣が生に執着し本能に従った。生きたい。アレに喰われたくない。我を失い優真から離れようと一斉に逃げ出す機巧魔獣たち。

指揮官機という頭を失ったソレらに戦術的な撤退はありえない。敗走というよりも潰走。優真を中心に這這の体で、一目散でバラバラに散った。

生き残る為に。喰われない為に。中には王国側へ逃げ出した機巧魔獣もいる。優真はそれを見逃さなかった。

『罠』はもう、寡黙で忠実な彼の精霊が仕掛けている。

「逃がすと思ったか？」

優真は言った。魔力を喰らった時の『味』に胸糞悪い思いをしながら。

本当に不味かった。かつて喰らったラヴニカ（あるいはエイルシアだが、彼にその時の記憶はない）のそれとは比べ物にならない。「あれは甘かった」と普段では考えもしない下品なことを考えるほど。

思い付きでするものじゃなかった。嫌な気分になった優真は今後一切《魔力喰い》は使わないと誓った。

だけど魔力で動くモノにとってこれほど効果的な脅しはない。機

巧魔獣の心をへし折った。優真はこれで余計な反撃や妨害を気にすることなく大技に集中することができる。

優真は念じる。本当に最後の力だ。

機巧魔獣を1体も漏らさず破壊するには、すべてを出し切るしかない。《梟》や《狼》、《魔力喰い》だけではなく、彼のもうひとつの力までも。

《精霊使い》の力を。その為に優真はもう1度『切り替わる』。滅ぼす為に。

《全力》を超えた《本気》の戦い。持てる力をすべて晒し、搾り尽くして尚も戦う必殺技の波状攻撃。

奥義戦闘。

「お前たちに次なんて与えない。……行くぞ、砂更！」

ユーマが砂の精霊に最終トラップの発動を命じると、形振り構わず逃げるすべての機巧魔獣の動きが止まった。

正確にはそれ以上前には進めなくなった。8本もある多脚を必死に動かし前に進もうとするが、尖った脚は元から砂地を走るには不向きであって逆に砂の中にずぶずぶと埋まる。更には流されてうしろへと引き寄せられていく。

《砂縛陣》。地属性の大規模捕縛術式。

ユーマの使えるものの中でも最大級の術式は、展開範囲の広大さに特徴がある。例えば皇帝竜事件の後、ユーマはエイリークや報道部部長に訊ねられてこう答えている。

『……精霊の、アンタの力なら面倒なことしなくても十分勝てたんじゃないの？』

『学園の半分を吹き飛ばしたり砂漠化したりして生徒会の派閥同士が争うきっかけを作ってもいいならね』

『……本気出せば学園を半分吹き飛ばせるなんて本当？』

『風葉で半分。砂更がもう半分を砂に変えるから学園は崩壊です』

その根拠が《砂縛陣》なのである。故に学園では滅多なことでは使えず、最大展開することは1度もなかった。

今回は周囲に気を配る必要もなく十分に『時間を稼いで』陣を練り上げている。縁の地である砂漠にいて強化された砂更の魔力もあり、ユーマは半径キロメートルを優に超えるトラップを創ることができた。

《砂縛陣》は蟻地獄と地盤崩壊で起きる流砂の2つの性質を持っている。砂漠の海にできた超巨大なすり鉢に呑み込まれた百体もの機巧魔獣は、足掻けば足掻くほど砂に脚をとられ中心へ向かい滑り

落ちてゆく。逃げられない。そして逃がさない。

機巧魔獣は今、ウスバカゲロウの幼虫の巣穴に落ちて喰われまいとしている蟻やダンゴムシとそう変わらない。身体を半ば砂に埋めて流砂に引き摺り落とされまいと必死にもがいている。

そこに怯えも恐れもない。機巧魔獣は自分達がただ狩られるモノだと思い知らされ、狂乱していた。

許すな。許すな。許すな。許すな。

壊せ。壊せ。壊せ。壊せ。壊せ。

ユーマはとっくに魔力の狂気に侵されている。指揮官機の魔力を喰らう前からの話だ。自爆した機巧魔獣や《魔導砲》によって周囲の砂漠は有害なほどの瘴気が充満している。

それでもユーマは正気を保っていた。むしろ利用するつもりであえて逆らわず狂気に侵されていたりする。殺戮と破壊の矛先を機巧魔獣に絞り込むことで自身をコントロールし、《狼》の拳に威力を上乗せしたりもしていた。

《砂縛陣》から離れたユーマはひたすらにイメージを溜める。破壊の《幻想》を生み出すならば身体も精神を狂気に侵された今の状態が1番いいと何となく思い、それだけの理由で実践した。

機巧魔獣を滅ぼす為ならば本当にユーマは手段を選ばなかった。

「……お前らは」

在ってはいけないモノだ。奪うモノだ。だからユーマは許さない。

誰もが戦った。ただ、守りたくて。

『皆は』。今もきっと。

なのに。あとからのこのこやってきた機巧魔獣が皆の想いを踏み躙ろうとしている。皆の大切なものを目の前で奪い、絶望に突き落とそうとしている。それが許せない。

失ってからでは遅いのだ。ユーマはあとで泣きたくなかった。嘆きたくなった。

泣かせたくなかった。嘆かせたくなかった。――失わせたくなかった。

だから。

「止めてやる。壊してやる！　殴ってでも喰らってでも、どんな手でも使ってでもいい。見せつけてやる！！」

たとえユーマのそれが《幻想》から生まれたマガイモノだとして

も、確かに存在するのだ。

絶望に絶望を叩きつけて相殺させる、災厄の闇を狩るモノは。

ゲンソウの力が増す。《砂縛陣》が周囲にある砂漠の砂までも大量に呑み込み、尚も抵抗する機巧魔獣を力技で押し流した。流れ込んだ砂がすべての機巧魔獣を砂の奈落に落とし、そのまま《砂縛陣》の穴を埋めてしまった。

これでもう機巧魔獣は『次』を躱すことができない。

《砂縛陣》は2段構成の大規模術式。ユーマはもう必殺を超える必滅のイメージを完成している。

生き埋めにした機巧魔獣を前にユーマは精霊の魔力、自らの狂気のすべてを解放。左腕を前に伸ばし拳を握り締める。

発動。大規模殲滅術式。

「爆ぜろ。爆砂陣！！」

起爆装置は風葉によって極限まで圧縮された空気爆発だ。それが地中で炸裂し、一か所に集められた機巧魔獣に自爆による連鎖破壊を起こさせ、最終的に数キロに渡る砂漠から地響きとはいえない轟音を上げて大爆発を起こした。

砂が空まで届く勢いで上空に撒きあげられ、まるでその場に絶壁

が生まれたよう見える。

《爆砂陣》は砂漠地帯の一部を完全破壊した。爆心地を中心に半径数キロの地帯の砂が取り除かれ、埋まっていたはずの《西の大帝国》の都市の地下部分、ユーマが王国の新開発地区で見たような『基礎』を剥き出しにした。そこに機巧魔獣の姿はない。

残骸さえも。今の1撃で百体もの機巧魔獣はすべて滅ぼされ砂塵となった。あとは撒きあげられた砂と共に地に墜ちて自然に還るだけ。

そのはずだった。

「――集え、集え集え集え」

ユーマは止まらない。風葉の魔力を使い風で撒きあげた砂漠の砂すべてをかき集める。

まだ敵がいる。あと2体。空を飛ぶ機巧魔獣が。2隻の《雲鯨》は変異を終えて『要塞級』と呼ばれる真の姿を現していた。

機体の大部分を占める流線型の浮揚体（気嚢にあたる）が鱗のような強固な装甲板に覆われ、浮揚体の『顔』にあたる前面には元となった《雲鯨》の名の通り鯨のような口を開いて牙を剥く。

要塞級の顔に目はない。代わりに額らしい場所に『威力偵察型』とは比べ物にならない大きな魔石が浮かび上がる。推進装置も重装

化に伴い大型化。《魔導砲》の数も倍に増えている。

ただそれだけ。敵がどんな姿になろうがユーマは構いはしない。

余計なことはさせない。先制攻撃で撃ち滅ぼす！

「風よ集いて螺旋を描け！　竜巻よ、砂を喰らいて血肉と為せ！　模造するは砂の――」

地を這う《サンドワーム・ブラスト》では届かない。ユーマは更なるイメージで術式に変化を与え《補強》する。

天へと昇り、獲物を喰らう竜の姿を。それともう1つ。

「喰らえ喰らえ喰らえっ！――呑み込めぇ！」

砂を喰らい続ける巨大竜巻は２００メートル級の巨大な鯨のバケモノまでも2匹まとめて呑み込んだ。同時に竜巻が砂を纏ってかたちを変え、天へ昇るように直立する今までにない巨大な竜蛇となる。

要塞級を逃がさないよう、腹の中に抱え込んだまま。

「バレル、展開！」

それは『砂漠の竜蛇』のかたちをした『砂嵐の砲身』だった。《サンドワーム・バレル》は上空の敵を砂嵐に捕らえた上でガンプレ

ートの射程を伸ばし、超長距離攻撃を可能にする支援術式なのだ。
ユーマは砂嵐の中心で左腕を真上に掲げ、いつの間にか手に戻したガンプレートを構えている。

砂更の力を使って砂漠から探しだしたのだろう。砂嵐をぶつけたくらいで巨大な要塞級を破壊できるとは思っていない。《爆砂陣》と同じく『必殺技』はここからだ。

必殺技とは必中が絶対条件。いくら空を飛ばれても竜蛇が喰らった以上もう逃がさない。

次にユーマが繰り出すのは、小手先と評された自身のゲンソウ術を覆す為に彼が学園で編み出したもの。その名も合成術式。

複数のゲンソウ術を重ね合わせて1つの大きなゲンソウ術を生み出すのだ。未完成の技ながらこれ以上の『対空攻撃』がユーマは思いつかない。

サンドワーム・バレル、フレイム・ブラスト、ボルテックストームの3つの術式を合成し、ユーマは新たな術式を生み出す。術式を1つに纏め上げるイメージはすでに存在する。

風と砂で《現操》した竜蛇は炎と雷を1つにしたイメージ――光を与えられ《幻操》、神格化されて龍となる。

ユーマが《幻創》するのは電光を纏い、輝く炎を吐くという伝説上の白い龍。

《光焔龍》

この龍にユーマが込めた願い、《現想》はただ１つ。

絶望を滅ぼせ！

『白龍の砲身』が天に向かって口を開いた。ユーマは『腹の中の機巧魔獣』に向かってガンプレートを撃ち放つ。

地風雷炎。４属性の複合、３術式の合成。光属性照射殲滅術式。

「灼き尽くせっ、ライフレム・ドラグ・ブラスタァーーッ！！」

閃光。光焔龍は白熱の輝く炎を天に向かって吐き出した。龍の腹の中にいる要塞級に回避する余地はない。

為す術もなく灼き尽くされるだけ。まず１体が光焔の熱線に耐えきれず爆散し、消し飛んだ。

あと１体。しかし。

ガンプレートが光焔を照射できたのは僅か０．２秒。それ以上はユーマの方が耐えきれない。

バキン！　金属板が砕け散る。

「――ッ、くそっ！」

この技が未完成な理由は1つだけ。ユーマのゲンソウ術にブースターが耐えきれず自壊してしまうことだ。

ブースターが試作量産モデルである《レプリカ2》だからではない。複数のゲンソウ術を同時発動どころか合成しようとするユーマのしていることが無茶苦茶だった。

高度な術式はユーマでなくてもブースターがなくては展開を長く維持できない。瀕死の要塞級1体を残し今度は光焔龍が爆散。

龍を形作った大量の砂が一部は燃え尽きて激しい火花をあげるものの、ほとんどの砂がまさに土砂降りで地表に広範囲に降り注いだ。それがユーマの視界を奪ってしまう。

あと1撃、あと少しだったのに。

砂塵に紛れここぞとばかりに要塞級機巧魔獣が反撃に転じた。要塞級は焼け焦がした鱗のような装甲板を次々と真下に向けて落とす。爆撃機の真似ごとをした質量攻撃だ。

要塞級は夜空で暴れ回り、鱗を落として所構わず砂漠の砂山を破壊する。まるで力を見せつけるように。

機巧魔獣には感情がある。個性がある。この要塞級は傲慢な性格をしており、ここまでやられておいて尚、絶対の優位性を疑ってい

なかった。

信じたかったのかもしれない。それは、地を這い蹲るモノとは違うという空の支配者としての矜持。

《光焔龍》は学習した。それで考える。邪魔者を鱗で潰したあとでじっくり解析と自己修復を済ませてしまえば……

「……そんなんで」

「――――!!?」

立ち込める砂塵の真下からの殺意が放たれる。繕った矜持は一瞬で砕かれた。

要塞級は戦慄する。どこにいようが関係ない。

《狼》が再び牙を剥く。

「潰せると思ったか？　――逃がすと思ったか？」

要塞級が反転して逃げ出そうとする気配がわかる。その態度に優真は苛立つ。握り締めた右の拳はあまりの力強さに更にひび割れ、また同時に唸り声を上げる。

それに相棒の《梟》が呼応して左腕の燐光が空に広がっていく。

――ああ。優真は思い出す。あの2人はいつもこうだった。

――届かない？　だったら俺が届かせてやる

――だから行けっ！　大和！！

２人が揃えば不可能はなかった。信じられる。これが優真の抱く最強の《幻想》。

最後の最期まで少年の中に残り、支えてくれるもの。

切り札。

「――っ、あああああああああああ――――――！！」

《梟》は飛べない。だけど真鐘光輝は挑むモノだ。あらゆる手を尽くし、その上で諦めない。

飛べなければ跳べばいい。

優真は手を広げ空へと伸ばす。それからどこまでも広がる銀の片翼を地面に叩きつけ、反動を利用して一気に跳びあがる。

砂塵を突き破り、苦し紛れの《魔導砲》を左腕で打ち払い、要塞級の正面に立ち塞がる。優真は要塞級が自分を直視して怯えるのがわかった。

逃がしはしない。狙うは要塞級の額にある魔石。

「うぅ……らあっ！！」

要塞級の額に張り付くと右の拳を魔石に突き出す。パキッと音を鳴らしたのは優真の拳。要塞級の魔石はあまりにも硬い。

構わない。優真は拳を魔石に叩きつける。殴り続ける。炭化した右腕が先に砕けるなんて優真は微塵も思っていない。

《狼》を名乗る古葉大和は超えるモノだ。どんなに傷つこうがその心は厚く芯は堅い。

彼の拳が砕けるはずがない。

殴る。殴る殴る。

殴る殴る殴る殴る殴る！

殴って、殴りつけて、咆哮し、砕く。

砕いて、突き破り、また拳を叩きつける。咆哮。

壊すまで殴ってやる。優真の発する狂気を受けて要塞級が悲鳴を上げた。

魔石より先に要塞級の心が砕ける。イヤダ、ヤメテと暴れ狂い、要塞級は振り落とそうとするが優真は離れない。離さない。

だからどうした？　すべて潰すと決めた優真は躊躇わない。

それにもう拳しかないから。殴るだけしかできないから。

楽に消してやる武器はもうないから。

慈悲はない。

「――いい加減に、おちろぉぉぉぉ！！！」

その１撃を最後に要塞級は絶望し生きることを諦めた。魔石の核に刻まれた自律思考の術式（プログラム）を自分で焼き切ったのだ。

自殺した要塞級は自爆もせず、ユーマ諸共そのまま墜落した。

＋＋＋

あれからどのくらい時間が経ったのだろう？　わからない。

月と星と、砂の世界で。少年は１人佇んでいた。鈍く輝く赤い光は１つもない。

機巧魔獣は全滅。いるのは空っぽの少年だけ。

少年はボロボロだった。全身火傷まみれの砂まみれ。

特に酷いのが右腕。形だけが残った炭クズみたいなもので、もう一生使えそうにない。

でもこれで王国の脅威はすべて排除したはずだ、これでよかったんだと少年は自分に言い聞かせる。

だけど虚しい。何の達成感も得られない。

守ったわけじゃない。その自覚が少年にはあった。

少年がやったのはただ――

「……帰ろう」

そう思い少年は足を動かそうとして、思い直した。

どこへ？

この世界は自分の世界じゃないのに。

本当の家もなければ家族も、光輝さんや大和兄ちゃんもいないのに。

まして『この俺』は――

「……歩こう」

止まってはいけない。考えてもいけない。そう思った。

ここは沢山の魔石を破壊したせいで魔力の瘴気が濃い。どうにかなりそうだ。

今は空っぽのまま、倒れるまで進もう。

少年はあてもなく、のろのろと夜の砂漠を歩きはじめた。

＋＋＋

少年が歩きはじめて数分経った頃だろう。歩みも遅くそんなに進んでいない。

その時。

パァン

「ぎゃあああああ！」

「……？」

背後から聞こえてくるのは火薬の炸裂する音。発砲音？

それから喚き声。少年は立ち止まり振り返る。すると少年は少し離れた場所でひっくり返っている男を見つけた。

やけに派手な装飾の軍服を着た小太りの中年。指が変に曲がった手を抑え激痛に呻いている。地面にはおそらく儀礼用であろう、単発式の装飾銃が転がっていた。

《新帝国軍》の総指揮官を名乗る中将だった。

どうやって生き延びたか知らないが、さっきは少年を狙って発砲したらしい。

中将は名ばかりの将軍であってこの装飾銃さえも撃ったことがなかったのだろう。狙いを外した上に反動で指を折り、ひっくり返っていた。

少年にすれば全くわけのわからない状況だ。中将は少年に向かって喚いている。

煩い。

「ぁああーーっ！？　痛い。痛い痛い。いたいぃぃ！！　……きさまぁ、よくも」

「……なんだよ。あんた」

「五月蠅い！　まただ。またも私の前に現れ邪魔したな！」

「あ？」

錯乱している？　言いがかりにしても訳がわからない。

「と、惚けるな！！　お、おお覚えてるぞ。その銀色！　悪魔め！　よくもまた私の軍を、機巧兵器をぉ！」

煩い。

ナンダ、コレハ？

「な……なんだその目は？　砂喰いめ、ひれ伏せろ！」

ナニヲイッテルンダ？　コノイキモノハ？

「私は、私はジャファルのような負け犬ではない！　《帝国》を統べる真の英雄だぞ。私は侯爵、帝国貴族だぞ！！」

「お前がそうかよ」

「――ッ！？」

ようやく理解した。今回の争いの経緯は粗方知っている。それで。目の前にいるコレが元凶なのだと。

傭兵を利用し争いを起こし、機巧魔獣を招き寄せたコモノ。

シッテル。アレハ、ツマラナイイキモノ。

ツブシテモ、ツブシテモワイテクルモノ。

空っぽだった少年、優真は中将という些細なきっかけで魔力の瘴

気に当てられ、簡単に狂気に満たされた。

『ユーマ』でなかった。危険だ。存在が歪みはじめている。

「……」

何かなかったか？

優真は思い出して背中腰に左手をやり、短剣を抜いた。そのまま中将に歩み寄る。

身体が重い。頭も痛くて目も霞む。だからゆっくり、ゆっくりと進む。

短剣を逆手に持って。刃の輝きはやけに鈍い。

「……」

「なっ！？　なにを？」

ゆっくり、ゆっくりと進む。

「ま、待て。……わかった。お前に私の権限を一部譲渡してやろう。私達の議会にも参加させるし発言権も与えてやる」

「……」

今の優真の瞳に映るものはない。聞こえもしない。

中将なんてヒト、見えはしない。あるのは煩わしいモノが１つだけ。

「に、2割だ。いや3、4割だ！　……駄目なのか？」
「……」
「じゃあ金か？　女か？　《帝国》か！？　欲しいものはいくらでもやる。だから」
「……」
一体何を見たというのだろう？　中将の悲壮に満ちた絶叫が煩い。
煩い。煩い。煩い。煩い。煩い。
「だからぁぁぁぁぁぁ！！」
「黙れ」
煩い。――黙らせよう。
優真は中将に向かって短剣を振り下ろす。
そして。
ガキィィッ！！
短剣は、見えない何かに弾かれた。
「……？」
「何をしてる？」

彼はいきなり目の前に姿を現した。中将を《盾》で守り、優真の前に立ち塞がる。

青いバンダナを額に巻いたその男は。

「……レヴァン、さん？」

「随分と暴れたな。……でだ。てめぇはまだ満足しないのか？　おい」

レヴァンの少年を見るその目は、どこまでも怒りに満ちていた。

どこまでも『奴』に似ていたから。黙っていられなかった。

「餓鬼が。いい加減にしろよ」

＋＋＋

3－11c　闇を狩るゲンソウ　3（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《次回予告》

少年は守ることを捨て脅威を滅ぼした。だけど間違っていると、立ち塞がった男は少年の過ちを許さなかった。

対峙する2人の前に現れるのは王国を滅ぼす最後の罠。少年を諭した男は、王として1人立ち向かう。

王国と帝国。そのすべてを背負い、愛するものすべてを守る為に。

次回「王の帰還」

『レヴァイア』の名を継ぐその意味。男は最後の《盾》を掲げる。

3－12　最後の罠（前書き）

優真とレヴァン。そして砂漠の王国編のラスボス

3－12　最後の罠

＋＋＋

レヴァンに割り込まれた優真は、怒りに満ちた彼の顔、次に弾かれた短剣と見てぼんやりと考える。

わからなかった。どうしてこの人はアレを庇っているのだろう。

王国を襲撃した元凶の帝国軍、『帝国貴族』をどうして《盾》で守ったのか。

「どいてください」

「させねぇよ」

「敵なんですよ」

「そういう話じゃねぇんだ」

「こいつらが機巧魔獣を。あんな数、下手をしたら王国は！」

「違う！」

レヴァンは叫ぶ。同じやりとりを2度もする気はなかった。

とめたかった。

これ以上少年の振る舞いを見ていられなかった。

帝国軍の成れの果て、機巧魔獣の群れは少年によって壊滅した。
ここにはもう墜落した要塞級以外は砂と瘴気と化した魔力の残滓しかない。

一方的な破壊。繰り出した多くの技は人のなせる業ではなかった。

連続発動した大規模殲滅術式。特に少年の見せた光の龍は《擬似召喚魔術》というゲンソウ術の秘奥に近い。それは《鳳凰術》のロート家をはじめ《世界の記憶》を保有する特殊な家系の人間しか使えなかったはず。

それに夜空に広がった輝く銀の燐光。

《魔導砲》の光を打ち払う翼を遙か遠くから見たレヴァンは酷く動揺した。あの力の使い手を彼は1人しか知らなかったから。『現れた』と彼はつい思ってしまった。

レヴァンは思う。先ほどの戦いといい、今の少年はあまりにも似すぎている。

（……違うだろ。なんで坊主だよ）

落胆に近い思いを抱いた。同時に僅かに期待していた自分に気付いてレヴァンは苛立ってくる。

（あれだけのことをしたのが、なんでここにいるのが『お前』じゃない？）

レヴァンはやるせない怒りに駆られつい優真を睨みつけてしまう。
少年は全く動じず、逆に醒めた目で睨み返した。そんなところもそっくりでレヴァンは怒りを過ぎて憐れにさえ思う。
光を映さない少年の瞳。金色に見えるのはレヴァンの錯覚である。

一方であらゆるものを捨てた優真に迷いはない。機巧魔獣を潰し、要塞級を潰し、それから、
争いの芽を潰す。そのために彼は中将を……

「もういいだろ？　戦いは終わった。だから」
「許すんですか？」
中将を、帝国軍を。
大事なものを危険に晒されたあなたが！

激昂する優真。でもレヴァンにすればそのやりとりも2度目だ。煩わしくて何もは答えない。
優真の怒りなんて些細なことだった。もっと大事なことがある。その為にレヴァンは優真の前に立ち塞がった。
中将を守るためではない。レヴァンが『跳んで』きた理由は1つ。彼は大事なものを守ろうとするすべての味方だからだ。それは決し

て人だけではない。

見失っている優真は気付いていない。今。レヴァンだけが助けを求める『声』を聞くことができた。

「短剣を見ろ」

「……え？」

「ふざけた声出すなよ。いい加減気付きやがれ」

レヴァンの言うことがわからず、怒鳴られてやっと優真は握りしめた短剣を見る。

《守護の短剣》。元々は風森の国宝でありエイリークからの借りもの。エイルシアの短剣と対となる《精霊器》。

この短剣は彼女の『おうち』。

やめてくださいー

とまってくださいー

「……風葉？」

優真には短剣を握る手にしがみつく、ちいさな羽つき妖精が殆ど見えなかった。

身体の下半分を失い半透明どころか『もや』のように薄い。注意深く見て『いる』と感じ取れるのがやっと。

風葉は存在が危うくなるほど魔力を消耗し尽くしていた。弱りすぎて声も出すことも伝えることもできない。

届くことのない声をあげて、風葉は必死に少年の凶行を止めようとしていた。少年が壊れる最後の一線で踏みとどまっていた。

約束を守る為に。

――わたしたちは、あなたに人を殺めさせません

精霊はいつだって少年を護るためにいる。

「わかるか？　そいつはお前を止める一心でくっついてるんだぞ。泣いてるんだぞ」

「レヴァン、さん……」

「なにしてやがる！！」

誰でもない。守るべきものをテメェが捨てるな。

踏み躙るな。そんな奴、この俺が許さなねぇ！

レヴァンの怒りはどこまでも正しい。優真は捨ててしまったものの重さにようやく気付かされる。彼が止めなければと本当に失くし

てしまうところだった。

風葉を大事に思う心。力を振るうために払った代償を優真は少しだけ取り戻した。

虚ろだった瞳に光が戻る。

「……ごめん」

優真は左手にしがみつく風葉の頭を撫でてあげたかった。でも感覚のない炭化した右腕は肘から下が全く動かない。

拳も握りしめたかたちのまま。優真は今になって言いようのない喪失感に襲われる。

壊すだけ壊して、壊れて失っていく。そんな力。優真がやったのは機巧魔獣を壊しただけ。

やっぱり。何も守れなかった。

「剣をしまえ」

「……はい」

それでも最悪の事態は免れた。

レヴァンは消えていく精霊の存在と、歪んでいく優真という少年の存在を救った。

十十十

「納得がいかないって顔だな」
「そんなこと」

正気に戻ったのはいいが未だ険しい顔をしている優真。あれだけ自分を止めておいたレヴァンが中将に《必殺・王様パンチ》をぶち込んだことに納得がいかないらしい。

そう。レヴァンは1発殴って中将を解放した。レヴァンの仇敵ともいえる男だったにも関わらず。

２０年前。私利私欲で軍を率いては道楽で砂漠の民の集落を焼いていた『帝国貴族』の1人。悪魔の怒りを買い、返り討ちにあっておめおめと逃げ帰った小物。それが中将だった。

中将は当時のレヴァンのことなど覚えていなかった。昔のレヴァンは勿論『レヴァイア』ではなく、王でなければ反乱軍にさえ参加していない。『帝国人』に虐げられる砂漠の民のガキの1人にすぎなかった。

昔の話だ。

捕虜にする価値もないと中将を見逃したレヴァン。

中将が「お、覚えてろ」と捨て台詞を吐くと「忘れるな」と言っ

て彼は殴りとばした。

本当にそれだけだった。そのやりとりの意味を優真は最後まで理解することはない。

今の優真は反抗期の少年らしい楯突くような目つきをしている。危うさは大分薄れたが調子が戻るのは時間がかかりそうだった。

レヴァンは優真に少しだけ説明した。

「『帝国貴族』にもいろんな奴がいてな。前の戦で反省した奴もいれば懲りなかった奴もいる。あいつは後者だった」

その中でもあれで中将は過激な主戦派だったという。彼は《砂漠の王国》が怖かったのだ。

「ビビってたんだよ。虐げてきた『砂喰い』が国なんか作って力付けて。亡命先にいつ報復に来るかわかんねぇ、って」

「そんな」

「滅ぼさなきゃ安心できなかったんだよ。坊主、お前もそうじゃなかったのか？」

優真は答えられない。機巧魔獣の群れに空飛ぶ要塞級を前にしたあの時を思い返せばそうかもしれない。

弱い奴ほど攻撃的になるとレヴァン。優真は耳が痛い。

「それにな。本当に悪い奴ってのは慎重で狡猾だ。『深い』ところにいて決して姿を現さねぇ。正直あいつ1人締め上げてもたかがしれてる」

レヴァンは戦を仕掛けた黒幕は中将を唆した別の『帝国貴族』だと思っている。

しかし。それは間違いで本当の黒幕は彼らさえも『覚えていない』。

機巧魔獣の出所を含め、手がかりとなるのは後にオルゾフが『忘れずに』持ち帰った情報だけである。これが大きな波紋を呼ぶのは別の話。

《新帝国軍》は機巧魔獣により壊滅。7年もかけて用意した機巧兵器をすべて失い、集めた1万を超える傭兵もその半数が機巧魔獣によって虐殺された。王国の外で暗躍する『帝国貴族』の中には中将に支援した者も多く、今回の大敗で手痛い打撃を受けてしまっている。

軍を失い主戦派は再起不能に陥った。これで『帝国貴族』が王国に一切手を出さなくなるか一層危険視するかどうかはわからない。

言えることは『帝国貴族』の中でも失墜するであろう中将にはもう、なんの力もない。全て失ってしまった。レヴァンはそんな中将に手を差し伸べるまでの優しさはなかった。

王国を巡る一連の戦い。失うものはあっても得るものは誰も、何も無い。

「奪いあって潰しあって、傷つけあっても。それじゃあ何も取り戻せねぇんだ」

「……」

レヴァンが思い出しているのは失ってきた同胞たちのことだろうか？　彼の視線の先はここではないどこかで、どこまでも遠い。

潰すことしかできなかった優真は、何も言い返せなかった。

戦いは終わった。王国はレヴァンの《盾》のおかげで人的損害は殆ど無かったが怪我人は多く、消費した物資やこれから必要になるだろう医薬品、都市の修繕などのことを考えるとレヴァンは頭が痛い。

「傭兵も放置しとくわけにはいかねぇよな。……あー。とりあえず帰るか」

優真も相当酷いがレヴァンも負けずボロボロだ。包帯代わりに右腕に巻いた帯が血に染まって痛々しい。

レヴァンは誰よりも疲れきっていた。

いくら『サヨコさん成分』を途中補給したとはいえ今日1日で《城壁》をはじめ何百万枚もの《盾》を使っている上に負担の大きい《真・王様ジャンプ（仮）》を使いすぎた反動もある。そんな素振りは決して見せない男であったが。

「近くまでアギたちも来ている。待たせてるから合流するぞ」

「あっ……」

歩き出すレヴァンの一言にはっとする優真。

機巧魔獣と戦っていた時の自分を見られていたかも知れない。そう思うと優真は足を動かせなかった。

今回はやりすぎたなんてレベルじゃない。常軌を逸してることは優真だってわかっている。

自分は普通じゃない。

本当にすべてを晒してしまった。どう思われるだろうか？

『ユーマ』が築いたもの、そのすべてを壊してしまう覚悟を持って力を振るった。だけどやっぱり迷ってしまう。

戻ってはいけない。そんな気がする。

先を歩くレヴァンは途中で優真が付いて来ていないことに気付い

た。見ると優真は俯いて1歩も動いていない。

「……ったく」

レヴァンは面倒そうに反転。ざくざくと砂を踏んで戻ると、優真の頭を遠慮無く右の拳で殴った。

拳骨だ。

――切り替えろ。抱え込むんじゃねぇ

「あ……」

驚いた。その拳は、その言葉は間違いなく彼のものだ。

優真が《幻想》したマガイモノの《狼》じゃない。今では懐かしいその痛みが優真の心を強く揺さぶる。

（大和、兄ちゃん……？）

どうして？

知っている？

戸惑う優真を他所に、レヴァンは声をかける。

「ここで寝るなよ。いいから国に帰るぞ」
「！　離して。俺は！」
レヴァンは優真言い分を聞きはしない。優真の無事な方の手を掴んでは強引に引っ張ってはざくざくと先へ進む。
大きくてかたい手だった。少年の生きた年数以上の時を戦いの中で過ごし、その中で多くのものを守ってきた男の手。
殴るだけじゃない。少年の手を掴むことも、包むこともできる手だ。
「見ろよ」
しばらく引っ張られるままに歩き続けていた優真は、レヴァンが促されるままに前を向いた。
月と星と、砂の世界で。
暗闇の先に光り輝く大きな国がある。
砂漠の王国。
砂漠に住むすべての民の故郷。１人の男が理想を形にした家族の

家。

その光の正体があちこちで打ち上げた照明弾だと優真は知っているけど、綺麗だと素直にそう思う。

あの国に住む人達の力強さとあたたかさを知っているから。

「俺たちが守ったんだ。胸を張れ」

お前も誇っていいんだ。優真に言うレヴァンの声は優しかった。

本当はもっと言いたいことが沢山ある。少年に向かってあんな馬鹿の真似をして、救いようがない馬鹿だと、レヴァンは昔のように胸ぐらを掴み罵ってやりたかった。

そうしなかったのは少年が身も心も深く傷ついてることに気付いたからであり、気遣う余裕があったからだ。今の彼だからできる。

大人になった。

少年を見るとレヴァンは昔わからなかったことに気付かされることが多い。それで酷くそう思う。

レヴァンは訊ねた。

「なぁ坊主。仲間を置いて自分を犠牲にして、大事なもんを失くしそうなってまでして、お前は何がしたかったんだ?」

「それは……」
「言えねぇか？」
優真は頷いた。
自分の戦いを省みて、誇らしい気持ちには決してなれなかった。
「……そうか。でも気まずい思いすんのなら最初から1人で突っ走るんじゃねぇ。悪いことしたと思ってんならちゃんと向きあって、頭を下げて謝って、自分の言葉で謝って……それで許してもらえ」
「許す？」
「仲間なんだろ？　だったら怖がるな」
「――！」
心を見透かされたような気がした。優真は驚いてレヴァンを見る。
「レヴァンさん……」
「まずは皆に会って安心させてやれよ。それで互いの無事を喜べ。お前が誰かの為に戦ったというのなら、皆と一緒にいていいんだ」
1人で背負うな。
1人で責めるな。
お前を受け入れてくれる奴は、お前がしたことを許してくれる奴は必ずいる。
なぜなら。
「お前は守ったんだ。よくやったよ」

「！」
「やり方はまずかったがな。今度はうまくやれよ」
「……はい」

――“ありがとう”と言って貰えた。それだけでよかったんだ

（……光輝さん。俺は）

王国を守ったなんて自分からは決して言えなかった。決して褒められることはしていない。八つ当たりのような暴力を振るっただけだったから。

でもレヴァンが「よくやった」と言ってくれたから。優真は救われた気がした。

近くまで来た優真たちを発見したのか。王国側から何かが2人に近づいてくる。

高スピードで走ってくるのはボロボロの《駱駝》。アギ達だ。優真とレヴァンを迎えに来てくれた。

「おーさまー！　ユーマぁーーっ！」

《駱駝》の上から叫ぶのは右腕を吊ったアギ。ライトの逆光で優真からは何も見えないがアイリーン、マーク、シュリ、ファルケの5人が乗っている。あとは待機組のようだ。エイリークの姿はない。

「アギ。みんな……」

「ほら。手くらい振ってやれ」

レヴァンがどん、と優真の背中を押す。

押された力が強くてよろめくがなんとか転ばず、優真はぎこちなくアギたちに左腕を振ってみる。

また戻れるだろうか？　学園にいる時みたいに皆と笑いあえるだろうか？　そんな不安を抱きながら。

「アギー！」

優真は大きな声で親友の名を呼ぶのだった。

でも。

次の瞬間。優真の不安は粉微塵に砕け散る。

優真の声に気付いたアギが必死な声で叫び返している。

「――え？」
「逃げろーーっ！　王蜥蜴だぁーーーーっ！！」

その声に振り返れば。

優真は巨大な砂山が『３つ』も迫っているのを見てしまった。

＋＋＋

中将に協力することで『帝国貴族』を利用した魔人の男がいた。
彼の目的は今は《砂漠の王国》と名を変えた《西の大帝国》の滅亡。
その為に男はいくつかの策を弄した。

１つ目は《新帝国軍》への介入。破棄同然の機巧兵器を改修して１万を超える傭兵を集めてやった。

傭兵の中には《炎槍》、《氷斧》という規格外がいたにもかかわらず王国軍は学生の力を借りて奇襲に対応し善戦。中将の戦下手もあって人間同士の潰し合いはうまくいかなかった。

２つ目は機巧兵器の細工。帝国軍を囮にした機巧魔獣による《転移》強襲と本隊での制圧、２段構えの作戦。

しかし思わぬ妨害にあって機巧魔獣を王国に３体しか転送できず、エイリークたちの活躍に阻止される。更には帝国軍の《虎砲改》に偽装した先行部隊はレヴァンとミハエルが、要塞級を含めた本隊は

優真に潰されて失敗に終わった。

本当はこの２つ目の策までで王国は墜ちるものだと男は踏んでいたのだが、実際はそうはいかず逆に彼はオルゾフというイレギュラーの介入により深手を負い撤退せざる得なくなった。男はこうしてオルゾフを恨みつつ『ゲーム』に敗北した。

遊びだった。どの道すべてを滅ぼす気でいたから。男にとって王国、いや『レヴァイア』は邪魔になる存在だったのだ。

罠は最初から仕掛けられていた。

＋＋＋

山が迫ってくる。

それに気付いたのは周囲を探る為《暗視》できる望遠鏡を手にしていた《遠見》持ちのシュリだった。

救援に来たものの、優真の力を見て呆然とすることしかできなかったアギ達。遙か遠くから『王蜥蜴』が突進してくると気付くと流石にまずいと思い２手に別れた。砂地でもマシンのホバー走行で高速移動できるチェルシーが別行動をとって王国へ危機を伝えに行き、アギ達は先行して優真の元へ『跳んだ』レヴァンを追いかけたのだ。

『王蜥蜴』は全長８０メートルを超える化物。その巨体の割に動きは素早く、特に砂中を潜行するスピードはこのあたりのどの魔獣

よりも速い。この魔獣の王は破壊された機巧魔獣の『匂い』に釣られ、『ごちそう』を求めて《西の大砂漠》よりやってきた。

だけど『ごちそう』なんてここにはない。あるのは瘴気となった魔力の濃い残滓だけ。その『匂い』は魔獣にとって極上の酒のようなものであり、『王蜥蜴』を酔わせるのに十分だった。

もっと。もっと食わせろ。

飢えた魔獣が餌を求めて向かうのは、砂漠の王国。

「なんだよ。そりゃ……」

どこからきやがった？　ヌシってのは1匹じゃなかったのか？

目前に迫る魔獣の脅威にレヴァンが呆然と呟く。

「王様！」

「ユーマさん！」

優真とレヴァンに合流する《駱駝》。すぐにアギとアイリーンが2人の名を呼んだ。

「おいアギ！　一体どうなってる？」

「そいつは」

「機巧魔獣です。あれは魔石の魔力で動いてましたから」

「――！　そうか」

アイリーンの返答にレヴァンはとんでもないことを見落としていたことに気付く。

魔獣は強い魔力に惹かれる習性がある。そして先ほどまで高純度の魔石を積んだ百体を超える機巧魔獣がいた。その高密度な魔力は周囲の魔獣だけではなく《西の大砂漠》のヌシも呼び寄せるにも十分な餌となったのだ。

「やられた！　まさか帝国の奴ら、これまで見越して仕込んでいたのか？」
「今は時間がねぇ。早く乗ってくれ」
「急いで王国へ避難を」
「駄目だ！」

地下都市への避難は危険だ。下手をすると生き埋めになる。レヴァンはそう判断した。

かつての大帝国の民のようになる。だから。たとえ辛くても王である彼の決断は早い。

「国は……放棄する」
「王様！？」
「何を馬鹿な！」

故郷を捨てることに声を荒げるのはシュリとファルケ。決断を下したレヴァンに迷いはない。

「いいかシュリ。それにファルケ。俺たち砂漠の民は何者にも屈しねぇ。踏み躙られも、虐げられても今日まで助けあい、生きてきた。生きていれば国はなんとでもなる」
「でも！　あの国は王様の！」
「このことは国には知らせてるのか？」
「っ」

淡々としたレヴァンの声に気圧された。これ以上反論できずシュリは頷く。

「は、はい。チェルシーさんが」
「よし。あとはミハエル達やジジイがなんとかするだろう。お前らも早く行け。黒い坊主、悪いが」
「わかりました。……ご武運を」

マークはレヴァンの覚悟を受けてそう答えた。彼はレヴァンが足止めするつもりだと察した。

王としての責任だろうか？　マークはレヴァンの覚悟を止められない。

マークが背負える責任は後輩たちを守るくらいしかない。

「ありがとよ」
「はい。……さあ、行こう」
「先輩！？」
「時間を無駄にしないで。僕らは僕らで今できることをするんだ。……こういうことだってあるんだ」
「わかってる！　わかってるけど！」

アギは王国を守りたかった。マークだってそうだ。でも彼らの鋼も《盾》も、『王蜥蜴』の巨体から王国を守るにはちっぽけすぎた。

畜生。アギは自分の無力に嘆くしかできない。慰める言葉は誰も持たない。

時間がなかった。誰もが絶望から立ち直り、気持ちを切り変えて次に進むことを強要された。そうしなければすべてを本当に潰されてしまう。

次々と王国を襲う脅威を前に誰もが戦った。戦い抜いて、守った。守りぬいた。

そのはずだった。でもそうじゃなかった。

幻だった。

あと数分で3体の『王蜥蜴』の突進が王国の外郭にぶつかる。『王蜥蜴』に悪意なんて無い。ただ餌を求めただけだ。それだけの理由で王国は大打撃を受け壊れてしまう。

すべての戦いが無駄になってしまう。

そんなこと。そんな理不尽を、

『あの2人』が許すと思っているのか？

「あああああっっ！！」

「ユーマ！？」

咆哮にビリビリと空気が震える。誰もが少年を見て目を見開いた。

炭クズの腕に力を込め、拳が唸り声を上げる。左腕からは今までにない銀色の強い光が溢れ出してくる。

まだだ。まだ。もう少しだけ――戦える。

2度目はない。だったら足掻け。足掻け足掻け！

牙を剥け。喰らいつけ。

俺はっ、まだっ、

全部を捨てちゃいない！

優真は抗うために押し潰されそうになった恐怖を捨てた。クリアになった思考で武器を探す。

技もへったくれもない『王蜥蜴』に左腕の燐光は役に立たない。
ヒビ割れた右の拳はいつ砕けてもおかしくない。

あとはガンプレートのカートリッジ。これも属性ＩＭが付与されたブースターだ。焼け石でも使いようはあるはず。

他に、ないのか？

わたしがいますよー。サラっちもですよー

「！　風葉？」

（あなたがあなたのままでいるのなら、わたしたちは……）

「……ありがとう。――アイリさん」

「えっ？」

優真は《守護の短剣》を彼女に向かって投げ捨てた。

精霊のやさしさは、もういらない。

「それ。エイリークに返しておいて」

「！　貴方はっ」

「おい待て！」

「アギ」

《駱駝》から飛び降りたアギに向かって優真は、

「邪魔。どいて」
「っ！？」

仲間を切って捨てた。アギは親友だったはずの少年の目を見て思わず退いてしまう。

透明だった。その狂気はあくまで澄んでいた。アギは寒気さえ覚える。

あきらめない、叩き潰すと覚悟したその目は。

「お前」
「俺は、俺が――」

優真が背を向けて『王蜥蜴』に向かって1歩踏み出したその時。

「だからそれやめろっつてんだろうが！！」

拳骨だ。優真が砂地に沈む。

「……お、王様？」

誰も、何が起きたかすぐには理解できない。

「なに勝手に盛り上がってんだよ。坊主を連れていけ。邪魔だ」
「レヴァンさん！　何を！」
「どうしてそうなんだよ。『お前ら』は」

優真の抗議をレヴァンは無視した。いい加減頭に来る。

自分を切り捨て、犠牲にすることに躊躇いのない馬鹿は1人でいい。それに付き合う馬鹿も1人知ってれば十分だ。

レヴァンには信念がある。

――俺は、絶対にあいつみたいにならねぇ

「諦めんなよ。俺はな。お前らも、国だって誰1人犠牲を出さず全部守る気でいるんだ。勿論死ぬ気はねぇ」

「な、なにを」

無理だ。疑問の目を向ける優真にレヴァンは不敵に笑ってみせる。

「まあ見てろよ。俺はな」

レヴァイアなんだよ。

彼はそう言って1人残り、少年たちを送り出した。

＋＋＋

３－１３ａ　王の帰還　前（前書き）

最終決戦のパーティー結成

レヴァンの対話

3－13a　王の帰還　前

＋＋＋

レヴァンを残して《駱駝》で撤退するアギ達。

輸送車両でもある《駱駝》は、操縦席のある車内に操縦士のアレックスとシュリ、ファルケが乗り込み、装甲車の後部に増設されたキャリーにアギ、アイリーン、マーク、そして優真が乗っている。後部のキャリーでは長い間、沈鬱な雰囲気に包まれていた。

アギは尊敬するレヴァンを今も信じている。それでも、言いようのいない不安とやるせなさが消えることない。

「アギ」

「……なんだよ」

「ごめん」

アギは一瞬、優真に何を言われたのかわからなかった。

王国を守れなかったことか、それとも「邪魔」と言ったことなのか。考えても返せる言葉が「馬鹿野郎」としか思い浮かばない。

なんだよ。あの力は。

なんだよ。その腕は。

なんなんだよ、お前って奴は。

本当は言いたいことが沢山ある。だけど何も言えない。この傷ついてぐったりとした親友が機巧魔獣を食い止めてくれなければ、王国はとっくに終わっていたのだ。王国を守った恩人に謝られる筋合いはない。

居た堪れない。誰よりも故郷を守りたかったのは自分だった。守れなかったのは自分だった。

最後まで王様と、故郷の為に戦いたかった。

なのに。今こうやって退いていることが、心のどこかで諦めてしまった自分に気付いてることが何よりも悔しい。

「ユーマ。お前はよくやった。あとは王様を信じろよ」

「……うん」

優真はもう1度「ごめん」と言った。こんな時でも優しくできるアギの強さを羨ましく思う。

――ああ。俺は最低だ。狂ってる。

優真は思う。情けない。

弱いから。もう力が残っていないから。――諦めが悪かったから。

自分勝手な理由で仲間たちを巻き込もうとしている。

「お願いがあるんだ」

「！　お前」

この場にいる誰もがその一言にはっとした。

アギだけではない。アイリーンも、マークさえも背筋が凍った。

同時に自分の中で燻る何かを刺激されるのを嫌でも感じてしまう。

少年の目が死んでいない。今も物騒な光を宿している。

＋＋＋

王の帰還

＋＋＋

「さーて。どうしたものか」

優真たちの前では見栄を張った。迫り来る魔獣の山を前にしてレヴァンは思案する。

『王蜥蜴』は片目が潰れたやつが1体、それと額に赤い何かが刺さっているやつでもう1体、

そして。正面からはからはわからないがレヴァンと縁のある尻尾を半ばから切られているやつの計3体。正直これらを1人で抑えるのは無謀だとレヴァンはわかっている。

「それでも……やるしかねぇだろうが」

「あらん。王さまったらほんとに1人でやる気？」

「あ？」

いきなり声をかけられた。レヴァンの前に姿を見せたのは、燃えるような赤い髪の女と凍てつく氷の目をした巨漢。

《炎槍》と《氷斧》。

「ねーちゃんと旦那か。なんの用だ？」

「営業よん」

軽い調子で言ったおそらく最強の女傭兵は、この土壇場でなんと自分たちを売り込んできた。

《炎槍》はレヴァンに提案する。今傭兵として自分たちを雇う気はないかと。

「なんだと？」

「これ以上無い援軍だと思うけど」

報酬に期待するわよん、と《炎槍》。

商売上手め。この魅力的な提案にレヴァンは舌打ち。

「なら2人で3体だ。時間稼ぎでいい。頼めるか？」

「……それで？　王さまは何をする気？」

「説明はあとだ。そのくらいやってくれなきゃ俺1人でいい」

「そうねぇ」

不審に思い彼女は相棒と目だけで相談する。相談を受けた《氷斧》はあることに気付いて口を開いた。

「引き受けるのは2体。1人あたり1体だ」

「何？」

「あら。この子って」

「……」

3人の前に現れるのは金髪白ローブの、人型をした砂の精霊。

流石にこれまでの戦いで魔力を消耗しているのか、砂更の姿は半透明に透けて見える。

「お前は坊主の。どうしてここにいる？」

「……」

「あん？　代理だ？　坊主を止めてくれた礼だって？」

「……」

「わかったよ。好きにしろ」

「……」

砂更が参戦することに決まった。これには《精霊使い》である《炎槍》が「どちらも変わってるわねぇ」と感想を持つ。

自分の意志で主人と別行動を取る少年の精霊。それと《精霊使い》でもないのに何故か精霊と意思疎通を図ることができるレヴァン。

（見たところ火燕ちゃんと同格みたいだから下位の精霊よね？　坊やの精霊が離れて活動できるのは……？　契約が切れてる。それでいて坊やに尽くすの？　忠誠心かしらん？）

（それに王さまの力は……『レヴァイア』。ああ。そういうこと）

《炎槍》はレヴァンが『王蜥蜴』を相手に何をしようとしているのか、なんとなく察した。

面白い。前代未聞の奇跡を起こそうとしているこの王は、見る限りその資格と資質を持っている。彼女はそう思う。

分の悪い賭けじゃない。《炎槍》はこれから起きるであろうことにゾクゾクしてきた。

彼女らしく言えばまさに燃えてきたのだ。こうなると相棒である巨漢の斧使いは人知れず溜息を吐くしかない。

「最終戦のパーティー。これで決まりかしらん？」

《炎槍》は全長１０メートルを超える武装術式、《炎樹槍》を展開。燃え盛る大樹を思考操作で豪快に振り回す。

「……《雷槌》が仕損じた魔獣か」

《氷斧》は『王蜥蜴』を見据えると、握った斧の柄に冷気を纏わせて《炎槍》に負けないくらい巨大な戦斧を氷で創る。

「……」

砂更は残る魔力を練り上げ砂漠の砂を操った。

主人の少年を真似して模造するのは、２０メートル級の大型魔獣『砂猿』。

「王さま。いつでもいいわよん」
「ああ。おめぇらに命を預けるぜ。いってくれ！」
「了解！」

《炎槍》が《氷斧》が、砂の魔獣が。まだ遠くにいる『王蜥蜴』に向かい、それぞれぶつかっていく。

最終決戦。

＋＋＋

しかし。

「……やべっ。ブルってきた」

《炎槍》たちが突撃する中。１人になったレヴァンはがくがくと身体を震わせていた。武者震いではない。

本当はとっくに限界を超えていた。体力気力共に空。レヴァンはもう《盾》１枚展開するのも無理なくらい疲弊していたのだ。

目眩と頭痛はゲンソウ術の使いすぎによる脳の負担から。身体が震えるのは恐怖ではなく疲労からくる痙攣だった。彼１人ではもう何からも守ることができない。

「あー。酒も飲んでねぇのに頭いてぇ。腹も減ったが眠てぇ。……サヨコさんに癒されてぇ」

誰もいないことをいい事にレヴァンは独りごちた。まるで目の前で繰り広げる死闘から逃避するように。

傭兵たちはそれぞれ巨大な武装術式をぶつけて、砂の魔獣は体当たりして『王蜥蜴』の勢いを殺そうとしている。しかし相手は８０メートルを超える超大型魔獣。１０メートルサイズの槍や斧でも２０メートルサイズの魔獣もどきの体当たりでさえも、『王蜥蜴』の突進はスピードが落ちるだけで止まらない。

王国の崩壊は徐々に近づいてくる。そんな中でレヴァンは考える。

そうだ。帰ってサヨコさんを抱きしめよう。

レヴァンは妄想に耽る。膝枕もいいが抱き枕は最高だ。

まずは彼女の細い肩を抱き寄せ、頭を自分の胸元に寄せてぎゅーっ。それから彼女の結い上げた髪を勝手に解いて、抱きしめながら髪に触れるのだ。

艶やかで長い黒髪の感触はいつだって飽きない。彼女が自分の背中に腕を回してぎゅっ、と抱きしめ返してくれれば、それだけで幸せになれる。

あとは彼女の匂いとぬくもりを感じながら、そのまま眠ることができたら――

――その前に。やるべきことがあるでしょう？

「……ああ。わかってるぜ。サヨコさん」

実はレヴァンはその花を実際に見たことがない。だけどレヴァンは自分だけの『桜』を心に想い描くことができる。

最愛の王妃を思い出せば、彼女の笑顔を守るためならばそれだけでレヴァンは何度でも力を取り戻せた。

彼女を抱きしめたぬくもりはずっと左腕に残っている。守りたい。

レヴァンは願い、力を手にする。

左手の《盾》1枚。それがサヨコがくれた最後の力。

レヴァンは《盾》を夜空に掲げ、念じる。すると最後の《盾》は眩い光を放ちはじめた。世界を越えてどこにでも届くような、強くて青い輝き。

これはレヴァンが西の果てにあるとある国で、城に住む彼女に「いつか必要になる」と言われ彼女の義姉に教わることになった魔術。奇跡を起こす鍵。

「感謝するぜおちびちゃん。俺は、いい買物をした」

《交信》。それは『声』を聞くことしかできなかったレヴァンに『対話する力』を与える。

「はじめまして、だな。お前にはずっと世話になってたのに挨拶が遅れた。悪かったよ」

聞こえるか？　レヴァンは《それ》に話しかけた。

＋＋＋

7年前。『レヴァイア』と名を改めたその日から彼は不思議な力を授かった。見えないなにかを知覚できるようになり、時折なにか

の『声』が聞こえるようになったのだ。

危ない。助けて。

その声に導かれるままレヴァンが『跳ぶ』と、その先では常に事件が起きていた。都市開発の事故に遭遇することもあれば行き過ぎた喧嘩の最中に飛び込むこともあり、酷ければ人さらいが仕事する場面に出くわすこともあった。

偶然とは思えない。このことをサヨコや彼の舅となる元皇帝（レヴァンは一応婿。今も殴り合うほど仲が良い？）に相談すると、2人は少しだけ驚いて「それは皇族ではない『真のレヴァイア』だから」とよくわからない答えを彼に返した。

予知能力みたいなものだろう。レヴァンはそう割り切ると『声』の正体をよくわからぬまま受け入れた。それからは『声』を聞く度に《蜃楼歩》で事件に介入しては《盾》で国のものを守り、それ続ける内にレヴァンは王であると同時にヒーローのようになった。

実は昔レヴァンが幼少のアギを孤児院の火事から救ったのも、ユーマたちの危機にどこからでも駆けつけることができたのもこの『声』のおかげである。

目に見えなくても必ず傍にいる。王国を守る《盾》の王、レヴァンにとって《それ》は、相棒と呼べる存在であった。

＋＋＋

話かけてみたが返事がない。とりあえずレヴァンは対話を続ける

ことにした。

《それ》に伝えたい事は沢山あった。

「いつもありがとな。お前がいなけりゃ俺はこの国の家族を守ることができなかった」

……。

「こんな時になって礼を言うなんて随分情けない話だが……え？」

そんなことはない。《それ》はレヴァンに答えた。

助けてくれたのはお前だ。守ってくれたのはお前だ。そう言った。《それ》はいつも『声』を聞き入れ、力を貸してくれるレヴァンに感謝した。

感謝を。その言葉がレヴァンは嬉しかった。こんなことならもっと早く話かけてやればよかったと彼は少し後悔した。

でも今は親交を深める時間がない。レヴァンは真剣な顔をして対話を続ける。

「それはお互い様だぜ相棒。……それでだな。今の状況、わかるだろ？」

……。

「都合がいいのはわかってる。でも頼む。力を貸してくれねぇか？」

それはできない。《オレ》は無力だ。

「駄目なのか？　俺の力が足りないせいか？」

力ではない。願いだ。

お前の守りたいという願い。それはどのヒトよりも強い。しかし1人には限界がある。

あの《転写体》がそうだ。破壊を願うなど随分と無理をした。

「坊主のことか？　転写体？　なんだそれ」

《オレ》は無力だ。お前1人の願いに応えるには《オレ》は大きすぎる。

《オレ》は無力だ。お前に声を掛けることしかできない。

《オレ》は『また』、『お前たち』に何もしてやれない。

「……いや。質問にも答えてくれよ」

無念と悔恨。無力に打ち拉がれる声。《それ》は、王国という芽生えた希望が潰えてしまうことに絶望していた。

『王蜥蜴』が迫る。《炎槍》たちも粘るがレヴァンの元まであと1キロを切る。

《オレ》は無力だ。《オレ》は……

「そんなことはねぇ！　お前はずっと俺に力を貸してくれた。一緒に『俺たちの家族』を守ってきたじゃねぇか」

……。

「わかってくれ。お前は1人じゃねぇ。それに守りたいと願ってるのは俺だけじゃねぇんだ」

……本当にそうか？

「なんだと？　ちょっと待て！」

《それ》は口を閉ざす。なんと言おうが今ここにはレヴァンしかいないのだ。

長い時を経て捻くれモノになった《それ》は、レヴァンの言葉を信じる事ができずにいる。

（畜生。俺だけじゃ無理だ）

レヴァンに反応して《盾》が更に輝く。

（誰でもいい。このわからず屋に教えてやってくれ！）

世界を越えてどこにでも届くような青い光が夜の砂漠を照らす。

その光はレヴァンの『メッセージ』。受け取った彼女たちはレヴァンに応える。

ドン！　ドドン！

「！　こいつは……」

レヴァンのいる場所から遥か後方。砂漠の王国から鳴り響く炸裂音。

砲撃ではない。これは……花火だ。

＋＋＋

「キャノンストライカー、ダブルで起動。いっくよーーっ！」

マシンアームの両腕を《虎砲》の主砲である１２０ミリ砲――それをマシンアームに内蔵できるよう短砲身に改造したマルチシリンダー――《キャノンストライカー》に換装したチェルシー。

一足先に戻り『王蜥蜴』の接近を伝えた彼女は、何故か王国の外

郭から砲弾の代わりに花火を打ち上げていた。

チェルシーだけではない。《レアメダル・メカニック》をはじめとする西校の生徒、残った王国軍の兵たちや研究所の技術士たちも次々と花火を打ち上げている。マークが率いてきた《黒耀騎士団》の魔術師は代わりに炎系の魔術を夜空に撃つ。

王国の民は危機を知らされても誰も国を放棄しなかった。今は国の外に出ては王妃であるサヨコと共に皆で王国の運命を見守っている。２０万の民だけではない。ここにはレヴァンに助けられた傭兵たちもいる。

王国からはまだ『王蜥蜴』を確認できない。でも遙か遠くにある青い光はここからでもはっきりとわかった。あの光が王のものだと誰もが理解し、じっと見つめていた。

サヨコの傍にいるミヅルは、《転移門》で速やかに脱出しない彼女たちをどうしても理解できない。

また。今打ち上げてる花火はすべて彼女の敬愛するサヨコの指示だった。

「叔母様。花火なんてどうしてこんなことを？」

「なんとなく。ただあの光を見るとあの人が助けを求めてる気がしたのです」

「なんとなく、って」

ミヅルは絶句。まっすぐに先を見つめるサヨコの横顔に何も言えることができない。

サヨコは確かにレヴァンの『メッセージ』を受け取った。花火は彼への返事なのだ。

「聞こえますか？　私たちはここにいます。私たちはあなたを信じてます」

――あなたが守るというのなら、わたしたちはいつだってあなたを支えます

皆がレヴァンを思い青い光を見つめている。

王国は輝く《盾》のもと、ひとつになる。

＋＋＋

「……おい。聞こえるかよ。みんなの声が！」

……。

《それ》は返事をしない。だけどサヨコたちの花火、声は確かに届いている。

それだけじゃない。青い光に導かれ、レヴァンたちのもとに集ま

る人だっていた。

「レヴァン様！」
「リーダー！」

先頭を走るのは《機巧剣》を担いだミハエル。続くのは精鋭たる3万もの王国軍の兵たち。

レヴァンを「リーダー」と呼ぶ多くの猛者は反乱軍時代からの戦友たち。強行軍で王国に戻る彼らもレヴァンの『メッセージ』を受け取っていた。それでさらに無茶をして、潰れる覚悟で彼のもとへ駆けつけたのだ。

「おめぇら！」
「リーダー。おもしれぇことやってんじゃねぇか」
「帝国軍の野郎が相手じゃなかったのか？」
「へっ。元々『王蜥蜴』とやりあう話だったんだ。こっちがやりがいがあるってもんだ」
「またあいつの尻尾、食ってやろうぜ」

7年経った今でもふてぶてしい仲間たち。

流石に疲弊しきった王国軍を頼るわけにはいかなかったが、直接彼らの声を聞くことができたのが何よりもレヴァンの力となった。

《盾》の輝きが更に増す。

「……馬鹿野郎が」

「レヴァン様。どうしましょうか？」
「よし！　ミハエル、お前が応援団長だ。音頭をとれ。あとは野郎どもと適当に声出してろ」
「はい？」
またとんでもないこと言われた国王付き『元』宰相補佐官の改造人間。
これにはミハエルだけでなく王国軍の誇る歴戦の猛者たちも「はぁ？」それから「なんじゃそりゃ！？」でそのあと遠慮無いブーイング。
「リーダー！　ここまできてそりゃねぇだろ」
「「そうだそうだ！」」
「うるせぇ！　バテバテのおっさんどもが。今のおめぇらでも声くらいいくらでも出せるだろうが！」
「そりゃあ……そうだが」
３万人のブーイングをレヴァンは一蹴。
「なんだよ。『俺たち』を信じられないってか？」
「「「……」」」
「どうなんだよ？」
あーもう。
野郎どもは思いをひとつにしてレヴァンに叫んだ。
「「「勝手にしろ！！」」」
「おう。任せな」

「……はぁ。あなたという人は」

ミハエルは溜息に苦笑。王命で応援団長に就任した彼は仕方なしに王国軍の指揮を執る。

夜の砂漠に野太いおっさんたちの声が轟く（もちろん青年たちもいるが）。彼らの声は応援団長がいるにも関わらず全く揃わないが、誰もが喉を枯らして必死で声を張り上げている。

彼らはずっとレヴァンに声援を送り続けた。

『王蜥蜴』はレヴァンまであと数百メートル。《炎槍》は《炎樹槍》を突き出すと同時に特大の火炎放射を浴びせ続け、《氷斧》は氷の巨大戦斧を何度もぶつけては砕いてを繰り返し、砂更の『砂猿』もどきは真正面から組み付いて踏ん張っている。

3万もの声援を受けたレヴァンは、《それ》にもう1度話しかける。

「なあ。間違ってねぇだろ？　俺たちにはみんながいる。みんなが国を守りたいと願っている」

……。

「お前言ったよな？　俺1人の願いに応えるのにお前は大きすぎるって。でも俺たちみんなの願いならどうだ？　みんながいて、それでもお前は力になってくれねぇのか？」

……駄目だ。それでも。

それでも《オレ》は無力だ。お前たちに何もしてやれない。

「なんでだよ！」

《それ》の言ってることがどこかおかしいのにレヴァンは気付いていた。まるで力になれないと言うよりも『力になっても意味が無い』そう聞こえるのだ。

わからない。レヴァンは初めて向き合った《それ》のことをよく知らないのだ。

わからなければ訊ねるしかない。

「……教えてくれよ。どうして拒むんだ？　一体お前に何があったんだよ？」

《オレ》は……

裏切られた。そして救えなかった。

《それ》は、わかりやすく『記憶』を直接レヴァンに見せた。

＋＋＋

４００年前。かつて西国で栄華を極めた国の名は、今では正しく知るものが殆どいない。人は今も昔もその国を《西の大帝国》と呼んでいた。《それ》はこの国の守護者だった。

記憶。《それ》は大帝国の民を愛し、民もまた国を護り恵みを与える《それ》に感謝を捧げていた

記憶。国には代々《それ》に仕えて《それ》の声を民に届ける巫女がいた

記憶。亜麻色の髪の女。聡明で優れた力を持ち、《それ》と深く心を通わせることができた彼女。最後のレヴァイア

記憶。彼女は《それ》との繋がりを自らの手で断ち切ると、《それ》を国から切り離して《世界》に還した

彼女の独断じゃない。これはすべての民の意思。

《オレ》は裏切られた。

「なっ！？」

驚くレヴァン。まさかこれこそが大帝国が滅んだ原因だというのか？

『風森をはじめ〇〇の加護を受けた国は《世界》に守られる。逆に

〇〇のいない、『〇〇を拒絶した国』は例になく滅びの運命を辿る。《帝国》もそうだ』

信じられない。大帝国の民が《世界》の守りを放棄していたなんて。

……違う。何か理由があるはずだ。レヴァンは見せられてる『記憶』を巡る。

記憶。戦があった。魔人戦争。その前哨戦とも呼ぶべき歴史に記されない戦いに民は魔人に機械で抵抗した。《それ》もまた民を守るため彼女と共に戦った

「そうか。魔力を使わない機巧兵器は魔人に有効だが反面魔法攻撃に対する防御が弱すぎる。そこをお前が盾になって守ってたんだな」

記憶。魔人との戦いで《それ》と彼女は深い傷を負った。彼女たちだけでは数千万の民を守れなかった

「まさかお前らだけですべての攻撃を受け止めていたのか？　そりゃ無茶だろ」

そう。いくら彼女が優れても1人で《オレ》を支えるのは限界があった。《オレ》は、

「大きすぎる、か。なるほどな。体験談かよ」

……。

記憶。幾千の剣を操る黒髪の少年。白を身に纏い白猫を抱いた魔人の少女

この時、一時的にも魔人から民の危機を救ったのは《剣》。そして《裏切りの魔女》。

「！　勇者か」

《剣》のゲンソウは民に希望を見せた。そして《剣》が《聖王国》が喚び寄せた異界のモノだと知ると、民はある決断を下した。

それは。

「大帝国を守る新たな守護者。……勇者の召喚だと！？」

民を守れなかった《オレ》は、切り捨てられた。

「お前……」

声は深い悲しみに満ちていた。《それ》はレヴァンにその後を語る。

用済みとなった《オレ》は《世界》へ強制送還された。その後の民を行く末を《オレ》は遠くからずっと見ていた。

結局召喚の儀式は失敗。膨大な『魔人の魔力』を暴発させて国は

滅んだ。

儀式の贄となった彼女も死んだ。《オレ》声を聞けるものは誰もいなくなった。

民の多くは国と運命を共にして砂となった。だがすべての民が滅んだわけではなかった。

「そいつは、まさか地下の！」

彼女のいない《オレ》はこの世界では何もできない。《オレ》は大災厄を生き延びた民が砂の下で１０年かけて緩やかに絶望し、飢えて死ぬのを見ているだけしかできなかった。

生き埋めになった民を助けるものは誰もいなかった。《オレ》しか知らなかったのだ。《オレ》の声はもう、誰にも届かない。

《オレ》は無力だ。救えなかった。

《オレ》の愛した民は、《オレ》の目の前で滅んでしまった。

ひとり残らず、すべて。

「……待てよ。大帝国の民はすべて滅んだだと？　じゃあ《帝国》は何だよ？　サヨコさんたち皇族もいるじゃねぇか」

レヴァンがふとした疑問を口にすると、《それ》は悲しみから一転して怒りを露にした。

《帝国》は大昔に『帝国貴族』と名乗りを上げた余所者が作った彼らの国。すべて偽りだと《それ》は侮蔑の思いを込めて言う。

それを聞いてレヴァンは、初めてサヨコと出会った時のことを思い出す。

『……なんだよ、貴族って奴らは。自分の国も守れねェ腰抜けなのか？』

『あれは大昔から貴族などではありません。偽りの特権を振りかざして奪うことしかできない愚者の集まり』

「……サヨコさんは知ってたんだな。ほんとは皇族じゃねぇって」

《オレ》と彼女たちの名は『帝国貴族』に国の象徴として使われた。彼らに『レヴァイア』の名を与えられた偽りの皇族たちもまた、《オレ》の知る皇族や民、彼女たちとはなんの縁のないもの。

彼らの奴隷、『砂喰い』と呼ぶものたちだった。

「！？」

《オレ》は、《オレ》の愛した国の、次に生まれた国に失望した。

《帝国》と呼ぶあの国にもしも《オレ》の声を聞けるものが現れたとしても、力を貸すつもりは微塵もなかった。

《オレ》は、遠くから見ているだけ。裏切られた悲しみと救えなかった後悔を抱えたまま。

ずっと。ずっと見ているだけだった。

それから……

３－１３ｂ　王の帰還　後（前書き）

レヴァイアの奇跡。守護者の再臨

3－13b　王の帰還　後

＋＋＋

『王蜥蜴』が迫る。レヴァンまであと数十メートル。百メートルを切った。

「……ちょっと、しんどいわねぇ」

《炎槍》は『王蜥蜴』の突進を《炎樹槍》で受け止めると同時に、柄にあたる部分を砂地へ斜めに突き刺し、突っ張り棒にして踏ん張っている。それでいてずるずると押されていた。

彼女の精霊が宿る炎の翼刀は、自在に飛び回り『王蜥蜴』の脚を切り裂くが、刃は岩のように硬い皮膚までしか届かず微々たるダメージしか与えられない。《氷斧》は《炎槍》と似たようなもの。凍結攻撃も動きまわる『王蜥蜴』の巨体を凍らせるには至らないようで苦戦している。

足留めをする《炎槍》と《氷斧》の2人は本来世界指折りのハンター、魔獣狩りのプロだ。制限なしの殺し合いならばいくら『王蜥蜴』が相手でも互角以上に戦える。しかし今回は条件が悪すぎた。『王蜥蜴』の突進を正面から受け止めるなんて彼女たちにも荷が重い。

「この賭けは負けかしらん？」

《炎槍》はちらっと後ろを見て、微動だににないレヴァンと彼の掲げる《盾》の光に驚いた。

世界を越えてどこにでも届くような、強くて青い輝き。光は王国から打ち上げる花火の『メッセージ』と、王国軍の声援を受けて更に輝きを増す。

これなら届く。あと少し。

「……まだわからないわね」

このままでは退けない。《炎槍》は歯を食い縛り《炎樹槍》の展開に力を注ぐ。

あの少年の手前、それにここにはいないもう1人相棒の目を疑ったことを詫びるためにも《炎槍》は無様を見せるわけにはいかなかった。

「大口叩いて、坊やにあんな戦いをさせたあたいが……引き下がれるわけないのよ！」

レヴァンに協力を申し出たの他でもない。それは機巧魔獣との戦いで化物になるまでの覚悟を見せた少年と、少年を見出した《雷槌》に報いようとする彼女の意地。戦士としての誇りを以て《炎槍》は『王蜥蜴』に立ち向かう。

それでも。『王蜥蜴』は止まらない。

十十十

レヴァン《それ》にはじめて自分を『見られた』。声だけの《それ》の瞳はどこまでも深く、透き通って青く見える。

そんな幻をレヴァンは見た。正直居心地が悪い。

「な、なんだよ」

長い時を経てお前は現れた。《オレ》の嘆きを聞き入れ、受け入れてくれたお前が。

新たな『レヴァイア』よ。

感謝を。

《それ》はもう1度レヴァンに気持ちを伝えた。

お前の興した国をずっと見ていた。

《オレ》がすべてを失った砂の世界で、《帝国》に歪められたあの国で、お前とお前の『家族』の創る『家』をずっと見ていた。

お前たち砂漠の民の気概は、故郷を想い前に進む逞しさは彼女たちによく似ている。

《オレ》は、お前の国に夢を見た。

「夢？」

《オレ》は思う。お前が彼女に代わり『その名』を継ぐものならば、お前たち砂漠の民こそあの国を継ぐもの。《オレ》は信じたい。

彼女たちはもういない。だけど、もう1度よみがえるかもしれないと。

お前の理想は、《オレ》の愛した国によく似ている……

「俺たちの王国があの《西の大帝国》に……」

ヒトだけではない。夢や希望は《オレ》のようなモノにとっても生きる糧となる。夢を与えてくれたお前たちに《オレ》は何かしてあげたかった。お前は《オレ》の嘆く声を信じ、多くのものをその手で守ってくれた。

感謝を。

「そいつはお互い様って言っただろ。『俺たち』が守ったんだ」

感謝を。

《オレ》は、《オレ》の愛する国によく似た、お前たちの国をずっと見ていたかった。

守りたかったよ。

「そこでなんで過去形なんだよ」

……《オレ》は、無力だ。

（結局それか。頼むよ。諦めないでくれ）

だけどレヴァンは慰めの言葉をかけてあげられない。《それ》の受けた傷はあまりにも深い。

裏切られた悲しみの中で、それでも救いたいと願い、何もできず見殺しにしてしまったことにずっと打ちひしがれていた。

レヴァンに王国内で起きる危険を呼び掛けるのは罪滅ぼしのようなものだったのだろうか。

（虫がよすぎた。今のこいつから力を借りようとした俺が馬鹿だった）

（せめて。こいつが悲しみから立ち直ってくれれば）

「お前は……本当に大帝国の奴らが好きだったんだな」

ああ。その通りだ。だが彼女は《オレ》を捨てた。《オレ》はあの時。たとえ魔人どもに殺されたとしても、彼女たちを最後まで守り通したかった。

「……」

《オレ》が弱かったせいだ。《オレ》があの時。深い傷を負わなければ、《オレ》が民を最後まで守り通すことができていれば、彼女は《オレ》を見捨てなかった。

彼女も民も、《オレ》の代わりとなる守護者を求めて召喚の魔術に奔ることはなかった。

「何？」

国が滅んだのもすべては《オレ》が……

「お前」

何かが引っ掛かった。

もしも。もしもだ。

――仲間を置いて自分を犠牲にして、大事なもんを失くしそうなってまでして、お前は何がしたかったんだよ

（そんな自己犠牲の塊のような馬鹿がいるのなら、俺だったら）

――だからそれやめろっつてんだろうが！！

レヴァンなら、殴ってでも止める。

「ちょっとまて。……確認したいことがある。もう1度俺に『あれ』を見せてくれ。頼む」

……いいだろう。

《それ》はレヴァンにもう1度『記憶』を見せた。今度のレヴァンは、自らの手で『記憶』を手繰り寄せることにした。

何かを見落としている。そうレヴァンは思ったのだ。

見せられたものでは駄目だ。《それ》の主観が混じっている。本当の真実を知るには『記憶』の隅々から自分の視点で見つめるしかない。

記憶。戦があった。魔人戦争、その前哨戦とも呼ぶべき歴史に記されない戦い。民は魔人に機械で抵抗し、《それ》もまた民を守るため彼女と共に戦った

記憶。魔人との戦いで《それ》と彼女は深い傷を負った。彼女たちだけでは数千万の民を守れなかった

（ここでお前は死を覚悟した。……わかる。お前は刺し違えても彼女たちを魔人から守ろうとしたんだ）

記憶。亜麻色の髪の女。聡明で優れた力を持ち、《それ》と深く

心を通わせることができた彼女。最後のレヴァイア

（そうだ。彼女はお前のことを誰よりも理解している――お前の覚悟に気付いていた！）

記憶。彼女は《それ》との繋がりを自らの手で断ち切ると、《それ》を国から切り離して《世界》に還した

ごめんね

わたしたちの為に……ごめんなさい

（――！？）

記憶。全身を抉られた上に焼かれ、魔力の浸食に傷の再生が追いつかない死に体。眠る《それ》は彼女の声に気付いていない。

記憶。傷ついた《それ》に触れ、泣いているのは亜麻色の髪の――

彼女の独断じゃない。これはすべての民の意思。

《剣》のゲンソウは民に希望を見せた。そして《剣》が《聖王国》が喚び寄せた異界のモノだと知ると、民はある決断を下した。

もういいの
あなたはもう戦わなくていい
わたしたちは、あなたがいなくても大丈夫。わたしたちのために
傷つく必要はないの

新たな《剣》を喚ぶことができれば、わたしたちは
だから安心してあなたは……

そう。だから《オレ》は……

「――馬鹿野郎がっ！！」

やり場のない怒りにレヴァンが吼える。

畜生。畜生畜生畜生。

畜生！

（お前は、お前たちは……）

「……全部。すれ違ってただけじゃねぇかよ！！」

……違う。

「あいつらは、お前を守りたかったんじゃねぇか。お前に死んでほしくなくて勇者を喚ぼうとしてたんじゃねぇか！」

違う。

《オレ》は裏切られた。

「それだけじゃねぇ。見たぜ。お前、あの時の傷は致命傷じゃなかったのか？　こっちの世界じゃ癒せないほど酷かったんだろ？」

……。

「そんなザマで戦おうとしたんだろ？　守ろうとしたんだろ？　馬鹿野郎。……ああそうだ。おまえのせいだ。お前がそんなだから彼女が、大帝国の奴らは心配したんだ。非情になったんだ。お前の為に彼女は繋がりを絶ち切ったんじゃねぇか！」

違う！

いつからか泣いていた。《それ》もレヴァンも、彼女たちを想い涙を流した。

優しいひとたちだった。優しかったから別れを選んだ。

本当は、離れたくなんてなかったのに。

「畜生。なんでだよ。お前も、彼女たちも、大切に思いあってたじゃねぇか。もう少しわかりあえば、もう少しだけ手を取り合うことができたら、違う未来があったじゃねぇか！」

……ああ。

「馬鹿だよ。お前は間違った。でも彼女たちも間違ったんだ。召喚の儀式だって彼女はお前と力を合わせればうまくいったはずだ。そうだろ？」

《オレ》は……彼女が自らを贄にするのを見たくなかった。

「俺だってそんなの見たくねぇ！！」

《それ》は優しい亜麻色の彼女を想い泣いた。

滅んだ国を想い、愛する民を想い、見殺しにしてしまった民を想って涙を流した。レヴァンは《それ》の悲しみを想い、相棒の為に涙を流した。

気持ちがわかる。レヴァンは１０数年も続いた紛争で多くを殺され、彼もまた多くを殺してきた。

守りたくて、守れなくて、守られて失った、大切なものたち。

――泣けるさ。死んでいったダチを想うのなら、ちゃんと

（だからお前も泣いてやれ。泣くんだ！　彼女たちの為に）

レヴァンもまた、託された未来と奪った命を想い、《それ》の傍で一緒に泣いた。

ずっと。ずっと。

……聞いてくれ。

「ああ。いいぜ」

《オレ》は、彼女たちを愛していた。

叶うならば一緒に、あの国と運命を共にしたかった。

「俺は死にたくねぇな。でも。死んでいったあいつらとも一緒に国を、砂漠（ここ）に未来を創りたかった」

……そうか。

「ああ」

それ以上の言葉は要らない。レヴァンと《それ》は想いを共にする。

彼女も友も、もういないけど。

本当はずっと。

ずっとそばに、

ずっといっしょにいたかったよ。

＋＋＋

レヴァンの意識が現実に戻った。

「なあ。こっち来ねぇか？　ずっと見てるだけじゃやっぱ寂しいだろ？」

……。

「大帝国はもう無いけどな、お前の居場所くらい俺たちが用意する。一緒に暮らそう。だから」

すまない。《オレ》は、行けない。お前の力になれない。

足りないのだ。願いが。想いが。

「足りない？　……おい。まさか」

お前たち２０万人を超える願いを以てしても《オレ》を喚び戻せない。

かつて《オレ》は、８千万もの民の願いに応じあの国の守護者となった。

「なっ！？」

言ったはずだ。《オレ》は大きすぎる。

お前の、お前たちの願いは、《オレ》が応えるには小さすぎるのだ。

わかってくれ。《オレ》は無力だ。守りたくとも、救いたくとも、お前たちには、何もしてやれない。

「そういうことは最初に言ってくれ！？」

絶対量が足りない。《それ》がレヴァンに力を貸せないのはそういうことだった。

レヴァンは重大なミスに気付かされ動揺。《盾》の光は一瞬揺らぎを見せる。

このままでは……

悪いことは続けて起こった。《炎槍》たちが食い止める3体の『王蜥蜴』の内、中央の『王蜥蜴』が抜け出した。

砂更の魔力が尽きてしまったのだ。『王蜥蜴』を押さえ込んでいた『砂猿』もどきが砂に還る。

突進する『王蜥蜴』は正面に立つレヴァンに襲いかかるかたちになる。《盾》を通して《交信》する今のレヴァンにこれを防ぐ手段がない。

「レヴァン様！」

「来るんじゃねぇ！！」

ミハエルたち王国軍を叫び1つで押し留めるレヴァンだが彼に『王蜥蜴』を止める術はない。

気休めでも《盾》で凌ぐなら《交信》を解くしかない。そこまで彼が考えたその時。

レヴァンのうしろから《機巧兵器》が駆け抜ける。

度重なる戦闘にガタガタになった車体。応急処置だけされたエンジンは限界を迎え悲鳴をあげた。

それでも止まらない。『王蜥蜴』に立ち向かうのは、青い装甲をした装軌式装甲車。

古びたその機体の名は、

「あの《駱駝》は！？」

違う！　あれはっ！

《それ》は驚くレヴァンの言葉を訂正し、彼にしか届かない声で叫んだ。

あれは《虎砲》。たとえ武装を外され輸送車両に改修されたとしても、《それ》はかつて共に戦ったあの機体の勇姿を覚えている。

それは脅威に立ち向かう為に生まれ、守る為に作られた《西の大帝国》の剣。

この機体こそ最後の《機巧兵器》。

人を運び物を引っ張ることしかできない、武器を積まれなかったそれは、人を守る為に『剣』を引っ張ることができた。

あるときはおんぼろ舟を引いて、あるときは剣士の少女を連れて。この《機巧兵器》は剣だけなく騎士の馬の役までこなし、何度も王国の敵と戦ってきた。

《駱駝》は走る。騎馬として、剣として『王蜥蜴』に突撃する。

十十十

これが少年たちの最後の戦い。

「いきます！」

《駱駝》の後部キャリーにいるアイリーンは風属性のブースターであるガンプレートのカートリッジを握り締め、《ストーム・ブラスト》を放った。彼女が旋風の反動で飛ばされないようシュリとファルケがアイリーンを支えている。

オーバーブースト。《駱駝》が砂山の段差を利用し、勢いをつけて空を飛んだ。

絶叫するのは操縦士のアレックス。そのまま『王蜥蜴』に特攻を仕掛ける。

「う…わぁぁぁぁぁ！！」

「先輩、ユーマ！　先にいくぜ。おらぁ！」

《駱駝》の上、左腕で手摺を掴み身体を支えていたアギは、折れた右腕を無理やり伸ばして《盾》を突き出す。

シールド突撃！

《駱駝》とアギの体当たりは『王蜥蜴』の弱点である額に直撃。しかしこれだけでは『王蜥蜴』は怯みはしない。アギたちは《駱駝

≫ごとその巨体にはじき飛ばされた。

「アギ！　アイリさん！」
「構うな！　いけぇ！」

だがまだ直前で《駱駝》から飛び出した優真とマークがいる。

「いくよ。ユーマ君」
「……ああっ！！」

宙を舞うほんの僅かな時間に2人は迫る『王蜥蜴』に向かって拳を構える。

マークは鋼に覆われた騎士の拳を、優真は炭化してボロボロの、唸り声をあげる右の拳を。

波状攻撃。《狼》と《黒鉄》のゼロ距離同時攻撃。

「ジオ・インパクト！！」
「あああああああ――――っ！！！」

2つの拳の衝撃は、確かに『王蜥蜴』の額に浸透し脳まで届いた。魔獣の巨体が思わぬ1撃にぐらりと揺れて、僅かに怯む。

均衡は一瞬。飢えに狂う『王蜥蜴』は止まらない。優真とマークもまた、力負けして『王蜥蜴』にはじき飛ばされる。

彼らの悪あがきはそこまでだった。全身がバラバラになってもおかしくないその衝撃。

「っ！！　……まだっ！」

優真は意識を飛ばす直前で左腕を伸ばし、銀の燐光を翼のように伸ばす。

伸ばしたけれど、届かなかった。

＋＋＋

「坊やたち！　あうっ！？」

「……これまでか」

《炎槍》と《氷斧》も武装術式が維持できなくなりとうとう力尽きる。これでもう3体の『王蜥蜴』を止めるものは誰もいない。

レヴァンが押し潰されるまであと数秒。

王を守れと突撃をはじめる王国軍。ミハエルまでも冷静を欠いてレヴァンの前に立とうと駆け出した。

間違っている。ミハエルたち王国軍も、特攻した優真たちも。それに動かないレヴァンも。状況はどう考えても撤退するべき場面だった。

だけど戦おうとした。戦った。

ただ守りたくて。

ああ。ああ！

《それ》は泣いた。《駱駝》と少年たちの姿が、間に合わないとわかっても走りだす王国軍の姿が、《それ》はかつて魔人と共に戦った彼女や民の姿と重なって見えたのだ。

大帝国は滅びても、この砂漠の世界にはまだ、今を変えようとする人の心が残っている。

《それ》の愛した民と同じ心が。

レヴァンだけじゃない。失われたと思ったものが、砂に埋れずまだここに沢山あったことを思い知らされ、《それ》は嘆いた。

すまない。すまない。

《それ》はレヴァンが『王蜥蜴』に潰されるその直前までレヴァンに、砂漠の民に何度も謝った。

レヴァンにしか聞こえない声で何度も謝り、嘆き、泣いた。

すまない。すまない。

《オレ》は無力だ。まただ、また何もしてやれない。

《オレ》は救えない。お前たちを守れない。

すまない……

「諦めんじゃねぇ！！！」

山のような『王蜥蜴』の突進がレヴァンを飲み込んだその時――

＋＋＋

「レヴァン様！？　これはっ……ああっ！？」

眼の前で起きた現象に驚愕するミハエル。レヴァンの掲げた青い光が、彼の叫びに応じてどこまでも広がっていく。

光は近づくミハエルたちを弾き飛ばし、３体の『王蜥蜴』を包み込む。

これが本当に最後の、最後の時間稼ぎだった。レヴァンは《交信》を維持したまま、《盾》の光でだけで３体の『王蜥蜴』の突進を食い止める。

それでも止まらない。レヴァンは左手を突き出し、王国に向かう『王蜥蜴』に押し潰されそうになりながら、《それ》に向かって大声で叫ぶ。

「願え！　お前が願うんだ！」

――！？

「お前はまだ何もしちゃいねぇ！　泣く前に！　嘆く前に！　足掻きやがれ！！」

……。《オレ》に足はない。

「茶化すな！　……信じるぜ。お前の言葉を」

半ば《盾》ではなくなった光では突進の衝撃を殺し切れない。

レヴァンは受け止めたダメージに血を吐き、それでも声を上げる。

「救いたいんだろ？　守りたいんだろ？　だったら、だったら願ってくれ！　俺たちと共に！」

《オレ》は……、

「守るんだ。俺たちが。お前も、お前の願いに応えるんだ！」

「レヴァン様！」

「ミハエル！　野郎共！　声を出せ！　出しやがれ！」

願いが届くように。世界を越えて届くように。

レヴァンは3体の『王蜥蜴』の突進に飲み込まれた。ミハエルたちはひたすらに『レヴァイア』の名を叫ぶ。

王を信じて。王の無事を祈り、叫び続ける。3体の『王蜥蜴』は何も食えないことに我を忘れて突進を続ける。

レヴァンの発する青い光に包まれながら。彼はまだ諦めていない。

《オレ》は……、

「帰ってこい！　お前の家はここだ！　ここにある！！」

《オレ》は……、

「迷うな！　願え！　願って、てめぇの願いを、叶えやがれ！」

《オレ》は、

「お前は、いったい何がしたいんだよ！！」

《オレ》は！

守りたい。

帰りたい！

《オレ》が、皆が愛した世界へ。あの国へ。

帰りたい！！

《それ》は、自身を縛り付けていた柵を遂に自らの想いで振り切った。帰るべき場所を見出し、全速力で《世界》の海を泳ぎはじめる。

《世界》の理、制約が行かせまいと茨のようにまとわりついて《それ》を傷つけるが構いはしない。たとえ半身を千切られたとしても《それ》は前に進むつもりだった。

見ているだけで悲しみ、嘆くことで傷ついた痛みにくらべればなんてことはない。

《それ》は初めて自身の願いを叶えるために力を行使した。天を駆け昇り、空の先にある《世界》の壁、《鏡界》をレヴァンたち王国の願いと、自身の力で突き抜ける。

空の果てから再生の世界に降りる。ここまで決して迷いはしなかった。レヴァンがずっと道を示してくれていたから。

本当に世界を越えてどこにでも届いた、強くて青い輝き。《盾》の光はレヴァンのメッセージをずっと《それ》に伝え続けている。

「そうだ。見えるか？　ここだ。俺たちはここにいるぞ！！」

レヴァンの《盾》は多くの願いと想いを集め青く輝く。王国にいるサヨコたちの、王国軍らミハエルたちの、倒れた優真やアギたち、《炎槍》たち、レヴァンに救われた傭兵たち。それだけでない。

王国の地下都市に眠る大帝国の民の魂はレヴァンたちに手厚く弔われたことを覚えている。彼らも共に願う。

砂漠の地に次々と精霊たちが姿を現した。金髪白ローブの、砂更と同タイプの砂の精霊たち。

それらもまた、滅んだ大帝国の民の成れの果てである。精霊たちもかつて共にあった《それ》を覚えている。だから青い光に向かって願う。

王（それ）の帰還を。

『王蜥蜴』は止まらない。青い光は何も見えなくなるくらい激しい光を放っている。

王国崩壊まであとわずか。

あと少し。レヴァンは光を翳した左手を伸ばす。

「来い。ここだ！　俺の手を取れ！」

《それ》に手はない。だけど光をめがけ、雄叫びを上げてレヴァンの手に向かい必死に伸ばす。

届け。届け届け。

届け！！

レヴァンの手が何かに繋がったその時。

彼と《それ》は、声を聞いた気がした。

おそらく。きっと亜麻色の彼女の声を。

――ありがとう。それに、

おかえりなさい

彼女は《それ》に向かって微笑んだとレヴァンは思った。《それ》は泣いている。

《盾》はかたちを失い、青い光は砂の世界に弾けた。

＋＋＋

王国の外郭の外。結局彼女たちは最後の最後まで逃げ出そうとしなかった。

信じたから。ひとつになった想いを。

王国の民は身じろぎもせず、レヴァンの光を見つめ、誰ひとり目を背けなかった。

光が弾けたその時。サヨコたちが見たものは、目の前で静止する3体の『王蜥蜴』の巨体。

そして。左手を突き出したまま、魔獣に立ち塞がっている彼の背中。

「あなた……」

立ち往生。レヴァンは、力尽きたように動かない。

終わった？　そうじゃない。彼は今、サヨコの声を聞いた。

そうだ。男なんて単純だから。愛する女性（ひと）を守るためならば、

限界も不可能も、いくらだって超えていける。

「――《世界》に問う！」

レヴァンは叫ぶ。まだ足りないのだ。

それは、《精霊使い》が授かることのできる、己を賭けて《世界》に請い願い、力を授かる呪文。

「俺の、俺たちの、守りたいと願う想いは間違っているか？」

変わる。

「違ってるなんて言わせねぇ。応えろ、《世界》！　俺たちに！『レヴァイア』にもう1度、守る力を寄越しやがれぇぇぇ！！」

世界が変わる。

月と星と、砂の世界が。

青く、青く輝いてゆく。

《世界》は答えた。頑なな《あれ》の心を動かした、お前たちの勝ちだと。

どこへでも連れて行け。《世界》は応えた。

レヴァンは湧き上がる力に促されるままに左手を掲げ、叫ぶ。砕けた《盾》に繋がった《それ》を喚び寄せる。

「……いいぜ。帰ってこい。相棒！」

《それ》の正体は再生の世界にて西の地を守る、海の悪魔の名を持つ水を司るモノ。上位精霊４体の内の１体。

Ｌｅｖｉａｔｈａｎ

世界が変わる。《幻創》の海が砂漠を覆い尽くす。

レヴァンに応じ現れたのは、透き通る鱗を持つ巨大な海蛇。海竜と呼ぶにふさわしい。

その大きさは全長８０メートルの『王蜥蜴』を超え、《雲鯨》を呑み込んだ《光焔龍》よりも大きい。海竜は何重にもとぐろを巻い

て、王国全域とすべての民を守るように包み込んでいる。

全長は１０キロなんて下らない。それ以上だ。圧倒的だった。現れた海竜の姿に誰もが呆然とする中、レヴァンは初めて見た相棒に笑うしかない。

「……ははっ。たしかにでけぇ。『大きすぎる』ってマジだったんだな」

海竜の上位精霊はずっと泣いていた。巨大な口から覗く鋭い牙を見せて、巨大な青い目から滝のように涙を流した。

帰ってきた。《オレ》は帰ってきた。それは歓喜の涙だった。

「……感謝を。今代の《巫女》よ。オレは、オレは……ッ！」

「泣くなよ。あとで歓迎会もしてやるからな。――今は守ろう。俺たちの家を」

レヴァンと彼の精霊は、立ち止まったままの『王蜥蜴』を見た。あの巨体が怯えるように心なしか震えている。

海竜は魔獣を高いところから見下ろし、睨みつける。

「薄汚ない『小物』が。ひれ伏せろ。ここがオレの守る国と知っての狼藉か！」

「……なんでそんな高圧的なんだよ」

豹変する海竜の態度に呆れるレヴァン。

「我が牙で噛み砕き、喰らい尽くしてくれる」

「食うなよ」

レヴァンは今更ではあるが、利用されただけの魔獣が蛇に睨まれたようにおとなしくなるのを見て申し訳なく思った。

確かにこの精霊の力は『王蜥蜴』を相手にしても大きすぎる。これでは一発逆転どころか弱い者いじめだ。

それでレヴァンは『王蜥蜴』に慈悲を見せることにした。

「こいつらは腹が減って暴れただけだ。だからな。食わせてやれよ。お前の魔力」

「……よかろう」

1人と1体は互いを見てニヤリと笑う。

「浴びるほど、溺れるほどに。さあ。遠慮なく喰らうがいい！！」

海竜は身体を少しだけ捻り、それだけで逆巻くほどの波を起こした。

魔人に匹敵する膨大な魔力の奔流は、巨大な津波となって3体の『王蜥蜴』の腹を満たし、呑み込み、魔獣の縄張りである《西の大砂漠》まで押し流す。

それだけで王国の脅威すべてを押し流してしまった。

＋＋＋

王国から遙か遠い場所で、力なく幻の海に浮かんでいる少年たち。

ここからでも守護者たる巨大な海竜の姿が見えた。優真はやっとの思いで隣の溺死体（？）に声をかける。

「……アギ」

「……こういう人なんだよ。もう何も聞くな」

すげぇよ。でもあそこまでやられると俺たちやってらんねぇな。

……うん。噛ませ犬だね。

だけど。王国は守られた。報われた。

そのことは素直に喜ぶことができた。

＋＋＋

こうして、一夜にして長い戦いは終わりを迎えるのだった。

海竜に守られながら、津波に流されていく『王蜥蜴』を見ているだけの民たち。誰も口を開くことができない。

「さーよこさーん！」

沈黙する中、最初に声を上げたのはレヴァン。

すべてを守りぬいた王は、やっぱり呆然としていた王妃に話しかけた。

「あなた」

「こいつさ、うちで飼っていいか？」

「……何だと？」

海竜の姿をした偉大なる守護者、上位精霊は新たな契約者の発言に耳を疑った。

「待て。その言い方はまるでこのオレが……ペットだと？」

「名前はあなたが決めてくださいね」

サヨコはあっさりと受け入れた。

長い時を経て帰ってきた、新しい家族を。

＋＋＋

3－13b　王の帰還　後（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

《あとがきらしいことを》

最後の数話が難産でうまくまとめられなかったのですが（戦闘パートは伸ばしすぎてはいけないと反省）、砂漠の王国編もエピローグを残すところとなりました。

優真を再びユーマに戻して、私自身も調子を取り戻したいと思います。

３－１４ａ　宴のはじまり（前書き）

前半は「真鐘くんの日常外伝」、後半はエピローグ導入部

各キャラその後の話は次回

3－14a　宴のはじまり

＋＋＋

人は夢をみる。

それは過去の記憶から生み出す空想でもあれば、理想を描く未来への願望でもある。

「思い出して。自分を失くさないように」

翠の髪をした精霊は少年に夢をみせる。

それは過去の記憶を想起させることで、綻びが生じた少年の存在を繕う魔術。

精霊の加護であり呪縛。

「私があの時、あなたに書き込んだ《精霊使い》の適正はあなたの可能性を縛ることで護る『枷』なのです。どうか無闇に捨てないでください」

同一の存在である風葉を通して夢枕に立つ精霊の風森は、眠る少年にもう1度『枷』を施した。

少年の右腕にそっと触れる。力を求めるあまり自力で『枷』を外してまで戦った、少年のもうひとつの代償。

風森は腕を治す助言を少年に一言だけ告げると、風となって消えた。

深い眠りの中、優真は夢を見る。

＋＋＋

桜道場。

道場とは名ばかりのここは真鐘光輝の住居兼工房であり、古葉大和の居候している家でもある。

夏休みに入って数日後。優真は小さな紙箱を持って道場を訪れた。

道場の居住区の奥へ行き、古臭い二間続きの和室の、その手前の部屋の前で1度声をかける。

「光輝さん。いる？」

中からの返事はない。

「寝てるの？　開けるよー」

縁側の廊下と部屋を間仕切るのは障子の張られた４枚引き戸。優真が引き戸を開けて部屋の中を見てみればそこには、死体があった。

布団の上でうつ伏せに倒れたソレは、確か真鐘光輝という名前があった気がする。

「光輝さん？」

「……」

光輝は顔を上げなければ身動きもしない。

寝てる？　……動けない？

息、してる？

「ちょっ！？　光輝さん、生きてるの？」

「生きてる。生きてるから死ぬ。……死にたい。久々に……」

「はぁ！？」

なんだ。何があった？　優真はこの兄の身に何があったのか想像できない。

まさかまた人知れず事件が？　優真の中で嫌な予感がすぎる。

「しっかりして光輝さん。いったい何があったの」

「優花に」

「姉さん？」

「プレゼントを……」

「……誕生日の？」

「渡して……死にたくなった」
「……」
悶死か。優真はそう診断した。
しかし完全秘密主義のこの兄がカミングアウトするほど弱っているとは。2人に何があったのだろう？　大和はこのことを知っているのか？
姉の誕生日の翌日である今日。優真が見る限り今朝の彼女に何の変化もなかったのだが。
「まあ、いいや。それで光輝さん。その姉さんの誕生日のケーキ、残りを持ってきたけど食べる？」
「……どうせ食べるなら違うものがいい」
光輝は死体のままそう言った。何か作れとも。
「わかった」
勝手知ったる桜井さん（光輝の義姉）家の冷蔵庫。
優真は冷蔵庫の中身が大和に食い潰されてないことを祈りながら戸を開けた。
30分後。

「優真君」
「何？　大和兄ちゃん」
「これはなんだい？」
「パスタ」

食卓のちゃぶ台を囲む3人。優真と光輝の目の前にあるのは野菜たっぷりのスパゲティ。

茹でたキャベツを太めに千切りして水気を絞ったものにエノキ、ベーコンと一緒に炒めて固形コンソメスープをベースに味付けしたもの。やけにヘルシーな1品。

ただし大和の目の前にあるのはキャベツ。

「俺の皿だけ茹でキャベツの千切りが山になっているのは気のせいか？」
「かさましだよ」

そうは言うが、優真と光輝のパスタも麺は半分の量であとはキャベツとエノキで相当かさ増しされている。

「どうせ増やすなら麺にしてくれ。あと肉を」
「うるさいよ。ギリギリの材料で作ったんだ。大体いつの間に兄ちゃん帰ってきてるのさ」
「家の方角から飯の匂いがした」

方角？　このはらぺこ狼はどこから嗅ぎつけてきたのか。

優真は深く考えないことにした。

「これを教わったのは優花か？」
「夏だからダイエットするって。この前なんかうちの食卓に豆乳のカルボナーラがでた」
「ダイエット？　ああ。今度『王子』と『姫』連れて海に行くんだったな」
「水着か。……無駄なあがきを」

いつもの眼鏡を装着した光輝は、大和の話を聞くと微妙な女心に向かって悪態を吐く。

「いいから食べよう。ほら」
「そうだな」
「……キャベツか」

大和の尻尾頭はしおしおにうなだれている。

いただきます。優真と光輝は野菜パスタを、大和は箸で（麺が絡まない）もそもそと『パスタ入り茹でキャベツ』を食べはじめた。

「どう？」
「……キャベツもうまいな」
「馬鹿め」

光輝の悪態を他所に大和の尻尾頭が嬉しそうに揺れた。

古葉大和。のちに《超人》と呼ばれる青年。

味の感想は「うまい」と「食える」の2種類しかない上、食べればとにかく幸せになれる男である。

＋＋＋

腹ごしらえを済ませて一息つく3人。

「そういやコウ。結局ユウのアクセサリー間に合ったのか？」
「……徹夜続けてギリギリだ。できたのは昨日の夜」
「夜？　それじゃ当日の内に渡せたのかよ」
「0時を回る前にな」

それ以上は何も語らない光輝。大和は優真とアイコンタクト開始。

（おい。あの2人は何か進展あったのか？）
（わかんない。今朝見た姉さんはいつも通りだったし、光輝さん死んでたし）
（そうか。……俺の推測はこうだ。コウは深夜にユウに会いに行って誕生日のプレゼントを渡した。おそらくこの馬鹿は誰にも見つからない時間帯を選んだ）
（夜行性の鳥類だもんね。それで？）
（ポイントは2人きりの夜）
（……夜這い？）
（そこまでは。でも確実になにかあったな。俺にはわかる）

「いったい何が」
「それは……きっと2人並んで夜空を見てるとな、その時寄り過ぎ

て2人の肩がぶつかるんだ。はずみで振り向くと2人の顔が思いのほか近すぎて」
「見つめ合って？」
「そして遂に！」
「おお！」
「途中から声に出てるぞ」

ドスの効いた低い声にはっとする2人。目だけの会話を『聞いていた』光輝の表情は眼鏡で隠れてよくわからない。

でも彼の目が金色になってるのは気のせいか？

「冗談だコウ。だから『変わる』な」
「ちっ。俺のことはいいんだよ。じゃあ大和、お前は昨日優花に何やったんだ」
「肉」

大和が即答すると光輝は絶句した。これが高校で1、2を争うモテる男の言動だと思うとムカつくので諸兄を代表して殴りたくなる。

それより光輝は気になることが。

「肉ってお前まさか」
「うまかったよな、優真」
「うん。姉さんはすっごい複雑そうに食べてたけど」

いくら誕生日とはいえ、ダイエットを決意した年頃の少女にハイカロリーな焼肉セットはどうかと思う。

「そういやあの肉、牛や豚じゃなかったよね。猪でもなかったし…

…羊？」
「蜥蜴だ」
「……光輝さん？」

冗談でしょ？　と優真は耳を疑う。大和から貰った肉は１０キロもあるブロックだった。

『肉』の出所を知る光輝は「マジかよ」と疑問の目を大和に向ける。

「大和」
「うまいもんは皆で分け合うべきなんだ。俺はこの夏、それを学んだ」
「……そうか。そうだな」
「肉を食べれることは幸せなことだ」
「ああ」
「「それがなんの肉でも」」

「しみじみしないで説明して！？　俺が食った肉は何！？」

兄たちは一切答えなかった。

「いいからほら。俺たちコウに話逸らされてるぞ」
「いいって何？　家の冷凍庫にはまだ正体不明の肉が……それで夜這いした光輝さんは姉さんに何したの？　抱いた？」
「おい」

話を即切り替えた優真（中３男子）は直球だった。

「キスくらいしただろ」
「黙れ大和」
「でもいくら光輝さんでも何かしたでしょ？　『高校最後の夏』って焦るものらしいし」
「……一応聞こう。何の話だ？」
「〇〇卒業」

優真の暴言に大和がおののいた。

そして光輝がキレた。金の目だけでなく髪まで銀に変わる。

「餓鬼が。表出ろ」
「嫌だね。弟として言わせてもらう。光輝さんは責任取るべきだ」

おお！　今日の優真君はひと味違う。

『いい加減に姉と相棒をくっつけよう同盟』の同志、大和は頼もしそうに弟分を見た。

だけど次の瞬間。大和は優真の背後を見て青褪める。

優真の力説がはじまった。

「いい？　光輝さん。光輝さんと姉さんは幼馴染だ。姉さんは光輝さんの『事情』を知りながらもずっと傍にいる。『幼馴染』だから」
「……それで？」
「光輝さんのせいだ。光輝さんみたいな陰険眼鏡が幼馴染のせいで姉さんはずっと」
「……」

「１８にもなって彼氏なし。男っ気が全くないじゃないか！」
「それが俺のせいかよ」

訂正を入れておきたい光輝。その原因は彼よりもむしろこっそり逃げようとしている大和（美形）にある。

光輝絡みとはいえ無駄にモテる大和と親しい優花は色々苦労している。光輝は光輝で彼女と周囲に軋轢が生じて実害がないよう便宜を図っていたりするのだ。

「光輝さんは光輝さんで姉さんをないがしろにして兄ちゃんとばっかりイチャイチャしてるし」
「妙なこと言うな。……わかった。落ち着こう」

光輝は怒りを自制して髪と目を黒に戻した。

「優真。お前何が言いたいんだよ」
「男同士のぶっちゃけ話。光輝さんは姉さんのことどう思ってるの？」
「どうって……なぁ？」
「姉さんのどこが不満なのさ」

余計なことを言おうとした光輝の視線が、正面に座る優真より『やや上に』逸れた。優真はそれを話をはぐらかす行為だと思い、「話を聞け」と思いっきりちゃぶ台を叩く。

優真は光輝に言った。

「光輝さん。姉さんに告白して、いい加減ちゃんとしたかたちで付

き合いなよ」
「……」
「もう何年も宙ぶらりんで見てるこっちがもどかしい。２人がくっつくのなら、光輝さんが姉さんを襲おうが俺も兄ちゃんも何も言わないし責めないから」
むしろ襲って責任とれ！
そこまで言われた光輝は。
「――と弟君は申してますが、どうなんでしょう？」
「……え？」
気付いた。優真は気付くのが遅すぎた。光輝はちゃぶ台の下にある隠し通路へ避難しようとしている。
居間の入り口の、優真の背後に立つ、昨日１８になられました幼馴染のお姉さまから。
「はっ！」
戦慄が走る。優真は振り返れない。大和も光輝もすでにいなかった。とばっちりを受ける前に撤退完了。
１人だけ逃げそびれた。
「優くん……余計なお世話って知ってる？」

羞恥か怒りか、真っ赤になった優花から放たれるプレッシャーが優真を縛り付ける。これは魔法でも何でもない。優真が弟として生まれ染み付いた習慣。

躾ともいう。

立ち上がれない。優真は無意識に正座している。

「姉さん、違っ、これは姉さんを思って、いやだからっ！」

「優くん！」

背を向けた優花は、ミニスカートにも関わらず脚を振り上げ、軸足を中心に半回転。

このとき。優真は姉の首を飾る細いシルバーチェーンが目が入った。

ああ。今年はネックレスか。

ピンクダイヤかな？　光輝さんどこで手に入れたんだろう？　優真は迫る惨劇を前にそんなことを考える。

裁きの時。紫電一閃。

放たれるのは御剣優花必殺の――

――起きなさい！　優くん！！

＋＋＋

「やめて姉さん！　それはっ、光旋脚だけは、ぎゃあああああああ！！？」

自分の絶叫で目が覚める。

ダメージを抑えようと全身のバネを使い蹴られる方向へ飛ぶ――実際は勢いよくベッドから転げ落ちた。

心臓がバクバクとうるさい。身体がやけに火照って熱い。首。首は無事か？

熱い。それに暑い。エアコンが効いてない？　どこだ、ここは？

覚醒した少年が首筋に左手を当て、状況を把握するその前に。

「こうやってー、起こすんですよー」

目の前をふよふよ飛んでいる羽妖精さんがそんなことを言っている。

「……風葉？」

正気になった。どうやら風葉は今日も《変声》を使って主人を起こしたようだ。

少年は姉の声で起こすのは「心臓に悪いからやめて」と何度も頼んでいるのだが、この風の精霊はちっとも言うことを聞かない。

「わかりましたかー？」

「ええ。……まぁ」

「碌な起き方してないわね」

風葉だけじゃない。いつからいたのかわからないが、少年の様子を見に来たアイリーンとエイリークもいる。

２人はなんだか気まずそう。

「何が、どうなってるの？」

「アンタ、アタシたちが何をしても起きなくて、それで風葉の『声』を聞いたらいきなりうなされたのよ。姉さん、ごめんなさい姉さん、って」

「それからいきなり飛び跳ねて……どんな夢を見たのですか？」

調子に乗ったせいで姉の回し蹴りを受けて飛び出ました。……言えるわけがない。

状況確認。ここは王城の中。部屋の造りを見ると、どうやらアイリーンが使っていたような客室のひとつのようだ。

それでやられたのは寝起きドッキリ。

少年は「お姫様2人に寝顔を晒し」「姉さん姉さん、と寝言で唸り」「ベッドから飛び跳ねて転がり落ちる」という醜態を晒したと理解した。それで男らしくない悲鳴をあげる。

「風葉ぁ！」
「べー、ですよー」

悪戯した風葉はあっかんべー。どうやらおかんむりらしい。

こうして。ユーマも半日遅れで日常に帰ってきた。

＋＋＋
エピローグ
＋＋＋

「（もう何度目かわからない）1番王様！　サヨコさんへ捧ぐ愛を歌います！」
「「「ひっこめー！！」」」

空の瓶が宙を舞う。ナチュラル・ハイと呼ばれる興奮状態で笑いが絶えない。

ごった煮の人の輪の中、レヴァンは速攻で国民の顰蹙を買った。構わず彼はブーイングに負けじと調子の外れた自作のラブソングを披露する。

そしてシャウト。

「すぅぅぅわぁよぉくぅお！　さぁぁぁぁぁーーーーぐぇ！！？」

「シャァーッ！！」

耳障りだとレヴァンの首をキュッと締めるのは、全長１５０センチほどの海蛇。窒息してレヴァンがぶっ倒れると「いいぞにょろすけー！」「げこくじょーだー」と歓声が上がる。

海蛇は２本の角と立派な長髯を持ち、鱗は水色に透き通った色をしている。声援を受けると海蛇はすこぶる上機嫌で本物のスネークダンス（？）を披露して場を沸かせた。

王様ピンチ。このままでは国民の人気ナンバー２の座（１位はサヨコ）を『ペット』に取られてしまう。

不眠不休ではじまった宴は、おわりが見えない。

＋＋＋

実は戦いが終わってまだ１日も経っていなかった。

レヴァンと海竜が『王蜥蜴』を追い払ったあと。負傷者の手当や機巧魔獣に殺された傭兵たちの埋葬など、最低限の戦後処理を済ませるともう夜明け。そんな誰もが疲れきった中、王であるレヴァンは国を挙げての宴を強引に開いた。『ペットの歓迎会』だという。

ユーマが王国に運ばれてから目覚めたのは、その日の昼だった。

改めてベッドに腰掛け、その後の話を彼女たちから聞いたユーマ。

アイリーンはスツール（背もたれなしの椅子）に座り、エイリークは近くの壁にもたれかかっている。風葉は彼女の肩の上だ。

「じゃあ、みんな休んでないの？」

「流石に料理や会場作りとかの準備の間に交代で仮眠とったわよ」

「色々ありましたから」

「そうだね……よく生きてたよな」

アイリーンの言うその色々（王蜥蜴に特攻等）を思い出し、ユーマは自分の酷使した右腕を見た。

肘の下から骨まで炭化して無数のヒビの入ったその腕は、痛覚どころか感覚がまったくない。拳も塊のように固まったまま。２度と指は開かない。

今はうっかり砕いたり折れないよう丁寧に包帯が巻かれ三角巾で吊っている。

「切り落とさなかったんだ。どうせ再起不能なのに」

「馬鹿を言わないでください」

割り切ったことをユーマが言えばアイリーンは少し怒るような声を出した。実は炭クズのような腕に包帯を巻いたのは彼女である。

「まだ治る可能性があるのですから」
「治る？　これが？」
肩で吊った腕を上げて見せる。アイリーンは頷いた。
「上位精霊の力。ユーマさんの腕もレヴァイア様に頼めば」
「精霊？　……ああ。あのでかい竜のことか」
夢じゃなかったんだな。ユーマの反応はどこか鈍い。
「夢か」
「ユーマさん？」
「なんでもない。でもどうなんだろう？　要はあの竜の精霊に、風葉みたいに魔法使ってもらうってことだよね？」
「ええ。気付いてますか？　貴方の右腕以外の傷、全部治っているんですよ」
言われてはじめて気が付いた。ユーマは右腕だけじゃなく《炎槍》の炎や機巧魔獣の攻撃に炙られた火傷のダメージを全身に受けていたはず。
身体はなんともない。被った砂や汗の不快感もなく髪までさっぱりしている。焼け焦げた戦闘衣の着替えは……気にしないことにした。
「これって」
「海竜レヴァイアサンが喚ばれた際に私達は皆幻の海に呑まれましたね。あの時私達は精霊の魔力、その余波の影響を受けたのです」

水を司る上位精霊レヴァイアサン。

その魔力の波動は津波を起こして多くの生命を奪うことも出来れば、海の持つおおいなるめぐみをもたらすエネルギーで多くの命を癒すことも出来るという。

精霊の力は世界を管理するためにあるものだ。上位精霊ともなれば地形さえも大きく変えてしまうだけの力がある。

あの海竜は制約さえなければ幻ではなく、本当に新たな海を世界に創ることだってできる。

「ユーマさんの火傷もそうですし、アギさんは折れた腕がほぼ完治したそうです。他の皆さんの傷も同じく精霊の恩恵を授かっています」

「……ここまですごいと反則だな」

「『王蜥蜴』を押し流す程ですから。……単なる魔力の余波だけでこれです。ゲンソウ術では高度な治癒魔術は再現できませんが、上位精霊の使う魔法なら」

「……」

なんとなく。ユーマは駄目だろうと思った。

おそらく。ユーマの腕を元に戻すことができるのは、

「風葉、どう思う？」

とりあえず精霊のことは精霊だ。ユーマが意見を求めると風葉は、

「つーん」

エイリークの肩にちょこんと座ったまま、そっぽ向いた。

「？　どうした？」

無視。風葉は怒っている。ストライキ中だった。

ユーマはそれがどうしてかわからない。

「なんだよ、お前」

「ユーマさん。わかってないのですか？」

「えっ」

呆れるアイリーン。

「拗ねてるのよ。ほら」

ここで胡乱な目付きをして静観していたエイリークがようやく口を開いた。彼女がユーマに投げ渡すのは、翠の鞘を持つ《守護の短剣》。

ユーマは『王蜥蜴』を前にした時、これを風葉ごとアイリーンに渡して……

「あっ」

「アイリィから聞いたわ。アンタ、また人づてに短剣をアタシに返そうとしたでしょ。なんのつもり？」

「それはっ、その……」

「昇級試験の時はいいにしても、今度は風葉まで捨てるような真似まで」
「……」
言い返せない。あの時はこれ以上風葉を使い潰さないようにと思ってのことであったが、最後まで一緒に戦おうとした風葉にすれば短剣を捨てる行為は裏切られたようなものかもしれない。
「約束、忘れてるんじゃないでしょうね」
「いや。ちゃんと覚えてる」
エイリークが神妙に訊ねれば、ユーマはしっかりと頷いた。
忘れていない。風森の国で《精霊使い》となったユーマが、風葉の『おうち』にと彼女の短剣を預かった時の話だ。
彼女に短剣を返す時。それは少年が還る時だという約束。
忘れていたのではなくて約束を放棄しようとした。ユーマはあの時捨てようとしたものにまた1つ気付かされて、自分の傲慢、愚かさに酷く落ち込んだ。
「……ごめん」
「……」
沈みがちに謝るユーマ。エイリークは仕方がないと溜息を吐く。
思うところがあっても、彼女は決して問い詰めたいわけじゃなか

った。

「反省してるならもういいわ。風葉。アンタもいい加減人の肩の上で拗ねないで向こう行きなさい」

「拗ねてませんよー」

風葉はエイリークに言われてふくれっ面のまま、ふよふよー、と飛んで行きいつものようにユーマの肩にしがみついた。

変わらずそっぽ向いてるけど。

「風葉もごめん。そういやお前、あの時消えかかったけど、大丈夫なのか？」

「にょろっちにー、魔力をたくさん分けてもらいましたー」

「にょろ？」

「王さまに会えばわかるわよ」

それ以上誰も説明してくれないので事情が飲み込めない。

「話を戻そう。……なんだっけ？」

「アンタの腕のこと。どうするの？」

「……うん。一応レヴァンさんに会いに行って話を聞いてみるよ」

「そう。じゃあアンタは王さまを探してきなさい。ついでに《門》の使用許可を直接貰ってきて。アタシはミサとポピラを探して帰り支度を始めておくから」

「え？　帰る？」

意外だったのかきょとんとするユーマ。

「今後のことを話し合ったのです。アギさんはともかく私達は本来立ち寄っただけ。王国が落ち着くまで長居するわけにもいきませんから」

彼女たちは故郷で帰りを待つ人がいる。それなら王国を発つのは早いほうがいいとユーマは納得した。

「いい？　3時間後に王城前に一旦集合よ。挨拶はその間に済ませておいて。……先に行くわ」

エイリークは素っ気無く、言うことだけ言ってさっさと部屋から退出した。

「……。すいませんユーマさん。私もこれで」
「うん。またあとでね」

アイリーンがエイリークのあとを追い、精霊はいるけどユーマは1人になった。

最後のエイリークの態度は気になる。でも一方で仕方ないとも思った。本当ならもっと避けられてもおかしくないのだ。

あの時の優真（じぶん）の戦いを見られたのなら……

「あれ？」

ふとユーマは思い出した。

国の外でアイリーンやアギたちの乗る《駱駝》と合流した時。そこにエイリークはいなかったはず。

それじゃあ彼女はあの時、何をしていたのだろうか？

＋＋＋

一方その頃。

中央広場でケンカするようにはじまった、王様対海蛇のパフォーマンス対決は佳境を迎えた。

大昔の伝統芸を披露する海蛇にレヴァンは大苦戦。国民の反応を見るからに３：７でレヴァンの負けという展開。

水芸なんて反則だ。こうなりゃ脱ぐしかねぇ。

レヴァンが一発逆転の下策を決意したその時。

「ここで真打見参！　いっくよー！」
「あらん。これって賞金でるのかしらん？」
「……俺もなのか」
「あはは」

マシン芸を引っ提げたチェルシーを筆頭に次々と現れる挑戦者たち。

一発芸大会の開幕。王様は勝ち残れるか？

＋＋＋

3－14b　宴の最中に（前書き）

遅くなってすいません。しかもまだ続きます

３－１４ｂ　宴の最中に

＋＋＋

レヴァンを探すユーマはとりあえず城を出ることにした。

日除けを兼ねた砂除けのローブを頭から被って《守護の短剣》をズボンの腰に差す。ソードホルダーのあるガンベルトはガンプレートを失くしてしまったのでなし。第一片腕でベルトをするのが面倒だった。

ずっと不機嫌な風葉をくっつけたまま、ユーマは外へ。相変わらず外の日差しは強い。

だけどユーマは「あれ？」と首を傾げた。

心なしか気温が下がっているような気がする。屋内では気づかなかったのだが外の何らかの力で暑さが緩和されているようだ。

「これもあの竜の影響かな？　さて。レヴァンさんは」

気温が下がった分、人の熱気が上昇しているみたいだ。国を挙げての宴会は騒がしく、どこにいても人でごった煮している。皆が何をやっているのかもよくわからない。

その様子はお祭りというより何かのイベント会場のような雰囲気

でユーマは少し懐かしい感じがした。昔兄に連れられて行ったことのある野外ライブがみたいだ。確か国内最大の音楽ライブの動員数が２０万人だったはず。ちょうど王国の人口と同じくらい。

レヴァンの居場所はすぐにわかった。中央広場。十何万人もの人が集まった中、レヴァンは急ごしらえのステージの上に１人立っている。

王様コールが鳴り響く。でも当の本人が青褪めているのは気のせいか？

「なにやってるんだろう？」

＋＋＋

「……やべぇ」

宴の席で。レヴァンは追い詰められていた。これは王の威信をかけた戦いだった。

その名も一発芸大会。

最初はレヴァンが国民的人気者となりつつある海蛇に「俺のほうがすげぇんだよ！」と言って争い、競いあっていただけのパフォーマンス対決。それがいつの間にか周囲を巻き込んで大事になってしまっている。

そして巻き込まれて、というか飛び込んできた彼女たちが場を異様に盛り上げてしまった。

例えば学生代表のチェルシー。機械の巨腕を使って腕立て伏せからの逆立ち、宙返りとアクロバットな動きを見せたあとは『人間お手玉』でジャグリング。マシンアームのパワーと意外な器用さをアピール。

《レアメダル・メカニック》と協力して行う空中換装をはじめ、奇抜な各種ギミックは技術士や機巧兵器をよく知る者たちを賞賛と批判の両方で唸らせた。「破棄パーツをよくここまで流用した」とか「でも実用性はどうなんだ？」とか。技術士と子供、特に男の子には受けがよかった。

「次は飛行ショーだよ。アレっく君、フライヤーユニット射出！」
「了解！」

チェルシーたち《W・リーズ学園》の学生たちは、ユーマたちと違いしばらく王国に滞在するつもりらしい。技術士の多い彼女たちは実践を兼ねて王国の復旧作業に参加するそうだ。

ユーマはこのあと、王国でチェルシーと話す機会はなかった。

しかし。彼女と彼女の率いる《レアメダル・メカニック》とは、今度はユーマの、そしてティムスの敵として夏期休暇明けの学園祭で再会することになる。

傭兵代表で芸をするのは《炎槍》。炎の槍を振り回す演舞であり演武。彼女は情熱的な舞を見せた。

豪快に躍動する炎。あと胸。円の軌道を描く槍と尻。揺れ動く腰布のスリットから露出する脚も、大胆に肌を晒した衣装の彼女が舞えば扇情的で野郎共が燃え上がる。調子に乗った彼女が腰布に手をかけ、脱ぎだそうとした時が最高潮。

「サービスよん」

と、言った次の瞬間には《氷斧》が彼女を氷漬けにして強制退場させたけど。《氷斧》は今日1番のブーイングを一身に受けた。

「寒っ！　ちょっとレー君、何するの！？」
「……酔ってるな。いい加減にしてくれ」

生き残った傭兵たちは、レヴァンが希望者を募りその多くが王国で労働者として雇われることとなった。

復旧作業だけではない。王国は都市の開発や遺跡の発掘と多くの人手を欲しているのだから。《氷斧》を閉じ込めた時に発見した地下の採掘場だってある。元々傭兵は職にあぶれた体力のあるものばかり。懲罰ではなく雇用だというのだから破格の待遇。

レヴァンは機巧魔獣と共に戦った『戦友』をぞんざいに扱わなかったのだ。傭兵たちもレヴァンと共に戦ったことで彼に畏敬と信頼を寄せている。ましてあの巨大な海竜なんて見せられたら反抗する気にもなれない。

しばらくは国民との間で何かと問題があるかもしれない。でももしかすると、彼らもいずれ王国を家として砂漠の民になるかもしれなかった。

もちろん労働も定住も性に合わないと王国を離れる傭兵もいる。《炎槍》と《氷斧》がそうだ。

レヴァンは機巧魔獣を倒し、『王蜥蜴』を食い止めた2人に「せめてもの礼だ」と王の名で2人の功績を認め、ハンターの資格を取り戻すために口利きすることを提案したが《炎槍》はこれを拒否。「むしがよすぎるわよん」とは彼女の言葉。

1度は敵、王国を襲った身だからという理由らしい。彼女はあくまで傭兵として『王蜥蜴』戦の時に交わした報酬だけを受けとった。それも大した額ではない。

敵だったり味方だったり。最後までよくわからない彼女だった。この先レヴァンが《炎槍》、アニスタリス・エンという女と会うことは2度とない。

《炎槍》が退場したあとも大会は続く。他にも次々と飛び入りで挑戦者が現れるのだが彼女たちに敵う芸達者はなかなか現れない。ちなみにレヴァンは王国代表でしかもトリと決まっている。

時間が経つにつれ盛り上がる観客のプレッシャーが半端ない。ここでスベったら王として終わりだとレヴァンは本気で思った。

「……おい。ここはひとつ、手を組まねぇか？」

窮地を悟ったレヴァンは卑怯にも自分の首にまとわりつく海蛇に協力を仰いだ。

しかし海蛇は「オレに手はない」とこれを無視。

「相棒だろ？　なあ、にょろすけ」

「……」

「って、おい！」

何か気に入らないことがあったらしい。海蛇はするするとレヴァンから離れて壇上に登った。そのまま一匹で芸を披露。

海蛇は口から身体の体積を無視するように大量の水を空に向かって吹き出した。水しぶきをあげる水鉄砲は空気中に大量の水滴を撒き散らして太陽の光を反射。それで大きな虹をつくってみせる。

空に描く光のアート。どよめく観客。

砂漠の国では珍しい鮮やかな7色の光に誰もが目を惹かれた。万人受けするその芸に今日1番の歓声。

その中でただ1人「裏切り者！」と恨みがましく海蛇を睨むレヴァン。対して「フッ」とキメ顔（？）を返す海蛇。

これがキラーパスとなった。

「盛り上がったところでそろそろ参りましょう。本日のオオトリ、王様が満を持しての登場です」
「ここで!?　こいつの次でか!?」
「あはは。目で会話してたじゃないですか『場は温めてやったぜ』『おう。あとは任せな』って」
「ちげぇよ!」

臨時の司会を務める黒衣の魔術師は朗らかな笑顔でスルーパス。レヴァンは海蛇に芸のハードルを高く上げられたまま、１人ステージに立たされた。

期待に満ちた観客の視線が痛い。古くからの仲間は「スベろ!」とマジコールするので本気でイラッとくる。

レヴァンの周りだけ異様な空気が包み込んだ。マズイ。何をしてもスベる。レヴァンは確信した。そもそも宴会芸レベルの彼に海蛇やチェルシーたちを上回るネタなんて持ち合わせていない。

歌?　駄目だ。新曲『サヨコさんバーニンラブ～第２９章～』はとっくに披露している。

踊る?　脱ぐ?　もっと駄目だ。彼の肉体美（?）では《炎槍》に勝てはしない。つーか４０近いおっさんが脱ぐな。

ミハエル!　こんな時「レヴァン様。これを」と助け舟を寄越してくれるあいつはどうした!

＊彼は王命で裏方、雑務をこなしています

絶体絶命。レヴァンはもう『《盾》を使った芸』ができないというのに。

スベる。落ちる。

何が？　って王の威信とか人気が。

蛇（ペット）に負ける失笑王。嫌なフレーズがレヴァンの頭をよぎる。

「王様？」

「あ？　……ああ」

奇跡を。レヴァンは願う。

今こそ伝説の大海竜を喚び戻す以上の奇跡を。レヴァンは笑いの神に請い願う。

「……」

もちろん笑いの神はレヴァンに降りてこない。この世界。神は殺されたことになっている。

「――ッ！」

にょろっと来た。神の代わりに現れたのは相棒。海蛇は再びレヴァン首に巻きついた。

海蛇は何も語らない。だけど『繋がっている』レヴァンには海蛇が何を伝えようとしているのかが手に取るようにわかる。

「……そうか。わかったぜ相棒」

行こう。レヴァンは覚悟を決めた。

＋＋＋

真剣な眼差しを観客に向ける、時折レヴァンの見せる威圧感に国民は息を呑む。ユーマもまた。

「レヴァンさん？」

何をする気だ？　観客の期待が高まる中でレヴァンは叫ぶ。

「１０番！　王様、いきまーす！」

レヴァンはステージから跳んだ。それから『跳んだ』。

《蜃楼歩》だ。レヴァンは皆の前から姿を消した。それから、

沈黙。

「「「……」」」
「「「はぁ！？」」」

逃げた。まさかの王様エスケープに騒然。ドタキャンにも程がある。

期待を裏切られた国民たち。宙ぶらりんとなったこの場を一体誰が仕切って、どう締めてくれるというのか。下手をすると観客が暴徒と化すかもしれない。

問題ない。『代役』は既に海蛇が用意していた。

「あ。レヴァンさんの行方がわかんなくなった。……風葉？」

ユーマは気付いた。捨てられたと不貞腐れていた風葉がいなくなっている。『おうち』に帰った感じもない。

どこへ行った？　ユーマがきょろきょろと周りを見たその時。

「１１ばんー。かぜはー！」

発見。風葉はいつの間にかステージの上にいた。小さいので姿はよくわからないが《拡声》を使って大声を出している。

海蛇に頼まれた風葉はレヴァンの代理として、とっておきの芸を

披露した。

それは、

「かぜはー、げきじょー」

「やめろぉぉぉぉ！」

この場面で誰にも理解されない身内ネタの暴露ネタなんて。イタイ。イタすぎる。

ユーマは絶叫しながら《高速移動》、《天躯》の空中機動コンボでステージに乱入した。

罠にかかった。

風葉を止めるためとはいえ、ユーマはステージの上に立ってしまった。スベりやすい魔の巣窟へ。

「来ちゃったね。それじゃあユーマ君。君は何をしてくれるのかな？」

「マークさん。……え？」

「がんばってくださいー」

罠だ。嫌がらせだ。ユーマに握りつぶされて首だけの風葉が笑みを浮かべている。どこか邪悪。

ユーマは１０万人を超える人の視線を浴びた。レヴァンも味わったプレッシャーが彼を襲う。

マズイ。精霊の援護なし、ガンプレートなしのこの状況。いきなりネタなんて出るものじゃない。

こうなったら。

「１２番。ユーマ・ミツルギ。小話をひとつ。……あの日、友達のＡ君の行きつけの店に１人呼び出された俺は、真剣な顔をしたＡ君に『なぁ、デートってどうやるんだ？』てマジな相談を受けたんです。それで俺がＡ君の為にとっておきのデートプランを企画したその３日後。Ａ君は……」

「やめやがれぇぇぇぇ！」

ステージ上のユーマに酷い形相で飛びかかる青バンダナのＡ君。彼もまた見事に罠にかかった。

「よし釣れた！　あとよろしく！」

バトンタッチ。ユーマはアギのタックルを躱すとレヴァンを探すべく空を駆け、ステージをあとにした。

「てめっ、待ちやがれ、って……え？」

「あはは。それじゃあトリをお願いするね」

１３番アギ。代理の代理、その代理のオオトリ。

「張り切っていこう」

「……マジかよ」

彼が観客の前で披露した芸とは？

＋＋＋

話は前後して。ユーマより先に城をあとにしたエイリークとアイリーン。

初めて王国の街並みを見るアイリーンは最初もの珍しそうにしていたが、中央広場に集まる人の数にびっくり。雑踏を抜けるだけで2人はぐったりとなった。

「……すごい人の数でしたね。学園祭を思い出します」

「ポピラは研究所、ミサは前に手伝った新開区の食堂に行くって確か言ってたわね。……あー。こんな時ＰＣリングの通話機能が使えればいいのに」

「ほう？」

呼んだ？　とエイリークの携帯ポーチ、その中にあるリングから飛び出してくるのは手のひらサイズのしろい梟。彼女の幻創獣だ。

梟の『しろ』はエイリークの頭の上にちょこんと乗った。

「何よ。別にアンタは呼んでないわよ」

「……ｚｚｚ」

「寝ないで」

「ほう」

「痛っ！　だからって髪を引っ張らないで」

「ほーぅ」

「いつ見てもその子は変わっていますね」

他の幻創獣とは違い特別に簡単な思考プログラムを持つ『しろ』。エイリークとは迷コンビだったりする。

瞳までまっしろでぽわぽわ。「ほう？」と首を傾げる仕草なんかして愛嬌がある。

「可愛い子ですね」

「どこが！　いっつも髪を引っ張るのよ。こんなのをユーマのやつは」

「ユーマさん？」

「うっ」

押し黙るエイリーク。『しろ』をユーマから譲ってもらったことが内緒、という訳ではない。

ただなんとなく。

「……」

「……ふぅ。貴女には聞きたいことが沢山あるのですけど」

「何よ」

「例えばあの時。先を行った貴女がどうして最後になって、しかもオルゾフ先生と一緒に王国へ帰って来たのですか？」

「それは、……道に迷ってたら偶然……」

「……まあいいです。でもこれだけは教えてください。どうして彼のこと、避けるのですか？」

「っ」

アイリーンが核心を突いた。エイリークは息を呑む。

「『あんなにまで』なって王国のために戦ったのです。失礼ではないのですか」
「本当にそう思ってる？」
「えっ？」
今度はアイリーンがドキッとした。思い出す。
身の毛がよだつ咆哮。醒めた声。透き通った黒い瞳の色。
機巧魔獣が逃げ出すほど、滅ぼすほどの圧倒的な暴力。
それに触れるだけで崩れてしまうような、無残なかたちをした腕のようなモノ。
優真（あれ）を見て怖くなかったといえば嘘になる。でも、
――やっぱりこんなの暴力だ。あと少しで……
アイリーンは信じたい。あの時、初めて手合わせしたあの時の、泣きそうになった顔を見せた『ユーマ』こそが本当の少年なのだと。
「だけど。ここで私達が避けてしまったらユーマさんは」
「わかってる。違うのよ。そうじゃない」
「エイリィ？」

避けているわけじゃない。エイリークは自分を責めているだけ。
その理由をアイリーンは理解することができない。

アイリーンは知らないから。ユーマが異世界から来た《転写体》
だということを。

アイリーンは違うから。彼女は剣士、戦うことしかできない戦士
じゃないから。

それに。アイリーンは交わしていないから。

――ユーマさんが無茶するのを止めて欲しいの

――面倒をみてあげるわ。アタシやアイリィ、アギやポピラ。み
んなで

――お願い。……ユーマさんに拳を、それを使わせないで

彼女と。大事な約束を。

「ねぇアイリィ。今回アタシたちは……」
「ほう！」

突然『しろ』が鳴いた。まるで危険を告げるように。

「おい。見ろよ」
「へへッ」

人混みを避けたのがまずかった。彼女たちの行く先を阻むように現れるガラの悪い男たち。値踏みするように2人を見ている。

おそらく傭兵。酔ってる上に武器まで所持している。

「絡まれるわね。話はあとよ」
「……仕方ありません」

タチの悪いナンパなんて慣れたものだ。エイリークが威嚇で剣に手をかけたその時。

「不埒な真似してんじゃねぇ！」
「シャァッ！」

『跳んで』来たレヴァンの飛び蹴りと海蛇の噛み付き攻撃が傭兵たちを強襲。

「どわっ！」
「れ、レヴァイア王!?」
「ぶっ！　わぁぁぁぁっ!!」
「酔い覚ましだ。しっかり浴びとけ」

海蛇の水鉄砲を頭から被る傭兵たち。すると。

「……あれ？」

「なんだかスッキリ」
「おい。つまんねぇことしてねぇで向こうで皆と騒いでこい。別に傭兵だからってこそこそしなくていい」
「はあ……」
「行けよ。じゃねぇと１０万超えの観客の前で一発芸させるぞ」
「し、失礼しました！」

毒気を抜かれたようにきょとんとするずぶ濡れの傭兵は、レヴァンの一言で一目散に逃げ出した。

レヴァンは傭兵たちを見送ってボリボリと頭を掻く。エイリーク達は何度目かわからないが、やっぱりいきなりのことに呆然。

「……ったく。にょろすけの『目』があるとはいっても警備の数増やしとくべきだったか」
「王さま？」
「嬢ちゃん達もだ。また砂除けのローブ被ってねぇじゃねぇか」
「あっ」
「美人さんは顔隠しとかねぇと危ないんだぜ」

冗談交じりに注意するレヴァン。その間海蛇はエイリークの頭の上をじっと凝視している。「ほう？」と首を傾げる『しろ』。

海蛇は幻創獣をみて「ＥＷＧシステム。しかも紛いモノか」とすぐに興味を失くした。餌にもならないと思ってレヴァンに突っ込まれる。

「お前、人のペット食おうとするなよ」
「……傭兵たちのあの様子。先程の彼らに浴びせた水は、もしかし

て《清水》ですか？」
「あ？」

レヴァンの代わりにアイリーンの問いに答えるのは海蛇。「詳しいな。魔銀の娘」といった感じで頷いた。

「《清水》って？」
「清めの水。そのままの意味です。人に使えば身体や精神の異常を清める働きがあります。魔力の狂気さえも中和できる、水属性の精霊のみが精製できる魔法の水」
「ん？　ああ。『王蜥蜴』の奴もその水で押し流したらしいな。これで魔獣もしばらく大人しくなるだろうって……マジかよ」
「そんな」
「うそ」

海蛇の言葉を通訳するレヴァンを含め皆が驚く。《清水》は特効薬の材料として恐ろしく稀少で高価な代物だ。市場に出回るのも少量で小瓶でさえ例えば『リュガキカ丸』が2隻は作れるほどの値を張る。

それを津波を生み出すほど大量に精製するなんて。

「……（ごくっ）」

海蛇はレヴァンの邪な念を感じて首筋に噛み付いた。

「シャァーッ！！」
「痛ぇ！　わーた、わーってるよ。商売に使わねぇって。ウチは貧乏で大所帯なんだぜ。億万長者なんて夢くらい見てもいいじゃねぇか！」

「でも。それほどの力があるのなら」

アイリーンは思い切ってレヴァンと海蛇に頼み込む。

「レヴァイア様。陛下のその力でユーマさんの腕を癒すことはできないでしょうか？」

「何？」

「アイリィ？」

「お願いします」

真剣な面持ちで頭を下げる彼女にレヴァンは、

「……悪いが。今の俺じゃ無理だ。《精霊使い》だの《巫女》だの、なったばかりのオレじゃこいつの力を引き出せねぇ」

レヴァンは2人に正直に答えた。相棒である海蛇を見る。

この海蛇は上位精霊レヴァイアサンの力を抑えた分身体と呼べるもの、精霊の風森にとっての風葉に近い。本体である海竜は王国の地下、《西の大帝国》の水道網に身を潜め、眠らせている。

水道網は元々大帝国の民が上位精霊の為に用意した巨大な魔法陣、《精霊器》だった。

『王蜥蜴』の時はあらゆる手を尽くし、裏技まで使って無理矢理喚び出したのだ。契約は済ませたものの、下位レベルの海蛇ならまだしも海竜の力を使役するとなると今のレヴァンでは不可能に近い。

「そうですか」

「そうがっかりするな。それに坊主は……」

「レヴァイア様？」
「……いや。相談するなら俺よりも、頼りになるのが嬢ちゃん達にはいるじゃねえか」
「えっ？」
「《風邪守の巫女》」
はっとする2人。
いや。エイリークの表情が僅かに強張った。
「風森の姫さんは《精霊使い》で《巫女》。いわば俺の先輩だ。今は魔女のおちびちゃんもいる。坊主のことはなんとかしてくれるだろう」
「魔女？」
「姉さま……」
よくわからなかったアイリーン。逆に話を理解したエイリークは「わかった」とぎこちなくレヴァンに頷いた。
風森の国へ。
だけど。できることならユーマの腕をエイルシアに見せずに済ませたかったとエイリークは思う。
「どうした？」
「……いえ。アタシ達、今日中に国を発とうと思います。《門》の開放をお願いしてもいいですか？」
「そうか。いいぜ。俺の方から連絡しておく。ただ銀雹は遠いな。

北国へは中継地点の国になるが」
「お願いします」

こうしてユーマより先にレヴァンと会った彼女たちは、《転移門》の使用許可を得て帰り支度の要件をひとつ片付けた。

「また後でな。ステージの観客が俺を待ってる」
「はあ」
「いくぜ……っと、いけねぇ。聞き忘れてた」

レヴァンは《蜃楼歩》で跳ぶ前に2人に訊ねる。

「王さま？」
「昨晩《2重転移》の罠にかかって捕まっていた傭兵と、みつあみの嬢ちゃん達にやられて王立研究所で寝転がってた傭兵が『すべていなくなっていた』。何か知らねぇか？」
「……っ！」
「って、嬢ちゃん達に聞いてもわかんねぇよな。でももしかすると《帝国》関連でまだ何かあるかもしれねぇ。だから気をつけてくれよ」

じゃあな。レヴァンと海蛇は2人の前から消えた。

「……」
「エイリィ？」

エイリークは返事を返さない。彼女は傭兵を逃した人物に心当たりがあった。

黒い詰襟の学生服に腰に提げた黒い長剣。どこかユーマと似た雰囲気を持つ少年とその仲間。

それでいてユーマをバケモノと呼んだ彼は、

（いつか。アイツはユーマの前に現れる。だけど）

だけどその時。アタシに何ができる？

思わず掴んだ剣の重さは、いいようのない不安を払拭するにはあまりにも軽く、頼りなかった。

＋＋＋

一方。神は降りた。

あるいは女神だったのかもしれない。

「いいぞ。アギー！」
「アンコールだー！」

ユーマの罠にかかり１０数万人の観客の前で芸を披露するはめになったアギ。窮地に陥った彼を救ったのは歌だった。

アギは歌った。《歌姫》の彼女に教わった、砂漠を渡る旅人の歌を。初めて聞く歌に誰もが耳を澄ます。

家族を想う旅人が月に聞かせる故郷の歌。その歌は砂漠の夜の冷たい世界を歩く旅人にぬくもりを与えてくれる。

恋人を想い倒れた旅人が捧げる愛の歌。その歌は太陽の下、乾ききった旅人の心に潤いを与え、再び歩む力を与えてくれる。

旅人がどんな困難も歌を共に乗り越え砂漠を渡る、そんな歌だ。

アギの歌声はともかくメロディは最高。砂漠の民向けの歌詞も悪くないむしろいい。アンコールからはバックコーラスとミュージックがついて勝手に盛り上がっていく。

歌は少年を救う。アギはスベらず見事オオトリの勤めを果たした。

「た、助かった……俺が歌ってこれだ。やっぱあいつの歌すげぇよ」
「おつかれ様。でもアギ君。みんなが君を待ってるよ」
「先輩……。いいぜ。こうなったらあいつの代わりだ。やってやるぜ」

俺の歌を聞けぇ！　と言わんばかりに叫ぶアギ。ステージはクライマックスの最高潮。

「……俺の歌だって本気出せば」

戻ってきたら出番がなくなっていた王様は、海蛇に慰められた。

＋＋＋

３－１４ｃ　２次会の前に（前書き）

伏線伏線伏線。次回が砂漠の王国編のラスト

3－14c　2次会の前に

＋＋＋

アギが意外な特技を披露してそのまま観客と皆で歌っていたその頃。ステージを抜けて空を駆けるユーマは攻撃を受けていた。

襲いかかるのは、炎を纏う翼刀。

「チィィィィイ」

「このっ！」

ユーマは《天躯》を使い空中2段ジャンプで回避。《風乗り》で滑空して距離を稼ぐ。

駄目だ。翼刀はユーマの動きに追従して一定の距離以上離れない。自由自在に空を飛ぶ精霊相手に空中戦は不利。

しかも今のユーマは片腕が不自由な上にまともな飛び道具がない。風葉は今もご機嫌斜め。翼刀は尚も追いかけてくる。

「こうなったら」

仕方がないとユーマは左腕に力を込めた。

ゲンソウ術で左腕から僅かに洩れ出す銀の燐光。だけど翼を形成できるほどではない。

出力不足。『ユーマ』では燐光で掌を覆うのが精一杯だ。

「落ちろっ！」

平手打ち。ユーマは正面から来る翼刀を叩き落す。

昨晩何度も受けた攻撃だ。炎は燐光で相殺。なんとかうまくいった。もしも翼刀がもっと速く、複雑な軌道を描いて死角を突いてきたならば、掌だけの狭い展開範囲では防ぎようがなかった。

ユーマは内心で安堵しつつ、なるべく人気がない場所を選んで着地する。

「なるほどね。同じ手は通じない、ってとこかしらん」

「……随分な挨拶ですね」

ユーマの前に姿を現すのは2人の傭兵。

＋＋＋

国王付き宰相補佐官なる妙な役職に復帰したミハエル青年。彼は早速レヴァンにこき使われていた。

今は『おつまみ係』である。相棒は《機巧剣》ではなく鍋。炊出しで鍋を振っている。

焼く、蒸す、揚げる。なんでもできる万能鍋だ。再成世界では中

華鍋と呼ばれるものに似ている。

しかし巨大な鍋だ。１回できっと２０人前は容易い。振るとなるとミハエルが今装着している機械腕でないと無理かもしれない。

「しかし助かります。この鍋、量を作るのは向いてるのですけど、香ばしく炒るには火の回りが悪く火力不足なもので」

「いえ。……大変でしょう」

「慣れてますから」

「……」

何だろう。この青年は自分とどこか共感するものがある。

魔術で巨大鍋の火加減を調節する《心火》の魔人こと教師オルゾフは、王に振り回されるミハエルの苦笑を見てなんとなくそう思った。彼もまた代々リーゼリットの血筋に振り回されている。

マークをはじめとする《C・リーズ学園》の派遣組はすぐに学園に帰還する予定であった。しかし学生たちへの労うからと言うレヴァンの厚意を無碍にできず、結局全員が宴の席に参加することになった。オルゾフがミハエルの手伝いをしていたりマークが余興の司会をしたりしているのはその流れだ。

ふとオルゾフは鍋を持つミハエルの義手に目を遣る。左の肩から下全部が銀の装甲に覆われた、右腕よりも一回り大きい機械の腕。オルゾフは気になる。

「失礼ですがその義手。機巧兵器の類ではありませんね。……もしかして貴方方の言う機巧魔獣と呼ぶそれに近いのでは？」

「……鋭いですね。わかりますか？」
「魔術師としてもたいへん興味深いものでして。金属の割にとても柔軟で機械の割にとても繊細な動きをする。まさに鋼の筋肉のようだ。ピエラ・エルド女史の弟子であるチェルシー・レアメダルの機械腕と比べても技術力に大きな差を感じます」
「まあ……そうでしょうね」
「もしやレヴァイア王の友人であるという『あの』ケイオス・エルドの作品なのでしょうか？」
「すいません。この腕は我が国の機密です。いくら先生といえどお教えできません」

鍋を振るミハエルは苦笑した表情を変えずやんわりと拒絶した。

「ですが『帝国軍のアジトを潰して下さった』先生に免じて1つだけ」
「……何のことかわかりませんが。お聞きします」

とぼけるオルゾフ。彼の秘密は誰にも暴かれてはいけない。

「いいですか？」

ミハエルは宰相補佐官の油断ならないところを見せると、真剣な顔をしてオルゾフに秘密を漏らした。

「『これ』を初めて付けた時に手術をしたのです。とても痛かったんですよ。失禁するくらい」
「……」
「内緒ですよ」

微笑むミハエルに「そうですか」とオルゾフ。はぐらかされたという気持ちは何故か起きなかった。

本当に秘密だったのだろう。ミハエルの笑みはどこか照れがあって昔を懐かしむ気持ちで一杯だった。オルゾフはそう感じる。

（思い出か。そうだな。これこそが４００年前の俺達、魔人が持たなかった人の力。その源泉だ）

長い教師生活を経て、彼もまた手にすることのできたその力。

オルゾフは自分の知る、今の時代を生きる同胞たちのことを思う。

《病魔》、《沈黙》。それに《忘却》。彼女たちは人の世界で、ひとつでも幸せな思い出を作ることができたのだろうかと。

前者２人は問題ないだろう。だけど昨晩出会った、彼が殺し損なったあの魔人は。

（《忘却》。お前は今も独りか？）

「良い話でした」

「ありがとうございます」

このあと彼らは黙々と巨大鍋を振り続け、火を熾し続けた。

ところが。

「せんせいー、ナッツできましたかー？」
「……もうすぐだ」

給仕を手伝うミサが料理の皿を手に縦横無尽に駆け回り、

「――！？　きゃあーーっ！　ミハエルさんその腕！　みみみ見せて。分解させて！」
「……日常用の義手は《技術交流都市》に置いてきているのです。分解はやめてください」

食べ物を物色しにきたはずのチェルシーが黄色い声を上げてミハエルの義手に目を輝かせ、

「ようミハエル。ツマミもらってくぜ」
「ああっ、レヴァン様。そんなごっそり」
「シャァ……！」
「睨むな。お前とは因縁もなければ敵対する気もない」

突然現れては炒ったナッツを勝手に紙袋に詰めているレヴァンにオルゾフを威嚇する海蛇。あと食い物はまだかと叫ぶ人達。

２人の周りは何かと騒がしく、忙しかった。

＋＋＋

王立研究所のポピラさん。

「……」

みつあみの少女は研究所の片隅に小さな墓を作った。共に戦い機巧魔獣との戦いで命を散らした、『彼』を供養する為の墓だった。

リュガキカ丸の墓

「……」

ポピラは墓石の前で手を合わせ祈りの仕草をすると、研究所の技術士たちも彼女に倣う。

「あなたの尊い犠牲は無駄にしません。欠片は必ず兄に届けます」

舟の破片をぎゅっと握り締めるポピラ。「良い奴だった」「もっとデータが取れてりゃ……」嘆く技術士たち。

こうして研究所を傭兵から守った『リュガ』の名は、本人のあずかり知らぬ所で王国の小さな伝説となる。

どうでもいい話だけど。

あと破片だけになった舟を送りつけられたティムスが『リュガキカ丸』の短くも波乱万丈な一生を《解読》し、呆れとも怒りともつ

かない複雑な顔をしていたけど。

技術士として供養を済ませたあと。ポピラは整備工場に運ばれる『それ』を見た。それで呟く。

「あれは……いったいどうするのでしょう？」

それは機巧魔獣。ミハエルが核の魔石を引き抜くことで機能停止に追い込み、唯一自爆せず無傷で鹵獲できた稀少な一体。

他にも王国の外にはユーマが撃墜して半壊した要塞級もある。今回の事件における重要機密だった。

ポピラの呟きに答えるのは近くにいた整備主任。

「あれかい。とりあえずウチと《技術交流都市》で調べるだけ調べて封印といったところだな」

「主任さん」

「こいつは世に晒すには危険な『兵器』だ。『次』がある時に備えて対策を立てんとなんともな」

「そうですね。……いったいどんな人がこれを作ったのでしょう」

「……そうだな」

答えはなかった。ポピラは別のことを考える。

（機巧魔獣の体。あれがチェルシーさん経由で母の手に渡らなければいいですけど）

ポピラのその願望が叶わなかったことを彼女が知るのは、またあとの話。

＋＋＋

思わぬ鉢合わせ。ユーマに緊張が走る。

《炎槍》は興味深そうに、《氷斧》は相変わらず冷たく無表情にユーマを見ている。翼刀は試したのだろうか？

戦う？　それとも逃げる？　襲われた意図が読めないのでユーマはすぐに動けない。２人もだ。

どちらも動かない。考えた末にユーマは砂除けのローブを脱ぎ捨てると、右腕を吊る三角巾を外して油断なく構えを取った。

包帯が巻かれたままの右の拳をいつでも使えるように。

そこへ。

「痛っ！　か、風葉！　やめて！」

「む～」

風葉はユーマの左腕に齧り付いた。ちょっと強くなったからって喧嘩癖のついたユーマがお気に召さなかったらしい。

「だめですよー。敵じゃありませんー」

「風葉？」

「『風森のちびっこちゃん』の言うとおり。それにしても、そこであの右を躊躇わず使うのね。……とんでもない子」
「え……？」
「『魔銀の力』まで使う《精霊使い》。こんな子が今まで無名だったなんて」
僅かな驚きを含む呆れ声。敵意が感じられなかった。
今の《炎槍》の表情は戦士らしくなく、どこかやわらかい。
「別に喧嘩売りに来たわけじゃないわ。王国を発つ前に坊やを見かけたから声をかけただけ」
「声、ってあれが？」
「あらん。空を走り回ってる坊やを呼び止めるなんて、火燕ちゃんにしかできないわよん」
随分と乱暴な呼び止め方だった。翼刀から分離した火の精霊は《炎槍》の肩にちょこんと乗る。
彼女の精霊である火燕は方翼を上げて「よっ」と同僚の風葉にご挨拶。
「チ！」
「元気ですかー？」
風葉は先輩風を吹かせて後輩（どうも精霊どうしの認識に違いがある）にミサちゃんクッキーを差し出した。喜んで啄む火燕。
風葉がまたどこからクッキーを取り出したかはさておき。

「何の用です？　《炎槍》さん」
「警戒しないでいいわよん。いくらレー君の顔が怖いからって」
「……」

なんと言われようが《氷斧》は無表情。《炎槍》に付き従うこの巨漢は普段何を考えているかよくわからない。

「はぁ。……レー君？」
「話をする前に自己紹介が先かしらね。じゃあ改めて。あたいはアニスタリス・エン。アニスでいいわ。この子は火燕ちゃん」
「チチッ」
「……」
「ほら。レー君も」
「……レークリュス・タロスだ。間違ってもレー君はやめろ」

２人が名乗るのでユーマも自分の名を名乗る。風葉も一緒だ。

（タロス……やっぱり由来は青銅の巨人かな？）

《氷斧》の本名を聞いて変わっているとユーマは思った。でもやはり気になるのは《炎槍》のファミリーネーム。学園の大図書館で調べたことを思い出す。

南国に存在する世界有数の山岳地帯。その秘境の地に住む《エンの部族》と呼ばれる者たち。火の《精霊使い》縁の一族。

確か初代勇者の１人、《弓》がそのエンの女戦士ではなかっただろうか。

「エンの戦士……でも槍なんですね」
「？　ああ。《弓》の話ね。飛び道具が向いてなかったのよ」
元《巫女》だし、と彼女。
「それにエンの戦士から勇者が出たのは初代だけ。《弓》も今じゃオーバちゃんが『アロウ』の名を継いでるし」
「へぇ」
「あの不良エルフ娘、傭兵上がりのハンターって経歴があるのよ。あたいの後輩」
「……へぇ」
世界は狭い。ユーマは思った。
流石は1流の元有名ハンター。彼女はユーマが1度会ったことのあるジン・オーバの師、現《弓》の勇者とも旧知の間柄らしい。
それだけではなかった。
「それに思い出したわ。剣士のお嬢ちゃん。あの子風森の、エイリアの娘でしょ？」
「えっ？」
「よく似てるのよ。『剣筋はそうじゃないんだけど』。気性が」
「気性って。……そうなのかな？」
ユーマには判別かつかない。彼は風森の王妃、エイリア・ウインディの眠った姿しか見たことがなかった。
思い出してみると、エイリアの外見は長いはちみつ色の髪といい

どちらかというとエイルシアに似ていたと思う。

「どうりで懐かしいと思ったのよ。若い頃風森に行ってはよく彼女に喧嘩ふっかけてたわ。旦那ができてからはご無沙汰だったけど」

「はぁ」

疑問が浮かぶ。《炎槍》の見た目は２０代後半。《氷斧》は３０代半ばに見えるが彼女は彼のことを「レー君」「あの子」呼ばわりしている。しかも彼女の話が本当ならば２０年以上昔に風森の王妃と交流があったということになるのだが。

いったいこの人いくつだろう？　なんとなく訊ねてはいけない気がする。

「ま。雑談はこのへんで。……昨夜は見せてもらったわ。機巧魔獣を滅ぼし、１人で戦況をひっくり返した坊やの戦い。坊やの覚悟を」

「っ！」

「最後は全部王さまがおいしいとこ持ってっちゃったけどね」

肩をすくめる《炎槍》。ユーマは急に緊張で体を強張らせた。

見られた。それはもう今更で別にいい。それで彼女は何を言う気だ？

「坊やは英雄になりそびれたわね。あたい達は坊やたちのおかげで侵略者になりそびれたけど」

「英雄なんて。そんなの別にいいです」

「興味ない？　じゃあその力、何の為に使うの？」

ユーマは答えない。答えを持ち合わせていない。

「……自覚があるのね。精霊の力を除いても自分の持つ力が『バケモノの域に達している』って。だから『人相手に』力を振るうのは躊躇うし、仲間を切り捨てることができなくても自分は捨てられる。その腕のようにね。違う？」

「……」

ユーマは答えない。無言は肯定と彼女は判断した。

「別に非難してるわけじゃないわ。だけど」

次の《炎槍》の意外な申し出にユーマは驚くことになる。

「力を振るうことでこの先……もしも坊やの居場所がなくなったのならあたい達を頼りなさい。歓迎するわ」

「……っ！？」

「坊やは……いえ、『坊やの中にあるモノ』はあたい達に近い」

それは人の皮を被った何か。例えば彼女達やこの世界の勇者達を象徴する槍、斧のようなヒトの武器。

あるいは《梟》、《狼》といった獣。ヒトでは届かない領域に踏み込んだモノたち。

「……どうして？」

「キー君、《雷槌》のキリンジが坊やのことを高く買ってたわ。あ

の子も坊やを仲間に引き入れようとしてたみたいだけど？」
「おっさん……」
「実際に坊やの力を見てあたいもそう思った。それでどうかしら？」
「俺は」
《炎槍》の勧誘に戸惑うユーマは、しばらく黙り込むとひとつの答えを彼女に返す。
そして。
「じゃあまたね。2度と会わないことを祈ってあげる」
「……」
結局ユーマはその場で2人と別れた。
最後の《氷斧》の一睨みがユーマの中に強く印象に残っている。
彼の僅かな表情の変化から感情が読み取れたのだ。
あれは恨みか妬みか。
再会は3人が思った以上に早く訪れる。
その時ユーマは……
＋＋＋

王城の離れにある宮殿――《帝国》時代は後宮だった――は王国の行政機関とも呼べる所で普段は多くの文官が詰めている。

今は宴の席に外へ全員出払っており、そんな物静かな場所に立ち寄る2人の少年がいた。

シュリとファルケである。

「やめろシュリ。引っ張るな」

「いいから」

帝国軍に加担していたことが引け目となって宴に混じれないでいたファルケ。彼を宮殿に連れ出したのは幼馴染だった。シュリはレヴァンに頼まれたのだ。

ファルケが王国を発つ前に『開かずの間』に連れて行けと。

開かずの間。それは王国の建国以来、一度も表舞台に姿を現さない宰相の部屋であった。

「気にならないのか？　宰相様の正体といえば王国7不思議のひとつじゃないか。ミハエルさんたち宰相補佐官の人は絶対に教えてくれないし」

「それは……そうだが」

「だろ？　なぁ。これが最後とは言わないけどさ、探検しようぜ。昔みたいにさ」

「……そうだな」

少しだけ口元が綻ぶファルケに笑顔を向けるシュリ。こうやって幼馴染と遊ぶのは何時ぶりだろうか。随分昔だった気がする。

宮殿の奥へ進み目的の部屋に辿り着く。扉を前に緊張する2人。王国の秘密を目の前にしてもう5分くらいじっとしている。

「あ、開けるぞ」
「わかった」

ノックも忘れ2人は不躾に扉を開けた。中は本棚と書物に埋もれながらも整頓された部屋だった。

部屋の主はいた。老年に差し掛かった体の大きな男。きっと彼が宰相だ。

だけどシュリとファルケは、宰相の正体にすぐ気付いて酷く驚く。

「……礼儀のなってない子供達だ。そういうところは王(あれ)に似なくていい」
「ああっ！？」
「あなたは……っ！」

呆れながらも静かで威厳のある声だった。玉座ではなく執務用の木の椅子に座る男の前で臣下の礼として膝をつくファルケ。シュリも慌てて彼に倣う。

シュリは覚えている。彼が最後に男を見たのは約7年前。まだレ

ヴァンが反乱軍のリーダーだった頃の話だ。

砂漠の王国の宰相。その正体は王妃サヨコの父、元皇帝である。

王国が建国され新王に『レヴァイア』の名を託したその時。最後の皇族としての役目を終えたと余生を砂に埋もれるようひっそりと過ごすつもりだった元皇帝。しかし。

――楽隠居なんてさせねぇ。『おじいちゃん』はな、国の孫やひ孫の為にしっかり働きやがれ

――私達が国の為にできることは安易に身を引くことではありません。これからなのです。お父様

と新王と娘である王妃に請願され、表舞台に2度と立たないことを条件に今の官職に就くことになった。ファルケの言っていた「皇帝は幽閉された」との噂もこのあたりが原因である。

王国のおじいちゃん（レヴァンが1人勝手に言っている）、宰相となった元皇帝は『帝国貴族』から仕込まれた帝王学（教養は本物。しかし傀儡であったので《帝国》時代は一切振るわれることがなかった）を基にミハエルをはじめとする多くの宰相補佐官を育て、王国をずっと影から支えている。

反乱軍やレヴァンを憎む余りファルケは知らず、また気付かなかった。王国の文官の殆どが宰相を慕う《帝国》の民であったことを。

砂漠の王国は《西の大帝国》、そして《帝国》に連なる国。《帝国》が遺した善きところは王国に受け継がれている。

「陛下っ！」

「やめなさい。今の私は君たちと同じ砂漠の民の1人。娘夫婦に隠居さえさせてもらえないただのジジイだ」

宰相は自らの手で跪いて恐縮する少年たちを立ち上がらせた。それからひとりずつ声をかける。

「君がシュリだね。王とミハエルから聞いている。母思いの立派な少年だと」

「そんな。俺なんて」

「自分を誇りなさい。私は家族を誰1人守れなかった」

「陛、……宰相様……」

感涙で震えるシュリ。

次に宰相はファルケを見た。少年を見る宰相の目はどこまでも優しい。

「そして君が……」

「……」

「ああ。君は本当に父親によく似ている」

「！」

「話は聞いている。君はこの夏、旅に出るそうだね」

「……はい」

なんとか目を逸らさずに答えることができた。ファルケは今の自

分を宰相に見られると気恥ずかしいというか居た堪れない気持ちで一杯になる。

ファルケは夏期休暇の残りを自分の心身を鍛え直すことに費やすことに決めた。今度こそ自分の手で誇りを取り戻す為、まずは武者修業の一環として王国を離れしばらく《炎槍》たちと行動を共にするつもりらしい。

今、ファルケは思う。誇りを取り戻したその時。目の前にいる人と次に顔を合わせる時は目を逸らさず、理想の『帝国人』、英雄の息子として堂々と前を向きたいと。

「いつか父のようになりたい。そう思います」
「……そうか。ならば旅立つ君に餞別として話をしよう」
「え？」
「皇帝でも宰相でもない。ジャファル・シュペルの友である老いぼれの話だ」
「！？」
「君の長い旅の指針となればいいと思う。聞いてくれるか？」
「……是非」

おねがいします。言葉にならずファルケは膝を突いて崩れ落ち、涙を流す。シュリは「よかったな」と貰い泣き。

ずっと。ずっと知りたかった。誇り高き軍人で英雄だった父の真の姿を。あの中将の男なんかじゃない、本当の父を知る誰かにずっと聞きたかった。

願いは叶った。もしも。もっと早く少年が宰相と出会えていたならば、彼は迷走せずにすんだのかもしれない。

「ファルケ。長い旅路の果てには、君もいつかはこの国に帰って来なさい。今の王やサヨコ、ミハエルの跡を継ぎ、砂漠の未来を担うのは誰でもない君たちなのだから」

「……はい。必ず！」

ファルケはシュリと共に一生忘れまいと宰相の話を聞いた。宰相は友の忘れ形見を導くことができることに密かに感謝する。

人に会うのを頑なに拒んだ自分を説教し、殴り合ってまで引っ張り出した今の王、彼の婿に。

レヴァンが図らなければ実現出来なかった宰相と少年の邂逅。それは今後の少年たちの糧となる、かけがえのないひとときだった。

＋＋＋

エイリークたちとの約束の時間まであと1時間を切った。

レヴァンをなかなか見つけることができないユーマ。彼は今、風葉をくっつけたまま1人王城の屋根の上にいた。

《炎槍》たちと別れたあと、なんとなくひとりになりたかったのだ。

王国全部を見渡せるてっぺんで風葉と一緒にぼんやりしていた。
時折ユーマは機嫌の直らない風葉に話しかける。

「別にポピラやミサちゃんのところに行っていいんだぞ」
「いやですよー。わたしはー、ストライキ中ですー」

そう言って風葉はぷいっと顔を逸らす。

「いうこと聞きませんー。護衛のお仕事もしませんー」

だけど報酬はもらいますー、と風葉はユーマの携帯ポーチからミサちゃんクッキーを取り出しばりぼり。これにユーマは「ポピラたちにくっついて行くのは仕事だったのか……」と妙な感想を持った。

『レンタル守護精霊かぜは』。確かに学園では何度もそういうことも頼んではいたけど。

風葉は気の済むまで放置することにした。風森の国に帰るまでに機嫌が直ればいいと思いながら。

国中で行われている宴。その中でレヴァン1人捜し出すのは難しい。だからユーマは捜すのではなく待つことにした。

ぼんやりと。今後のことを考えながら。

「坊主。ここは俺の特等席だって言わなかったか？」

「……あっ」
「にょろっちー」

待ち人が来た。レヴァンは手に紙袋、首に海蛇を巻いてさらにミハエルを連れている。

レヴァンはユーマの隣にどっかり座る。ミハエルは王の傍に控えた。

「ミハエルさんまで……なんです、その腕？」
「元気そうですね。腕の具合はいかがですか？」
「あ。はい。いやだから」
「挨拶なんていいだろ？　ほれ」

レヴァンはミハエルの機械の義手に驚いたままのユーマに空のグラスを渡す。

「これは？」
「嬢ちゃんたちに会ったぜ。帰るのにまだ少し時間あるだろ？　ちょっと付き合え」

俺たち3人。男同士の内緒話だと彼は言った。

＋＋＋

３－１５ａ　エピローグ－ユーマとレヴァン２（前書き）

＊エピローグの前半です。後半は時間をかけずにお送りします

3－15a　エピローグ－ユーマとレヴァン2

＋＋＋

「内緒話って」
「まあ待て。まずは一杯だ。喉乾いてねぇか？」

城の屋根の上。戸惑いながらもレヴァンからグラスを受け取るユーマ。

レヴァンは腰に提げた水筒の蓋を開けてユーマのグラスに自らの手で飲み物を注ぐ。飲み物は無色透明な液体だった。

「あの、お酒はちょっと」
「違う違う。そいつは水だ」
「水？」

そう言われればアルコールの匂いがしない。レヴァンはミハエルにもグラスを渡すと「乾杯」と自分のグラスを掲げぐびぐびと美味そうに水を飲んだ。ユーマも彼に倣い水を口に含む。

水は良く冷えて美味かった。爽やかでミネラルとは違う『味のある』水。外の暑さもあるがユーマはここまで美味い水を飲むのは初めてだ。

「すごく美味しいです。レヴァンさんこれは……って」
「あ？　いいだろ個人で楽しむくらい。もう少しくらい出してくれ

よ」

レヴァンはグラスだけでなく水筒の水までも飲み干し、おかわりを要求していた。『蛇口』からなみなみとグラスに水を注ぐ。

言い換えると、レヴァンの首に巻き付く不機嫌そうな海蛇の口から、レヴァンのグラスに向かって水がげぼげぼと吐き出されている。

ユーマは思わず自分のグラスを見る。

「この水ももしかして」

「《清水》ってやつだ。そこらの酒なんて目じゃない贅沢品なんだぜ」

「これが？」

《清水》の希少価値はユーマも学園で学んでいる。コップ1杯の水に1滴混ぜるだけで清めの聖水となる、霊薬ともよべる水だ。

原液で飲んで身体に害はないのか？

「何より水の出所は知りたくなかった……」

「細かいこと気にすんなよ。ほれ。ツマミでも食え」

差し出される紙袋。中には乾燥したカボチャの種などを香ばしく炒られたミックスナッツが入っている。

カリッとして塩加減が絶妙。ミハエルが大量に作っていた実は自慢の逸品。

3人はナッツをツマミに《清水》を味わう。まるで炎天下で水分

と塩分を補給するような、実に細やかな飲み会がはじまった。

＋＋＋
エピローグ
＋＋＋

「さて。何から話そうか」

話を切り出したのはレヴァン。

「そうだな。好きな子の話でもするか」
「はい？」
「まずは言いだしっぺの俺がサヨコさんのことをだな」
「やめてください。それで1話分使い切るつもりですか」

止めないとレヴァンは何時間もノロケてしまう。ここはミハエルがメタ発言をしてまでシャットアウト。

「なんだよ。男同士の内緒話ならお約束だろ？　お前も好いたの惚れたの1人くらいいるだろ？」
「あのですね」
「恥ずかしがんなよ、ミハエルくんよぉ」
「……水で酔ってませんよね？」
「じゃあ坊主だ。どっちだ？」
「どっち、って」

どうして『2人』と決め付けるのだろう。なんだか最初から駄目な気がしてきた。

「レヴァン様。彼も時間があまりありませんから」
「そうだな。……チッ」
「レヴァン様……」
「わかってるよ。坊主、昨日は助かった」
いきなり真面目な顔をして、レヴァンは頭を下げる。
「礼を言う。正直機巧魔獣は……坊主が国の外で食い止めてなけりゃ奇襲に気付かず間に合わなかった」
「そんな」
違う。自分は感謝されることなんてしていない。
困惑するユーマは心の内でレヴァンの言葉を否定する。あの時。
ユーマは許せなかっただけだから。
それで彼がやったのはただ――
「レヴァンさん達なら、俺なんかいなくても王国を守れたはずです。俺なんてただ」
「八つ当たりをしただけだ。ってか？」
「あ……」
「違うか？　でも、そうじゃねぇんだろ？」
ユーマは驚く。そのセリフは『彼』のものだった。
レヴァンの少年を見る目は優しい。「しょうがねぇ奴だ」と、苦笑ともいえない笑みを浮かべている。

薄々と気付いていた。レヴァンと話しているとユーマはもしかしてと思うことが多々あった。

この人はあの人たちを知っている。

確かめたい。でもそれはユーマを見るレヴァンも同じだ。

「そうだな。まずは俺の昔話を聞いてくれ。俺が『レヴァイア』でもないただのガキだった頃の話だ」

「……はい」

「２０年も昔、俺が坊主と同じか少し上くらいのガキだった頃、俺が住んでいた集落に２人の旅人が来た。といっても砂漠越えの装備何一つ持っていない、妙な２人組だ」

――馬鹿かお前！　日除け砂除けの装備もなしで焼け死にてぇのか！？

――空腹で死ぬ。頼むから飯を分けてくれ

「年は当時の俺くらい。見つけたのが運の尽きで野垂れ死にされても後味が悪い。それで仕方なく俺が２人を拾って集落に案内した」

旅の目的もどこから来たのかも告げず、集落に滞在する謎の２人組。

当時砂漠の民の生活は貧しく、食糧も少なければ水を手に入れるのも一苦労。過酷な環境の下、砂漠の民は小さな子供も野良仕事しなければ生きて行けなかった。

そんな集落に居候する自称旅人の2人は彼に次々と不満を口にしたらしい。

「どこの生まれか知らねぇが、俺達の暮らしを見て散々言いやがる。腹が立つんで俺はあいつらに言った」

――文句があるなら、自分らのことくらいどうにかしやがれ

「それで？」

「本当にどうにかしやがった」

レヴァンは思い出し笑い。それは冗談のような本当の話。

「変な奴どころじゃねぇ。とんでもない奴らだった。たらふく肉が食いてぇと言ったと思えば『王蜥蜴』の尻尾千切ってくるわ、うまい水が飲みてぇと穴を掘って水を掘り当てるわ」

「『王蜥蜴』！？　肉って」

「どうした？」

「いえ」

まさかと思い、ユーマは肉に関する都合の悪い記憶を封印した。

焼肉は美味しかったんだけど。

レヴァンの話は続く。

「実はな、《西の大帝国》の地下水道を発見したのは俺じゃなくあいつらなんだ。そこで砂に埋もれた《西の大帝国》の地下が使える可能性を俺はあいつらに教わった」

これにはユーマだけでなくミハエルも驚いた。彼も知らない王の秘密だったらしい。

「ミハエルも知らなかったか？」

「ええ。……でも。そう言われればそうだと納得できます。あの方々は常識はずれでしたから」

ミハエルは彼らのことを思い出して義手の肩に触れる。

実はそこには彼の知らない文字でこう書かれている。『ＭＢ－ｔｙｐｅ０Ｘ　Ｆｅｎｒｉｒ』と。

「だよな」

「はい。２人で帝都を強襲した上でミハル姫を攫ったりもしています」

「はぁ！？　知らねぇぞそれ。そんなこともしてたのかよ」

驚いて、呆れて。思い出話に笑いあう２人。ユーマは１人ついていけない。

「レヴァンさん。続きを」

「ん？　ああ悪い。――それ以来俺の住む集落は水に困らなくなって、『王蜥蜴』の皮や骨が素材としてすげぇ高く売れたおかげで貧

しい暮らしは一転。3年は食うに困らないほどの蓄えを持つこともできた。あいつらは一躍集落の人気者さ。俺は嫉妬さえした。なんでもできる、自由なあいつらのことを」

ヒーローみたいで羨ましかったんだな。レヴァンは昔の青臭い自分を振り返る。

「それからその2人は？」

「いなくなった。集落が帝国軍に焼かれた次の日にな」

「――！？」

「あの頃は反乱軍もなくて、よくあったんだ。人狩りじゃねぇ、『砂喰い狩り』が」

話は急転。レヴァンの声の調子も幾分低く下がる。

夜襲だった。

あっという間にレヴァンの生まれ育った集落は炎に焼かれ、《機巧兵器》に蹂躙された。帝国軍の兵は砂漠の民というだけで無抵抗の女子供も逃さず、容赦しなかった。

レヴァンはその時に唯一の家族であった彼の妹を……

「レヴァンさん……」

「俺はあの時地獄を見た。でもな、それは《帝国》の奴らにじゃねぇ」

「えっ？」

「帝国軍が地獄を見せられたんだ。あいつに」

彼は理不尽な惨劇の中で変貌した。銀色の悪魔に。

悪魔はまず光を翼のように広げて炎を薙ぎ払った。それから暗闇の中、その金の瞳で帝国軍を見据えて手にした金属板を振るい、《機巧兵器》諸共すべてを一方的に叩き潰して滅ぼした。

「帝国軍はたった2人を相手に全滅。その時生き残ったのが今回王国を襲った『帝国貴族』のあの中将。そしてミハエル。こいつだ」

驚くユーマにミハエルは「昔のことです」と笑みを返した。

彼が左腕を失ったのも、レヴァンと初めて出会ったのもその時だったという。

「怖かったですね。彼にあの『銃』を向けられた時のことは今でも夢を見ます」

「ミハエルさん……」

「俺は……許せなかった。集落を焼いて、仲間を殺していった帝国軍も憎かったけどな、それがどうでもよくなるくらい俺は、あいつのことを認めたくなかった」

「レヴァンさん」

救いがなかった。許さなかった。怒りに任せて潰しにかかり、滅ぼして、何も残さない、

悪魔の所業。

――お前は、あいつらがやったことが許せるのか？

――潰し合ってどうする！？　傷つけるのも傷つけられるのも俺はまっぴらだ！

「あいつに助けられたなんて思いたくねぇ。あいつみたいには絶対にならねぇ。そう思って俺は、今まで生きてきた」

「……誰なんです？　その人は」

もう間違いない。もしユーマの考える『あの2人』ならば、時と世界を越える荒業なんてしてもおかしくない。

大きな疑問。そして思わぬ手掛かり。レヴァンが出会った2人組が『彼ら』だというのなら――

「教えてください。その2人の名前は！」

「あいつらは――」

レヴァンは答える。

「マガヤンとロウ。坊主、奴らを知っているか？」

「知りません」

即答した。つい反射で。

なんだ、それは。

『ロウ』はわかる。きっと『狼』だからだろう。でも……まがやん？

いったい昔に何をしていたのだろう？　あの兄達は。

考えてもどうしようもないことだった。

「そうか。どちらかが坊主の親父かと思ったんだが」

「まさか。もしかすると弟が1人くらいいるかも知れませんけど」

「……まあいい。坊主、2度目だがもう1度聞いていいか？」

嘯くユーマにレヴァンは特に何も言わなかった。それで改めてユーマに訊ねる。

レヴァンが見るのは、包帯が巻かれたユーマの右腕。機巧魔獣を滅ぼすために少年が支払った代償。

止めなければこの少年はもっと多くのものを失くしていたかもしれない。

「あの時の坊主はマガヤン、あいつによく似ていた。殺しに殺しまくって、助けた奴らにまでバケモノと恐れられた、救いようのないあの大馬鹿悪魔野郎にな」

「……」

「お前といいあいつといい、どうしてそこまでするんだ？」
「それは」
訪ねられたユーマは、無意識に首に提げた『しろいはね』を服の上から握りしめる。それから、
「……怖かったんです」
そう答えた。
失ったものは戻らない。少年は知っている。
失くさないように強くなることを望み、この世界でも鍛錬を怠らなかった。それこそ『一睡もせず』だ。ゲンソウ術のあるこの世界で、《精霊使い》となった『ユーマ』は『ただの少年でしかなかった御剣優真』以上の力を手にすることができた。
けれど。それでも限界がある。今回ユーマは現実を直視する。
暗闇の中、無数にある機巧魔獣の赤い光に囲まれて、壊しても壊しても次々と現れて、迫ってきて、
絶望を目の当たりにして、また無力を味わった。
「俺じゃ守れないと思った。何もできなくて、失くしてしまう。そう思ったんです」

「……」

「怖くて、でも諦められなくて、俺は……」

拳を握りしめて、願った。自分が駄目でも『あの2人なら』と。

不可能じゃない。ユーマは《転写体》。バケモノだから何にでもなれる。

光輝と大和。《梟》と《狼》。あの2人のように『今、なれたら』とユーマは願った。

ゲンソウの力でその願いを再現する。それが『あの優真』だ。恐れを抱く闇を狩るモノ。

御剣優真の可能性の1つ。だけどあの時、レヴァンが止めなければ2度と『切り替わる』ことができず戻れなかったかもしれない。

「もう『あれ』しかなかった。弱かったから。できることはビビってブチ切れて、暴れるだけ暴れるしかなかった。それから『王蜥蜴』が現れて……結局俺は何もできなかったけど」

「……」

「みんなを守りきったレヴァンさんに比べたら俺なんて」

「まあな」

当然だとレヴァン。

彼は少年の倍以上生きて、少年の生きた年数以上の月日を戦場で過ごし戦い続けてきた。戦場で多くの仲間を失い、多くの敵をその手で殺し、さらにはその上に立って、彼は王となり国を建てた。

《砂漠の王国》は、今では２０万人を超える家族と住む彼の家だ。レヴァンが背負う大事なもの。守れなければ死んでいった彼らにも合わせる顔がない。そう思っている。

責任がある。捨てるなんて決してできない。

積み上げてきたものがあまりにも違う。ユーマは子供で、彼は大人。それだけのことでもある。

（そうだな。こいつはガキで、あの時の俺もガキだった。あいつらも……）

昔聞けなかった答えを得ることができた気がする。哀しそうに沈むユーマを見てそう思う。

「だけどな。１人で守るなんて俺だって当然無理だ。レヴァイアサンだって皆に支えられて喚び戻すことができた。そうだろ？」

相棒に訊けば、「当然」と首に巻き付く海蛇がレヴァンに返事を返す。

海蛇が伝える言葉にレヴァンは大きく頷いた。

「ああ。そうだ。勇者や悪魔なんていなくても、誰かが犠牲にならなくても、俺たちは守れる。俺たちは１人じゃない。１つになれば奇跡だって起こせる」

辿り着いた。２０年かけてやっと。

――俺は、お前みたいには絶対にならねぇ！

砂漠の王国。そこに住む愛すべき、守るべき家族たちはいつだって自分を支えてくれる。みんなを守ってくれる。

彼がずっと昔から望んだ、上位精霊さえも喚べる、彼らとは異なる大きな力。

守れる力。それを得て今、レヴァンは思う。

やっと。追いつくことができた。

「レヴァンさん？」

「どんなに力を持とうがお前はまだガキだ。お前には先がある」

レヴァンはユーマに言葉を送る。

激励のような彼の願いを。

「だからな。１人で生き急ぐな。俺もお前もあいつらじゃない。ゆっくりでいい。いつか。あいつらとは違う何かになってくれ」

「あ……」

「それにありがとな。俺たちのために戦ってくれて」

守ってくれて、ありがとう。

それは、昔一方的に喧嘩別れして彼らに言えなかった感謝の言葉。

少年はあの2人ではないけれど、ようやく言うことができた。

救いのある生き方をして欲しい。少年の行く末を思ってレヴァンは願い、ユーマは感謝と敬意を込めてレヴァンに頭を下げた。

出会えてよかった。彼らを知るこの人に。

最後に。ユーマは訊ねてみる。

「どうしたらレヴァンさんみたいになれますか?」

「サヨコさんだな」

「はい?」

即答するレヴァン。なんだかまたおっさんモードに戻ってしまった。

「男は好きな女の為なら限界なんてすぐにぶっちぎれるぜ。愛の力は偉大だ」

「はぁ……」

「サヨコさんがいれば俺は1週間くらい寝ずに働ける」
「まあ、レヴァン様はそうでしょうね」

根性論とそんなに変わらない気がする。

「つまりだ。強くなる1番の近道は誰かを好きになることだ。俺が最初に『好きな子の話をしよう』と言ったのはその辺にある。アドバイスが欲しけりゃ参考に今から俺がサヨコさんのことをだな」
「嘘ですから。自分がサヨコ様のことを語りがたい為の方便ですからね」
「ミハエル！」
「愛の力って。言いたいことはわかるんですけど」
「だろ？　よーし。坊主、これはサービスだ。王国土産に持っていけ」

機嫌良くレヴァンが渡すのは、宝石の嵌め込まれたペンダント。

「これは？」
「《消魔石》って知ってるか？　この辺りで採れる鉱物でそれを使ったものだ。一種の魔除けアイテムだな。元々坊主が国を出る前に渡すつもりだったんだが」
「俺にですか？　しかも2つも」

これは最初に『王蜥蜴』が縄張りから離れ、王国に接近した事件が関係している。

その原因が砂漠を渡るユーマの精霊たちの魔力に釣られてのことだったとミハエルから聞いたレヴァンがユーマの為に予め用意したものだった。

魔獣は魔力に惹かれる。《消魔石》を身に付けて魔力の残滓をかき消せば、魔獣に襲われる危険を抑えることができるのだ。

「俺も《精霊使い》になったんでな。1つは自分用に用意したんだがそれもお前にやる。気になる女の子へのプレゼントにでもしてくれ。坊主の恋愛成就を祈る」

「はぁ」

おせっかいだなぁと思いながら、ユーマはペンダントの宝石をまじまじと見た。

嵌め込まれた《消魔石》は指先ほどの丸い宝石だ。カットの仕方が独特なのか、光に当てると5枚の花弁を持つ花のようにも見える。

宝石の色にも特徴があって中心は鮮やかなピンク、外に行くほど周りは透き通っており、宝石はカットにあわせ桜の花を連想させる。

これもサヨコ絡みのデザインだ。王様はどれだけ王妃様が好きなんだろう。

でも。

「この宝石の色は」

「気に入らねぇか？」

「……いいえ。ありがとうございます」

もしかすると。

このピンクダイヤに似た《消魔石》というものは、《魔術回路》

という特殊な加工を施すことで魔人にも匹敵する膨大な魔力を封じ込めるアイテムが作れるのではないのだろうか？

あと、まがやんとかいうふざけた偽名の人はこの《消魔石》が必要だったのではないだろうか？

例えば、幼馴染の誕生日プレゼントなんかに。

（ほんと。普段なにしてるんだろう？）

そんなことをユーマは考えたのが、レヴァン達の前では口にしなかった。

＋＋＋

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4305l/

幻創の楽園

2011年10月10日01時32分発行